徳蔵地区遺跡

――― 近畿自動車道松原那智勝浦線(御坊～南部)建設に伴う発掘調査報告書 ―――

－本文編－

2005年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

徳蔵地区遺跡

――― 近畿自動車道松原那智勝浦線(御坊～南部)建設に伴う発掘調査報告書 ―――

－本文編－

2005年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

南部平野遠景（南から）

同上（東から）

調査地遠景（南から）

同上（北から）

12-④区 縄文時代中期遺構面全景（東から）

12-④区 縄文時代後期遺構面全景（東から）

12-④区 縄文時代後期土坑2538検出状況（北西から）

12-④区 弥生時代前期～古墳時代前期遺構面全景（東から）

13-②区 堰状遺構検出状況（西から）

13-②区 同上検出状況（南から）

13-④区 高田土居城北外郭部 全景（東から）

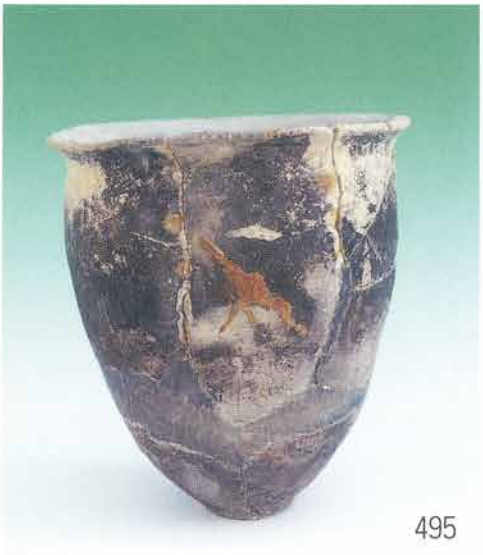
11-①Ｓ区 高田土居城北辺外堀（北から）

2298

2302

2293

496



495

379

序

陽光降りそそぐ南部郷は南紀の入り口とでも言うべき風光明媚な地であります。特産品としての南高梅や備長炭は全国的に有名で南部の代名詞となっております。また海岸線は千里の浜として知られアカウミガメの産卵地でもあります。

南部平野には「標本的な中世の面影を残す荘園遺跡」として有名な八丁田圃と呼ばれる条里型地割が当時のまま良好に遺っており、さらにその南端部には「高田土居城」と呼ばれる中世の平城の堀も現存しております。また、この平野を囲む丘陵地からは弥生時代の祭祀に使われたと考えられる大型銅鐸が6個も出土しています。

発掘調査は平成7年度の試掘調査に始まり、平成13年度の本調査終了まで約7ヶ年にわたり実施しました。調査の結果、微高地に営まれた縄文時代の集落址や墓域、弥生時代～古墳時代にかけての集落址を発見しました。これまで単郭と考えられていた高田土居城が複郭であることも判明しました。

このたびここに調査成果をまとめ報告書として刊行する運びになりました。県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、本事業の推進にあたりご指導、ご支援を賜りました諸先生方並びにご理解をいただきました日本道路公団関西支社をはじめとする関係諸機関、地元の皆様に対し深く感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長　　木 村 良 樹

例言

1．本書は和歌山県日高郡みなべ町徳蔵から気佐藤に所在する徳蔵地区遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は近畿自動車道松原那智勝浦線建設事業に伴うもので、日本道路公団関西支社の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと㈶和歌山県文化財センターが実施した。

3．発掘調査および整理事業にかかる経費はすべて日本道路公団関西支社が負担した。

4．本書は調査員がそれぞれの担当地区を執筆分担し、目次に示している。なお、編集は渋谷、佐伯が行なった。

5．調査・整理事業に伴う基準点測量・標準点測量および航空写真撮影・遺構図化は株式会社ワールド・株式会社かんこう、木製品および溶解炉の保存処理は株式会社京都科学、土壌の微化石等の科学分析・種実・材の同定・年代測定は株式会社パリノ・サーヴェイ、石器の分析は株式会社アルカにそれぞれ委託した。

6．図版編に使用した各地区の遺構写真は、調査担当者が撮影した。遺物写真については井石が撮影した。

7．徳蔵地区遺跡の地理的環境は和歌山市立博物館 額田雅裕氏に依頼した。

8．本書に使用した遺構番号は各地区ごとに１番から使用している。

9．南部荘遺跡調査指導委員会

委　員　長　　工楽善通
副 委 員 長　　小山靖憲
考 古 部 会　　工楽善通、森　郁夫
歴史地理部会　　小山靖憲
文　　献　　山本　賢、後藤君和、海津一朗、綿貫友子

10．調査および報告書作成にあたっては以下の方々からご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第であります。（所属・敬称略）

石黒立人、泉拓良、五十川伸矢、伊藤幸司、上田健太郎、大野薫、岡本敏行、川崎雅史、小谷正樹、阪本敏行、白石博則、菅榮太郎、竹広文明、千葉豊、坪之内徹、冨井眞、中井均、中村貞史　中村豊、橋口定志、浜岸宏一、増澤文武、森岡秀人、森村健一、森島康雄、水島大二、武藤康弘　家根祥多、矢野健一、弓倉弘年、吉松敏隆

11．発掘調査・整理業務の調査組織は次頁に示すとおりである。

調査組織

事務局

専務理事（事務局長兼務）	中谷博昭（平成７年度～平成11年度）
	田中嘉一（平成12年度）
	岩橋　驍（平成13年度～平成16年度）
事務局次長	菅原正明（平成７年度～平成11年度）
	吉田宣夫（平成12年度）
	畑中照雄（平成12年度・平成13年度）
	松田正昭（平成13年度～平成16年度）
	篠原　隆（平成14年度）
管理課長	西本悦子（平成14年度～平成16年度）
管理課長心得	西本悦子（平成７年度～平成13年度）
副主査	松尾克人（平成13年度～平成16年度）
主事	森　和美（平成７年度）
	松尾克人（平成７年度～平成12年度）
	久保陽子（平成８年度・平成９年度）
	出口（大野）由香子（平成11年度～平成16年度）
埋蔵文化財課長	松田正昭（平成７年度～平成12年度）
	松下　彰（平成13年度）
	渋谷高秀（平成14年度～平成16年度）

各年度担当者（埋蔵文化財課）

（発掘調査平成７年度～平成13年度）（整理業務平成14年度～平成16年度）

担当者名＼調査年度	平成７	平成８	平成９	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
渋谷　高秀 （平成８・９年度：主査、平成10～12年度：主任、平成13年度：課長補佐、平成14～16年度課長）		○	○	○	○	○				○
土井　孝之 （平成12～14年度：主任）						○	○	○		
佐伯　和也 （平成７年度：主査、平成13～16年度：主任）	○						○		○	○
黒石　哲夫 （平成13年度：副主査）							○			
立岡　和人 （平成10～13年度：専門調査員）				○		○	○			
三浦　基行 （平成11～13年度：専門調査員）					○		○			
藤村　瑞穂 （平成12・13年度：専門調査員）						○	○			
齋藤　有美 （平成11～13年度：専門調査員）						○	○			
山野　晃司 （平成10～13年度：調査補助員）				○			○			

凡例

① 地区別遺構全体図および地区割の基準線は国土座標(第Ⅵ系)に基づき、標高は東京湾標準潮位(T.P.+)の数値である。

② 本書の遺構図に使用した北方位は座標北であり、当地域では磁北が真北に対して6度10分西偏し、座標北は真北に対して0度22分西偏する。

③ 本書に使用した遺構番号は現地調査時のものをそのまま使用し、またその種類にかかわらず調査年次毎に1番からの通し番号とした。なお番号の前に遺構の種別を冠して呼称する。

④ 本書で使用した土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』(1999年度版)に準拠した。

⑤ 遺物実測図は縄文土器が1/3、それ以外の土器については1/4を基本としたが異なる場合は各々縮尺を明示している。石器・木器・金属製品についても図版内で大きさが異なるため、各々に縮尺を明示している。

⑥ 本書の遺物番号は本文と遺物実測図及び写真図版すべてに共通する。写真図版に収録した遺物は遺物実測図のすべてではなく、特に縮尺も統一していない。

⑦ 遺構写真図版は調査区ごとに載せている。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……(渋谷)……1
　第２節　調査の経過……4
　　(1)試掘調査……(佐伯)……4
　　(2)発掘調査……(渋谷)……7
　　(3)南部荘遺跡調査指導委員会……(渋谷)……8
　　(4)普及活動……(渋谷)……9
　　(5)整理の方法……(佐伯)……10
　第３節　調査の方法……(渋谷)……11
第２章　立地と環境……13
　第１節　南部平野の地形と沖積層……(額田　雅裕)……13
　第２節　歴史的環境……(渋谷)……18
第３章　遺構・遺物……26
　第１節　基本層序……(渋谷)……26
　第２節　Ⅰ区……29
　　(1)10－①区・11－⑤区……(渋谷)……29
　　(2)12－①区……(土井)……29
　　(3)Ⅰ区の包含層出土遺物……(佐伯)……30
　第３節　Ⅱ区……39
　　(1)平成９年度調査区……(渋谷)……39
　　(2)10－②区・11－②２区……(渋谷)……39
　　(3)12－②区……(土井)……48
　　(4)12－③区……(土井)……48
　　(5)10－③区……(渋谷)……51
　　(6)13－⑩区……(渋谷)……53
　　(7)13－③・⑤区……(黒石)……53
　　(8)Ⅱ区の包含層出土遺物……(佐伯)……67
　第４節　Ⅲ区……71
　　(1)11－①区……(渋谷)……71
　　(2)10－⑤区……(渋谷)……79
　　(3)12－⑧区……(土井)……87
　　(4)13－①区……(遺構－立岡・遺物－土井)……92
　　(5)13－②区……(遺構－立岡・遺物－土井)……97
　　(6)13－⑨区……(藤村・土井)……104

(7)III区の包含層出土遺物……(佐伯)……106
第5節　IV区……128
(1)11－①S区 ……(遺構－渋谷・遺物－佐伯)……128
(2)13－④区……(佐伯)……138
(3)IV区の包含層出土遺物……(佐伯)……192
第6節　V区……195
(1)11－④区……(渋谷)……195
(2)12－⑤区……(渋谷)……195
(3)13－⑥・⑦・⑧・⑪区……(土井)……195
(4)12－④区……205
縄文時代中期……(渋谷)……205
縄文時代後期……(立岡)……257
弥生時代前期～古墳時代前期……(渋谷)……283
(5)V区の包含層出土遺物……(佐伯)……319
第4章　まとめ……333
第1節　縄文時代中期～後期……333
(1)縄文時代中期……(渋谷)……333
(2)縄文時代後期……(立岡)……335
第2節　縄文時代晩期～弥生時代前期……(渋谷)……343
(1)縄文時代晩期～弥生時代前期……343
(2)遺跡の動向……345
(3)堰状遺構……348
第3節　弥生時代後期～古墳時代前期……(渋谷)……352
(1)当該期土器編年の蓄積と徳蔵地区遺跡・大塚遺跡の土器……352
(2)徳蔵地区遺跡と大塚遺跡の動向……355
(3)南部川水系の弥生時代後期から古墳時代前期の動向……356
第4節　鎌倉時代～室町時代　条里型地割の形成とその変還……(渋谷)……358
(1)現状の条里型地割……358
(2)水田の形成……360
(3)結語……368
第5節　高田土居城について……(渋谷)……369
(1)高田土居城成立以前の条里型地割……369
(2)堀6の掘削と内郭部の形成－平地居館の成立……369
(3)堀9廃絶と外堀1・2・3の掘削－城館の成立……371
(4)城郭の変還と廃絶……374
(5)出土遺物の傾向……374

付章１　徳蔵地区遺跡から出土した石器群の分析……1
(A)分析……1
(B)石鏃の押圧剥離について……50
(C)金山産サヌカイトと二上山産サヌカイトの特徴について……52
(D)使用痕分析……53

付章２　徳蔵地区遺跡の自然科学分析……63
はじめに……63
１．試料……63
２．分析方法……64
３．結果……65
４．考察……75

巻頭図版目次

巻頭図版１　南部平野遠景(南から)・南部平野遠景(東から)
巻頭図版２　調査地遠景(南から)・調査地遠景(北から)
巻頭図版３　12－④区縄文時代中期遺構面全景(東から)・12－④区縄文時代後期遺構面全景(東から)
巻頭図版４　12－④区縄文時代後期土坑2538検出状況(北西から)・
12－④区弥生時代前期～古墳時代前期遺構面全景(東から)
巻頭図版５　13－②区弥生時代前期堰状遺構検出状況(西から)・
13－②区弥生時代前期堰状遺構検出状況(南から)
巻頭図版６　13－④区高田土居城北外郭部全景(東から)・11－①Ｓ区高田土居城北側外掘(北東から)
巻頭図版７　12－④区縄文時代後期埋甕１・４・13
巻頭図版８　11－①区・10－②区弥生時代前期の土器

挿図目次

第１図　調査地位置図……2
第２図　本調査地周辺の既往の調査地……3
第３図　試掘調査位置図……4
第４図　微高地出土の土器
平成７年度試掘調査……6
第５図　中世包含層出土の土器
平成７年度試掘調査・
平成８年度試掘調査……6
第６図　調査区地区割図……12
第７図　南部平野の地形分類図……14
第８図　南部平野の地質横断面図……14
第９図　徳蔵地区遺跡とその周辺……19
第10図　南部周辺の縄文時代の遺跡……22
第11図　出土銅鐸……23
第12図　南部周辺の城館跡……24
第13図　徳蔵地区遺跡周辺地形復元図……26

第14図　基本層序模式図……28
第15図　タイプ別土師器皿……30
第16図　Ⅰ区遺構平面図・土層図……31・32
第17図　Ⅰ区10－①区包含層出土遺物……34
第18図　Ⅰ区10－①区包含層出土遺物……35
第19図　Ⅰ区10－①区包含層出土遺物……36
第20図　Ⅰ区11－⑤区包含層出土遺物……37
第21図　Ⅰ区12－①区包含層出土遺物……38
第22図　Ⅱ区10－②区・11－②２区
・13－⑩区遺構平面図……41・42
第23図　Ⅱ区10－②区中央東西トレンチ土層図
溝19土層図、溝22平面図・立面図…43
第24図　Ⅱ区10－②区土坑21・サブトレ①～③
土層図、13－③区北壁土層図、
13－⑩区南側ベルト・南壁土層図…44
第25図　Ⅱ区12－②・③区第５層上面
平面図・土層図……46
第26図　Ⅱ区12－②区第４a・b層上面平面図
・土層図、12－③区第３層上面
平面図……47
第27図　Ⅱ区平成９年度・10－③・③Ａ区
・13－③・⑤区遺構平面図
・土層図……49・50
第28図　Ⅱ区10－③区旧河川出土遺物
実測図……52
第29図　Ⅱ区13－③・⑤区溝21・30、
土坑29平面図・土層図、溝23～27
・土坑２・６～８・18土層図……54
第30図　Ⅱ区10－②区遺構出土遺物実測図
……57
第31図　Ⅱ区10－②区・11－②２区・13－③
・⑤区遺構出土遺物実測図……58
第32図　Ⅱ区13－③・⑤区遺構出土遺物
実測図……59
第33図　Ⅱ区10－③区旧河川出土遺物
実測図……60
第34図　Ⅱ区10－③区旧河川出土遺物
実測図……61
第35図　Ⅱ区10－③区旧河川出土遺物
実測図……62
第36図　Ⅱ区10－③区旧河川出土遺物・石器
実測図……63
第37図　Ⅱ区10－③区・13－③・⑤区
遺構出土石器実測図……64
第38図　Ⅱ区10－②区・Ⅲ区11－①区遺構出土
木器実測図……65
第39図　Ⅱ区10－②区・11－②２区遺構出土
木器実測図……66
第40図　平成９年度調査区・12－②・③区・
13－⑩区包含層出土遺物実測図……68
第41図　Ⅱ区10－②区包含層出土遺物
実測図……70
第42図　Ⅲ区11－①区遺構全体図……73・74
第43図　Ⅲ区11－①区掘立柱建物１・柵列１平
面図、土坑９・43・44・50・51・54・
55平面図・土層図……76
第44図　Ⅲ区10－⑤区西壁土層図、土坑４・11・
20・22・23・38、溝５・６・47・56、
Pit24土層図 ……80
第45図　Ⅲ区10－⑤・11－①・12－⑧・13－①・
②・⑨区遺構平面図……81・82
第46図　Ⅲ区10－⑤区・12－⑧区・13－①・②・
⑨区遺構平面図、13－⑨区南壁土層図
……85・86
第47図　Ⅲ区10－⑤区旧河川１・溝１・土坑２
土層図、掘立柱建物３・竪穴住居１平
面図・土層図・断面図……88
第48図　Ⅲ区12－⑧区東壁土層図……91
第49図　Ⅲ区12－⑧区旧河川２a・２b
遺物出土状況……93
第50図　Ⅲ区13－①区掘立柱建物１・２平面
図・断面図、北壁土層図……95

第51図　III区13－①区土器棺151・土坑81・508・1130・1213平面図・立面図・土層断面図、13－⑨区井戸８・９平面図・立面図・土層断面図……96
第52図　III区13－②区南壁・東壁土層図……98
第53図　III区13－②区遺構平面図・堰状遺構部分図……99
第54図　III区13－②区堰状遺構立面図・土層断面図……102
第55図　III区11－①区遺構出土遺物実測図……107
第56図　III区11－①区遺構出土遺物実測図……108
第57図　III区11－①区遺構出土遺物実測図……109
第58図　III区11－①区遺構出土遺物・鉄製品・石器実測図……110
第59図　III区11－①区遺構出土遺物・鉄製品・石器実測図……111
第60図　III区10－⑤区遺構出土遺物実測図……112
第61図　III区10－⑤区・13－①区遺構出土遺物・石器実測図……113
第62図　III区12－⑧区・13－①・⑨区遺構出土石器実測図……114
第63図　III区13－①区遺構出土遺物実測図……115
第64図　III区13－①区遺構出土遺物実測図……116
第65図　III区13－①・②区遺構出土遺物実測図……117
第66図　III区12－⑧区遺構出土遺物実測図……118
第67図　III区12－⑧区遺構出土遺物実測図……119
第68図　III区12－⑧区遺構出土遺物実測図……120
第69図　III区12－⑧区遺構出土遺物実測図……121
第70図　III区12－⑧区・13－⑨区遺構出土遺物実測図……122
第71図　III区13－⑨区・Ⅴ区13－⑥区遺構出土遺物実測図……123
第72図　III区12－⑧区・13－①・②・⑨区遺構出土木器実測図……124
第73図　III区12－⑧区遺構出土木器実測図……125
第74図　III区13－②区遺構出土木器実測図……126
第75図　III区10－⑤区・11－①区・12－⑧区・13－⑨区包含層出土遺物実測図……127
第76図　IV区11－①Ｓ区北辺外堀１内護岸用木材平面・立面図……129
第77図　IV区11－①Ｓ区北辺外堀１・２・４土層図……131・132
第78図　IV区11－①Ｓ区外堀１出土遺物実測図……133
第79図　IV区11－①Ｓ区外堀２出土遺物実測図……136
第80図　IV区11－①Ｓ区溝５（近世溝）出土遺物実測図……137
第81図　IV区11－①区・13－④区高田土居城北外郭部遺構平面図……139・140
第82図　IV区13－④区南壁土層図……143・144
第83図　IV区13－④区東辺外堀１・２・３、外堀２・３合流部 内堀６b土層図……145
第84図　IV区13－④区東辺外堀1・2合流部土層図……146

第85図　Ⅳ区13－④区外堀1・2合流部
土留め材実測図……147
第86図　Ⅳ区13－④区橋脚遺構実測図
……149・150
第87図　Ⅳ区13－④区遺構出土遺物
実測図……153
第88図　Ⅳ区13－④区堀６c堰止め状況・
内堀６a土層図 ……154
第89図　Ⅳ区13－④区遺構出土遺物実測図
……157
第90図　Ⅳ区13－④区
溝40・14・49・456土層図 ……159
第91図　Ⅳ区13－④区溝14出土遺物実測図
……160
第92図　Ⅳ区13－④区溝40出土遺物実測図
……161
第93図　Ⅳ区13－④区掘立柱建物４・５
実測図……163
第94図　Ⅳ区13－④区掘立柱建物
６・10～13実測図……164
第95図　Ⅳ区13－④区井戸30実測図
……165
第96図　Ⅳ区13－④区井戸32実測図
……166
第97図　Ⅳ区13－④区溝49出土遺物実測図
……167
第98図　Ⅳ区13－④区遺構出土遺物実測図
……168
第99図　Ⅳ区13－④区土坑８出土遺物実測図
……168
第100図　Ⅳ区13－④区土坑937平面図・土層図、
土坑５・８・18～20・26・33・34・37
・38・43・46・435・456・603土層図
……170
第101図　Ⅳ区13－④区掘立柱建物１～３・14、
井戸815実測図 ……172
第102図　Ⅳ区13－④区井戸815出土遺物
実測図……173
第103図　Ⅳ区13－④区土坑16出土遺物
実測図……174
第104図　Ⅳ区13－④区南北セクションベルト・
土坑605・609・611・653・662・726
・793・811・892土層図、土坑428
平面図・土層図、土坑622平面図
・立面図・土層図……175
第105図　Ⅳ区13－④区土坑825出土遺物
実測図……176
第106図　Ⅳ区13－④溝61・62・204・210・819
・871、土坑825土層図……176
第107図　Ⅳ区13－④区掘立柱建物７～９、
井戸219実測図 ……178
第108図　Ⅳ区13－④区土坑254・1084・1085
実測図……180
第109図　Ⅳ区13－④区各土坑出土遺物実測図
……180
第110図　Ⅳ区11－①S区・13－④区
近世井戸出土遺物実測図……181
第111図　Ⅳ区13－④区井戸17（溶解炉転用井戸）
および出土遺物実測図……183
第112図　Ⅳ区13－④区溶解炉模式図……184
第113図　Ⅳ区13－④区溶解炉実測図……185
第114図　Ⅳ区11－①Ｓ区外堀１、13－④区外堀
１出土木器実測図……187
第115図　Ⅳ区11－①Ｓ区外堀1出土木器実測図
……188
第116図　Ⅳ区・Ⅴ区11－①Ｓ区・13－⑦区
遺構出土木器実測図……189
第117図　Ⅳ区11－①Ｓ区・13－④区外堀１
出土木器実測図……190
第118図　Ⅳ区11－①Ｓ区・13－④区
遺構出土木器実測図……191
第119図　Ⅳ区13－④区包含層第３層

出土遺物実測図……193
第120図　Ⅳ区13－④区包含層第３層
出土遺物実測図……194
第121図　Ⅴ区12－⑤区遺構平面図
・土層図……196
第122図　Ⅴ区12－④区基本層序……198
第123図　Ⅴ区11－④区・13－⑥・⑦・⑧
・⑪区第５層上面遺構平面図
・土層図……199・200
第124図　Ⅴ区11－④区・13－⑦・⑧・⑪区
第４層上面遺構平面図・土層図、
11－①区溝１詳細図、第５層上面図の
取水口部分拡大図……201・202
第125図　Ⅴ区12－④区東西・南北トレンチ
土層図……203・204
第126図　Ⅴ区12－④区第７層上面縄文時代中期
遺構平面図……207・208
第127図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居1900・1950
平面図・土層図……214
第128図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居2002・2003
平面図・土層図……215
第129図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居2006・2007
平面図・土層図……216
第130図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居2244・2245
平面図・土層図……217
第131図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居2295・2486
平面図・土層図……218
第132図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期竪穴住居2650・2651
・2661・2678平面図・土層図……219
第133図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期埋甕平面図・土層図
・遺物実測図……231
第134図　Ⅴ区12－④区第７層上面
縄文時代中期土坑1922・2340・2527
・2760平面図・土層図、土坑1868
・1930・2199・2201・2237・2498
土層図……232
第135図　Ⅴ区12－④区縄文時代中期
土坑1881・2371・2648・2773
平面図・土層図・断面図……233
第136図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……234
第137図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……235
第138図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……236
第139図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……237
第140図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……238
第141図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……239
第142図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……240
第143図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……241
第144図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……242
第145図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……243
第146図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……244
第147図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……245
第148図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……246

第149図　Ⅴ区12－④区遺構・包含層出土遺物
実測図……247
第150図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……248
第151図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……249
第152図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……250
第153図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……251
第154図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……252
第155図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……253
第156図　Ⅴ区12－④区縄文時代中期出土
サヌカイト分布密度図……254
第157図　Ⅴ区12－④区縄文時代中期出土
石器分布密度図……255
第158図　Ⅴ区12－④区遺構・包含層出土
石器実測図……256
第159図　Ⅴ区12－④区包含層出土石器実測図
……257
第160図　Ⅴ区12－④区第６層上面縄文時代後期
遺構平面図……259・260
第161図　Ⅴ区12－④区第６層上面縄文時代後期
埋甕1～6平面図・土層図・断面図
……263
第162図　Ⅴ区12－④区第６層上面縄文時代後期
埋甕９～12平面図・土層図・断面図
……264
第163図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……265
第164図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……266
第165図　Ⅴ区12－④区第６層上面
縄文時代後期竪穴住居2600・2682
・1113平面図・土層図、
配石遺構１平面図・立面図……280
第166図　Ⅴ区12－④区第６層上面
縄文時代後期埋甕13上の配石遺構
(土坑2538)平面図・土層図
埋甕13平面図・土層図……281
第167図　Ⅴ区12－④区第６層上面
縄文時代後期土坑2603・1160・1165
・1174・1214・2273・2268・2241
・1778・1179・1780・2602・2458
・2451平面図・土層図……282
第168図　Ⅴ区12－④区第６層上面
縄文時代後期土坑1162・2528・2609
・2569平面図・土層図……283
第169図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……284
第170図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……285
第171図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……286
第172図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……287
第173図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……288
第174図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……289
第175図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図
……290
第176図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……291
第177図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……292
第178図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……293
第179図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図
……294

第180図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図……295
第181図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図……296
第182図　Ⅴ区12－④区包含層出土遺物実測図……297
第183図　Ⅴ区12－④区遺構出土石器実測図……301
第184図　Ⅴ区12－④区遺構出土石器実測図……302
第185図　Ⅴ区12－④区第５層上面
弥生時代～古墳時代遺構平面図……305・306
第186図　Ⅴ区12－④区第５層上面
弥生時代前期竪穴住居100
平面図・土層図、遺構出土石器実測図……307
第187図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期竪穴住居200・300
平面図・土層図……308
第188図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期竪穴住居400・500・501
平面図・土層図……310
第189図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期竪穴住居550・700
平面図・土層図……313
第190図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期竪穴住居600・800・900
平面図・土層図……315
第191図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期掘立柱建物１～６
平面図・土層図……317
第192図　Ⅴ区12－④区第５層上面
古墳時代前期土坑143・324・868平面図
・土層図、土坑57・196・305・311・320
・456・496・926土層図、溝33・201・
301・367・403・888・1000土層図…321
第193図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図……323
第194図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図……324
第195図　Ⅴ区12－④区遺構出土遺物実測図……325
第196図　Ⅴ区12－④区遺構出土石器実測図……326
第197図　Ⅴ区12－④区・13－⑦・⑧区・12－⑤
区遺構出土遺物実測図……327
第198図　Ⅴ区11－④区包含層出土遺物実測図……328
第199図　Ⅴ区11－④区・13－⑦・⑧区・12－⑤
区・13－⑪区包含層出土遺物実測図……329
第200図　Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅴ区包含層出土
石器実測図……330
第201図　徳蔵地区遺跡周辺の縄文遺跡……334
第202図　12－④区縄文時代中期遺構平面図
……336・337
第203図　12－④区縄文時代後期遺構平面図
……338・339
第204図　縄文時代晩期～弥生時代前期
遺構分布図……347
第205図　堰状遺構の機能推定図……349
第206図　堰状遺構の類例（北島遺跡・岩屋遺跡）
……350
第207図　南部川水系弥生時代後期後半～古墳
時代前期土器変遷表……353
第208図　弥生時代後期～古墳時代前期
遺構分布図……354
第209図　南部平野調査地点試掘状況図……359
第210図　南部平野灌漑概況区分図……362
第211図　中世水田層遺物分布図……363
第212図　高田土居城変遷図１……372

第213図　高田土居城変遷図２……373

表　目　次

第１表　既応の調査地一覧……３
第２表　調査工程表……８
第３表　普及活動一覧表……９
第４表　地区割表……12
第５表　遺跡地名表……20
第６表　内堀６a出土土師器皿一括資料法量表
……156
第７表　掘立柱建物規模一覧……162
第８表　縄文時代中期出土石器一覧
……221
第９表　Ⅴ区12－④区縄文時代中期
土坑・Pit規模一覧１～９……222～230
第10表　Ⅴ区12－④区縄文時代後期
土坑・Pit規模一覧１～３……298～300
第11表　縄文時代後期出土石器一覧……303
第12表　Ⅴ区12－④区縄文時代後期
遺構及び包含層出土の石器器種別
数量表……303
第13表　Ⅴ区12－④区第５層上面検出
掘立柱建物一覧……314
第14表　徳蔵地区遺跡遺構出土石器一覧
……331
第15表　徳蔵地区遺跡包含層出土
石器一覧……332
第16表　出土銭貨拓影及び一覧……332
第17表　包含層出土遺物器種構成表……364～367

写　真　目　次

写真１　試掘調査風景……５
写真２　発掘現場風景……７
写真３　調査指導風景……８
写真４　普及活動風景……９
写真５　現地説明会風景……10
写真６　整理作業風景……11
写真７　調査区地点別土層断面……27
写真８　堰状遺構……103
写真９　西壁土層堆積状況……103
写真10　溶解炉（中甑）……185
写真11　航空写真……367

付　章　１

挿　図　目　次

第１図　図説による剝離技術……２
第２図　ハンマーの材質の違いによるコーン
……３
第３図　12－④区縄文時代中期前半の遺構から
出土した石器群(1)……12
第４図　12－④区縄文時代中期前半の遺構から
出土した石器群(2)……13
第５図　12－④区縄文時代後期前半の遺構から
出土した石器群……14
第６図　12－④区５層・６層（包含層）より出土
した石器群(1)……19
第７図　12－④区５層・６層（包含層）より出土

した石器群(2)……20
第８図　12－④区５層・６層(包含層)より出土した石器群(3)……21
第９図　12－④区５層・６層(包含層)より出土した石器群(4)……22
第10図　12－④区５層・６層(包含層)より出土した石器群(5)……23
第11図　12－④区５層・６層(包含層)より出土した石器群(6)……24
第12図　12－④区５層・６層(包含層)より出土した石器群(7)……25
第13図　12－④区縄文時代の遺構より出土したその他の石器群……27
第14図　12－④区弥生時代の住居から出土した石器と弥生時代特有の石器……29
第15図　12－④区古墳時代前期の住居から出土した石器群(1)……30
第16図　12－④区古墳時代前期の住居から出土した石器群(2)……31
第17図　12－④区中世溝・河川より出土した石器群とその他出土の石器群(1)……32
第18図　12－④・⑤区その他の出土石器群(2)……33
第19図　10－②区より出土した石器群……34
第20図　11－①区と12－⑧区より出土した石器群……35
第21図　13－④区より出土した石器群(1)……36
第22図　13－④区より出土した石器群(2)とその他の表採・出土地不明の石器群……38
第23図　二上山石核１類の製作系列(1)……40
第24図　二上山石核１類の製作系列(2)と角柱状剥片の製作系列……41
第25図　二上山石核２類の製作系列(1)……42
第26図　二上山石核２類の製作系列(2)……43
第27図　二上山石核３類の製作系列……44
第28図　二上山石核４類の製作系列……44
第29図　金山石核１類の製作系列……45
第30図　金山石核２類の製作系列……47
第31図　二上山原石核の製作系列……48
第32図　石庖丁の使用痕……58
第33図　石器の使用痕……59

表　目　次

表１　全体属性表１～３……60～62

写　真　目　次

写真１　鋸歯縁凹基鏃……54
写真２　凹基鏃……54
写真３　鋸歯縁凹基鏃……54
写真４　凹基鏃……54
写真５　凹基鏃……54
写真６　凹基鏃……54
写真７　凹基鏃……54
写真８　凹基鏃……54
写真９　中形有茎鏃……55
写真10　有茎鏃……55
写真11　二上山産サヌカイト……55
写真12　金山産サヌカイト……55
写真13　二上山産サヌカイト……55
写真14　金山産サヌカイト……55
写真15　二上山産サヌカイト……55
写真16　金山産サヌカイト……55

付　章　2

挿　図　目　次

図 1　暦年較正結果……66
図 2　主要珪藻化石群集の属位分布……69
図 3　花粉化石群集の属位分布……71
図 4　植物珪酸体群集と珪化組織片の産状…72

表　目　次

表 1　分析試料一覧……63
表 2　放射性炭素年代測定結果……65
表 3　暦年較正結果……65
表 4　珪藻分析結果(1)……67
表 4　珪藻分析結果(2)……68
表 5　花粉分析結果……70
表 6　植物珪酸体分析結果……72
表 7　樹種同定結果……73
表 8　種実同定結果……74

図　版　目　次

図版 1　珪藻化石……79
図版 2　花粉化石……80
図版 3　植物珪酸体……81
図版 4　種実遺体……82
図版 5　木材……83

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

和歌山県の海岸線に沿ってその中央部、紀北地方と紀南地方の境界部、南部川流域に日高郡みなべ町（平成16年10月より現在の町名、それまでは南部町・南部川村）は位置する。南高梅や備長炭の産地として、またアカウミガメの産卵地である千里の浜など全国的に有名な地域である。考古資料においても、縄文時代から中世に至る数多くの遺跡が存在する。南部川流域の丘陵部では南部平野を囲むかのように、「見る銅鐸」と呼ばれる大型銅鐸が６個も集中して出土している。中世には高野山領南部荘として多くの文献史料が残り、中世荘園の内実の明らかな地域として著名である。またこの平野部には中世平城である高田土居城の堀跡や173ヘクタールにも及ぶ条里型地割が明瞭に残り、中世の面影を色濃く残している。南部平野に条里制が施工されて以降、大規模開発が現代までなかったことにより、景観としての「中世荘園」が良好に残った地域である。

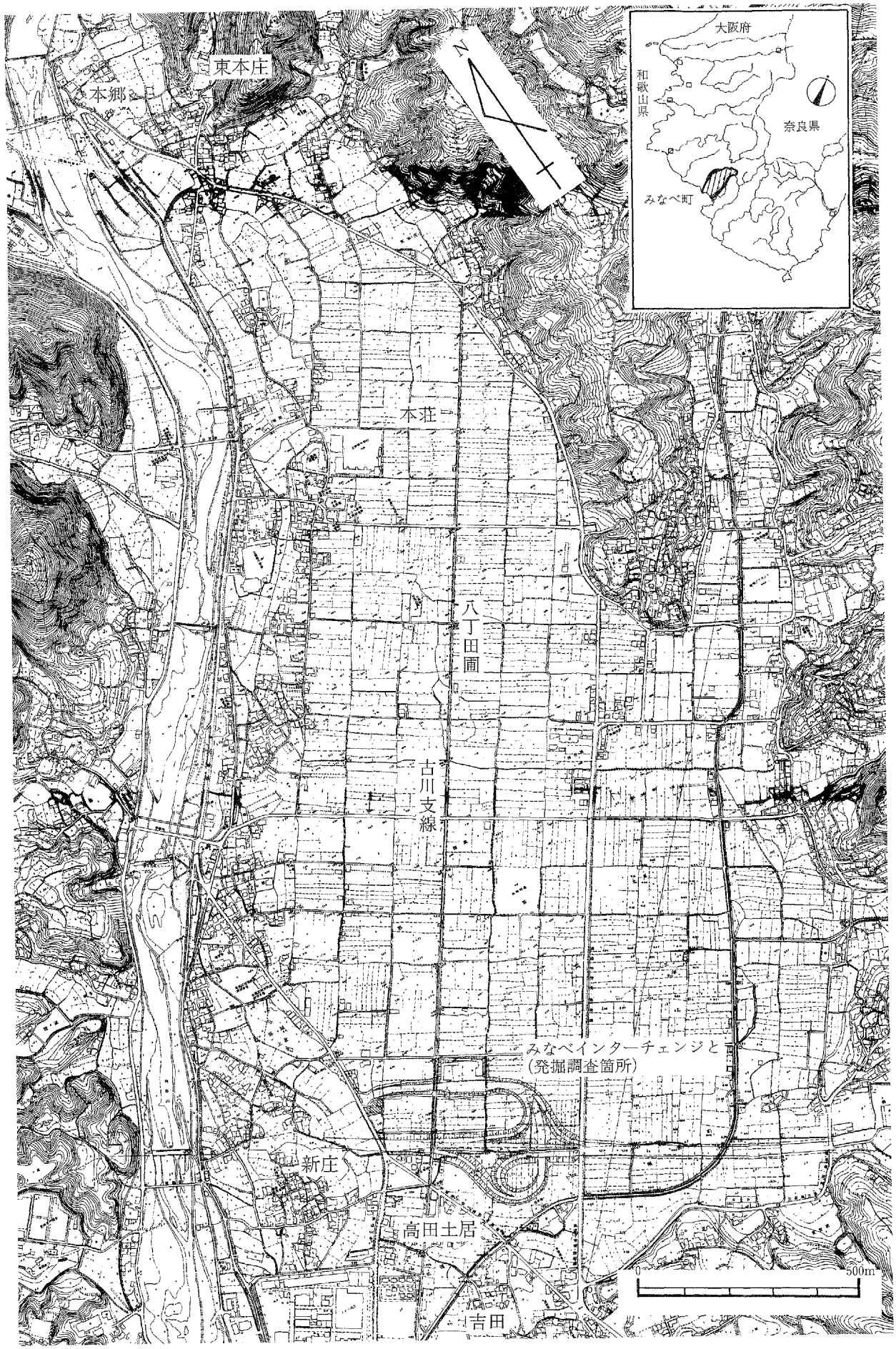
紀北地方と紀南地方を結ぶ主要な幹線道路は、複雑な海岸線を南進する国道42号線のみであり慢性的な渋滞が続いていた。そのため早期に近畿自動車道紀勢線の延長が望まれており、御坊インターチェンジからみなべインターチェンジまでの事業化がなされた。このことにより、歴史的景観を良好に残す南部平野に日本道路公団建設のみなべインターチェンジが着工された。その面積は60,000㎡に及び、これは大阪府松原市から和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にいたる延長約208㎞の近畿自動車道松原那智勝浦線の一部である。

この路線が平成６年度に計画されて以降、路線内の埋蔵文化財について日本道路公団と県教育委員会文化財課が協議し、当センターで平成７年度に路線内の御坊市～旧南部町にかけての分布調査とみなべインターチェンジ建設予定地内の旧南部町部分の試掘調査、平成８年度に旧南部川村の山間部と同インターチェンジの同村部分の試掘調査を実施した。

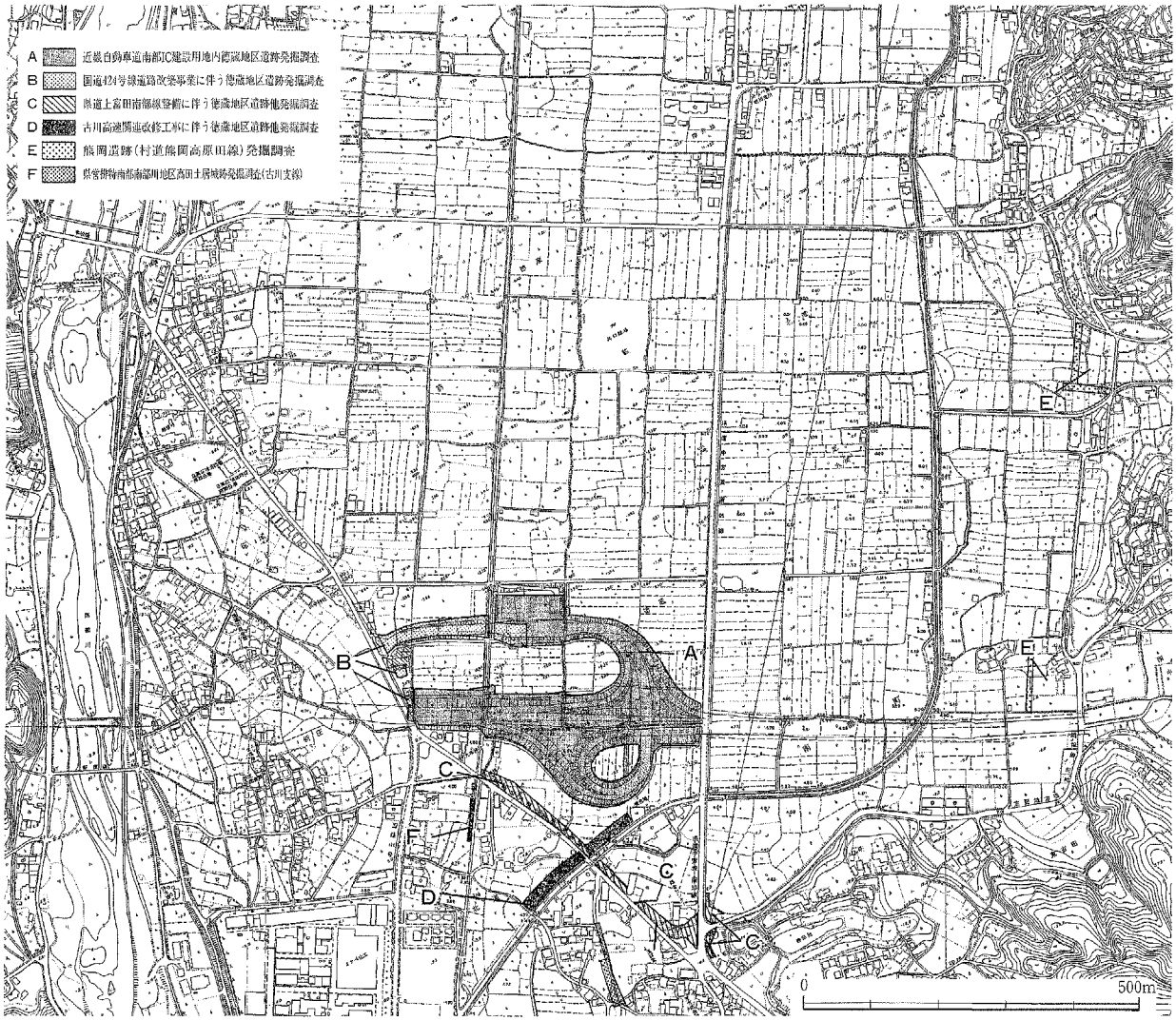
試掘調査の結果、みなべインターチェンジ建設予定地は、南部平野全域に残存する条里型地割の南端部分に該当し中世包含層が全面に存在すること、また縄文時代から古墳時代にかけての遺構を検出したことにより、県教育委員会では、全面調査が必要であるとの判断に達し、日本道路公団と協議した結果、当センターで対象となる地域について平成９年度より順次発掘調査を実施することになった。

高速道路建設に伴い南部平野では、高速道路周辺の道路整備、河川改修工事、農業用地基盤整備など数多くの事業が一挙に着工された。これら各種開発行為に伴う試掘調査と発掘調査は、平成16年度まで実施された。この間、平成10年度から13年度までが開発のピークであり、毎年13,000㎡前後が調査された。また、国・県・町村の各公共事業に対する埋蔵文化財調査と共に民間工事に伴う調査も実施された。平成16年度の古川本線改修工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査をもって一連の南部平野における埋蔵文化財調査は終了した。

これらの調査総面積は、約73,000㎡に及ぶものであり、この様な大規模な調査は一地域における埋蔵文化財調査としては、和歌山県下では初めての出来事である。


東本庄
本郷
本荘
八丁田圃
古川支線
みなべインターチェンジと
(発掘調査箇所)
新庄
高田土居
吉田
大阪府
和歌山県
奈良県
みなべ町
N
0
500m

第１図　調査地位置図



第２図　本調査地周辺の既往の調査地

南部平野　徳蔵地区遺跡周辺部　発掘調査					
	事業名	委託機関名	対象遺跡名	調査年度	報告書等
A	近畿自動車道南部ＩＣ建設用地内徳蔵地区遺跡発掘調査	日本道路公団関西支社	徳蔵地区遺跡・高田土居城跡	1997～2001年	本報告書に記載
B	国道424号線道路改築事業に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡	1998年 2001年	『徳蔵地区遺跡 424号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』 財団法人 和歌山県文化財センター　2003年８月
C	県道上富田南部線整備に伴う徳蔵地区遺跡他発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡、高田土居城跡 大塚遺跡	2001年	『文化財センター年報2001』
D	古川高速関連改修工事に伴う徳蔵地区遺跡他発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡	2001年 2004年	『文化財センター年報2001・2002』
E	熊岡遺跡（村道熊岡高原田線）発掘調査	南部川村	熊岡Ⅱ遺跡	2002年	『文化財センター年報2002』
F	県営排特南部南部川地区高田土居城跡発掘調査（古川支線）	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡・高田土居城跡	2002年	『高田土居城跡発掘調査』 財団法人 和歌山県文化財センター 2003年３月

第１表　既往の調査地一覧

第２節　調査の経過

（１）試掘調査（第３図）

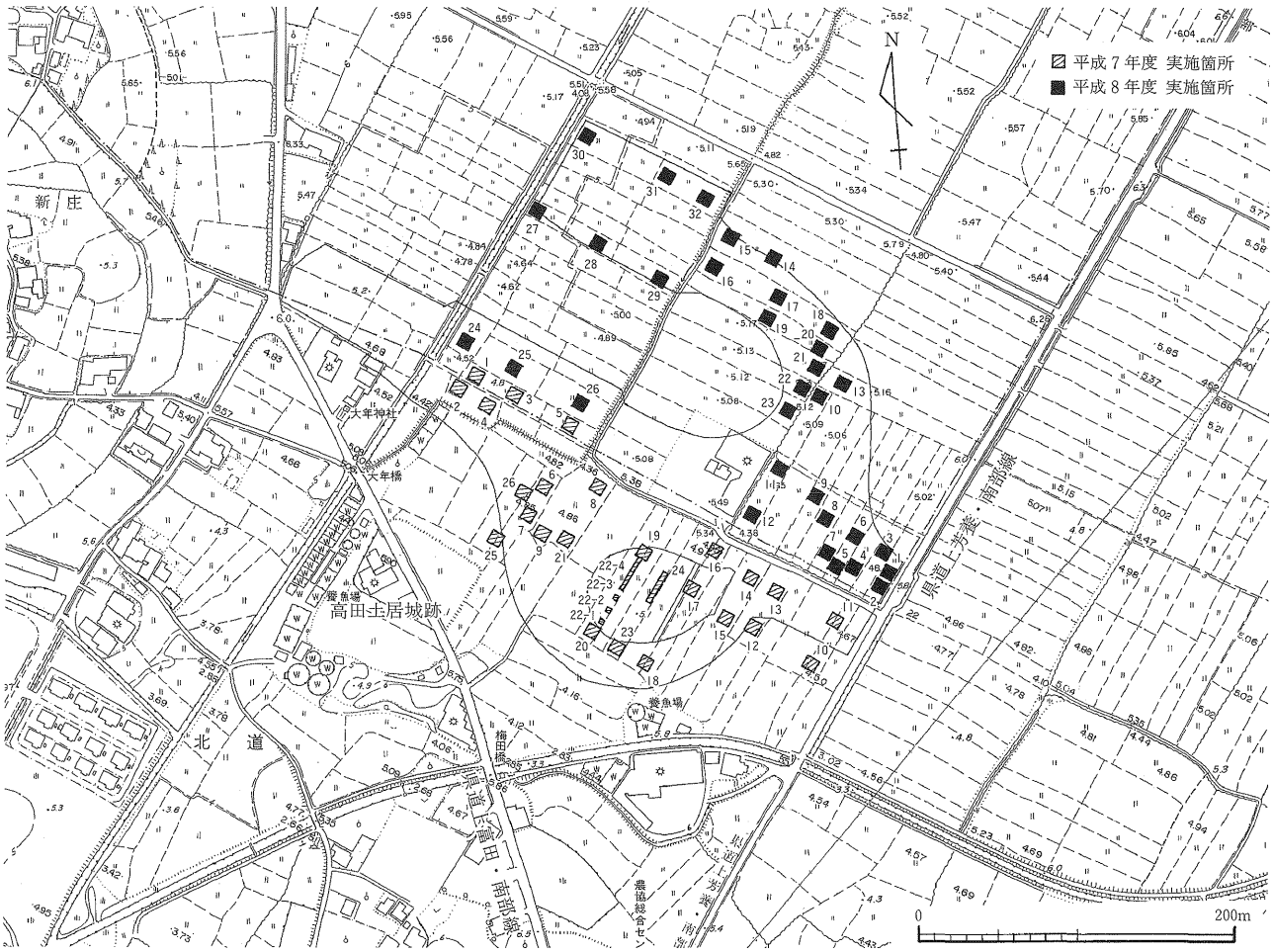
調査は基本的に耕作土と床土を機械掘削し、それより下層の包含層あるいは遺構については人力による調査を行なった。層位については耕作土と床土を第１層・第２層とし、それ以下を順次３・４・・・層とした。従って各試掘坑の時期的な層位認識は必ずしも同じでない。

〔平成７年度調査〕

御坊インターチェンジ以南からみなべインターチェンジまでの区間で分布調査を行い、路線内を踏査したが、遺物の集中する箇所や現状地形から遺構の存在を確認できる地点はなかった。

試掘調査は、一辺３ｍの正方形の調査坑を24箇所、１ｍ×９ｍのトレンチを２箇所設定した。この試掘坑26基のうち24基で包含層を、うち７基については遺構を検出した。堆積状況や土質から、Ａ～Ｃに区分できる。

Ａグループは東側に設定した試掘坑No.10～No.17・No.19である。状況は出土遺物から中世包含層（室町時代）と考えられる第３層（N6/0・灰色シルト）、第４層（N7/0・灰色シルト）が確認された。ただし第４層についてはNo.10、No.12のみの確認であった。その下層は灰色の弱粘性土と緑灰あるいはオリーブ灰の強粘性土で無遺物層であった。中世包含層の下層は湿地帯と考えられる。



第３図　試掘調査位置図

Ｂグループは№18・№20・№22～№24である。Ａグループと同様に中世の包含層である第３層、第４層は確認できたが、灰白色系（Ｎ7/0～Ｎ8/0）の砂質土にマンガン粒が混ざるもので、土質、色調ともに若干の違いが認められた。またこれより下層はＡグループのように粘性土は無く、褐色系の砂質シルトが堆積し、縄文時代中期の土器を包含していた。また、トレンチ22-４ではこの包含層が北東方向に落ちることを確認した。すなわちＡグループとＢグループの境で、状況的には微高地の縁辺部であろう。

Ｃグループは確認範囲の西側の№１～№９、№21・№25・№26である。Ｂグループと同様な中世包含層（№３・４）が確認された。この内№25･26グリッドで室町時代の包含層の下にもう一層の中世包含層を確認した。この層は出土遺物から鎌倉時代と考えられる。№２・№４・№５・№８・№９・№21については中世包含層下に粘性土を確認した。他のグリッドについての中世包含層下は黄橙色系（10ＹＲ8/8）シルトで、出土遺物から弥生時代の包含層であった。

以上、Ａ・Ｂ・Ｃグループの全ての試掘坑で中世包含層を確認した。この三地区が大きく違うのはそれより下層の堆積状況が異なっていることで、中世以前のそれぞれの地点での様相の違いを反映していると考えられる。

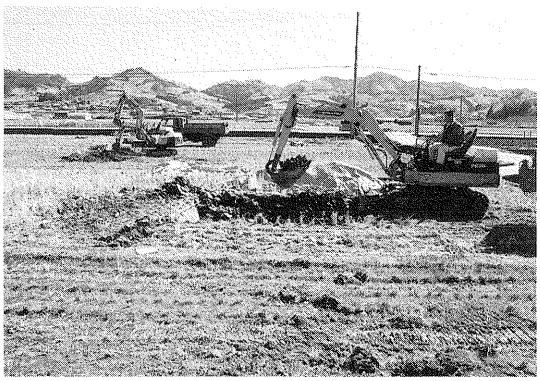
〔平成８年度調査〕

調査対象地の現状は水田、梅畑、ハウス栽培地、野菜畑、工場などである。３ｍ×３ｍのグリッドを32箇所設けた。さらに南部川の右岸、鎌倉時代の寺院跡とされるブゼン寺跡に１ｍ×６ｍのトレンチを２箇所設定した。現状は山林である。

ブゼン寺跡の調査については、丘陵の頂上部分の平坦部にトレンチ２箇所を「Ｌ」字状に設けた。丘陵のため機械の搬入は難しく、最初から人力で行なった。層序は表土、黄褐色土、地山（黄色岩）で遺構は皆無であった。

水田部分の調査では、前年度の調査結果と同様に第３層、第４層で中世包含層を確認した。ここでも、これより下層の堆積状況の違いによって、２地区にグルーピングが可能である。

平成７年度 試掘調査



平成８年度 試掘調査

写真１　試掘調査風景

Ｄグループ（№１～№23、№27～№32）はＡグループの北側に位置し、酷似した堆積状況を呈した。Ａグループの湿地帯の続きと考えられる。Ｅグループ（№24～№26）は中央部には中世包含層が存在せず、黄色シルト層を検出したことから、Ｂグループに繋がる弥生時代の遺構面があると考えた。

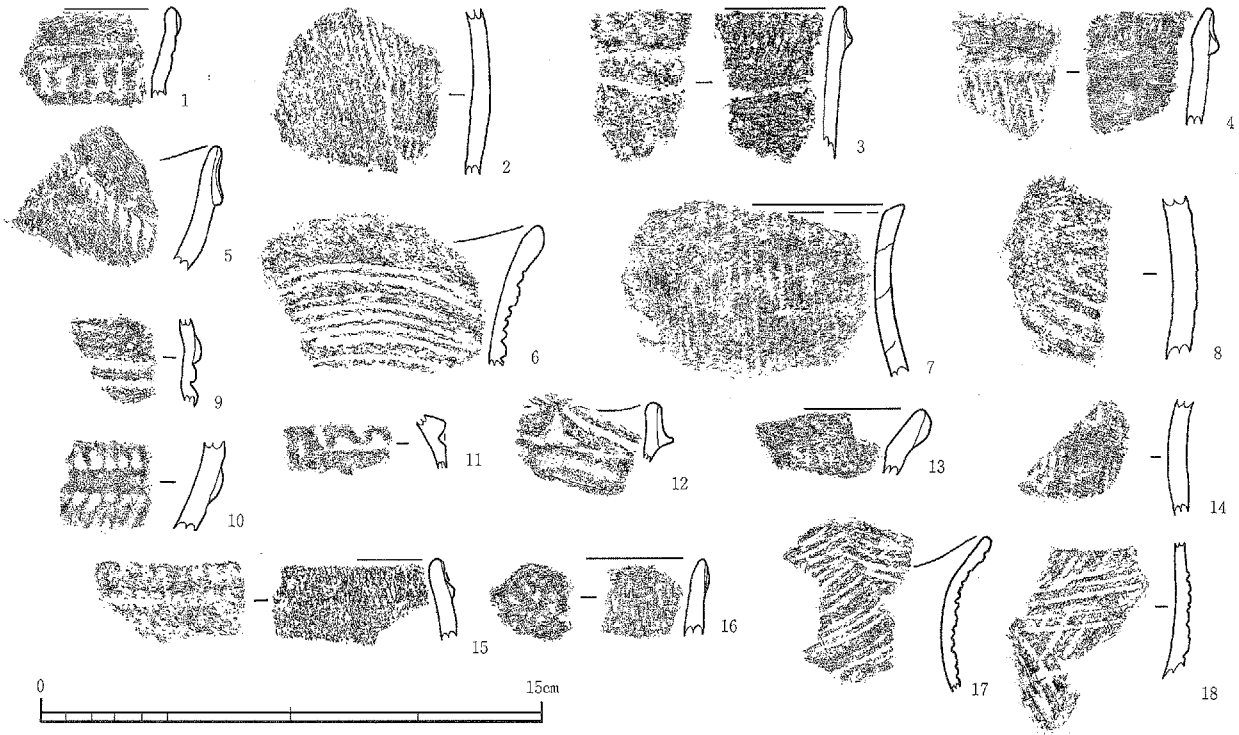
平成７・８年度の調査において判明したことは以下の点である。ブゼン寺跡には遺構は存在しない。南部平野の水

田部分には、中世包含層が全面に存在すること、旧南部町部分には微高地が存在し、縄文時代中期の遺物が出土することである。

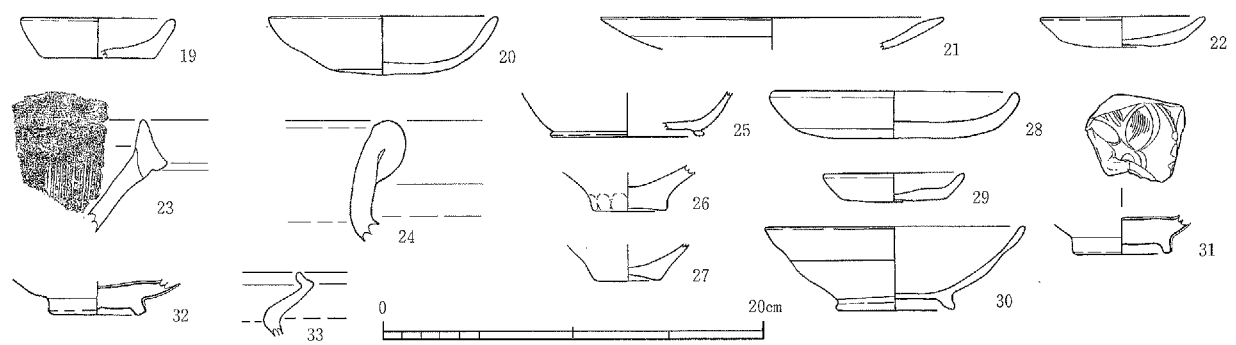
〔試掘調査出土の遺物〕（第４・５図、PL.81）

試掘坑から出土した遺物には先述した地形的な面から大きく分けて、微高地から出土した遺物と中世包含層から出土した遺物がある。この微高地は本調査区のＶ区12-④区に相当する。微高地から出土した遺物のほとんどは縄文土器（１～18）であった。１～５・13～16は船元Ⅰ・Ⅱ式、６・17は船元Ⅲ式、７・８・18は船元Ⅳ式である。９～11については搬入品と考えられ、東海や関東地方との交流が窺えられる。12は四ツ池式である。試掘調査で出土した数少ない後期の土器である。また、出土した縄文時代中期の遺物の中で船元Ⅱ式が最も多く、次いでⅣ式である。この二時期に画期が認められる。

中世包含層出土の遺物は多種多様で縄文時代から室町時代までの遺物がある。19～21・28は土師器皿で、21は京都系である。22・29・30は瓦器である。22と29は小皿で、30は椀である。23は備前焼の擂鉢で、24は備前焼甕である。双方ともに乗岡編年の４期ｂと考えられる。31・32は中国製青磁碗で



第４図　微高地出土の土器 平成７年度試掘調査(20グリッド　１～12、23グリッド　13～18)



第５図　中世包含層出土の土器 平成７年度試掘調査(19～27)・平成８年度試掘調査(28～33)

ある。25は須恵器の杯身、26・27は弥生土器の底部である。33は土師質土釜である。

このような遺物出土状況から、調査地の周辺一帯には連綿たる先人たちの生活の営みを感じとることができる。しかしながら、平安時代前半の時期の遺物が欠けている。

（２）発掘調査

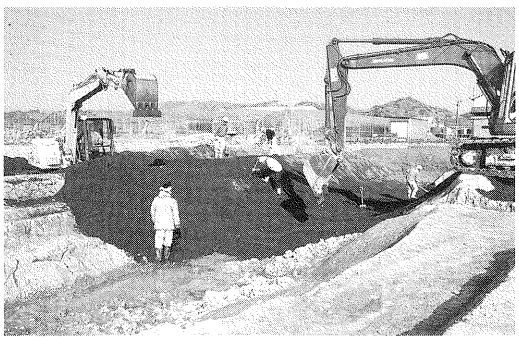
調査は、平成９年度から13年度にかけて実施した。平成10年度の調査では、条里制地割が残る水田の作られた時期把握を調査目的の一つとした。水田層の層位的発掘により、鎌倉時代まで遡ることが判明した。また縄文時代晩期～弥生時代前期、弥生時代後期末～古墳時代前期、鎌倉時代～室町時代の各時代の遺構・遺物を検出した。とりわけ、旧河川に堆積した層から出土した縄文時代晩期～弥生時代前期の土器には、弥生土器や在地でつくられた瀬戸タイプと呼ばれる突帯文土器のほかに、東日本・東海・紀北・生駒西麓地域などからの搬入品があり、水稲耕作が各地に広まる時期に他地域と交流をしていたこと、条里型地割の水田層が、鎌倉時代以前に造られたことも判明した。平成11年度の調査では、高田土居城の二重の北辺外堀、三重の東辺外堀、二重の西辺外堀を検出し、その規模は、全国有数のものであることが判明した。単郭の館形式の平城と認識されていた高田土居城は、中世南部荘において、条里型地割の水田を潤す用排水がすべて集まる地点に立地し、複郭形式であることが確認されたのである。平成12年度の調査の12-④区では、３面にわたる遺構面を検出した。最下層では縄文時代中期前半の西日本で初めての集落や最古の埋甕を、中層面では縄文時代後期前半の集落、上層面では弥生時代前期と古墳時代初頭にかけての集落を検出した。面積は約3,600㎡であるが、微高地の広がりは40,000㎡以上の大きさがあることからも、各時代ともに大規模集落であることが推定されるに至った。平成13年度の調査では、高田土居城の外郭の調査を行い、通路で区画された屋敷地や橋脚などを検出した。また、弥生時代前期の堰状遺構を検出し、水稲耕作の技術が早い段階から土木技術を伴って南部に入ってきていたことが判明した。高田土居城廃絶以降の外郭部からは、井戸枠に転用されたため、完形で残った江戸時代の溶解炉も検出した。

県教育委員会の指導により、縄文時代中期の遺構と高田土居城跡の外郭部と外堀は、砂で埋め戻した。

西辺外堀については更に、ボックス自体を工法変更して外堀跡の遺構面より下位を現状保存した。

平成12年度　発掘風景

平成13年度　発掘風景



調査地 13-④区 砂による埋戻し状況

写真２　発掘現場風景

（３）南部荘遺跡調査指導委員会

みなべ町のみなべインターチェンジ建設を契機として行われる周辺の基盤整備を含めた大規模な発掘調査は、和歌山県では初めての経験である。また条里型地割に代表される中世荘園の面影が色濃く残り、文献資料や石造遺物など数多く残る地域であることから、考古資料だけの調査ではなく、総合的な視野からの調査が必要との判断から、考古・歴史地理・文献の三分野からなる南部荘遺跡調査指導委員会を平成13年８月１日に設置した。その後、現地での指導を平成13年10月24日、出土遺物の整

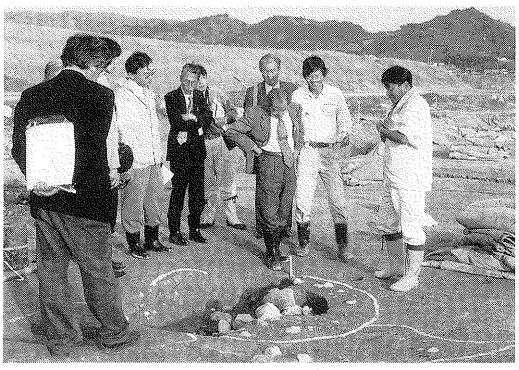


写真３　調査指導風景

委員長

工楽　善通
（財団法人和歌山県文化財センター理事）

副委員長

小山　靖憲
（県立博物館協議会委員・帝塚山大学教授）

考古部会（埋蔵文化財調査）

工楽　善通
森　　郁夫
（県文化財保護審議委員・帝塚山大学教授）

歴史地理部会（水利調査）

小山　靖憲

文献（絵図・文献・金石文等調査）

山本　　賢
（県文化財保護指導員・南部町文化財保護審議委員会委員長）

後藤　君和
（県文化財保護指導員・南部川村文化財保護審議会委員長）

海津　一朗
（和歌山大学助教授）

綿貫　友子
（大阪教育大学助教授）

和歌山中世荘園調査会

調　査　区	面積(㎡)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
第１次試掘調査（平成７年度）	234												
第２次試掘調査（平成８年度）	300												
９－１区　（平成９年度）	1,700												
10－１区　（平成10年度）	4,904												
10－２区　（平成10年度）	4,915												
10－３区　（平成10年度）	1,164												
10－５区　（平成10年度）	2,906												
11－１区　（平成11年度）	4,796												
11－１Ｓ区　（平成11年度）	2,246												
11－４区　（平成11年度）	5,145												
11－５区　（平成11年度）	524												
12－１区　（平成12年度）	2,862												
12－２区　（平成12年度）	2,350												
11－②２区　（平成12年度）	207												
12－３区　（平成12年度）	1,726												
12－４区　（平成12年度）	3,600												
12－５区　（平成12年度）	2,169												
12－８区　（平成12年度）	936												
13－１区　（平成13年度）	1,247												
13－２区　（平成13年度）	246												
13－３区　（平成13年度）	2,936												
13－５区　（平成13年度）													
13－４区　（平成13年度）	5,056												
13－６区　（平成13年度）	201												
13－７区　（平成13年度）	635												
13－８区　（平成13年度）	901												
13－９区　（平成13年度）	1,229												
13－10区　（平成13年度）	411												
13－11区　（平成13年度）	305												

第２表　調査工程表

理指導を平成14年８月２日に受けた。

（４）普及活動

大規模開発に伴う発掘調査は、記録保存のためのものである。しかし地域史としての考古学、県民が地域の歴史を考古資料で理解する、知るという側面を考えるとき、普及活動は、必要不可欠な活動として浮かび上がる。自分が住むすぐ近くの地域からでた遺構・遺物から祖先の成り立ちを考えるとき、歴史はよりリアルで身近な存在になる。南部川流域の徳蔵地区遺跡及び高田土居城跡調査は、県下で初めての大規模な発掘例である。その調査をより有効に活用し利用してもらうため、調査期間中に多くの普及活動を行った。

岩代小学校見学

上南部中学校発掘体験

南部中学校見学

南部小学校６年生総合学習

写真４　普及活動風景

現地説明会	内　　容
平成10年度 平成11年２月７日	徳蔵地区遺跡現地説明会（古墳時代初頭の水田跡） 南部町・南部川村教育委員会共催
平成11年度 平成12年３月11日	徳蔵地区遺跡現地説明会（高田土居城北辺堀） 南部町・南部川村教育委員会共催
平成12年度 平成12年10月７日	徳蔵地区遺跡現地説明会（弥生時代前期～古墳時代前期集落跡） 南部町・南部川村教育委員会共催
平成13年３月24日	徳蔵地区遺跡現地説明会（縄文時代中期前半集落跡） 南部町・南部川村教育委員会共催
平成13年度 平成13年11月10日	徳蔵地区遺跡・高田土居城跡現地説明会（高田土居城跡内郭・外郭） 南部町・南部川村教育委員会共催
啓発活動	内　　容
平成12年２月27日	シンポジウム「南部荘と高田土居を考える」 和歌山県中世荘園調査会
３月７日	高田土居城見学会　上南部中学校見学
平成12年８月31日	日本中世史サマーセミナー徳蔵地区遺跡見学
９月21日	田辺市立新庄小学校見学
９月27日	南部町立岩代小学校４～６年生見学
９月28日	南部町アウトドアクラブ発掘体験
９月30日	南部町立南部中学校１年生見学
10月２日	南部町議会全員協議会見学
10月４日	南部町文化財審議会見学
10月５日	南部川村立上南部小学校教員見学
10月13日	南部川村立上南部中学校１・２年生見学
10月24日	南部川村立上南部中学校１年生発掘体験
10月26日	南部川村立上南部中学校２年生発掘体験
11月９日	岩出町文化財研究会見学
11月29日	粉河町文化財研究会見学
11月30日	日高地方社会科教育研究会見学
12月５日	県高等学校社会科研究協会歴史部会見学
平成13年１月12日	印南町小中学校教頭見学
１月29日	南部文化の会現地見学
２月14日	南部川村議会議員見学
３月19日	南部町議会議員見学
３月29日	清川・高城・上南部小学校５・６年生見学
４月10日	田辺市中芳養小学校見学会
６月８日	県高等学校社会科研究協会歴史部会見学
７月24日	みなべ長寿大学７月講座「おおむかしのみなべ」
８月２日	南部町社会教育委員・教育委員見学
９月８日	南部川村立高城中学校PTA親子見学会
10月４日	南部町立南部小学校６年生総合学習 「南部の町を調べよう　徳蔵地区遺跡からの発見」
11月20日	南部川村立上南部中学校１・２年生「ふるさと学習」
11月27日	大塔村立三川小学校５・６年生見学
１月23日	南部文化の会見学
２月16日	県立高等学校社会科研究歴史部会見学
２月27日	みなべ長寿大学速報展展示解説
３月２日	南部町立南部中学校１年生速報展展示解説
３月19日	南部町議会　町づくり特別委員会 「徳蔵地区遺跡調査成果」見学

第３表　普及活動一覧表

平成10年度 現地説明会

平成11年度 現地説明会

平成12年度 現地説明会

平成13年度 現地説明会

写真５　現地説明会風景

検出した各時代の遺構・遺物は、地域の歴史を身近に感じる素材・教材であるとの認識のもと、県民への還元である現地説明会を南部町、南部川村教育委員会と共催で実施し、その開催回数を増やすとともに長寿大学、文化の会など講座への講師派遣、現地説明、また学校教育の一環として両教育委員会を通じ、小・中学校生徒の見学会、発掘体験、総合学習、また小・中・高等学校教諭への説明会など実施した。

小・中学生に対する現地見学会や発掘体験、さらに総合学習での学習、討論、研究により、地域の歴史が古代より続いており、現在に至っているのだとの歴史認識を形成した。「歴史がおもしろくなった」との中学生の発言は、埋蔵文化財の普及活動の意義を教えてくれる。

現代景観そのものが中世の景観と深く関わる南部で「まちつくり」の一環として町村議会議員の先生方にも見学会を実施した。

見慣れた八丁田圃の水田が、鎌倉時代まで遡り、これらの風景が延々と現在まで守り伝えられてきたものであること、その地下に破壊されずにほぼ完全な形で埋もれていた埋蔵文化財、西日本で初めての縄文時代中期前半集落跡、高田土居城が一重ではなく、幅17m、長さ100mにも及ぶ二重、三重の堀で囲まれた全国有数の規模と機能をもつ平城であることなど、伝えることは数限りなくあった。

（５）整理の方法

平成14年度から平成16年度までの３次年で整理作業を実施した。５年次の発掘調査によって出土した遺物は土器のほかに石器、金属製品、木製品、分析用の資料（種実・土壌）などがある。一部は発掘調査と併行して応急整理作業のなかで洗浄と注記を行っている。以下１次年から３次年の作業内容を記す。

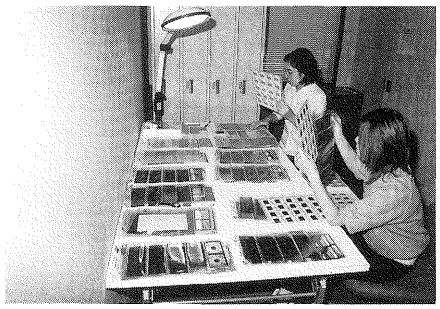
第１次年度の整理作業は洗浄作業と注記作業、接合作業、分類作業、遺物実測作業（土器・木器・金属製品）、石膏復元作業を主に行なった。他の作業はこれに付随する遺物登録、実測図の登録、図面の登録等の各台帳作成の作業をパソコン入力で行なった。

洗浄作業は土器と木器を行なった。注記作業に関しては発掘年度、市町村番号、遺跡番号等の調査コードと登録番号を記した。木器は注記ができないためカードに略図を描き、そこに調査コードと登録番号を記した。接合作業は包含層や遺構を地区毎（４ｍメッシュ）に分けて行ない、次いで近隣の地区間の接合を行なった。包含層の遺物に関しては時期別、器種別に分類し破片数を計測した。また、石器の一部については専門機関に委託して図化および分析を行なった。

第２次年度は前年度の続きとしての分類作業、遺物実測作業、土器拓本作業、トレース作業（遺構・

遺物)、遺物写真撮影、遺構･遺物図版作成、遺物（木器）写真図版作成等を行なった。木器に関する作業としては一部のものを専門機関に委託して保存処理を行なった。他のものについては当センターで糖アルコール法により保存処理作業を行なった。自然科学分析においても放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、種実遺体分析などの項目を専門機関に委託した。

実測作業



写真整理作業

写真６　整理作業風景

第３次年度作業の大半は遺構トレース、遺構・遺物図版作成、遺物写真撮影、遺構･遺物写真図版作成、原稿執筆を行なった。遺物写真撮影のフィルムは基本的にブローニ６×７判を使用した。溶解炉の炉体の保存処理を専門機関に委託した。

第３節　調査の方法

発掘調査は、機械・人力掘削等は工事請負方式で業者に発注し実施した。調査については、試掘調査のデータにより、現代の水田である第１層、その床土の第２層を機械掘削し、それ以下の層を調査した。平成９年度・平成10年度は調査地の買収が終了していなかったため、県土木が借地をして調査した。そのため、水田に現状復旧する必要があり、耕作土・床土・人力掘削土を区分し、調査終了後は、個別に埋め戻した。測量は業者委託により、３級基準点を設置し、それを基点として４級基準点を各調査区に設置した。さらに４m区画の方眼をつくり、遺物取り上げの最小単位とした。また併用して遺構図作成の基準とした。調査区の遺構図面は、1/20縮尺の航空測量を業者委託して実施した。遺構写真は、６×７判モノクロ写真、35㎜モノクロ・カラー・カラースライド撮影を行った。

［遺跡の名称］　発掘の対象となったみなべインターチェンジ部分には、徳蔵遺跡・大年遺跡・高田遺跡・梅田遺跡・古川遺跡・高田土居城跡などの遺跡群があり、従来は徳蔵地区遺跡の名称は使用されていなかった。しかし、近畿自動車道建設に伴う試掘調査により、遺跡の範囲外に調査が及ぶことになったため、本調査が行われる範囲全体を徳蔵地区遺跡と呼称することとなった。

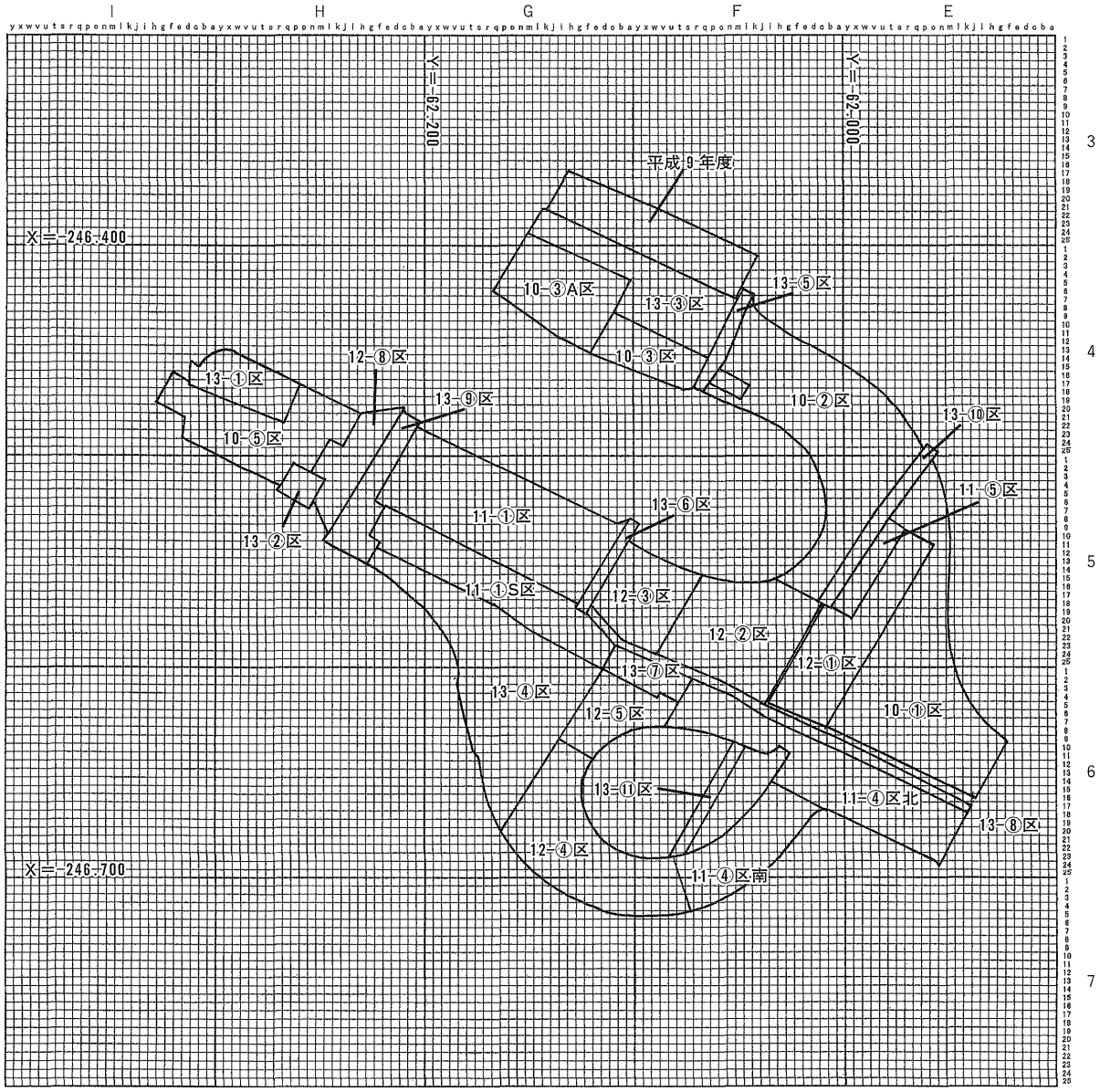
［地区割り（第６図）］　徳蔵地区遺跡全域がカバーできるように、国土座標第Ⅵ系のＸ＝-246.100km、Ｙ＝-61.500kmを基点として、100mの大区画と４mの小区画を用いて、地区割りを行った。大区画は、東から西方向にアルファベットの大文字でＡＢＣ・・、北から南方向は１２３・・と呼ぶ。小区画は、100m大区画を25等分して、東から西方向へａｂｃ・・、北から南方向へ１２３・・と呼ぶ。

調査した徳蔵地区遺跡は、３Ｆ、３Ｇなどである。

［地区の呼称（第６図）］日本道路公団のみなべインターチェンジ建設は、約60,000㎡にも及ぶ広大な調査面積をもつ。公共性の高いインターチェンジ建設と埋蔵文化財調査を円滑に進めるため、県土木部により、埋蔵文化財調査のための借地が行われ、土地買収が終了していない段階から調査に入った。そのため、買収や地権者の借地が承諾された地点から、また日本道路公団が工事を急ぐ地点から順次発掘

調査を実施した。地区名は、調査順に調査区の番号を付していった。調査区番号は、調査年度の年号を頭に付して、あとは調査の順番につけた。例えば12-①区は、平成12年度の１番に調査した事になる。遺構番号についても、発掘調査が数カ所の調査区で同時に進行したため、一連の番号を付することは困難であり、各地区別につけている。よって、隣接する地区でも調査年度が違えば、全く違った番号になっている。

報告書では、発掘調査時に付けられた調査区名を、位置関係で近いものを一括してくくり、Ⅰ区からⅤ区に再編成する（第４表）。



第６図　調査区地区割図

調　査　区	発掘調査時における調査区名
Ⅰ区	10-①、12-①、11-⑤
Ⅱ区	平成９年度分、10-②・③、11-②2、12-②・③、13-③・⑤・⑩
Ⅲ区	10-⑤、11-①、12-⑧、13-①・②・⑨
Ⅳ区	11-①S、13-④
Ⅴ区	11-④、12-④・⑤、13-⑥・⑦・⑧・⑪

第４表　地区割表

第２章　立地と環境

第１節　南部平野の地形と沖積層

本節では、徳蔵地区遺跡が立地する南部平野の地形と地質を中心に述べることにしたい。なお、本節に出てくる地名は特に記載のない限りみなべ町のもので、煩雑になるので同町名は省略する。

（１）南部平野の地形

南部平野及びその周辺の地形は、第７図に示した。

［山地・丘陵］　南部平野は東・西・北を山地に囲まれ、南は南部湾に臨む。平野の東側は高津山（170m）など南部梅林が広がる低い丘陵状の山地で、西側は高田山（222.4m）、北側には行者山（422.4m）・三里が峰（768.9m）・虎が峰（789.5m）などの山々が連なっている。平野の北側・西側の山地及び東側の丘陵状の山地は主に砂岩・泥岩などからなる始新世前期の音無川層群で構成される。南部川両岸の海岸部における標高50m前後の台地（Ｌ１面）を米倉（1968）は最終間氷期（約13万年前）に形成された南関東の下末吉面に対比したが、その地質を日本の地質近畿地方編集委員会（1987）は主に中新世の海成層である田辺層群からなるとしている。

［海岸段丘・河岸段丘］　段丘面は南部川左岸では中島・東吉田付近など、右岸では野原・前谷など標高15～40mに断片的に分布するにすぎない。その形成時期はよくわかっていないが、同面は米倉（1968）の紀伊半島西岸に位置する低位段丘（Ｌ２面・Ｌ３面）にあたると思われる。

［完新世段丘面］　南部平野は主として南部川が形成した沖積平野であるが、地形の標高・連続性・比高などから、２つの地形面に区分される（額田 1987・1999）。上位の地形面を完新世段丘面、それより新しい時期に形成された下位の地形面を沖積低地面とする。

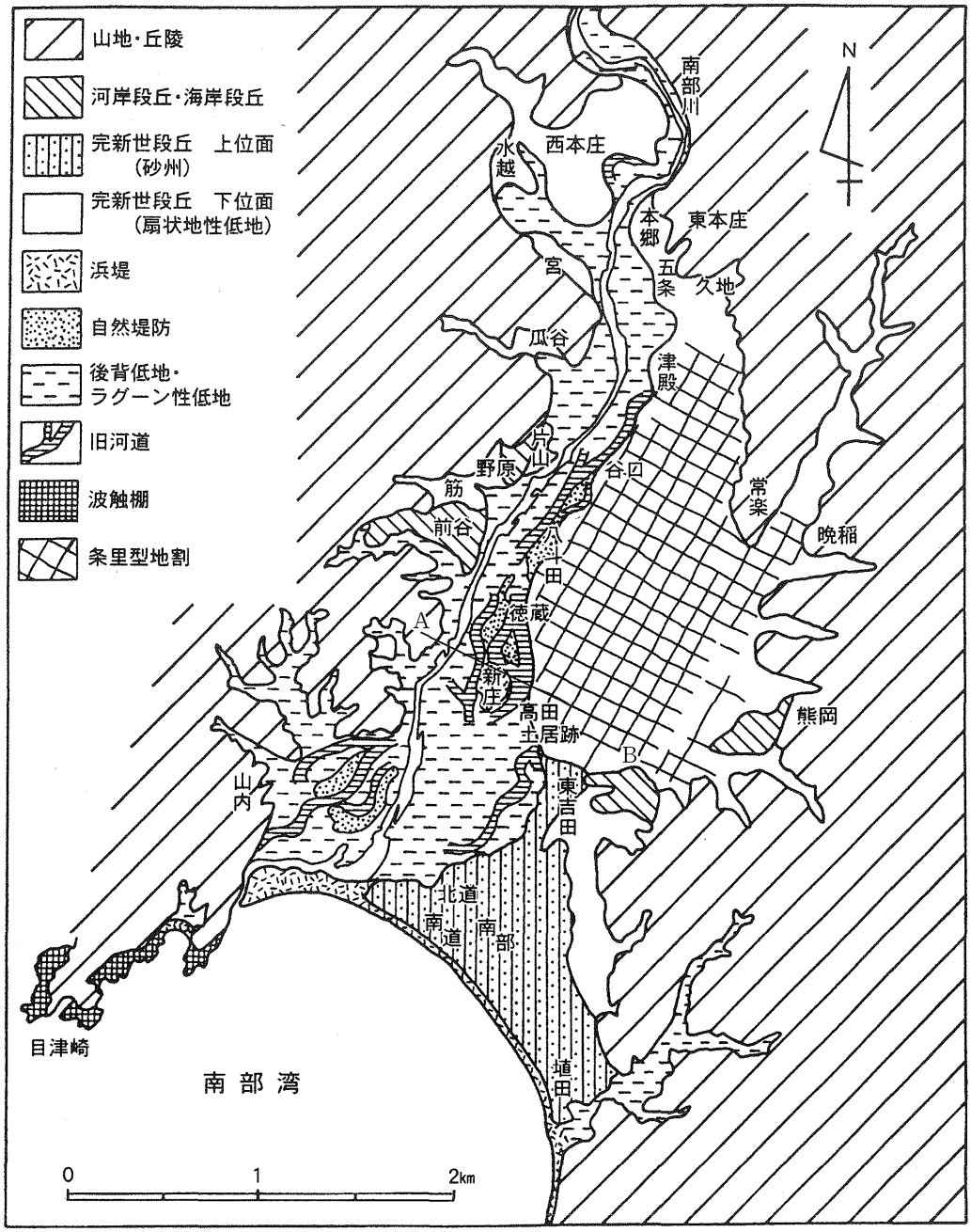
完新世段丘面は、さらに上位面と下位面とに区分される。

上位面は、埴田から北西へ延び南部湾の湾口を塞ぐ、かつての湾口砂州と考えられる。紀伊半島西海岸では平野の前面に砂州が形成され、その背後に抱かれたラグーンを中小河川が埋積する形で平野が発達してきたところが多い。そのほとんどの砂州は北西から南東方向に延びているが、南部付近では沿岸流の方向が逆のため、その発達が反対方向となっている。砂州の標高は６～７m（額田 1987、第１図参照）で、その最大幅は１㎞余と広大である。

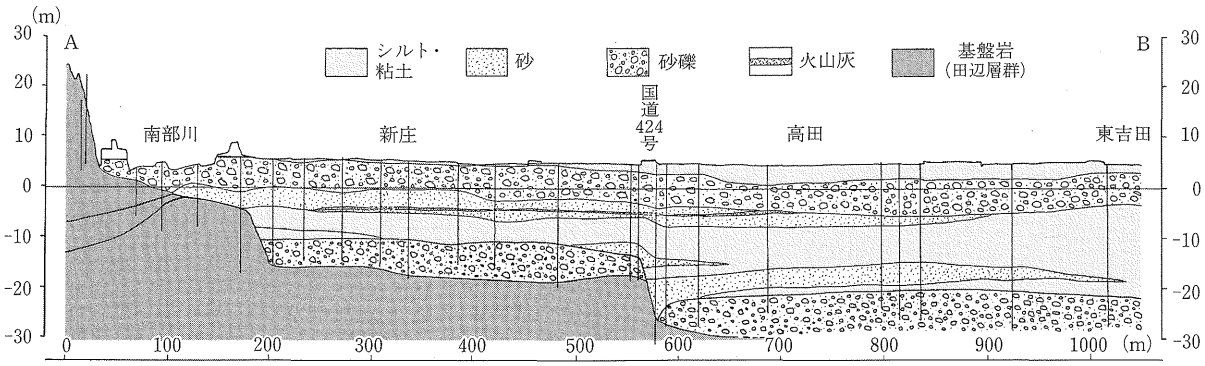
上位面の形成時期は、南部平野において絶対年代の測定値が得られていないので明らかではないが、南隣の田辺平野（長澤 1982・1983）や全国的な砂州の形成時期からみて、今から約5,000年前頃の縄文海進頂期の最高海水準に対応してその基礎が形成された地形面と考えられる。

上位面の北道には三鍋（南部）王子社が位置し、その南側を熊野古道が南東に走っている。熊野古道はそこから２つに分岐し、海沿いのルートは北道から埴田まで砂州の頂部を通過する。山越えのルートは、三鍋王子社から150mほど東で左に折れ、北道から東吉田まで同様に砂州上を通り、完新世段丘下位面・河岸段丘面をへて灰坂峠を越えている。

下位面は、上位面の背後、南部川左岸の五条から徳蔵の田中神社付近にかけて広く連続的に分布す



第７図　南部平野の地形分類図（額田 1999）



第８図　南部平野の地質横断面図
（『近畿自動車道南部地区第二次構造物基礎調査報告書』1996,より作成）

る。その標高は五条で約15m、田中神社で約５mとなっており、同面は南南西方向に傾斜している。その平均傾斜は約4.1パーミルと、沖積面としてはかなり急勾配の地形面である。同面の表層地質をみると、地表面下１～３mには砂礫層があり、それを粘土層及び砂質シルト層が覆っている。同面には、旧河道や自然堤防がまったく認められない。これらの特徴から、同面はかつての扇状地性低地と考えられる。

国土地理院発行の２万分の１空中写真（1982年撮影）を観察すると、南部川左岸から古川流域にかけての完新世段丘下位面には条里型地割が広く検出される。同面上には自然堤防など微高地がほとんど認められず、条里型地割がほぼ全面にわたって乱れなく整然と分布する。しかし、東本庄付近、南部川左岸の自然堤防沿い及び晩稲付近の古川沿いには条里型地割の撹乱が若干認められる。

条里型地割の規模は東西10町余、南北約20町で、173町が認められる。その付近は通称「八丁田圃」と呼ばれ、広大な耕地が広がることが知られるが、八町四方より規模ははるかに大きい。一町方格の地割内にはほぼ１つの小字名が残っており、坪内地割は長地型とその変形をとっている。坪名は旧南部川村域に10ケ所、旧南部町域に３ケ所が残存するが、数詞地名が遺存していないので条里界線の復原は困難である（中野 1989）。条里型地割の阡陌はＮ30°Ｅに傾いているが、これは地形面の傾斜方向と調和する。

次に条里型地割の分布・残存状況をみると、同地割は南部川左岸の完新世段丘下位面に限られ、南部川沿いの沖積低地面にはまったく分布していない。地形学の立場からみると、条里型地割は、特定の地形面にのみ限られて分布する場合のあることが知られ、一般に現在も河川の氾濫が可能で浸蝕・堆積がおこる沖積低地面にはほとんどみられず、段丘化した地形面に広範に分布するようである（高木1985）。南部平野の条里型地割は、完新世段丘下位面の末端においてシャープな形で削られたような形態を示している。このような条里型地割と地形面との対応関係が認められることから、①条里型地割は南部平野の全体に施行されたが、施行後まもなく南部川の下刻作用によって完新世段丘面が段丘化した、あるいは②段丘化に伴なって荒廃した完新世段丘面に灌漑用水を引いて再開発した時に条里型地割が施行されたため、その後に形成された沖積低地面には同地割がみられず完新世段丘面にだけ残存すると考えられる。

中野（1989）は、当地域の条里型地割を南部条里区と呼び、「数詞地名を欠くが整然とした条里地割が残存」し、「『和名抄』の南部郷に比定できる条里区」とした。このように、同遺構は漠然と古代の水田区画としてされてきたが、平成10年度に和歌山県文化財センターによって行なわれた徳蔵地区遺跡の発掘調査では、鎌倉時代と15～16世紀の水田跡が検出され、条里型地割の起源は少なくとも中世前期まで遡れるが、今のところ古代にまで遡らせることはできないと考えられる（渋谷 1999）。南部平野には承安５年（1175）に成立した高野山領南部荘が所在することから、筆者は現存する条里型地割は高野山勢力による中世の再開発によって施行されたものと推定する（額田 2002）。

完新世段丘面は条里型地割の施行後に地割を掻き乱すような南部川の氾濫をほとんど受けなかったと思われる。同面の段丘崖沿いには本郷・五条・久地・津殿・谷口の集落が連続的に分布するが、そ

の背後の扇状地性の堆積面には集落がまったく立地せず、専ら水田として利用されている。

南部川右岸では下位面の分布が断片的で、その面積のほとんどが西本庄・水越・宮・瓜谷・片山・野原・筋の集落によって占められている。このことは、左岸と比べて極めて対照的である。

［沖積低地面］　沖積低地面は、南部川等が完新世段丘面を浸蝕した河谷に形成された堆積面で、上位面と下位面とに区分される。

上位面は、さらに海成の浜堤と河成の自然堤防とに細分される。浜堤は、波浪の大きな海岸において、波によって打ち上げられた砂礫が堤状に堆積した地形である。完新世段丘上位面の前面や南部川の河口部では、標高２～４mに発達する。南道における完新世段丘上位面と浜堤との比高は、約３mである。自然堤防は、島状に分布し、顕著な発達をみない。それと下位の後背低地との比高は２m以下であるが、八斗田・徳蔵・新庄などの集落は自然堤防上に立地する。

下位面は、さらに後背低地とラグーン性低地とに細分される。後背低地は、南部川沿いの自然堤防背後に形成された細長い低地で、標高は４m以上である。ラグーン性低地は、砂州の背後に形成されたラグーンが南部川等によって埋積されてできたもので、標高２～４mの低地となっている。

旧河道は、南部川左岸に多く、現河道に並走して分布する。その幅は20～40mで、明瞭な凹地を残しているものが多い。旧河道間には自然堤防が島状（中州状）に形成されている。

［波蝕棚］　波蝕棚は、安定した海水準のもとで波の浸蝕作用によって海蝕崖が削られてできた、ほぼ水平の平坦な岩床面で、主として潮間帯に形成される。その形状から、ベンチ（bench）、あるいはプラットフォーム（shore platform）とも呼ばれる。南部湾に面しては、目津崎付近などに波蝕棚などの海蝕地形が分布している。

（２）南部平野の沖積層

わが国の臨海沖積平野における基本的な沖積層の層序は、形成順に下位から上位へ沖積層基底礫層（ＢＧ）、沖積下部砂層（ＬＳ）、沖積中部泥層（MM）、沖積上部砂層（ＵＳ）、頂部陸成層（Ｔ）となっている（井関1980）。その堆積時期は、主としてＢＧが最終氷期最盛期（18,000年Ｂ．Ｐ．以前）、ＬＳが晩氷期（18,000年～10,000年Ｂ．Ｐ．）、MMが縄文海進期（10,000年～5,000年Ｂ．Ｐ．）、ＵＳが5,000年～3,000年Ｂ．Ｐ．、Ｔが3,000年Ｂ．Ｐ．以降とされる。ＢＧ・ＬＳは更新世、MM・ＵＳ・Ｔは完新世の堆積層である。

第８図は、近畿自動車道南部地区のボーリング・データに基づいた、前谷から東吉田付近に至る南部平野の地質横断面図である。現在の南部川は西側の山際に沿って沖積層の浅い部分を流れているが、平野の中央部、国道424号を境として東側と西側では沖積層の堆積構造が異なっていることがよくわかる。南部平野は直接外洋に面していないので、沖積層が比較的薄い地域で、ＢＧが東側では-20m以深にあるが、西側ではそれよりも浅く-10m以深に約５mの厚さで堆積している。ＢＧ上面を下刻する深い谷地形はみられない。日本道路公団・東建ジオテック（1996）は西側の平坦にみえるＢＧの堆積面を埋没段丘面としている。そして、国道424号の東側では-20～-15mにＬＳ、-15～-５mにMMが堆積しているが、西側ではMMがＢＧを直接覆って-10～-５m付近に堆積している。西側の層厚は東側の半

分程度と薄い。それは、東側では更新世末期から南部平野東部へ海が入ってきたが、西側ではそれより遅れて完新世になってから縄文海進の海面上昇によって浅海底になったためである。

MM層の上部には-５m付近に薄いガラス質火山灰層が挟まれているところがある。これは浅海底に二次堆積した火山灰で、層位的にみて南九州の鬼界カルデラから噴出されたアカホヤ火山灰(6,500年Ｂ.Ｐ.)と推定される。MMを覆って砂礫層が約５mの厚さで堆積している。これはＵＳ期に相当する時期に堆積した砂礫層と考えられる。南部川はほかの河川より砂礫の運搬が活発であったため、南部平野ではほかの平野に発達するＵＳに砂礫が多く混じっているものと思われる。

第８図の地質断面図をみると、ＢＧの堆積面の段差ほどではないが、MMとＵＳの堆積面は国道424号の東側の方が西側より若干低いレベルに位置し、Ｔの層厚も東側の方が西側よりあつい。その原因は、国道424号の地下に推定断層があり、ＢＧ堆積後も断層活動が継続しており、その影響がMM･ＵＳの堆積にもみられると解することが、西側の堆積面を埋没段丘面とみるよりも妥当と思われる。現在の地表面では、国道424号を挟んで東側が１～２m高く完新世段丘面、西側は相対的に低い沖積低地面となっており、地形が逆転している。

１つの地質断面図だけでは、この推定断層が活断層かどうか判断できない。また、断層の走向や活動の周期等もわからないが、ＢＧの堆積を約２万年前、垂直変位量を約10mとすると、変位速度は約0.5㎜／年となり、活動度がＢ級の活断層と推定される。その解明には、今後さらに南部平野のボーリング・データを収集・解析する必要があるであろう。

引用・参考文献
井関弘太郎（1980）『沖積平野』、東京大学出版会、49～58頁、71～91頁
高木勇夫（1985）『条里地域の自然環境』、古今書院、182～183頁
長澤良太（1982）「紀伊田辺平野における先・原史時代の遺跡立地とその古地理」『人文地理』34-３、84～95頁
長澤良太（1983）「田辺湾沿岸の海岸地形の形成過程と後期完新世海面変化」『東北地理』35-１、11～19頁
中野榮治（1989）『紀伊国の条里制』、古今書院、189～193頁
日本道路公団大阪建設局田辺工事事務所・㈱東建ジオテック（1996）『近畿自動車道南部地区第二次構造物基礎調査報告書』
日本の地質近畿地方編集委員会（1987）『日本の地質６　近畿地方』、共立出版
額田雅裕（1987）「南部平野における地形面の区分について」『和歌山地理』７、37～43頁
額田雅裕（1999）「南部平野の地形と条里型地割」『くちくまの』115、44～50頁
額田雅裕（2002）「空中写真で方格地割（条里型地割）発見」『和歌山地方史研究』42、61～64頁
米倉伸之（1968）「紀伊半島南部の海岸段丘と地殻変動」『地学雑誌』77、１～23頁
渋谷高秀（1999）「発掘された中世水田面」『くちくまの』115、38～43頁」

第2節　歴史的環境

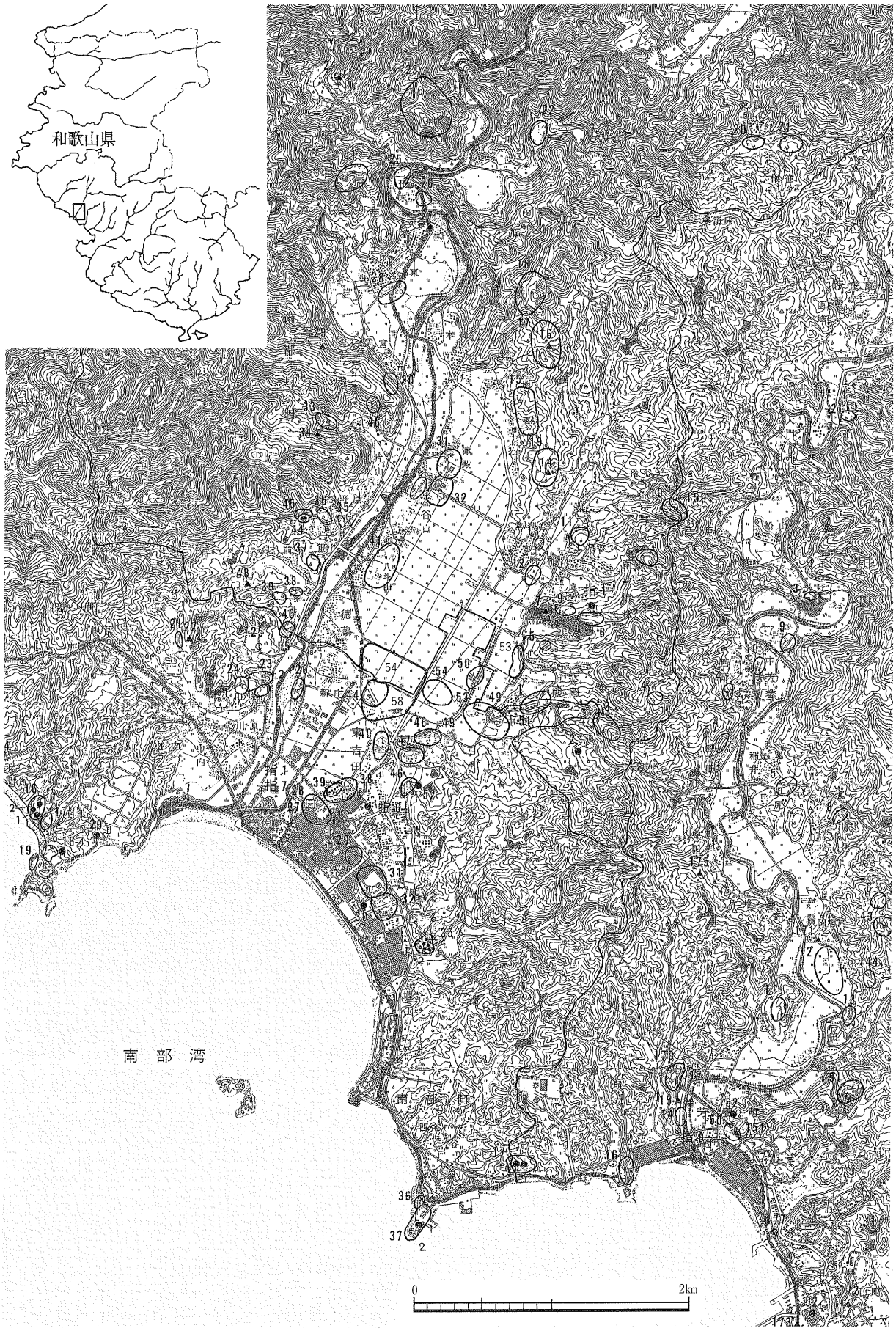
紀伊半島は南北に細長い地形で、険しい山岳部が大半を占め平野部は少ない。とりわけ有田川以南の紀中・紀南地方では、山岳部が海岸線まで迫る。険しい山岳部をぬうように流れる河川下流域には、小さな平野部が独立して存在する。日置川流域以南には、平野部と呼べる地域は存在しない。このような紀南地方にあって、南部川下流域に広がる南部平野は、比較的大きな平地面積をもつ。

南部川下流域においては、旧石器時代から縄文時代前期にかけての遺跡は発見されていない。人が痕跡を残すのは、縄文時代中期初頭からである。中期初頭の鷹島式土器が出土するのは、砂丘上に立地する大塚遺跡と古川を挟んで指呼の位置に存在する徳蔵地区遺跡である。徳蔵地区遺跡は中期初頭から始まり、中期前半に盛期を持つ縄文集落跡である。この集落の成立は、縄文時代前期にピークを迎える「縄文海進」後におこる海退現象を受けてのことと考えられる。洪積段丘上には、中期後半の里木II式の土器が出土する岡の段遺跡が、同じく丘陵部に位置し石器が多数採集されている上城遺跡がある。後期前半には徳蔵地区遺跡の集落がある。後期中頃の遺跡は、大塚遺跡が上げられる[註1]。住居とも考えられる土坑から石鏃、叩石が出土し、周辺からも多くの土器や石器が出土することから集落であったと考えられている。このように縄文時代中期から後期にかけて、砂丘、沖積地、丘陵地など約500m程度の範囲を遺跡は移動する。各遺跡共に、単時期であり、この移動は、「環境の変化に整合する」との考え方がある[註2]。縄文人の生活パターンを知る上で、標本的な地域といえる。

縄文時代晩期から弥生時代の遺跡は、徳蔵地区遺跡から見つかっている。徳蔵地区遺跡からは、円形住居や掘立柱建物などで構成される集落跡、また水田開発に伴う堰状遺構などを検出した。本格的な水稲耕作が早い段階から開始されていることが判明している。旧河川の埋土からは、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が単一の層から出土する。砂丘上に立地する墓地の片山遺跡からは、弥生時代前期段階の土器棺に使用された突帯文土器が出土している。

弥生時代中期の遺跡は、南部川の自然堤防上に位置する津殿遺跡が上げられる。顕著な平地の中期遺跡がいまだ見つかっていないが、丘陵上や丘陵裾部に当該期と考えられる石器類が数多く出土している。南部川の右岸丘陵裾部に立地する青蓮谷遺跡では大型石包丁、柱状片刃石斧、同じく右岸の田文字I遺跡では大型石包丁、左岸の上ノ尾遺跡では環状石斧などが出土する。墓地は、片山遺跡や高見遺跡など砂丘上に立地する。片山遺跡の当該期の墓地は、特異である。中期前葉から中葉の土坑墓があり、中期後葉には、約44mの間隔をあけて平行に延長90m以上の溝が二条走る。溝により、内と外を区別する空間を作りだした墓域である。副葬遺物は器種が限定され、把手付壺、高杯、台付鉢が主流を占める。このほか弥生時代中期関東地方の須和田式の細頸壺が出土した高見遺跡、同時期の安養寺跡などがある。

畿内沿岸部から和歌山県有田川流域にかけては、弥生時代中期末から後期前半の時期に、水田近くの微高地に立地する拠点集落が解体し、周辺の丘陵部に集落立地を変える。いわゆる高地性集落である。短期の間、水稲耕作に不便な土地に各河川流域の集落が一律に移動するのである。紀南地方である日高川流域、南部川流域、会津川流域は、紀北地方の単純とも呼べる短期間・一律の集落移動とは



（『和歌山県埋蔵文化財抱蔵地所在地図』和歌山県教育委員会　平成８年３月発行）改変

第９図　徳蔵地区遺跡とその周辺

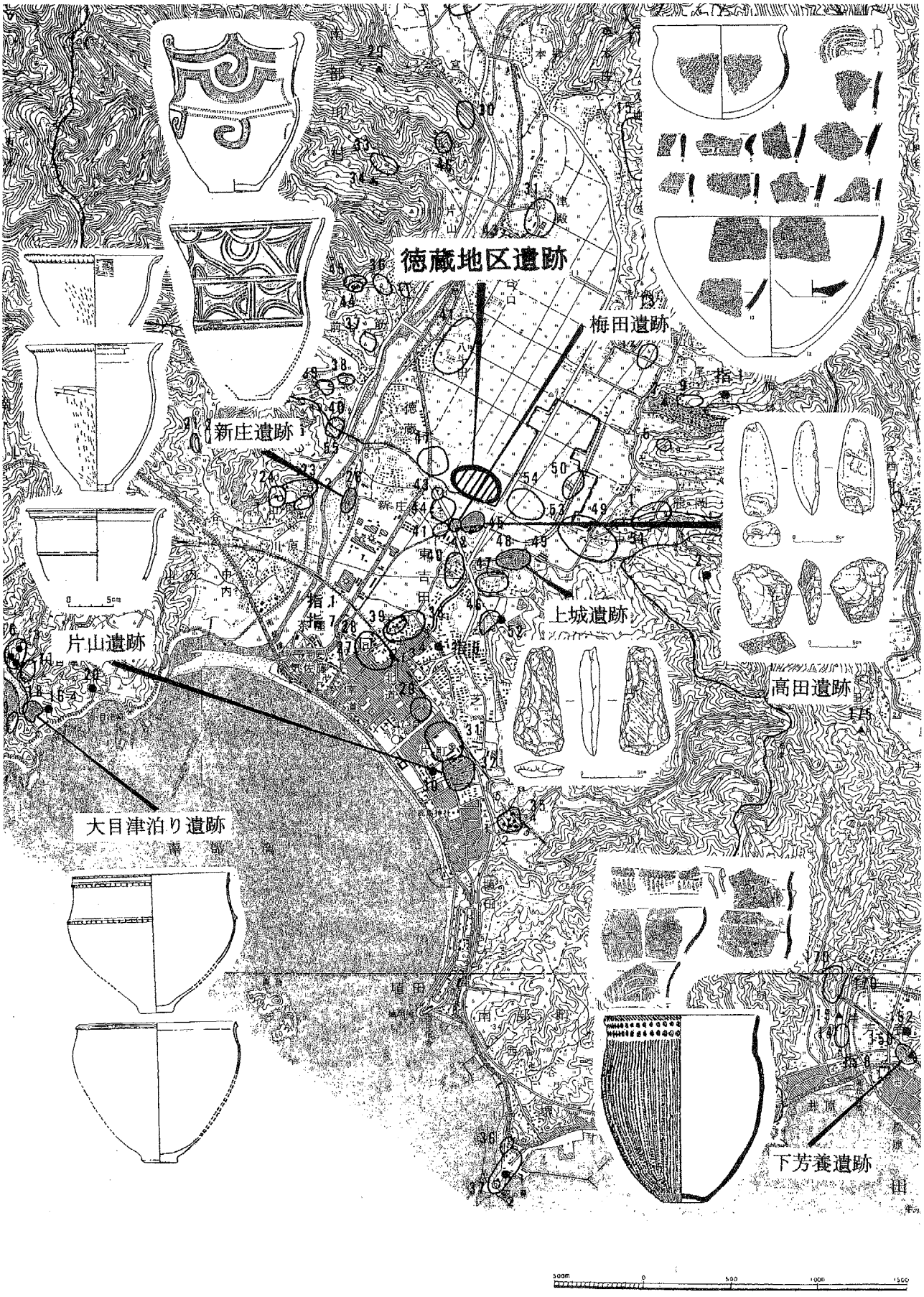
番号	遺跡名	種別	時代	遺跡概要	番号	遺跡名	種別	時代	遺跡概要
1	熊岡遺跡	散布地	弥生	弥生土器、石鏃	45	田文字Ⅱ遺跡	散布地	弥生～古墳	弥生土器、石斧、土師器
2	熊岡経塚	経塚	鎌倉	経筒、合子、刀子	46	半田遺跡	散布地	弥生	弥生土器、敲石
3	熊岡大谷遺跡	散布地	弥生	高地性集落？、弥生土器、敲石、石鏃	48	前谷石斧出土地	出土地	縄文	泥岩製磨製石斧
4	毘舎門堂跡	寺院跡	鎌倉	瓦	49	東吉田Ⅰ遺跡	散布地	弥生～近代	土師器、陶磁器
5	関戸遺跡	散布地	弥生	石斧	51	要害城跡	城跡	中世	
6	晩稲東二本松遺跡	散布地	弥生	弥生土器（高杯・杯）、土師器	53	熊岡Ⅱ遺跡	散布地	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、瓦器
7	下の尾銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸、弥生土器(高杯)	**54**	**徳蔵地区遺跡**	**集落**	**縄文～中世**	**竪穴住居、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦器、鍛冶遺構**
8	上の谷遺跡	散布地	弥生	弥生土器(高杯)	16	目津古墳１～４号	古墳	古墳	円墳（１号・２号は破壊）、須恵器
9	城の段遺跡	城跡	室町		17	目津遺跡	散布地	弥生～古墳	弥生土器、土師器
10	小野遺跡	散布地	弥生	高地性集落、弥生土器	18	大目津泊りⅠ遺跡	散布地	縄文～平安	縄文土器、製塩土器、瓦器、土師器、弥生土器
11	高田城跡	城跡	室町	野辺忠秀の居城	19	大目津泊りⅡ遺跡	散布地	古墳～奈良	須恵器、土師器、土錘
12	晩稲古川遺跡	散布地	弥生	弥生土器	20	小目津古墳	古墳	古墳	
13	常楽窯跡	窯跡	奈良	須恵器、土師器	21	起請ヶ谷窯跡群	窯跡	奈良	須恵器
14	常楽銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸、弥生土器、石鏃	22	桜口遺跡	出土地	弥生	石斧
15	方丈遺跡	散布地	弥生	弥生土器、石斧	23	城山古墳1・2号	古墳	古墳	円墳、箱式石棺、鏡、銅鏃、直刀
16	久地峠銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸	24	城山城跡	城跡	室町	市栗山城とも呼ぶ
17	久地遺跡	散布地	弥生	弥生土器、石斧、石鏃	25	閉谷窯跡群	窯跡	奈良	須恵器、消滅
18	小倉孫六遺跡	散布地	弥生	弥生土器、凹器、敲石	26	新庄遺跡	散布地	縄文	縄文土器
19	常楽遺跡	散布地	弥生	弥生土器、石鏃	27	三鍋王子跡	王子跡	平安	
20	受領遺跡	散布地	弥生	弥生土器	28	高見遺跡	散布地	弥生～古墳	弥生土器、土師器
21	受領城跡	城跡	室町	鉄鏃	29	片町遺跡	散布地	弥生～	壺、高杯（庄内式土器）
22	辺川遺跡	散布地	弥生	弥生土器	30	芝松原火葬墳墓	墳墓	室町	蔵骨器
23	平須賀城跡	城跡	室町	土塁、堀、備前焼水甕	31	南部高校遺跡	散布地	弥生～古墳	須恵器、円墳
24	玉銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸	32	片山遺跡	散布地	弥生	弥生土器
25	上五味遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石斧	35	埴田古墳群1～6号	古墳・散布地	古墳	円墳、横穴式石室（残存）、須恵器、土師器
26	下五味遺跡	散布地	弥生	弥生土器	36	森の鼻遺跡	散布地	古墳	須恵器、土師器、製塩土器
27	天神古銭出土地	出土地		宋銭、陶壺	37	森の鼻１・2号墳	古墳	古墳	円墳
28	西本庄遺跡	散布地	弥生	弥生土器	38	安養寺跡	寺院跡	鎌倉	瓦、板碑
29	雨乞山銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸	39	芝古墳１～５号	古墳	古墳	円墳、横穴式石室、須恵器、土師器、勾玉、金環
30	宮遺跡	散布地	弥生	弥生土器	40	大塚遺跡	散布地	縄文～鎌倉	縄文土器、石鏃、サヌカイト、石棒、弥生土器片、土師器、須恵器
31	津殿遺跡	散布地	弥生～平安	須恵器、土師器、弥生土器	44	高田土居城跡	城跡	室町	須恵器、土師器
32	谷口遺跡	散布地	弥生	弥生土器	46	猪野山遺跡	散布地	弥生	弥生土器
33	苗代谷遺跡	散布地	弥生	弥生土器	47	岡の段遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石斧、石鏃、石匙
34	大久保山銅鐸出土地	出土地	弥生	銅鐸	48	上城遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石斧、石鏃、石匙、石錘、サヌカイト
35	西王子遺跡	散布地	弥生	弥生土器	49	上城城跡	城跡	室町～安土	
36	田文字Ⅰ遺跡	散布地	弥生	大型石庖丁、弥生土器、石斧	50	上坪遺跡	散布地	弥生	弥生土器
37	和田城跡	城跡	室町	和田千官の居城	51	熊岡遺跡	散布地	弥生	石鏃
38	青蓮谷墳墓群	散布地	鎌倉～室町	常滑焼蔵骨器	52	猪山火葬墳墓	墳墓	室町	蔵骨器、五輪塔
39	青蓮谷遺跡	散布地	弥生	弥生土器、大型石庖丁、石斧、方柱状片刃石斧	53	東吉田Ⅰ遺跡	散布地	古代～近代	土師器、陶磁器
40	ブゼン寺跡	寺院跡	鎌倉	瓦	54	東吉田Ⅱ遺跡	散布地	奈良～近世	須恵器、土師質土器、陶磁器、サヌカイト、チャート剥片
41	八斗田遺跡	散布地	弥生～古墳	須恵器、石鏃	55	ブゼン寺跡	寺院跡	鎌倉	瓦
43	西津殿遺跡	散布地	古墳	土師器	**58**	**徳蔵地区遺跡**	**集落**	**縄文～中世**	**竪穴住居、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦器、鍛冶遺構**
44	田文字火葬墳墓1・2号	墳墓	平安	蔵骨器、和鏡	※１～54　南部川村、16～58　南部町				

第５表　遺跡地名表（南部川村・南部町）

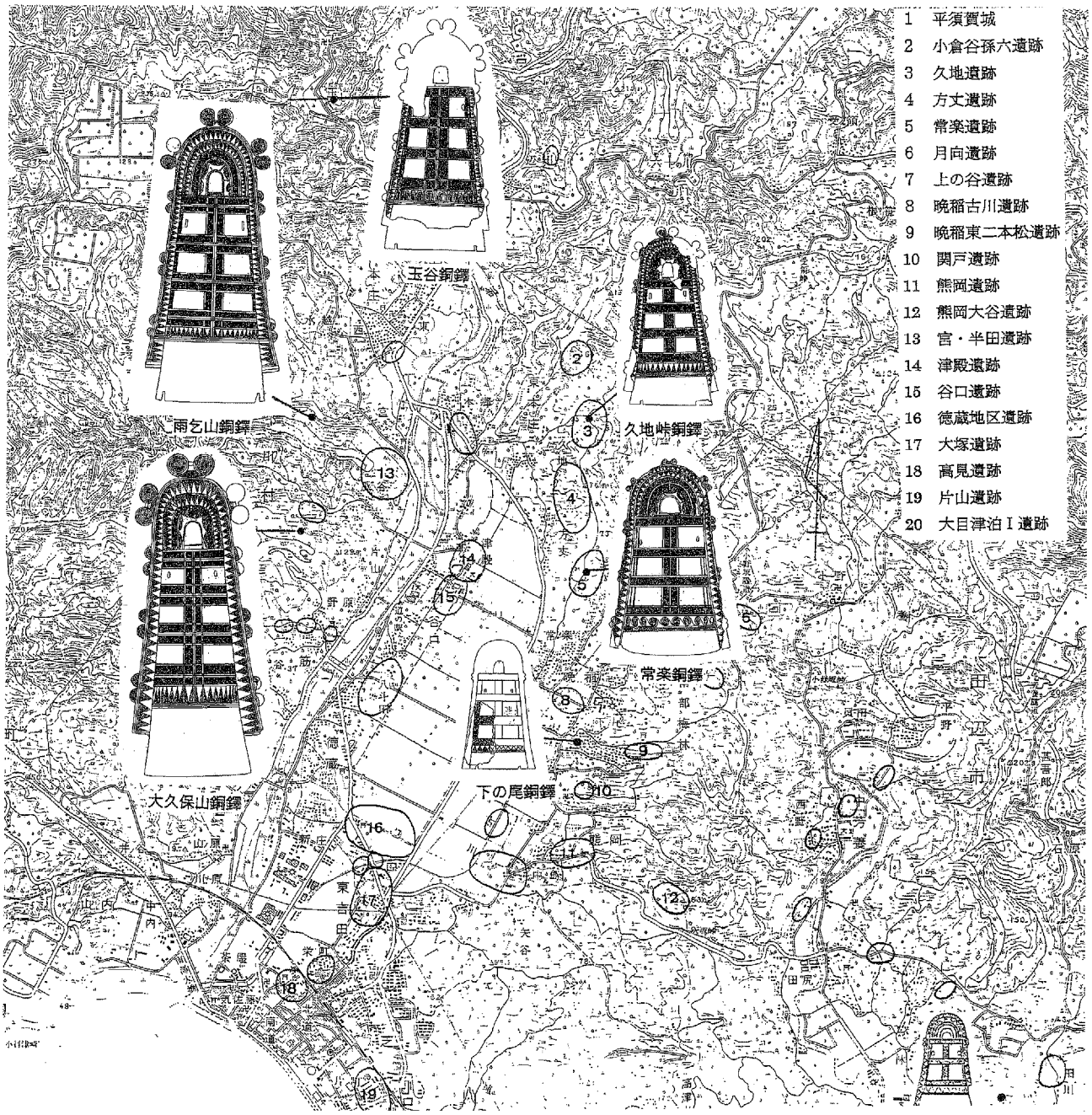
少し様相を変える。南部川流域から会津川流域にかけては、数多くの丘陵上の遺跡が存在する。これら高地性集落は、南部川流域の小野遺跡のように中期末から後期前半期の紀北地方と軌を一にする集落ばかりではなく、後期後半まで存続するものも多い。日高川流域の中村遺跡では古墳時代前期まで続く。様相の違いは鮮明である。農耕祭祀に使用され、時代とともにその目的が変わったとされる銅鐸であるが、和歌山県では「聞く銅鐸」の多数は、紀ノ川水系・有田川水系・日高川水系を中心とした紀北・紀中地方に、「見る銅鐸」は日高川水系・南部川水系・会津川水系を中心とした紀中・紀南地方に分布する。中間地帯の日高川流域には両方の銅鐸が重複して出土する。畿内に近い地域からは、「聞く銅鐸」が、遠い地域からは「見る銅鐸」が出土するのである。この「見る銅鐸」が出土する地域は、紀伊水道を南下して紀伊半島を回れば、伊勢湾の文化圏に近い地域でもある。南部川流域では南部平野を取り囲むように６個の大型銅鐸が出土し、それも新式の最終段階に近い銅鐸が多い。高地性集落のあり方と新旧の銅鐸分布の関連が示唆される。

南部平野では弥生時代中期の拠点集落の位置・内容が不明瞭であるものの、古墳時代前期になると大塚遺跡周辺に大規模な集落が展開するようになる。その範囲は、旧古川を挟んで徳蔵地区遺跡から大塚遺跡にかけてで、南北500m、東西200mの規模が想定できる。期間も短期間で、庄内期から布留古段階にかけての時期の集落である。当該期には庄内式甕、布留式甕などが搬入される。大塚遺跡では、集落の最も高い地点より一辺が９mの大きな住居が検出され、また付近の住居内からは管玉なども出土している。この時期墓地には、弥生時代からの伝統を引く片山遺跡がある。片山遺跡は砂丘上の遺跡であるが、時期により遺構の存在地点が違い、砂丘の稜線より後背地には弥生時代から古墳時代前期まで、古墳時代中期以降は稜線より海側に存在する。庄内期の方形周溝墓は２基があり、そのうち１基は主体部の肩部に粘土を貼り巡らしている。布留期の周溝墓は、前方後円形を呈し、周溝から鉄鏃が出土している。他に、庄内から布留期の片町遺跡などがある。南部川左岸の砂丘上の墓地を、弥生時代から古墳時代にかけて概観すると、長期的に存続する片山遺跡を墓域とする集団と断続的に存在する高見遺跡から安養寺跡付近を墓域とする集団に区分され、それが後期古墳になると前者集団系統の埴田古墳群と後者集団系統の芝古墳群に東西二極分化し集約されると想定されている。両古墳群共に10基に満たない。一方、南部川右岸、山内新福寺裏には、前期古墳の可能性を持つ鏡や直刀が出土した城山２号墳や中期古墳である城山１号墳がある。左岸の墓制比べて、前代に系譜を引く墓は存在しない。

飛鳥時代の７世紀後半代の製塩炉が大塚遺跡で検出されている。内陸部にあることから焼塩用の炉の可能性が指摘されており、同時に把手付中空円面硯が出土している。「南部郷」の中心地として、各地へ運ぶ塩を集積し、精製した場と想定されている[注2]。文献資料によるみなべの初現は万葉集で、大宝元年（701）の持統天皇「三名部の浦・・」の歌がある。律令期、日高郡に属した南部郷は、南部川流域に比定される。当時の「調」として南部郷より塩を納めていたことが平城宮出土の木簡から明らかになっている。千里の大目津泊り遺跡で製塩が行われている。大塚遺跡では土坑から南部で三例目の緑釉陶器が出土している。須恵器の窯跡は、起請ヶ谷窯跡や閉谷窯跡があり、田文字火葬墳墓では奈



第10図　南部周辺の縄文時代の遺跡



雨乞山銅鐸（桑谷銅鐸）南部川村西本庄
高さ　100cm
重さ
形式　突線鈕４式（近畿ⅣＢ式）６区袈裟襷文銅鐸
発見年月日　大正元年（1912）12月
所蔵　東京国立博物館

玉谷銅鐸　南部川村西本庄
高さ　現高50cm　復原高約80cm
重さ　13.2kg
形式　突線鈕３式（近畿ⅡC式）６区袈裟襷文銅鐸
発見年月日　安政６年（1859）
所蔵　東京大学人類学教室

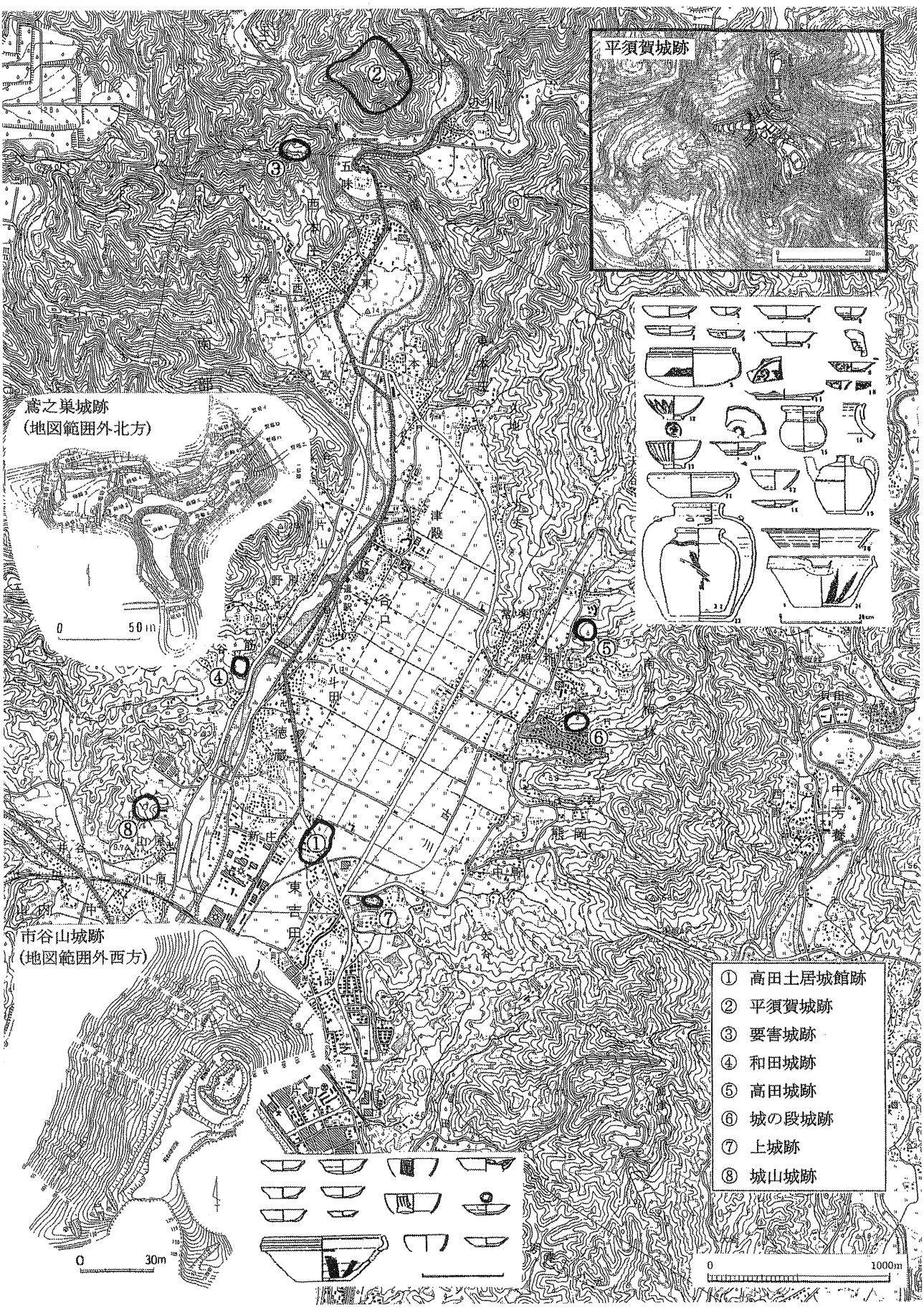
久地峠銅鐸　南部川村晩稲
高さ　現高60cm
重さ
形式　突線鈕２式（近畿Ⅰ式）６区袈裟襷文銅鐸
発見年月日　昭和25年（1950）９月
所蔵　奈良国立博物館

大久保山銅鐸　南部川村西本庄
高さ　111cm
重さ　17.6kg
形式　突線鈕５式（近畿ⅣＣ式）６区袈裟襷文銅鐸
発見年月日　大正９年（1920）４月
所蔵　東京国立博物館

下の尾銅鐸　南部川村晩稲
高さ　現高22cm　復原高約45cm
重さ
形式　扁平鈕式６区（４区）袈裟襷文銅鐸
発見年月日　昭和19年（1944）頃
所蔵　和歌山県教育委員会

常楽銅鐸　南部川村晩稲
高さ　67.5cm
重さ　15.5kg
形式　突線鈕２式（近畿ⅠＢ式）６区袈裟襷文銅鐸
発見年月日　昭和５年（1930）３月
所蔵　東京国立博物館

第11図　出土銅鐸



第12図　南部周辺の城館跡

良時代の蔵骨器が発見されている。

平安時代中頃には、京都八坂神社より勧請して須賀神社が造営される。後期以降、貴族を中心として熊野参詣が行われるが、関連して千里王子社、南部王子社がある。南部から灰坂越えのルートは徳蔵地区遺跡の近くを通過していたと考えられる。

平安時代末から鎌倉時代には、南部荘として開発され、高野山領として多くの高野山文書を残し、室町時代まで存続する。173haに及ぶ南部平野に広がる条里型水田は、荘園関連遺跡の範囲・内容確認のための試掘・確認調査により「おおよそ11世紀末～12世紀代前半頃に耕地化された」ことが判明した[註3]。15世紀～16世紀前半代、紀伊国守護は畠山氏が世襲する。畠山氏は数カ国の守護を兼ねており、国許には守護代をおく。紀伊国には紀北地方の「口郡」と南部地方の「奥郡」に小守護代を置き支配にあたらせた。奥郡の小守護代は南部荘にいて15世紀～16世紀前半、中村氏、野辺氏らが任にあたる。16世紀中頃～後半にかけて湯川氏が台頭し、南部に勢力を及ぼしたと考えられる。この時期、山城の平須賀城や平城の高田土居城が南部荘に築城された。平須賀城は、15世紀前半以降16世紀前半に盛期を迎える県内屈指の山城である。高田土居城跡は、館形式の単郭の平城と考えられてきたが、調査から二重三重の堀をもつ大規模な城郭であることが判明した。

江戸時代には、鋳造技術者が徳蔵地区遺跡周辺にすんでいたとの記録があり、大塚遺跡や徳蔵地区遺跡からは、鋳造に関連する土坑、溶解炉などが確認されている。

註1　『大塚遺跡』御坊市文化財調査会・南部町教育委員会　2002年3月
註2　同上　川崎雅史「第4章まとめ」
註3　『南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター2003年9月

参考文献

『南部町史』資料編・通史編第二巻　南部町　1991年・1997年
『上南部誌』上南部誌編纂委員会　1963年
『片山A地点発掘調査概報』南部町教育委員会　1978年
『安養寺跡』御坊市文化財調査会・南部町教育委員会　2002年
『安養寺跡・芝古墳群』御坊市文化財調査会・南部町教育委員会　2002年2月
『南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター2003年9月
『徳蔵地区遺跡』財団法人和歌山県文化財センター　2003年8月
川崎雅史『6個の銅鐸の不思議』フレッシュ梅の里大学　第4回講座2002年10月4日
『南部平野区画整理工事にかかる発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター2003年9月
『高田土居城跡発掘調査』財団法人和歌山県文化財センター2003年3月
川崎雅史『平須賀城跡の土器組成』和歌山城郭研究第3号　2004年
『平須賀城跡発掘調査概報』南部川村教育委員会1995年3月
『平須賀城跡発掘調査概報』南部川村教育委員会1996年3月

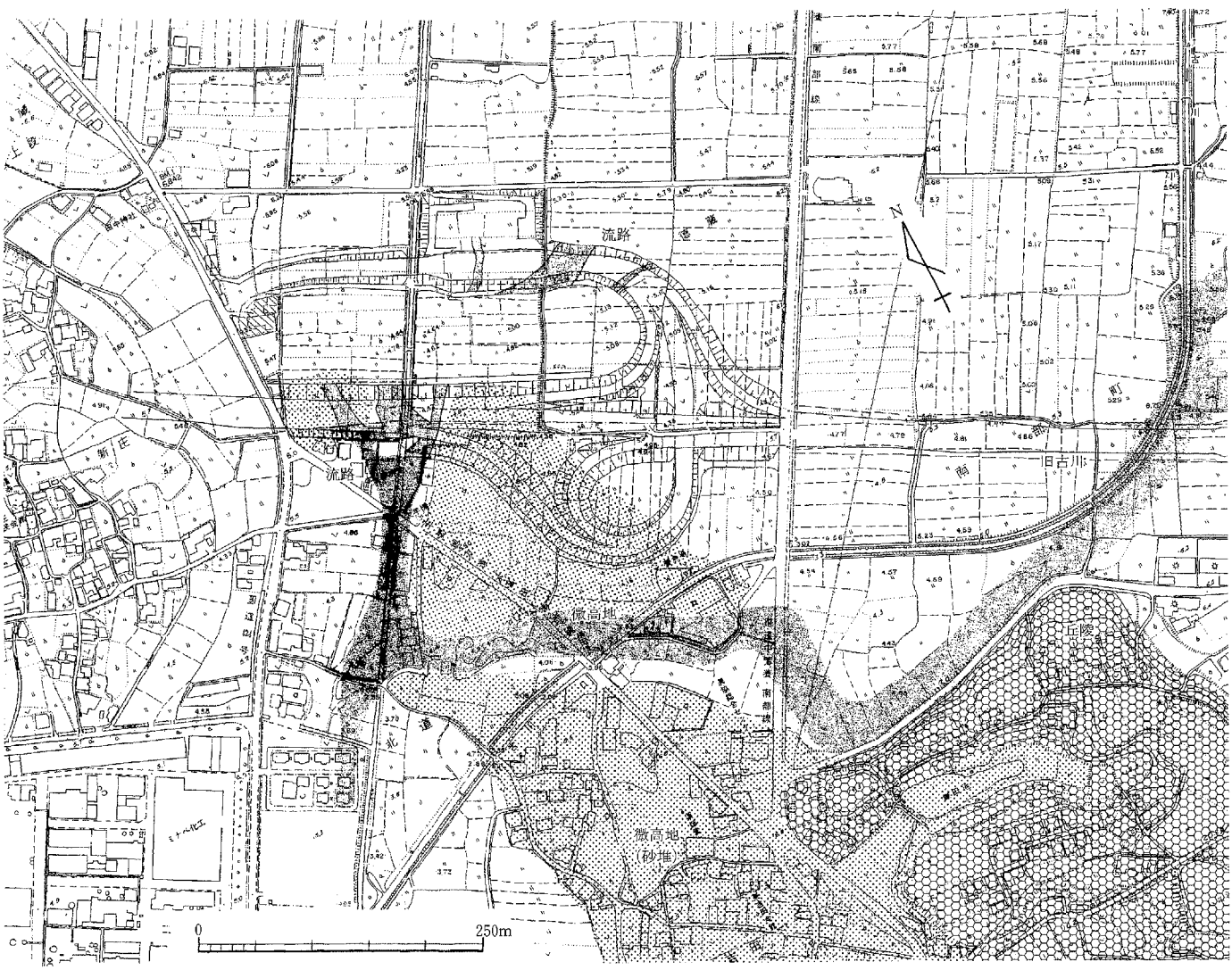
第３章　遺構・遺物

第１節　基本層序

みなべインターチェンジ建設を契機に発掘調査した徳蔵地区遺跡は、約60,000㎡の面積で、調査区は南部平野につくられた八丁田圃の南端部に位置する。現状は水田や梅畑である。水田層の下には起伏に富む旧地形がある。調査区の地形は沖積地であり、その一部に微高地が広がる。

基本層序は、第１層近世から現在の水田層、第２層床土、第３層・第４層は中世水田層である。第５層以下の層は地区によって違いが見られる。調査区のほぼ全域で確認できる層は、中世水田層の第３層、第４層である。第４層は12-④区では存在しないが、その他の地区では存在する。遺構は第３層、第４層、第５層の各上面で検出できる。第３層水田層の時期は14世紀中頃から15世紀後半で、第４層水田層は12世紀中頃から14世紀中頃の時期に該当する。

第５層以下の層は、沖積地とその一部にひろがる微高地では異なる。沖積地の10-①・11-④・12-⑤区では、基本的に同じで第５層は灰色シルト層、第６層は黒褐色シルト層、第７層は灰色シルト層と



第13図　徳蔵地区遺跡周辺地形復元図

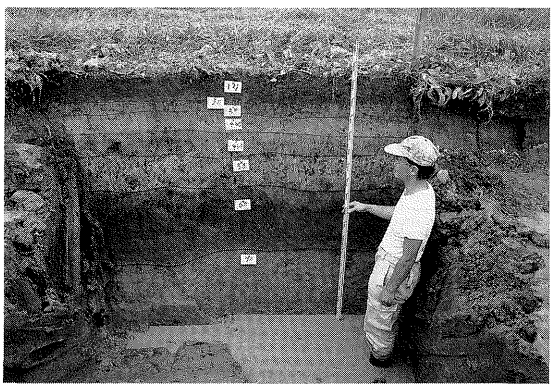
なる。

微高地は、旧河川を挟んで二地域に分かれている。西の微高地は、南部川が形成した自然堤防、東のそれは旧古川が形成した、或いは大規模に流れていた河川が形成した自然堤防と想定される。

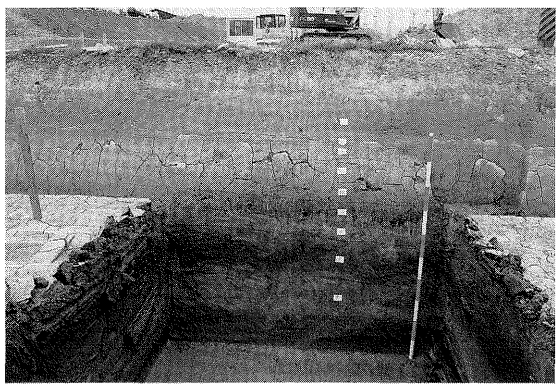
西の微高地は、中世水田層の下位、第５層は黄褐色シルト層、さらに下層は砂礫層で、10-⑤･13-①区を中心として南北に伸びる。第５層黄褐色シルト層の上面には、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構が存在する。下位には遺構は存在しない。

東の微高地は、中世水田層の下位が黄褐色シルト層で、11-①区付近は粘土層が続く。12-④区は、第５層が黄褐色シルト層に礫を含む層で縄文時代包含層で、この層の上面では弥生時代前期から古墳時代前期の遺構が検出でき、第６層は黒褐色系の砂質土の縄文時代包含層で、上面からは主に縄文時代後期の遺構を検出した。第７層は黄色系のシルトと礫層で、上面からは主に縄文時代中期の遺構を検出した。第８層は礫層、第９層が砂礫層である。第10層はしまりのない砂層である。第６・７層には径10～30cm前後の大きさの石が多く混っている。これらの層は、12-④区を中心として堆積し、北北西から南南東方向に直線的に分布する。12-④区の第５層から以下の層は、基本的に13-④区の高田土居城外郭部東部分に伸びるが、西部分はシルト層が主体である。

微高地のひろがりは、11-①区の西半分に舌状に伸び、南は高田土居城内郭部に至る。この間に12-⑧・13-②・13-⑨区に旧河川が存在する。東の微高地から北方向の調査区は、全て沖積地である。この沖積地上を旧河川が流れる。これら旧河川は、全て微高地間の古川支線に流れ込む。

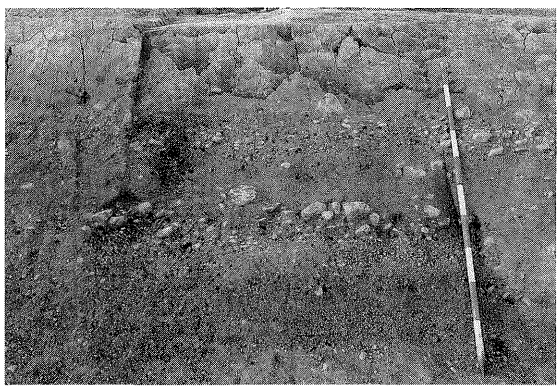


10-①区 南端上層(東から)



12-②区 調査区南壁土層(北北東から)

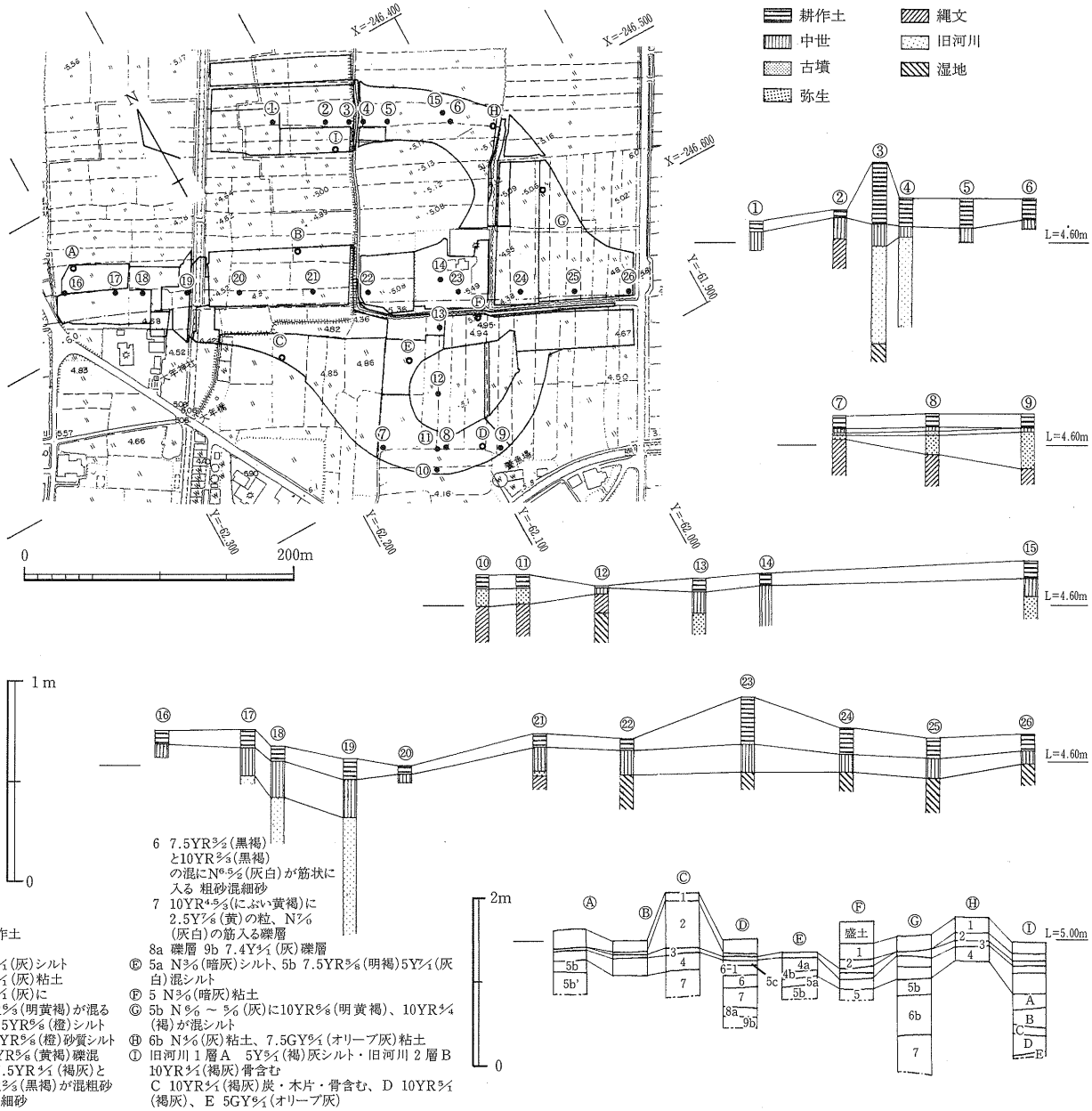
12-④区 南北トレンチ2 サブトレ1(東から)



13-④区 外堀1 西肩内 中世面より下の堆積状況(南東から)

写真７　調査区地点別土層断面

Ⅰ・Ⅱ区は、沖積地の低地部分である。水田層を主な調査対象とした。Ⅱ区では、第５層上面から縄文時代の自然流路や旧河川を検出（10-②･③区）し、縄文時代晩期から弥生時代前期の一括資料をえた。また古墳時代初頭の溝、水田（10-②区）なども検出した。Ⅲ区を構成するのは、微高地と旧河川である。西の微高地（10-⑤・12-⑧・13-①区）では、第５層上面から縄文時代晩期から弥生時代前期の竪穴住居と旧河川、土器棺を検出した。また13-②区からは、河川の流れを大きく変えるための弥生時代前期の堰状遺構を検出した。東の微高地（11-①区）では、第５層上面から弥生時代前期の掘立柱建物や土坑、弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝などを検出した。両微高地の間からは、旧河川（13-⑨区）を検出した。Ⅳ区は微高地部分に作られた高田土居城跡で、第３層上面から堀と外郭部を検出した。Ⅴ区は微高地（12-④区）と低地部分（11-④・12-⑤区、13-⑧・⑦・⑪区）で構成される。微高地では、第６・７層上面から縄文時代中期、後期の集落を検出し、第５層上面からは弥生時代前期と



第14図　基本層序模式図

古墳時代前期の集落を検出した。

第2節　Ⅰ区

10-①区、11-⑤区、12-①区がある。現況は水田である。同じ一丁区画内の水田部分である。調査対象地区の中では、最も南東に位置する調査区である。主な調査対象は旧水田層で、その時期把握が最大の主眼点であった。

（1）10-①区、11-⑤区（第16図、PL．9）

調査区外に借地がなされたため、排土を借地部分に置き全面調査を実施した。4,904㎡の大規模な調査は、徳蔵地区遺跡では初めてであったが、試掘調査からは沖積地であり、粘土層が続く調査区であることは判明していた。そのため、水田層と考えられる第3層と第4層を分層発掘することにより、時期把握と遺構の面的な状況を把握することに最大の目的をおいた。遺構検出は、第3層上面、第4層上面、第5層上面、一部第6・7・8層上面で実施した。第1層は現在の耕作土である。第2層は床土である。第3層は灰色シルト層（下面に鉱物質の沈殿あり）で薄く10cm程度の厚さであり、第4層は灰色粘土（下面に鉱物質の沈殿あり）で20cm程度の厚さがある。第5層は灰褐色系粘土で、地山である。11-⑤区、12-①区も同一土層である。

第5層上面からは、調査区の東から西に向かって、9.5m-10m-10mの間隔で、幅0.4～1mの南北方向に走る色調の違う帯を検出した。断面の観察からは盛土や溝など確認できない。この帯の間からは、第4層と同質・同色の粘土層が不規則に混入していた。現状の水田層と同一方向に走ることから、畦畔の痕跡と考えられる。第4層上面からは、調査区中央部に現在の水田区画と同一方向に打ち込まれた杭列を検出した。その他の遺構は一切存在しない。第3層上面からは、現在の水田区画と同一方向へ走る鋤溝を検出した。

出土遺物は第3層と第4層でコンテナで18箱出土した。これらは小破片となっている。量的には第3層が多く、第4層は少ない。10-②区においても同量の遺物が出土している。

（2）12-①区（第16図、PL.17・18）

第5層上面（第16図）において鎌倉時代の南北方向の水田畦畔3条を検出した。水田畦畔は、幅約50～90cm、検出延長約60mである。第5層上面では、同規模の畦畔が平行・隣接して真ん中が溝となり、畦畔の盛上りの途切れる部分が水の取り入れ口となる。畦畔間の東西の距離は、A畦畔とB畦畔間は平均約6m、B畦畔とC畦畔間は平均12mとなる。

第4a・b層に古墳時代後期末の遺物（特に須恵器）の包含が目立つ状況にある。同一面において、歪な形状を呈する不整形な多数の落ち込みを検出した。不整形な落ち込みは、鎌倉時代の水田層除去面で検出したが、弥生時代中期の遺物の散布が認められることから当該期に遡る部分が存在する可能性も考えられる。

第4a層上面（第16図）において室町時代の南北方向の水田畦畔4条を検出した。第4a層上面での、畦畔間の東西の距離は、畦畔7と畦畔8a間は平均約10.4m、畦畔8aと畦畔9間は平均10.0m、畦畔9と畦畔10間は平均9.0mとなる。水田畦畔は、基本的に水田層と土質・色調が近似する状態にあ

るが、大半の畦畔部分は、鉄分質の沈着の強い状態となっていることで検出が可能であった。畦畔８ａ・８ｂ・８ｃの関係は、畦畔８ｂ・８ｃが畦畔８ａより古い。

水田畦畔は、幅約50～80cm、検出延長約104mにも及ぶものである。最も西側の水田畦畔７に沿って、最大幅約1.8m、深さ20cmの水路状遺構６を検出した。水路状遺構は、かなり不整形な遺存状態ではあるが、検出延長約37mである。水田層の第４ａ層と第３層の間に粗砂の認められる部分が存在すること、水路状遺構の埋土の最下層には、約５㎜厚の粗砂が堆積していることから、小規模な洪水による冠水が考えられる。また、第４ａ層上面において、無数の人間の足跡が存在するが、浅く、平面形が微妙であるため検出を断念した。特筆できる遺物として、槍先状を呈する鉄製品が出土している。

また、第４層上面において畦畔８に沿って、南北方向の杭列を検出した。

第３層上面において江戸時代の水田区画と南北方向の畦畔の一部、５区画を検出した。水田区画は、幅約６～８m、検出延長約36m以上に及ぶものを３区画(面積平均約252㎡以上)、幅約７m、検出延長14m以上に及ぶものを１区画（面積約98㎡以上)、幅約10.5m、検出延長約８m以上に及ぶものを１区画（面積約84㎡以上）検出した。

各時代における水田畦畔の方向は、現在の畦畔方向とほぼ一致し、東側に約1.0～1.5mずれて存在する。また、室町時代と考えられる水路状遺構も現在の用水路とほぼ平行して存在する。

（３）第Ⅰ区　包含層出土の遺物

遺物記載を行なう前に、包含層および遺構から出土した土師器皿についてＡＢＣ・・・タイプと定義づけをし、以下・・・タイプで呼称する。

Ａタイプ・・・・・体部は斜め上方にやや外反しながら立ち上がり、縁部分を丸くおさめる。底部の調整痕は放射状の糸切り（掛け切）を施した後、わざわざ不定方向のナデにより平滑にし、糸切痕を消している。色調は褐色を呈し、口径15～16cmを測る

Ｂタイプ・・・・・口径は12cm前後を測り、色調、形態、調整はＡタイプに同じである。

Ｃタイプ・・・・・口径は９cm前後を測り、色調、形態、調整はＢタイプに同じである。

Ｄ１タイプ・・・・口径6.0～6.5cmを測り、体部は直立ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめ、底部は掛け切を施す。色調は褐色を呈する。

Ｄ２タイプ・・・・口径7.0～7.5cmを測り、体部は斜めに立ち上がり、底部は掛け切を施す。

Ｄ３タイプ・・・・口径９cm前後で、体部は強いナデにより斜めに立ち上がり、器高は低い。底部の調整は静止糸切を施す。

Ｅタイプ・・・・・口径11～12cmを測り、全体の器壁は厚い。体部は斜め上方に内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部調整は粗い目の静止糸切を施す。色調は褐色を呈する。

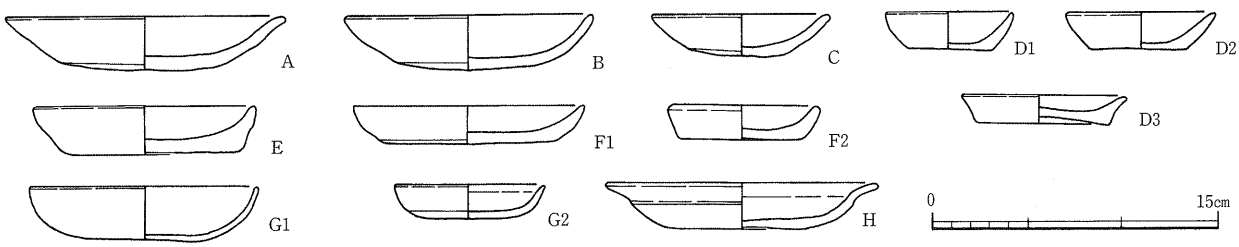
Ｆ１タイプ・・・・Ｅタイプと大きさ、形態、調整は同じである。色調は乳白色を呈する。

Ｆ２タイプ・・・・Ｆ１タイプと色調、調整は同じである。口径7.5cmを測る。

Ｇ１タイプ・・・・口径12cm前後を測り、体部は内湾気味に立ち上がり、携帯は浅い椀状を呈する。器壁が薄い。体部は内外面横ナデを施す。底部は掛け切のような痕跡をわずかに遺す。このタイプの出土は極少量である。

Ｇ２タイプ・・・・口径８cmを測る。Ｇ１タイプの小皿である。底部は不定方向のナデにより調整される。出土は極少量である。

Ｈタイプ・・・・・口径14.5～15.0cmを測り、口縁部は体部中位から強いナデによって大きく外反する。底部は軽い指押さえと不定方向のナデにより調整される。



第15図　タイプ別土師器皿

X=-246.520
X=-246.540
X=-246.560
X=-246.580
X=-246.600
X=-246.660
Y=-61.960
Y=-61.980
Y=-62.000
Y=-62.980
N
10-①区
11-⑤区
'99
畦畔Ⓑ
畦畔Ⓒ
畦畔Ⓐ
畦畔8b
畦畔9
畦畔10
畦畔8a
畦畔8c
畦畔7
水路状遺構6
サブトレ1
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
第3層上面
鋤溝
杭列
第4層上面
畦畔
0
25m

12-①区　土層土色⑤～⑩

1　耕作土
2、2a　床土
2b　旧耕作土
2c　旧床土
3　10Y5/1(灰)シルト
4a　10Y5/1(灰)粘土
4b　4a層に酷似。10YR5/3(明黄褐)の3～5㎜幅の縦筋状のブロックが入る
5　N3/(暗灰)粘土に5Y5/1(灰)がブロック状に入る
6　7.5Y3/1(オリーブ黒)粘土

12-①区
5層上面遺構

12-①区
土層柱状図⑤
L=5.20m
(S)　(N)
1　2b　2c　3　4a　4b　5

12-①区
土層柱状図⑦
L=5.20m
(E)　(W)
カクラン
1　2a　2b　3　2c　4a　4b　東畦畔　5

12-①区
土層柱状図⑥
L=5.20m
(W)　(E)
1　2　4a　4b　5

12-①区
土層柱状図⑧
L=5.20m
(E)　(W)
1　2a　2c　3　4a　4b　5
西畦畔

10-①区
土層柱状図土色①～④

1　現耕作土
2　床土
3
4　旧水田
5a　N5/～5/(灰)シルト(粘質強)
10YR5/8(明黄褐)、10YR3/1(褐)
5=5b　N5/～5/(灰)シルト(粘質強)
10YR5/8(明黄褐)、10YR3/1(褐)の密度濃
6a　N5/(灰)粘土
10YR5/8(明黄褐)
10YR3/1(褐)
5a・5層に比べ密度がかなり低くなる
6=6b層　N3/(灰)粘土
6c層　N5/～3/(灰)粘土
7層　5GY5/1(オリーブ灰)粘土

10-①区
土層柱状図①
L=4.80m
(S)　(N)
1　2　3　4　5

10-①区
土層柱状図②
L=4.80m
(S)　(N)
1　2　3　4　5a　5b　6a　6b　6c　7

10-①区
土層柱状図③
L=4.80m
(E)　(W)
1　2　3　4　5

10-①区
土層柱状図④
L=4.80m
(N)　(S)
1　2　3　4　5

12-①区
第4a層上面遺構

12-①区
サブトレ2土層⑨
(S)　(N)
L=4.60m
3　4a　4b　落ち　5

12-①区
サブトレ1土層⑩
(S)　(N)
L=4.60m
黄褐色畦畔
2c　3　4a　4b　5　6a
10YR3/3(暗褐)タテ筋状

0　2m

第16図　Ⅰ区遺構平面図・土層図

10-①区（第17～19図、PL.81・82）

この地区の水田層の包含層については第3層、第4層と層位的に発掘調査を行なった。包含層だけで言えば出土した遺物量の最も多い地区である。出土遺物には土師器皿、瓦器、国産陶器、山茶碗、中国製磁器、土師質鍋・釜、東播系土器、須恵器などの遺物がある。

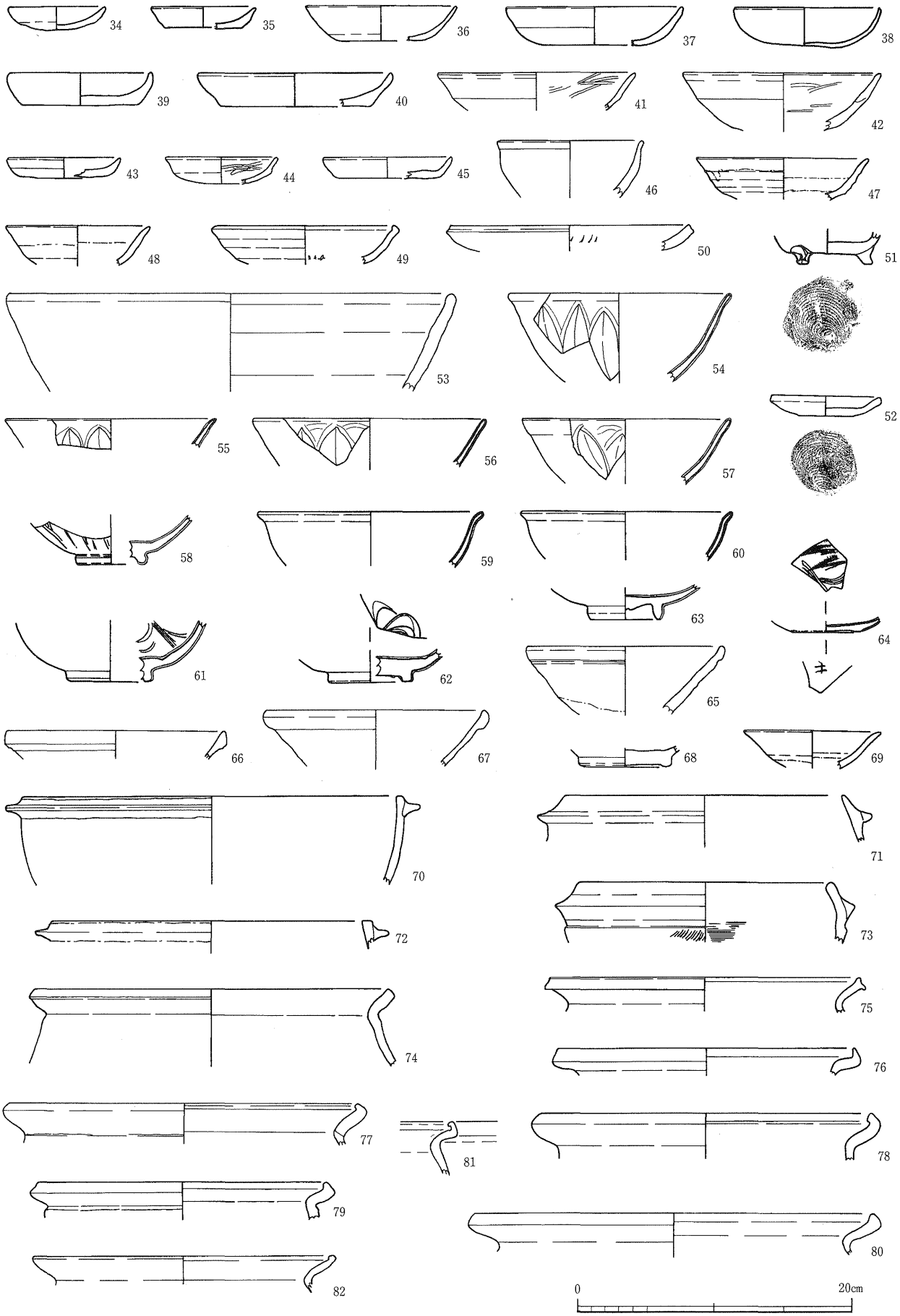
第3層出土の遺物

34～40は土師器皿である。34はG2タイプ、35はD2タイプ、36・37はG1タイプである。38はG1タイプであるが色調は白色を呈する。39・40はEタイプである。瓦器は41～45である。41・42は椀で、42は41に比べ器壁が厚い。双方ともに器面の磨耗が著しい。43～45は皿である。44は他の2片に比べ器高が高く、口縁を一回きつくなでている。46～51は瀬戸美濃系の土器である。46は天目茶碗で大窯4期後半である。47・48は緑釉小皿で、47は後期I、48は後期IIである。49・50はおろし皿である。49は火中している。中期IIIと考えられる。50の釉は刷毛塗りで前期IIIの時期である。51は鉄釉の香炉の底部で三足が付き、時期的には中期I～IIと考えられる。52は山茶碗（皿）である。胎土の粗い南部系で長石が混ざる。時期は6型式である。53も6型式の山茶碗の鉢である。54～63は青磁碗、64は青磁皿である。54～58は片切彫りにより鎬蓮弁文を施している。54は火中している。58の施釉は畳付きの釉を削り取っている。59・60は無文で、口縁端部を外反させる。61は雷文帯の付くものであろうか、内面にはヘラ先で文様を描く。畳付きも施釉されている。62の見込みもヘラ先による文様が描かれている。63の畳付きの釉は削り取られている。64は劃花文皿である。65～68は玉縁状口縁の白磁碗である。65は白濁色、66～68は灰白色を呈する。69は白磁皿で、口縁は肥厚しながら外反する。

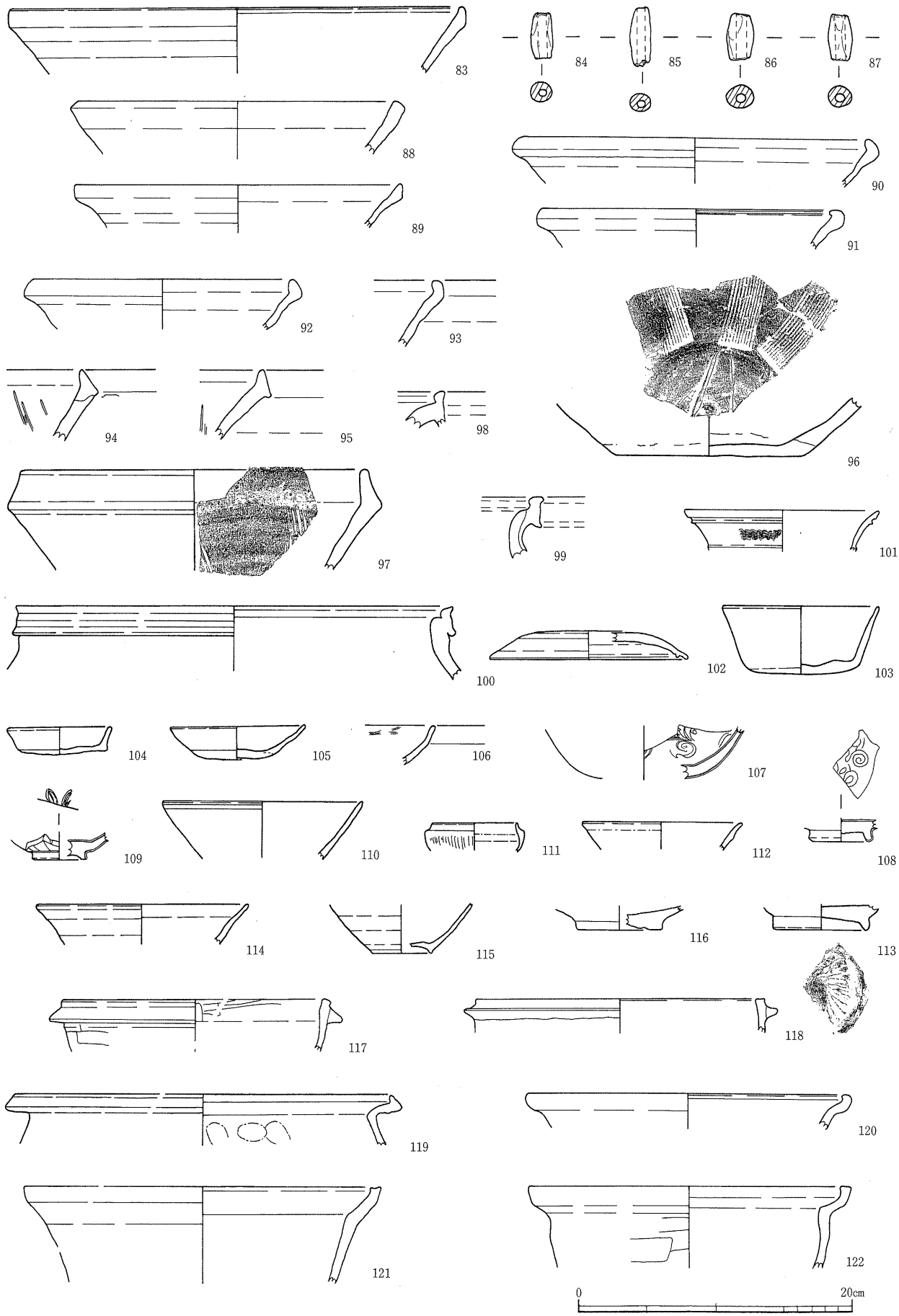
70～73は土鍋である。口縁部直下に短い鍔が付く。鍔の上部は接合痕を消すため一回きつく撫でている。70～72は鍔の下から体部に煤が付着する。73は断面三角形の鍔が付く。口縁端部から煤が付着する。体部外面には斜方向のタタキがあり、内面は粗いハケ状の工具による調整が施されている。74～82は土釜である。いずれも頸部が「く」の字状に折れ曲がり体部へと移行する。74は口縁端部に面をもつ。75の口縁端部は上下に拡張する。76～82の口縁端部は基本的に嘴状に摘み上げられている。特に81は繊細でヘラ状の工具を内面から押し当てている状況が顕著に現われている。83は瓦質の捏鉢である。84～87は管状土錘である。88～93は東播系捏鉢である。88は口縁端部にやや丸みを帯びる面をもつ。89の体部は斜め上方に伸び、端部は上方に拡張される。90～93の端部は内側に拡張される。94～97は備前焼擂鉢である。94・95は口縁部の上方への拡張が始まる時期である。97は口縁帯の凹線が未発達の段階である。96は底部で櫛目の一単位は11条である。98～100は常滑焼の甕である。いずれも「N」字状口縁化の始まりの時期である。13世紀中ごろから後半の時期と考えられる。100は全面に自然釉がかかる。101～103は須恵器である。101は古墳時代の壺、102は飛鳥時代杯蓋で宝珠摘みの付くものである。103は奈良時代の杯身である。

第4層出土の遺物

105は土師器Cタイプである。胎土は微量のクサリ礫を含む。104・106は瓦器で、104の皿の口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。106の椀は内外面磨耗が著しい。口縁の上部をキツク撫でているた



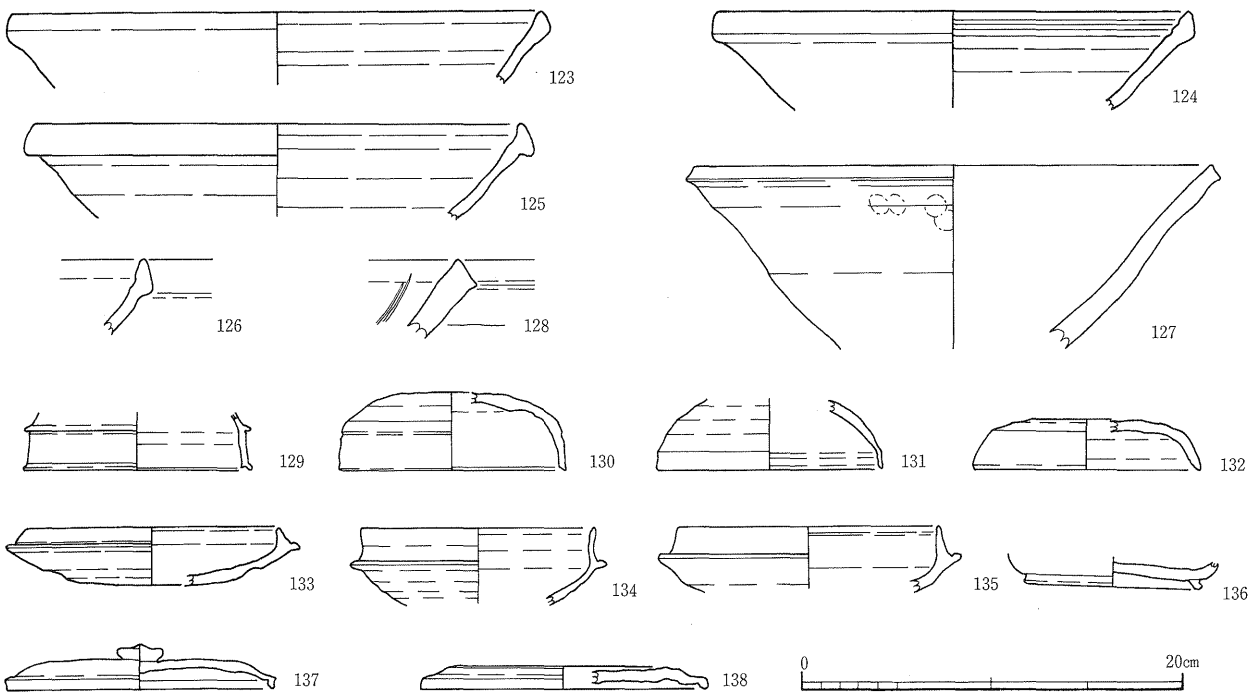
第17図　Ⅰ区 10-①区 包含層出土遺物　第３層(34～82)



第18図　Ⅰ区 10-①区 包含層出土遺物　第3層(83～103)　第4層(104～122)

め内湾気味に立ち上がる。107～109は青磁碗である。107･108は内面にヘラによる文様を描く。109は小碗である。外面に鎬蓮弁文を、見込みにも蓮弁文を描いている。畳付きまで釉が掛かっている。110は白磁碗で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がり口縁端部を尖り気味に納める。111は白磁の合子の身である。内外面の合わせ部分は無釉である。112・113は瀬戸美濃系である。112は緑釉小皿である。時期的には共に14世紀後半と考えられる。113は灰釉瓶子の底部である。外低に重ね焼時の付着を防ぐためおろし目を施している。114・115は山茶碗である。114は尾張型の５型式、115は東濃型の８型式で所謂、均質手と呼ばれるもので精製した胎土の薄手でシャープな作りである。116は緑釉陶器の皿である。遺存状況が著しく悪いため釉は皆無である。底部は削り出しで、残存の状況から円盤状高台か蛇の目高台かは不明である。117・118は土師質鍋である。双方とも口縁端部は平坦で、口縁部直下に断面三角形の短い鍔を付す。119･120は土師質釜である。口縁端部を斜め内にツマミ上げている。121･122は瓦質鍋である。121の口縁部はやや受口状になり端部は平坦である。胴部は膨らまず直線的に径を小さくする。122の口縁部は121に比べ大胆な受口である。瓦質鍋の出現期のものであろうか。123～127は東播系捏鉢である。123・124・126は口縁端部の拡張が上下に認められる。時期的には12世紀末～13世紀初めである。124は高熱による二次焼成を受け明褐灰色に変色している。125は前者に比べ、より口縁端部が肥厚する。時期的には13世紀前半から後半である。127は口縁端部が肥厚し始めた時期で、やや下方に拡張の兆しが認められる。胎土には細かな長石がパラパラと入る。時期は11世紀末から12世紀である。128の備前焼擂鉢は口縁端部が内外に突出しているところから、時期的には中世３期ａである。中世遺物の他には古墳時代（６世紀）の須恵器、杯蓋129～132、杯身133～135、奈良時代（８世紀）の須恵器、杯蓋137・138、杯身136が出土した。

出土遺物から言えることは第３層出土の遺物は瀬戸美濃系陶器、東播系捏鉢、輸入陶磁器、国産陶



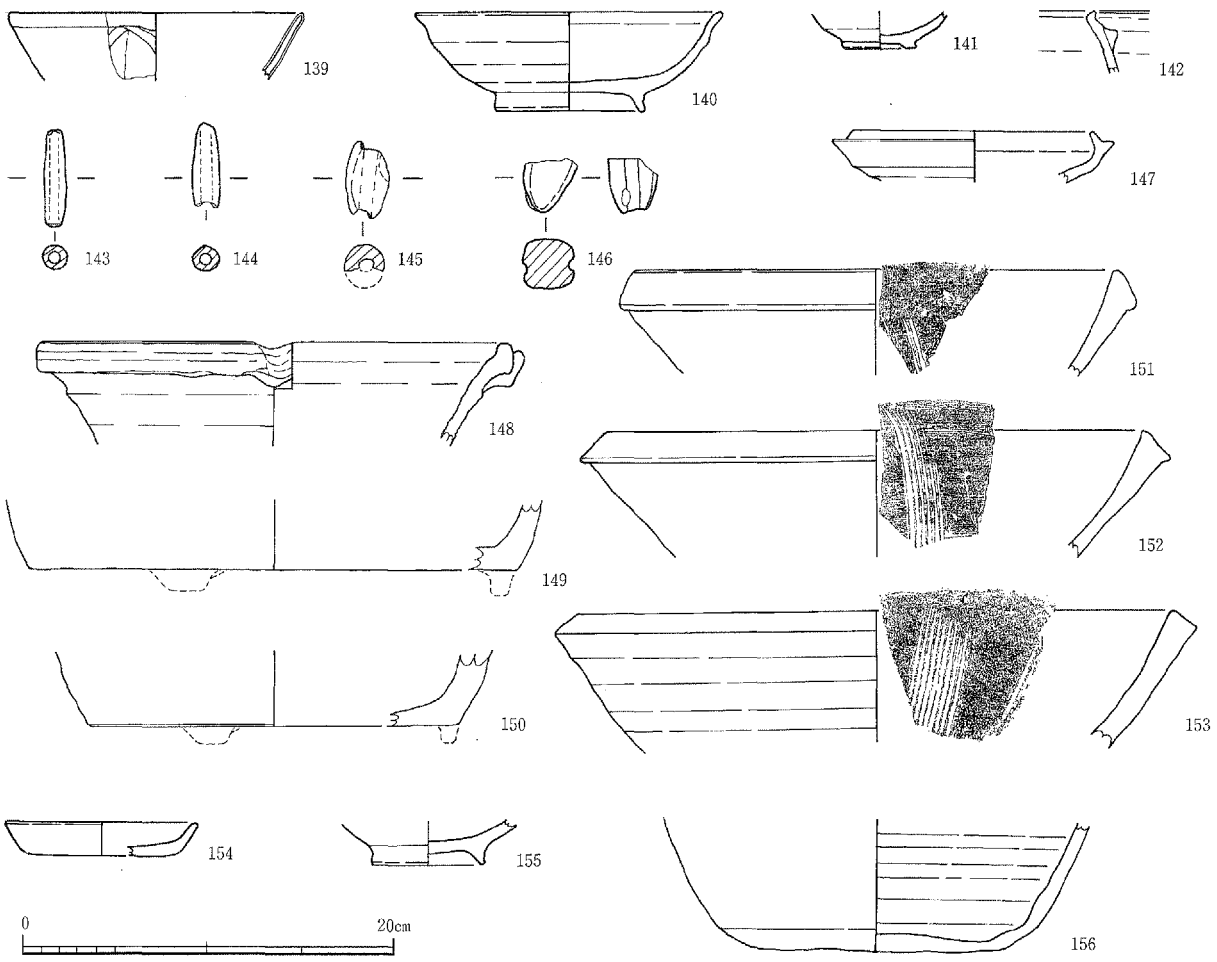
第19図　Ⅰ区 10-①区 包含層出土遺物　第４層(123～138)

器等から14世紀中頃～15世紀後半の時期で纏まっている。ただ1点46の瀬戸天目茶碗は16世紀末の時期と考えられ、混入と思われる。また、第3層と同じ観点から、第4層出土遺物の時期は、12世紀中頃～14世紀中頃で纏まりをみせる。

11-⑤区（第20図、PL.82）

第3層出土の遺物

139は鎬蓮弁文青磁碗である。140は南部系の山茶碗で尾張型第3型式である。141も南部系の山茶碗小皿である。渥美型の4型式である。142の土師質鍋は口縁直下に強いナデを施すため端部はやや外に拡張する。ナデの下に断面三角形の短い鍔が付く。胎土には0.2～0.5㎜大の砂粒を多く含む。143～146は土錘である。143～145は管状土錘である。146は有溝土錘である。須恵器の杯身147などの古い遺物も入る。148の東播系捏鉢は器面がザラつく。口縁端部の上下の拡張が認められる。149･150は瓦器火鉢の底部細片である。双方ともに浅鉢形のものと考えられ、底部外面縁辺部分に三足を付すものと思われる。151～153は備前焼擂鉢である。151は口縁の上方への拡張が始まる時期で、15世紀中頃である。152と153はあまり時期差のないもので15世紀を前後する時期である。152の櫛目は7本、153は9本を一単位としている。



第20図　Ⅰ区 11-⑤区 包含層出土遺物　第3層(139～153)　第4層(154～156)

第４層出土の遺物

154の瓦器小皿は器面の磨耗が著しく調整は不明である。155の土師器椀も器面の磨耗が著しい。高台は外面を強く撫で「ハ」の字状に外に開く。156は須恵質土器であるが東播系かどうかは不明である。体部中位の粘土紐接合箇所できれいに割れている。器形は東播系の捏鉢のように斜め上方に立ち上がらず、ボール型を呈し底部の径も大きい。

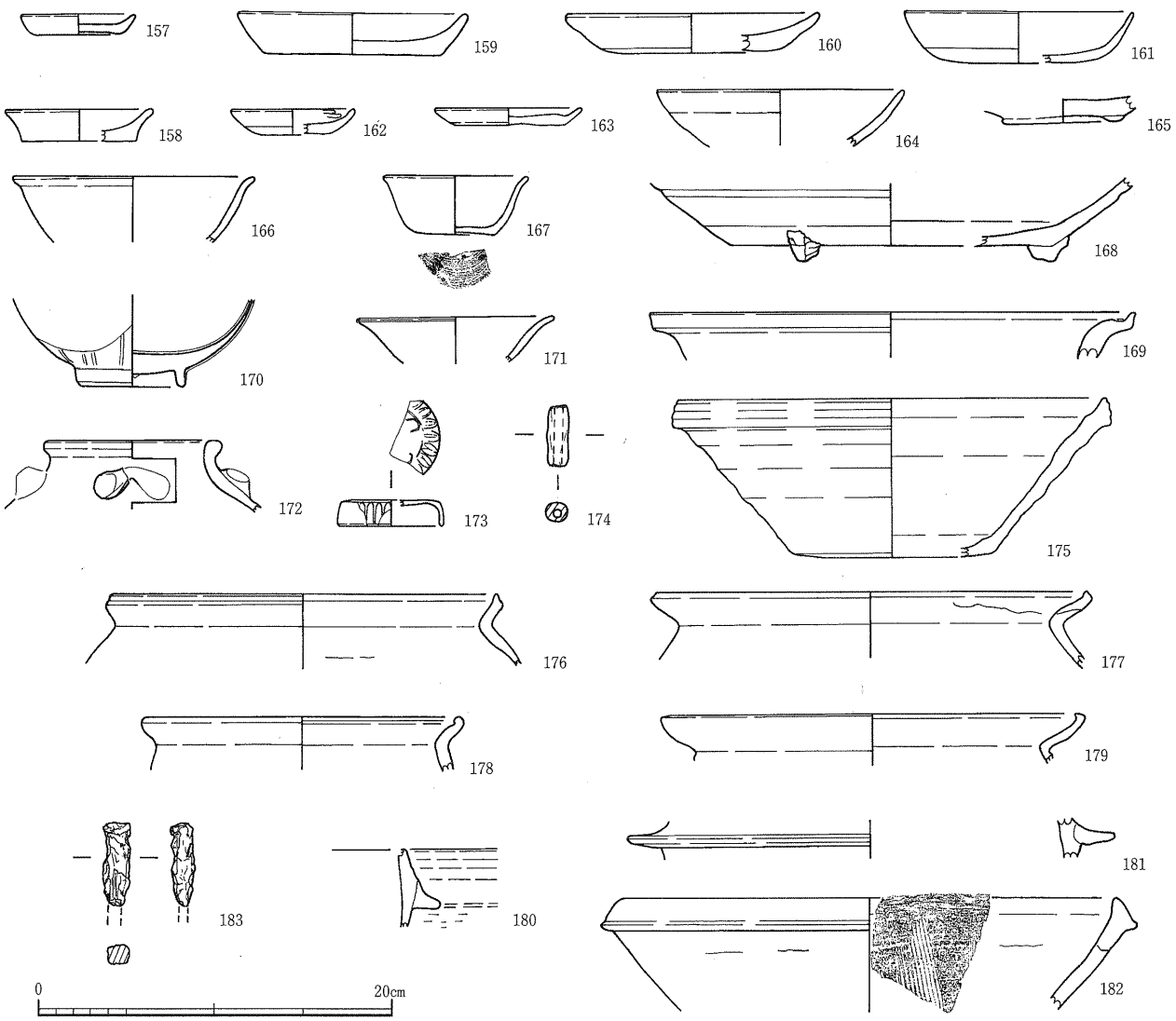
12-①区（第21図、PL.82）

第４層出土遺物には弥生土器、須恵器、黒色土器、瓦器などがある。

第３層出土遺物

157～161は土師器皿である。157はＤ２タイプ、158はＤ３タイプ、159･160はＥ１タイプ、161はＧ１タイプである。

162･163は瓦器皿で162は内湾気味に立ち上がる。163は硬質で器高が浅い。底部外面は指押さえ、内面はヘラ状工具により器壁を薄く削りとっている段が認められる。164の瓦器椀の調整は不明である。165・



第21図　Ⅰ区 12-①区 包含層出土遺物　第３層(157～183)

166は南部系山茶碗である。165は7型式、166は5型式の範疇と考えられる。167・168は瀬戸美濃陶器である。167はわずかに遺こる口縁から稜皿と思われる。168は折縁深皿で底部に3足を付す。時期的には13世紀前半と考えられる。170の青磁碗は器面全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取っている。淡橙色を呈する。171は白磁皿である。口縁端部はやや肥厚し端反る。173は青白磁の合子蓋である。外面と側面に蓮華文を施す。172は中国製鉄釉四耳壺である。169は常滑焼の甕である。受け口状の口縁を呈する。174は管状土錘である。175の東播系捏鉢は、口縁部が上下に拡張される時期である。176～179は土釜である。いずれも調整は不明である。口縁は「く」の字状を呈し、端部を内側に折る。180・181は瓦器釜で、調整は不明である。短い鍔の上面は緩く凹む。180は鍔直下からべっとりと煤が付着する。182の備前焼擂鉢は時期的には中世3期bである。櫛目の一単位は11本である。183は鉄釘である。

第3節　II区

平成9年度分、10-②・③区、11-②2区、12-②・③区、13-③・⑤・⑩区がある。旧河川と自然流路、溝、水田層が主な調査対象である。層序は、I区と同じである。

（1）平成9年度調査区（第27図、PL.1）

料金所部分、最も北に位置する調査区である。1,700㎡を調査した。調査区の北側を土置き場として借地し、全面調査した。

遺構検出は、第4層上面で実施した。遺構は調査区東端と中央部西よりに集中する。鋤溝、溝、土坑などがある。鋤溝は幅5～10cm、深さ5cmで調査区に平行あるいは直行する。溝は幅1.5m、深さ10～20cmである。鋤溝や溝からは、15～16世紀の遺物が出土した。土坑は鋤溝周辺で検出した。

第3層出土遺物は、小破片が多く、器表面も摩滅している。弥生時代から中世の遺物である。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器等がある。

（2）10-②区・11-②2区（第22～24図、PL.2・3・10）

10-②区は4,915㎡で、縄文時代から古墳時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物を検出した微高地（12-④区、13-④区）の前面に位置し、低湿地である。11-②2区（207㎡）は、物置小屋があった箇所で別途調査した。調査区外に借地し、全面調査した。第3・4層は、分層発掘を行っていない。遺構は第5層上面で検出した。第5層上面からは、畦畔の痕跡を検出した。現在の水田方位と同じである。また調査区西側で旧河川の落ち込みやその中に造られた弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝、水田などを検出した。この弥生時代後期末の層の下には更に縄文時代晩期から弥生時代前期の層が存在する。縄文時代晩期から古墳時代前期の遺構には、複数の自然に形成された流路や人工的に掘削をされた溝1～18がある。これらの遺構は、調査区の中央部から東側の位置で検出した。自然流路と考えられる不規則な流れをもつものと明確に堀形と考えられる垂直に落ち込むものに区分できる。

溝1～3（第22図）

調査区の東側で検出した。溝1は、幅0.8～2.4m、深さ20cmである。堆積土は1層である。出土遺物は、弥生時代後期末の甕（195・196）がある。口縁部破片はくの字形に外反する。底部は外面に叩きが残る。溝2・3は、窪み状に落ち込む遺構である。深さは10～20cmである。堆積土は1層である。

溝５・７・８・９・10・11（第24・30・31図、PL.３・83）

調査区の中央部を東から西方向へ流れる。各遺構は複雑に切り合いながら西端部では合流する。時期によって流れを変えた自然流路の可能性がある。各遺構の堆積土は、砂層を含んだシルト層である。溝５は幅30cm以上、深さ10cm前後である。溝７は幅80cm前後、深さ25cmで、緑泥片岩を含んだ紀北地方の弥生土器底部が出土する。溝８は幅約３m、深さ30cmで堆積土はシルト層で、弥生時代中期の壺（197）が出土する。溝９は、幅1.5m前後、深さ15cm前後で下層から庄内期の二重口縁壺（194）と石棒（215）が出土する。溝10は幅80cm、深さ20cmである。溝11は、幅2.0～3.2m、深さ40cmである。上流の堆積土は２層で、下流では砂層とシルト層が細かく薄く堆積する。弥生土器底部（198・199）が出土する。198はタタキ痕が残る。

土坑13（第22図）

溝５に切られている。楕円形で1.75m以上×1.2～1.45m、深さ23cmである。弥生土器底部（207）が覆土から出土した。

水田畦畔と足跡（第22図、PL.３・９）

第５層上面から、幅0.5～１m前後の畦畔痕跡を２条検出した。現在の水田と同一方位である。また旧河川の東肩部から北東の方向へ五方向に伸びる足跡を検出した。足跡は、26～30cm前後が最も多い。

旧河川跡（第23・30～39図、PL.７・10・83・158）

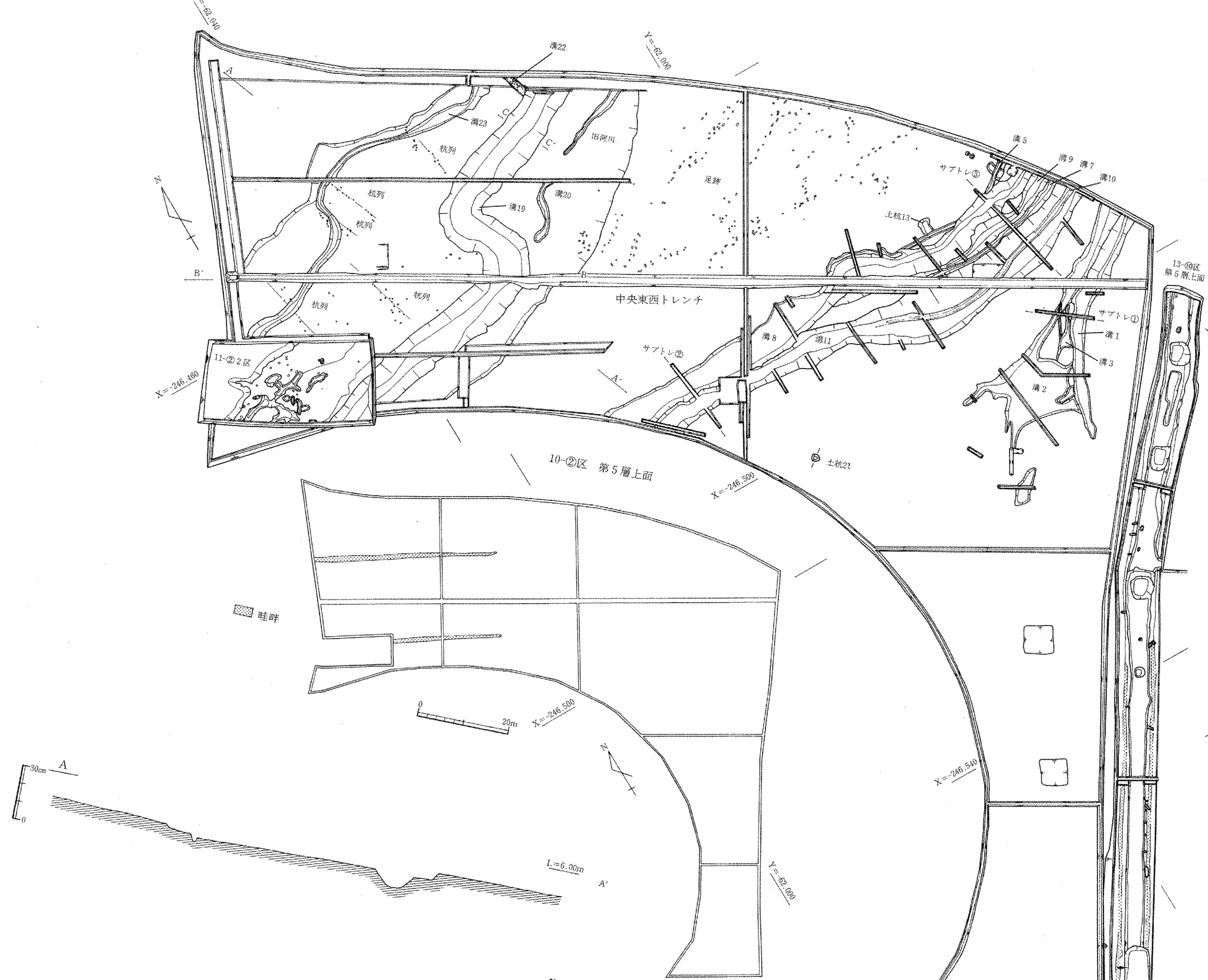
第５層上面で検出した幅22～40mの河川である。10-③区・11-②区・13-③・⑤区で延長線上に同一河川を検出している。縄文時代晩期以前に遡る河川である。10-②区で検出した河川跡は、東側肩部のみ検出した。深さ２m以上である。

堆積土は、上層に旧河川第１層、その下に旧河川第２層が堆積する。旧河川第１層は、堆積土の土質から見て、整地土の可能性がある。旧河川が埋没して窪地状になっている段階で、水田を作るために地面を水平・平坦に整地したと考えられる。旧河川第１層出土遺物は、弥生時代中期の凹線文の壺、須恵器杯身（210）、須恵器杯蓋（208・209）、外面に強いナデ調整を施した土師器皿（214）、甕の把手（213）などが出土する。旧河川堆積土第２層は、弥生時代後期末の遺物を含む層である。出土遺物には、土器・木器がある。土器は、壺（200～203）、甕（204・205）、高杯、鉢などが出土し、弥生時代後期末に最終的に埋没したと考えられる。壺は広口壺（200）で、口縁端部に擬凹線を施し、二個一対の円形浮文を貼り付ける。底部（201～203）は外面にナデ調整がある。甕は小型（204）と大型（205）がある。大型の甕は口縁端部に刻み目を施す。木器は、荒く杭状に削り尖らした矢板材（403～408・410・411）、天秤棒（401）、有頭棒（402）、斧の柄（400）、杭（412）、抉を入れた用途不明の木製品409などがある。409は片側を欠損する。

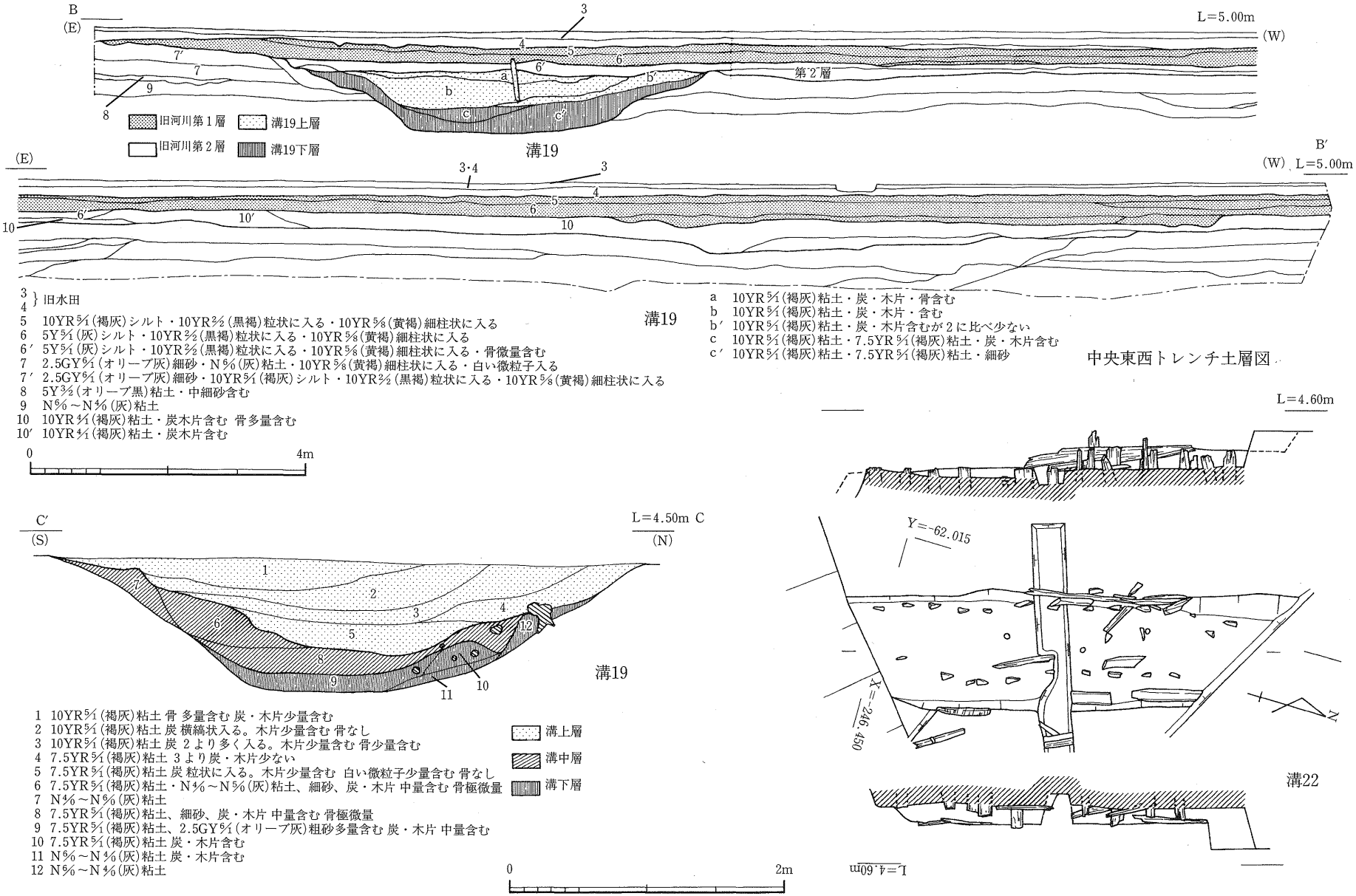
溝19・溝20・22・23と周辺平坦部

河川の埋没の過程で平坦部が形成され、中央部で溝19、その両側に溝20・23を検出した。また、東端で溝19に直行する溝22を検出した。

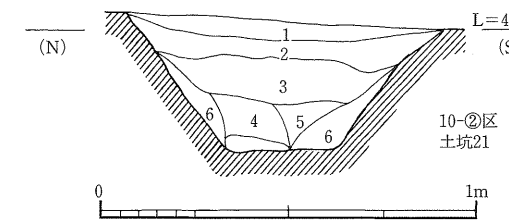
溝19（第22・23・30・31・38・39図、PL.７・10・83・157・158）



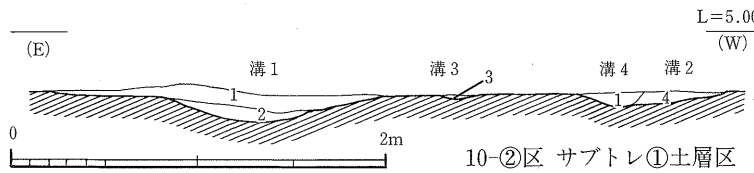
第22図　II区 10-②区・11-②2区・13-⑩区遺構平面図



第23図　II区 10-②区 中央東西トレンチ土層図、溝19土層図、溝22平面図・立面図

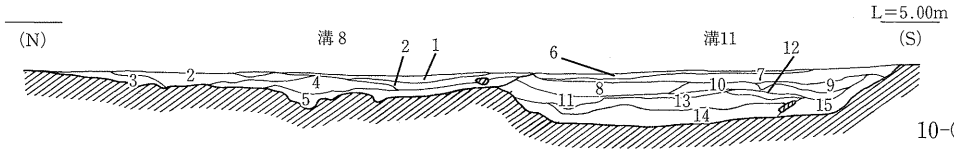


1 2.5Y4/1(黄灰)シルト、5YR3/2(暗赤褐)粒状に入る。
10YR5/8(黄褐)細柱状に入る。
2 2.5Y3/1(黒褐)シルト
3 2.5Y3/1(黒褐)シルト+7.5YR3/1(黒褐)焦土。中・細砂混じる。
4 10YR4/3(にぶい黄褐)中・細砂、7.5YR5/1(灰)粘土、少量混じる。
5 {2.5Y3/1(黒褐)シルト+7.5YR3/1(黒褐)焦土}+7.5Y5/1(灰)粘土、
10YR4/6(褐)中・細砂
6 7.5Y5/1(灰)粘土、10YR4/6(褐)中・細砂



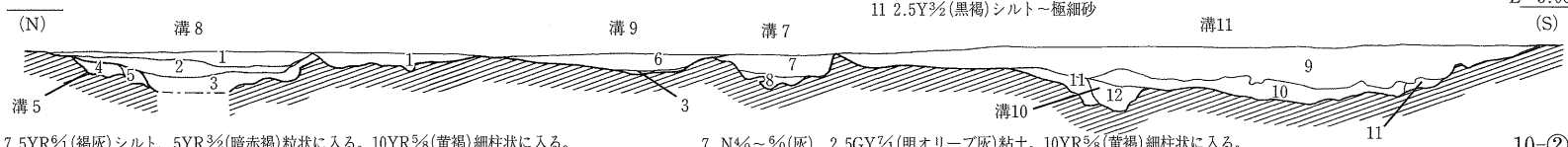
10-②区 サブトレ①土層区

1 10YR5/1(褐灰)シルト。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5YR2/3(極暗褐)粒状に入る。
2 10YR5/1(褐灰)砂質土、10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5YR2/3(極暗褐)粒状に入る。
3 10YR5/1(褐灰)シルト。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5YR2/3(極暗褐)粒状に入る。但しやや砂質土が入る。
4 N4/0(暗灰)シルト(粘土質)、10YR5/8(黄褐)細柱状に入る。
7.5YR2/3(極暗褐)粒状に入る。



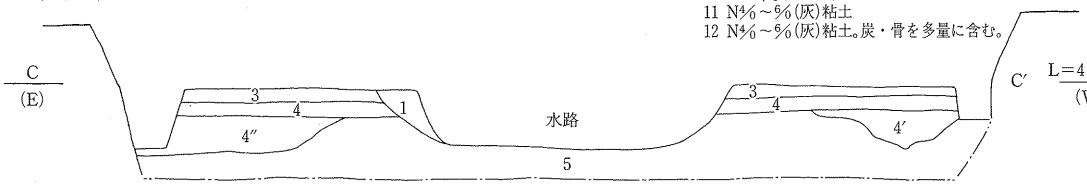
10-②区 サブトレ②土層区

1 10YR4/1(褐灰)シルト
2 10YR4/1(褐灰)シルト、Φ0.1cmの長石、炭化物含
3 2.5Y3/1(黒褐)シルト～極細砂
4 10YR3/1(黒褐)+2.5Y4/2(暗灰黄)シルト～極細砂
5 2.5Y3/1(黒褐)シルト～細砂
6 10YR4/2(灰黄褐)シルト
7 10YR4/1(褐灰)シルト
8 5YR3/1(黒褐)シルト+10YR5/1(褐灰)極細砂～細砂
9 10YR3/2(黒褐)シルト
10 10YR4/1(褐灰)粘土
11 2.5Y3/2(黒褐)シルト～極細砂
12 2.5Y4/1(黄褐)粘土
13 2.5Y4/1(黄褐)粘土～シルト+2.5Y5/1(黄灰)極細砂～細砂
14 7.5YR3/2(黒褐)シルト～極細砂、10YR4/4(褐)極細砂～細砂
10YR5/1(褐灰)中砂
15 2.5Y4/1(黄褐)シルト～極細砂

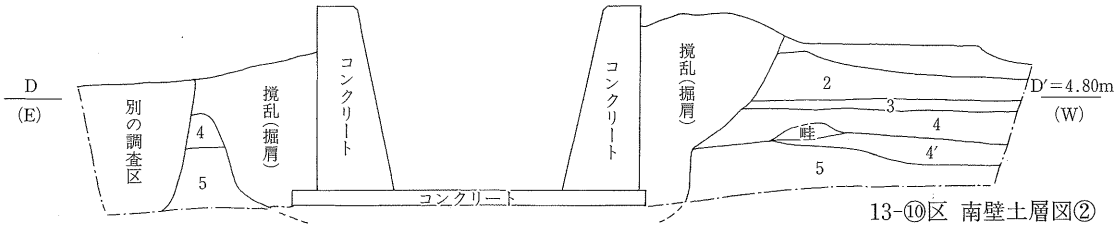


10-②区 サブトレ③土層図

1 7.5YR5/1(褐灰)シルト、5YR3/2(暗赤褐)粒状に入る。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
2 7.5YR5/1(褐灰)シルト、5YR3/2(暗赤褐)粒状に入る。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。但し砂を含む。
3 7.5YR3/4(暗褐)、10Y5/2(オリーブ灰)、10YR6/6(明黄褐)粗・中・細砂混合
5Y5/1(灰)粘土質土少量含む。
4 N3/0(黒)粘土、10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。5YR3/2(暗赤褐)粒状に入る。
5 N3/0(黒)粘土、5GY5/1(オリーブ灰)砂質土、10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
6 10YR6/1(褐灰)シルト、10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。7.5Y3/3(極暗褐)粒状に入る。
7 N4/0～5/0(灰)、2.5GY7/1(明オリーブ灰)粘土。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5YR3/3(極暗褐)粒状に入る。
8 N4/0(灰)シルト(砂質)。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
9 N6/0(灰)2.5GY6/1(オリーブ灰)シルト混合。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5Y3/3(極暗褐)粒状に入る。
10 N5/0(灰)2.5GY6/1(オリーブ灰)シルト混合。10YR5/6(黄褐)細柱状に入る。
7.5Y3/3(極暗褐)粒状に入る。但し砂質土になる。
11 N4/0～5/0(灰)粘土
12 N4/0～5/0(灰)粘土。炭・骨を多量に含む。



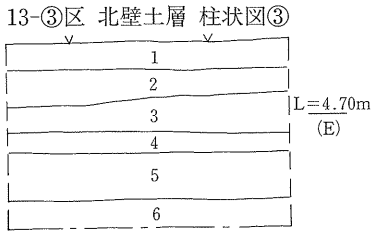
13-⑩区 南側ベルト土層図①



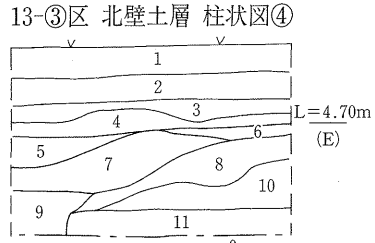
13-⑩区 南壁土層図②

13-⑩区
南壁土層

1 現代耕作土
2 近・現代耕作土及び床土
3 旧耕作土
4 旧耕作土
4′N3/0(暗灰)シルト、5YR3/1(黒褐)粒と5YR5/6(暗赤褐)粒を少量含む。
4″N4/0(灰)シルト、5YR3/1(黒褐)粒と5YR5/6(暗赤褐)粒を少量含む。
5 N4/0(灰)シルト、7.5YR6/6(橙)粒を少量含む。



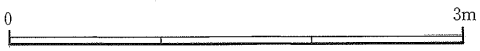
13-③区 北壁土層 柱状図③



13-③区 北壁土層 柱状図④

13-③区
北壁柱状図土色③④

1 耕作土
2 盛土
3
4 } 旧水田
5 2.5Y5/1(黄灰)粘質土
6 2.5Y4/1(黄灰)粘質土
7 5Y5/1(灰)粘質土
8 N3/0(暗灰)粘質土
9 7.5Y5/1(灰)粘土
10 5Y7/3(浅黄)粘土
11 7.5Y5/2(灰オリーブ)粘土



第24図 II区 10-②区 土坑21・サブトレ①～③土層図、13-③区 北壁土層図、13-⑩区 南側ベルト・南壁土層図

旧河川の第2層除去後検出した溝で北東から南西方向に蛇行しながら流れる。旧河川の中央部のやや東寄りに掘削されている。規模は幅5m前後、深さ0.9mである。この溝は途中で大きく南に蛇行し、この蛇行地点には溝の肩部と底部に杭が密に打ち込まれていた。堆積土は大きく上・中・下の3層に区分でき、下層は木片を多く含み、流れ堆積を示す。

遺物は上層と下層から出土する。下層からは弥生土器（186・187）、木製品（392・396・398・399が出土する。186・187は壺である。392は角杭、396は丸太杭、398は柱材、399は基部を尖らせた棒状製品である。上層からは弥生土器（184・185・188～192・216～218）、木製品（393～395・397・413）が出土する。184・185・188・192は壺で、184は後期の広口壺である。185・188・192は中期に帰属し、このうち185は直口壺である。189～191・216～218は弥生時代後期の甕である。217は底部の破片で、それ以外は口縁部から体部にかけての破片で、口縁部は「く」の字型に屈曲する。189は口縁端部をわずかに拡張し、190・218は口縁端部に刻み目を施す。216以外は体部にタタキ調整を施し、このうち190は体部を分割成形する。393は角杭、394・395は有頭棒、397は柱材である。413は方形の板材で、孔の存在から組み物の部材と考えられる。

溝20（第22・30図）

溝19の東側で検出した溝で、幅30cm前後、深さ15cmを測る。堆積土は1層である。遺物は突帯文土器深鉢（193）や弥生時代後期末の甕細片が出土する。193は口縁部外面に突帯を巡らし、突帯上に刻み目を施す。

溝22（第23図）

溝22は溝19の北東端で検出した。これの北端は調査区外になるが延びる方向を考えれば溝23に繋がる。南端は溝19に流れ込む。規模は幅50～60cm、深さ15cmを測る。掘方はほぼ垂直となる。溝の肩に沿って板材を打ち込み、その間に板を横に這わせて護岸した小溝である。この溝からの出土遺物はない。溝22は溝23から受けた水を、溝19に流し込む機能を持った溝と考えられる。

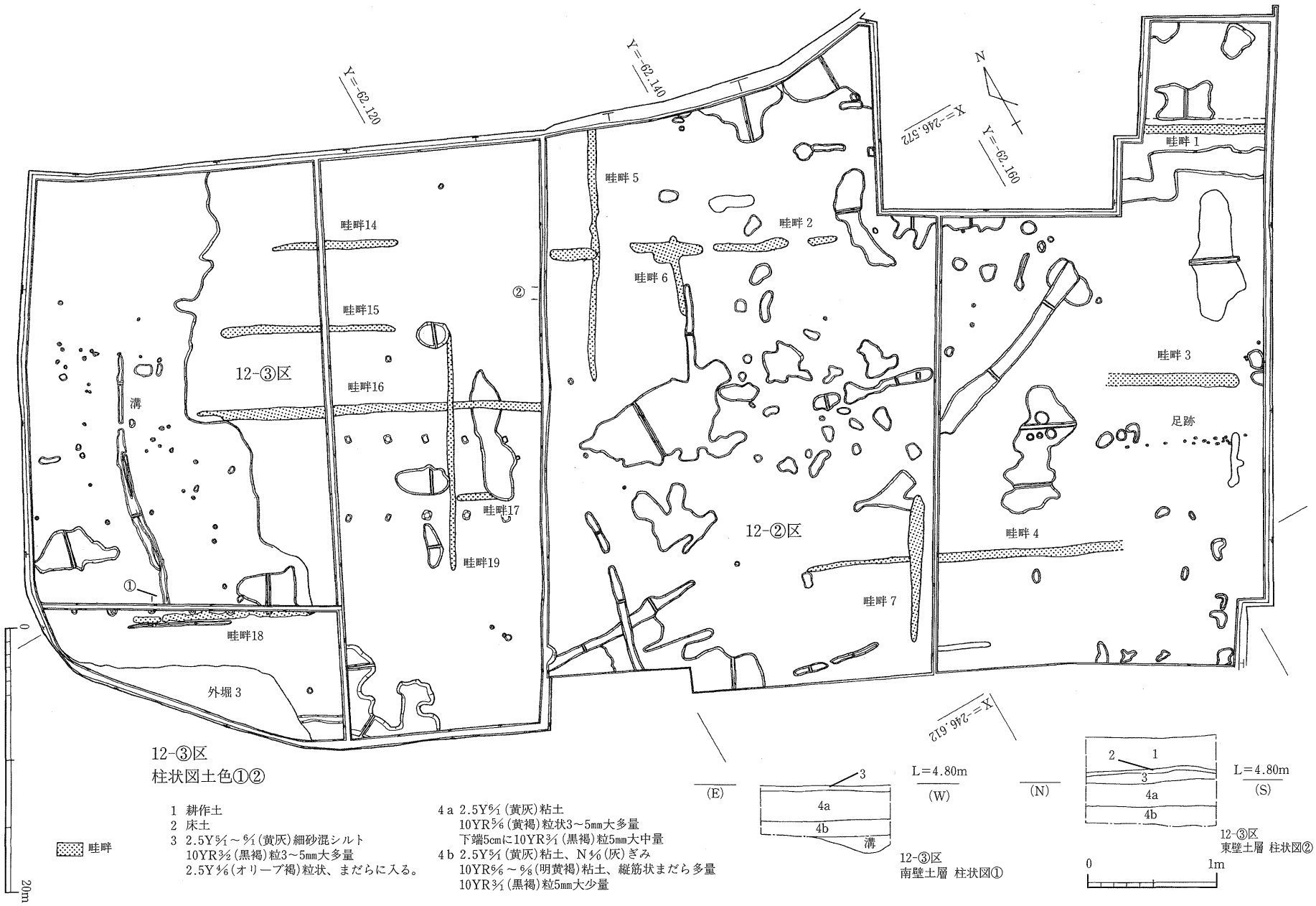
溝23

一段下がった旧河川の右岸に沿って検出した溝である。流れの方向性は溝19と酷似する。幅は0.6～1.4m、深さ16～30cmを測る。堆積土は1層で、遺物は出土しなかった。

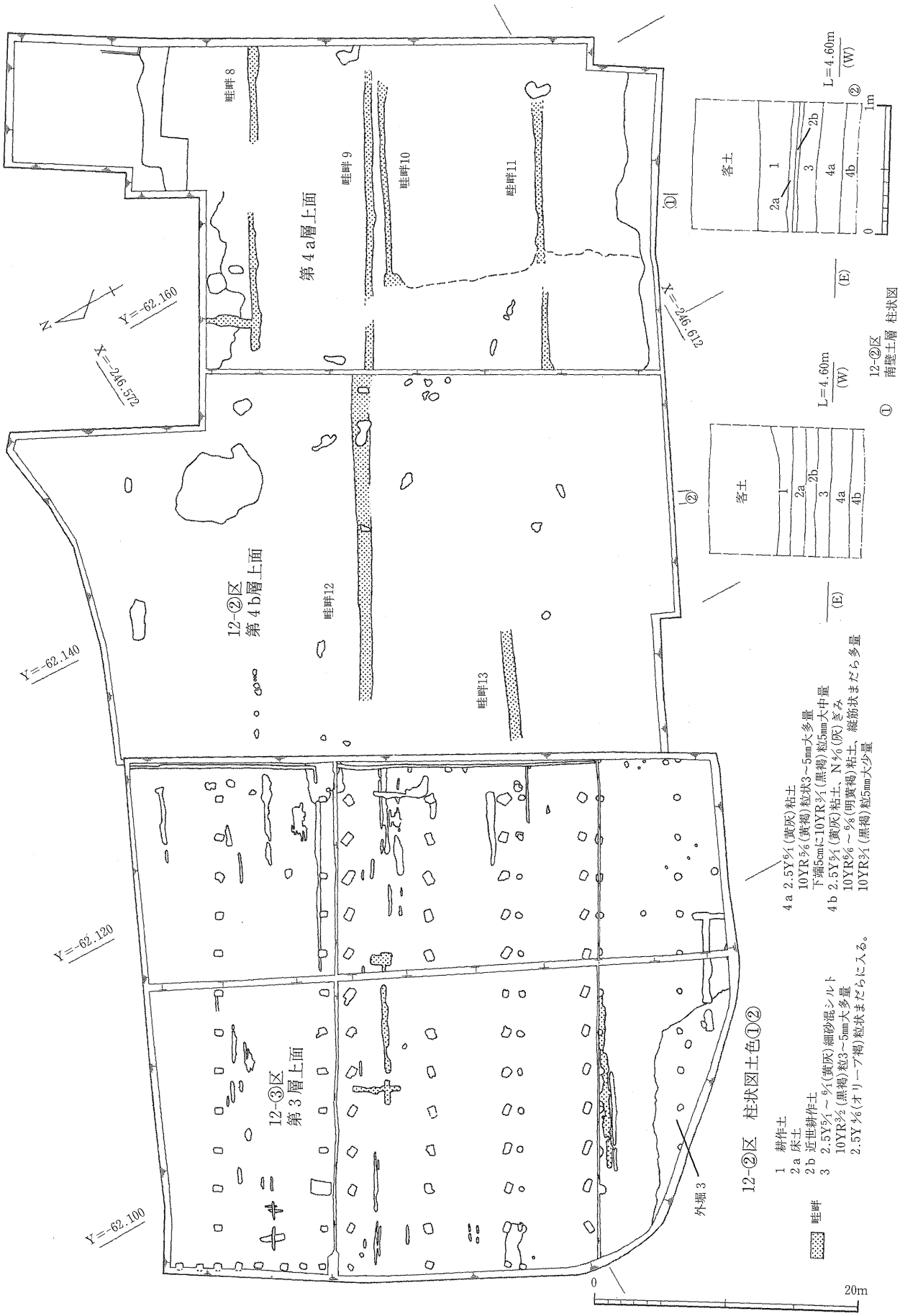
平坦部

溝19と溝23の間には平坦な面が存在する。この面に溝19に直行して5列の杭列を検出した。杭列は扁平な幅15cm前後、厚み1cm前後の板材と直径7cm前後の棒状の杭で構成され、間隔を空けずに直線的に打ち込まれている。また、周辺部には多数の板材が散乱していた状況から、当初は杭列間に、これらの板材を渡していたと考えられる。それ故これらの杭列は平坦地の空間を区切っていたと想定できる。

旧河川が埋まる過程でできた低湿地に造られた溝19、その両側の平坦地に造られた溝20・溝23、溝19に流れ込む溝22、溝19と溝23の平坦地の間に打ち込まれた杭列、これらは層位的に見ても、出土遺物から見ても同時期であり、一連の施設と考えることができる。平坦地を杭列と板材で仕切り水田と



第25図　II区 12-②・③区 第５層上面平面図・土層図



第26図　II区 12-②区 第４ａ・ｂ層上面平面図・土層図、12-③区 第３層上面平面図

考えられる。溝23は溝19から取水し、各水田用に引水し、溝22は溝23の水量を調整したのであろう。

（３）12-②区（第25・26図、PL.20）

調査区12-②区の基本層序は、12-①区とほぼ同一である。工程上、調査地の東側半分と西側半分に分けて調査を行った。

第５層上面において、中世の東西方向の水田畦畔４条、南北方向の水田畦畔３条を検出した（第25図）。東西方向の水田畦畔は、幅約40～90cm、検出延長約22～23mである。畦畔間の南北の距離は、畦畔１と畦畔３間は平均約19.2m、畦畔３と畦畔４間は平均約12.6mとなる。南北方向の水田畦畔は、幅約0.7～1.2m、検出延長約12～20mである。畦畔間の東西の距離は、畦畔５と畦畔６間は平均約7.6m、畦畔６と畦畔７間で平均約18.2mとなる。また、同一面において、不整形な多数の落ち込みと一部で人間の足跡を検出した。不整形な多数の落ち込みからの遺物は瓦器椀の細片が一片だけである。

東側半分では、第４ａ層上面において室町時代の東西方向の水田畦畔４条、南北方向の水田畦畔１条を検出した。東西方向の水田畦畔は、幅約40～70cm、検出延長約20～23mである。畦畔間の南北の距離は、畦畔８と畦畔９間は平均約8.8m、畦畔10と畦畔11間は平均約11.8mとなる。

西側半分では、第４ｂ層面において室町時代の東西方向の水田畦畔２条を検出した。水田畦畔は、幅約0.9～1.0m、検出延長約８～25mである。畦畔間の南北の距離は、畦畔12と畦畔13間は平均約11.0mとなる。

水田層の遺物量は、調査区12-①区と比較して極端に少ない状況にある。少ない中でも、特に注目されるものとして古墳時代と考えられる銅製耳環１点（448）が出土している。

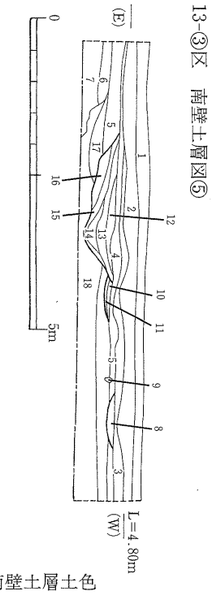
（４）12-③区（第25・26図・124図、PL.21）

第５層上面において中世の東西方向の水田畦畔５条、南北方向の水田畦畔１条を検出した。これらの水田畦畔は、厳密には「畦畔痕跡」と呼称するのが相応しい遺存状況にある。東西方向の水田畦畔は、幅約60～80cm、最長で27m検出した。畦畔間の南北の距離は、畦畔14と畦畔15間は平均約6.3m、畦畔15と畦畔16間は平均約6.3m、畦畔16と畦畔17間は平均約7.0m、畦畔17と畦畔18間は平均8.8mとなる。

また、調査区の西側で、西方に向かって微低地が続く鎌倉時代以前の落ち込み状地形を検出した。微低地の深さは、東側部分と比較して平均８～10cm低い状況にある。この微低地は、西側の調査区13-⑥区でも検出されている微低地に続くものである。遺物は、弥生土器片が一片だけ出土している。この為この微低地の時期は不明である。ほぼ微低地の落ち肩に沿って、南北方向に延びる溝状遺構を検出している。溝は、幅約30～90cm、延長約18.8m分を検出した。出土遺物は皆無の為、時期は不明である。

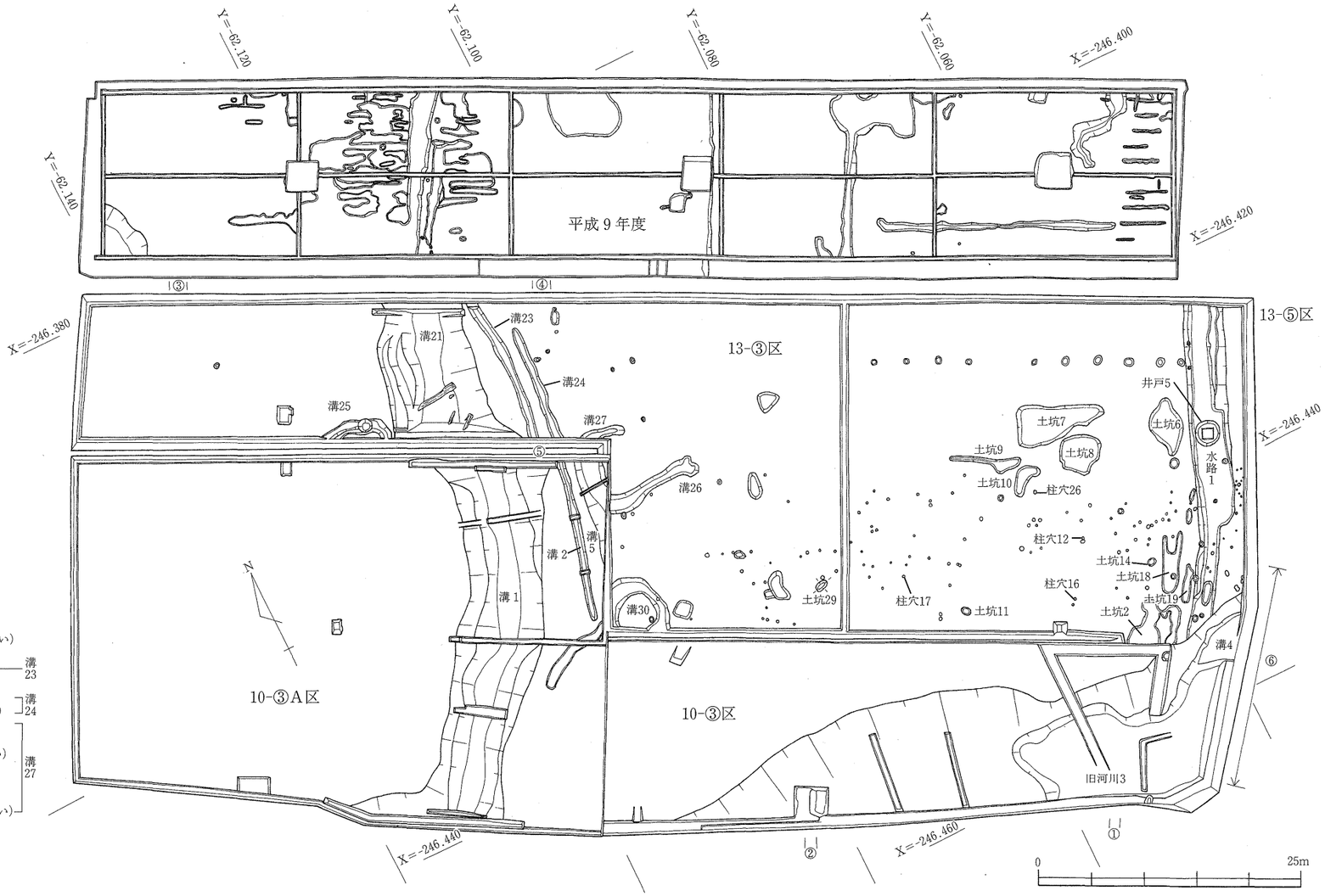
第４層上面において室町時代の水田畦畔を検出した。水田層の遺物量は調査区12-②区と同様で、調査区12-①区と比較して少ない状況にある。

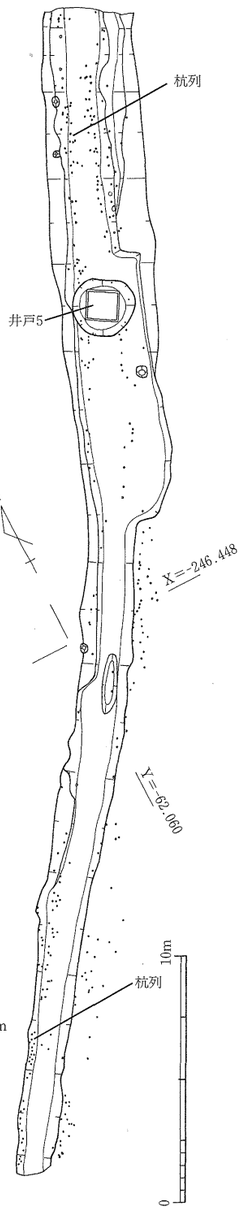
第３層上面において室町時代の堀跡を検出した。堀跡は、幅約4.5m以上、深さ約1.2m、検出延長約19mである。第３次調査（平成11年度）で検出した高田土居城の東縁部を取り囲む最も外側の外堀３の延長部である。外堀３は、当調査区の北側において深さ約1.2mから約0.4mと急激に浅くなり、本来の



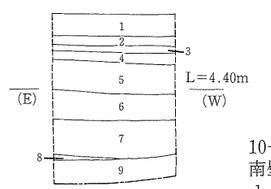
13-③区　南壁土層土色

1 耕作土
2 盛土
3 第３層
4 2.5Y5/1（黄灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱あり）
5 5Y5/1（灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱が多い）
6 5Y4/1（灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱が非常に多い）
7 7.5Y7/2（灰白）粘土
8 7.5Y6/1（灰）弱粘質土（鉄分、鉱物の沈澱あり）―― 溝23
9 N4/（灰）粘質土
10 2.5Y4/1（黄灰）粘質土 ┐溝24
11 2.5Y5/1（黄灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱が多い） ┘
12 2.5Y4/1（黄灰）粘質土（遺物包含、炭化物微量）
13 2.5Y3/1（黒）粘質土 ┐
（遺物包含、炭化物やや多い。鉄分の沈澱が多い）
14 2.5Y5/1（黄灰）粘土（遺物包含、炭化物微量。鉄分の沈澱あり）
15 2.5Y5/1（黄灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱微量）
16 2.5Y3/1（黒褐）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱やや多い） ┘溝27
17 5Y4/1（灰）粘質土（鉄分、鉱物の沈澱多い）
18 2.5Y4/1（黄灰）粘土（鉄分の沈澱多い）

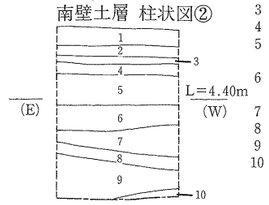




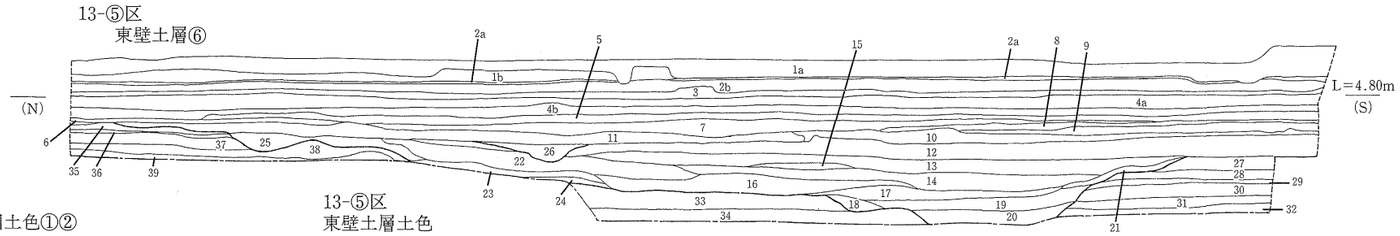
10-③区
南壁土層 柱状図①



10-③区
南壁土層 柱状図②



13-⑤区
東壁土層⑥



10-③区
南壁 柱状図土色①②

1 耕作土
2 2.5Y6/6（明黄褐）砂質土
3 10YR5/1（褐灰）砂質土、10YR4/4（褐）粒状に入る
4 10YR5/1（褐灰）シルト、10YR4/4（褐）粒状に入る
5 10YR5/1（褐灰）シルト、10YR2/2（黒褐）粒状に入る
10YR5/6（黄褐）細柱状に入る
6 5Y5/1（褐灰）シルト、10YR2/2（黒褐）粒状に入る ┐旧河川第１層
10YR5/6（黄褐）細柱状に入る ┘
7 10YR4/1（褐灰）粘土（骨含む） ―旧河川第２層
8 10YR5/1（褐灰）粘土（炭、木片、骨含む）
9 10YR5/1（褐灰）粘土（炭、骨含む）
10 5GY5/1（オリーブ灰）粘土（中砂少量含む）

0　2m

13-⑤区
東壁土層土色

1a 耕作土
1b 盛土
2a 床土
2b 近世耕作土
3 5Y4/1（灰）砂質土（鉄分の沈澱多い）
4a 2.5Y5/1（黄灰）粘土と10YR5/4（にぶい黄褐）混〔10YR5/2（黒褐）3～5mm粒少量含む〕
4b 10YR5/6（明黄褐）～10YR7/6（黄褐）〔10YR5/2（黒褐）5mm粒少量含む〕
5 2.5Y5/1（黄灰）粘土に10YR5/4（にぶい黄褐）混
6 10YR5/6（明黄褐）～7.5YR5/6（橙）
7 2.5Y3/1（黒褐）砂質土に細砂混（層の上部に鉄分の沈澱あり）
8 2.5Y4/1（黄灰）粘質土（1cm以下の褐色の礫含む）
9 2.5Y4/1（黄灰）粘土
10 2.5Y3/1（黄灰）粘土（炭化物、木片わずかに含む）
11 2.5Y3/1（黄灰）粘質土に細砂混（鉄分の沈澱、鉱物が全体にみられる）
12 7.5YR3/1（灰）砂質土（炭化物、鉱物含む）
13 7.5YR4/1（灰）粘土に2.5Y6/4（にぶい黄）混（炭化物、木片含む）
14 5Y4/1（灰）粘土（木片多量に含む）
15 5Y4/1（灰）砂質土に細砂混（鉱物、木片を多く含む）
16 5Y4/1（灰）粘土（木片を多く含む）層の下方は細砂混、2.5Y5/2（灰白）が全体に混じる
17 5Y4/1（灰）粘土と粗砂の互層（木片を多量に含む）
旧河川３
18 5Y4/1（灰）粘土（2cm大の礫がブロック状に入る）
19 5Y4/1（灰）粘土と細砂の互層（木片を多量に含み、5mm以下の粗砂礫多い）
20 5Y4/1（灰）粘土と細砂の互層（木片は微量）
21 7.5Y4/1（灰）粘質土に細砂混
22 5Y4/1（灰）粘質土に細砂混（木片含む）
23 5Y4/1（灰）粘質土
24 5Y4/1（灰）砂質土
25 5Y4/1（灰）砂質土（鉄分の沈澱あり）
旧河川３
26 5Y4/1（灰）粘土に5Y5/2（灰オリーブ）をまだらに含む ┐溝４
（鉱物多い。木片含む） ┘
27 7.5Y4/1（灰）粘土
28 7.5Y4/1（灰）粘土
29 5Y3/1（オリーブ黒）粘質土（木クズが帯状に堆積する）
30 7.5Y4/1（灰）粘質土（木片、鉱物を含む）
31 5Y3/1（オリーブ黒）粘質土、細砂混じり（木片多く含む）
32 5Y3/1（オリーブ黒）粘質土と細砂の互層
33 7.5Y4/1（灰）粘土（木片、鉱物とともに微量に含む）
34 7.5Y4/1（灰）粘土、細砂混じり
35 5Y4/1（灰）粘質土（鉄分の沈澱あり）
36 5Y3/1（オリーブ黒）粘質土
37 2.5Y3/1（黒褐）粘土
38 7.5Y5/1（灰）粘土、部分的に細砂が混じる
39 10Y5/1（灰）粘土

0　5m

第27図　II区 平成９年度調査区・10-③・③A区・13-③・⑤区遺構平面図・土層図

堀の機能とは別の機能を呈する状況になる。堀の埋土の最上層には近世の水田耕作土が落ち込み、最も東側に幅約1.6m、深さ30～40cmの用水路の機能をもつと考えられる近世の溝が取り付く。堆積埋土から見て、外堀3および近世の溝は、人為的に埋められたものである。この外堀3の延長部から一つ内側の外堀2に取水すると見られる落ちも検出した。

調査区12-②･③区は、大きくは縄文時代中期から弥生時代に断続的に続く集落域（調査区12-④区）の北側の微低地に当るが、面としての対応、及び堆積層の対応は把握できなかった。

また、第3層上面において近世の東西方向の水田畦畔と素掘小溝群（鋤溝）も検出している。室町時代の外堀跡の詳細に関しては、一括して13-④⑦区の高田土居城の項で記述することとする。

（5）10-③区（第27・28・33～37図、PL.83・85～88）

北側には13-③区が、東には10-②区が位置する。

10-②で検出した旧河川の東側肩部を検出した。旧河川の東側肩部には一部杭が打ち込まれている。旧河川が埋没する過程で堆積した第8層からは、多くの縄文時代晩期から弥生時代前期の土器・石器が出土した。第8層は黒褐色粘土の単一層で、北側の肩部に堆積し、南方向に落ち込んでいる。出土遺物はコンテナにして20箱である。土器は、突帯文土器、弥生土器がある。在地で作られた土器は胎土に含まれる砂粒がチャートや頁岩質で、土器の色調も白色か黄色を呈するものが多く、特徴的な胎土・混和剤を含む土器は他地域から搬入されたものであると判別できる。結晶片岩粒を含むものは和歌山県北部地域（あるいは阿波）の土器、角閃石を含み茶褐色を呈するのが生駒西麓地域の土器であり、この他、長石・石英粒を多く含み赤褐色を呈する土器についても他地域から搬入されたものであると考えられる。また、東日本から搬入された土器は文様や形態で在地のものと区別することが可能であるが、地域までは限定できない。ただ一様に胎土に長石・石英類の細かい砂粒を多く含み、色調もくすんだものであることからも、一定の地域から搬入された可能性も考えられる。和歌山県北部から搬入された土器と考えられるものには、281・326～328、343～345・337・350・360・361・365・375・379が、生駒西麓地域の土器には355～357、374が、東日本の土器には354・358・366・368がある。このほか、323・352・362・372も地域は明らかでないが胎土や色調から搬入品と考えることができる。器表面に二段の刻み目をもつ鷹島式土器深鉢（319）なども混入する。

突帯文土器など縄文系土器の器種構成は、深鉢、鉢、壺であるが、ほとんどを深鉢が占める。小破片の場合、壺･鉢の抽出は困難であり、明らかに判別できるものは壺（362）1点と鉢（361･366･368）3点で、これらはすべて搬入品である。

深鉢には口縁端部外面のみに突帯を巡らした一条突帯のものと、口縁端部外面と体部中位の二箇所に突帯を巡らした二条突帯のものがあり、後者が主を占める。また、数は少ないが各部位に二条ずつの突帯を巡らす328・332・344があり、これらは搬入品である。

大きさは大まかに口径が30cm以上の大型、25cm以上の中型、25cm以下の小型の3つに分けることができ、口縁部から体部中位まで明らかな個体から判断すれば大型のものについては二条突帯、小型は一条突帯に限られ、中型には一条突帯のものと二条突帯のものが存在する。大型・中型・小型に関わ

らず、外面にススが付着するものが多く、用途によって使い分けられていないことが分る。

体部から口縁部にかけては、ほぼ直線的に立ち上がるものと緩やかに外反するものがあり、後者の方が多い。この部位の外面調整は、粗い条痕状のケズリによるものが主を占める

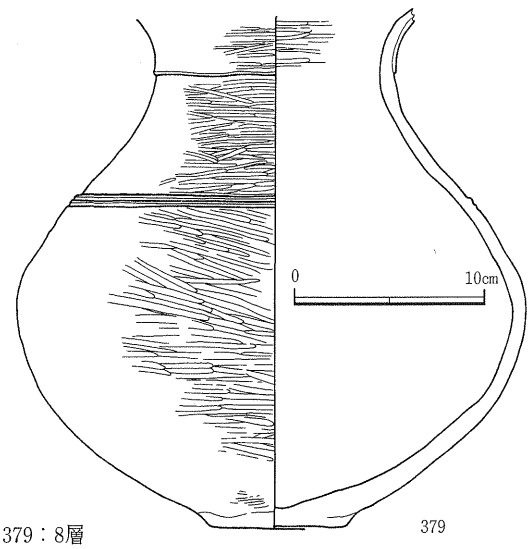
底部は尖底が３個体あり、他は平底で多数を占める。ただ、平底のものについても底部径が小さく、371･373などのように丸みをおびるものがあるなど、自立するか疑わしいものも存在する。尖底の321の胎土は、大型の286・287・294と同じであり、また、322も大型品であると考えられ、尖底は大型品の底部であると推定することができる。

口縁部の突帯は端部に接して貼付するものが主流を占めるが、305・351・352などのように端部よりやや下がった位置に巡らすタイプもわずかに認められる。端部に接して突帯を巡らすタイプでは、断面が三角形を呈するものと、突帯上半を押さえることによって幅広で垂れ下がったものとがあり、その中間的なタイプも認められる。刻みについては、突帯の断面が三角形を呈するタイプは突帯上のみを大きくＤ字状に刻むものがほとんどである。突帯が幅広のタイプでは突帯上のみを刻むものは客体的で、口縁端部と突帯上の両方を刻むものが多く、口縁端部のみを刻むもの、刻みを施さないものなども認められる。また、刻みの形態も、小さいＤ字やＶ字を呈するものが主を占めている。

354・358は東海地方から搬入された馬見塚式の深鉢で、口縁部から下がった位置に幅広の突帯を巡らし、刻み目は体部の条痕と同一の原体で大きく施す。355～357は生駒西麓地域から搬入された深鉢で、突帯は口縁端部に接して施す。355・356は刻み目が大きいが、おおむね長原式の範疇で押さえることができると考えられる。このほか、特異な突帯文土器として360がある。体部の破片で形態は二条突帯の深鉢であると考えられるが、二条の体部突帯の間に竹管状工具により刺突をおこなっている。結晶片岩を含み和歌山県北部地域からの搬入品と考えられる。

鉢のうち361は椀状を呈し、口縁端部に接して断面三角形の突帯を巡らすものである。366･368は東日本から搬入された浮線文土器の鉢である。

壺は口縁端部外面に細かい刻み目を施した二条の突帯を巡らしている。胎土から搬入品と考えられる。



第28図　Ⅱ区 10-③区 旧河川出土遺物実測図

弥生土器には壺（370・379）、甕（364・365）がある。370は頸体部の境に削り出し突帯を巡らし、その下部に重弧文を配しており、表面には黒色物を塗布している。379は口頸部と頸体部の境を段によって区画する。頸体部の段下には二条の沈線を巡らす。表面全体にヘラミガキ調整を施す。甕364・365は口縁端部に刻み目を施し、頸部には二条の沈線を巡らす。365・379は和歌山県北部地域からの搬入品である。

石器には石棒（381・382）、砂岩製の礫石器（380・383～388）がある。石棒はともに有頭形で、下部を欠損

する。断面は楕円形を呈する。材質は381が酸性凝灰岩、382は砂質片岩である。結晶片岩などの石材が多用される中で、381は近場で産する石を使用している。礫石器には石皿（380）、敲石（383・385・387）、敲石＋磨石（384・388）、台石（386）がある。石皿は板状で、平坦面の両側が使用されている。

（６）13-⑩区（第22・24図、PL.79）

Ｉ区とII区に挟まれた現状の南北用水路と両側の畦畔部分である。地籍調査の成果では、「オオビエ」に該当する用水路部分である。調査面積は、約411㎡である。基本層序は、現在の畦畔部分の補修に伴う撹拌が著しい状況にあるが、第２層以下は両側の調査区と同一である。

第５層上面では畦畔の痕跡を２条検出した。幅30～70cm、検出した長さは83mである。畦畔は近現代水路の両脇にやや東に偏って存在し、マンガン質の鉱物が沈着する度合いの異なることから、畦畔が存在したことが認識できる。水田畦畔の盛上りは、一部範囲によって、平面的な検出が可能な場合もあるが、大半は検出し難い場合が多く、痕跡として表出されるものである。辛うじて、断面土層において確認できる場合が多い。同耕作土としては、畦畔痕跡の両外側にみられる第４層にマンガン及び鉄分質の鉱物が沈着した第４′層、第４″層が対応する。

第３層上面において、近世に遡る南北方向の水路を検出した。殆どが現在の水路に重複して、調査区中央部を縦断し、幅2.5～3.0m、検出長83mである。調査区南半分の水路西側基底部には、石積みの護岸が１～２段良好に遺存するが、東側基底部にはそれに代わって護岸の機能を持つ杭列及び杭列に直交する胴木が一部見られるのみである。石積みは、平均約30～40cmの大振りの砂岩を割石状に整形し、水路内側の面を揃えて積まれている。杭は、径数cm前後の自然木の丸木を利用し、複数列に並べて打ち込んでいる状況にある。同水路は最近まで隣接する水田の取水・排水路として機能しており、近世陶磁器が出土したがそれ以前の遺物は見られなかった。

（７）13-③・⑤区（第24・27・29図、PL.56・57）

発掘調査は工程の都合により、東半部と西半部に２分割して実施した。調査区は縄文時代中期から近世にかけての多数の遺構が密集する徳蔵地区遺跡が営まれた微高地北側の低地部分に位置する。調査区は北側が平成９年度調査区、南側が10-③区、東側が10-②区と接する範囲にあたる。

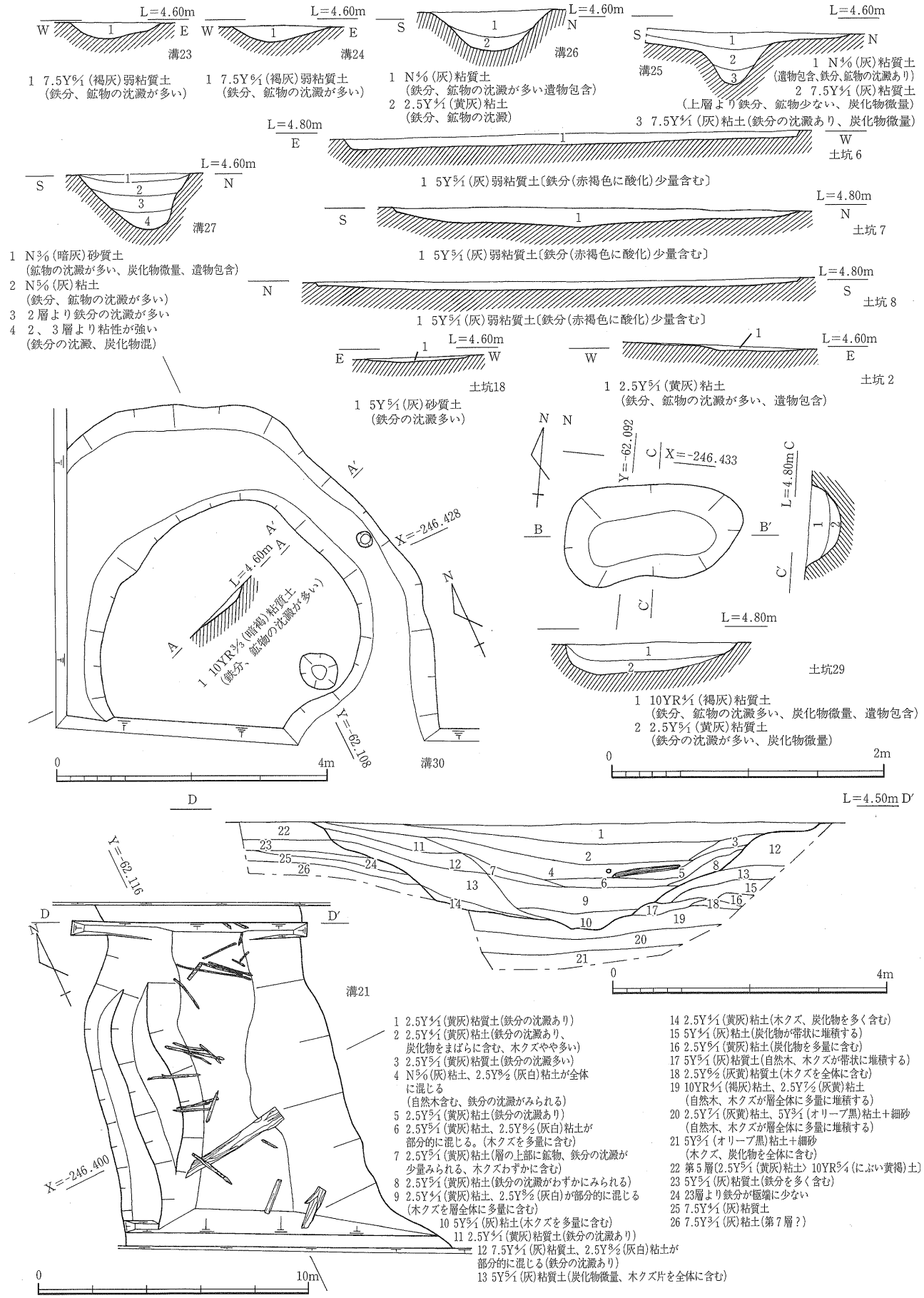
基本層序は、第１層が現代の水田耕作土、第２層が現代の水田床土及び近世水田耕作土、第３層が中世水田耕作土、第４層が中世水田耕作土、第５層が中世以前の堆積層である。

第５層上面において縄文時代晩期から近世にかけての遺構を検出した。調査区東半部で検出した遺構は、水路１、旧河川３、溝４、土坑、柱穴などである。

水路１（第31図、PL.83・84）

調査区東端の現在の農業用水路下において検出され、北々東から南々西に向かって延びる。幅3.2m、深さ40cmを測る。溝の両肩部には直径数cmの杭が多数打ち込まれている。水路中からは近代の井戸と考えられる遺構も検出した。

中世から近代にかけての土師器皿、土錘、国産陶器（唐津焼・備前焼・瀬戸美濃）、磁器（染付）などの遺物が出土した。



第29図　II区 13-③・⑤区 溝21・30、土坑29 平面図・土層図、溝23～27・土坑２・６～８・18 土層図

221は京焼系の碗でやや高い高台をもち、内外面には淡い飴色の釉薬が施される。223は瀬戸美濃天目茶碗で、低い削り出し高台で、内外面には褐釉がかかる。224は備前の擂鉢で、内面には14条からなる細かい摺り目がみられる。225～227は近世後期の伊万里の碗と皿である。

井戸からは唐津の碗（228）や、瀬戸美濃の皿（229）、煙管（231）などが出土した。

旧河川3（第31図、PL.57）

調査区の南東隅に位置する。一方の肩部を確認したのみで、幅等の規模は不明である。平成10年度調査において検出した、幅20m以上を測り北東から南西に向かって流れる旧河川の続きと考えられる。埋土は上層・中層・下層に分けられる。上層は黄灰色粘質土、中層は灰色砂質土及び粘土（木屑混じる）、下層は灰色粘土及び細砂（木屑多量に混じる）である。遺物として、上層からは弥生時代後期の甕・高坏、古墳時代の須恵器が出土し、中層・下層からは弥生時代前期の壺・甕、縄文時代晩期の突帯文土器・浮線文土器、果実の種が出土した。

232は浮線網状文を口縁下にもつ鉢ではないかと推定される。233～237は縄文時代晩期の突帯文を施す深鉢である。突帯部と口縁端部に浅いD字状あるいはV字状の刻み目が施されている。233は外面の色調が淡明黄橙色で、他の土器と異なっている。234と236の外面には煤の付着が顕著にみられる。238と239は弥生前期の甕で、口縁端部にD字状の刻み目を施す。240は弥生時代前期の広口壺で、内外面には密なミガキがみられる。241と242は弥生時代後期の壺と鉢の底部である。

溝4（PL.57）

旧河川3の上層を掘削した段階で、旧河川3と流れの方向を等しくする溝を検出した。溝は調査区南東部を東から西に向かって延び、西側で南に流れの方向を変え、調査区外へと続いていくものと推定される。幅約1.5m、検出延長8m、深さ25cmを測る。埋土は灰色粘土（木屑混じる）である。遺物は出土していないが、旧河川3の埋土との関係から弥生時代前期以降後期までの間と考えられる。

その他の遺構（第29図）

出土遺物が微量のため、時期の特定が困難な土坑や柱穴状の窪みを検出した。土坑2・6・7・8・9・10・11・14・18・19は平面が不整形を呈し、深さは5～14cmを測る。埋土は土坑2が黄灰色粘土、土坑6・7・8・9・10が灰色弱粘質土、土坑11が灰黄色弱粘質土、土坑14・19が黄灰色粘質土、土坑18が灰色砂質土である。土坑2から古墳時代の須恵器・中世の土師器皿、土坑9から弥生土器、土坑11から縄文土器・弥生土器・サヌカイトの剥片、土坑14から縄文時代の突帯文土器が出土した。また柱穴12・15・16・17・20からは縄文土器・弥生土器が出土した。

調査区東半部の西端部において、第5層以下の状況を確認するために調査を実施した。第7層上面においては遺構・遺物ともに確認できなかった。第8層上面において落ち込み状の遺構を検出した。平面は楕円形もしくは不定形を呈し、深さ4～10cmを測る。遺物は出土していない。第9層上面においては遺構・遺物ともに確認できなかった。

調査区西半部で検出した遺構は、溝、土坑、柱穴状の窪みである。

溝21（第29・31・32・37図、PL.59・84・85）

調査区西側中央部に位置し、北から南に向かって延びる溝である。10-③Ａ区の溝１へと続くものと考えられる。幅９ｍ、検出延長13m、深さ1.6mを測る。埋土は上層が黄灰色粘質土、中層が黄灰色粘土（木屑混じる）、下層が灰色粘土（木屑・炭化物の堆積多い）である。遺物の取り上げは上層・中層・下層に分けて行なった。

遺物は、上層からは弥生土器の壺・甕・高杯・鉢や縄文土器の小破片が出土した。中・下層からは、弥生土器の壺・甕・高杯・鉢や打製石斧（390・391）が出土した。また、先端を尖らせた木杭や加工痕を持つ木材も多数出土した。256～258は壺である。256は広口壺で口縁部が大きく外反する。257は頸部下に一条の沈線を巡らす。258は底部で指押え痕が顕著である。259～265・269は甕である。259・260は体部から頸部にかけての破片でタタキ目を施し、体部は長い。261～264・269は頸部が「く」の字型に屈曲する。265は底部である。250～253は鉢である。251は完形で椀型である。252は口縁部が屈曲する。254・255は高杯である。266～268は大型の高杯口縁部と考えられる。胎土・色調から搬入品と考えられ、これらは同一個体の可能性がある。内外面にミガキ調整が施される。甕（259～265）は、屈曲する口縁部に卵形の体部をつけ、底部は平底である。体部は分割整形技法により作られ、体部外面のタタキ調整は右上がりか水平である。内面はハケ調整されている。口縁端部を平坦に作る珍しいタイプ（261）もある。262は、口縁端部に刻み目を施す。259・260は、内外面に煤の付着が見られる。高杯は、小型で、杯部（254）と脚部（255）がある。杯部外面にはミガキ調整が施され、脚柱部内面にはしぼり痕がある。鉢（251・252）は完形で、椀状のもの（251）と屈曲する口縁部をもつもの（252）や、底部から体部にかけて直線的に延びるもの（253）もある。

溝23（第29図、PL.58）

溝21の東側に位置し、南北方向に延びる。幅70cm、検出延長14m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色粘質土である。土師器の細片が出土した。

溝24（第29図、PL.58）

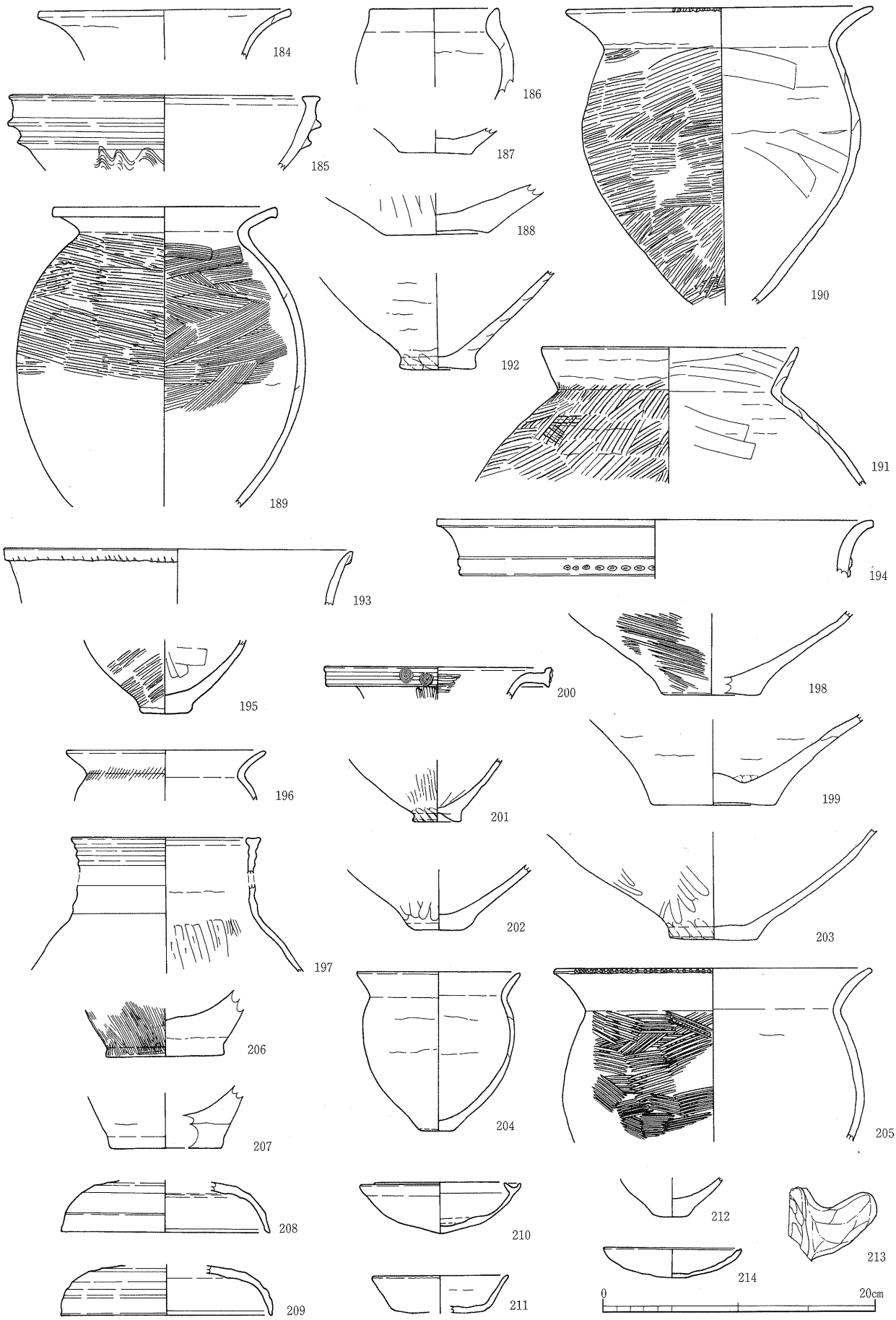
溝23の東側に位置し、溝23に平行して南北方向に延び、10-③Ａ区の溝２へと続いているものと考えられる。幅74cm、検出延長11m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色粘質土である。弥生時代後期末の高杯などが出土した。

溝25（第29図、PL.58）

溝21の西側に位置し、東西方向に弧状に延びる溝であり、両端は調査区外へと続いている。幅1.48ｍ、検出延長６ｍ、深さ38cmを測る。埋土は灰色粘質土及び灰色粘土である。弥生時代後期末の高杯などが出土した。

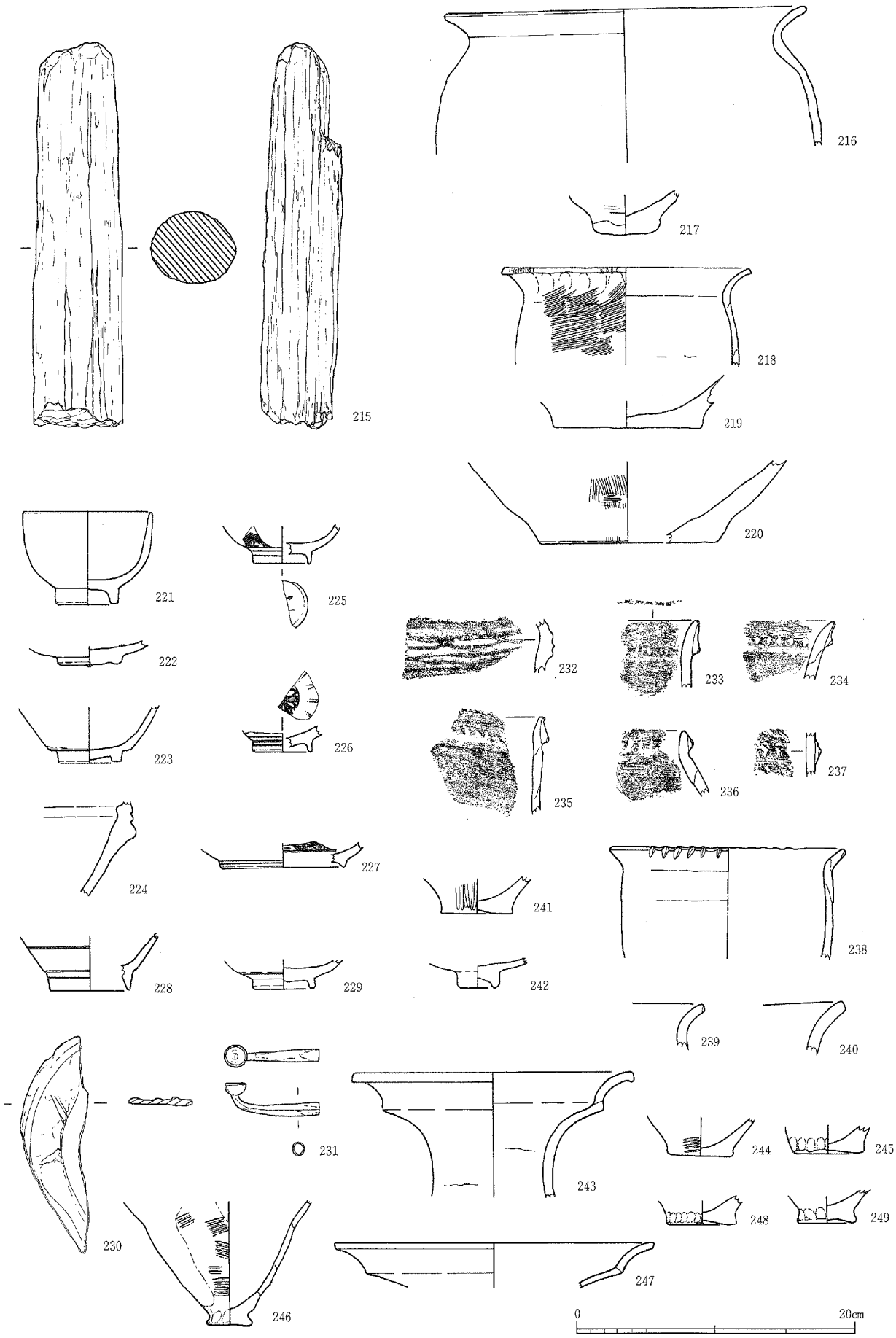
溝26（第29・32図、PL.58・85）

東西方向に延びる溝であり、西側は10-③Ａ区の溝５に続く。規模は幅90cm、検出延長９ｍ、深さ28cmを測る。埋土は灰色粘質土及び黄灰色粘土である。出土遺物には、弥生土器の壺底部（274）、甕（275～279）・高杯（270～273）などがある。高杯は脚部（270・271・273）と完形品（272）とがある。裾部にはやや大きな透し孔が施されている。脚柱部内面には絞り痕がみられる。甕（278）は、外面に



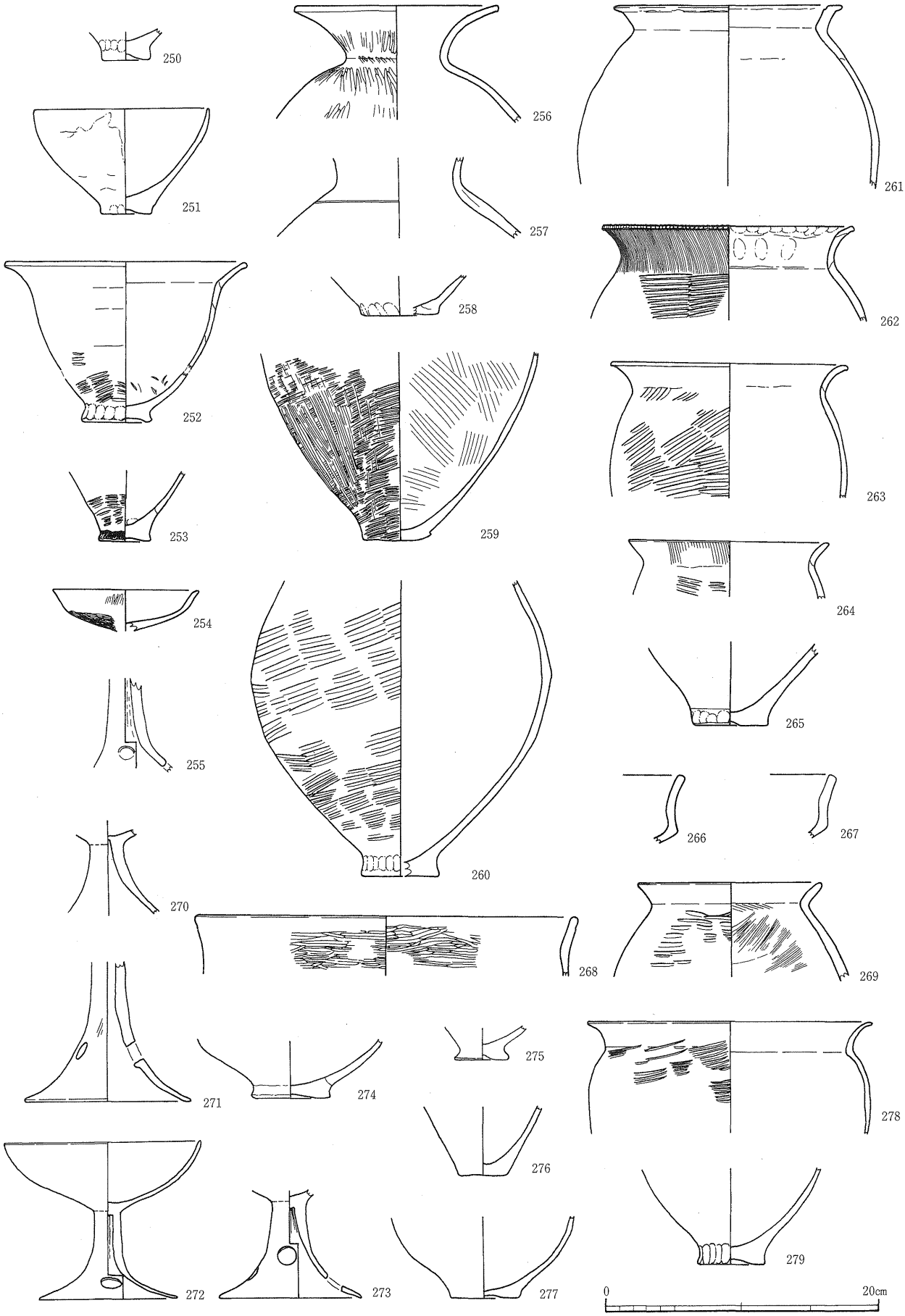
184～192：溝19、193：溝20、194：溝９、195・196：溝１、197：溝８、198・199：溝11、200～205：旧河川第２層、206：土坑６、207：土坑13、208～214：旧河川第１層

第30図　II区 10-②区 遺構出土遺物実測図



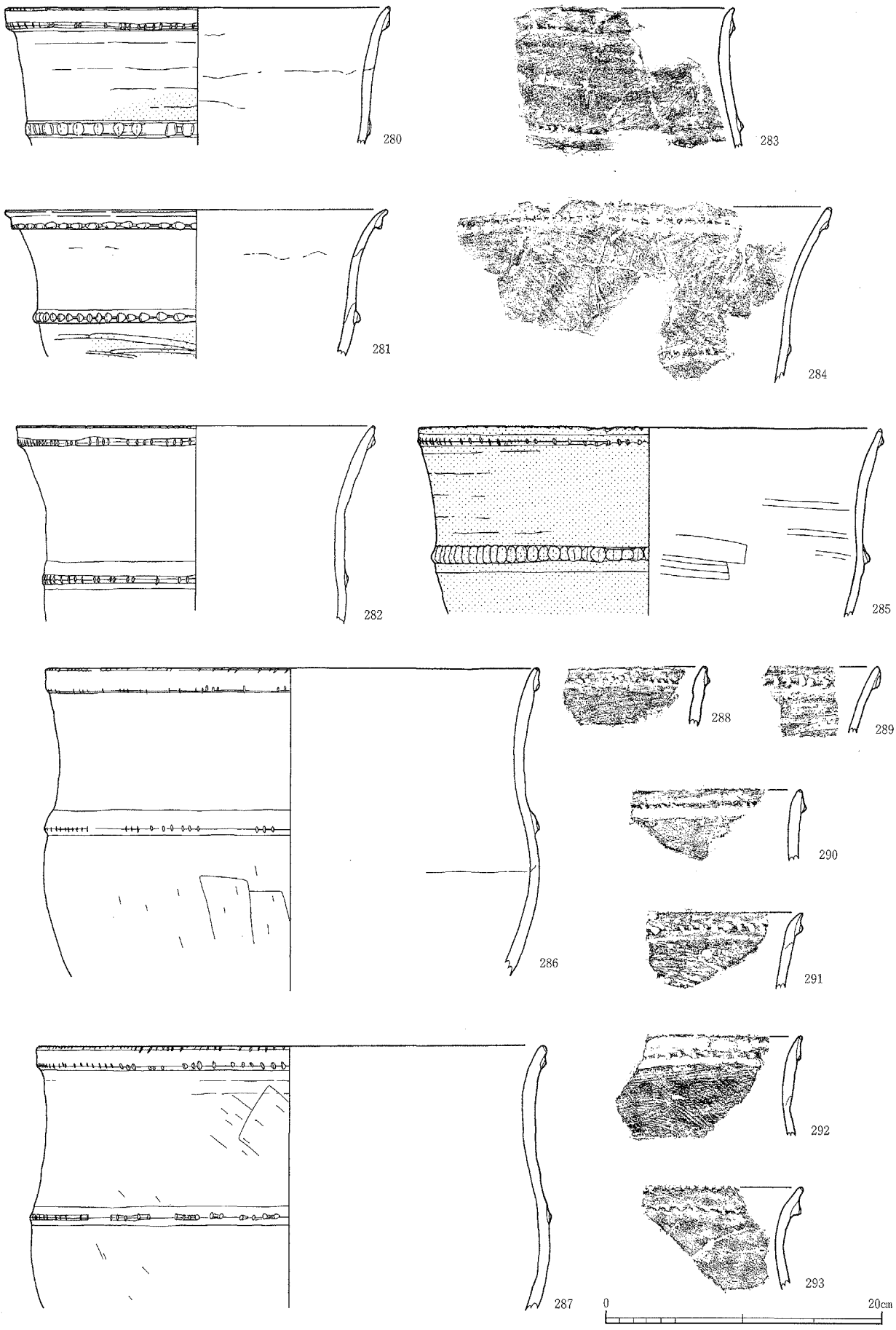
215：10-②区溝９、216～218：11-②-２区溝19、219・220：11-②-２区旧河川第４層、221～227：13-③・⑤区水路一括、228～231：13-③・⑤区井戸５、232～242：13-③・⑤区旧河川第１層・第３層・第４層、243～249：13-③・⑤区土坑27

第31図　II区 10-②区・11-②２区・13-③・⑤区 遺構出土遺物実測図



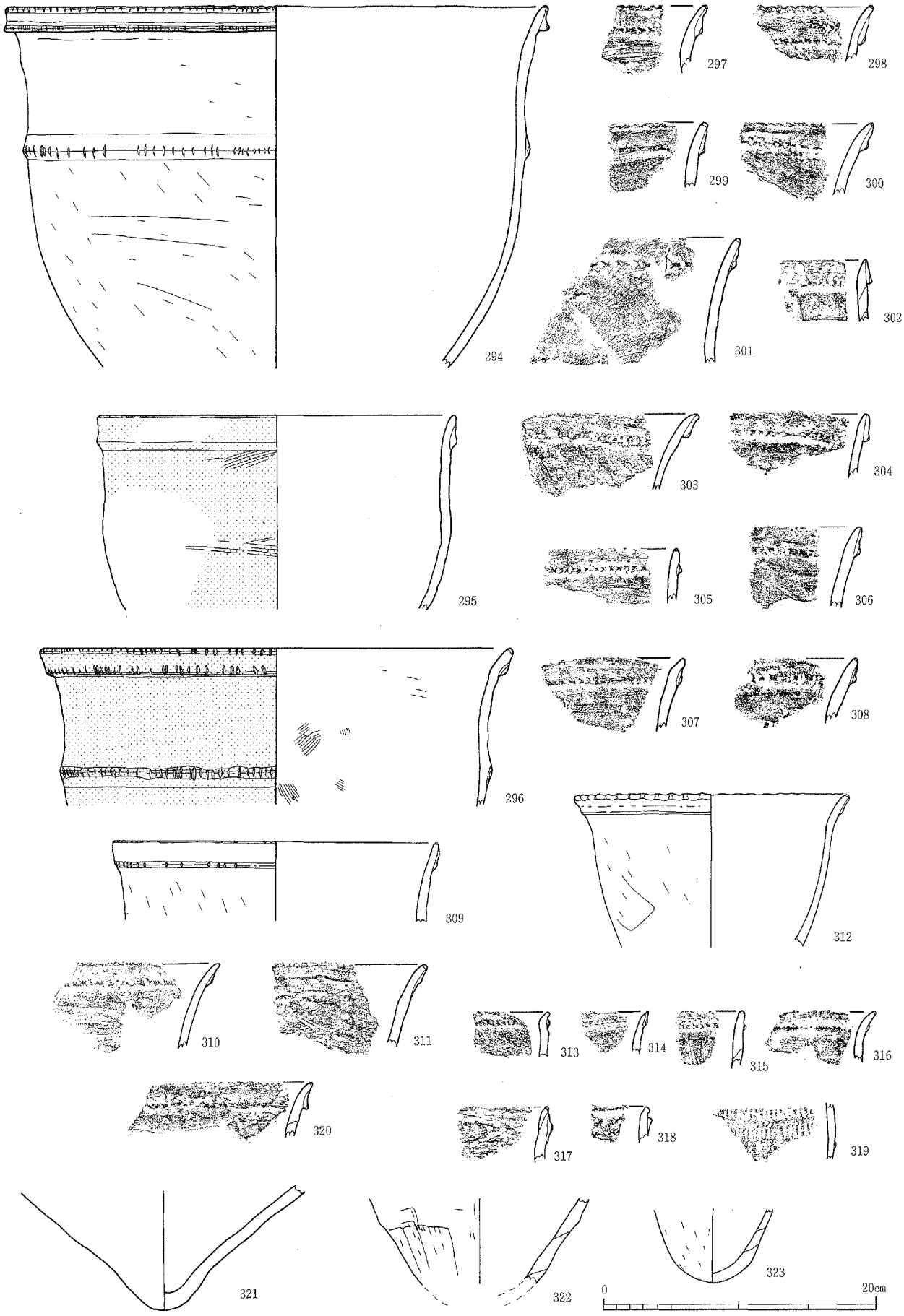
250～269：溝21、270～279：溝26

第32図　II区 13-③・⑤区 遺構出土遺物実測図



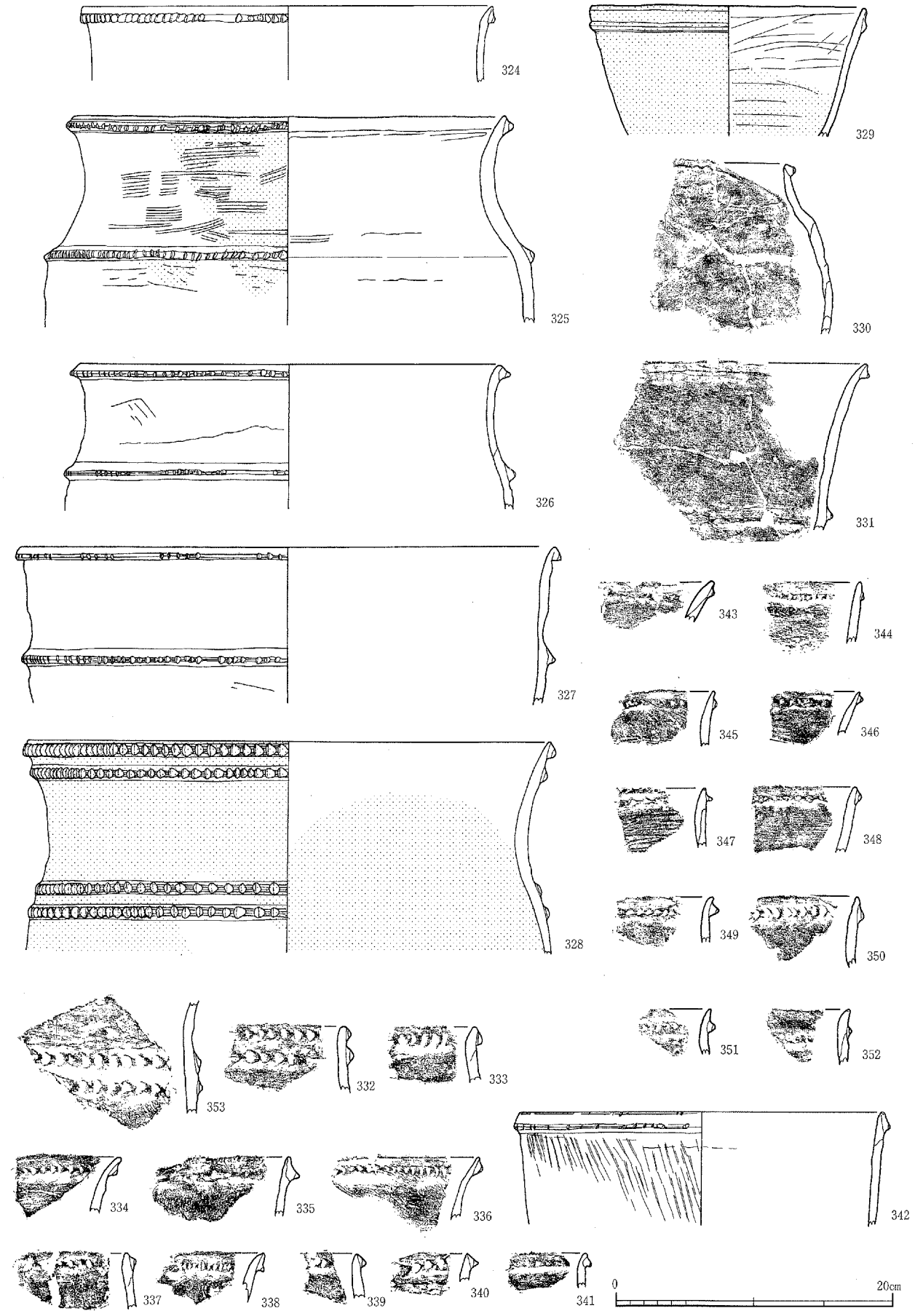
280～293：第8層

第33図　II区 10-③区 旧河川出土遺物実測図



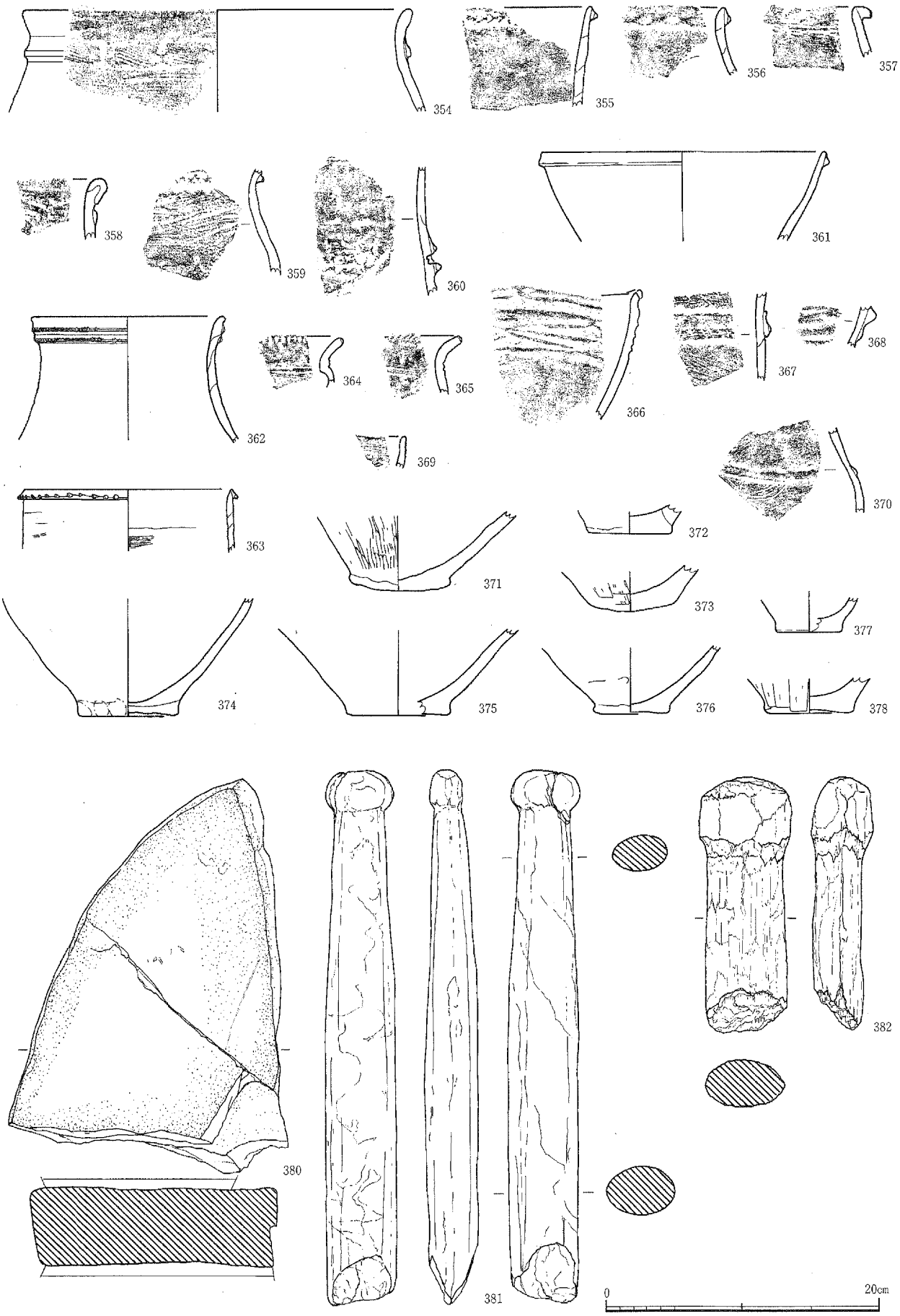
294～323：第８層

第34図　II区 10-③区 旧河川出土遺物実測図



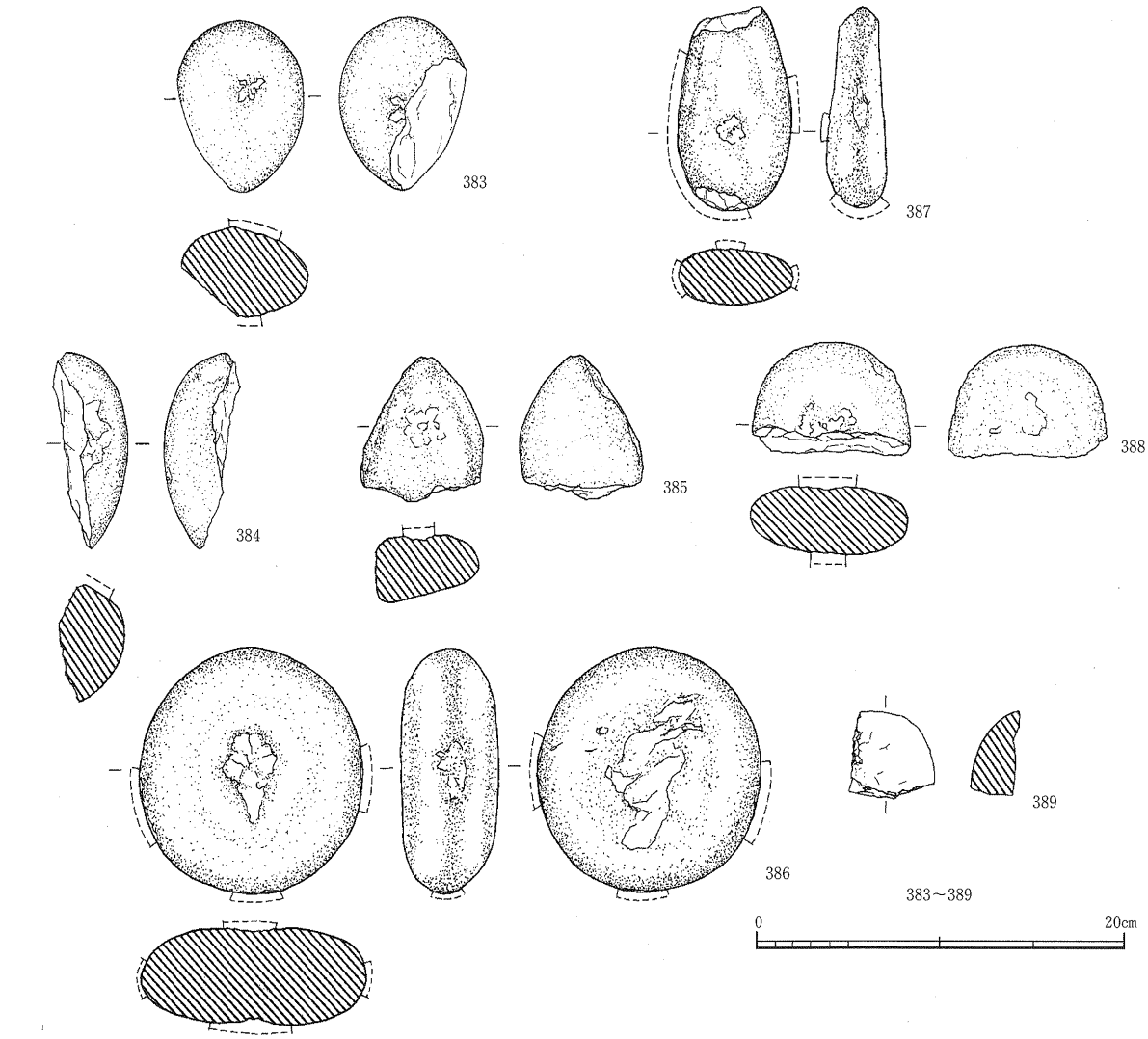
324～353：第8層

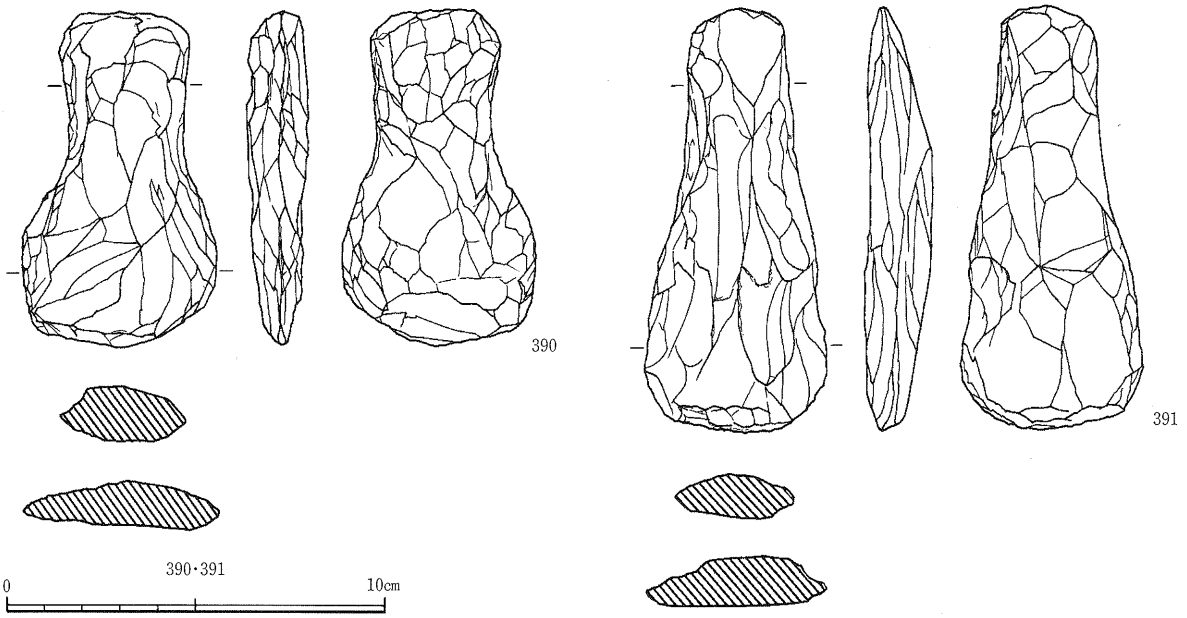
第35図　II区 10-③区 旧河川出土遺物実測図



354～378・380～382：第８層

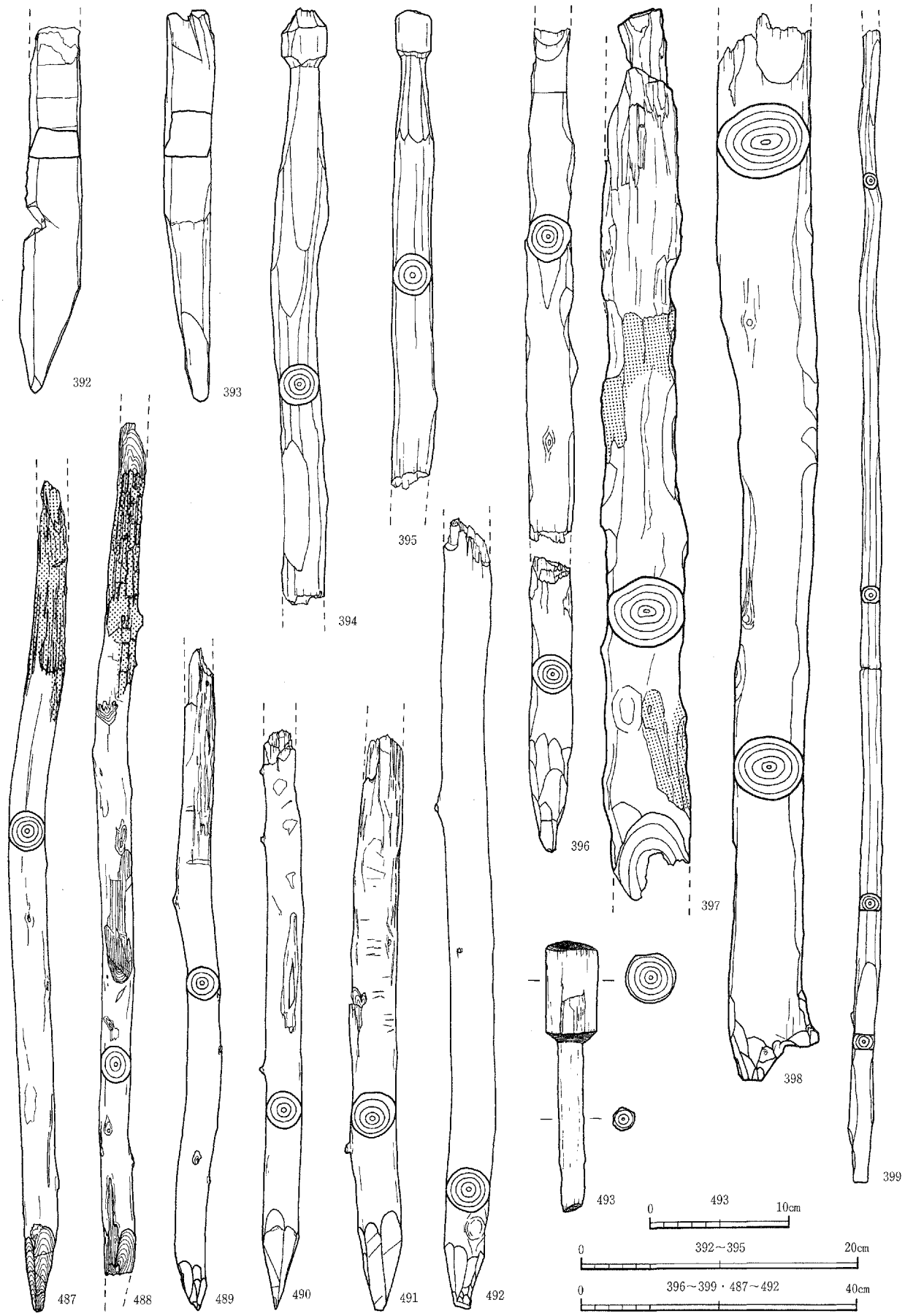
第36図　II区 10-③区 旧河川出土遺物・石器実測図





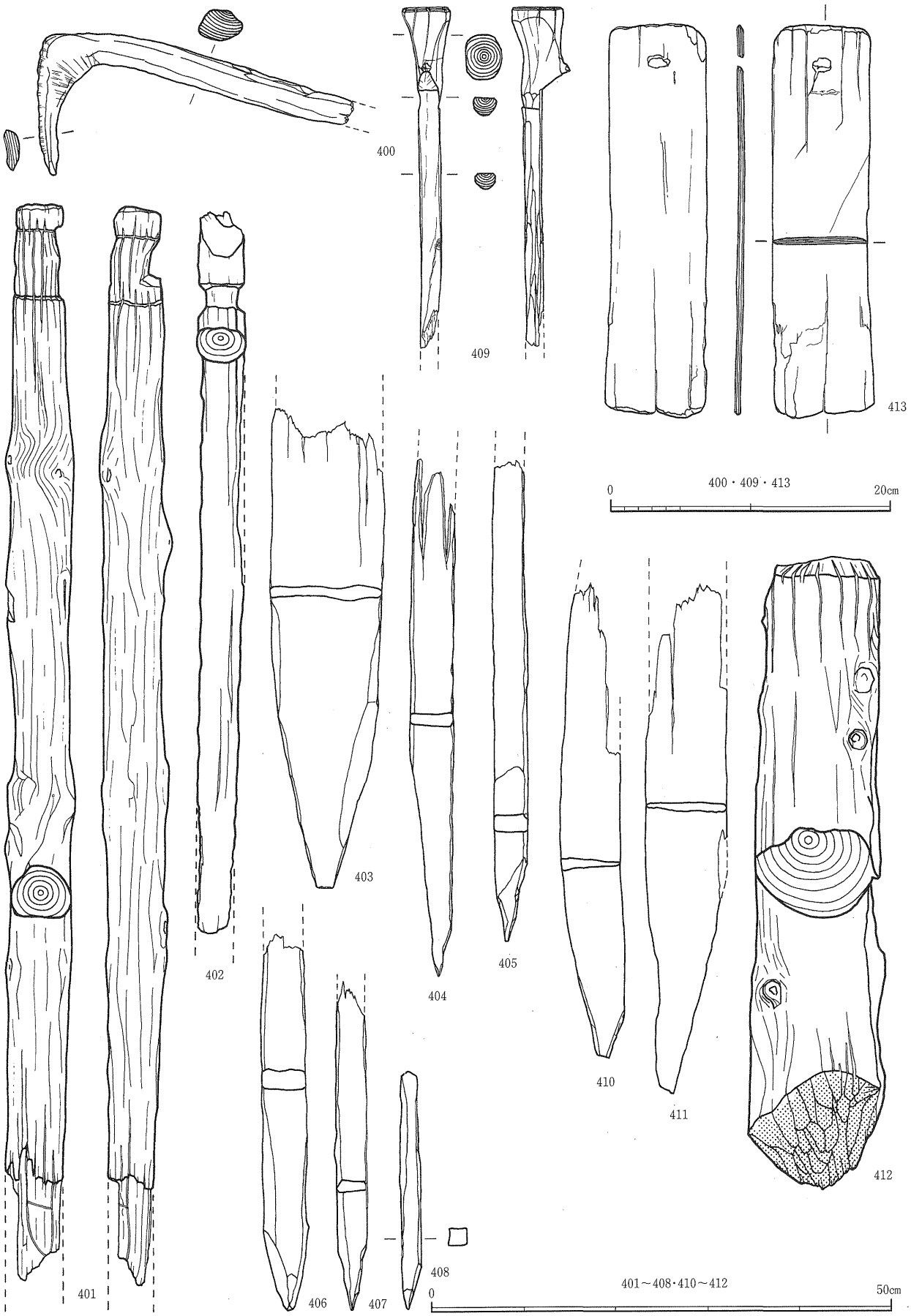
383～389：10-③区旧河川８層、390：13-③・⑤区溝21、391：13-③・⑤区第５層上面

第37図　II区 10-③区、13-③・⑤区 遺構出土石器実測図



392～399：10-②区溝19、487～489：11-①区旧河川57、490～493：11-①区溝48

第38図　II区 10-②区・III区 11-①区 遺構出土木器実測図



400：11-②-２区旧河川第２層、401～412：10-②区旧河川第２層、413：11-②-２区溝19

第39図　II区 10-②区、11-② 2 区 遺構出土木器実測図

右上がりの細かいタタキ痕がある。

溝27（第29図、PL.58）

東西方向に延びる溝であり、溝26と同様に10-③A区で検出している溝5につながる。従って溝26・27・5はC字型を程する一連の溝と考えられる。

溝30（第29図、PL.59）

調査区南西隅に位置し、平面が円形周溝状を呈する。南西部分は調査区外へと続いている。幅90cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していないため、時期は断定できない。

土坑29（第29図、PL.59）

調査区南端に位置し、平面が隅円長方形を呈する。長径1.3m、短径0.6m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色粘質土及び黄灰色粘質土である。出土遺物は弥生土器の細片である。

（8）II区の包含層出土遺物

この地区からの出土遺物には土師器皿、瓦器椀・皿、瀬戸美濃系陶器（灰釉平碗・天目茶碗・山茶椀）、中国製青磁・白磁、備前焼、東播系捏鉢、土師質鍋・釜、瓦質火鉢、土錘、須恵器、金属製品などがある。

平成9年度調査区（第40図、PL.84・89）

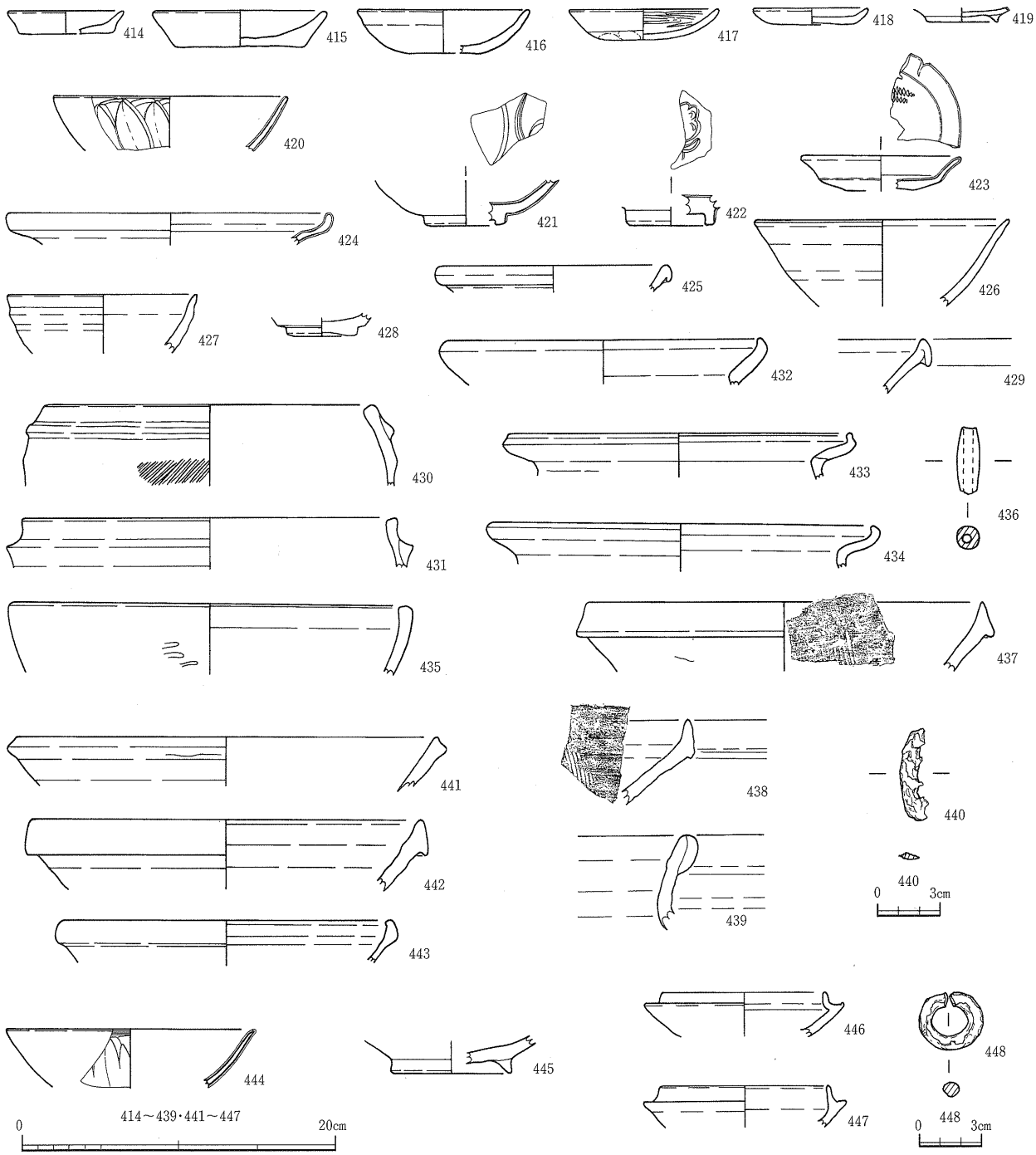
第3・4層出土の遺物

414～416は土師器皿である。414はD2タイプ、415はEタイプ、416はG1タイプである。417・418は瓦器皿で、417は外面のミガキは磨耗のため不明であるが、内面体部は口縁端部から幅2㎜で粗く、見込みは不定方向に密にみがく。418は内外面調整不明である。419の瓦器碗の高台は断面台形を呈する低いものである。420～422は青磁碗である。420は鎬蓮弁文碗で釉色は灰オリーブの発色を呈する。421の内面は劃花文を描き、釉色はオリーブ灰である。外低の釉を削り取る。422の見込みには草花文をヘラ描きする。釉の掛かりは高台の外面までである。釉の発色は明緑灰である。423は同安窯系青磁皿である。釉は外面体部までかかる。424は青磁盤である。425は口縁が玉縁状を呈する白磁碗である。426～428は瀬戸美濃系である。426は灰釉平碗である。内外面ともに釉が著しく剝落している。427・428は天目茶碗である。429は東播系捏鉢である。時期的には口縁端部が上下に拡張され肥厚する13世紀代である。胎土には0.1～1㎜大の黒色粒がはいる。430・431は播磨系の土鍋である。430は口縁直下にやや下向きの突帯を上下に撫で付けて貼付し、その下方から体部に斜め方向のタタキを施す。431の突帯貼付方法は430と同様であるがやや上方に摘み上げる。口縁部直下は強いナデを施すため端部が外反する。432～434は土釜である。いずれも頸部が「く」の字状になるもので、口縁端部を内側に折り込む。435は浅鉢型瓦器火鉢である。436は管状土錘である。437～439は備前焼である。437・438は擂鉢で、口縁の上方への拡張が始まる15世紀前半と思われる。439は甕である。時期的には前者の擂鉢と同時期と思われる。440は鉄製品で、内側に粗く突起が出ている。何らかの装飾が折れているようである。

12-③区（第40図、PL.89）

第３・４層の出土遺物

441～443は東播系捏鉢である。441は口縁端部にやや凹みのある平らな面を持つ。時期は11世紀末から12世紀初めである。外面に重ね焼痕がある。442は口縁端部の拡張が上下に認められる時期、12世紀末から13世紀初めと考えられる。外面に重ね焼の痕跡がある。443は口縁端部の上方への拡張が認められる時期である。時期は12世紀中頃から12世紀後半である。444は鎬蓮弁文碗であるが、鎬は顕著でない。



414～440：９年度調査区第３・４層、441～444：12-③区第３・４層、445：13-⑩区第３層、446～448：12-②区第４層

第40図　平成９年度調査区・12-②・③区・13-⑩区 包含層出土遺物実測図

13-⑩区（第40図）

第3層の出土遺物

出土遺物は少量で、出土遺物には土師器皿、瓦質甕、弥生土器などがある。445の高台は内外の側面を強く撫で、「ハ」の字に開くしっかりしたものである。

第4層の出土遺物

この層も第3層と同様に出土遺物は少量である。図化に耐えうる遺物は唯一445の山茶碗だけである。胎土は割合に精製されている。時期は12世紀代である。

12-②区（第40図）

第3層出土の遺物は細片のため図化できるものが皆無であった。出土遺物には縄文土器、弥生土器、須恵器（古墳時代・奈良時代）、備前焼甕、東播系捏鉢・甕、瓦質甕、土師器鍋などが微量ある。

第4層の出土遺物

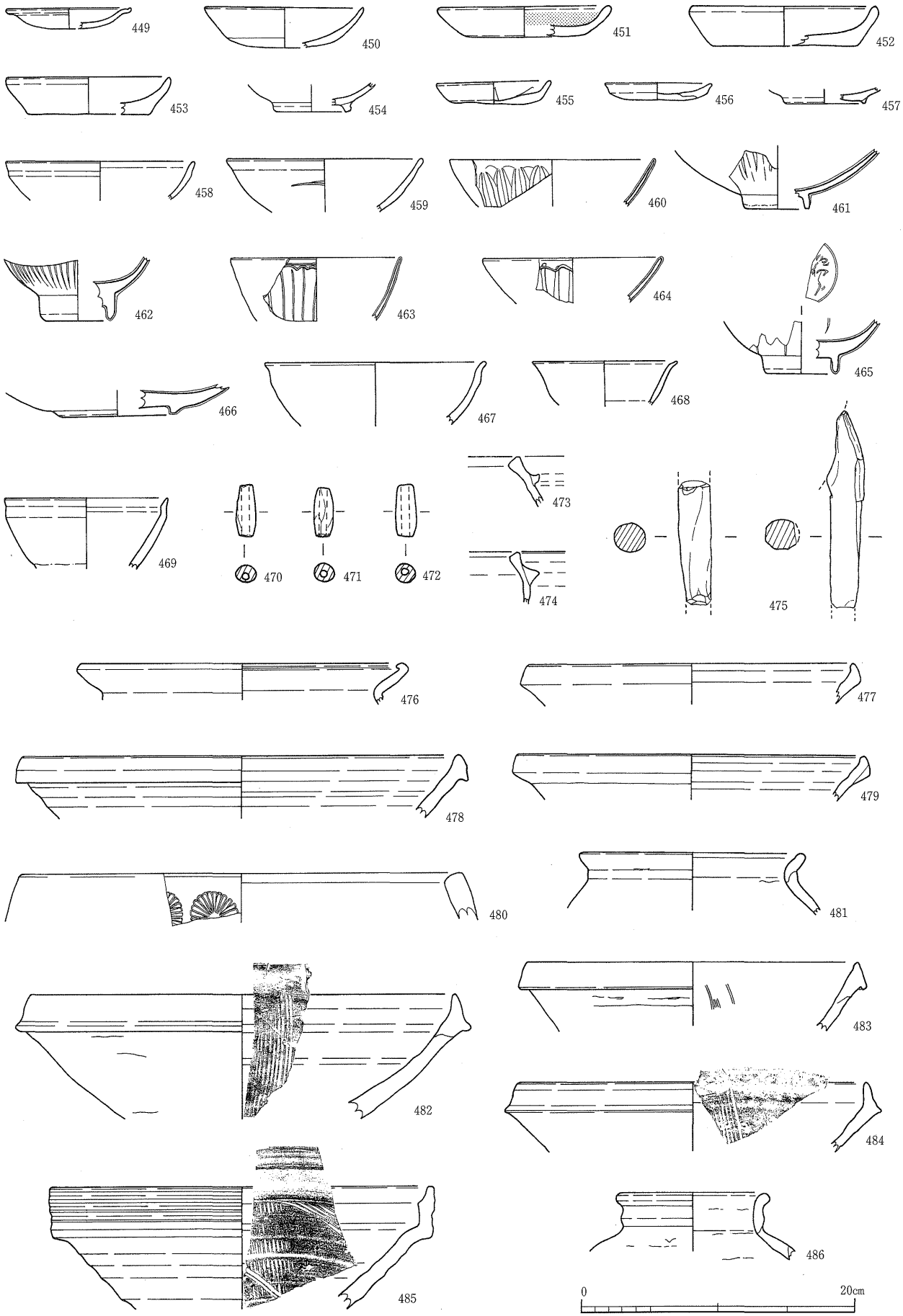
この層もまた、図化に耐えうる中世遺物がない。446・447は6世紀の須恵器杯身である。448は耳環である。全体的に緑青を帯びている。おそらく金メッキを施していたであろう。重量は18.85gである。図化していない遺物には弥生土器、須恵器（古墳時代・奈良時代）、瓦器椀などがある。

10-②区（第41図）

この地区は第3層、第4層と分層せずに、中世包含層一括で掘削したため出土遺物の取り上げは第3・4層混合である。

第3・4層出土の遺物

449～453は土師器皿である。449はいわゆる「て」の字状口縁と呼ばれる土師器皿である。色調は褐色である。11世紀末から12世紀初めの時期である。450はプロポーショはＧ１タイプに酷似する。体部中位を軽く一回横方向に撫でる。底部は不定方向のナデによる調整を施す。451は器壁の厚いもので、口縁は内湾しながら肥厚する。内面の口縁直下から見込みには油煤痕が付着する。Ｆ１タイプである。452・453はＥタイプである。454は土師器椀の底部である。455～459は瓦器である。455・456は皿で、455の見込みはヘラ状の工具により器壁を掻き取り、外側を強いナデが一周する。この調整時に生じたものであろうか、中央が凹んでいる。456は器高が低く、器面の磨耗が著しく調整が不明である。457～459の椀も器面の磨耗度が激しいため調整は不明である。中国製磁器には青磁（460～466）、白磁（467・468）がある。460～465は青磁碗である。460・461は鎬蓮弁文で、13世紀中～14世紀の初めと考えられる。460の発色はオリーブ灰、461は緑灰である。461の畳付きだけが無釉である。462～464は15世紀後葉～16世紀前葉の時期の細蓮弁文碗である。いずれも形骸化した剣頭と弁を描く。465は外面に雷文帯を描くものと思われる。見込みには草花文を描き、釉掛けは高台内面途中までである。時期は15世紀初めである。466は盤で、釉掛けは高台内から外低に及ぶ。467の白磁碗は口縁部が端反る。468は口禿の皿である。469は瀬戸美濃系の天目茶碗である。後期III期～IV期の範疇に納まるであろう。470～472は管状土錘である。それぞれの重量は順に6.17g・5.49g・7.80gである。475は瓦器足釜の足部分である。器面磨耗が著しい。473・474は播磨型の土鍋である。473の突起は上方向に反り返り、口縁端部を



449～486：第３・４層

第41図　Ⅱ区 10-②区 包含層出土遺物実測図

内外に肥厚させている。474の突起は断面三角形を呈する。476は土釜である。477～479は東播系捏鉢である。477・479は口縁部の上下の拡張が見始められ、478はその後のより拡張された時期である。480の浅鉢型の瓦器火鉢は、肩の部分に花文のスタンプを押捺する。481の壺は瓦質であろうか、断定はしかねる。器面の色調は明黄褐色である。瓦器壺とすれば燻し地は二次焼成により消滅した感も窺える。なお、内面は口縁直下から煤が付着している。482～485は備前焼擂鉢である。482は口縁端部が内外に突出する。摺り目の一単位は10条である。時期は中世3期bである。483・484は中世4期の範疇にある。双方ともに口縁端部の上方への拡張が認められる時期で、口縁帯の形状から、484は中央部が屈曲していることから483に比べ若干時期が下るものと思われる。485の口縁帯は幅広で多条の凹線の入るシャープな作りである。口縁内面からやや下がった位置に稜を施す。摺り目は放射状と斜め方向のものが混在する。以上のような形態的特長から時期は近世1期bと思われる。外面口縁直下には重ね焼痕が認められる。486は備前焼壺である。口縁端部を外に折り曲げ玉縁状を呈する。時期的には484の擂鉢と同時期であろう。

また、第4層からは付章1の「徳蔵地区遺跡から出土した石器群の分析」で示した両極石器や打製石斧なども出土している。

以上、II区包含層出土の遺物について簡単に記したが、第3・4層の時期の包含層（水田層）を一括で掘削したため遺物の時期幅が大きい。時期的には、概ね12世紀末から16世紀後半で纏まる。I区でもそうであったが、中世包含層に縄文土器や弥生土器、古墳時代の須恵器や奈良時代の須恵器が包含されている。このことから、この地区の周辺に、この時期の遺構の存在を示唆しているものと言えよう。

第4節　III区

調査区は、古川支線を挟んで両側の微高地に位置する。10-⑤区、11-①区、12-⑧区、13-①・②・⑨区がある。古川支線そのものの調査区は13-⑨区で、東側の微高地は11-①区、西側の微高地は10-⑤区、12-⑧区、13-①・②区である。13-①・②区は民家であったため、最終年度の調査となっている。

弥生時代前期の旧河川、堰状遺構、竪穴住居、柱穴、土坑、また古墳時代後期の旧河川などを検出した。弥生時代前期の遺構は、旧河川を挟んで西と東の微高地に展開する。また旧河川には堰状遺構が見られる。縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が共伴して出土した10-③区の旧河川は、北東方向60mの位置にある。

（1）11-①区（第42・45図、PL．4）

南に位置する高田土居城から延びる微高地の縁辺部に該当する。当調査区付近の標高は4.4m前後である。第5層は黄褐色シルト層でベース土となる。この状況は古川支線を挟んで西に位置する微高地と同一である。

微高地上には弥生時代前期の土坑、掘立柱建物、縁辺部に沿って掘削された弥生時代後期末から古墳時代前期の溝47がある。溝47の南は高田土居城の北辺外堀によって潰されている。また微高地が東側に向かって落ち込んでいく面では不整形な土坑群を検出した。弥生時代前期の掘立柱建物はこの土

坑群に囲まれている。土坑から石棒や黒色物を塗布した土器などが出土する。

この地区は安定した微高地にもかかわらず、弥生時代後期末以降は生活の痕跡が認められない。その後再び土地活用されるのは鎌倉時代になってからで水田となる。表採遺物として（617）がある。

不定形土坑11・38（第44・59図、PL．3・93）

調査区東側の微高地の落ち部分で検出した。不定形土坑11は６基の土坑が繋がる状況で約12m×30mの規模である。深さは10～12cmを測り、断面の形状は舟底状を呈する。不定形土坑38も同様な断面形状を呈し、深さ10～15cmの浅いものである。形状からみて人工的の掘削したものとは考えがたく自然作用でできた窪みの可能性が高い。不定形土坑の上部を覆う堆積土から石鏃（615・618）や釘（620）が出土した。

土坑３・４（第42・44図）

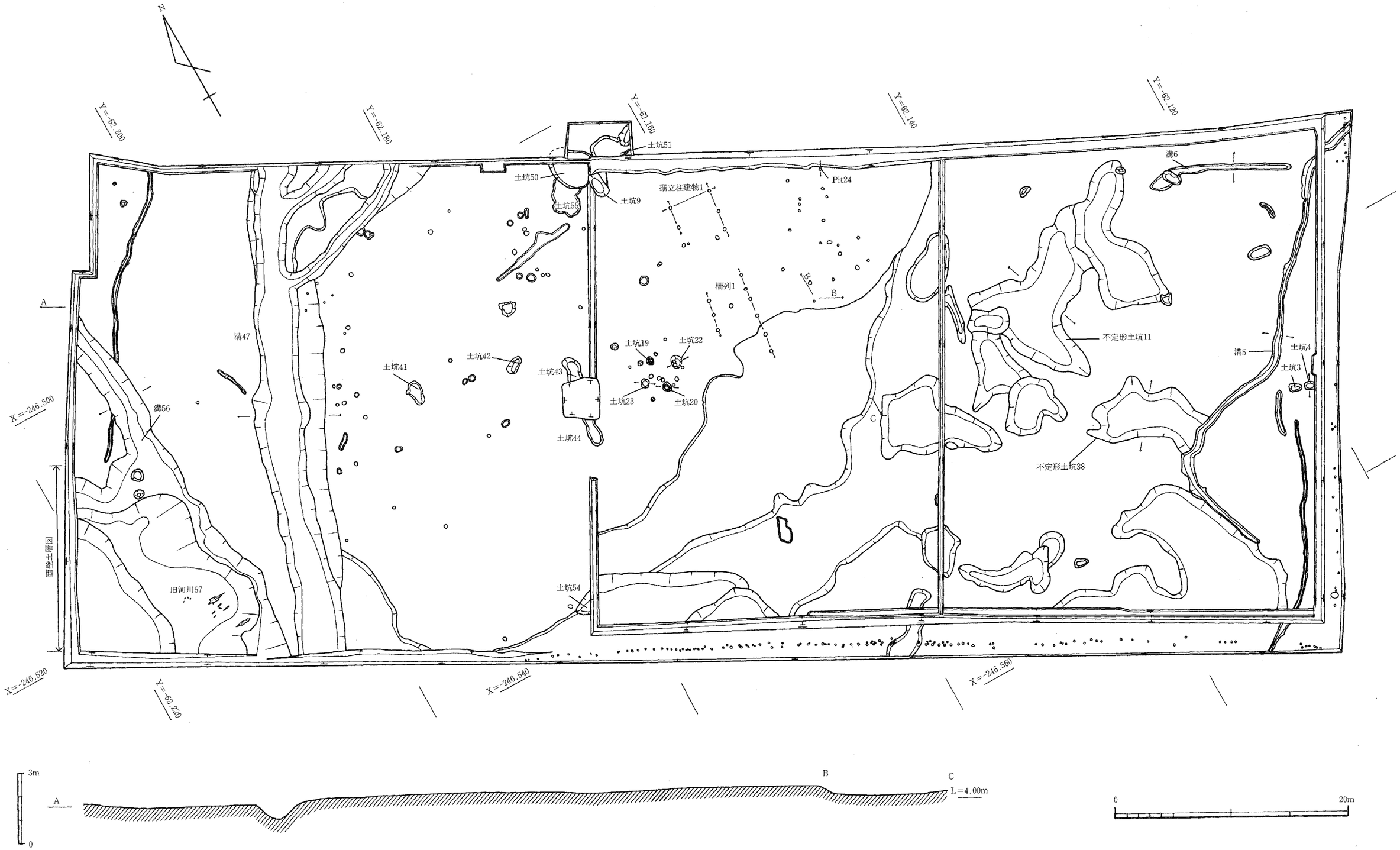
この２基の土坑は調査区の最も東側で検出した。形状は双方ともに楕円形を呈する。土坑3は長軸約１m、短軸約0.7mを測る。この土坑からはサヌカイト製の石鏃（616）が出土している。重さは2.22gである。土坑４の規模もほぼ土坑３と同様で、深さは約20cmを測る。

土坑９（第43・55・56・59図、PL．4・89・90・93）

調査区中央部北側の微高地で検出した。長辺を南北方向に向け、短辺１m×長辺２m、深さ1.1mの楕円形を呈し、壁は垂直に落ちる。堆積土は９層に区分できる。遺物は第３層～第６層間で出土する。また、遺物は第４層と第５層、第３層と第５層で接合するため堆積土に時期的な差はないと考えられる。なお、石棒は第５層から出土した。

遺物は土器、石器が出土する。土器には突帯文土器と弥生土器がある。突帯文土器は極微量で、図示できるものは、深鉢（494）1点のみで、口縁端部外面に断面三角形の突帯を付すものである。弥生土器には壺（510～513）、甕（495～509）、鉢（514～516）がある。肉眼観察では搬入品は認められない。甕は壺より多く出土する。壺には、短く外反する口頸部をもつ広口壺（510～512）と広口太頸壺（513）がある。外面は横方向のミガキ調整を施す。口頸部の境を510・513は段で、512は突帯で区画する。510は黒色物を塗っていたと考えられる。甕は如意形の口縁部をもつものが多く、このうち495・496は倒鐘形の体部をもつ。506は口縁部の屈曲が少ない。頸部は無文か、沈線を一条施すもの（496・497・502）と二条施すもの（498～500・507）がある。498は沈線下に刺突文を施す。口縁端部への刻み目は、不規則に刻むものが多く、505以外は細かい刻み目である。体部の調整は495がヘラミガキ、496はハケである。495・496は煤の付着が顕著である。鉢は外反する口縁部をもつ。514は外面をヘラミガキ調整し、その上に黒色物を塗布する。頸部には二条の沈線を巡らす。515は口縁端部に刻み目を施し、頸部には一条の沈線を巡らす。514・515は煤が付着する。底部は形態から甕（517～521）、壺（522～526）に区分できる。外面の調整は517・521がハケ、522・523・525がヘラミガキで、このうち522・523は黒色物を塗布する。土坑９の土器は弥生時代前期中段階前半の一括遺物と考えることができる。

石器には、紅簾片岩の石棒（622）と砂岩の敲石（621）がある。石棒は断面が楕円形を呈し、片側



第42図　III区 11-①区遺構全体図

が欠損する。残存する端部付近には赤色顔料が認められる。敲石は四周と両面に敲打痕が認められる。両面中央部は大きく窪む。

土坑19（第58図）

調査区の中央部、微高地で検出した。掘立柱建物群の西に存在する土坑群のひとつである。直径80cmの円形を呈し、深さ50cmである。堆積土は3層に区分できる。

遺物は最下層より、弥生土器甕底部（596）が出土する。時期は不明である。

土坑20（第44・58図、PL.92）

調査区の中央部、微高地で検出した。掘立柱建物群の西に存在する土坑群のひとつで北側には土坑19が位置する。直径1m前後の円形を呈し、深さ50cmである。二段に落ちる。堆積土は6層に区分できる。遺物は弥生土器甕底部（597）が出土する。

土坑23（第44図）

調査区の中央部、微高地で検出した。掘立柱建物群の西に存在する土坑群のひとつで北側には土坑19が位置する。直径50cm前後の円形を呈し、深さ20cmである。堆積土は2層に区分できる。

土坑41（第58図）

調査区の西側、微高地に位置する。不定形な土坑で、短辺1m×長辺2m、深さ50cmの楕円形を呈する。堆積土は1層である。遺物は、小型の高杯（593）が出土する。裾部には4孔を穿つ。杯部形状は不明である。弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期である。

土坑43・44（第43・56・58図）

調査区の中央部、微高地に位置する。東側には土坑群や掘立柱建物がある。土坑43・44の長辺は、掘立柱建物の長辺に平行する。試掘トレンチにより中央部を破壊されるが、位置からみて同一遺構と考えられる。短辺1m×長辺8m、深さ20cmで長い楕円形を呈する。堆積土は3層に区分できる。

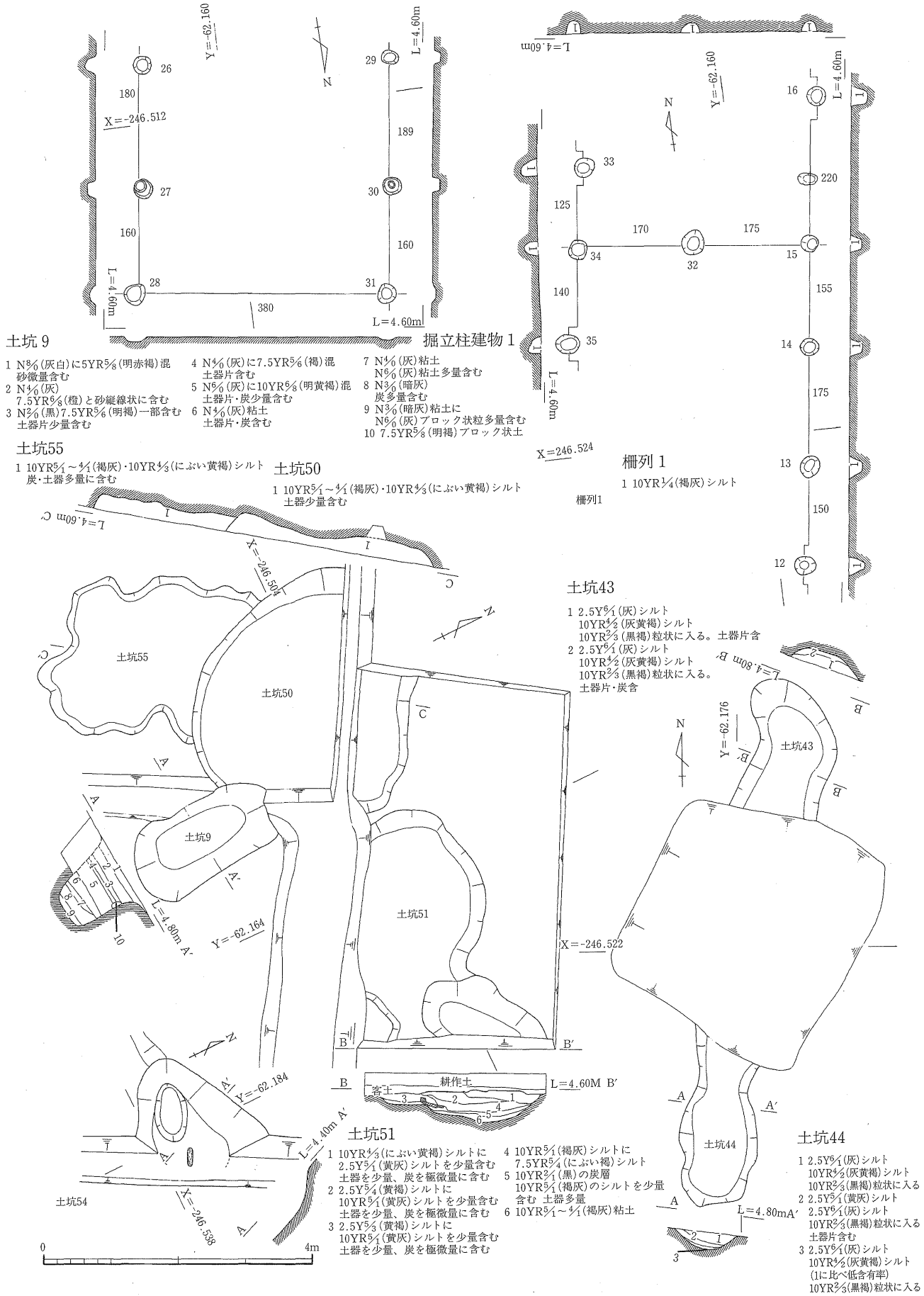
遺物は、突帯文土器深鉢（538・539）、弥生土器甕（540・594）・壺（541・595）が出土する。538は口縁部が内傾し、端部外面に断面三角形の突帯を巡らす。内外面摩滅する。底部（539）は、胎土から538と同一個体である。595は体部中位に貼付突帯を巡らす。540・541・594は底部である。

土坑50（第43・56図、PL.4）

調査区中央部北端、微高地に位置する。土坑9など一群の土坑群のひとつである。短辺3.5m×長辺4mの楕円形を呈する土坑で、深さ40cmである。土坑55を切る。堆積土は1層である。

遺物は、突帯文土器と弥生土器（543～550）が出土する。突帯文土器は深鉢（542）である。口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁端部と突帯には刻み目を施す。器表面は摩滅する。弥生土器は甕（543～545）がある。甕は、口縁部をくの字形に外反させるものである。緩やかに屈曲するもの（543・545）と強く屈曲するもの（544）がある。口縁部への刻み目は摩滅のため不明である。底部（546～550）は底部で、550は生駒西麓産の甕底部である。546は摩滅が激しいが、形態から突帯文土器深鉢の底部の可能性もある。

土坑51（第43・56図、PL.4）



第43図　Ⅲ区 11-①区掘立柱建物１・柵列１ 平面図、土坑 9・43・44・50・51・54・55 平面図・土層図

調査区中央部北端に位置する。短辺2m×長辺4m以上、深さ50cmである。平面形は楕円形を呈する。堆積土は6層に区分できる。

遺物は、弥生土器壺・甕・鉢が出土した。突帯文土器は出土しない。壺は広口壺（529・530）である。530は、口縁部と頸部の境に段がみられる。529は、口縁部と頸部の境界に沈線を施す。共に摩滅し器表面の調整が不明である。甕（527･528）は、くの字形に屈曲する口縁部をもつ。527は、三条の頸部へのヘラ描き沈線により二条の帯を作り出し、竹管による刺突列点文を施す。528は、二条の頸部へのヘラ描き沈線により一条の帯を作り出し、竹管による刺突列点文を施す。口縁端部には刻み目を施す。胎土には石英や白色粒が多く見られる。共に摩滅し器表面の調整が不明である。鉢（537）は深い埦型を呈する。底部に焼成後に円孔を穿つ。底部破片（532～536）がある。527・528は胎土から搬入品と考えられる。これらは前期中段階の資料である。

土坑54（第43・59図、PL．4・93）

調査区中央部南端、微高地縁辺部分に位置する。東側は側溝により、削平されるため全体の形状は不明である。短辺1m、長辺0.6m以上、深さ50cmの土坑である。堆積土は一層でシルト層である。土器は出土せず、石棒（623）のみが出土した。石棒は、土坑のほぼ中央の底面の地山に斜めに刺った状態で出土した。石材は結晶片岩と考えられる。両端部は擦られている。他に顕著な調整や使用痕はない。

土坑55（第43・58図、PL．4）

調査区中央部北端に位置する。土坑50に切られている。短辺2m、長辺2.3m以上の大きさで、深さ20cmで楕円形を呈する。堆積土は、シルト層で1層である。

出土遺物は、突帯文土器（582）と弥生土器（583～588）がある。582は深鉢で、突帯は垂れ下がる。突帯上には刻み目を施すが、口縁端部への刻み目は摩滅が激しいため不明である。甕（583）は、くの字形に屈曲する口縁部を持つ。大型鉢(584)は、口縁部で僅かに外反し、端部は丸く収める。585～588は底部の破片である。

掘立柱建物1（第43図、PL．4）

調査区中央部に位置する。主軸は南北方向である。柵列1が南に位置する。南に更に1間伸びる可能性がある。柱穴は直径20～35cm前後、深さ10～20cm前後である。埋土はシルト層で部分的に炭層が存在するものもある。

遺物は柱穴より出土した。弥生土器細片である。

柵列1（第43図、PL．4）

二列に並ぶ柱穴を検出した。柱穴は直径20～40cm前後、深さ20～30cm前後である。埋土はシルト層である。掘立柱建物1の南延長線に並ぶ。掘立柱建物の可能性もある。

遺物は、柱穴より出土した。弥生時代前期土器細片である。

柱穴群（第44図、PL．4）

掘立柱建物1の東側から柱穴群を検出した。柱穴は直径20～40cm前後、深さ20～40cm前後である。

埋土はシルト層である。

溝5（第44図）

調査区の東側、微高地が落ちる部分に掘削された溝である。北には溝6がある。幅20cm、深さ30cm前後で、長さ40mに渡って検出した。出土遺物はない。

溝6（第44・58図）

調査区の東側、微高地が落ちる部分に掘削された溝である。長さ13mにわたって検出した。幅20cm、深さ30cmを測る。堆積土は1層である。

遺物は、弥生時代前期土器（589～591）が出土する。589は広口壺で、外反する口縁部を持つ。590・591は底部の破片である。

溝47（第44・57・59図、PL.7・91・93）

調査区西側の微高地の縁辺部に沿って掘削される。北東から南西方向に流れる。調査区北側では三条存在し、合流して一条になる。幅6m、深さ50cm前後である。11-①区の高田土居城北辺外堀に切られる。弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝である。堆積土はシルト層で大きく4層に区分できる。

出土遺物は多く、土器・石器がある。土器は、弥生時代中期後半から後期末の壺（551～560）・甕（580・581）・高杯（561～570）・鉢（571～579）がある。壺は、口縁部に凹線を巡らす中期後半の直口壺（551）、弥生時代後期の長頸壺、広口壺、二重口縁壺がある。554は、体部外面にタタキを施す。552は口縁部を欠損する。553は完形品で、口縁部から体部にかけて縦方向のミガキ調整を施す。広口壺（554・556～559）は、口縁端部を垂下させる556と垂下しない557・558がある。556は、口縁端面に擬凹線を施す。560は球形の体部で、口縁部を欠損する。577は底部破片で、縦方向の磨き調整を施す。二重口縁壺（555）は、外面に横方向のミガキ調整を施す。口縁部を加飾する二重口縁壺は存在しない。甕（580・581）は、くの字形に屈曲する口縁部を持ち、外面には斜め右上がりのタタキを施す。鉢（573～576・579）は、完形品で椀型である。底部外面には指押さえの跡が明瞭に残る。579は小型の鉢で、外面にはタタキ調整を施す。屈曲する口縁部をつけるタイプは存在しない。底部（571・572・577・578）もある。高杯は、スカート状に開く脚柱部（561～569）に椀状の杯部をつける（570）。脚柱部には、中空（561～568・570）と中実（569）がある。裾部に穿たれた孔は565以外大きく、直径2cm前後である。565は上下に孔を穿ち、後期前半段階の可能性もある。570の脚柱部は長い。

石器は全て砂岩製の礫石器である。敲石（625・626）、凹石（627）がある。625は、両面中央部が窪む。626は両端が欠損し、両面が窪む。

溝48（第44図）

調査区西側で第3層を除去した面で検出した。幅4m以上、深さ1.2mである。堆積土は5層に区分できる。

溝49（第44・59図）

溝49は溝48の上面で検出した。遺物は下層より出土している。

出土遺物には青磁碗（612）、須恵器杯（613）、鋳造用具（614）がある。

溝52（第58・59図、PL.93）

調査区西側の溝48の東側に掘削された溝で、旧河川57の上位にある。幅２m、深さ１mを測る。

遺物は、突帯文土器深鉢（592）、サヌカイト製石鏃（619）が出土する。592は口縁の突帯の断面が台形である。小破片で摩滅する。

旧河川57（第44・58・59図、PL.７・８・92・93）

調査区の西側隅を流れる旧河川の東側肩部を検出した。北方向から流れ、高田土居城外堀の下位に流れ込む。肩部には木杭が打ち込まれる。堆積土は砂層をはさんでおり流れた堆積を示す。

出土遺物は、土器・石器がある。土器は、弥生土器・土師器・須恵器がある。弥生土器は後期の甕（611）である。土師器は、７世紀代の椀（604）、８世紀の皿（601～603）、製塩土器（609･610）、甕（608）がある。皿は大（602・603）、小（601）があり、内面にミガキが施され、603は×印がある。甕（608）は、体部外面と口縁内面にハケ目調整が施される。製塩土器は粘土紐のつなぎ目が顕著に目立つ。須恵器は、６世紀後半の杯（599・600）、７世紀の杯（605）、８世紀の杯Ｂ（606）、8世紀と考えられる俵瓶（598）、高杯（607）がある。598は、外面にタタキ調整を施す。

石器は、形状から石棒の可能性があるもの（624）がある。材質は結晶片岩である。

（２）10-⑤区（第45・46図、PL.５・８）

調査区内で土置き場を確保するために、二分割して調査した。調査区は古川支線を挟んで西の微高地に該当する。基本層序は他の地区と同じで３・４層が中世水田層であるが、東側の低い部分には、６世紀後半の遺物を含む灰色シルトが堆積する。遺構は第５層上面で、旧河川１、土坑、柱穴、竪穴住居、掘立柱建物、柵列状遺構を検出した。旧河川１の西側で弥生時代前期中段階の竪穴住居１があり、土坑群や柱穴群なども存在する。

弥生時代前期中段階の集落は、竪穴住居と掘立柱建物により構成されており、埋甕などもある。当該期には、西の微高地と二つの河川を挟んだ東の微高地に集落が形成されていたことになる。

柵列状遺構は６世紀後半代の遺構である。旧河川が埋まった後で作られている。弥生時代前期中段階の集落が存在し、古墳時代後期６世紀後半の時期の遺構があり、それ以降、土地は鎌倉時代の水田ができるまで遺構はなく土地を利用していない。

旧河川１（第47・60・61図、PL.５・93・94）

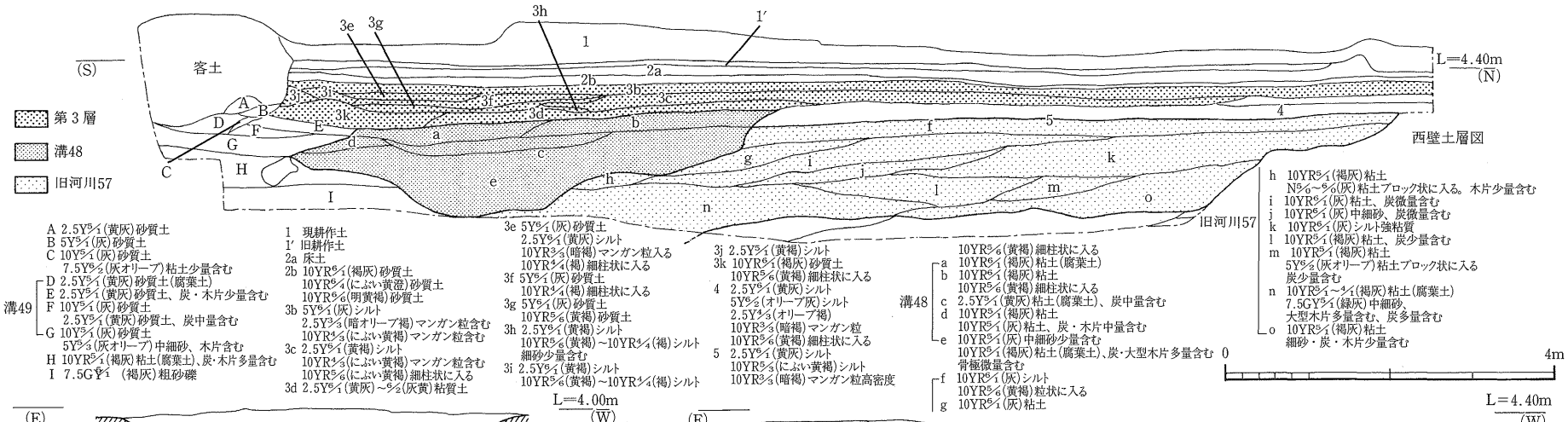
微高地の縁辺部、調査区東側を北から南方向へ直線的に流れる幅27m前後、深さ1.3mの旧河川である。下流には、堰状遺構が存在する。

堆積土は上層（２～７′）、中層（８～13）、下層（14～19）に区分できる。肩部の崩壊も初期段階でみられる。下層の堆積は木片等を含み、弥生時代前期の遺物も多く出土する。

出土遺物は、大きく２つの層から出土する。最下層の17層と18層である。17層では河川の底面上から多くの土器が出土した。

下層出土遺物は、土器・石器がある。土器は、突帯文土器と弥生土器である。小破片が多い。

突帯文土器には、深鉢と壺がある。628・629・633・635は口縁部が外反し突帯幅が広い瀬戸タイプ、



A 2.5Y5/1(黄灰)砂質土
B 5Y5/1(灰)砂質土
C 10Y5/1(灰)砂質土
7.5Y5/2(灰オリーブ)粘土少量含む
D 2.5Y5/1(黄灰)砂質土(腐葉土)
E 2.5Y5/1(黄灰)砂質土、炭・木片少量含む
F 10Y5/1(灰)砂質土
2.5Y5/1(黄灰)砂質土、炭中量含む
G 10Y5/1(灰)砂質土
5Y5/3(灰オリーブ)中細砂、木片含む
H 10YR5/1(褐灰)粘土(腐葉土)、炭・木片多量含む
I 7.5GY5/1 (褐灰)粗砂礫

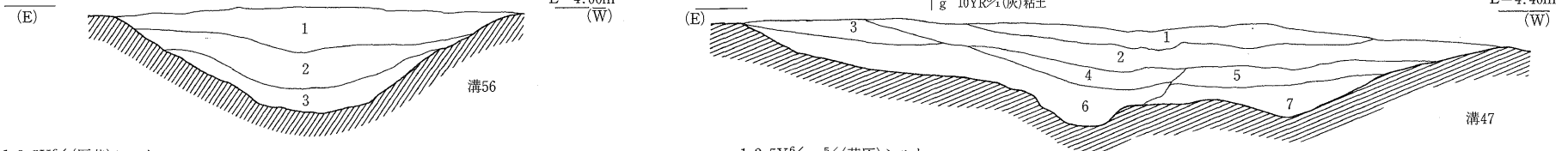
1 現耕作土
1′ 旧耕作土
2a 床土
2b 10YR6/1(褐灰)砂質土
10YR6/4(にぶい黄澄)砂質土
10YR6/6(明黄褐)砂質土
3b 5Y5/1(灰)シルト
2.5Y3/3(暗オリーブ褐)マンガン粒含む
10YR4/3(にぶい黄褐)マンガン粒含む
3c 2.5Y5/1(黄褐)シルト
10YR4/3(にぶい黄褐)マンガン粒含む
10YR5/3(にぶい黄褐)細柱状に入る
3d 2.5Y5/1(黄灰)～5/2(灰黄)粘質土

3e 5Y5/1(灰)砂質土
2.5Y6/1(黄灰)シルト
10YR3/3(暗褐)マンガン粒入る
10YR3/4(褐)細柱状に入る
3f 5Y5/1(灰)砂質土
10YR3/4(褐)細柱状に入る
3g 5Y5/1(灰)砂質土
10YR5/6(黄褐)砂質土
3h 2.5Y6/1(黄褐)シルト
10YR5/6(黄褐)～10YR5/4(褐)シルト
細砂少量含む
3i 2.5Y5/1(黄褐)シルト
10YR5/6(黄褐)～10YR5/4(褐)シルト

3j 2.5Y5/1(黄褐)シルト
3k 10YR5/1(褐灰)砂質土
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
4 2.5Y5/1(黄灰)シルト
5Y5/2(オリーブ灰)シルト
2.5Y3/3(オリーブ褐)
10YR3/3(暗褐)マンガン粒
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
5 2.5Y5/1(黄灰)シルト
10YR5/3(にぶい黄褐)シルト
10YR3/3(暗褐)マンガン粒高密度

a 10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
b 10YR6/1(褐灰)粘土(腐葉土)
10YR5/1(褐灰)粘土
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
c 2.5Y5/1(黄灰)粘土(腐葉土)、炭中量含む
d 10YR5/1(褐灰)粘土
10YR5/1(灰)粘土、炭・木片中量含む
e 10YR5/1(灰)中細砂少量含む
10YR5/1(褐灰)粘土(腐葉土)、炭・大型木片多量含む
骨極微量含む
f 10YR5/1(灰)シルト
10YR5/6(黄褐)粒状に入る
g 10YR6/1(灰)粘土

h 10YR5/1(褐灰)粘土
N5/0～6/0(灰)粘土ブロック状に入る。木片少量含む
i 10YR5/1(灰)粘土、炭微量含む
j 10YR5/1(灰)中細砂、炭微量含む
k 10YR6/1(灰)シルト強粘質
l 10YR5/1(褐灰)粘土、炭少量含む
m 10YR5/1(褐灰)粘土
5Y5/2(灰オリーブ)粘土ブロック状に入る
炭少量含む
n 10YR5/1～4/1(褐灰)粘土(腐葉土)
7.5GY5/1(緑灰)中細砂、
大型木片多量含む、炭多量含む
o 10YR5/1(褐灰)粘土
細砂・炭・木片少量含む



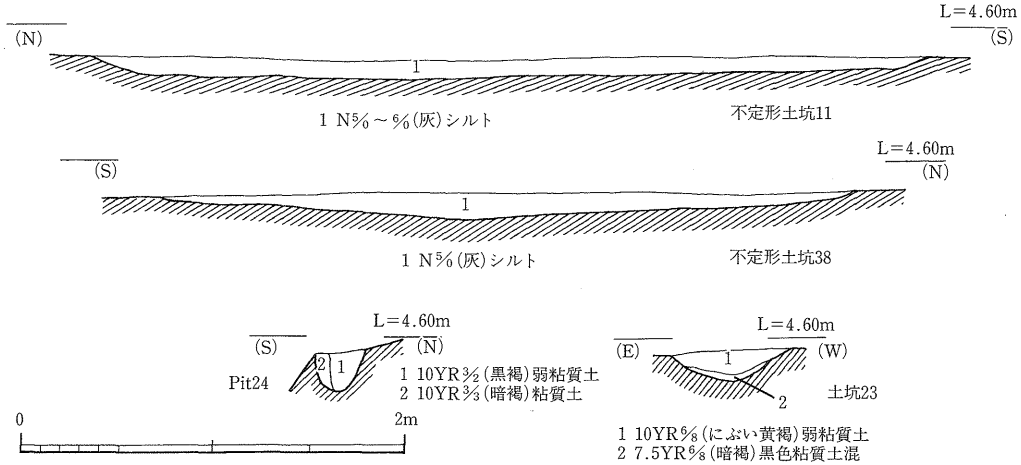
1 2.5Y6/2(灰黄)シルト
2.5Y6/1(黄灰)シルト少量混
10YR5/6(黄褐)シルト
2 10YR5/1(褐灰)シルト
7.5GY6/1(緑灰)シルト、5～6m大のブロック状に入る
10YR5/6(黄褐)粒状に少量混

3 10YR5/1(褐灰)シルト
7.5GY6/1(緑灰)シルト 1cm以下のブロック状
細砂・炭・土器含む

1 2.5Y6/1～5/1(黄灰)シルト
2.5Y3/3(暗オリーブ褐)マンガン粒・鉄
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
2 5Y6/1(灰)シルト
2.5Y3/3(暗オリーブ褐)マンガン粒・鉄
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る

3 10YR5/1(褐灰)シルト
2.5Y3/3(暗オリーブ褐)マンガン粒・鉄
10YR5/6(黄褐)細柱状に入る
4 N6/0(灰)粘土
5 N6/0(灰)粘土

5Y5/1(灰)シルト含む
6 N5/0(灰)粘土・炭・土器多量含む
7 N5/0(灰)粘土・炭少量含む

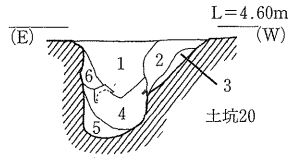


1 N5/0～6/0(灰)シルト

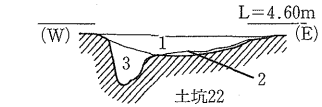
1 N5/0(灰)シルト

Pit24
1 10YR3/2(黒褐)弱粘質土
2 10YR3/3(暗褐)粘質土

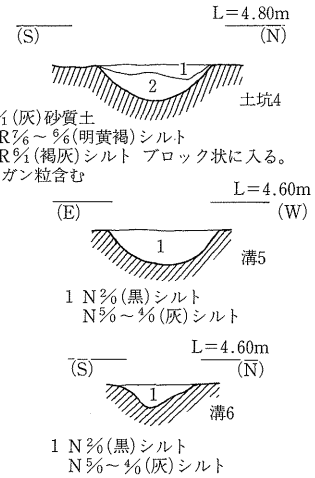
1 10YR5/8(にぶい黄褐)弱粘質土
2 7.5YR6/6(暗褐)黒色粘質土混



1 2.5Y4/1(黄灰)弱粘質土
2 2.5Y3/1(黒褐)弱粘質土、炭・灰含む
3 10YR4/4(褐)弱粘質土
4 10YR2/2(黒褐)粘質土、炭・灰含む
5 10YR4/1(褐灰)粘質土
6 10YR5/4(褐)粘質土



1 10YR5/4(にぶい黄褐)粘質土
2 10YR5/4(にぶい黄褐)粘質土に黒色の炭状のもの含む
土器含む
3 10YR4/1(褐灰)粘質土



1 5Y5/1(灰)砂質土
2 10YR7/6～6/6(明黄褐)シルト
10YR5/1(褐灰)シルト ブロック状に入る。
マンガン粒含む

1 N3/0(黒)シルト
N5/0～4/0(灰)シルト

1 N3/0(黒)シルト
N5/0～4/0(灰)シルト

第44図　Ⅲ区 10-⑤区 西壁土層図、土坑4・11・20・22・23・38、溝5・6・47・56、Pit24 土層図

第45図　Ⅲ区 10-⑤・11-①・12-⑧・13-①・②・⑨区遺構平面図

630～632は口縁部が直立気味で口縁端部外面に断面三角形の突帯を付す長原系の深鉢である。635は外面に煤の付着がある。壺634は外反する口縁端部外面に幅広で垂れ下がる突帯を付す。胎土に片岩を含み搬入品と考えられる。色調も淡赤褐色であり他と異なる。

弥生土器には、壺（636）・甕（639～644）・甕蓋（637・638）がある。636は広口壺である。頸部には段がみられる。体部には綾杉文を施す。片岩を含み紀北地方からの搬入品である。

甕は如意形に外反する口縁部をもつ。屈曲が緩やかなもの（639・640）ときついもの（641～643）がある。頸部には無紋（639）、二条（641・643）～四条（640・642）の沈線をハケ調整ののち施す。641は沈線原体のヘラの幅が広い。口縁部への刻み目は、639以外全て施す。639～641は、外面に煤の付着がある。

砂礫層（第12層）からの遺物は、土器・石器がある。土器は小破片が多く、突帯文土器と弥生土器である。器表面は摩滅しない。突帯文土器は、深鉢口縁部（645～647）と体部破片（648・649）である。645は口縁端部に接して突帯を、646・647は口縁部下に突帯を巡らす。645は断面台形の幅広の突帯で、口縁部に刻み目をもつ瀬戸タイプである。646は直立する体部に、断面台形の突帯をつけ、口縁部と突帯に刻み目をもつ。外面には煤の付着がある。胎土から搬入品である。648・649は体部の突帯上に刻み目をもつ。648は胎土に片岩粒を含み、和歌山県北部地域からの搬入品と考えられる。底部679は、底端部が外方に突出することから突帯文土器の可能性がある。

弥生土器は、壺、甕がある。壺（650～659）は、口縁部が外反する広口壺である。口縁端部を丸くする650・652・653と面をもつ651・654・655・657～659がある。頸部は削り出し突帯を施し、五条の沈線をもつ655や沈線を五条以上施す656がある。帯状に削り出したあと沈線を入れたため凸には縦方向のハケ目調整が残る。横方向のミガキ調整である。654はへら描き沈線を四条以上施す。651は口縁端部に沈線を一条入れ、内外面丁寧なミガキ調整である。大型の広口太頸壺（657）は、頸部に削り出し突帯をもち沈線を施す。甕（660～666）は、頸部に沈線を二条以上（664）、三条（662）、五条（660）施す。煤の付着が663にみられる。口縁部への刻み目は、661・664にみられる。壺体部外面に削り出し突帯（667・675）や沈線をもつものがある（668～673・674・676）。673は肩部に沈線を五条施し、その内の一条を設計線として刻み目をもつ突帯を巡らす。666・667には煤の付着がみられる。底部は677～679がある。677は底部外面への縦方向の磨き調整がみられる。

上層（第3・4層）からは、突帯文土器・弥生土器・石器が出土する。突帯文土器は深鉢（681）である。口縁直下に二条の突帯を貼り付け、突帯上への刻み目はD字で粗い。胎土に片岩を含み和歌山県北部からの搬入品と考えられる。弥生土器は、底部（682～686・689・690）と蓋が出土する。蓋（687）は、表面が摩滅する。底部は、ミガキ調整（682・689）、ハケ調整（684・686・690）がある。

石器は3層から打製石斧（701）が出土した。

時期については下層は弥生時代前期中段階、砂礫層・上層出土遺物は新段階前半である。よって、旧河川1の上層が堆積する時期は、弥生時代前期新段階の中で考えられる。

竪穴住居1（第47・61、PL.5・93）

プランは不定形である。土坑７を切る。一辺3.4m前後で、深さは14cmである。床面は中央部が窪む。周溝はない。柱穴或いは土坑を１カ所検出した。平面形態や大きさから住居と考えたが、柱穴がないなど否定的な要素もある。堆積土は中央部の窪みに炭を含んだシルト（第２層）が堆積し、その上にはシルト層（第１層）が堆積する。

埋土からは、土器・石器が出土した。土器は小破片で器表面が摩滅する。第１層は693・695～697、第２層は691・692がある。土器は、突帯文土器と弥生土器が共伴して出土した。突帯文土器は深鉢（691～694）である。691～693は口縁部で、口縁部下に刻み目を施した突帯を巡す。694は体部突帯で、突帯上に刻み目を施す。弥生土器は、甕（695・696）が出土する。甕は口縁部が緩やかに外反する。器表面は摩滅する。このほか平底の底部（697）がある。

石器は第１層より、砂岩の台石（698）、磨製石斧（700）、第２層よりサヌカイト製の石鏃（699）がある。磨製石斧は基部を欠損する。刃部は鋭利で両側から研ぎ出している。

掘立柱建物３（第47図）

柱穴は数多く検出したが、掘立柱建物は一棟のみである。竪穴住居１の北西に位置する。柱穴は直径20～40cm前後の大きさで、深さ15～25cm前後である。１間×２間の建物である。柱穴１より弥生土器細片が出土した。

土坑２（第47図）

竪穴住居１の南に位置する土坑である。平面プランは楕円形を呈し、長辺4.2m、短辺60cm、深さは70cmを測る。堆積土は４層である。

出土遺物は多く、弥生土器壺体部がある。

土坑５

竪穴住居１の西に位置する土坑である。平面プランは不定形な楕円形を呈し、長辺2.7m、短辺1.7m、深さは20cmを測る。堆積土は１層のみである。

出土遺物は、弥生土器細片である。

土坑６

竪穴住居１の南東側に位置する土坑である。平面プランは不整形な楕円形を呈し、長辺2.5m、短辺1.6m、深さは10cmを測る。堆積土は１層のみである。

出土遺物は、弥生土器細片である。

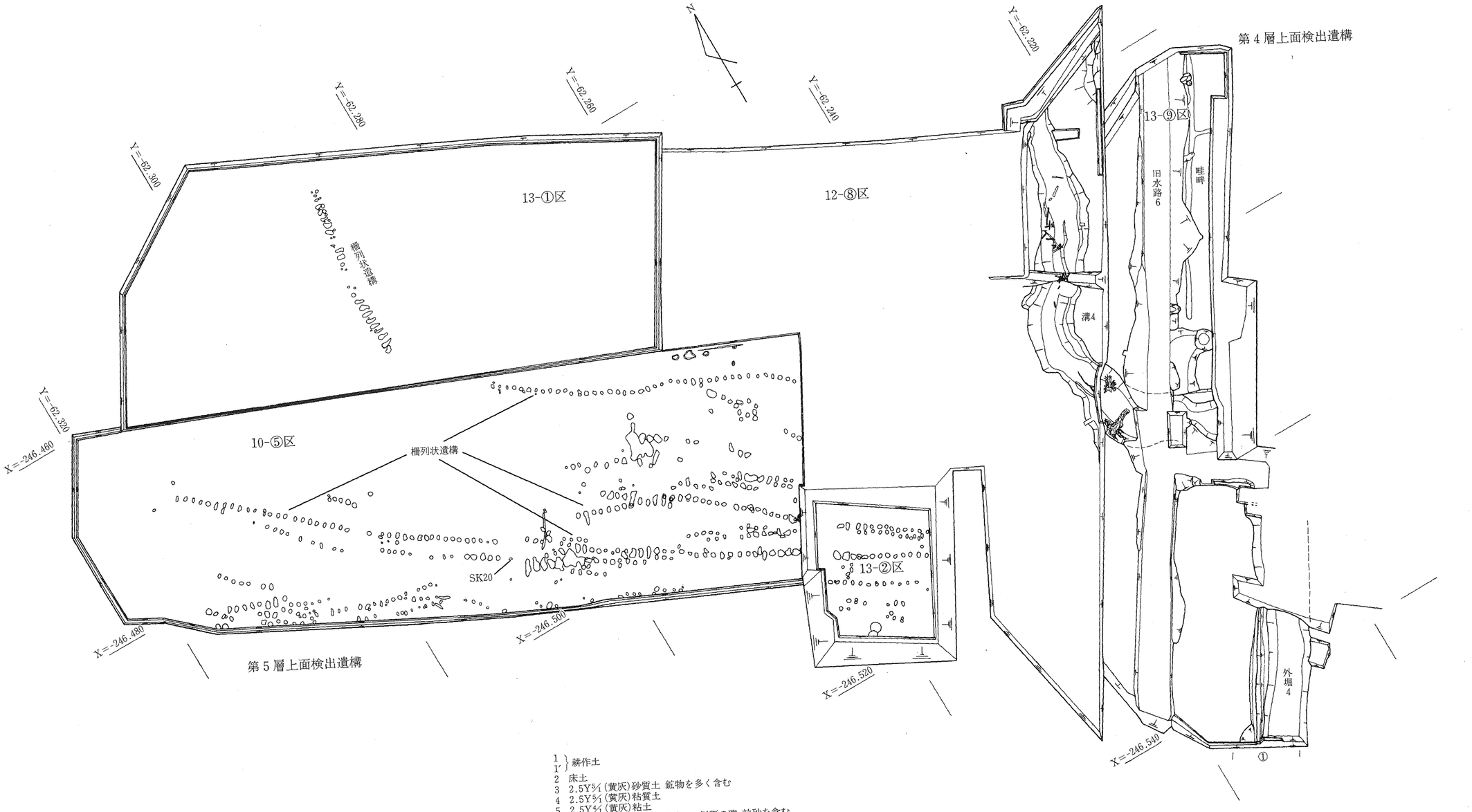
土坑９

竪穴住居１の南西に位置する土坑である。平面プランは不定形な楕円形を呈し、長辺1.6m、短辺１m、深さは20cmを測る。堆積土は１層のみである。

出土遺物は、弥生土器細片である。

土坑10

竪穴住居１の西に位置する土坑である。平面プランは不定形な楕円形を呈し、長辺1.8m、短辺90cm、深さは６cmを測る。堆積土は１層のみである。



第46図　Ⅲ区 10-⑤区・12-⑧区・13-①・②・⑨区遺構平面図、13-⑨区南壁土層図

出土遺物は、弥生土器細片である。

土坑17

竪穴住居1の西側に位置する土坑である。平面プランは不定形な楕円形を呈し、長辺1.4m、短辺30cm、深さは6cmを測る。堆積土は1層のみである。

出土遺物は、弥生土器細片である。

溝1～3（第47図）

竪穴住居1をはさむように、東西にそれぞれ掘削されている。溝1が幅40～50cm、深さ10～20cmで、溝2・3の幅が狭く20cm程度である。埋土は1層である。遺物は、弥生土器細片が出土する。

柵列状遺構（第46・61図、PL.8・93）

調査区の全域で、1列または2列並び、東南から北西方向へほぼ直線的に伸びる土坑列を第5層上面で検出した。旧河川1堆積層上面にもこの列は存在する。大きさは30～50cm、深さ20cm前後である。明確な堀方を持たず、上からの重圧により、押し込まれたような状態で検出した。土坑間は60～80cmの間隔で最長65m検出した。土坑20からは、須恵器杯身（688）が出土する。6世紀末である。東側の調査区は低湿地になっている。遺構の性格は不明であるが、上からの圧力により土の中に入った様相を呈すること、一列・二列など列として並ぶこと、直線的に造られていることなどから、道的な内容をもった遺構の可能性がある。

（3）12-⑧区（第45図、PL.22）

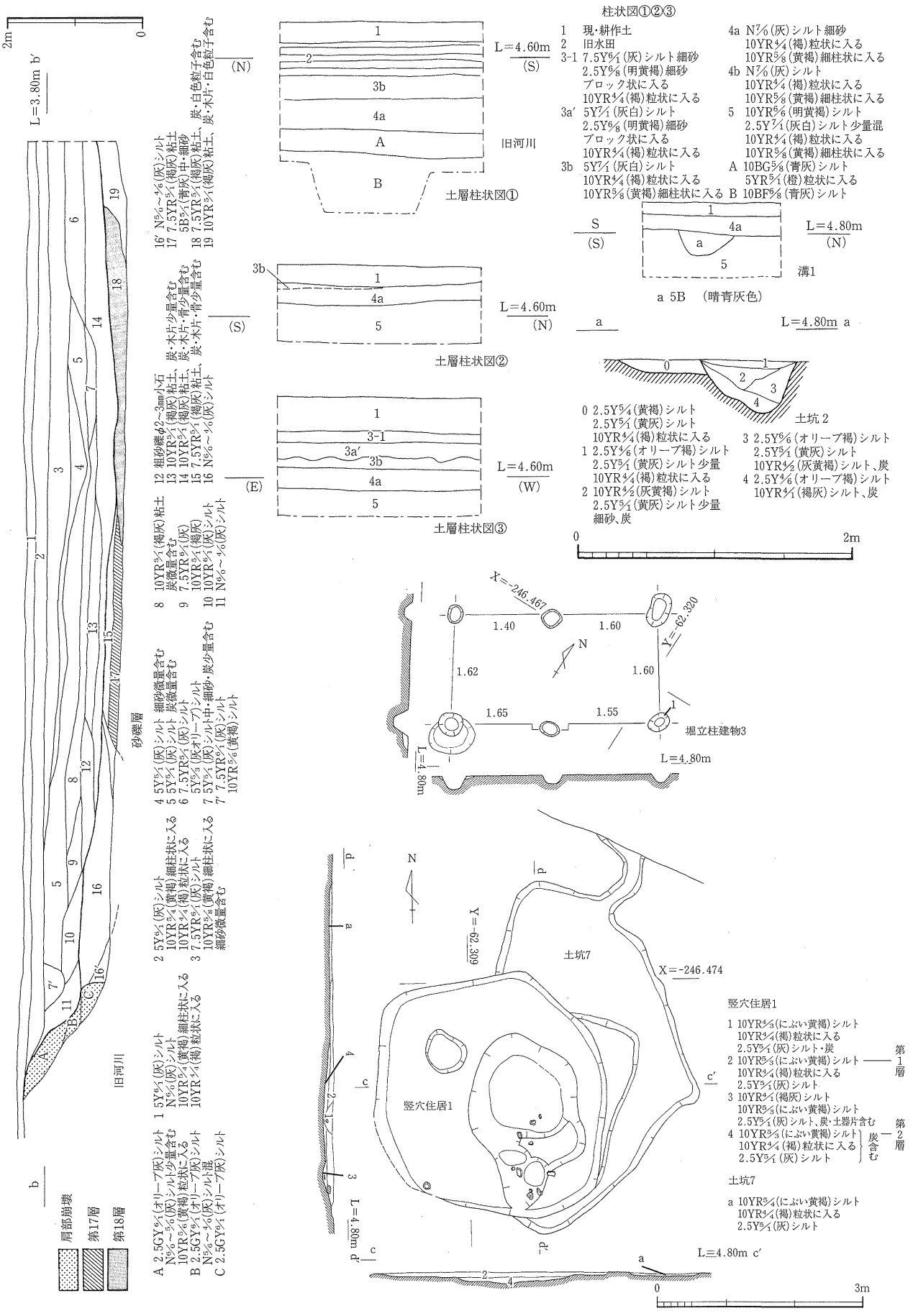
調査面積は、936m²である。12-⑧区では、中世の水田層（基本土層第3層・第4a・b層）を除去した面の第5層上面において、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての旧河川2条を検出した。その他、古墳時代から鎌倉・室町時代を通じて幾条かの自然河川の流れと人工的な溝が重複して位置する。一部は、10-⑤区として平成10年度に調査の進められていた地区でもある。前項からの記述に従って、古い流れの順から記述することにする。

各々の旧河川・遺構は、平面的な検出・土層の堆積状況などからみて、最も古い流れの河床状態を踏襲して、旧河川3→（一時的に＝）旧河川2→旧河川2a→溝（旧河川）2b→溝4の順で変遷したと考えられる。

調査の進行上、上部の水田跡や10-⑤区・13-①区で検出している土坑列等の調査は断念せざるを得なかった。

旧河川3（第48・62・66図、PL.23・95・97・98）

旧河川3は、一見地山に見える黄褐色シルト層を15～20cmほど除去した面が検出面となる。旧河川3は、西から東方向に伸び、幅約16m、深さ1.6m、検出延長約10mに及ぶ。旧河川2と同様に、河床に近い深さで直径約30～60cmの自然木（倒木）を多数検出した。堆積土は、上部がシルト質（旧河川3の第1層～第5層）、下部（旧河川3の第6層～第8層）が青灰色粘土ブロックの混在する砂礫層と木っ端（木屑）・木の葉を多量に含んだ有機質層の互層となり、遺物は主に前者の砂礫層から出土している。なお、旧河川3の肩口上端でT.P3.6m、河床の最深部でT.P2.0mを測る。



第47図　Ⅲ区 10-⑤区 旧河川１・溝１・土坑２ 土層図、堀立柱建物３・竪穴住居１ 平面図・土層図・断面図

旧河川3では層序的な掘削ができ、遺物の時期的傾向を認めることが可能である。埋土の堆積が、河川地形の窪み状の中で連続的に進んだものと考えられ、均質化した状況にある。

平面位置の状況・出土遺物の内容から、流路は、13-①区・10-⑤区から13-②区へ大きく蛇行して折れ曲がり、当地区に繋がるものである。また、東側の13-⑨区では、後述する旧河川2との重複関係が不明確となる。但し、堰状遺構との関係から再検討を要するところでもある。

遺物は、縄文時代晩期の突帯文土器、弥生時代前期の弥生土器、凹石・敲石・磨石・石匙、平滑に加工された板材等が出土している。

旧河川3の第41層では、突帯文土器（843・844）・打製石斧（アルカ216）・木の実（クルミ・コナラ）がある。旧河川3の第40層では、弥生土器（846）・突帯文土器（845）・凹石（707）がある。また、旧河川3の上部の堆積層から、突帯文土器（底部847）、凹石（708）、土師器杯（848）等が出土している。

旧河川2（第48・62・66・73図、PL.23・95・97・98）

旧河川2は、北北東から南南西方向に延び、調査区の中ほどで大きく南東方向にかけて蛇行する。幅約20m、深さ約2.2m以上（現地盤からの深さ3m）である。大半は、高田土居城西辺の外堀1および外堀4と重複する位置に潜っている。一部は、県道上富田南部線拡幅工事に伴う調査の外堀部分で確認されている。最終的には、湧水が著しいために最も古い旧河川の河床まで掘削することができていない。検出延長は約40mに及ぶ。掘削途中や一時期の河床において直径約30～60cmのクス自然木（倒木）を多数検出した。倒木には、根株の部分が認められないことから、本来の位置から遊離したものと考えられる。

特に、法面傾斜や崩落状況は、西肩に比して東肩が急な角度をもって落ち込んでいく状況にある。

堆積土は、主に旧河川3と同様に上部がシルト質、下部が粘土ブロックの混在する砂礫層と木っ端（木屑）・木の葉を多量に含んだ有機質層の互層となり、遺物は主に前者の砂礫層から出土している。

最も下位の湧水の著しいレベルでは、河床ではないがT.P1.8mにおいても遺物が認められる状況にある。

旧河川2からの最も古い遺物として第37層から、縄文土器の宮滝式に属する線状圧痕文の浅鉢（849）がある。

旧河川2では、旧河川2aの掘り残しがあったためか、一部において古墳時代の須恵器が混在している。第33・37層では、比較的、弥生時代前期の小破片の遺物が多いが、縄文土器浅鉢（850）、突帯文土器（851・852）、弥生土器脚台部（853）、古墳時代の須恵器杯身（854）が混在する。第35・38・39層では、相対的に古い遺物が多いと言えるが、確実に「古い層」とは言えない。第36層と第37層の間層では、突帯文土器（856）、弥生土器（855・857・858・859）、凹石（710）等がある。弥生土器の広口壺（857）は、中期前葉に属し、櫛描直線文帯が3条施され、胎土に結晶片岩を含む紀伊北部の土器である。第36層では、弥生時代後期中葉の高杯（860）等がある。

その他、上部の堆積層では、弥生時代後期の甕（861・862・864・875・876）・壺（865・872）・鉢（863・866・873・874）、古墳時代の須恵器（867～870・877）・土師器杯（871）、凹石（709）等がある。木器

は杭（1068～1070）がある。

旧河川２ａ（第48・49・67・68・69図、PL.24・25・99～102）

第５層上面（第４層除去面）で検出した旧河川２の埋没過程の中で、古墳時代後期の流路１条を検出した。幅約20m、検出延長約35mに及ぶ。平成11年度に検出した東側部分11-①区を合わせて、幅員約40mに及ぶ旧河川であることが判明した。

西肩から一段降りたテラス状の平坦部分で４単位の円形状に打設された杭列が検出され、土器の集中する範囲に背を向けるように位置する。杭は、直径３㎝前後の太さである。杭は、直径1.2m前後の広さに、不揃いの状態で一列ないし二列に打ち込まれている。テラス状の平坦部分の北から南東にかけて約８mの距離に、北東側の流れの強い部分に向かって孤を描くように４箇所に配置されている。

遺物は、古墳時代に関する多量の土器と共に木製品も出土している。特に、西側の微高地から廃棄されたとみられる土師器坏・高坏、須恵器の坏・蓋が完存品で多量に出土している。４Ｈ25ｋ・25ｌ、５Ｈ１１・２１の第26層・第27層で、遺物が最も多い。これらの遺物群は、出土した位置関係から旧河川２ａ西側からの廃棄行為が考えられるが、遺物そのものには特別視するようなものの出土を見ていない。河川の中で何条かの流れが重複して、土砂堆積を複雑化させていて土器類の層位的な関係が把握できない状況にある。

旧河川２ａの第５層・又は第７層下半では、多量の須恵器と共に貝殻（種類不明）も出土している。古い様相の須恵器の一群として、陶邑編年（以下、同じ）Ⅰ型式第５段階（ＴＫ47）～Ⅱ型式第２段階（ＴＫ10）の杯身・杯蓋・高杯が認められる。新しい様相の須恵器の一群として、Ⅱ型式第４・５段階（ＴＫ43・ＴＫ209）の杯身・杯蓋・高杯が圧倒的多数を占める。木器は、杭（1071～1074）がある。

古墳時代の須恵器の内、878・953・956等の軟質で瓦質に近い状態のものが散見される。調整で見ると、外面底部調整の基本は回転ヘラケズリ、ヘラケズリと言うよりヘラ切りに近い表現の方がよいもの（925）も含んでいる。ロクロの回転方向は、基本的に右回りである。大雑把には、右回り３に対して、左回り１ほどの比率となる。中には、ヘラ記号の認められるもの（杯身933・934・936・939・946・949、杯蓋886・887・910・919・921・922・926）がある。杯身・杯蓋・高杯の器種において、胎土の粗密・回転ヘラケズリのロクロ回転方向などの相関関係は存在しないようである。

古墳時代の土師器には、杯（957～969）・高杯（974～977）・鍋（972）・把手付鍋（971）・小形甕（980）等がある。他に、旧河川２ａの堆積層に混在して弥生時代中期後葉の水差形壺（979）・後期後半の鉢（981・982）等がある。

溝（旧河川）２ｂ（第48・49・70・72・73図、PL.102・159）

第５層上面（第4層除去面）で検出した旧河川２の埋没過程の中で、古墳時代後期末の溝１条（溝２ｂ）を検出した。調査時点では、「旧河川２ｂ」と呼称して行っている。ここでは、旧河川２ａ埋没後すぐに人為的に掘削された溝と判断するに至ったため、「溝２ｂ」に改めて記述を行う。溝２ｂは、北から南方向に緩やかに蛇行しながら延び、調査区の中ほどで大きく南東から東方向に向けて折れ曲が

る。それ以南は、高田土居の外郭部の北西隅部分に潜り込む状態となる。その地点からは、木製の加工材（1075・1076）が出土している。

溝２ｂは、幅約３～4.5m、深さ約40～70cm、検出延長約30mに及ぶ。堆積土は、極めて多量の木っ端（木屑）・木の葉を含む有機物を主体としている。

出土遺物は、弥生土器（991・988・989）の古墳時代の土師器（985・986・994・1001・1003～1005）・須恵器（987・990・992・993・995・1000～1002・1006）がある。また、多数の丸太杭に混在して竪杵（1066）長さ91.8cm・脱穀面及び精米面擦り面部径６cm・握り部径３cm、樹種はカシ類である。先端部抉り入り加工材（1064）が出土している。

溝４（第48・70図、PL.26）

第４ａ層上面（第３層除去面）において、室町時代の溝一条を検出した。流れの方向としては、殆ど溝２ｂと同様の状況を辿る。東側の13-⑨区の外堀４に連続する流れである。

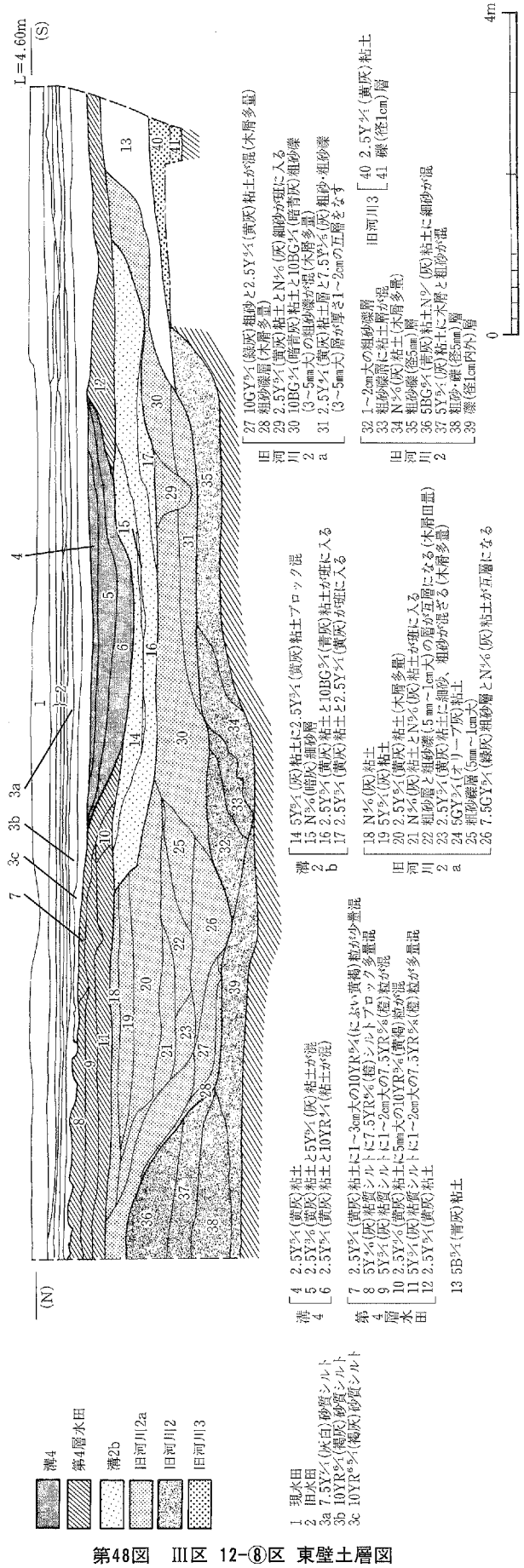
溝４は、幅約3.5～4m、深さ40～80cm、検出延長約28mに及ぶ。堆積土は、下部に移るに従って木っ端（木屑）・木の葉が極めて多い状況となる。

遺物は、土師器皿（1007）等があるが、該当時期の遺物は極めて僅かな出土量である。

その他の遺構

調査区南側の旧河川３以南では、何れの面においても顕著な遺構は検出されていない。

また、旧河川２の西側では不整形な土坑を２基検出したに留まり、なおここからの出土遺物は皆無であった。以上記述してきたように、12-⑧区での調査状況は、当然のことながら旧河川３と旧河川２において異なった埋没状況を呈



第48図　Ⅲ区 12-⑧区 東壁土層図

している。基本的に旧河川３と旧河川２の堆積層の違いは、埋没過程の違いを反映しており、旧河川３は比較的ゆったりとした埋没過程を示すのに対して、旧河川２では遺物の出土状況を踏まえて考えてみると、複雑な流れの重複と土砂の堆積が断続的に繰り返された状況にある。

また、古川支線を挟んで平成10･11年度に実施した、12-⑧区に接する東西両側の調査区においても旧河川を検出しており、高田土居城の西側に旧河川の大きな広がりを認めることができる。南側に大年神社の鎮座するこの一帯が、高田土居城から伸びてくる微高地の先端部分を形成し流路方向の変換点になっていたものと考えられる。このことや、他地区の調査成果から、旧河道の全体範囲の復元が可能となってきている。

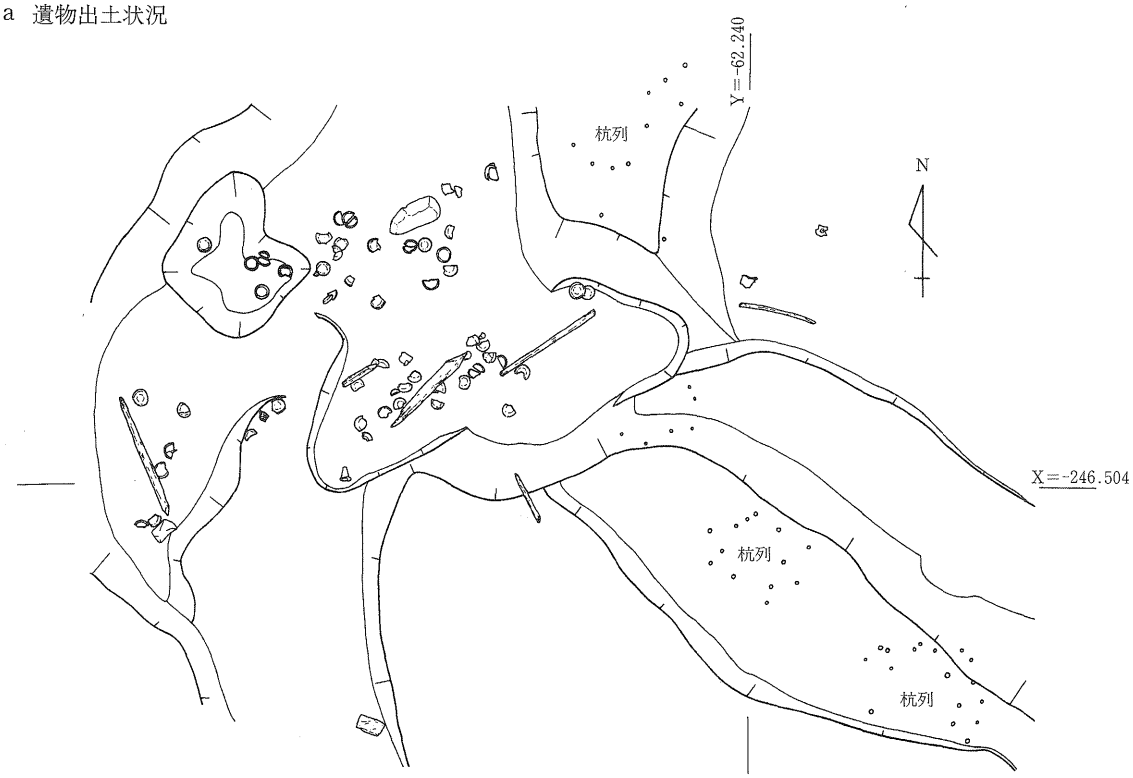
出土遺物では、層序的にあまり明確にできていないが、豊富な遺物量の中に弥生時代中期の遺物（中期前葉広口壺857・中期中葉脚台付鉢853・中期後葉水差形壺979）が散見されるところは注目すべき点である。調査範囲内において、直接当該期に結びつくような遺構が確認されていない。このことは、近接する他の地点において弥生時代中期に該当する遺構が埋もれていることを示唆するものである。

（４）13-①区（第45・50・51図、PL.48～51）

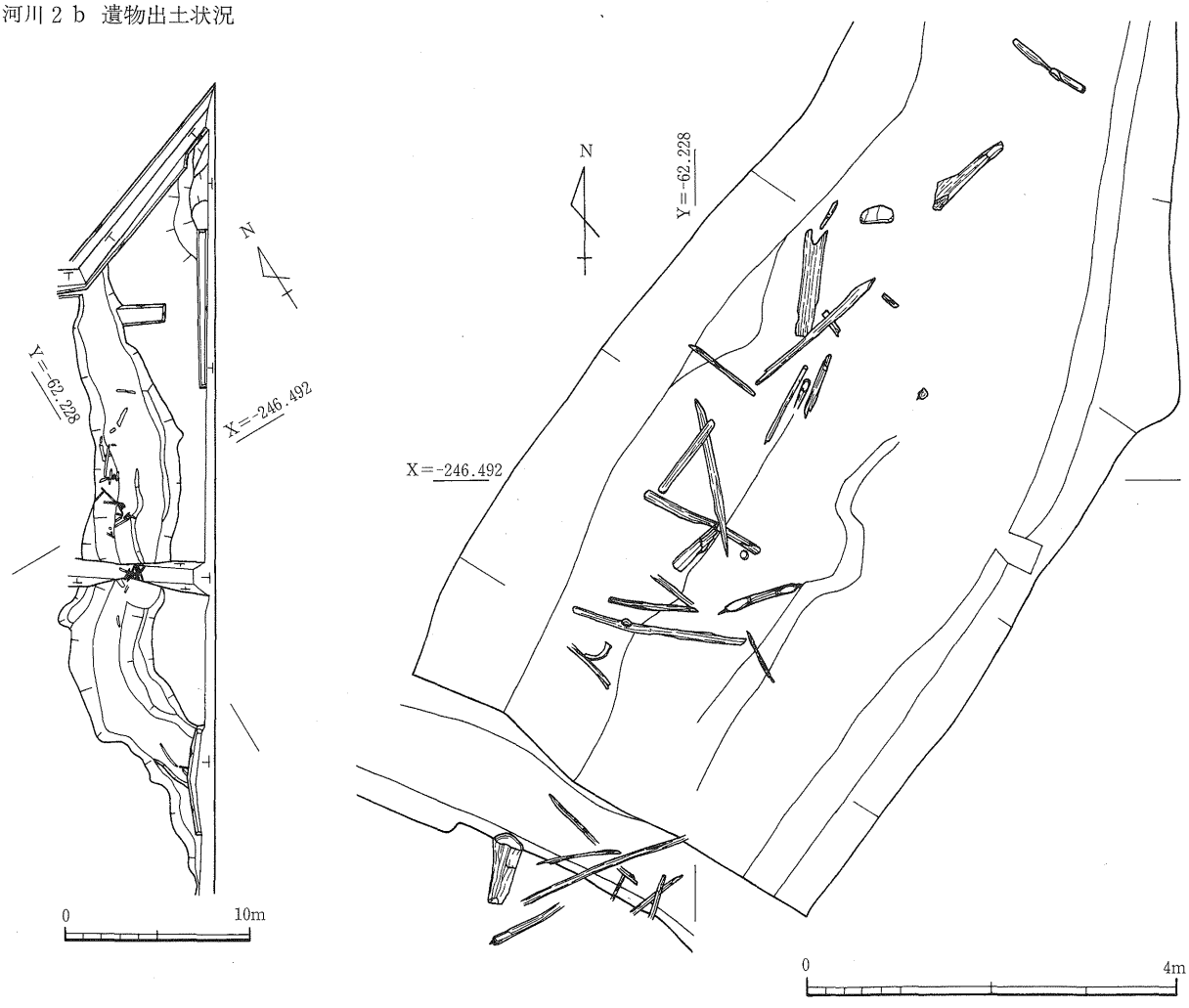
面積は1,247㎡である。西側が微高地で安定し、基盤面となる第５ｂ層の標高は約4.7mと高く、堆積層は新旧の耕作により削られ薄い。西側の基本層序は、第１層：現在の水田耕作土、第３層：室町時代の水田耕作土、第４ａ層：鎌倉時代～室町時代の水田耕作土となり、第５ｂ層面に弥生時代前期以後の遺構が形成される。東側は同時期に形成された旧河川１となり、河川埋没後は低湿地的な堆積状況となる。よって東側堆積層は厚く、基本層序は、第１層：現在の水田耕作土、第２層：現在の水田床土、第３層：室町時代の水田耕作土、第４層：鎌倉時代～室町時代の水田耕作土、以下旧河川堆積層となり、河川底は標高約2.9mとなる。当地区第５ｂ′層は、南接する調査区10-⑤区第５層に対応する。

第５ｂ層下面から、弥生時代前期の掘立柱建物２棟と、柱穴及び土坑を多数検出した。いずれもが微高地に存在する。また、この面から形成される旧河川１の西肩及び下層から、弥生前期土器及び突帯文土器、石器が多数出土した。掘立柱建物１は、西側中央に位置し、棟方向は北東を向く。２間×１間で、縦3.3m、横２mを測り、柱掘方は直径30㎝、深さ20㎝である。掘立柱建物２は、建物１の東側に近接し、棟方向は東を向く。２間×２間で、縦3.5m、横1.8mを測り、柱掘方は直径30㎝、深さ20㎝である。土坑1130は、南北1.4m×東西2.5m×深さ0.2mの不定形を呈し、周縁に焼土を含む。土坑1213は、南北0.5m×東西1.4m×深さ0.1mの長楕円形を呈し、埋土から弥生土器及び突帯文土器小片が出土した。旧河川１は、調査区東側に位置し全体の約１/３を占め、北から南に流れる自然河川である。今回及び既往の調査で、河川底から弥生時代前期中・新段階の遺物のみ確認されている。河川内堆積層は細分できるが、大きくは上層･中層･下層に分けられる。上層は１mに及ぶ厚く単調な粘土層で形成され、遺物はない。中層は西肩部を中心にやや複雑な堆積を示し、粘土と木屑を含む粘砂の互層となり、弥生前期土器を含む。下層はより細かな砂層と粘土の互層となり、土器を含む複雑な堆積層となる。基盤層は砂礫となるが、直上から多量の土器・石器及び流木群が出土した。西肩部の土器

旧河川２ａ　遺物出土状況



旧河川２ｂ　遺物出土状況



第49図　Ⅲ区 12-⑧区 旧河川２ａ・２ｂ 遺物出土状況

は廃棄された状況を示し、西側微高地を弥生時代前期生活面に対応させることができよう。

第５ｂ層上面からも、弥生時代前期の土器棺と、柱穴及び土坑を多数検出した。土器棺151は、調査区西端中央に位置し、弥生土器壺を斜めに埋置する。土坑の掘方は、直径30cmの楕円形で、深さは20cmを測る。土器は、斜め上部１/３が削平もしくは内部に落ち込む以外ほぼ完形で、弥生時代前期中段階の壺と考えられるが、状態は不良である。土坑170は、南北2.6m×東西1.2m×深さ0.1mの長楕円形を呈し、埋土から弥生土器及び突帯文土器小片が出土した。土坑508は、南北1.6m×東西0.8m×深さ0.1mの不定形を呈し、埋土に焼土及び炭を含む。これらの遺構埋土は、いずれも基盤面である第５ｂ層に近似した暗褐色土であり、第５ｂ層下面の遺構埋土に近似する。

また５ｂ層上面から、前述の暗褐色土を埋土とする弥生時代前期遺構の他に、第４ｂ層を埋土とする、東西方向の浅い柵列状遺構を１列検出した。これは、平成10年度の調査区10-⑤区で、６世紀後半の須恵器と共に検出されており、今回も一連のものと考えられる。

13-①区の出土遺物（第61～65図、PL.95～98・159）

当地区の上部の水田層や第５ａ層上面の遺構からの遺物の出土量はごく僅かであり、ほとんどが図示できるようなものではない。遺物の大半は、調査区の東側で検出した旧河川１から出土した縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器・石器である。

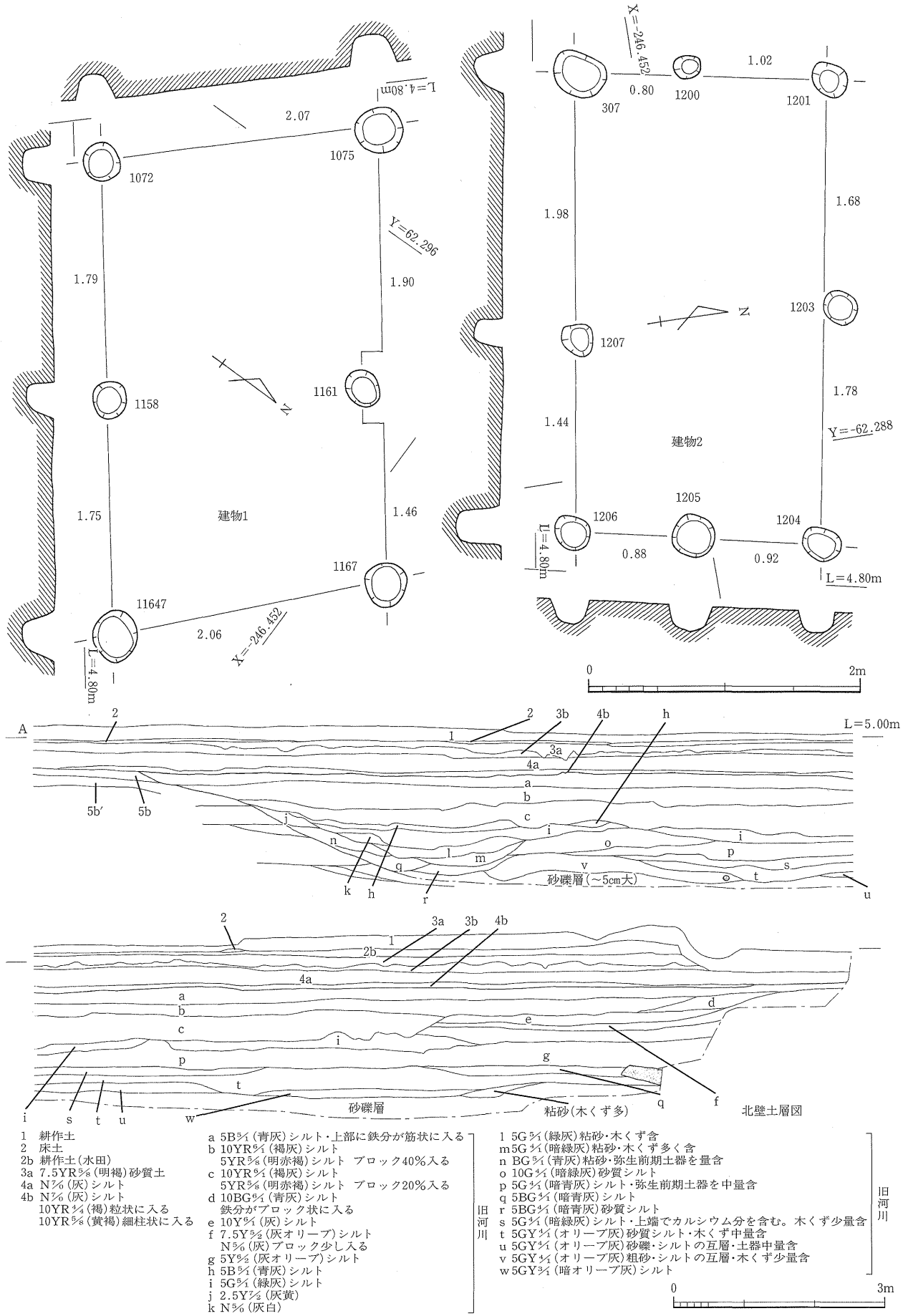
第５ｂ層上面の遺構からは、土坑169・441・543等からごく僅かであるが、時期不詳の土師器の小破片が出土している。土器棺151の壺(715)は、遺存状態が悪く本来の形態に復元できていない。壺(715)は、体部の張りが少なく、頸部が短く全体に胴長の形態から弥生時代前期中段階の壺とみられる。一見、松菊里型土器に通じる器形のように思われる。

旧河川１の遺物には、弥生時代前期の土器と突帯文土器がある。主に河床直上（底直上）と堆積層の下層から集中して出土している。両者の層位から出土した土器の構成比率は算出できていない。河床直上（底直上）からの遺物には716～752がある。突帯文土器の深鉢には716～725・728～731がある。口縁部に扁平な垂れ下りの突帯を付した（716～718・720～722)、断面が小さい三角形状の突帯を付した（723・724）がある。各々の形態的特徴から、前者は紀伊南部で特有の瀬戸タイプの系統に属する土器、後者は近畿一円で通有の長原式に親縁性をもつ土器と理解できる。弥生土器の甕には726・727、732～739がある。弥生土器壺は740～742がある。743～752は弥生土器底部である。

下層出土資料においても同様の傾向が認められるが、図示できた資料で見る限り、河床直上(底上)の資料は長原式系統の土器を含むのに対して、下層出土資料には含んでいない。これらの資料は、層位的にも型式的にも先後関係を示す資料とみて大過ない。

その他、突帯文土器において、口縁部に付される突帯と体部に付される突帯の位置・形状・条数の変化を観察し、口縁端部にみられる刻みの有無・形態等の観察を付加することによって、土器の型式変化の方向性は把握できるものである。これらの視点に煤の付着の有無・部位について統計的な処理ができれば、突帯文土器の深鉢と弥生土器の甕との機能的な変化の側面を推し測ることも可能である。

土器の内、大形の広口壺口縁部(740)は、口縁部端面にヘラによる縦長の刻みが施される。壺(767・



1　耕作土
2　床土
2b　耕作土(水田)
3a　7.5YR5/6(明褐)砂質土
4a　N7/0(灰)シルト
4b　N7/0(灰)シルト
　10YR7/4(褐)粒状に入る
　10YR5/8(黄褐)細柱状に入る

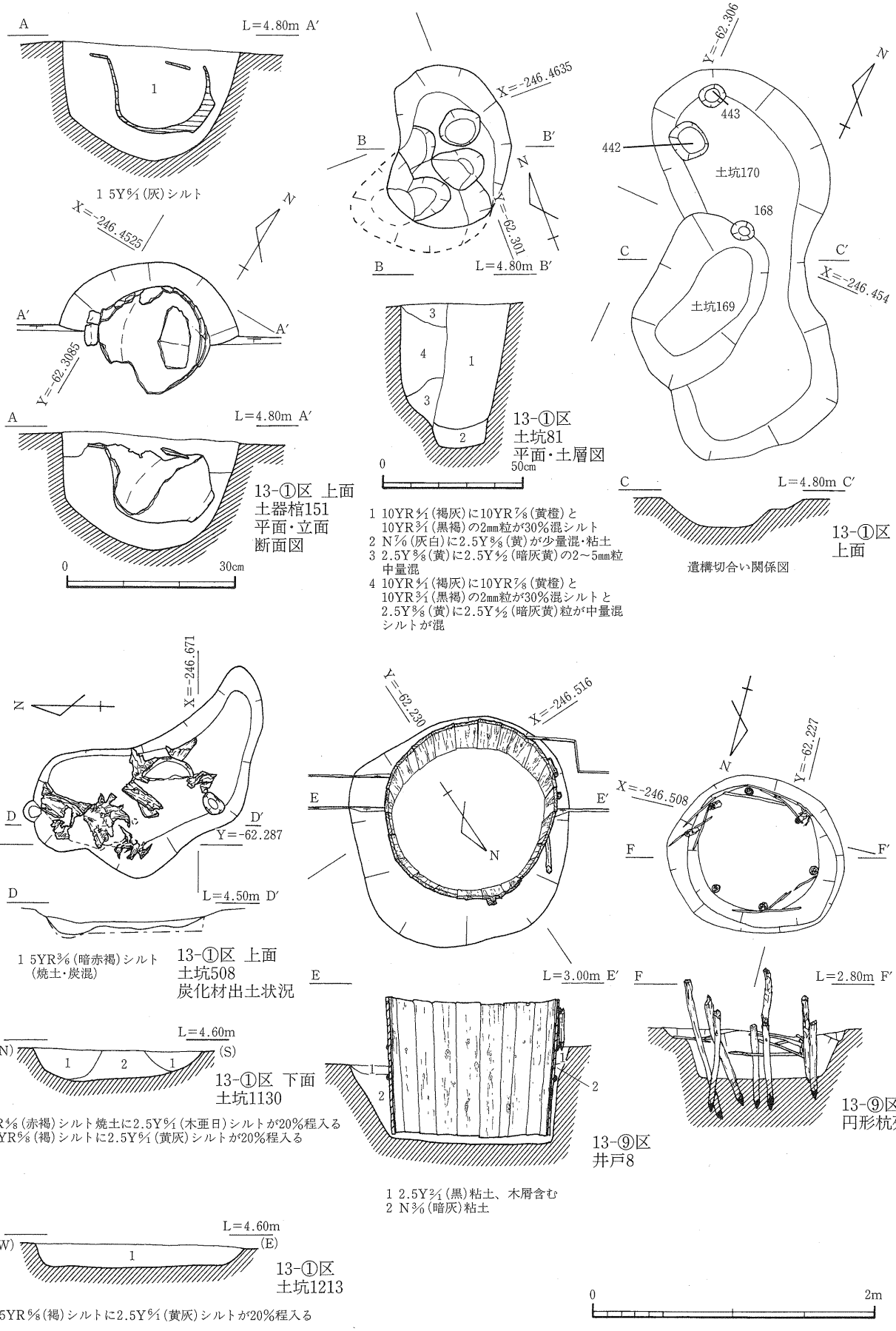
a　5B5/1(青灰)シルト・上部に鉄分が筋状に入る
b　10YR5/1(褐灰)シルト
　5YR5/6(明赤褐)シルト　ブロック40%入る
c　10YR5/1(褐灰)シルト
　5YR5/6(明赤褐)シルト　ブロック20%入る
d　10BG5/1(青灰)シルト
　鉄分がブロック状に入る
e　10Y5/1(灰)シルト
f　7.5Y5/2(灰オリーブ)シルト
　N5/0(灰)ブロック少し入る
g　5Y5/2(灰オリーブ)シルト
h　5B5/1(青灰)シルト
i　5G5/1(緑灰)シルト
j　2.5Y5/2(灰黄)
k　N5/0(灰白)

旧河川

l　5G5/1(緑灰)粘砂・木くず含
m　5G5/1(暗緑灰)粘砂・木くず多く含
n　BG5/1(青灰)粘砂・弥生前期土器を量含
o　10G5/1(暗緑灰)砂質シルト
p　5G5/1(暗青灰)シルト・弥生前期土器を中量含
q　5BG5/1(暗青灰)シルト
r　5BG5/1(暗青灰)砂質シルト
s　5G5/1(暗緑灰)シルト・上端でカルシウム分を含む。木くず少量含
t　5GY5/1(オリーブ灰)砂質シルト・木くず中量含
u　5GY5/1(オリーブ灰)砂礫・シルトの互層・土器中量含
v　5GY5/1(オリーブ灰)粗砂・シルトの互層・木くず少量含
w　5GY5/1(暗オリーブ灰)シルト

旧河川

第50図　III区 13-①区 堀立柱建物1・2 平面図・断面図、北壁土層図



第51図　Ⅲ区 13-①区 土器棺151・土坑81・508・1130・1213 平面図・立面図・土層断面図
13-⑨区 井戸８・９ 平面図・立面図・土層断面図

768）は、肩部に瘤状の乳状突起を付した破片である。異形の壺形土器（782）は、口縁部がラッパ状に大きく開き、頸部に削り出しの段を有した土器である。旧河川1の資料の中では、前期でも紀伊Ⅰ-2様式の古い様相に属する範疇ものである。深鉢（805）は、口縁端部からやや下がった位置が肉厚になり、扁平な垂れ下りの突帯の形状を遺存させている。口縁端部には、御坊市堅田遺跡・和歌山市太田黒田遺跡に類例の求められる櫛状の施文具による刺突が認められる。層位が不明であるが、広口壺（821）は、口縁端部が短く外反し、端面に櫛状工具による小刻みな波形を呈する櫛描文が施されている。旧河川2から出土した太頸壺（857）等と同じ段階と判断できるものであろう。

縄文土器・弥生土器の何れにおいても、チャート・石英等の丸い砂粒を多く含んだ地元特有の胎土であるが、中には紀伊北部で通有の結晶片岩を含んだ土器（821）や角閃石を含み、色調等から河内地域と判断される土器（823）も認められる。

その他、図示していないが、旧河川1の下層から土器破片を転用し周縁部を打ち欠いて円形に形を整えた円盤形土製品1点も出土している。

木器には、鋤状の大振りの木製品（1061）がある。ほぼ中央部と片方の端に近い位置に、少し朽ちているが差込み孔が各1箇所に穿たれている。板目板の部材を使用している。

石器には、旧河川1の河床直上から硬質頁岩質の泥岩を素材とした凹石（704）、ややきめの粗い花崗岩質の砂岩を素材とした凹石（706）、長軸の両端に打ち欠きのある硬質の泥岩を素材とした石錘（705）等がある。凹石（706）は、側縁部に軽い敲打の痕跡が認められる。

古墳時代以後の遺物は、前述したようにほとんど認めることができない。

（5）13-②区（第52～54図、PL.52～55）

13-②区は10-⑤区と12-⑧区に挟まれた調査区で、調査面積は246㎡である。調査区は旧河川3が横断し、南東隅部分で旧河川の南肩となる微高地が一部存在する。

微高地の基盤面である第5b層上面の標高は約4m、河川底は約2.5mを測る。基本層序は、10-⑤区と同じ状況を呈する。

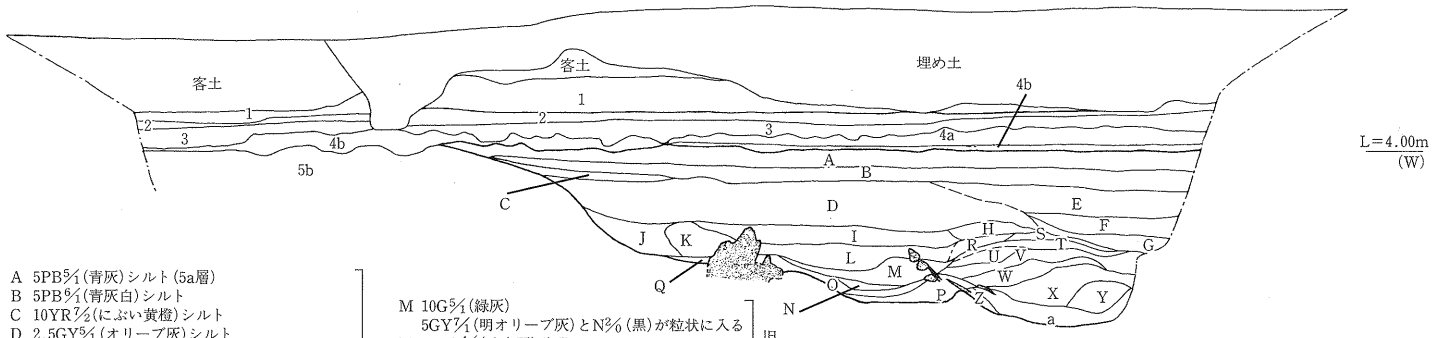
第4a層上面からは、室町時代の東西方向を示す水田畦畔1条と牛馬および人の足跡を検出した。畦畔は調査区に平行してやや北に傾き、幅1.3m、検出延長は11mに及ぶ。この畦畔は第3層が耕作土であった時期のものであると考えられ、畦畔盛土は第4a層に近似する土により形成されている。

第4b層を除去した段階で、旧河川3と柵列状遺構を検出した。旧河川3内からは堰状遺構を検出している。柵列状遺構は、旧河川堆積層（第5a層）の上面で検出したもので、楕円形の窪みが一列に並ぶものである。個々の大きさは、直径30～40cm、深さは5cm前後である。方位はやや北に傾き、東西方向に4列確認した。形状や並びから、10-⑤区・13-①区で検出したものと同様の遺構と考えられる。

旧河川3

調査区内において河川の南肩を一部確認したにとどまるが、南北幅12m以上、深さ1.5mを測る。13-①区・10-⑤区で確認した旧河川1の下流部にあたり、北から南への流れが、調査区内においてほ

南壁土層図④



1　現耕作土
2　旧耕作土・床土
3　10YR5/1(褐灰)
4a　N7/0(灰)シルト
　5YR7/8(橙)シルト
4b　5PB4/1(暗青灰)シルト
5b　7.5YR8/6(橙)シルト

A　5PB5/1(青灰)シルト(5a層)
B　5PB5/1(青灰白)シルト
C　10YR7/2(にぶい黄橙)シルト
D　2.5GY5/1(オリーブ灰)シルト
E　7.5Y5/3(オリーブ黄)弱砂質シルト
F　10YR6/1(緑灰)砂質シルト
G　2.5GY4/1(暗オリーブ灰)粘砂
　炭を少し含む
H　10Y7/1(灰)シルト
I　5G4/1(暗緑灰)砂質シルトが縞状に入る
J　10BG3/1(青黒)シルト
　5GY7/1(明オリーブ灰)ブロックが20%入る
K　5GY7/1(明オリーブ灰)シルトのかたまり
L　10G4/1(暗緑灰)シルト
　5GY7/1(明オリーブ灰)とN3/0(黒)が粒状に入る

旧河川3

M　10G5/1(緑灰)
　5GY7/1(明オリーブ灰)とN3/0(黒)が粒状に入る
N　10BG4/1(暗青灰)砂礫
O　10Y4/2(オリーブ灰)砂質シルト
P　10G3/1(暗緑灰)砂質シルト
Q　10BG2/1(青黒)シルト
R　7.5Y4/1(灰白)砂質シルト
　10Y7/1(灰)のブロックが混ざる
S　5B3/1(明青灰)シルト
T　2.5GY7/1(明オリーブ灰)シルト
　N4/0(灰)のブロック多く入る
U　N4/0(灰)シルト
V　5BG3/1(暗青灰)シルト
　5GY7/1(明オリーブ灰)混ざる

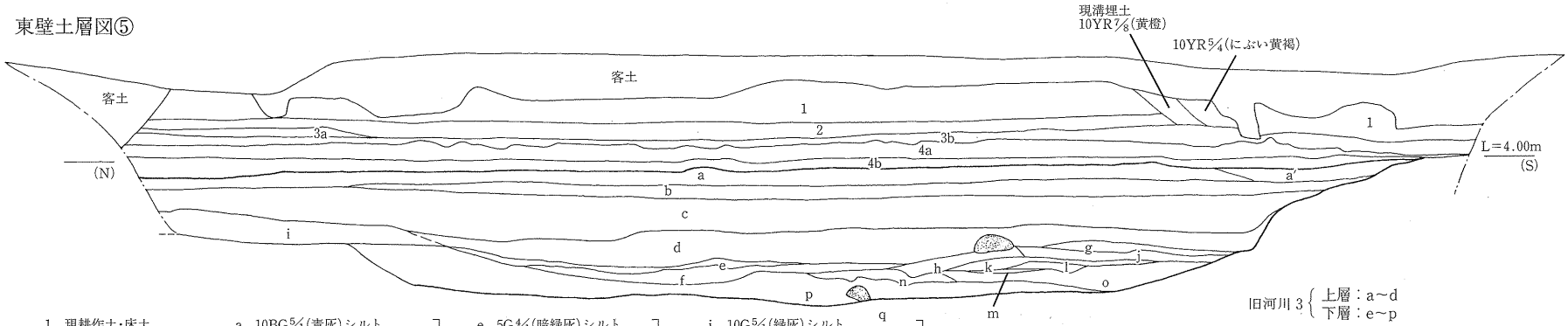
旧河川3 溝状遺構

W　7.5Y6/2(灰オリーブ)粘質
　炭少し含む
X　2.5GY(明オリーブ灰)シルト
Y　2.5GY(明オリーブ灰)シルト
　5G4/1(明緑灰)のブロック多く混ざる
Z　10BG4/1(暗青灰)粘質
a　10BG4/1(暗青灰)砂礫質シルト
　炭を多く含む

溝状遺構

旧河川3 { 上層：A～I / 下層：J～Q }

東壁土層図⑤



1　現耕作土・床土
2　旧耕作土・床土
3a　7.5Y7/1(灰白)砂質シルト
　10YR7/2(にぶい黄橙)粒混
3b　10YR6/1(褐灰)砂質シルト
　5YR5/8(明赤褐)粒混
4a　N7/0(灰白)シルト
　5YR7/8(橙)粒混
4b　5PB5/1(暗青灰)シルト
　5YR5/8(橙)粒混

旧河川3

a　10BG5/1(青灰)シルト
　5YR6/8(橙)粒混
a'　5BG5/1(青灰)シルト
　7.5YR6/8(橙)が3/4程入る
b　10BG6/1(青灰)シルト
c　2.5GY5/1(オリーブ灰)シルト
　炭小片含む
d　5BG4/1(暗青灰)シルト

旧河川3

e　5G4/1(暗緑灰)シルト
　炭化物がすじ状に入る
f　10G4/1(暗緑灰)シルト
　炭化物がすじ状に入る
g　N5/0(灰)砂礫
　2.5Y7/6(明黄褐)が混ざる
h　5G4/1(暗緑灰)砂礫
　最大5cm大含む

旧河川3

i　10G5/1(緑灰)シルト
　土器含む
j　2.5GY8/1(灰白)粘土
　砂礫をブロック状に含む
k　7.5Y5/1(灰)粘砂
　2.5Y7/6(明黄褐)混
l　N5/0(灰)砂礫
m　5G4/1(暗緑灰)粘砂　炭多く含む

旧河川3

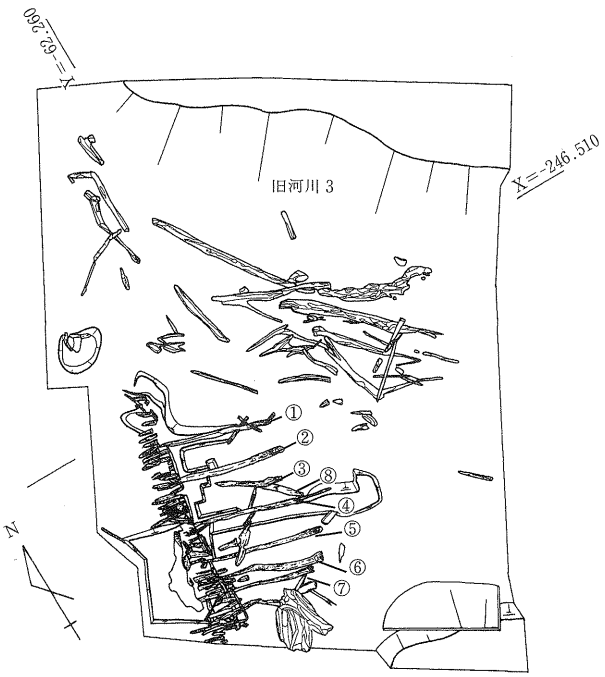
n　5Y6/1(灰)砂質シルト
　炭多く含む
o　10G5/1(緑灰)粘砂礫
　最大3cm大含む
p　7.5GY4/1(暗緑灰)シルト
　炭化物中量含む
q　N5/0(灰)砂礫(地山)

旧河川3

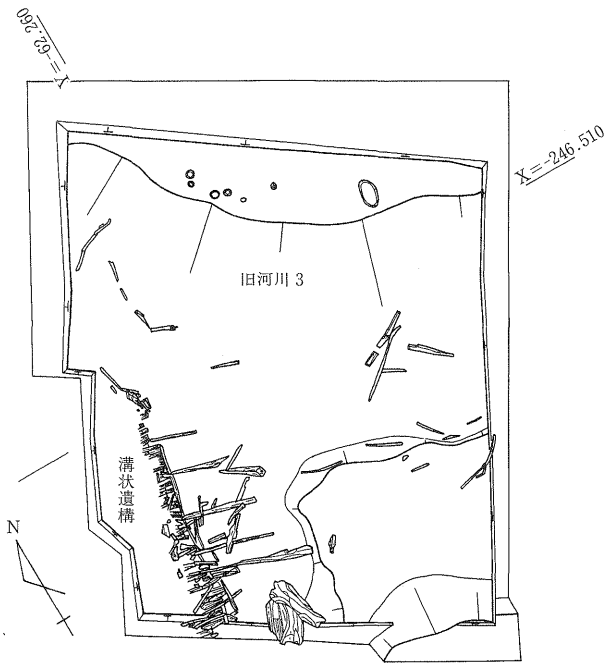
旧河川3 { 上層：a～d / 下層：e～p }

0　4m

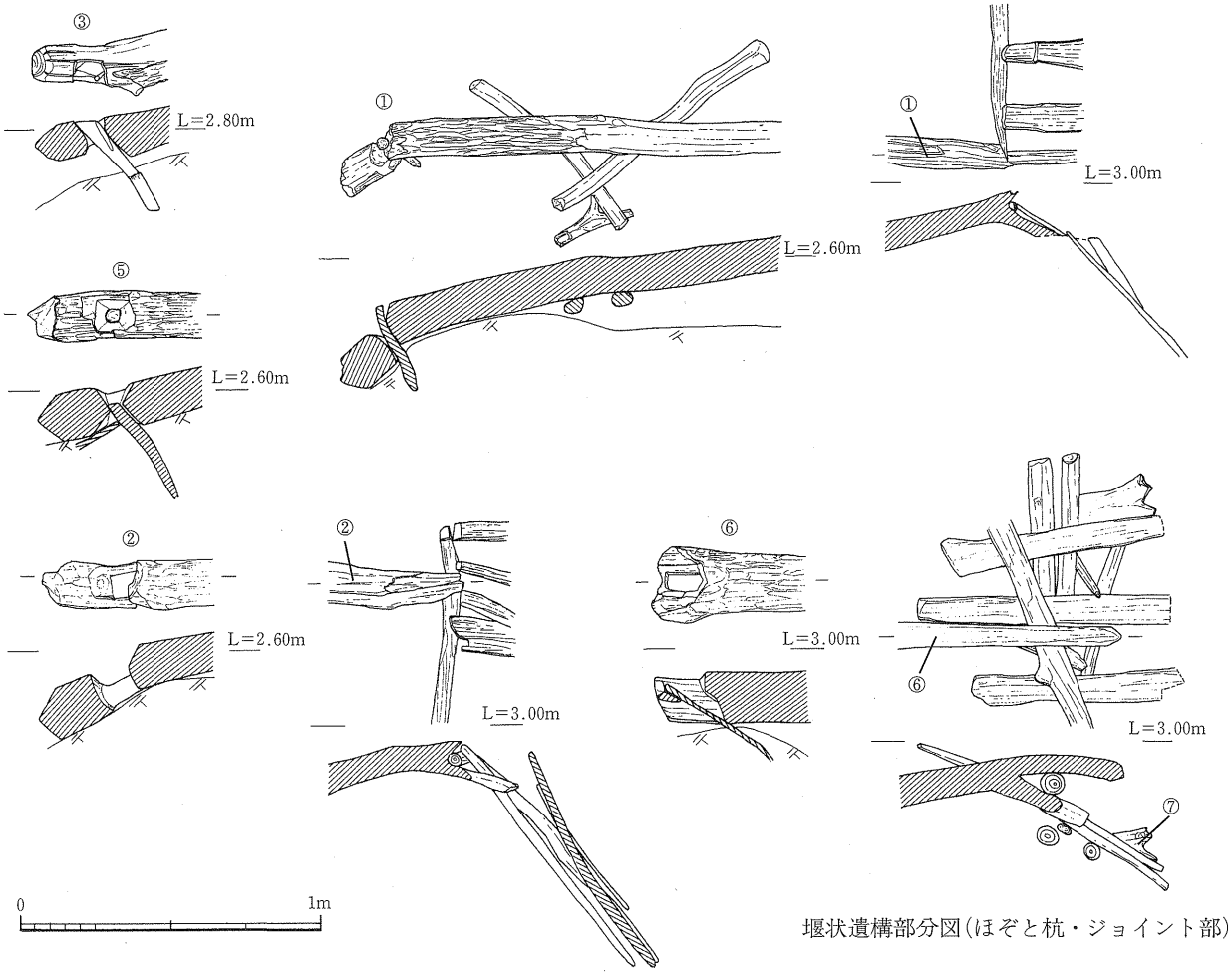
第52図　III区 13-②区南壁・東壁土層図



旧河川3完掘状況



旧河川3上層除去面



堰状遺構部分図(ほぞと杭・ジョイント部)

第53図　III区 13-②区遺構平面図・堰状遺構部分図

ぼ直角に屈曲して東に向かうものである。これの下流にあたる12-⑧区では、その延長部を確認しており、埋土の一部は旧河川２ａによって削り取られている。

堆積層は上流部の旧河川１と近似し、大きく上層と下層に分けることができる。ただ、西壁の断面を写真で検討した結果、下層は三時期に存在した可能性がある。上層は１mに及ぶ厚く単調なシルト層で形成され、出土遺物は最上層に微細な土器破片が微量あるのみで、時期の判明するものは出土していない。南壁で確認できるＥＦＧ層は、Ｄ層の上面から切り込む層であるが、その性格は不明である。下層は約40～60cmの厚みの中でシルト層、粘土層、砂礫層が堆積し、土器、流木や木屑を含む。地山と考えられる灰色砂礫層直上から弥生時代前期の土器片と流木群が出土し、旧河川北半部（堰状遺構以東）の砂礫層直上からも加工痕跡の認められる丸太材や割材を含む流木群を多数検出した。

上層のシルト層を除去した段階で、調査区の南西側において堰状遺構を検出した。また、調査区の南壁断面で溝状遺構と考えられる落ちを確認した。

堰状遺構

旧河川が屈曲する付近で東に流れる水を制御することを目的として構築されたものであり、横木とそれを支える８本の控え材（支え木）、そしてその前面に隙間なく打ち込まれた板杭・蜜柑割の割材杭と丸杭で構成される。この遺構は調査区南端から北方向へ7.6m程度検出したが、南端は調査区南壁断面に割材杭と横木が遺存していたため調査区外に続いているのが確認できている。時期的には検出された面（下層上面）から地山までの間の層（第54図土層図）は、青灰色砂礫と暗青灰色シルトおよび灰色の粘砂層であり、これらの層には弥生時代前期の遺物を含む。

構造

横木の長さは、確認部分で5.4m、直径12cm程であり細く残存状態が不良で、複数本を継いでいた可能性もある。控え材は８本確認した。控え材⑧を除いて横木に直交する、不定間隔で平行に置かれている。全ての控え材は、外皮の残る広葉樹原木が用いられ、基本的には、先端が二股に分かれる自然木を選択している。控え材①は、長さ3.3m、直径14cmを測る。先端部の二股部分に、横木を交差させ組み合わせている。基端部にはホゾ穴を開け、長さ30cm、幅５cmの杭を打ち込み固定している。なお、ホゾ穴部分より後ろは、地面へ折れ曲がっており、前方からの強い圧力があったことを示す。控え材②は、長さ3.16m、直径16cmを測る。先端部の二股部分に、横木を交差させ組み合わせている。基端部にはホゾ穴を開けるが、杭は残存しない。控え材①・②間は、ほぼ平行に88cm間隔である。控え材③は、長さ２m、直径16cmを測るが、他の支柱に比べ短く、かつ横木に連結する前に途切れている。基端部にはホゾ穴を開け、長さ40cm、幅５cmの杭を打ち込んでいる。控え材④は、長さ3.3m、直径16cmを測る。先端部の二股部分に、横木を交差させ組み合わせている。基端部を凹状に抉り、長さ1.1m、直径４cmの棒を斜めに刺した上で、更にそれを補強するように長さ30cm、幅５cmの杭を打ち込んでいる。支柱②・④間は、ほぼ平行に1.1m間隔である。また控え材④の基端部から斜め前方向に、控え材⑧が伸びる。控え材⑧は、長さ1.1m、直径16cmを測り、基端部を凹状に抉る。先端部は、地面に突き刺さることから、控え材④を斜めに補強する意味で、基端部どうしが連結していた可能性が高い。控え材

⑤は、長さ3.4m、直径15cmを測る。先端部は、主柱に交差するが二股ではない。基端部にはホゾ穴を開け、長さ40cm、幅5cmの杭を打ち込んでいる。支柱④・⑤間は、ほぼ平行に96cm間隔である。控え材⑥は、長さ3.12m、直径16cmを測り、前方1/3がやや『く』の字状に屈曲する。先端部の二股部分に、横木を交差させ組み合わせている。基端部を凹状に抉り、長さ40cm、幅5cmの杭を打ち込んでいる。支柱⑤・⑥間は、ほぼ44cm間隔である。控え材⑦は、長さ2.5m、直径12cmを測る。先端部は横木には交差せず二股でもない。また、他の控え材より一段低いところに位置し、直径も細い。基端部を凹状に抉り、杭を打ち込んでいる。

前面の杭は、ほぼ隙間なく斜め前方に45～70度の角度をもって打ち込まれ、50本以上を確認した。上部を欠くが長さ80～90cm、幅10～15cm、厚さ2～3cmで、先を尖らせた板を用いる。長さ80～90cm、直径10cmを測り、しっかりとしている。その他、漂着したような不定形な木片もあるが、細い枝などを板に組み合わせ補強材としている。

網代の出土状況

網代は堰状遺構の前面に打ち込まれる杭列部分の南西側で出土した。傷みが著しかったため、四方の端部が損なわれ、遺存している大きさは約1m×2.4mである。網代は東西の両端が低く、中央部が盛り上がった状態で凹凸になり、東端の下がった端の一部が杭列に接している。

樹種は特定できていないが、樹皮を剥いだ物の可能性が高い。網代一本の単位が、約3.0～3.3cmの幅である。これを縦・横、交互に規則的に編み込んで大きなものを作り上げている。基本的な編み込み方には、幾つかのパターンが存在するが、古墳時代以降にも続く編み込み方である。

溝状遺構

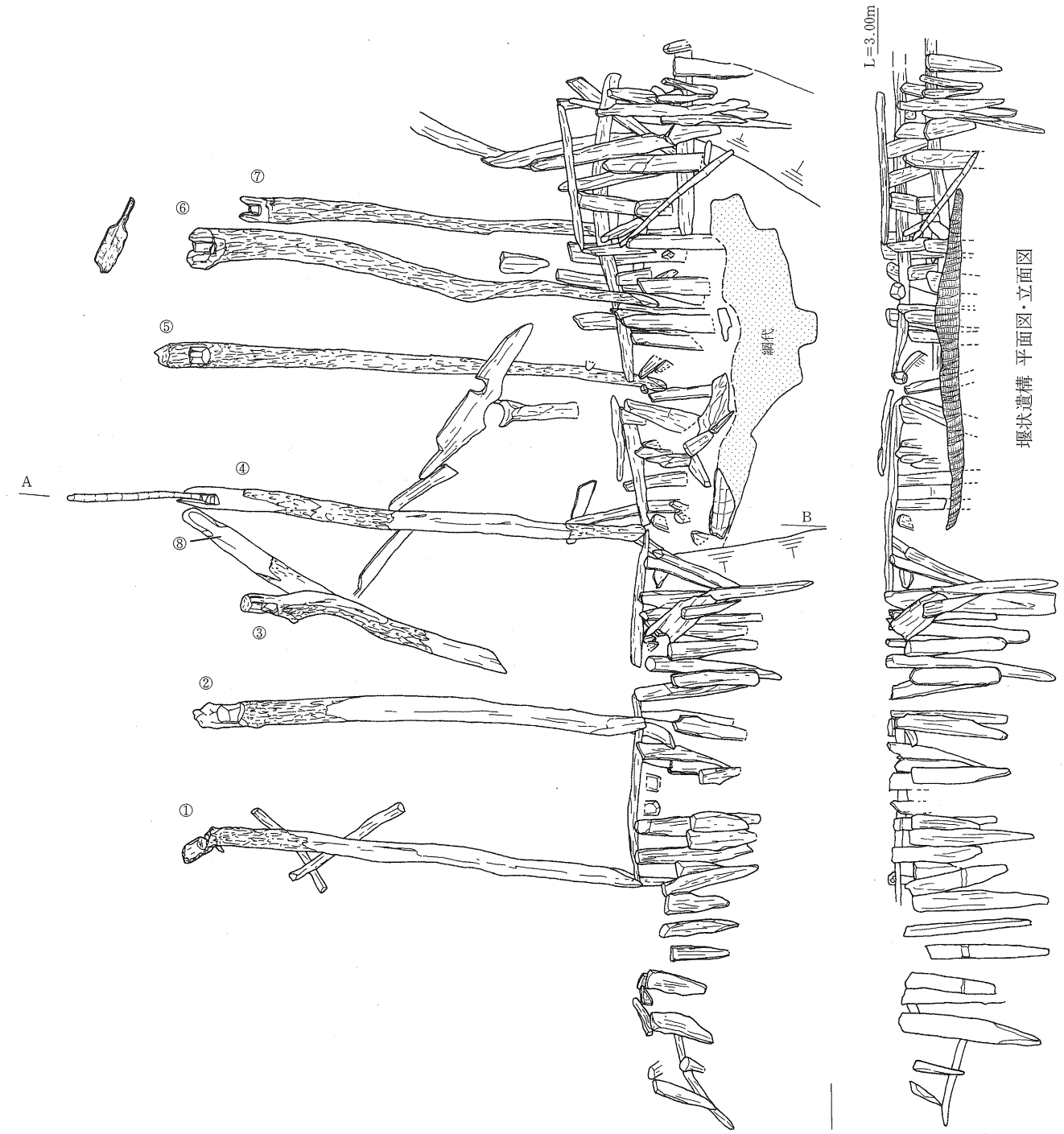
調査区の南壁断面で確認した溝状遺構と考えられる落ち込みは幅2m以上、深さ60cmを測る。堆積土は大きく二つに区分でき、下層（第22～24層）は粘砂・粘土層で、上層（第15～21層）はブロック状の粘土や粘砂などが混じる層である。

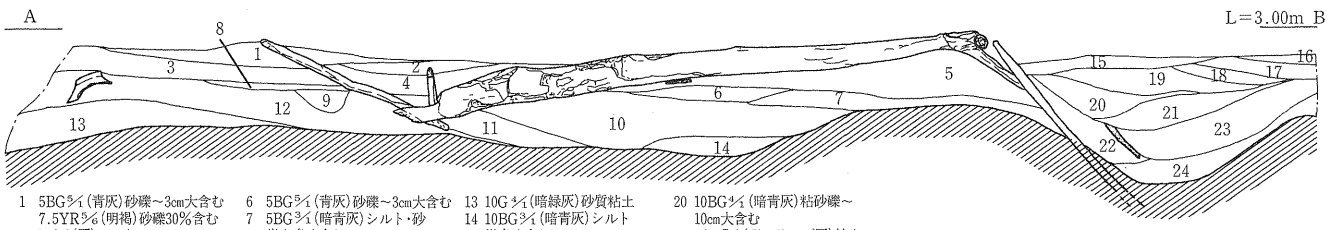
13-②区の出土遺物（第65図、ＰＬ．97・98・159）

当地区から出土した遺物は、調査区が狭小であるのに比例してさほど多くない。

旧河川3の下層堆積層からは、弥生土器の甕（827・828・838）、結晶片岩を含む紀伊形甕の体部破片1点、壺（829～833、839）、突帯文土器の深鉢（834～837）が出土している。837はバケツ形を呈し、胎土に結晶片岩を含む紀伊北部のものである。これらのうち834～837、838、839は堰状遺構構築材の下の層（第5～7・10・11・14層）から出土したものである。その他、出土層位は判然としないが旧河川の側溝部分などから突帯文土器の深鉢（840・842）、弥生土器壺（841）が出土している。以上のうち堰状遺構の横木の下の層より出土する遺物は、小破片が多いものの基本的に弥生時代前期に限定できる。

第4層上面で検出した土坑1からは、図示していないが古墳時代の土師器高坏基部1点、室町時代の土師器皿1点が出土している。第3・4層の水田層からは13-①区と同じく遺物はほとんど出土していない。





1　5BG5/1(青灰)砂礫～3cm大含む
　7.5YR5/6(明褐)砂礫30%含む
2　N5/(灰)シルト
　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土20%
　ブロック状に入る
3　N5/(灰)粘礫～1cm大含む
4　5BG5/1(青灰)砂礫～1cm大含む
5　5BG4/1(暗青灰)シルト・砂
　炭少し含む
6　5BG5/1(青灰)砂礫～3cm大含む
7　5BG3/1(暗青灰)シルト・砂
　炭を多く含む
8　N5/(灰)粘礫～2cm大含む
　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土
　ブロックを30%含む
9　N5/(灰)粘砂
10　5BG5/1(青灰)粘砂礫の斜互層
　～2cm大含む
11　N5/(灰)粘砂・炭少し含む
12　N5/(灰)粘砂
13　10G 4/1(暗緑灰)砂質粘土
14　10BG3/1(暗青灰)シルト
　炭多く含む
15　5BG3/1(暗青灰)粘砂・炭含む
16　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土
17　10BG5/1(青灰)砂
18　10Y5/1(灰)粘礫～1cm大含む
19　N5/(灰)粘土
　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土
　ブロック40%混
20　10BG5/1(暗青灰)粘砂礫～
　10cm大含む
21　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土
　炭少し含む
22　10BG5/1(暗青灰)粘砂
23　10G5/1(暗緑灰)粘砂
　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土40%
　ブロック状に含む
　炭すじ状に入る
24　10BG5/1(暗青灰)粘砂
　5GY5/1(明オリーブ灰)粘土20%
　含む

堰状遺構　土層断面図

0　2m

第54図　Ⅲ区 13-②区 堰状遺構立面図・土層断面図

このほか、旧河川3に構築された堰状遺構の部材として良好な木製品が出土している。また、鋤（1065）は、堰状遺構の控え材の東に隣接して下層から出土した。先端部の一部が欠損し、左右が非対称になるやや歪な形状を呈している。板目板の部材を使用している。

写真8　堰状遺構

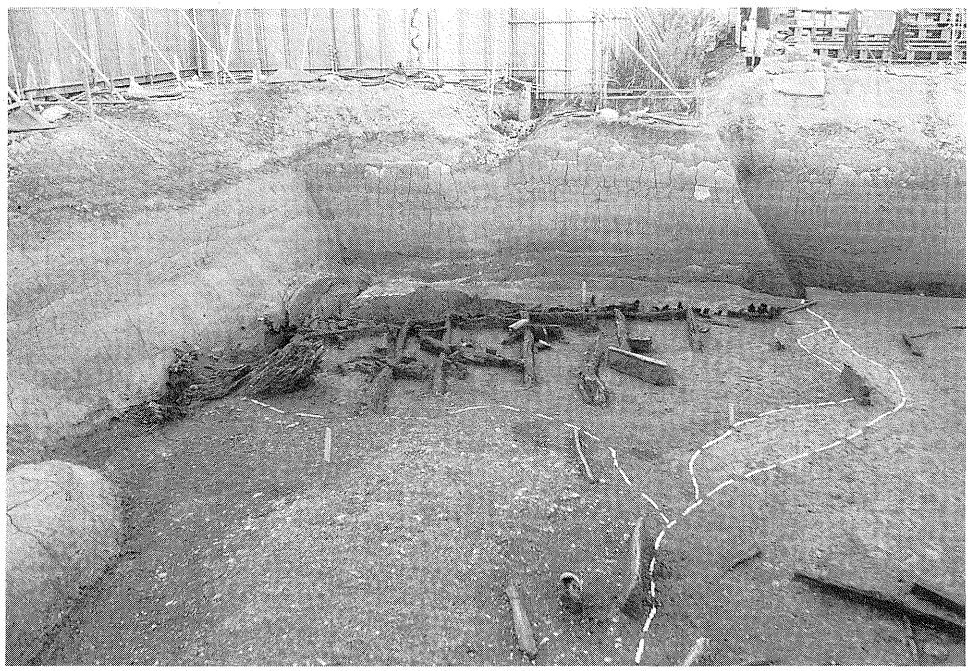


写真9　西壁土層堆積状況

（６）13-⑨区（第45図、PL.76・77）

調査面積は、1,229㎡である。調査区は、古川支線の真下に位置し、西側を平成12年度調査の12-⑧区、東側を平成11年度調査の調査区11-①区と接する範囲にあたる。

基本層序は、第１層水田耕作土及び整地土、第２層水田床土、第３・４層鎌倉時代～室町時代水田耕作土である。

第３層を除去した面において、畦畔と水田を検出した。第３層上面で平成11年度調査で確認した高田土居城跡北外郭部西辺外堀４の延長部分と平成12年度調査で確認した溝４の続きを検出した。

また高田土居城の遺構面を保存するため、外堀４を検出した調査区の南東隅は以下の層の掘り下げを行なわず、他の範囲について第４層を除去した面において、平成11年度調査で確認した溝56、旧河川57の続きと、平成12年度調査で確認した旧河川２・２ａ及び旧河川３の延長部分を検出した。また検出面が不確であるが、井戸８、円形杭列９、杭列10を検出した。

旧水路６（第71図）

調査区を縦断する古川支線の堀方の下部でほぼ重複する位置に、北東から南西に向かって延びる。幅約4.5m、検出延長45m、深さ95㎝を測る。埋土は上層が暗灰黄色砂質土･灰色粘質土、下層がオリーブ黒色及び灰色粘土（炭化物・木屑・骨混じる）である。遺物の取り上げは一括して行なった。出土遺物は弥生土器や中世の土師器などが混入するものの江戸時代の陶磁器（1045～1056）が殆どである。

畦畔（PL.78）

調査区北東部に位置し、条里型地割に沿って南北及び東西方向に延びる。幅40～80㎝を測る。畦畔構成土と水田層を比較すると、鉄分や鉱物（マンガン）を含む割合が大きく異なることからそれぞれを判断した。畦畔の時期は鎌倉時代と考えられる。

外堀４（第46図、PL.78）

調査区南東隅に位置し、北々東から南々西に向かって延びる。幅約５m、深さ約1.1mを測る。堀の埋土は、最上層・上層・中層・下層に分けられる。最上層はオリーブ褐色細砂、上層は灰色砂質土及び褐灰色粘質土、中層は褐灰色・黄灰色粘土（木屑混じる）、下層は灰色粘土（木屑・炭化物混じる）である。遺物は層位ごとに取り上げを行った。出土遺物は最上層から中世の土師器、陶器、中層から備前焼が出土した。最上層の遺物が17世紀代、中層の遺物が16世紀半ば頃に位置付けられる。

溝７（PL.78）

外堀４の最上層が堆積する以前と考えられる溝で、堀の西肩寄りに位置し、同じ方向に延びる。幅0.6～1.3m、検出延長13m、深さ30㎝を測る。埋土は黄灰色粘質土及び細砂である。遺物は出土していないが、外堀４出土の遺物から時期は16世紀後半から17世紀代の外堀４最上層が埋没するまでと推定される。

溝４（PL.78）

調査区中央部に位置し、北西から南東に向かって延び、調査区外で大きく流れの方向を90度変え、外堀４の北側へと続いていくものであることが明らかになった。幅約６m、検出延長11m、深さ75㎝を

測る。埋土は黄灰色粘土で上層から下層に向かって木屑を多く含んでいる。出土遺物は土師器皿である。

溝56（第45図）

調査区北東隅に位置し、北から南に向かって延びる溝である。幅約3m、検出延長約6m、深さ約3mを測る。遺物は出土していない。

旧河川57（第45図）

調査区中央部の東寄りに位置し、北々西から南々東に向かって延びる溝である。検出・掘削の結果、旧河川2aと続いていることが明らかとなった。

旧河川2・3（第45・48図）

調査区中央部に位置する。旧河川3はほぼ西から東に向かって流れる。調査区南西隅において一方の肩部を検出するが、北側の肩部は調査区外と推定される。旧河川2は北西から南東に向かって延び、推定幅50m以上、深さ約1.8m以上を測る。堆積土は上層が灰色・青灰色粘土（木屑が多量に混じる）、下層は粗砂礫である。旧河川2及び3の出土遺物は、突帯文土器、弥生土器壺・甕（前期）、凹石（711）、木製農耕具（広鍬・えぶり）、くるみの種で、混入遺物として唐津焼を含む。

旧河川2a（第45・48図）

旧河川2の堆積過程において検出した古墳時代後期の流路である。出土遺物は弥生土器（前期～後期）、古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器皿である。

旧河川2b（第45・48図）

旧河川2の堆積過程において検出した古墳時代後期末の流路である。出土遺物は弥生土器、古墳時代の須恵器である。

井戸8（第51図、PL.78）

調査区中央部の古川支線真下において検出した。径約1.2mの円形を呈し、楕円形の掘方を持つ。掘り方の埋土は黒色粘土（木屑が多量に混じる）及び暗灰色粘土である。底部は礫層に達する。井戸枠として長さ97cm、幅16cm、厚さ2cmの縦板22枚と、同じ長さ・厚さ、幅10cmの縦板1枚を組み合わせ、側面中央付近に竹製の箍を2重に巡らし、径3cm、残存長30cm程の先端を加工した木杭による支えを行なう。遺物が出土していないため時期は特定できないが、古川支線の改修が昭和27年（もしくはそれより古い時期）に行なわれたことから、それ以前と考えられる。

円形杭列9（第51図）

調査区中央部に位置する。径1.2mの掘方内に残存7本の杭を円形に配する。杭は径5cm、長さ0.6～1mを測り、先端を加工してある。杭と杭の間には太さ約1.5cm、長30～45cmの木の枝を横に渡し、部分的に杭と木の枝を縄で結んだと思われる痕跡が残っている。遺構検出面は旧河川2aに対応する礫層であり、杭列の内部には深さ30～50cmの粘土が堆積していた。遺物は出土していないため時期は特定できない。また遺構の性格も不明である。

杭列10

調査区中央部のやや北東寄りに位置する。杭は径３～８㎝、残存長20～95㎝を測り、先端を加工してある。旧河川２ａの肩部に平行するように（流れに沿うように）打ち込まれている。検出面は旧河川２ａに対応する礫層である。

13-⑨区の出土遺物（第70・71・72図、PL.103・159）

当地区は、周辺部の地区の中で最後に残った古川支線と併走する道路そのものの範囲の調査である。本来であれば、周りの調査区から旧河川および遺構の方向性と層序関係を的確に把握できるはずであるが、旧河川に関する方向性・層序について厳密に把握することができなかった。それだけに、旧河川に関する方向性・層序は断続的な流れによって堆積層が撹拌された状況になっていたものと判断される。このようなことから、旧河川に関する当地区の遺構・出土遺物の在り方は、当然の事ながら前述した12-⑧区と類似した状況にある。

旧河川２および２ａに関する遺物には、縄文時代晩期の突帯文土器深鉢（1012・1013）、弥生時代前期甕（1011・1015）、壺（1010・1014）、無文で弥生時代中期前葉に属すると思われるが時期の判然としない直口壺（1016）、弥生時代後期壺（1022）、甕（1021）、高杯（1017）、底部（1040）がある。その他、12-⑧区の旧河川２ａと同様に、古墳時代の須恵器杯身・蓋（1019・1020・1024～1026・1028～1030）、土師器杯（1018）、奈良時代の土師器鉢（1023）、須恵器杯蓋（1027）がある。旧河川２ｂ出土遺物は、須恵器杯身・蓋（1037～1039）がある。

旧河川３の中での出土遺物は、小破片を含めてみても突帯文土器（1031・1032）、弥生土器壺（1033～1036）を主体とした縄文時代晩器から弥生時代前期の時期に限定できそうである。

溝４に関する遺物には、奈良時代の土師器坏（1041）・皿（1042）がある。また、溝４に後出して重複する流路からは、室町時代の土師器皿（1043）、備前焼擂鉢（1044）等がある。

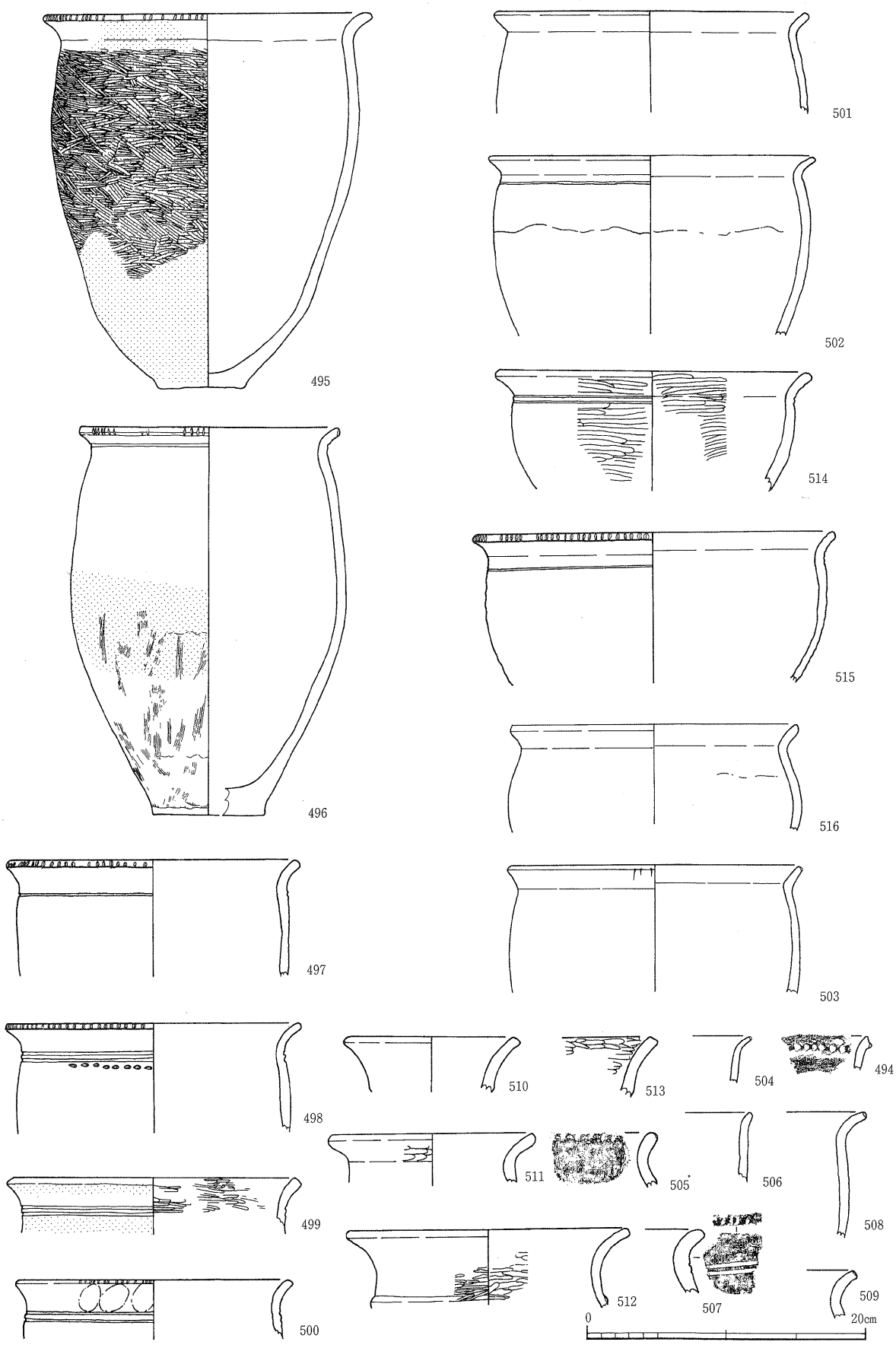
木製品には、広鍬（1063）・横鍬（1062）・孔をもつ板材（1067）・抉りをもつ丸材（1064）・鋤（1065）がある。広鍬（1063）は、図上の側縁部が欠損している。柄の差込み孔の舟形隆起部は差込み孔に柄の一部が遺存している。類例は、少し後出するが和歌山市太田黒田遺跡第26次調査で環濠と見なされているＳＤ19に前期末の資料がある。板目板の部材を使用し、材は赤ガシ亜属である。横鍬（1062）は、図上の片端を欠損しているが、遺存状態は比較的良好である。柾目板の部材を使用する。

（７）Ⅲ区の包含層出土遺物（第75・200図、PL.103・104・143）

この地区の中世包含層からの出土遺物は、他の地区に比べて非常に少なかった。したがって図化できた遺物についても同様のことが言える。出土遺物には土師器皿、瓦器椀、瀬戸美濃陶器、東播系捏鉢、中国製青磁・白磁、須恵器、弥生土器などがある。他に図化していない細片遺物には、13-①区の４層から縄文土器、古墳時代の鍋、奈良時代の須恵器、土師器椀などがある。13-②区の第４層には須恵器、土師器椀、土師器皿がある。

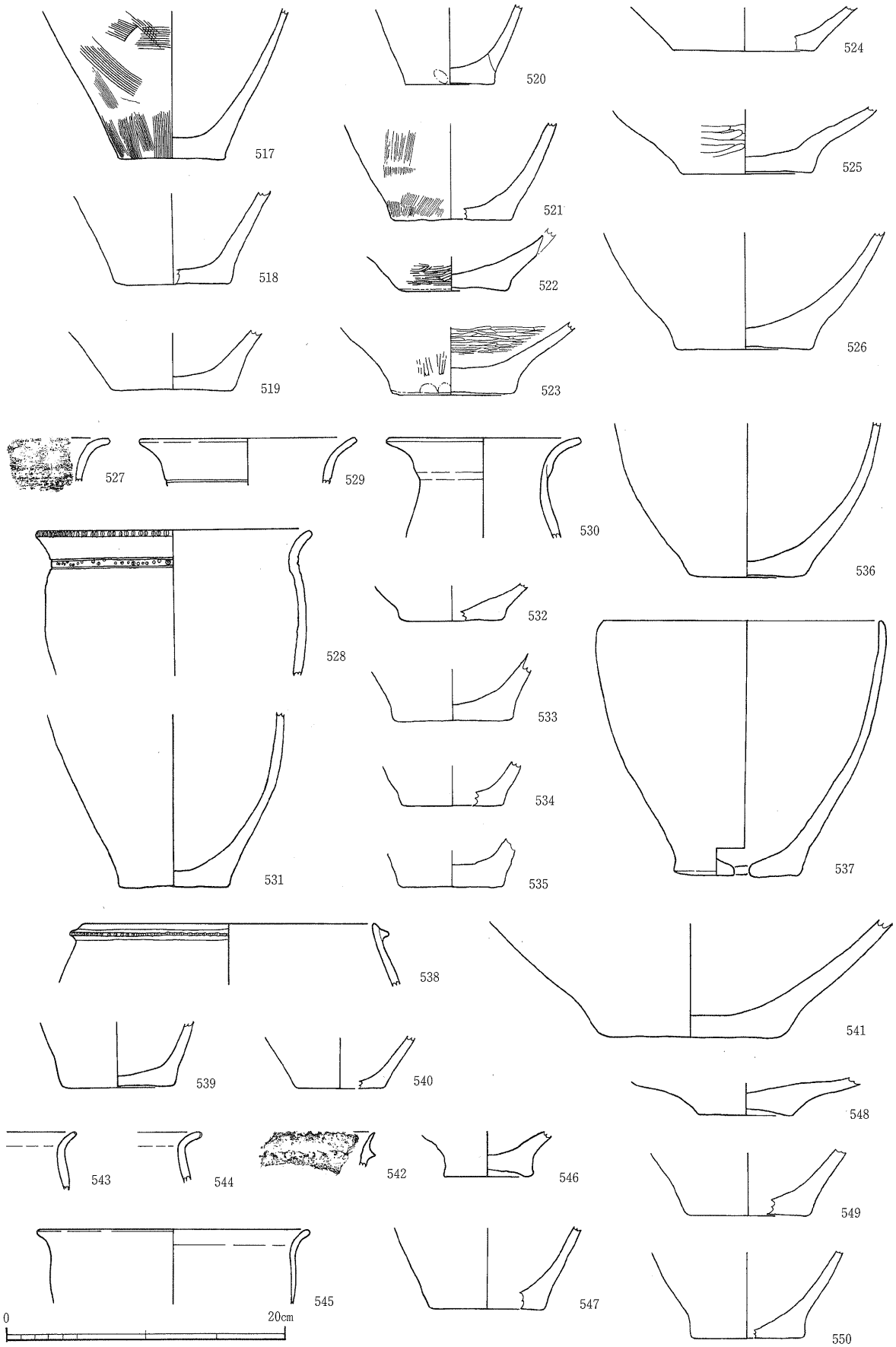
〔10-⑤区・13-⑨・12-⑧区・11-①区〕

1086は土師器皿Ｄ３タイプである。1087は瓦器椀である。高台は「ハ」の字にしっかりと開く。1088は玉縁状口縁の白磁椀の底部である。1089は土師器皿Ｄ３タイプに似るが体部のナデがきつい。1090・



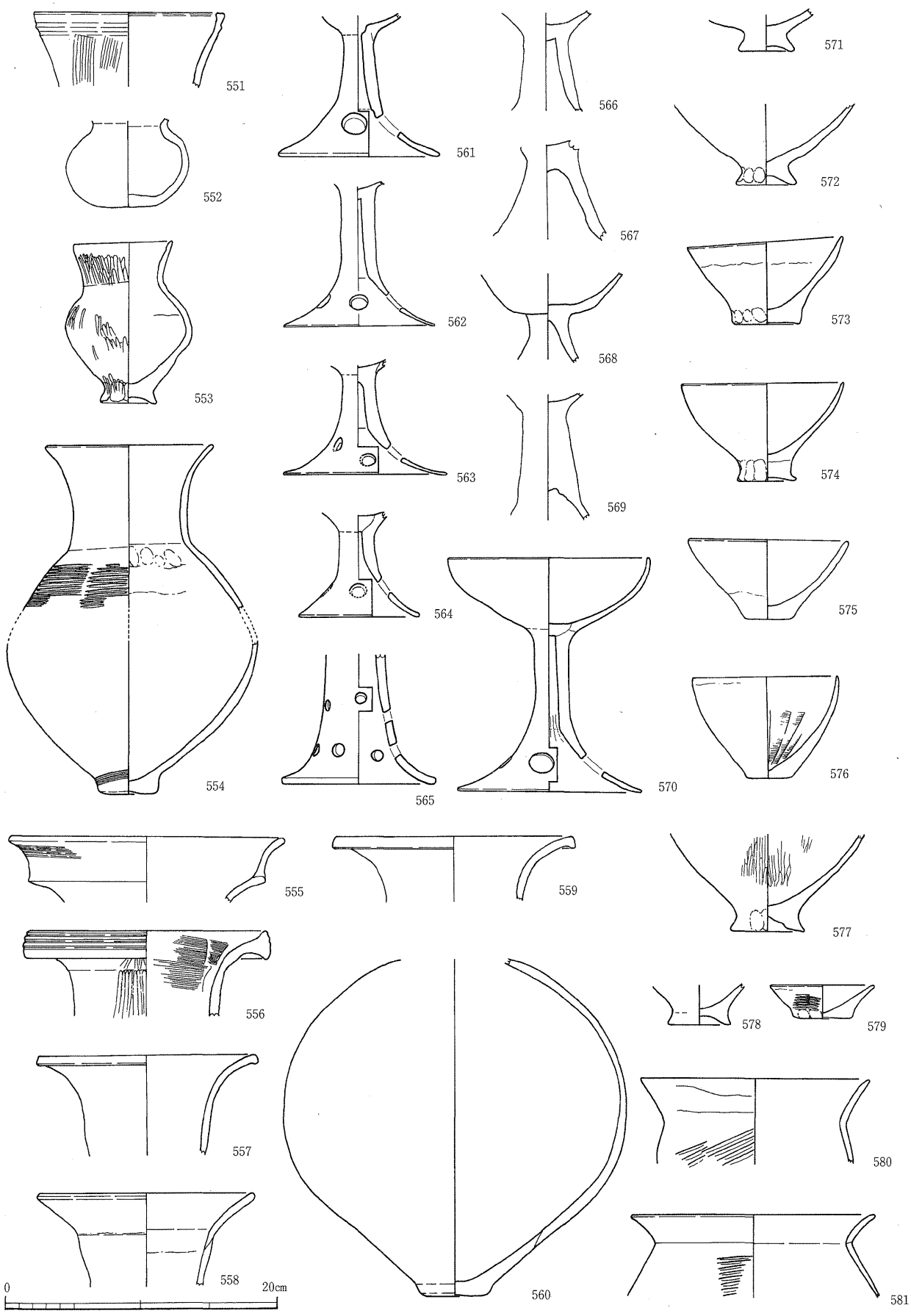
495～516：土坑9

第55図　Ⅲ区 11-①区 遺構出土遺物実測図



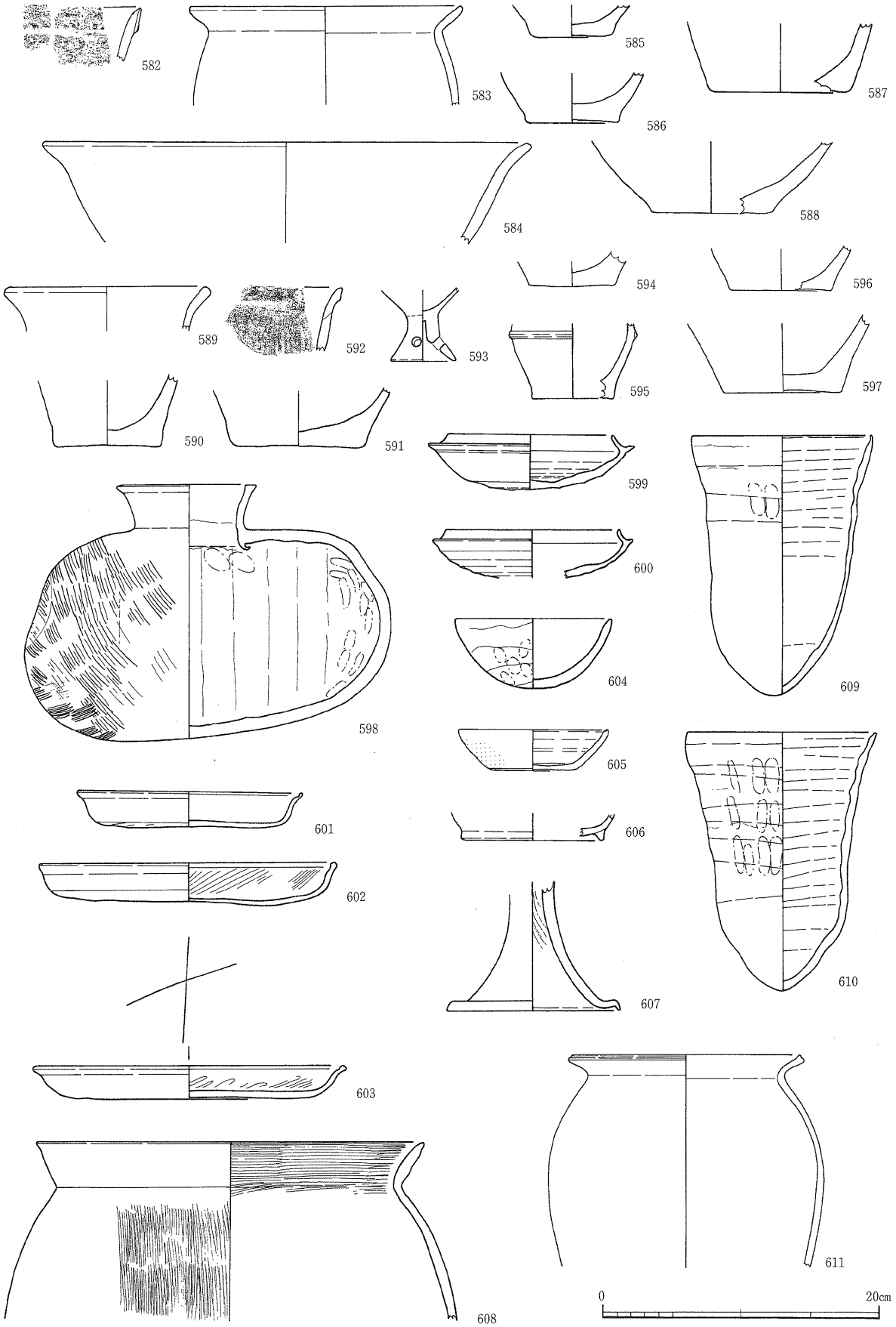
517～526：土坑９、527～537：土坑51、538～541：土坑44、542～550：土坑50

第56図　Ⅲ区 11-①区 遺構出土遺物実測図



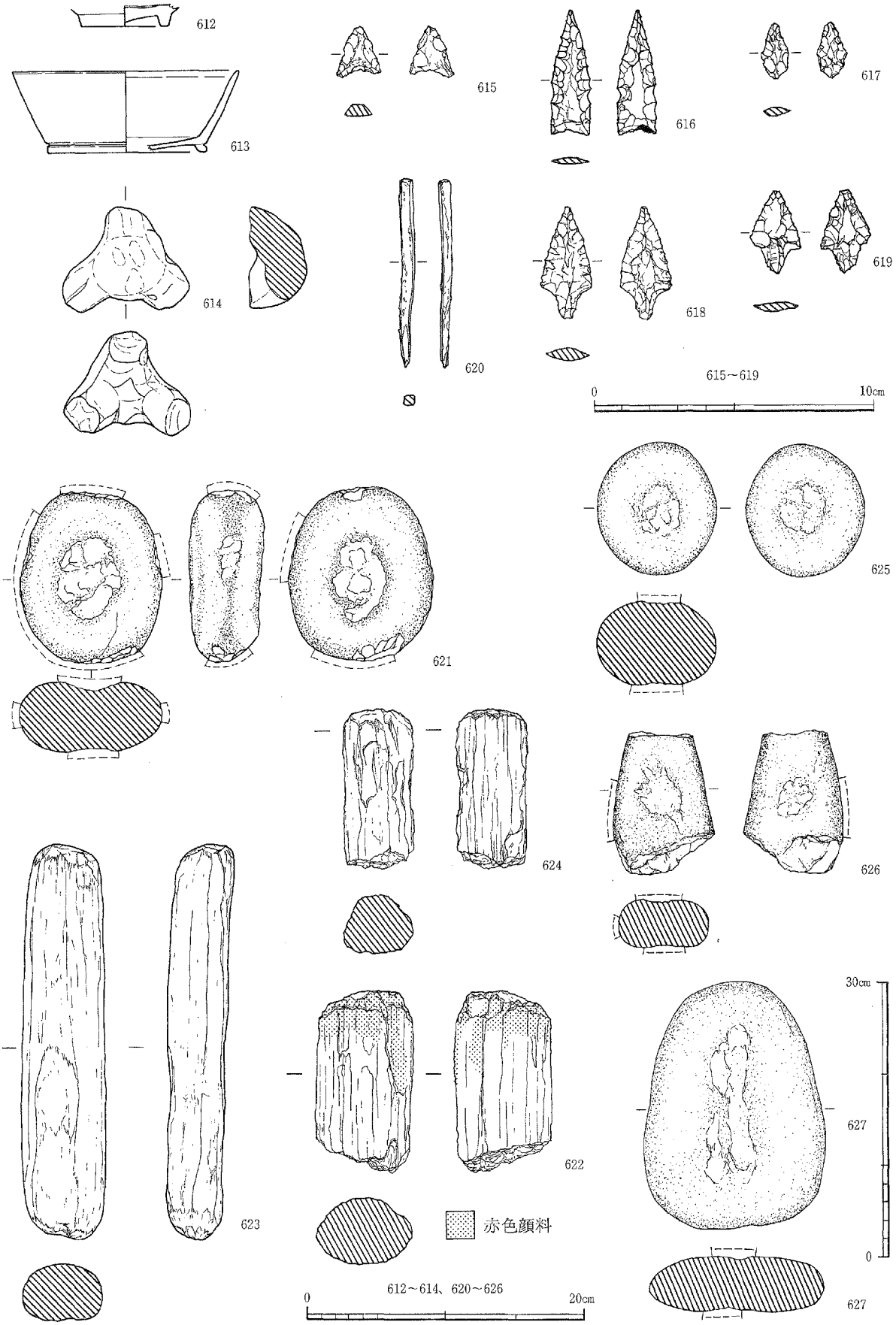
551～581：溝47

第57図　III区 11-①区 遺構出土遺物実測図



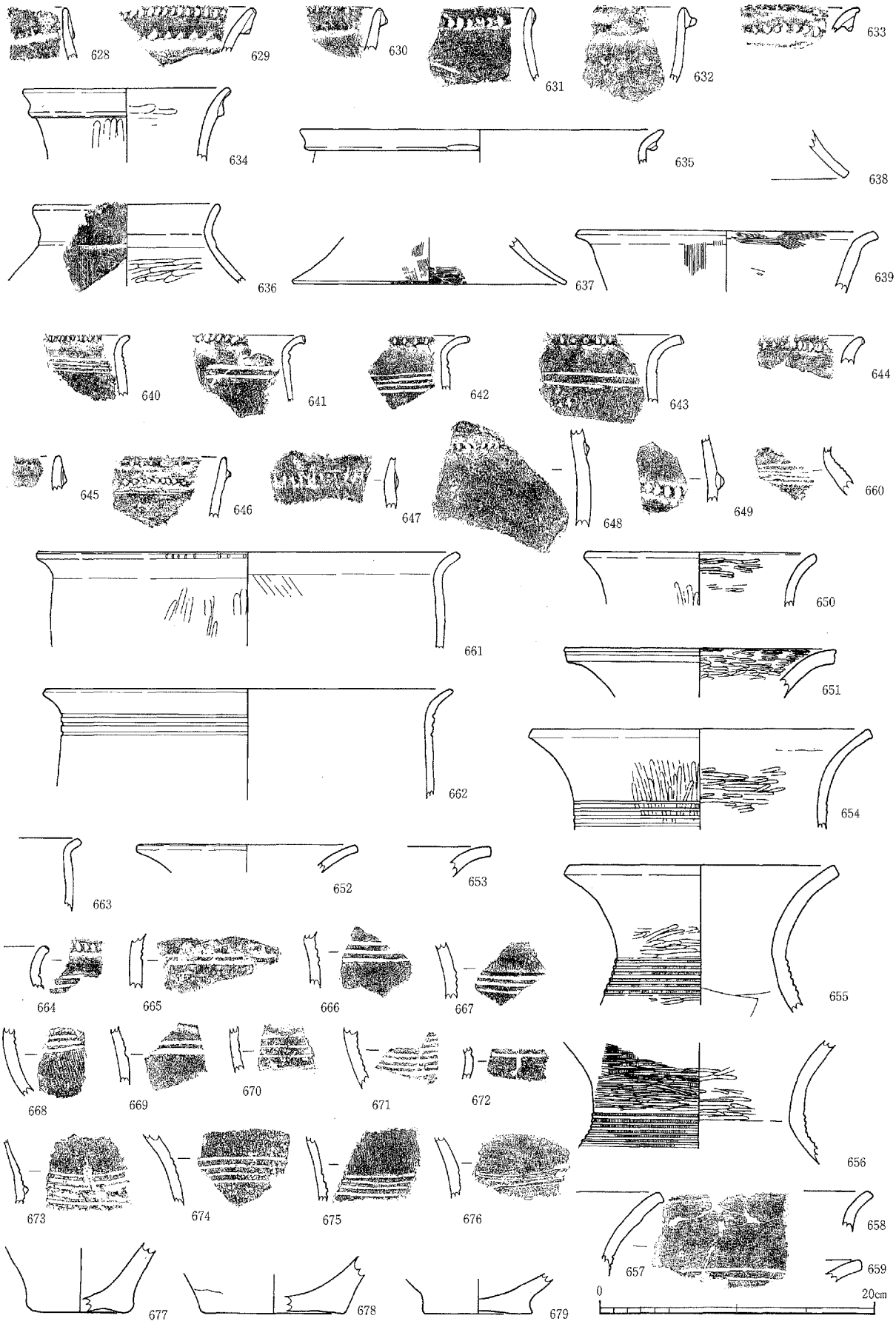
582～588：土坑55、589～591：溝６、592：溝52、593：土坑41、594・595：土坑43、596：土坑19、597：土坑20、598～611：旧河川57

第58図　Ⅲ区 11-①区 遺構出土遺物・鉄製品・石器実測図



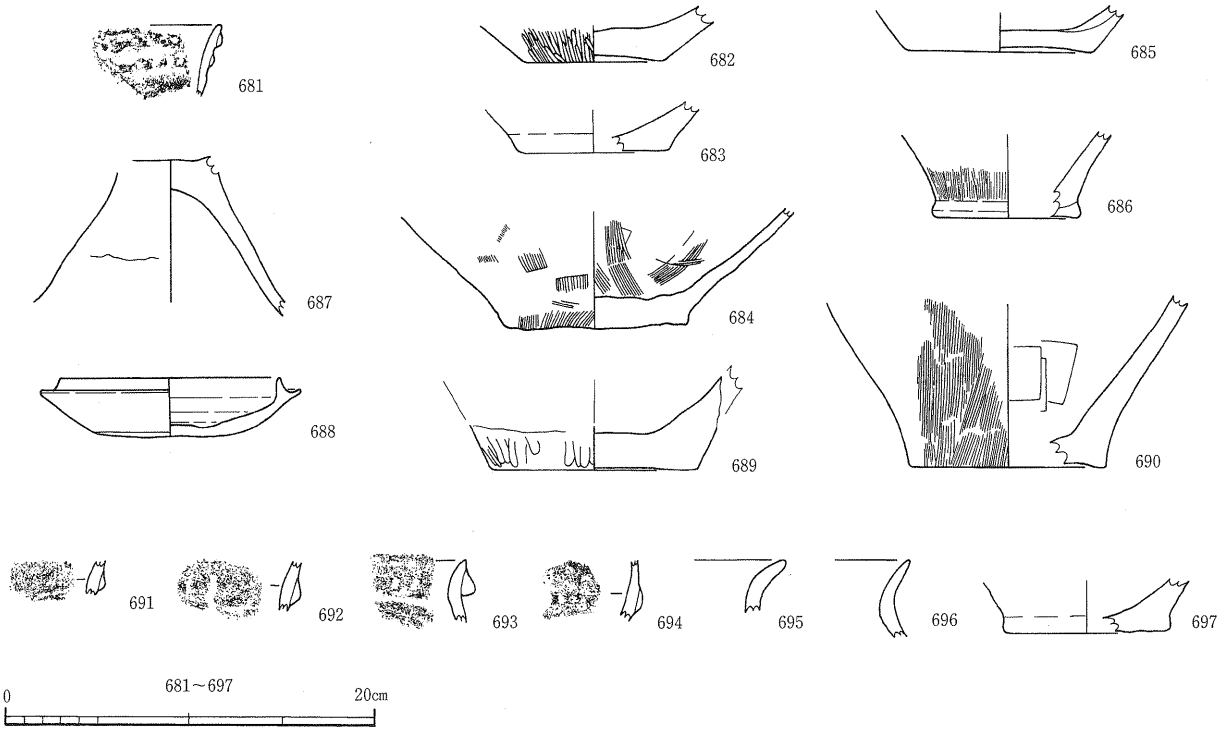
612～614：溝49、615･618･620：落ち込み、616：土坑３、617：表採、619：溝52、621･622：土坑９、623：土坑54、624：旧河川57、625～627：溝47

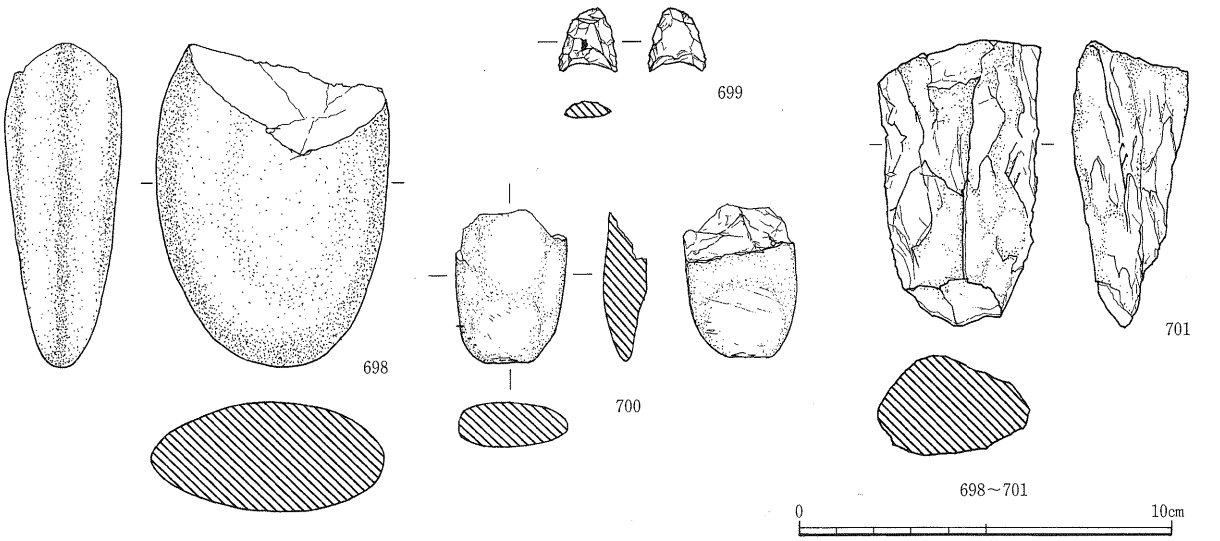
第59図　III区 11-①区 遺構出土遺物・鉄製品・石器実測図

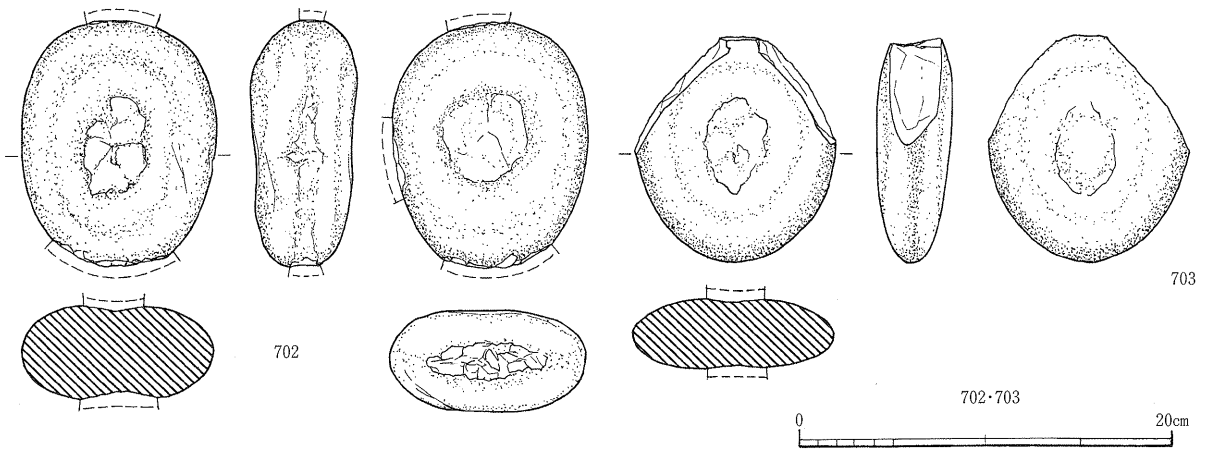


628～679：旧河川1

第60図　III区 10-⑤区 遺構出土遺物実測図

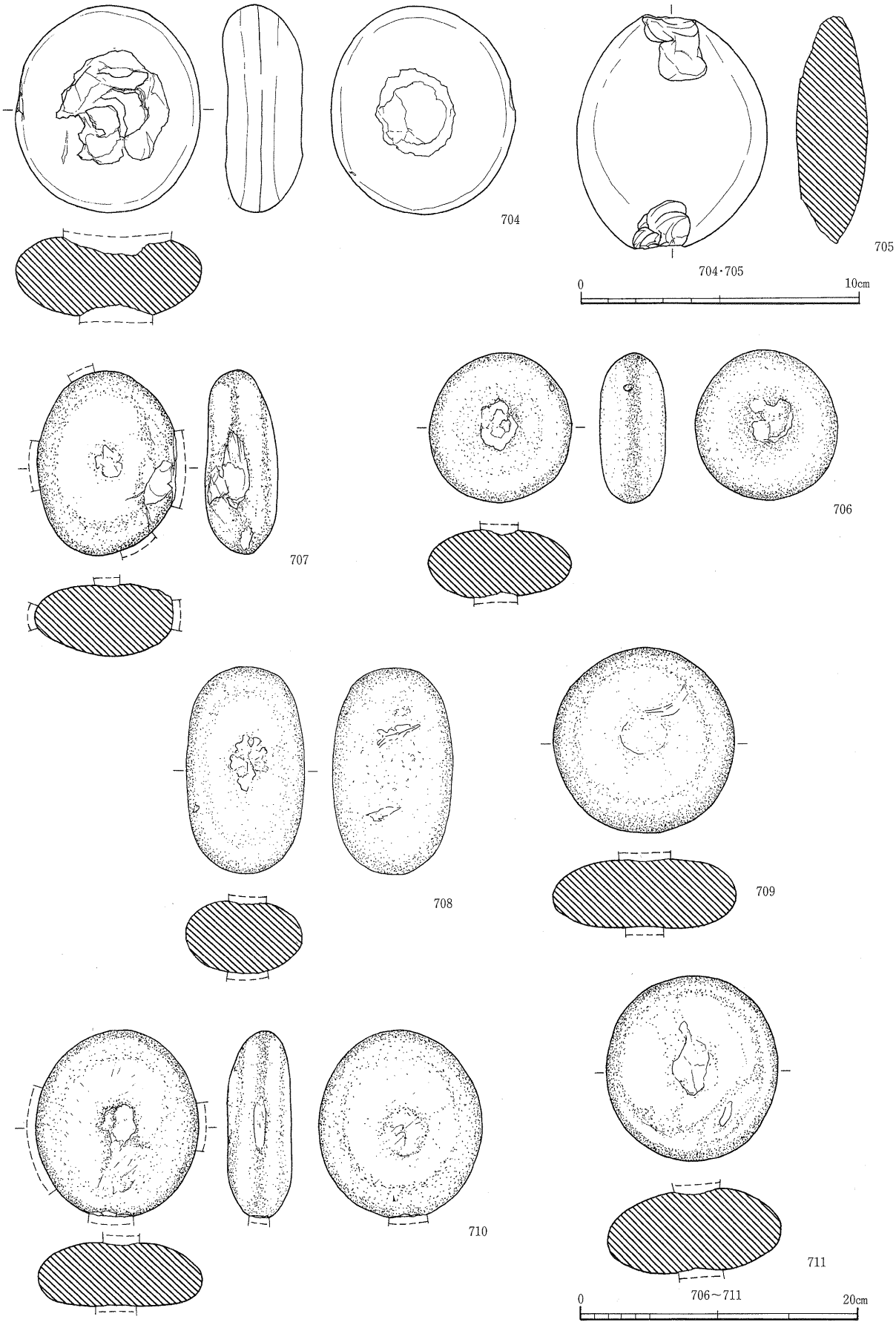






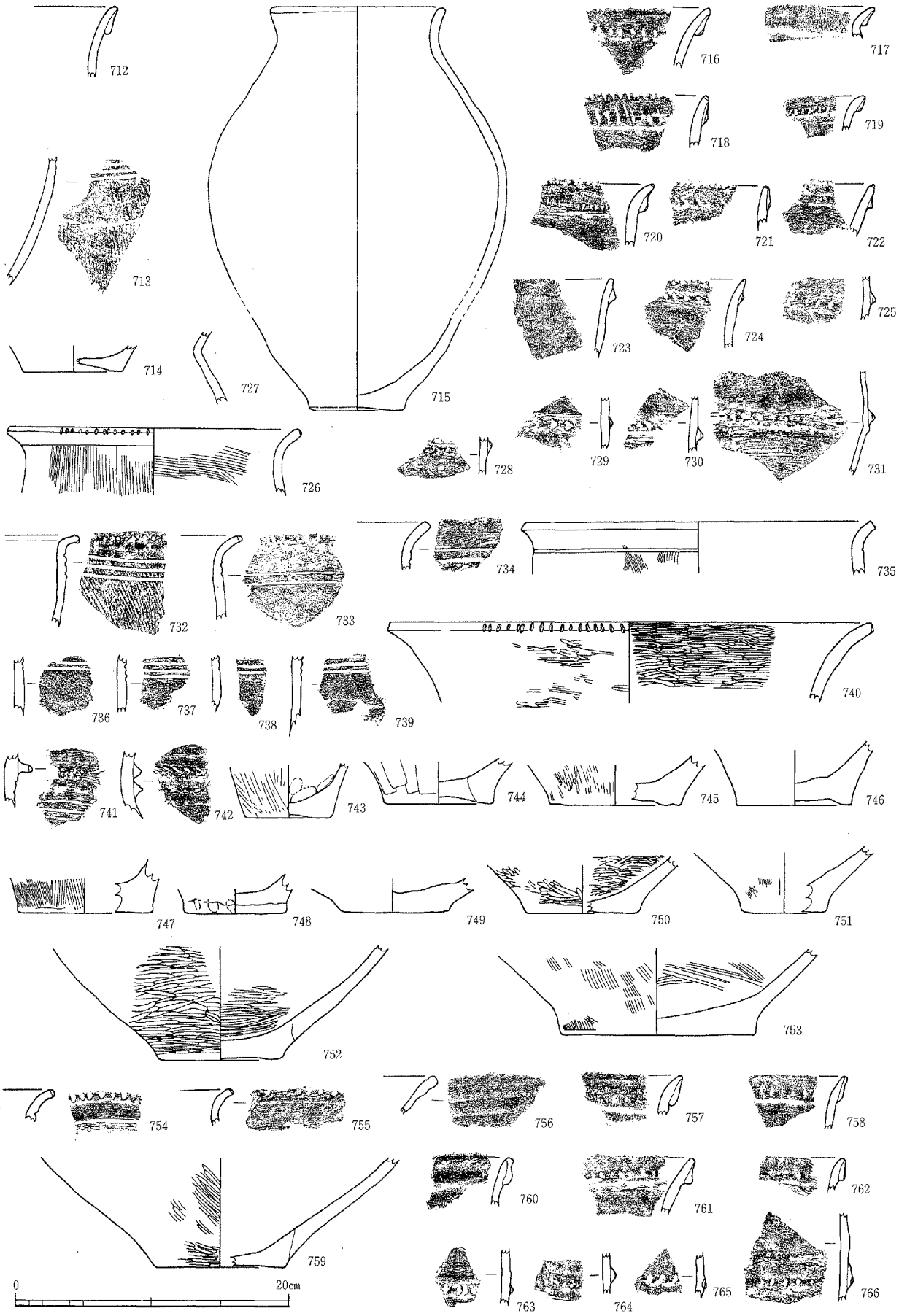
681～687：旧河川１、688：土坑20、689：南サブトレ（旧河川１）、690：北サブトレ（旧河川１）、691～700：竪穴住居１、701･702･703：旧河川１

第61図　III区 10-⑤区・13-①区 遺構出土遺物・石器実測図



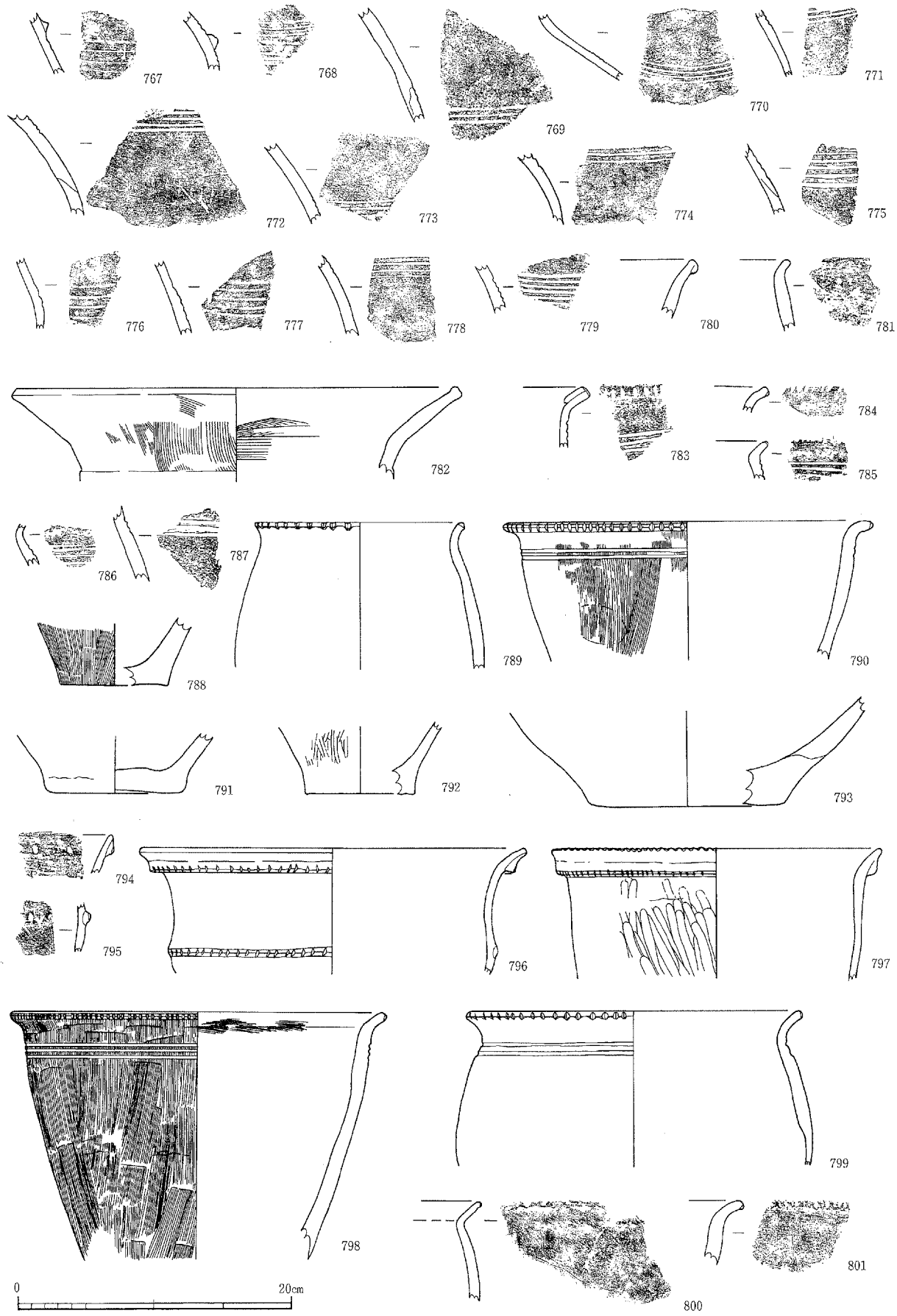
704～706：旧河川1、707・708・711：旧河川3、709・710：旧河川2

第62図　Ⅲ区 12-⑧区・13-①・⑨区 遺構出土石器実測図



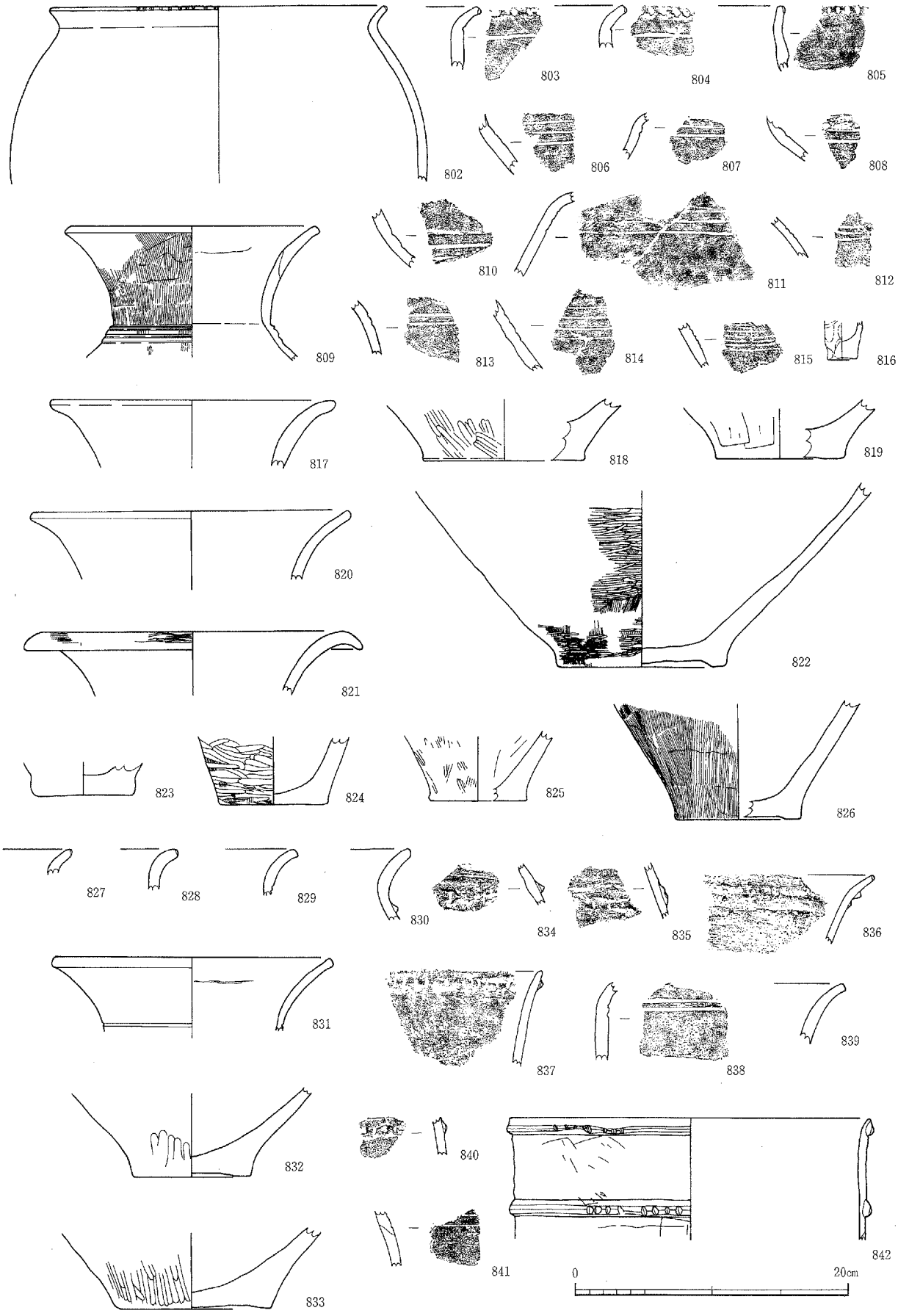
712：Pit442、713・714：ＳＴ1、715：土坑151、716～766：旧河川１

第63図　Ⅲ区 13-①区 遺構出土遺物実測図



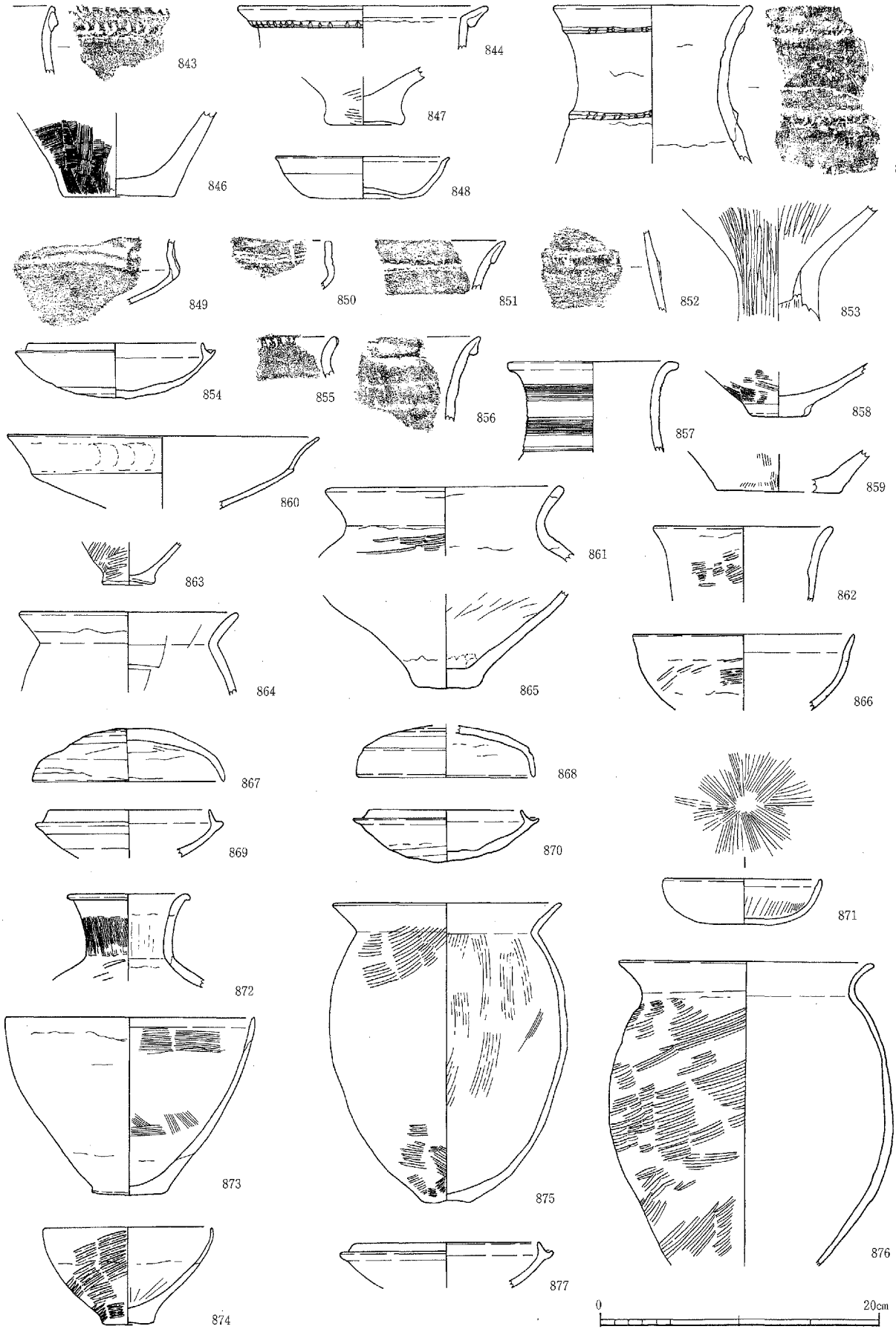
767～801：旧河川１

第64図　Ⅲ区 13-①区 遺構出土遺物実測図



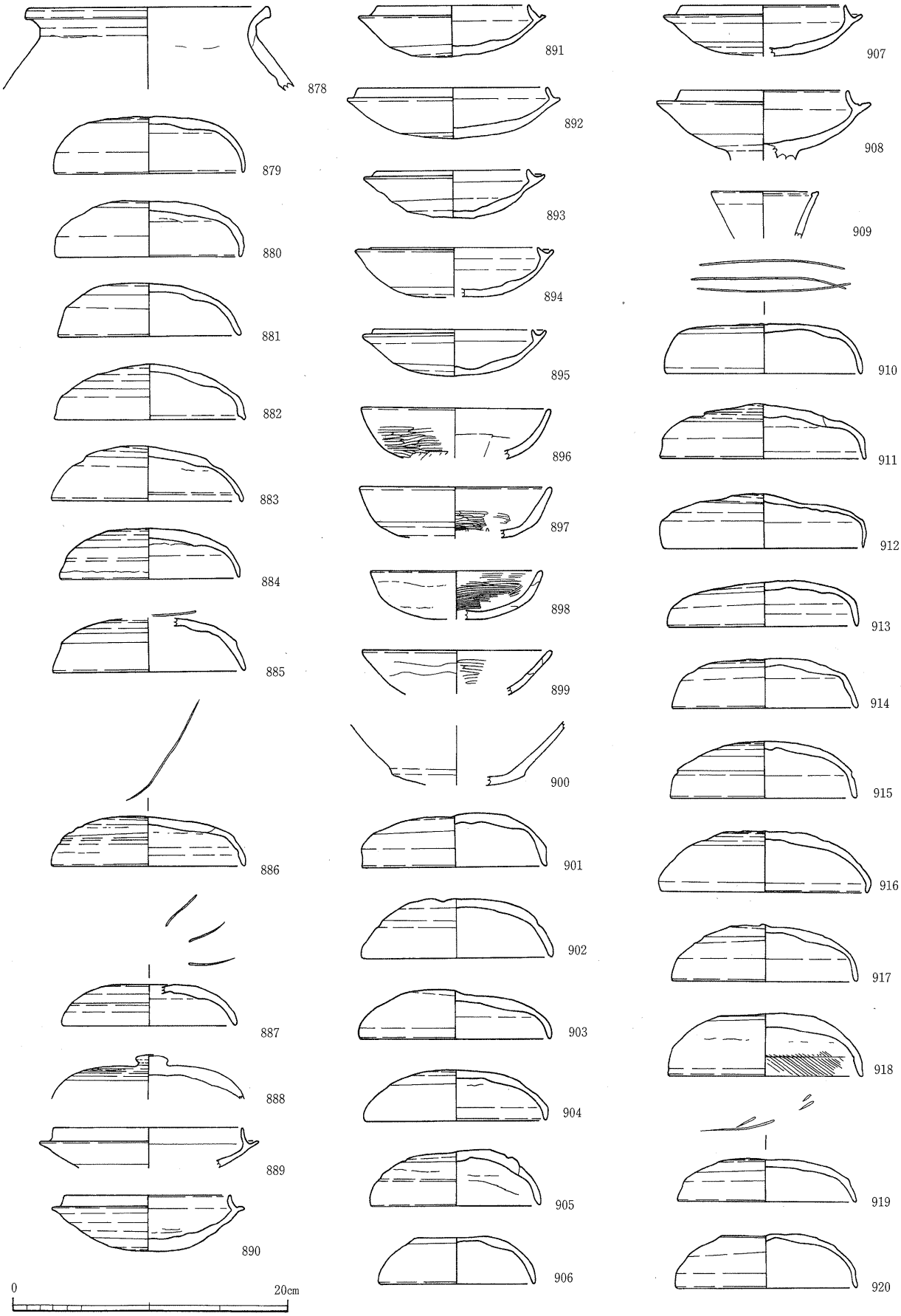
802～826：旧河川1、827～842：旧河川3

第65図　III区 13-①・②区 遺構出土遺物実測図



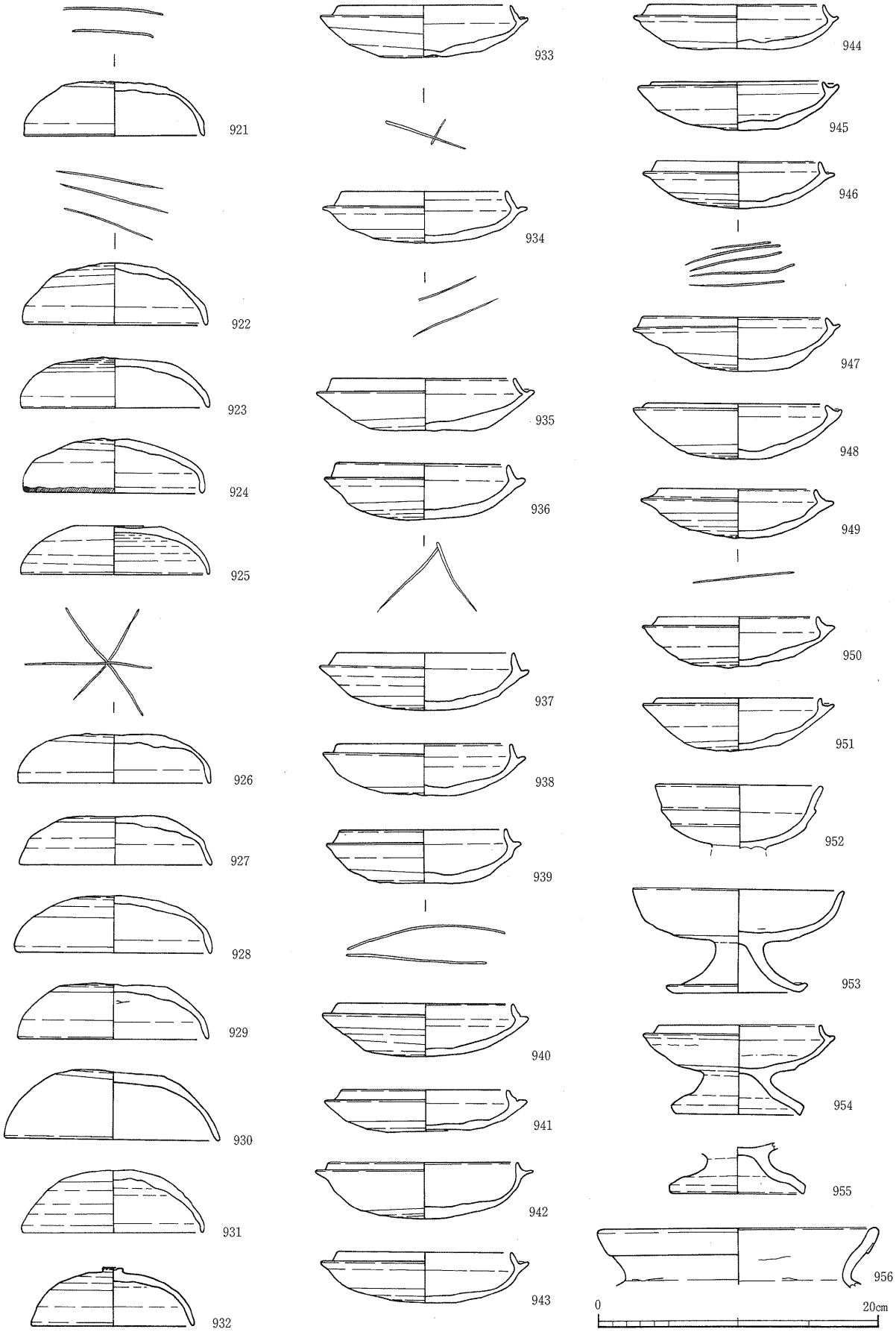
843～848：旧河川３、849～877：旧河川２

第66図　Ⅲ区 12-⑧区 遺構出土遺物実測図



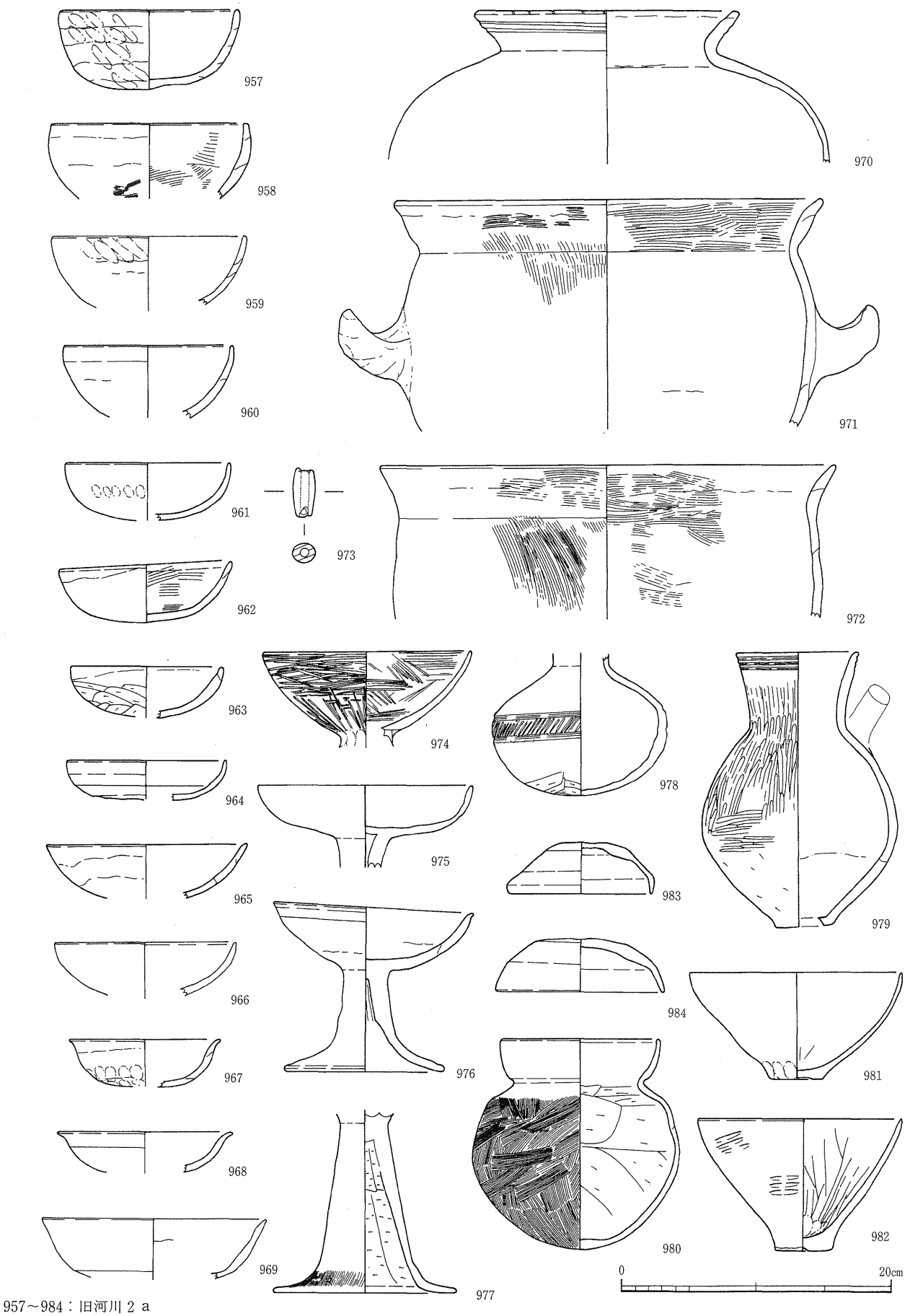
878～920：旧河川２ａ

第67図　III区 12-⑧区 遺構出土遺物実測図



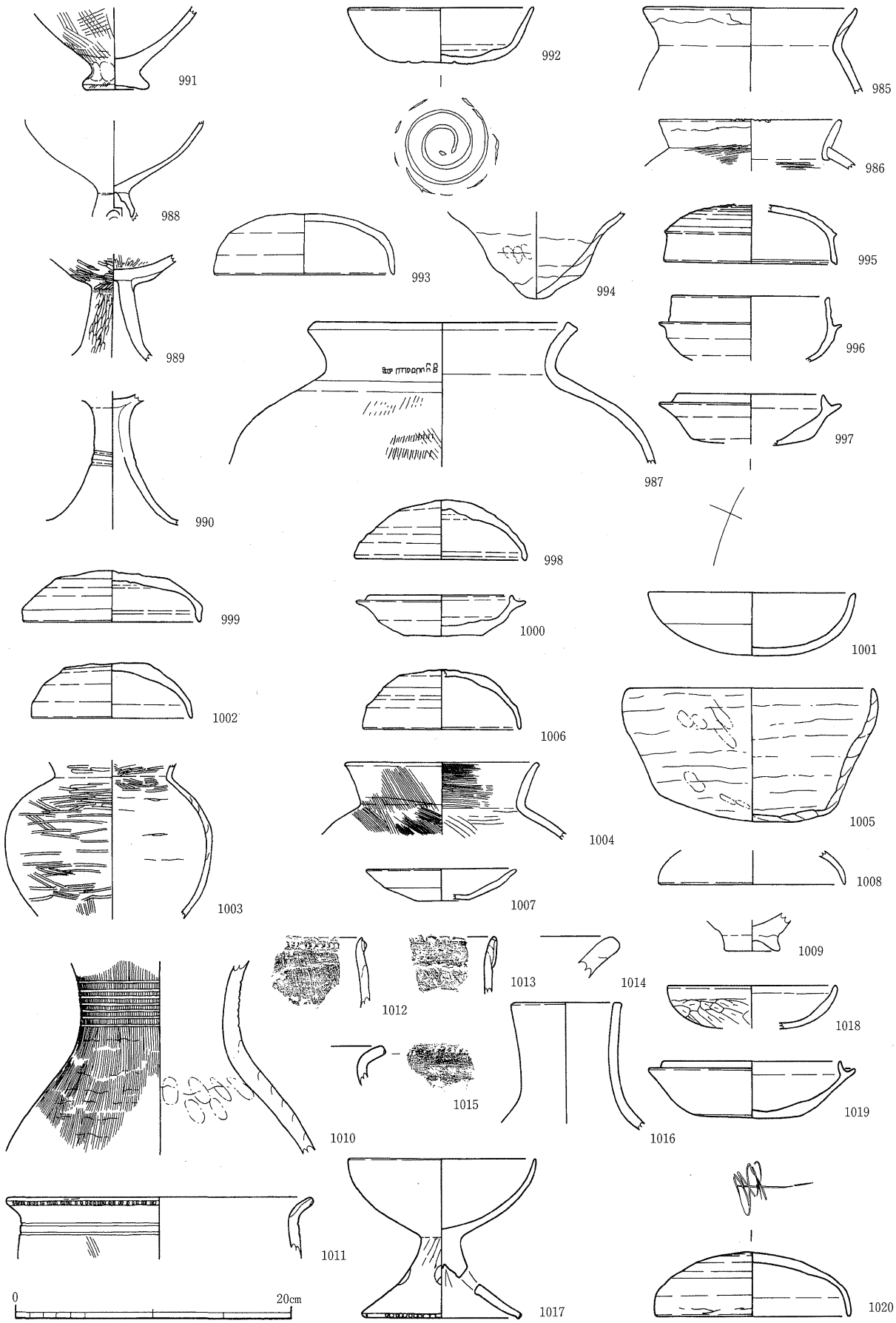
921～956：旧河川２ａ

第68図　Ⅲ区 12-⑧区 遺構出土遺物実測図



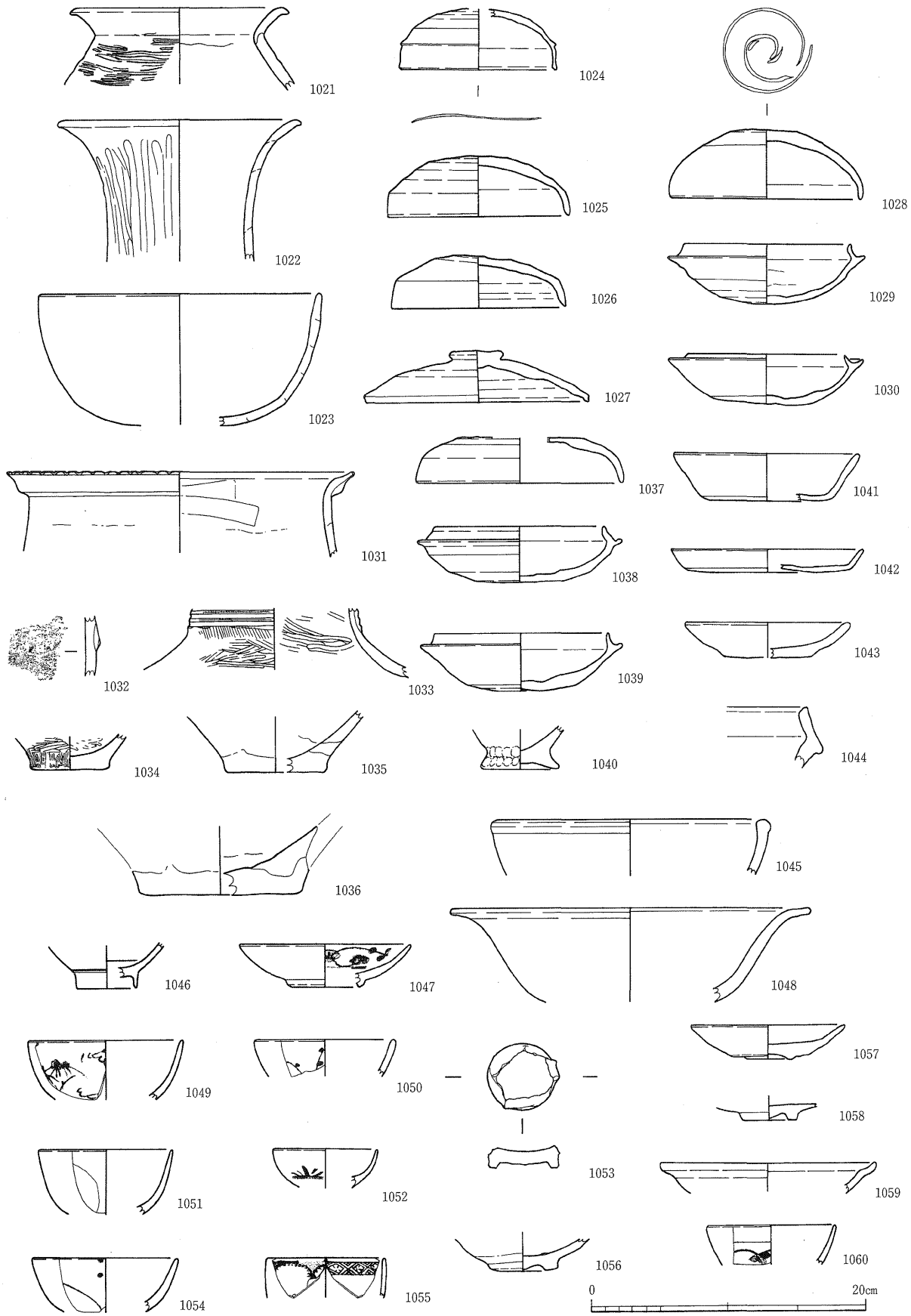
957～984：旧河川２ａ

第69図　Ⅲ区 12-⑧区 遺構出土遺物実測図



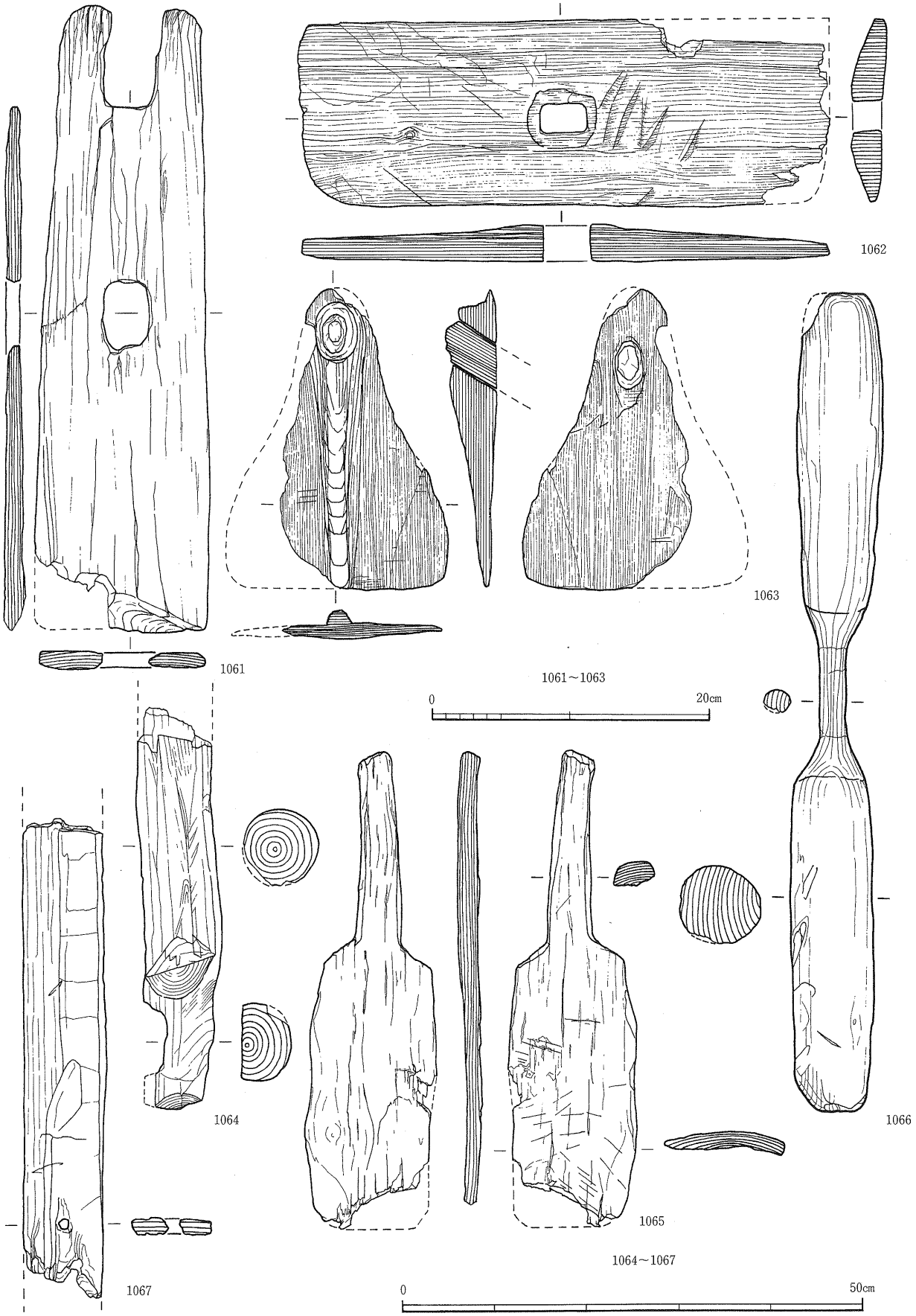
985～1006：旧河川２ｂ、1007：溝４、1008・1009：土坑12、1010～1020：旧河川２ａ

第70図　Ⅲ区 12-⑧区・13-⑨区 遺構出土遺物実測図



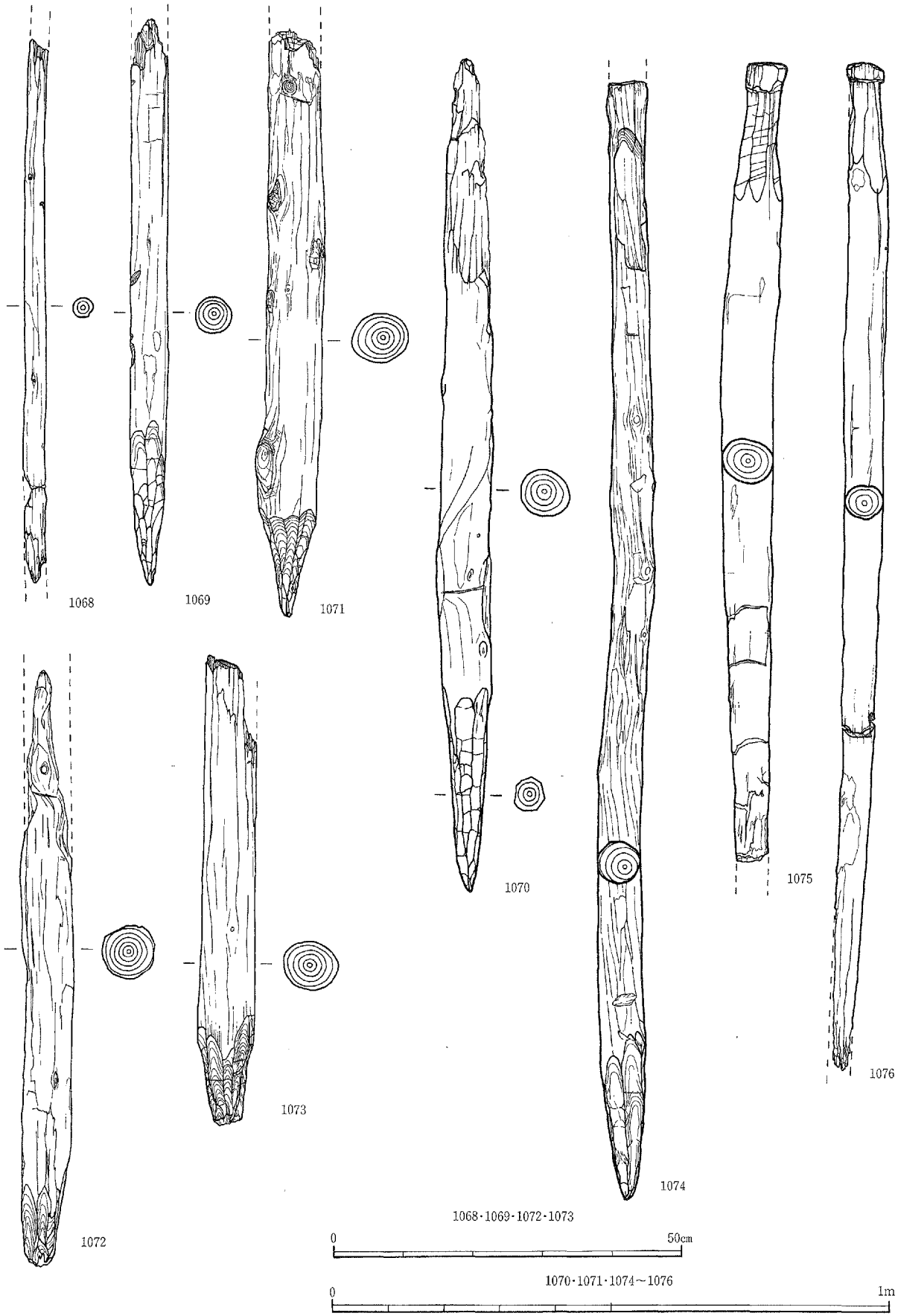
1021・1022：旧河川2、1023～1030：旧河川2a、1031～1036：旧河川3、1037～1039：旧河川2b、1040：旧河川2、1041・1042：溝4、1043・1044：溝4を切る流路、1045～1060：旧水路6

第71図　III区 13-⑨区・V区 13-⑥区 遺構出土遺物実測図



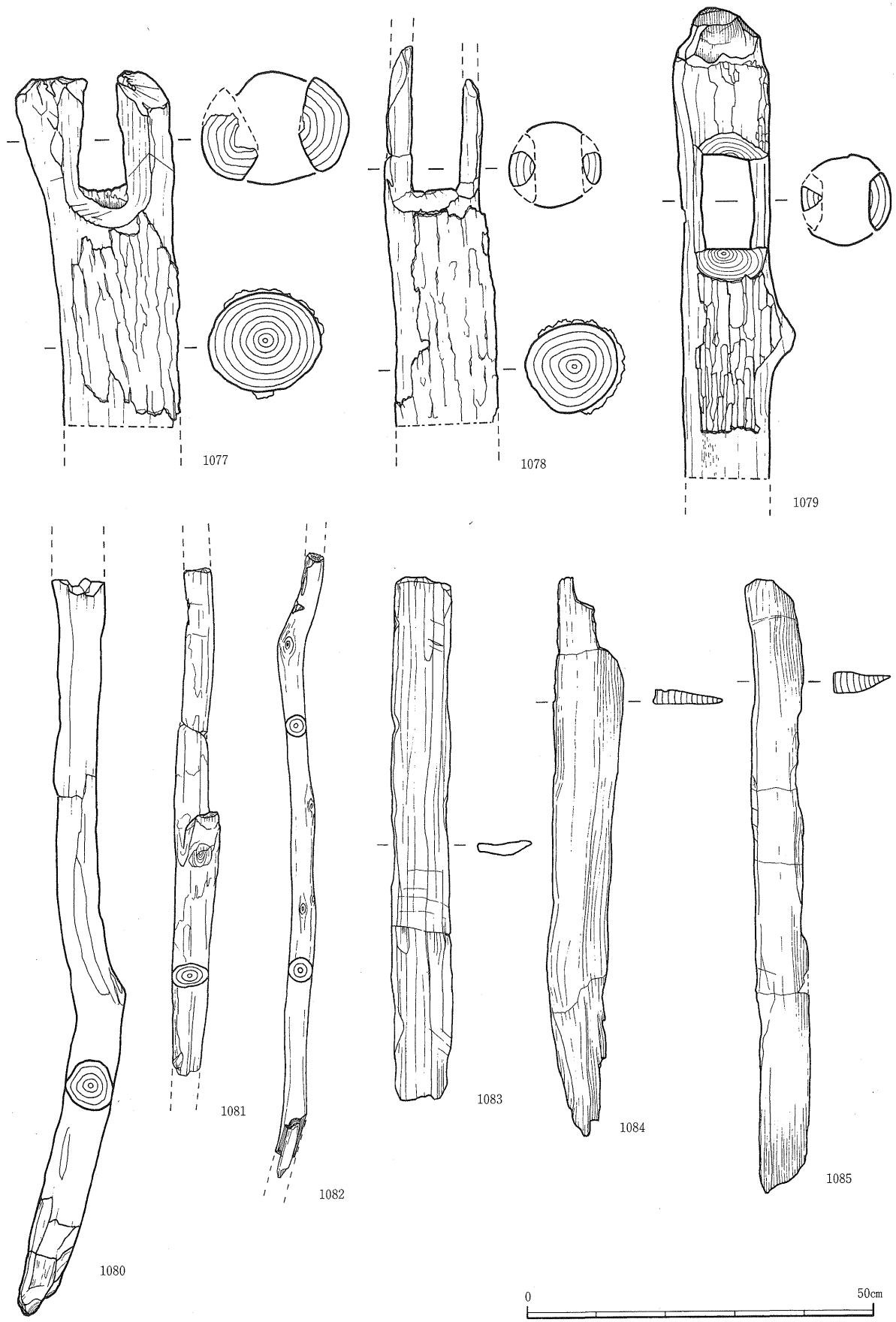
1061：旧河川1、1062：旧河川３、1063・1067：旧河川２、1064：旧河川２ａ、1065：旧河川、1066：旧河川２ｂ

第72図　Ⅲ区 12-⑧区・13-①・②・⑨区 遺構出土木器実測図



1068～1070：旧河川2、1071～1074：旧河川2a、1075・1076：旧河川2b

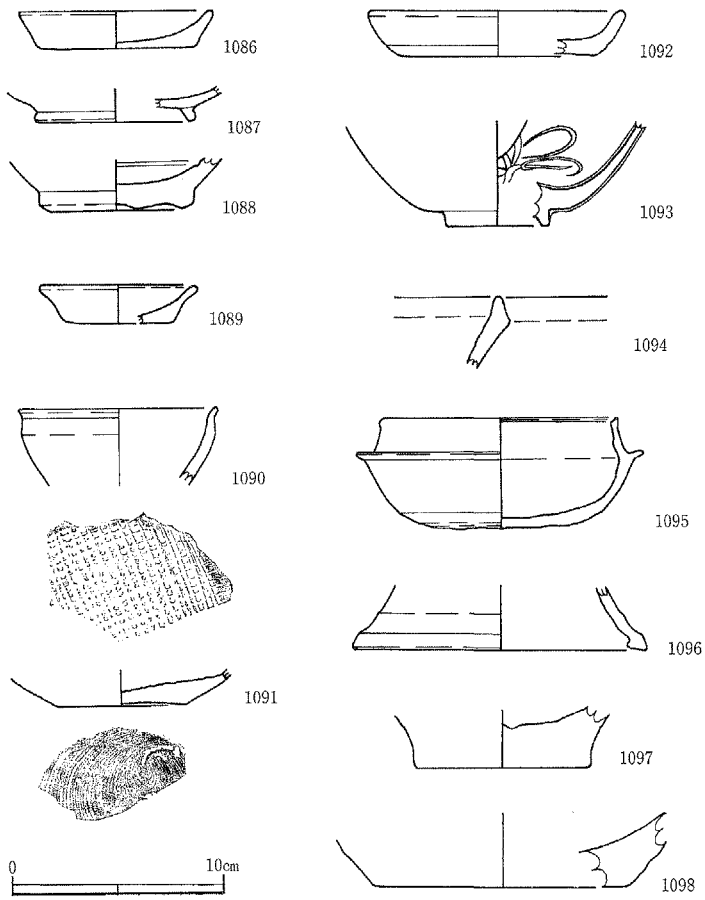
第73図　Ⅲ区 12-⑧区 遺構出土木器実測図



1077～1085：堰状遺構

第74図　III区 13-②区 遺構出土木器実測図

1091は瀬戸美濃系陶器である。1090は大窯２期の小天目茶碗である。1091はおろし皿の底部である。時期的には後期Ⅲであろうか。1092は土師器皿Ｅタイプである。1093は青磁碗である。器面の内外に細かい貫入が入り、釉の発色は草緑色である。1094は東播系捏鉢である。口縁の上方への拡張が認められる時期である。口縁部のやや下に重ね焼痕がはっきりと付く。1095・1096は古墳時代の須恵器である。1095は杯身、1096は高杯の脚部である。1097・1098は弥生時代前期の底部である。また、第200図、表15に示した、遺物番号2884～2886の石斧、磨石が出土している。



1086～1089：３層、1090・1091：２・３層、1092～1098：３・４層

第75図　Ⅲ区 10-⑤区・11-①区・12-⑧区・13-⑨区 包含層出土遺物実測図

第５節 Ⅳ区

Ⅳ区は高田土居城の調査である。高田土居城は、二回に分けて調査した。平成11年度北辺外堀と13年度の外郭部及び東辺外堀である。北辺外堀の調査は、現地踏査や地形図から堀部分に該当するとの認識があったが、調査により二重・三重の外堀を検出した。平成13年度調査は、東側外堀部分と外郭部の調査である。高田土居城の遺構に関しては、砂埋め戻しにより保存したため、下層の遺構に関しては未調査である。

（１）11-①Ｓ区（第76・77・81図、PL.11～15）

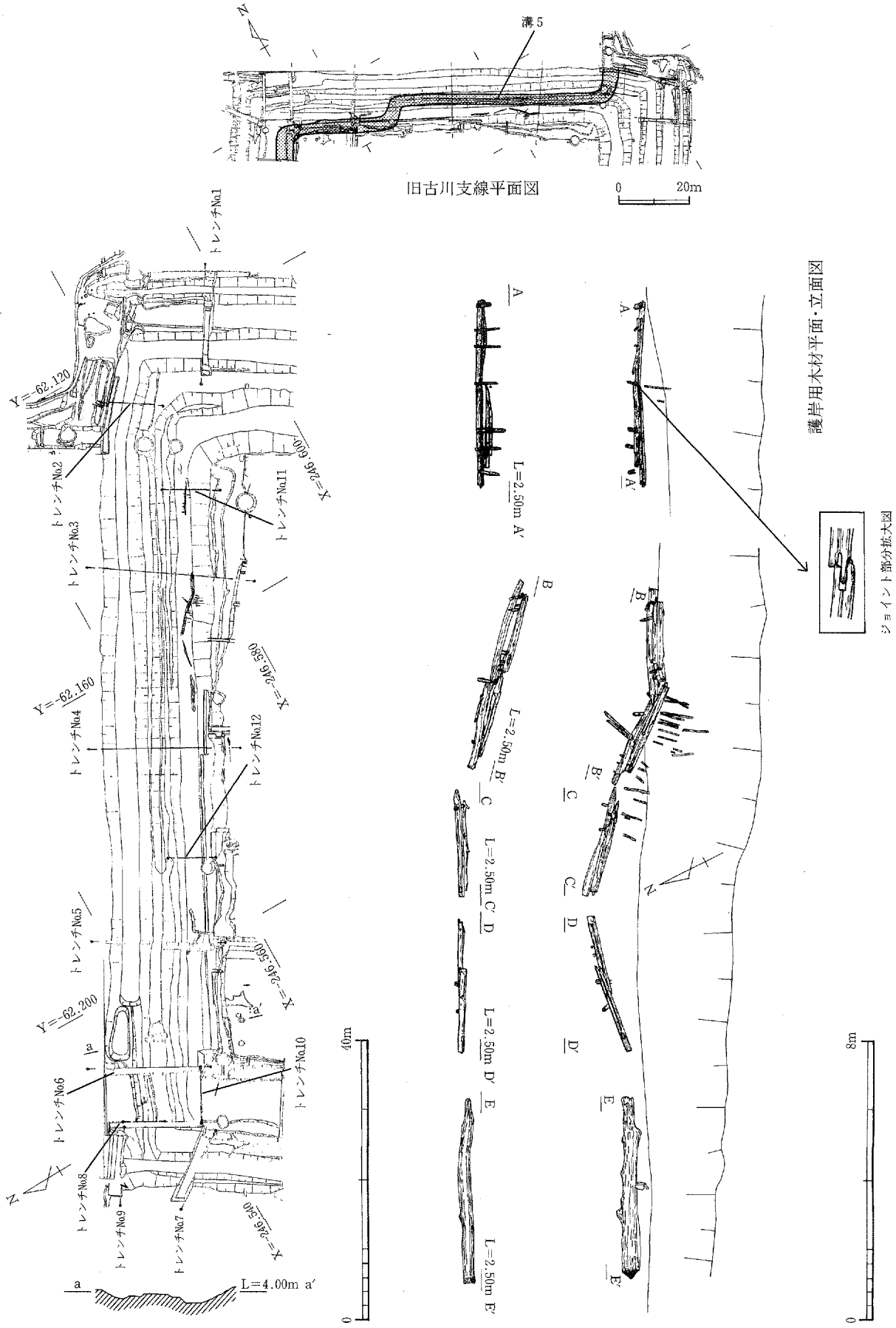
現状地形は水田部分と溝に該当する。現代の溝５は、11-①と12-③の間を条里型水田に沿って南北方向に流れたあと西一南一西一南と直角に屈曲して流れる。旧古川支線の流れである(第76図)。溝の複雑な屈曲は水田区画を造るためのものであろう。溝の両側には水田がある。溝の両方の肩部には護岸用杭が密に打ち込まれている。

外堀は、第１層水田層と第２層床土を機械掘削した第３層上面で検出した。当調査区の西側部分は旧河川に該当するが、中央部より東側部分は微高地に該当する。北側の調査区11-①中央部は、弥生時代前期の土坑など検出し、東の12-④区は三面にわたって集落を検出した微高地に該当する。高田土居城外郭部から広がる微高地は、室町時代に造られた二条・三条の外堀で分断されている。外堀１と外堀２、外堀３に関しては切り合い関係がなく、新旧は不明であるが、外郭部の調査により高田土居城の一連の遺構であることが判明した。外堀２と外堀４は、外堀２が外堀４に切られたかのような状況を呈し、段差もみられるが、水の流れや条里型水田の外周を巡る点からみて、切り合い関係は無いと考えられる。

外堀１・２は条里型地割と同一の方向に造られている。外堀１と外堀２は平行して掘削され、東部分と西部分で90度曲がり、南方向にのびる。外堀２は、西側では堀の幅が狭くなり、外堀４に流れ込む。幅が狭くなった地点より少し東側で、外堀２と外堀１と連結する小溝が掘られる。東部分の外堀２は、条里型地割の坪境より東にはずれるが、外堀１は条里型地割の坪境に合致する。西側部分では、外堀４に外堀２は連結するが外堀１は外堀４に連結せず、南に流れる。外堀４は条里型地割に沿って北より流れる。条里型水田の用排水の目的をもつ。土層観察用のあぜは、北辺部に等間隔に５本、東側に１本、西側に１本設定した。No.１～11である。また外堀１の北東隅北辺部分の版築状の置土が確認された地点にも土層観察のあぜを残した(No.11)。調査は、各あぜ間を層単位で掘り下げた。遺物の取り上げは、このあぜ間で行い、北辺堀の出土遺物は、コンテナで外堀１が９箱、外堀２が３箱であり、内郭に近い外堀１の方が出土量は多い。調査面積からすると、少ない遺物量である。

外堀１

外堀１は高田土居城外郭部をとり囲む堀である。外角部北辺にそって、直線的に掘削された堀で全長110m検出した。東西両端で90度南に折れる。この堀は、溝５に、北東隅から中央部までの北肩部と中央部から西側の南肩部を破壊される。近現在の溝５の両肩部には、杭が打ち込まれており、その残存した杭列が外堀１に残る。断面形状はＵ字形を呈し、外堀２とは異なる。外堀１は北辺部の中央で、



第76図 IV区 11-①S区 北辺外堀1内 護岸用木材平面・立面図

幅９m前後、深さ1.6～2.2mである。北辺部の東側では幅7.8m、深さ２mである。西側では幅７m以上、深さ2.2mである。堀底の標高は、コーナー付近で2.52m、これより南方向へ５m前後の間隔で、2.78m、2.92m、3.02m、2.94mである。よって南から北方向へ流れることになる。また北東コーナーから西方向へ５～10m前後の間隔で、2.52m、2.53m、2.58m、2.26m、2.24m、2.14m、2.23mである。よって東から西方向へ流れることになる。このことから堀内の水は南から北、さらに西へ流れる。

護岸用の木材列は、外郭部北東隅のコーナー部分から、外堀１の南肩部分に沿って西に35mにわたって作られている。この間は、堀の南肩部に版築状置土が存在する。作られた後も土圧により一部が北側に押されて潰れている。またこの間には、堀内堆積土にこぶし大の石が散乱する形で出土する。

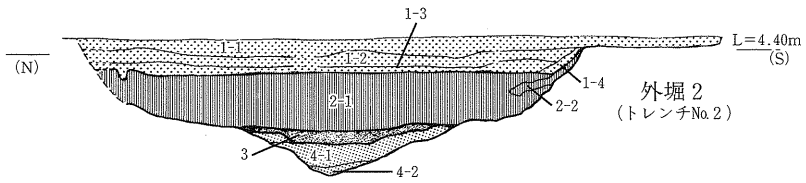
護岸の構造は、最下部に木材列を置いて、版築状置土により南肩部を固めている。版築状置土は、No.11土層観察あぜでは、下部は３層（27～29）の黒褐色シルト、明黄褐色シルト、黄褐色シルト層で固め、順次10～30cm程度のシルト層を水平に築き固めている。またNo.３土層観察あぜでは、シルト層により４層の簡単な積み上げを行い、後に３層にわたって小石を入れながら築き固めている。木材列に関しては、堀の南辺底に太いもので15cm、細いもので10cm前後の先端を尖らした丸杭を、0.4～1.4mの間隔で打ち込んでいる。杭の前面には丸柱材を横におき、杭を打ち込んでいる。また杭を挟んで後ろの最下部には、建築用の部材（第114～116図）を横に置き、最大で３段にわたって積み上げる。横に繋がる部材同士は、ほぞ孔があるものは組み合わせている。ほぞ孔に杭を打ち込み、止めている柱材もある。建築部材は丸柱や角柱などがある。丸柱の先端部は削りだしている。第５層からは松材が３本出土する。松材は先端部を尖らした以外、加工しておらず樹皮を付け原木を切り出した状態である。堀には杭で留めた状態などなく、切り出されたあと堀に貯木されていたと考えられる。使用する前に埋没したものである。

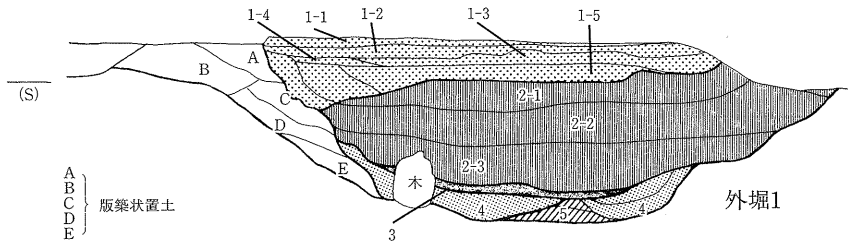
堆積土は、基本的に外堀２と同一の様相を呈する。長い堀であるが、堆積土の様相は東でも西でも第１層～第５層まで同一である。

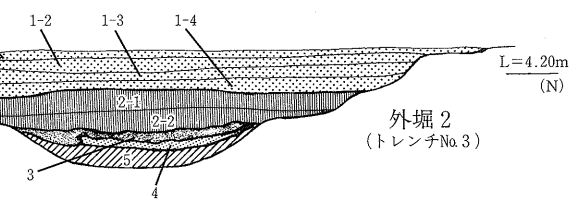
第１層、第２層は、外堀１・２・３共に同一の堆積である。第１層は、黄灰色シルト層で小礫を含み、北辺部堀全面に見られる層である。土質からみて、堀を埋めるために整地された層で、４層に区分できる。この上には床土を敷いて近現在の水田層が見られる。第２層は、茶褐色シルト層と粘土層で、３層に区分できる。この層は滞留したため堆積した粘土層で、流れによる堆積層ではない。第３層は、青灰色粘土層で、白色粒を含む。第４層は木片などを含む層で、流れによって堆積した層である。第５層は、木片を多く含む粘土層である。この第５層の上にNo.４、No.12、No.５で南の外郭部からの黄褐色シルト層の落ち込みが確認できる。No.４では外堀２の北方向からも黄褐色シルト層が落ち込んでいる。北側からの落ち込みはこの部分だけである。No.４の南側では、第５層粘土層が軟弱なため、勢いを持ってシルト層が南から落ち込み、その圧力で両側に粘土層が跳ね上げられた状態で堆積している。No.４とNo.５の中間地点のNo.12付近では第５層がなく、堀底部分に南から北方向へ短期間に流れ落ちて堆積した層がみられる。シルト層が交互に堆積した層である。内郭部の調査で検出した土塁は、版築状に積み上げられている状況から、この落ち込みの堆積層も、版築状に積み上げた土塁を潰して

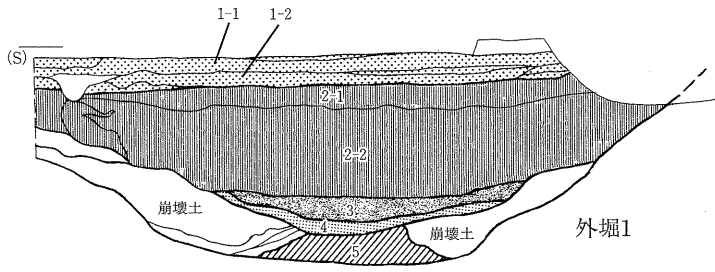
第1-1層 N6/8(灰)に10YR5/8(黄褐)混シルト 砂少量含む
第1-2層 N6/8(灰)に10YR5/4(にぶい黄褐)混シルト 小石(3～5mm大)含む
第1-3層 N5/8(灰)に10YR5/4(にぶい黄褐)混シルト 砂少量含む マンガン含む
第1-4層 N6/8(灰)に7.5YR6/8(橙)とマンガン粒 7.5YR2/2(黒褐)を含む シルト
第1-5層 N5/8(灰)に7.5YR6/8(橙)を助状に含む 小石(3～5mm大)含む
第2-1層 N5/8(灰)砂多量含む 上端に7.5YR6/8(橙)を含む 粘土層
第2-2層 N5/8(灰)粘土層 小石わずかに含む
第2-3層 N6/8(灰)に10YR5/8(黄褐)が混 マンガン粒 10YR3/2(黒褐)を含む シルト

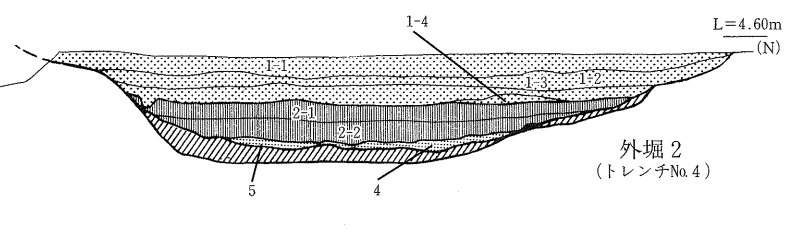
第3層 N5/8(灰)に10YR5/8(黄褐)が混 シルト
第4層 N5/8(灰)に10YR6/8(明黄褐)が混 シルト
第5層 N5/8(灰)にマンガン粒7.5YR2/2(黒褐)と7.5YR5/8(明褐)を含む シルト

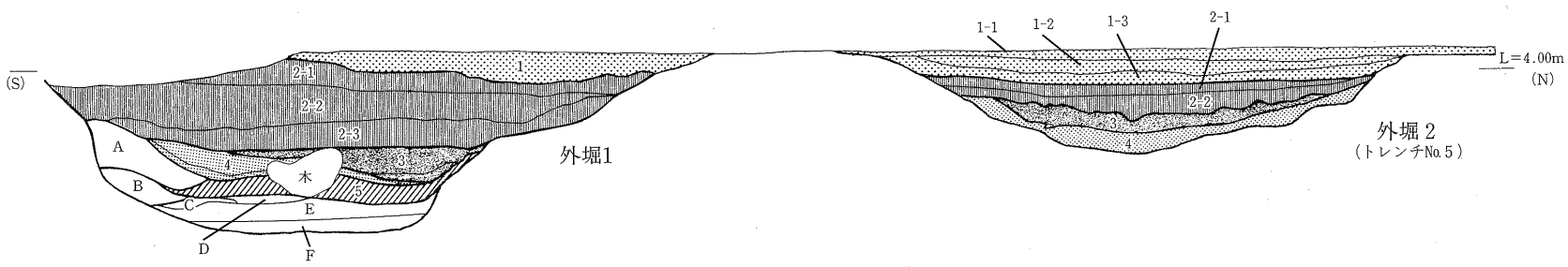




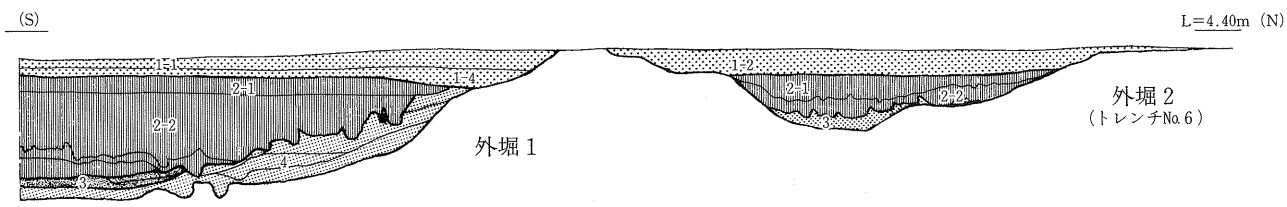


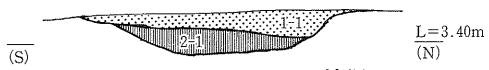


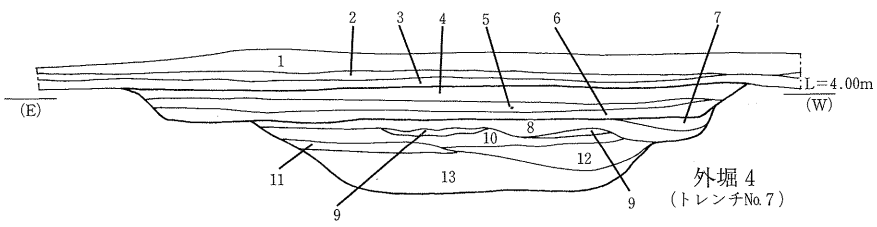


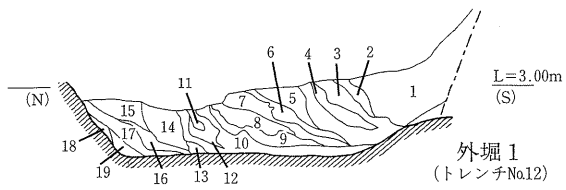


A 10GB6/1(青灰)シルト
B N3/(灰)粘土層
C 10BG5/1(青灰)粘土層、木片含む
D 10BG6/1(青灰)シルト、砂多く含む
E N5/(灰)と10BG6/1(青灰)が混る 粘土層、木片含む
F 10BG6/1(青灰)シルト

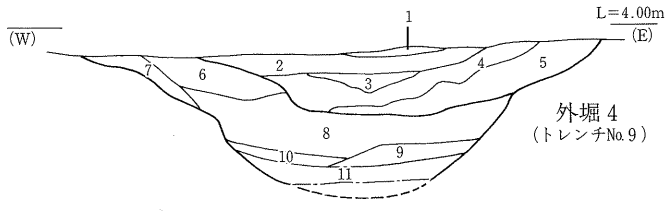




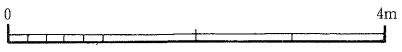




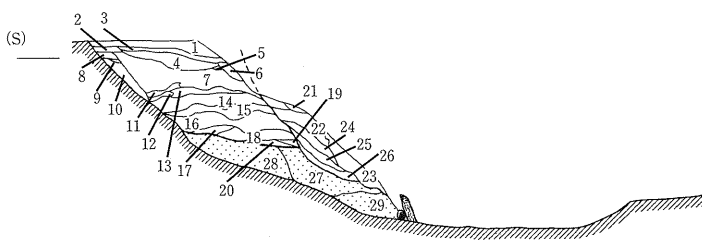
1 N5/(灰)砂多量含む シルト
2 N4/(灰)シルト
3 5B6/1(青灰)シルト
4 N5/(灰)砂層・炭微量含む
5 N5/(灰)シルト
6 5B6/1(青灰)シルト
7 N5/(灰)シルト
8 N5/(灰)シルト
9 N5/(灰)砂層
10 N7/(灰)シルト
11 N5/(灰)砂層
12 N6/(灰)シルト
13 N6/(灰)シルト・砂含む
14 N5/(灰)シルト一部砂多く含む
15 N5/(灰)砂層に青灰色シルトをブロック状に含む
16 N4/(灰)砂層に炭小片をわずかに含む
17 N6/(灰)シルト
18 N5/(灰)シルトに炭小片をわずかに含む
19 5B6/1(青灰)シルト



1 N5/(灰)砂質シルト
2 N5/(灰)シルト
3 2.5Y4/1(黄灰)砂層
4 N4/(灰)シルト 炭小片・砂含む
5 5BG5/1(青灰)シルト 砂多量含む
6 10BG6/1(青灰)粘土層
7 N5/(灰)粘土層 炭小片・砂含む
8 N4/(灰)砂と礫を多量含む
9 N4/(灰)砂層
10 N4/(灰)粘土層・一部砂含む
11 N4/(灰)粘土層 薄い砂層が数層堆積する



1 耕作土
2 耕作土
3 耕作土
4 N5/(灰)に5YR5/8(明赤褐)を含む 砂質シルト
5 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)とマンガン粒7.5YR3/2(黒褐)を含む 砂質シルト
6 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)を多く含む 砂多い
7 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)を上端に多く含む 砂質シルト
8 N5/(灰)に10YR7/8(黄橙)をわずかに含む 砂多い粘土
9 N5/(灰)粘土
10 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)が班に入る 砂多い粘土
11 N5/(灰)に炭小片を多く含む 粘土
12 N5/(灰)に砂を多く含む 粘土
13 N5/(灰)粘土を上層に含み下層は砂が数層にわたって堆積する



1 N5/(灰)に10YR5/6(黄褐)が混 シルト
2 7.5YR5/6(明褐)に7.5YR3/2(黒褐)の粒を含む シルト
3 2.5Y5/1(黄灰)に7.5YR3/2(黒褐)の粒を多量含む シルト
4 N5/(灰)に7.5YR2/2(黒褐)の粒を多く含む シルト
5 N5/(灰)シルト
6 2.5Y5/1(黄灰)シルト
7 2.5Y5/1(黄灰)に10YR5/6(黄褐)が多量に混 10YR3/2(黒褐)粒含む
8 N5/(灰)に7.5YR6/8(橙)をわずかに含む
9 N5/(灰)シルト
10 N5/(灰)に7.5YR6/8(橙)と7.5YR3/2(黒褐)粒を多く含む シルト
11 N5/(灰)に5YR3/1(黒褐)の粒僅かに含む シルト
12 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)を多く含む シルト
13 N5/(灰)に7.5YR5/8(明褐)を多く含む シルト
14 N5/(灰)に7.5YR6/8(橙)をわずかに含む シルト
15 N5/(灰)に7.5YR6/8(橙)をわずかに含む シルト・砂多量含む
16 N5/(灰)シルト
17 N4/(灰)に7.5YR6/8(橙)を多く含む シルト
18 5B6/1(青灰)に7.5YR6/8(橙)
19 5G6/1(緑灰)シルト
20 5B6/1(青灰)に7.5YR6/8(橙)を多く含む・シルト
21 2.5Y5/1(黄灰)に10YR5/6(黄褐)を多く含む
22 N5/(灰)シルト 砂多量含む
23 N5/(灰)シルト 砂含む
24 N6/(灰)シルト 砂含む
25 N5/(灰)シルト
26 5B6/1(青灰)シルト
27 5B6/1(青灰)に10YR5/1(灰)と7.5YR6/8(橙)の粒わずかに含む
28 10YR6/8(明黄褐)とN5/(灰)が混 シルト
29 10YR3/1(黒褐)シルト 砂含む

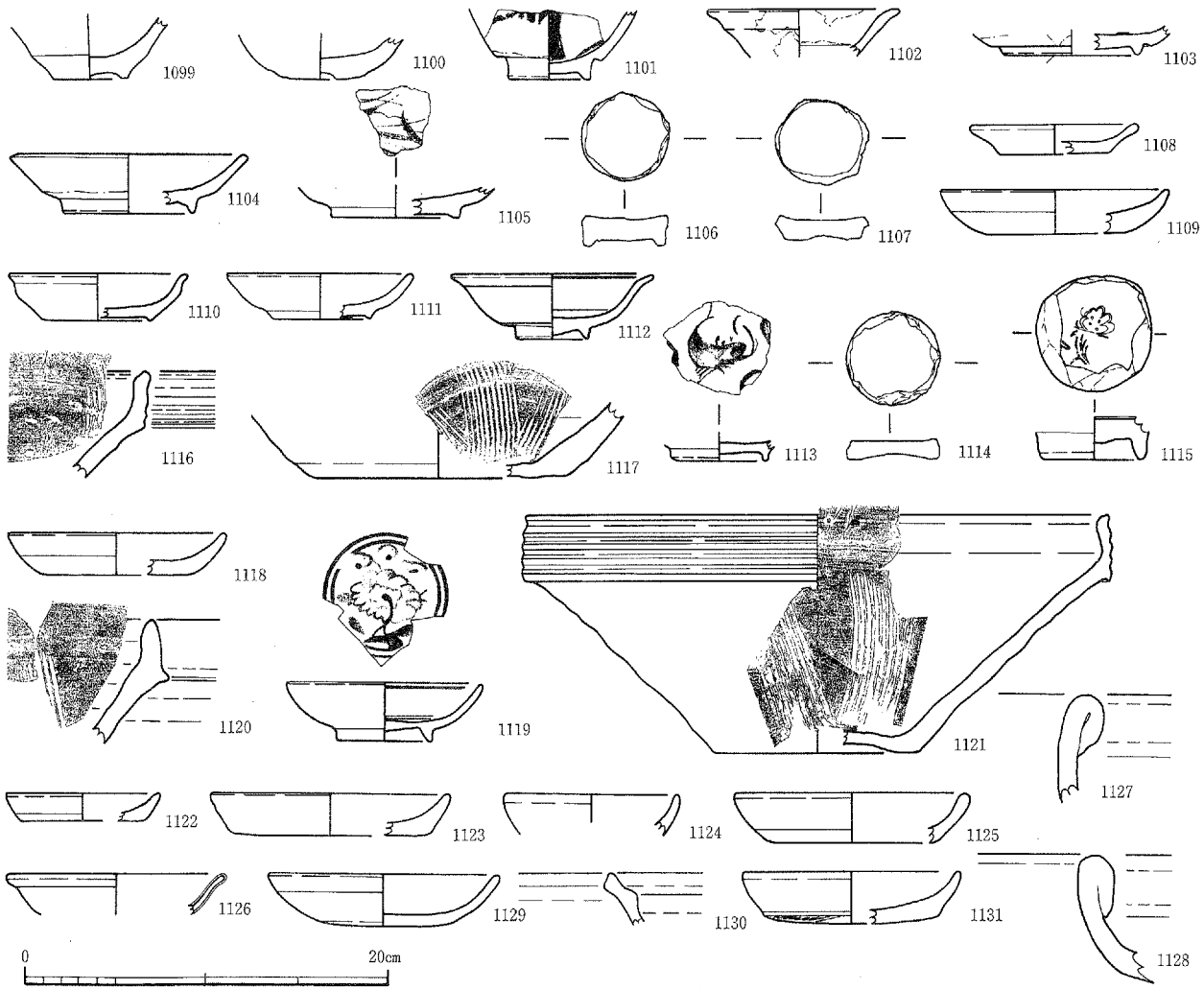
堀に投げ捨てた状態である。また黄褐色シルト層は堀内に堆積しているが、南や北方向から短期間に流れ込んで堆積した層であり、不自然な堆積層である。土塁あるいは堀の肩部が、何らかの原因により堀に流れ込んだ層と考えられるが、堀の切り込み面を形成している黄褐色シルト層が滞留などの水の影響で一気に流れ落ち込んだ可能性の方が高いとも考えられる。

外堀1北辺出土の遺物（第78図、PL.104）

出土遺物が、第1層が唐津焼など17世紀前半から17世紀後半までの遺物を含む。第2－1層は備前焼擂鉢の特徴などから、16世紀中頃～終わり、第2－2層はやはり備前焼擂鉢の特徴から16世紀前半～中頃に比定できる。第3・4層は青磁が15世紀後半で備前焼甕が間壁編年IVb期の終わりに該当し、15世紀後半～16世紀前半の堆積層である。第5層出土遺物は、土師器皿である。

第1層出土の遺物

1099・1100は唐津焼である。1099は碗で体部外面下部をヘラ削りしている。この場合のロクロ回転は左である。内面の釉はくすんだオリーブ色を呈し、また釉の表面には細かい黒褐色の鉄分が表れる。1100は段皿で、見込みには砂目痕がある。1101～1107は瀬戸美濃陶器である。1101の天目茶碗は赤茶



1099～1107：第1層、1108～1117：第2－1層、1118～1121：第2－2層、1122～1128：第2－3層、1129・1130：第4層、1131：第5層

第78図　IV区 11-①S区 外堀1 出土遺物実測図

色の釉を体部高台削り出し部分まで掛け、高台部分を露胎としている。1102は鉄釉の稜皿で、大窯３期前半の時期である。1103は灰釉反り皿、1104は灰釉丸皿で、時期は双方共に16世紀中頃である。1105は志野鉄絵皿で、時期は17世紀初頭である。1106・1107は天目茶碗の底部をメンコ状に打ち欠いたものである。

第２－１層出土の遺物

この層からは土師器皿、瀬戸美濃陶器、備前焼擂鉢、中国製染付などが出土した。

1108・1109は土師器の皿である。1108はＤ３タイプである。1109はＥタイプである。器壁が厚く、大きさの割合に浅いものである。底部は不定方向のナデ調整を施す。1110は灰釉端反り皿で、見込みには菊の印文が認められる。1111は灰釉丸皿である。高台の断面は三角形を呈する。1112・1113は漳州窯の染付皿である。1112は端反り皿で、内外面の口縁部から部に施釉され、内面見込みは無釉である。1113は雑ではあるがメンコ状に打ち欠いている。1114・1115もメンコで、1114は瀬戸美濃天目茶碗、1115は青磁碗である。1116・1117は備前焼擂鉢である。1116は口縁端部内面に稜線がはいる時期である。1117の櫛目は１単位11本である。

第２－２層出土の遺物

ここからの出土遺物には土師器皿、備前焼擂鉢、中国製染付などがある。

1118は土師器皿Ｅタイプである。器面磨耗のため調整は不明である。1119は漳州窯の皿である。見込みには草花文の絵付けを施す。1120・1121は備前焼の擂鉢である。1120の内面口縁部直下は自然釉が胡麻状に掛かる。時期は口縁の形態から、中世５期ａからｂの過渡期であろうか。1121は内面の口縁端部に稜線のはいる中世６期ａの時期と思われる。

第２－３層出土の遺物

この層の出土遺物は土師器皿、中国製青磁、備前焼甕、播磨系土師器鍋、須恵器（奈良時代）などが出土している。

1122～1125は土師器皿である。それぞれ1122はＤ２タイプ、1123はＥタイプ、1124はＦ２タイプ、1125はＦ１タイプである。1126は青磁の皿である。体部は膨らみながら立ち上がり口縁は外反しながら短部を丸くおさめる。1127・1128は備前焼甕の口縁部である。1127は中世４期ｂ、1128は中世５期の範疇であると思われる。

第４層出土の遺物

この層からは1129・1130の２点の破片だけである。

1129は土師器皿Ｂタイプである。1130は播磨系の土師質鍋の口縁部細片である。器面は激しく磨耗している。胎土には微細な酸化粒を含み、突帯下には煤がわずかに付着する。

第５層出土の遺物

この層から出土した中世遺物は土師器皿（1131）Ｅタイプ１点だけであった。完形品である。他には混入と考えられる弥生土器時代後期の高杯脚部、弥生時代前期の甕の底部が出土している。

調査面積や遺構の規模が大きいにもかかわらず、出土遺物が非常に少ない。堀の開削時期から埋没

時期まで、量的には少ない出土遺物から時期決定を行う。

最下層の第5層出土遺物は、土師器皿だけある。第4層からは15世紀末と考えられる土師器鍋(1130)、第2層の下層の2-3層からは15世紀代の青磁、備前焼甕等が出土した。この中でも最も新しいと考えられる遺物は、1128の備前焼甕である。時期は15世紀後半と考えられる。2層の上層、中層に当たる2-2層、2-1層の遺物では、漳州窯系の染付皿が最も新しいもので16世紀後半の時期である。最も上層の第1層の遺物は16世紀後半から17世紀第1四半期までの時期の遺物である。

以上、出土遺物から北辺の外堀1は15世紀後半に開削され、16世紀後半には堀としてのその機能を失い、16世紀末から17世紀初頭にかけて埋没したと考えられる。

外堀2

東西方向に直線的に掘削された堀である。全長120mの長さで検出した。一部北東部は12-③の調査区に入り、条里型水田の東外に出る。旧古川支線の溝が当たる部分の北側肩部は、破壊される。堀の北東隅には、北側より流れ込む溝が付けられている。断面形状は緩やかに落ち込む。幅5～6.5m、深さ1～1.4mである。西側の細い部分では、幅3m、深さ0.9mである。東部分で南流する外堀2は、幅が6.5mと北側の堀に比べて幅が大きくなる。堀底の標高は、東辺部分で東隅から5m前後の間隔で南へ3.24m、3.54m、3.51m、3.73m、3.69mである。南から北方向へ流れる事になる。また、北辺部分では東隅から5m前後の間隔で西へ3.14m、3.13m、3.26m、3.24m、3.23m.3.27m、3.27m、2.91m、3.22m、3.19mである。堀が細くなった部分では、高くなり3.39m、3.32m、3.34mになる。東から西方向へ流れる事になる。東端から中央部までは東から西に向かって低くなっているが、細い溝になる直前では高くなり、また細い堀では低くなる。細い堀になる直前では、水は滞留をしたものと考えられる。この場所の溝は、中央部を溝の流れに沿って凸部に掘り残しており、二条に区分される。南側は外堀4に流れ込み、北側は3m×7mの大きさでプール状に掘削される。このプール状の窪地の最下層には、砂層が堆積している。外堀4の下位には、弥生時代後期から以降の旧河川が存在する。堀を西端だけ細くするのは何のためか。①下位に旧河川が存在し堀を東側と同一に掘削するには基盤が軟弱であったため細くした、②水の流れを部分的に堰き止め、外堀1に流し込んだ、③橋を造る目的で細くした、など考えられる。

外堀2には版築や杭、木材列などにより護岸が行われた個所は存在しない。また外堀1のように原木が貯木されることもない。

外堀2出土の遺物（第79図、PL.105）

堆積土第1層～第5層は、外堀1に同じである。外堀2と違う層は、最下層の砂層などの堆積土である。第1-1層が唐津から16世紀中頃～17世紀前半、第2層は備前焼擂鉢から16世紀前半以降の時期と考えられる。

第1層出土の遺物

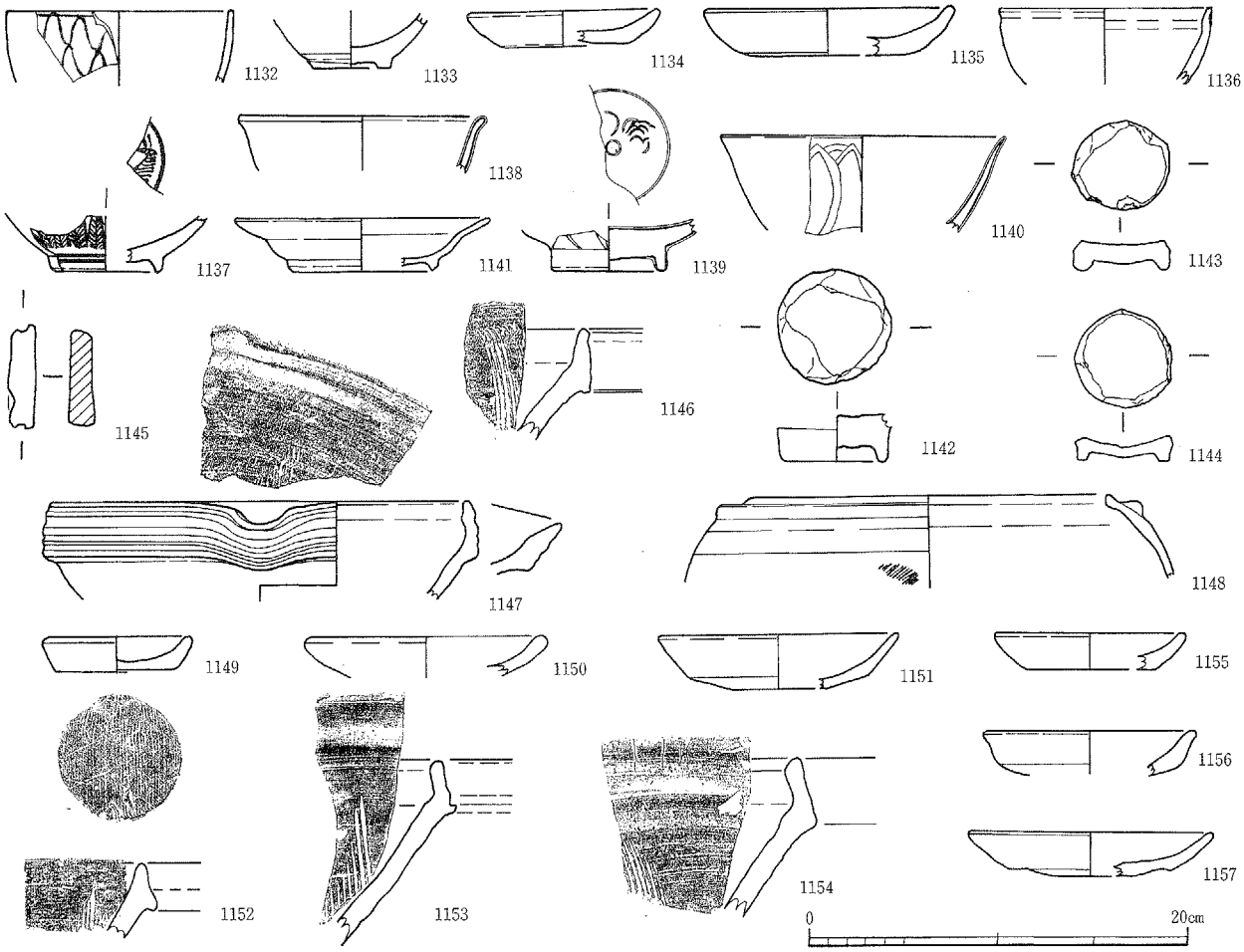
1132は波佐見窯の染付茶碗である。図柄は一重網目文である。1133は唐津焼碗で、赤褐色の生地に灰白色の釉が掛かる。1134・1135は土師器皿でEタイプである。1134は破片であるため、若干口径が

小さい。1136は瀬戸美濃天目茶碗である。口縁部の形態から大窯４期後半の時期である。1137は中国製染付茶碗である。外面には蕉葉文が描かれ、畳付は無釉である。1138～1140は青磁碗である。1138の口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。焼成は軟質である。1139は高台内面まで釉が掛かり、外底は無釉である。1140は鎬蓮弁文で、口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に丸くおさめる。1141は白磁の段皿である。体部は中位からやや受け口状に外反する。釉は白濁色を呈する。1142～1144はメンコ状製品である。1142は青磁碗、1143・1144は瀬戸美濃天目茶碗の再利用である。1145は土錘である。両端に孔を穿つタイプであるが、端部は欠損している。1146・1147は備前焼擂鉢である。1146は細片で、口縁帯は未発達の段階である。1147は口縁内面に明らかに稜線が入り、口縁帯の上部への拡張は一様な厚さで「く」の字状を呈する。胎土には微細な長石が混ざる。時期的には中世６期ｂと思われる。1148の播磨系土鍋の胎土には微細な酸化粒子と長石の粒子が含まれる。体部には斜め方向の並行タタキが認められる。

第２層出土の遺物

この層からは土師器皿、備前焼擂鉢・壺の底部などが出土している。

1149～1151は土師器皿である。1149はＦ２タイプ、1150は該当するタイプがない色調は褐色で、体部は斜めに立ち上がり、口縁は肥厚する。1151はＢタイプである。1152～1154は備前焼擂鉢である。



1132～1148：第１層、1149～1154：第２層、1155～1157：第３層

第79図　Ⅳ区 11-①Ｓ区 外堀２ 出土遺物実測図

これら三個体のそれぞれの時期は口縁の形状から、1152は15世紀後半(中世5期a)、1153は15世紀末(中世5期b)、1154は16世紀第1四半期～第2四半期(中世6期a)の範疇と思われる。

第3層出土の遺物

1155～1157は土師器皿で、1155はD3タイプ、1156はF1タイプ、1157はBタイプである。

第3層出土遺物は土師器皿である。1156の皿と同様のタイプのものが外堀1の最下層(第5層)から出土している。中層の第2層からは、15世紀後半から16世紀前半の備前焼擂鉢が出土している。上層の第1層出土遺物は最も多く、時期的には13世紀末から17世紀後半と広い時期幅があるが、1132・1133の肥前系陶磁器、1136の瀬戸美濃天目茶碗などから、16世紀後半から17世紀後半の埋没時期が考えられる。

外堀2は鎬蓮弁文の青磁(1140)を除けば15世紀後半から17世紀代の時期幅があり、この中で下層、上層の遺物の時期が外堀1と合致することから、開削時期は外堀1と外堀2は同時期と考えられる。

外堀3

最も外側に位置する堀である。北東部の堀は三条あり、西から外郭部を形成する外堀1、中間の外堀2、最も東の外堀3になる。外堀3は、外堀1・2と切り合い関係は存在しないが、南で外堀1・2に合流し一条になる。北辺の溝より取水する。幅4.5mで最も細い堀である。深さは1.3mである。

堆積土は、第1～4層については外堀1・2と同じであるが、両肩部よりのシルト層の崩壊がある。下位は流れて堆積した層である。堀底の標高は北側から南に向かって、3.55m、3.49m、3.50m、3.51m、3.59mとなる。ほぼ変わらない高さであるが、僅かに南の方が高くなる。

この堀からの出土遺物については13-④区東辺の外堀3で記す。

外堀4

西辺部を南北方向に流れる堀である。幅5m、深さ1.5mである。古川支線を挟んで西側に外堀4の延長線部分が存在し、蛇行しながら北方向に向かう。外堀1・2・3などと堆積状況は違い、本来の用排水の目的を持った溝と考えられる。

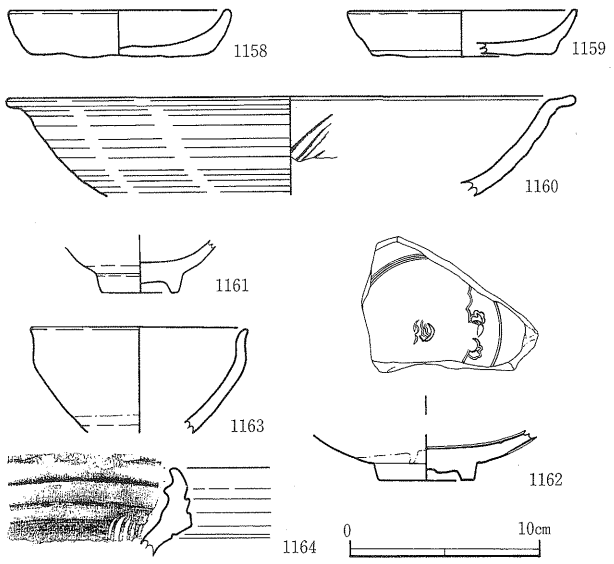
堆積土は木片を含む層が多く、粘土層と砂層が交互になっており、流れて堆積したものである。堆積状況から、水田の北側からの排水は、外堀2よりもこの堀9の方が活発に行っていたと考えられる。

この堀からの出土遺物には上層で土師器皿、中国製青磁碗、瓦器火鉢、近世Ⅰ期bと考えられる備前焼擂鉢などがある。下層からは須恵器、弥生土器等がある。

溝5

この溝は現有の溝で北辺外堀上を流れる。近世から現代まで踏襲されている。

溝5出土の遺物(第80図)



1158～1160：第1層、1161～1164：第2層

第80図　IV区 11-①S区 溝5(近世溝)出土遺物実測図

この溝からの出土遺物には土師器皿、国産陶磁器（唐津焼、備前焼、瀬戸美濃）中国製白磁などがある。溝の時期は、外堀１を掘り込んでいることからも近世以降であることは明白である。しかしながら、周辺の中世包含層との関連上、出土した中世の遺物も図化した。

第１層出土の遺物

土師器皿1158・1159はＥタイプである。1160は絵唐津の大皿である。口縁端部を外側に折り曲げ受け口状にしている。釉色は灰白色を呈し、図柄は不明である。

第２層出土の遺物

1161は唐津焼天目茶碗である。胎土は密で、鉄分を含んで赤茶色である。1162は所謂ビロースクタイプと呼ばれる白磁碗である。森田分類のＣ群である。1163は16世紀前半の瀬戸美濃天目茶碗である。1164は備前焼擂鉢である。形状は口縁帯外面の下顎部の張り出しが弱くなる。時期は近世２期ａ（17世紀前半）と考えられる。

（２）13-④区

この地区は11-①Ｓ区で検出した北辺の外堀１・２と、これに繋がる東辺の外堀１・２・３、西辺の外堀１・４に囲まれた高田土居城の北外郭部分である。

基本層序（第81図）

調査地の現状は梅畑であった。その下は周囲と同様に元々は水田として使用されていた。この地区の調査に関しては高田土居城を保存する目的で第４層以下の調査には至らなかった。なお、この地区は東側の第Ⅴ区から続く微高地に当たり、そのため高田土居城の検出面より下の堆積層の状況確認の意味で調査地全般にグリッドを設けた。

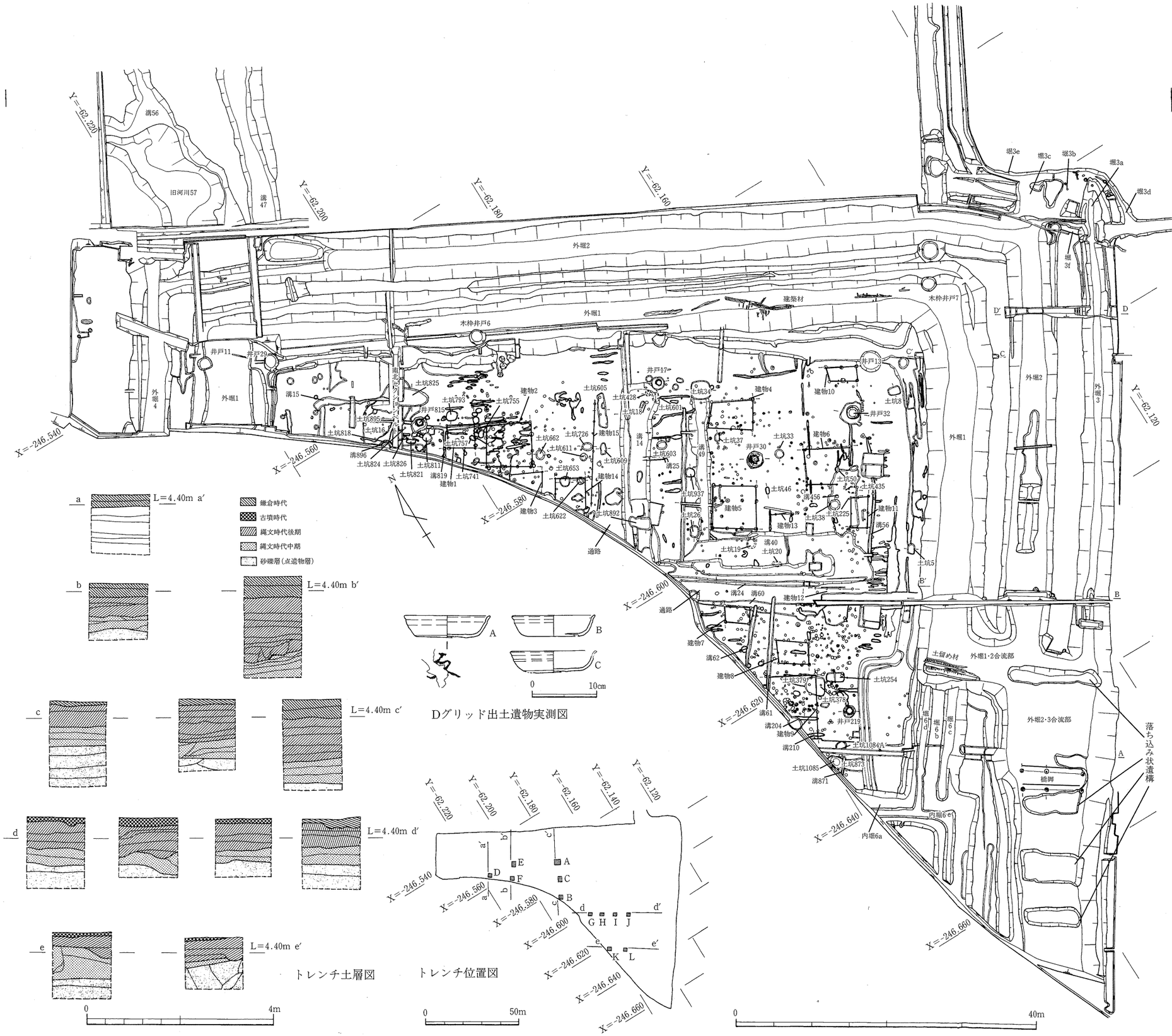
基本層序は上層から第１層：現耕作土、第２層：床土、第３層：中世包含層(室町時代)、第４層：中世包含層（鎌倉時代～室町時代)、第５層：古代包含層（飛鳥・奈良時代)、第６層：古墳・弥生時代包含層、第７層：縄文時代後期包含層、第８層：縄文時代中期包含層である。これら各層の色調、土質については調査区南壁の土層図（第82図)、グリッドの土層図（第81図）に著している。

第３層は細かく３ａ層、３ｂ層、３ｃ層と分層することができたが、３ａ層～３ｃ層がそれぞれ調査区全域において一定の厚さで全域に存在するわけではなかった。先にも記したが掘削したのはこの層までである。第４層は厚さ８～10㎝で調査区の西判部で確認できたが東側では確認できなかった。第５層は東側の狭い範囲でしか確認できなかった。この第5層と同時期の遺物がⅢ区溝48や本調査区のＤグリッドからも出土している(第81図)。おそらくⅢ区溝48の続きであると考えられる。第６層～第８層は調査区の東側で確認され13-④区の微高地の延長である。これらの層の確認については、東辺外堀の肩部で顕著であった（PL.65)。

また今回の調査において、縄文時代から中世までの堆積層が確認できたのはこの調査区だけであった。このような状況を作り得たのは、旧南部川と旧古川の流れにより微高地が形成されたためである。

東辺の外堀（第81～86図、PL.60～67)

この区の堀（外堀）についての遺物の記述は、調査時の堀の呼称別に行なう。呼称は内側から順に



第81図　IV区 11-①区・13-④区 高田土居城北外郭部 遺構平面図

外堀１、外堀２、外堀３で、途中でこの外堀１と外堀２が合流する箇所がある。この箇所を外堀１・２合流部と呼び、この箇所と同地点から、外堀２と外堀３が合流して１本化する。この幅の広い堀を外堀２・３合流部と呼ぶ。

従って、以下に外堀１、外堀２、外堀３、外堀１・２合流部、外堀２・３合流部の記述と各堀からの出土遺物を記す。

東辺の外堀１

外堀１は最も外郭部に隣接する堀で、南北方向に約57m（一部北側は11-①Ｓ区である）を検出した。南の突き当り部分では、堀６を埋め立てた崩落を防ぐため土留め材により護岸されていた。深さは約1.55～2.00mを測り、北方向に徐々に深くなる。堀の幅は8.0～9.5mを測る。埋土の堆積状況は最上層が近世の水田層で数枚の水田が認められる。その下は黄橙色系の砂質シルト層である。ここまでの層を遺物取り上げ時の上層とした。中層は褐色系のシルト層で滞留していたと考えられる。下層は灰色系の粘土層であった。また、11-①Ｓ区で検出した北辺の外堀の様な土塁の崩落土とみられる様な土は確認できなかった。

東辺の外堀１出土の遺物（第87図、PL.105）

北辺の外堀１の項でも記したが、この地区の堀も全体から出土した遺物量は、発掘面積と深さからすれば非常に少ない。出土遺物には土師器皿、肥前系陶磁器、備前焼擂鉢、土師器鍋などがある。

上層出土の遺物

この層からの出土遺物には1167・1168・1170がある。1167・1168は土師器皿で、1167はＢタイプ、1168はＦ１タイプである。1170は備前焼擂鉢である。外面の色調は重ね焼により口縁帯（暗褐色）と体部（赤茶色）とがはっきり異なる。時期は中世５期ｂである。

これらの遺物のほかに図化できなかった細片で縄文土器、弥生土器、須恵器、備前焼甕、瀬戸美濃灰釉皿などがある。

中層出土の遺物

出土遺物は1169・1172である。1169は土師器皿Ｅタイプである。1172は播磨系の土師器鍋で、口縁直下に付された突帯は断面三角形を呈する。また、突帯直下から平行タタキを施している。胎土は堅緻で微細な長石粒を含む。

この層から出土した細片遺物としては弥生土器、土師器皿、常滑焼甕などがある。この常滑焼甕の押印は約２㎝の間隔を測る。受口状口縁から「Ｎ」字状に移行する時期（13世紀後半）であろうか。

下層出土の遺物

この層の遺物は図化できるものは無かった。出土遺物には弥生土器高杯、須恵器杯蓋（古墳時代）、須恵器高杯（奈良時代）、中国製青磁碗（15世紀）、備前焼甕・擂鉢（15世紀後半）などがある。

最下層出土の遺物

この層からの出土遺物は1171の土師器皿１点のみであった。これはＤ３タイプである。

【東辺の外堀１出土の遺物について】

この堀は北辺で検出した外堀１と当然ながら繋がるもので、開削の時期も同時期でなくてはならない。また、時期決定も北辺堀と同様に少量の遺物で行なうほかない。そこで、時期が確立されている備前焼擂鉢でおこなうと次のようになる。

各堆積層から出土した遺物の、最も新しいと考えられるものは、下層からは15世紀後半の備前焼擂鉢、中層からは16世紀中頃の備前焼擂鉢、上層からは17世紀初頭と思われる唐津焼碗が出土している。この時期は北辺外堀１の開削時期から埋没までの時期幅と大差の無いものと考えられる。

東辺の外堀２

外堀２は外堀１の外側（東側）に沿うように南北方向に約55m（一部北側は11-①Ｓ区である）を検出した。南側では外堀３と合流する。

堀の幅は6.0～7.0mを測る。また、底でのレベルは、土層の図化箇所であるＢラインからＤラインに行くほどに深くなる。これはたまたまこのような状況になったのではなく、底のレベルでは北方向に徐々に低くなっていることを、全体の遺構図から確認している。この状況は外堀１と同様の傾向を示す。また、これの底で長さ約9.0m、幅約2.8mのほぼ長方形の窪み状の箇所を検出した。この深さは底から約30cmを測る。

堀の堆積状況は基本的に外堀１と同様であり、ここでも最上層は近世の水田層が数枚認められた。

東辺の外堀２の出土遺物（第87図、PL.105）

ここには上層から出土した遺物を３片図化（1174～1176）した。他の層の出土遺物は細片のため図化できなかった。

上層出土の遺物

1174は瀬戸美濃端反り碗である。釉は鉄釉が掛かり、胎土はざっくりとした感のある白濁色のものである。1175は備前焼擂鉢で、口縁端部内面には段が付き、その下には稜が入る。時期的には中世６期ｂ～近世１期ａの範疇と考えられる。1176は東播系捏鉢である。口縁端部の上下拡張の形状から時期は12世紀末～13世紀初頭と思われる。

他に細片出土遺物では絵唐津片（17世紀前半）、土師器皿、灰釉丸皿（16世紀前半）、須恵器甕などがある。

中層出土の遺物

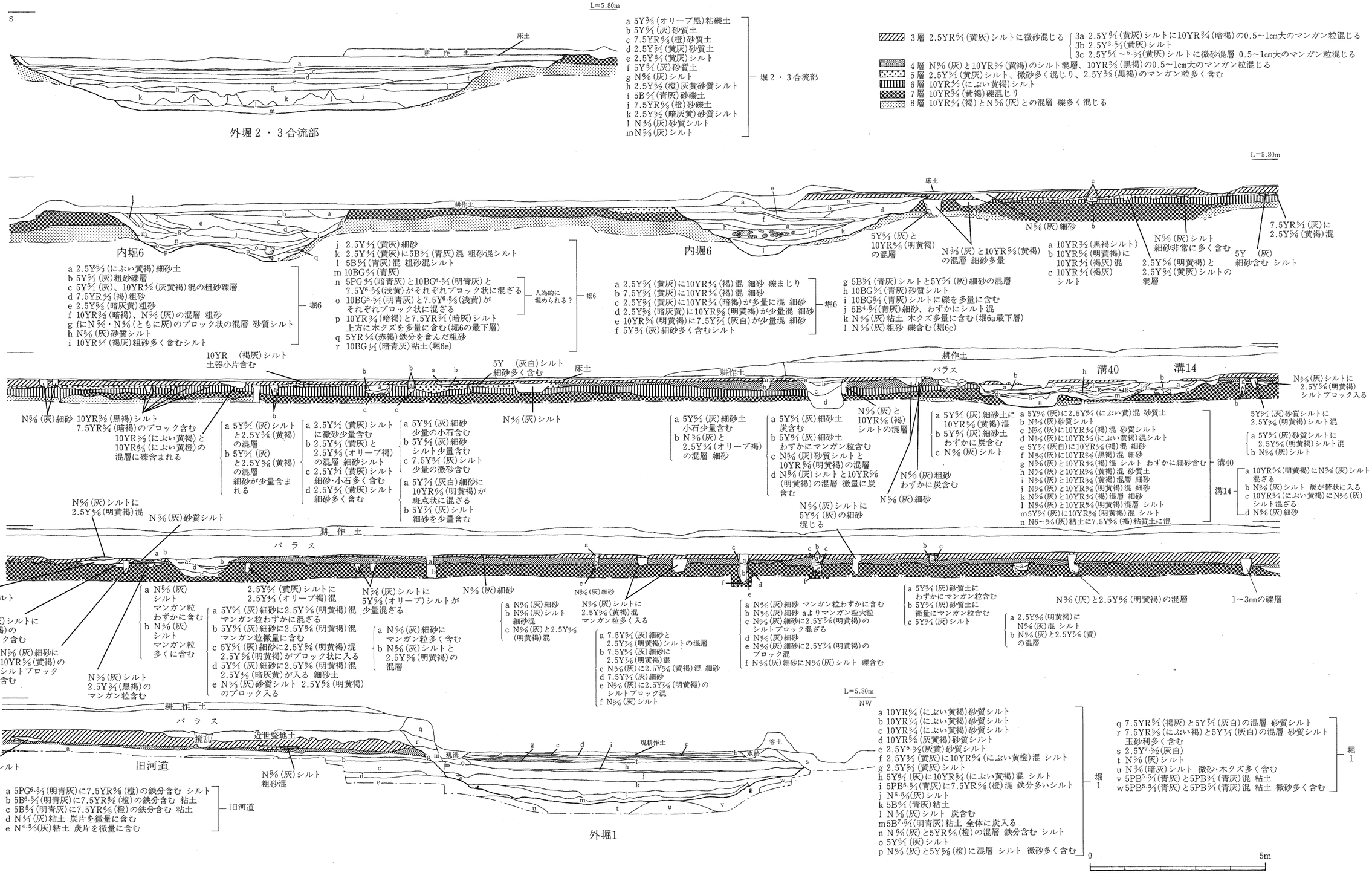
この層からの出土遺物は殆んど無い。縄文土器片、弥生土器片、あとは土師器皿と思われる細片が数片出土したのみである。

下層からの出土遺物は皆無であった。

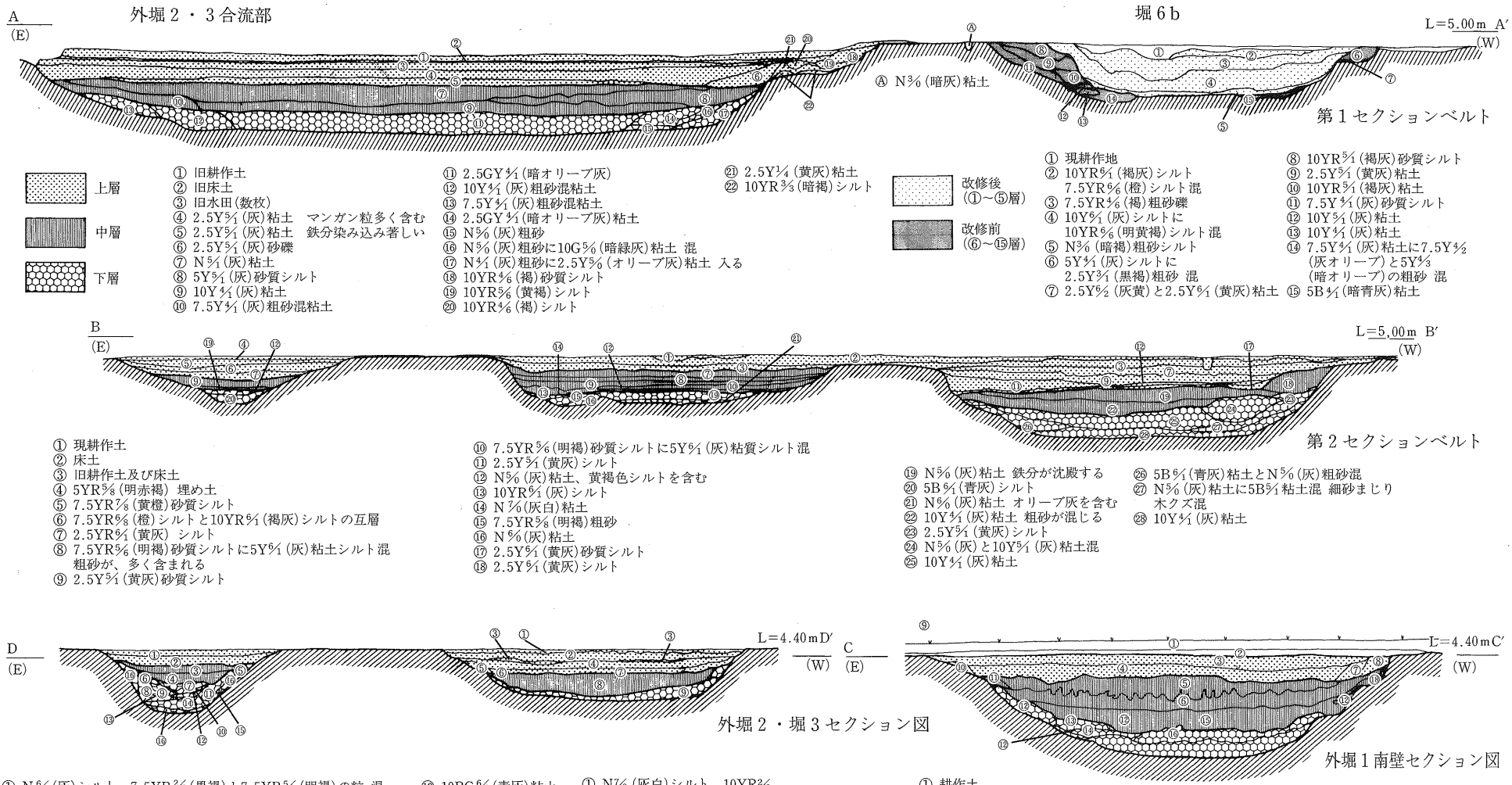
【東辺の外堀２出土の遺物について】

上記のようにこの堀からの出土遺物は極少量である。下層の出土遺物は無く、中層からの出土遺物では時期判断の対象にはならない。出土遺物で言えることは、上層で絵唐津が出土していることから、外堀１と同様な時期であると言える。

東辺の外堀３



第82図　Ⅳ区 13-④区 南壁土層図


外堀２・３合流部
堀６ｂ
A
(E)
L=5.00m A′
(W)
Ⓐ N3/6(暗灰)粘土
第１セクションベルト
上層
中層
下層
① 旧耕作土
② 旧床土
③ 旧水田(数枚)
④ 2.5Y5/1(灰)粘土　マンガン粒多く含む
⑤ 2.5Y5/1(灰)粘土　鉄分染み込み著しい
⑥ 2.5Y5/1(灰)砂礫
⑦ N5/1(灰)粘土
⑧ 5Y5/1(灰)砂質シルト
⑨ 10Y4/1(灰)粘土
⑩ 7.5Y4/1(灰)粗砂混粘土
⑪ 2.5GY4/1(暗オリーブ灰)
⑫ 10Y4/1(灰)粗砂混粘土
⑬ 7.5Y4/1(灰)粗砂混粘土
⑭ 2.5GY4/1(暗オリーブ灰)粘土
⑮ N5/0(灰)粗砂
⑯ N5/0(灰)粗砂に10G5/0(暗緑灰)粘土 混
⑰ N4/1(灰)粗砂に2.5Y5/0(オリーブ灰)粘土 入る
⑱ 10YR3/6(褐)砂質シルト
⑲ 10YR5/6(黄褐)シルト
⑳ 10YR4/6(褐)シルト
㉑ 2.5Y1/4(黄灰)粘土
㉒ 10YR3/3(暗褐)シルト
改修後
(①～⑤層)
改修前
(⑥～⑮層)
① 現耕作地
② 10YR5/1(褐灰)シルト
7.5YR6/6(橙)シルト混
③ 7.5YR4/6(褐)粗砂礫
④ 10Y5/1(灰)シルトに
10YR5/6(明黄褐)シルト混
⑤ N3/0(暗褐)粗砂シルト
⑥ 5Y4/1(灰)シルトに
2.5Y3/1(黒褐)粗砂 混
⑦ 2.5Y5/2(灰黄)と2.5Y5/1(黄灰)粘土
⑧ 10YR5/1(褐灰)砂質シルト
⑨ 2.5Y5/1(黄灰)粘土
⑩ 10YR5/1(褐灰)粘土
⑪ 7.5Y5/1(灰)砂質シルト
⑫ 10Y5/1(灰)粘土
⑬ 10Y4/1(灰)粘土
⑭ 7.5Y4/1(灰)粘土に7.5Y4/2
(灰オリーブ)と5Y4/3
(暗オリーブ)の粗砂 混
⑮ 5B4/1(暗青灰)粘土
B
(E)
L=5.00m B′
(W)
第２セクションベルト
① 現耕作土
② 床土
③ 旧耕作土及び床土
④ 5YR5/8(明赤褐) 埋め土
⑤ 7.5YR7/8(黄橙)砂質シルト
⑥ 7.5YR5/8(橙)シルトと10YR5/1(褐灰)シルトの互層
⑦ 2.5YR5/1(黄灰) シルト
⑧ 7.5YR5/6(明褐)砂質シルトに5Y5/1(灰)粘土シルト混
粗砂が、多く含まれる
⑨ 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト
⑩ 7.5YR5/6(明褐)砂質シルトに5Y5/1(灰)粘質シルト混
⑪ 2.5Y5/1(黄灰)シルト
⑫ N5/0(灰)粘土、黄褐色シルトを含む
⑬ 10YR5/1(灰)シルト
⑭ N7/0(灰白)粘土
⑮ 7.5YR5/8(明褐)粗砂
⑯ N5/0(灰)粘土
⑰ 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト
⑱ 2.5Y5/1(黄灰)シルト
⑲ N5/0(灰)粘土 鉄分が沈殿する
⑳ 5B5/1(青灰)シルト
㉑ N5/0(灰)粘土 オリーブ灰を含む
㉒ 10Y4/1(灰)粘土 粗砂が混じる
㉓ 2.5Y5/1(黄灰)シルト
㉔ N5/0(灰)と10Y5/1(灰)粘土混
㉕ 10Y4/1(灰)粘土
㉖ 5B6/1(青灰)粘土とN5/0(灰)粗砂混
㉗ N5/0(灰)粘土に5B5/1粘土混 細砂まじり
木クズ混
㉘ 10Y4/1(灰)粘土
D
(E)
L=4.40m D′
(W)
C
(E)
L=4.40m C′
(W)
外堀２・堀３セクション図
外堀１南壁セクション図
① N5/0(灰)シルト　7.5YR3/2(黒褐)と7.5YR5/6(明褐)の粒 混
② N5/0(灰)粘質土　7.5YR5/8(橙)とスジ状 混
③ N5/0(灰)粘土　7.5YR5/8(橙)の帯状、7.5YR4/6(褐)をスジ状 混
④ N5/0(灰)に7.5GY5/1(緑灰)混 粘土
⑤ 10BG5/1(青灰)にN5/0(灰)混 粘土　2.5Y7/8(黄)をスジ状混
⑥ 10BG5/1(青灰)粘土に2.5Y4/1(黄灰)混合 炭含む
⑦ N4/0(灰)粘土　炭を多く含む
⑧ 10BG5/1(青灰)に2.5Y5/3(黄褐)混 粘土　炭砂を微量に含む
⑨ 10BG5/1(青灰)に2.5Y5/2(灰オリーブ)混 粘土
⑩ N5/0(灰) 粘土
⑪ 10BG5/1(青灰)に7.5Y5/2(灰オリーブ)混 粘土
⑫ 10BG5/1(青灰)粘土
⑬ N5/0(灰)粘土 炭含む
⑭ N5/0(灰)粘土
⑮ N5/0(灰)粘土
⑯ 10BG(青灰) シルト
① N7/0(灰白)シルト　10YR3/2
(黒褐)、10YR6/6(明黄褐)混
② N5/0(灰)シルト　7.5Y4/6(褐)の粒 混
③ N5/0(灰)シルト　②よりも多く砂を含む
④ N5/0(灰)シルト　7.5YR4/6(褐)の粒を多く含む、
炭を少量含む
⑤ 5B5/1(明青灰)に7.5YR5/8(橙)混 粘土
⑥ N7/0(灰白)粘土　7.5YR5/8(橙)と10YR3/2(黒褐)
の粒 混
⑦ N5/0(灰)シルト　10YR3/2(黒褐)と7.5YR6/8(橙)混
⑧ N5/0(灰)粘土　10YR5/8(明黄褐)混
⑨ 10BG5/1(青灰)シルト　10YR7/6(明黄褐)の粒 混
① 耕作土
② 床土
③ N5/0(灰)に7.5YR5/8(橙)の粒 混
④ N5/0(灰)に7.5YR5/8(橙)の大粒混
⑤ N5/0(灰)シルト　炭を微量に含む
⑥ N5/0(灰)シルト　砂多い
⑦ N5/0(灰)
⑧ N5/0(灰)に10YR6/2(灰黄褐)多く混
⑨ N5/0(灰)シルト
⑩ N5/0(灰)に黒褐の粒　微量に含む
⑪ N5/0(灰)シルト
⑫ 5B5/1(青灰)シルト
⑬ 10YR5/1(褐灰)と5B6/1(青灰)混 シルト
⑭ 5B5/1(青灰)に10YR5/1(灰褐)混 シルト
⑮ N5/0(灰)シルト 炭小片と灰白の粒 混
⑯ 5B5/1(青灰)とN4/0(灰)混 シルト 炭小片混
⑰ N5/0(灰)シルトに5B5/1(青灰)が少し混
⑱ N5/0(灰)に7.5YR6/8(橙)混
0
6m

外堀２の外側（東側）に長さ約55m（一部北側は11-①Ｓ区である）を検出した。幅は約3.5～6.0mを測り、南端の外堀２・３合流部にいくほど徐々に拡がる。深さは約0.95～1.30mを測り、ここでも北方向にいく程深くなり、外堀１や外堀２と同様の傾向を示す。

東辺の外堀３の出土遺物

この堀の出土遺物は図化していない。遺物は上層から出土した細片ばかりであった。出土遺物には弥生土器数片、備前焼甕の体部２片、土師器皿数片がある。

東辺の外堀１・２合流部

この部分は外堀１の南側末端部から堀６までの範囲である。この部分の東西約10m、南北約８mを調査時の便宜上このように呼称した。

外堀１の調査時、北側からこの堀を掘削していく途中で土留め材を検出し、この土留め材の南は一段高くなっていることに気付き、別の堀（堀６）の存在を確認した。そのため応急に土層観察用のセクションベルト（第84図）を残した。なお、外堀１・２合流部の底と堀６の底の比高差は約65cmを測る。

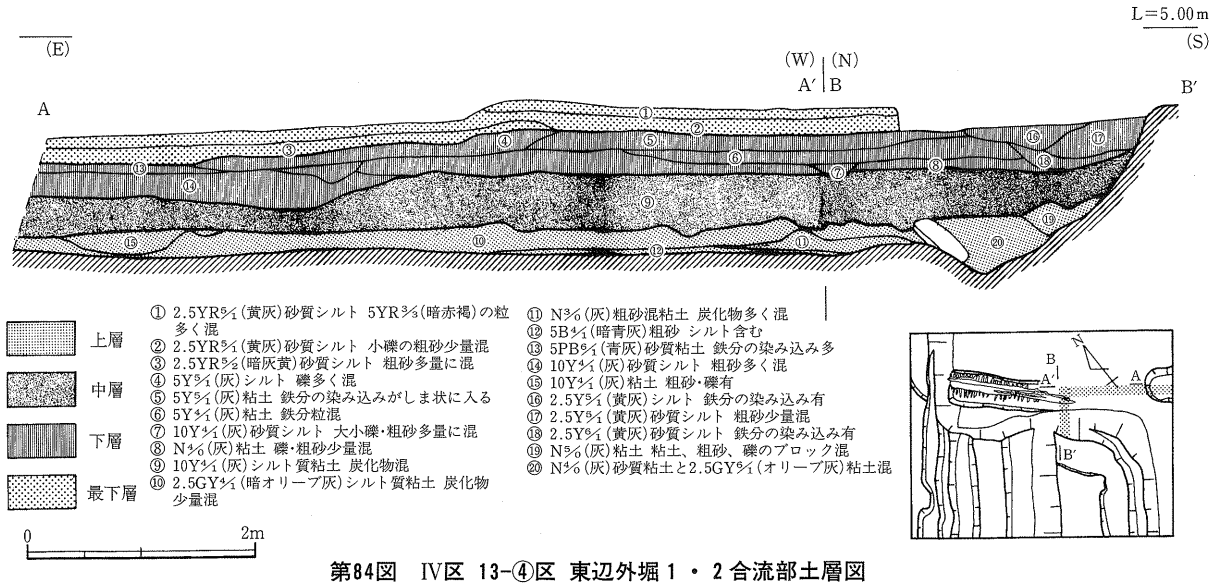
この合流部の土層堆積土は、上層は黄灰色の粗砂混じりのシルト層、中層は灰色粘性土、下層は暗灰色粘性土、最下層は暗オリーブ灰粘性土で、粗砂と炭化物を混入していた。ベース土は２～８cm大の川原石の礫層であった。

堆積の状況は土留め材を据えるために、ベース土である礫層を掘り込み、裏込めとして灰色粘土を材の上部まで入れている。後はこれを覆うように自然堆積したものと思われる。

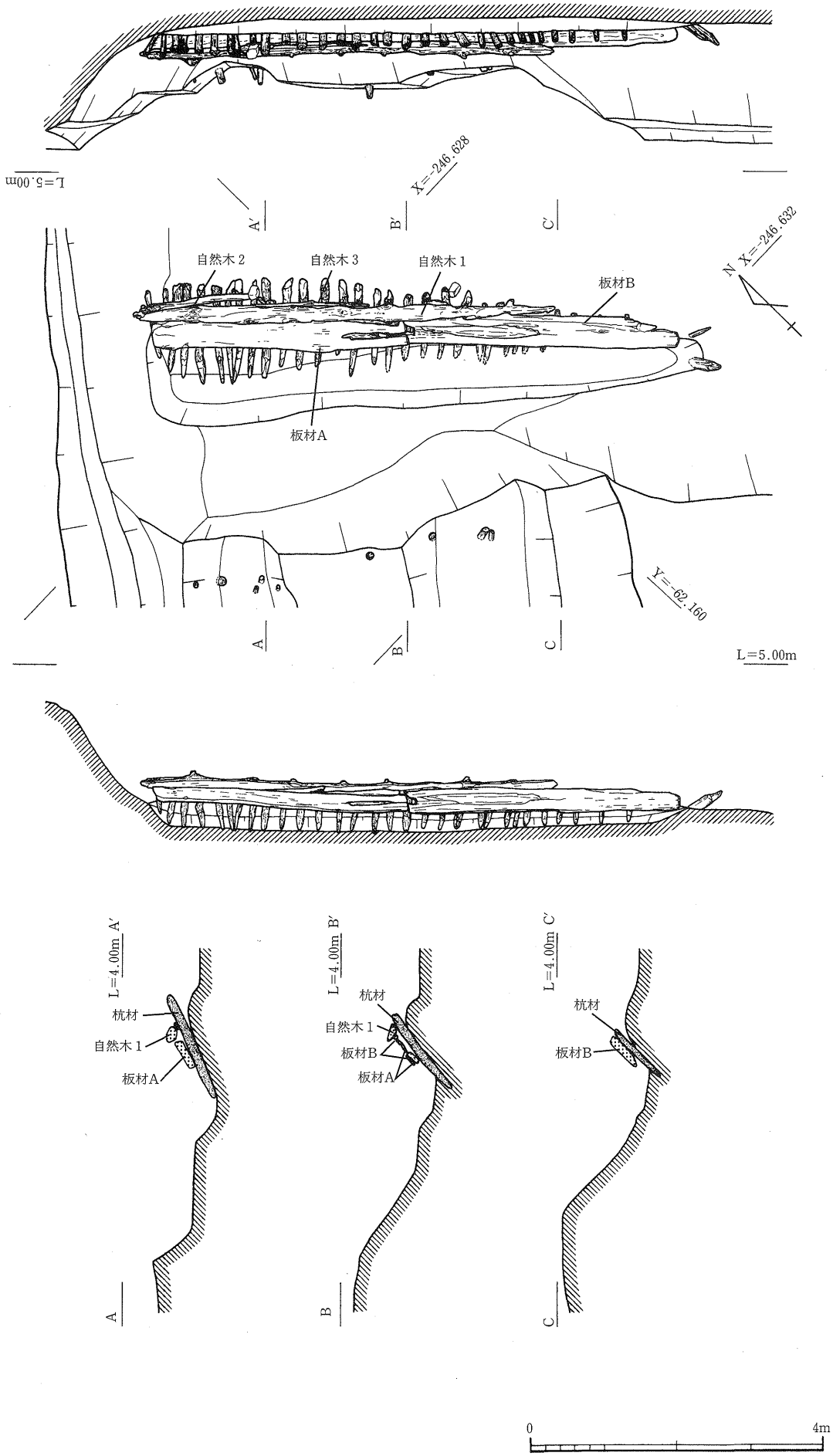
土留めの施設（第85図）は２本の建築材を堀６の正面に横たえ、北側から長さ1.0～1.4mの十数本の杭で押し当て、護岸用の施設として転用している。また、この材の東端では両端に杭を打ち固定している。しかし、西端では南から土砂で押され元の位置から北側にずれた形跡があり、固定材の杭も検出できなかった。転用材はそれぞれの長さ約3.5m、3.8mで幅約50cm、厚み８～９cmを測る大きな角材である。

東辺の外堀１・２合流部の出土遺物（第87、PL.105）

ここでも図化に耐えうる遺物は少なく、上層と中層の遺物は図化を行なっていない。



第84図　Ⅳ区 13-④区 東辺外堀１・２合流部土層図



第85図　IV区 13-④区 外堀1・2 合流部土留め材実測図

上層出土の遺物

縄文土器片、弥生土器片、土師皿片、中国製白磁皿片の細片が合わせて８片だけ出土しただけである。

中層出土の遺物

この層からの出土遺物は皆無であった。

下層出土の遺物

1177は土師器皿で、Ｂタイプである。他のこの層から出土した細片遺物には、弥生土器、瓦器、土師器皿、備前焼甕などがあり、合わせてわずかに９片である。

最下層出土の遺物

この層からの出土遺物は図化した遺物（1178～1181）のみである。

1178は土師器皿Ｂタイプである。1179は青磁碗で、外面は無文である。釉の発色は草緑色で、高台内面までかかる。1180は播磨系の土師器鍋である。外堀１の中層からも出土しているものに比べ、突帯直上の口縁端部がやや短い。胎土は同様に微細な長石粒を含み、堅緻な焼成である。突帯から下は煤が付着している。1181の備前焼擂鉢口縁内面直下に明瞭に稜の入る直前の時期と思われ、中世５期ｂから中世６期ａの時期であると考えられる。摺目の一単位は８条である。

【東辺の外堀１・２合流部出土の遺物について】

ここの合流部の開削時期を判断する遺物としては、最下層の1180・1181の播磨系土師器鍋と備前焼擂鉢であろう。双方ともに15世紀後半の時期はほぼ確定できると思われるが、もう少し突き詰めて言うならば、15世紀第４四半期の時期が妥当と思われる。

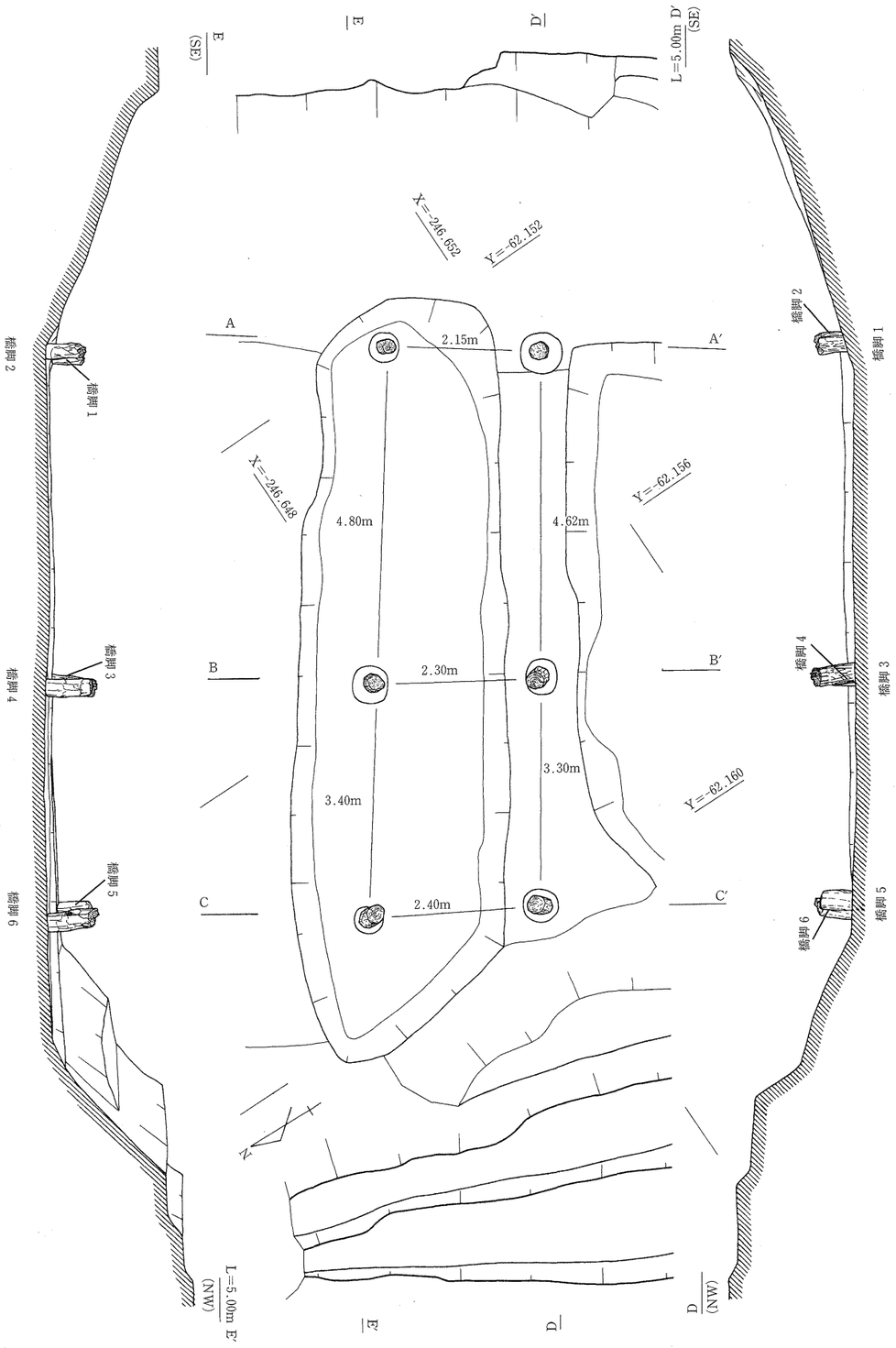
上層の遺物からでは、埋没時期を判断できるものがなかった。

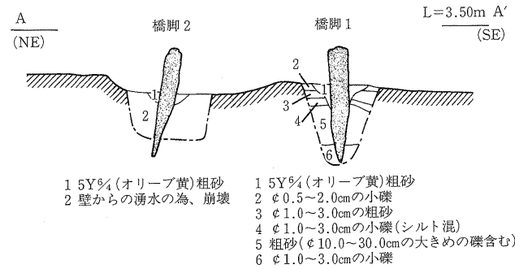
東辺の外堀２・３合流部

この部分の検出できた長さは約43mで、後は調査区外の南側に延びる。この延長線上で、内郭の調査（上富田南部線）の際に一部を検出している。この堀の幅は北側では17mを測り、南側では西肩は近世の溝で攪乱され、13mとなる。おそらく同様な幅で南延していたものと思われる。深さは約1.5～1.6mを測る。底のレベル高は、外堀１や外堀２、外堀３などとは違い、方向的に高低差は確認できなかった。

また、西側の肩部に沿って幅0.5～1.0mの犬走り状の施設を検出した。位置的には西肩から80～90cm下で、堀底から60～70cm上である。なお、この施設は橋が架けられていたと考えられる箇所で途切れ、南方向に傾斜する。

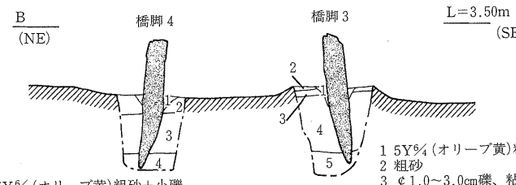
上記で触れた外郭への入り口と考えられる架橋箇所もこの堀で検出した。検出し得たのは橋脚の根本部分である。橋脚（第86図）は直径約30cmの丸太材で、２本一対で三対の計６本を検出した。これらの橋脚全ての上端部分をよく観察すると意識的に切断した痕跡があり、全て同様な長さであった。三対は「ハ」の字状にやや内傾ぎみに設置されている。幅は基底部で2.15～2.40m、上端部で2.1～2.2mを測る。この状況から上部の安定を計ったものと考えられる。桁行方向のそれぞれの間尺は第86図の通りである。堀底からの遺存長は40～60cmを測る。また、これの地中部分は断割りにより確認し、約1.0～1.2m埋設され、先端は杭先状に尖らせていた。加工痕の範囲は先端から上部に65～80cmである。





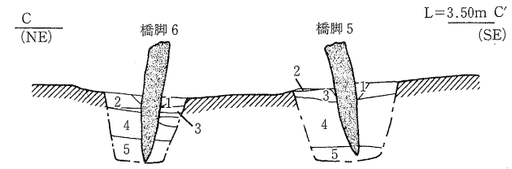
1 5Y⅝(オリーブ黄)粗砂
2 壁からの湧水の為、崩壊

1 5Y⅝(オリーブ黄)粗砂
2 ¢0.5～2.0cmの小礫
3 ¢1.0～3.0cmの粗砂
4 ¢1.0～3.0cmの小礫(シルト混)
5 粗砂(¢10.0～30.0cmの大きめの礫含む)
6 ¢1.0～3.0cmの小礫



1 5Y⅝(オリーブ黄)粗砂＋小礫
2 ¢1.0～5.0cm礫(帯は粘性のシルトが染み込む)
3 粗砂(80%)＋¢1.0～2.0cm小礫(20%)
4 ¢1.0～3.0cm小礫(90%)＋粗砂(10%)(帯水層)

1 5Y⅝(オリーブ黄)粗砂＋シルト混小礫
2 粗砂
3 ¢1.0～3.0cm礫、粘性のシルト混
4 粗砂に¢10.0～20.0cmの礫含む
5 ¢1.0～3.0cm小礫



1 5Y⅝(オリーブ黄)¢1.0～2.0cm粗砂
2 粗砂
3 ¢1.0～2.0cmシルト混じりの礫
4 ¢1.0～2.0cm小礫(70%)＋粗砂(30%)
5 ¢1.0～2.0cm小礫＋粗砂

1 5Y⅝(オリーブ黄)¢0.1～0.54cm粗砂
2 粗砂
3 ¢1.5～2.0cm小礫シルト混じり
4 粗砂
5 ¢1.0～2.0cm小礫

第86図　IV区 13-④区 橋脚遺構実測図

橋脚の遺存長は最も短いもので1.45m、最も長いもので1.70mであった。

これら橋脚の堀底から上部の露出部分において、6本の丸太材が全て変色している箇所がある。その変色の境目は東端の2本、真中の2本、西端の2本ともに同様なレベルであった。このことから、下層の埋土（暗灰色粘土）が長期間堆積していたことが窺われる。

この堀底で窪み状の遺構を4基検出した。このうち3基は橋脚の南側で、他の1基は、この堀の北端部である。この遺構の形状は4基ともに崩れた長方形を呈する。規模は最大長でいうと、北端のものは12.0m×2.0m、橋脚の南側のものは北から順に7.5m×3.0m、8.5m×4.5m、7.5m×2.5mを測り、いずれの深さも約20～30cmである。ここの埋土は灰色のシルトであった。

これは従来、戦国城郭の堀に備えられた障子掘り遺構、あるいは箱掘り遺構などと比較できるようなものではなく、あまりにも浅すぎるのではないだろうか。何故このような窪みを設けたのかという疑問がでる。はたして、戦略上のものに成りうるかが今後の課題である。

東辺の外堀2・3合流部の出土遺物（第87図、PL.105）

今まで外堀1、外堀2、外堀3、外堀2・3合流部の出土遺物について記してきたが、堀の中ではこの部分から出土した遺物量が最も多い。

上層からの出土遺物には石器（横形石匙）、弥生土器片、土師器片、須恵器杯（奈良時代）、土師器鍋、備前焼甕・擂鉢、中国製青磁・白磁、土師器皿、唐津焼、伊万里焼などがある。

中層からはサヌカイト原石、木製耳栓、土師器壺（古墳時代）、瀬戸美濃灰釉四耳壺・黒釉瓶子・天目茶碗、備前焼甕・擂鉢、土師器皿などの多種多様な遺物が出土している。図化はしていないが、備前焼擂鉢の体部の摺目が、放射状に加えて斜め方向が交錯する時期の、明らかに近世1期の範疇であるものも出土している。また、徳蔵地区遺跡では珍しい古瀬戸前期様式II期の灰釉四耳壺の体部破片、後期様式III～IV期の黒釉根来型瓶子の体部下端の破片も出土している。

下層からの出土遺物には縄文土器細片、土師器釜、土師器椀、備前焼甕、中国製青磁碗などがある。

上層出土の遺物

1182は伊万里焼染付小杯である。高台から外低は無釉である。図柄は草花文であろうか。1183は唐津焼碗である。見込みには砂目痕がある。1184は土師器皿Eタイプである。1185は青磁碗で、線描きの蓮弁と剣頭の単位が乱れる。1186の白磁皿の施釉は体部下端まで漬掛けを行ない、部分的に高台外面に釉垂れをおこす。1187の備前焼擂鉢の口端部は尖り気味になり、口縁内面やや下の稜線はシャープでないことから、近世期までは下がらず、中世6期bの時期と思われる。1188の播磨系の土師器鍋の突帯は断面三角形を呈し、胎土には1172や1180の遺物と同様に微細な長石粒が含まれる。

中層出土の遺物

1189は鎬蓮弁文青磁碗である。口縁は斜め上方にたちあがり、端部は尖り気味に丸く納める。1190は瀬戸美濃天目茶碗である。頸部は若干くびれ、口端部は尖り気味に納める。1191～1194は備前焼で、1191～1193は擂鉢、1194は甕である。1191は口縁帯が大きく口縁部内面やや下に稜をもち、端部は丸く納める。外面は口縁帯にゴマが掛かる。1192は口縁帯が未発達の段階で、端部を丸く納める。体部

上端に重ね焼痕がはっきりと遺こり、口縁帯外面に微細なゴマが掛かる。1193は徳蔵地区遺跡から出土する擂鉢の中では最も古いものである。口縁端部が内外に突出し、外面体部上端には重ね焼痕がある。摺目の一単位は９条である。時期は中世３期ｂと思われる。1194の甕の口縁部は上方に直立し、端部を丸く納める。頸部は比較的短い。時期的には中世５期ｂと思われる。1195は管状土錘である。1196は木製耳栓である。また、側面には左右対称に２条の溝があるが、意図的なものか、欠損しているものかは判断しかねる。

下層出土の遺物

1197は土師器皿Ａタイプである。1198は青磁碗の底部で、釉の発色は草緑色で、高台内面途中まで釉が掛かる。見込みには印花文があり、その周りに圏線が巡る。

【東辺の外堀２・３合流部出土の遺物について】

下層からの出土遺物は、青磁碗（1198）と土師器皿（1197）のみである。1198の青磁碗は底部のみで無文のものかどうかも判断しかねる。時期は15世紀代であろう。1197の土師器皿は堀６（後述する堀）で同タイプが出土している。この共伴遺物が播磨系の土師器鍋で、15世紀末の時期と思われる。したがって、この堀の開削時期は15世紀第４四半期の範疇にあると考えられる。

中層の時期決定をするにつけて妥当と思われる遺物は、備前焼擂鉢（1191･1192）、瀬戸美濃天目茶碗(1190)、図化していないが近世１期の備前焼擂鉢の体部である。故に、これらの遺物から中層の堆積時期は概ね15世紀末から16世紀第４四半期であると考えられる。

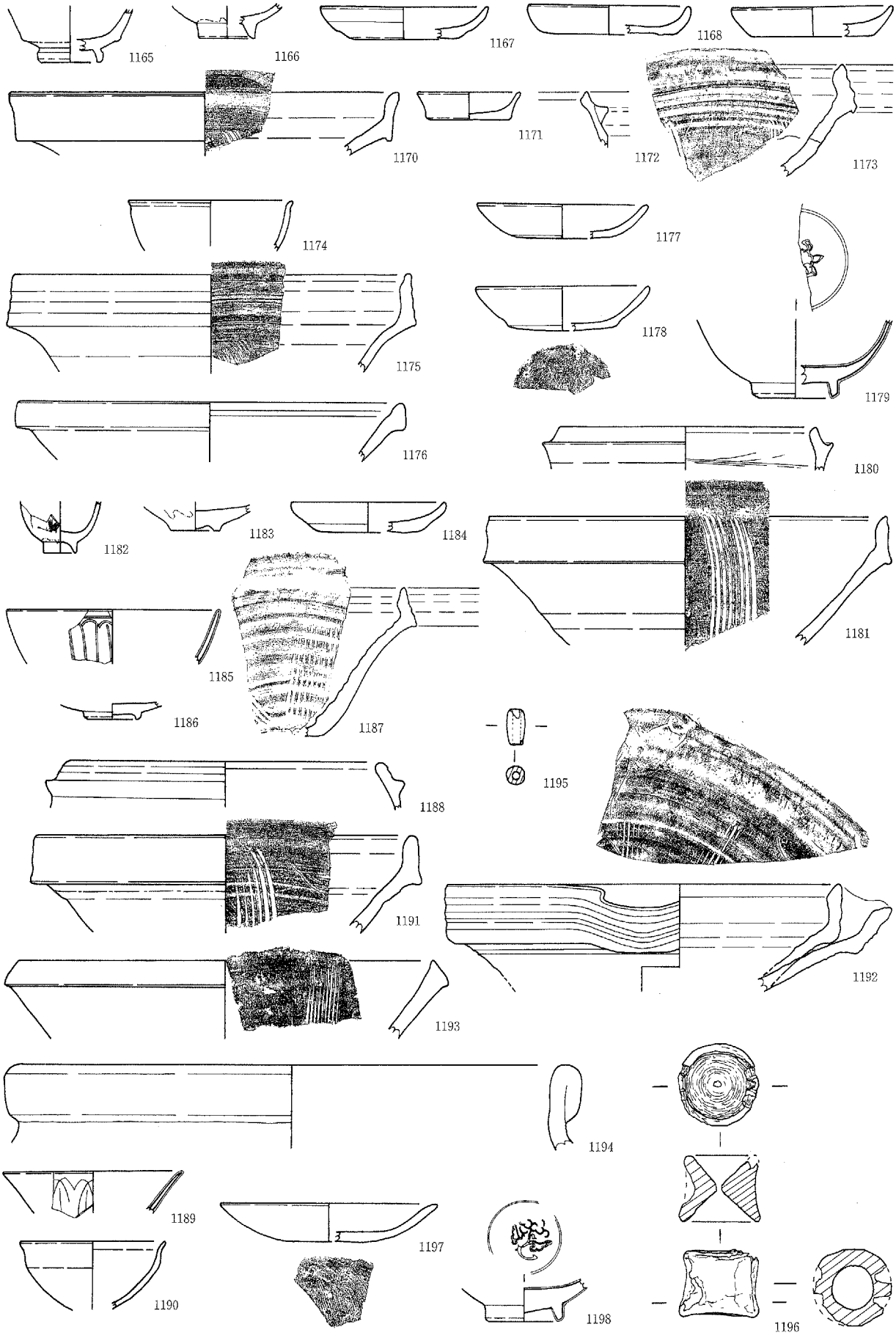
上層は伊万里焼（1182）、唐津焼（1183）からこの堀の終焉時期を推察することができる。したがって、この層の堆積の時期幅は漠然としているが16世紀第４四半期から17世紀前半と考えられる。

西辺の外堀１

北辺の外堀１から続く堀である。北西のコーナー部までは11-①Ｓ区で確認し、ここから南方向に延びる部分の約11.5mを検出した。調査前ここには鮎の養殖場があり、検出面は北外郭部の敷地の高さより約50cm低い。この堀の両肩部分は近世に改変され攪乱をうけている。なお、上層部は他の堀と同様に、近世に水田化されている。堀の埋土（ｊ層）の範囲で幅を計測すると約10.5mである。元々はこれより広かったと思われる。残存の深さは近世水田の上部まで約1.5mを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈する。遺物の取上げは第82図の上層（ａ～ｉ層）、中層（ｊ・ｋ層）、下層（ｌ・ｍ層）でおこなった。上層は数枚の水田層の堆積で近世のものである。中層は明らかに堀の埋土と思われ、シルト層および粘土が堆積し、下層も同じくシルト層および粘土が堆積していた。このことから中層、下層は滞留していたものと考えられる。

この堀からの遺物は上層から第87図の1165・1166が出土している。1165は唐津焼碗である。器面の鉄釉が黒色と飴色の斑に発色し、釉垂れをおこしている。1166は伊万里焼白磁碗である。釉の発色は青みがかった白色を呈する。高台内外面と外低は無釉である。

中層からは第87図の備前焼擂鉢（1173）が出土している。口縁帯は「く」の字になって、口縁端部を尖り気味に強く撫でている。時期は中世６期ｂ～近世１期ａと思われる。



1165～1173：堀1、1174～1176：堀2、1177～1181：堀1・2、1182～1198：堀2・3

第87図　IV区 13-④区 遺構出土遺物実測図

下層からは掲載していないが須恵器の杯身が出土している。

堀６

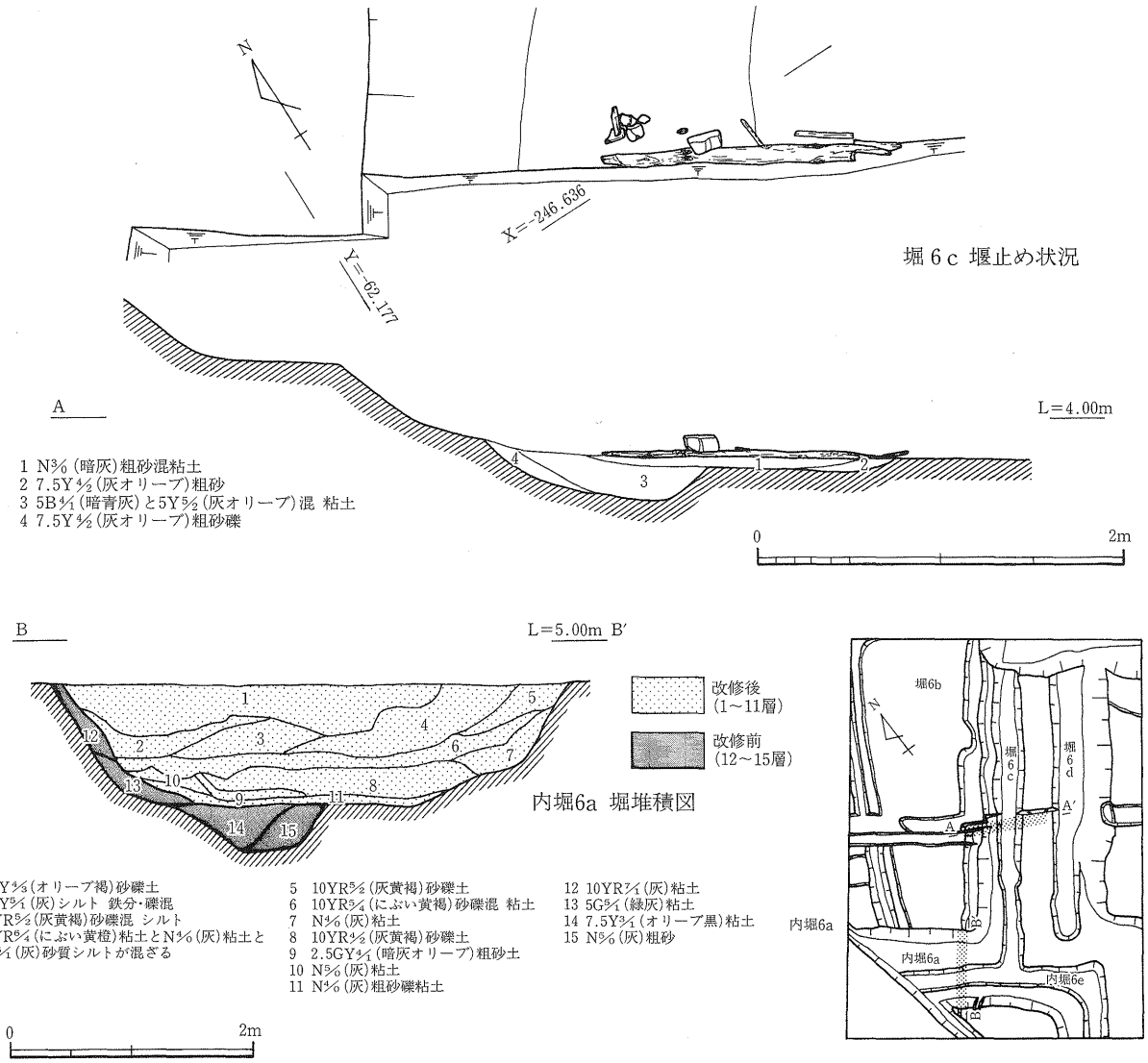
調査地東南端の内郭部分に隣接する地点で検出した。外堀１・２合流部の項でも若干触れたが、外堀１に先行する堀で、外堀１方向に延びている。この堀の一部は内郭の堀のコーナー部分に当たり、後は外郭の外堀に当たる。また、各々の堀底には一段深くなる掘り込みがあり、内郭の堀部分は１条、外郭の外堀部分は２条検出した。

調査の便宜上、内郭の部分を内堀６ａ、外郭の部分を堀６ｂ、次に内堀６ａ内の掘り込み部分を内堀６ｅ、堀６ｂの掘り込み部分を堀６ｃ・ｄと呼称した。遺物の取上げもこれで行なった。

上記のように堀６は大きく内堀６ａと堀６ｂに分けられ、以下はこの２本の堀について記述する。

（内堀６ａ）

内堀６ａの幅は南北方向約5.2m、東西方向4.2mを測る。深さは掘り込み部分の底まで約1.35mである。南北方向、東西方向ともに内郭部分の調査時（上富田南部線拡幅工事）にその一部分の確認を行なっている。また、東西方向の堀の北側肩口には土師器皿の完形品が一括投棄されていた。この投棄



第88図　IV区 13-④区 堀６ｃ堰止め状況・内堀６ａ土層図

されていたのは第88図の土層でいうと第５・６層上である。このような状況から、この堀の廃絶に関わる儀式的なことに使用されたのではないかと推測される。時期的には当地域では土師器皿の編年が確立されていないため、土師器皿だけでは時期を把握できないものの、これと共伴して出土している土師器鍋から15世紀後半と考えられる。

土層堆積状況は、最下層の内堀６ｅが灰色粗砂層の上に黒色粘土が堆積している。なお、内堀６ｅは内堀６ａの中央にない。次に、内堀６ａのその上層は南の肩口から底に掛けて灰色粘土が貼りつくように堆積する。この状況から堀の改修が窺える。つまり、第88図の12～15層は改修前の一時期古い堀の可能性が考えられる。したがって、これから上層については改修された時期以後の堆積層と考えられ、土師器皿の一括投棄層から下層（５～11層）はレンズ状の自然堆積を呈し、底には粗砂混じりの粘土層が薄く堆積し、その上層は粘土混じりの砂礫層が堆積する。上層（１～４層）は均一な土質と色調でなく、意図的に埋められたと考えられる土層である。

（堀６ｂ）

堀６ｂは長さ約14.5m、幅約7.8～8.3m、深さは掘り込みの底まで約1.1mを測り、底は内郭に向かって下がっている。この堀の東肩は２段落ちとなる。

この堀の土層堆積状況から堀６ａと同様に改修されていると考えられる。掘り込み部分である堀６ｃ・ｄについては灰色の粘土層（12～15層）が堆積し、その上層には東の肩口に砂混じりのシルトや粘土層が堆積している。以上が改修前の堆積層である。改修後の下層はここでもレンズ状の自然堆積（４・５層）を示すがその上層（２・３層）の堆積は乱れる。以上の様に、この堀の堆積状況はまったく内堀６ａと同様の様相を呈する。ちなみに、ここで１層とした層は、堀の埋土ではなく現代の耕作土で、この辺りには中世包含層は存在せず、現代の耕作土を除去すると直ぐに遺構面であった。

この中央部分の堀改修時の底で長さ1.6m、幅10cm、厚み４cm程度の板状の材を堀に直行するように渡し、また、この周囲には長さ30cm、直径３cmの細い杭状の木も散らばっている状況を確認した。この状況から判断して、おそらく堀全体に板材を渡し、杭で固定していたものと考えられる。これの性格については分からない。また、この構築物を検出した位置から土留め材を検出した範囲の上層は、厚み５cm程度に３～10cm大の礫層（川原石）が堆積していた。おそらく、外堀２・３合流地点の底はこのような礫ベースであることから、外堀２・３堀削時にここから排出した土でこの堀６ｂを埋めたものと思われる。したがって、このような状況から、堀６ａの上層の埋土についても同じことが言えるであろう。

堀６の出土遺物（第89図、PL.106・107）

内堀６ａの上層からは一括投棄遺物として土師器皿、土師器鍋、瀬戸美濃灰釉盤の底部破片、中国製白磁碗破片、土錘などが出土している。土師器皿については表６に法量表を示している。

堀６ｂからは土師器皿、堀６ｃから土師器皿、土釜の口縁部破片、堀６ｄからは土師器皿、堀６ｅからは土師器皿が出土した。

土器の出土状況は一括投棄の分以外は極少量で遺物は殆んど土師器皿であった。

内堀６ａ出土の土器

1199～1204は土師器皿Ｄ１タイプで、1205～1209は土師器皿Ｃタイプで、1210～1217はＢタイプで、1218～1221はＡタイプである。1222は白磁碗である。口縁端は端反り、端部を丸く納める。1223は瀬戸美濃灰釉盤で、時期は後期Ⅳである。1225は播磨系の土師器鍋である。口縁やや下の突起は短く、強いナデにより受口状になる。体部中位から底部にかけて斜め方向のタタキを施す。外面は突起下から体部下位に、内面は体部下位から底にかけて煤が付着する。1224は管状土錘である。

堀６ｂ上層出土の土器

1226～1228は土師器皿で、1226はＤ３タイプ、1227・1228はＢタイプである。

堀６ｃ出土の土器

1229は土師器皿Ｅタイプである。1230は土師質土釜である。口縁端部は摘み上げ内折する。

堀６ｄ出土の土器

1231～1234は土師器皿Ｂタイプである。1235はＡタイプである。この内1233の内面の一部と1235の口縁端部内面にはタール状の煤が付着し、灯明皿に使用された痕跡がある。

内堀６ｅ出土の土器

1236は土師皿Ｆ１タイプである。

北外郭部の敷地の遺構

北外郭部の居住地は通路により「田」の字状に四区画に造っている。敷地の広さは北外郭部の外堀を抜いた場合、東西幅約87m、南北幅約58mで推定の敷地面積は5,046㎡である。また、外堀を入れた東西幅は123mであった。四区画の敷地を検出したうちで全て調査できたのは北東側の区画だけで、あとの三区画については、北西の区画と南東の区画は一部調査区外にかかりその全容は不明であり、南西の区画については全て調査区外でありその全容は全く不明であった。

一区画の主要遺構は掘立柱建物、井戸、土坑、溝で構成されていた。三重の東堀は北外郭部東辺の中程、つまり内郭部に近い地点で１条に合流されていた。また、北外郭部分は中世の水田層の上に整地し

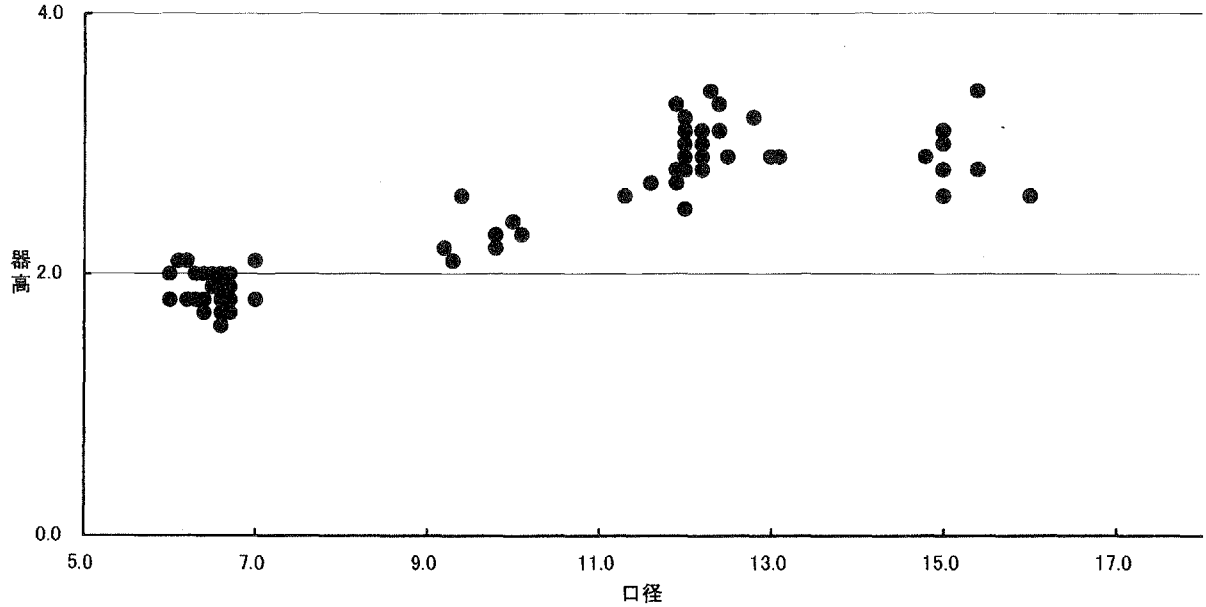
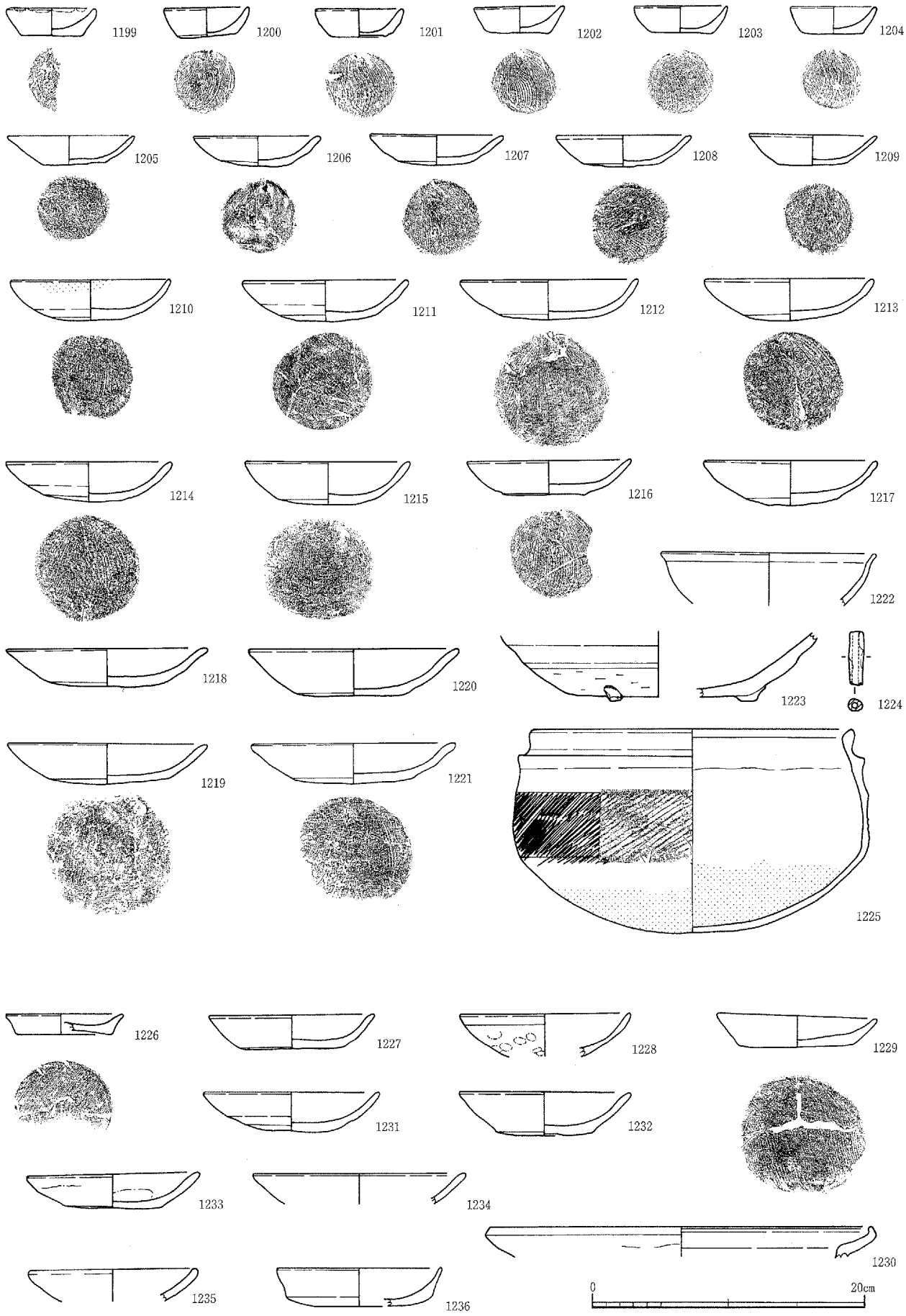


表６　内堀６ａ出土土師器皿一括資料法量表(単位：cm)



1199～1225：内堀6 a、1226～1230：堀6 b、1231～1235：堀6 c、1236：内堀6 e

第89図　IV区 13-④区 遺構出土遺物実測図

て築いたと考えられる。この整地土は二時期あることも確認した。場所によっては１時期しか確認できない所もあった。また、外堀１の肩口から北外郭の敷地内側に６～７mの範囲は、この時期の城に伴う遺構が検出されなかったことから、この部分に土塁があったことが想定される。なお、敷地の北縁辺部分や北辺の堀内は城廃絶後に近世の水路や井戸などによってかなり削平をうけていた。

以下、各々の敷地の遺構について記述する。便宜上、北東の敷地をＡ敷地、北西の敷地をＢ敷地、南東の敷地をＣ敷地、南西の敷地は調査区外ではあるがＤ敷地と呼称する。

まず全ての敷地にかかる区画溝と通路部分の記述を行なう。

溝14・40（区画溝）（第90～92図）

区画溝は南北方向（溝14）と東西方向（溝40）の２条がある。

溝14は通路の西側で同方向の幅約3.6～5.0m、深さは約50～70cmを測り、北から南にかけて傾斜する溝である。これは南北方向を区画する溝と考えられる。堆積の状況は、上層が灰色味の強い砂質シルト、中層も上層に比してより灰色味の強いシルト層、下層は中層に比して粘度の強いシルト層であった。

上層からの出土遺物には割高台白磁皿(1237)、これは口縁部に煤痕が付着し灯明皿に使用されていたと思われる。中層からの出土遺物の1238･1240は土師器皿Ｄ２タイプ、1239は土師器皿Ｄ３タイプ、1241・1243は土師器皿Ｂタイプ、1242は土師器皿Ｆ１タイプ、1244・1245は土師器皿Ａタイプ、1247は土師器皿Ｈタイプ、1246は土師器皿Ｅタイプ、1248は線描き蓮弁文の青磁碗である。1249は青磁の稜花皿である。下層からの出土遺物の1250～1253は土師器皿Ｄ２タイプ、1254～1258は土師器皿Ｂタイプ、1259は土師器皿Ｅタイプ、1260は土師器皿Ａタイプである。1261は線描き蓮弁文の青磁碗である。1262は瀬戸美濃おろし皿の口縁部細片である。

溝40は東西方向の区画溝である。南北方向の区画溝(溝14)に比べればかなり広い溝で、幅は５～７m、検出総延長は25.5m、残存の深さは約60cmである。遺物取り上げは上・中・下と3層で取り上げ、上層は第90図の２・３層、中層は６・７層、下層は８・９層で取り上げた。上層は灰白色の砂質土で、中層は灰色の砂質土に炭およびシルトをブロックで含んでいた。下層は灰色の粘質土であり、底には微量の砂が帯状に堆積していた。以上の確認後、さらにこの下には長さ19m、幅2.2mの溝状遺構を検出した。これの最下層の堆積土は灰色の粗砂層が水平堆積し、それから上層については北方向から傾れ込むような状況の埋没堆積が認められた。

上層からの出土遺物には1263～1272があり、1263～1268土師器皿である。1263～1265はＤ２タイプである。1266・1267はＢタイプで、1268はＨタイプである。1269は東播系碗である。1270は蓮弁文青磁碗である。釉は高台内面の途中までかかり一部外底に付着する。発色は草緑色と呈する。1271は備前焼小型の壺で、鳶口になるものであろうか。1272～1274は備前焼擂鉢である。1273の口縁帯外面に３条の凹線を持ち、口縁部内面直下に稜線が入る時期である。1274の口縁帯は上方と下方に発達し、中程でやや屈曲する。なお口縁端部を丸く納める。内面の摺り目は口唇部端部から施されている。1272は1273に比べ口縁端部がより丸く納められる。口唇部にゴマ状に灰がかかる。

1275～1285は土師器皿で中層の出土遺物の殆んどである。1275はＤ３タイプで、1270・1278はＤ２

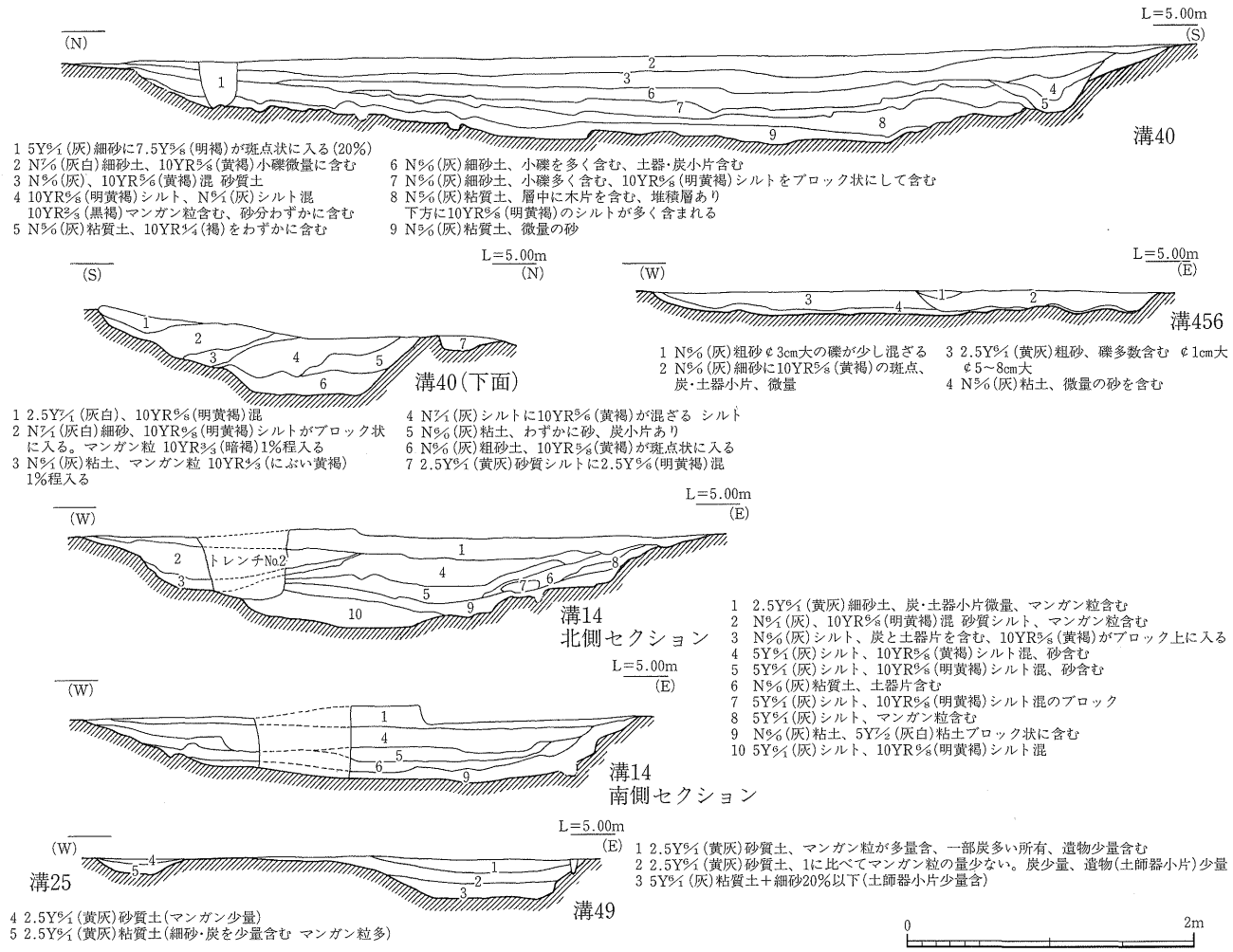
タイプ、1277はG2タイプである。1279～1283はBタイプ、1284・1285はAタイプである。1286は青磁碗である。高台中程まで釉がかかる。1287は擂磨系土鍋である。口縁帯下半から著しく煤の付着が認められる。

下層の出土遺物も土師器皿が殆んどである。1288～1300まで土師器皿である。1288はD2タイプである。1289～1292・1294・1300・1301がBタイプで、1295・1293はAタイプである。1296・1302・1303までがHタイプである。1297・1304は備前焼擂鉢である。1297は中世5期bと考えられる。1304は体部から底部にかけての破片である。1298は備前焼甕で中世5期の範疇である。1299は瓦質製品である。口縁部は頸部で外方向に外反し端部は丸くつまみあげている火鉢であろうか。

最下層の出土遺物には土師器皿と備前焼擂鉢がある。1301・1302はBタイプ、1302・1303はHタイプである。1304は備前焼擂鉢の底部である。

通路（第81図）

内郭に通ずる南北方向の通路を調査区のほぼ中央で検出し、東西方向の通路もこれと交差する状況で検出した。通路と判断したのは、この部分だけ直線状に周囲と比べ遺構密度が少なかったからである。南側は調査区外であるため通路の全容は定かでないが、この通路が交差することから敷地は「田」



第90図　IV区 13-④区 溝40・14・49・456 土層図

の字状に区画されていたものと思われる。

南北方向の通路は区画溝（溝14）の西と建物15（柵状遺構）の間の約２～３m幅と考えられる。おそらく北外郭の南端まで延び、内堀には橋状の施設があり内郭に通じていたものと考えられる。東西方向の通路はＣ敷地の北側で検出した。建物12（柵状遺構）と溝60に挟まれた範囲で、溝状遺構には北側に石積みがある。つまりこの幅が東西方向の通路と思われ、幅は約２mを測る。これの西側はＤ敷地に当たり、検出できなかった。

Ａ敷地の遺構

この敷地で検出した遺構は掘立柱建物、井戸、土坑、溝等である。掘立柱建物は敷地割の方向に整然と並び、敷地の中央や建物の間の広場的な空間に井戸を構築している。

建物の規模及び柱穴の規模は表７および第93・94図参照のこと。

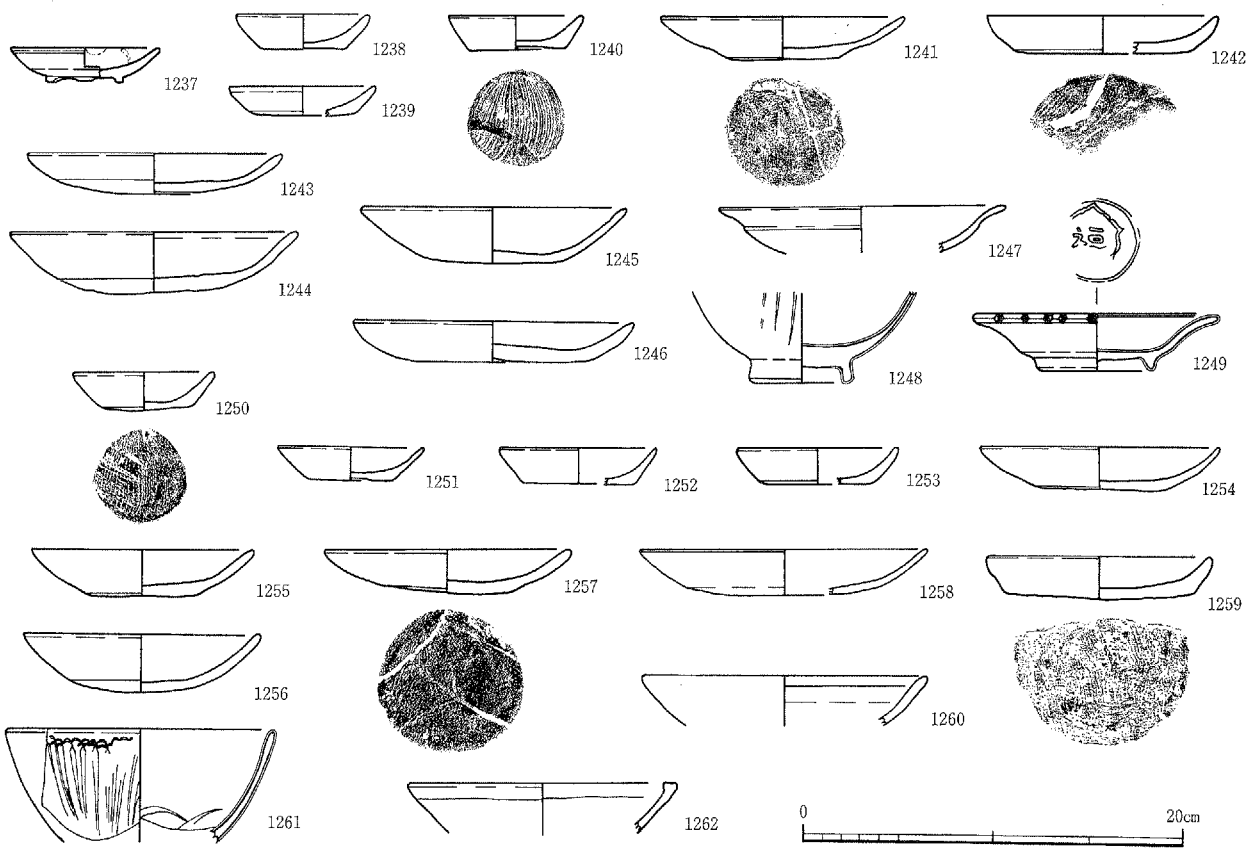
掘立柱建物

建物４（第93図、PL.68）

敷地の北西隅で検出した桁行４間、梁行２間の建物である。柱穴の埋土は灰色シルト層で、ただ１基だけ柱穴563の上層は炭で覆われていた。

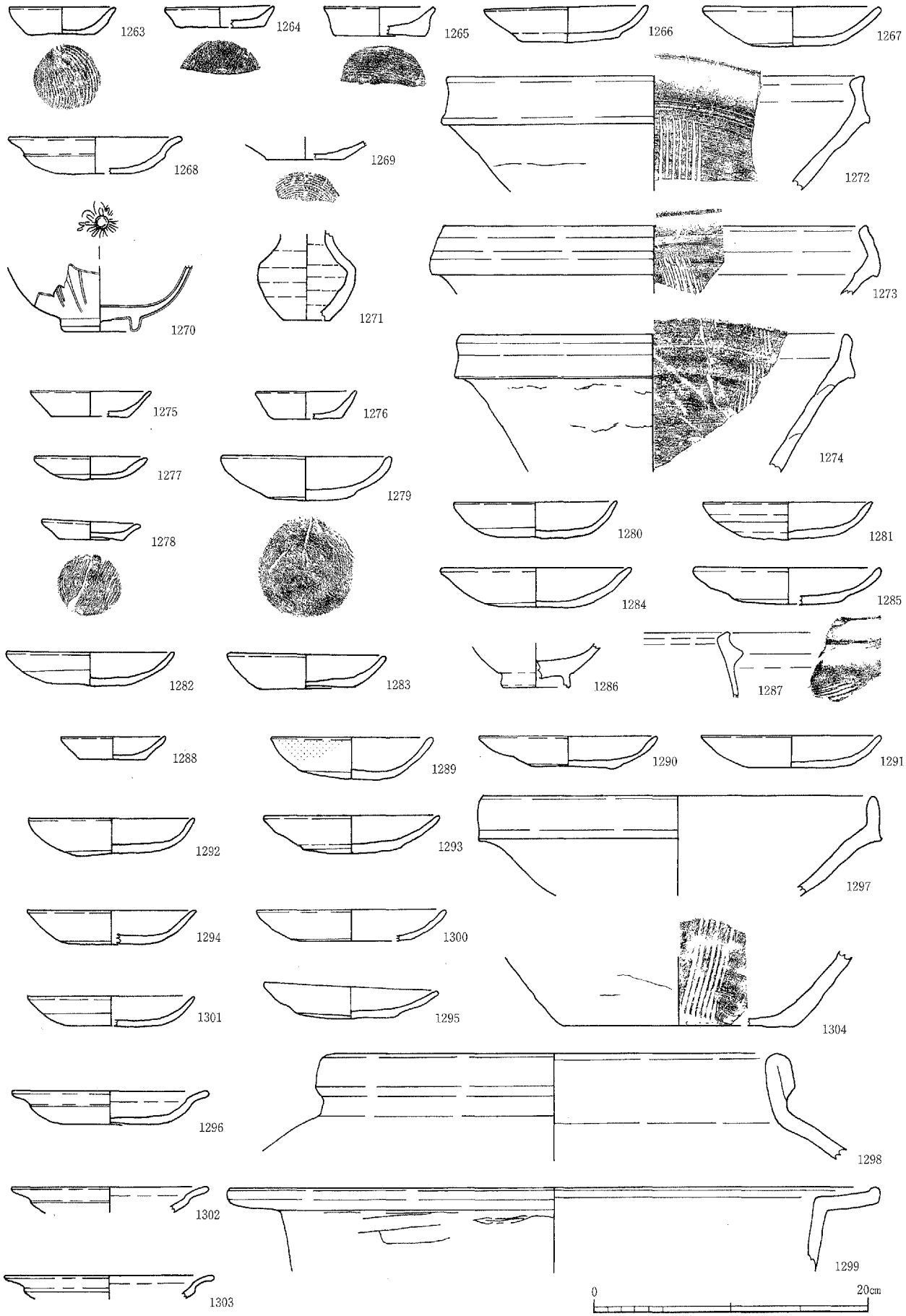
建物５（第93図、PL.68）

敷地の南西隅で検出した。桁行３間、梁行２間の建物である。梁行方向は間尺が違い、南１間分は庇であろうか。柱穴489には柱根が残存していた。この柱穴を例にとってみると、掘方の規模と柱の大



1237：上層、1238～1249：中層、1250～1262：下層

第91図　Ⅳ区 13-④区 溝14 出土遺物実測図



1263～1274：上層、1275～1287：中層、1288～1299：下層、1300～1304：最下層

第92図　IV区 13-④区 溝40 出土遺物実測図

きさとはあまり大差のないものであった。掘方に対する約２/３以上の太さの柱材を使用していたように思われる。

建物６（第94図、PL.68）

敷地の東側中央で検出した。桁行３間、梁行２間の建物である。桁行方向は東と西では間尺が違う。掘方の柱あたりの埋土は黄灰色の砂質シルト及び灰色シルトであった。

建物11（第94図）

建物６の南側で検出した。桁行２間、梁行１間の建物である。柱穴439に柱根の芯が残存していた。埋土は灰色シルトで全体的に覆われていた。

建物10（第94図）

敷地の北東隅で検出した。桁行2間、梁行1間の建物である。この建物の柱穴埋土も灰色シルトで覆われていた。

建物13（第94図）

敷地の南端中央部で検出した。東西１間の建物で、他の建物と違い性格的には不明である。

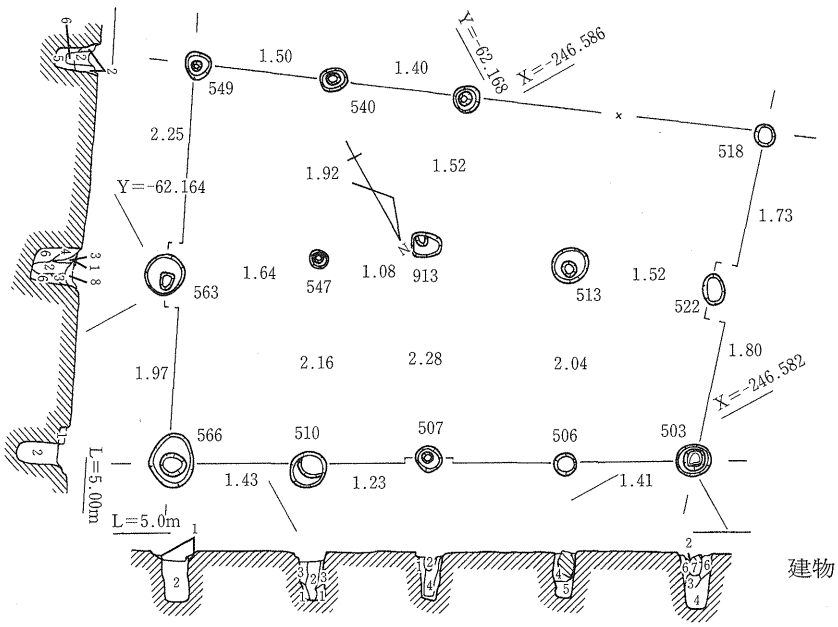
井戸30（第95図、PL.70）

建物４と建物５の間で検出した石積み井戸である。掘方の平面の形状は2.15m×2.25mの楕円形を呈し、断面は袋状を呈する。石積みの深さは検出面から1.8m下まで確認したが、そこから下は崩落の危険性があるため断念した。しかし、井戸底で石積みを検出したので底まで積まれていたと思われる。

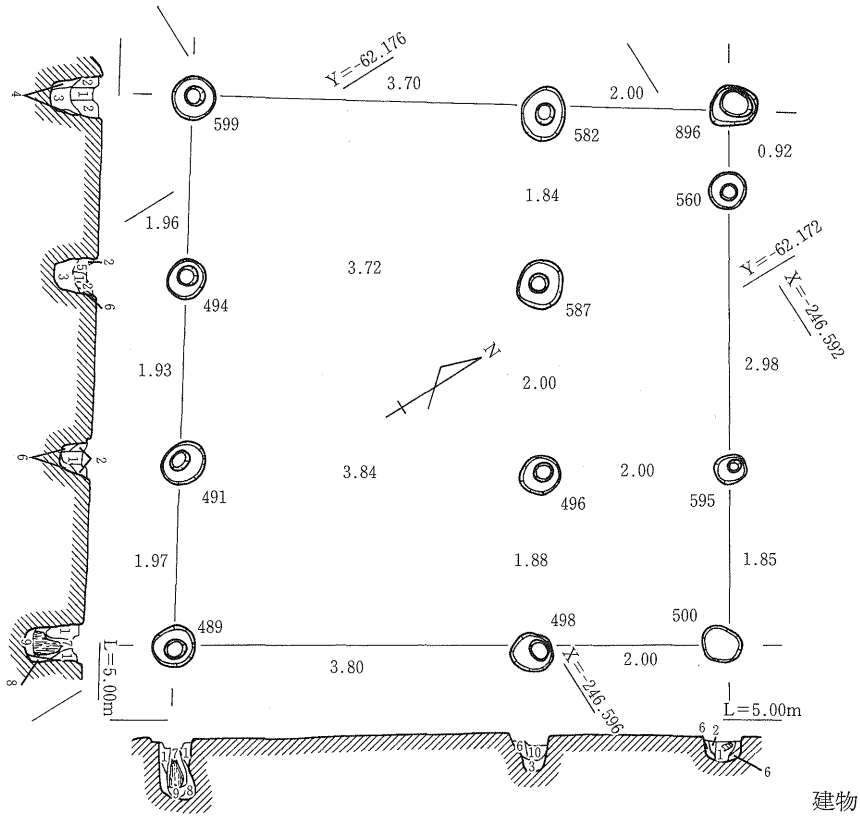
掘立柱建物	規模			柱穴				主軸方位	備考
	間×間 面積(㎡)（小数点第２以下切捨）	東西(cm) (尺)	南北(cm) (尺)	掘形(cm)		柱当たり(cm)			
				直径	深さ	直径	深さ		
建物１	２間×２間 11.70	桁行　350 11.55	梁行　335 11.05	18～40	18～54	9～18	18～50	N-25°-E	南西向き 柱穴756に柱根が遺る
建物２	３間×３間 36.90	桁行　610 20.13	梁行　606 20.00	35～58	19～73	20～18	13～70	N-27°-E	南西向き
建物３	２間×(１間以上) (9.50)	桁行　475 15.67	梁行　(202) 6.66	24～52	36～72	12～22	24～56	N-31°-E	南西向き
建物４	４間×２間 23.20	桁行　550 18.15	梁行　422 13.92	30～48	47～60	14～16	36～52	N-32°-E	南西向き
建物５	３間×２間 33.90	桁行　580 19.14	梁行　586 19.33	42～44	33～66	19～25	27～54	N-31°-E	南東向き 柱穴489に柱根が遺る
建物６	３間×２間 29.80	桁行　620 20.46	梁行　481 15.87	25～28	39～56	12～18	28～52	N-26°-E	南西向き
建物７	２間×２間 6.90	桁行　341 11.25	梁行　204 6.73	22～45	19～47	16～22	19～47	N-37°-E	南西向き
建物８	２間×２間 11.70	桁行　411 13.56	梁行　285 9.40	28～40	28～51	15～24	28～51	N-34°-E	南西向き
建物９	(３間以上)×(３間以上) 67.00	桁行　(1015) 33.49	梁行　(661) 21.81	30～46	22～49	10～18	10～49	N-29°-E	南東向き
建物10	２間×１間 7.60	桁行　405 13.36	梁行　188 6.20	36～50	51～78	13～18	51～78	N-30°-E	南西向き
建物11	２間×１間 9.30	桁行　425 14.02	梁行　220 7.26	18～38	12～71	10～20	12～48	N-35°-E	南東向き 柱穴439に柱根が遺る
建物12	３間	490 16.17	—	17～27	10～40	11～15	10～40	N-58°-W	北向き　柵
建物13	１間	221 7.29	—	26～31	24～49	17	24～49	N-61°-W	北向き柵入り口？
建物14	(２間以上)×２間 (16.80)	(408) 13.46	412 13.59	15～26	26～35	13～18	26～35	N-30°-W	南東向き

※(　　)付は現存規模、1尺＝30.3cmで計算。　主軸方位は座標北を軸とし、この地点では真北より0°22′西偏する。

表７　掘立柱建物規模一覧



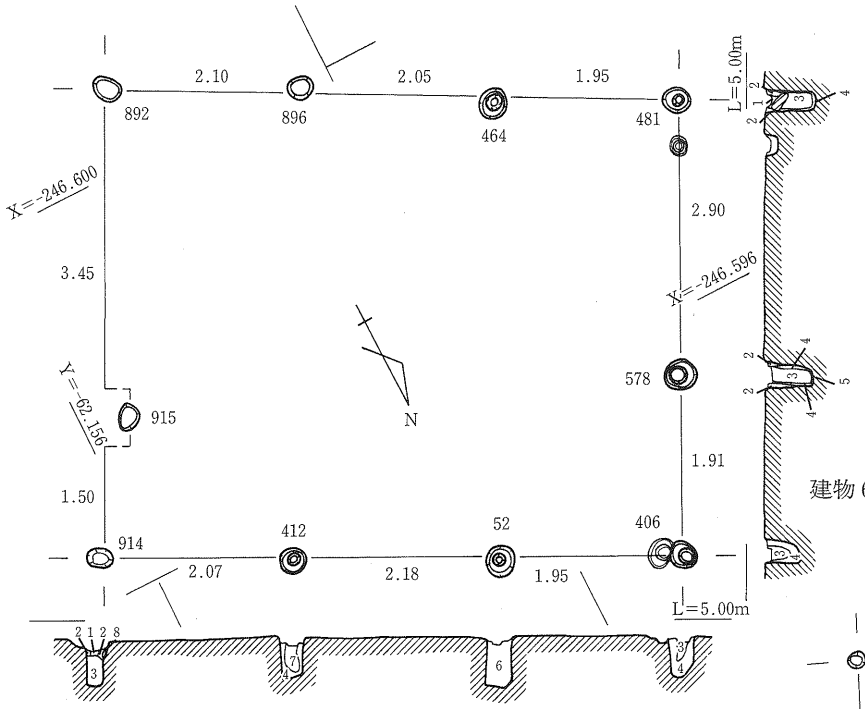
1 N5/(灰)シルト、マンガン粒微量
2 N5/(灰)シルト、細砂多く含む、炭片ごく微量を含む
3 N5/(灰)シルト、細砂多く含む
4 N5/(灰)シルト、2.5Y5/3(明黄褐)混
5 N5/(灰)シルト、細砂多く含む
6 2.5Y6/1(黄灰)に2.5Y5/3(明黄褐)混 シルト
7 2.5Y5/1(黄灰)、マンガン粒微量 シルト
8 N5/(灰)細砂土、炭多く含む



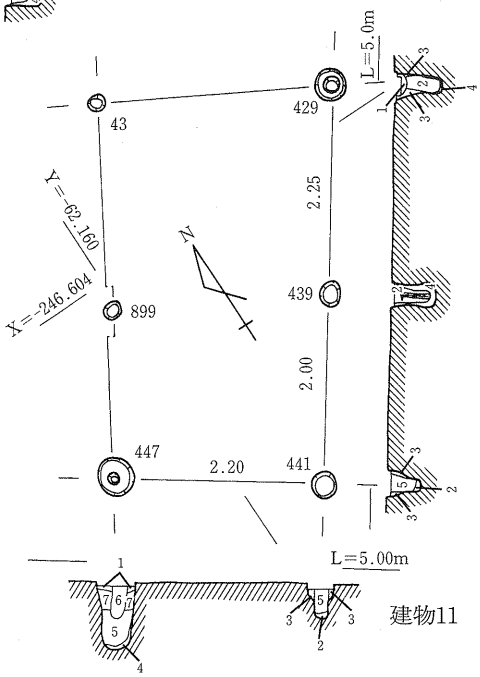
1 2.5Y6/2(灰黄)弱砂質土、2.5Y3/3(オリーブ褐)弱粘質土混
2 5Y6/2(灰オリーブ)弱砂質土、2.5Y4/3(オリーブ褐)弱粘質土混
3 5Y5/1(灰)弱粘質土、2.5Y5/3(明黄褐)弱粘質土混
4 2.5Y5/4(黄褐)弱粘質土、10Y5/1(灰)弱粘質土混
5 5Y6/3(オリーブ黄)弱粘質土
6 2.5Y5/2(暗灰黄)弱砂質土
7 5Y5/1(灰)弱粘質土
8 2.5GY5/1(オリーブ灰)弱粘質土
9 5GY5/1(オリーブ灰)弱粘質土
10 5Y5/2(灰オリーブ)弱砂質土、10YR4/2(灰黄褐)小粒子混

0 4m

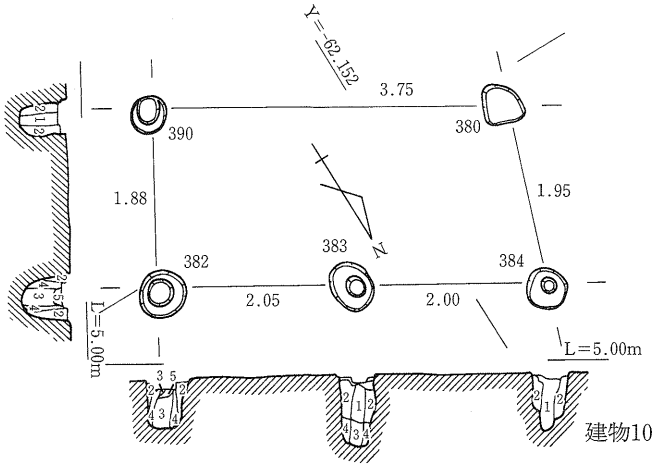
第93図 IV区 13-④区 掘立柱建物4・5実測図



1 2.5Y5/1(黄灰)細砂土、マンガン粒含む
2 5Y5/1(灰)細砂土
3 2.5Y4/1(黄灰)砂質シルト
2.5Y6/6(明黄褐)シルト混
4 2.5YR5/1(黄灰)シルト
2.5Y6/6(明黄褐)シルト混
5 2.5Y6/6(明黄褐)シルト
6 N5/(灰)にブロック状に2.5Y6/6(明黄褐)シルトが入る 細砂土
7 N4/(灰)砂質シルト、炭・土器小片微量に入る
8 N6/(灰)シルト

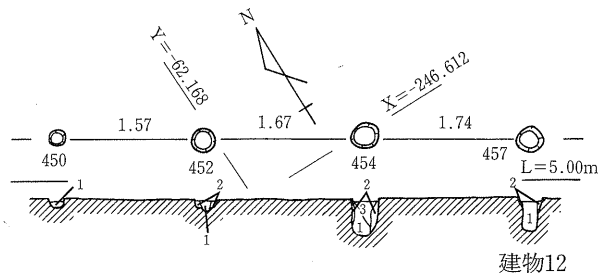


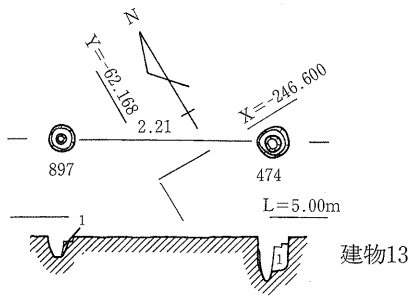
1 N5/1(灰)シルト、細砂多く含む、10YR6/6(明黄褐)シルト混
2 N5/1(灰)シルト、10YR5/6(明黄褐)シルト混
3 N5/1(灰)シルト、細砂わずかに含む、10YR6/6(明黄褐)シルト混
4 N5/1(灰)シルト、10YR5/6(明黄褐)シルト混
5 N4/0(灰)シルト、少量の木片



1 N5/(灰)シルト、砂を多く含む、10YR4/6(褐)混
2 N5/(灰)シルト、砂を含む、土器小片ごく微量混ざる
3 N6/(灰)シルト、マンガン粒わずかに含む
4 N5/(灰)シルト
5 N6/(灰)シルトと10YR5/6(黄褐)シルトの混層
6 N6/(灰)シルトと10YR5/6(黄褐)シルトの混層
砂礫が混ざる
7 N6/(灰)砂礫(礫はφ5mm～1cm大)

1 N6/(灰)と10YR5/6(黄褐)シルトの混層、細砂多く含む
2 N6/(灰)と10YR5/6(黄褐)シルトの混層
3 5Y5/1(灰)細砂少量含む シルト





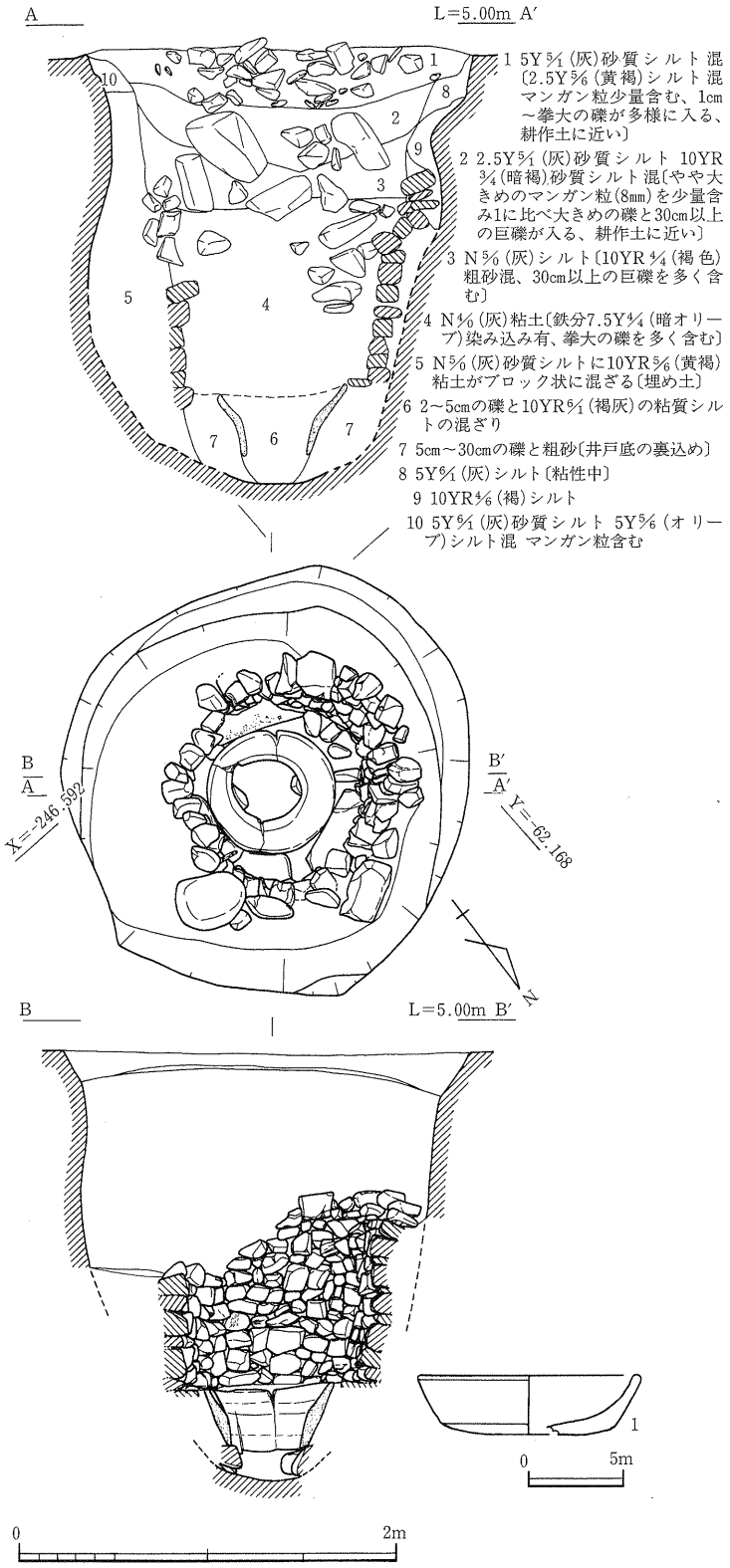
1 2.5Y5/1(黄灰)粗砂土に10YR4/4(褐)シルトのφ1～2mm大のブロックが入る

0　4m

第94図　IV区 13-④区 掘立柱建物 6 ・10～13 実測図

石積みの上部は崩落し、下部の約1.5mだけが残存していた。石積みの内径は約0.95mを測る。井戸底には擂鉢状の上下貫通した木製品を礫の上に据えていた。このベースは砂層で湧水が認められる。

この井戸の埋土の上層（1～3層）は礫混じりの砂質シルトであった。おそらく、これらの礫はこの井戸に積まれていたものであろう。中層（4層）は灰色粘土層が約1mの厚みで堆積していた。下層の井戸底内は小ぶりの礫混じりの褐灰シルト層であった。また、裏込めは灰色の砂質シルトで、井戸底の裏込めとしては礫と粗砂で固定されていた。出土遺物は埋土から土師器皿1点が出土したのみである。Eタイプに酷似するが色調は白色を呈する。



第95図　IV区 13-④区 井戸30 実測図

井戸32（第96図、PL.70）

建物6と建物10の間で検出した素掘り井戸である。遺構検出時の平面プランは、検出面から約10cmの深さで窪んだ範囲があった。この平面の形状は南北方向に長い楕円形を呈し、長軸約3.0m、短軸約2.5mを測る。この部分の埋土は黄褐色シルトであった。この範囲が敷地内での井戸の占有範囲で、窪んだ範囲内に上屋の存在も考えられる。

井戸はこの窪みの上から掘られている。断面の形状は微妙な段がつき3段になる。深さは検出面から底まで約2.20mを測る。埋土の上層（1・2層）は砂質土、中層（3～6層）は灰色のシルト及び粘土で、下層は炭化物の混じった灰白色の粘土であった。

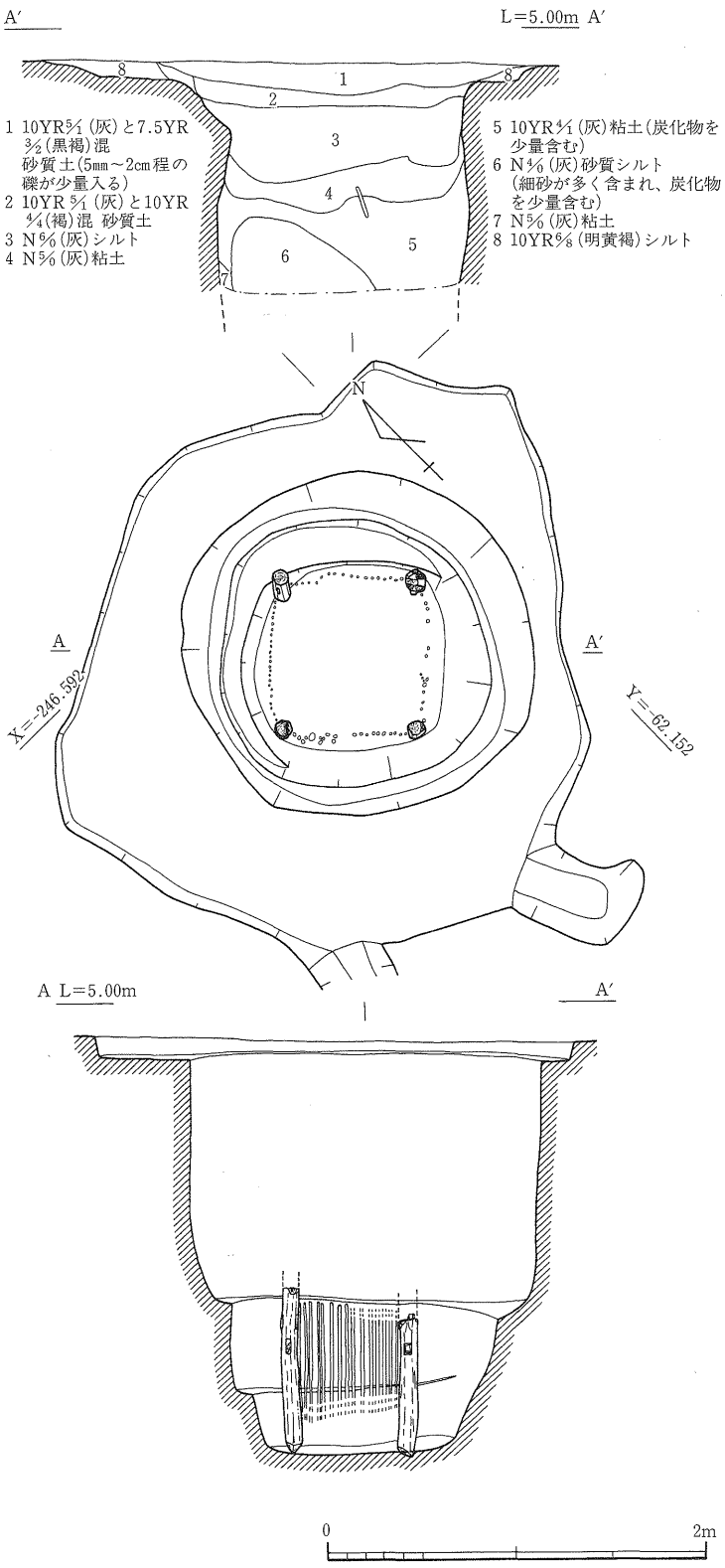
井戸底には直径9～12cmの4本の杭を、一辺70～80cmのほぼ正方形に四隅に立て、その間に竹製の簾状のものを四角に一周させていた。四隅の杭は上部が欠損していたため、元々の長さは不明である。なお、四隅の杭は打ち込まれずに、これの上方の二箇所に長方形の穴を穿っているところから、横木を渡していたと思われる。なお、この中に

は曲物はなかった。

溝49（第97図、PL.67・108）

通路と考えている場所の南側に沿いながら、建物４・５の西側の面に接するように検出した。建物４・５の西側雨落ち溝と考えられる。これの南側は溝40に繋がると思われるが、調査時、何回も遺構検出を行なったが、不鮮明であったため途切れたような状況である。また、南端は近世の土坑34に切られ、不明である。検出長は約20mを測り、幅は1.9～2.8m、深さは20～25cmを測る。この溝の西肩は全体的に浅く深さ３～５cmの凹みとなる。

出土遺物の1305は土師器皿Ｄ１タイプ、1306はＤ２タイプ、1307～1309はＥタイプ、1308はＢタイプである。1310は割高台の白磁皿である。1311は線描き蓮弁文の青磁碗である。1312～1314は備前焼擂鉢である。1312は中世３期ａ、1313は口縁端部を丸く納める時期で、中世５期ａと思われる。1314の内面口縁端部下に稜がはいる兆しが見受けられる。中世５期ｂの時期と思われる。



第96図　Ⅳ区 13-④区 井戸32 実測図

溝25（第98図、PL.67）

溝49の西側で検出した。この溝は溝49と並行に延び、南側で溝40（区画溝）に繋がる。検出長約20.5m、幅は約50～70cmを測る。残存の深さは８～12cmと非常に浅い。遺物は1315の土師器皿Ｄ２タイプが出土している。

溝24

溝40（区画溝）の埋土上で検出した。北側の肩は後にこの区画溝によって潰される。検出長約20m以上を測り、西側は調査区外に延びる。幅は約50cm、残存の深さは約15cmを測る。この溝は東西方向の通路と考えている箇所の北側に接して検出した。このことから通路の側溝の可能性が考えられる。こ

の溝と溝25は東西の区画溝（溝40）と南北の区画溝（溝14）の前身とも考えられる。

溝56（第98図）

土坑456の東側で検出した。検出長約17.0m、幅40～45cmを測る。残存の深さは約20cmを測る。この溝も先に記した遺構24・25と同様な溝と考えられ、これらの溝により東、西、南は区画されることになる。出土遺物は1316の土師器皿Bタイプである。

土坑8（第99・100図、PL.69・108）

敷地の北東隅で重機堀削後すぐに検出した。遺構の形状と規模は長軸約3.3m、短軸約2.2mの長方形である。埋土は単一層の灰色砂質土で、深さは約7～10cmを測る非常に浅いものである。ここからの出土土器は土師器皿のみで、正位の状態でEタイプが7枚、D2タイプが1枚出土した。残存の深さからみて後世に削平されたと思われる。おそらく地鎮的な性格の遺構と考えられ、元々は土師器の皿が整然と置かれていたものと推測される。

また、この場所は、外堀1の西肩から約3m敷地内に入り、この上にはかつて土塁が築かれていたことが十分想定できる箇所であるところから、土塁構築に関わる地鎮坑の可能性も考えられる。

土坑38（第100・109、PL.69）

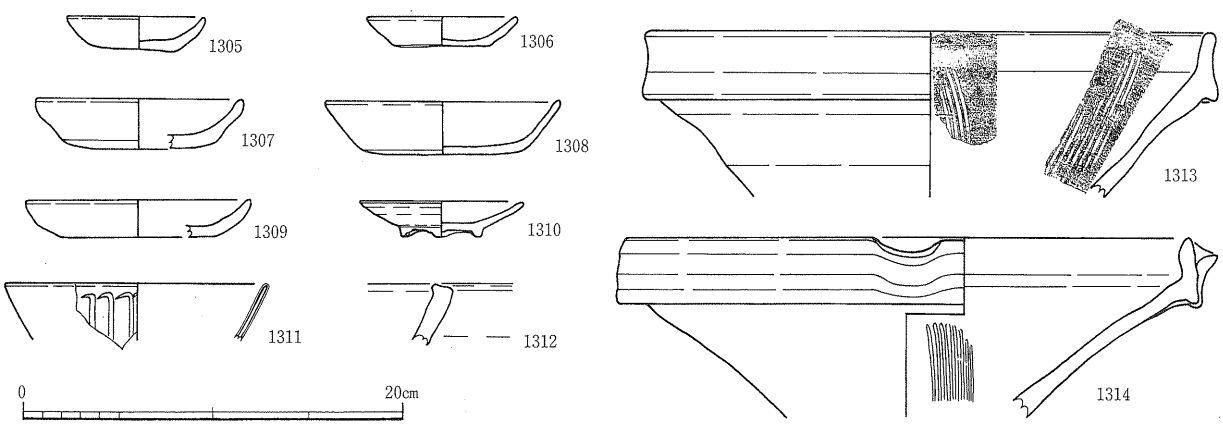
土坑456の上面で検出した。形状はほぼ円形で、規模は直径1.4～1.5mを測る。深さは約45～50cmを測る。第2層からは土師器皿の破片が少量出土した。遺構検出時は、第1層・5層は同一の層に思われたため一括に掘削したが、後に土層堆積状況から判断すると、他の土坑と重複していた。遺構の大きさの割りに出土遺物は少なく1374の土師器皿と他は土師器皿細片のみであった。

土坑18（第100図）

溝14の北側の埋土上で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸80cmを測り、残存の深さは27cmを測る。埋土の上層（第1層）には礫を多く含むが、それより下層は粘土質であった。底の第4層には木屑を含む。時期は近世の可能性がある。

土坑5（第100図）

敷地の東端で検出した近世の土坑である。形状はほぼ長方形を呈し、長軸1.4m、短軸0.9m、残存の深さは約30cmを測る。肩はほぼ垂直に掘られ、底は平らとなる。



第97図　IV区 13-④区 溝49 出土遺物実測図

土坑435（第100・109図、PL.69）

遺構456の埋土上で検出した。平面形状はほぼ楕円形を呈する。規模は長軸1.05m、短軸0.9mを測り、残存の深さは５～８cmと浅い。埋土は単一層で礫を多く含む。1380の播磨系の土師器鍋が出土している。これの外面突帯下端から煤がびっしり付着している。

土坑937（第100図）

溝25と溝49に挟まれた位置で検出し、溝49を切っている。平面形状はほぼ円形を呈し、直径1.2～1.3mを測る。深さは約55cmを測り、断面の形状は袋状を呈する。

土坑46（第100図）

建物５の東側で検出した。平面形状は楕円形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.6mを測り、残存の深さは５～７cmと非常に浅い。

土坑20（第100・109図、PL.69）

土坑19と同様に溝40の埋土上で検出した。平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.3m、短軸0.75m、残存の深さは38cmを測る。肩はほぼ垂直で、底はやや船底状を呈する。1371の土師器皿Ａタイプが出土している。

土坑19（第100・109図、PL.69）

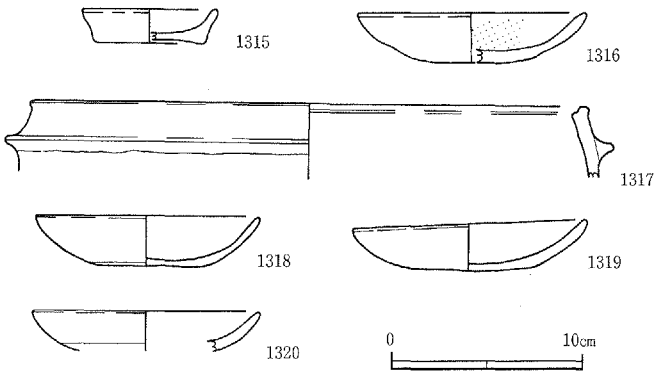
溝40の埋土上から検出した。平面の形状は楕円形を呈し、長軸約1.5m、短軸約1.2mを測る。残存の深さは28cmを測る。掘り込みの肩部は、緩やかな傾斜で底は平らである。埋土は３層に分層でき、レンズ状の堆積である。中層には少量の炭片を含む。出土遺物は1369の土師器皿Ｄ３タイプ、トリベと思われる1370がある。

土坑37（第100図）

建物４の南側で検出した。平面形状は長軸1.0m、短軸0.7mの長方形を呈する。残存の深さは最も深い地点で38cmを測り、断面の形状は擂鉢状を呈する。

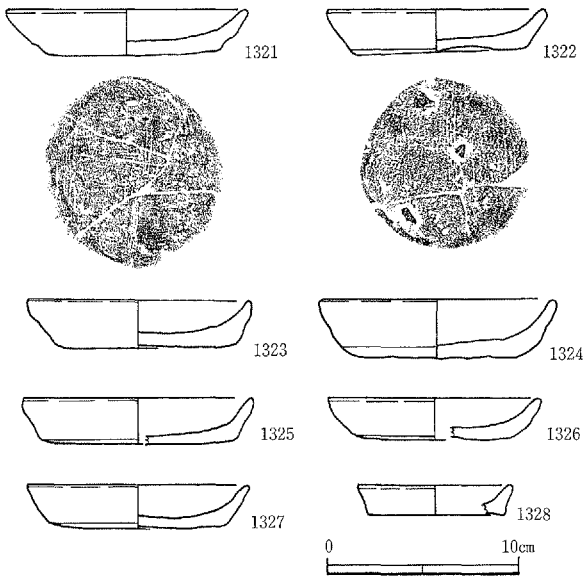
土坑26（第100図）

溝49と溝25の間で検出し、方位はこれらの溝と同様



1315：溝25、1316：溝56、1317：溝15、1318･1319：溝819、1320：溝896

第98図　Ⅳ区 13-④区 遺構出土遺物実測図



第99図　Ⅳ区 13-④区 土坑８ 出土遺物実測図

である。形状は小判形を呈し、長軸約1.6m、短軸約1.1mを測る。埋土は上下2層に分層される。上層には炭片を含み、下層は黄色粘土と灰色の砂質シルトがブロック状に混在する。意図的に埋められたものであろうか。

土坑225

土坑456の埋土上で検出した。平面形状はほぼ楕円形を呈する。長軸約60cm、短軸約40cm、残存の深さは約10～18cmを測る。土坑の内側の縁には板状のものが当てられていたと思われる。

土坑33（第100図）

井戸30の東側で検出した。平面形状は直径1.05mの円形を呈する。残存の深さは18cmを測る。肩はほぼ垂直に掘られ、底は平らである。埋土の堆積は一方向からなだれ込むように堆積する。

土坑456（第100図）

敷地の東側で検出した大型土坑である。これの南は溝40に切られている。平面形状は長方形を呈する。長軸は約8.0m、短軸は約4.0mを測る。残存の深さは15cmを測る。埋土は二層に分層でき、上層は黄灰色のシルト層に小礫が混ざる。下層は厚み3～5cmの灰色粘土が底全面に堆積する。この遺構の上から建物6や建物11を検出していることから、これらの建物の時期より一時期古いと考えられる。

土坑603（第100図）

溝14と溝25の間で検出した。平面形状は楕円形を呈し、長軸2.6m、短軸2.3mを測る。残存の深さは約60cmを測る。埋土はレンズ状に堆積し、底は船底状になる。

土坑34（第100・109図）

溝49の北端を切る位置で検出した。形状は東西2.7m、南北2.5mの隅丸方形を呈する。残存の深さは10～15cmを測る。埋土は二層に分層でき、上層は灰色シルト、下層は純粋な細砂層であった。検出した位置と遺構の切合い関係から近世の遺構と考えられる。しかしながら、ここからの出土遺物は1372の土師器皿D2タイプ、1373の播磨系土師器鍋といったような中世遺物のみであった。

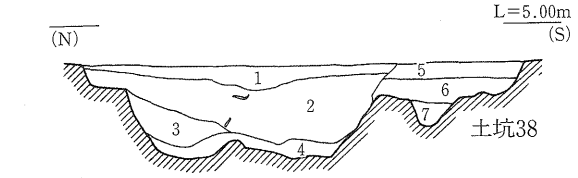
B敷地の遺構

この敷地の南半部は調査区外のため、遺構の状況については不明である。Aの敷地と同じく掘立柱建物、井戸、土坑、溝状遺構などで構成されていた。掘立柱建物は敷地の中央部にまとまって検出され、その西側で井戸が1基検出された。また、この敷地を区切る南北方向の区画溝と建物の間で土坑がまとまって検出されている。敷地の西端については近世の攪乱をうけており、顕著な遺構は確認できなかった。西辺の外堀（外堀1）や北辺の外堀（外堀1）の敷地に接する肩も著しい攪乱をうけていた。建物の規模、各々の柱穴の規模、間尺については表7、第101図を参照。

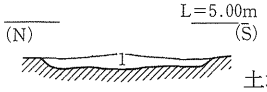
掘立柱建物

建物1（第101図、PL.68）

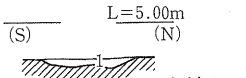
敷地の中央部で検出した桁行2間、梁行2間の建物である。桁行方向の間尺には違いがみられ、東側の間尺が明らかに短い。柱穴の深さは756に比べ742・745は極端に浅い。柱穴756には柱根が遺こる。概ね柱穴の埋土は灰色系のシルトであった。



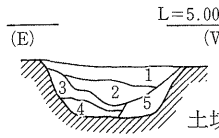
1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 0.5～2cmの小礫混じる
2 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルトに10YR3/3(暗褐)粗砂と2.5Y3/3(明黄褐)粘土がブロック状に混ざる 1～3cmの小礫と遺物が少量含まれる
3 2.5Y3/3(暗褐)粘土に2.5Y5/1(黄灰)砂質土が混ざる
4 2.5Y3/3(暗褐)粘土と2.5Y5/1(黄灰)砂質土の混層
5 2.5Y5/3(にぶい黄)砂質シルト マンガン粒が沈殿し、0.3～0.5cmの小礫が混ざる わずかに遺物含む
6 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト マンガン粒の沈殿がわずかに混ざる
7 2.5Y5/1(黄灰)粘質シルト 底部には粗砂が多く混じる



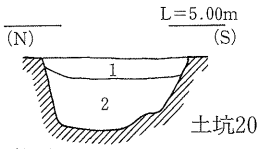
1 2.5Y5/1(灰)砂質シルト 1～4cmの礫を多く含む



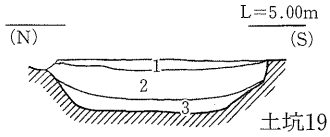
1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト マンガン粒が少量沈殿し、細砂多く含む



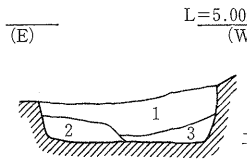
1 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂 1～10cmの礫を多く含む
2 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質土 5Y5/1(灰)粘土混 4cm大の礫含む
3 2.5Y5/4(黒褐)粘土
4 5Y5/1(灰)粘土 木クズ含む
5 2.5Y5/1(黄灰)粘土 2層と3層がブロック上に混ざる 5cm以下の礫含む



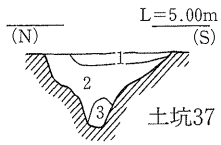
1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 細砂混じる 1～5cmの礫、鉱物の沈殿含む
2 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト 5cm以下の礫・マンガン粒の沈殿、遺物、木クズ含む



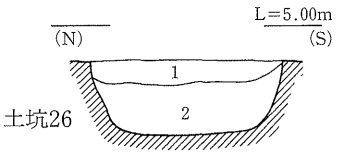
1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 1cm大の礫、マンガン粒の沈殿、遺物を含む
2 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 1cm大の礫、マンガン粒の沈殿あり、わずかに遺物・炭を含む
3 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト 5cm大の礫、マンガン粒の沈殿あり



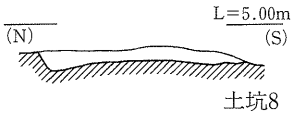
1 N6/1(灰)シルトに、2.5Y4/6(オリーブ褐)が斑点状に入る
2 10YR5/6(明黄褐)細砂、マンガン粒をわずかに含む
3 N5/0(灰)シルト わずかに砂含む



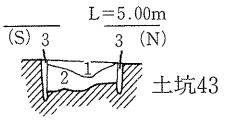
1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 鉱物の沈殿あり
2 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 鉱物の沈殿あり 砂質シルトが5cm以下のブロック状に混ざる
3 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト マンガン粒の沈殿あり 遺物少量含む



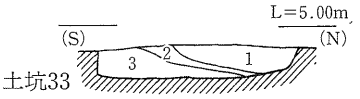
1 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト 5cm大の礫、マンガン粒の沈澱、遺物・炭を含む
2 2.5Y5/3(黄灰)粘質シルト 部分的に2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルトが混ざる 3cm以下の礫、マンガン粒の沈殿多い



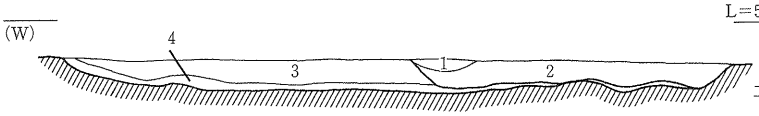
1 2.5Y5/1(灰)砂質土 マンガン粒少量と2.5Y5/6の粒を含む 遺物含む



1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト マンガン粒の沈殿あり、1cm程度の礫含む
2 2.5Y5/1(黄灰)粘土 細砂を若干混ざり、遺物と礫を含む
3 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 遺物わずかに含む

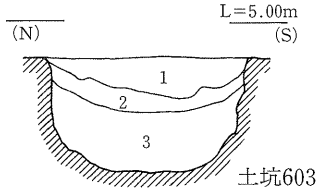


1 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト 2cm以下の礫、鉱物の沈殿あり
2 2.5Y5/2(暗灰黄)粘質シルト 3cm以下の礫含む
3 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト 5cm以下の礫含む

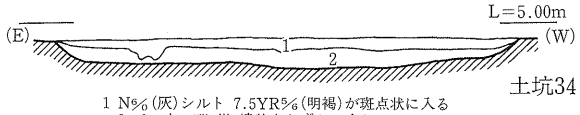


1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 0.5～2cmの小礫が混じる
2 N5/0(灰)細砂に10YR5/8(黄褐)の斑点 炭・土器小片が微量含む
→ 土坑38

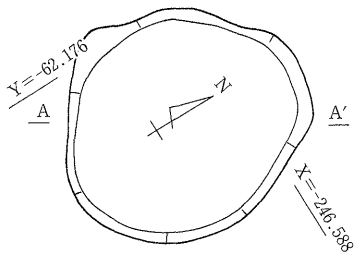
3 2.5Y5/1(黄灰)粗砂 φ1cm大、5～8cm大の礫多量含む
4 N5/0(灰)粘土、砂微量含む
→ 土坑456



1 2.5Y5/4(にぶい黄褐)砂質シルト N5/0(灰)粘土がブロック状に混ざる
2 2.5Y5/1(黄灰)粘土、細砂が少し混ざり炭少量含む
3 5Y5/1(灰)粘土、2.5Y5/6(明黄褐)の粘土が炭・遺物が少量含まれる



1 N5/0(灰)シルト 7.5YR5/6(明褐)が斑点状に入る 2～3cm大の礫・炭・遺物をわずかに含む
2 N5/0(灰)細砂



1 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト マンガン粒1～3cmの小礫少量混
2 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルト 2.5Y5/6(黄褐)シルトがブロック状に混ざる、炭・遺物少量含む
3 5Y5/1(灰)シルト
4 5Y5/1(灰)砂質シルトと 10YR4/6(褐)シルトの混層
5 2.5Y5/1(黄灰)砂質シルトに 10YR3/4(暗褐)粗砂が混じる
6 5Y5/1(灰)砂質シルトに 10YR3/4(暗褐)粗砂が混じる 炭・木クズ少量含む
7 5Y5/1(灰)砂質シルトをベイスに 10YR3/4(暗褐)粗砂と 10YR7/6(明黄褐)と10YR5/1(褐灰)シルトがブロック状に混ざる

第100図　Ⅳ区 13-④区 土坑937 平面図・土層図、土坑 5 ・ 8 ・18～20・26・33・34・37・38・43・46・435・456・603 土層図

建物2（第101図、PL.68）

建物1の東側に隣接して検出した桁行3間、梁行3間の建物で、北側は建物1と面を合わせる。梁行方向の北側の間尺は南側に比べやや短く、柱穴の深さも浅い。北庇の建物であろうか。

建物3（第101図）

この建物も建物2の南側に隣接して検出した。東西（梁行）2間以上、南北（桁行）1間以上で、南側は調査区外のため規模は不明である。

建物14（第101図）

建物3の東側で検出した桁行2間以上、梁行2間の建物である。これの南側は調査区外のため不明である。

建物15

敷地の東側で検出した南北方向の柵状遺構である。この敷地の居住区と通路を仕切る柵列と考えられる。

また、これの西側、建物2の東側で並びそうな柱穴を検出したが組合すことができなかった。空間的には一棟の建物が建つスペースがあり、建物2・3等と同方向の建物の存在が十分考えられる。

井戸815（第101・102図、PL.70）

建物1の西側で検出した石組みの井戸である。この井戸の掘方は不定形を呈し、規模は約2.3m×1.8mを測る。これの肩口は調査時、約10cm程度下げただけで、上方で確認した掘方の傾斜は緩やかであるが、下方では急激に落ち込むものと思われる。

石積みはほぼ築造当時の様相を遺しているものと思われ、最上段の石は比較的安定した大ぶりのものが遺こっていた。石積みの内径は約75～80cmと狭いため、埋土の堀削に難をきたし、危険であったため深さ約1.6mの地点で断念した。また、石積みの形状は、掘り得た深さの範囲では殆んど円筒状である。

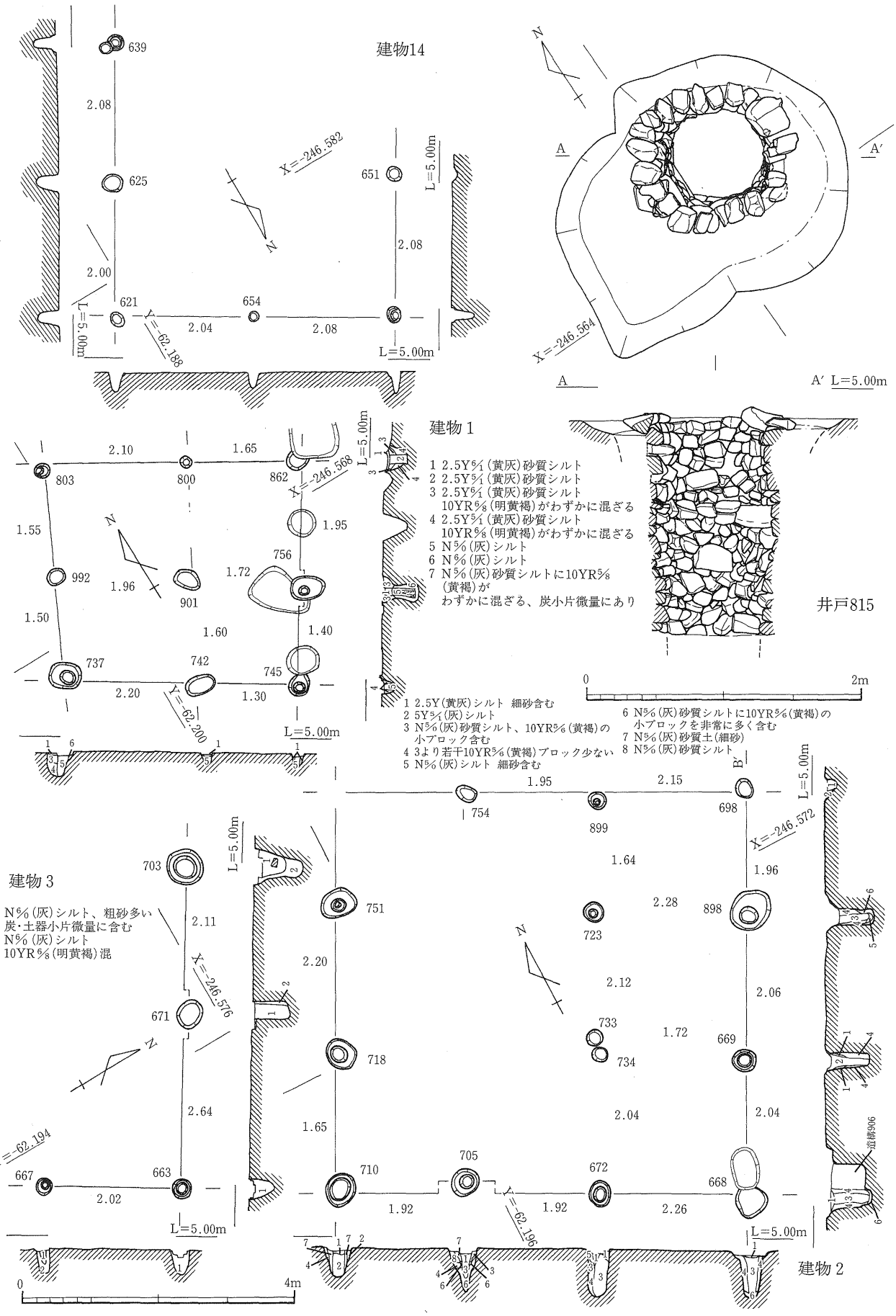
出土遺物には土師器皿、青磁皿、備前焼擂鉢がある。1329・1330は土師器皿Dタイプ、1331は土師器皿D2タイプ、1332・1333は土師器皿Bタイプ、1334は土師器皿F1タイプである。1335は青磁の稜花皿である。1336は、中世5期bと考えられる備前焼擂鉢である。

溝819（第98図）

敷地の中央南端部分の建物1の西側で検出した「T」字状をした溝である。南は調査区外に延び不明である。検出総延長は約14mを測る。これの西側は井戸815によって切られている。幅は約35cm、残存の深さは約10cmである。この溝は直角に東西に曲がることから、建物の雨落ち溝の可能性も考えられる。建物1などに取り付くものとは考えられない。ここからの出土遺物には1318・1319の土師器皿Bタイプがある。

溝896（第98図）

土坑16の埋土上で検出した。不定形の溝状遺構である。南は調査区外に延びる。検出できた長さは約4.5m、幅約1.0m、残存の深さは約5cmと浅いものである。遺物は1320の土師器皿Bタイプ、他に瓦器椀の高台部分の細片が出土している。



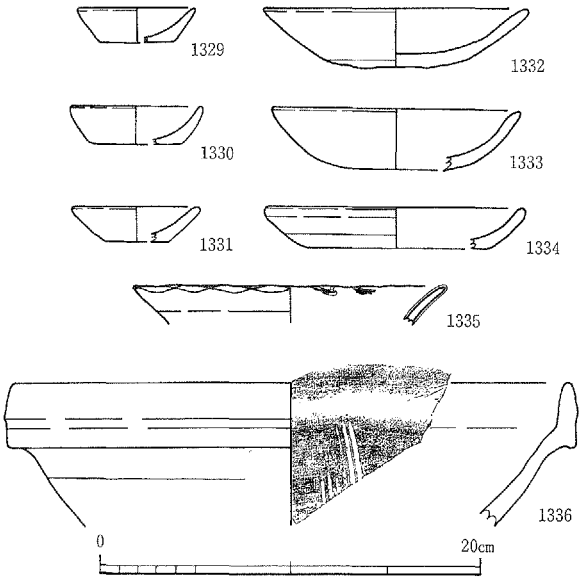
第101図　Ⅳ区 13-④区 掘立柱建物1～3・14、井戸815 実測図

溝15（第98図）

敷地の西端で検出した溝状遺構である。幅は20～80cmを測り、残存の深さは8～10cmを測る。非常に不安定な溝である。ここからは1317の播磨系の土師器鍋が出土している。

土坑16（第103・104、PL.69・108）

敷地の中央で検出した。平面形状は楕円形を呈し、長軸約10m、短軸約4mを測る。残存の深さは最も深いところで38cmを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈する。ここからの出土遺物も殆んどが土師器皿であった。遺物の取上げは上層（6～9層）、下層（10～15層）で取り上げた。上層からの出土遺物は、1337はDタイプ、1338～1340はD2タイプ、1341～1343はBタイプ、1344・1345はAタイプである。1346は播磨系の土師器鍋の細片である。1347は管状土錘である。1348は瀬戸美濃灰釉折縁深皿である。1349は備前焼擂鉢で中世6期aと思われる。下層からの出土遺物は1350～1356で全てが土師器皿である。1350はD2タイプ、1351～1354はBタイプである。1351の口縁端部内面には、灯明の芯痕が両側の油煤により明確に分かる。1355はAタイプ、1356は京都系の土師器皿である。



第102図　IV区 13-④区 井戸815 出土遺物実測図

土坑428（第104・109、PL.69）

溝14の北端の埋土上で検出した。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸1.6mを測る。残存の深さは約30cmを測り、断面の形状は逆台形を呈する。土師器皿D2タイプ二枚が正位の状態で底の南端に置かれていた。ここからの出土遺物は1378の土師器皿Dタイプ、1379の土師器皿D2タイプがある。

土坑605（第104・109図）

建物15（柵状遺構）の東側で検出した長方形の土坑である。規模は長軸約4.6m、短軸約1.0mを測る。残存の深さは約30cmを測る。肩の掘り込み状況は西側が緩やかで、東側はキツイため深くなっている。埋土の堆積はレンズ状となる。ここからは1382の15世紀中頃の備前焼擂鉢が出土している。

土坑609（第104・109図、PL.69）

これも建物15（柵状遺構）の東側で検出した。平面形状は長楕円形で、規模は長軸1.5m、短軸0.7mである。残存の深さは約10～15cmを測る。埋土の2・3層は、堆積の状況から人為的な埋め戻しによるものであろうか。出土遺物には1383の土師器皿D2タイプ、1384の土師器皿Bタイプがある。

土坑611（第104図）

土坑726に隣接した南側で検出した。平面形状は円形で、直径1.0mを測る。残存の深さは38cmを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は全体に粗砂層で、5～20cm大の礫を多く含む。

土坑622（第104図、PL.69）

土坑653の東側に隣接して検出した埋桶遺構である。掘方は円形を呈し、直径は約1.0mを測る。桶の

大きさは直径84cmである。桶の一枚の側板の高さは52cm、幅は12～14cmを測る。埋土の一層分は全て混層となっているところから、人為的に埋められたと思われる。ここからの出土遺物は溶解炉の溶体の破片が出土している。時期は近世と考えられる。

土坑653（第104図）

建物14内で検出した。規模は直径約1.35mのほぼ円形である。残存の深さは約58cmを測る。埋土の3層～８層については人為的に埋められたように埋土が入り混じる。９層とした土坑の壁に沿うような縦の埋土は、この土坑の壁内に貼り付けていた何かの痕跡であろうか。

土坑662（第104図）

建物２の東側で検出した。平面の形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.3m、短軸1.1mを測る。残存の深さは最も深い中心部で23cmを測る。両肩の落ちは緩く、底は船底状である。

土坑726（第104図、PL.69）

建物15（柵状遺構）の西側で検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸1.1mを測る。残存の深さは約30cmを測る。肩は緩やかな傾斜で、底は平らである。埋土の底には厚さ１～３cmの灰色粘土が堆積していた。

土坑825（第105・106、PL.108）

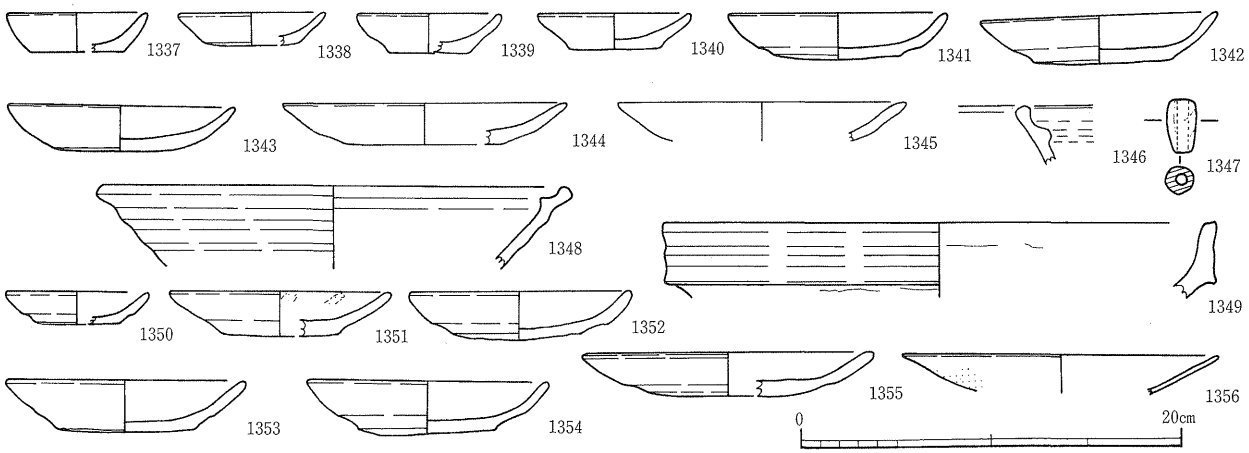
土坑16の上で検出した。平面形状は楕円形である。規模は長軸約5.0m、短軸約2.5mを測る。残存の深さは約30cmを測る。埋土はレンズ上の堆積を呈する。出土遺物の殆んどが土師器皿である。1357～1367が土師器皿で、1357・1358はＤ２タイプ、1359はＤタイプ、1360はＧ２タイプ、1361～1365はＢタイプ、1366はＡタイプ、1367は奈良時代の土師器皿であろうか。1368は青磁碗で、外低には釉は掛からない。

土坑892（第104図）

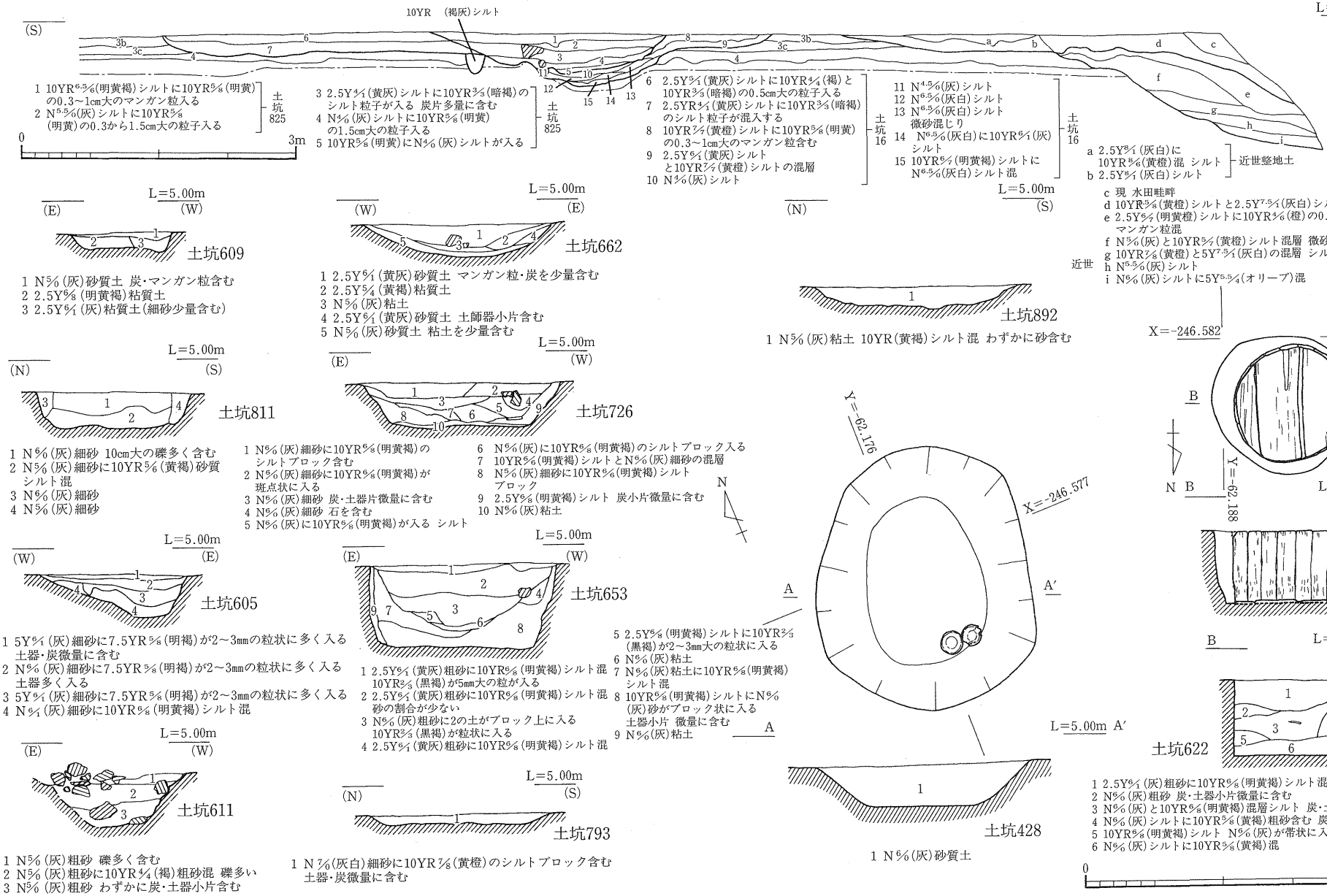
溝14の埋土上層で検出した不定形の土坑である。規模は長軸3.0m、短軸1.6mを測る。残存の深さは15cmを測る。両肩は緩やかに落ち、底は船底状となる。埋土は灰色粘土の単一層である。

土坑793（第104・109図）

建物１の北側で検出した。平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約1.4mを測る。残



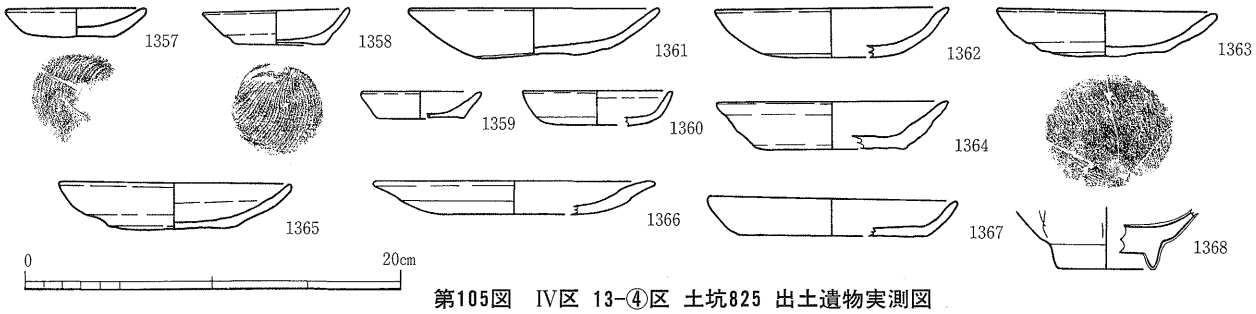
第103図　Ⅳ区 13-④区 土坑16 出土遺物実測図


10YR (褐灰)シルト
(S)
(N)
L=5.00m
1 10YR6.5/6(明黄褐)シルトに10YR5/6(明黄)の0.3～1cm大のマンガン粒入る
2 N5.5/(灰)シルトに10YR5/6(明黄)の0.3から1.5cm大の粒子入る
土坑825
3 2.5Y4/1(黄灰)シルトに10YR3/3(暗褐)のシルト粒子が入る 炭片多量に含む
4 N4/(灰)シルトに10YR5/6(明黄)の1.5cm大の粒子入る
5 10YR5/6(明黄)にN4/(灰)シルトが入る
土坑825
6 2.5Y5/1(黄灰)シルトに10YR4/4(褐)と10YR3/3(暗褐)の0.5cm大の粒子入る
7 2.5Y4/1(黄灰)シルトに10YR3/3(暗褐)のシルト粒子が混入する
8 10YR7/2(黄橙)シルトに10YR5/6(明黄)の0.3～1cm大のマンガン粒含む
9 2.5Y5/1(黄灰)シルトと10YR7/2(黄橙)シルトの混層
10 N3/(灰)シルト
11 N4.5/(灰)シルト
12 N6.5/(灰白)シルト
13 N6.5/(灰白)シルト 微砂混じり
14 N6.5/(灰白)に10YR6/1(灰)シルト
15 10YR6/(明黄褐)シルトにN6.5/(灰白)シルト混
土坑16
a 2.5Y5/1(灰白)に10YR5/6(黄橙)混 シルト
b 2.5Y5/1(灰白)シルト
近世整地土
c 現 水田畦畔
d 10YR5/6(黄橙)シルトと2.5Y7.5/1(灰白)シルト混
e 2.5Y5/(明黄橙)シルトに10YR4/6(橙)の0.5cm以下マンガン粒混
f N5/(灰)と10YR5/(黄橙)シルト混層 微砂混じり
g 10YR7/6(黄橙)と5Y7.5/1(灰白)の混層 シルト
h N5.5/(灰)シルト
i N5/(灰)シルトに5Y5.5/4(オリーブ)混
近世 堀
0 3m
土坑609
1 N5/(灰)砂質土 炭・マンガン粒含む
2 2.5Y6/6(明黄褐)粘質土
3 2.5Y6/1(灰)粘質土(細砂少量含む)
土坑662
1 2.5Y6/1(黄灰)砂質土 マンガン粒・炭を少量含む
2 2.5Y5/4(黄褐)粘質土
3 N5/(灰)粘土
4 2.5Y6/1(黄灰)砂質土 土師器小片含む
5 N5/(灰)砂質土 粘土を少量含む
土坑892
1 N5/(灰)粘土 10YR(黄褐)シルト混 わずかに砂含む
X=-246.582
Y=-62.176
X=-246.577
Y=-62.188
N
B
B′
A
A′
L=5.00m B′
L=5.00m A′
土坑811
1 N6/(灰)細砂 10cm大の礫多く含む
2 N5/(灰)細砂に10YR5/(黄褐)砂質シルト混
3 N6/(灰)細砂
4 N5/(灰)細砂
土坑726
1 N5/(灰)細砂に10YR6/6(明黄褐)のシルトブロック含む
2 N5/(灰)細砂に10YR6/6(明黄褐)が斑点状に入る
3 N5/(灰)細砂 炭・土器片微量に含む
4 N5/(灰)細砂 石を含む
5 N5/(灰)に10YR5/6(明黄褐)が入る シルト
6 N5/(灰)に10YR5/6(明黄褐)のシルトブロック入る
7 10YR5/6(明黄褐)シルトとN5/(灰)細砂の混層
8 N5/(灰)細砂に10YR5/6(明黄褐)シルトブロック
9 2.5Y5/6(明黄褐)シルト 炭小片微量に含む
10 N5/(灰)粘土
土坑605
1 5Y5/1(灰)細砂に7.5YR5/6(明褐)が2～3mmの粒状に多く入る 土器・炭微量に含む
2 N5/(灰)細砂に7.5YR5/6(明褐)が2～3mmの粒状に多く入る 土器多く入る
3 5Y5/1(灰)細砂に7.5YR5/6(明褐)が2～3mmの粒状に多く入る
4 N5/1(灰)細砂に10YR5/6(明黄褐)シルト混
土坑653
1 2.5Y5/1(黄灰)粗砂に10YR6/6(明黄褐)シルト混 10YR3/3(黒褐)が5mm大の粒が入る
2 2.5Y5/1(黄灰)粗砂に10YR6/6(明黄褐)シルト混 砂の割合が少ない
3 N5/(灰)粗砂に2の土がブロック上に入る 10YR3/3(黒褐)が粒状に入る
4 2.5Y5/1(黄灰)粗砂に10YR6/6(明黄褐)シルト混
5 2.5Y5/6(明黄褐)シルトに10YR3/3(黒褐)が2～3mm大の粒状に入る
6 N5/(灰)粘土
7 N5/(灰)粘土に10YR5/6(明黄褐)シルト混
8 10YR6/6(明黄褐)シルトにN5/(灰)砂がブロック状に入る 土器小片 微量に含む
9 N5/(灰)粘土
土坑611
1 N5/(灰)粗砂 礫多く含む
2 N5/(灰)粗砂に10YR4/4(褐)粗砂混 礫多い
3 N5/(灰)粗砂 わずかに炭・土器小片含む
土坑793
1 N7/(灰白)細砂に10YR7/8(黄橙)のシルトブロック含む 土器・炭微量に含む
土坑428
1 N6/(灰)砂質土
土坑622
1 2.5Y5/1(灰)粗砂に10YR5/6(明黄褐)シルト混
2 N5/(灰)粗砂 炭・土器小片微量に含む
3 N5/(灰)と10YR5/6(明黄褐)混層シルト 炭・土器・板材含む
4 N5/(灰)シルトに10YR5/6(黄褐)粗砂含む 炭微量に含む
5 10YR5/6(明黄褐)シルト N5/(灰)が帯状に入る
6 N5/(灰)シルトに10YR5/6(黄褐)混
0 2m

存の深さは５～８cmと非常に浅い。両肩の落ちは緩やかで、底は凸凹である。ここからは1388の大窯２の瀬戸美濃天目茶碗が出土している。時期的には近世の土坑である。

土坑811（第104・109、PL.69）

井戸815の南側で検出した。平面形状はほぼ円形である。規模は直径約1.1～1.2mを測る。残存の深さは約25cmを測る。埋土の堆積は両側に幅12cm程度の細砂層が認められる。ここからは瀬戸美濃天目茶碗（1389）、唐津皿（1390）が出土した。



第105図　Ⅳ区 13-④区 土坑825 出土遺物実測図

C敷地の遺構

A、Bの敷地と同様に居住域の主となる遺構は掘立柱建物、井戸、土坑、溝状遺構などであった。この敷地の約半部の南西部分も調査区外のため全容は不明である。敷地の東側では南北方向に現有の水路が走り、これより東の堀６ｂとの間には遺構は皆無であった。また、この域には中世包含層の第３・４は確認されず、第５-６層については調査区南端で確認し、第７層上面からは遺構（弥生・古墳時代）を確認している（PL.72）。

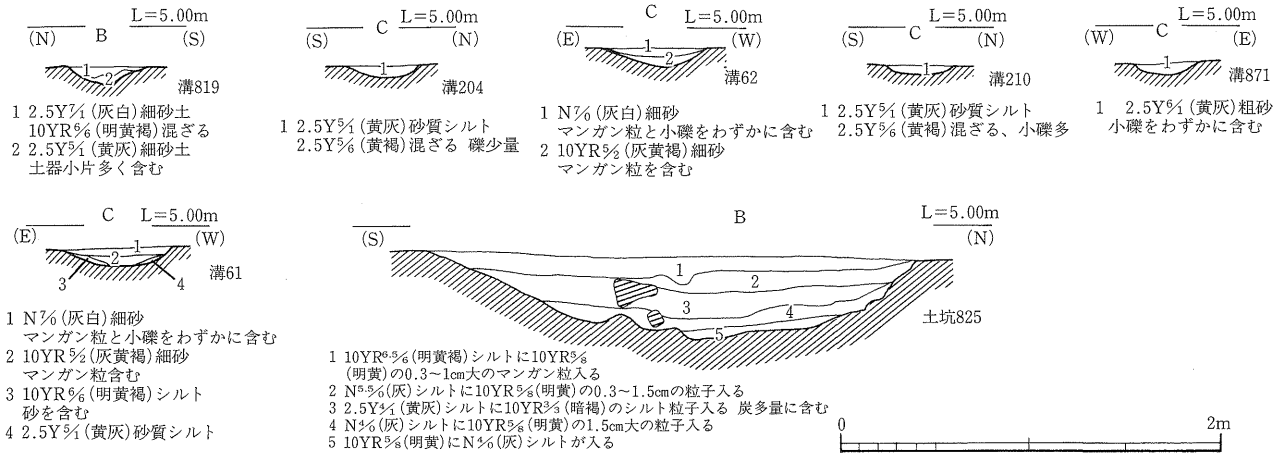
掘立柱建物

建物７（第107図）

敷地の北西隅で検出した東西棟の建物である。規模は桁行２間、梁行２間の建物である。この建物は桁行、梁行ともに間尺が違い、中央の束柱がない。

建物８（第107図）

敷地の中央部で検出した。規模は桁行２間、梁行２間の東西棟の建物である。建物を建てるには若



第106図　Ⅳ区 13-④区 溝61・62・204・210・819・871、土坑825 土層図

干苦しい柱穴列である。

建物9（第107図、PL.68）

敷地の南側、堀6の北側に接すると考えられる場所で検出した。規模は桁行3間以上、梁行3間の南北棟の建物である。この建物内において柱穴を多数検出したが、組合う束柱は検出できなかった。柱穴137の断面土層には、柱当りと思われる痕跡が確認されたが、これ以外のものにはその痕跡は見受けられなかった。北外郭部において今回検出した建物の中では最も大きい規模となる。

建物12

敷地の北側、東西方向の通路と溝40の間で検出した、柵状遺構と考えられる東西方向の柱穴列ある。また、柱穴450・452などの深さが非常に浅いところから、これより以西は削平されている可能性が十分考えられる。

井戸219（第107図、PL.70）

敷地の中央東寄りの箇所で検出した石積み井戸である。埋土の堀削は積みの内径が小さく作業が困難なことと危険を伴うため、途中で中止した。

掘方の形状は長軸1.75m、短軸1.55mの楕円形を呈する。掘方の埋土は検出面から60cm下がった地点までしか確認していない。石積みは検出面から約30cm下がったところから残存していた。石積みの内径は検出面では約70cm、検出面から1.5m下で85cmを測る。このことから、断面の形状は袋状を呈するかと思われる。石積み内の埋土は検出面から石積みが残存している地点までが灰色の砂質シルトに径1cm～拳大の礫が混ざる。この地点から掘り下げた地点までは、灰色シルトに拳大～人頭大の礫が混ざる層である。このような堆積状況から判断して意図的に廃棄したものであろう。

溝61（第106図）

建物8・9の西側で検出した南北方向の溝状遺構である。南は調査区外に延びているため全容は不明である。検出できた長さは約12.5mを測り、幅は約60cm、残存の深さは約10cmを測る。両肩は緩やかな傾斜で、断面の形状は船底状を呈する。検出した建物遺構とは合致しないが、雨落ち溝の可能性も考えられる。

溝62（第106図）

溝61と約2.5m西側に隔てて検出した南北方向の溝状遺構である。この遺構もまた南は不明で、検出長8.2m以上を測る。幅は約50cm、残存の深さは約10cmを測る。底は船底状を呈する。

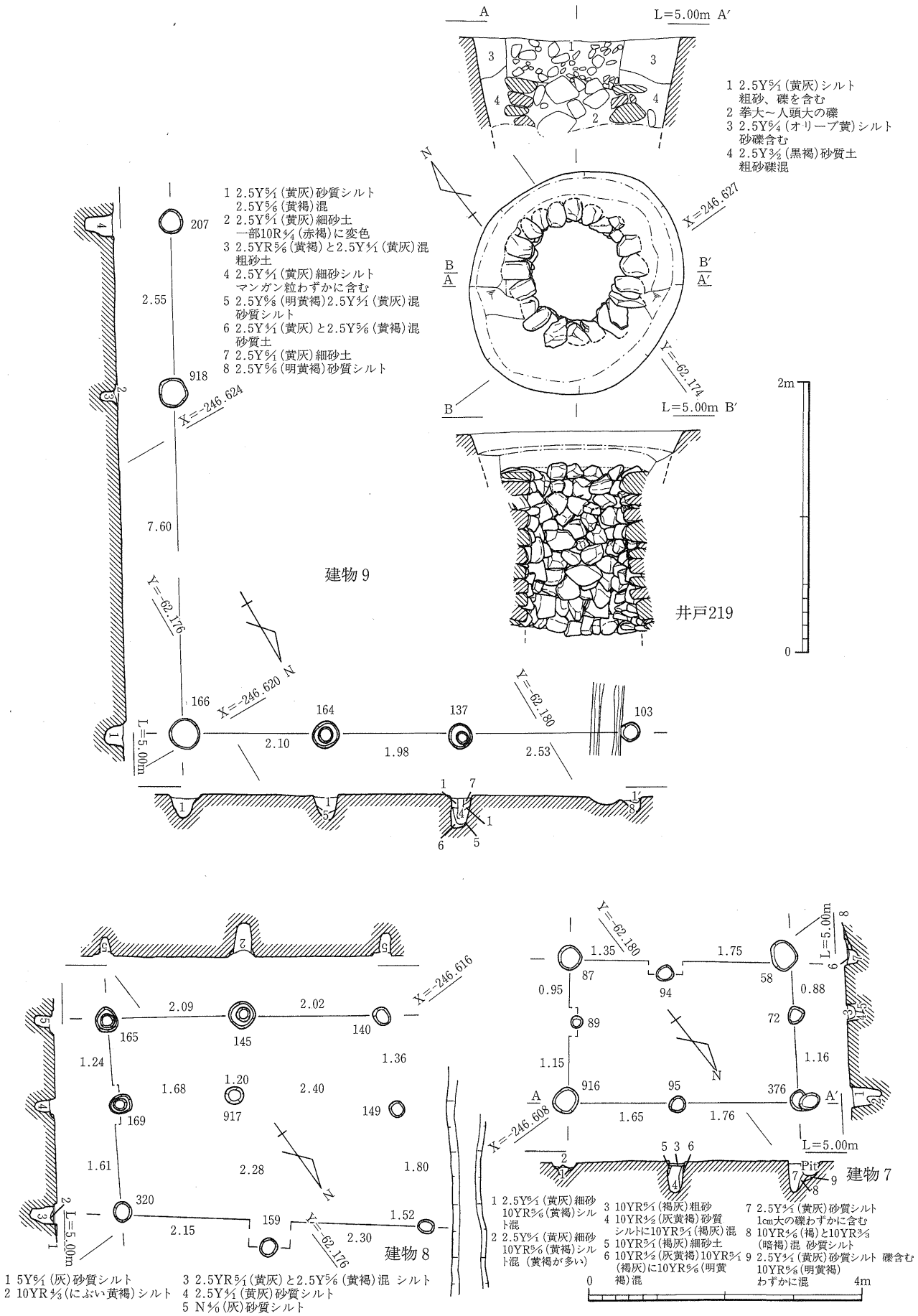
溝204（第106図）

建物9の南端で検出した東西方向の溝状遺構である。この溝の西側は調査区外のため不明である。検出できた長さは約3.6m、幅は約40cmを測る。残存の深さは5cmと浅い。

溝210（第106図）

溝204の約2.5m南で検出した。この溝も溝204と同じく西側は不明である。検出長約2.3mを測り、幅は40cmを測る。残存の深さは約5cmである。

上記の4条の溝状遺構は東西方向（溝204・210）、南北方向（溝61・62）がほぼ直角を呈し、建物の



第107図　Ⅳ区 13-④区 掘立柱建物7～9、井戸219 実測図

雨落ち溝となる可能性が考えられる。

溝871（第106図）

敷地の南端で検出した南北方向の溝状遺構である。この溝204、溝210と同様な雨落ち溝と考えられる。検出できた長さは2.5mを測り、南の調査区外に延びる。断面の形状と埋土は溝204・210と同様である。

土坑254（第109図）

敷地の中央部で検出した。平面形状は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.2mを測る。残存の深さは約3～5cmを測る。

土坑1084（第109図）

敷地の南側で検出した。規模は約1.3m×1.2mのほぼ円形である。残存の深さは約50cmを測る。埋土の中層には5～20cm大の礫がはいる。掘り込みの状況は西側は緩やかに落ちるが、東側はほぼ垂直に落ちる。

土坑1085（第109図）

土坑1084の南で検出した。これの西は調査区外のため不明である。検出し得た形状から判断すると楕円形を呈する。長軸は不明、短軸約1.7mを測る。残存の深さは約50cmを測る。掘り込みの状況は二段落ちになり、上方は緩やかに落ち込み、下方は垂直に落ち込む。

その他の土坑出土遺物（第109図、PL.108）

遺構の断面土層図を掲載していない土坑の出土遺物を以下に記す。

土坑50からは土師器皿Ｄ3タイプ（1375）、土坑53からは土師器皿Ａタイプ（1376）、土坑379からは土師器皿Ｄ2タイプ（1377）、土坑601からは土師器皿Ｆ1タイプ（1381）、土坑741からは土師器皿Ｅタイプ（1385）、土坑755からは土師器皿Ｄ2イプ（1386）、土坑757からは土師器皿Ａタイプ（1387）、土坑821からは土師器皿Ａタイプ（1391）、土坑826からは土師器皿Ｂタイプ（1392）と備前焼擂鉢（1393）、土坑824からは土師器皿Ｄ2タイプ（1394）、土師器皿Ｂタイプ（1395・1396）、土坑895からは土師器皿Ａタイプ（1397）が出土している。このように中世と考えられる土坑からの出土遺物は土師器皿が殆どであった。土坑818からは唐津焼碗（1398）と漆椀（1399）が出土している。

11-①Ｓ区 近世井戸（木枠井戸6・7）出土の遺物（第110図、PL.109）

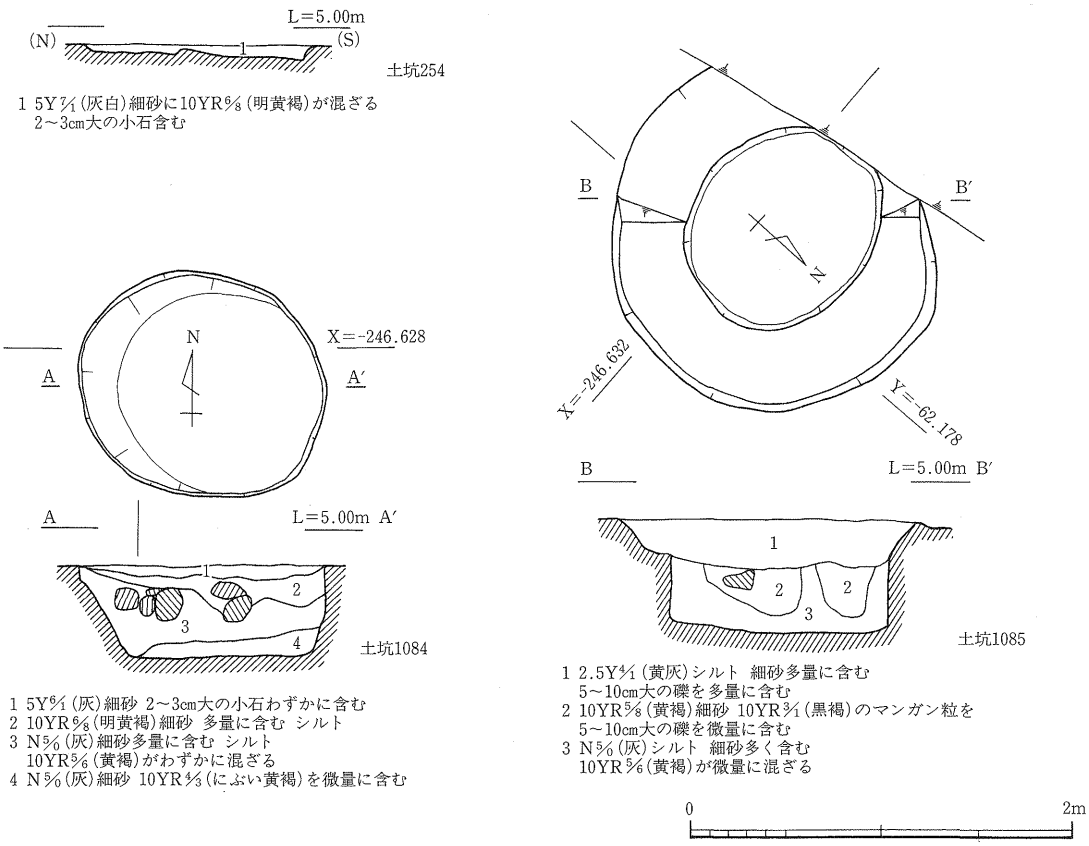
木枠井戸6は北辺の外堀1の南肩の上から検出した。ここからの出土遺物には肥前系磁器の広東碗（1410）、唐津皿（1411）、時期的には中世の範疇に入る備前焼擂鉢（1412・1413）などがある。

同じく北辺の外堀1の北東コーナー部分で検出した、木枠井戸7からは肥前系磁器のくらわんか茶碗（1414）、溶解炉の溜の破片（1415）が出土している。

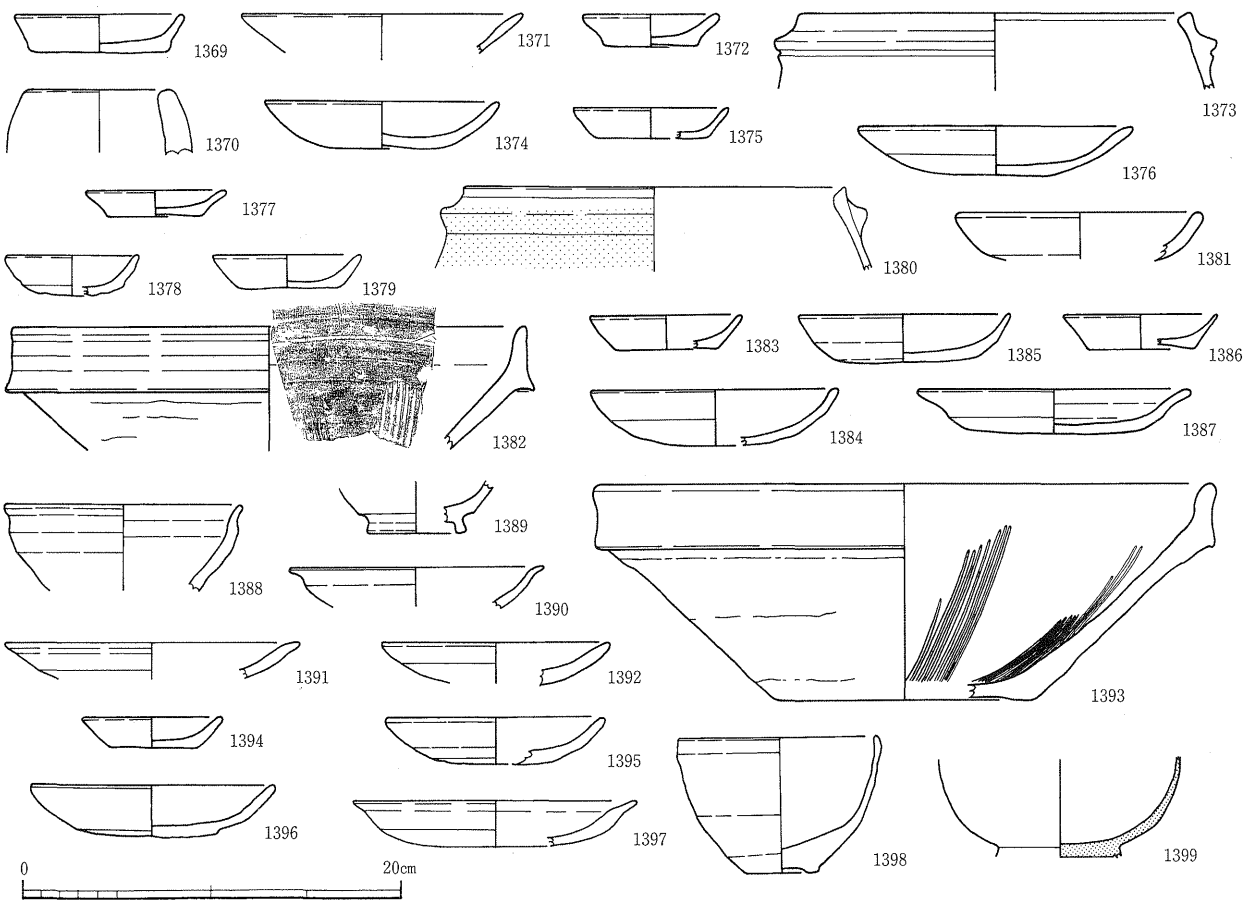
13-④区 近世井戸（井戸11・29）出土の遺物（第110図、PL.70・109）

遺構11は、西辺の外堀1の埋土上から検出した素掘り井戸である。ここからの出土遺物には、肥前系磁器の広東碗（1400）とくらわんか茶碗（1401）、近世初頭の備前焼擂鉢（1402）、中世の備前焼壺（1403）がある。

井戸29も北辺の外堀1の北西コーナーで検出した素掘り井戸である。ここからは片口になると考えられる唐津焼鉢（1404）、釉剥ぎ部分に重ね焼痕の遺こる伊万里皿（1405）、瀬戸美濃天目茶碗と底部



第108図　Ⅳ区 13-④区 土坑254・1084・1085 実測図



1369・1370：土坑19、1371：土坑20、1372：1373：土坑34、1374：土坑38、1375：土坑50、1376：土坑53、1377：土坑379、1378・1379：土坑428、1380：土坑435、1381：土坑601、1382：土坑605、1383・1384：土坑609、1385：土坑741、1386：土坑755、1387：土坑757、1388：土坑793、1389・1390：土坑811、1391：土坑821、1392・1393：土坑826、1394～1396：土坑824、1397：土坑895、1398・1399：土坑818

第109図　Ⅳ区 13-④区 各土坑出土遺物実測図

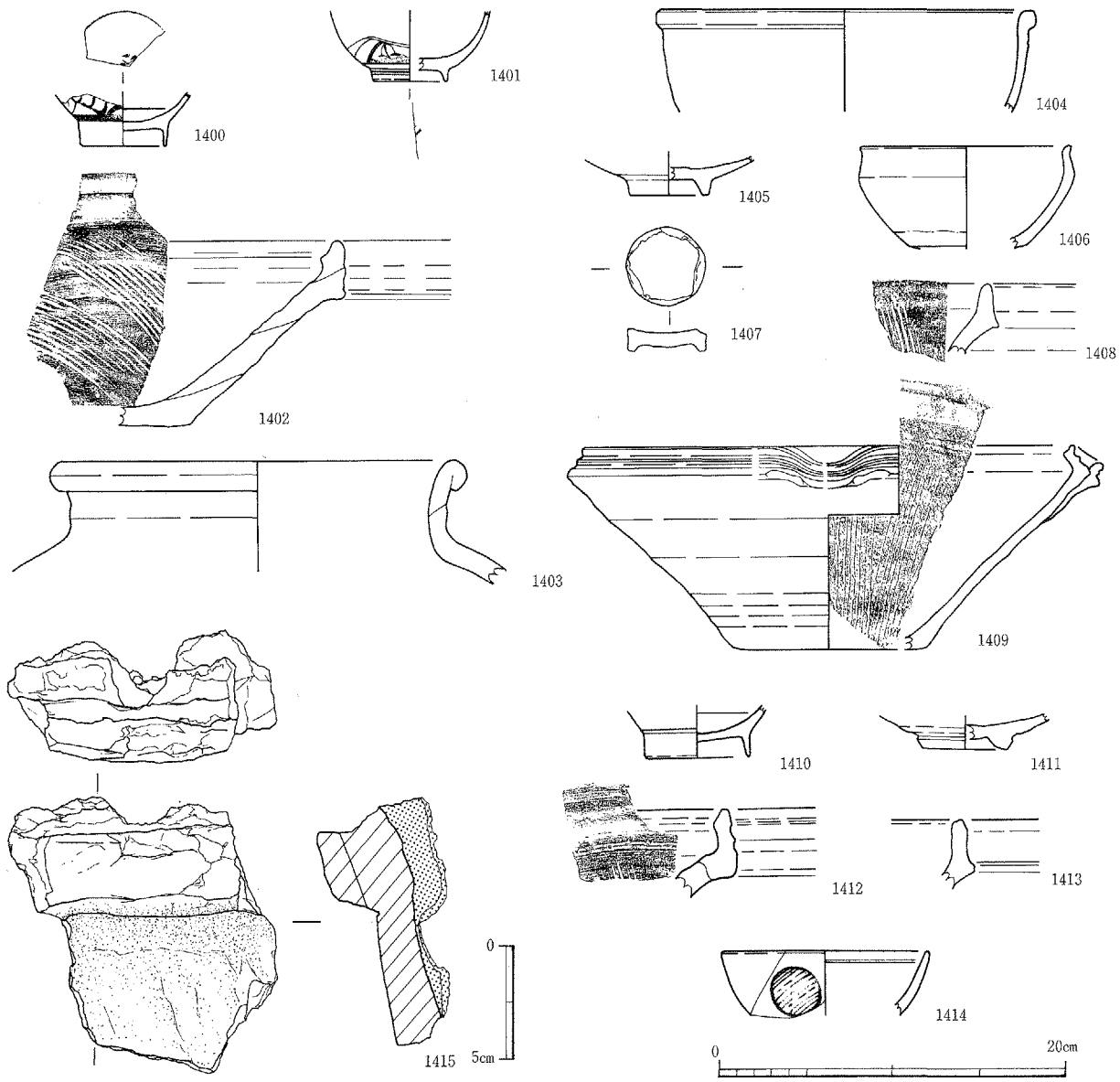
をメンコ状にしたもの（1406・1407）、中世の備前焼擂鉢（1408）、信楽焼であろうか、長石粒を含んだ擂鉢（1409）が出土した。櫛目は一単位7本で非常に細く浅い。

井戸17（溶解炉転用井戸）（第111図、PL.71）

井戸17は溶解炉を井筒として転用した珍しい井戸である。調査地のほぼ中央北、すなわち東西方向の外堀の内側で検出した。詳細には高田土居城の土塁が築かれていたと推測される地点である。したがって、時期的には高田土居城の廃絶後と考えられる。

〔形状と構造〕

検出した井戸の掘方は検出面で直径約1.8mの円形で、底は約0.85mを測る。断面の形状はいわゆるメガホン形を呈する。残存の深さは約2.5mを測る。埋土は検出面から50cmがシルト層でそれより以下は粘土質である。この粘土は保水力を高めるためのものであろう。



1400～1403：13-④区 井戸11、1404～1409：13-④区 井戸29、1410～1413：11-①S区 木枠井戸6、1414・1415：11-①S区 木枠井戸7

第110図　IV区 11-①S区・13-④区 近世井戸出土遺物実測図

井筒は溶解炉の炉体を基本的には三段に積み上げ、上段と中段の間にもう一個体を嚙まし、強度と漏れ防止を考慮して構築されていた。一個体の炉体の規模は各々に多少のバラツキはあるものの直径約80～85cm、高さ約70～80cmを測る円筒状のもので、やや中膨らみである。ただし上段の炉体については上部が欠損していたため、その体高は不明である。厚みは４～６cmを測るが、このうち約0.5～２cmは珪素が高熱により噴き出し、ガラス質となっている。最下段の炉体の外周には上下二段に殆ど朽ちてはいたが幅２～３cm、厚み約0.5cmの竹製タガで補強されていた。炉体は全体に著しくひび割れが入り非常に脆く、取り上げに難をきたした。

また、底には縦35cm、横80cm、厚み２cmの板材に対角に切り込みを入れ、四角に組み合わせ井戸底としていた。その上に長さ40～60cm、直径３～５cmの木の棒を板材に対し斜めに渡し、その上に三段の炉体を設置している。なお、炉体間の隙間は外からの粘土（埋土）で充塡し、湧水の確保をしていたものと考えられる。

〔出土遺物〕

この井戸から出土した土器はわずか２点（Ａ・Ｂ）でいずれも井筒内から出土した。Ａは瀬戸美濃の天目茶碗である。釉の発色は口縁部内外面が暗赤褐色で、体部は黒褐色に黒ずむ。時期的には大窯４期で16世紀末～17世紀初めと考えられる。出土状況は検出面から約15cm下がった地点の、大きさ５～15cmの礫が混在する暗灰黄色粘質土より出土した。この状況から最上層であるこの天目茶碗出土層は、明らかに廃絶時に人為的に埋められたものと推察できる。Ｂは備前焼の擂鉢である。時期は15世紀末と考えられ、体部上端に重ね焼きの痕跡がある。出土の状況は検出面から約1.5m下の灰色の小砂利混じりのシルト層からで湧水が認められる地点であった。以上からこの井戸の廃絶時期は17世紀初め以降と考えられる。

〔本来の溶解炉の構造と仕組〕[註1]（第112図）

溶解炉は甑炉と呼ばれ金属溶解を目的とするものである。これは基本的には用途別の三段を積み重ねて使用する。それぞれの呼称は上段から上甑、中甑、溜（る）である。上甑は鋳鉄製で上の口から地金や燃料を投入する。中甑は上甑から落下してきた地金を溶解する。この時に必要不可欠なものは温度を上げるための送風施設であり、よって中甑には必ず輪の羽口を接続する孔が穿たれている。溶解炉と輪（この場合は踏み輪）の間には火避けのための壁が構築され、この壁を通して風樋でつながっている。溜は鋳鉄製で内側に耐火粘土を塗りこめ、溶けた湯を溜めるところで正面には取出し口がついている。

〔中甑の観察〕（第113図、PL.110）

炉を４個体検出したうちで最も遺存度の良好なものは、井戸の二段目に使用されていたもの（炉体Ｃ）であった。中甑がこのような良好な状態で出土することは稀であるため、専門機関に依頼して保存処理をおこなった。ただし、口縁部は一部しか遺存していなかったためそれを基に全周した。また、内面は体部下半に付着物がありこの状況がよく解かるように意図的に据付を逆にした。（写真８）中甑は堺環濠都市遺などでも出土している。

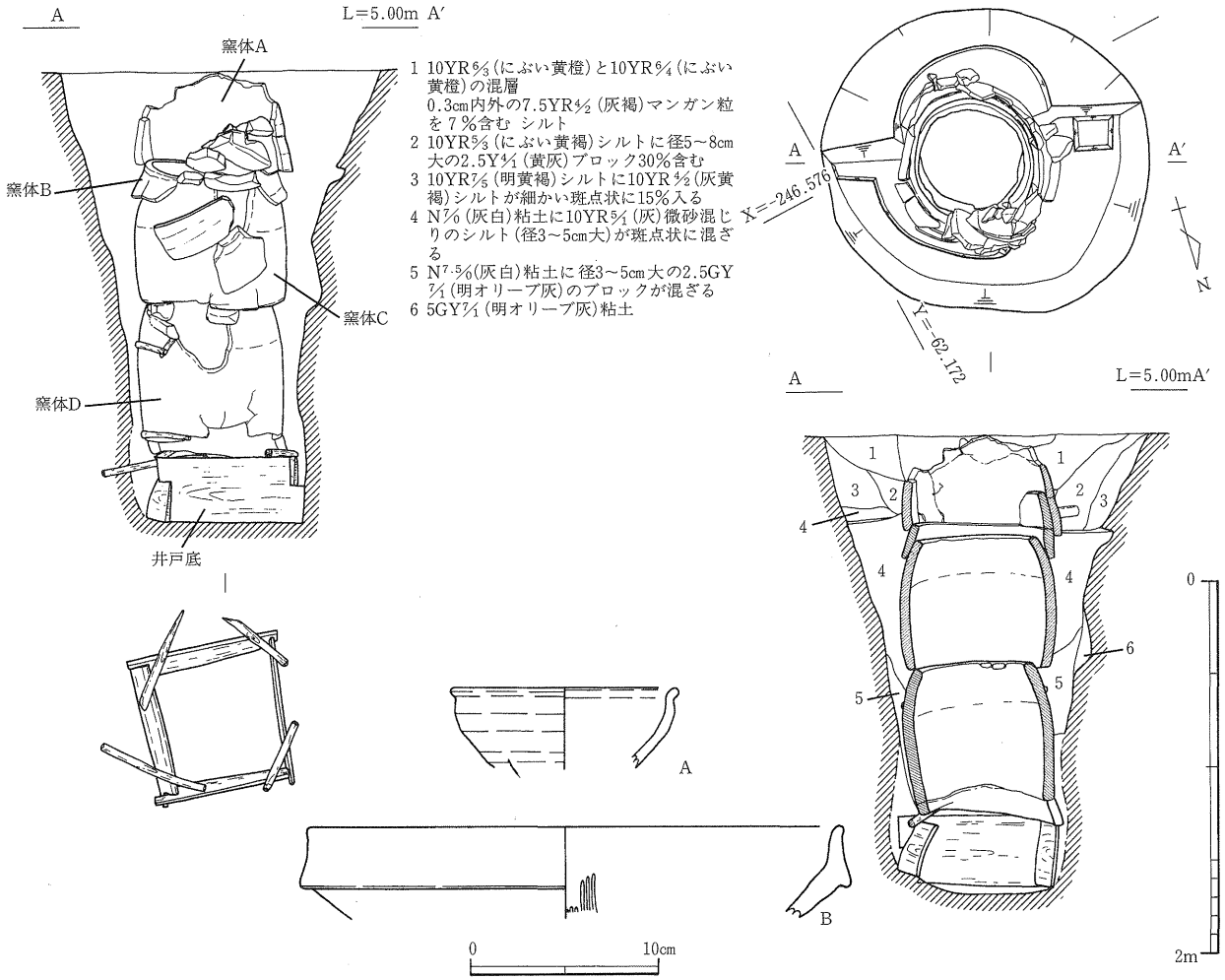
規模は体高71cm、口径78cm、基底部径66cm、胴部の最大径84cmを測る。よって、形状は中膨らみを

呈する。炉壁の厚みは3～4cmを測る。

器壁表面は剝離と亀裂が著しい。器壁の外面色調は5YR8/3（淡橙）で、断面は外から内に10YR7/7（明黄褐）→2.5YR7/4（淡赤橙）→10Y4/4（赤褐）とグラデーションをなす。最も内側にはガラス質状のものと少量のスラグがこびり付いている。また、このガラス質に混ざって燃料の炭も付着しているのが認められる。輔の羽口の装着孔は中央やや下にあり、これの下部は欠損している。孔の大きさは縦約28cm、横約17cmの楕円形である。また、この部分の内側の周囲には幅4cmの盛り上がりがあり付着物は無い。この状況から羽口を固定していた痕跡と考えられる。羽口の固定は当然外側からも行っていなければならないのであるが、この場合その痕跡は遺存状況が悪いため確認できない。

〔溶解炉検出の背景〕

今回の発掘調査において、前述の井筒として使用された溶解炉が単体で検出されたことの意味合いを考えねばならない。この井戸17に使用された炉は欠けているものもあるが、少なくとも4個体出土した。この4個体は溶解炉の仕組み上いずれも中甑部と考えざるをえない。したがって最低4基以上の溶解炉が稼動していた作業場が周囲に存在していたと考えられる。増してや完形品に近いものが出



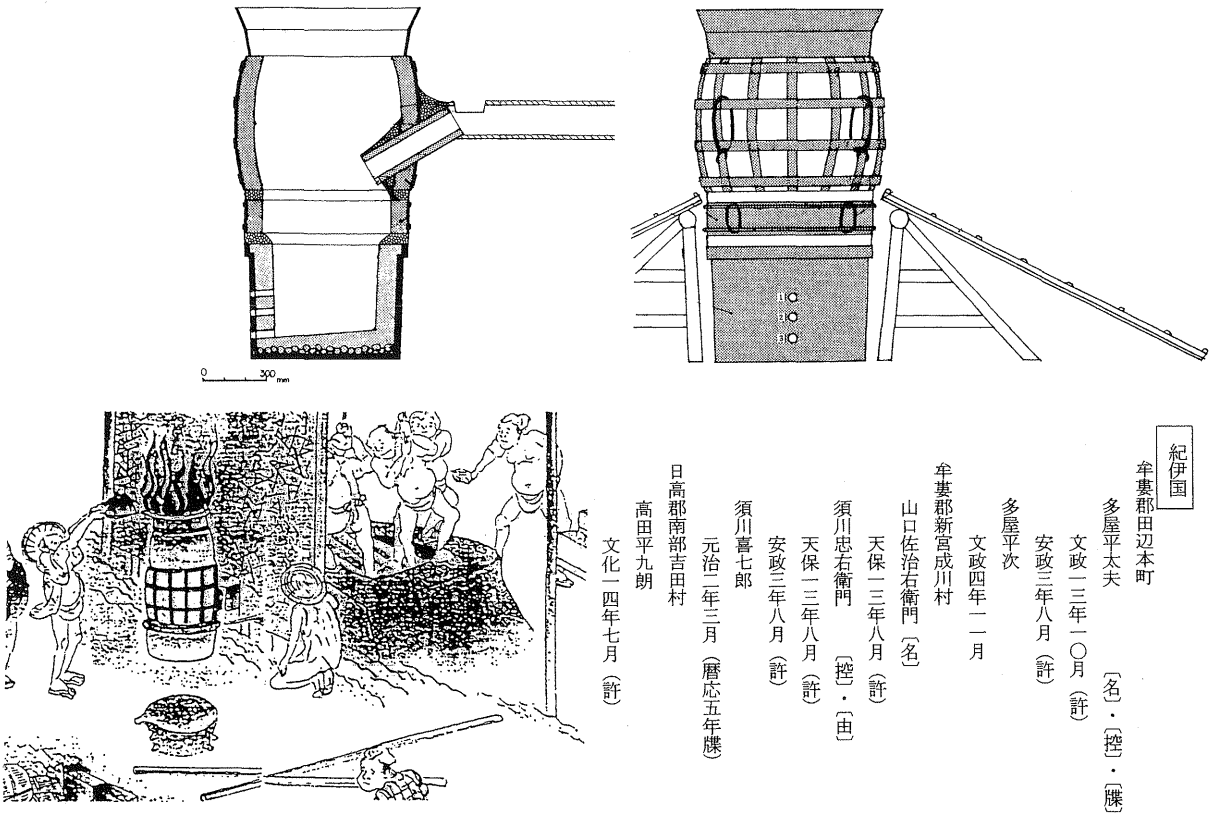
第111図　IV区 13-④区 井戸17（溶解炉転用井戸）および出土遺物実測図

土したということから、廃棄後まもなく井筒に転用されたと考えるのが自然ではないだろうか。この場合、作業場としての廃棄なのか、中甑だけの造り替えのための廃棄なのか不明である。

さて、それではこれらの溶解炉は元々何処で稼動し、何を作っていたかが問題となる。井戸17出土地点から直線距離で南へ約110mの同じ高田土居城跡の内郭部の調査において、鋳造施設と考えられる遺構を検出している。ここでは溶解炉を据付けたと思われる円形の赤く焼けた床面や、鋳造関係の遺物が出土している。この鋳造関係遺物には三叉状土製品、鍋や農耕具などと思われる鋳型がある。おそらく今回検出の炉はここから持ち運ばれたものであろう。また、さらにこれより南方約300mに所在する大塚遺跡でも炉体の破片が出土している。

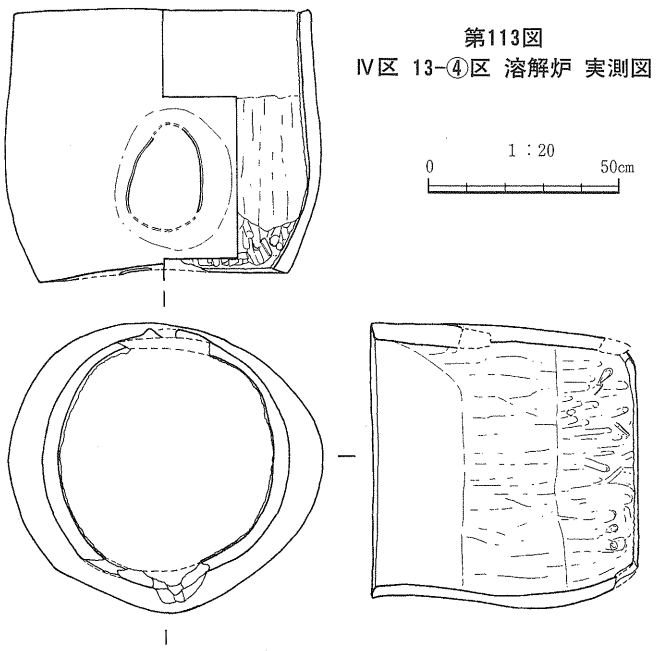
あと、若干ではあるが文献資料からの検証として、全国の鋳物師を支配していた真継家が作成した『鋳物師人名録に、文化十四年（1817）七月に日高郡南部吉田村 高田平九郎の名前がみえる。吉田村は古くは正応四年（1291）の『高野山文書』に見ることができ、その後、江戸期に入っても度々文献に表れる。東吉田村と改称されたのは明治十二年（1879）であり、まさに本調査地の周辺である。

さらに上述の記載を裏付ける資料として南部町在住の高田平九郎の子孫の家系図と文書がある。これは江戸時代後期に書き写されたと考えられ、天福元年(1233)まで遡ることができる。これによると南北朝の暦応五年（1342）に鋳物師の証である御綸旨を所持していたが、その後焼失し第十九代平九郎の代の文化十四年に御綸旨、鋳物師の御座法、や定書を書き改めたと記されている。この天福元年、暦応五年は真継家が鋳物師支配に関わる時期よりかなり早いため信憑性に欠けるが、文化十四年は先の『鋳物師人名録』と合致する



第112図　Ⅳ区 13-④区 溶解炉模式図（「倉吉の鋳物師」から転載）

ことから鋳物師の存在を実証することのできる資料であると言えよう。故にこれら物的事実と文献資料から、その創業はいつの頃からかは明らかでないが真継家が衰退する幕末の頃までは操業していたと考えられる。



第113図
IV区 13-④区 溶解炉 実測図

最後に、鋳物の鋳造作業には多量の地金、燃料、粘土が必要とされる。このようなことから次のような問題点が浮かび上がる。第1番目に鋳物の原材料の銑鉄あるいは銅の入手経路がどこなのか、第2番目に鋳型を作るための粘土と砂を何処から入手したか、第3番目に溶解時の燃料とする炭の入手などである。

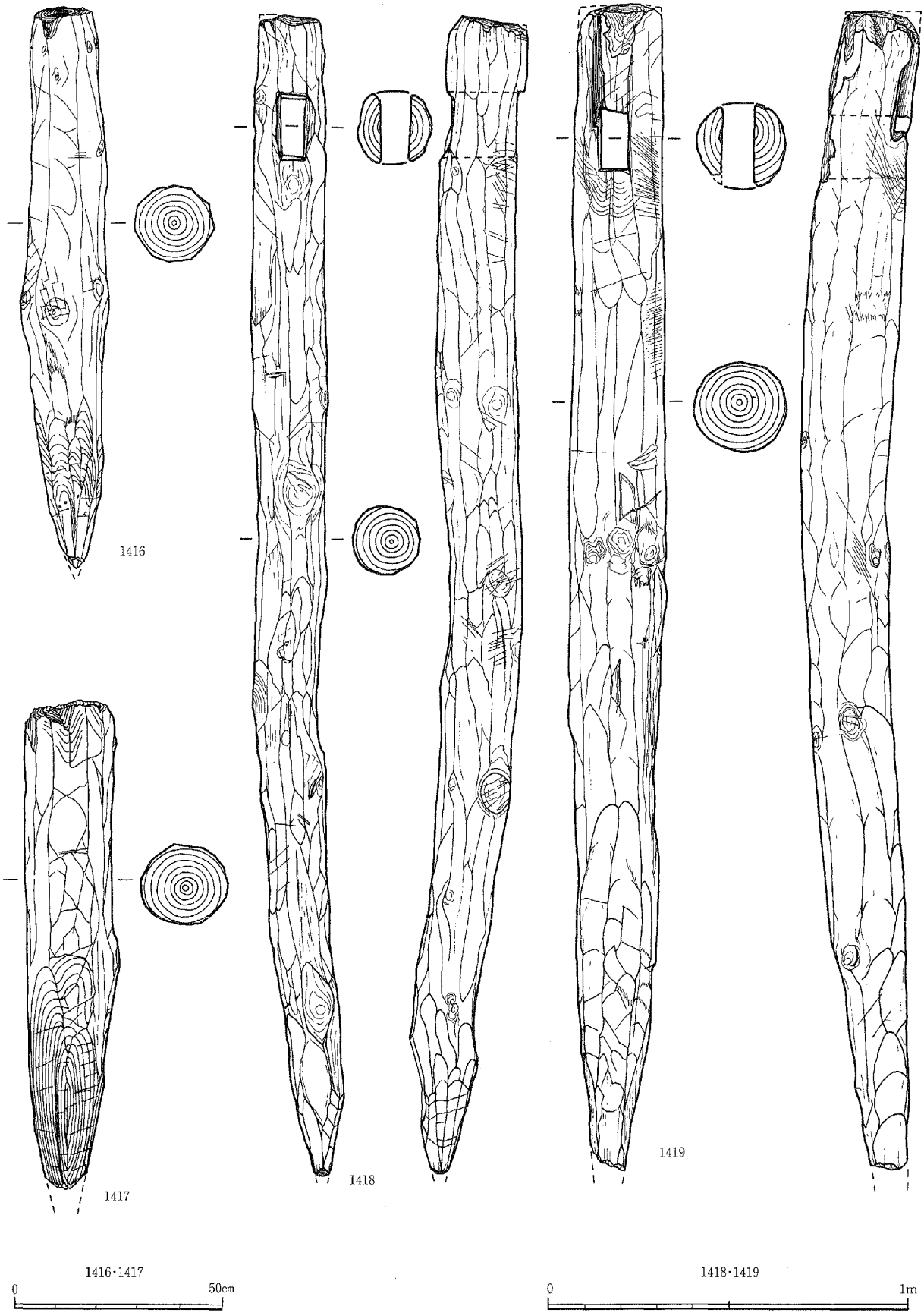
第1番の疑問点としては堺などの先進都市からの海路による入手が考えられるのではないだろうか。また、今回発掘した中甑に付着した金糞は鉄で、銅製品を製造していたかは不明である。第2番の疑問点には、先にも記したように高田土居城廃絶後、いつの時期かは判然としないが、この城の内郭域は鋳物鋳造所と化したことはまぎれも無い事実である。内郭部から約150～200m南方に『スナトリ』という小字名が見られる。この場所は鋳物鋳造関連の一つとして考えても良いのではなかろうか。第3番は地形的に山に囲まれているため燃料については恵まれていたと考えられる。

写真10 溶解炉(中甑)

註1.「倉吉の鋳物師」 倉吉市教育委員会 1986年発行
「国立歴史民俗博物館研究報告」 第46集 古代・中世の鋳鉄鋳物 五十川 伸矢 1992年発行
註2.「堺市埋蔵文化財調査概要報告 第65冊」 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告. 堺教育委員会 1997年発行
「堺市文化財調査報告第34集」 堺環濠都市遺跡発掘調査報告 堺市教育委員会 1990年発行
「堺市文化財調査報告第51集」 堺環濠都市遺跡発掘調査報告 堺市教育委員会 1990年発行
註3.「名古屋大学文学部 研究集ＬＶＶＶＶI」 1983発行

Ⅳ区出土の木器（第114～118図、PL.155～158）

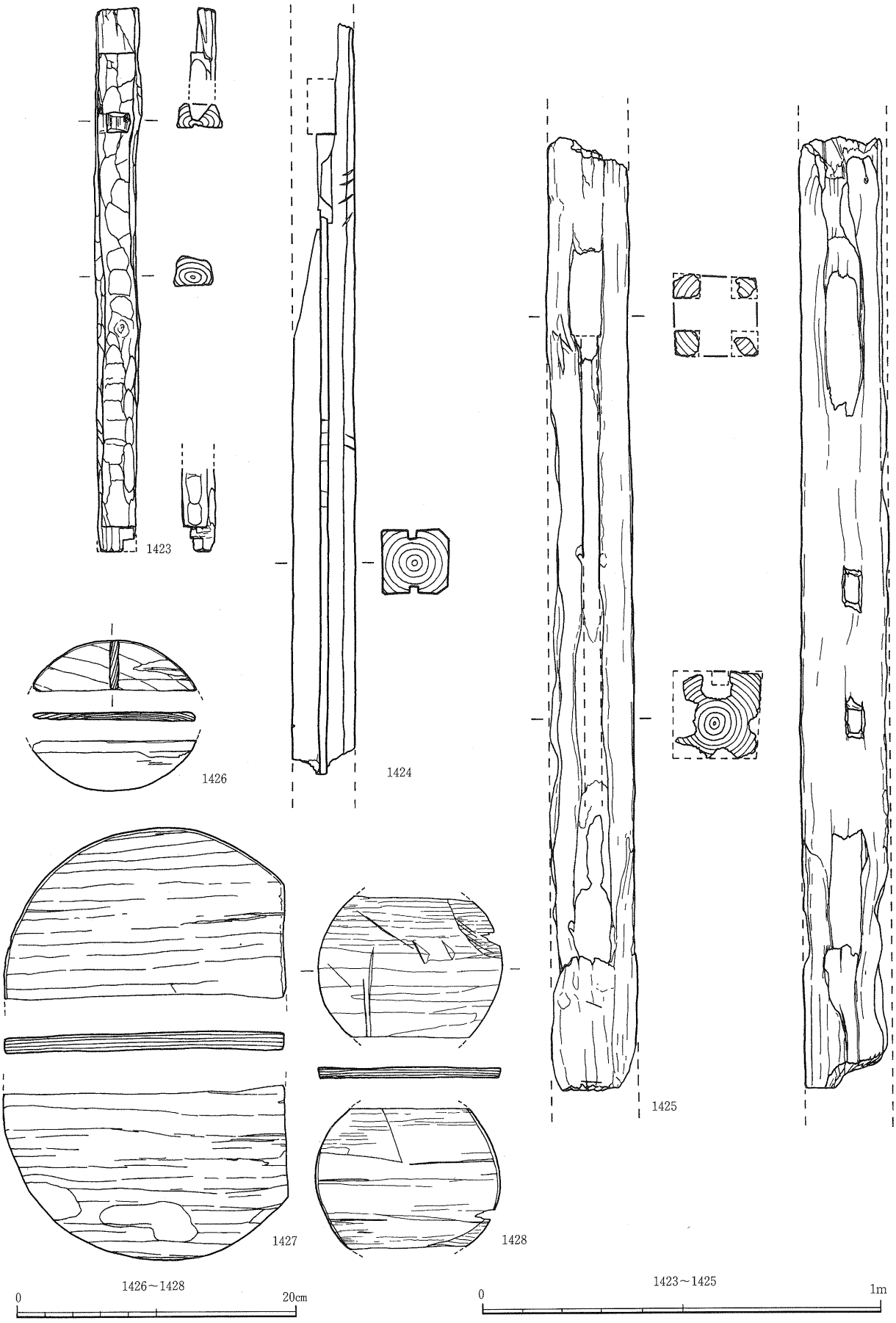
1416～1419は橋脚と考えられるものである。1416・1417は13-④区の東辺の外堀２・３連結部で検出した。これらは構築当時の原位置を保ったまま出土した６本の内の２本である。これらの樹種は松材である。先端は与岐のようなもので切断され、元々の長さは1418・1419と同様の長さが想定できる。したがって、上部の1.70～1.80mの長さを切断されていることとなる。橋脚全体の加工は表面を粗く削り、先端部分の60～80cmは杭状に尖らす。また、この材の枝の成長方向からすると、木の上方の部分を杭状に削っている。つまり、天地逆に材を使用し加工の効率化を図っているものと思われる。1418・1419は11-①Ｓ区の北辺の外堀１から出土したもので、双方ともに全長約3.20mを測る。上部から20～30cm下がった位置に梁を掛けるための７cm×16cmの長方形の貫穴を穿っている。加工は1416・1417と同様である。1420～1425は建築部材と考えられ、北辺の外堀１から出土した。1420～1422・1424は角柱で、片方あるいは両端が欠損している。これらいずれの柱材にも壁板をはめ込む溝が彫られている。この溝の幅は３cm内外、深さは２～３cmを測る。1420は一辺15.5cm、遺存長2.60mの角柱材で、先には重ホゾを造作し、その下方25cmの位置に長押の仕口のような切り込みをいれている。さらに、そこから下方17cmの位置には６cm×18cm大の貫穴を穿っている。構造的には重ホゾに舟肘木をのせ、その上に梁を架けるものか、あるいは直接梁を架けるものかは定かでない。1421・1422は一辺16.5cmの柱材である。遺存長は1421が2.68m、1422が2.90mを測る。双方ともに先端にホゾを造作し、1420と同じ位置にほぼ同様の大きさの貫穴を穿つ。1422の下方には対蹠的に貫穴の痕跡が見うけられ、この内法は約1.9mを測る。この柱(1421・1422)には折置に梁が架かる。また、1420と1421・1422には大きな違いがみられ、1420の壁板の溝はホゾの側面のツラに彫られているのに対して、1421・1422はホゾの正面のツラに彫られている。このことより建物における柱の役割の違いが推測できる。なお、若干ではあるが1420の方がやや細い。1423・1425も建築部材と考えられるものである。1423は全長1.40m、幅11.5cm、厚み6.5cmを測る。両端にはホゾを造作し、片方のホゾ先から30cmのところにホゾ穴を穿っている。表面には手斧痕が認められる。1425は遺存状態が悪い。遺存長2.40m、断面幅20～21cmのほぼ正方形の角材である。この材にも前述した1420～1422と同様に壁板をはめ込む溝が彫られている。両端には約７cm×20cmの貫穴が穿たれ、この内法は約1.40mであるため柱材とは考えがたい。1426～1431は曲げ物の底板である。1427の端は柾目に対し直交して切断されている。1432は用途不明の船形の加工木である。表面の加工は粗く、両端も尖らせ気味に粗く切断し、中を四角に抉っている。1433～1440は杭状に先を尖らせたものである。この内の1438～1440は前述した橋脚(1416～1419)と太さや加工方法が類似しているところから、橋脚の可能性が高いと考えられる。また、1440の尖端部の上方約60cmは細かい手斧痕が観察できる。1433・1434は先端から約60～70cm上方で５cm×12cmのホゾ穴を穿っている。これらも橋脚の一部と成りうるものであろうか。1441は折敷の底板の部分である。結束用の５mm程度の穴が対称位置に認められる。1442は導水管のコーナー部のジョイントである。管はおそらく竹製であろう。1443は曲げ物の底板である。1444・1445は隅柱型井戸の材で４本組みの内の２本である。1444の上部は欠損し、1445は完形である。双方ともに表面は粗く削られている。尖端部分は杭状



1416・1417：13-④区 外堀1、1418・1419：11-①S区 外堀1

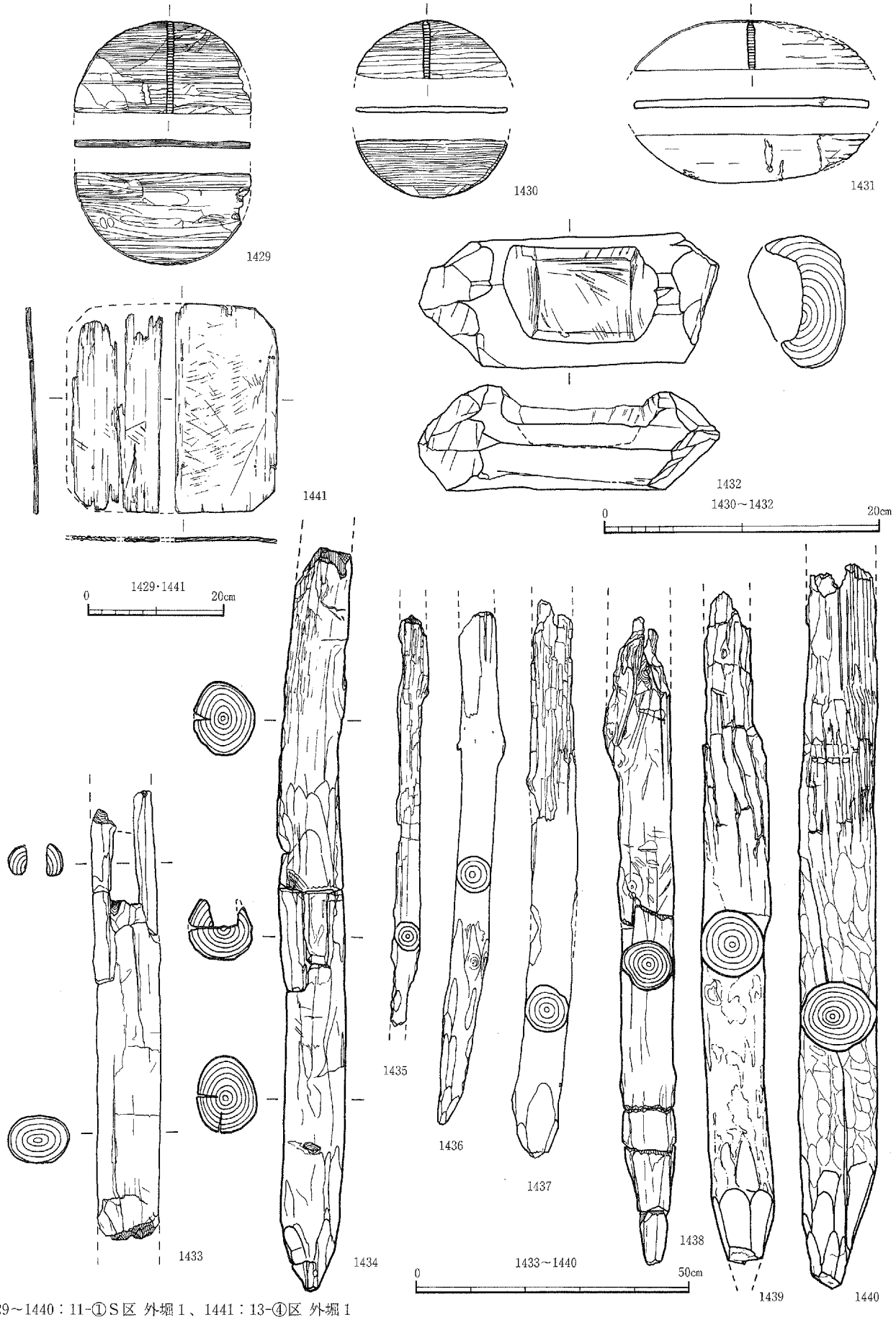
第114図　IV区 11-①S区 外堀1、13-④区 外堀1 出土木器実測図

第115図　Ⅳ区 11-①Ｓ区 外堀１ 出土木器実測図



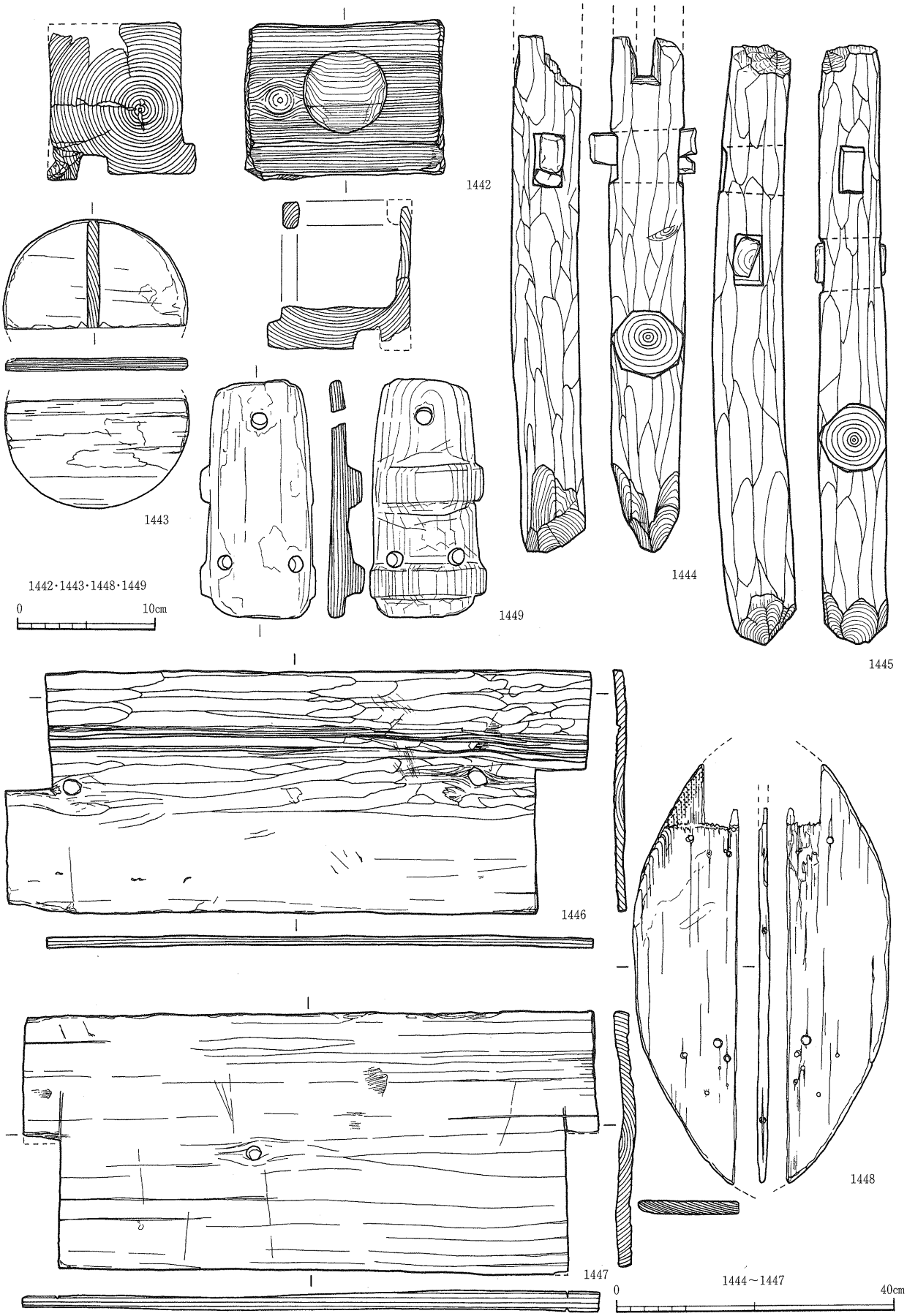
1423～1426：11-①5区 外堀1、1427・1428：13-⑦区 外堀2

第116図　IV区・V区 11-①S区・13-⑦区 遺構出土木器実測図



1429～1440：11-①S区 外堀1、1441：13-④区 外堀1

第117図　Ⅳ区 11-①S区・13-④区 外堀1 出土木器実測図



1442：13-④区 Pit393、1443：13-④区 建物1-Pit737、1444・1445：13-④区 井戸32、1446・1447：13-④区 井戸17、1448：13-④区 井戸815、1449：11-①S区 木枠井戸

第118図　IV区 11-①S区・13-④区 遺構出土木器実測図

に短く尖らしている。尖端から上方50～70cmの位置に、貫穴を上下に二箇所面互いに穿っている。この２本については貫材の断片が残っており、井桁状に貫を通していたものと思われる。1446・1447は溶解炉転用井戸の底に組まれていた板材である。４枚出土したうちの２枚で、両端に切込みを入れ枡状に組んでいた。表面を槍鉋で平滑に加工している。1448は曲げ物の底板と考えられ、両端には結束のための小さな穴が穿たれている。また、断面にも５㎜程度の穴が認められ、竹釘のようなもので結合した痕跡であろうか。この状況から液体などの容器ではないと考えられる。

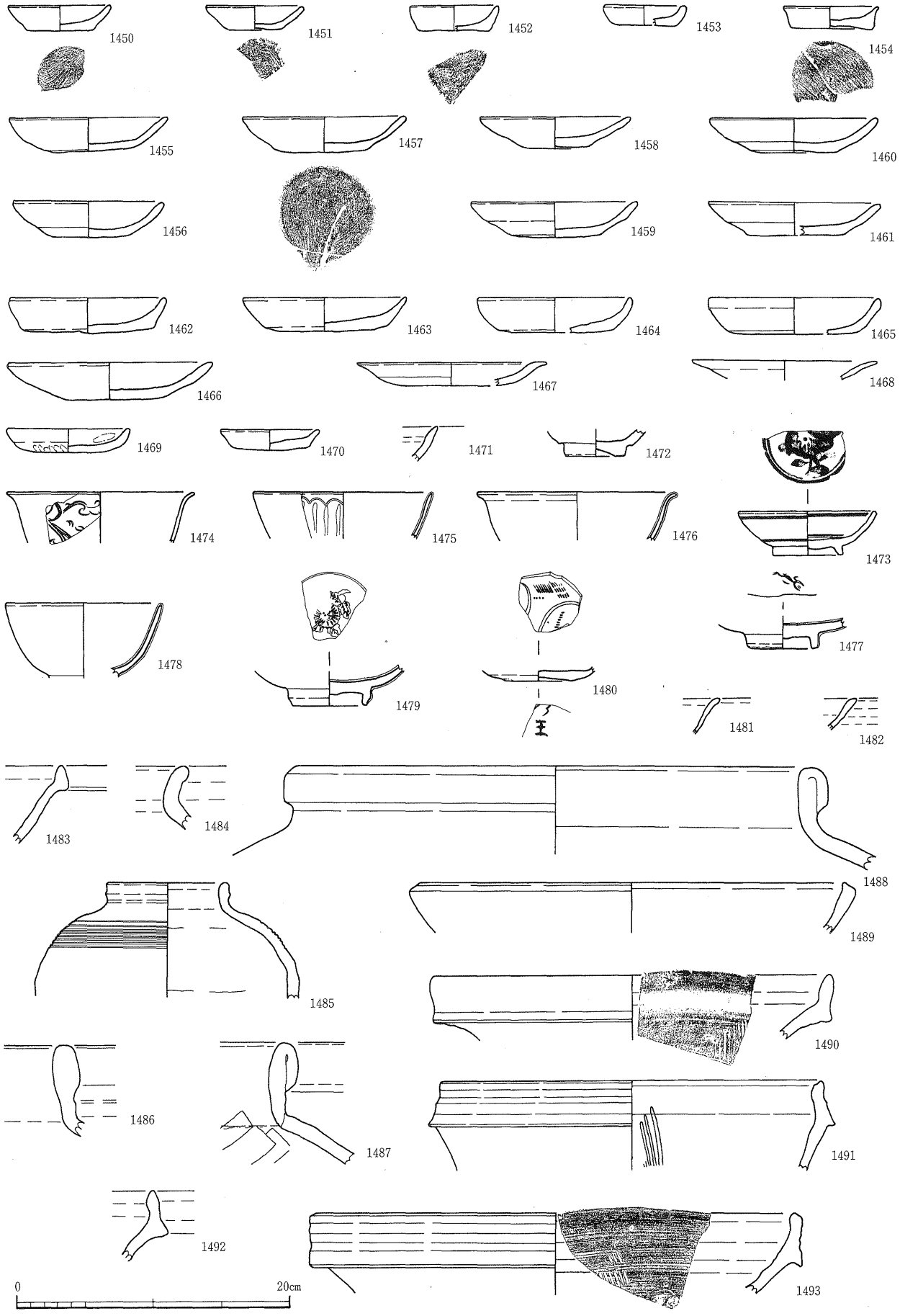
（３）Ⅳ区の包含層出土遺物

この地区は11-①Ｓ区と13-④区の高田土居城跡である。11-①Ｓ区の現状は水路であったため、中世包含層は一部であり出土遺物は細片のみであった。13-④区は高田土居城北外郭部にあたる。中世包含層は第３ａ層、第３ｂ層、第３ｃ層、第４層であったが、この最下層の包含層上（第４層）に高田土居城は築かれていることが判明していたため、この第4層の堀削には及ばなかった。第３層ａ・ｂ・ｃはいずれも全面に整然と堆積していたわけではなかった。

〔13-④区〕（第119・120図、PL.109・110）

第３ａ層出土の遺物

1450～1468は土師器皿である。1450・1451はＤ２タイプ、1452・1453はＦ２タイプ、1454はＤ３タイプである。1455～1461はＢタイプであるが、この内1460については底部外面が未調整である。1462・1463はＥタイプ、1464・1465はＦ１タイプで、1466・1467はＡタイプである。1468は京都系で器壁が薄く、色調は灰白色を呈する。1469・1470は瓦器皿である。1469は口縁部内外面を緩やかに撫で、斜め外方に立ち上がる。内面のミガキは不定方向に蜜に、外面底部は指押さえによる突出を粗くミガいている。1470は細片で器面が磨耗している。1471・1472は瀬戸美濃の天目茶碗である。1473～1480は中国製輸入陶磁器である。1473は漳州窯染付皿である。内外面には粗い貫入が入る。1474は白磁椀の端反りの口縁部である。器壁の厚みは２㎜と薄く上質な作りである。釉の発色は淡い青味を帯び、内外面には貫入が入る。1475～1479は青磁碗である。1475は線描き蓮弁文で、まだ剣頭を意識している。1476・1478は無文である。1476は厚みのある釉が掛かかり、発色は淡いグリーンである。1477・1479は底部である。双方ともに高台外面まで釉が掛かり畳付きと外低は無釉である。1479の見込みには花文が強くスタンプされている。1480の同安窯系青磁皿の外低には「□王」の文字が墨書されている。1481･1482は山茶碗の口縁部細片である。1483は東播系捏鉢で、口縁端部の拡張が上下に認められる。時期的には12世紀末から13世紀初頭と思われる。1484～1493は備前焼である。1484･1485は壺である。双方ともに口縁部は玉縁状を呈する。1485は玉縁の外側が欠損する。肩部に数条の直線文を施す。1486～1488は甕である。これらは中世３期ｂ～中世４期ａの範疇に納まると思われる。1487の肩部には灰が掛かる。1489の器形は不明確であるが、欠損部の内面のロクロ調整から判断すると、内側に曲がる兆しがある。浅鉢状になるものであろうか。1490・1493は擂鉢である。この内1490と1492は口縁端部を丸く収め、口縁帯の下方の張り出しは小さくシャープである。時期的には中世５期である。1491の口縁帯には未だ明確な多条の凹線は認められない。1493の口縁帯には多条の凹線が入るが、未だ口



第119図　IV区 13-④区 包含層第3層出土遺物実測図

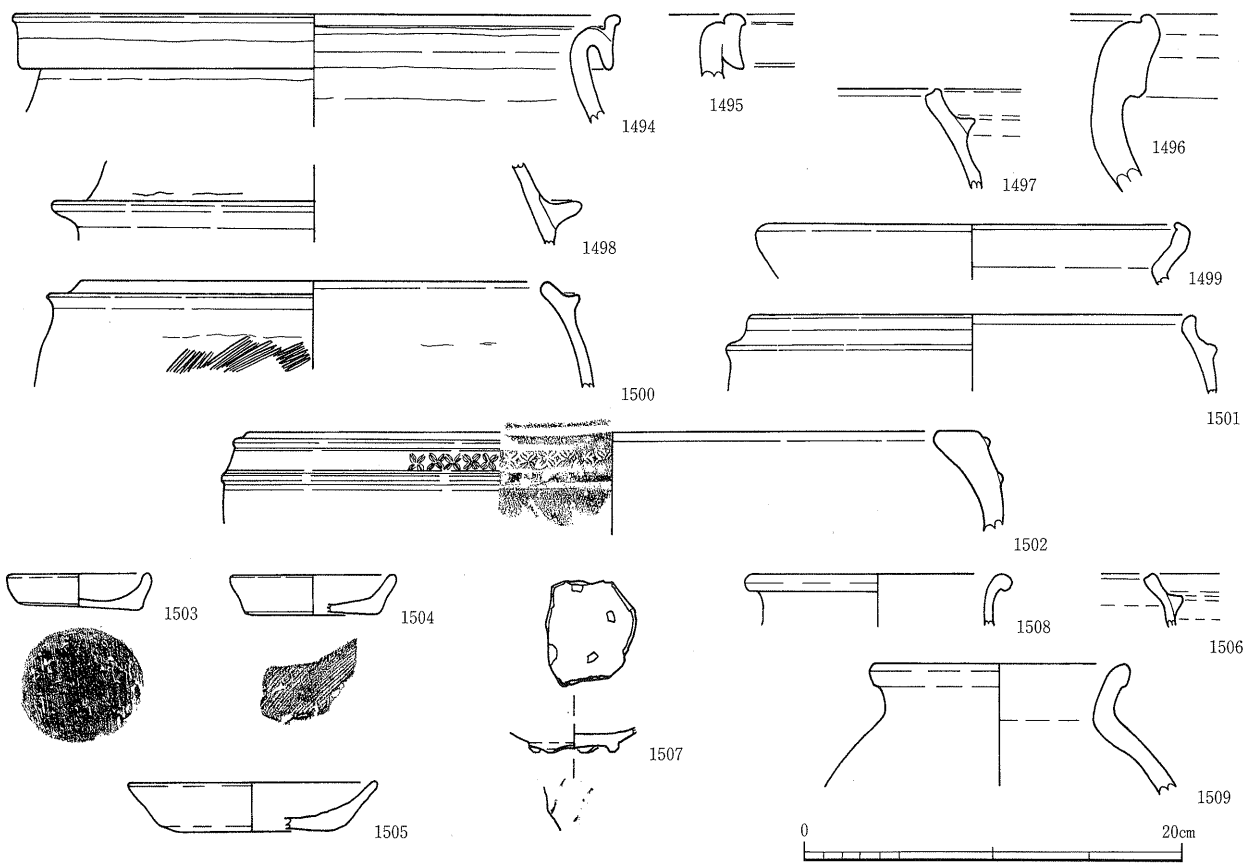
縁内面に稜が付かない時期である。したがって、1491は中世６期ｂ、1493は近世１期ａの時期であろう。1494～1496は常滑焼の甕の口縁部である。1494・1495は「Ｎ」字状口縁で、時期は13世紀末～14世紀前半である。1494は肩部と口縁部内面に灰がかかる。1495の口縁帯は頸部に密着している。1496は大型の甕で、口縁帯は大きく垂下し、頸部に密着する段階の15世紀前半と考えられる。1498・1499は土師質土釜である。1497・1500・1501は播磨系の土師質土堝である。1497・1500は突帯の下方から煤が付着する。1500の体部には斜め方向のタタキが施される。1501は口縁端部から煤が付着する。1502は瓦器火鉢で、外面口縁部直下に花菱文のスタンプを押捺する。

第３ｂ層出土の遺物

1503～1505は土師器皿である。1503・1504はＦ２タイプである。色調は乳白色を呈する。1505はＥタイプである。1506は播磨系の土鍋の細片である。

第３ｃ層出土の遺物

1507・1508は白磁である。1507は割り高台の白磁皿で、見込みには目跡が付く。1508は白磁四耳壺の口縁端部である。釉の発色は灰オリーブを呈する。1509は備前焼壺で、口縁端部は玉縁状を呈し、肩部には灰が掛かる。



第120図　Ⅳ区 13-④区 包含層第３層出土遺物実測図

第6節　V区

11-④区、12-④・⑤区、13-⑥・⑦・⑧・⑪区で、立地は沖積地である。このうち12-④区では、3面にわたる遺構面を検出した。縄文時代中期、縄文時代後期、弥生時代前期・古墳時代前期である。調査区の中央部を北西方向から南東方向に横断する形で砂礫層が凸部を形成している。中世に作られた水田により、この凸部は削平が行われており、残りが悪い。東南には古川が流れる。微高地の北東縁辺部に該当すると考えられる。

（1）11-④区（第123・124図、PL.9）

調査区は、微高地12-④区の北東に位置する。遺構は、第4層上面と第5層上面で検出した。遺構は希薄である。第4層上面からは水田に関係すると考えられる溝を検出した。溝は、幅80cm、深さ10cmで断面U字形を呈する。遺物は出土しない。この面からは畦畔の痕跡は確認できない。調査区の最も東側の第5層上面からは畦畔の痕跡を検出した。東西南北に確認でき、十字になっている。遺物は第3層、第4層から出土する。

（2）12-⑤区（第121・197図、PL.6）

調査区は、各時代の集落が確認された微高地の縁辺部と水田が拡がる低湿地で構成される。

基本層序は、第1層耕作土・第2層床土・第3層10YR8/1（灰白）シルト（表面に鉱物の沈殿あり）・第4a層は10YR8/2（灰白）シルト（表面に鉱物の沈殿あり）・第4b層10YR7/1（灰白）シルト・第5a層N3/0（暗灰）シルト・第5b層である。第5b層は微高地を形成する層で、調査区南端から緩やかに北方向に傾斜して下がる。第3・4層は中世の遺物を含む層、第5a層は弥生時代、第5b層は縄文時代の土器が少量出土する。第5b層上面では、弥生時代～古墳時代にかけての柱穴と弥生時代前期の東西に流れる流路、調査区中央部にはその流路内にある大型円形土坑（遺構1）を検出した。大型土坑1からは、弥生時代前期の土器(2786～2794)、流路からは2795が出土した。第5a層上面では、南北方向に走る畦畔状の痕跡を検出した。第4層上面では、同じく畦畔の痕跡を検出した。第3・4・5a層は堆積状況・土質などから判断して、水田面の可能性が高い。

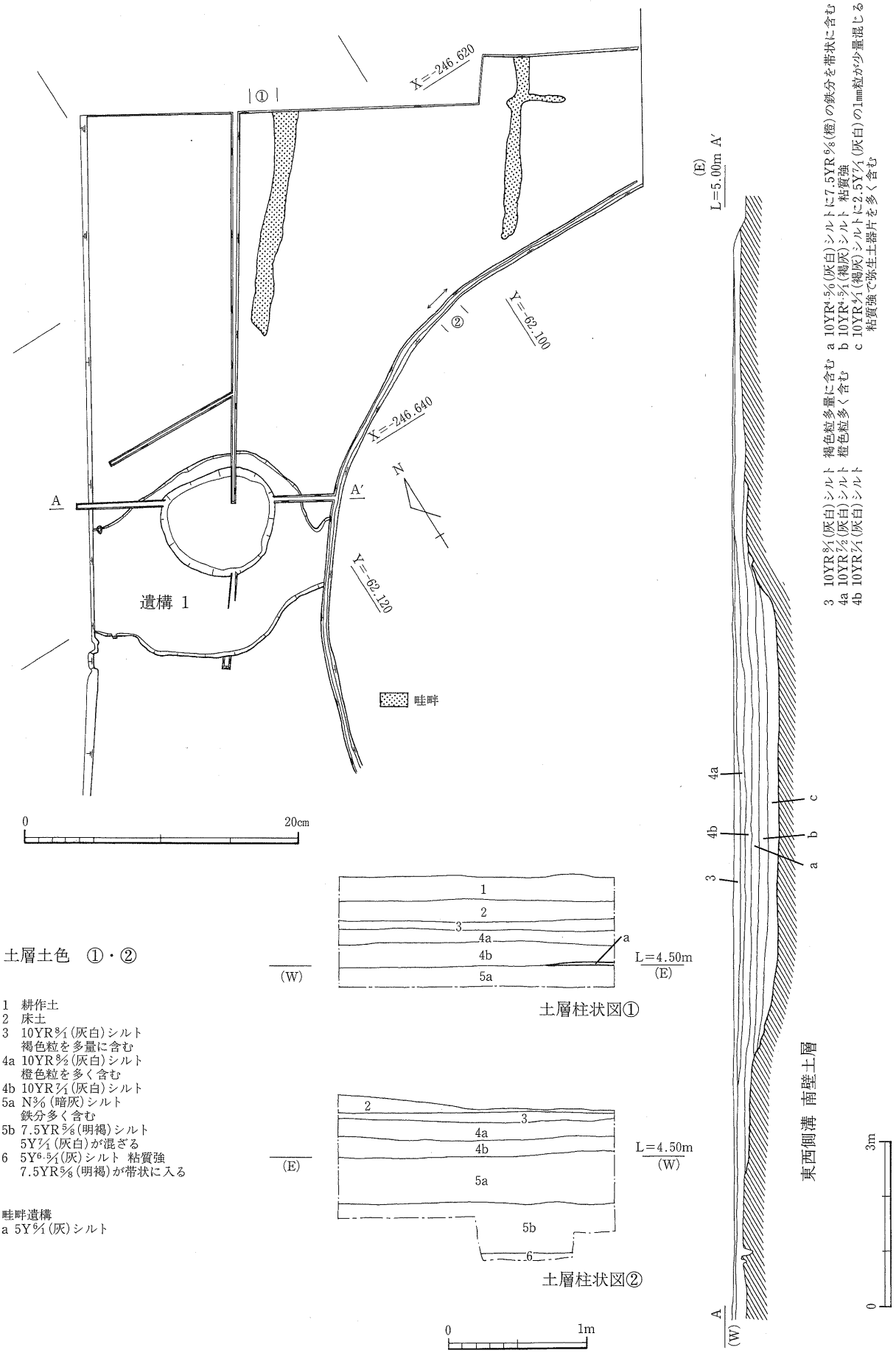
（3）13-⑥・⑦・⑧・⑪区（第122～124・197図、PL.74・75・80）

調査面積は、それぞれ⑥区が201㎡、⑦区が635㎡、⑧区が901㎡、⑪区が305㎡である。高田土居城跡の堀を一括して調査する必要性及び工期等の都合により、便宜的に調査区を分割あるいは再編成した。東西に長く延びる⑧区は、工事道路を挟んでそれぞれ東西に分割し、⑧区東半を先行して調査した。また堀周辺部となる⑥・⑦・⑧区西半を一括し調査を行った。以下その区分に従い、記述を行なう。

13-⑧区東半部

基本層序は、第1層：現在の水田耕作土、第2層：現在の水田床土もしくは近世の水田耕作土・床土、第3・4層：鎌倉時代～室町時代の水田耕作土、第5層：鎌倉時代以前の堆積層となっている。

第5層上面において東西方向を示す水田畦畔痕跡を1条検出した。他の調査区と同じく中央部やや南よりに、現在水路による攪乱が入る。畦畔痕跡は、水路の北肩に平行して存在し、幅0.2～1m、検



第121図　Ⅴ区 12-⑤区 遺構平面図・土層図

出延長83mに及ぶ。調査区東側の畦畔痕は幅広く、マンガン及び鉄分質の鉱物の沈着が明瞭であるのに対し、西側ほど細く不明瞭となる。畦畔痕の沈着する第5層面に食い込むかたちで、須恵器杯身が出土した。また、同畦畔西端部を切るかたちで、流路状の浅い落ち込み遺構を一部検出した。落ち込み内には杭列が打ち込まれ、埋土は木屑を含むほか、弥生土器及び須恵器の小片を検出したが、流入した可能性が高い。

第4ｂ層面は西端部でのみ調査したが、中世の東西方向を示す水田畦畔（溝）を1条検出した。畦畔（溝）は、幅1～1.5m、検出延長9mに及ぶ。現状水路に平行するが、攪乱の及ばない第3層を間層に挟み、区別できる。溝埋土は、第4ａ層に近似する。

13-⑥・⑦・⑧区西半部

基本層序は、調査区13-⑧区東半部と同様である。

第5層面の調査は、⑦・⑧区西半部の東側で行った。第5層調査面南西部で、弥生時代の「Ｌ」字状を呈す溝を検出した。溝は、ほぼ南北･東西方向を示し、やや東に傾く他の畦畔の方向とは異なる。幅0.4～1.1m、検出延長は北から4.5m、直角に曲がって東に7mに及ぶ。溝断面は「W」字状に凹凸があり、ピット状の窪みが多数見られる。遺構埋土は、第5ａ層暗灰色粘土となり、遺存状態が不良な弥生土器が出土した。これらのことから溝は、弥生時代の水田畦畔に伴う溝と考えられる。

また、弥生時代の水田畦畔とは方向が異なる中世の畦畔痕跡を多数検出した。いずれも、南北方向からやや東に傾く高田土居城跡及び現水田区画方向と一致し、第5層面にマンガン及び鉄分質の沈着が顕著である。

第3層面及び第4層面の調査は、高田土居城跡の堀周辺部となる⑥区と⑦区西半及び⑧区西半部で行った。第3層の堆積が顕著でなかった堀付近は、第4層面まで掘削し、高田土居城跡に伴う室町時代の堀を検出した。調査区の南側に接する11-①Ｓ区では、高田土居城跡の外郭部を全周する大規模な外堀を3条検出し、それぞれ南側（城側）から、外堀1・外堀2・外堀3と呼称され確認されている。また、当調査区の北側に接する12-③区では、外堀3の北端部及び外堀2に取りつく取水口が確認されて、その規模・形態および構造が判明した。（第124図：第5層上面図の取水口部分拡大図）

取水口は、堀3（ａ～ｆ）が主要な取水地になると考えられ、複雑に分岐し一部が外堀2にも取り付く。西から順次述べると、全ての給水源となる堀3ｅ、そこから枝分かれして外堀2に流れ込む堀3ｃ・堀3ｂ、外堀3の北端部となる堀3ａ、ただ一つ堀に流れ込まず外に給水する堀3ｄ、外堀3から外堀2へと取水する堀3ｆで構成される。

堀3ｅは、幅約1.1～2.2m、深さ約30～40cmとなる。西端部は、⑥区の近世～現在水路に切られ不明であるが、東端部は堀3ｃ等に分岐し繋がり、西から東へと給水される。

堀3ｃは、幅約4m、深さ約50～70cmと幅広く、北側の堀3ｅから取水し、南側の外堀2へと給水される。

堀3ｂは、幅約2m、深さ約50cmであり、堀3ｃとは低く不定形な緩衝帯により分けられる。北東側から取水され、堀3ｃ及び堀3ｆに合流するかたちで、南西側の外堀2へと斜め方向に給水される。

堀３ａは外堀３の北端取水部分であり、外堀３は堀３ｅから直接取水するかたちとなる。堀の幅は約２m、深さ約1.2mと深く、堀３ｂとの間にある緩衝帯もしっかりしたものである。

堀３ｄは、堀３ｅと繋がるかたちで外縁部に位置し、幅約1.6m、深さ約40cmである。どの堀にも流れ込まず外堀３の外側を廻り、堀３ｅから取水した水を北西から南東へと流し、外側の水田等へと給水していたと考えられる。

堀３ｆは、幅約1.5m、深さ約50cmと、外堀２と外堀３の間にある緩衝帯を深く断ち切るかたちとなり、断面中央が溝状に一段下がる。堀３ａ北端から６m程南下した西肩部から直角に取水し、外堀２北東隅へ給水される。

これらのことから、防御的な外堀１及び外堀２が掘削された後に外堀３が掘削され、さらに堀３ａ～３ｄ、最後に緩衝帯を断ち割るかたちで堀３ｆが増設され、堀は巨大な水利的施設を兼ねるようになったとも考えられる。これら複雑に分岐する取水・給水施設は、微妙な水利調整をより効果的にするものであろう。遺物は少ないが、堀３ｃ付近から備前焼の擂鉢（197図：2783）及び漆器等が出土している。

外堀３の東肩となる13-⑦区西半部では、第３層面で近世の南北方向を示す畝状遺構を多数検出した。高田土居城周辺部の土地利用が復元できよう。

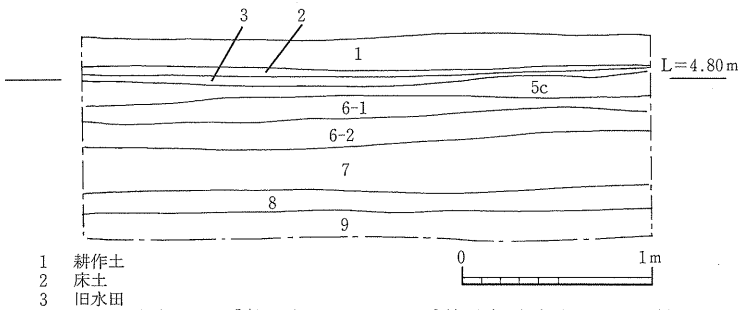
13-⑪区

基本層序は13-⑧区の東半部と同様である。第５ｂ層は調査区南端部で確認し、北方向に序々に下がり粘質化して第５ａ層となることから、微高地の北端を示すと考えられる。またこの範囲で、埋土を第４ｂ層とする柱穴状のものを多数検出したが、まとまり及び遺物の確認はできなかった。

第４ａ層面において、室町時代の南北方向を示す畦畔痕跡を確認した。第３層面の畦畔より東方向に約50cm程平行にずれ、幅1.3m、検出延長17mに及ぶ。またこの畦畔の東側から平行に約50cm程あけて、杭列を検出した。この杭列は、後述の第３層面畦畔東肩に一致することから、上層から打ち込まれた第３層面畦畔に伴う杭列と考えられる。

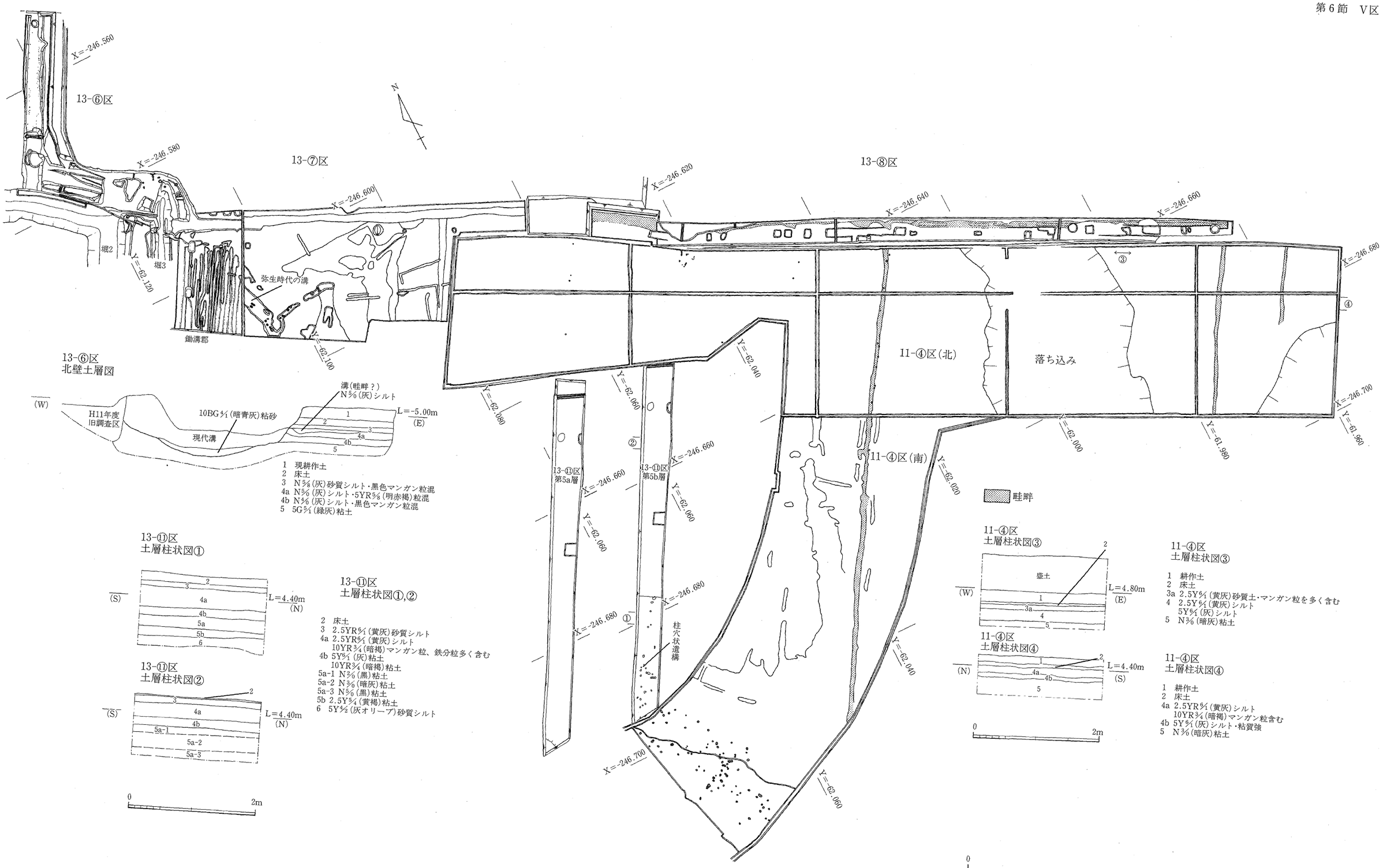
第３層面では、室町時代の南北方向を示す水田畦畔を１条検出した。畦畔は、調査区に平行してやや東に傾き、幅1.3m、検出延長17.5mに及び、現畦畔方向と一致する。畦畔は第４ａ層に近似する土により構成され、水田埋土は第３層で構成されたと考えられる。また、同畦畔に平行あるいは直交するかたちで、第２層を埋土とする溝状遺構を検出した。

遺物は、須恵器・土師器、白磁片が出土している。



1　耕作土
2　床土
3　旧水田
5c　2.5Y 7/6（黄）と10YR 7/1（灰白）の混りに、2.5Y 3/1（黒褐）の褐色粒3～8mm大10%含む　5～20cm大の礫20%含む　シルト
6-1　7.5YR3/1（褐灰）10YR2/3の混り　粗砂混細砂
6-2　7.5YR3/2（黒褐）と10YR2/3の混りにN6·5/（灰白）の筋が入る　粗砂混細砂
7　10YR5/3（にぶい黄褐）に2.5R7/6（黄）の２mm粒10%、N9/（灰白）の筋が５cm幅で入る　5～20cm大の礫30%含む　礫層
8　礫層
9　粗砂

第122図Ⅴ区12-④区　基本層序



13-⑥区
北壁土層図

1　現耕作土
2　床土
3　N5/0(灰)砂質シルト・黒色マンガン粒混
4a　N5/0(灰)シルト・5YR5/6(明赤褐)粒混
4b　N4/0(灰)シルト・黒色マンガン粒混
5　5G5/1(緑灰)粘土

13-⑪区
土層柱状図①

13-⑪区
土層柱状図②

13-⑪区
土層柱状図①,②

2　床土
3　2.5YR5/1(黄灰)砂質シルト
4a　2.5YR5/1(黄灰)シルト
10YR3/1(暗褐)マンガン粒、鉄分粒多く含む
4b　5Y5/1(灰)粘土
10YR3/1(暗褐)粘土
5a-1　N3/0(黒)粘土
5a-2　N3/0(暗灰)粘土
5a-3　N3/0(黒)粘土
5b　2.5Y3/1(黄褐)粘土
6　5Y5/2(灰オリーブ)砂質シルト

11-④区
土層柱状図③

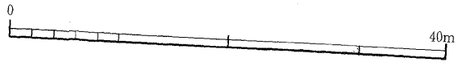
11-④区
土層柱状図④

11-④区
土層柱状図③

1　耕作土
2　床土
3a　2.5Y5/1(黄灰)砂質土・マンガン粒を多く含む
4　2.5Y5/1(黄灰)シルト
5Y5/1(灰)シルト
5　N3/0(暗灰)粘土

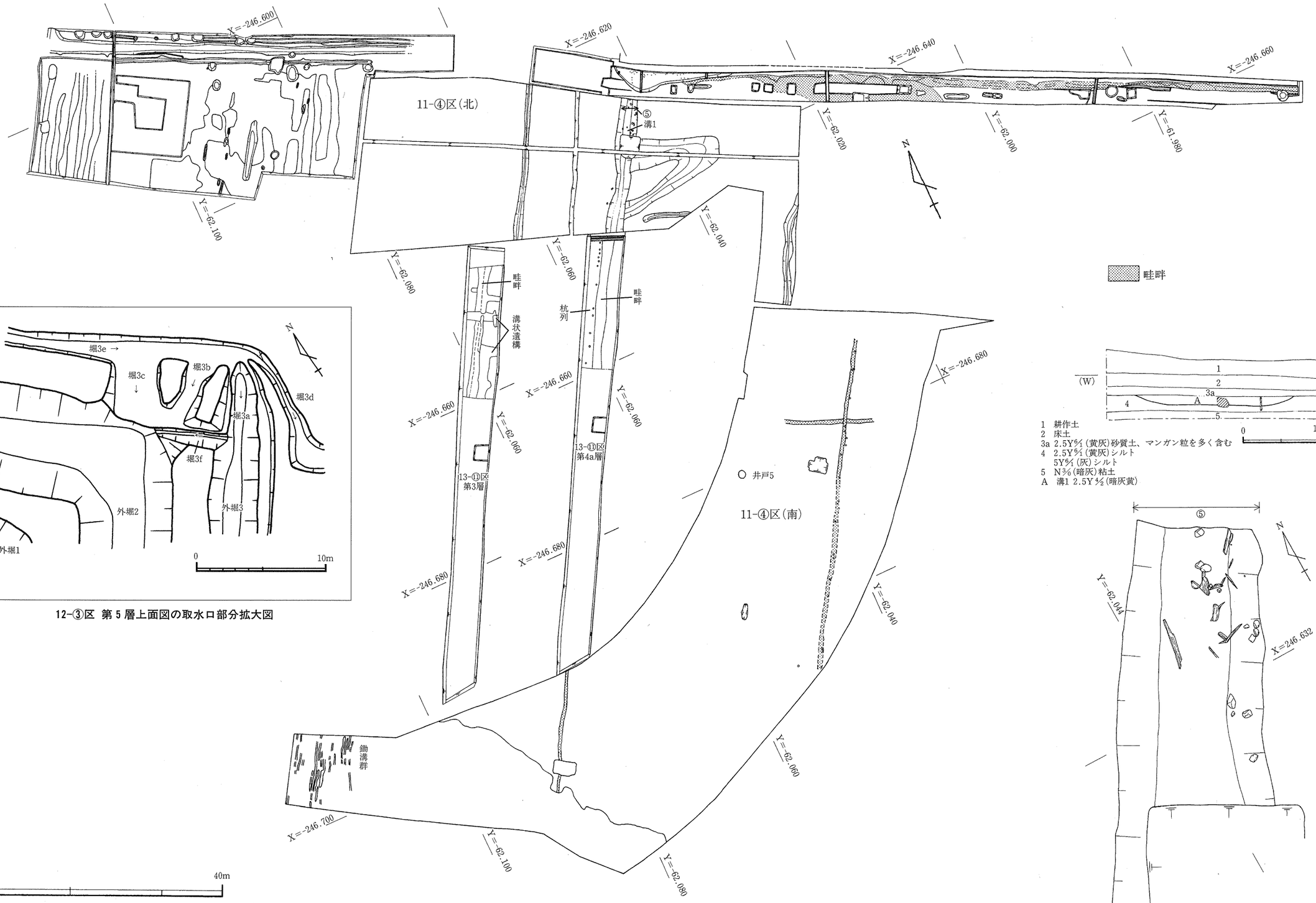
11-④区
土層柱状図④

1　耕作土
2　床土
4a　2.5YR5/1(黄灰)シルト
10YR3/1(暗褐)マンガン粒含む
4b　5Y5/1(灰)シルト・粘質強
5　N3/0(暗灰)粘土



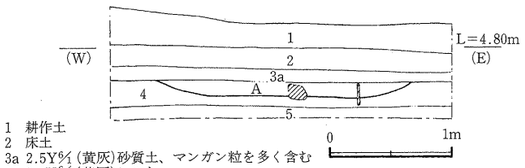
第123図　V区 11-④区・13-⑥・⑦・⑧・⑪区 第5層上面 遺構平面図・土層図

12-③区 第5層上面図の取水口部分拡大図

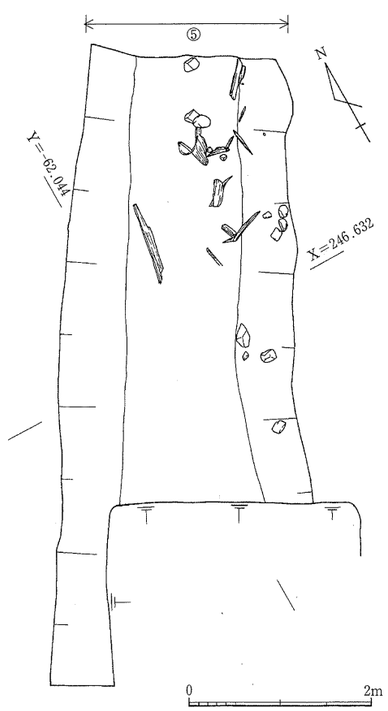


第124図　V区 11-④区・13-⑦・⑧・⑪区 第4層上面 遺構平面図・土層図、11-①区 溝1 詳細図
第5層上面図の取水口部分拡大図

畦畔

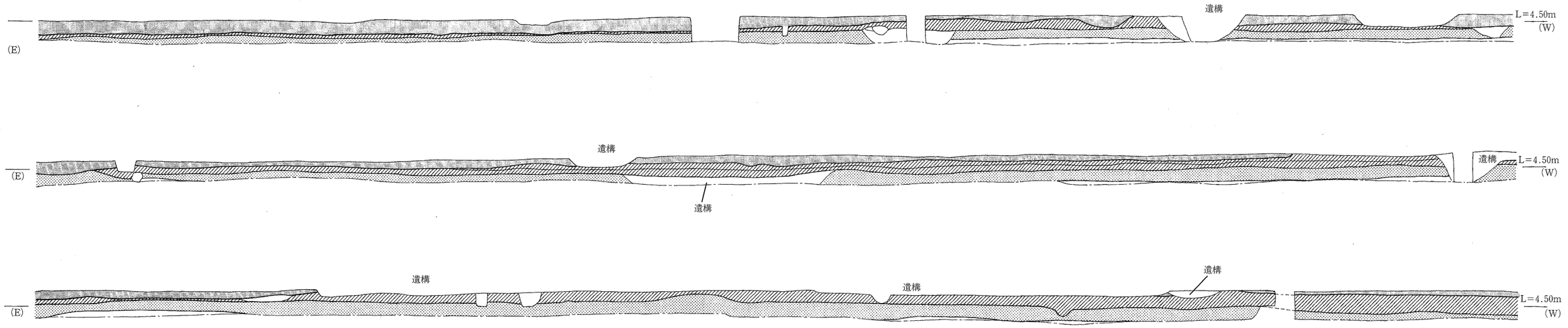


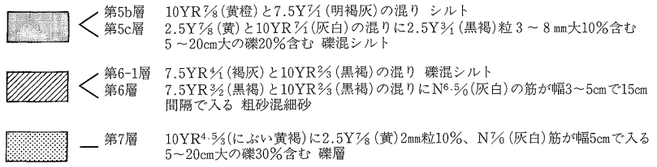
1　耕作土
2　床土
3a　2.5Y9/1(黄灰)砂質土、マンガン粒を多く含む
4　2.5Y9/1(黄灰)シルト
　5Y9/1(灰)シルト
5　N3/(暗灰)粘土
A　溝1 2.5Y4/2(暗灰黄)



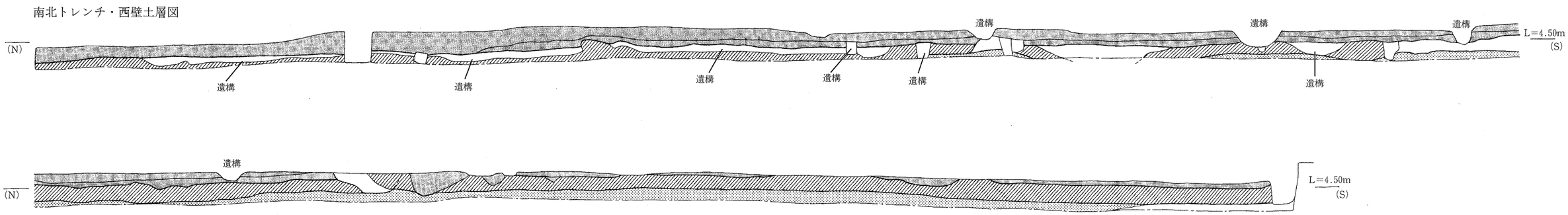
11-④区 溝1 詳細図

東西トレンチ・南北土層図





南北トレンチ・西壁土層図



第125図　V区 12-④区 東西・南北トレンチ土層図

（4）12-④区（第122・125図）

12-④区は、標高4.5m前後の微高地に位置する。堆積層は地下の微地形に影響されて地点によって微妙に異なる。また、中世水田層を造成する際に大きく地表面を削平している。

層序は、調査区全域で第1層水田層、第2層床土、第3層水田層が確認できる。第4層水田層は調査区の北側で確認できるが、南側には存在しない。第3層を作る際に削平されたと考えられる。第5層は全域に存在する。色調や土質の違いにより、a・b・cの3層に区分でき、このうちb・c層は南側にのみ存在する。第6層は2層に区分でき、微高地が南に向かって落ちていく部分には存在しない。

第5層は縄文時代後期包含層、第6層は縄文時代中期包含層と考えられる。第7層には微量の土器が含まれる。第6層に後期の遺物が若干含まれるが、出土量や出土する地区から想定して後期遺構の掘り残しとすることができる。第8・9層は無遺物層である。

第5層上面からは弥生時代前期と古墳時代前期の遺構を検出した。第6層上面からは縄文時代後期の遺構を検出した。第7層上面からは縄文時代中期を主とする遺構を検出した。一部後期の遺構も存在する。

1．縄文時代中期遺構検出面（第126図、PL.27～29）

遺構検出面は、シルトと礫で形成されたもので、検出した遺構は、竪穴住居・埋甕・土坑・柱穴などである。竪穴住居は微高地のなかでも標高が高い地域にあたる調査区中央部に列状に位置する。土坑・柱穴は、竪穴住居の周辺部に密に分布する。比較的遺構の少ない空間は、調査区中央部北側から東側である。微高地が落ちる地域に該当する。

12-④区が位置する微高地は、西側の高田土居城外郭部から内郭部に拡がる。高田土居城外郭部や内郭部の調査で、当該期の包含層や遺構の存在を確認していることからも、縄文時代中期の集落は西側に大きく展開していたことが窺える。

竪穴住居

竪穴住居は14棟検出した。平面プランは隅丸方形や方形を呈する。これらは出土遺物から船元式の時期内でいくつかに分けることができ、一時期に並存する住居は少ないと考えられる。

文章中、住居から出土した土器の破片点数を記述しているが、5㎜以下の形状不明な土器は全て点数から除外している。

竪穴住居1900（第127・136・158図、PL.30・111・112）

調査区の東側中央部に位置する。平面規模2.5m×3.0m、深さ15cmの隅丸方形を呈する竪穴住居である。中央部西側には上部からの土坑の攪乱部分がある。床面は平坦で壁溝はなく、壁の立ち上がりはなだらかである。炉は検出できない。柱穴は対角線上に2本検出し、直径15cm、深さ9～12cmである。南コーナー部分に砂岩の台石が据えられていた。

出土遺物は、柱穴1・床面・埋土の3区分で取り上げをおこなっている。土器（1510～1522）・石器（2283）がある。土器は小破片が主で破片総数は70点が出土する。

柱穴１・床面からはそれぞれ２点出土した。船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す体部破片がある。埋土からは1510～1522が出土する。1510・1511・1513・1516は船元Ⅰ・Ⅱ式である。1510は頸部付近の破片で斜行する刺突文を施す。胎土に結晶片岩を含み搬入品であると考えられる。1511は口縁部外面に貝殻圧痕を、その下には刺突文を施し、口縁部内面には縄文帯を巡らす。1513は口縁部が肥厚する。1516は薄手の波状口縁で、爪形文を施す。1514・1520は船元Ⅲ式である。1514は半裁竹管による平行沈線を施す。1512・1515・1517は胴部に隆帯をもつもので、隆帯下に半裁竹管による刺突文を施す。時期は確定できないもののおおよそ船元Ⅰ～Ⅲ式の範疇であると考えられる。1518は東海地方の山田平Ⅱ式と考えられ、半裁竹管による平行沈線を施こす。色調は黒っぽく、長石・石英粒を多く含む。1519は隆帯上に爪形文を施す。胎土は1518と同じで搬入品と考えられる。1521は勝坂式で隆帯下に半裁竹管による刺突文を施す。1522は藤内式の口縁部破片である。突起部の上部には玉抱三叉文を施す。

竪穴住居1900の時期は、埋土出土遺物から判断して船元Ⅲ式期であると考えられる。

竪穴住居1950（第127図、PL.30）

竪穴住居1900の北側に位置する。調査区では最も標高が高い地点である。平面は長方形を呈し、規模は2.2m×3.8m、深さ15㎝前後である。埋土は褐色の粗砂混じりのシルト層である。床面は平坦で、壁の立ち上がりはなだらかである。柱穴・炉・壁溝は床面上で確認できない。

出土遺物がないため時期は不明である。

竪穴住居2002（第128・136図、PL.32・111・112）

竪穴住居1900の西側に位置し、竪穴住居2003に切られる。平面プランは楕円形を呈し、規模は4.3m×6.0m、深さ15㎝を測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりもなだらかである。床面上で柱穴を検出したが、住居に伴うものか明らかでなく、また炉・壁溝などは検出できない。形状などからも竪穴住居ではなく浅い窪みの可能性もある。埋土は黒褐色シルト1層のみである。

埋土から出土した遺物には、土器（1523～1541）がある。土器は小破片が主で出土総数は96点である。1523～1528・1535は船元Ⅱ式である。1523は口縁部近くの破片で、半裁竹管の刻み目を施す隆帯の上位に貝殻文を、下位に縄文を施す。内面にも縄文が認められる。1524は波状口縁で、斜行する隆帯上に刻み目を施す。1525は胴部に隆帯をもつ。1526・1527は口縁部に隆帯をもち、口縁部内面に縄文を施す。このうち1526は隆帯上に刺突文を巡らす。1527は口縁端部に刻み目を施し、外面の隆帯上には縄文と刺突文を施す。1528は波状口縁で、外面には縄文地の上に刻み目隆帯を、口縁部内面にも縄文帯を施す。1535は頸部付近の破片で、縄文地の上に半裁竹管による平行沈線を施す。胎土に結晶片岩を含むことから搬入品と考えられる。1529・1536は船元Ⅲ式の口縁部破片である。1529は半裁竹管による平行沈線を施す。口縁内端面には刻み目を施す。1536は口縁部下に半裁竹管による平行沈線を引く。口縁端部には縄文を施す。1530は船元Ⅳ式である。深浅縄文の上に半裁竹管による沈線を施す。1531～1534は体部外面に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1537は帰属時期が不明である。薄手で、刻み目隆帯の間に半裁竹管による平行沈線を施す。1538～1541は搬入品の勝坂式土器である。色調は黒色あるいは褐色を呈し、器壁は厚い。1538は押圧文を施した斜行する隆帯の両側に刻み目を施す。新

第126図　V区 12-④区 第7層上面 縄文時代中期 遺構平面図

道式の可能性がある。1539は浅鉢である。口縁端部を内外に拡張する。形態からみて、狢沢～藤内式に該当する。1541は弧状に走る隆帯の下位に平行沈線を、隆帯の上位に半裁竹管による刺突文を施す。

竪穴住居2002の時期は、埋土出土遺物から船元IV式期であると考えられる。

竪穴住居2003（第128・136・137図、アルカ第3図、PL.31・111・112・144）

竪穴住居1900・1950の西側に位置し、竪穴住居2002を切る。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は3.6×4.0m、深さ25cmを測る。後期面からの土坑の撹乱が多く見られる。床面は平坦で、柱穴・土坑を検出した。壁面はなだらかに立ちあがる。

出土遺物は、土坑1・土坑3・土坑7・床面直上・埋土（下層・上層）の区分で取り上げている。土器（1542～1588）・石器（アルカ1）がある。土器の出土総数は229点である。土器出土量は、竪穴住居の中で最も多い。土坑7からは1542・1543が出土する。1542は船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を胴部に施す。1543は船元Ⅲ式で、隆帯下に半裁竹管による平行沈線を施す。胎土から搬入品と考えられる。土坑3からは1544が出土する。器壁が厚く、外面に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。土坑1からは、1545～1548が出土する。1545・1546は船元Ⅱ式で、刻み目隆帯を施す。1547は薄手で、口縁部を肥厚させる。1548は色調が赤褐色で胎土に長石粒を多く含み搬入品と考えられる。床面直上からは、1549が出土する。船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。埋土下層からは、1550～1568・1570・1573・1576・1578・1582・1585が出土する。1550～1556・1570・1573・1576は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1557は船元IV式で、胴部に深浅縄文を施す。1558は口縁部に突帯を貼付する。1559は船元Ⅱ式で、外面に刻み目隆帯、貝殻圧痕を施し、口縁内面に縄文を施す。1560・1562・1564は船元ⅠまたはⅡ式の波状口縁をもつ深鉢で、口縁部に隆帯をもち端部には刻み目を施す。1561は口縁部に爪形文と平行沈線を施す。胎土から搬入品と考えられる。1563・1578・1582は船元Ⅱ式で、縄文地に刻み目隆帯を持つ。1565～1567は胎土や文様などから搬入品と考えられる。1565は山田平式で半裁竹管による平行沈線を施す。1566は前畑式で隆帯の両側に半裁竹管による刺突文を施す。1567は刻み目をもつ幅広の隆帯をもつ。1568は波状となる口縁部の隆帯下に刺突文を施す。1585は船元Ⅰ式で、内折する口縁部外面に爪形文を施す。埋土上層出土土器には、1569・1571・1572・1574・1575・1577・1579～1581・1583・1584・1586～1588がある。1571・1572・1574・1575・1577・1588は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。このうち1588はおはじきとして再利用している可能性がある。1569は器壁が厚く、縦横に半裁竹管による沈線を施す。1579は船元Ⅱ式で、縄文地に刻み目隆帯を施す。1580は船元Ⅲ式で、口縁部に爪形文と半裁竹管による平行沈線を施す。1561と同じ文様構成で、胎土から搬入品と考えられる。1581・1583・1584・1587は山田平式で、このうち1581以外は胎土から明らかに搬入品と考えられる。1581は口縁部外面の隆帯に貝殻圧痕をし、内面には縄文帯を施す。1583は口縁部外面に間隔が開く爪形文と半裁竹管による平行沈線を施す。1584は半裁竹管による平行沈線を施すもので、文様構成と胎土は1565と同じである。1587は口縁部が波状で、半裁竹管による平行沈線を施す。1586は斜行する隆帯をもつもので、胎土から搬入品と考えられる。

石器には、覆土から出土した削器（アルカ1）がある。

竪穴住居2003の時期は、土坑７や埋土下層の遺物から判断して船元IV式期であると考えられる。

竪穴住居2006（第129・138・159図、PL.111～113）

調査区東中央部に位置する隅丸方形の竪穴住居である。隣接して竪穴住居2003がある。平面規模は4.3×3.7m、深さ15cmである。床面は平坦で、柱穴や土坑などが検出されたが、主柱穴と考えられるものはない。壁溝や炉跡は存在しない。壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は、土坑５・６・８、ピット２・４、埋土（下層・中層・上層）の区分で取り上げている。出土遺物には、土器（1589～1627）・石器がある。出土量は多く、全体に摩滅し小破片である。土器の総数は186点で、東海系の土器や東日本の土器が多く出土する。

土坑５からは1589・1590・1594～1597・1619が出土する。1589・1595・1597は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1590は船元IV式で、胴部に深浅縄文を施す。1594・1619は船元Ⅱ式で、このうち1594は口縁に貝殻押圧文を施し、外面には縄文地の上に刻み目隆帯と刺突文を施す。1619は口縁部外面に隆帯を、内面には縄文帯を施す。1596は、薄手で半裁竹管によって平行沈線を施す。東海系の土器である。土坑６からは、1591・1593・1622・1623が出土する。これらは船元IV式で、胴部に深浅縄文を施す。土坑８からは、1592が出土する。胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。ピット２からは、1599が出土する。胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。ピット４からは、1598が出土する。船元Ⅱ式の浅鉢で、屈曲して外湾気味に立ち上がる口縁部の外面に刻み目を、口縁端部には縄文を施す。埋土下層からは1600～1602・1618・1620が出土する。1600・1601は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1602・1618は縄文地に刻み目隆帯を施す。1620は口縁外面の隆帯上に爪形文を、その下には半裁竹管による平行沈線を施す。北陸系の土器である。埋土中層からは1603～1612が出土する。1603～1605・1612は胴部に船元Ⅰ～Ⅲの縄文を施す。1606～1608・1610は船元Ⅱ式で、刻み目隆帯を持つ。このうち1608は、隆帯の上位に押圧文を施す。1609は船元ⅢまたはIV式で、隆帯の下に半裁竹管による平行沈線を施す。1611は器壁が厚く、胎土から勝坂式であると考えられる。埋土上層からは1613～1617・1621・1624～1627が出土する。1613・1614は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1615・1621は胴部に船元Ⅲ式の縄文を施す。1616・1617は波状口縁をもつ船元Ⅱ式である。1616は隆帯を持つ。1617は口縁部の刻み目隆帯の上位に押圧文、下位に刺突文を施す。1624は東海系の土器で、半裁竹管に平行沈線を施す。1625～1627は器壁が厚く、胎土からも東日本からの搬入品と考えられる。1625は山田平式で隆帯を持つ。1627は勝坂式で隆帯の両側に刺突文を施す。

竪穴住居2006の時期は、床面土坑や埋土下層の土器から判断して船元IV式期であると考えられる。

竪穴住居2007（第129・138・158、PL.111・113・158）

調査区東、竪穴住居2006の南に位置する長方形の竪穴住居である。中央部を船元IV式の埋甕７で切られる。平面規模は4.2m×2.7m、深さは最も深いところで40cmを測り、壁の立ち上がりは極めて緩やかである。炉跡はない。住居の周りにも柱穴等は存在しない。床面は平坦であるが、中央部が窪む。

出土遺物は、土坑１・埋土（下層・上層）の区分で取り上げている。土器（1628～1662）と石器（2278・2279・2284・2285）がある。土器の総数は141点である。土坑1からは1628～1630が出土する。これら

は色調・胎土からも搬入品と考えられる。1628・1630は半裁竹管による平行線文を多用し、このうち1628は平行沈線の中に爪形文を押し、さらに内側には円を描く。1629は屈曲部に施した隆帯の上に押圧を施す。埋土下層からは1631～1636が出土する。1631・1632は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1633～1635は半裁竹管による平行沈線を施す。これらはの胎土は1630と同じで搬入品と考えられる。1633は口縁部が肥厚する。1636は山田平式で、胴部に隆帯を施す。色調・胎土から搬入品と考えられる。埋土上層からは1637～1662が出土する。1642・1644～1647は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1637～1641・1643は船元Ⅱ式である。1637は口縁部下に施した沈線と口縁端部の間に縄文を施す。1638は縄文地の上に刻み目隆帯を施す。1639～1641は口縁部に施した幅広の隆帯上に貝殻の押圧文を施す。このうち1639は口縁下に縄文と刻み目隆帯・刺突文を施す。1643は船元Ⅱ式で、胴部の縄文地の上に半裁竹管による刺突文を弧状に施す。1662は船元Ⅲ式で、胴部に隆帯と半裁竹管による平行沈線をもつ。1648～1653は船元Ⅳ式で、胴部に深浅縄文を施す。このうち1648は縄文地の上に「く」の字型の山形文を半裁竹管で施す。1654～1661は胎土や色調などから搬入品と考えられる。このうち1654～1656・1659は半裁竹管による平行沈線を施す。これらは1630らと同じ胎土であり、同一個体あるいは同一地域からの搬入品と考えられる。1657は波状口縁で、口縁に沿って半裁竹管による平行沈線を施す。1658・1661は器壁が厚く、胴部に隆帯を巡らす。1660は肥厚する口縁部外面に爪形文を、その下位には半裁竹管による平行沈線と刺突文を施す。

石器は下層から磨石（2279）、台石（2285）、上層から敲石（2278）、土坑3から台石（2284）が出土する。

竪穴住居2007の時期は、土坑1や埋土下層の土器から判断して船元Ⅰ～Ⅲ式期であると考えられる

竪穴住居2244（第130・138図、PL.31・111・112）

調査区中央部に位置し、竪穴住居2245に切られる方形住居である。平面規模は2.5m×2.6m以上、深さは10cmである。床面は平坦で、壁の立ち上がりは非常になだらかである。床面からは土坑などを検出したが、炉跡・壁溝は存在しない。

遺物は、埋土から土器（1663～1673）・石器が出土する。土坑からは遺物が出土しない。土器総数は33点である。1668～1670は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1664～1666は船元Ⅱ式で縄文地に刻み目隆帯を施す。このうち1664は口縁部内面に爪形文をもつ。1663・1667は船元Ⅲ式である。1663は口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らす。1667は薄手で、区画隆帯を持つ。1671は隆帯を貼り付け、刻み目を持つ。1672・1673は胎土から搬入品と考えられる。1672は勝坂式で、胴部に爪形文を施す。1673は山田平式で、半裁竹管による平行沈線を施す。

竪穴住居2244は、埋土出土土器から判断して船元Ⅲ式期であると考えられる。

竪穴住居2245（第130・139・158、アルカ第3図、PL.31・112・113・144）

調査区中央に位置し、竪穴住居2245を切る長方形を呈する住居である。平面規模は3.0m×4.0m以上である。炉、壁溝などは確認できない。床面は平坦である。

遺物は、土坑1・埋土から土器（1674～1686）・石器（2280・アルカ2）が出土する。土器の出土総

数は56点である。土坑1からは1674～1676が出土する。1674は船元IV式で半裁竹管による平行沈線文を弧状に施す。胎土や色調から搬入品と考えられる。1675は幅広の隆帯上に四角形の圧痕を施す。朱の痕跡が残り、文様から見て搬入品と考えられる。1676は沈線を施す。中期末あるいは後期の土器で混入品の可能性がある。埋土からは1677～1686が出土する。1683・1684は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1677～1679・1686は船元IV式である。1677は刻み目隆帯を施す。1678は縄文地に区画隆帯・刺突文を施す。1679は隆帯の両端に刻み目を施す。1686は縄文地に隆帯と刻み目を施す。1680～1682は船元Ⅲ式である。1680は半裁竹管により区画を施す。1681は波状口縁で、口縁部外面に刻み目を、口縁端部に縄文を施す。口縁下には半裁竹管による多条の平行線文を巡らす。1682は隆帯の上下に半裁竹管による平行沈線を施す。1685は厚手で、胎土から勝坂式と考えられる。

石器は土坑１から敲石（2280）が、埋土から横型石匙（アルカ２）が出土する。

竪穴住居2245の時期は、埋土出土土器から判断して船元Ⅲ式であると考えられる。

竪穴住居2295（第131・139図、PL.32・112・113）

調査区中央西端に位置する。北西辺は調査区域外となる。平面規模は長軸4.0m以上×短軸2.5m以上を測る。壁高は10cmで、壁面は緩やかに立ちあがる。床面上で柱穴や土坑を検出した。

出土遺物には土器（1687～1692）があり、土坑１・土坑２・埋土の区分で取り上げている。出土総数は24点である。土坑１からは2点出土したが、細片で図示できるものはなかった。土坑2からは1687が出土する。1687は船元Ⅱ式で、口縁部外面に貝殻圧痕を施し、口縁端部には刻み目を施す。斜行する隆帯の両端には刺突文を施す。埋土からは1688～1692が出土する。1690は船元Ⅱ式である。口縁部外面の隆帯の両側に刺突文を施し、内面には縄文帯を巡らす。1688・1689・1692は船元Ⅲ式である。1688は胴部に半裁竹管による刻み目状の文様を密に施す。1689は口縁部の外面に波状の爪形文を、内面に縄文を施す。1692は底部付近の破片で、底は平坦である。1691は半裁竹管による平行沈線を持ち、船元式Ⅱ・Ⅲ期のものと考えられる。

竪穴住居2295の時期は、埋土出土土器から判断して船元Ⅲ式期であると考えられる。

竪穴住居2486（第131・139、アルカ第３図、PL.112・144）

調査区北部に位置する。平面規模は長軸４ｍ×短軸３ｍ以上で、深さは８cmの楕円形を呈する竪穴住居である。主柱穴は確認できなかった。住居西半は土層観察トレンチにかかり、削平を受ける。

遺物は、埋土から土器（1693～1702）・石器（アルカ３～７）が出土した。土器は破片点数で95点ある。1693は半裁竹管で平行沈線を施す。胎土に金雲母を含み色調からも搬入品と考えられる。1694・1695は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1696・1697・1699は船元Ⅱ式である。1696は波状口縁で、肥厚する口縁外面に櫛状工具による刺突文を施す。口縁端部と内面には縄文を施す。1697は縄文地に刻み目隆帯と刺突文を施す。1699は縄文地に連続刺突文と平行沈線を施す。700は船元ⅢまたはIV式で、半裁竹管による平行沈線を施す。1702は船元IV式で、胴部に深浅縄文を施す。1698・1701は文様や胎土から搬入品と考えられる。1698は表面全体に細かい貝殻圧痕を施す。1701は口縁部に縦位の平行沈線を施す。

石器は、凹基鏃が5点（アルカ3～7）出土している。

竪穴住居2486の時期は、埋土出土土器から判断して船元IV式期と考えられる。

竪穴住居2650（第132・139図）

調査区北部に位置する。方形を呈する竪穴住居である。平面規模は、長辺3.4m×短辺3.0m、深さ5cmを測る。柱穴は3本検出した。

遺物は埋土から土器（1703・1704）が出土した。破片総数は6点である。1703は口縁部の内面に縄文を施す。1704は無文である。このほか船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す破片がある。

竪穴住居2650の時期は、埋土出土土器から船元Ⅰ～Ⅲ式期であると考えられる。

竪穴住居2651（第132・139図、PL.32・112）

調査区北部に位置する隅丸方形を呈する竪穴住居である。平面規模は一辺3mで、壁高は10cmを測る。壁面は緩やかに立ちあがる。柱穴は7本検出した。埋土は1層である。

遺物は埋土から土器（1705～1718）が出土しており、下層・上層の区分で取り上げている。土器の総数は57点である。埋土下層からは1705・1706が出土する。1705は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1706は船元Ⅱ式で、縄文地の上に刻み目隆帯を施す。埋土上層からは1707～1718が出土する。1711～1713は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1714～1717は船元Ⅱ式である。1714・1715は口縁部に貝殻圧痕を施し、その下位に半裁竹管による刻み目を施す。1716は肥厚する口縁下に半裁竹管による刺突文を施す。1717は波状口縁で、縄文地の上に隆帯を施す。1707～1710・1718は船元IV式である。このうち1707・1709・1710・1718は深浅縄文を施す。1708は肥厚する口縁部に斜行する平行沈線を施す。

竪穴住居2651の時期は、埋土下層土器から判断して船元Ⅰ～Ⅲ式期であると考えられる。

竪穴住居2661（第132・139・158図、PL.112・126）

長方形を呈する竪穴住居である。南側を上部からの土坑により撹乱される。平面規模は1.8m×1.8m以上である。壁高は10cmを測る。壁面は緩やかに立ちあがる。埋土は1層である。

遺物は埋土から土器（1719～1724）、石器（2281・2282）が2点出土する。1719～1723は胴部に船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1724は口縁下に半裁竹管による平行沈線を施す。北陸系の土器で胎土からも搬入品と考えられる。

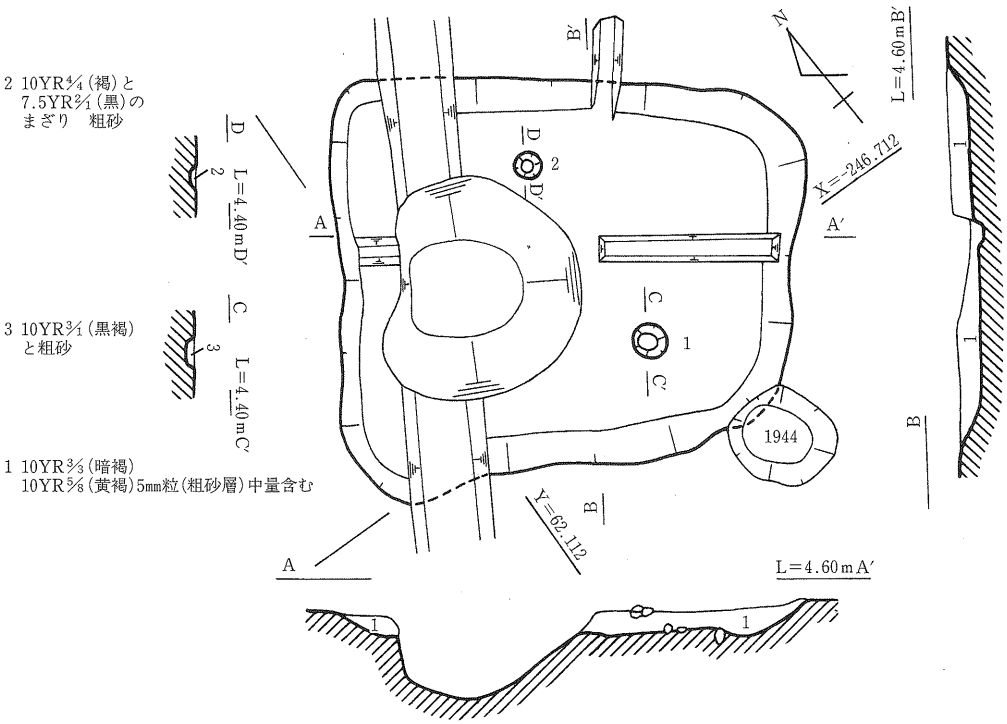
石器には敲石＋磨石（2281・2282）がある。

竪穴住居2661の時期は、埋土出土土器から判断して船元Ⅰ～Ⅲ式期であると考えられる。

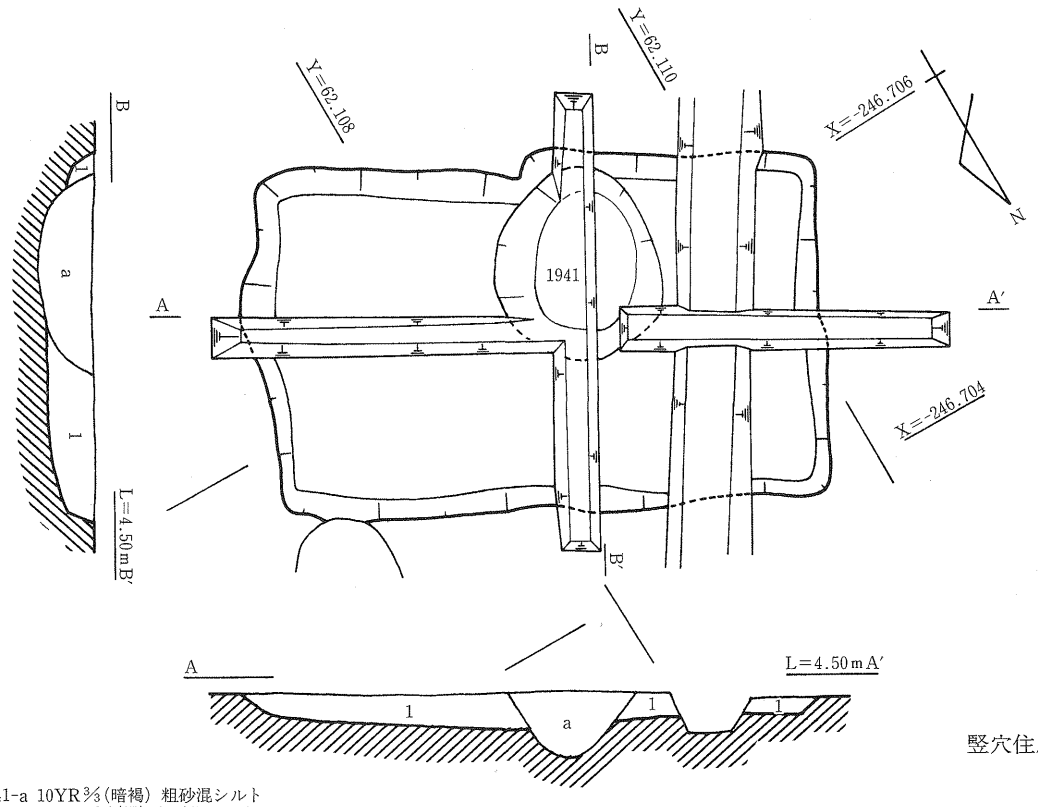
竪穴住居2678（第132・140図、PL.32・112・113）

調査区北部に位置する。方形を呈する竪穴住居で、規模は一辺3.3mである。壁高は15cmを測り、緩やかに立ちあがる。柱穴は4本検出した。

遺物は埋土から土器（1725～1752）が出土する。出土総数は151点である。1725・1726・1729～1731・1733は船元Ⅰ～Ⅲ式の縄文を施す。1727・1732～1736・1744は船元Ⅱ式である。1727・1734は、隆帯に沿うように刺突文を施す。1732・1735・1736は、縄文地に刻み目隆帯を施す。1744は垂下隆帯を4



竪穴住居1900

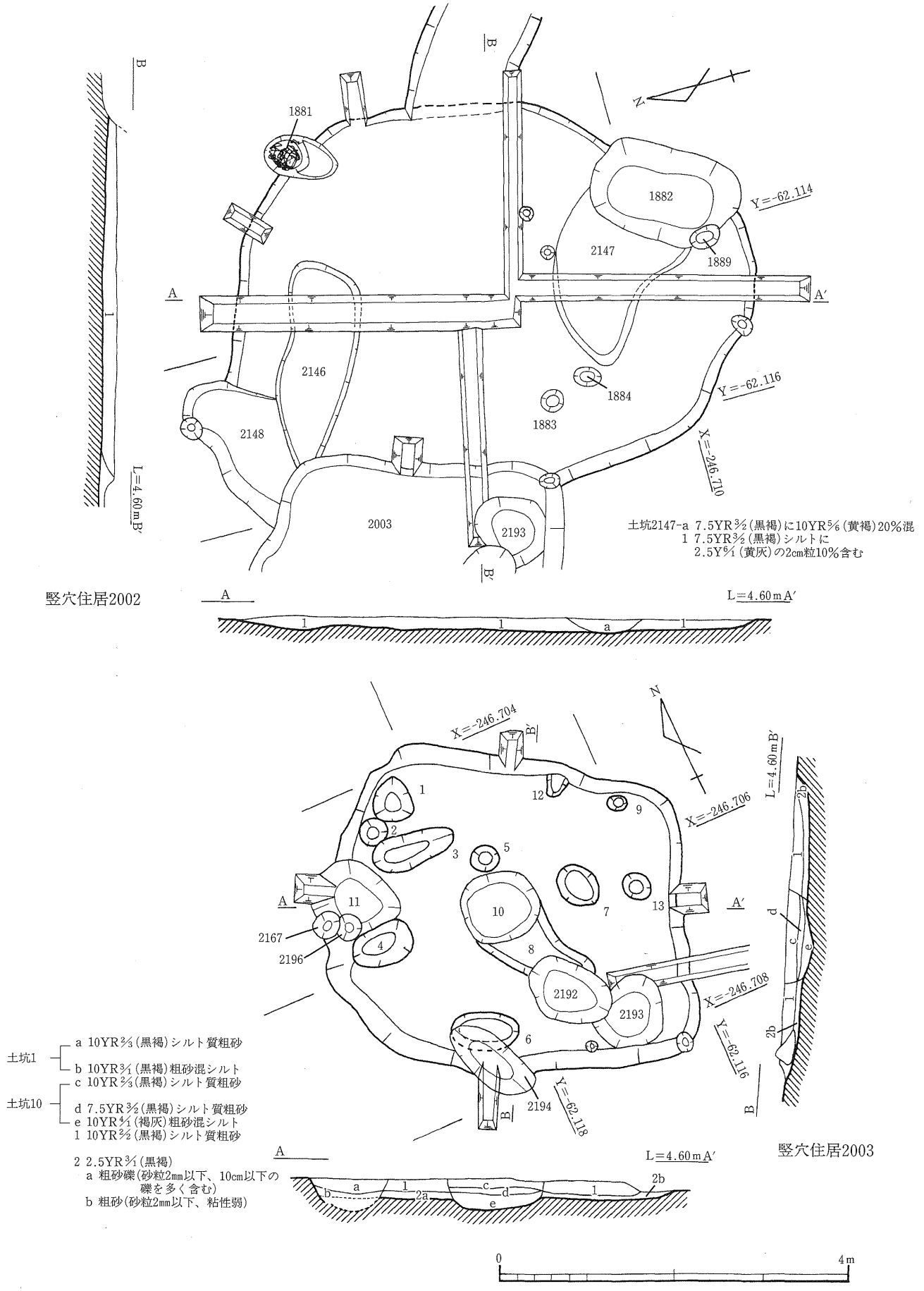


竪穴住居1950

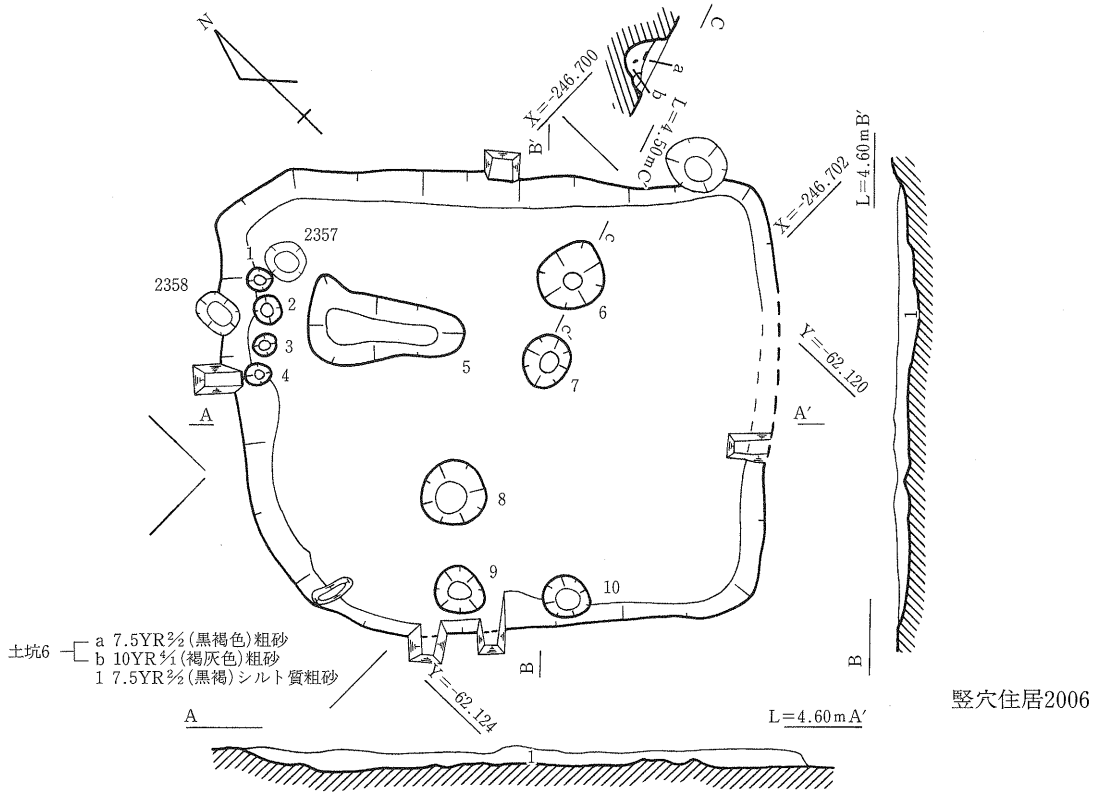
土坑1941-a 10YR3/3(暗褐) 粗砂混シルト
1 7.5YR3/4(褐) 粗砂混シルト

0　2m

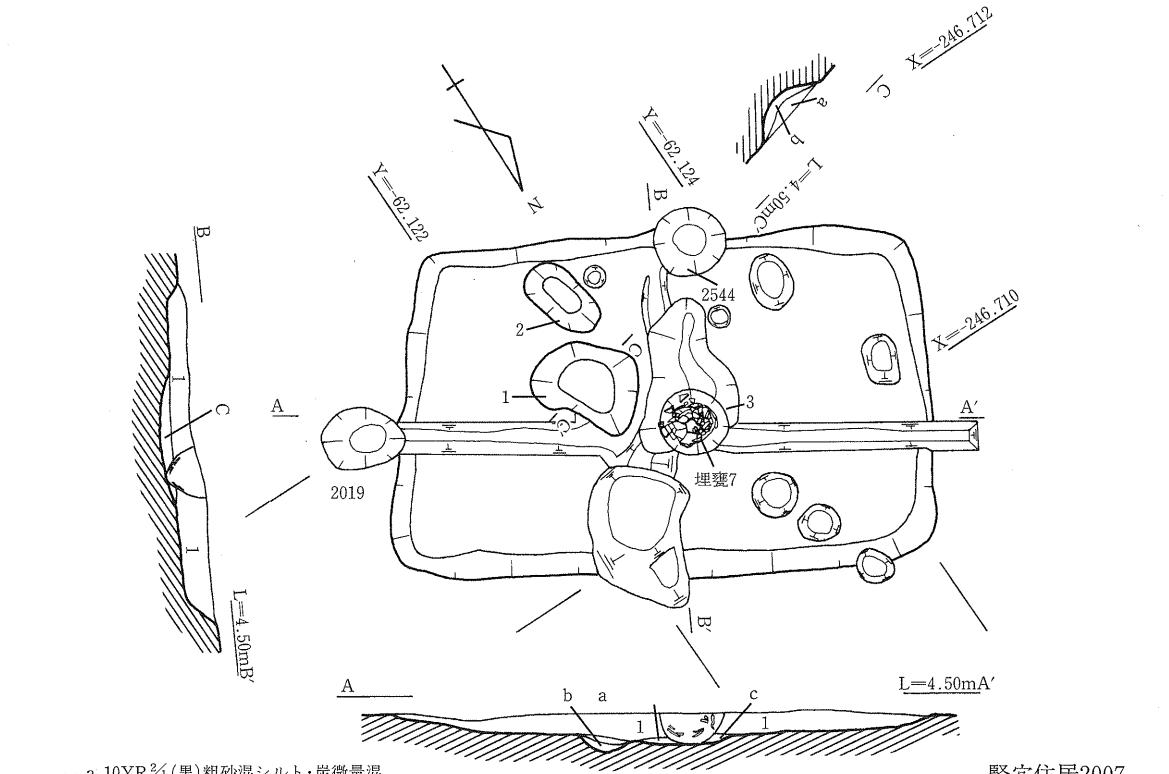
第127図Ⅴ区 12-④区 第７層上面 縄文時代中期 竪穴住居1900・1950平面図・土層図



第128図Ⅴ区12-④区 第7層上面 縄文時代中期竪穴住居2002・2003 平面図・土層図

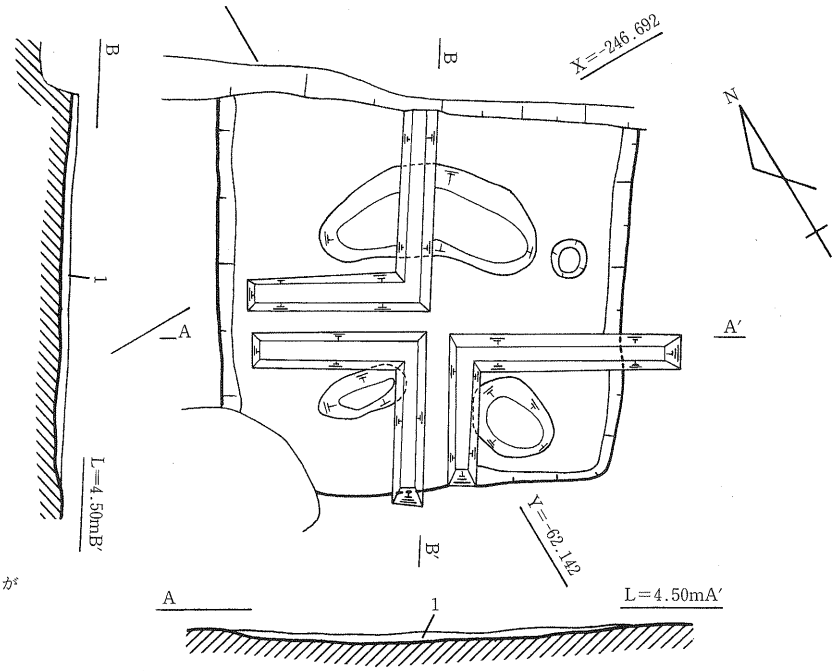


竪穴住居2006



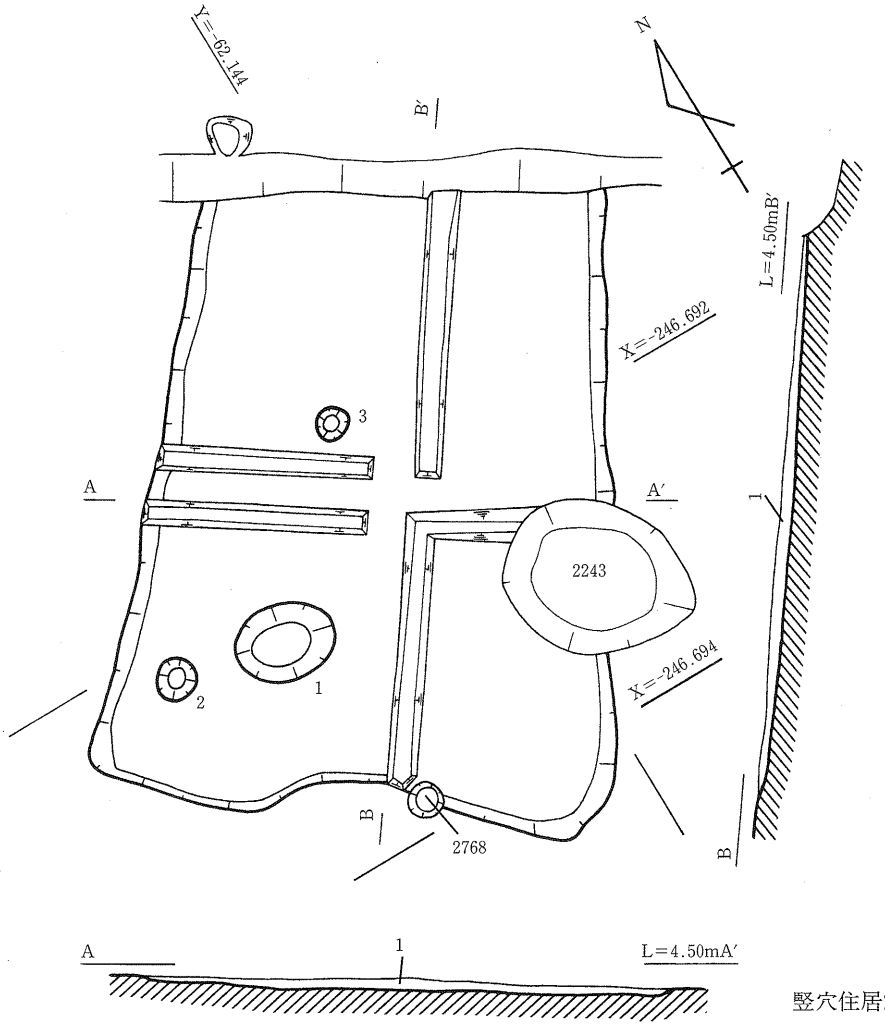
竪穴住居2007

第129図　Ⅴ区 12-④区 第7層上面 縄文時代中期 竪穴住居2006・2007平面図・土層図



竪穴住居2244

1 10YR3/4(暗褐)に10YR4/1(褐灰)が
20%混(4mm～1cmの礫中量混)
礫・シルト

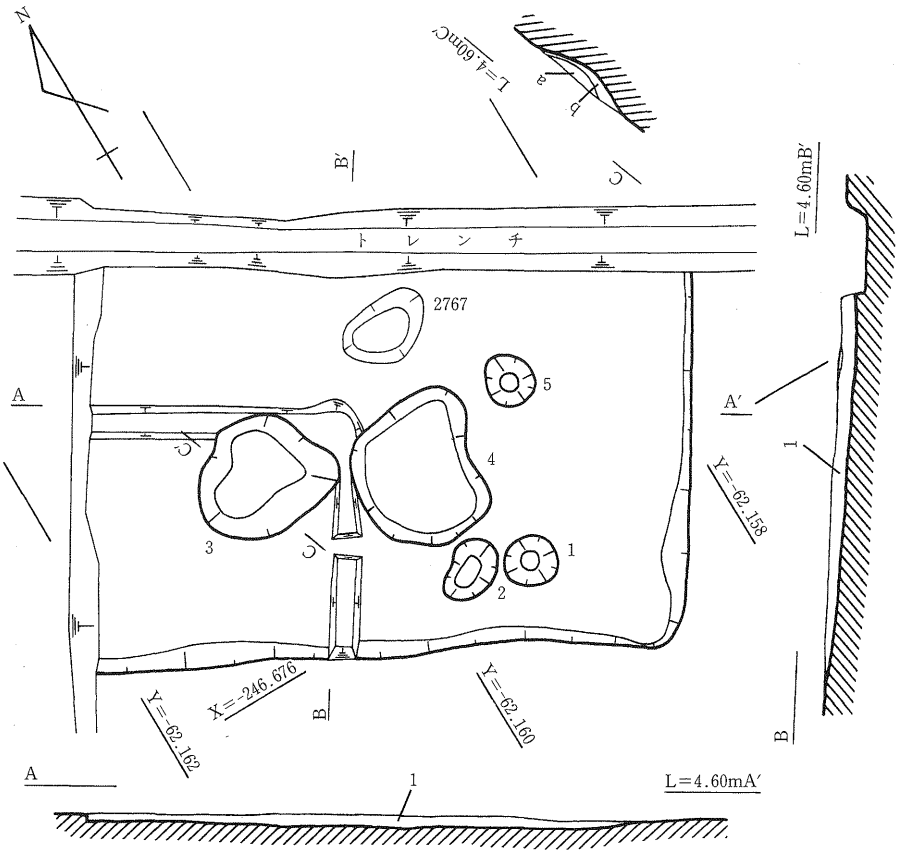


竪穴住居2245

1 10YR2.5/1(黒褐)に10YR3/4(暗褐)混
粗砂混シルト

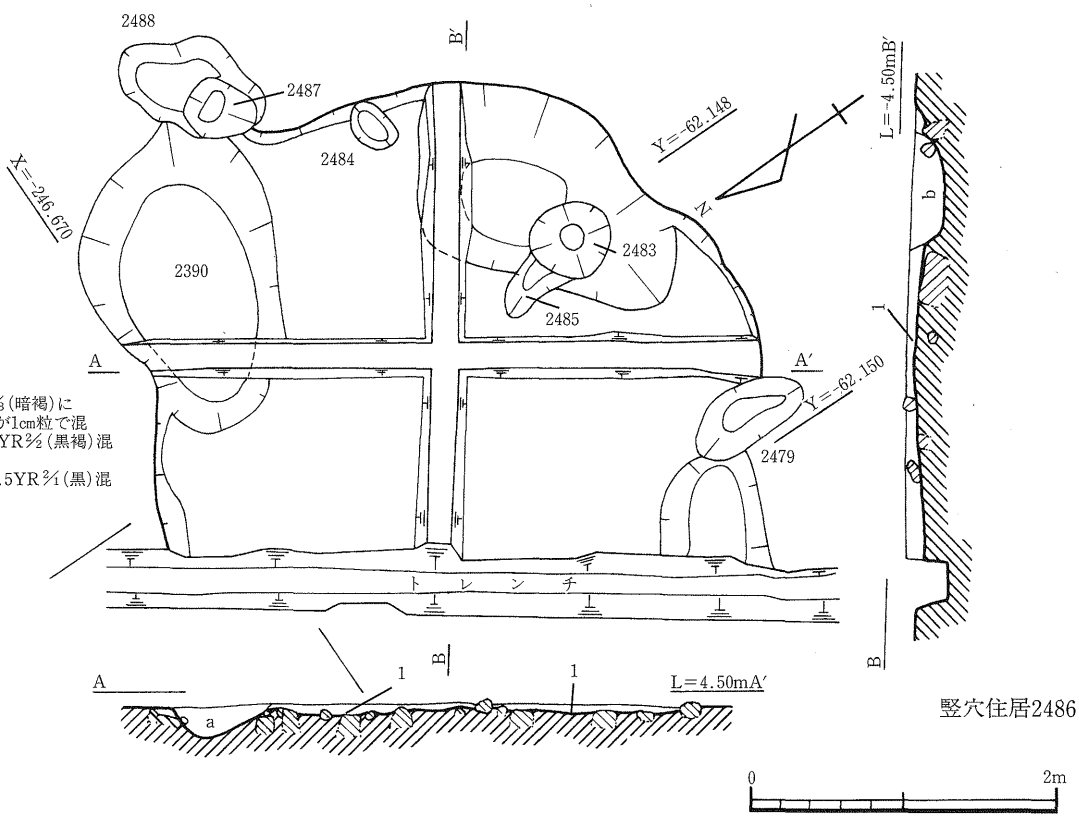
0　2m

第130図　V区 12-④区 第7層上面 縄文時代中期 竪穴住居2244・2245平面図・土層図



竪穴住居2295

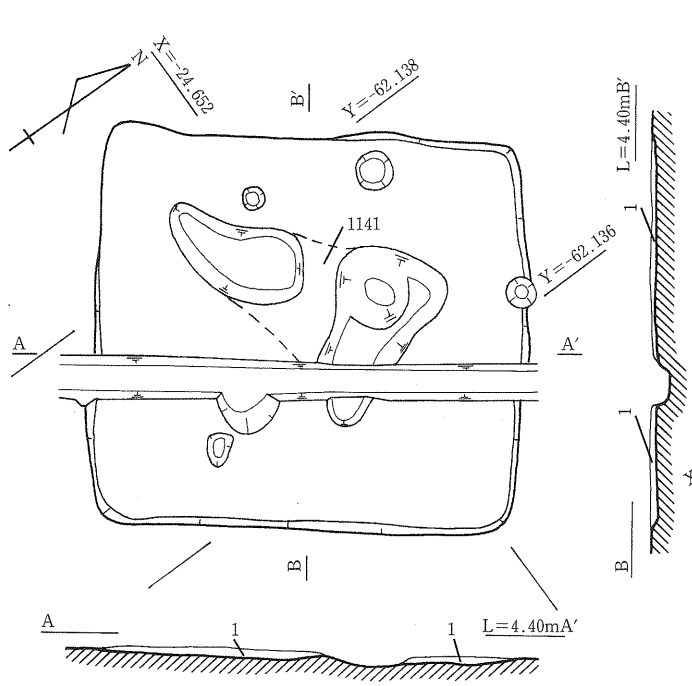
土坑3 ┌ a 7.5YR3/3(黒褐)にN5/(灰)混 炭少量含む・粗砂混シルト
　　└ b 7.5YR3/2(黒褐)にN5/(灰)混 粗砂混シルト
　　1 7.5YR3/2(黒褐)に7.5YR2/1(黒)混ぜ 粗砂



竪穴住居2486

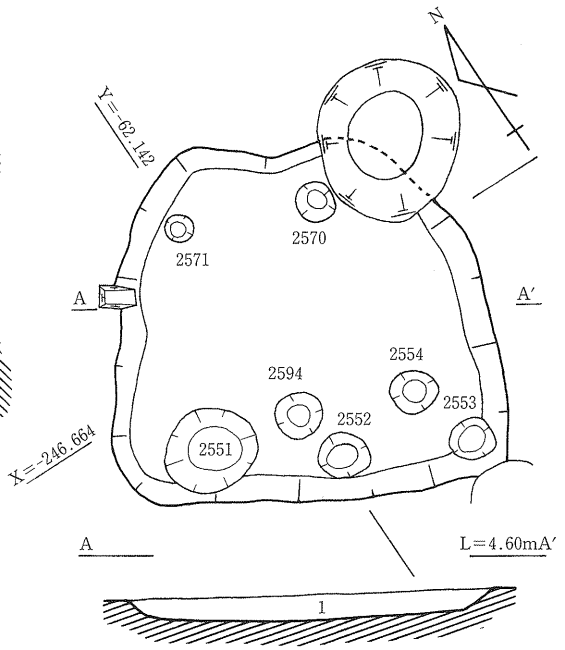
土坑2390－a 7.5YR3/3(暗褐)に
　　N5/(灰)が1cm粒で混
　b 7.5YR4/3(褐)と7.5YR3/2(黒褐)混
　　粗砂混シルト
　1 7.5YR3/3(暗褐)と7.5YR2/1(黒)混
　　粗砂

第131図　Ⅴ区 12-④区 第７層上面 縄文時代中期 竪穴住居2295・2486平面図・土層図



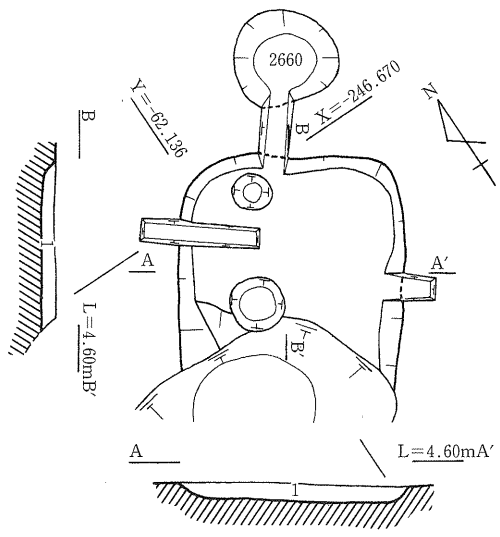
竪穴住居2650

1 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)
粗砂混シルト



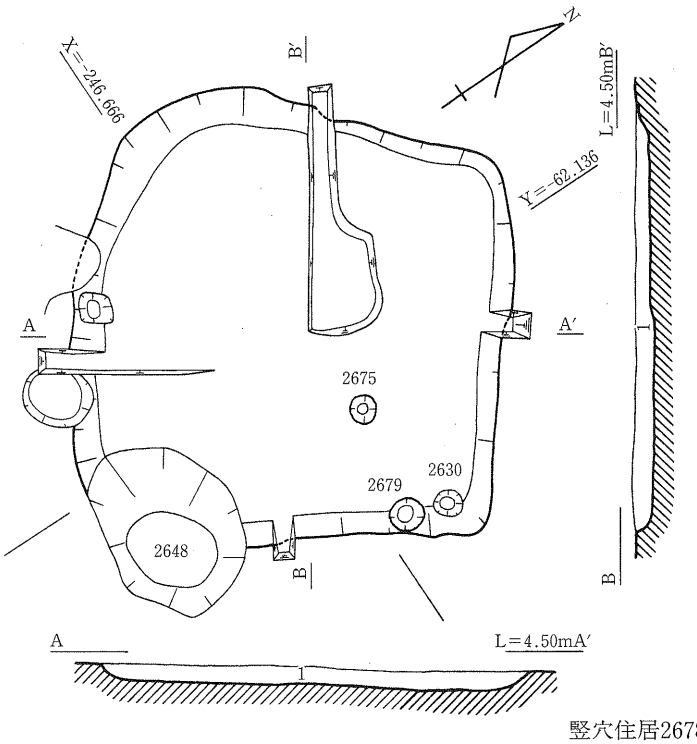
竪穴住居2651

1 10YR3/3(暗褐)に10YR2/1(黒)混
粗砂混シルト



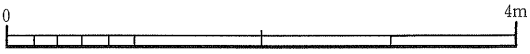
竪穴住居2661

1 10YR3/2(黒褐)
粗砂混シルト



竪穴住居2678

1 10YR3/3(暗褐)に10YR2/1(黒)とN5/(灰)混
粗砂混シルト



第132図　V区 12-④区 第7層上面 縄文時代中期 竪穴住居2650・2651・2661・2678平面図・土層図

条施す。1737・1738・1740・1749・1750は船元III式である。すべて無刻隆帯を施し、半裁竹管による平行沈線を施す。1749・1750は胎土・色調から同一個体で、搬入品であると考えられる。1745～1747は胴部に深浅縄文を施す船元IV式である。1742・1752は帰属時期が不明である。1742は口縁部が肥厚する。1752は平底である。1739・1748は胎土や色調から搬入品と考えられる。1739は屈曲部の隆帯に押圧を施し、その上位には半裁竹管による平行沈線を引く。1748は勝坂式であると考えられる。1751は文様から判断するば東海系の土器で、半裁竹管による平行沈線を施す。このほか撚糸文をもつ1728や、口縁端部が窪む1743があるが混入の可能性がある。

竪穴住居2678の時期は、埋土出土土器から判断して船元IV式期であると考えられる。

埋甕（埋設土器遺構）

調査区中央部、25mの間隔をあけ標高4.35mで２基検出した。

埋甕７（第133図、PL.33・119）

掘方の平面プランは円形で、規模は直径50cm、深さ22cmである。深鉢は正位の状態で据えられる。口縁部から体部にかけて残存するが、底部は打ちかいている。掘方埋土と土器内に堆積する土とは別である。

埋設土器は、船元IV式の深鉢である(2093)。口縁部から体部にかけては直立して伸びる。体部外面は縦方向の深浅縄文を施す。

埋甕８（第133図、PL.33・119）

竪穴住居2007の埋土の中央部上面で検出した。上部を削平される。掘方の平面プランは円形で、規模は、直径52cm、深さ15cmである。深鉢は正位の状態で据えられる。土圧により外側に押しつぶされている。深鉢は口縁部が存在せず、底部のみである。掘方埋土と土器内に堆積する土とは別である。

埋設土器は、船元IV式の深鉢である(2094)。底部は穿孔される。体部外面は縦方向の深浅縄文を施す。

土坑

土坑1881（第135・142図）

調査区中央東寄りに位置する。竪穴住居1950と竪穴住居2003の間に位置する。長軸85cm×短軸49cm、深さ９～13cmの楕円形土坑である。縄文土器1795が折りかさなった状態で出土した。土器の上には礫がのっている。保存状態は悪い。

土坑1922（第134図）

調査区東側中央部分、竪穴住居1950の北側に位置し、径2.05m×2.0m、深さ92cmの円形土坑である。底面中央部には、石により囲まれた径40cm、深さ40cmの土坑が存在する。

堆積土は大きく７層に区分できる。底面に２層堆積したあと、土砂の流れ込みがあり、のちに順次３層が堆積する。遺物は出土しない。

土坑2340（第134・143図、アルカ第３図、PL.115・144）

調査区西南に位置する楕円形の土坑である。堆積土は３層に区分できる。遺物は多い。1870・1872は、東日本の土器である。両極石器（アルカ11）が１点出土している。垂直打撃痕が認められる。

土坑2371（第135・144図、PL.118）

調査区中央南寄りに位置する。長軸46cm、短軸34cm、深さ9cmの楕円形の土坑である。出土した土器は、体部外面に深浅縄文を持つ1898・1899が出土する。

土坑2527（第134図、アルカ第4図、PL.33・144）

調査区北側に位置する。円形プランの土坑である。2層に区分でき、下層と上層より各1個二上山サヌカイト原石（アルカ16）が出土した。

土坑2648（第135・148・149図、PL.116・117・119・120）

調査区北部に位置する。竪穴住居2678を切って検出した。長径1.38m×短径1.20m、深さ32cmの楕円形土坑である。堆積土は2層である。2055～2071・2085～2089が出土する。

土坑2760（第134・140・141図、PL.113・117・118）

調査区中央部、竪穴住居2678の南に位置する土坑である。土坑2665に切られる。堆積土は7層に区分できる。各層より1753～1793の遺物が出土する。

包含層第6層出土遺物（第149～154図、PL.120～126）

包含層から多くの遺物が出土した。船元式土器、東海系の土器、東日本の土器がある。

鷹島式土器は2150である。

2095～2111・2118は、東海系の土器である。2095は山田平式で、体部に沈線があり、三角形の刺突がある。2096・2099は北屋敷式である。2097・2098は沈線文をもつ。2100は前畑式から北浦C式である。2101・2110は山田平式である。2106は平行沈線をもつ。2109は三角文をもつ。2111は波状口縁である。

2113～2117・2120～2142は東日本の土器である。2116・2123・2124・2130・2139～2141は勝坂式、2117は狢沢式、2125は五領台式である。2128は東海系の土器である。2132は土偶の足か。

2143～2233は船元式土器である。

遺物No.	器　種	出土地区	遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材	備　　考
2278	磨石・敲石	12-4 G7 f3	住居2007・上層	10.60	9.80	5.00	752.18	砂岩	
2279	磨石	12-4 G7 f3	住居2007・下層	9.00	8.20	3.60	322.72	泥岩ノジュール	
2280	敲石	12-4 G6 l24	住居2245・土坑-1	11.10	8.70	2.90	413.91	砂岩	
2281	磨石・敲石	12-4 G6 i18	住居2661	12.00	10.20	4.00	736.25	砂岩	
2282	磨石・敲石	12-4 G6 i18	住居2661	10.40	10.10	4.60	680.78	砂岩	
2283	台石	12-4 G7 c3	住居1900	34.60	21.20	7.60	6,000.00	砂岩	田辺層群砂岩
2284	台石	12-4 G7 f3	住居2007内土坑-3	22.40	17.20	6.30	3,500.00	砂岩	
2285	台石	12-4 G7 f3	住居2007・下層	36.60	26.30	12.40	18,000.00	砂岩	田辺層群砂岩・平行ラミナ有
2286	磨石・敲石	12-4 G6 j15	土坑2636	12.10	11.10	6.00	1,121.21	砂岩	
2287	大型剝片	12-4 G6 i13	土坑2773	12.90	9.35	1.15	168.66	サヌカイト	
2288	石棒	12-4 G6 g20	第6層	23.30	2.60	2.50	247.34	凝灰岩	純粋の泥岩ではない
2289	磨石・敲石	12-4 G6 h17	第6層上面	(13.3)	11.20	3.05	698.25	砂岩	2889と同じタイプ
2290	磨石・敲石	12-4 G6 k19	第6層上面	12.60	9.90	4.65	813.67	粗粒砂岩	礫混じりの砂岩
2291	磨石＋敲石	12-4 G6 i15	第6層	13.00	11.70	6.10	1,339.59	粗粒砂岩	礫混じりの砂岩
2292	敲石	12-4 G6 n21	第6層	11.00	7.10	4.10	458.45	粗粒砂岩	礫混じりの砂岩

第8表　縄文時代中期出土石器一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
1179	G 6	d 23	土坑	不定形	1.30	0.85	0.54													0
1780	G 7	f 5	土坑	不定形	4.00	1.50～1.94	0.36～0.44													0
1808	G 7	f 4	土坑	円形	0.55	0.55	0.34													0
1809	G 7	f 4	Pit	円形	0.33	0.30	0.14													0
1811	G 7	g 4	Pit	円形	0.25	0.22	0.05													0
1812	G 7	g 4	Pit	円形	0.24	0.23	0.16													0
1813	G 7	g 4	Pit	円形	0.24	0.20	0.05													0
1814	F 7	t 3	土坑	不定形	1.00	0.33～0.53	0.17						1					1		2
1816	F 6	u 25	Pit	円形	0.44	0.42	0.32													0
1820	F 6	v 25	土坑	半円	1.10	0.85	0.36													0
1821	F 6	v 25	土坑	隅丸方形	1.10	0.70	0.02													0
1822	F 7	v 1	土坑	楕円形	0.82	0.50	0.06													0
1823	F 7	v 1	Pit	円形	0.45	0.43	—													0
1825	F 7	u 2	土坑	円形	0.50	0.45	0.07													0
1826	F 7	u 1	土坑	楕円形	2.30	1.80	0.02～0.15													0
1827	F 7	u 2	土坑	楕円形	0.50	0.30	0.07													0
1828	F 7	u 2	土坑	楕円形	1.50	0.92	0.04～.11													0
1838	F 7	x 1	土坑	半円	1.50	0.60以上	0.21													0
1839	F 7	v 1	Pit	円形	0.22	0.20	—													0
1840	F 7	w 2	土坑	円形	0.52	0.50	0.10													0
1842	F 7	w 2	土坑	円形	0.70	0.70	0.03													0
1843	F 7	w 2	土坑	楕円形	3.30	2.20	0.06											1		1
1845	F 7	w 3	土坑	楕円形	0.50	0.35	0.08													0
1846	F 7	x 3	土坑	隅丸三角形	0.77	0.64	0.12													0
1848	F 7	x 3	土坑	隅丸方形	2.25	2.10	0.16													0
1851	F 7	s 5	土坑	円形	0.64	0.60	0.09													0
1852	F 7	s 5	Pit	円形	0.35	0.33	0.31													0
1854	F 7	s 4	Pit	円形	—	0.37	0.06													0
1855	F 7	s 4	Pit	円形	0.47	0.42	0.09													0
1858	F 7	s 5	土坑	楕円形	0.62	0.47	0.11													0
1859	F 7	t 5	土坑	円形	0.68	0.57	0.09													0
1860	F 7	y 4	土坑	楕円形	1.50	0.95	0.28													0
1861	G 7	a 3	土坑	楕円形	0.60	0.46	0.39													0
1862	G 7	a 3	Pit	円形	0.45	0.40	0.17													0
1864	F 6	w25	土坑	不定形	6.50	1.05～1.50	0.07											1		1
1865	F 6	w25	土坑	隅丸三角形	0.70	0.67	0.21													0
1866	F 6	w25	Pit	円形	0.32	0.31	0.22													0
1867	F 6	w25	土坑	隅丸三角形	1.14	0.85	0.18													0
1868	F 6	w25	土坑	楕円形	1.20以上	1.07	0.34													0
1869	F 6	x 24	土坑	円形	0.60	0.58	0.32											8		8
1870	F 7	w 4	Pit	円形	0.38	0.32	0.11													0
1871	F 7	x 5	土坑	隅丸方形	1.20	1.08	0.07～0.20													0
1872	F 7	x 4	土坑	半円	0.53	0.42以上	0.14													0
1873	F 7	w 5	土坑	楕円形	0.60	0.25～0.35	0.11													0
1874	F 7	x 4	土坑	楕円形	1.10	1.00	0.18													0
1875	F 6	x 25	Pit	円形	0.19	0.18	0.07													0
1876	F 6	x 24	Pit	円形	0.20	0.17	0.14													0
1877	F 6	x 24	Pit	円形	0.19	0.16	0.11													0
1878	F 7	w 4	Pit	円形	0.30	0.30	0.15													0
1880	F 7	y 2	土坑	不定形	2.67	1.36～1.60	0.54～0.79											3	1794	3
1881	F 7	d 2	土坑	楕円形	0.85	0.49	0.09～0.13						66						1795	66
1882	G 7	d 3	Pit	楕円形	0.25	0.18	—													0
1883	G 7	d 3	Pit	円形	0.25	0.25	—													0
1884	G 7	d 3	土坑	楕円形	0.50	0.30	—													0
1885	G 6	a 24	Pit	円形	0.16	0.16	—													0
1887	G 6	a 25	Pit	円形	0.20	0.18	0.04													0
1888	F 7	d 3	土坑	楕円形	1.65	1.10	0.22													0
1889	G 7	d 3	Pit	楕円形	0.35	0.23	—													0
1890	F 6	y 25	土坑	不定形	2.30	0.77～1.50	0.05～0.19											8		8
1891	F 7	w 4	Pit	円形	0.31	0.27	0.19													0
1893	F 7	x 4	土坑	長楕円	1.25以上	0.44	0.05													0
1897	F 6	x 25	Pit	円形	0.25	0.25	0.13													0
1898	F 6	x 25	土坑	不定形	2.20	0.56～0.74	0.13～0.19													0
1899	F 6	x 25	土坑	楕円形	0.57	0.44	0.10													0
1901	F 6	x 25	Pit	楕円形	0.37	0.30	0.27													0
1904	F 7	x 1	土坑	楕円形	2.20	1.50	0.06													0
1905	F 7	x 1	Pit	円形	0.44	0.40	0.12													0
1906	F 6	y 25	土坑	不定形	2.30	0.70～1.50	0.20～0.39											6		6
1908	F 7	w 1	土坑	不定形	1.45	0.40～0.62	0.14													0
1909	F 7	x 1	土坑	楕円形	0.58	0.48	0.13													0
1910	F 7	x 1	土坑	不定形	1.00	0.70	0.11						1					3	1796	4
1911	F 7	y 2	土坑	半円	1.00	0.70	0.16											1		1
1912	F 7	x 1	土坑	不定形	2.25	0.56～0.84	0.13～0.15													0
1913	F 7	x 2	土坑	不定形	0.87	0.49	0.10													0
1914	F 7	x 2	土坑	不定形	0.95	0.70	0.15						1						1797	1

第9－1表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

※ピットと土坑は、大きさにより、50cm以上と以下で区分した。

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
1915	F 7	x 2	土坑	隅丸方形	0.55	0.40	0.07													0
1916	F 7	y 3	Pit	円形	0.26	0.24	0.06													0
1917	F 7	y 3	土坑	不定形	1.65	1.16	0.06											9		9
1919	F 7	y 2	Pit	円形	0.44	0.40	0.04											3		3
1920	F 7	y 2	Pit	楕円形	0.34	0.25	0.09													0
1921	F 7	y 1	土坑	楕円形	1.50	0.71	0.06													0
1922	G 7	a 1	土坑	円形	2.05	2.00	0.92													0
1923	F 7	y 3	土坑	不定形	1.30	0.50～0.75	0.15～0.27													0
1924	G 7	a 3	土坑	楕円形	2.10	1.95	0.39						1					9	1798	10
1929	G 7	b 4	Pit	円形	0.28	0.25	—													0
1930	G 7	b 4	土坑	隅丸方形	1.82	1.40	0.31							1				1		2
1931	G 7	a 5	土坑	不定形	3.35以上	1.50	0.15						1					9	1799	10
1932	G 7	a 5	土坑	不定形	1.30以上	0.50～0.70	—				3							8	1800	11
1933	G 7	b 6	Pit	楕円形	0.24	0.18	0.08													0
1934	G 7	b 5	Pit	円形	0.24	0.22	0.11													0
1935	G 7	b 5	Pit	円形	0.38	0.34	0.14													0
1936	G 7	b 5	Pit	円形	0.25	0.25	0.12													0
1937	G 7	c 5	Pit	円形	0.30	0.30	—													0
1938	G 7	b 4	Pit	円形	0.20	0.19	—													0
1941	G 7	c 2	土坑	楕円形	1.20	0.60	—			6		3	10				1	9	1801～1804	29
1942	G 7	c 3	Pit	円形	0.30	0.20	—													0
1942	G 7	c 3	Pit	円形	0.30	0.20	0.11													0
1944	G 7	c 4	土坑	円形	0.65	0.60	0.14						4					2	1805・1806	6
1945	G 7	c 4	土坑	不定形	2.30	1.75	0.30													0
1946	G 7	d 4	土坑	円形	1.45	1.30	0.16							1			1	1	1807・1808	3
1947	G 7	d 4	土坑	不定形	2.45	1.00以上	0.16						1				14		1809～1812	15
1948	G 7	d 5	土坑	楕円形	4.00	2.80	0.17											3		3
1951	G 7	e 5	Pit	円形	0.25	0.20	0.04													0
1952	G 7	e 5	Pit	円形	0.20	0.20	—													0
1969	G 7	e 4	土坑	楕円形	0.70	0.60	0.69					1						6	1813	7
1975	G 7	e 3	土坑	楕円形	1.40	0.90	0.16			1			2					7	1814	10
1976	G 7	e 3	土坑	半円	1.45	1.15	0.18		1	3			5					3	1815～1818	12
1977	G 7	e 3	土坑	楕円形	1.25	0.95	0.19		1					1				3	1819	5
1978	G 7	e 3	Pit	楕円形	0.45	0.37	0.15			1				1						2
1979	G 7	e 3	土坑	楕円形	0.60	0.46	0.17						1					1		2
1980	G 7	e 4	土坑	隅丸三角形	2.05	1.35	0.04						3	1					1820・1821	4
1982	G 7	e 4	土坑	楕円形	1.90	1.10	—										1	1	1822	2
1984	G 7	e 3	Pit	円形	0.46	0.45	0.19													0
1989	G 7	d 2	土坑	楕円形	0.50	0.36	0.16													0
1991	G 7	e 1	Pit	円形	0.20	0.18	0.19													0
2001	G 7	d 1	土坑	不定形	6.75	2.20～4.65	0.19～0.28											7		7
2008	G 7	h 2	土坑	方形	4.00	3.20	—						3						1874・1875	3
2012	G 7	f 2	土坑	不定形	1.50	1.10	0.38						3					10		13
2013	G 7	f 2	土坑	不定形	0.90	0.87	0.13						1					1		2
2015	G 7	f 2	土坑	円形	0.90	0.80	0.27													0
2019	G 7	f 4	土坑	楕円形	0.65	0.48	0.21													0
2020	G 7	f 4	土坑	楕円形	0.70	0.35	0.17													0
2024	G 7	f 4	土坑	不定形	1.40	1.25	0.14													0
2025	G 7	f 4	Pit	楕円形	0.35	0.30	0.10													0
2029	G 7	f 5	土坑	楕円形	0.50	0.45	0.10													0
2030	G 7	f 5	土坑	楕円形	0.50	0.40	0.19													0
2031	G 7	f 4	Pit	円形	0.30	0.30	—													0
2032	G 7	g 4	Pit	楕円形	0.34	0.26	0.09													0
2033	G 7	g 4	Pit	円形	0.30	0.30	0.19													0
2034	G 7	g 4	土坑	不定形	2.00	0.80～1.00	—													0
2035	G 7	g 4	土坑	不定形	1.80	0.30～0.55	0.01～0.14													0
2036	G 7	g 2	土坑	楕円形	2.60	0.55	0.10～0.28													0
2037	G 7	g 2	土坑	不定形	2.00以上	1.85	0.16													0
2041	G 7	g 3	Pit	円形	0.47	0.40	0.35													0
2044	G 7	g 3	Pit	円形	0.23	0.24	0.04													0
2045	G 7	g 3	Pit	円形	0.27	0.26	0.09													0
2046	G 7	g 3	Pit	円形	0.25	0.24	0.04													0
2047	G 7	g 3	Pit	円形	0.30	0.25	0.16													0
2048	G 7	h 3	土坑	不定形	0.51	0.30	0.06～0.14													0
2049	G 7	h 3	Pit	円形	0.25	0.23	0.14													0
2050	G 7	g 3	土坑	楕円形	1.60	0.42	0.12～0.21													0
2052	G 7	h 4	土坑	楕円形	0.55	0.25	0.50													0
2053	G 7	h 4	Pit	円形	0.40	0.32	0.19													0
2054	G 7	h 4	Pit	円形	0.24	0.20	0.10													0
2055	G 7	h 4	土坑	不定形	1.85	0.70～1.10以上	0.16～0.18													0
2056	G 6	h25	Pit	円形	0.27	0.20	—													0
2056	G 6	h25	土坑	円形	0.90	0.90	—													0
2058	G 7	h 4	土坑	楕円形(半)	1.15	0.25以上	0.20													0
2059	G 7	h 3	Pit	楕円形	0.30	0.27	0.10													0
2060	G 7	h 3	Pit	円形	0.28	0.27	0.07													0

第9－2表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2061	G 7	h 3	Pit	円形	0.26	0.26	0.14													0
2062	G 7	h 3	Pit	楕円形	0.27	0.24	0.15													0
2063	G 7	h 4	Pit	楕円形	0.29	0.23	0.09													0
2064	G 7	i 4	Pit	楕円形	0.30	0.24	0.08													0
2065	G 7	i 3	Pit	楕円形	0.36	0.29	0.03													0
2066	G 7	i 3	土坑	円形	0.20	0.20	0.09													0
2071	G 6	g25	Pit	円形	0.30	0.30	—													0
2072	G 6	g24	土坑	楕円形	0.78	0.62	0.23													0
2073	G 6	h25	土坑	楕円形	0.80	0.73	—													0
2074	G 6	h24	土坑	楕円形	0.72	0.60	0.19													0
2075	G 6	h24	土坑	不定形	1.30	0.80	0.50													0
2076	G 6	h23	Pit	円形	0.20	0.20	—													0
2077	G 6	h24	Pit	円形	0.20	0.20	—													0
2081	G 6	h24	土坑	楕円形	1.10	0.70	—					7	1	2		3	1	5	1823・1824	19
2083	G 6	h24	土坑	不定形	1.15	0.75	0.28			2				5	3			4	1825	14
2083	G 6	h25	Pit	円形	0.32	0.27	0.09													0
2084	G 6	h24	Pit	楕円形	0.29	0.24	0.04													0
2088	G 6	g25	Pit	楕円形	0.50	0.30	—													0
2089	G 6	g25	土坑	円形	0.80	0.70	—													0
2090	G 6	g25	Pit	円形	—	0.35	—													0
2092	G 6	g25	土坑	円形	0.90	0.40	—													0
2093	G 6	g25	土坑	円形	0.60	0.60	—													0
2094	G 6	g25	Pit	円形	0.40	0.30	—													0
2095	G 6	h25	Pit	円形	0.48	0.48	0.11					1	1							2
2099	G 6	h25	土坑	不定形	0.95	0.90	0.14													0
2100	G 7	h 1	土坑	不定形	2.20	1.40	0.22													0
2102	G 7	h 1	土坑	楕円形	1.55	1.00	0.29											6		6
2103	G 7	h 1	Pit	円形	0.30	0.30	0.18													0
2104	G 7	h 1	土坑	楕円形	0.52	0.38	0.15													0
2106	G 7	i 1	Pit	円形	0.25	0.23	0.08													0
2107	G 7	i 2	土坑	楕円形	1.55	0.60	0.12													0
2108	G 7	i 2	Pit	円形	0.30	0.30	—													0
2109	G 7	i 2	土坑	不定形	1.60	0.62	0.13													0
2111	G 7	h 2	土坑	不定形	1.85	1.30	0.16			1										1
2112	G 6	h25	土坑	楕円形	1.00	0.80	0.27													0
2113	G 7	i 2	Pit	円形	0.30	0.20	—													0
2114	G 7	i 2	土坑	不定形	1.00	0.50	0.08													0
2115	G 7	i 3	土坑	円形	0.55	0.52	0.08													0
2117	G 7	h 1	土坑	方形	1.60	1.20	—													0
2120	G 6	i 25	土坑	楕円形	0.60	0.40	—													0
2121	G 6	i 25	土坑	不定形	1.50	0.30	—													0
2123	G 6	i 25	Pit	円形	0.20	0.20	—													0
2124	G 7	i 1	土坑	楕円形	1.10	0.40	0.02													0
2125	G 7	i 1	土坑	楕円形	1.10	0.63	0.30													0
2126	G 7	i 2	土坑	不定形	1.60	0.35~1.12	0.22						1							1
2128	G 7	j 2	土坑	不定形	1.66	1.05	0.09											2		2
2129	G 7	i 2	土坑	楕円形	0.86	0.60	0.32			1			1						1826	2
2130	G 7	j 1	土坑	不定形	0.80	0.60以上	—													0
2132	G 7	j 2	Pit	円形	0.30	0.30	—													0
2133	G 7	j 2	土坑	楕円形	0.80	0.60	—													0
2134	G 7	j 2	Pit	不定形	0.40	0.30	—													0
2135	G 7	j 2	土坑	円形	0.72	0.70	0.22													0
2136	G 7	j 2	土坑	方形	2.00	0.50以上	—													0
2138	G 7	j 2	土坑	不定形	1.7以上	0.95	0.32											1		1
2139	G 7	j 2	土坑	隅丸三角形	0.62	0.55	0.27													0
2140	G 7	j 3	土坑	隅丸方形	0.50	0.40	—													0
2143	G 7	e 3	土坑	不定形	1.75	1.15	0.59						10			1		10	1827	21
2144	F 6	x25	Pit	円形	0.42	0.40	0.16													0
2145	F 7	u 2	Pit	楕円形	0.48	0.41	0.27													0
2146	G 7	d 2	土坑	不定形	2.23	0.83	0.00													0
2147	G 7	a 3	土坑	不定形	1.55	1.20	0.22						2				2	5	1828	9
2148	G 7	d 2	土坑	楕円形	1.80	1.30	0.15			1	2	2	4		7		1	21	1829~1832	38
2152	G 6	a24	Pit	円形	0.35	0.35	—											3		3
2153	G 6	b25	土坑	楕円形	1.08	0.75	0.19				1		1	1					1833・1834	3
2154	G 6	b25	土坑	楕円形	1.03	0.78	0.03						2				1	1		4
2155	G 6	a25	Pit	不定形	0.40	0.40	0.18							3		2			1835	5
2156	G 7	a 1	土坑	楕円形	0.50	0.31	—													0
2157	G 7	b 1	土坑	不定形	0.75	0.58	0.14						4			1	1	4	1836	10
2158	G 7	b 1	土坑	不定形	1.00	0.94	0.19						1					5	1837	6
2159	G 7	a 1	土坑	楕円形	1.42	0.55	0.06													0
2161	G 7	a 1	土坑	隅丸方形	0.62	0.55	0.08													0
2162	G 7	a 1	土坑	楕円形	1.11	0.70	0.05						2							2
2163	G 7	a 1	Pit	円形	0.48	0.42	—											1		1
2164	F 7	w 6	土坑	円形	2.25	1.95	0.30													0
2169	G 7	b 2	土坑	不定形	3.15	0.70~1.30	0.38											6		6

第9－3表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2169	G 7	b 5	Pit	円形	0.42	0.41	0.14						4					12	1838・1839	16
2170	G 7	c 5	Pit	楕円形	0.24	0.18	0.12													0
2171	G 7	c 5	Pit	円形	0.27	0.25	0.15													0
2192	G 7	k 1	土坑	不定形	2.35	0.85	0.27											2		2
2198	G 7	k 1	Pit	円形	0.12	0.12	0.08													0
2199	G 7	k 1	土坑	不定形	1.95	0.95	0.30				1					1			1840	2
2201	G 7	l 1	土坑	不定形	1.50	0.70	0.25									1				1
2202	G 7	k 1	Pit	楕円形	0.30	0.16	0.05													0
2204	G 7	k 1	土坑	不定形	0.70	0.50	0.24													0
2205	G 7	k 1	土坑	不定形	0.90	0.27	0.25													0
2206	G 7	k 1	土坑	不定形	2.30	0.90	0.21						1				1	5	1841	7
2207	G 7	k 1	土坑	楕円形	0.65	0.55	0.11													0
2208	G 7	j 1	土坑	円形	0.68	0.65	0.11													0
2210	G 7	j 1	Pit	円形	0.30	0.28	0.15													0
2214	G 6	j 25	Pit	楕円形	—	0.30	0.11													0
2215	G 6	j 25	Pit	円形	0.27	0.25	0.09													0
2218	G 6	j 25	Pit	楕円形	0.35	0.20	0.05													0
2219	G 6	j 25	Pit	円形	0.23	0.21	0.05													0
2220	G 6	k 25	Pit	円形	0.23	0.20	0.05													0
2221	G 6	j 25	Pit	円形	0.44	0.36	0.10													0
2222	G 6	i 25	Pit	楕円形(半)	0.42以上	0.36	0.16													0
2227	G 6	j 25	土坑	楕円形	0.58	0.28	0.18													0
2228	G 6	j 25	土坑	楕円形	0.60	0.39	0.20							1				3	1842	4
2230	G 6	j 25	Pit	楕円形	0.45	0.32	0.07													0
2231	G 6	k 25	Pit	楕円形	0.40	0.13	0.04													0
2232	G 6	k 25	Pit	円形	0.22	0.22	0.11													0
2233	G 6	k 25	Pit	楕円形	0.38	0.26	0.24													0
2234	G 6	k 25	Pit	円形	0.25	0.20	0.17													0
2235	G 6	k 25	土坑	楕円形	0.55	0.35	0.16													0
2237	G 7	l 1	土坑	楕円形	1.40	0.55	0.27											3		3
2238	G 7	l 1	Pit	円形	0.45	0.38	—													0
2239	G 7	l 1	土坑	円形	1.10	0.80	0.20													0
2242	—	—	土坑	—	—	—	—			1			1			2		9	1844～1847	13
2243	G 6	k 24	土坑	円形	1.30	1.20	0.21					1		1				5	2049～2052	7
2246	G 6	n 22	土坑	半円	0.76	0.33	0.26							2				1	1843	3
2247	G 7	a 5	土坑	不定形	10.45	1.25～4.20	0.08～0.17													0
2248	G 6	j 23	土坑	不定形	3.25	2.66	0.05													0
2250	G 6	j 23	土坑	不定形	0.70	0.50	0.17													0
2251	G 6	j 23	土坑	楕円形	0.90	0.25	0.17													0
2252	G 6	i 23	土坑	不定形	0.65	0.48	0.14													0
2253	G 6	i 23	Pit	楕円形	0.43	0.30	0.08													0
2254	G 6	i 23	Pit	不定形	0.45	0.38	0.11											3		3
2255	G 6	i 23	土坑	楕円形	0.50	0.35	0.08													0
2256	G 6	i 23	土坑	不定形	0.74	0.55	0.11											4		4
2257	G 6	k 24	土坑	不定形	1.40	0.80	—													0
2258	G 6	k 24	Pit	円形	0.20	0.20	—													0
2259	G 6	k 25	土坑	楕円形	1.45	0.25	0.08													0
2260	G 6	k 25	土坑	不定形	1.25	0.20	0.06													0
2262	G 6	k 24	Pit	円形	0.23	0.20	0.23													0
2263	G 6	m 24	土坑	不定形	1.95	1.50	0.26						1					1		2
2264	G 6	m 24	土坑	楕円形	1.15	0.90	0.26						3			1		18		22
2266	G 6	n 23	土坑	隅丸三角形	1.13	0.92	0.11						8	1				2		11
2267	G 6	m 23	Pit	円形	0.32	0.30	0.28						6					14		20
2269	G 6	m 22	土坑	円形	0.55	0.47	0.21				1		6					4	1850・1181	11
2270	G 6	n 22	土坑	不定形	0.96	0.62	0.31						5	3					1853・1854	8
2271	G 6	n 22	Pit	不定形	0.45	0.28	0.05													0
2272	G 6	n 22	土坑	楕円形	1.12	0.60	0.20			1									1848	1
2274	G 6	o 23	土坑	不定形	0.90	0.50	0.09						2					2		4
2275	G 6	p 22	土坑	方形	2.00	1.60	0.17								2				2053・2054	2
2276	G 6	p 21	Pit	円形	0.25	0.23	0.16											3		3
2277	G 6	j 22	土坑	円形	0.90	0.80	0.17						13	2				7		22
2278	G 6	j 22	Pit	円形	0.34	0.28	0.39											2		2
2279	G 6	k 23	土坑	不定形	0.83	0.72	0.13			1			2					1	1849	4
2280	G 7	k 1	Pit	楕円形	0.45	0.32	0.80													0
2281	G 6	k 22	Pit	円形	0.34	0.34	0.19											6		6
2282	G 6	k 22	土坑	不定形	1.10	0.58	0.20			1								1	1876	2
2283	G 6	l 22	土坑	不定形	0.81	0.63	—						1					3		4
2284	G 6	k 22	Pit	円形	0.30	0.30	0.24													0
2285	G 6	k 22	土坑	円形	0.56	0.53	0.14													0
2286	G 6	k 22	Pit	円形	0.28	0.27	0.17													0
2288	G 6	l 22	Pit	円形	0.42	0.40	0.12													0
2289	G 6	l 22	土坑	円形	0.60	0.52	0.12													0
2290	G 6	l 22	Pit	円形	0.48	0.44	0.11													0
2291	G 6	l 22	Pit	円形	0.40	0.39	0.14													0
2292	G 6	o 20	Pit	円形	0.45	0.42	0.16													0

第9－4表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元					里木II	搬入品		不明			
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2293	G 6	o 20	土坑	不定形	0.62	0.50	0.16													0
2294	G 6	p 20	土坑	円形	0.98	0.94	0.20													0
2296	G 6	l 24	Pit	円形	0.27	0.25	0.09													0
2299	G 6	m24	Pit	円形	0.15	0.15	0.10													0
2300	G 6	b 24	Pit	円形	0.38	0.35	—													0
2301	G 6	b 24	土坑	不定形	0.72	0.56	0.18													0
2302	G 6	b 25	Pit	円形	0.36	0.35	0.11													0
2304	G 6	c 25	土坑	楕円形	0.75	0.55	0.13													0
2306	G 6	c 25	Pit	円形	0.10	0.10	—													0
2307	G 6	c 25	土坑	楕円形	0.55	0.45	0.14													0
2308	G 6	c 24	土坑	不定形	1.53	0.98	0.24			1			2				4			7
2309	G 6	c 24	Pit	円形	0.48	0.45	0.20													0
2310	G 6	c 24	土坑	不定形	1.90	1.00	0.03～0.31										22			22
2311	G 6	c 24	土坑	不定形	2.55	1.35	0.24				1		1	1			13	1877		16
2312	G 6	c 24	Pit	円形	0.40	0.37	0.03													0
2313	G 6	c 24	土坑	円形	0.60	0.55	0.06													0
2314	G 6	e 24	Pit	楕円形	0.45	0.27	0.12													0
2315	G 6	c 23	土坑	隅丸三角形	0.95	0.90	0.12													0
2316	G 6	c 23	土坑	不定形	3.15	1.65	0.20							1			24	1873		25
2318	G 6	e 23	土坑	隅丸方形	0.95	0.75	0.38													0
2319	G 6	e 23	土坑	不定形	4.00	3.70	0.08			1		8	6	1			14	1860～1865		30
2321	G 7	d 1	Pit	円形	0.34	0.42	0.09						4				6	1858・1859		10
2325	G 6	e 24	土坑	楕円形	0.90	0.58	0.21													0
2326	G 6	e 25	土坑	—	—	—	—			2			1	3			8	1855・1856		14
2327	G 6	e 24	土坑	円形	0.64	0.54	0.18													0
2329	G 7	g 4	土坑	不定形	1.00	0.75	0.07													0
2340	G 6	m21	土坑	不定形	3.25	1.15	0.22			6	1	6	39	4		2	1	105	1866～1872	164
2341	G 6	m21	土坑	楕円形	1.00	0.42	0.16													0
2342	G 6	m21	土坑	楕円形	0.72	0.46	0.20													0
2343	G 6	i 23	土坑	不定形	0.63	0.54	0.16			2							1			3
2345	G 6	b 25	土坑	不定形	8.25	6.55	0.09～0.15	1		1		1	3				1	6	1878～1880	13
2350	G 6	i 24	Pit	円形	0.27	0.25	0.12													0
2355	G 7	c 4	Pit	円形	0.15	0.14	—													0
2356	G 6	a 25	土坑	楕円形	0.60	0.28	—													0
2357	G 6	f 25	Pit	円形	0.32	0.30	—													0
2358	G 6	f 25	Pit	楕円形	0.37	0.27	—													0
2360	G 7	c 3	Pit	円形	0.11	0.05	—													0
2362	G 7	c 3	Pit	円形	0.10	0.09	—													0
2363	F 6	x 25	土坑	不定形	3.16	0.62～1.70	0.10～0.12													0
2366	G 6	c 24	土坑	不定形	0.90	0.62	0.11													0
2369	G 6	c 24	土坑	不定形	2.60	1.90以上	0.13					5	4	18		5		82	1881～1890	114
2370	G 6	m23	土坑	不定形	2.00	1.05	0.07			2	3	4	5	2		3		6	1891～1896	25
2371	G 6	n 22	Pit	円形	0.40	0.36	0.09						3	13				5	1898・1899	21
2372	G 6	m24	Pit	円形	0.25	0.22	0.09											1		1
2373	G 6	o 22	土坑	方形	1.95	1.40	0.22			2	1		15					44	1900～1902	62
2374	G 7	d 1	土坑	楕円形	1.62	0.85	0.28			1							1	11	1852	13
2375	G 6	h 23	Pit	円形	0.40	0.30	—			1			4					13	1857	18
2376	G 6	k 22	Pit	円形	0.20	0.20	0.30											1		1
2377	G 6	i 22	土坑	隅丸方形	0.86	0.70	0.12		1	1	1		3			1		16	1897	23
2378	G 6	o 19	土坑	不定形	0.80	0.60	0.25						1	1				1	2076・2077	3
2379	G 6	o 19	土坑	不定形	0.72	0.65	0.08													0
2380	G 6	o 18	土坑	楕円形	0.85	0.35	0.15													0
2381	G 6	o 17	Pit	円形	0.32	0.26	0.22											3		3
2383	G 6	n 19	Pit	円形	0.37	0.35	0.20				1		5					3	2079	9
2384	G 6	l 18	Pit	楕円形	0.45	0.28	0.24											3		3
2386	G 6	l 18	Pit	円形	0.47	0.45	0.09													0
2389	G 6	l 18	Pit	円形	0.30	0.30	0.15													0
2390	G 6	l 18	土坑	不定形	1.20	1.00	0.14			1								2		3
2392	G 6	l 18	土坑	隅丸方形	0.75	0.65	0.16			1								1		2
2394	G 6	l 17	土坑	不定形	0.70	0.35	0.18～0.27													0
2395	G 6	k 18	土坑	楕円形	0.62	0.37	0.28				1							4		5
2396	G 6	n 17	土坑	不定形	1.45	1.15	0.05													0
2397	G 6	m17	Pit	円形	0.22	0.19	0.15													0
2398	G 6	l 18	Pit	円形	0.30	0.30	0.15													0
2399	G 6	m17	Pit	円形	0.27	0.25	0.16													0
2401	G 6	n 17	土坑	不定形	0.68	0.45	0.21													0
2402	G 6	m17	Pit	円形	0.47	0.45	0.13													0
2403	G 6	l 17	Pit	円形	0.32	0.28	0.03													0
2404	G 6	l 17	Pit	隅丸三角形	0.38	0.28	0.11													0
2405	G 6	m16	Pit	円形	0.38	0.37	0.14											4		4
2406	G 6	m16	土坑	不定形	0.60	0.50	0.15						4					4		8
2407	G 6	m16	土坑	不定形	0.52	0.43	0.15													0
2408	G 6	m16	Pit	円形	0.37	0.35	0.11											3		3
2409	G 6	m16	土坑	楕円形	0.50	0.40	0.10													0
2410	G 6	m16	Pit	円形	0.36	0.36	0.07													0

第９－５表　Ⅴ区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鹿島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2411	G 6	m16	Pit	円形	0.43	0.40	0.09													0
2412	G 6	m16	Pit	円形	0.36	0.33	0.06													0
2413	G 6	m16	土坑	円形	0.65	0.65	0.09													0
2414	G 6	m16	土坑	円形	0.51	0.50	0.14											4		4
2415	G 6	m16	Pit	楕円形	0.43	0.32	0.15											2		2
2416	G 6	n16	Pit	楕円形	0.43	0.29	0.07											7		7
2417	G 6	m16	土坑	隅丸方形	0.54	0.52	0.06													0
2418	G 6	m15	Pit	円形	0.45	0.40	0.06													0
2419	G 6	m15	Pit	楕円形	0.38	0.28	－													0
2420	G 6	m15	土坑	楕円形	0.65	0.45	0.15			3								1	1903・1904	4
2421	G 6	l16	Pit	円形	0.43	0.42	0.15													0
2422	G 6	m15	土坑	不定形	0.86	0.40	0.14			2								1	1905	3
2423	G 6	m15	Pit	楕円形	0.47	0.35	0.16													0
2424	G 6	l15	土坑	楕円形	0.46	0.30	0.08													0
2425	G 6	l15	土坑	楕円形	0.50	0.37	0.09													0
2427	G 6	l15	Pit	円形	0.35	0.34	0.06						2							2
2428	G 6	l15	土坑	楕円形	0.78	0.57	0.11											5		5
2430	G 6	l15	Pit	円形	0.18	0.18	0.13													0
2431	G 6	m14	Pit	円形	0.30	0.29	0.17				1		1					5		7
2432	G 6	l14	土坑	円形	0.55	0.50	0.12													0
2433	G 6	l14	土坑	円形	0.50	0.50	0.12													0
2434	G 6	l14	Pit	円形	0.45	0.45	0.11													0
2437	G 6	l13	Pit	円形	0.42	0.42	0.12											16		16
2439	G 6	l15	土坑	不定形	0.85	0.60	0.08						4					10	1906	14
2440	G 6	k14	Pit	円形	0.30	0.29	0.12													0
2441	G 6	k14	土坑	不定形	1.30	0.80	0.21											3		3
2442	G 6	k14	Pit	円形	0.40	0.35	0.14											5		5
2443	G 6	k14	Pit	円形	0.32	0.32	0.11											1		1
2444	G 6	k14	Pit	円形	0.30	0.30	0.12													0
2444	G 6	k14	土坑	不定形	0.78	0.46	0.12													0
2445	G 6	k14	Pit	円形	0.40	0.40	0.10													0
2446	G 6	k15	Pit	円形	0.34	0.30	0.18													0
2448	G 6	k15	土坑	楕円形	1.50	0.80	0.17											5		5
2449	G 6	k15	Pit	円形	0.29	0.26	－													0
2450	G 6	l15	Pit	円形	0.35	0.33	0.12													0
2452	G 6	j14	土坑	楕円形	0.75	0.53	0.11													0
2453	G 6	k14	Pit	楕円形	0.19	0.15	0.12											2		2
2454	G 6	k14	Pit	楕円形	0.40	0.23	0.13						1					11	2078	12
2455	G 6	j14	Pit	円形	0.24	0.23	0.07													0
2456	G 6	j14	Pit	円形	0.23	0.22	0.08													0
2457	G 6	j14	Pit	円形	0.24	0.24	0.17													0
2458	G 6	l13	土坑	楕円形	0.66	0.52	0.22											13		13
2459	G 6	k13	土坑	円形	0.58	0.49	0.09													0
2460	G 6	k13	Pit	円形	0.25	0.20	0.05													0
2461	G 6	k13	土坑	円形	0.50	0.45	0.07													0
2462	G 6	k13	Pit	円形	0.33	0.33	0.17													0
2463	G 6	k13	Pit	円形	0.25	0.25	0.17						1							1
2464	G 6	m18	土坑	円形	0.64	0.62	0.17			1			8					2	1911	11
2465	G 6	m17	土坑	円形	0.77	0.66	0.17							2				1		3
2466	G 6	l16	土坑	円形	0.50	0.50	0.12											2		2
2470	G 6	l14	Pit	隅丸方形	0.25	0.21	0.11										6			6
2473	G 6	n19	土坑	楕円形	0.70	0.38	0.04													0
2474	G 6	l14	土坑	楕円形	0.85	0.36	0.10											10		10
2475	G 6	l16	土坑	円形	0.68	0.63	0.09											1		1
2478	G 6	m19	土坑	半円	1.50以上	1.50	0.24			4	1		4					10	1908～1910	19
2479	G 6	m19	土坑	楕円形	0.80	0.38	0.11			2								7		9
2480	G 6	m19	土坑	不定形	2.40	1.35～2.10	0.22			12	4	4	50	3		12	1	52	1927～1945	138
2481	G 6	m19	土坑	円形	0.53	0.50	0.14													0
2482	G 6	l19	Pit	不定形	0.43	0.42	0.22													0
2483	G 6	m19	土坑	円形	0.55	0.50	－											2		2
2484	G 6	l19	Pit	楕円形	0.35	0.24	0.21													0
2487	G 6	l18	Pit	不定形	0.47	0.40	0.23													0
2488	G 6	l18	土坑	不定形	1.20	0.60	0.08													0
2491	G 6	l19	土坑	不定形	0.83	0.83	0.15													0
2492	G 6	m20	土坑	不定形	0.55	0.43	0.10													0
2493	G 6	l19	土坑	楕円形	0.87	0.45	0.16													0
2494	G 6	l16	土坑	不定形	1.35	0.57～1.10	0.10											2		2
2495	G 6	m16	土坑	不定形	1.10	0.33～0.75	0.08～0.15											1		1
2497	G 6	m17	Pit	楕円形	0.48	0.39	0.15													0
2498	G 6	m15	土坑	楕円形	2.06	0.80	0.32						2					5		7
2499	G 6	o19	土坑	不定形	0.70	0.65	0.18						1					1		2
2500	G 6	j12	土坑	不定形	1.90以上	1.15	0.10											14		14
2503	G 6	j12	土坑	楕円形	0.71	0.45	0.13													0
2504	G 6	j12	Pit	円形	0.25	0.23	0.16													0
2506	G 6	j12	土坑	楕円形	0.54	0.43	0.40～0.90													0

第9－6表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2507	G 6	j 12	土坑	楕円形	0.50	0.35	0.21													0
2508	G 6	j 13	Pit	円形	0.32	0.30	0.08											3		3
2509	G 6	j 13	Pit	円形	0.35	0.30	0.07													0
2510	G 6	j 13	Pit	円形	0.28	0.23	0.06													0
2511	G 6	k 13	Pit	円形	0.23	0.21	0.10											1		1
2512	G 6	l 20	土坑	不定形	1.98	1.55	0.72			9	1		23			3		32	1912～1919	68
2513	G 6	i 13	土坑	不定形	0.75	0.50以上	0.11											1		1
2515	G 6	i 13	Pit	円形	0.32	0.29	0.07													0
2516	G 6	i 13	Pit	円形	0.25	0.25	0.03													0
2517	G 6	j 13	Pit	楕円形	0.47	0.25	0.09													0
2519	G 6	k 12	Pit	円形	0.23	0.21	0.06													0
2520	G 6	k 12	Pit	円形	0.14	0.15	0.08													0
2521	G 6	k 12	Pit	円形	0.20	0.19	0.18													0
2523	G 6	n 17	土坑	不定形	3.10	2.93	0.10			1			5				1	2	1922～1925	9
2524	G 6	n 18	土坑	隅丸方形	0.51	0.45	0.12													0
2525	G 6	n 18	土坑	楕円形	2.30	1.04	0.19						5					5		10
2526	G 6	k 12	Pit	半円	0.30	0.16以上	0.08													0
2527	G 6	k 12	Pit	円形	0.43	0.40	0.14													0
2530	G 6	k 19	土坑	楕円形	1.10	0.40	0.15											1		1
2531	G 6	l 19	Pit	円形	0.40	0.39	0.21											3		3
2533	G 6	l 16	土坑	不定形	2.35	1.60	0.09						1			1			1920・1921	2
2534	G 6	k 18	土坑	楕円形	1.00	0.69	0.25									3	1	12	1926	16
2537	G 6	m 18	土坑	—	—	—	—			1			3			1		2	1946～1948	7
2539	G 6	m 15	土坑	不定形	2.25	0.75～1.45	0.09						1							1
2545	G 6	l 20	土坑	不定形	2.05	0.50	0.26			5	1	1	5		3		6		1949～1955	21
2546	G 6	l 20	Pit	円形	0.30	0.30	0.13													0
2547	G 6	l 17	Pit	楕円形	0.46	0.37	0.16													0
2548	G 6	k 17	Pit	円形	0.34	0.30	0.27													0
2549	G 6	k 17	Pit	円形	0.32	0.29以上	0.29													0
2550	G 6	k 17	Pit	円形	0.29	0.24	0.03													0
2551	G 6	k 17	土坑	円形	0.75	0.65	0.29													0
2552	G 6	k 17	Pit	円形	0.42	0.39	—													0
2553	G 6	k 17	Pit	円形	0.36	0.34	—													0
2554	G 6	k 17	Pit	円形	0.40	0.35	—													0
2556	G 6	k 17	Pit	円形	0.43	0.41	0.20													0
2557	G 6	k 17	土坑	不定形	1.72	0.85	0.26					2	1	4				10	1956・1957	17
2558	G 6	k 17	Pit	円形	0.27	0.23	0.18													0
2560	G 6	k 18	土坑	不定形	1.11	0.75	0.28						1					7		8
2561	G 6	k 17	Pit	円形	0.42	0.36	0.18													0
2562	G 6	k 17	土坑	楕円形	1.37	0.85	0.26						2					50		52
2563	G 6	l 17	土坑	不定形	1.24	1.20	0.30			4	2		3					30	1958	39
2564	G 6	k 18	土坑	不定形	0.85	0.52以上	0.24						2						1959・1960	2
2565	G 6	j 18	土坑	円形	0.80	0.76	0.16						2					8		10
2570	G 6	k 16	土坑	円形	0.50	0.30以上	0.14													0
2570	G 6	k 16	Pit	円形	0.32	0.30	—													0
2571	G 6	k 16	Pit	円形	0.24	0.20	—													0
2572	G 6	k 16	土坑	円形	0.50	0.44以上	0.22						1						1961	1
2573	G 6	j 16	土坑	不定形	0.98	0.67	0.20						5					7	1962	12
2574	G 6	l 15	土坑	不定形	1.60	1.30	0.31													0
2574	G 6	l 15	Pit	円形	0.29	0.26	0.09											2		2
2575	G 6	i 12	Pit	円形	0.40	0.36	0.12													0
2578	G 6	g 13	Pit	円形	0.34	0.34	0.10													0
2578	G 6	h 13	Pit	円形	0.29	0.27	0.13													0
2580	G 6	g 13	Pit	楕円形	0.47	0.36	0.14													0
2581	G 6	g 13	Pit	楕円形	0.43	0.33	0.14													0
2582	G 6	i 10	土坑	楕円形	1.05	0.38	0.17													0
2584	G 6	g 13	Pit	円形	0.33	0.28	0.14													0
2585	G 6	g 12	Pit	円形	0.32	0.30	0.18													0
2586	—	—	Pit	—	—	—	—						1	1				4	2081・2082	0
2585	G 6	g 12	土坑	不定形	0.50	0.40	0.09													0
2591	G 6	i 11	Pit	円形	0.48	0.45	0.31													0
2592	G 6	l 14	土坑	不定形	1.25以上	0.83	0.13							2				16	1963	18
2593	G 6	l 14	土坑	楕円形	0.60	0.35	0.03											10		10
2594	G 6	k 17	Pit	円形	0.35	0.35	—						1					1		2
2596	G 6	h 13	土坑	不定形	1.20	0.70	0.09									3		7		10
2597	G 6	h 13	Pit	楕円形	0.35	0.28	0.16													0
2598	G 6	h 14	Pit	円形	0.35	0.35	0.11													0
2605	G 6	h 14	Pit	楕円形	0.36	0.27	0.22											1	2080	1
2607	G 6	g 14	Pit	円形	0.36	0.32	0.18											2		2
2608	G 6	g 15	Pit	円形	0.30	0.29	0.27											2		2
2610	G 6	h 17	土坑	円形	0.55	0.48	0.16			1			2						2084	3
2611	G 6	h 17	土坑	不定形	0.55	0.50	0.10											3		3
2613	G 6	h 15	土坑	不定形	0.80	0.80	0.17											13		13
2615	G 6	i 15	Pit	不定形	0.47	0.43	0.24											2		2
2616	G 6	h 15	Pit	円形	0.32	0.31	0.12													0

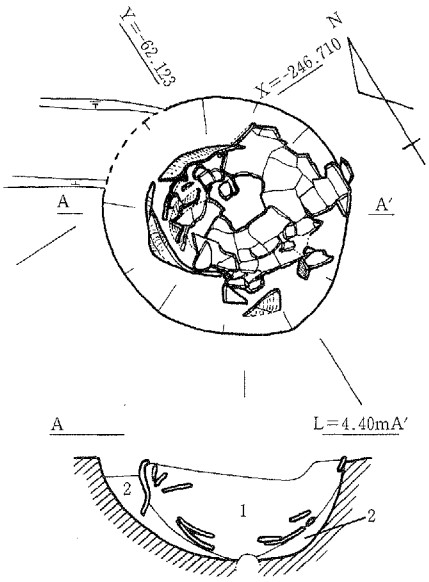
第9－7表　V区 12－④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鷹島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2617	G 6	h 15	Pit	楕円形	0.40	0.30	0.21													0
2618	G 6	h 14	土坑	楕円形	0.73	0.50	0.16											5		5
2620	—	—	Pit	楕円形	0.45	0.38	0.10													0
2621	G 6	g 13	土坑	不定形	0.52	0.20以上	0.10													0
2622	G 6	g 16	土坑	不定形	0.75	0.59	0.13											5		5
2623	G 6	g 16	土坑	楕円形	0.79	0.45	0.16													0
2624	G 6	g 17	Pit	半円	0.44	0.36	0.15													0
2625	G 6	h 16	Pit	円形	0.25	0.25	0.07													0
2626	G 6	h 17	土坑	円形	0.55	0.50	0.17													0
2627	G 6	h 17	Pit	円形	0.28	0.26	0.17													0
2628	G 6	h 17	土坑	楕円形	0.85	0.47	0.23													0
2629	G 6	i 17	土坑	楕円形	1.70	1.00	—											3		3
2630	G 6	i 17	Pit	円形	0.40	0.45	0.11													0
2631	G 6	i 17	土坑	不定形	0.70	0.30	0.12						5					14		19
2632	G 6	h 17	Pit	円形	0.19	0.19	0.13											1		1
2633	G 6	i 17	Pit	楕円形	0.45	0.37	0.14													0
2634	G 6	i 17	Pit	円形	0.20	0.19	0.10													0
2635	G 6	i 15	土坑	不定形	1.77	1.08	0.18			1								5		6
2636	G 6	i 15	Pit	円形	0.42	0.40	0.10													0
2637	G 6	i 15	土坑	円形	0.58	0.56	0.22											16		16
2638	G 6	i 16	Pit	円形	0.40	0.45	0.15											1		1
2639	G 6	i 16	Pit	円形	0.39	0.37	0.27											3		3
2640	G 6	i 16	Pit	円形	0.32	0.30	0.12													0
2641	G 6	i 16	土坑	不定形	0.74	0.59	0.19													0
2642	G 6	j 14	土坑	不定形	1.45	0.35~0.90	0.04											8		8
2643	G 6	i 19	Pit	楕円形	0.48	0.35	0.15						1					4		5
2644	G 6	i 19	土坑	楕円形	0.52	0.33	0.11													0
2646	G 6	h 18	土坑	円形	0.50	0.40	0.08			1									1907	1
2647	G 6	g 18	土坑	不定形	1.10	0.83	0.10											4		4
2648	G 6	i 17	土坑	楕円形	1.38	1.20	0.32			35			93	1		70		58	2055～2071・2085～2089	263
2649	G 6	i 17	土坑	不定形	1.50	0.80	0.23		1	2			1	10			1	5	1965～1967	20
2652	G 6	j 15	土坑	不定形	1.90	0.70	0.23										1	19	1964	20
2653	G 6	j 15	Pit	円形	0.32	0.32	0.12													0
2654	G 6	j 15	Pit	円形	0.39	0.39	0.09													0
2655	G 6	j 16	土坑	不定形	1.95	0.59	0.13													0
2657	—	—	土坑	—	—	—	—						1						1976	0
2658	—	—	土坑	楕円形	2.55	1.52	0.00													0
2659	—	—	土坑	不定形	3.50	1.30~2.30	0.01													0
2660	G 6	i 18	土坑	円形	0.83	0.74	0.18											8		8
2662	G 6	i 18	土坑	円形	0.42以上	0.38以上	0.10													0
2663	—	—	土坑	半円	0.33以上	0.19以上	0.07													0
2665	G 6	j 18	土坑	楕円形	1.80	0.93	0.37			10			1	20		4	2	20	1968～1975	57
2666	G 6	i 19	土坑	円形	1.21	1.05	0.36			1			4					5		10
2667	G 6	j 19	土坑	不定形	0.90	0.60~0.75	0.30											5	2072～2075	5
2668	G 6	j 19	土坑	不定形	0.55	0.38	0.31									1		11	2091	12
2669	—	—	土坑	不定形	0.48	0.43	0.28													0
2670	G 6	i 19	土坑	不定形	0.85	0.75	0.32						4	1				11		16
2671	G 6	i 19	土坑	不定形	1.25	0.70	0.28						2					11		13
2674	G 6	h 20	土坑	円形	0.73	0.62	0.11													0
2675	G 6	i 17	Pit	円形	0.22	0.20	—													0
2676	G 6	j 20	Pit	円形	0.23	0.20	—													0
2680	G 6	j 15	土坑	不定形	1.95	0.55~1.20	0.14						1							1
2683	G 6	i 20	土坑	不定形	1.55	0.87~1.15	0.30				1			1				14		16
2684	G 6	i 20	土坑	不定形	1.10	0.55	0.30					1	6				1	3		11
2685	G 6	h 20	土坑	楕円形	0.75	0.37	0.11											4		4
2686	G 6	i 20	土坑	円形	0.52	0.50	0.13													0
2687	G 6	i 20	土坑	不定形	0.64	0.40	0.09~0.15													0
2688	G 6	i 20	土坑	不定形	0.70	0.40	0.20													0
2689	G 6	h 20	Pit	円形	0.40	0.37	0.09													0
2690	G 6	h 20	土坑	不定形	1.85	0.70	0.26						2					1		3
2691	G 6	h 20	土坑	隅丸三角形	0.58	0.38	0.13													0
2692	G 6	h 20	土坑	不定形	1.87	0.87	0.04			1			1		1			12		15
2693	G 6	i 20	土坑	不定形	2.85	0.85~1.15	0.44			4			5					11	1978・1979	20
2694	G 6	j 20	Pit	円形	0.33	0.29	0.11													0
2695	G 6	j 19	Pit	楕円形	0.44	0.35	0.29													0
2696	G 6	j 19	Pit	円形	0.29	0.28	0.20													0
2697			Pit	楕円形	0.40	0.30	0.09													0
2698	G 6	i 19	土坑	楕円形	1.42	0.68	0.12						6	1						7
2700	G 6	j 20	Pit	円形	0.24	0.21	0.11													0
2701	G 6	i 14	Pit	円形	0.23	0.23	0.18													0
2702	G 6	i 14	Pit	円形	0.32	0.26	0.09													0
2704	G 6	j 14	土坑	楕円形	0.85	0.42	0.45											21		21
2706	G 6	i 14	土坑	不定形	2.55	2.05	0.05			1				6			4	53		64
2709	G 6	k 19	Pit	円形	0.29	0.27	0.16													0

第9－8表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧

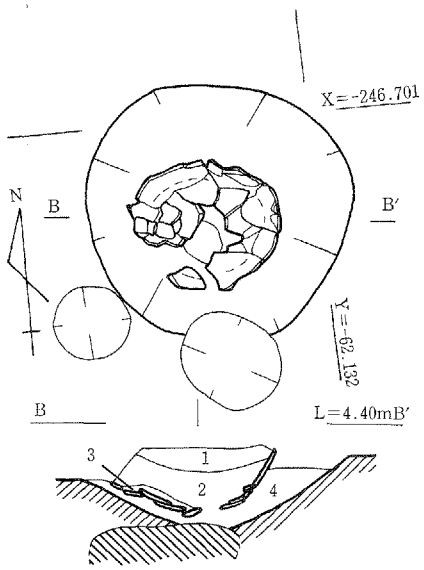
遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)			出土遺物											掲載遺物番号	出土合計
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ	鹿島	船元						里木II	搬入品		不明		
									I	II	III	IV	I～III	III・IV		東海	中部			
2710	G 6	k 19	Pit	円形	0.29	0.28	0.17													0
2711	G 6	k 19	Pit	円形	0.30	0.29	0.10													0
2712	G 6	k 19	Pit	楕円形	0.36	0.29	0.14													0
2713	G 6	k 20	Pit	楕円形	0.35	0.25	0.09													0
2714	G 6	k 20	Pit	円形	0.29	0.25	0.09													0
2715	G 6	l 20	Pit	楕円形	0.45	0.28	0.12													0
2716	G 6	k 19	Pit	円形	0.40	0.40	0.19													0
2718	G 6	k 19	Pit	円形	0.40	0.38	0.21													0
2719	G 6	k 19	Pit	円形	0.35	0.31	0.19													0
2720	G 6	k 19	土坑	不定形	0.50	0.36	0.15						1					1		2
2721	G 6	k 20	土坑	不定形	1.47	0.86	0.09													0
2722	G 6	k 20	Pit	楕円形	0.43	0.33	—													0
2723	G 6	k 20	Pit	楕円形	0.32	0.20	0.13													0
2724	G 6	k 20	土坑	楕円形	1.00	0.60	0.14											8	1981	8
2725	G 6	k 20	Pit	円形	0.45	0.45	0.09											1	1977	1
2726	G 6	j 20	Pit	円形	0.22	0.20	0.08													0
2727	G 6	k 21	土坑	不定形	1.50	0.90	0.10						1					1	1980	2
2728	G 6	k 21	土坑	楕円形	0.60	0.30	0.10													0
2729	G 6	k 21	土坑	半円	0.98	0.60以上	0.20			2	2		8					6	1984・1985	18
2730	G 6	j 21	土坑	不定形	1.65	1.20	0.52			10	2		28	12		1	3	108	1986～1992	164
2732	G 6	i 21	土坑	不定形	0.75	0.61	0.13											18		18
2733	G 6	i 21	土坑	楕円形	0.97	0.50	0.19			4			3					6	1993・1994	13
2734	G 6	i 21	Pit	隅丸方形	0.48	0.34	0.15													0
2735	G 6	i 21	土坑	不定形	0.55	0.45	0.19													0
2736	G 6	j 22	土坑	不定形	0.57	0.55	—													0
2737	G 6	i 15	土坑	不定形	1.00	0.55	0.16											2		2
2738	G 6	h 21	土坑	不定形	1.95	1.10	0.09											2		2
2739	G 6	h 22	土坑	不定形	1.25	0.75	0.90				1		14	1		1		10	1995～1997	27
2740	G 6	h 22	土坑	隅丸方形	0.92	0.82	0.19				1		3	2		1		20	1998～2000	27
2741	G 6	h 21	土坑	楕円形	3.60	0.72	0.38			1	1		2	5		1	2	14	2018～2024	26
2743	G 6	i 22	土坑	不定形	3.60	3.46	0.10			1	1		4	1				17	2001～2003	24
2744	G 6	f 21	土坑	楕円形	1.30	0.60	0.14				2		1	3				9	2004・2005	15
2745	G 6	f 21	土坑	円形	0.50	0.42	0.09						1	1				1	2092	3
2746	G 6	g 22	土坑	不定形	1.75	0.50～0.80	0.30			4			4				4	10	2006～2008	22
2747	G 6	f 22	土坑	楕円形	0.63	0.43	0.24													0
2748	G 6	f 22	Pit	円形	0.34	0.30	0.16													0
2749	G 6	f 22	Pit	円形	0.26	0.26	0.16													0
2750	G 6	f 23	Pit	円形	0.40	0.38	0.11													0
2752	G 6	f 23	土坑	円形	0.55	0.50	—											5		5
2753	G 6	j 22	Pit	不定形	0.35以上	0.29	0.14							1				3		4
2754	G 6	i 20	土坑	不定形	1.30	0.45～1.05	0.31							1		1		18		20
2755	—	—	土坑	—	—	—	—			1			1						2009・2010	0
2756	G 6	f 23	土坑	円形	1.25	0.92	—			3			5	2		2	2	75	2011～2015	89
2758	G 6	i 22	土坑	楕円形	1.10	0.55	0.16													0
2759	G 6	j 21	土坑	隅丸方形	0.95	0.55	0.06													0
2760	G 6	j 18	土坑	不定形	2.15	1.75	0.55			48	13		2			29	1	105	1753～1793	198
2761	G 6	i 18	土坑	円形	0.63	0.60	0.17						1					6		7
2757	G 6	j 15	Pit	円形	0.23	0.23	0.17						1					5		6
2763	G 6	f 24	土坑	楕円形	0.83	0.39	0.16							1				5		6
2766	G 6	o 19	土坑	不定形	0.95	0.70	0.07											3		3
2767	G 6	b 24	土坑	不定形	2.40	2.05	0.18						6					4	2016・2017	10
2768	G 6	l 24	Pit	円形	0.24	0.23	0.13							1				8		9
2770	G 6	k 16	土坑	不定形	0.80	0.75	0.15											9		9
2773	G 6	i 12	Pit	円形	0.40	0.40	—													0
2775	G 6	f 25	Pit	楕円形	0.40	0.30	—													0
2779	東西トレンチC区		土坑	隅丸方形	1.90	1.10	0.04～0.08											1	2025	1
2780	G 6	f 25	土坑	楕円形	0.80	0.40	—													0
2782	—	—	土坑	—	—	—	—			2	2							1	1982・1983	0
2783	東西トレンチA区	—	土坑	—	—	—	—			1									2026	1
2788	東西トレンチ	—	土坑	—	—	—	—			1			8					1	2027～2033	10
2789	東西トレンチ	—	土坑	—	—	—	—										1			1
2790	東西トレンチG区	—	土坑	—	—	—	—				1								2034	1
2795	南北トレンチF区	—	土坑	—	—	—	—											1		1
2798	—	—	Pit	—	—	—	—							1				1	2090	2
2799	—	—	Pit	—	—	—	—						6						2083	6
3000	G 7	e 2	土坑	—	—	—	—												2044～2048	0

第9－9表　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑・Pit規模一覧



埋甕7

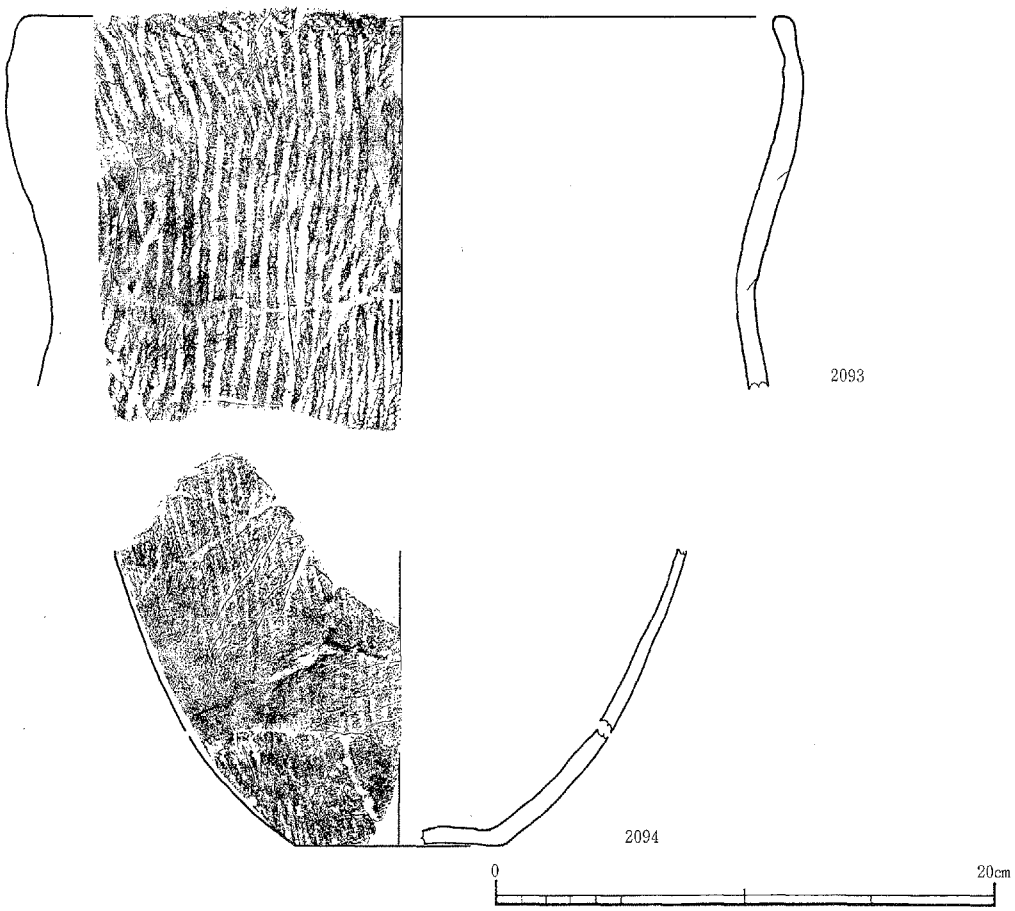
1 10YR3/1(黒)粗砂混シルト
2 10YR3/1(黒褐)粗砂混シルト



埋甕8

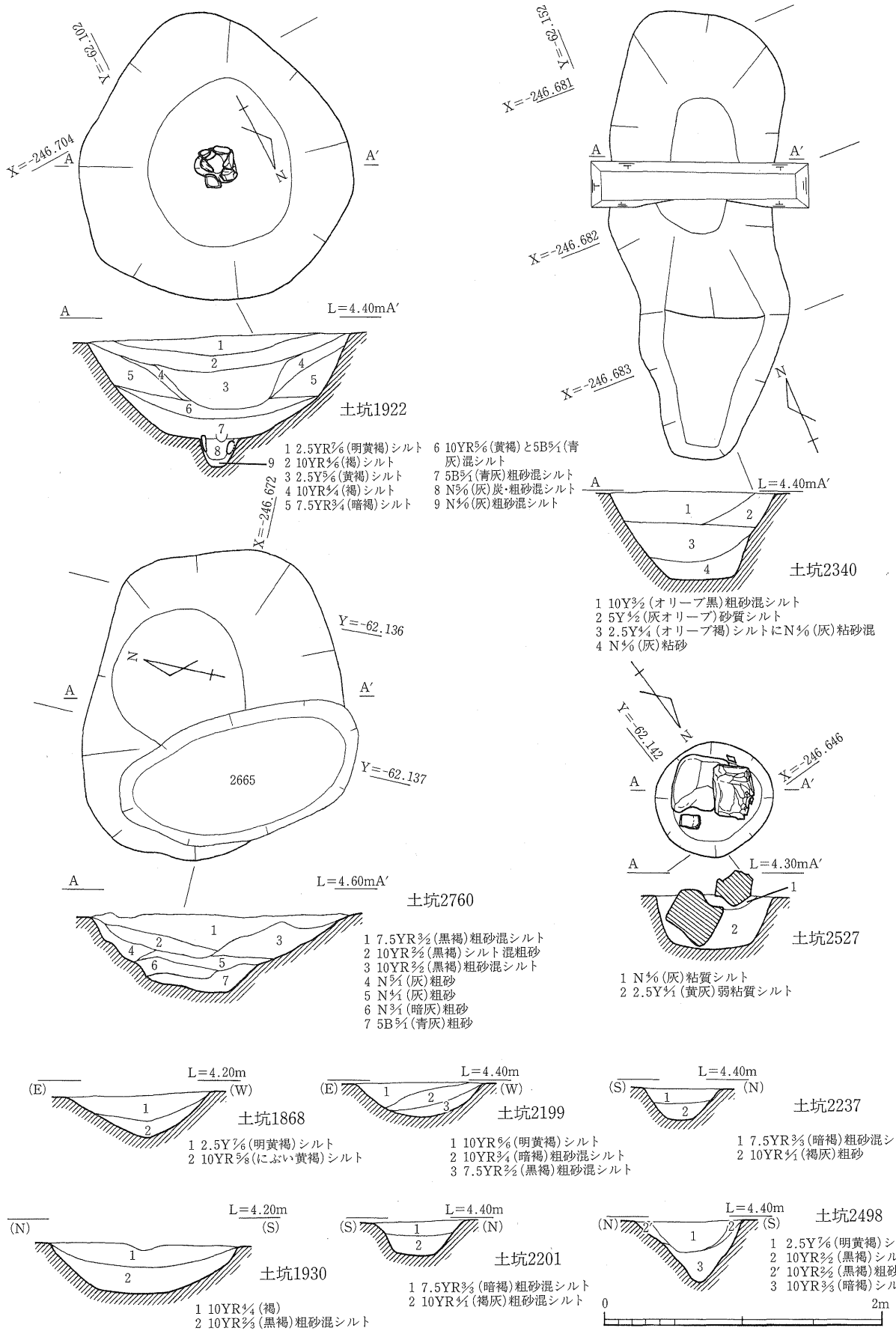
1 7.5YR1.7/1(黒)砂壌土
2 7.5YR3/2(黒褐)砂壌土
3 N5/(灰)シルト
4 10YR3/1(黒褐)砂壌土

0　1m

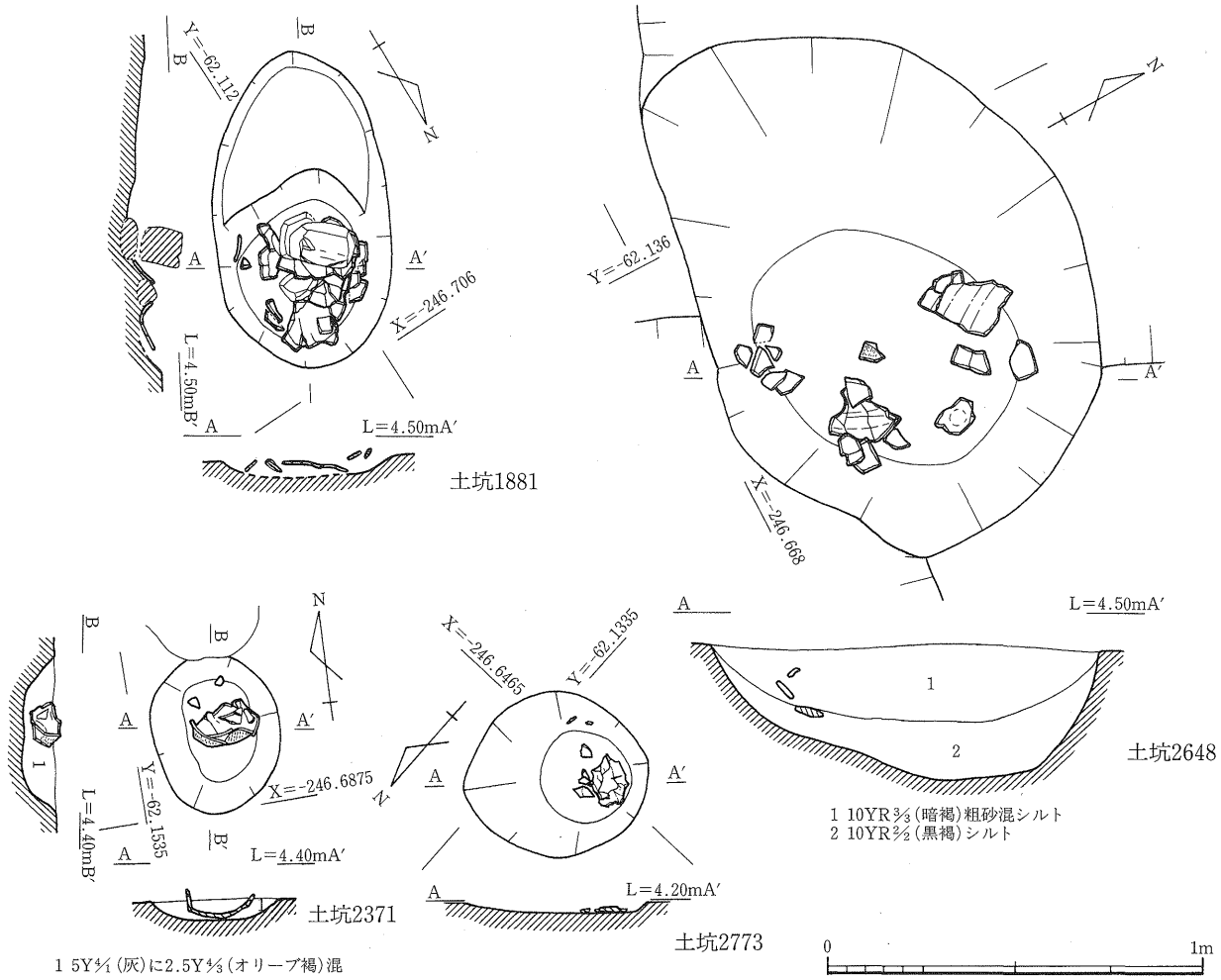


2093：埋甕7、2094：埋甕8

第133図　V区 12-④区 第7層上面 縄文時代中期 埋甕平面図・土層図・遺物実測図



第134図　Ⅴ区 12-④区 第７層上面 縄文時代中期土坑 1922・2340・2527・2760 平面図・土層図
土坑 1868・1930・2199・2201・2237・2498 土層図



第135図　V区 12-④区 縄文時代中期 土坑 1881・2371・2648・2773 平面図・土層図・断面図

Ⅰ式は2176・2178・2195である。

Ⅰ式～Ⅱ式は、2143・2144・2145・2153・2156・2163～2164・2170・2171・2174・2179～2181・2183・2185・2191・2192・2196・2201・2205・2212・2210である。

Ⅱ式は2146・2147・2149・2154・2155・2157・2157・～2162・2165～2169・2173・2175・2177・2182・2186・2187～2189・2193・2198・2199・2200・2203・2204・2206である。

Ⅲ式は、2190・2207・2209・2213・2211・2219・2227・2229・2230・2233である。

Ⅰ式～Ⅲ式は2148・2153である。

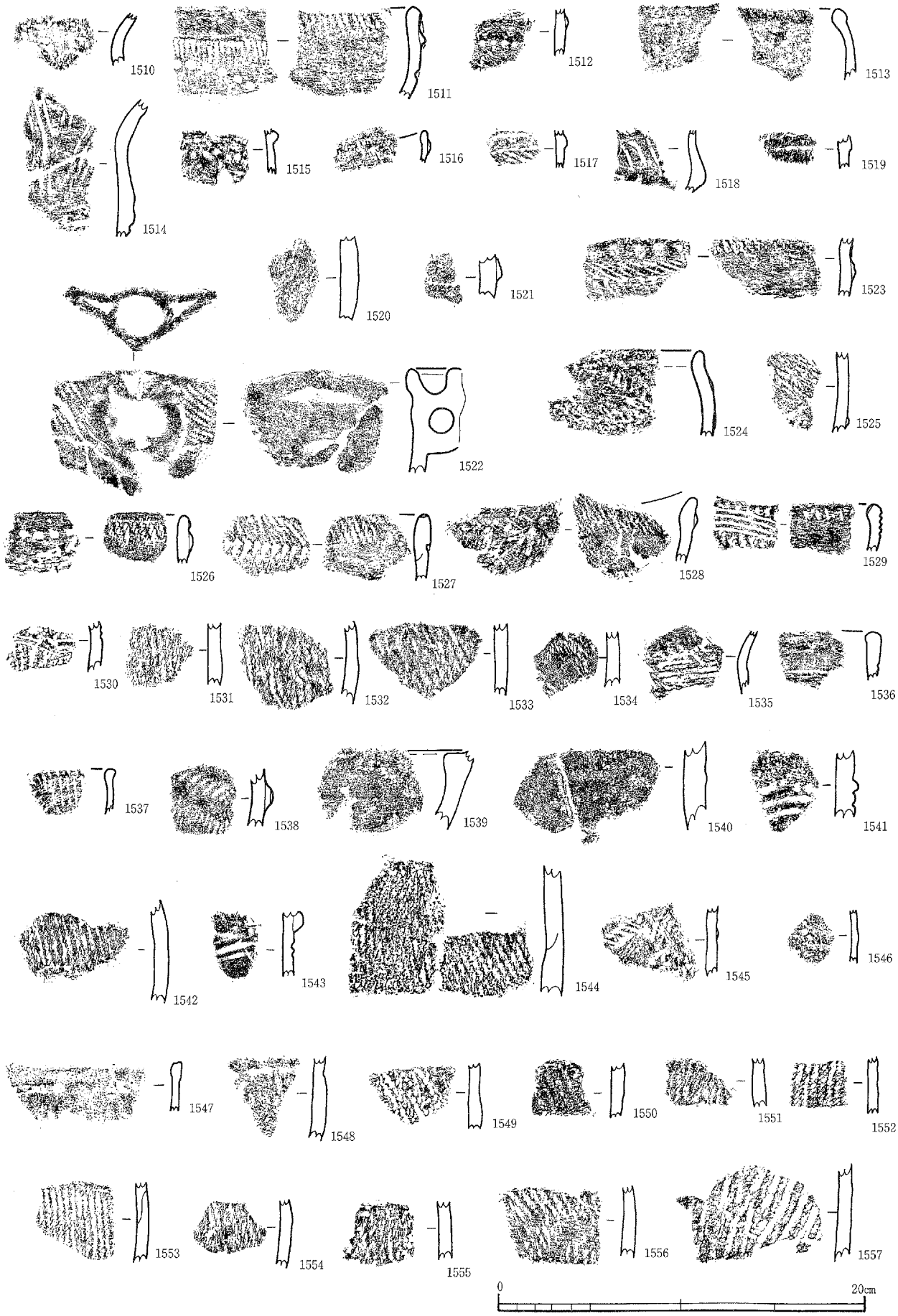
Ⅲ式～Ⅳ式は2184・2214～2217・2220～2226・2228である。

Ⅳ式は2208・2231・2232である。

包含層第6-1層出土遺物（第154・155図、PL.123・124・126）

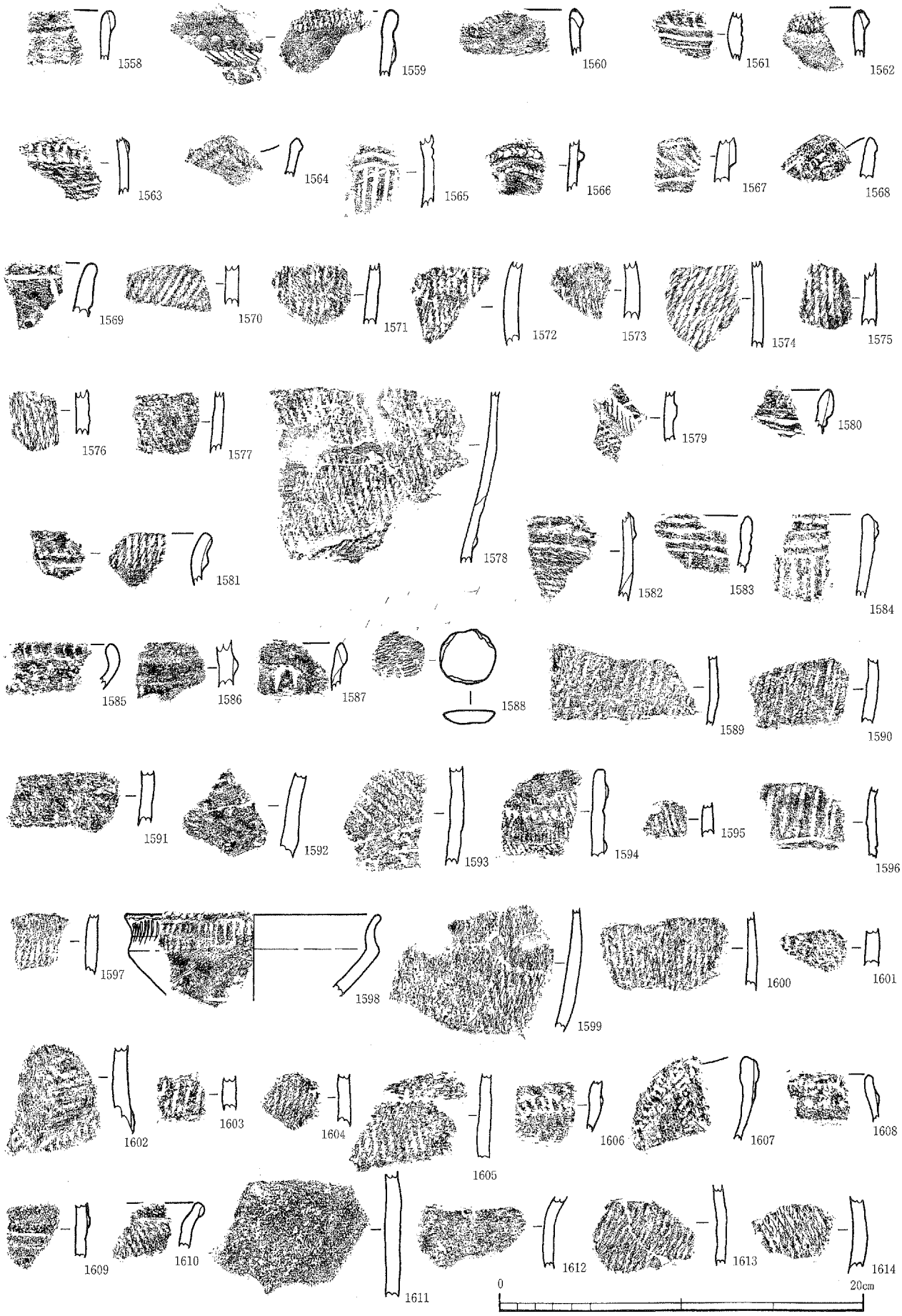
鷹島式土器は2236～2238、Ⅰ式～Ⅱ式は2235、Ⅱ式は2234・2239・2240・2243、Ⅲ式は2241、Ⅱ式～Ⅲ式は、2242・2244である。

2245～2277は東日本からの搬入品である。2247～2250までは薄手の土器である。勝坂式は2251・2256・2258～2270・2273・2275である。厚手で砂粒の混入がある。



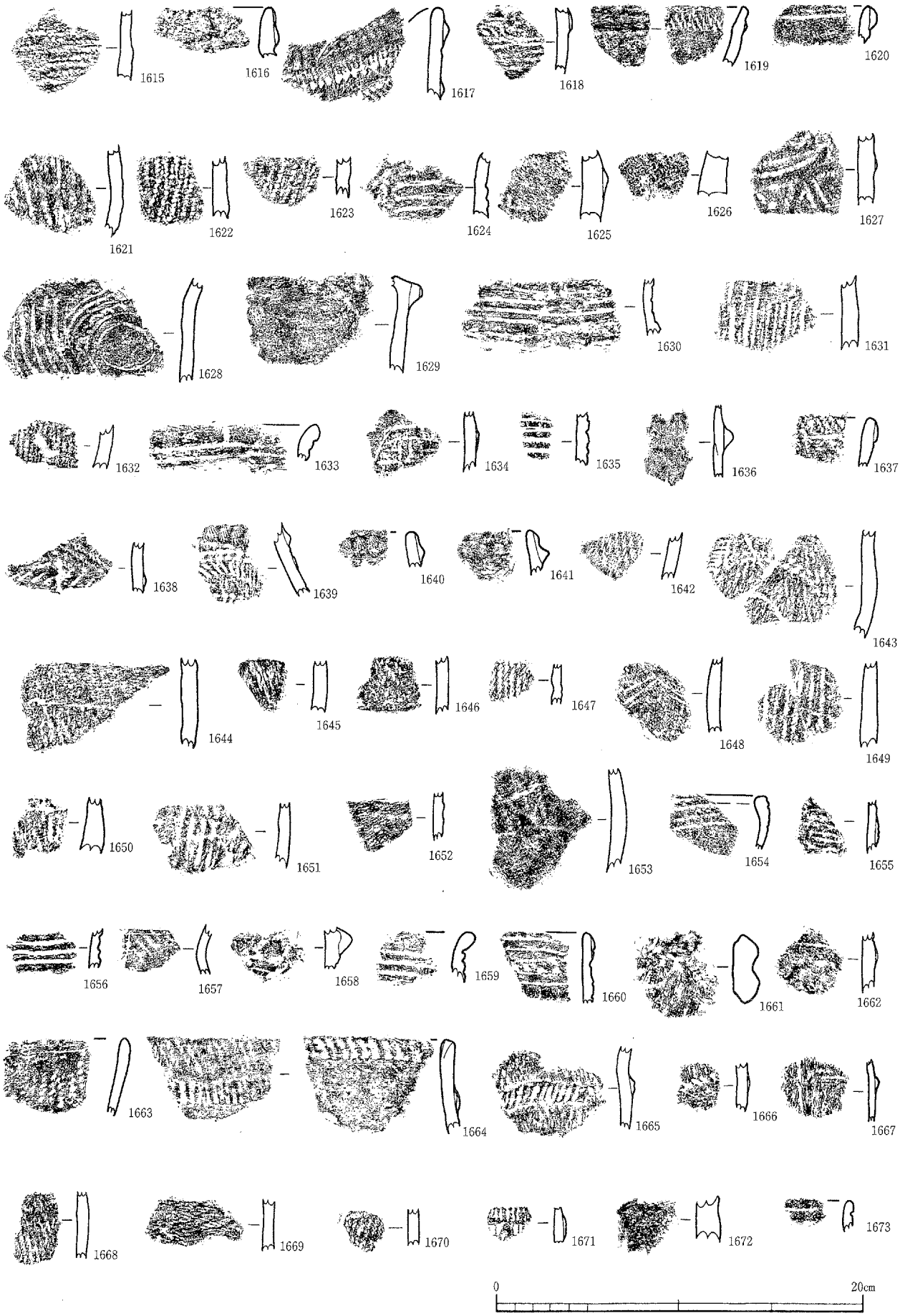
1510～1522：竪穴住居1900、1523～1541：竪穴住居2002、1542～1557：竪穴住居2003

第136図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



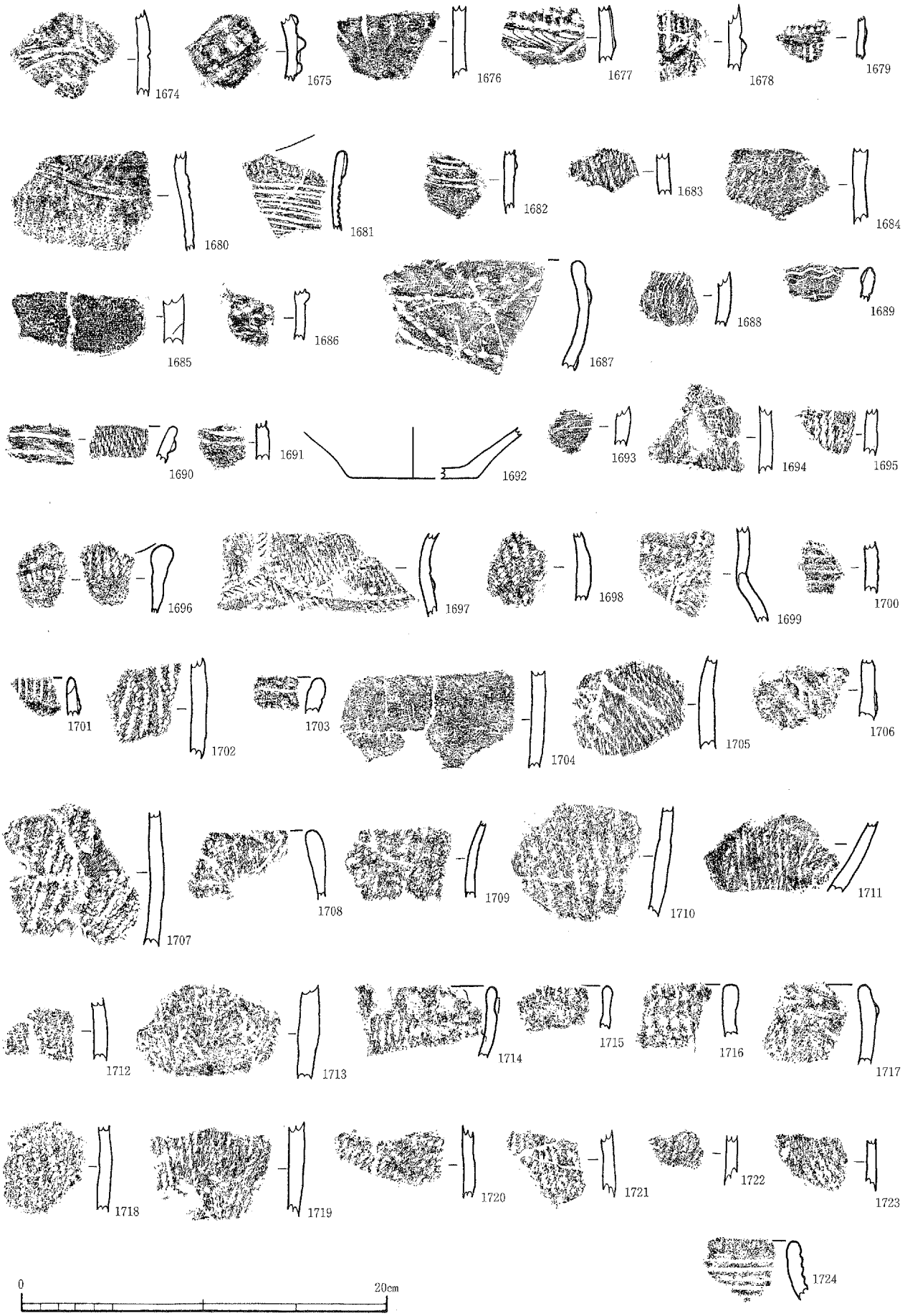
1558～1588：竪穴住居2003、1589～1614：竪穴住居2006

第137図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



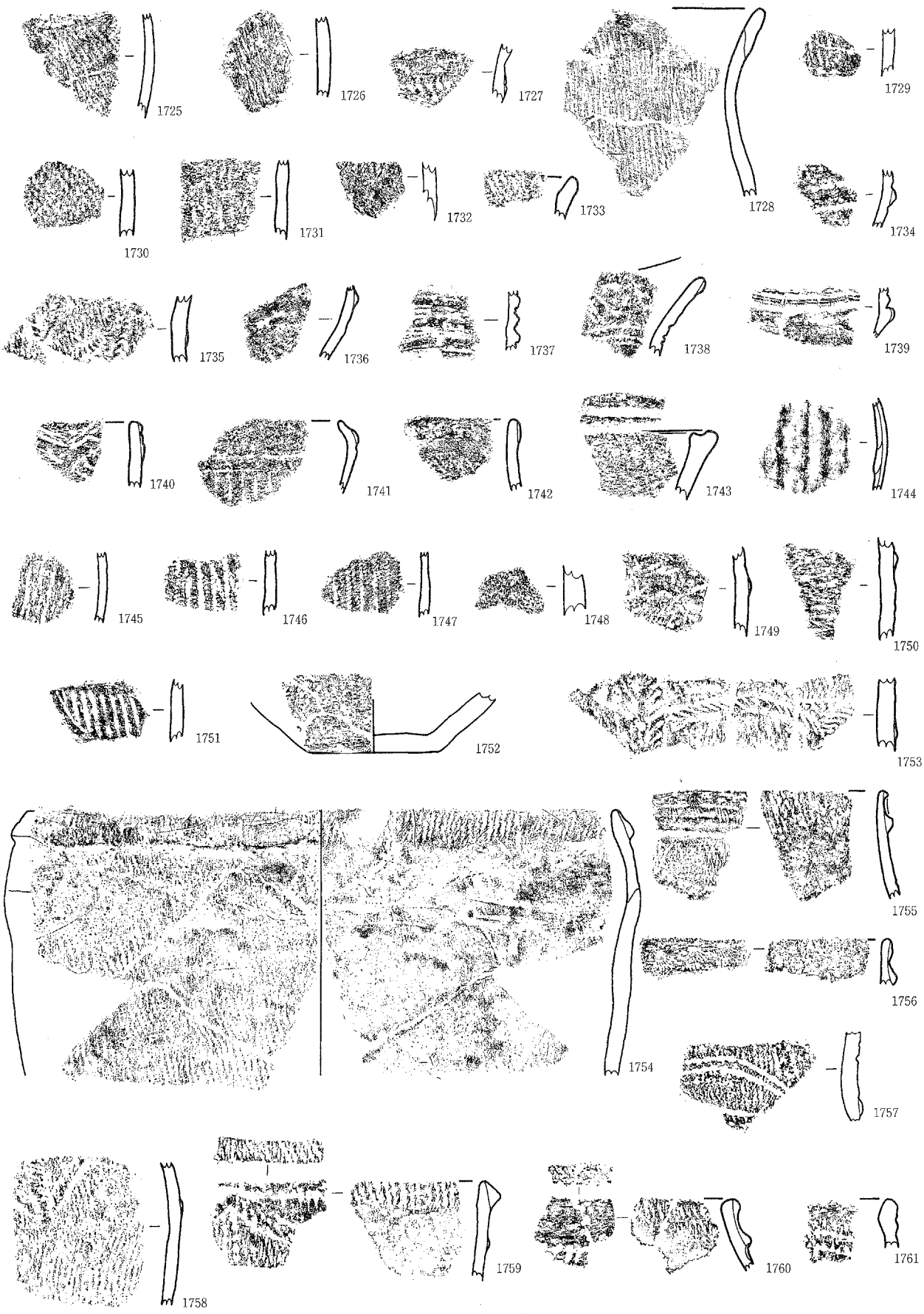
1615～1627：竪穴住居2006、1628～1662：竪穴住居2007、1663～1673：竪穴住居2244

第138図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



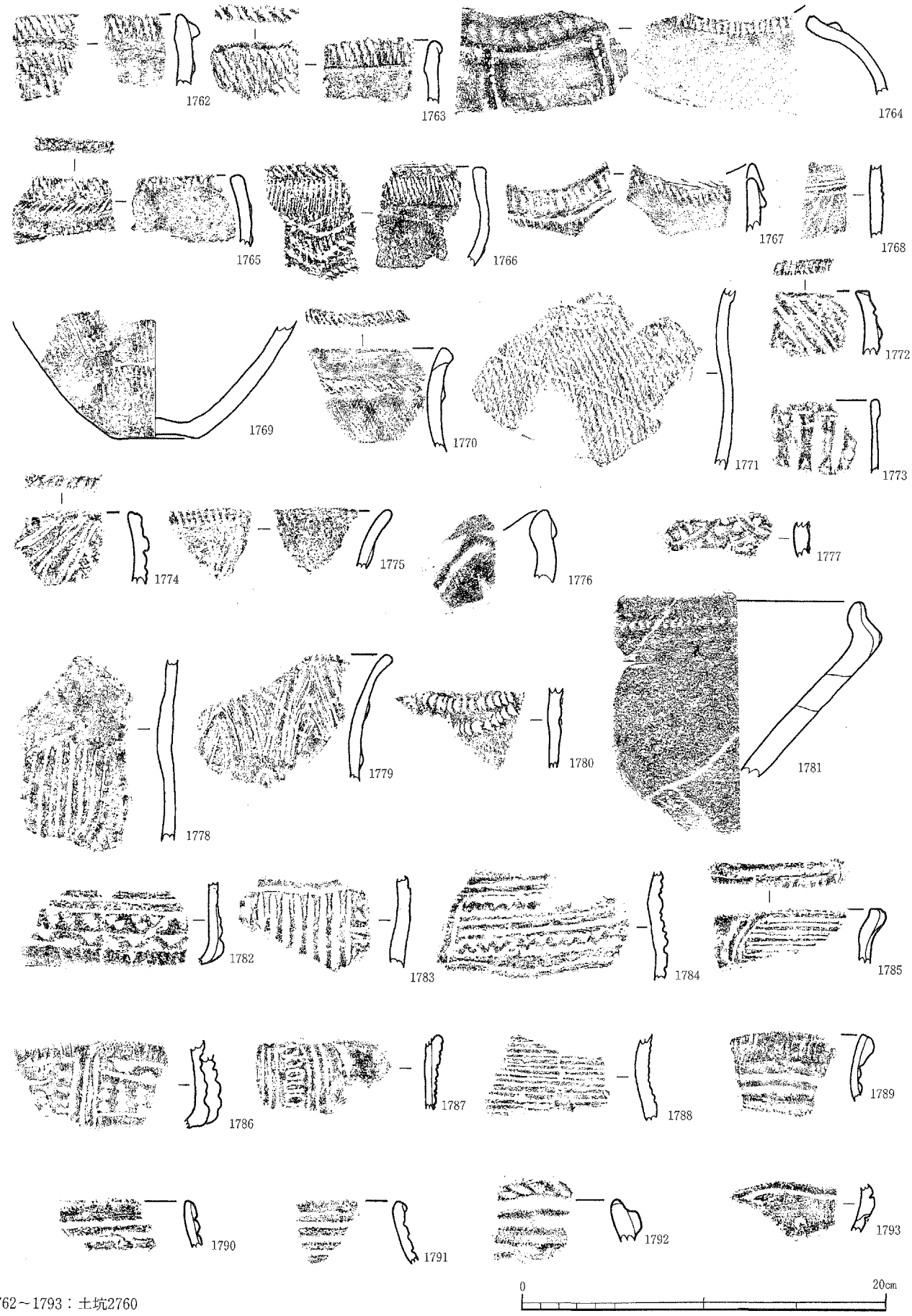
1674～1686：住居2245、1687～1692：住居2295、1693～1702：住居2486、1703・1704：住居2650、1705～1718：住居2651、1719～1724：住居2661

第139図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



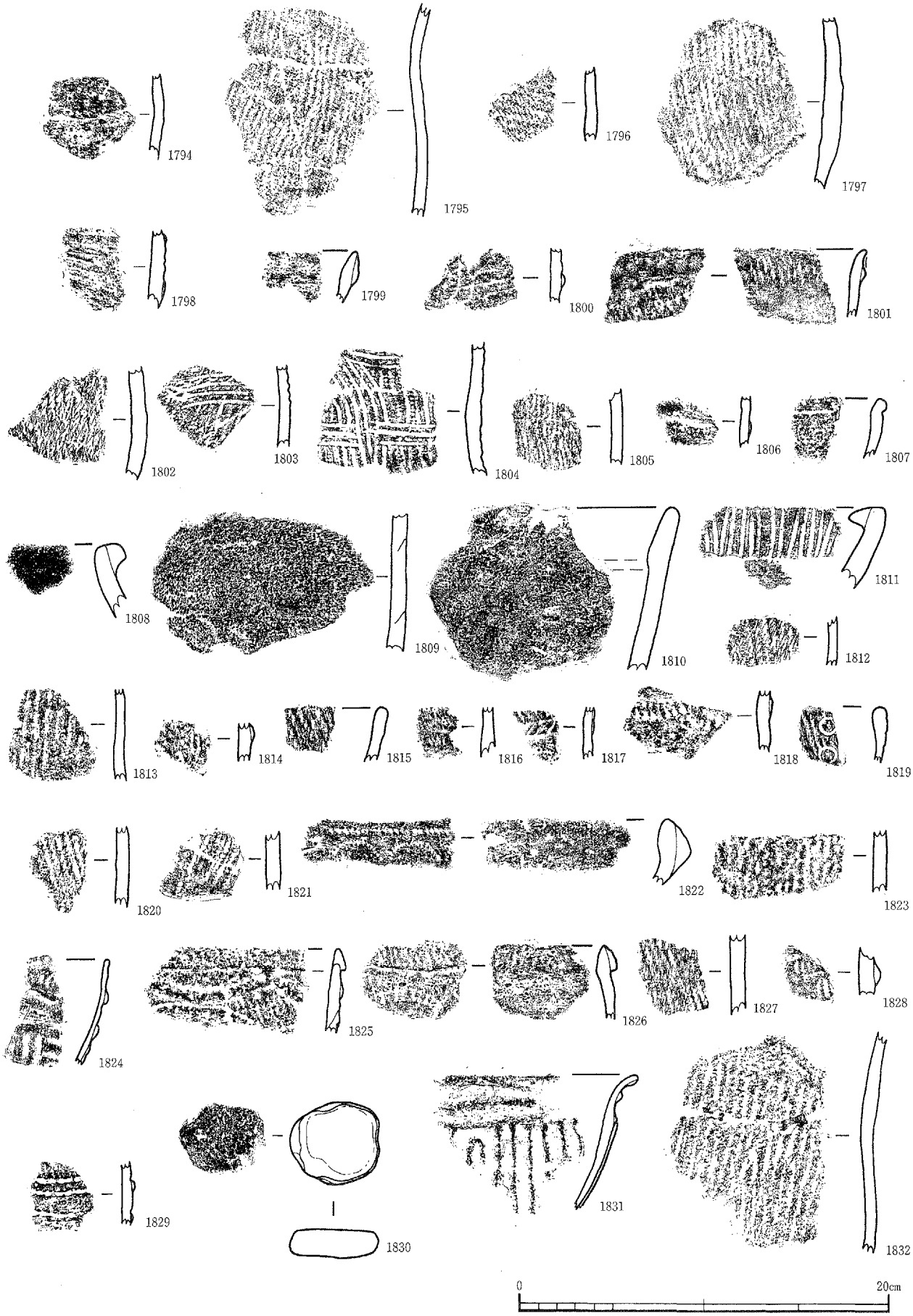
1725～1752：住居2678、1753～1761：土坑2760

第140図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



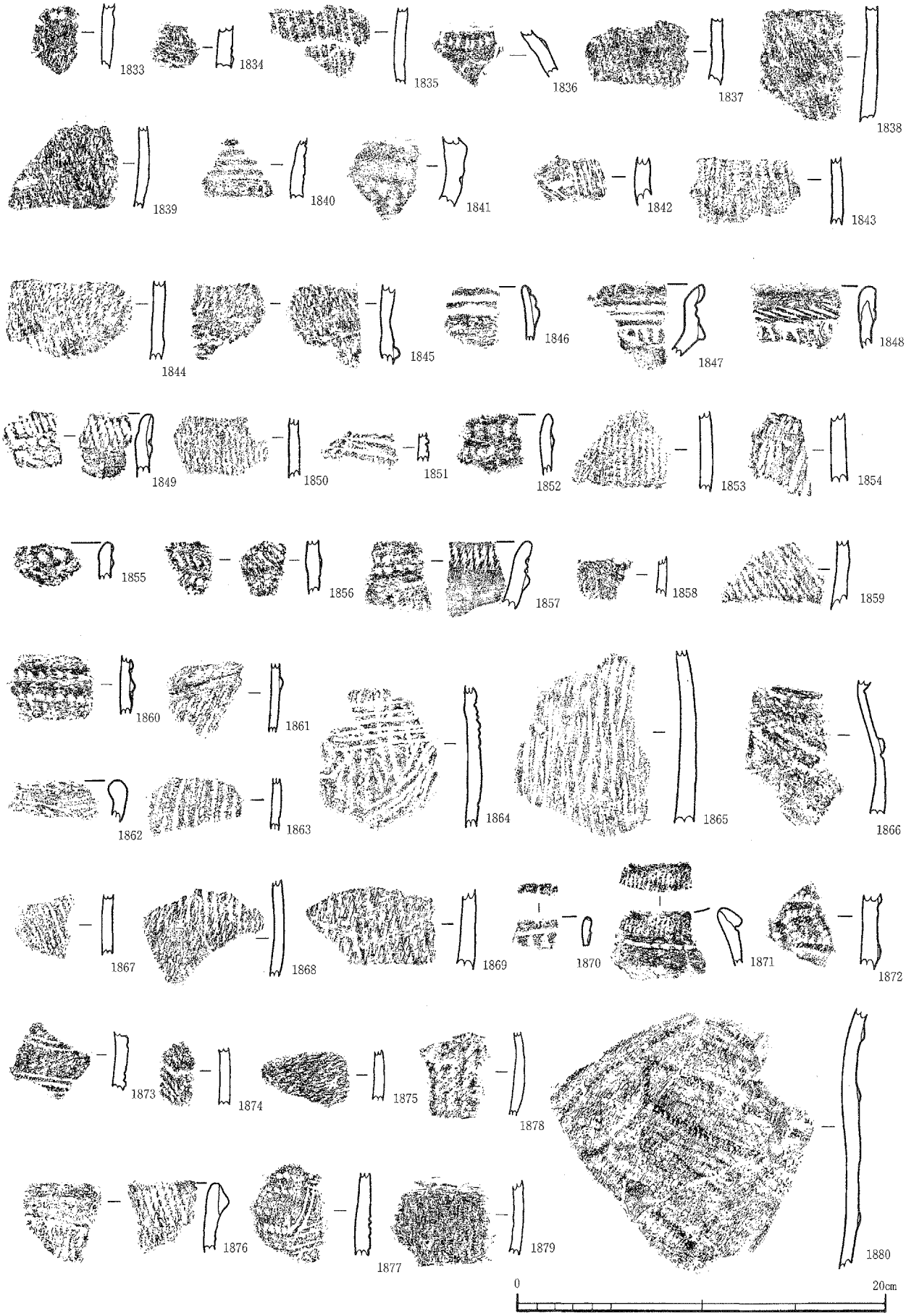
1762～1793：土坑2760

第141図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



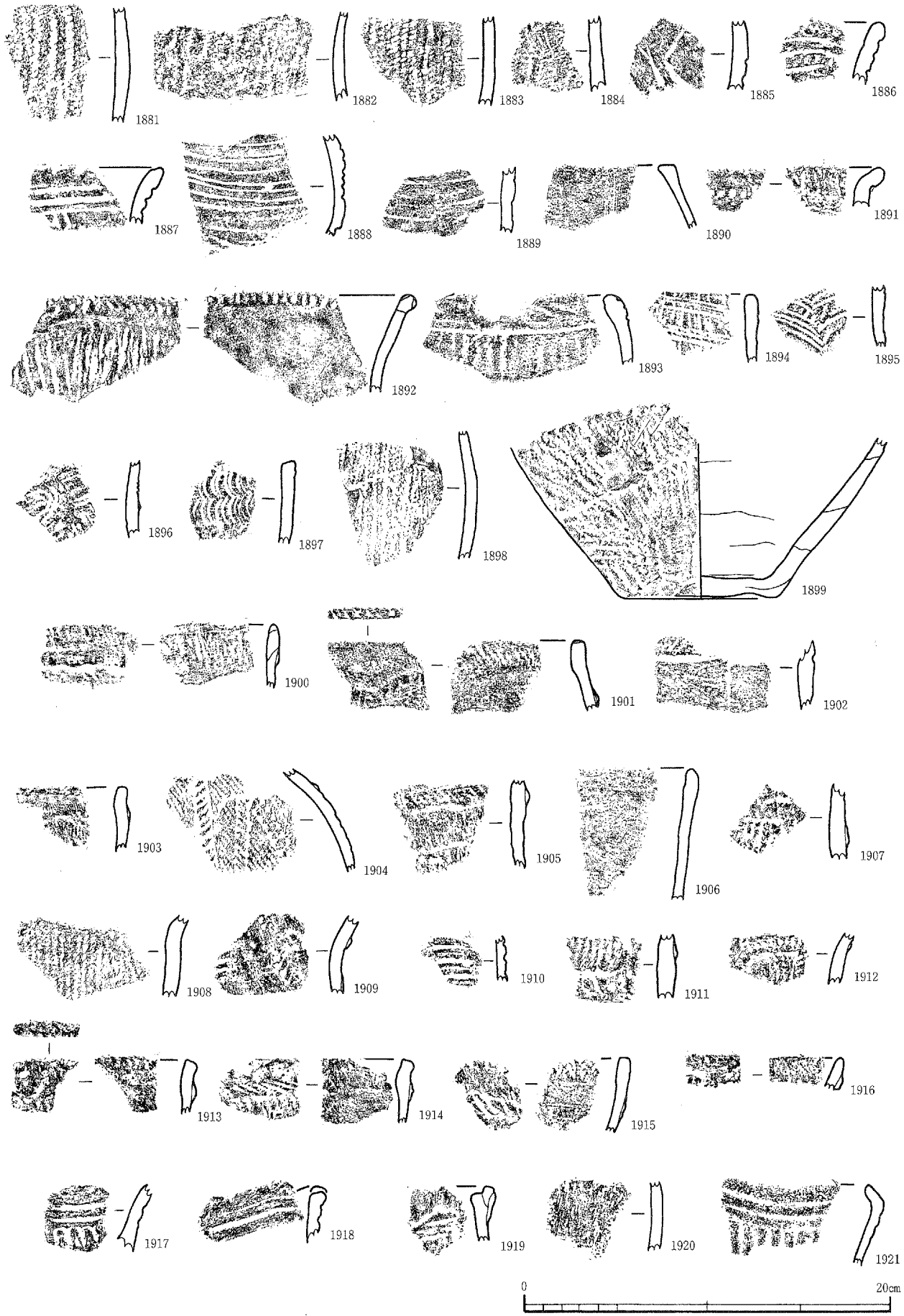
1794：土坑1880、1795：土坑1881、1796：土坑1910、1797：土坑1914、1798：土坑1924、1799：土坑1931、1800：土坑1932、1801～1804：土坑1941、1805・1806：土坑1944、1807・1808：土坑1946、1809～1812：土坑1947、1813：土坑1969、1814：土坑1975、1815～1818：土坑1976、1819：土坑1977、1820・1821：土坑1980、1822：土坑1982、1823・1824：土坑2081、1825：土坑2083、1826：土坑2129、1827：土坑2143、1828：土坑2147、1829～1832：土坑2148

第142図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



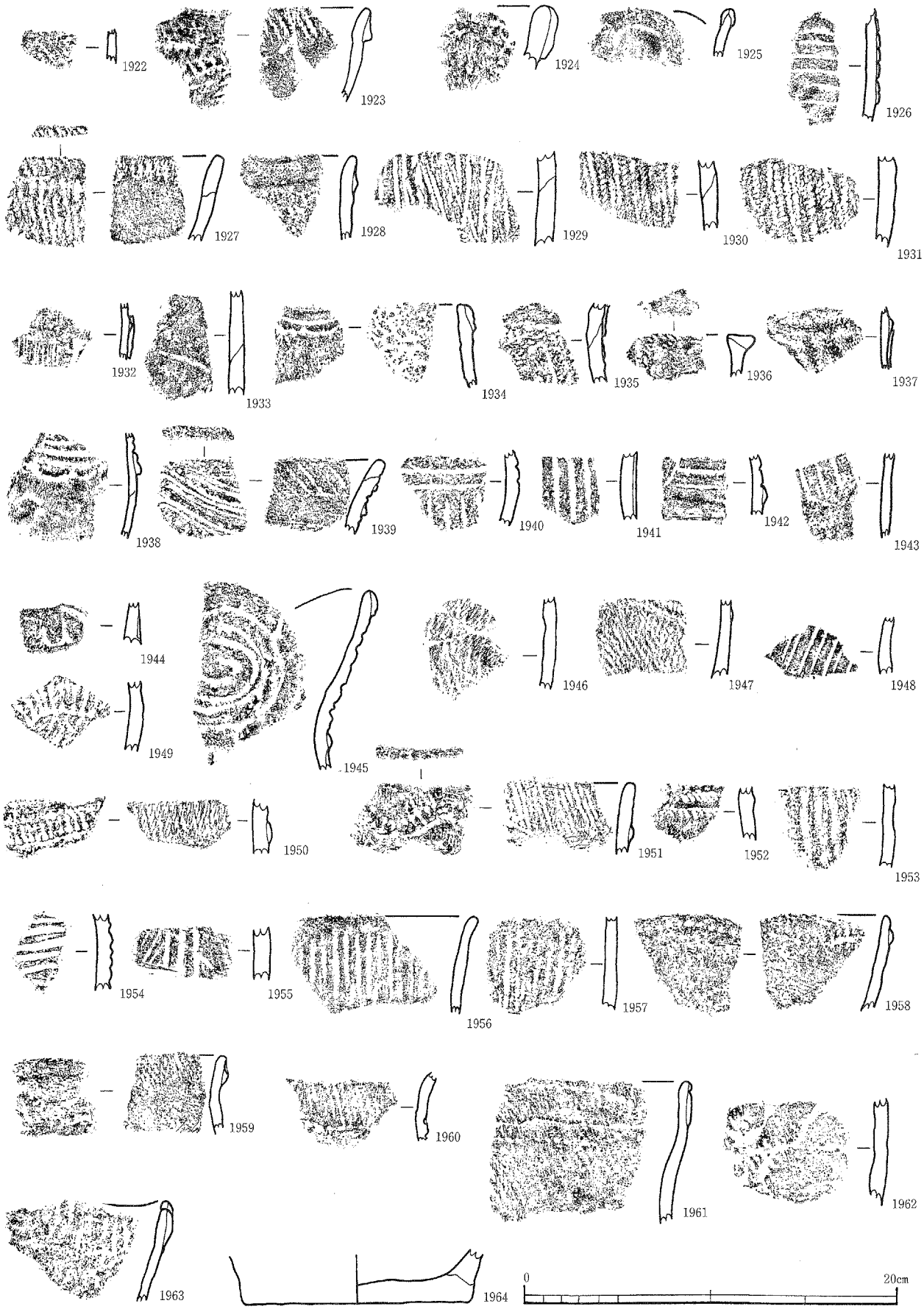
1833・1834：土坑2153、1835：土坑2155、1836：土坑2157、1837：土坑2158、1838・1839：土坑2169、1840：土坑2199、1841：土坑2206、1842：土坑2228、1843：土坑2246、1844～1847：土坑2242、1848：土坑2272、1849：土坑2279、1850・1851：土坑2269、1852：土坑2374、1853・1854：土坑2270、1855・1856：土坑2326、1857：Pit2375、1858・1859：Pit2321、1860～1865：土坑2319、1866～1872：土坑2340、1873：土坑2316、1874・1875：土坑2008、1876：土坑2282、1877：土坑2311、1878～1880：土坑2345

第143図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



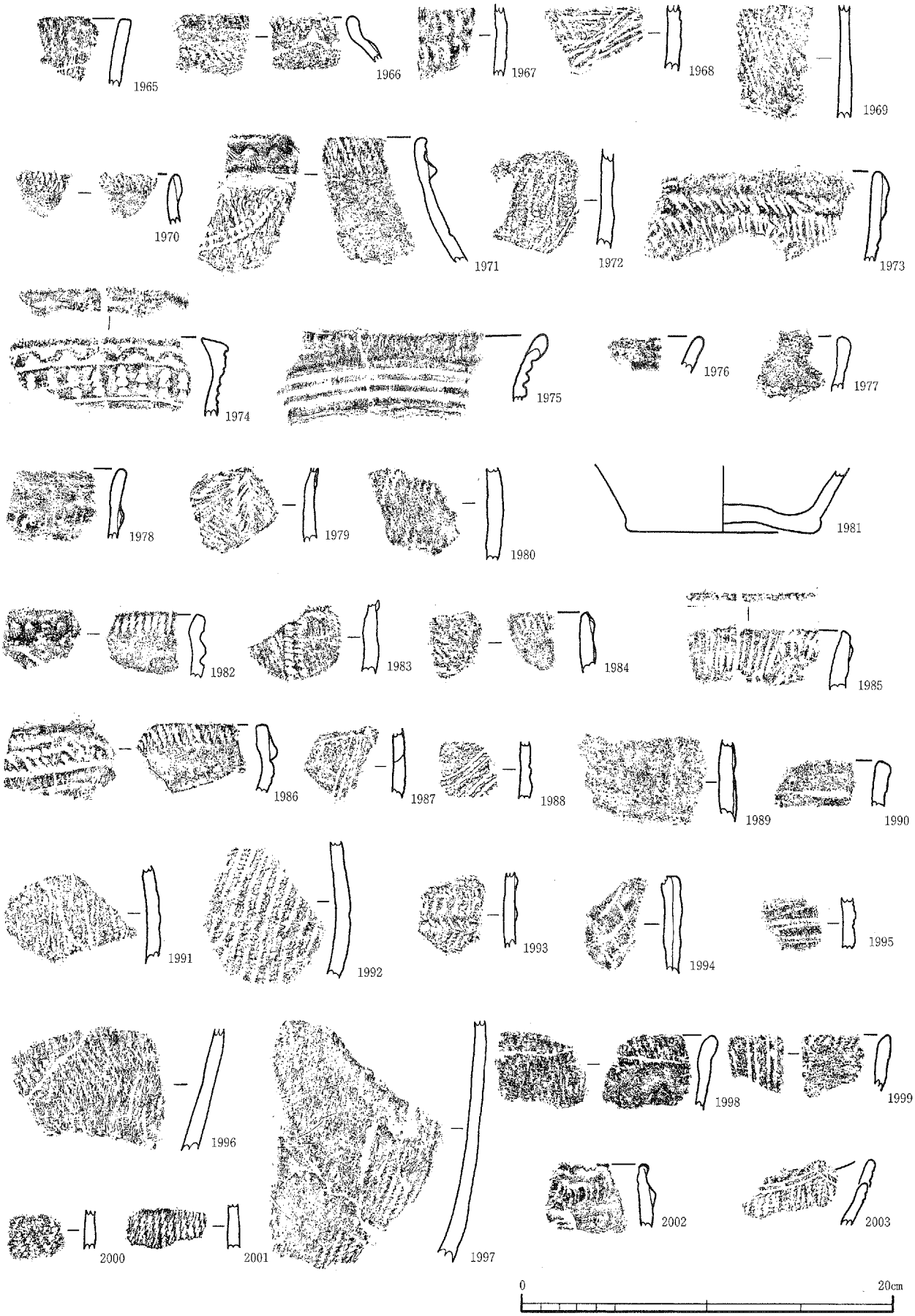
1881～1890：土坑2369、1891～1896：土坑2370、1897：土坑2377、1898・1899：Pit2371、1900～1902：土坑2373、1903・1904：土坑2420、1905：土坑2422、1906：土坑2439、1907：土坑2646、1908～1910：土坑2478、1911：土坑2464、1912～1919：土坑2512、1920・1921：土坑2533

第144図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



1922～1925：土坑2523、1926：土坑2534、1927～1945：土坑2480、1946～1948：土坑2537、1949～1955：土坑2545、1956・1957：土坑2557、1958：土坑2563、1959・1960：土坑2564、1961：土坑2572、1962：土坑2573、1963：土坑2592、1964：土坑2652

第145図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図

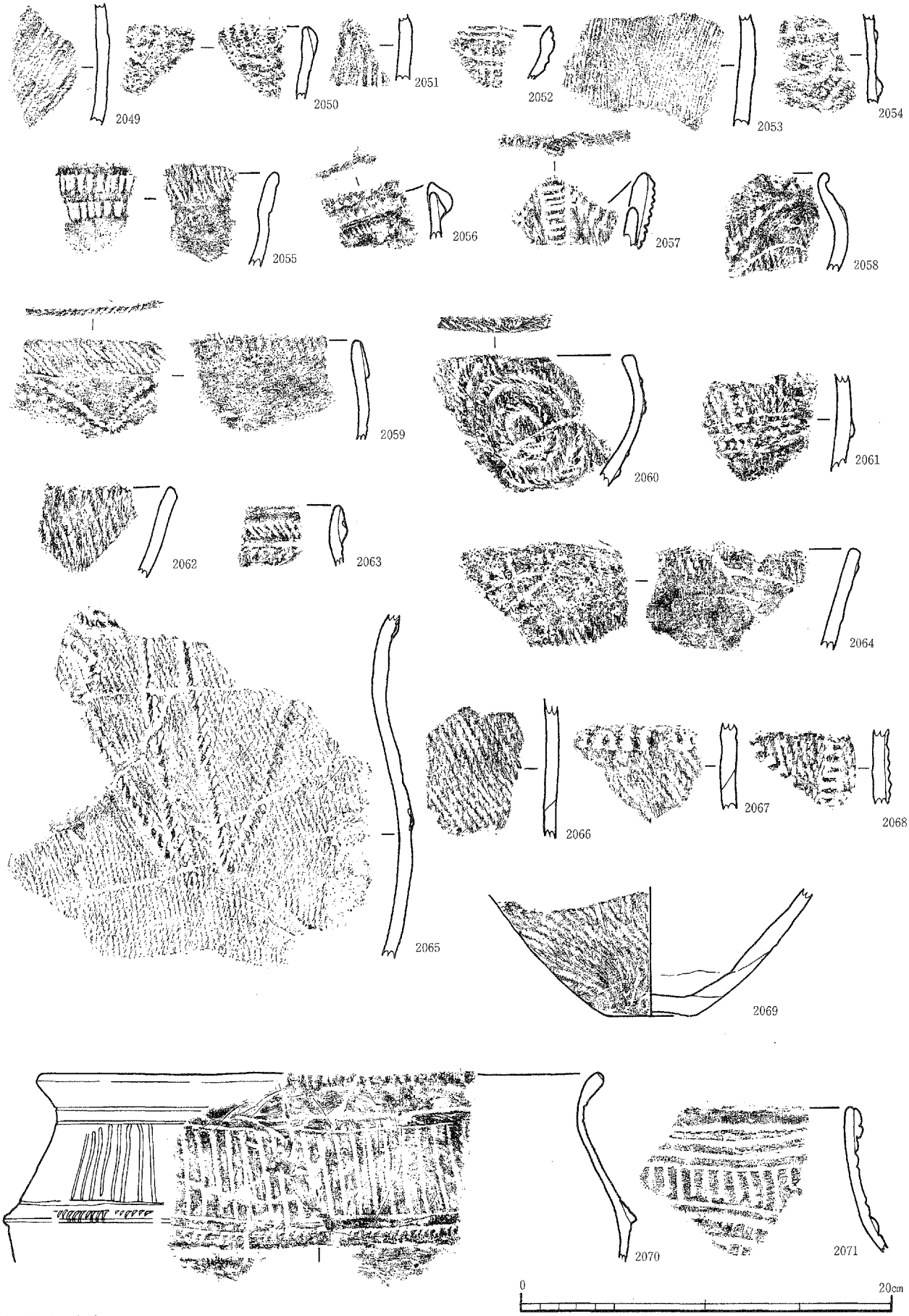


1965～1967：土坑2649、1968～1975：土坑2665、1976：土坑2657、1977：土坑2725、1978･1979：土坑2693、1980：土坑2727、1981：土坑2724、1982･1983：土坑2782、1984･1985：土坑2729、1986～1992：土坑2730、1993･1994：土坑2733、1995～1997：土坑2739、1998～2000：土坑2740、2001～2003：土坑2743

第146図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図

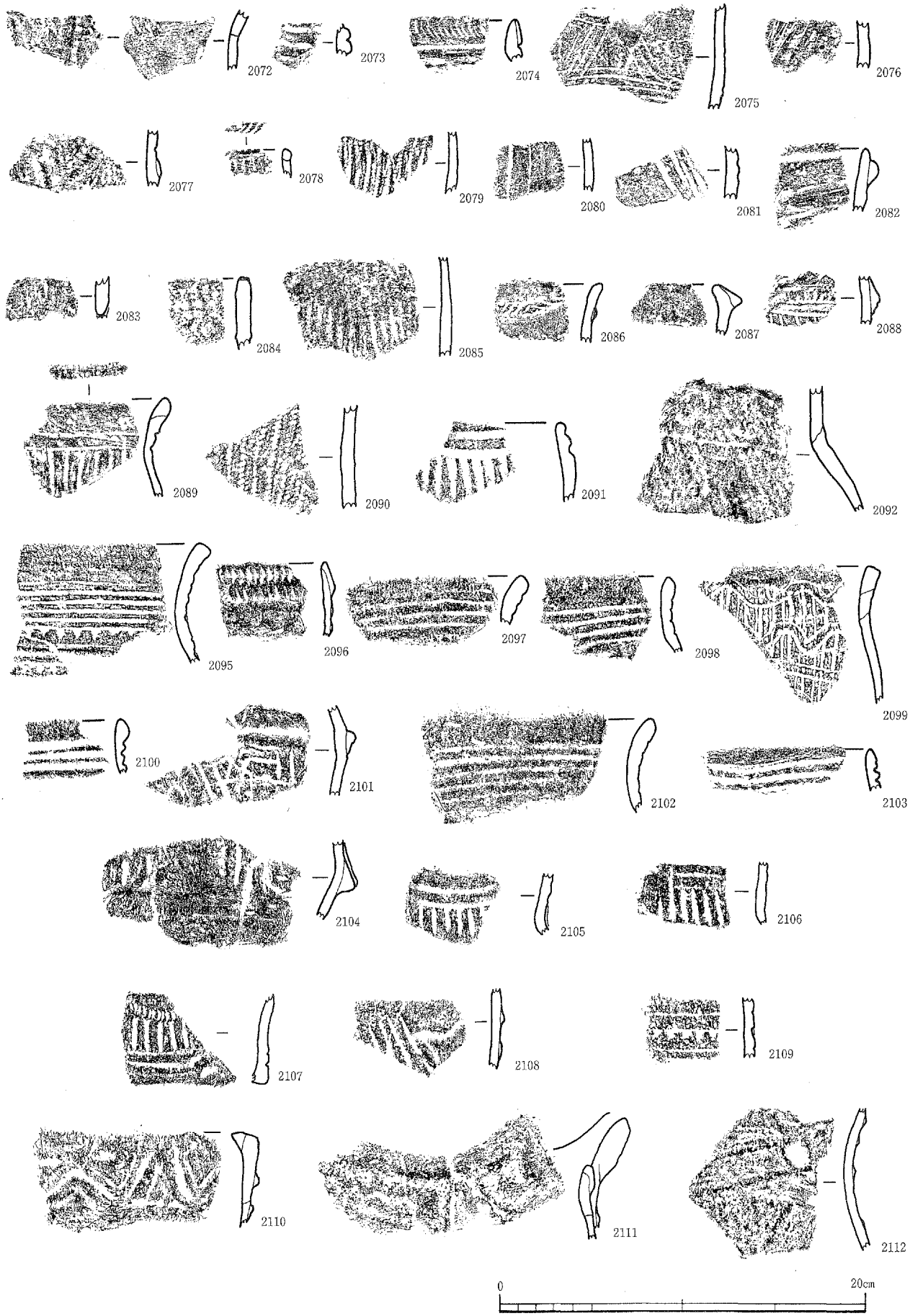
2004・2005：土坑2744、2006～2008：土坑2746、2009・2010：土坑2755、2011～2015：土坑2756、2016・2017：土坑2767、2018～2024：土坑2741、2025：土坑2779、2026：土坑2783、2027～2033：土坑2788、2034：土坑2790、2035～2043：土坑2247、2044～2048：土坑3000

第147図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



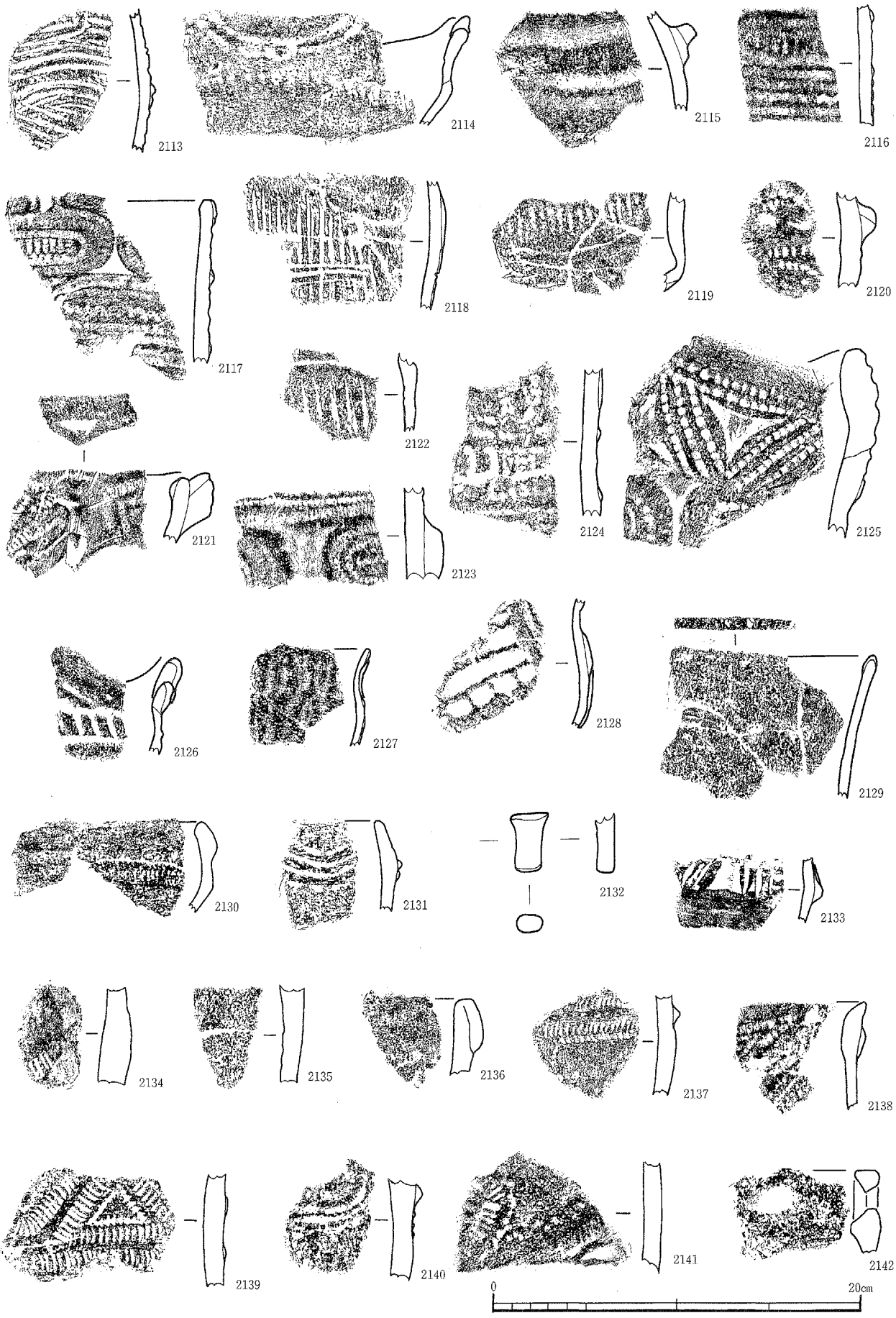
2049～2052：土坑2243、2053・2054：土坑2275、2055～2071：土坑2648

第148図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



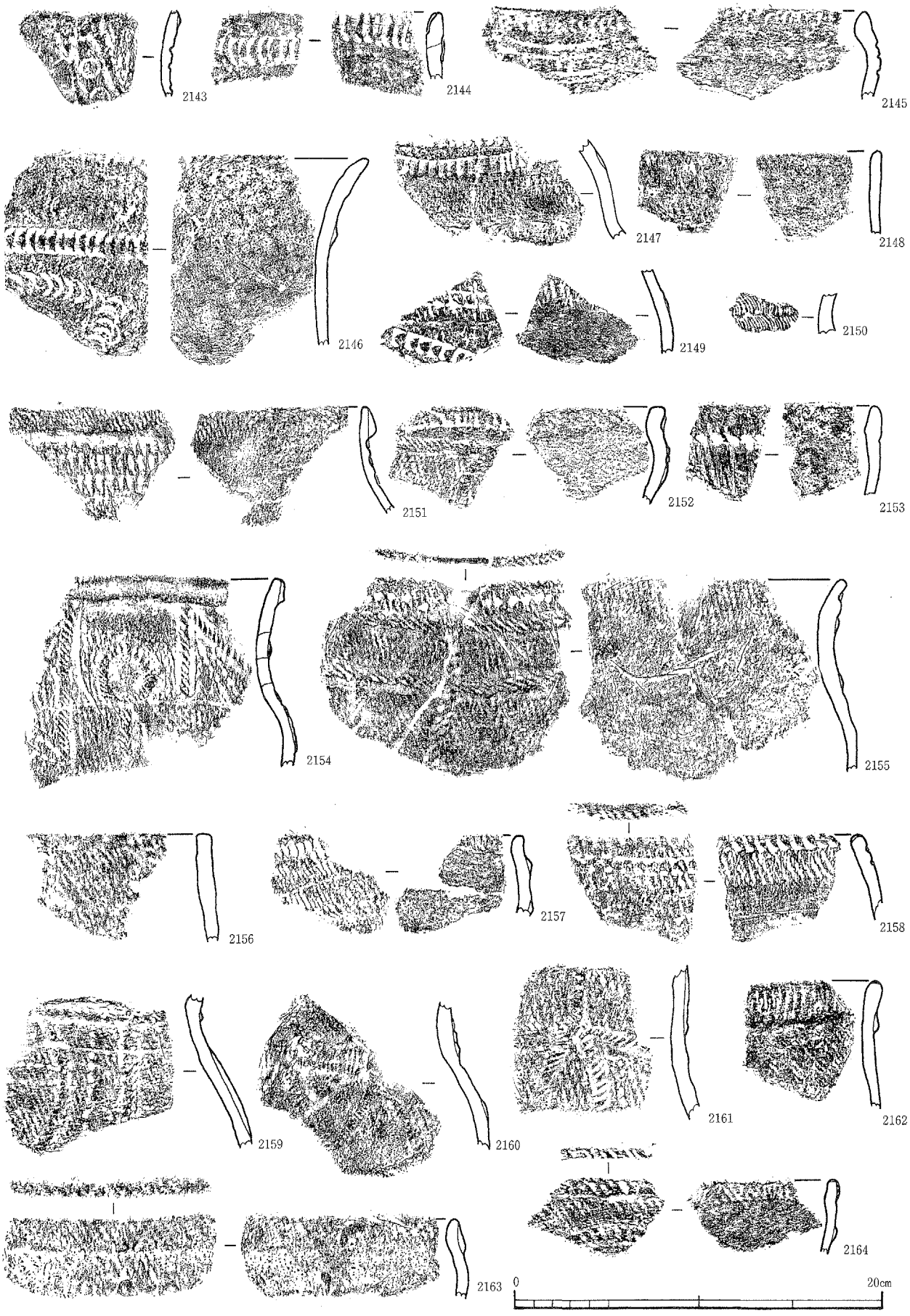
2072～2075：土坑2667、2076・2077：土坑2378、2078：Pit2454、2079：Pit2383、2080：Pit2605、2081・2082：Pit2586、2083：Pit2799、2084：土坑2610、2085～2089：土坑2648、2090：Pit2798、2091：土坑2668、2092：土坑2745、2095～2110 第6層

第149図　V区 12-④区 遺構・包含層出土遺物実測図



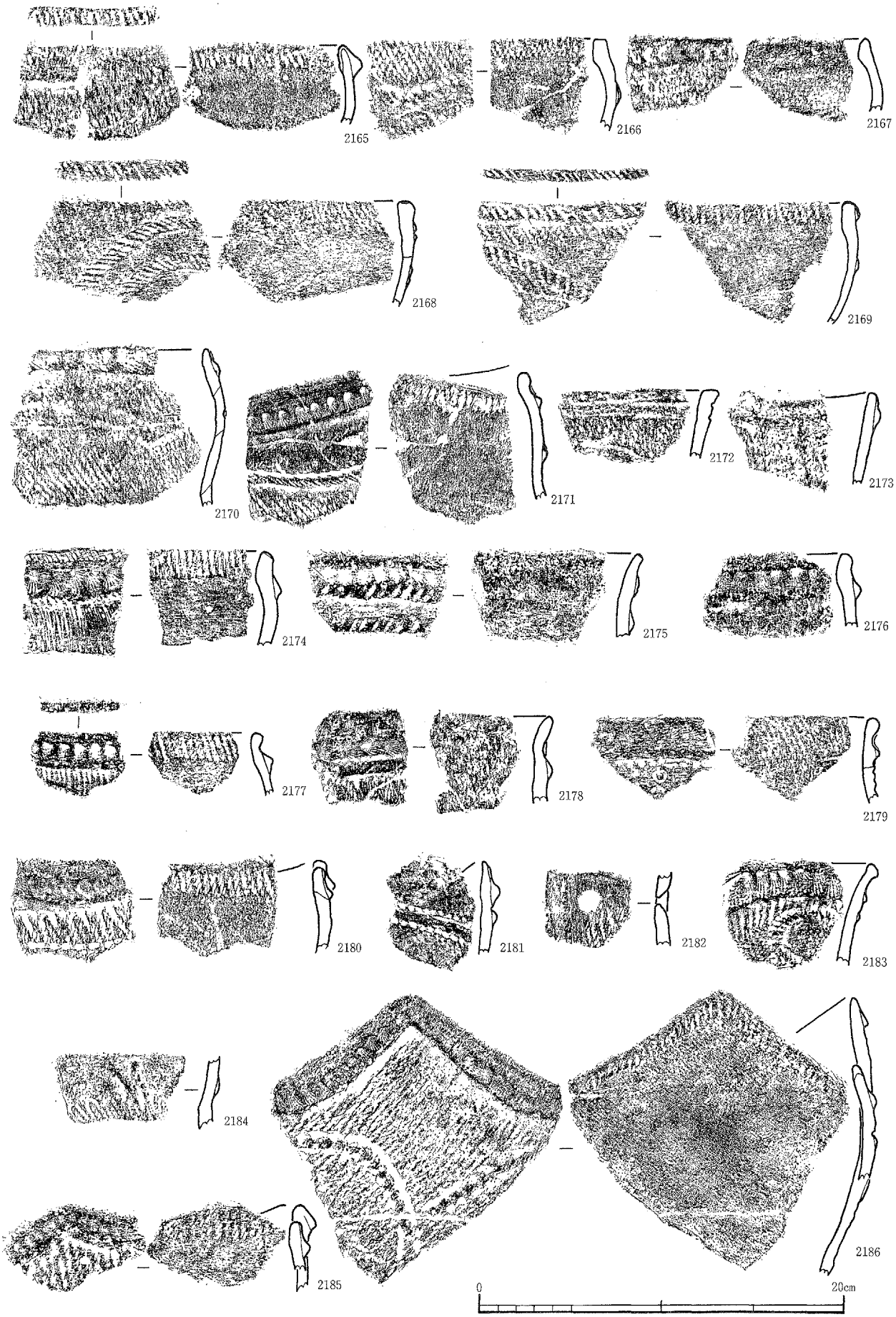
2113～2142：第６層

第150図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図



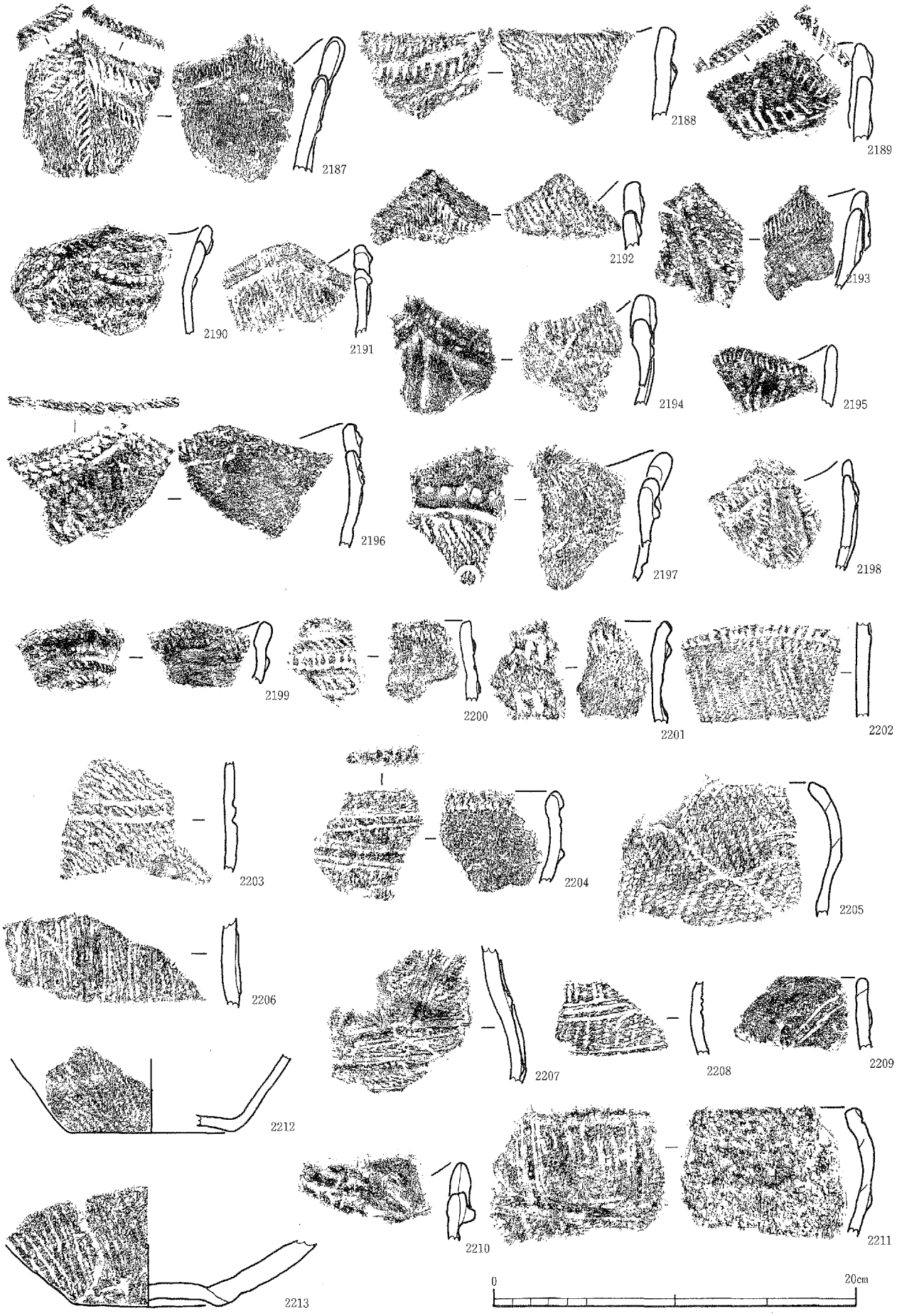
2143～2164：第6層

第151図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図



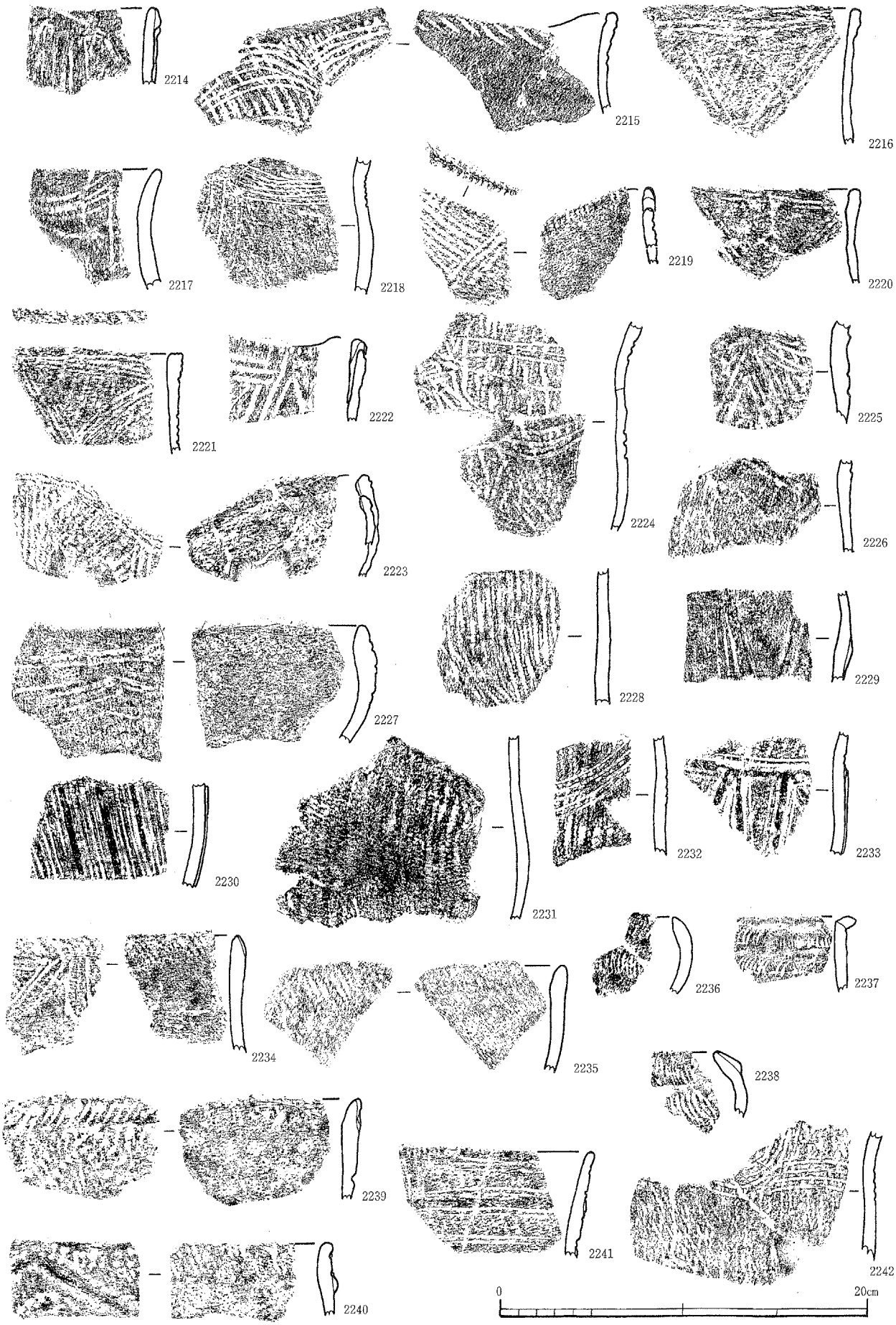
2165～2186：第６層

第152図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図



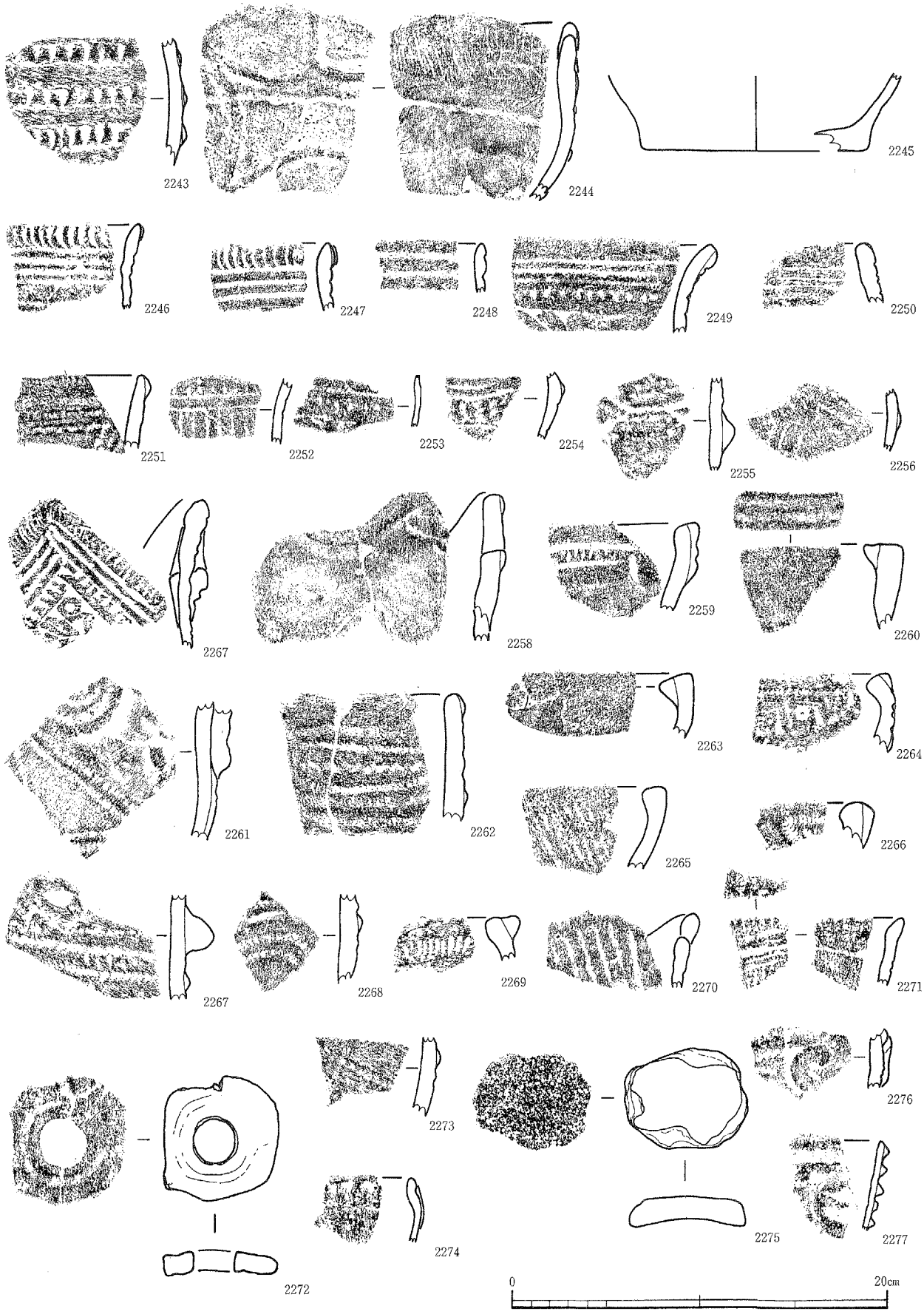
2187～2213：第6層

第153図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図



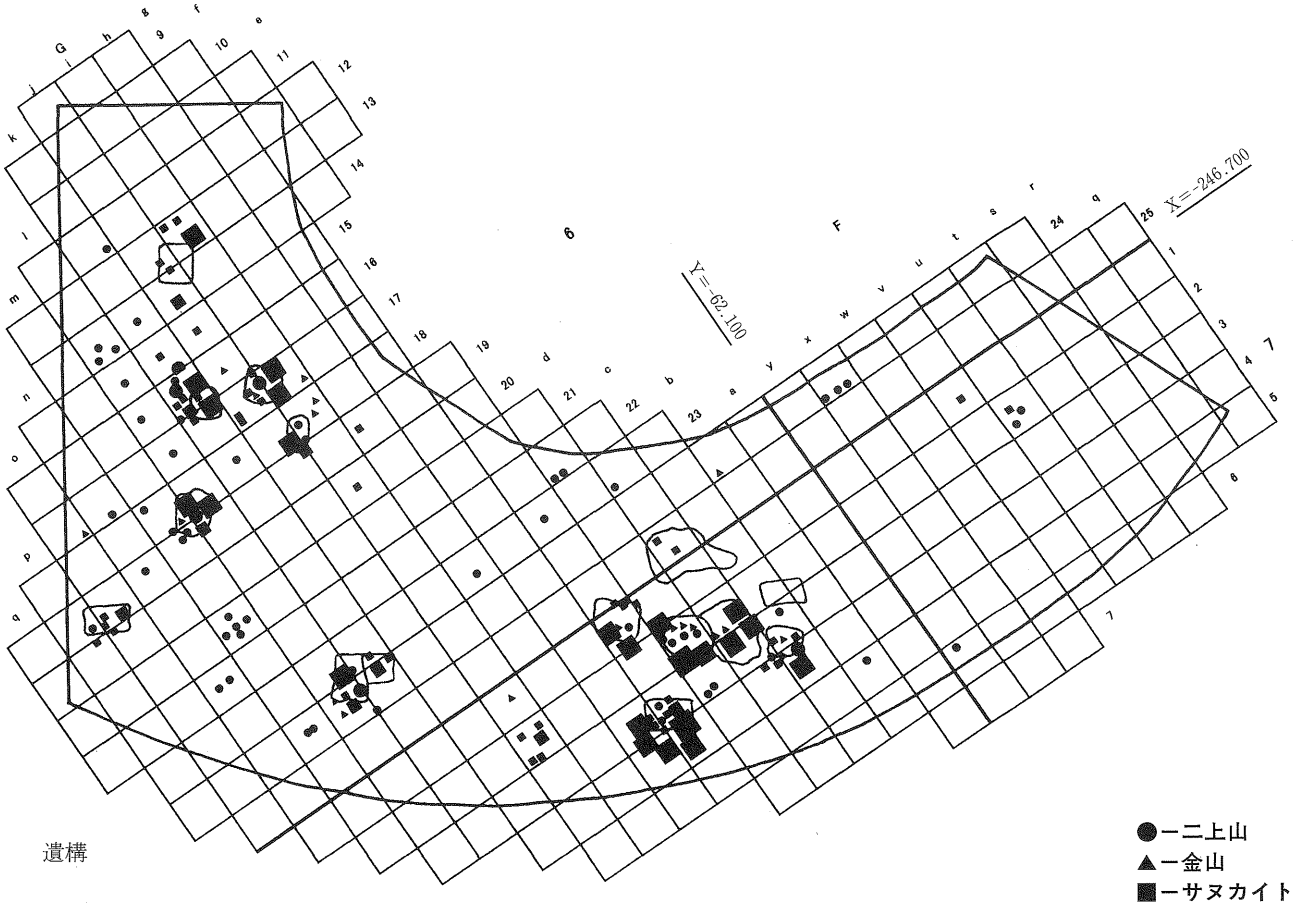
2214～2233：第６層、2234～2242：第6-1層

第154図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図

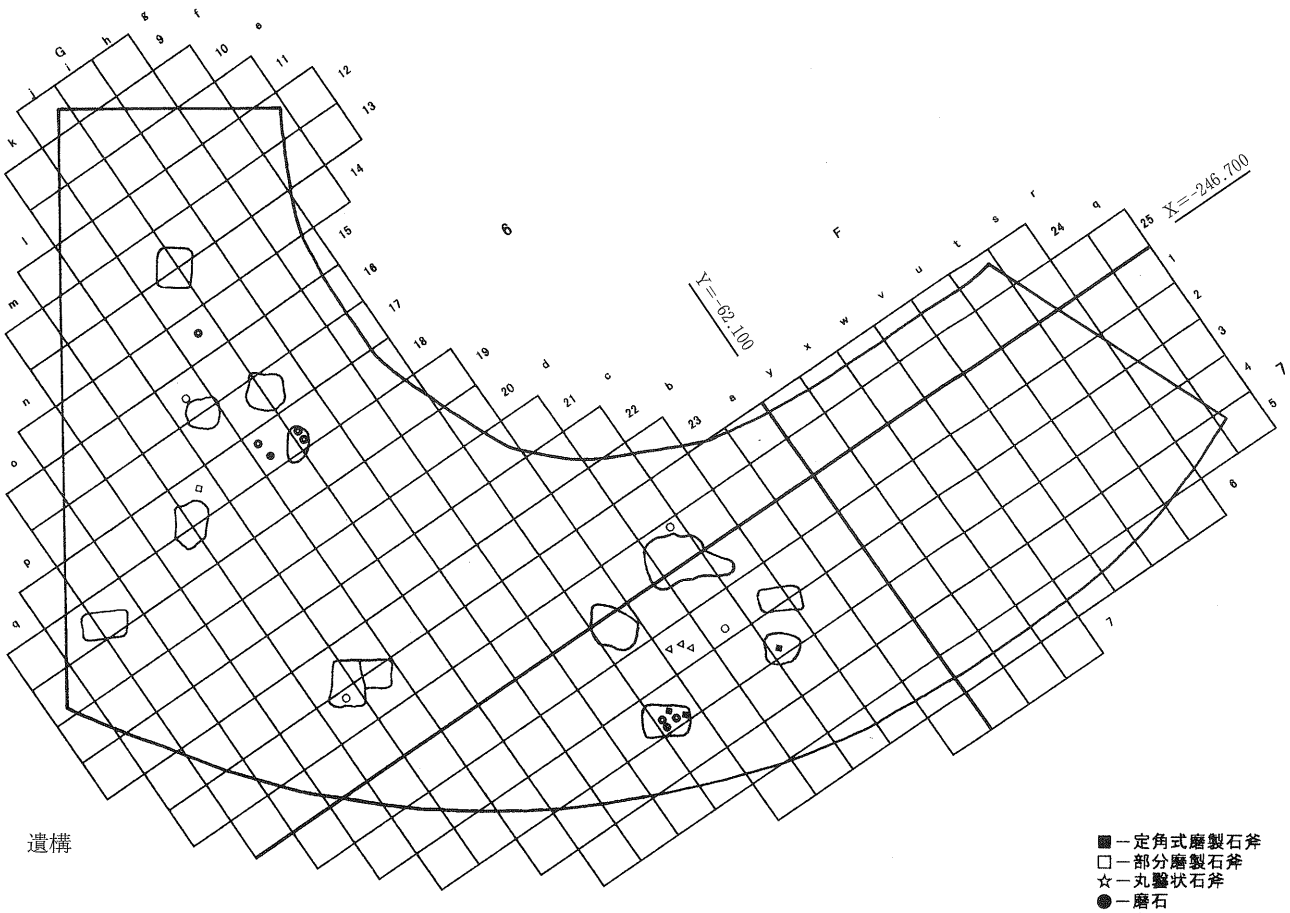


2243～2277：第6-1層

第155図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図

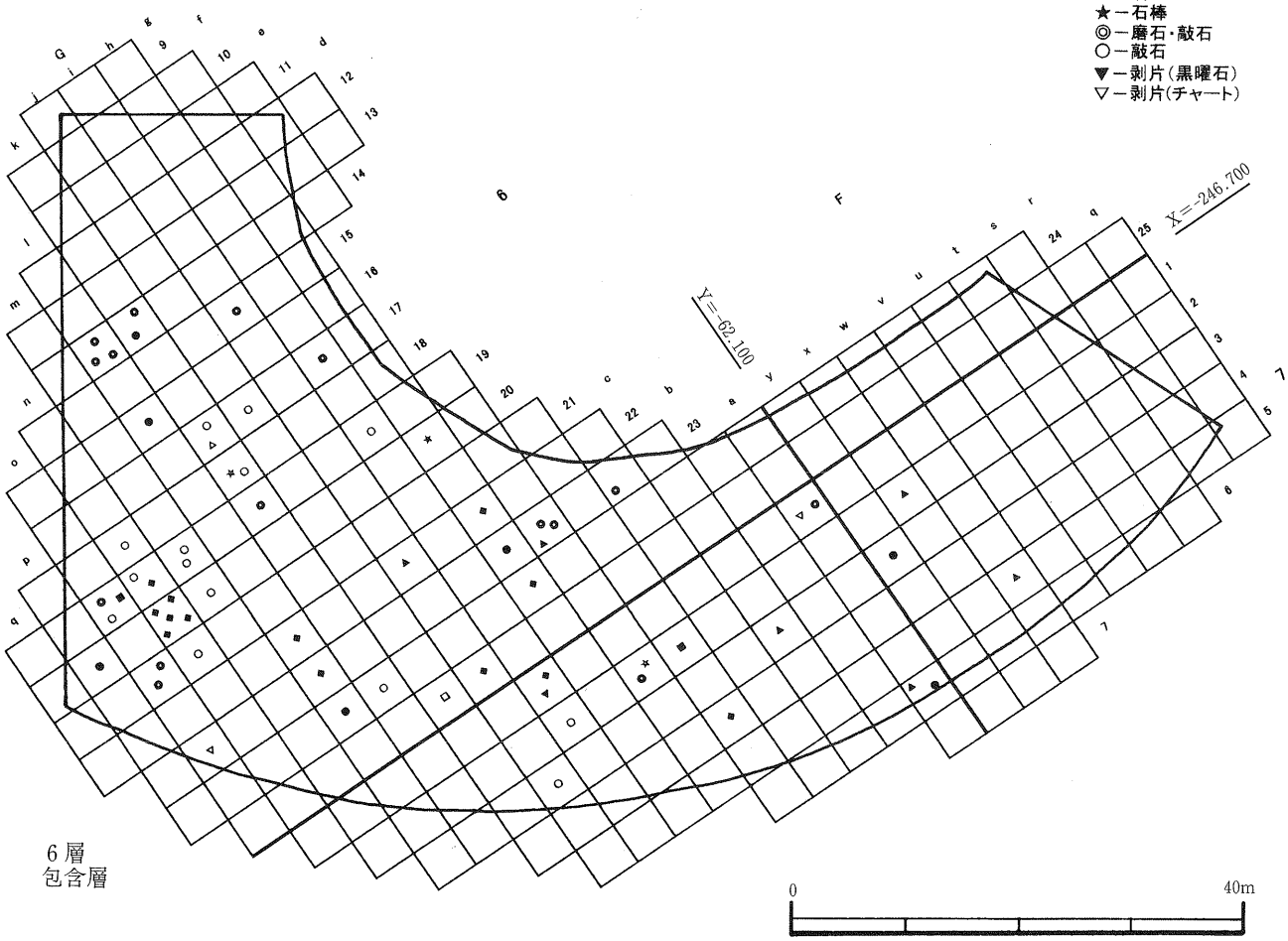


第156図　12-④区 縄文時代中期出土サヌカイト分布密度図



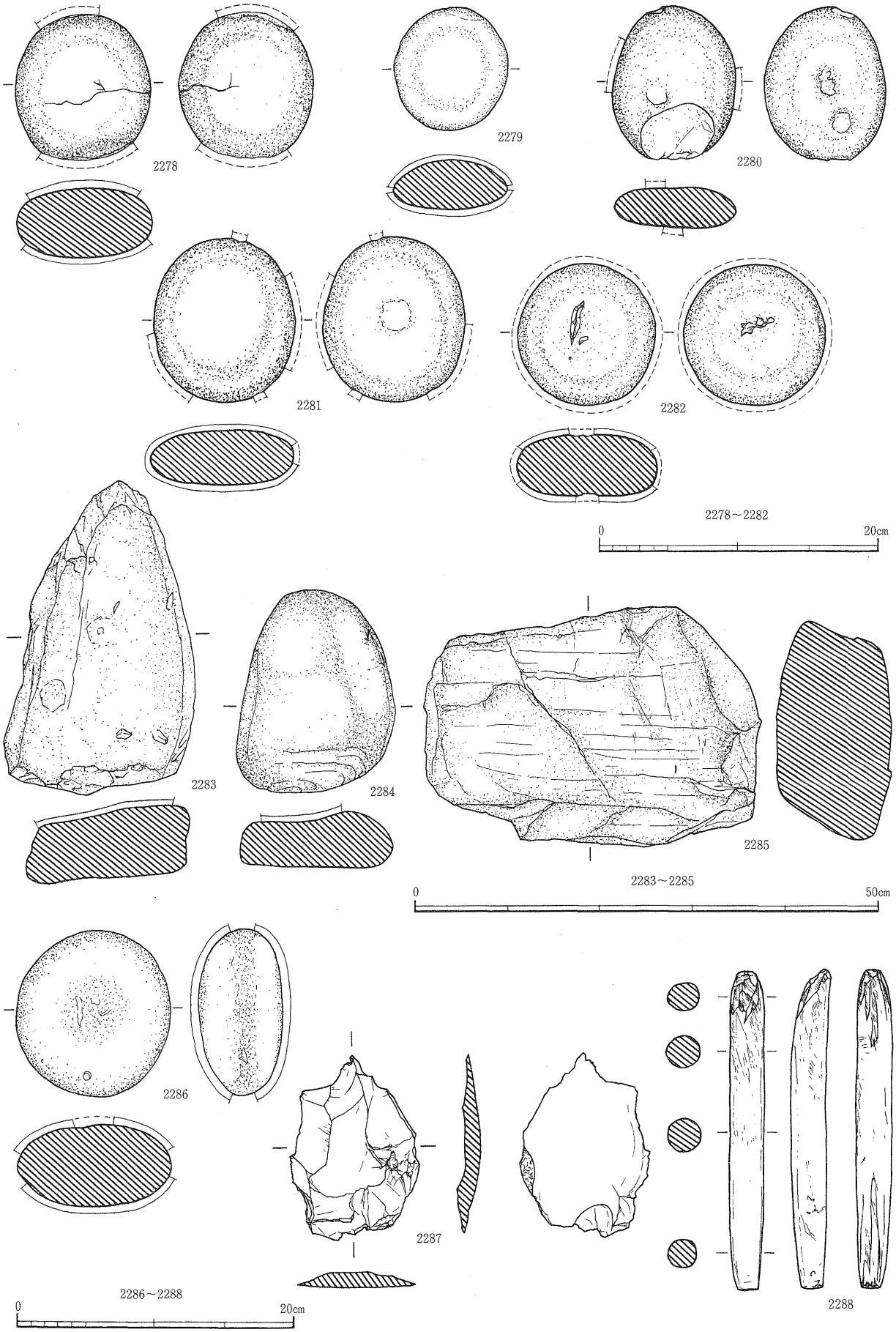
遺構

■－定角式磨製石斧
□－部分磨製石斧
☆－丸鑿状石斧
●－磨石
◆－台石
△－石皿
★－石棒
◎－磨石・敲石
○－敲石
▼－剥片(黒曜石)
▽－剥片(チャート)



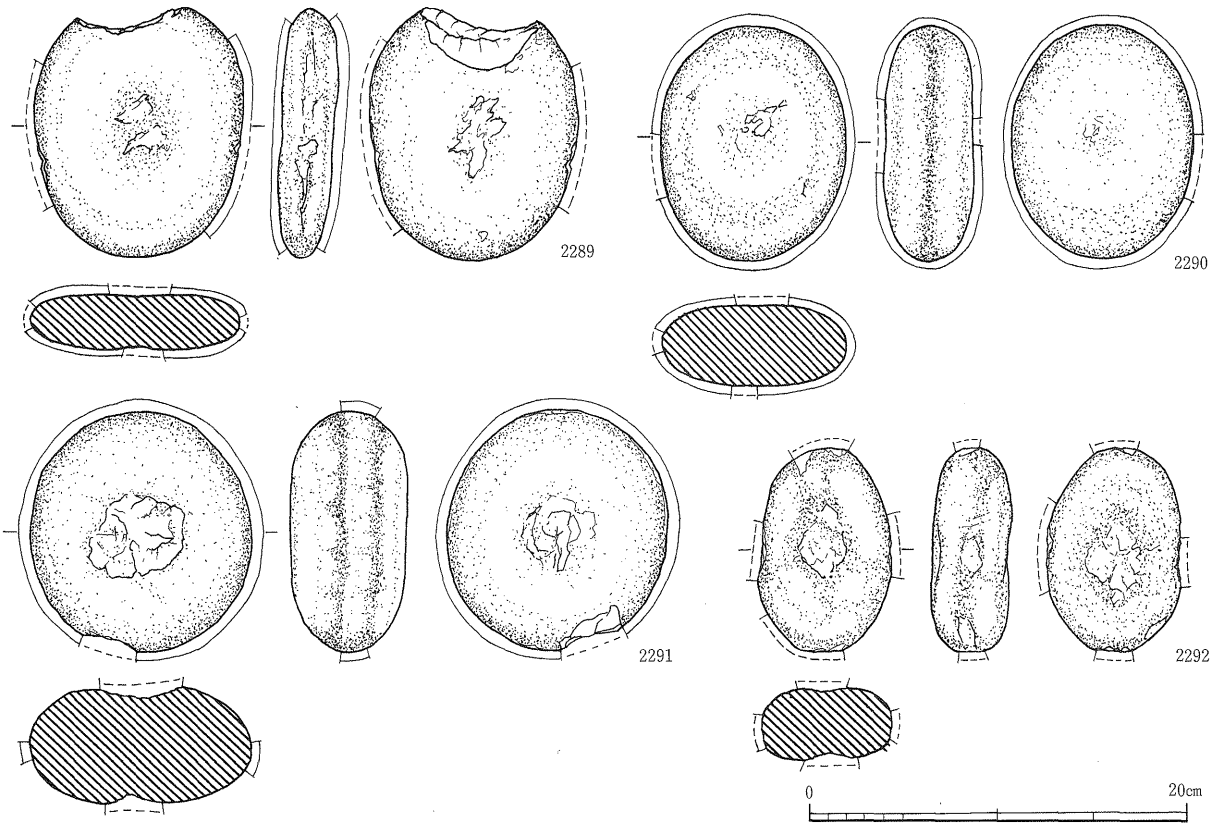
6層
包含層

第157図　12-④区 縄文時代中期出土石器分布密度図



2278・2279・2284・2285：住居2007、2280：住居2245、2281・2282：住居2661、2283：住居1900、2286：土坑2636、2287：土坑2773、2282：第６層

第158図　Ⅴ区 12-④区 遺構・包含層出土石器実測図



2289・2290・2291・2292：6層

第159図　V区 12-④区 包含層出土石器実測図

2272・2275は形状から面子であると考えられる。2289～2292は砂岩の磨石・敲石である。

2．縄文時代後期遺構検出面（第160図、PL.34・35）

縄文時代後期の遺構は、主として第6層上面と第7層上面の二面を主たる遺構面とする。詳細に述べると、第6層上面の遺構面は後期前葉と考えられるが、住居（竪穴住居1113）・埋設土器遺構（埋甕2・3・4）を除いて明確な遺構・遺物が僅少で、生活面としての痕跡は薄い。更に付け加えるなら、後期前葉の埋設土器遺構（埋甕1）は、上面である第5層、弥生前期～古墳前期を主とする遺構面から検出されている。この理由としては、旧遺構面から埋設土器遺構などが突出して構築された、あるいは自然地形的な起伏などとも考えられよう。また、第7層上面の遺構面は、直上層が中期前～中葉の遺物を含むため、本来その遺構面と認識し掘削した遺構面であった。しかし、包含層遺物は後述する検討の結果、第5層・第6層ともに後期土器を含むことを確認している。これらの結果を踏まえた上で、改めて第7層上面から土器型式編年を基に、中期と認識した遺構から後期の遺物を安定して含む遺構のみ、本稿で取り上げ記述を行なった。

《土器型式分類》

ここで扱う遺物は、まとまって出土した各遺構内遺物と包含層出土の特徴的な遺物のみである。遺構内遺物については、無文土器口縁を含め出来うる限りの遺物を記載した。包含層遺物については、ほとんどの有文土器と、大破片及び口縁を中心とする無文土器の一部を抽出した。なお全体的な器種別の数量把握及び比率分析等は行なっていない。

後期の土器型式分類にあたっては、泉拓良1981「後期の土器　近畿地方の土器」『縄文文化の研究　第

４巻　縄文土器Ⅱ』雄山閣、泉拓良・玉田芳英1986「文様帯系統論　縁帯文土器」『季刊考古学　第１７号』雄山閣、玉田芳英1989「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観４　後期・晩期・続縄文』小学館、泉拓良1989「縁帯文土器様式」『縄文土器大観４　後期・晩期・続縄文』小学館ほか、千葉豊1989「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林　第72巻第６号』、山崎真治2003「縁帯文土器の編年的研究」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室　紀要第18号』の各論、岩崎二郎ほか1986『仏並遺跡』大阪府埋蔵文化財協会、植田文雄1990『今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会、高松龍暉・千葉豊・大下明1990『小森岡遺跡』竹野町教育委員会、橋本久和1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会、小濱学ほか1997『新徳寺遺跡』三重県埋蔵文化財センターなどの調査報告書を参考とした。

なかでも後期土器の報告にあたっては、千葉豊1989「縁帯文系土器土器群の成立と展開」を念頭において基本分類を行なうとともに、千葉氏から直接、土器一片一片に及ぶ指導を受けた。基本的な形態から器種・文様はもちろん、特殊な双耳壺や鉢、堀之内式系土器の特徴は同氏の教示によるものである。ただし、本稿の記述・図版等や細部観察における誤記はそのかぎりではない。

《石器の分析》

剥片及び剥片石器は、（株）アルカに分析・図化・記述を委託し、付章転載した。礫石器においては、（財）和歌山県文化財センターにて実測・分析を行ない、遺構出土遺物を主に一部図化した。以上の記述に従い、便宜的に器種名・個数のみ本項にも記載した。なお、委託した剥片及び剥片石器と土器などの共伴関係および土器型式期は、引き渡し時の見解と異なるため若干の齟齬を生じているが、後期遺物については本項の記述を正とされたい。

①埋甕（埋設土器遺構）

埋甕１（第161・164・183図、PL.38・127・139）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の南よりに位置し、標高4.8mの第５層面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は円形を呈し、規模は直径65cm、深さ45cmを測る。土坑埋土は、土坑上層、土器内部層、土器と土坑の僅かな間層に分けられる。完形の無文深鉢（2302）を、正位に埋設する。土器底部には、６cm大の穿孔がみられる。土器内上下部から、10～20cm大の礫を８個検出した。

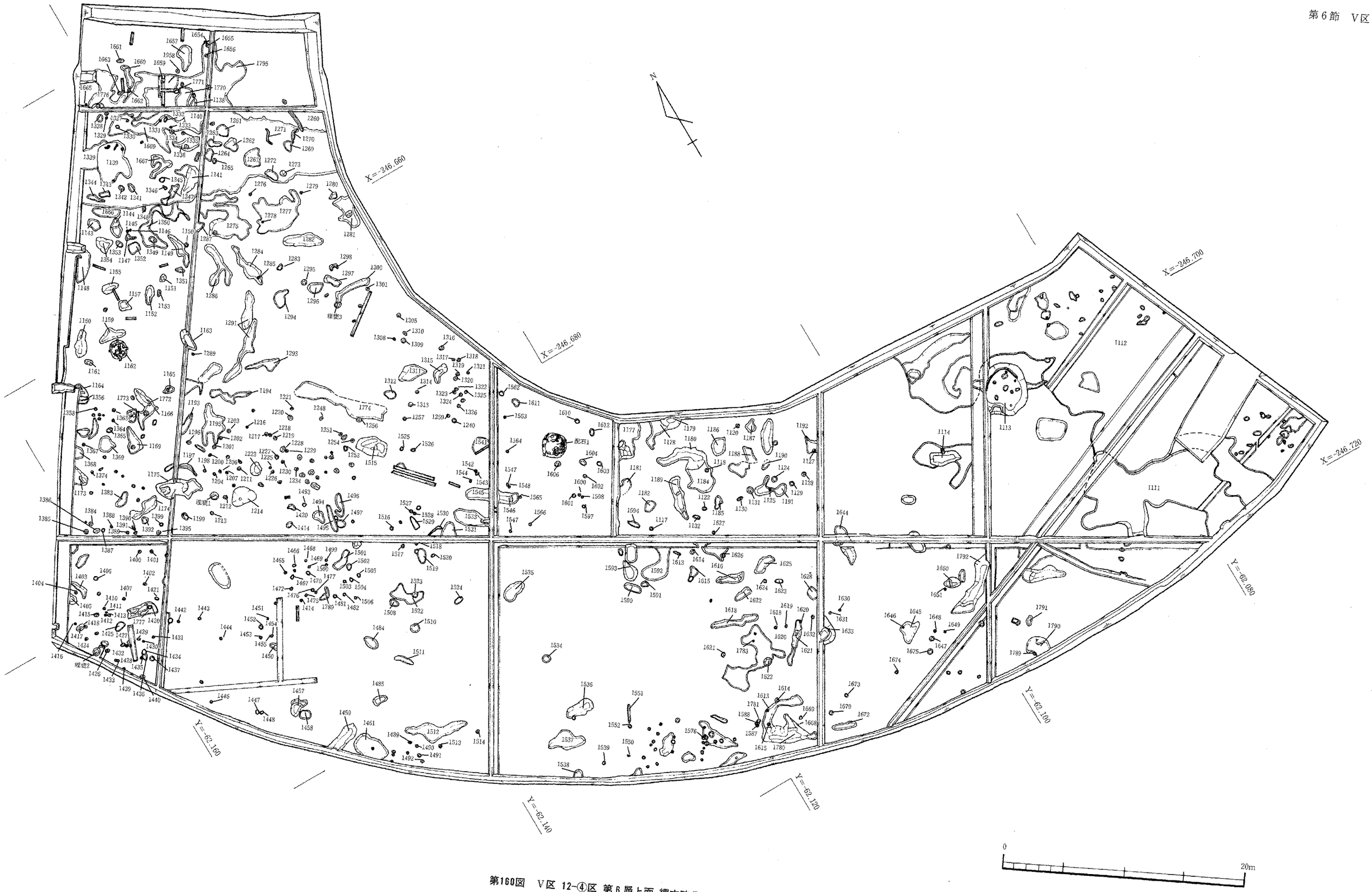
本体土器は、完形の無文深鉢である。口縁端部は丸く収める。口頸部は垂直ぎみに立ち上がり、くびれが弱く、胴部が緩やかにやや膨らむ程度である。外面調整は、全体的にナデを施し、粘土接合痕がみられる。底部には、直径６cmの四角形状の穿孔が行なわれる。平底と考えられるが、やや凹みぎみで、底縁からそのまま立ち上がる。土器型式は芥川期または北白川上層式１期に比定される。

その他、土坑掘方から中期前～中葉の土器片が若干出土している。

礫石器2638は、砂岩製の磨・敲石で、土坑掘方から出土した。

埋甕２（第161・163・183図、PL.39・139）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区中央部の西端に位置し、標高4.6mの第６層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径67cm×短径55cm、深さ26cmを測るが、



第160図　V区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 遺構平面図

南東半部をトレンチにより欠損する。土坑埋土は、土器内上層・下層、土器よりひとまわり大きい外部層に分けられる。土坑底部には、土器を安定させるためのものと考えられる石を、土器底に接するかたちで検出した。無文深鉢（2297）を正位に埋設するが、土器の下部1/3を検出したのみで、上部は削平をうけた可能性が高い。土器底部には6㎝大の穿孔がみられる。

本体土器は、無文深鉢の胴底部である。胴部以下の外面調整は、巻貝もしくは二枚貝による微妙な条痕と考えられる。底部には、直径5㎝の不定形の穿孔が行なわれる。平底で、底縁がやや張り出る。土器型式は芥川期または北白川上層式1期と考える。

礫石器2639は、砂岩製の石皿・台石で、本体土器の下から出土した。

埋甕3（第161・164図、PL.39）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の中央東よりに位置し、標高4.4mの第6層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径55㎝×短径40㎝、深さ34㎝を測る。土坑埋土は、土器内上端層・下層、土器が浮いたかたちとなる下の外部層に分けられる。無文深鉢(2299)を正位に埋設するが、土器の下部1/2を検出したのみで、上部は削平をうけた可能性が高い。土器底部には穿孔がみられない。土器は土圧によるものか東西にやや歪んでいる。

本体土器は、無文深鉢の胴底部である。胴部以下の外面調整は、摩滅のため不明瞭であるが、底部付近にナデがみられる。底部に穿孔はなく、平底で底縁が少し張り出る。土器型式は芥川期または北白川上層式1期と考える。

埋甕4（第161・164図、PL.39・128）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の中央北よりに位置し、標高4.4mの第6層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は円形を呈し、規模は直径58㎝、深さ52㎝を測る。土坑埋土は、土坑上層、土器内上層・下層、土器と土坑の僅かな間層に分けられる。完形の無文深鉢（2303）を正位に埋設するが、わずかに南西に傾く。土器底部に8㎝大の穿孔がみられる。土器内部から小礫を1個検出した。

本体土器は、完形の無文深鉢である。口縁端部は丸く収める。口頸部は外反ぎみに立ち上がり、くびれも弱いが、胴部はやや角度をもって膨らむ。外面調整は、全体的にナデを施す。底部には、直径5㎝の角形の穿孔が行なわれる。平底と考えられるが、やや凹みぎみで底部からそのまま立ち上がる。土器型式は、芥川式または北白川上層式1期に比定されよう。

埋甕5（第161・163図、PL.40・127）

後期前葉、北白川上層式1期の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の中央北よりに位置し、標高4.3mの第7層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径72㎝×短径58㎝、深さ22㎝を測るが、東部をトレンチにより欠損する。土坑埋土は、土器内上層・下層、土器と土坑の僅かな間層に分けられる。ほぼ完形の有文深鉢（2295）を正位に埋設するが、やや南西に傾く。土器底部に穿孔はない。土器内下半部から、15㎝大の礫を3個検出した。

本体土器2295は、完形の有文深鉢で、やや小型である。口縁部に簡略な文様帯を有し、5単位の低

い波状口縁となる。口縁端部を面取りする。波頂部には、主文様として円形刺突、その間に従文様として、太めの１条沈線を施す。頸部は無文帯でナデを施す。胴部には地文として、ＬＲ縄文を底部付近にまで施す。底部に穿孔はない。平底でナデを施し、底縁からそのまま立ち上がる。土器型式は北白川上層式１期に比定される。口縁部文様は堀之内１式に近い要素もみられるが装飾は弱く、胴部縄文は西日本的と考えられる。

埋甕６（第161・163図、PL.40）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の中央西よりに位置し、標高4.3mの第７層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は円形を呈し、規模は直径50cm、深さ25cmを測る。土坑埋土は、土器内上層・中層・下層、土器と土坑の間層に分けられる。無文深鉢（2296）を正位に埋設するが、土器の下部１/３を検出したのみで、上部は削平を受けた可能性が高い。土器底部には、６cm大の穿孔がみられるほか、底部から12cm上の下腹部付近にも３cm大の穿孔を確認した。土器内下半部から、体部に沿う状態で５～10cm大の礫を４個検出した。

本体土器2296は、無文深鉢の胴底部である。胴部の外面調整は、二枚貝等による微妙な条痕と考えられる。底部は土器を埋設後にはずしたかのような状態が考えられ、さらに胴下部に直径４cmの円形の穿孔が行なわれる、珍しい例である。底部は残存不良だが平底で、底縁からそのまま立ち上がる。土器型式は、芥川期または北白川上層式１期と考えられる。

埋甕９（第162・163図、PL.40）

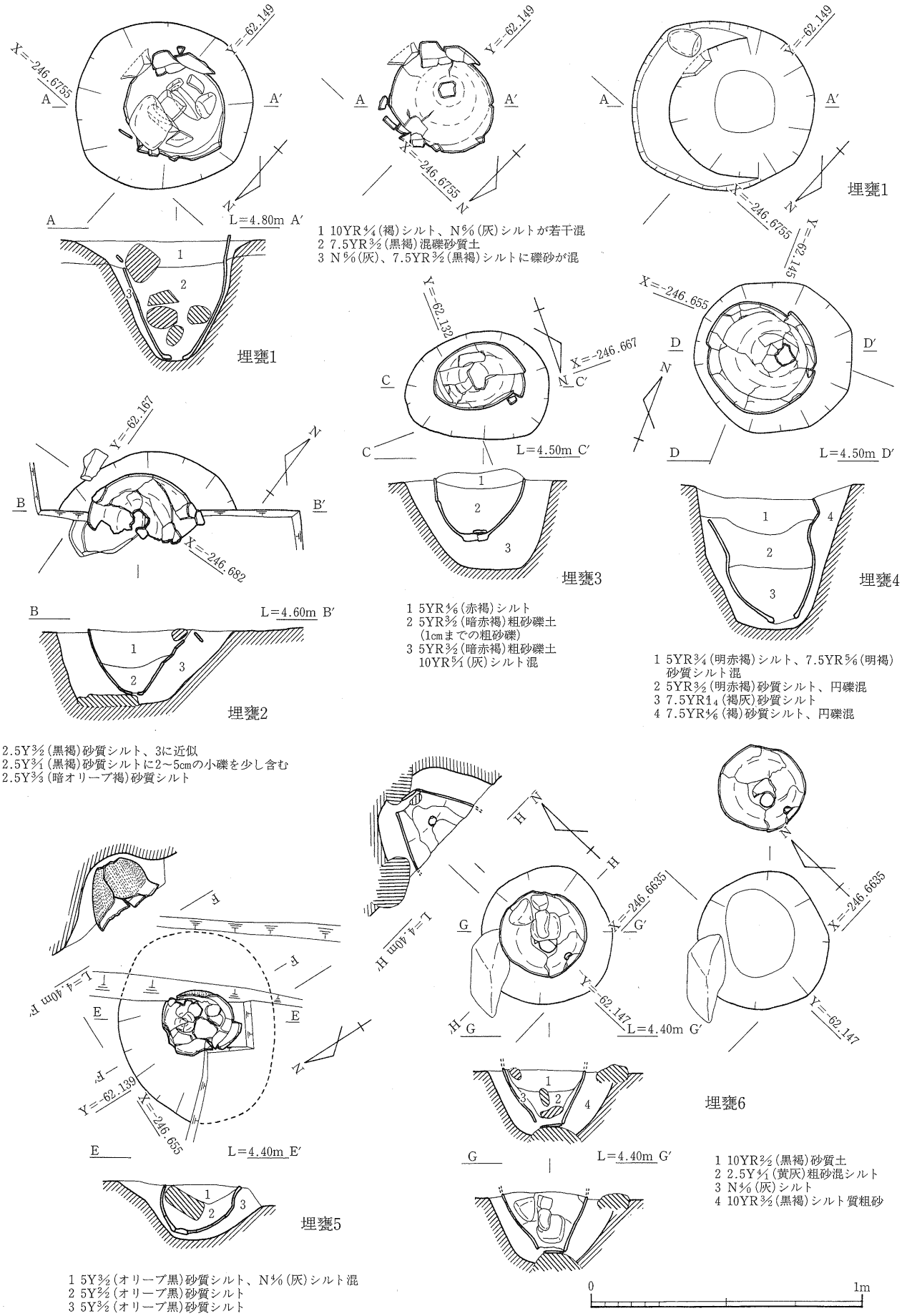
後期前葉、北白川上層式１期の埋設土器遺構と考えられる。調査区中央部北よりに位置し、標高4.4mの第７層上面で検出した。土坑(掘方)の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は直径53cm、深さ14cmを測る。土坑埋土は、土器内上層・下層、土器と土坑の間層に分けられる。有文深鉢（2294）を正位に埋設するが、土器の下部1/4を検出したのみで、上部は削平を受けた可能性が高い。土器底部に穿孔はない。

本体土器2294は、有文深鉢の胴底部である。胴部が張り、やや小型になると考えられる。残存する胴下半部には山形文が重ねて描かれており、胴上半部にはその上に三角文が描かれた可能性が指摘される。また沈線間には、ＲＬ縄文が施される。底部に穿孔はなく、平底で底縁がやや張り出る。

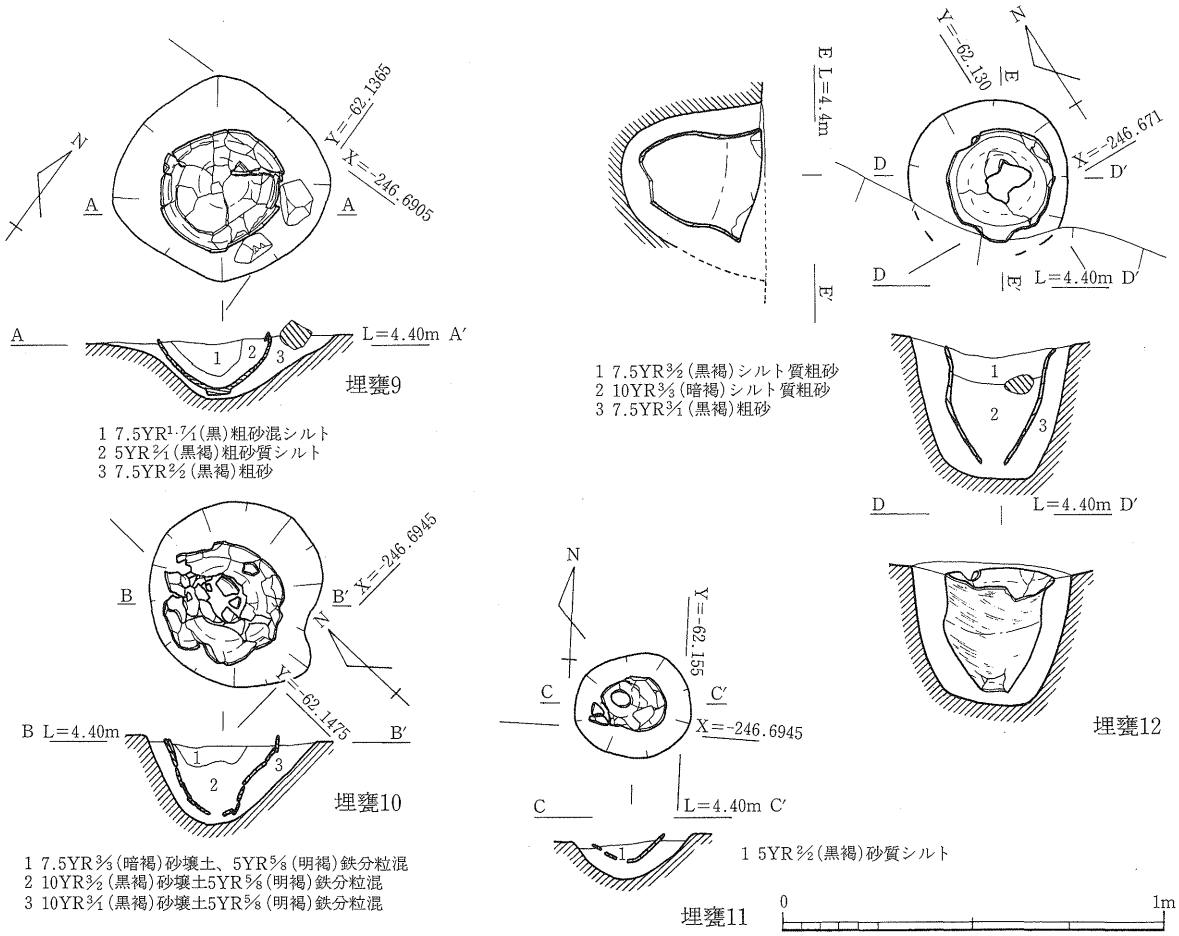
その他、有文深鉢の口縁部片が出土している。口縁端部は丸く、前面肥厚となる。沈線で枠状区画を描き、区画内は無文、区画外に縄文を施す。枠状区画は口縁に沿って横に複数展開する。本体土器は胴部が張るのに対し、口縁部片はくびれが弱く復元されるが、同一個体になる可能性はある。いずれの土器型式も、北白川上層式１期に比定されよう。

埋甕10（第162・164図、PL.41）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区中央部西よりに位置し、標高4.4mの第７層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は円形を呈し、規模は直径50cm、深さ20cmを測る。土坑埋土は、土器内上端層・下層、土器と土坑の間層に分けられる。無文深鉢（2300）を正位に埋設するが、土器の下部1/3を検出したのみで、上部は削平を受けた可能性が高い。土器の状態は不良であるが、底部に穿



第161図　V区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 埋甕1～6平面図・土層図・断面図



第162図　Ⅴ区 12-④区 第６層上面 縄文時代後期 埋甕９～12 平面図・土層図・断面図

孔がみられる。

本体土器2300は、無文深鉢の胴底部である。胴及び底部に条痕調整がみられる。底部には穿孔が行なわれたとみられるが、残存が不良である。平底で底縁がやや張り出る。土器型式は、芥川期または北白川上層式１期と考えられよう。

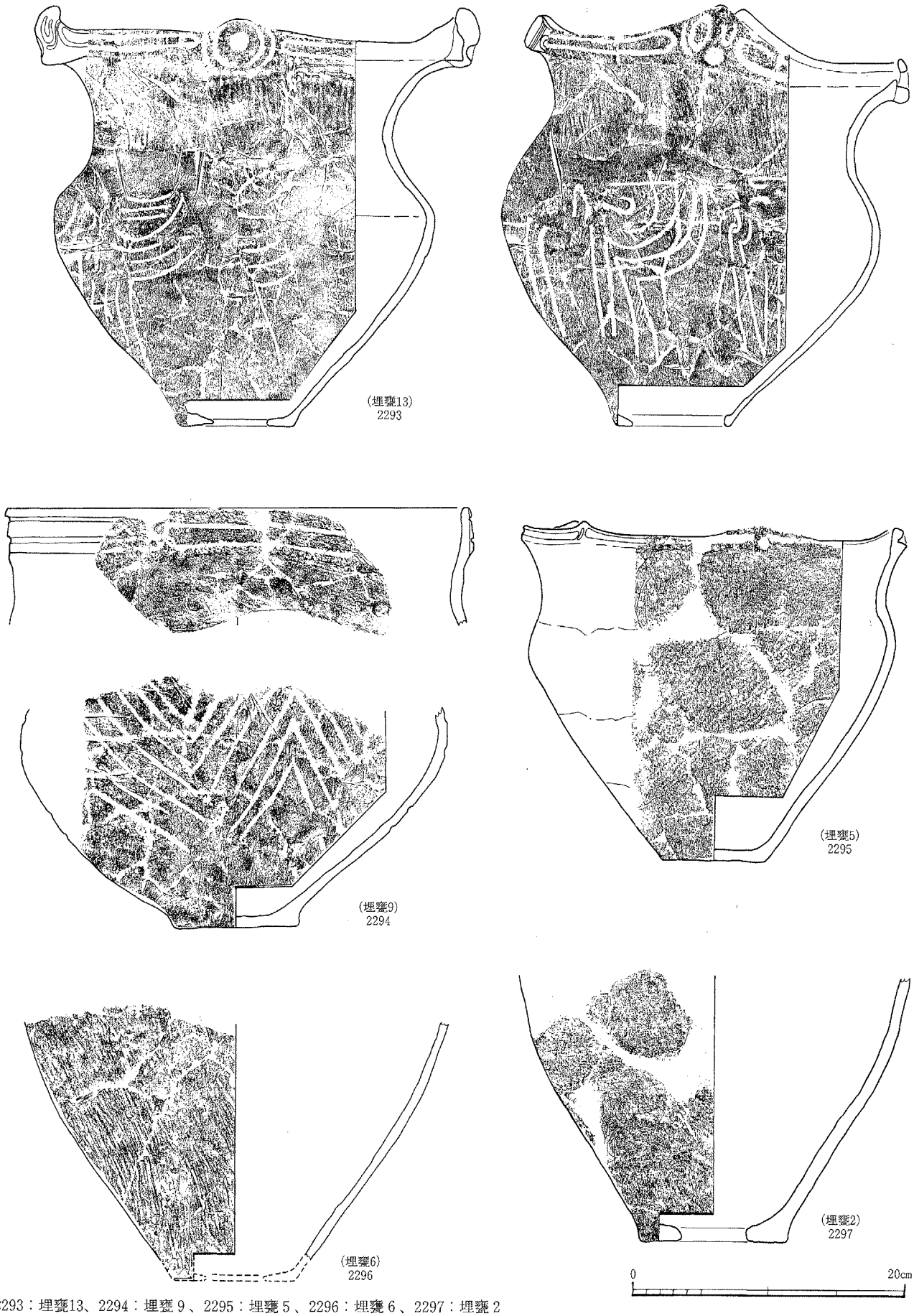
埋甕11（第162・164図、PL.41）

後期前葉の埋設土器遺構としたが、土器底部のみの出土で、時期も後期以前の可能性がある。調査区中央部の西端に位置し、標高4.4mの第７層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径30cm×短径25cm、深さ12cmを測る。土坑埋土は単層である。縄文地深鉢（2301）を正位に埋設したと考えられるが、底部のみの出土と残存状態が不良で、ほとんどが削平を受けた可能性が高い。底部には穿孔がみられる。

本体土器2301は、縄文地深鉢の胴底部である。底部付近にまで、ＲＬ縄文を施すようにみえるが、縄文は不明瞭である。底部には、直径９cmの楕円形の穿孔が行なわれる。平底と考えられるが、やや凹みぎみで、底縁が張り出るかのようにもみえるが底が薄く、そのまま立ち上がるものと考えたい。土器型式は後期前葉、芥川期または北白川上層式１期と考える。

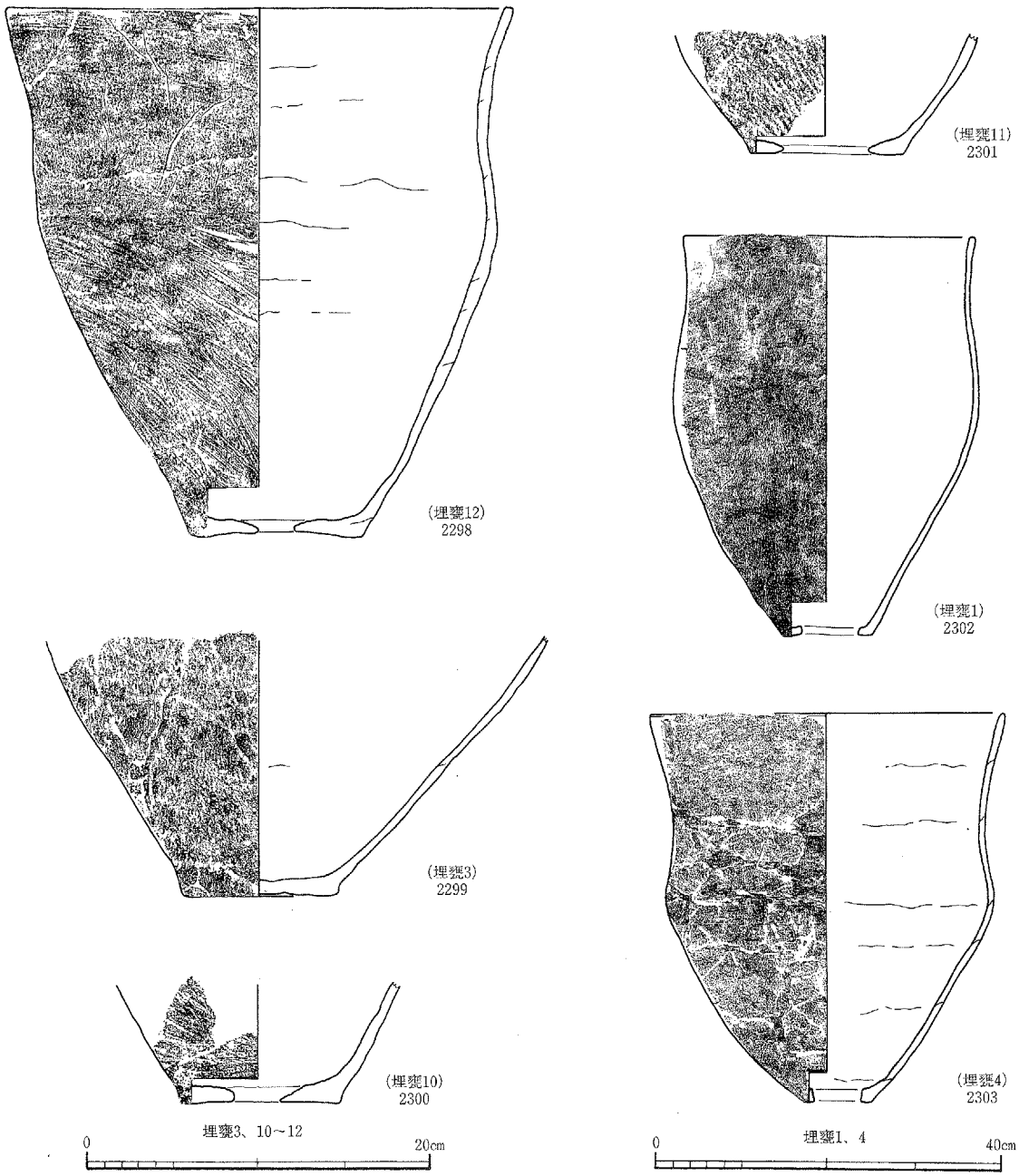
埋甕12（第162・164図、PL.41・127）

後期前葉の埋設土器遺構と考えられる。調査区北西部の中よりに位置し、標高4.3mの第７層上面で検出した。土坑（掘方）の平面形態は円形を呈し、規模は直径42cm、深さ40cmを測る。土坑埋土は、土器



2293：埋甕13、2294：埋甕９、2295：埋甕５、2296：埋甕６、2297：埋甕２

第163図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



2298：埋甕12、2299：埋甕３、2300：埋甕10、2301：埋甕11、2302：埋甕12、2303：埋甕４

第164図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図

内上層・下層、土器と土坑の間層に分けられる。完形の無文深鉢（2298）を、正位に埋設する。土器底部には、底部の大半を欠くような打ち欠きがみられる。土器内部から８cm大の礫を１個検出した。

本体土器2298は、完形の無文深鉢でやや小型である。口縁端部に面取りを施す。口頸部は外反ぎみに立ち上がり、くびれは弱く胴部がやや膨らむ程度である。外面調整は、口頸部から胴部最大径まで丁寧な横ナデを施す。最大径以下の胴部には、斜め右下方向に、巻貝もしくは二枚貝条痕を施したとも考えられるが他の調整に比べ荒々しく、植物質原体による擦痕の可能性もある。底部には、遺物実測図では小さくみえるが、部分的に底部の大半を欠くほどの、大きい不定形の打ち欠きを行なう。平底と考えられるがやや凹みぎみで、底縁からそのまま立ち上がる。土器型式は、芥川期または北白川上層式１期に比定できよう。

埋甕13→後述する（３）配石遺構として、土坑2538［埋甕13］に記載。

②竪穴住居

竪穴住居1113（第165・169図、PL.36・128・129・139・145・183、アルカ第５図）

後期前葉、北白川上層式２期の竪穴住居と考えられる。調査区東部の北よりに単独的に位置し、標高4.2mの第６層上面で検出した。平面形態はやや南北斜めに伸びた楕円形を呈すが、北西端部は土層観察用トレンチにかかり欠損した。規模は、検出面で長径4.5m×短径3.4mを測り、検出面からの深さは57cmでレンズ状に深い。同形態の床面は、長径3.6m×短径2.8m、床面積は約32㎡である。住居埋土は、大きく２層に分けられ、上層は黄灰色のシルト層、下層は暗灰色粘質土層で炭・土器等を多数検出したことから、焼失した可能性もある。

中央部には、直径46cm×深さ９cmの円形を呈す凹み（Ｐ２）があり、地床炉の可能性がある。主柱穴は４本（Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８）と考えられ、それぞれの規模はＰ４が直径22cm×深さ12cm、Ｐ６は直径20cm×深さ30cm、Ｐ７は直径24cm×深さ28cm、Ｐ８は直径20cm×深さ24cmを測る。柱穴の埋土は灰色粘土で、このうち３本は、石を埋めてしっかりと柱が据えられる構造だと推定されるが、基盤が砂礫層であるため分別はできなかった。壁周溝を、床面端部の北側半周に幅15cm×深さ２cm検出した。南西部には、階段として使用したと考えられる高まりを１段検出し、その段の規模は長径48cm×短径32cm×床面からの高さ60cmを測る。

2304～2306は有文深鉢の口頸部片である。2304は口縁に透かし彫りを施した特異な文様例である。波状口縁と考えられ、波頂部に主文様として円孔、両脇に三角形の透かし彫りを沈線で囲み、ＬＲ縄文を施す。波底部付近に、区切文として縦方向に短い沈線を数本施す。胴部の文様は確認できないが、やや段状を呈す。2305は口縁内面が肥厚し、横方向の２条沈線間に長方形区画文を施す。2306も内面肥厚する。いずれも北白川上層式２期と考えられが、2304などは、そのなかでも新しい特徴を示す。

2307～2310・2313は、条線地深鉢の胴部片と胴底部である。2313は凹みぎみの平底で、底縁上がややくびれる。

2311・2312は、無文深鉢だが口縁外面が肥厚する。北白川上層式２期。2314～2316は無文深鉢で、口縁を丸く収めるものとつまむものがある。

2317～2319はボウル形を呈す有文鉢の口縁部である。2317は横方向の太い２条沈線間にＲＬ縄文を施す。2318は摩滅するが三角形の文様を描くとみられる。2319も摩滅するが横方向の２条沈線がみられる。いずれも上記の共伴遺物から北白川上層式２期と考えられる。2320は無文鉢片で、2321は無文の注口土器注口部である。2322～2326は中期の船元式前後の土器片で混入品であろう。

19は二上山産サヌカイト製の凹基石鏃で１点出土、20・21は同サヌカイト製の石錐で、２点出土した。また、二上山産サヌカイト製の両極石器23・24・25が４点、同サヌカイト製の両極剥片と使用痕剥片22が各１点出土した。他にも、二上山産サヌカイト製の剥片が13点、金山産サヌカイト５点のほか、数点の剥片が出土した。

2641は砂岩製の台石で、他石皿・台石で計５点出土、2640は砂岩製の磨・敲石で、他計４点出土した。

竪穴住居2600（第165・170図、PL.30・129・130・139・145・183、アルカ第５図）

後期前葉、北白川上層式２期の竪穴住居と考えられる。調査区北西部の中央に位置し、標高4.1mの第７層上面で検出した。平面形態はやや南北斜めに伸びた楕円形を呈すが、北西部は土層観察用トレンチにかかり欠損した。規模は長径4.3m×短径3.9mを測り、検出面からの深さは６cmでレンズ状に浅い。住居埋土は褐色土の単層である。

中央部には円形の地床炉があり、規模は直径56cm、深さ16cmで、上部は赤褐色によく焼けている。主柱穴は５本（Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７）と考えられ、それぞれの規模はＰ２が直径24cm×深さ11cm、Ｐ３は直径44cm×深さ19cm、Ｐ５は直径24cm×深さ15cm、Ｐ６は直径24cm×深さ20cm、Ｐ７が直径20cm×深さ７cmを測る。ほとんどの柱穴埋土は灰色シルトで、一部炭が混じる。床面から掘り込まれた住居内土坑４は不定方形を呈し、長径1.4m×短径80cm、深さ10cmを測り、底から石皿やサヌカイト材が出土した。その他土坑は多数みられるが、ほとんどが住居廃絶後のものと考えられる。床面からは土器多数のほかに、石皿がもう１点出土した。

2327は摩滅した有文深鉢の口縁部で、断面「Ｔ」字形を呈する。2328は条線地深鉢片である。2329・2330・2331・2333・2334は、無文深鉢の口頸部片で、2334は小型である。2332は平底の底部である。2335はボウル形を呈する有文鉢の胴部片で、２条沈線間にＬＲ縄文を充填する。いずれの土器も後期前葉、北白川上層式２期と考えたい。

26・28・30は二上山産サヌカイト製の凹基石鏃で、素材不明の１点27を含め計４点出土し、同サヌカイト製の鋸歯縁凹基石鏃の脚部29も１点出土した。また二上山産サヌカイト製の石錐も１点出土した。また、二上山産サヌカイト製の石核31と同サヌカイト製の二次加工剝片が各１点出土した。サヌカイト製剝片が約100点と多数出土し、その中には二上山産７点、金山産１点が含まれる。

2642は砂岩製の打欠石錘？で１点出土した。2643・2644は砂岩製の石皿・台石で計３点出土したが、磨・敲石は確認できなかった。

竪穴住居2682（第165・170・171・183図、PL.129・130・139・145、アルカ第５図）

後期前葉の竪穴住居としたが、上記の２住居と異なり炉・柱穴などの明確な付属施設がなく、大型の土坑あるいは落ち込み遺構の可能性がある。また、微高地の北端部に相当する。調査区北西部の北端に位置し、標高約3.75mの第６層から検出し始め、標高4.2mの第７層で再検出した。規模は一辺が3.5m程度の正方形状を呈し、検出面からの深さは約11cmと浅い。埋土は黄褐色土と考えられる。

主柱穴は３本（Ｐ２・Ｐ５・Ｐ９）と考えられ、それぞれの規模はＰ２が直径21cm×深さ11cm、Ｐ５は直径32cm×深さ19cm、Ｐ９は直径44cm×深さ16cmを測る。その他土坑が多数みられるが、住居廃絶後に掘り込まれたものと考えられる。周辺から土器が多数出土している。

2336～2344・2346は、有文深鉢の口縁と考える。2336・2337は、上面肥厚した口縁に沈線を施す。2336は口縁に低突起を有し、頸胴部界線を施す。2339も口縁が上面肥厚し、主文様として低突起の周囲に弧状沈線を、従文様として摩滅するが２条沈線を施す。2340は口縁前面に隆帯と沈線を施す。口頸部には刺突の施した垂下隆帯とその両脇に複数の沈線で区画文を描き、区画外にＬＲ縄文を充填する。2338と同一個体か。2341は口縁が前面肥厚し、緩やかに内湾する。2342は口縁内面に主文様とし

て円孔とその両端に弧線文、従文様に1条沈線を施す。2344は口縁に横方向の条線を施したものか。2346は上面へ伸びた口縁部片で、主文様沈線の一部である。

2345～2349は有文深鉢の胴部片である。2347は3本沈線で曲線的な文様を描き、2349は沈線区画内に縄文を施したものと考える。2348・2350は縄文を施したものである。

2351・2336は無文深鉢で、口縁がしっかりと面取りされたもの、底部平底のものである。2343はボウル形の無文鉢で、2353は大型で口縁外面が肥厚する。いずれも後期前葉、芥川期～北白川上層式1期のものと考えられる。

32・33は二上山産サヌカイト製の凹基石鏃で、計3点出土した。34はチャート製の削器で1点出土した。また二上山産サヌカイト製の両極石器、両極剝片が各2点出土した。他にも、二次加工剝片1点のほかに、二上山産製4点を含むサヌカイト剝片が約70点出土した。

2645は砂岩製の石皿・台石で1点、2646・2647は砂岩製の磨・敲石で2点出土した。

③配石遺構

土坑2538［埋甕13］（第163・166・171・184図、PL.37・127・130・139）

後期前葉、芥川期の石棒と埋設土器を伴う配石遺構と考えられる。調査区北西部の北東よりに位置し、標高4.3mの第7層上面で検出した。土坑の平面形態は不定円形を呈し、規模は長径2.2m×短径1.65m、深さ30cmを測り、中央部は円形に一段深くなっている。土坑内に深鉢と石棒を埋納して、その周りに配石を行なう。

埋設土器2293［埋甕13］は、平坦な土坑基底部東隅に長軸60cm×短軸50cm、深さ10cmの楕円形を呈す掘方を作り、底部を穿孔した深鉢を、三方から据え石により正位で固定し、腹部まで埋めている。土器内は有機物を納めていたのか、外周からの土圧を受け頸部が崩れ口縁部は内部に落ち込む。土器は完形の有文深鉢で、底部に穿孔がみられる。

石棒は、土坑のほぼ中央で頭部を方位北北西のやや下に向け、横置した状態で出土した。石棒の基底部は欠損している。一部は数mmの堆積土を挟んで埋設土器に重なっている。埋設土器との関係から石棒は埋納時の原位置を留めておらず、埋設土器の上や周辺にあったものが、最終的には土器の口縁部崩壊とともに現在の位置に落ち込んだと考えられる。配石は石棒を中心としてほぼ円形をかたどって砂岩の礫が配されている。埋設土器・石棒を境として、東側には30cm程の大きめの礫、西側には15cm程の小さめの礫を配す違いが見受けられる。この他の出土遺物としては、埋設土器の掘方から磨耗礫？と磨・敲石が各1点、土坑埋土からはサヌカイト剝片が出土している。

埋設土器の本体土器2293は、完形の有文深鉢で、やや小型である。全体的に薄手で丁寧に作られた精製品である。口縁部に文様帯を有し、4単位の低い波状口縁となる。波頂部は、対向して大小の2組の突起が付く。大突起には、主文様として中央に円刺突文と左右に縦長楕円文と弧線文を施す。小突起には、主文様として円形刺突と弧線文を施す。波頂間の従文様として、左右に伸びた区画文を施す。区画文端部は隅丸だが、一部途切れるものもある。頸部は強くくびれ無文帯となるが、しっかりとした巻貝条痕を縦方向に上下を揃えて施し、文様的効果をねらったものと考えられる。胴部も強く

張り、その拡張し始める部分から文様を施す。胴部文様には、２条の沈線によるＲＬ縄文帯を曲線的に垂下させ、沈線の末端は部分的に入り組んでいる。底部には、直径４㎝の穿孔が行なわれる。平底と考えられるがやや凹みぎみで、また底縁がやや張り出るかのようにも見受けられるが薄く、そのまま立ち上がるものと考えたい。土器型式は芥川期に比定される。

その他、土坑から出土したものとして、2356は有文深鉢の胴部片で、縦方向に４条沈線を施す。2357も胴部片で、末端が入り組む３条沈線を施す。2358は条線地と考えられる。2359は特異な器形文様で、横方向に太い隆帯と沈線を施す。口縁が内湾する形態の丁寧に作られた有文鉢で、近畿以西に散見するとされ。いずれも時期は芥川期に比定される。

2648は、砂岩製の大型石棒である。頭部をやや膨らむように削り出し、胴部は断面隅丸正方形に削る。また、基底部は欠損する。2651は泥岩製で、磨耗礫とされる。2650は砂岩製の磨石である。2649・2652は砂岩製の石皿・台石で、他３点出土している。その他にサヌカイト製の削器が１点出土している。

配石遺構１（第165図、PL.37）

後期前葉の配石遺構としたが、遺構に伴う遺物もなく時期・種類を特定し難い。調査区中央部の北端に位置し、標高4.4mの第６層上面で検出した。配石の平面形態は円形を呈し、規模は直径４m前後を測る。堀形は、その規模を若干上回る程度と考えられる。配石の構造は、周辺に散在する40～80㎝大の川原石を、中心を粗にして輪状に並べる。また、石の長軸を中心に向け、放射状に配した可能性がある。なお遺物は、サヌカイト剝片が数点出土したのみである。

土坑1162（第168図）

後期前葉の配石遺構としたが、遺構に伴う遺物もなく時期・種類を特定し難い。調査区北西部の中央西よりに位置し、標高4.5mの第６層上面で検出した。10～15㎝大の石が集中したため配石遺構としたが、配石形態も不定形である。下部から掘り方も検出したが、遺物は確認できなかった。

土坑・ピット

第６層面土坑群［土坑2468・1160・1165・1174・1214・2273・2241・1778・1179・1780］（第167図）

第６層上面で検出した土坑群と調査時は認識したが、遺物も僅少かつ平面形態も不定形で、浅い流路もしくは水溜まり状を示すものがほとんどであり、ここでは大規模な洪水等に伴う自然流路痕と考え一括する。なお、この第６層上面で、埋甕２～４を検出したため後期の遺構面と考えていたが、逆に同遺構の土器本体が突出していたため、本来の遺構面より上面で検出した可能性も考えられる。

土坑2599（第171図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の北東よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は円形を呈し、規模は長径1.3m×短径1.12m、深さ39㎝を測る。

2355はボウル形の有文鉢で２条沈線の曲線文様を施し、口縁面取りする。中津Ⅱ式～福田Ｋ２式と考えられるが、当遺跡の状況から後期前葉にまで残存した可能性もある。

土坑2603（第167・171図、PL.38・130）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の北よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平

面形態は円形を呈し、規模は長径75cm×短径65cm、深さ43cmを測る。

2360は有文深鉢の口縁片で、口縁前面が肥厚し、低突起に主文様として浅い円刺突と従文様に沈線を施す。内面突起裏にも円刺突を施す。後期前葉と考えられる。

石器については、サヌカイト剝片が数点出土した。

土坑2273（第167・171図、PL.130）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の南端に位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は不定形を呈し、規模は長径2.85m×短径1.5m、深さ49cmを測る。

2361・2362は有文深鉢片である。2361は胴部に、横方向の長方形区画文を施す。2362は口縁内面が肥厚し、上面の主文様端に弧線文、従文様に沈線を施す。後期前葉と考えられる。

土坑2268（第171図、PL.130）

後期前葉、芥川期～北白川上層式1期の土坑と考えられる。調査区北西部の南端中央よりに位置し、標高4.6mの第7層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径90cm×短径74cm、深さ12cmを測る。埋土は2層に分けられ、皿状に堆積する。土坑底部西端から深鉢口頸部片が出土した。

2363・2364・2366・2367は有文深鉢の口縁・頸胴部である。2366は口縁前面に太い1条沈線を施し、沈線下に小刺突を刻み状に施す。低突起を有し、主文様として円形刺突を沈線に重ねて施す。断面が内面へクランク状に屈曲し段を持ち、内面低突起裏にも円刺突を浅く指押さえ状に施す。内湾し段を持つ口縁形態など堀之内1式に近いとされる。2363は口縁前面が肥厚し、太い1条沈線を施す。2367は大きめの突起で波状口縁となる。肥厚した口縁と前面に文様を有し、主文様として大きい円孔を穿ち沈線で縁取り、太い1条沈線を垂下させる。口縁と太い沈線のわきに長楕円状の区画文を施し、縄文を充填する。内面にも、突き抜けた円孔から一方に沈線を施す。2364は胴部片で、湾曲した1条沈線と縄文が見られる。2365は無文深鉢の口縁部片、2368は口縁を面取る。いずれも時期は芥川期～北白川上層式1期に比定される。

石器については、砂岩製の磨・敲石が2点出土した。

土坑2705（第171図、PL.130）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央北よりに位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長径1.15×短径0.7mを測る。

2369は有文深鉢の口縁片で、緩やかに内湾し、肥厚した口縁前面に1条沈線を施す。2370・2371は有文深鉢の胴部片である。2370は縦方向に「8」字形浮文と沈線を施す。2371は太い複数の沈線で円弧状の曲線文様を施す。時期は芥川期～北白川上層式1期に比定される。

土坑2458（第167・171図、PL.33・131）

後期前葉の土器埋納土坑と考えられる。調査区北西部の北西端に位置し、標高4.3mの第7層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径66cm×短径50cm、深さ22cmを測る。土坑断面は逆かまぼこ形を呈し、埋土は黒色シルトの単層である。土坑底部から、頸部以上を欠き、その上に石を置いたほぼ完形の双耳壺が検出された。

2372は双耳壺と考えられ、左右が楕円形に膨らむ。口頸部を欠くが、頸胴部界線が微妙に残存する。胴部は無文であるが、耳状突起として左右に逆「U」字形に粘土を高く貼り付ける。両方とも耳下端部が歪む。底部は丸底に近いが、やや面を持つ平底である。独特な器形ではあるが、器面が劣化し他の文様は確認できない。

耳上端部を欠くが、本来ここに孔があり、紐を通し吊したとされ。双耳壺については、時期的に限られ後期初頭、中津式～福田Ｋ２式期にかけて散見されるとされてき。だが今回の徳蔵遺跡例は、後期初頭というより次期の芥川期～北白川上層式２期を中心とする遺跡のありかたから、時期的に後発するものとなる可能性がある。今後、双耳壺の当期における類例、また前段階からの系譜問題など、今後の検討が待たれる。

石器については、二上山産サヌカイト製の両極石器が１点出土した。

土坑2451（第167・171図）

後期前葉の土器埋納土坑としたが、埋設土器遺構の可能性がある。調査区北西部の中央北よりに位置し、標高4.3mの第７層上面で検出した。土坑の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長径80cm×短径25cm、深さ８cmを測る。埋土は浅く暗褐色シルトの単層である。土坑長径の北端部に、無文深鉢を正位に埋設したと考えられるが、底部のみの出土と残存状態が不良で、上部のほとんどが削平を受けた可能性が高い。底部には直径４cm大の穿孔が見られる。他の埋設土器遺構の堀形が、土器よりやや大きめであったのに対し、この遺構の掘方は土器より長大で、やや性格が異なるものと考えられる。

2373は無文深鉢の底部で平底である。底縁がやや張り出す。後期前葉。

石器については、二上山産サヌカイト剥片が５点出土した。

土坑2602（第167・171図、PL.38）

後期前葉の土器片埋納土坑と考えられる。調査区北西部の北端中央に位置し、標高4.1mの第７層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径78cm×短径70cm、深さは30cmを測る。土坑断面は逆台形を呈し、埋土は５層に細分されるが大きくは２層に分けられ、一回り小さい上層の１・２層の掘方に沿って、貼り付けるかの様に土器片を立て並べた状況を示す。

2374は有文深鉢胴部片で、３条沈線で山形文を描き、文様外に縄文を施す。2375は無文深鉢の頸胴部片である。後期前葉と考える。

礫石器（第184図）は2653の砂岩製の打欠石錘で１点が出土したほか、二上山産サヌカイト剥片が４点出土した。

土坑2528（第168・172図、PL.38・131）

後期前葉、芥川期の土器埋納土坑としたが、埋設土器遺構の可能性がある。調査区北西部の西端中央に位置し、標高4.4mの第７層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径86cm×短径70cm、深さ22cmを測る。埋土は黒・褐色シルトを中心とし、土坑底部から土器が横置した状態で検出された。土器は有文深鉢で口縁部から底部まで確認できたが、焼成が不良で残存状態も悪く、完形の深鉢を横位に埋設した可能性もある。

2376～2379はいずれも同一個体の有文深鉢である。破片数は多いが土器が脆く、復元接合が不可能であった。2376は口頸部で、口縁は肥厚しないが面を持ち、浅い1条沈線を施す。頸部は無文で直立ぎみにやや外反し、頸胴部界線がめぐる。2377・2378は胴部片で太い2条以上の沈線を施し、沈線間にＲＬ縄文を充填するが文様は不明である。2379の底部は厚い平底で、底縁が張り出る。磨消縄文が定型化しないことから、芥川期前後に比定される。

石器については、砂岩製と石材不明の磨・敲石が各1点、サヌカイト剥片が数点出土した。

土坑2793（第172図、PL.131）

調査区の南部を大きく走る東西トレンチから検出された後期前葉の土坑と考えられる。

2380・2381・2383は、有文深鉢の口縁部である。2380は低突起が肥厚し、前面に縦方向の2条以上の沈線を施す。2381も突起が肥厚し、頂部上・内面に円形刺突と両脇に楕円形の押圧を施す。2383も口縁が肥厚し上面に沈線を施す。2382は胴部片で、湾曲した沈線と縄文を施す。2384は有文鉢と考える。口縁を面取り、鋭角に屈曲した2条沈線を施す。いずれも後期前葉、芥川期～北白川上層式1期と考えられる。

土坑2703（第172図、PL.131）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央北よりに位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は半円を呈し、規模は長径1.0m×短径0.6m、深さ39cmを測る。

2385は有文深鉢の口縁部と考えると、堀之内系もしくは後期初頭の時期になる。口縁下に横方向の2条沈線を施し、ＬＲ縄文を充填する。内面がやや段状に肥厚する。2386は有文深鉢で、口縁前面が肥厚し、円孔と円形刺突を施す。2387は太く短い複数の沈線を施す。後期前葉、芥川期～北白川上層式1期か。

石器については、サヌカイト剥片が3点出土した。

土坑2609（第168・172図、PL.131）

後期前葉、芥川期～北白川上層式1期の土器片埋納土坑と考えられる。調査区北西部の東端中央よりに位置し、標高4.3mの第7層上面で検出した。土坑の平面形態は伸びた隅丸三角形を呈し、規模は長径1.9m×短径1.3m、深さ36cmを測る。埋土は2層に分けられ、土坑底部から30cm大の礫3個とともに、土器半部を横置した状態で検出した。土器は口縁部を刻んだ深鉢を縦に2分割したもので、底部は確認できなかった。

2388は大型の有文深鉢である。口縁前面が肥厚し、やや縦長の刻みを施す。頸部がややくびれる程度でバケツ形を呈す。条痕調整をナデ消し、頸部は横方向、胴部は縦方向の違いがみられる。胴下部から欠損する。2389・2390は有文深鉢の口縁である。2389は内面施文で1条沈線を施し、突起が肥厚する。2390は口縁上面が肥厚し1条沈線を施す。2391は頸部片で、横方向の隆帯に円浮文を貼り付け、刻んだ垂下隆帯を施す。2392は有文鉢か。口縁下に1条沈線をめぐらし、鋭角な文様を施す。口縁内面が肥厚し面取りをし、内面にミガキを施す。いずれも時期は、芥川期～北白川上層式1期の範囲とされよう。

礫石器については、砂岩製の石皿・台石が１点、サヌカイト剥片が３点出土した。

土坑2769（第172図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央よりに位置し、第７層上面で検出した。竪穴住居2600の廃絶後、その上面に掘削されたと考えられる。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径80cm×短径60cmを測る。

2393は有文深鉢の口頸部で、頸部に横方向の沈線？を施す。後期前葉か。

土坑2656（第172図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径80cm×短径32cm、深さ19cmを測る。

2394は大きくくびれ壺形を呈すが、有文鉢の口頸部と考える。口縁内面に１条沈線を施す。2395は胴部片で、鋭角な沈線を施す。2396はボウル形の有文鉢胴部で、湾曲した複数の沈線を施し縄文を充塡する。時期は、芥川期～北白川上層式１期とされる。

土坑2265（第173図、PL.131）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の南端に位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.1m×短径0.68m、深さ14cmを測る。

2397は有文深鉢の口縁で、上面肥厚し内面よりに１条沈線を施す。芥川期～北白川上層式１期とされる。2398は口縁面取りし内面肥厚する。口縁下に横方向の２条沈線を施す。福田Ｋ２式の深鉢の可能性がある。

土坑2681（第173図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.75m×短径1.22m、深さ5cmを測る。

2399は有文深鉢の口縁で、内面肥厚した口縁に横方向の３条沈線を施す。後期前葉か。

石器については、二上山産サヌカイト製の二次加工剥片が１点出土した。

土坑2765（第173図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区東部の中央北よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径80cm×短径63cm、深さ28cmを測る。

2400･2401は有文深鉢の胴部片で赤色顔料が付着する。前者には縄文、後者には斜格子状の条線を施す。

土坑2472（第173図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の西端南よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は不定形を呈し、規模は長径2.25m×短径1.10～1.75m、深さ22cmを測る。

2404・2405は有文深鉢の胴部片で、横方向の沈線を施す。後期か。

土坑2471（第173図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の西端南よりに位置し、第７層上面で検出した。土坑の平面形態は不定形を呈する。

2402・2403は無文深鉢の口縁・胴部片である。

石器については、石材不明の玉石？と砂岩製の磨・敲石が各1点出土した。

土坑2514（第173図）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央北に位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.45m×短径1.20m、深さ12cmを測る。

2406は有文深鉢の口頸部で、波状口縁となり前面肥厚する。上部欠損するが波頂部の主文様として、中央の楕円押圧を沈線で三角形に囲む。波底部の従文様に横方向の長方形区画文を施す。口縁主文様下部が剝落しているため、頸胴部に向けて橋状把手が付いていた可能性がある。芥川期～北白川上層式1期とされよう。

剝片石器（アルカ第5図、PL.145）35は二上山産サヌカイト製の削器が出土している。

土坑2361（第173図、PL.131）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区東部の中央よりに位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は円形を呈し、規模は長径9cm×短径7cmを測る。

2407は有文深鉢の口縁で、口縁が上面肥厚し1条沈線を施す。口縁外端を刻み、さらに口縁直下に1条沈線を施し、福田K2式の特徴を示す。2408は上端を欠くが沈線を施し、その上に縄文を充填する。2409は鉢の可能性があり、横方向に条線を施す。2410は無文深鉢の口頸部である。

土坑2469（第173図、PL.131）

後期前葉の土坑と考えられる。調査区北西部の中央西よりに位置し、第7層上面で検出した。土坑の平面形態は不定形を呈し、規模は長径2.4m×短径0.5～1.2m、深さ19cmを測る。

2411は後期有文深鉢の口縁と考えられ、上面肥厚した口縁に円形刺突を施す。2412は有文深鉢の胴部で、逆三角形文を重ねて施す。北白川上層式1期とされるが、中期の可能性もある。2413は無文深鉢の口縁で面取りを施す。

土坑2569（第168・173図、PL.38・131）

後期前葉、芥川期の土坑と考えられる。調査区北西部のほぼ中央に位置し、標高4.3mの第7層上面で検出した。土坑の平面形態は楕円形を呈し、長径1.34m×短径1.04m、深さ36cmを測る。埋土は4層に分層され、土坑底部の南東部に接して、20cm大の礫数個とともに土器の大破片を検出した。土器は有文深鉢の胴部である。竪穴住居2600の南側に近接するが、土器型式は前後し異なる。

2414は有文深鉢の口縁で、突起を持ち上面肥厚した口縁に太い1条沈線を施す。2415は無文深鉢の口縁である。2416は大型の有文深鉢頸胴部で、頸胴部界線として3条沈線を施す。また界線につながる湾曲した3条沈線も見られ、文様外にLR縄文を充填する。いずれの沈線幅も一定せず、文様を含め雑な施文である。時期は芥川期とされる。

Pit2429（第173図、PL.132）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の中央西よりに位置し、第7層上面で検出した。規模は長径50cm×短径43cm、深さ15cmを測る。

2417は有文深鉢の口頸部で、わずかに前面肥厚した口縁部に、主文様として渦巻文、従文様に2重の長方形区画文を施す。頸部に渦巻文から垂下する条線を施す。時期は北白川上層式1期と考えられる。

Pit2382（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部に位置し、第7層上面で検出した。規模は長径37cm×短径35cm、深さ16cmを測る。

2418は有文深鉢の胴部片で、垂下隆帯を刺突状に刻み、両端に沈線を施す。後期前葉、北白川上層式1～2期か。

剥片石器（アルカ第3図、PL.144）12は二上山産サヌカイト製の石錐である。

Pit2447（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の中央よりに位置し、第7層上面で検出した。規模は長径36cm×短径36cm、深さ16cmを測る。

2419は胴部片で、蛇行する沈線を施す。後期前葉か。

Pit2476（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の中央西よりに位置し、第7層上面で検出した。

2420は無文深鉢で、口縁を丸く収める。後期前葉か。

Pit2606（第173図、PL.132）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の北東よりに位置し、第7層上面で検出した。規模は長径27cm×短径26cm、深さ15cmを測る。

2421はくびれた有文鉢の頸胴部で、胴部に渦巻文を施す。後期前葉。

Pit2501（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の北西よりに位置し、第7層上面で検出した。規模は長径32cm×短径15cm、深さ3cmを測る。

2422は胴部片で、横方向に沈線を施す。後期前葉か。

Pit2577（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の北中央に位置し、第7層上面で検出した。規模は長径40cm×短径30cm、深さ22cmを測る。

2423は有文深鉢口縁で、上面肥厚した口縁内面よりに太い1条沈線を施す。後期前葉。

Pit2679（第173図）

後期前葉のピットと考えられる。調査区北西部の北中央に位置し、第7層上面で検出した。規模は長径41cm×短径35cm、深さ16cmを測る。

2424は有文深鉢の口縁で、小突起と上面肥厚した口縁に1条沈線を施す。後期前葉。

落ち込み1112（第174図、アルカ第13図、PL.150）

後期前葉の自然落ち込み痕と考えられる。調査区東端部に位置し、第6層上面で検出した。微高地の東の縁辺部に相当し、東に向かって緩やかに傾斜していく。落ち込み1111も同遺構と一括できよう。

2425は有文深鉢の口縁で、やや肥厚した口縁前面に円形刺突を施す。2426は胴部片で湾曲した沈線を施す。2427は無文深鉢の頸胴部で、丸く収めた口縁が大きく外反してくびれ、胴部が丸く膨らむ。頸部に補修孔がある。後期前葉と考えられる。

135（アルカ第13図）の二上山産サヌカイト製の削器、136で同製の削器未製品で各1点出土した。

落ち込み1795（第174図、PL.132）

後期前葉の自然落ち込み痕と考えられる。調査区北西端部に位置し、第6層上面で検出した。微高地の北西の縁辺部に相当し、北に向かって緩やかに傾斜していく。

2428～2430は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に1条沈線を施す類群である。時期は芥川期～北白川上層式1期に比定できるが、そのなかでも古い特徴である。

2431～2439も有文深鉢の口縁部で、前面肥厚した口縁に沈線もしくは隆帯を施す類群である。2431・2434・2435は口縁前面に太い1条沈線を施すが、上面施文に近い。小突起を有し、主文様に円刺突と脇に弧線文と刺突を施すものがある。2433・2436は口縁が内湾ぎみに直立し1条沈線を施す。2432・2437～2439は口縁がゆるやかに内湾し肥厚もしくは隆帯を施す。いずれも時期は、芥川期～北白川上層式1期に比定できるが、そのなかでも新しい特徴である。

2440・2441・2446は有文深鉢の口頸部で、口縁が肥厚せず文様を施す類群である。2440は口縁面取りし、頸部に垂下する2条沈線間に刺突を施す。2441は沈線を施し、多くを有文鉢と認識するものである。2446は口縁突起のみ肥厚し、同前面と頂部に円形刺突を施す。頸胴部界線として、円形浮文と横方向の2条沈線を施す。

2442～2445は有文深鉢の口縁部で、内面肥厚した口縁に沈線等を施す類群である。2443は横方向の長楕円区画文を施す。上面施文に近いものがある。

2447～2457は有文土器の胴部片である。2447～2449は横方向の沈線を主文様とする。2450～2457は曲線的な沈線を主文様とする。

2458は頸部片で垂下する隆帯に円形刺突を施す。2459は大きくくびれる頸胴部で、頸胴部界付近に横方向の「8」字浮文と沈線を施す。

2460・2461は縦・斜方向、あるいは横方向に条線を施す。

2462・2463は、口縁前面が肥厚する無文深鉢である。北白川上層式2期に多い特徴である。

2464～2468は無文深鉢の口縁部である。2470は平底の底部片である。

2469はボウル形の有文鉢で、口縁下に横方向の部分的に3条となる、2条沈線を施す。

いずれの土器も時期は、後期前葉の芥川期から北白川上層式1期に比定できよう。

剥片石器（アルカ第13図、PL.150）は、133は二上山産サヌカイト製、134はサヌカイト製の削器で各1点出土した。その他二上山産サヌカイト製の両極石器132が1点、サヌカイト剥片が8点出土した。

礫石器（第184図、PL.139）については、2655・2656は砂岩製の磨・敲石で計4点出土した。

包含層（後期土器）

第5層包含層　（第176～178図、PL.133・134）

2471～2473は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に沈線を施し、さらに口縁外端を刻む類群である。2472は突起が厚く内湾し、突起前・上面に縦方向の沈線を施し、刻みを加える。また突起内面と左面に深い楕円形刺突を施す。口縁上面に１条沈線を施し外面を刻む。口縁直下に横方向の２条沈線、突起下に垂下する３条沈線を施す。2473は上面肥厚した口縁に沈線はみられないが、凹みぎみに面取りし外面に刻みを施す。いずれも縁帯文土器成立期の古い特徴を示し、広瀬土坑40段階に比定できよう。

2474・2476～2480は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に１条沈線を施す類群である。時期は芥川期～北白川上層式１期に比定できるが、そのなかでも古い特徴である。

2475・2481～2485は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に２条沈線というより区画文を施す類群である。時期は芥川期～北白川上層式１期に比定できるが、そのなかでも古い特徴である。

2486は筒状突起で、おそらくは有文深鉢の口縁突起部に貼り付けられたものであろう。筒前面の円孔を１条沈線で縁取り、細くすぼまって斜め下方に伸び口縁に付着したと考える。時期は福田Ｋ２式に比定できるが、そのなかでも古い特徴であ。

2487～2494も有文深鉢の口縁部で、前面肥厚した口縁に沈線等を施す類群である。肥厚した突起の他に、１条・２条沈線あるいは区画文を施す。2191は肥厚した口縁前面に、斜め方向の短線状の刻みを施す。いずれも時期は、芥川期～北白川上層式１期に比定できるが、そのなかでも新しい特徴である。

2488・2459～2499は有文深鉢の口縁部で、内面肥厚した口縁に沈線等を施す類群である。基本的に１条沈線を施すが、内面肥厚させるかのように隆帯を貼り付けた退化的なものも見受けられる。上面施文にちかいものもある。2488は、内面に主文様の突起があり、その両端から従文様の１条沈線を施す。芥川期から北白川上層式１期のものか。

2500～2503は口頸部に沈線文様を施す類群である。2500・2501は中津Ⅱ式の有文深鉢で、２条沈線間にＲＬ縄文を充填する。他は有文鉢もしくは堀之内系の有文深鉢の可能性がある。

2504～2506は有文深鉢の頸胴部で、曲線的な沈線文様を主体とする。2504・2507は頸胴部界線となる横方向の２条沈線間に、有刻隆帯あるいは刺突を施し、堀之内式的な特徴と考える。なお、2504は胴部区画内にＬＲ縄文を施し、胎土に角閃石と長石を多く含み暗褐色を呈す。

2509は条線を施す。後期前葉。

2510は内湾する口縁前面に縄文を施す、有文深鉢の口縁部である。

2511・2512は口縁端が内湾あるいは直立して受け口状となる、無文深鉢の口縁部である。同一個体の可能性がある。後期前葉か。

2513は無文深鉢の口縁部で、多数出土している。後期前葉。

2514は大きくくびれ壺形を呈すが、有文鉢と考える。口縁内面に沈線というより隆帯を貼り付ける。後期前葉か。

2516～2519は沈線等の文様を有する口縁部片で、多くを後期前葉の有文鉢と考える。ただし2516は口縁直下に１条沈線と、その上の口縁上部にまでＲＬ縄文を充填する、福田Ｋ２式の鉢と考えられる。内面肥厚部が剝落する。2517は深鉢胴部片の可能性がある。2518はボウル形を呈する有文鉢と考えられ、縦・横方向に

平行する2条沈線を持つ。2519は胴部がややくびれる小型の鉢で、摩滅するが頸部に「V」字状の垂下沈線と、胴部に横方向の沈線を施す。

2515・2520～2522はボウル形の無文鉢である。2520は大型品でやや浅く、口縁内面が肥厚する。後期前葉か。

2563～2637は第5層から出土している縄文時代中期の土器群である。

第6層包含層（第178・179図、PL.135・136）

ここに示す遺物群は本来は第5層上面から検出すべき遺構の掘り残りと考えられる。

2523～2530・2533は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に1条沈線を施す類群である。時期は芥川期～北白川上層式1期に比定できるが、そのなかでも古い特徴である。なお2524は口縁1条沈線の外端に、沿うように破線状の沈線を施す。

2531・2532は有文深鉢の口縁部で、上面肥厚した口縁に2条沈線を施す類群である。時期は上記同様か。

2534～2540も有文深鉢の口縁部で、前面肥厚した口縁に沈線や刺突等を施す類群である。2534は口縁前面に主文様として円形刺突を施し、それを巻き込むかたちで従文様に1条沈線を施す。2535は口縁前・内面に主文様として円形刺突を施し、小刺突を周囲に施す。また前面主文様下の頸部には、縦方向の2条隆帯を施し、両端に沈線を施す。その文様と、断面クランク状に屈曲して内面に面を持つことから、堀之内式的な要素と考えられる。いずれも時期は芥川期～北白川上層式1期に比定できるが、そのなかでも新しい特徴である。

2541～2551・2554は有文深鉢の頸胴部で、曲線的な沈線文様を主体とする。そのなかでも、2548は「8」字形浮文または複数の沈線を施し、堀之内1式古～中段階の大型の深鉢と考えられる。また2549は胴部文様が蕨手文的な文様構成となる可能性がある。

2552は斜方向に2単位の条線を施す深鉢口縁である。後期前葉。

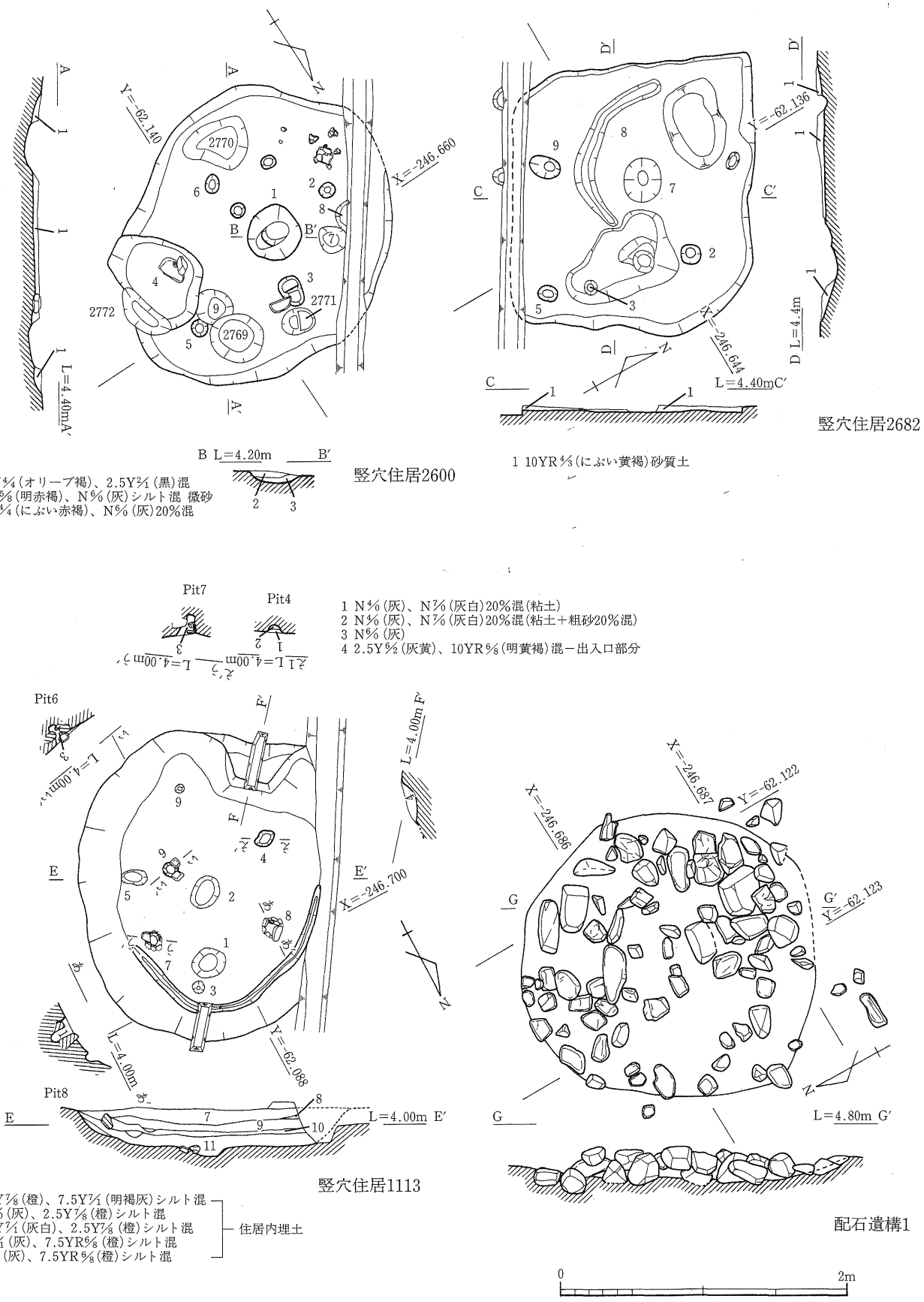
2553・2561は無文深鉢の口縁部、頸胴部である。多数出土している。2561は巻貝条痕である。時期は後期前葉と考えられる。

2556・2559は口頸部に沈線文様を施す類群である。多くを北白川上層式2期の有文鉢と考えるが、堀之内式系の有文鉢の可能性がある。

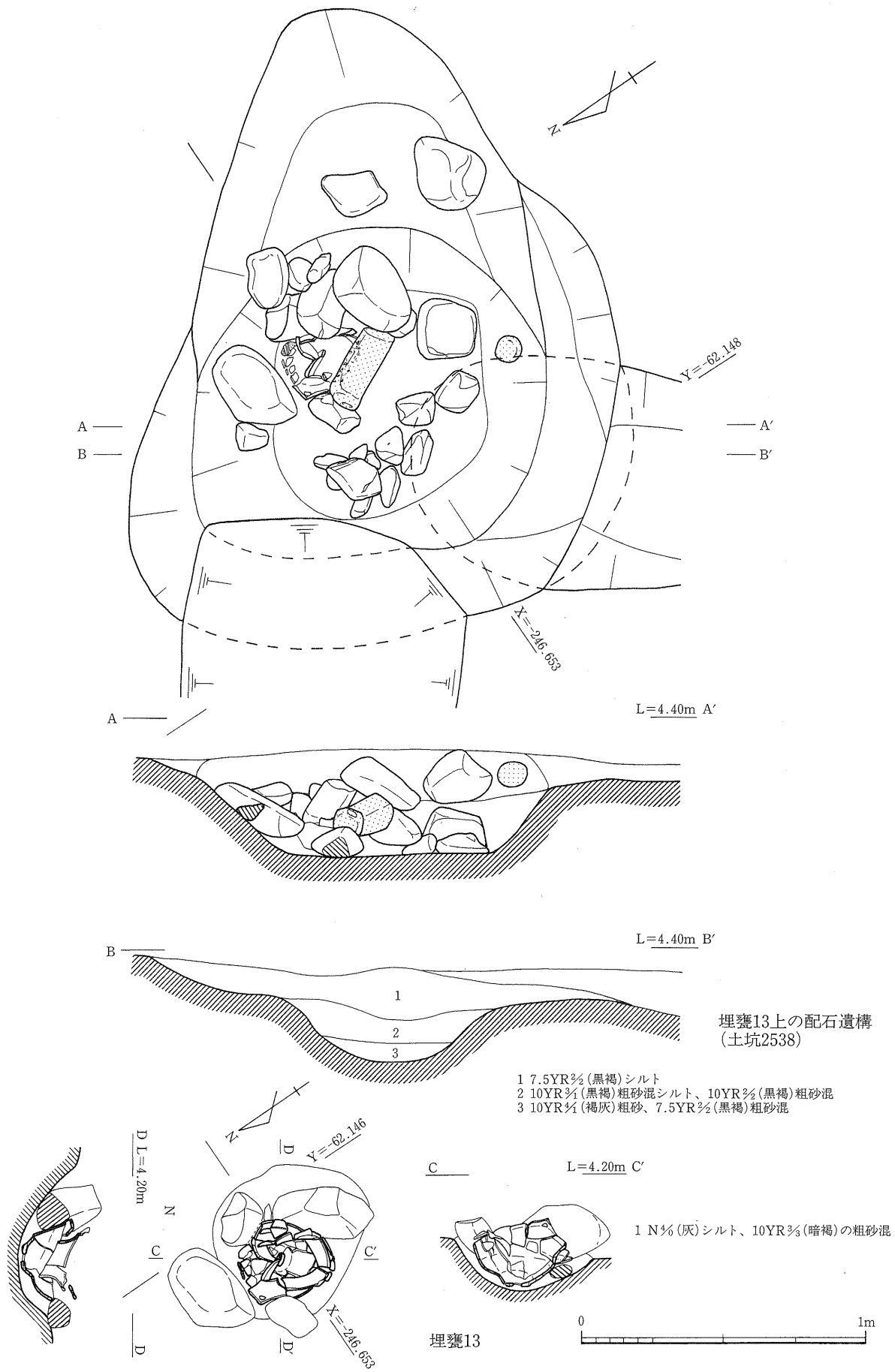
2557・2558はくびれを持つ有文鉢の頸胴部である。胴部に横・斜方向の複数の沈線を施す。時期は後期前葉と考えられる。

2562はボウル形の無文鉢で、口縁内面が肥厚する。後期前葉か。

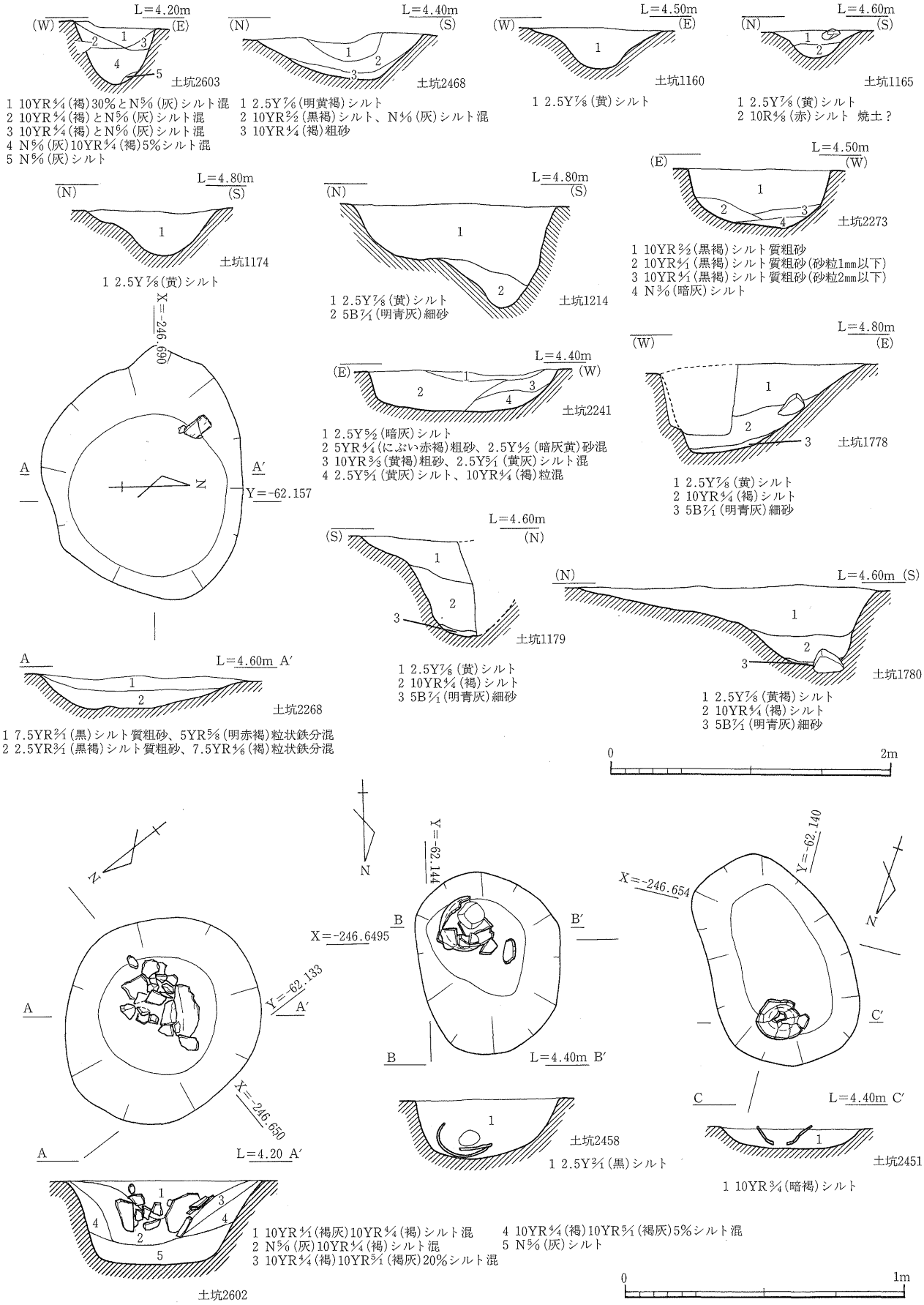
1．千葉豊氏の教示による。
2．同上。
3．穂積裕昌1992「縄文時代後期の壺形土器―中津・福田K2式土器に伴う双耳壺を中心に―」『同志社大学考古学シリーズV』、同2001「双耳壺再論―その成立と用途に関する一考察―」『古代学研究　第152号』
4．千葉豊1995「V.考察　1．縄文土器について」『貝野前遺跡』中町教育委員会



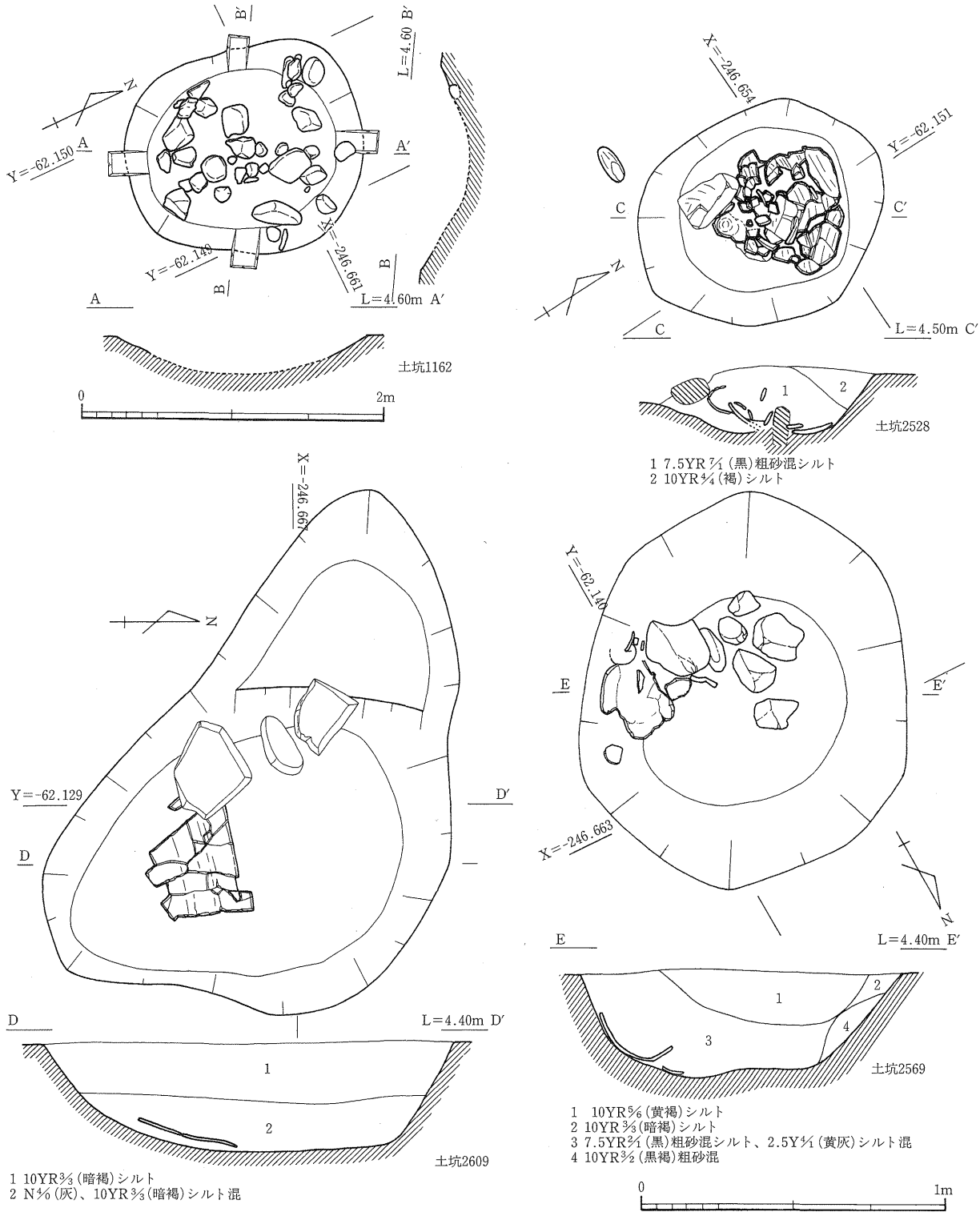
第165図　Ⅴ区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 竪穴住居2600・2682・1113 平面図・土層図、配石遺構1 平面図・立面図



第166図　V区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 埋甕13上の配石遺構(土坑2538)平面図・土層図
埋甕13平面図・土層図



第167図　Ⅴ区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 土坑2603・1160・1165・1174・1214・2273・2268・2241・1778・1179・1780・2602・2458・2451 平面図・土層図



第168図　V区 12-④区 第6層上面 縄文時代後期 土坑1162・2528・2609・2569 平面図・土層図

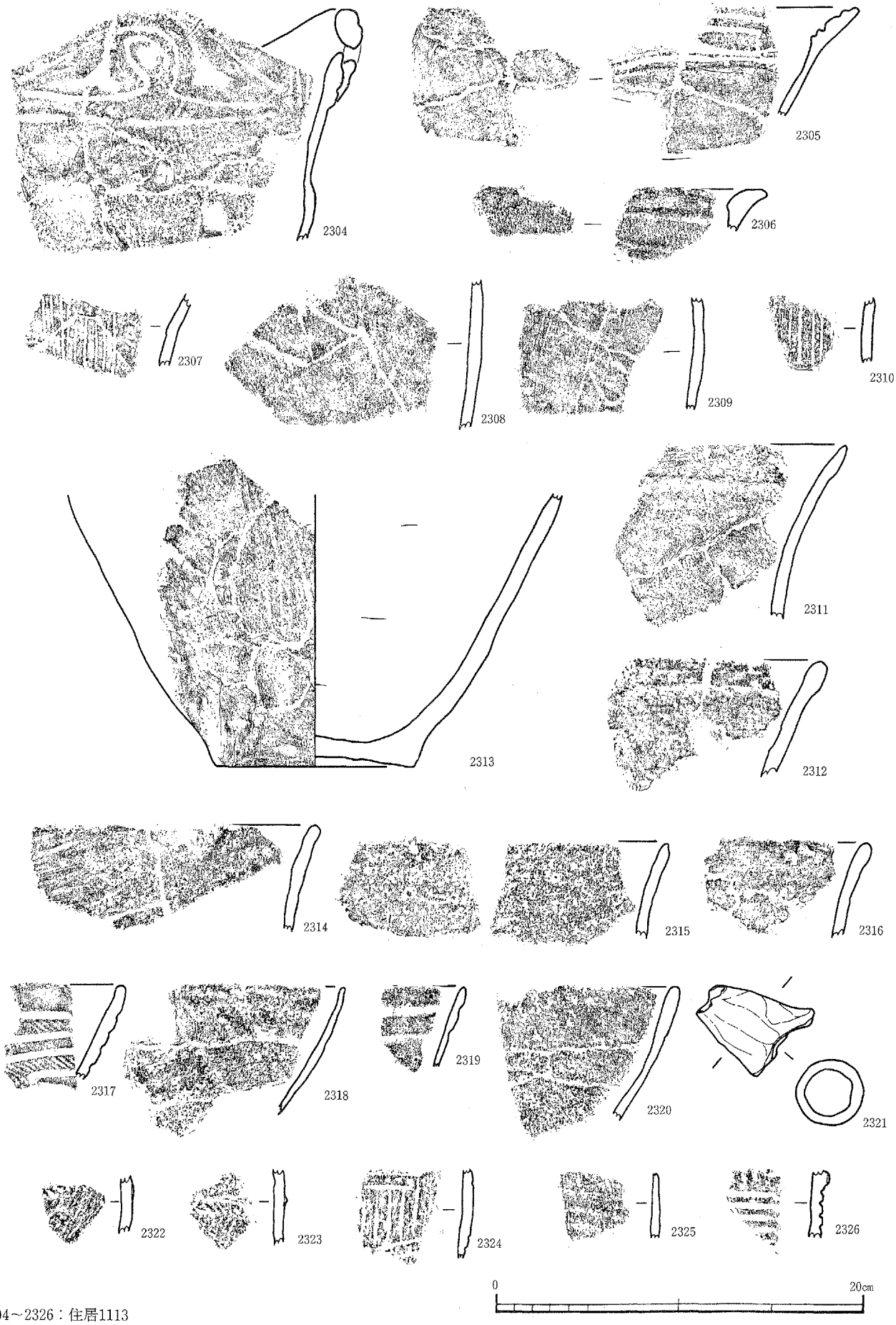
3．弥生時代前期～古墳時代前期遺構検出面（第185図、PL.42・43）

5層上面からは、弥生時代前期と古墳時代前期の遺構を検出した。弥生時代前期の竪穴住居1棟・大型土坑1基、古墳時代前期の竪穴住居8棟・掘立柱建物6棟・溝・土坑である。

弥生時代前期

竪穴住居100（第186図、PL.6・143）

竪穴住居100は、直径7.7m前後で円形を呈する。住居の中央部には楕円形土坑があり、その両端に主柱穴と呼べる柱跡が存在する。松菊里式住居である。柱の位置などから2回の建替えがある。南の壁

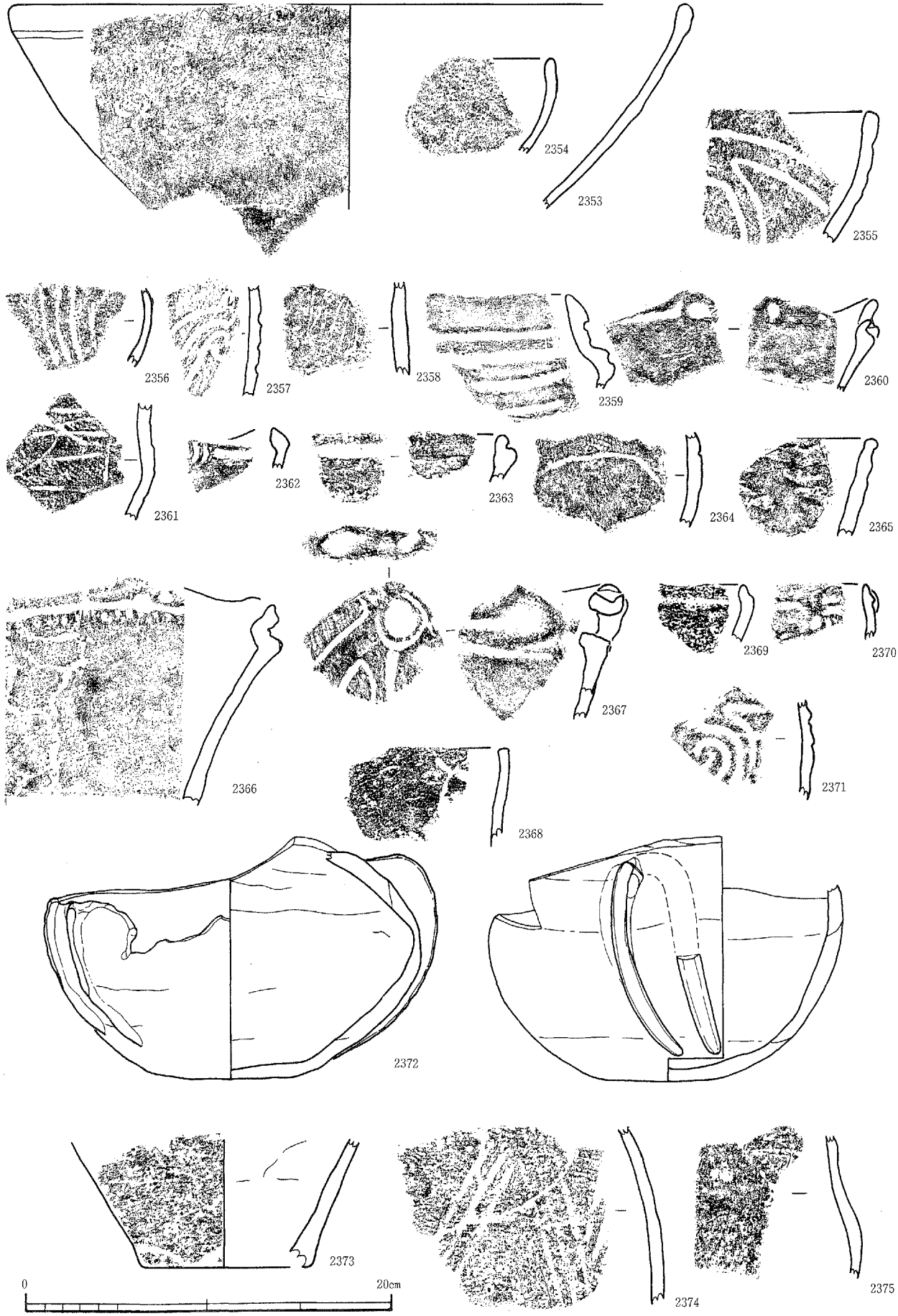


2304～2326：住居1113

第169図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図

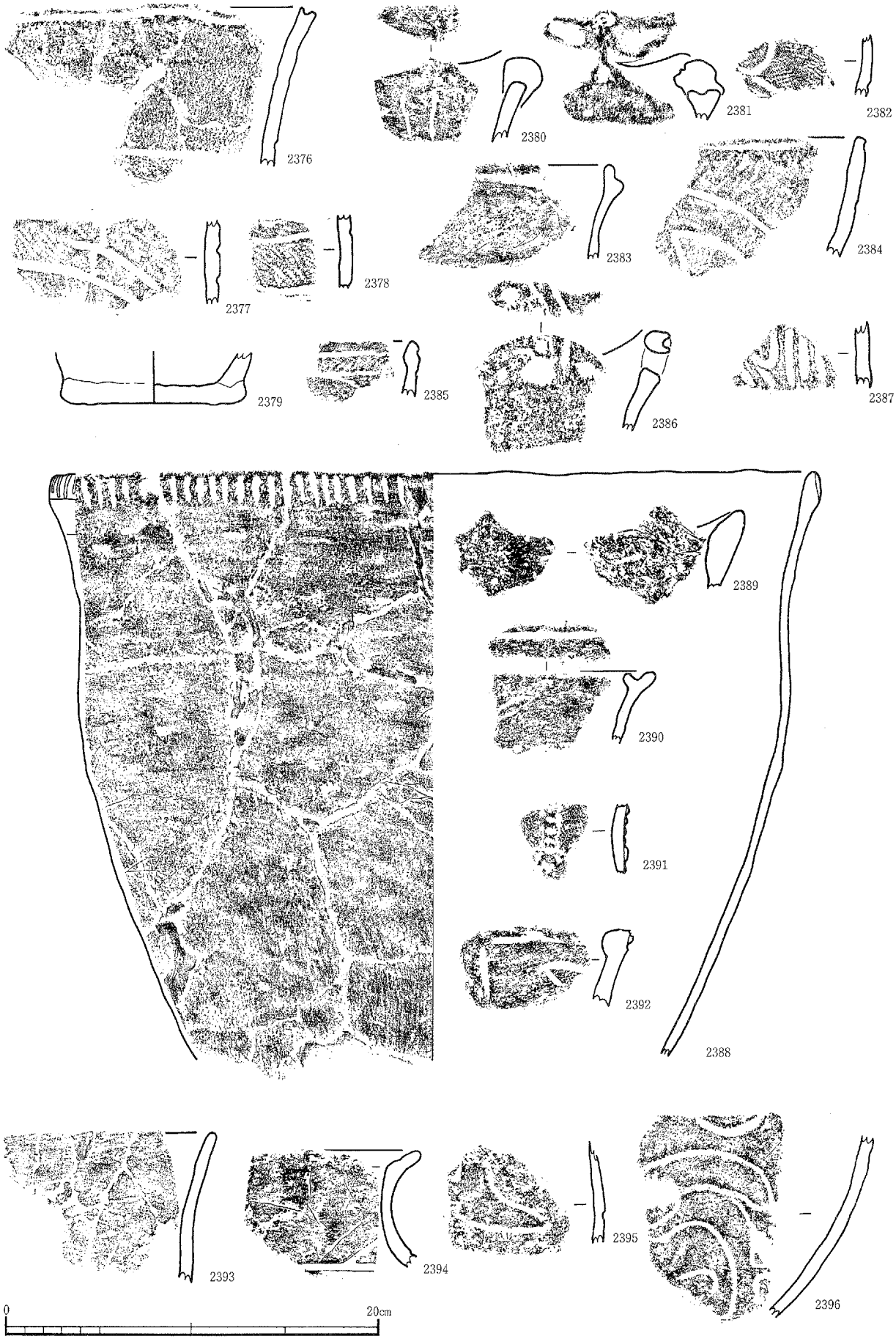
2327～2335：住居2600、2336～2352：住居2682

第170図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



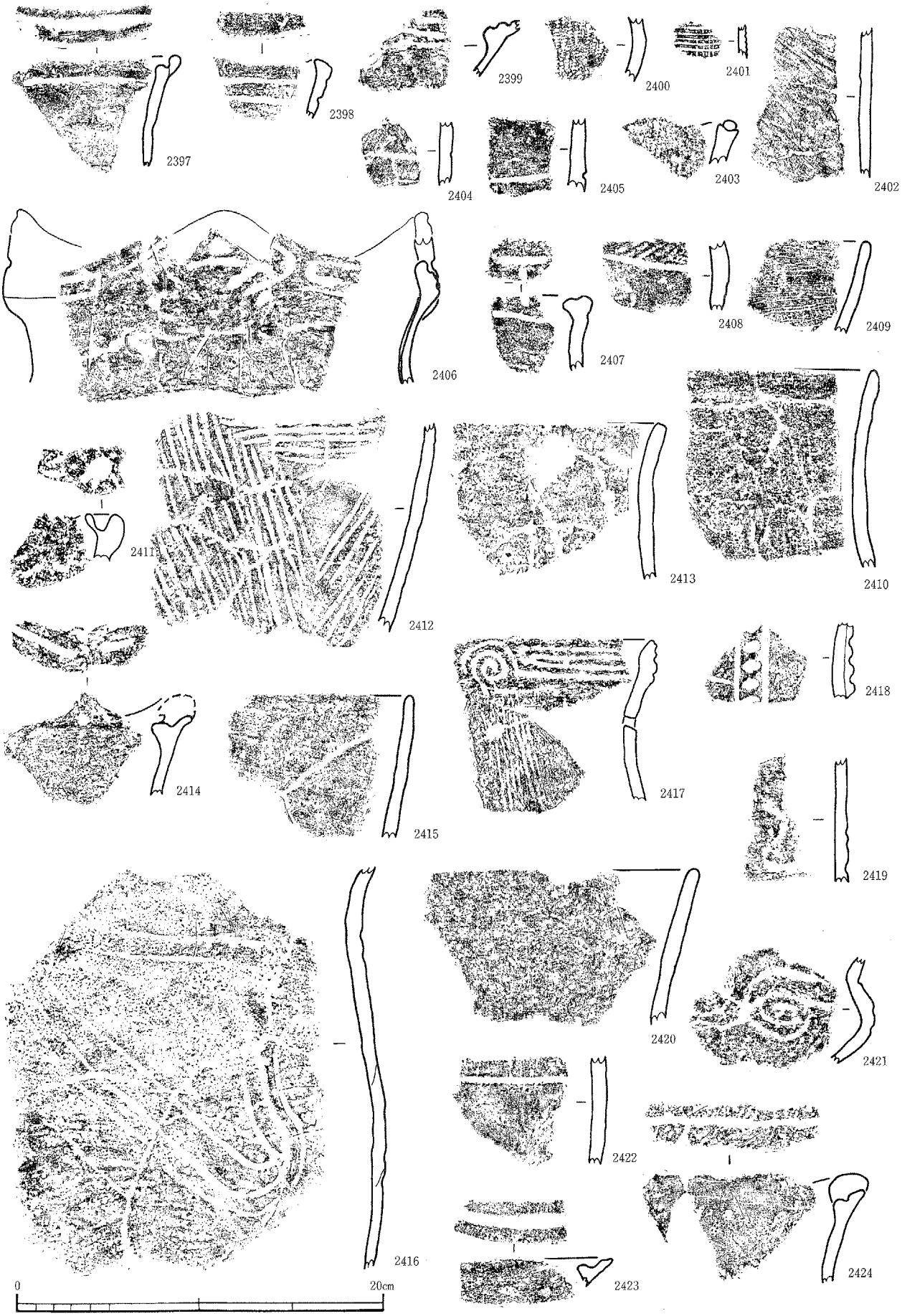
2353・2354：住居2682、2355：土坑2599、2356～2359：土坑2538、2360：土坑2603、2361・2362：土坑2273、2363～2368：土坑2268、2369～2371：土坑2705、2372：土坑2458、2373：土坑2451、2374・2375：土坑2602

第171図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



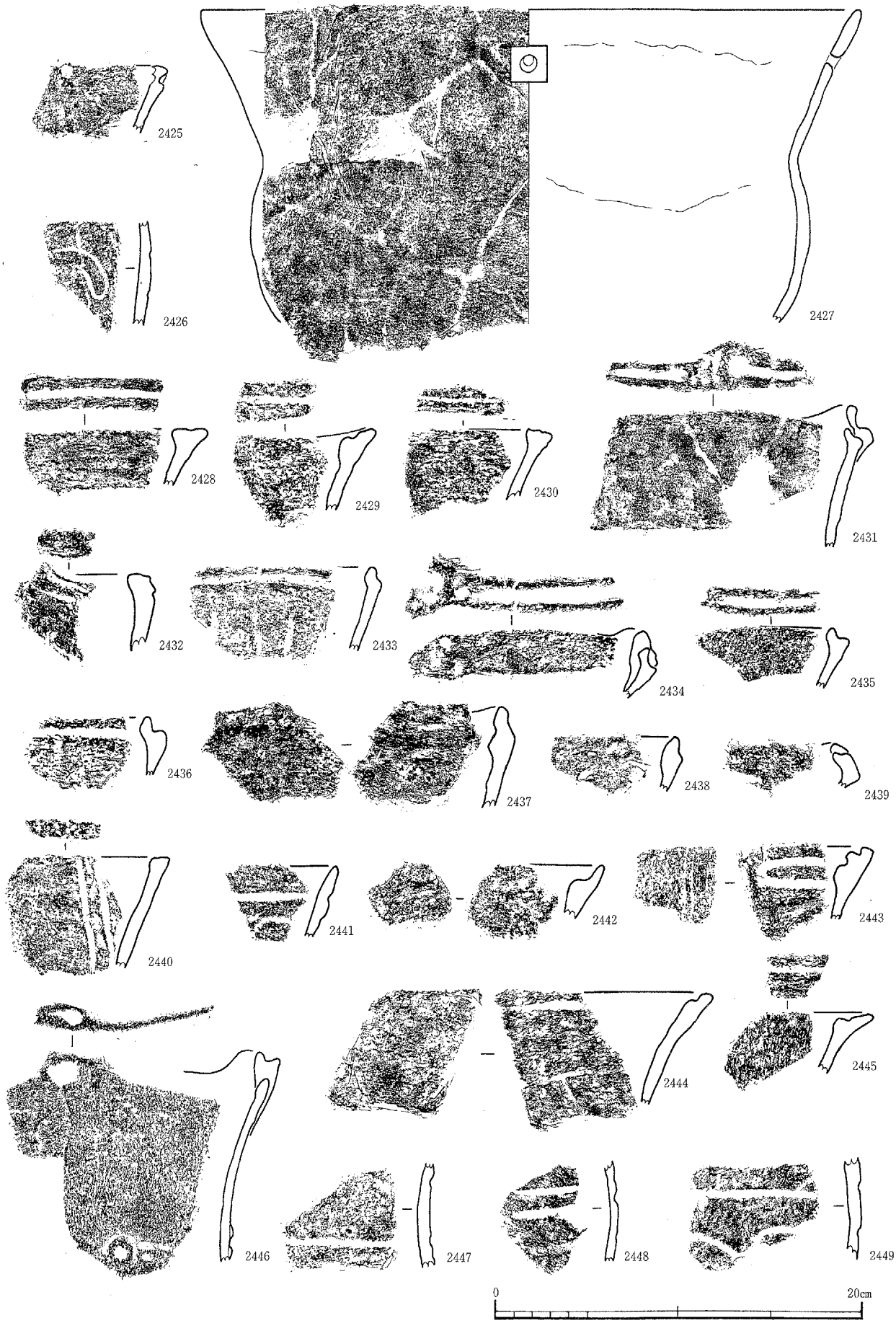
2376～2379：土坑2528、2380～2384：土坑2793、2385～2387：土坑2703、2388～2392：土坑2609、2393：土坑2769、2394～2396：土坑2656

第172図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



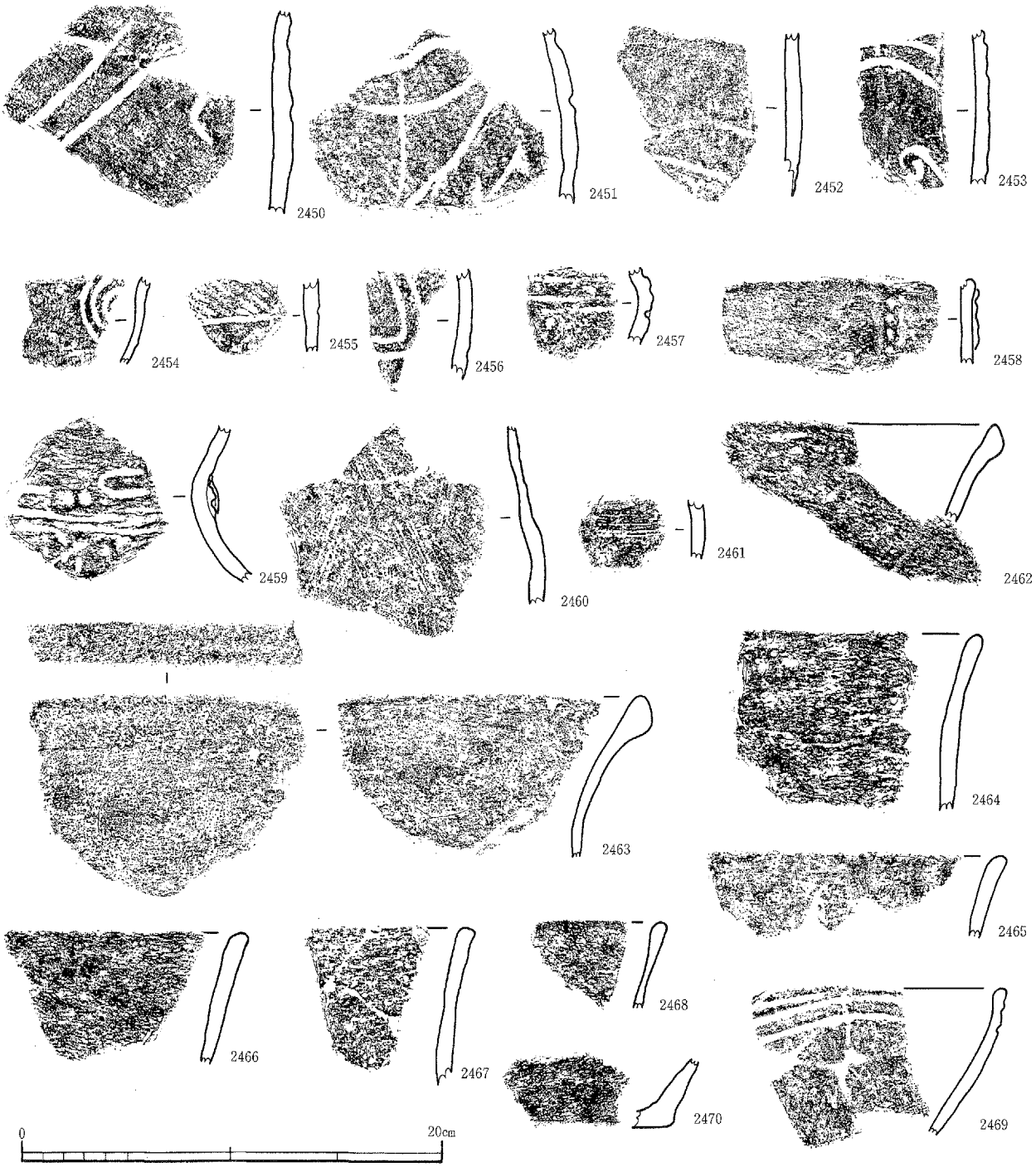
2397・2398：土坑2265、2399：土坑2681、2400・2401：土坑2765、2402・2403：土坑2471、2404・2405：土坑2972、2406：土坑2514、2407～2410：土坑2361、2411～2413：土坑2969、2414～2416：土坑2569、2417：Pit2429、2418：Pit2382、2419：Pit2447、2420：Pit2476、2421：Pit2606、2422：Pit2501、2423：Pit2577、2424：Pit2679

第173図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



2425～2427：落ち込み1112、2427～2449：落ち込み1795

第174図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



2450～2470：落ち込み1795

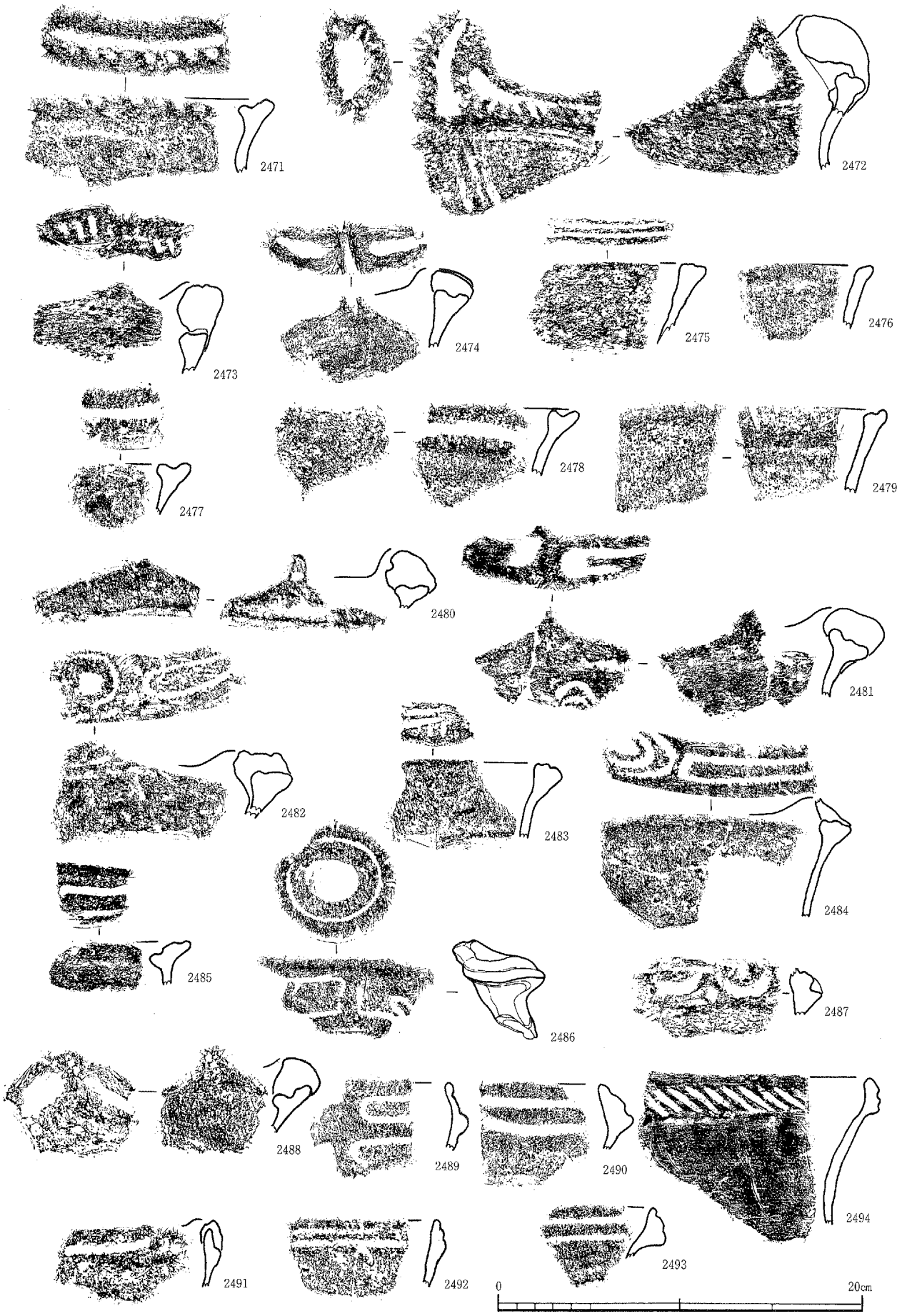
第175図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図

の際には、入り口と考えられる一段高い部分が確認できた。堆積土は一層のみである。遺物は埋土から弥生土器細片と石器（2889）が出土した。

古墳時代前期

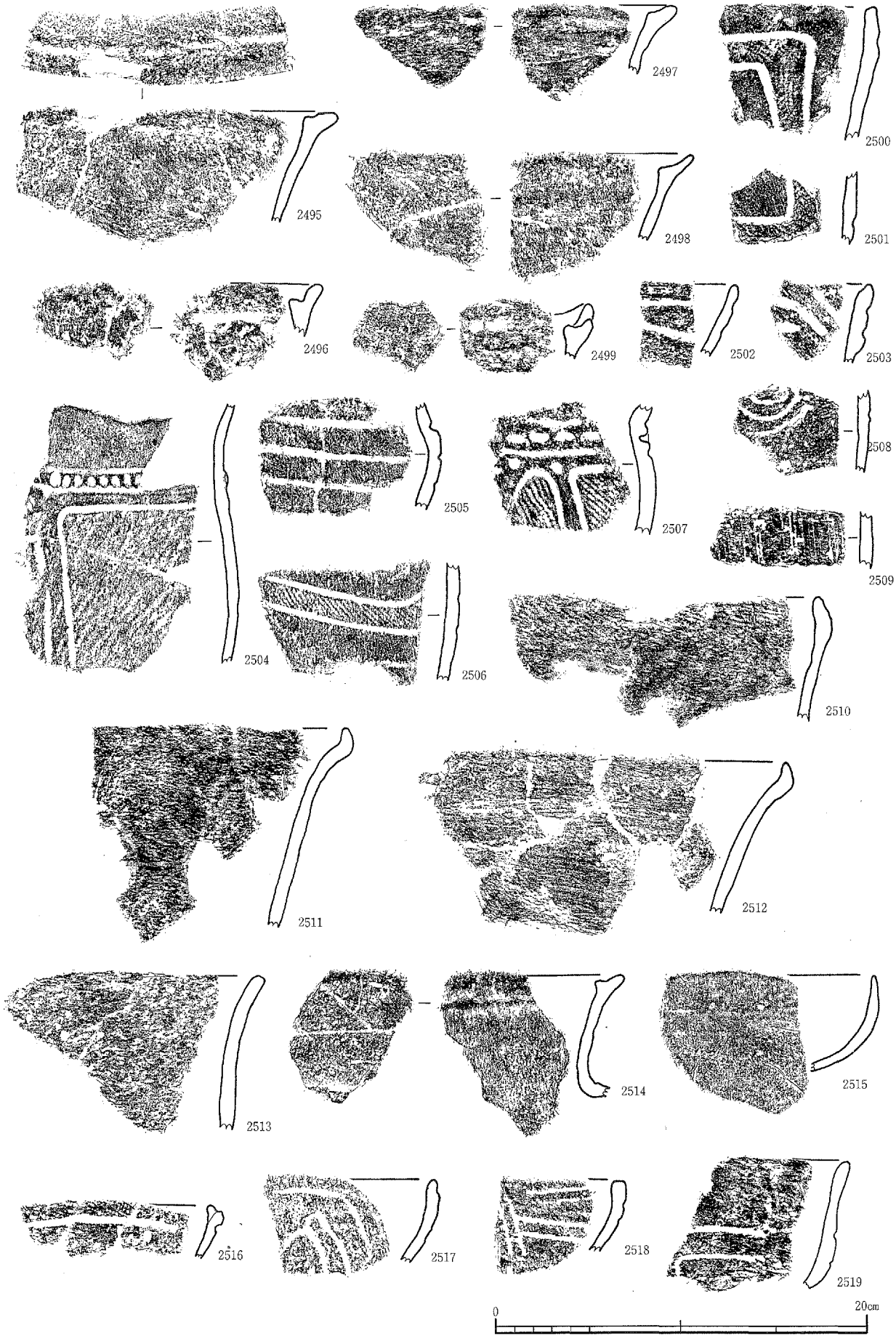
①竪穴住居

竪穴住居は、８棟検出した。平面プランは、隅丸方形や方形を呈する。大きさには大小があり、方位も違う。焼失住居もある。ベースとなる第５・６層が縄文時代中期～後期包含層であるため、遺構内からは縄文土器が混在して出土する。出土した土器は摩滅しており、器面調整など不明な個体が多い。色調は全体として黄灰色系で、少量の淡赤褐色を呈する個体も含まれる。



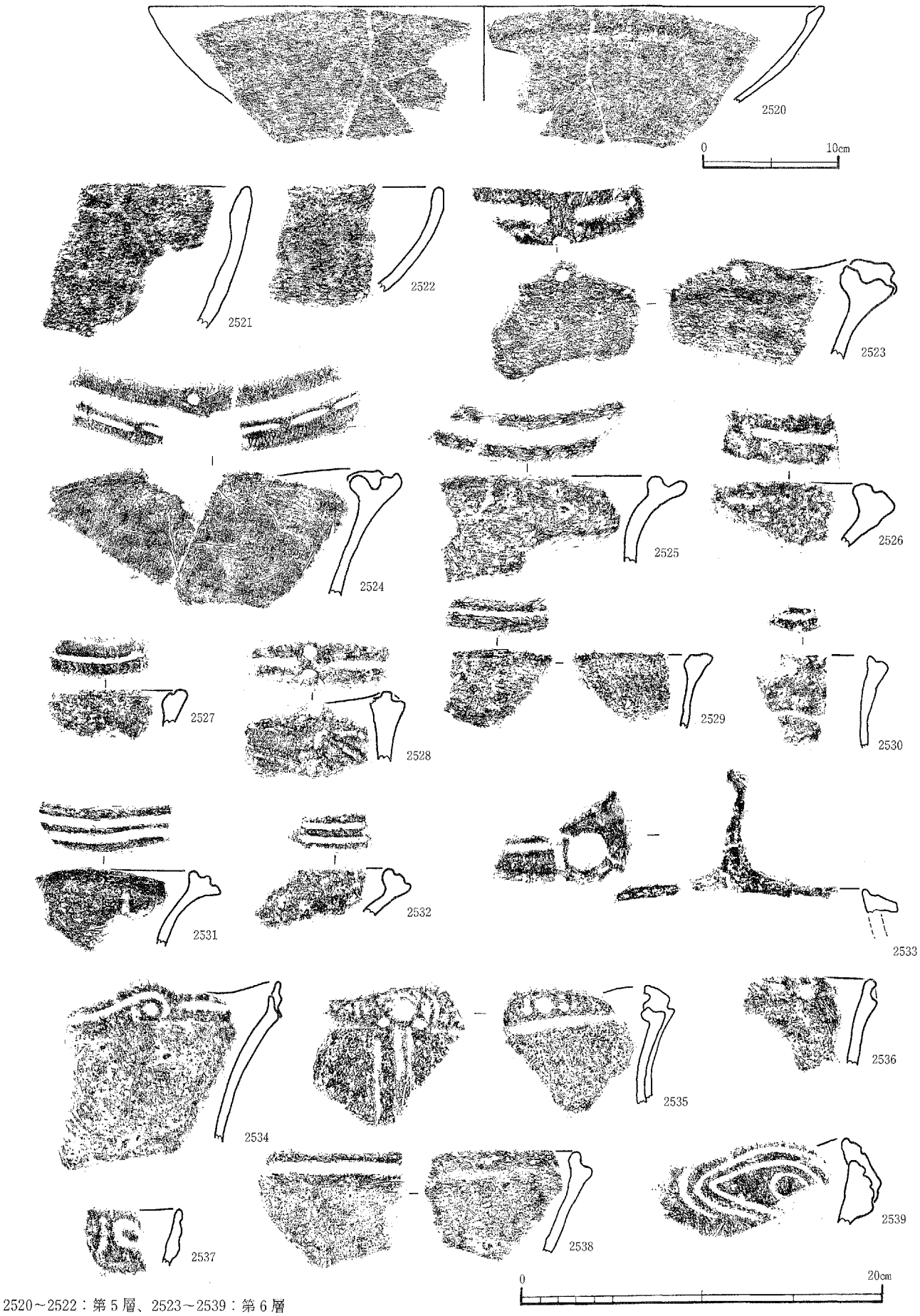
2471～2494：第5層

第176図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図



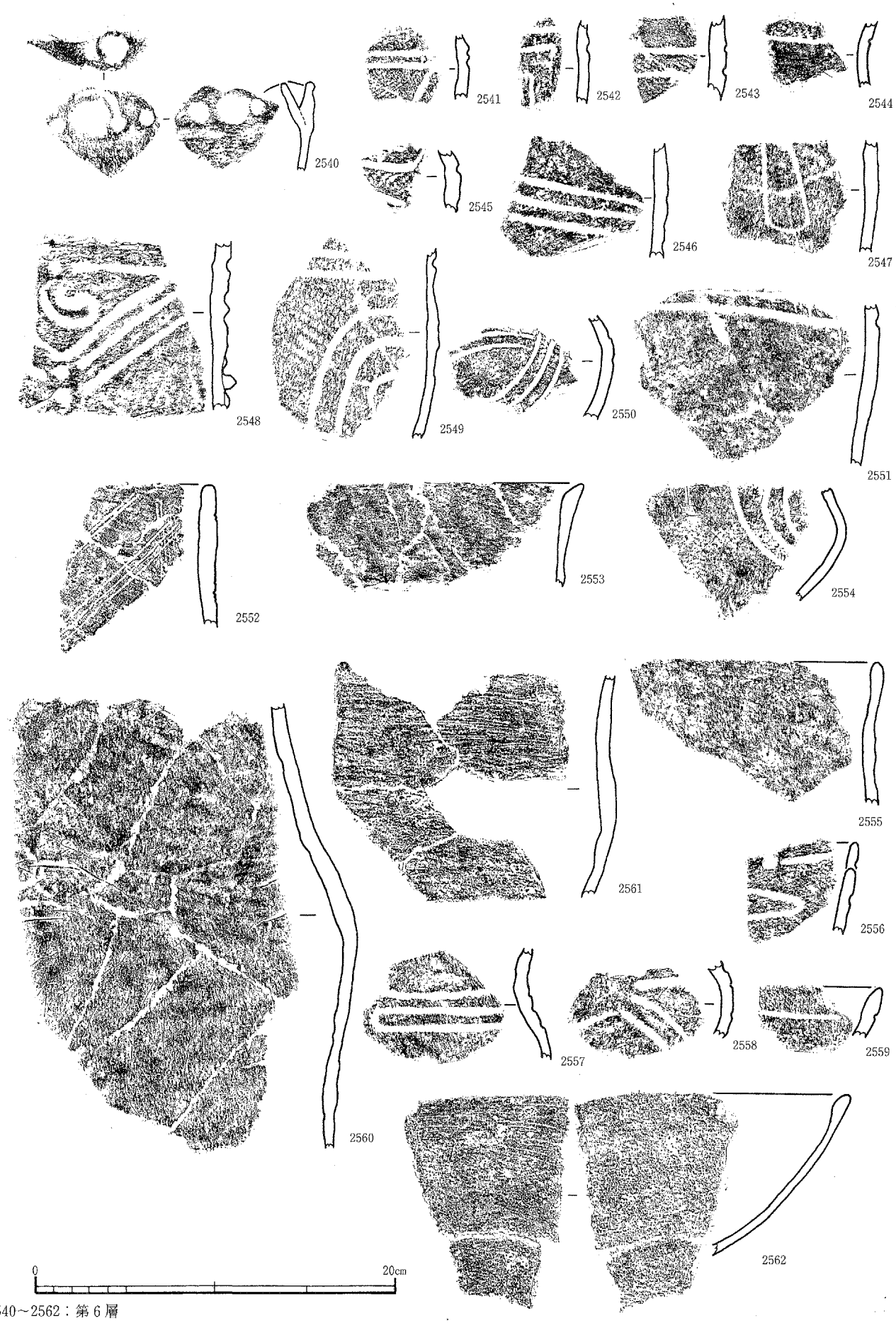
2495～2519：第５層

第177図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図



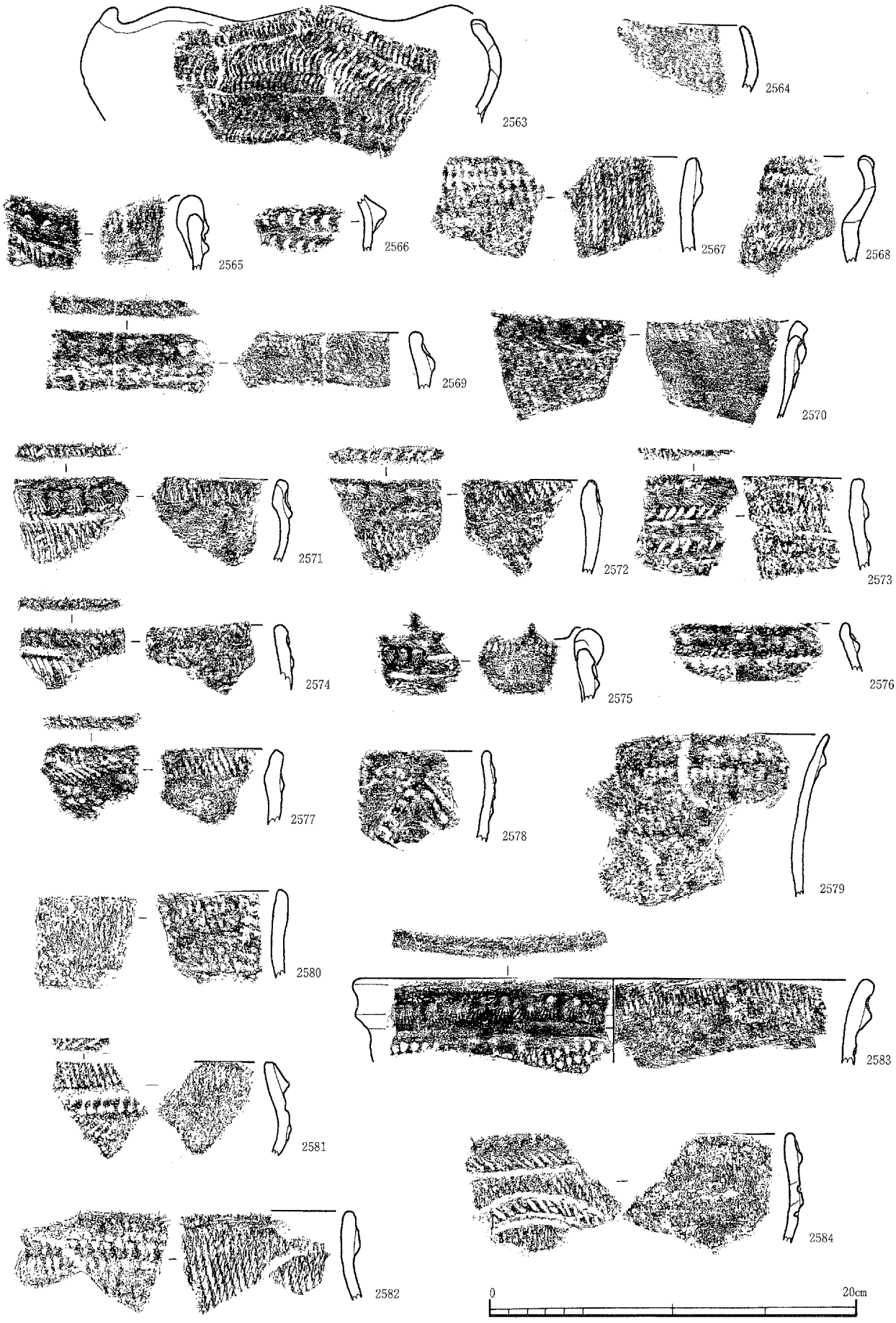
2520～2522：第5層、2523～2539：第6層

第178図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図



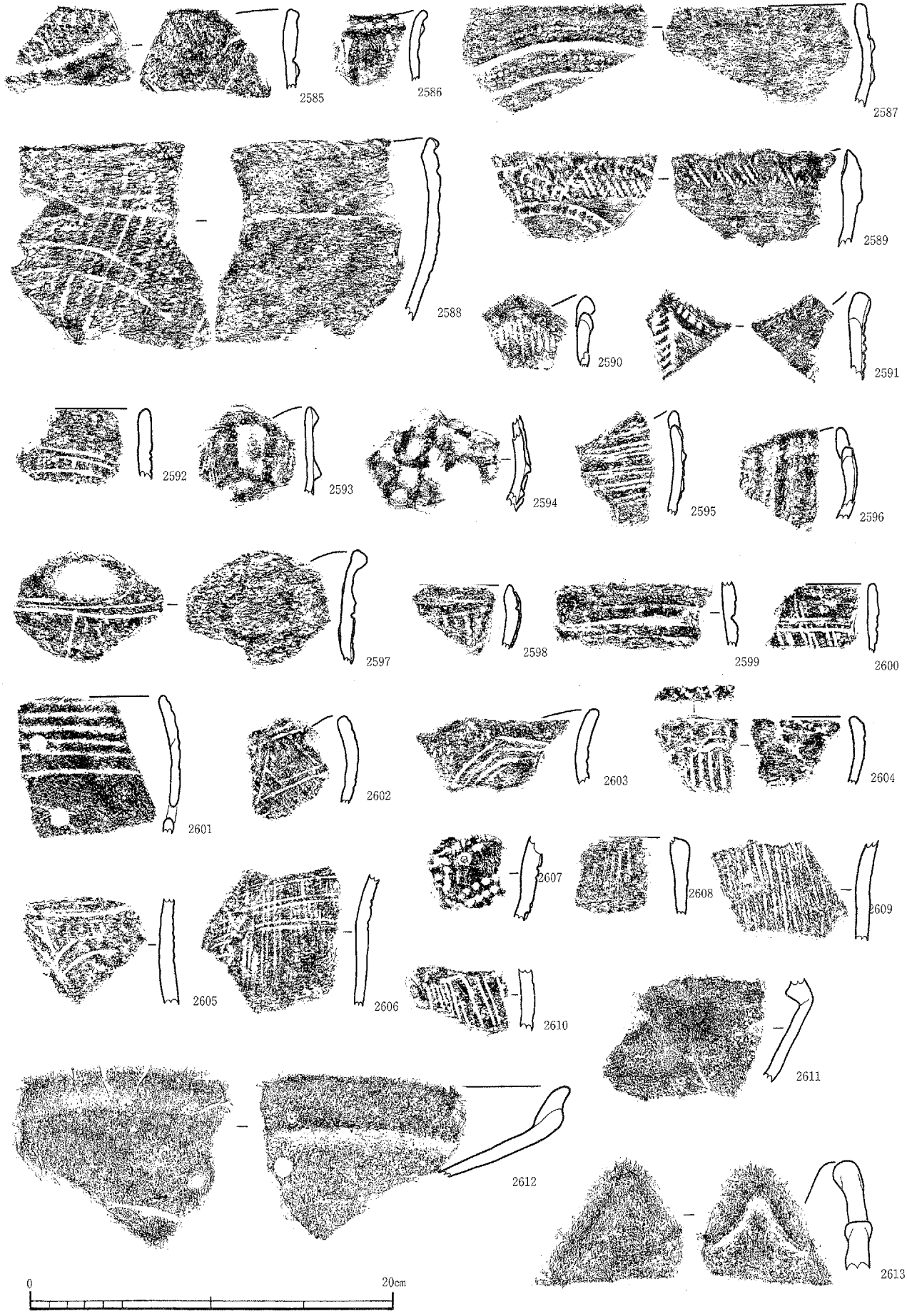
2540～2562：第6層

第179図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図



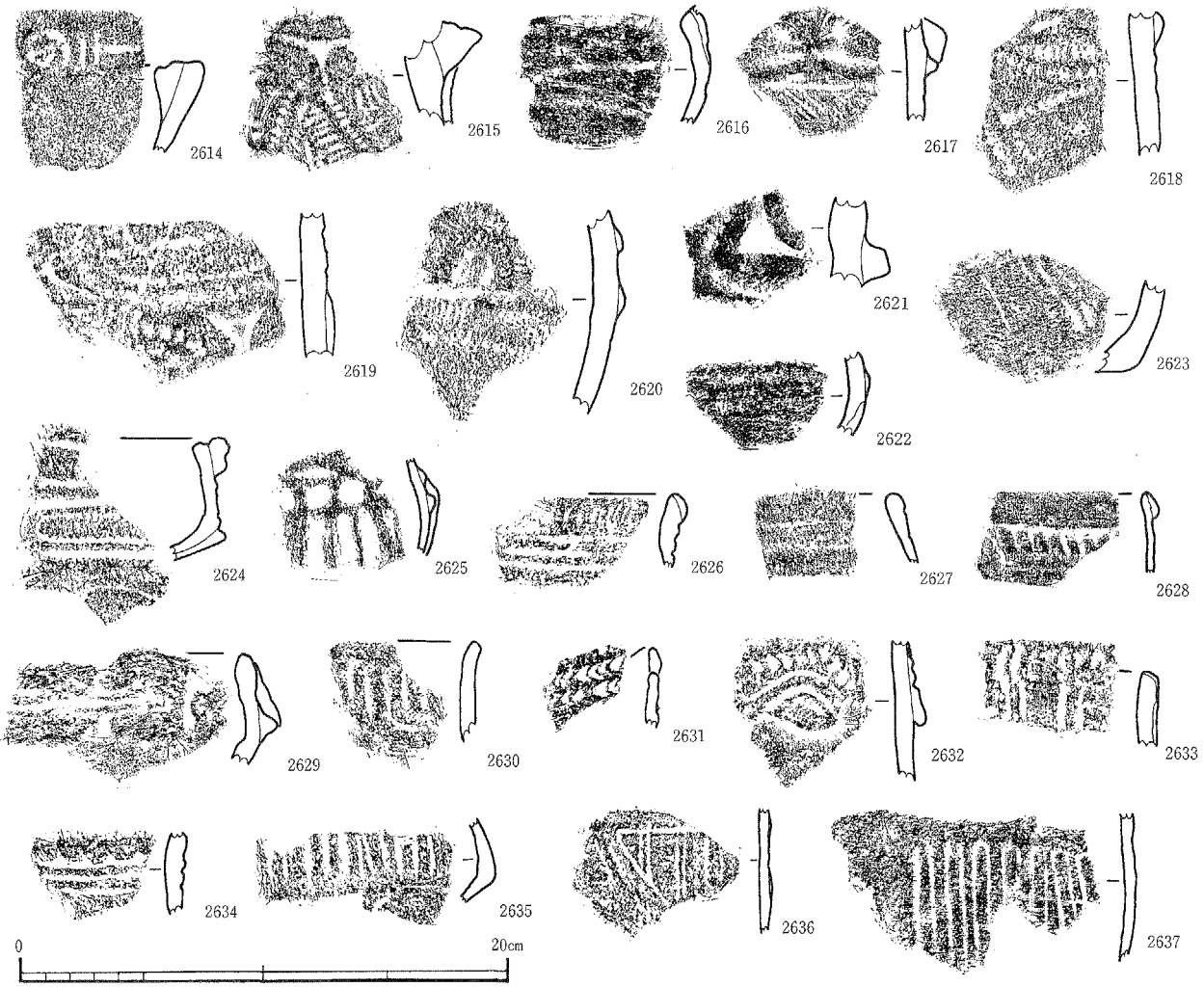
2563～2584：第5層出土縄文時代中期混入遺物

第180図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図



2585～2613：第５層出土縄文時代中期混入遺物

第181図　Ⅴ区 12-④区 包含層出土遺物実測図



2614～2637：第5層出土縄文時代中期混入遺物

第182図　V区 12-④区 包含層出土遺物実測図

竪穴住居200（第187・196図、PL.141）

12-④区の最も北側、竪穴住居100の東側に位置する。東側が調査区外におよぶため、検出できたのは約2/3である。削平のため、埋土は6cm前後を残すのみである。規模は短辺2m以上×長辺7mを測る。床面はほぼ平坦で、主柱穴及び炉は不明である。この住居に隣接して、幅2.4m×5.6mの長方形を三区画の遺構を検出した。幅10～20cm、深さ5cmの窪みにより、区画している。出土遺物は少なく、柱穴1より高杯・甕の細片が出土した。石器は埋土よりサヌカイトの石鏃（2743）が出土している。

竪穴住居300（第187・193図、アルカ第15図、PL.44・140）

調査区中央部に位置する。長辺5.7m×短軸5.2mの方形竪穴住居である。壁高は最も残りのよい部分で20cmを測る。壁溝は、幅10cm前後、深さ7cm前後で一周廻る。柱穴は10本あり、うち主柱穴は4本（柱穴1～4）である。掘方の規模は30～50cmを測る。深さは最も深い柱穴1で44cm、浅い柱穴4で23cmである。柱穴痕は柱穴1で11cm、柱穴4では13cmを測る。柱間は3～3.1mを測る。住居中央には炉と考えられる土坑16があり、規模は直径60cmの円形で、深さ25cmである。土坑16からは、高杯・甕破片が重なりあって出土した。底面には、約10cm大の川原石が敷き詰められた状態である。石は焼けた痕跡がなく、炭もない。南辺の中央部から、土坑14を検出した。規模は、長辺2.7m×短辺1m、中央部の深さ50cmで長方形を呈し、貯蔵穴と考えられる。埋土は2層に分けられる。下層はレンズ状堆

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1114	F 7	x 1	土坑	不定形	4.95	1.40	0.03
1129	G 6	b25	土坑	円形	0.52	0.40	無
1130	G 6	c 25	土坑	楕円	0.52	0.22	0.20
1131	G 6	c 25	土坑	円形	0.60	0.57	0.48
1132	G 6	d 25	土坑	不定形	0.60	0.30	0.13
1138	G 6	i 12	土坑	不定形	0.75	0.35~0.60	0.09
1139	G 6	l 12	土坑	不定形	3.35	2.60	0.07
1141	G 6	k13	土坑	不定形	2.55	2.05	0.40
1143	G 6	l 13	土坑	不定形	1.10	0.85	0.07
1144	G 6	l 14	土坑	不定形	1.06	0.85	0.10
1147	G 6	l 14	土坑	不定形	0.87	0.13~0.65	0.09
1148	G 6	m14	土坑	不定形	2.65	1.10	0.04
1149	G 6	k 15	土坑	不定形	2.85	0.76	0.15
1151	G 6	k 15	土坑	不定形	0.66	0.47	0.10
1152	G 6	l 15	土坑	不定形	1.66	0.80	0.18
1153	G 6	l 15	土坑	楕円	0.55	0.26	0.05
1155	G 6	l 15	土坑	楕円	1.50	0.80	0.31
1157	G 6	l 15	土坑	不定形	0.82	0.80	0.14
1159	G 6	m15	土坑	不定形	2.35	0.60~1.00	0.08
1160	G 6	n 15	土坑	不定形	2.35	1.00	0.11
1162	G 6	m16	土坑	円形	1.53	1.32	0.12
1163	G 6	l 16	土坑	不定形	2.00	0.80	0.80
1165	G 6	l 17	土坑	不定形	0.75	0.65	0.10
1166	G 6	m17	土坑	不定形	2.47	0.75	0.08
1169	G 6	n 18	土坑	不定形	2.22	0.78	0.05
1174	—	—	土坑	不定形	2.35	0.30~0.92	0.19
1175	G 6	m19	土坑	不定形	3.75	1.30	0.39
1177	G 6	e 23	土坑	不定形	2.87	1.16	0.07
1178	G 6	d 23	土坑	不定形	2.30	0.35	0.14
1179	G 6	23 d	土坑	不定形	1.72	1.05	0.72
1180	G 6	d 24	土坑	不定形	3.65	0.75	0.29
1181	G 6	e 24	土坑	不定形	1.10	0.67	0.03
1182	G 6	e 24	土坑	不定形	1.08	0.74	0.09
1184	G 6	d 24	土坑	不定形	3.00	1.80	0.17
1185	G 6	d 25	土坑	不定形	1.16	0.31	0.10
1186	G 6	c 24	土坑	不定形	1.46	1.14	0.21
1187	G 6	b24	土坑	不定形	1.12	0.40	0.13
1188	G 6	c 24	土坑	不定形	1.20	0.65	0.08
1189	G 6	d 23	土坑	不定形	1.60	1.08	0.07
1190	G 6	c 25	土坑	不定形	0.60	0.45	0.16
1192	G 6	b25	土坑	不定形	1.00	0.92	0.11
1193	G 6	l 18	土坑	不定形	1.90	0.50	0.04
1194	G 6	k 18	土坑	不定形	3.40	0.45	0.05
1195	G 6	l 18	土坑	不定形	2.45	1.45	0.07
1197	G 6	m19	土坑	不定形	2.60	0.21	0.07
1214	G 6	l 20	土坑	不定形	2.00	1.45	0.71
1220	G 6	k 19	土坑	楕円	0.45	0.36	0.21
1222	G 6	l 19	土坑	不定形	1.15	0.78	0.17
1224	G 6	l 20	土坑	不定形	0.47	0.32	0.16
1228	G 6	k 19	土坑	楕円	0.48	0.35	0.22
1238	G 6	k 20	土坑	楕円	0.75	0.45	0.18
1252	G 6	j 20	土坑	楕円	0.53	0.29	0.08
1260	G 6	g 14	土坑	楕円	1.85	0.25	0.08
1261	G 6	i 13	土坑	不定形	1.05	0.90	0.03
1262	G 6	i 13	土坑	不定形	1.10	1.05	0.07
1263	G 6	i 13	土坑	不定形	1.17	0.32~0.64	0.05
1264	G 6	i 13	土坑	不定形	1.07	0.63	0.04
1265	G 6	i 13	土坑	楕円	0.50	0.32	0.13
1266	G 6	i 14	土坑	不定形	0.90	0.40	0.05
1267	G 6	h 14	土坑	不定形	1.50	1.38	0.05
1269	G 6	h 14	土坑	不定形	0.90	0.60	0.02
1270	G 6	g 14	土坑	不定形	0.80	0.15	0.03
1271	G 6	h 14	土坑	不定形	1.20	0.14	0.04
1272	G 6	h 14	土坑	不定形	1.20	0.60	0.05
1273	G 6	h 14	土坑	円形	0.50	0.50	0.18
1275	G 6	j 15	土坑	不定形	2.80	0.80	0.01
1277	G 6	i 15	土坑	不定形	4.00	2.20	0.03
1280	G 6	g 15	土坑	不定形	0.75	0.28	0.07
1281	G 6	g 16	土坑	不定形	2.80	1.00	0.10
1282	G 6	h 16	土坑	不定形	3.30	0.90	0.07
1283	G 6	i 16	土坑	不定形	0.55	0.40	0.04
1284	G 6	j 16	土坑	不定形	4.10	0.65	0.13
1286	G 6	j 15	土坑	不定形	3.50	0.52	0.07
1287	G 6	j 14	土坑	不定形	2.70	0.40	0.05
1291	G 6	k 17	土坑	不定形	8.00	0.65	0.09
1293	G 6	j 18	土坑	不定形	2.95	0.38	0.05
1294	G 6	i 17	土坑	不定形	1.20	0.90	0.02
1295	G 6	i 17	土坑	円形	0.45	0.45	0.06
1296	G 6	i 17	土坑	不定形	1.35	0.85	0.05
1297	G 6	h 17	土坑	不定形	1.50	0.48	0.10
1298	G 6	h 17	土坑	不定形	0.58	0.20	0.04
1300	G 6	h 17	土坑	不定形	3.10	0.50	0.05
1311	G 6	h 19	土坑	不定形	2.35	1.20	0.04
1312	G 6	i 19	土坑	不定形	1.00	0.78	0.02
1315	G 6	g 20	土坑	不定形	1.30	0.70	0.06
1328	G 6	k 11	土坑	不定形	0.65	0.53	0.08
1336	G 6	i 13	土坑	不定形	2.20	0.31~1.12	0.10
1339	G 6	k 12	土坑	不定形	2.00	1.80以上	0.02

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1341	G 6	k 13	土坑	楕円	0.78	0.43	0.07
1342	G 6	k 13	土坑	楕円	0.56	0.34	0.05
1343	G 6	k 13	土坑	不定形	0.92	0.40	0.04
1344	G 6	l 13	土坑	不定形	1.55	0.21~0.43	0.04
1345	G 6	j 13	土坑	楕円	0.53	0.43	0.05
1346	G 6	j 13	土坑	不定形	0.45	0.30	0.04
1347	G 6	j 14	土坑	不定形	2.10	0.55	0.04
1348	G 6	k 14	土坑	楕円	0.45	0.30	0.06
1350	G 6	k 14	土坑	不定形	2.40	0.32	0.03
1351	G 6	k 15	土坑	不定形	0.80	0.27~0.44	0.06
1352	G 6	l 14	土坑	隅丸方形	1.02	0.84	0.04
1353	G 6	l 14	土坑	楕円	0.63	0.43	0.05
1368	G 6	o 17	土坑	不定形	1.10	0.65以上	0.05
1369	G 6	n 17	土坑	不定形	1.40	0.98	0.07
1383	G 6	n 19	土坑	不定形	1.40	0.70	0.04
1385	G 6	o 19	土坑	楕円	0.42	0.32	0.13
1386	G 6	o 19	土坑	楕円	0.57	0.37	0.11
1392	G 6	n 19	土坑	円形	0.60	0.58	0.08
1403	G 6	p 20	土坑	不定形	1.45	0.40	0.18
1405	G 6	p 20	土坑	不定形	0.75	0.68以上	0.25
1406	G 6	p 20	土坑	不定形	0.40	0.35	0.09
1414	G 6	l 21	土坑	楕円	0.50	0.40	0.10
1417	G 6	q 20	土坑	不定形	0.65	0.50	0.22
1420	G 6	k 20	土坑	不定形	0.65	0.30	0.03
1425	G 6	p 21	土坑	不定形	0.90	0.55	0.07
1426	G 6	o 21	土坑	円形	0.36	0.27	0.16
1434	G 6	p 22	土坑	楕円	0.46	0.35	0.24
1436	G 6	p 22	土坑	不定形	0.50以上	0.45	0.12
1438	G 6	p 21	土坑	円形	0.20	0.20	0.13
1450	G 6	m22	土坑	不定形	0.67	0.53	0.13
1457	G 6	m24	土坑	不定形	1.55	0.90	0.33
1458	G 6	m24	土坑	不定形	0.85	0.70	0.08
1459	G 6	m25	土坑	不定形	2.45	1.00	無
1461	G 6	m25	土坑	不定形	2.75	1.70以上	0.23
1479	G 6	l 22	土坑	不定形	0.46	0.40	0.15
1484	G 6	l 24	土坑	不定形	1.32	0.80	0.21
1485	G 6	l 25	土坑	不定形	1.18	0.62	0.13
1494	G 6	k 21	土坑	不定形	1.20	0.50	0.10
1495	G 6	k 21	土坑	楕円	2.35	0.40	0.09
1496	G 6	k 21	土坑	不定形	1.90	0.52	0.07
1497	G 6	k 21	土坑	円形	0.70	0.65	0.04
1501	G 6	k 22	土坑	不定形	1.88	0.55	0.08
1502	G 6	k 22	土坑	不定形	0.50	0.40	0.05
1508	G 6	k 23	土坑	不定形	0.84	0.55	0.10
1510	G 6	k 24	土坑	円形	0.72	0.70	0.05
1511	G 6	k 24	土坑	不定形	1.65	0.45	0.02
1515	G 6	i 20	土坑	不定形	2.50	1.61	0.31
1518	G 6	j 22	土坑	不定形	0.25	0.20以上	0.06
1519	G 6	j 23	土坑	楕円	1.30	0.75	0.10
1522	G 6	j 23	土坑	不定形	2.50	0.56	0.07
1524	G 6	i 24	土坑	楕円	0.75	0.45	0.08
1529	G 6	i 22	土坑	楕円	1.15	0.40	0.05
1530	G 6	i 22	土坑	不定形	1.35以上	0.15	0.03
1531	G 6	i 23	土坑	不定形	1.23以上	1.30	0.05
1533	G 6	h 22	土坑	不定形	2.95以上	1.30	0.17
1534	G 7	i 1	土坑	円形	0.67	0.64	0.08
1535	G 6	h 24	土坑	不定形	2.03	1.02	0.22
1536	G 7	h 2	土坑	不定形	2.42	0.99	0.37
1538	G 7	i 3	土坑	D形	0.75	0.70	0.17
1541	G 6	g 21	土坑	半円	1.50	0.90	0.04
1545	G 6	h 22	土坑	不定形	1.90以上	1.00	0.23
1546	G 6	h 23	土坑	不定形	1.57以上	0.90	0.27
1551	G 7	h 3	土坑	不定形	1.54	0.22	0.13
1555	G 7	h 4	土坑	不定形	0.67	0.60	0.19
1568	G 7	g 3	土坑	円形	0.40	0.34	無
1572	G 7	g 4	土坑	不定形	1.05	0.72	0.19
1578	G 7	f 4	土坑	楕円	0.48	0.40	無
1581	G 7	f 4	土坑	不定形	3.70	1.22	0.21
1583	G 7	f 4	土坑	不定形	1.45	0.25	0.06
1590	G 7	f 1	土坑	楕円	1.53	0.62	0.12
1591	G 7	f 1	土坑	楕円	0.64	0.44	0.08
1592	G 6	f 25	土坑	不定形	2.55	0.70	0.10
1594	G 6	f 24	土坑	不定形	1.05	0.40	0.04
1604	G 6	f 23	土坑	楕円	0.60	0.41	0.22
1606	G 6	f 22	土坑	楕円	0.53	0.44	0.11
1612	G 6	e 22	土坑	楕円	0.62	0.35	0.15
1613	G 6	e 25	土坑	楕円	0.65	0.20	0.11
1614	G 7	d 1	土坑	楕円	0.42	0.34	0.23
1615	G 7	e 1	土坑	不定形	0.95	0.60	0.15
1616	G 7	d 1	土坑	不定形	2.32	0.70	0.17~0.32
1618	G 7	d 3	土坑	不定形	4.05	0.44	0.09
1620	G 7	d 3	土坑	不定形	5.45	0.40~1.30	0.06
1621	G 7	d 3	土坑	不定形	3.80	0.50	0.29
1622	G 7	e 3	土坑	不定形	1.63	0.50	0.16
1623	G 7	d 2	土坑	楕円	0.54	0.30	0.06
1625	G 7	d 1	土坑	不定形	2.00	0.73	0.34
1628	G 7	c 2	土坑	不定形	0.90	0.75	0.08
1644	G 7	b 2	土坑	不定形	3.50	0.95	0.09

第10-1表　V区 12-④区 縄文時代後期 土坑・Pit規模一覧

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1645	G 7	b 4	土坑	不定形	1.30	1.30	0.39
1650	G 7	a 4	土坑	不定形	1.47	0.90	0.11~0.35
1657	G 6	i 11	土坑	不定形	2.15	0.70~1.23	0.14
1659	G 6	i 11	土坑	楕円	0.43	0.30	0.12
1660	G 6	j 11	土坑	不定形	1.95	0.60	0.09
1661	G 6	j 11	土坑	楕円	0.54	0.32	0.10
1666	G 6	l 13	土坑	円形	0.50	0.40	無
1667	G 6	j 13	土坑	不定形	6.00	1.35	0.02
1672	G 7	d 5	土坑	不定形	2.07	0.48	0.15
1675	G 7	b 5	土坑	円形	0.46	0.41	0.27
1770	G 6	i 12	土坑	不定形	1.69以上	0.92~1.09	0.06
1771	G 6	i 12	土坑	円形	0.40	0.38	0.09
1772	G 6	m17	土坑	楕円	0.65	0.40	0.11
1773	G 6	m17	土坑	不定形	1.07	0.82	0.05
1774	G 6	i 19	土坑	不定形	7.50	1.00	0.03
1775	G 6	j 11	土坑	不定形	12.00	3.00	0.90
1777	G 6	o 21	土坑	不定形	2.50	0.90	0.26
1778	G 7	c 3	土坑	不定形	2.45	0.95	0.38
1780	G 7	e 5	土坑	不定形	4.60	2.10	0.24~0.66
1790	F 7	y 6	土坑	不定形	1.64	1.40	0.04
1791	F 7	y 5	土坑	不定形	0.95	0.45	0.16
1792	F 7	y 4	土坑	不定形	5.50	0.90	0.49
1793	G 7	f 5	土坑	不定形	2.00	0.65	0.20
1986	G 7	d 1	土坑	不定形	3.50	0.70	0.16
2082	G 6	h 24	土坑	不定形	1.50	0.65	0.42
2242	G 6	m25	土坑	楕円形	2.10	1.00	0.28
2261	G 6	k 24	土坑	楕円形	0.75	0.45	0.19
2265	G 6	n 25	土坑	楕円形	1.10	0.68	0.14
2268	G 6	o 23	土坑	円形	1.85	1.45	0.21
2273	G 6	o 22	土坑	不定形	2.85	1.50	0.49
2361	G 7	c 3	土坑	円形	0.09	0.07	無
2438	G 6	l 13	土坑	不定形	0.65	0.60	0.15
2451	G 6	j 14	土坑	楕円形	0.80	0.47	0.12
2458	G 6	l 13	土坑	不定形	0.65	0.52	0.20
2467	G 6	l 13	土坑	楕円形	0.89	0.70	0.28
2468	G 6	l 15	土坑	不定形	1.95	1.12	0.28
2469	G 6	l 15	土坑	不定形	2.40	0.50~1.20	0.19
2472	G 6	o 18	土坑	不定形	2.25	1.10~1.75	0.22
2477	G 6	k 12	土坑	不定形	0.53	0.30	0.18
2490	G 6	l 19	土坑	不定形	0.95	0.65	0.22
2496	G 6	m17	土坑	不定形	1.22	0.62	0.15
2514	G 6	i 13	土坑	不定形	1.45	1.20	0.12
2528	G 6	m15	土坑	円形	0.80	0.72	0.05
2538	G 6	l 14	土坑	不定形	2.10	1.25	0.37
2555	G 6	k 17	土坑	不定形	1.15	0.55~0.65	0.19
2569	G 6	k 16	土坑	円形	1.30	1.12	0.39
2576	G 6	i 12	土坑	不定形	0.65	0.55	0.07
2586	G 6	k 11	土坑	楕円形	0.68	0.55	0.38
2602	G 6	i 13	土坑	円形	0.70	0.68	0.33
2603	G 6	k 13	土坑	円形	0.75	0.65	0.43
2609	G 6	h 17	土坑	不定形	0.85	0.10	0.31
2612	G 6	h 16	土坑	円形	0.70	0.67	0.20
2614	G 6	i 15	土坑	不定形	1.35	0.77	0.30
2639	G 6	i 16	土坑	楕円形	1.75	0.10	0.10
2656	G 6	i 16	土坑	楕円形	0.80	0.32	0.19
2673	G 6	h 19	土坑	不定形	2.05	0.85~1.15	0.34
2681	G 6	j 17	土坑	不定形	1.75	1.22	0.05
2699	G 6	k 20	土坑	不定形	1.20	0.65	0.13
2703	G 6	j 14	土坑	半円	1.00	0.60	0.39
2705	G 6	j 14	土坑	隅丸方形	1.15	0.70	無
2706	G 6	k 18	土坑	楕円形	1.05	0.70	0.30
2755	G 6	j 18	土坑	不定形	0.95	0.67	無
2765	G 6	d 25	土坑	楕円形	0.80	0.63	0.28
2769	G 6	j 15	土坑	円形	0.80	0.60	無
1117	G 6	e 25	Pit	円形	0.30	0.28	0.24
1118	G 6	d 24	Pit	円形	0.30	0.25	無
1120	G 6	c 24	Pit	円形	0.30	0.25	0.17
1122	G 6	d 25	Pit	円形	0.34	0.28	0.22
1124	G 6	c 25	Pit	円形	0.58	0.55	0.23
1125	G 6	c 25	Pit	円形	0.15	0.15	0.11
1127	G 6	b 25	Pit	円形	0.28	0.26	0.10
1128	G 6	b 25	Pit	楕円	0.37	0.30	0.25
1145	G 6	k 14	Pit	円形	0.22	0.20	0.11
1146	G 6	k 14	Pit	円形	0.18	0.18	0.14
1150	G 6	k 15	Pit	円形	0.35	0.32	0.07
1196	G 6	m18	Pit	楕円	0.38	0.28	0.12
1198	G 6	m19	Pit	円形	0.30	0.25	0.0.4
1200	G 6	l 19	Pit	楕円	0.27	0.20	0.10
1201	G 6	l 19	Pit	楕円	0.34	0.26	0.10
1202	G 6	l 18	Pit	楕円	0.31	0.24	0.13
1203	G 6	l 18	Pit	円形	0.30	0.28	0.16
1204	G 6	l 19	Pit	楕円	0.30	0.24	0.08
1206	G 6	l 19	Pit	楕円	0.32	0.24	0.17
1207	G 6	l 19	Pit	円形	0.26	0.24	0.12
1211	G 6	l 19	Pit	円形	0.32	0.29	0.12
1213	G 6	m20	Pit	円形	0.30	0.28	0.17
1217	G 6	k 19	Pit	円形	0.30	0.28	0.16
1218	G 6	k 19	Pit	円形	0.28	0.26	0.15

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1219	G 6	k 19	Pit	円形	0.30	0.24	0.18
1221	G 6	j 19	Pit	円形	0.26	0.20	0.12
1226	G 6	k 20	Pit	不定形	0.27	0.23	0.13
1227	G 6	k 19	Pit	楕円	0.36	0.29	0.11
1229	G 6	k 19	Pit	円形	0.24	0.22	0.12
1230	G 6	k 20	Pit	円形	0.25	0.23	0.08
1235	G 6	k 20	Pit	円形	0.41	0.40	0.16
1240	G 6	h 21	Pit	円形	0.32	0.30	0.11
1246	G 6	j 20	Pit	隅丸三角	0.40	0.27	0.09
1248	G 6	j 19	Pit	円形	0.30	0.27	無
1251	G 6	j 20	Pit	円形	0.27	0.26	0.12
1254	G 6	j 20	Pit	円形	0.31	0.30	0.11
1257	G 6	i 20	Pit	円形	0.31	0.28	0.10
1259	G 6	h 20	Pit	円形	0.28	0.26	0.10
1276	G 6	i 14	Pit	円形	0.20	0.17	0.04
1285	G 6	j 16	Pit	円形	0.24	0.22	無
1289	G 6	l 17	Pit	円形	0.22	0.20	0.70
1301	G 6	h 17	Pit	楕円	0.32	0.27	0.10
1305	G 6	h 18	Pit	円形	0.30	0.30	0.10
1308	G 6	h 19	Pit	円形	0.25	0.25	0.09
1309	G 6	h 19	Pit	円形	0.40	0.38	0.06
1310	G 6	h 19	Pit	楕円	0.35	0.20	0.08
1313	G 6	h 20	Pit	楕円	0.43	0.35	0.08
1314	G 6	h 20	Pit	円形	0.30	0.30	0.10
1316	G 6	g 19	Pit	楕円	0.42	0.33	0.09
1318	G 6	g 20	Pit	円形	0.30	0.30	0.11
1319	G 6	g 20	Pit	隅丸三角	0.33	0.28	0.12
1320	G 6	g 20	Pit	円形	0.38	0.32	0.07
1321	G 6	g 20	Pit	円形	0.22	0.19	0.07
1322	G 6	g 20	Pit	円形	0.32	0.28	0.09
1323	G 6	g 20	Pit	楕円	0.30	0.24	0.06
1324	G 6	g 20	Pit	円形	0.30	0.29	0.08
1325	G 6	g 20	Pit	円形	0.27	0.25	0.08
1327	G 6	j 12	Pit	楕円	0.30	0.20	0.04
1330	G 6	k 12	Pit	楕円	0.40	0.30	無
1331	G 6	j 12	Pit	楕円	0.20	0.18	0.08
1332	G 6	j 12	Pit	楕円	0.41	0.23	0.11
1333	G 6	j 12	Pit	円形	0.23	0.22	0.09
1334	G 6	j 12	Pit	円形	0.35	0.33	0.11
1335	G 6	i 13	Pit	隅丸三角	0.28	0.28	0.09
1340	G 6	k 12	Pit	楕円	0.29	0.20	0.05
1359	G 6	n 17	Pit	円形	0.27	0.25	0.04
1363	G 6	n 17	Pit	円形	0.29	0.27	0.12
1364	G 6	n 17	Pit	円形	0.28	0.21	0.12
1365	G 6	n 17	Pit	土坑	0.53	0.40	0.04
1367	G 6	o 17	Pit	円形	0.25	0.24	0.09
1374	G 6	o 18	Pit	円形	0.29	0.23	0.10
1384	G 6	o 19	Pit	円形	0.44	0.32	0.12
1387	G 6	o 19	Pit	円形	0.35	0.25	0.04
1388	G 6	o 19	Pit	円形	0.28	0.22	0.25
1389	G 6	o 19	Pit	円形	0.25	0.23	0.09
1390	G 6	n 19	Pit	楕円	0.42	0.18	0.06
1391	G 6	o 19	Pit	円形	0.25	0.25	0.08
1395	G 6	n 20	Pit	不定形	0.38	0.34	0.11
1399	G 6	n 19	Pit	不定形	0.31	0.30	0.03
1400	G 6	o 20	Pit	円形	0.27	0.26	0.12
1402	G 6	o 20	Pit	楕円	0.30	0.18	0.07
1404	G 6	p 20	Pit	円形	0.23	0.22	0.15
1407	G 6	o 20	Pit	円形	0.25	0.24	0.06
1410	G 6	p 20	Pit	円形	0.25	0.23	0.06
1411	G 6	p 20	Pit	円形	0.20	0.15	0.03
1412	G 6	p 20	Pit	円形	0.19	0.18	0.03
1413	G 6	p 20	Pit	隅丸三角	0.30	0.22	0.07
1414	G 6	l 20	Pit	円形	0.20	0.20	0.14
1415	G 6	p 20	Pit	円形	0.40	0.30	0.07
1416	G 6	q 20	Pit	円形	0.23	0.20	0.03
1418	G 6	p 20	Pit	円形	0.26	0.23	0.11
1420	G 6	k 20	Pit	円形	0.32	0.25	0.13
1421	G 6	o 21	Pit	楕円	0.35	0.19	0.06
1427	G 6	p 21	Pit	楕円	0.36	0.24	0.19
1428	G 6	p 21	Pit	円形	0.20	0.17	0.17
1430	G 6	p 21	Pit	円形	1.60	1.15	0.12
1431	G 6	o 21	Pit	円形	0.25	0.20	0.09
1432	G 6	p 21	Pit	円形	0.23	0.20	0.09
1433	G 6	p 21	Pit	円形	0.20	0.18以上	0.15
1435	G 6	p 22	Pit	円形	0.18	0.18	0.20
1437	G 6	o 21	Pit	円形	0.40	0.38	0.11
1439	G 6	p 22	Pit	円形	0.23	0.20以上	0.07
1440	G 6	p 22	Pit	円形	0.40	0.38	0.09
1442	G 6	o 21	Pit	楕円	0.25	0.18	0.10
1443	G 6	n 22	Pit	楕円	0.30	0.20	0.11
1444	G 6	n 22	Pit	円形	0.20	0.20	0.11
1445	G 6	o 23	Pit	円形	0.26	0.24	0.18
1446	G 6	o 23	Pit	円形	0.22	0.20	0.30
1447	G 6	n 24	Pit	楕円	0.35	0.28	0.11
1448	G 6	n 24	Pit	楕円	0.30	0.22	0.13
1450	G 6	m22	Pit	隅丸方形	0.22	0.20	0.07
1451	G 6	m22	Pit	円形	0.20	0.19	0.14

第10-2表　V区 12-④区 縄文時代後期 土坑・Pit規模一覧

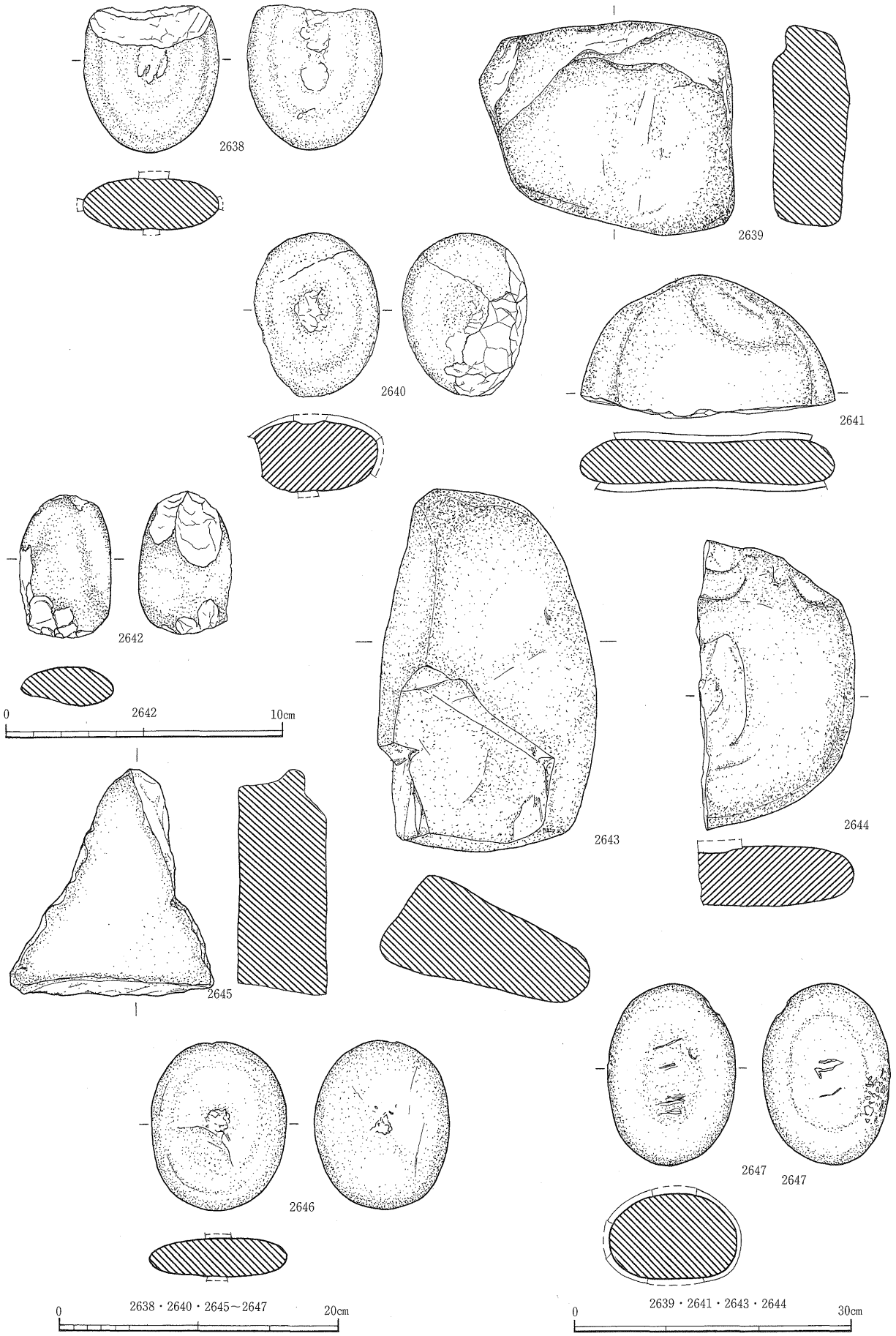
遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1452	G 6	m22	Pit	円形	0.35	0.30	0.10
1453	G 6	m22	Pit	円形	0.26	0.22	0.07
1455	G 6	m23	Pit	円形	0.15	0.15	0.10
1463	G 6	l 21	Pit	円形	0.24	0.22	0.06
1465	G 6	l 22	Pit	円形	0.24	0.23	0.08
1466	G 6	l 22	Pit	楕円	0.30	0.20	0.10
1467	G 6	l 22	Pit	楕円	0.35	0.30	0.12
1468	G 6	l 22	Pit	円形	0.20	0.20	0.10
1469	G 6	l 22	Pit	円形	0.24	0.21	0.10
1470	G 6	l 22	Pit	楕円	0.36	0.26	0.07
1472	G 6	l 22	Pit	円形	0.27	0.25	0.08
1475	G 6	l 22	Pit	円形	0.23	0.17	0.06
1476	G 6	l 22	Pit	円形	0.23	0.22	0.09
1477	G 6	l 22	Pit	円形	0.20	0.20	0.70
1481	G 6	l 23	Pit	円形	0.32	0.28	0.15
1482	G 6	k 23	Pit	円形	0.25	0.23	0.05
1493	G 6	k 21	Pit	円形	0.30	0.30	0.14
1503	G 6	k 22	Pit	円形	0.24	0.20	0.03
1504	G 6	k 22	Pit	楕円	0.37	0.25	0.04
1505	G 6	k 22	Pit	楕円	0.33	0.24	0.03
1506	G 6	k 23	Pit	円形	0.23	0.20	0.04
1489	G 6	l 22	Pit	楕円	0.33	0.24	0.08
1516	G 6	j 22	Pit	円形	0.30	0.27	0.15
1517	G 6	j 22	Pit	円形	0.28	0.26	0.07
1520	G 6	i 23	Pit	楕円	0.30	0.22	0.28
1523	G 6	j 23	Pit	円形	0.43	0.43	0.01
1525	G 6	i 21	Pit	楕円	0.35	0.28	0.22
1526	G 6	i 21	Pit	楕円	0.37	0.28	0.11
1527	G 6	i 22	Pit	円形	0.30	0.28	0.08
1528	G 6	i 22	Pit	円形	0.25	0.23	0.05
1542	G 6	h 22	Pit	円形	0.20	0.18	0.42
1543	G 6	h 22	Pit	楕円	0.30	0.22	0.09
1547	G 6	g 22	Pit	楕円	0.25以上	0.21	0.16
1548	G 6	g 22	Pit	円形	0.20	0.20	0.14
1549	G 6	h 23	Pit	円形	0.25	0.23	0.04
1550	G 6	k 22	Pit	楕円	0.25	0.10	0.08
1552	G 7	h 3	Pit	円形	0.30	0.30	無
1554	G 7	h 4	Pit	楕円	0.22	0.18	0.16
1556	G 7	h 4	Pit	楕円	0.25	0.20	0.10
1557	G 7	h 4	Pit	楕円	0.30	0.23	0.18
1558	G 7	h 3	Pit	円形	0.16	0.14	無
1559	G 7	h 3	Pit	円形	0.24	0.22	無
1560	G 7	g 3	Pit	円形	0.20	0.20	無
1561	G 7	g 3	Pit	円形	0.22	0.22	-
1564	G 6	g 22	Pit	円形	0.21	0.21	0.09
1565	G 6	g 23	Pit	円形	0.25	0.23	0.22
1566	G 6	g 23	Pit	円形	0.24	0.22	0.06
1567	G 7	g 3	Pit	隅丸三角	0.20	0.20	無
1573	G 7	g 4	Pit	円形	0.24	0.23	0.18
1574	G 7	g 4	Pit	円形	0.34	0.32	無
1574	G 7	g 4	Pit	円形	0.30	0.25	0.15
1575	G 7	g 4	Pit	円形	0.29	0.24以上	無
1576	G 7	g 4	Pit	円形	0.30	0.30	0.09
1579	G 7	f 4	Pit	円形	0.25	0.25	無
1580	G 7	f 4	Pit	円形	0.34	0.30	無
1582	G 7	f 4	Pit	円形	0.24	0.22	0.12
1587	G 7	f 4	Pit	円形	0.25	0.24	0.16

遺構番号	地区名		種類	形状	規模(m)		
	大区画	小区画			長軸	短軸	深さ
1588	G 7	f 4	Pit	円形	0.25	0.23	無
1597	G 6	f 24	Pit	円形	0.27	0.25	0.05
1598	G 6	f 23	Pit	円形	0.21	0.20	0.08
1600	G 6	f 23	Pit	円形	0.20	0.20	0.07
1601	G 6	f 23	Pit	円形	0.31	0.30	0.07
1602	G 6	f 23	Pit	円形	0.30	0.30	0.11
1603	G 6	f 23	Pit	円形	0.40	0.36	0.20
1610	G 6	e 22	Pit	円形	0.40	0.35	0.10
1613	G 6	e 25	Pit	円形	0.20	0.18	無
1614	G 7	d 1	Pit	円形	0.32	0.36	0.14
1615	G 7	e 1	Pit	円形	0.25	0.25	無
1618	G 7	d 3	Pit	円形	0.25	0.22	0.12
1619	G 7	d 3	Pit	円形	0.32	0.30	0.17
1620	G 7	d 3	Pit	円形	0.21	0.20	0.16
1621	G 7	d 3	Pit	楕円	0.41	0.21	無
1624	G 7	d 2	Pit	円形	0.30	0.25	0.16
1627	G 6	d 25	Pit	円形	0.28	0.24	0.15
1631	G 7	c 3	Pit	円形	0.23	0.23	0.06
1632	G 7	c 3	Pit	円形	0.29	0.24	0.14
1646	G 7	b 4	Pit	円形	0.15	0.15	0.10
1647	G 7	b 5	Pit	円形	0.47	0.35	0.16
1648	G 7	a 4	Pit	円形	0.25	0.20	0.08
1649	G 7	a 5	Pit	円形	0.19	0.18	0.09
1651	G 7	a 4	Pit	円形	0.19	0.18	0.13
1654	G 6	h 11	Pit	楕円	0.25	0.18	0.15
1655	G 6	h 11	Pit	円形	0.33	0.27	0.12
1656	G 6	h 11	Pit	円形	0.25	0.25	0.16
1658	G 6	i 11	Pit	円形	0.34	0.30	0.22
1662	G 6	j 11	Pit	楕円	0.34	0.25	0.07
1663	G 6	j 11	Pit	円形	0.32	0.28	0.15
1665	G 6	k 11	Pit	楕円	0.23	0.18	0.10
1668	G 7	e 5	Pit	円形	0.14	0.14	0.12
1669	G 7	e 5	Pit	隅丸三角	0.30	0.30	0.17
1670	G 7	d 5	Pit	円形	0.35	0.35	0.30
1673	G 7	d 5	Pit	円形	0.27	0.27	0.09
1674	G 7	c 5	Pit	円形	0.28	0.25	0.12
1676	G 7	b 5	Pit	楕円	0.30	0.25	0.09
1677	G 7	b 6	Pit	円形	0.35	0.34	0.16
1678	G 7	a 5	Pit	円形	0.30	0.27	0.10
1679	G 7	a 6	Pit	楕円	0.30	0.24	0.05
1776	G 6	k 11	Pit	楕円	0.35	0.28	0.10
1779	G 7	g 4	Pit	楕円	0.18	0.15以上	無
1781	G 7	e 4	Pit	円形	0.30	0.30	0.17
1782	G 7	e 3	Pit	楕円	0.18	0.14	0.06
1783	G 7	e 3	Pit	円形	0.17	0.15	0.05
1789	F 7	y 6	Pit	円形	0.23	0.23	0.11
1794	G 7	f 5	Pit	円形	1.50	1.50	0.04
1832	F 7	v 1	Pit	楕円形	0.38	0.31	無
2382	G 6	n 19	Pit	円形	0.37	0.35	0.16
2429	G 6	l 15	Pit	円形	0.50	0.43	0.15
2447	G 6	k 15	Pit	円形	0.36	0.36	0.16
2501	G 6	j 12	Pit	半円	0.32	0.15以上	0.03
2577	G 6	i 12	Pit	楕円形	0.40	0.30	0.22
2590	G 6	i 16	Pit	円形	0.29	0.29	0.22
2606	G 6	g 14	Pit	円形	0.27	0.26	0.15
2645	G 6	h 18	Pit	円形	0.35	0.31	0.18
2679	G 6	i 14	Pit	楕円形	0.41	0.35	0.16

第10-３表　Ⅴ区 12-④区 縄文時代後期 土坑・Pit規模一覧

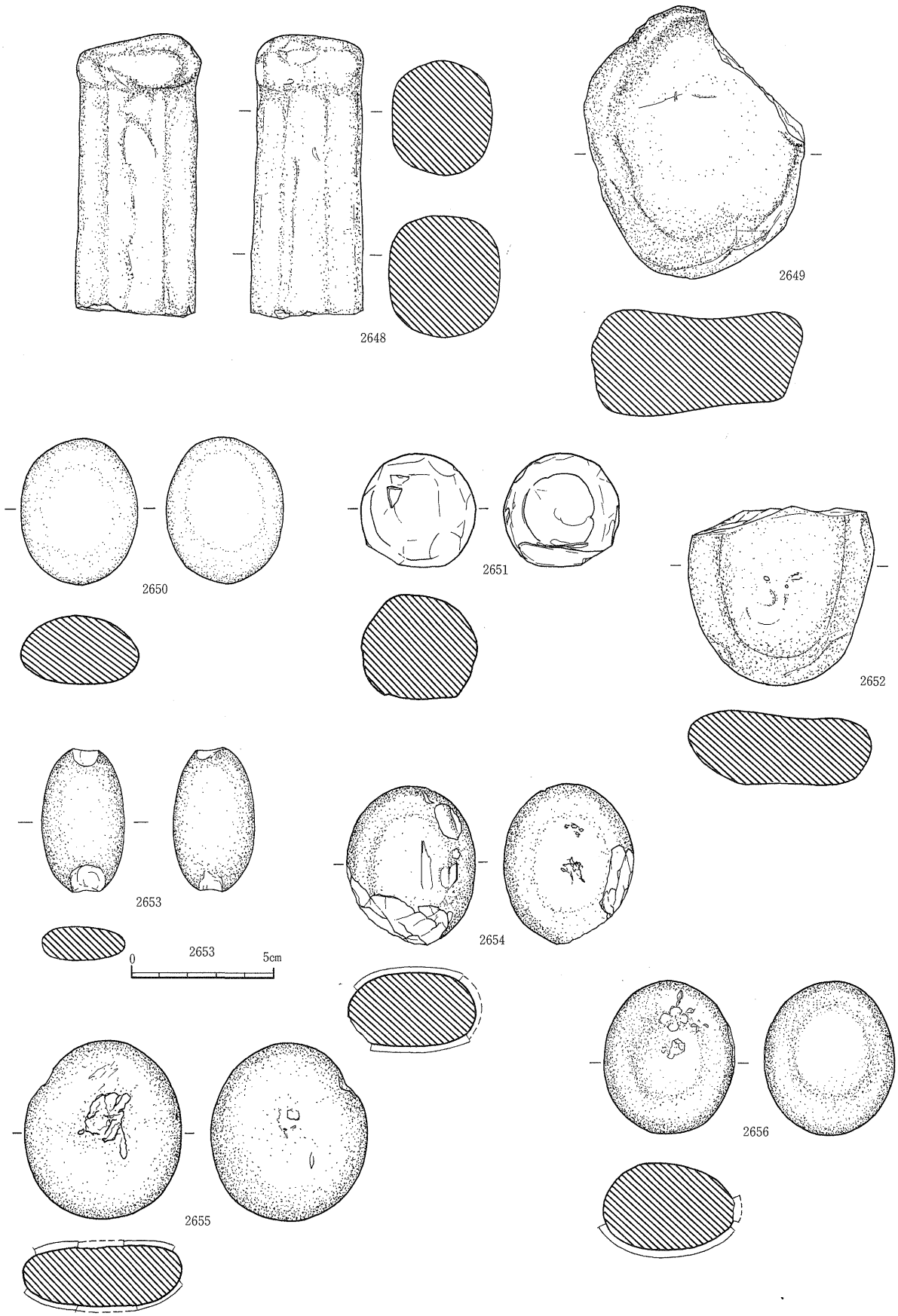
積で、上層は10cm大の礫を多く含む層である。

遺物は、埋土１層・２層から甕・壺・高杯・鉢・石器が出土した。壺（2657・2658）は小型である。2657は直立する口縁部をもち、肩部にはミガキ調整を施す。2658はドーナツ底である。甕(2660～2662)は、直立する口縁部(2661)やタタキをもつ底部がある(2662)。高杯は、屈曲して伸びる杯部(2663・2664)で、中実で直立する脚柱部（2665）と中空の脚柱部がある（2666・2667)。2666の内面にはしぼり痕がのこり、中間部が少し広がる。床面直上からは甕底部（2660）が出土する。外面にタタキがある。土坑14からは甕が出土する(2672)。外面にタタキをもつ。土坑16からは、壺(2668)、甕(2669)、高杯（2670)、鉢（2671）が出土する。壺は口縁部が直立する（2668)。外面の調整は摩滅のため不明である。甕は底部（2669）で、横方向のタタキをもつ。高杯は椀形の杯部（2670）を持ち、脚柱部は短い。鉢は底部の指押さえが顕著である(2671)。形態から製塩土器の可能性もある。炉17からは高杯破片が出土する。壁溝15からは甕破片が出土した。柱穴３からは底部外面に荒い指押さえを施す鉢が



2638：埋甕1、2639：埋甕2、2640・2641：住居1113、2642～2644：住居2600、2645～2647：住居2682

第183図　V区 12-④区 遺構出土石器実測図



2468～2652：土坑2538、2653：土坑2602、2654：落ち込み1111、2655・2656：落ち込み1795

第184図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土石器実測図

遺物No.	器種	出土地区	遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
2638	敲石	12-4 G& m19	埋甕-1	10.60	9.80	3.70	520.28	砂岩	
2639	台石	12-4 G6 p21	埋甕-2	27.40	21.80	4.10	8,000.00	砂岩	
2640	磨石+敲石	12-4 F7 y1	住居1113　s-7	(11.90)	9.00	5.00	742.53	砂岩	
2641	台石	12-4 F7 y1	住居1113　s-6	(27.20)	(15.60)	5.00	2,500.00	砂岩	田辺層群砂岩
2642	石錘？	12-4 G6 k16	住居2600・土坑-④	5.20	3.30	1.40	28.65	砂岩	
2643	台石	12-4 G6 k16	住居2600・土坑-④	39.40	23.60	10.80	13,000.00	砂岩	
2644	台石	12-4 G6 k16	住居2600・石-4	31.60	16.80	6.60	5,000.00	砂岩	田辺層群砂岩
2645	台石	12-4 G6 j12	住居2682	(16.40)	(14.70)	6.40	1,325.17	砂岩	田辺層群砂岩
2646	敲石	12-4 G6 j12	住居2682	12.40	9.80	2.80	526.74	砂岩	
2647	磨石・敲石	12-4 G6 j11	住居2682・い	13.10	9.30	6.30	951.26	泥岩ノジュール	凝灰石ではない
2648	石棒	12-4 G6 l13	土坑2538	(29.70)	11.70	12.70	1,319.69	砂岩	
2649	石皿	12-4 G6 l13	土坑2538	28.80	22.90	11.20	10,000.00	砂岩	田辺層群砂岩・御坊～南部に多いタイプ
2650	磨石	12-4 G6 l13	土坑2538内埋甕掘り方	8.40	8.20	4.80	590.28	溶結凝灰岩礫	
2651	磨耗礫	12-4 G6 l13	土坑2538　2～3層	(8.00)	8.00	7.30	640.19	泥岩	石灰質ノジュール・南部瓜谷地区に多い
2652	石皿	12-4 G6 l13	土坑2538	(18.80)	19.20	8.00	4,000.00	砂岩	
2653	石錘	12-4 G6 i13	土坑2602	5.10	2.90	1.10	28.05	砂岩	
2654	磨石・敲石	12-4 F7 t5	落ち込み1111	(11.30)	9.00	5.10	744.61	砂岩	田辺層群砂岩
2655	磨石・敲石	12-4 G6 i14	落ち込み1795	12.70	11.00	4.30	839.60	砂岩	
2656	磨石・敲石	12-4 G7 h13	落ち込み1795	10.80	9.00	6.30	862.52	砂岩	

第11表　縄文時代後期 出土石器一覧

器種 / 遺構	サヌカイト								礫石器														
	石鏃	石錐	石匙	石核	スクレイパー	両極石器	削器	剥片	台石	石皿	石棒	磨石+敲石	磨石	敲石	石錘	石偶	石斧	砥石	抉入石器	削器	玉石	磨耗礫
住居1113	1	2				4		22	4	1		2		2								
住居2600	6	1		1				114	3						1							
住居2682	3					2		74	1			1		1						1		
土坑2268												2										
土坑2681								1														
土坑2755								1														
土坑2703								3														
土坑2458						1																
土坑2471												1									1	
土坑2514							1															
土坑2528								2					2									
土坑2538					1			1		5	1		1									1
土坑2602								4							1							
土坑2603								1														
土坑2604								3														
土坑2609								3		1												
土坑2451								5														
土坑2467												1										
土坑2382		1																				
埋甕1								2						1								
埋甕10								2														
埋甕2								3	1													
埋甕3								3														
埋甕4								1														
埋甕5								1														
落ち込み1111												1										
落ち込み1112							2	3						2								
落ち込み1795						1	2	8				1	2									
土坑1138								1														
土坑1179								1														
土坑1267							1															
土坑1335	1							1														
土坑1343							1															
土坑1354								1														
土坑1522								1														
土坑1805			1																			
土坑1922								1														
土坑1141								2														
土坑1179								2														
土坑1267								6														
土坑1408								1														
土坑1425								1														
土坑1541								1														
土坑1770								2														
土坑1771				1		1		7														
土坑1776						1																
土坑1778								1														
柱穴1246								1														
柱穴1428								1														
柱穴1796								1														
柱穴1801								2														
配石Ⅰ								4														
5層	8	4	3	3		18	12	248	3	2		1	7	18		1	2	1	1			
合　計	19	8	4	5	1	28	19	543	12	9	1	7	12	27	2	1	2	1	1	1	1	1

第12表　12-④区 縄文時代後期 遺構及び包含層出土の石器器種別数量表

出土する（2673）。形態から製塩土器の可能性もある。石器は両極石器（アルカ162）である。

竪穴住居400（第188・193・196図、アルカ第11図、PL.44・141・148）

竪穴住居200の南に位置する方形住居である。東辺が調査区外であり、約2/3を検出した。平面規模は南北４ｍ×東西5.8m以上、床面までの深さは７㎝前後を測り、壁際に沿って、幅1.1m前後のベッド状遺構が廻る。炉は、土坑１で中央やや東よりに位置する。土坑１は楕円形を呈し、長径80㎝×短径70㎝、深さ50㎝を測る。厚さ５㎝程の焼土塊がある。南西隅で貯蔵穴と考えられる土坑10を検出した。円形を呈し、径70㎝、深さ52㎝を測る。土坑10からは底面で鉄鎌、中層で高杯杯部が出土した。基底部に鉄鎌（2676）を置き、灰白色の粘土で30㎝程埋め、その上に土器を入れたと考えられる。主柱は確認できなかったが、北西側の壁際にそって７個の柱穴を検出した。

遺物は埋土２層から甕底部（2675）、石器が出土した。石器は磨石と敲石を併用する石製品（2750）、石錐の未製品（アルカ117）、削器（アルカ118）が出土する。石錐と削器の石材は、二上山産サヌカイトである。2750は断面楕円形である。片面のみ使用しており、他面には中央部に窪みがある。長辺部先端には敲きの使用痕がある。柱穴９からは、高杯(2674)、甕細片、石器が出土した。高杯は杯部で、屈曲して外反する。器面は摩滅し調整は不明である。土坑10からは、甕、壺の細片が出土した。下層から出土した鉄鎌（2676）は、長さ20㎝、幅25～27㎝、厚さ0.3㎝で先端が曲がる形態である。

竪穴住居500（第188・193・196図、アルカ第15図、PL.45・140・141・151）

調査区の東に位置する。方形を呈する焼失住居である。東西５ｍ×南北4.8mの規模で、深さは20㎝前後である。周溝は確認できない。中央部には非常に浅い楕円形を呈する土坑11があり、炉の可能性がある。直径20㎝弱の柱穴３・８・13・21があり、主柱穴は深さ40㎝である。２×2.2mの柱間である。住居埋土の第４・５層は焼失家屋部材の炭層である。柱材なども出土したが状態は悪い。

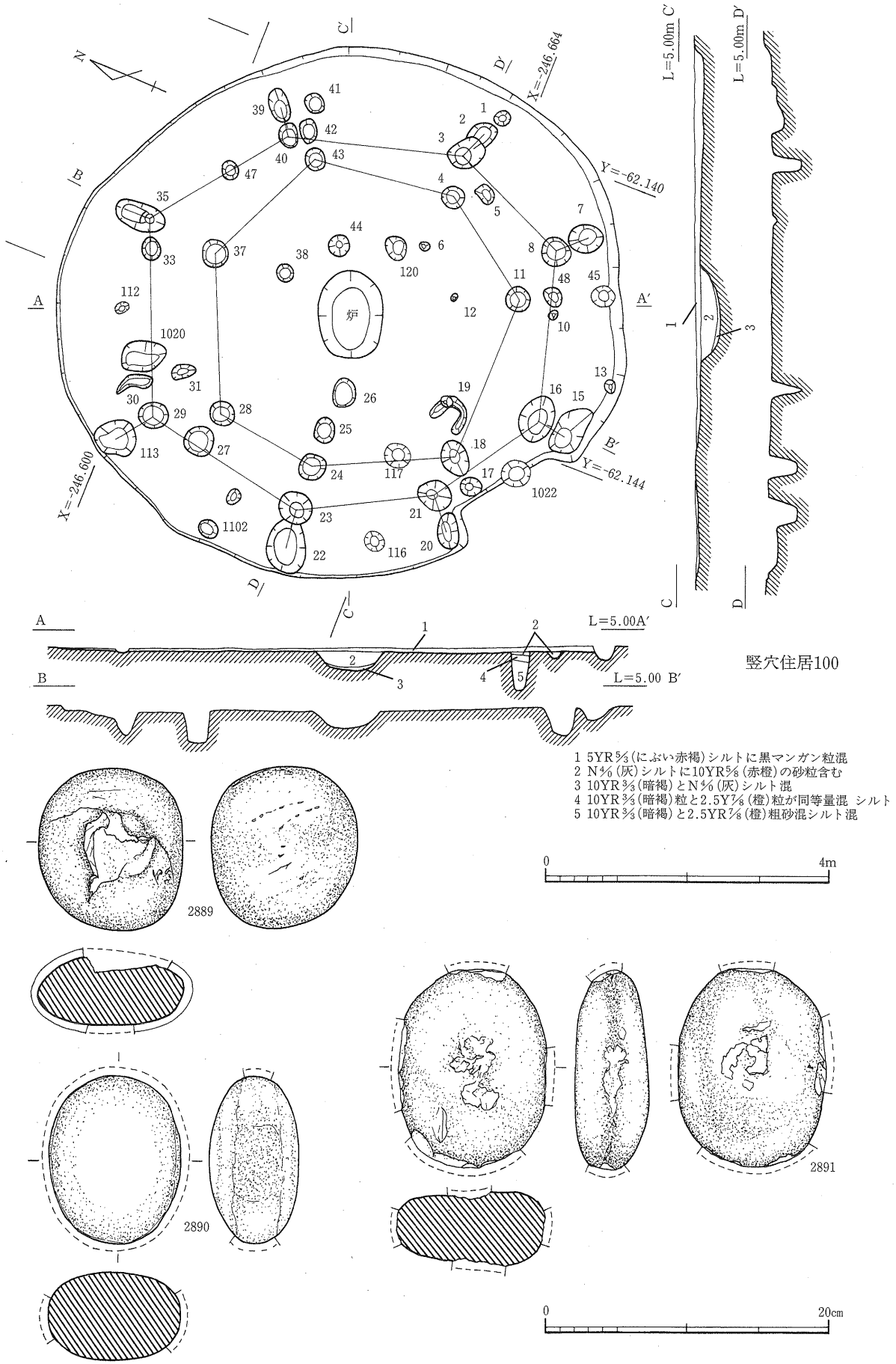
出土遺物は上層（1～3層）から、壺（2677）、高杯（2681・2682）、甕底部（2678・2679）、石器（アルカ165）、下層から高杯（2680）が出土している。壺（2677）は短い口縁部を直立させ、球形の体部をもつ。体部外面はハケ調整の後にミガキ調整を行う。内面はハケ調整により、器面を整えている。高杯は完形（2681）、脚部（2682）がある。2681は、杯部は屈曲して伸び、脚部は中空でスカート状に広がる。器面は摩滅している。

床面からは石器が出土する。下層の縄文時代に属するものか原位置を保つものか判断しがたい。金山産サヌカイトの削器（アルカ165）や、敲石（2747・2755）、磨石（2751）、石皿（2759）がある。敲石、磨石、石皿は砂岩である。磨石は断面楕円形を呈する。片面の平坦面に使用痕があり、平滑になっている。敲石は２点出土しており、円形（2747）と楕円形（2755）がある。2747は使用痕が全周しており、一部に一段深い使用痕がある。両面の中央部には窪みが存在する。2755は長辺部に著しい使用痕がある。石皿（2759）は片面のみ使用される。

竪穴住居501（第188図、アルカ第15図、PL.151）

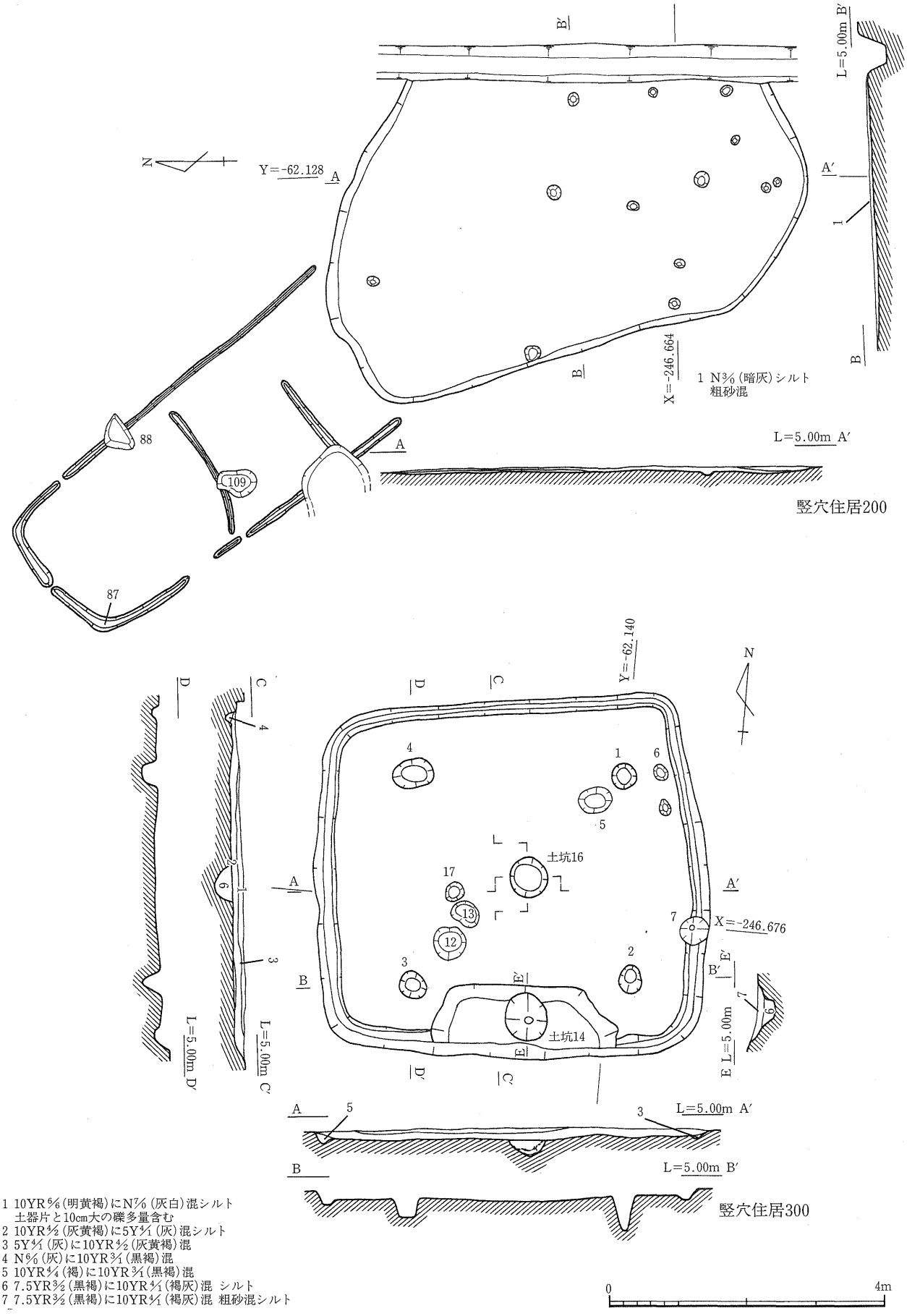
住居500の西側に位置し、大半は調査区外で東南隅を確認したにすぎない。深さ10㎝前後を測る。埋土はシルト層である。出土遺物は、土師器の小破片と石器が出土したのみである。石器は石錐（アル

第185図　V区 12-④区 第5層上面 弥生時代～古墳時代 遺構平面図



2889：住居100、2890：溝1000、2891：土坑1078

第186図　V区 12-④区 第5層上面 弥生時代前期 竪穴住居100平面図・土層図、遺構出土石器実測図



第187図　Ⅴ区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 竪穴住居200・300平面図・土層図

カ166）が1点出土している。

竪穴住居550（第189図、アルカ第15図、PL.45・151・151）

竪穴住居800の南に位置する。削平が激しい。壁溝は巡らない。中央部に直径0.6～1m、深さ38cmの楕円形を呈する土坑1を検出した。土坑1は底に炭層の堆積があり、炉と考えられる。埋土は1層である。

出土遺物は少ない。埋土より、器種不明の土師器細片、石器が出土する。石器は、敲石、凹基鏃（アルカ167）、石錐（アルカ168）、削器（アルカ169）、乳棒状磨製石斧（アルカ170）が出土する。敲石以外は二上山産サヌカイトである。炉1からは甕小破片が出土する。柱穴3からは土師器片が出土する。

竪穴住居600（第190・194・196図、アルカ第16図、PL.46・140・141・142・151）

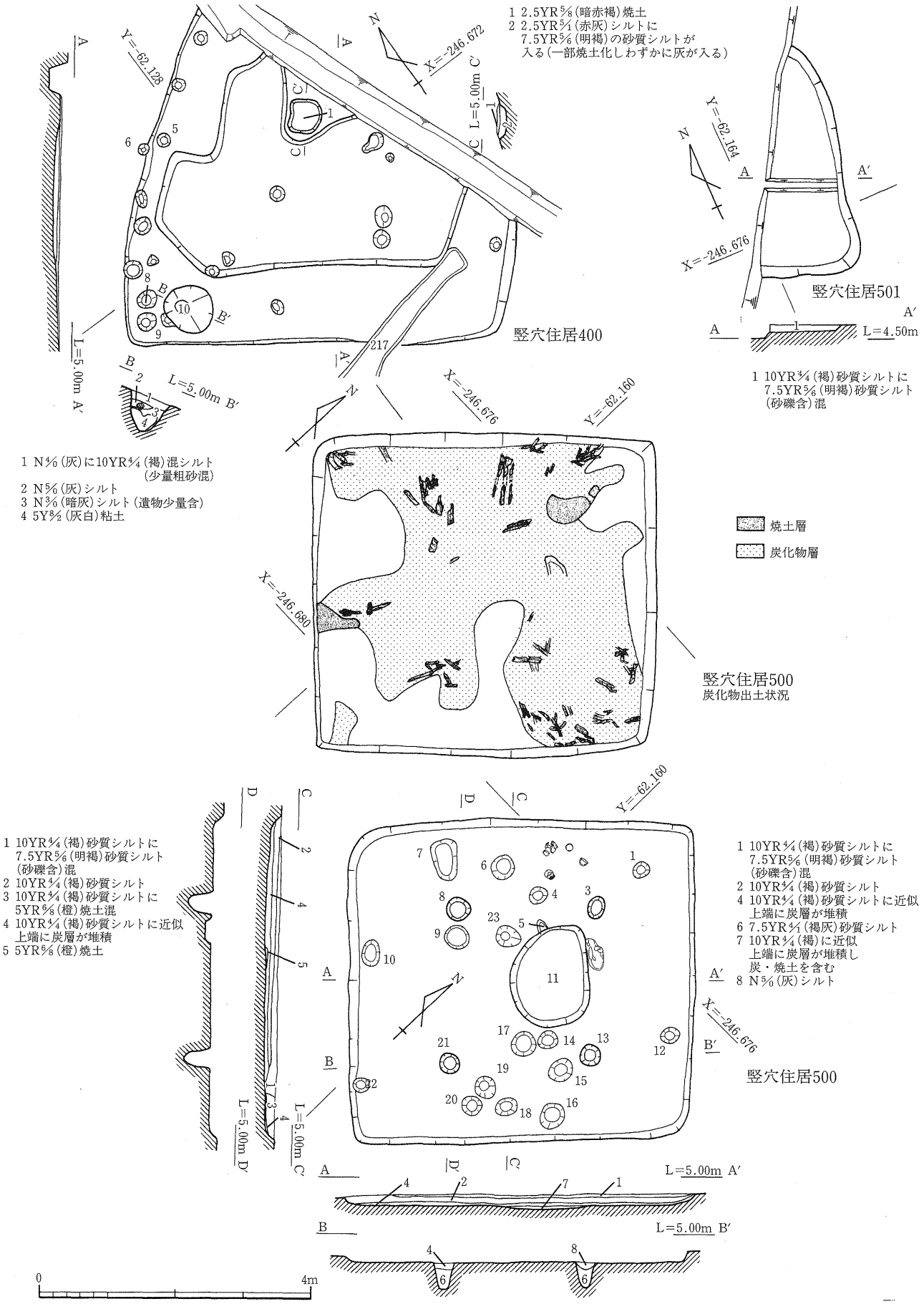
竪穴住居300の西側に位置する。検出した竪穴住居の中では最も大きい。平面規模は、長辺7.6m×短辺7mの方形竪穴住居である。ベッド状遺構が周囲を巡る。中央南よりに土坑6を検出した。土坑6は楕円形を呈し、位置から炉と考えられる。炭は確認できなかった。柱穴は20本程度検出した。主柱穴と考えられる柱は4本存在し、柱穴15・21・24・25である。周溝は南西辺中央で切れており、出入り口のあった可能性が考えられる。壁高は10cmである。住居埋土は2層に区分でき、上層は暗褐色と灰色の混ざるシルト層、方形にさらに一段下がった層は、褐色の粗砂混じりのシルト層である。住居のベース層は縄文時代後期の礫層のため、床面は凹凸である。

出土遺物は、土器・石器がある。土器は黄灰色系の遺物が多い。埋土第1層からは、壺（2691）、甕（2704）、高杯（2692～2703・2707・2708）、底部（2705）、石器（2757・アルカ171・172）などが出土した。高杯は、杯部が屈曲するもの（2692・2694・2700・2707）と椀状のもの（2693・2698）がある。後者は口縁端部をさらに外反させる（2693・2698）。脚柱部はスカート状にひらき、中空である。柱状部内面に粘土紐の痕跡が顕著に残る2699がある。2697・2702は、孔を裾部に穿つ。杯部は体部と口縁部の稜線が明瞭な2700がある。2707・2708は同一個体で、杯部は大型で口縁端部をわずかに外反させる。器種不明な底部（2705）破片も出土する。石器は、砂岩の台石（2757）、二上山産の横形石匙（アルカ171）、削器（アルカ172）が出土する。台石は20cm前後の四角形を呈し、扁平である。両面に使用痕があり、平滑になっている。土坑6からは高杯（2709）が出土する。裾部は明瞭に屈曲する。柱状部外面に縦方向のミガキ調整を行う。周溝1からは高杯杯部（2706）が出土する。口縁部と体部の稜線が明瞭である。口縁端部は外反する。柱穴7・10・21から土師器細片が出土する。周溝2からは、砂岩の敲石（2752）が出土する。小型である。断面円形に近い。長辺部・短辺部の両端を使用している。

竪穴住居700（第189・194・195・196図、アルカ第16図、PL.46・140・141・151）

調査区の最も東南に位置し、2回の建替えがみられる隅丸方形の住居である。Ⅰ～Ⅲ期に区分する。土層からみて拡張している。Ⅰ期が古く、Ⅲ期は新しい。

Ⅰ期　平面規模は周溝間で4mの方形住居である。主柱穴は4本（柱穴16.18.20.22）存在する。直径20cm前後、深さは20cm前後である。柱間は2.0～2.5mである。周溝は、幅40cm前後、深さ10cm前後で



第188図　Ⅴ区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 竪穴住居400・500・501平面図・土層図

ある。北東隅の土坑25は、貯蔵穴であろう。住居の中央には土坑24があり、炭は検出していないが位置からみて炉であろう。

II期　平面規模は周溝間で、東西5.4m、南北5.6mである。壁溝は幅10～40cm、深さ10cm前後であるが、北辺、東辺が浅くなっている。主柱穴は位置から見て、4本（7・8・9・10）である。炉は土坑6と考えられる。主柱穴、炉共にIII期と共有する。

III期　平面規模は東西7m・南北7.2mである。主柱穴はII期と共有する。壁高は22cm・周溝は幅10～20cm・深さ5cmである。中央には土坑6がある。貯蔵穴とみられる土坑は4基あり、2対共に切り合い関係を持つ。南辺中央には、II期の周溝を切って土坑4・5があり、東辺には、土坑2・12がある。2対の貯蔵穴とも、新旧関係がある。III期の炉は中央部に位置する楕円形の土坑6である。土坑6の埋土は2層に区分できる。下層から土器片が多数出土した。

住居の埋土は2層である。土器は主に、住居北西上層に集中している。上層からは布留式土器併行の甕、壺、小型丸底壺、高杯が出土した。住居北西より廃棄した可能性が考えられる。周辺の遺構としては、北東に掘立柱建物6、南西に掘立柱建物3・4・5がある。すべての建物は本住居と主軸が同一である。

出土遺物は量的に多い。埋土上層からは、壺、甕、高杯、鉢、石器が出土する。壺は小型丸底壺(2710・2711）である。外面に粘土紐の継ぎ目が目立つ。口縁部が屈曲して立ちあがる壺（2712）は色調が他の土器と違い、赤褐色系である。甕（2714～2718）は、口縁部を「く」の字形に外反させ、体部外面にハケ目調整を行う。内面は板状工具によるケズリ調整（2718）やナデ調整を行う。体部上半内面に粘土紐の痕が残る。2716は指押さえの痕が明瞭に残る。2718は口縁部内面、ハケによるナデ調整をおこなう。高杯（2719～2733）はスカート状に開く脚柱部に屈曲して伸びる杯部をもつ。脚柱部裾部は屈曲するもの（2719・2720・2722～2726・2731～2733）としないもの（2721）に区分できる。2720・2722・2724・2725・2729は、体部と口縁部の境界が明瞭で段をもつ。脚柱部外面に縦方向のミガキ調整があり、内面には横方向のケズリ調整がある。裾部に穿たれた孔は1cmと小さい。2734は直立する口縁部であるが、器壁が厚い。鉢と考えられる。石器は、金山産サヌカイトの石鏃(2744・アルカ173)、同じく石鏃の未製品（アルカ174)、神津島産黒曜石の両極石器（アルカ175)、二上山産の折取加工剥片（アルカ176)、石錘（2746)、砂岩の砥石（2756)、台石（2758)、敲石（2753）がある。石錘は小型で、80.57gである。砥石は断面六角形を呈し、半分欠損する。研磨の痕は、長辺部以外六角形全てに見られる。台石は断面四角形である。敲石は断面が楕円形で、四囲には敲き痕跡が残る。土坑2からは、高杯杯部(2735)、甕破片、壺が出土する。杯部は口縁部と体部の境界が明瞭である。体部にはハケ目調整が残る。壺は外面にハケ目が残る。土坑4からは器種不明な小破片が出土する。土坑5からは、甕、高杯が出土する。甕は小型（2737）で、口縁部を「く」の字形に屈曲させる。体部外面には横方向のタタキ調整がある。高杯（2738）は屈曲する杯部になだらかにひらく裾部をもつ。埋土の高杯脚柱部と違い、脚柱部と裾部の開きが少ない。土坑6からは、小型の中実脚柱部をもつ高杯(2736)が出土する。裾部に小さい孔を穿つ。床面直上からは高杯脚柱部（2739）が出土する。スカート状に

開く形態である。土坑12からは、甕、壺、石器が出土する。石器は砂岩の敲石（2754）である。四囲に使用痕跡が残る。長辺部は平坦になるほど使用されている。土坑25からは器種不明の小破片が出土する。周溝1・3・13・15からは土師器の小破片が出土する。土坑40からは砂岩の敲石（2749）が出土する。小型で半分欠損する。四囲に使用痕が残る。

竪穴住居800（第190・195・196図、アルカ第16図、PL.47・141・151）

竪穴住居300と竪穴住居550の中間で検出した隅丸方形を呈する小型住居である。東西3.2m、南北3mである。壁溝は５cm前後である。埋土は１層である。

出土遺物は少なく、埋土第１層より、高杯脚柱部（2740・2741）、石器が出土した。2741は脚柱部がスカート状に開く。石器は、砂岩製で磨石と敲石を併用する（2748）ものとサヌカイトの石鏃（2745）、二上山産の凹基型の石鏃（アルカ177）、両極石器（アルカ178）、削器（アルカ179）がある。敲石と磨石を併用する2748は、両面中央部が窪み、外周には敲きの使用痕が全周している。片面のみに使用痕が残る。

竪穴住居900（第190・195図、PL.47）

調査区中央のやや南寄りに位置する小型の隅丸方形住居である。規模は南北３m、東西3.8m、深さ２～８cmを測る。床面はほぼ平坦である。中央北よりで、浅い窪み状の土坑と柱穴８本を検出した。主柱穴や炉は不明である。埋土は２層である。

出土遺物は中央床面から土師器細片が出土している。住居埋土上層からは、高杯脚柱部（2742）が出土する。2742は脚柱部内面に粘土紐の痕跡を残す。

②掘立柱建物（表13）

６棟の掘立柱建物を検出した。竪穴住居に伴うと考えられる。この他、柱穴は、調査区内で数多く検出しているが、建物を想定するには至らなかった。

掘立柱建物１（第191図、PL.47）

調査区中央北よりに位置し、弥生時代前期竪穴住居100を切る。２間×２間の掘立柱建物である。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径29～42cm・深さは20～40cmである。方位としては竪穴住居300と同じである。柱穴116・117・249・253・1022より、土師器小破片が出土する。

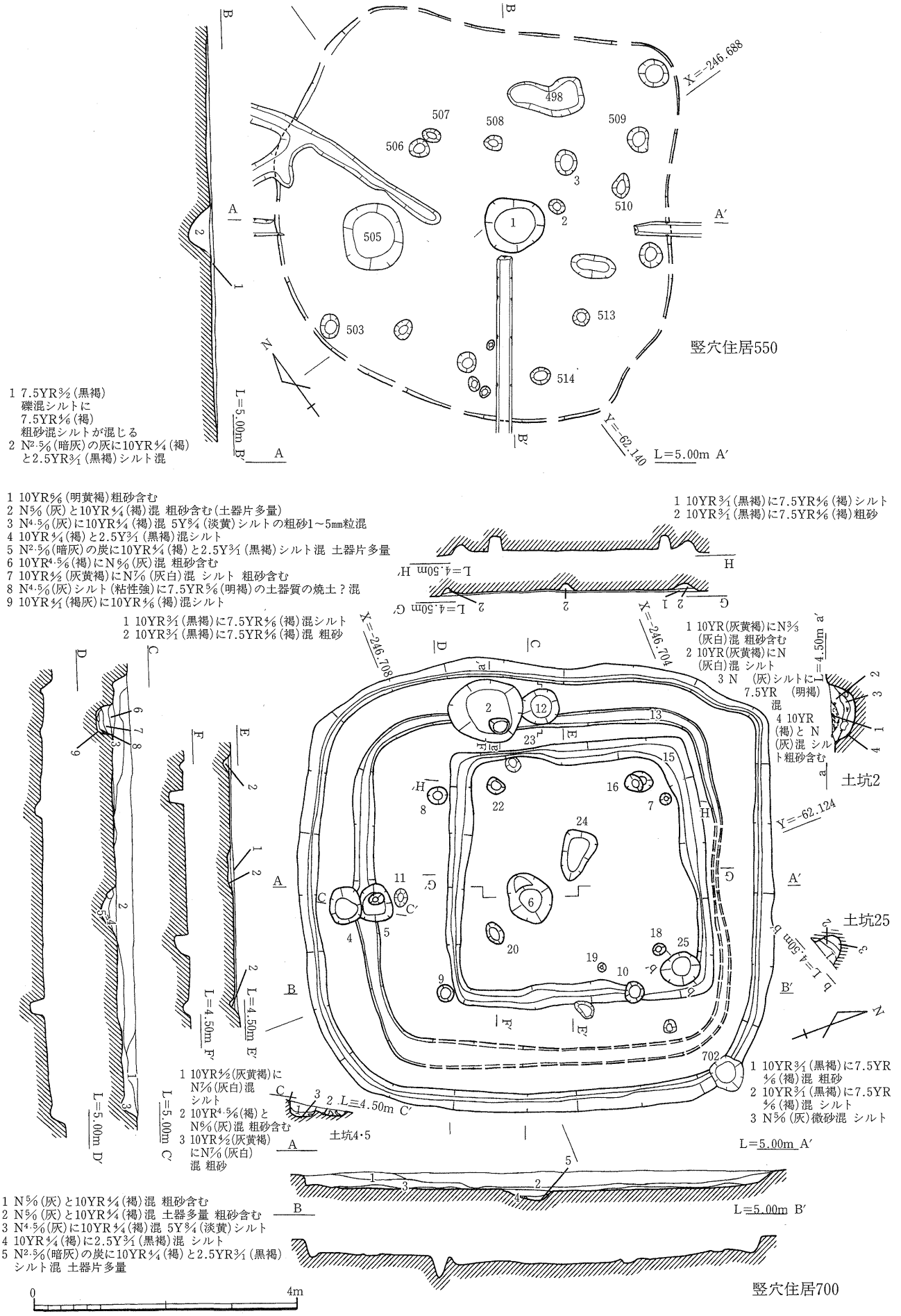
掘立柱建物２（第191図）

調査区中央西よりに位置する。竪穴住居500・600に隣接し、方位を同じくする。１間×３間以上の掘立柱建物である。竪穴住居500・600の方向にほぼ直行する。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径24～32cm、深さ18～34cmである。柱穴410・411・413から土師器小破片が出土している。

掘立柱建物３（第191図、PL.47）

掘立柱建物３・４・５は竪穴住居700の西隣に位置し、方位を同じくする。２間×３間の建物である。柱穴は径20～28cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは７～30cmとばらつきがみられる。柱穴644・647から土師器小破片が出土する。

掘立柱建物４（第191図、PL.47）



第189図　V区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 竪穴住居550・700平面図・土層図

掘立柱建物５と重複する１間×２間の建物である。柱穴の切り合い関係は認められない。柱穴は円形を呈し、径21～26cm、深さは26～31cmである。柱穴から遺物は出土しない。

掘立柱建物５（第191図、PL.47）

掘立柱建物４と重複する２間×２間の建物である。柱穴は円形を呈し、径24～30cm・深さは14～32cmである。柱穴682から土師器小破片が出土する。

掘立柱建物６（第191図、PL.47）

調査区中央に位置する２間×３間の掘立柱建物である。柱穴は円形または楕円形を呈し、径18～28cm、深さ14～25cmである。柱穴732・737から土師器小破片が出土する。

掘立柱建物	規模			柱穴				主軸方位	備考
	間×間 面積(㎡)(小数点第２以下切捨)	東西(cm)	南北(cm)	掘方(cm)		柱当たり(cm)			
				直径	深さ	直径	深さ		
建物1	２間×２間 8.80	梁行　254	桁行　350	29～42	20～40	12～18	18～36	N- 1°-W	東向き
建物2	１間×３間以上 14.10	梁行　340	桁行　415	24～32	18～34	16～22	18～28	N-45°-E	南向き
建物3	２間×３間 12.20	梁行　343	桁行　357	20～28	7～30	12～14	7～28	N-19°-E	東向き
建物4	１間×２間 8.60	梁行　270	桁行　321	21～26	26～31	11～14	24～30	N-19°-E	東向き
建物5	２間×２間 12.10	梁行　343	桁行　355	24～30	14～32	12～16	10～30	N-20°-E	東向き
建物6	２間×３間 19.20	梁行　340	桁行　565	18～28	14～25	8～12	14～24	N-15°-E	東向き

第13表　Ⅴ区 12-④区 第５層上面検出掘立柱建物一覧

③土坑

数多くの土坑を検出した。出土遺物は少なく、縄文土器が混入している。

土坑57（第192図）

調査区の北端部、竪穴住居100の北側で検出した不整形な土坑である。深さは10cm弱である。埋土はシルト層である。遺物は土師器小破片である。

土坑143（第192図）

竪穴住居100の南東に位置する土坑である。楕円形を呈し、規模は１m×1.2mである。深さは12cmである。出土遺物は土師器細片である。

土坑196（第192図）

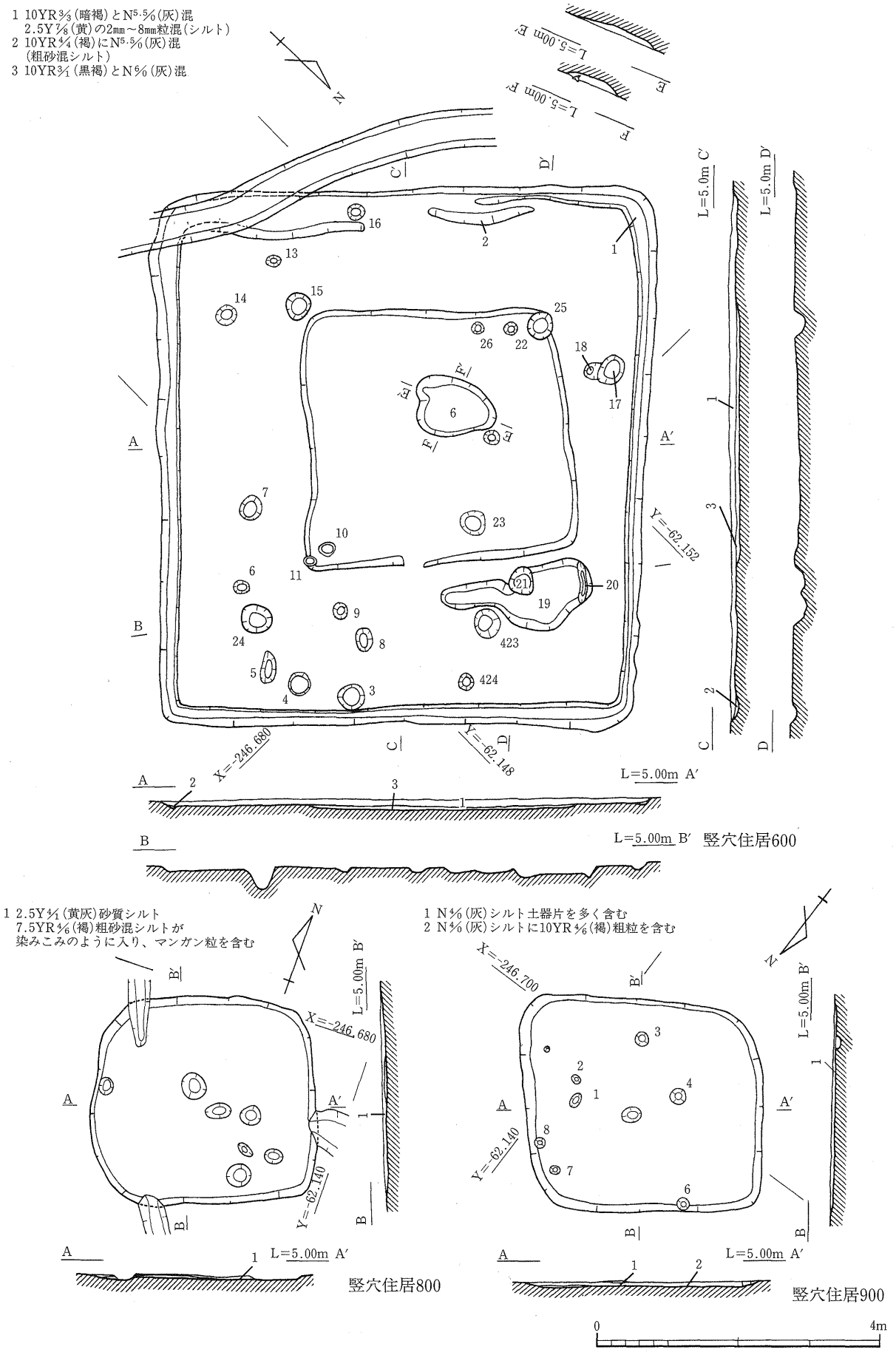
竪穴住居400の西側に位置する1.5m前後、深さ10cmの円形土坑である。埋土はシルト層１層である。土師器細片を含む。

土坑305（第192図）

溝367と溝301に挟まれた地点に位置する。楕円形を呈する土坑である。埋土はシルト層である。土師器細片を含む。

土坑311（第192図）

溝301と溝367に挟まれた場所に位置する。周辺部には土坑305・320などがある。柱穴も数多く存在



第190図　V区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 竪穴住居600・800・900平面図・土層図

する。直径80cm程度の円形を呈する土坑である。埋土は１層である。土師器細片を含む。

土坑320（第192図）

土坑311の周辺部に位置する楕円形の土坑である。砂岩の石が入る。堆積土は３層に区分できる。土師器細片を含む。

土坑324（第192図）

溝301に切られる不整形な土坑である。堆積土は１層である。土師器細片を含む。

土坑456（第192図）

埋土は３層に区分できる。埋土には土師器細片を含む。

土坑496（第192図）

竪穴住居550の北東に位置する30～40cm、深さ40cmの楕円形の土坑である。堆積土はシルト層である。土師器細片を含む。

土坑868（第192図）

溝1000の東に位置する土坑である。楕円形を呈する。埋土は３層である。埋土には土師器細片を含む。

土坑926（第192図）

土坑868の南側に近接する不整形な土坑である。周辺には柱穴が多数存在する。埋土には土師器細片を含む。

土坑1058

溝888の東側、微高地の縁辺部の最東端に位置する不整形な土坑である。５cm程度の浅い窪みであり、自然にできた可能性もある。埋土には土師器細片を含む。

④溝

集落の中を走る溝である。規模には大小がある。微高地の地形に合わせて南東方向から北西方向に流れる溝がほとんどで、数条の溝を検出した。

溝33（第192図）

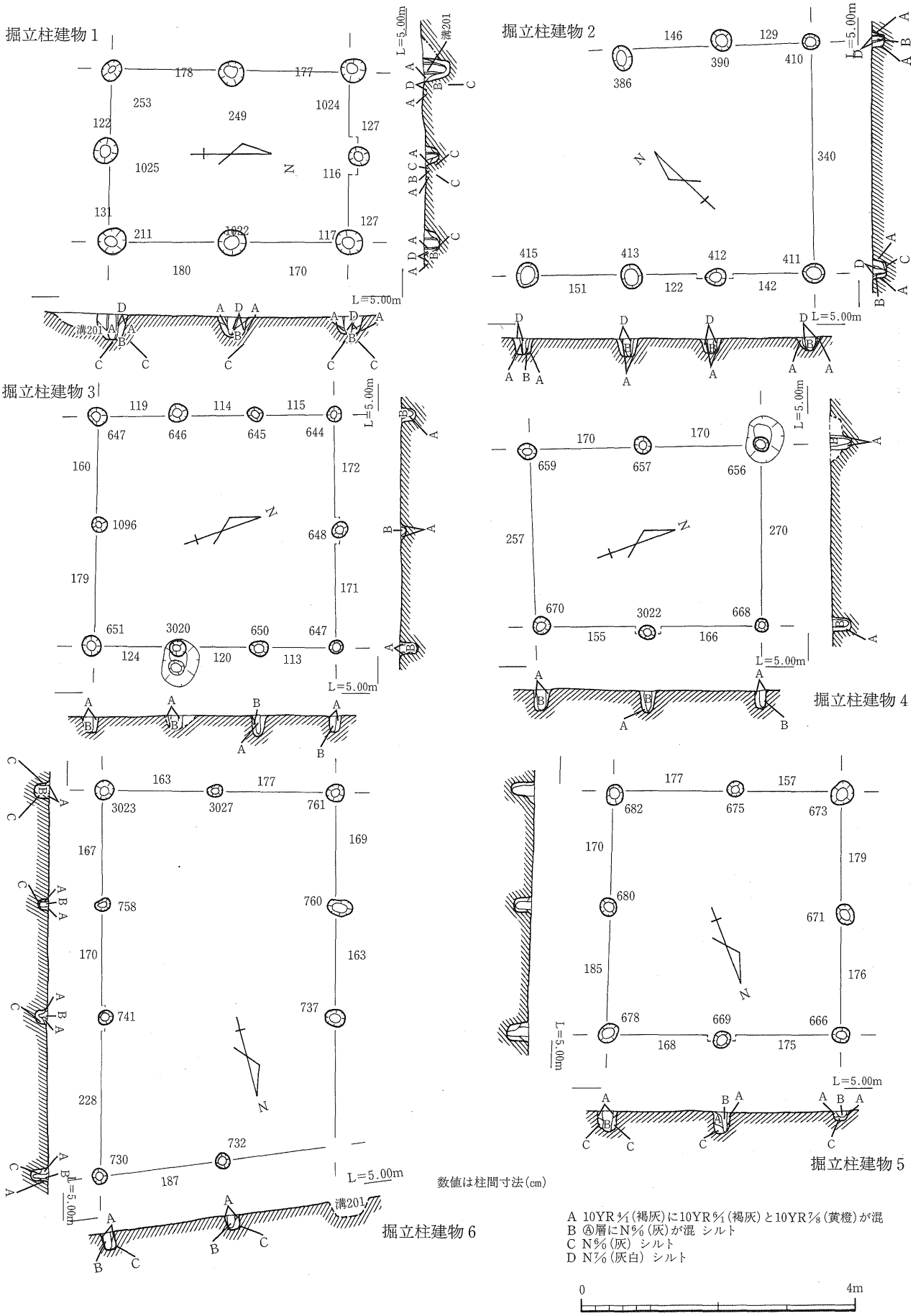
南東から北西方向に掘削され、北西端が調査区域外に延びる。微高地がなだらかに落ちていく縁辺部に位置する。検出全長約８m、幅１m前後、深さ14cmである。堆積土は一層でシルト層ある。出土遺物は土師器細片が出土する。

溝201・491（第192・197図）

溝201は、調査区内を延々と横切る形で南東から北西方向に走る溝である。北西端は調査区域外に延び、南東端は溝1000に流れ込む。枝分かれして溝491が流れる。溝801に切られる。検出全長約67m、幅40cm前後、深さ20cm前後である。断面Ｕ字形を呈する。遺物は土師器の壺底部破片が出土する（2776・2777）。溝491は溝201と幅・深さとも同規模である。遺物は出土しない。

溝217

東西に走る溝で、竪穴住居400・溝201を切る。検出全長９m、幅40～60cm、深さ10cmを測る。遺物は



第191図　V区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 掘立柱建物1～6 平面図・土層図

出土しない。

溝301（第192図）

南東から北西にかけて掘削された溝である。調査区外で位置から想定して溝201と重複する。南端は竪穴住居800・550を切っている。検出全長30m、幅40cm前後、深さ15cm前後である。埋土は１層である。遺物は少量の土師器細片が出土した。

溝367（第192図）

微高地の高い部分を北西から南東にかけて掘削された溝である。溝201に平行する。検出全長13m、幅70cm前後、深さ10cm前後を測る。南東端は竪穴住居600に接する。埋土は１層である。出土土器は微量の土師器が出土する。

溝403・445（第192図）

調査区の西端部を南北方向に掘削された溝で、竪穴住居500に接する。断面Ｕ字形を呈する。埋土は１層である。出土遺物は土師器細片がある。

溝748（第185図）

溝801に平行する。規模も同じである。出土遺物は土師器細片がある。

溝801（第185図）

北から南にかけて掘削された溝で、北側が低くなる。検出全長約13m、幅30cm、深さ10cmである。途中途切れるところもある。南端は溝1000に接する。出土遺物は土師器細片がある。

溝888（第192図）

調査区東端に位置する。微高地の縁辺部に沿って北から南に向かって弧を描いた形で掘削された溝である。全長15m、幅1.2～2.5m、深さ20cmを測る。埋土は１層である。出土遺物は土師器細片がある。

溝1000（第192・197図、アルカ第17図、PL.142・151）

調査区の中央東寄りに位置し、微高地の縁辺部を北東から南西にかけて直線的に掘削された溝である。全長約27m、幅1.5～2.7m、深さ20cmを測る。溝の北東端は溝888によって切られており、南西端は調査区域外に延びる。堆積土は２層あり、上層には土師器片を大量に含んでいる。位置から考えて、区画と排水のための溝であろう。

出土遺物は量的に多い。上層、下層の区分があるが、遺物に時期差は見られない。竪穴住居と同時期である。全体に土器は摩滅する。壺・甕・高杯がある。壺は広口壺がある。口縁端部は無文（2760～2762・2764）と擬凹線を施したあとに二つ一組の円形浮文を巡らす（2763）。2775は二重口縁の壺頸部と考えられる。2765は壺の底部である。甕（2766）は、黒色化しており摩滅が激しい。外面にタタキを残す底部（2767）は、指押さえが明確である。2768～2774は高杯である。高杯杯部は、屈曲して伸びるもの（2768・2769・2773）と椀状に伸びるもの（2774）がある。このうち2773は屈曲部が明瞭で段をもつ。2771・2772は高杯の脚部で、柱状部はスカート状に開く。2772は粘土紐の巻き上げが明瞭に残る。2770はしぼり痕が残る。金山産サヌカイトの凹基鏃（アルカ183）と大形削器（アルカ184）が各１点、磨製石斧（アルカ185）が１点出土している。

溝1026（第185・197図）

溝201とほぼ平行に走る溝である。全長26m、検出幅30～50cm、深さ20cmである。埋土は1層である。竪穴住居800に切られる。遺物は壺底部破片が出土する（2778）。

溝1084（第197図）

調査区東端に位置し、弧を描いた溝である。規模は全長12m、幅0.5～1m、深さ10cmである。埋土は1層である。遺物は、広口壺小破片（2779）、擬凹線を施した体部破片（2780）が出土する。

溝1090（第185・197図）

調査区東端の微高地の縁辺部に位置し、溝1084に平行する。埋土は1層である。出土遺物には奈良時代の須恵器杯身（2781）がある。

他に、溝1850から、青磁皿（2782）が出土する。

（5）V区の包含層出土遺物

この地区の出土遺物は11-④区、13-⑦・⑧・⑪区の水田層と考えられる層から出土した。12-④区から12-⑤区については微高地で、古墳時代～弥生時代、縄文時代の包含層は遺存していたが、中世水田層は削平されており、遺物の出土状況は微量であった。

〔11-④区〕（第198～200図、PL.142・143）

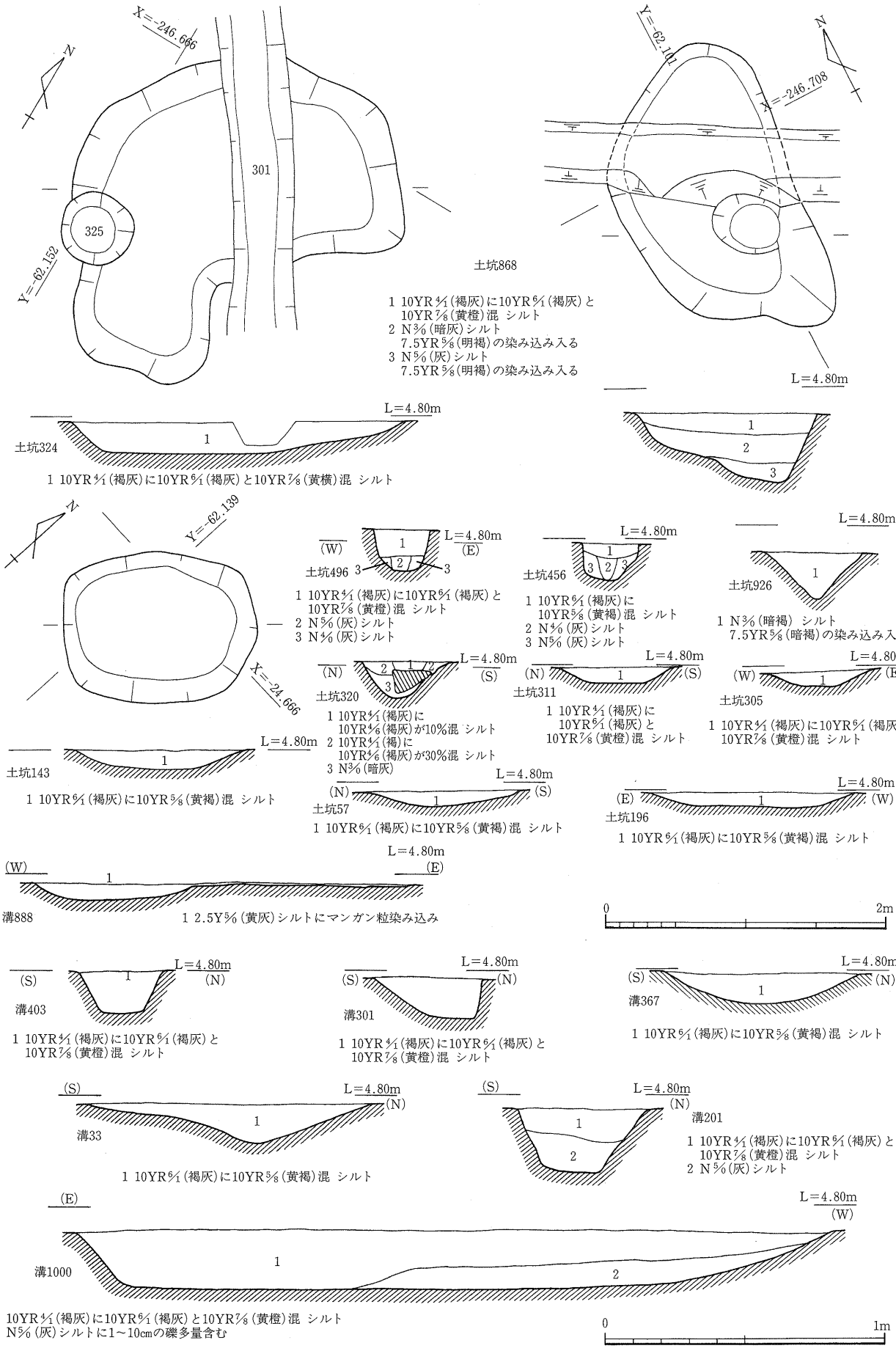
第3層出土の遺物

2796～2805は土師器の皿である。2796・2797はD2タイプである。2798は器壁が薄く硬質である。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部の内外面は重ね焼の痕跡であろうか黒灰色に変色する。2799の色調は褐色で器面は摩耗する。2800～2804はEタイプで、いずれも器面の磨耗が著しい。色調はこの内2800・2801は橙色系、2802・2803は白色系、2804は褐色系を呈する。2805はAタイプである。2806は瓦器皿で、内外の調整は器面磨耗のため不明である。2807～2809は青磁である。2807・2808は青磁碗で口縁端部は玉縁状を呈し外反する。発色は草緑色である。2808は見込みには「金玉満堂」の文字をスタンプする。釉は畳付きまで掛かるが、一部外底まで掛かる。2809は同安窯系の皿である。2810～2814は白磁である。2810・2811は碗で、2810は残存している箇所まで白濁の釉が厚く掛かり、内面は釉垂れしている。2811の体部にはカンナ痕が認められる。2812・2813は皿で、2812は口禿の皿である。釉の発色は淡い緑灰色を帯びる。2813の口縁部は端反る。釉色は白濁色を呈する。2814は青白磁合子の蓋である。2815は中国製天目茶碗の底部である。褐色の釉が掛かる。出土遺物の中で中国製天目茶碗はこれ1点だけである。2816・2817は瀬戸美濃灰釉碗である。2816は平碗で、後期IIの時期である。2817は丸碗で火中している。時期は大窯1期である。2818は灰釉陶器の椀の底部である。火中しているのか、外面にわずかにツケガケによる釉の痕跡が遺こる。時期的には折戸53窯式以降と考えられる。2819は緑釉陶器椀の底部である。高台は削り出し高台で、底部には圏線状の浅い丸みを帯びた抉りが入る。2820・2821は山茶碗で、尾張型5型式である。2822は山茶碗の片口鉢で、産地は不明である。底部は回転糸切の後、断面台形の高台を貼り付ける。2823～2828は土鍋で、すべて口縁部の細片である。2823は播磨系で、体部に斜め方向のタタキを施す。突帯より下方は煤が付着する。

2824の体部は直線的に上方に伸び、口縁端部は平坦である。口縁直下に断面三角形の突帯を付す。これは上下からツマミ、体部に強く押し付けている。内面は横方向のハケ調整を施す。2825・2826は口縁直下に短い鍔が付く。口縁端部は丸みのある平坦面である。双方ともに鍔の下から煤が付着する。2826は口縁部が肥厚し外面口縁直下は横方向のきついナデのため凹む。外面は口縁端部から煤が付着する。胎土には0.2～1.0㎜大の長石が多量に入る。2828は口縁端部が玉縁状に肥厚し、頸部は横方向のナデにより凹む。外面には斜め方向のタタキ、内面は粗いハケを施す。色調は内外面ともに灰色を呈し、瓦質であるのか、二次焼成によるものかは定かでない。2829・2830は土釜である。口縁端部を内側に折り曲げている。2829は体部に煤が付着する。2830の胎土には微細な砂粒を多く含む。2831は瓦器釜である。器面の燻が二次焼成をうけて消滅したものである。2832は土師器鉢である。口縁端部は平らな面で、頸部内面にはシャープな稜が付く。内外面の色調は全く異なり、外面は橙色、内面は明黄褐色を呈する。2833は瓦器擂鉢である。器面の磨耗が著しく、外面のケズリや内面のハケ調整は不明である。2834は浅鉢形の瓦器火鉢であろうか？火鉢にしては径が小さく、瓦器捏鉢の可能性も考えられる。器面の調整は不明で、内面にわずかに燻が遺こる。2835～2838は東播系捏鉢である。口縁部の形状から2835・2836は上方への拡張が認められる時期である。2837・2838は口縁部が上下へ拡張される時期である。2836と2838の外面口縁部直下には重ね焼痕がある。2839～2844は備前焼である。2839～2841は擂鉢である。2839･2840は口縁端部が内外に突出している。中世3期ａの時期であろう。2841は口縁端部が上方に拡張され口縁帯の中央部がやや屈曲する。時期は中世4期ａ～ｂである。2842･2843は甕である。双方ともに口縁端部は外側に丸く折り返す。時期は中世4期ｂであろう。2843の口縁内面から外面全体に自然釉が掛かる。2844は壺で、甕と同様に口縁端部を外に折り返す。2845は常滑焼の甕である。「N」字状の口縁で、縁帯が垂下し頸部に密着している。時期は14世紀末であろうか。2846～2850は土錘である。この内2846～2848は管状土錘で、2849･2850は有溝土錘である。2851は鉄釘の頭部である。2852～2855は須恵器で、2852は直口壺の口頸部である。外面に断面三角形の二条の凸線の下方に波状文を施す。この下は欠損しているが上部と同様の凸線で画していたと思われる。外面口縁端部から内面にかけて自然釉がかかる。2853は杯蓋である。2854は杯身で「ハ」の字に開く高台を底部端に付ける。2855は甕である。口縁端部は若干内側に折り曲げ、肥厚させて丸く納めている。外面は平行タタキの後、櫛状のもので回転ナデ調整を施し、内面には円弧状のタタキを施す。他に第200図に示した遺物番号2887の敲石が出土した。

第4層出土の遺物

2856は山茶碗の片口鉢である。口縁部はやや外反気味で端部を丸く納める。胎土には細かい長石が多量に入る。2857は黒色土器Ｂ類椀の底部である。遺存状況が悪いため器面の燻とヘラミガキは殆ど消滅している。高台は「ハ」の字にひらくように付されている。2858は東播系の捏鉢である。口縁端部は内側に折り曲げられ、拡張は上下に認められる。2859は土師器の小型甕である。口縁端部はやや内外に肥厚する。2860は弥生土器、甕の口頸部である。2861～2865は須恵器で、2861・2862は杯蓋である。双方ともに天井部と口縁部を画する稜は形骸化し、口縁端部内面には段を有する。2863～2865



**第192図　V区 12-④区 第5層上面 古墳時代前期 土坑143・324・868平面図・土層図、土坑57・196・305・311・320・456・496・926土層図
溝33・201・301・367・403・888・1000土層図**

は杯身である。2863はやや内傾気味に立ち上がり、受部には浅い沈線が認められる。2864の底の作りは稚拙で粘土板を付け足している。2865の口縁は逆「ハ」の字に立ち上がる。これらの須恵器に時期は2861～2863は陶邑編年のII-2段階、2864･2865は同じくIII-３段階であると考えられる。他に遺物番号2879・2880・2888の石器が出土している。これらについては第200図に示している。

〔13-⑦・⑧区〕（第197・199図、PL.143）

第３層出土の遺物

2866は瓦器椀である。器壁は肉厚で、口縁端部を丸く納める。内面のミガキは粗く太い。和泉型と思われる。2867の瓦器皿も肉厚である。ミガキ、暗文ともに磨耗のため不明である。2868は管状土錘である。2869は鎬蓮弁文青磁碗で、内外面に粗い貫入が入る。2870は青磁碗の底部で、高台内面まで釉がかかる。2871は割り高台の白磁皿である。釉の色調は青味のある乳白色で体部中程まで施釉する。高台は四箇所に抉りを入れる。

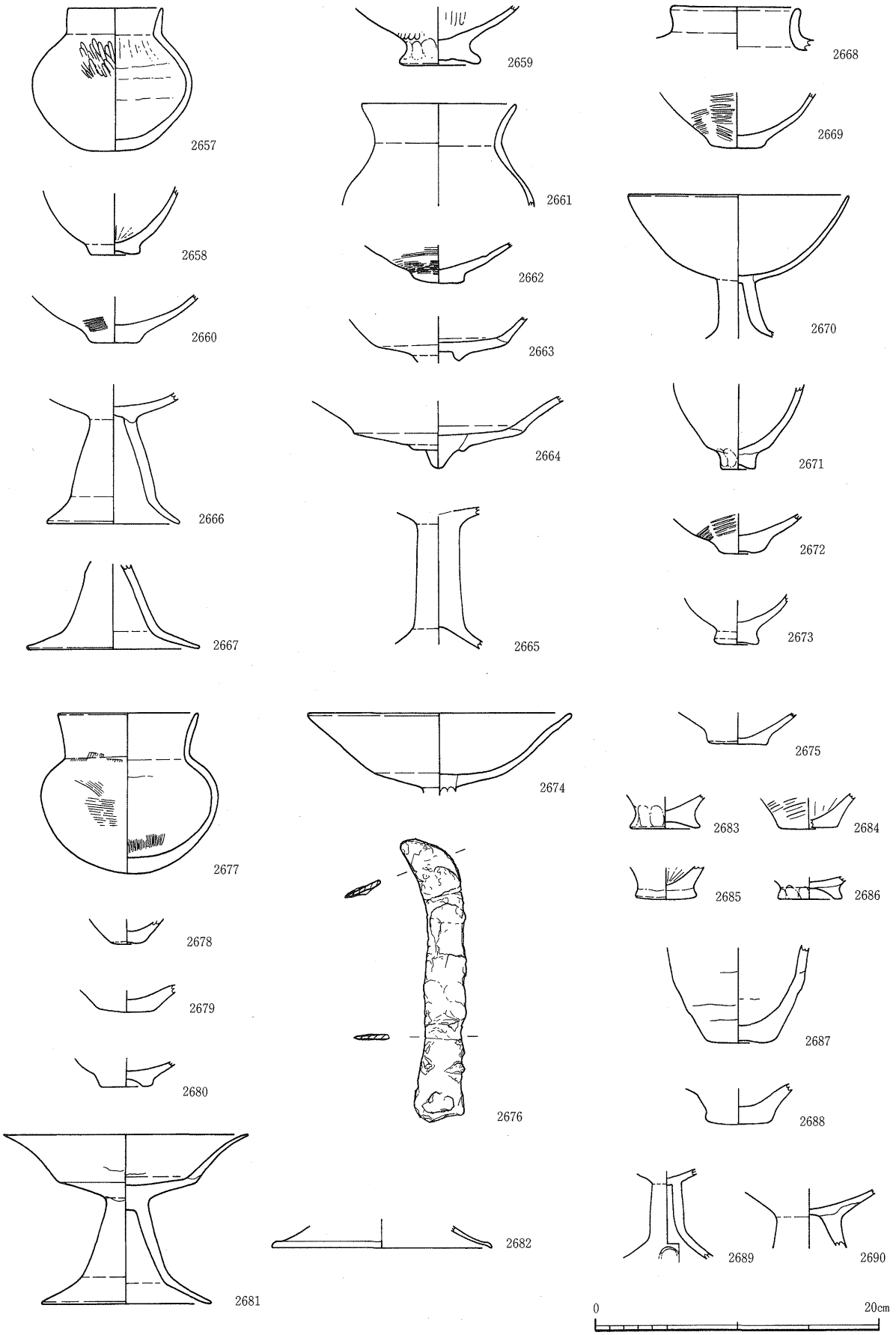
〔12-⑤区〕（第197・199図、PL.143）

第３層出土の遺物

2872は土師器の皿である。タイプとしてはどれにも当てはまらない。器面の遺存状態は劣悪である。底部は乱雑な押さえで、体部の立ち上がりは指で摘み上げた後に撫でている。色調は淡肌色を呈する。2873は山茶椀小皿である。南部系６型式である。2874も南部系の山茶椀で、2873と同様の時期である。畳付きには籾殻圧痕が付く。2875は白磁碗である。口縁端部は斜め上方に若干折れ曲がる。

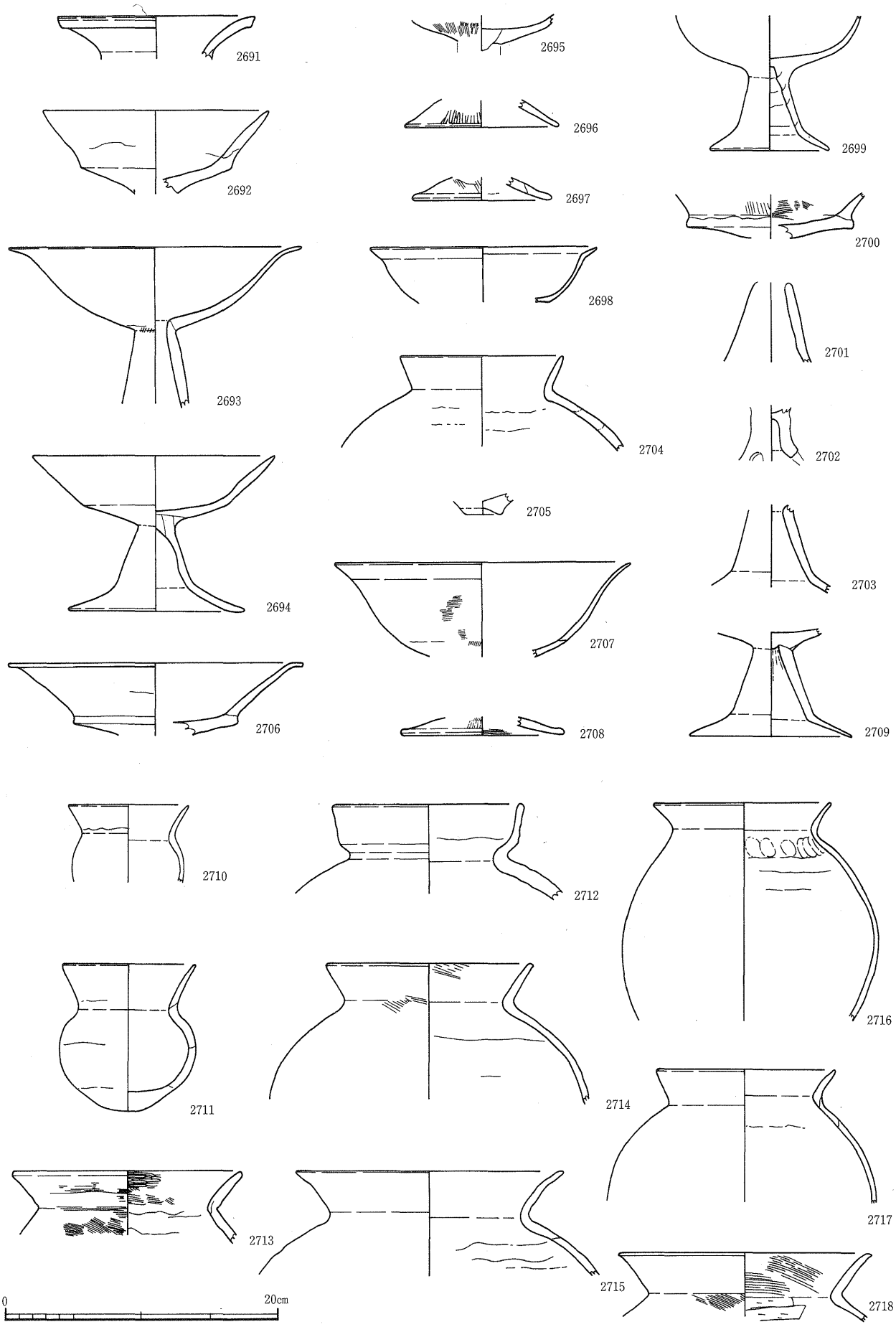
〔13-⑪区〕（第199図、PL.143）

2876･2877は白磁碗である。第３層からは2876が、第4層からは2877が出土している。2876は玉縁状口縁のIV類、2877は口縁端部が水平に外反するＶ類である。



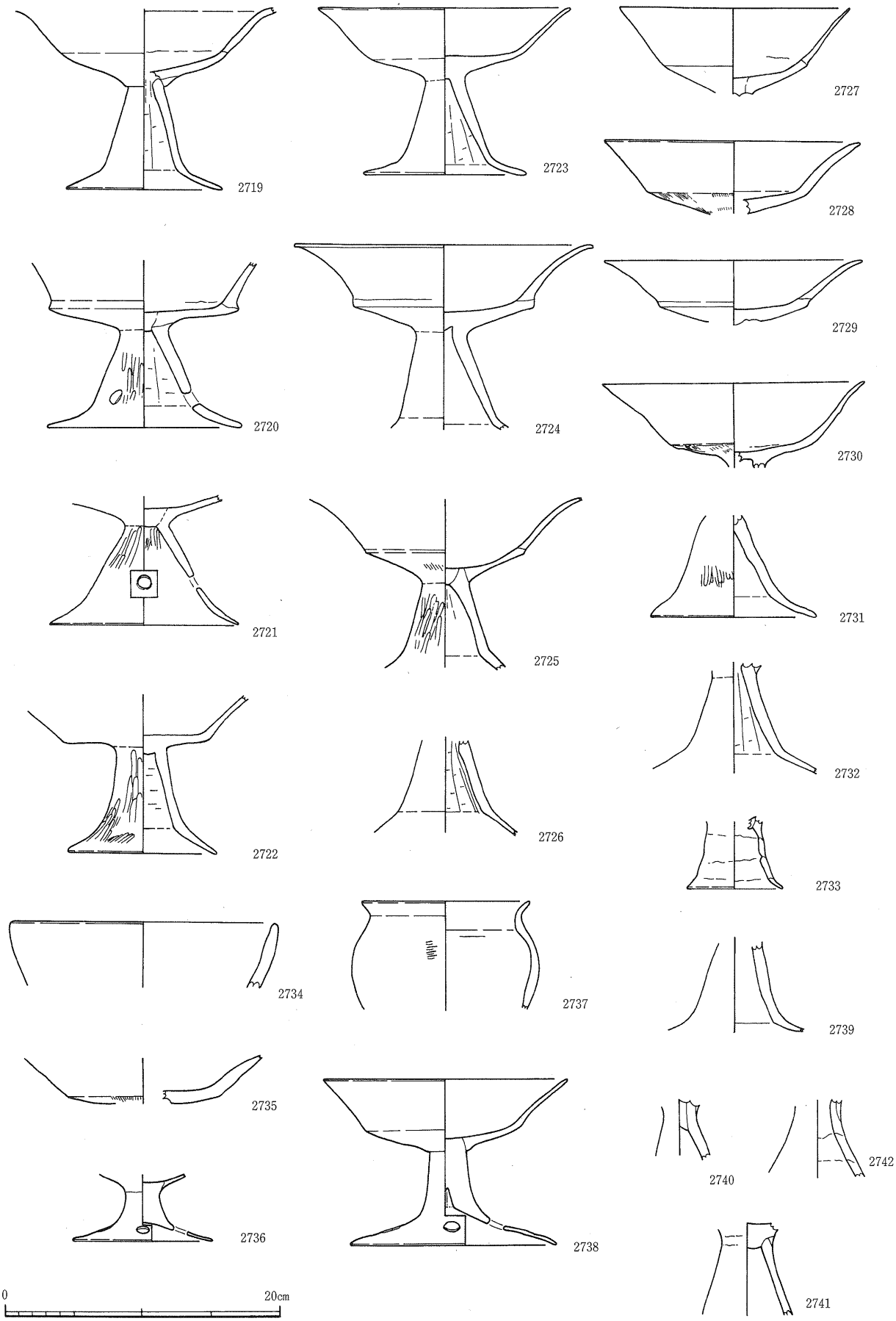
2657～2667：住居300、2668～2671：住居300-炉16、2672：住居300-土坑14、2673：住居300-Pit 3、2674～2676：住居400、2677～2682：住居500、2683～2685：土坑532、2687：土坑634、2688～2690：土坑1178

第193図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



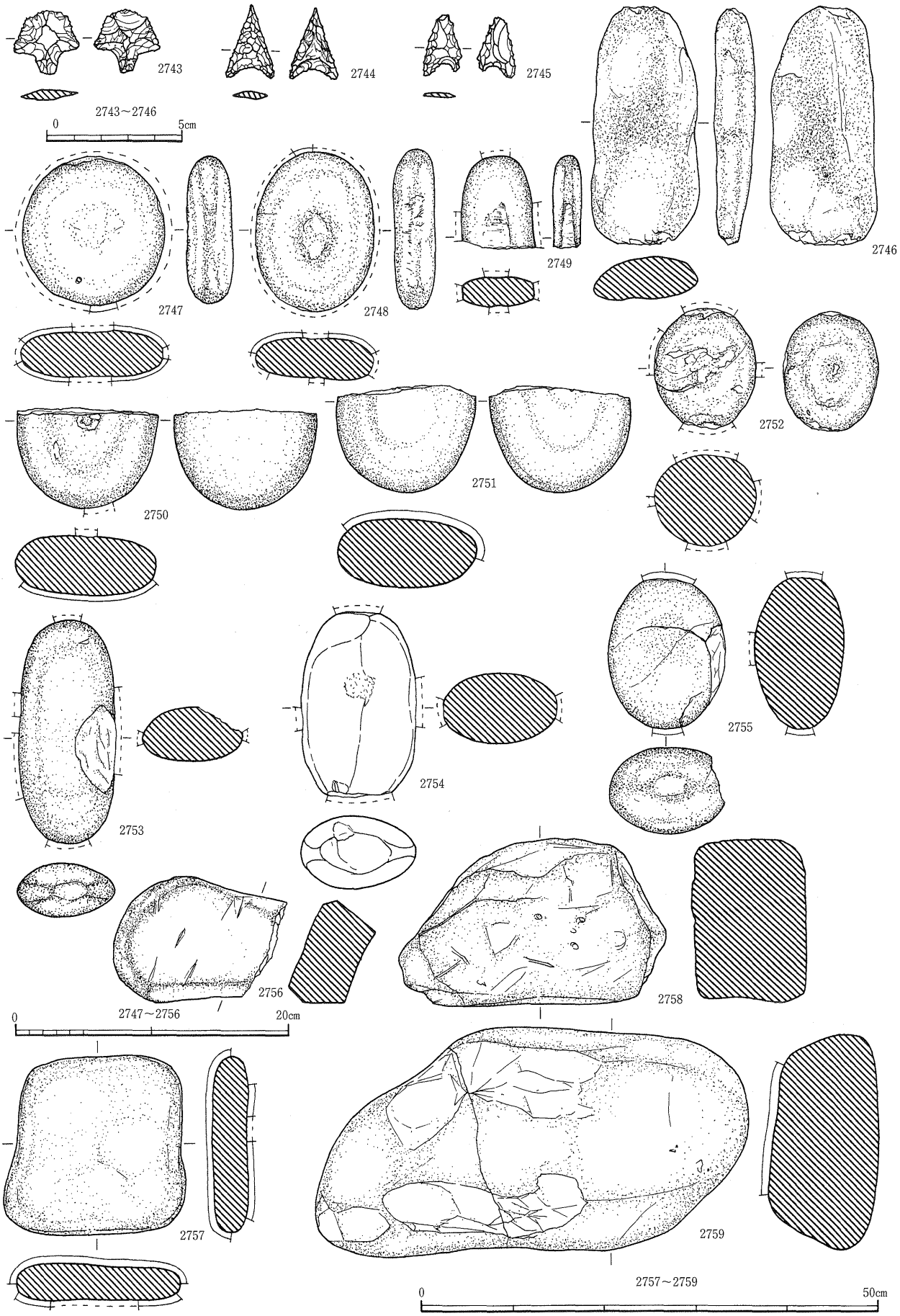
2691～2705・2707・2708：住居600、2706：住居600-溝１、2709：住居600-炉６、2710～2718：住居700

第194図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土遺物実測図



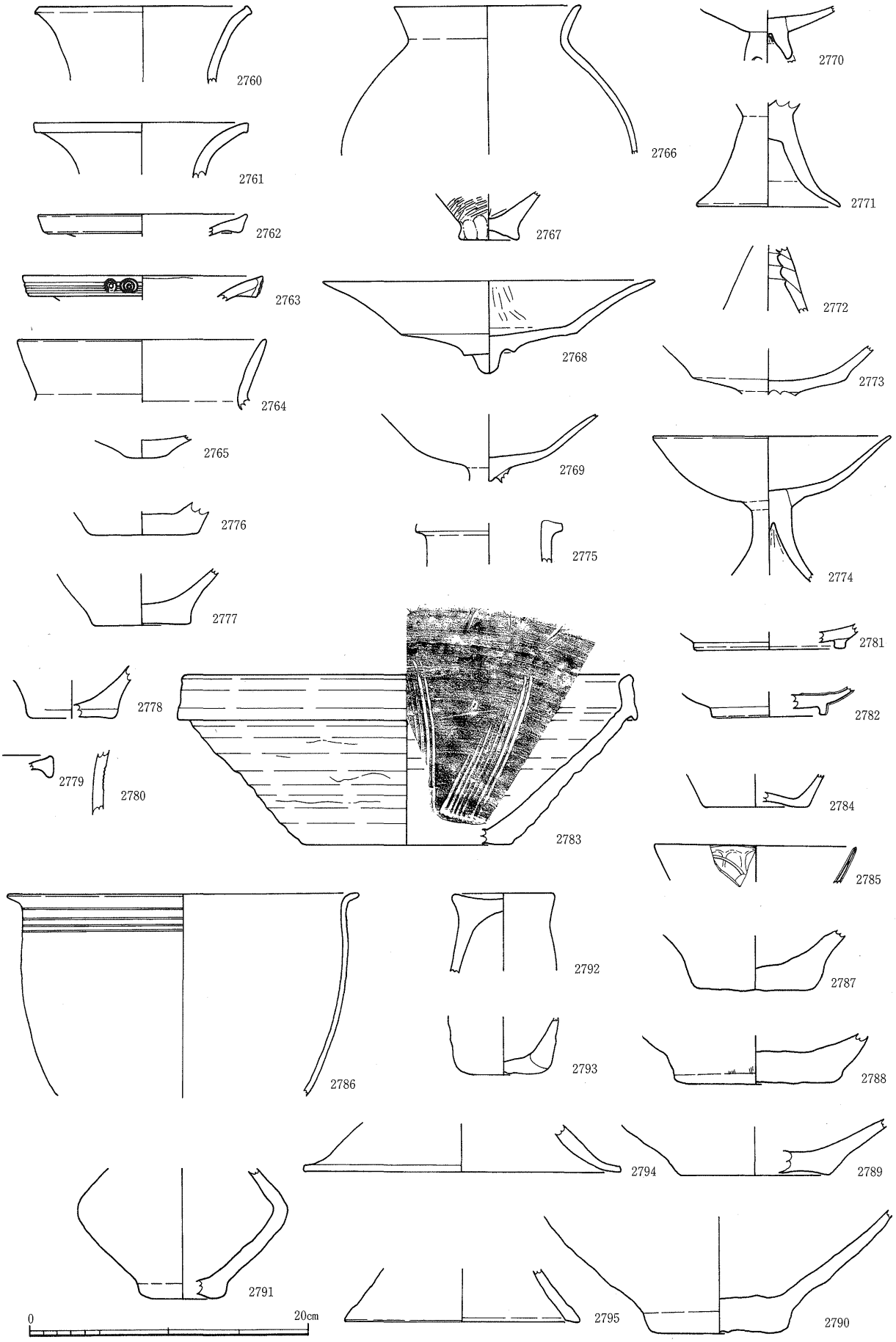
2719～2734：住居700、2735：住居700-土坑2、2736：住居700-炉6、2737・2738：住居700-土坑5、2739：住居700・床面、2740・2741：住居800、2742：住居800

第195図　V区 12-④区 遺構出土遺物実測図



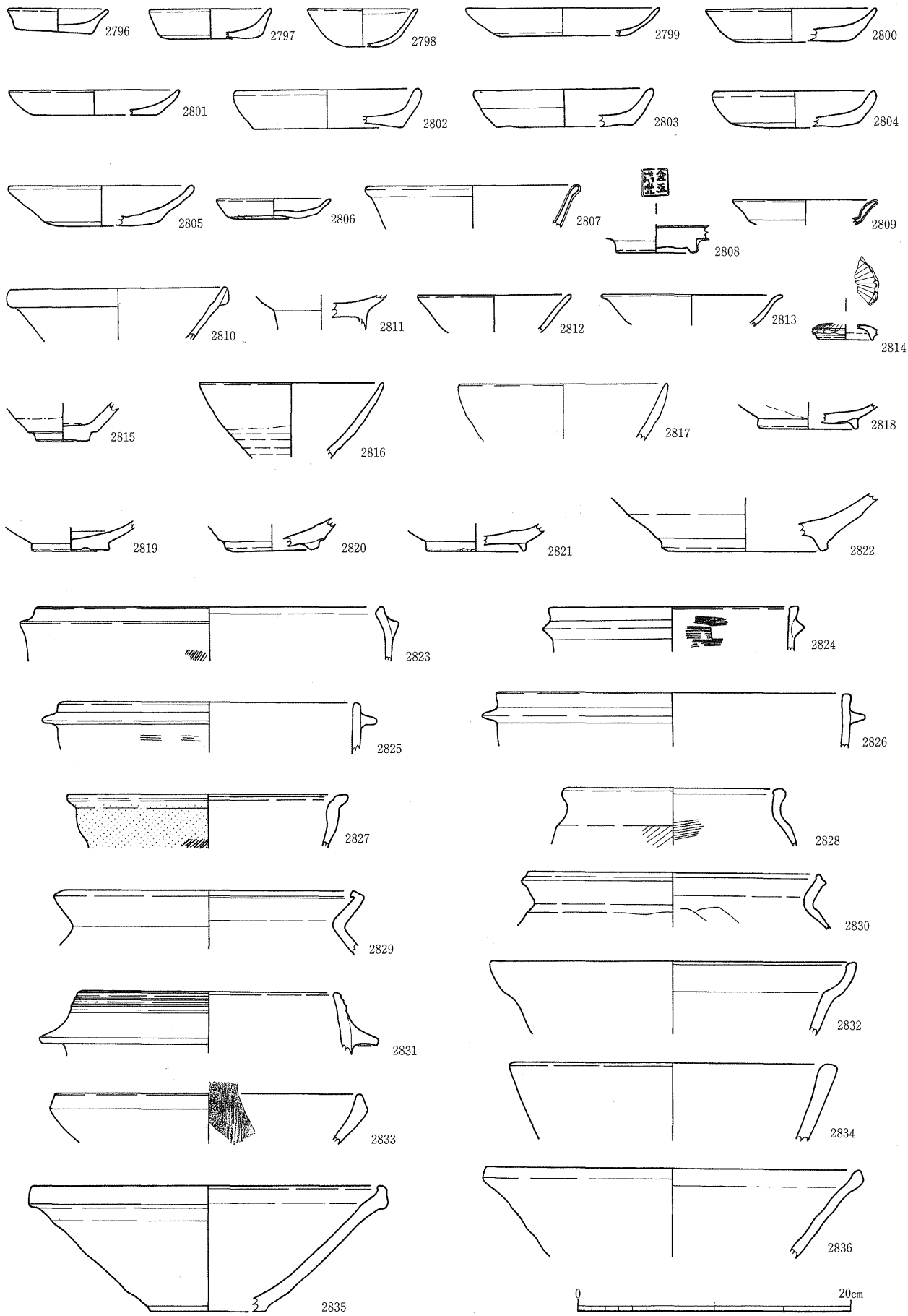
2743：住居200、2750：住居400、2747・2751・2755・2759：住居500、2752・2757：住居600、2744・2746・2749・2753・2754・2756・2758：住居700、2745・2748：住居800

第196図　Ⅴ区 12-④区 遺構出土石器実測図



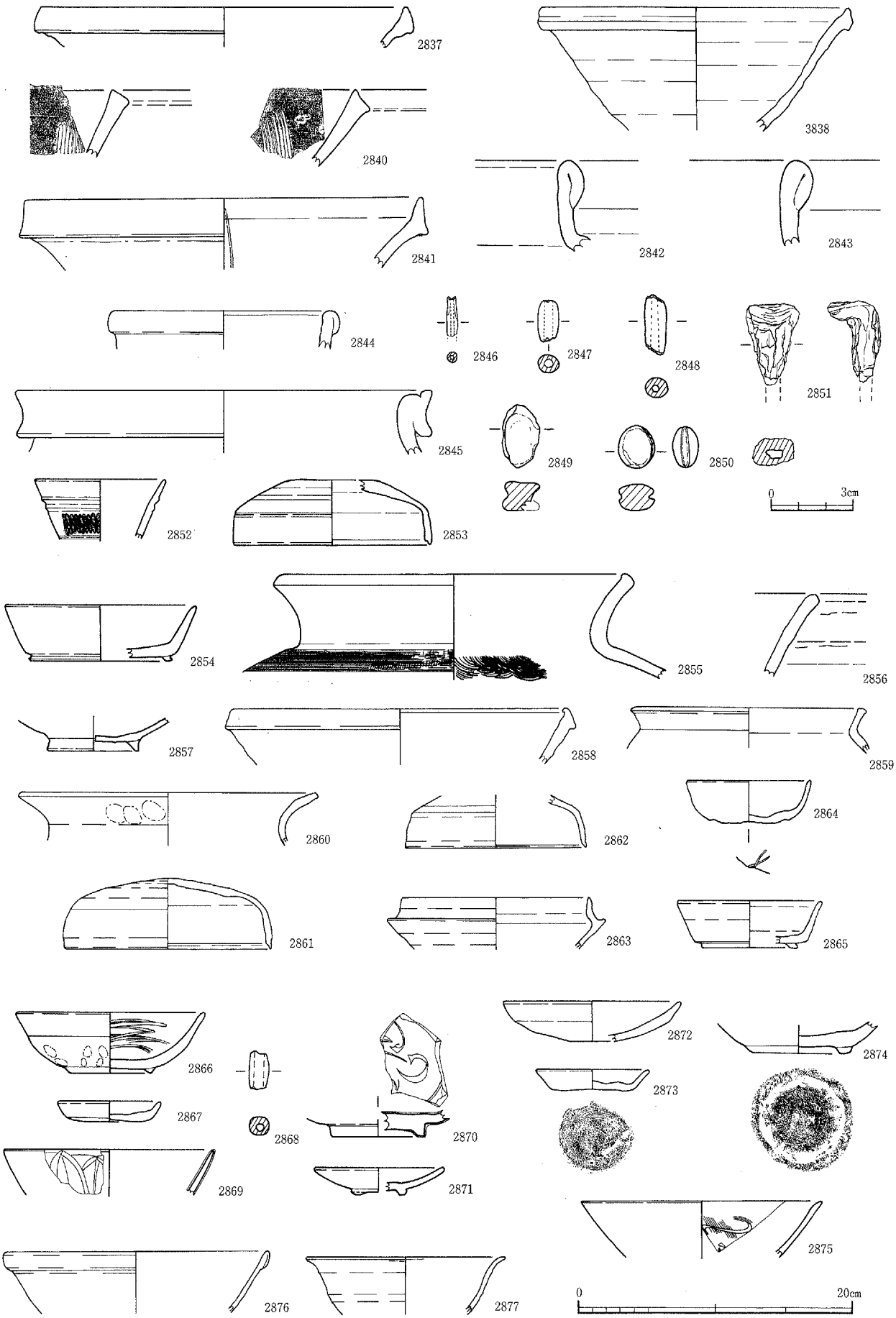
2760～2755：12-④区 溝1000、2776・2777：12-④区 溝201、2778：12-④区 溝1026、2779・2780：12-④区 1084、2783：13-⑦⑧区 堀3、2784：13-⑦⑧区 旧水路、2785：13-⑦⑧区 落ち込み、2786～2794：12-⑤区 土坑1、2795：12-12-⑤区 自然流路

第197図　V区 12-④区・13-⑦・⑧区・12-⑤区 遺構出土遺物実測図



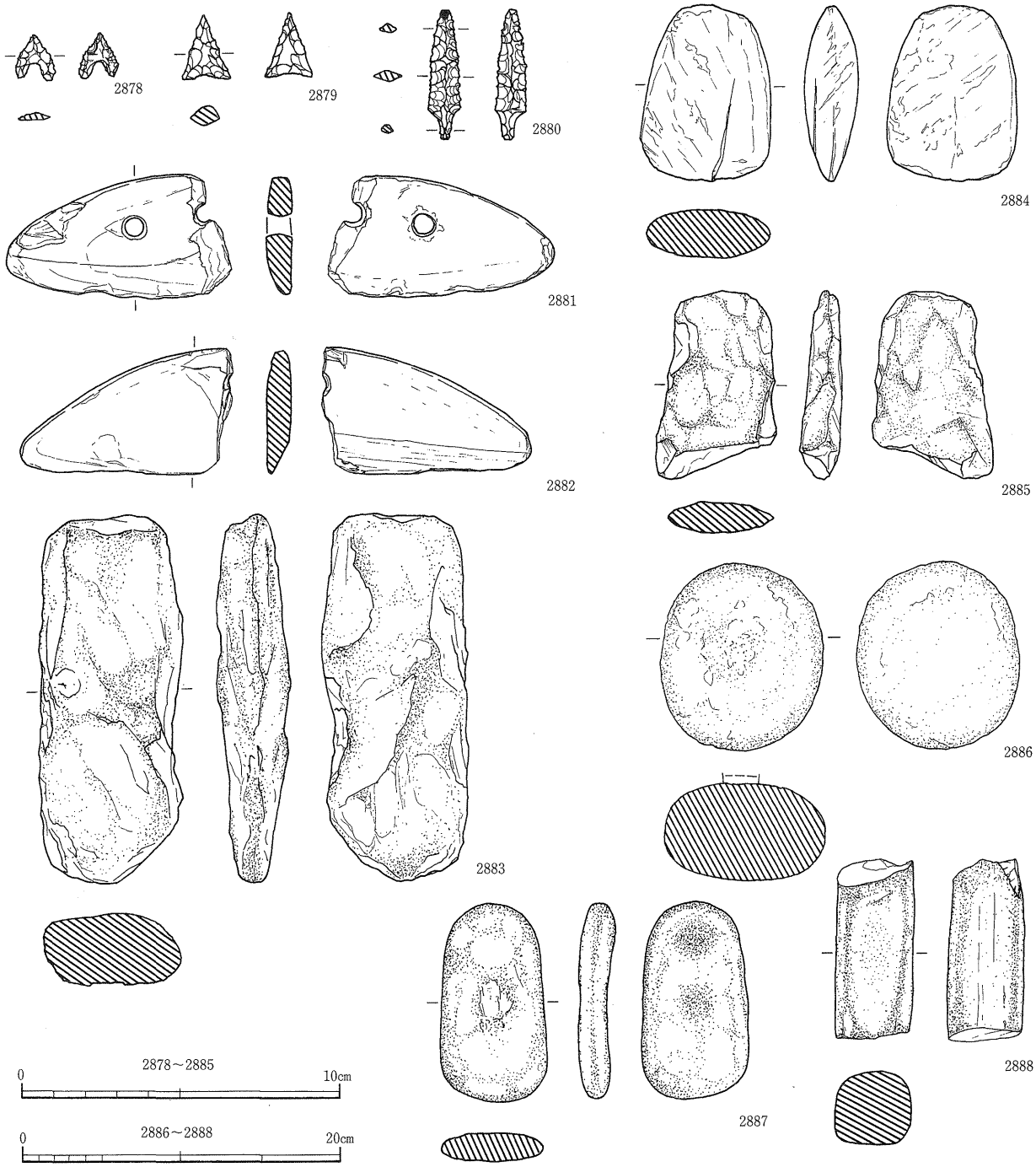
2796～2836：第３層

第198図　Ⅴ区 11-④区 包含層出土遺物実測図



2838～2855：11-④区 第3層、2856～2865：11-④区 第4層、2866：13-⑦⑧区 第4層、2867～2871：13-⑦⑧区 第3層、2872～2875：12-⑤区 第3層、2876：13-⑪区 第3層、2877：13-⑪区 第4層

第199図　V区 11-④区・13-⑦・⑧区・12-⑤区・13-⑪区 包含層出土遺物実測図



2878・2881：12-①区、2882：12-②区、2884～2886：11-①区、2879・2880・2883・2887・2888：11-④区

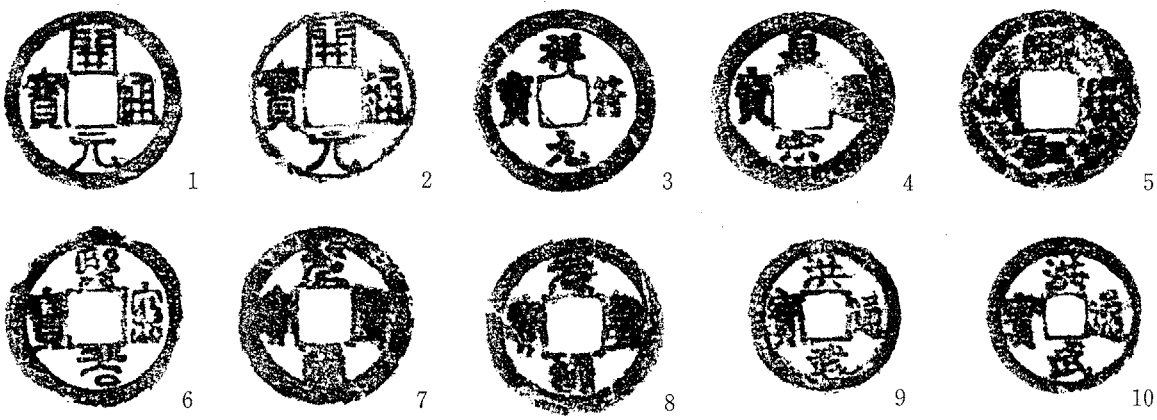
第200図　Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅴ区 包含層出土石器実測図

遺物No.	器種	出土地区	遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
215	石棒	10-2 F 4 a 23	溝-9・第4層	(28.00)	6.50	5.20	1,608.37	泥質片岩	
380	石皿	10-3 F 4 s 15	旧河川第8層	(29.20)	(20.60)	5.80	4,500.00	砂岩	10-5登録番号60と接合可
381	石棒	10-3 F 4 s 15	旧河川第8層	(39.70)	5.00	2.70	1,217.56	酸性凝灰岩	日高川層群・竜神層中に見られる(日高川流域)
382	石棒	10-3 F 4 s 15	旧河川第8層	(19.00)	6.80	3.50	764.02	砂質片岩	点紋結晶片岩・三波川変成帯より以北のもの
383	敲石	10-3 F 4 w 14	旧河川第8層	(9.40)	(7.00)	4.90	371.12	砂岩	
384	磨石・敲石	10-3 F 4 w 14	旧河川第8層	(10.90)	(3.70)	(6.30)	307.72	砂岩	
385	敲石	10-3 F 4 t 15	旧河川第8層	(8.00)	5.80	3.60	240.81	砂岩	
386	台石	10-3 F 4 w 14	旧河川第8層	13.70	12.40	5.30	1,334.13	砂岩	
387	敲石	10-3 F 4 t 15	旧河川第8層	(11.30)	6.30	3.30	303.28	砂岩	
388	磨石・敲石	10-3 F 4 s 15	旧河川第8層	(6.10)	8.50	3.70	260.10	砂岩	
389	磨石	10-3 F 4 v 14	トレンチ②一括	(4.90)	(4.65)	(2.40)	57.55	泥岩ノジュール	
390	打製石斧？	13-3･5 G 4 d 2	溝-21・中層	9.00	5.05	1.50	82.74	泥岩(頁岩)	
391	打製石斧	13-3･5 F 4 r 12	第5層上面精査	11.30	4.80	1.70	95.73	泥岩(頁岩)	
615	石鏃・剝片	11-1 G 4 v 24	落ち込み1層	1.85	1.60	0.40	1.17	サヌカイト	
616	石鏃・剝片	11-1 G 5 f 13	土坑3	4.50	1.40	0.25	2.22	サヌカイト	
617	石鏃	11-1 － －	表採	1.50	1.00	0.30	0.65	サヌカイト	
618	石鏃	11-1 G 4 t 25	落ち込み1層	4.00	1.90	0.50	2.93	サヌカイト	
619	石鏃	11-1 H 5 c 4	溝52	3.00	1.80	0.40	1.50	サヌカイト	
621	敲石	11-1 G 5 g 2	土坑9-一括	12.40	10.30	5.20	1,057.77	砂岩	
622	石棒	11-1 G 5 g 2	土坑9-一括	(13.30)	7.10	4.85	647.19	泥質片岩	三波川変成帯の中の変成岩
623	石棒	11-1 G 5 u 10	土坑54	28.80	5.80	4.10	8,000.00	泥質片岩	
624	石棒	11-1 H 5 f 6	旧河川57	(11.65)	5.20	4.30	406.35	泥質片岩	三波川変成帯の中の変成岩・緑色片岩を挟む
625	敲石・円礫	11-1 G 4 w 24	溝473層	9.70	8.50	6.10	723.33	砂岩	
626	敲石	11-1 G 4 v 24	溝473層	(10.50)	(7.30)	3.40	382.30	砂岩	
627	凹石(台石)	11-1 G 4 w 24	溝472層	27.20	19.80	6.20	5,000.00	砂岩	
698	台石	10-5 I 4 c 19	竪穴住居1	(8.80)	6.25	2.90	200.00	砂岩	
699	石鏃	10-5 I 4 b 19	竪穴住居1　2層	1.70	1.60	0.45	1.23	サヌカイト	
700	磨製石斧	10-5 I 4 b 19	竪穴住居1　1層	(4.20)	3.00	1.20	17.76	泥岩(頁岩)	
701	打製石斧	10-5 H 4 q 24	河川3層	(7.80)	4.30	2.70	108.82	泥岩(頁岩)	断面に平行ラミナ有り
702	敲石	13-1 H 4 r 20	旧河川①底直上	13.50	10.40	5.70	1,162.99	砂岩	
703	敲石	13-1 H 4 r 16	旧河川①中層	(12.30)	(10.80)	4.00	681.06	砂岩	
704	台石(凹石)	13-1 H 4 q 19	旧河川①底直上	7.60	6.80	2.80	197.48	泥岩ノジュール	
705	石錘	13-1 H 4 q 18	旧河川①底直上	8.10	6.80	2.55	194.36	硬質泥岩	
706	敲石	13-1 H 4 s 17	旧河川①底直上	11.00	10.20	4.80	779.00	砂岩	
707	敲石	12-8 H 5 l 4	旧河川3・第6層	13.50	10.10	5.20	1,031.69	砂岩	
708	敲石	12-8 H 5 k 4	旧河川3・第5層	15.10	8.60	5.30	1,038.32	砂岩	
709	台石	12-8 H 4 f 22	旧河川2・第4層	13.60	13.00	5.20	1,342.69	砂岩	
710	台石	12-8 H 4 g 25	旧河川2・第3層と第10層の間	13.70	11.80	4.70	1,128.85	砂岩	
711	台石	13-9 H 5 j 6	旧河川3	13.60	12.40	5.90	1,347.98	砂岩	
2743	石鏃	12-4 G 6 h 18	住居200・い・1層	(2.30)	2.40	0.40	2.26	サヌカイト	
2744	石鏃	12-4 G 7 f 3	住居700・ろ-はアゼ2層	2.65	1.80	0.30	0.98	サヌカイト	
2745	石鏃	12-4 G 6 j 21	住居800・ろ・1層	2.20	1.45	0.20	0.68	サヌカイト	
2746	石錘	12-4 G 7 g 2	住居700・に・2層	8.80	3.95	1.55	80.57	細粒砂岩	日高川上流域に多いタイプ
2747	敲石	12-4 G 6 n 19	住居500石-1	11.00	10.50	3.45	574.96	砂岩	
2748	磨石＋敲石	12-4 G 6 j 21	住居800・は・1層	11.80	8.75	3.10	480.68	砂岩	
2749	敲石	12-4 G 7 g 2	住居700　土坑40	(6.80)	5.50	2.20	130.45	砂岩	
2750	磨石＋敲石	12-4 G6 s 18	住居400・ろ・石-1	(7.45)	10.40	4.30	530.92	砂岩	
2751	磨石	12-4 G6 n 19	住居500石-2	(7.90)	10.30	5.10	600.25	砂岩	
2752	敲石	12-4 G6 n 21	住居600・溝-2	9.00	7.20	6.80	591.12	砂岩	
2753	敲石	12-4 G7 g 3	住居700・ろ-はアゼ3層	16.40	7.20	4.00	717.46	砂岩	
2754	敲石	12-4 G 7 g 2	住居700内土坑-12　3･4層	13.60	8.50	5.30	1,091.57	玄武岩	日高川層群の美山層・竜神層中にも見られる緑色岩類のひとつ
2755	敲石	12-4 G 6 n 19	住居500・い・上層(1･2･3層)	11.10	8.50	6.50	832.03	砂岩	
2756	砥石	12-4 G 7 g 2	住居700　石-43	12.50	9.50	4.30	824.43	砂岩	
2757	台石	12-4 G 6 h 21	住居600・石-3	20.4	20.00	4.20	3,000.00	砂岩	
2758	台石	12-4 G 7 f 2	住居700　石-50	29.80	18.40	12.60	9,000.00	砂岩	
2759	石皿	12-4 G 6 n 19	住居500石-4	47.80	24.20	12.00	20,000.00	砂岩	
2889	磨石＋敲石	12-4 G 6 k 17	住居100石-3	11.70	10.30	4.80	845.08	砂岩	田辺層群砂岩
2890	敲石	12-4 G 7 b 3	溝1000　2層	12.00	9.40	6.30	1,039.95	砂岩	
2891	磨石・敲石	12-4 F 7 v 2	土坑1078	14.20	10.60	5.30	1.14	砂岩	

第14表　徳蔵地区遺跡遺構出土石器一覧

遺物No.	器　種	出土地区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
2878	石鏃	Ⅰ区12-①区	第4層	1.50	1.30	0.25	0.37	サヌカイト	凹基鏃
2879	石鏃	Ⅴ区11-④区	第4層	2.05	1.50	0.60	1.08	サヌカイト	平基鏃
2880	石鏃	Ⅴ区11-④区	第4層	4.10	1.05	0.33	1.65	サヌカイト	凸基鏃
2881	石包丁	Ⅰ区12-①区	第4層	7.10	3.90	0.80	30.67	緑泥片岩	輝緑凝灰石
2882	石包丁	Ⅱ区12-②区	第3層	6.60	4.00	0.80	29.78	緑泥片岩	輝緑凝灰石
2883	打製石斧	Ⅴ区11-④区	第4層	11.70	4.60	2.40	170.50	泥岩(頁岩)	
2884	定角磨製石斧	Ⅲ区11-①区	第3・4層	5.55	4.15	1.60	51.56	蛇紋岩	長峰山系に見られる岩石
2885	打製石斧	Ⅲ区11-①区	第3・4層	6.00	3.80	1.20	33.68	泥岩(頁岩)	
2886	磨石	Ⅲ区11-①区	第4層	11.80	10.20	6.20	1070.00	砂岩	
2887	敲石	Ⅴ区11-④区	第3層	12.60	6.70	1.80	278.61	砂岩	
2888	石棒	Ⅴ区11-④区	第4層	(11.50)	4.85	4.85	502.84	砂岩	田辺層群砂岩・断面は隅丸方形

第15表　徳蔵地区遺跡 包含層出土石器一覧（第200図、PL.143参照）



拓本番号	銭　種	初鋳年代	φ(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区	遺構・層位	備　考
1	開元通寶	唐　武徳４年	24.0	1.0	2.42	11-1南区　5E-22e	堀2・へ・攪乱土	両面に緑青を帯びる　無背文
2	開元通寶	唐　武徳４年	24.0	1.0	2.52	12-1区　6F-4h	2b・c層	歪む　縁に緑青を帯びる　無背文
3	祥符元寶(行)	北宋　祥符元年	24.5	1.0	2.97	10-1区　6E-16l	3層上面	背面磨耗する
4	皇宋通寶(真)	北宋　宝元２年	25.0	1.0	3.00	10-1区　6E-15l	3層上面	背面の縁が磨耗して消滅　表面の銭名もやや磨耗
5	皇宋通寶(真)	北宋　宝元２年	24.5	1.0	3.27	10-2区　4E-18y中・上	3・4層	表面磨耗が著しい　背面緑青が著しい
6	熙寧元寶(篆)	北宋　熙寧元年	25.0	1.0	2.45	13-4区　5H-16c	3層	両面緑青著しい　縁欠損
7	元豊通寶(篆)	北宋　元豊元年	24.0	1.0	2.93	13-7・8区　6F-3v	3層	両面緑青著しく、磨耗も著しい
8	元祐通寶(篆)	北宋　元祐元年	25.0	1.0	2.13	第１次試掘　第21トレンチ	3層	両面緑青著しく　磨耗も著しい
9	洪武通寶	天正～元禄期	20.5	2.0	2.55	12-1区　6F-3x	3層	私鋳銭　径は小さいがしっかりした作りである
10	洪武通寶	天正～元禄期	21.0	1.2	3.72	13-4区　5G-20v	3層	私鋳銭　両面緑青が著しい

第16表　出土銭貨拓影及び一覧

第４章　まとめ

第１節　縄文時代中期～縄文時代後期

（１）縄文時代中期

縄文時代中期前半期は、西日本で一切集落が確認できていない空白期と呼べる時代である。このような中で、当該期の集落を徳蔵地区遺跡で検出したことが、きわめて意義あることであろう。

遺構

竪穴住居

竪穴住居は総数14棟検出した。このほか平面形状が方形であるが住居とするには非常に浅い遺構も１基検出した(土坑2008)。竪穴住居の平面形状には方形や隅丸方形がある。時期は三時期あり、船元Ⅰ～Ⅲ式、船元Ⅲ式、船元Ⅳ式である。遺物が出土しないことから時期の不明なものは１棟である。

船元Ⅰ～Ⅲ式の住居は、調査区の西側において３棟（2650・2651・2661)、中央南で１棟（2007）を検出した。。いずれも長方形を呈するもので、そのうち１棟には柱穴がみられ、中央部には窪みがある。

船元Ⅲ式の住居は、調査区南側の東側に１棟(1900)、中央部に２棟(2244･2245)、西側に１棟(2295)存在する。中央部の住居（2244・2245）からみると、東側と西側の住居は、それぞれほぼ等間隔の位置に存在する。平面形状は隅丸方形と方形である。中央部には窪みがみられ、柱穴も存在する。

船元Ⅳ式の住居は、中央やや東寄りに３棟（2002・2003・2006)、西側に２棟（2486・2678）存在する。平面形状は隅丸の長方形や正方形を呈する。

調査区北側の中央から東にかけては住居は存在しない。この空間は上面の縄文時代後期面では配石遺構があった場所であり、また第６層包含層中に金山産サヌカイト原石が多く分布する地域である。

土坑や柱穴は、竪穴住居の周辺部に多く見られた。

埋甕

埋甕２基を検出した。出土した埋甕は船元Ⅳ式で正位の状態で埋設され、底部穿孔されている。２基の埋甕は、間隔が12mと近い距離に位置する。埋甕は従来西日本では縄文時代中期末の時期に東日本から伝播すると考えられていた。しかし、東日本で埋甕が普及しだす時期のものが西日本で確認されたのは本例が初めてである。瀬戸内文化圏の船元式土器を使用しながら、祭祀形態は東日本の影響をいち早く受けたことを示す事例として、また西日本で最古の例として、この２基の埋甕を考える事ができる。

出土遺物

土器

縄文時代中期初頭の鷹島式が微量あり、中期前葉の船元Ⅰ式の終わり～Ⅱ式、Ⅲ、Ⅳ式が存在する。また微量ながら里木式土器も存在する。

搬入品には、中部高地・東海地方・関東地方のものがある。西関東から中部高地に分布する勝坂式土器の出土量は、西日本全域の当該期の遺跡から見ても特筆すべき量といえる。

船元式土器と搬入品の共伴関係が判明する主な遺構は、各竪穴住居、土坑2648･2760･2480などがある。

石器

縄文時代中期の遺構から出土した石器は、金山産･二上山産のサヌカイト、産地不明のサヌカイト、チャートなどがある。

最も多いのは二上山産サヌカイトである。人頭大の原石を搬入し、竪穴住居及びその周辺で石器製作を行っていた。金山産は、搬入した板状剥片があるが、形態の安定した石器は遺構からは出土していない。このことから大型削器としての使用が考えられる。縄文時代中期、後期包含層と考えられる第５・６層には、凹基鏃、縦形石匙など製品が認められるが、集落で剥片石器製作が行われないのであれば、他の地域で製作され持ち込まれたことになる。また第６層からは集中して金山産サヌカイトが出土する。比較的遺構の少ない空間である。

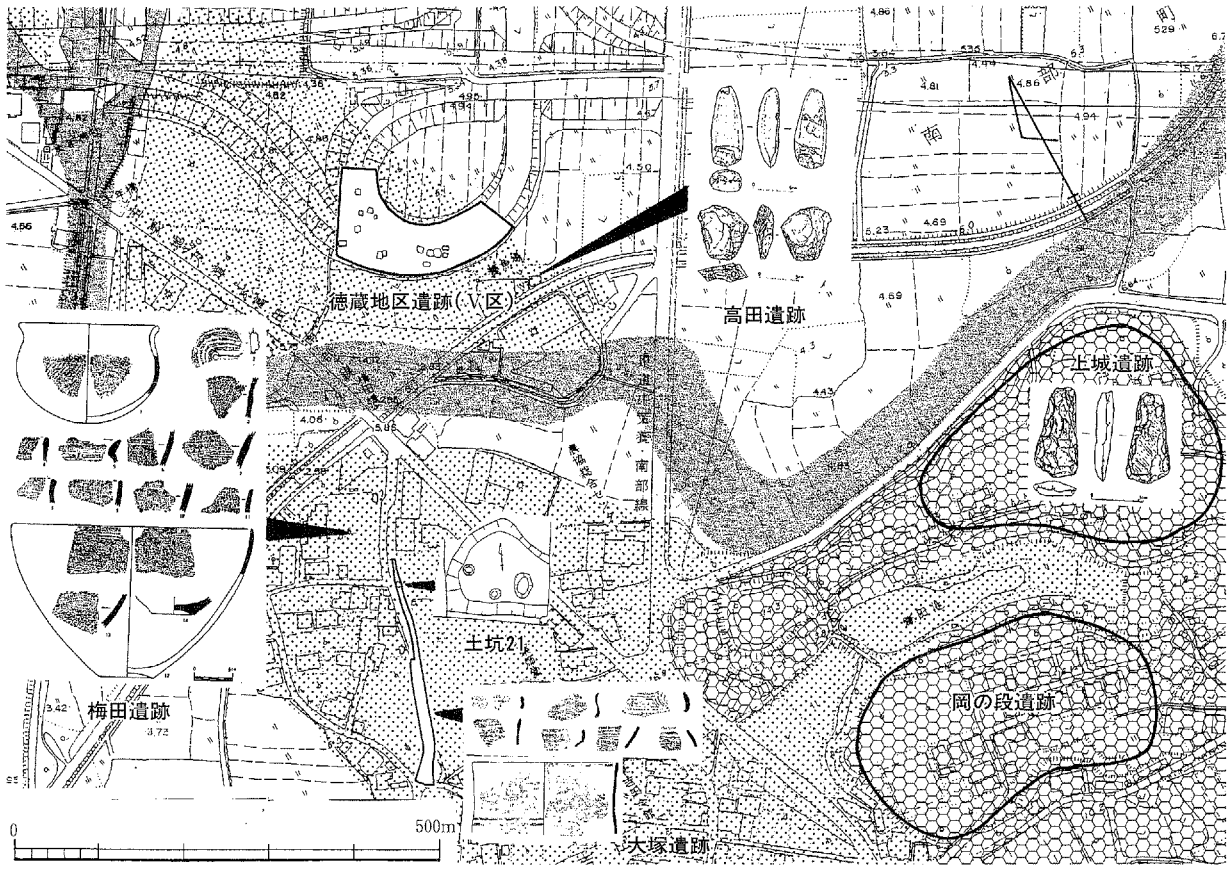
サヌカイトには二つの流通経路があり、金山産と二上山産と判明した。石材の持つ特性から、それぞれ用途別に使用されていたと考えられる。

包含層からは神津島産の黒曜石剥片が出土する。製品は出土していない。

竪穴住居出土の台石は、地元の石材を使用する（第８表）。

遺跡の性格

徳蔵地区遺跡は、西日本に広がる船元式土器の分布図であるにもかかわらず、東海・関東・中部高地からの搬入土器が多くみられる。各地の石器原石も搬入され、集落で消費されている。竪穴住居を



第201図　徳蔵地区遺跡周辺の縄文遺跡

中心とした集落の調査面積は、3,600㎡であるが、遺跡の広がりは微高地の大きさからすれば約40,000㎡に及ぶ可能性がある。立地からみて、当時は、海を間近にしたものと思われ、港としての機能を荷なって出現した集落とも考えられよう。

集落の構成が考えられ、かつ土器・石器からみた交流・交易エリアを検証できる遺跡であり、また、大きさからみても西日本で初めて確認された最大級の縄文時代中期前半期の集落と考えられる。

（２）縄文時代後期

埋設土器遺構ついて

縄文後期における徳蔵地区遺跡の特色として、後述する竪穴住居の他に、まとまって検出された11基の埋設土器遺構が挙げられる。そのうちの１基である土坑2538［埋甕13］は、大型の石棒を伴った配石と埋設土器が共伴・複合した、稀有な遺構例である。石棒を陽、埋甕を陰と組み合わせた、縄文時代の祭祀形態を現すとも想像できよう。また埋甕本体に使用された土器は、芥川期に比定できる完形の有文深鉢で、時期ともに形態・文様構成が把握できる貴重例である。

他の10基の埋設土器遺構は、全て深鉢を正位に埋設していた。いずれも土器型式から後期前葉、そのなかでも芥川期から北白川上層式１期に収まるものと考えられる。そのうち本体土器に有文深鉢を使用するものは３基、他の７基は無文深鉢であり、土器底部穿孔を施すものは６基、腹部穿孔を施すものが１基であった。いずれも数個の礫がみられる他は内容物を含め、明確な共伴遺物は確認できなかった。

中期末から後期初頭にかけて近畿地方に波及した埋甕が、同期から北白川上層式２期にかけ変容して屋外に埋設されることは、既に諸研究がなされ報告されている[註1]。今回の後期の埋設土器遺構群は、その事例を補強し得ることになるが、紀伊半島域に収まることが判明する初例であるとともに、東西縄文文化の伝播経路、例えば紀伊半島太平洋ルートなどを再考する良好な資料として評価できよう。

なお今回、『埋設土器遺構』としたのは、縄文時代中期末に東日本から伝播した『埋甕』と、晩期中葉に成立した『土器棺墓』の時期的経緯とその判別を目的とするためである[註2]。『埋甕』は中期末から後期前葉にかけて独特に成立した竪穴住居内の付属施設と定義でき、『土器棺墓』は晩期中葉以後、墓域に群集する棺墓とするならば[註3]、『埋設土器遺構』は、広義にそれら以外の土器を埋設した遺構とすることができよう[註4]。今後、時期的にも形態的にも、両者の中間的様相を示す埋設土器遺構の詳細が解明されることにより、縄文時代後期・晩期の墓制もしくは精神文化の具体的様相が浮き彫りにされるであろうことは想像に難くない。

竪穴住居について

竪穴住居は、調査時に後期面として認識した第６層上面で１棟(竪穴住居1113)、中期面とした第７層上面で２棟（竪穴住居2600・2682）検出した。なかでも、住居1113と住居2600は、遺構の残存状態もよく建物構造を窺うことができる好例であり、出土土器から時期も後期前葉の北白川上層式２期と特定できた。まず両住居の特色として、

①竪穴（＝住居掘方）は、やや南西↔北東に伸びた、楕円形の平面形態である。

②主柱穴は4～5本で構成され、各柱穴を最短距離で結んだ線は、上記の竪穴と同じで、やや南西もしくは北東に伸びた形となる。

③中央部に地床炉が存在する。

と、3つの共通点を挙げることができる。いずれも近畿地方における縄文後期前葉の普遍的な住居形態に収まるが[註5]、住居の楕円形掘方もしくは柱穴配置の背景については、竪穴住居1113の階段状遺構を勘案して、南西部に出入り口を設置した可能性を挙げたい。

また竪穴住居2600の床面が、遺構検出面からの深さが6㎝と浅いのに対し、竪穴住居1113の床面は、遺構検出面からの深さが57㎝と、平均20㎝程度とされる近畿周辺の縄文後・晩期竪穴住居例[註6]と比較しても格段に深い。竪穴住居1113が土層観察用トレンチにかかり、早くから遺構断面が見えていたということと、竪穴住居の埋土に多量の炭化物が含まれ検出され易かったということ、また竪穴住居2600の遺構検出面（標高4.1m。なお住居1113の遺構面は標高4.2m）が削平をうけた可能性があるという、二次的な諸条件を考慮しても両者、というよりも従来の検出例と竪穴住居1113の深さの差は歴然である。いずれにしても、竪穴住居1113の床面が検出面から57㎝下にあったという遺構例[註7]は、従来の縄文竪穴住居の建物構造を再考するのみならず、近畿周辺の縄文遺跡の残存埋没状況を考える上でも貴重な資料である。

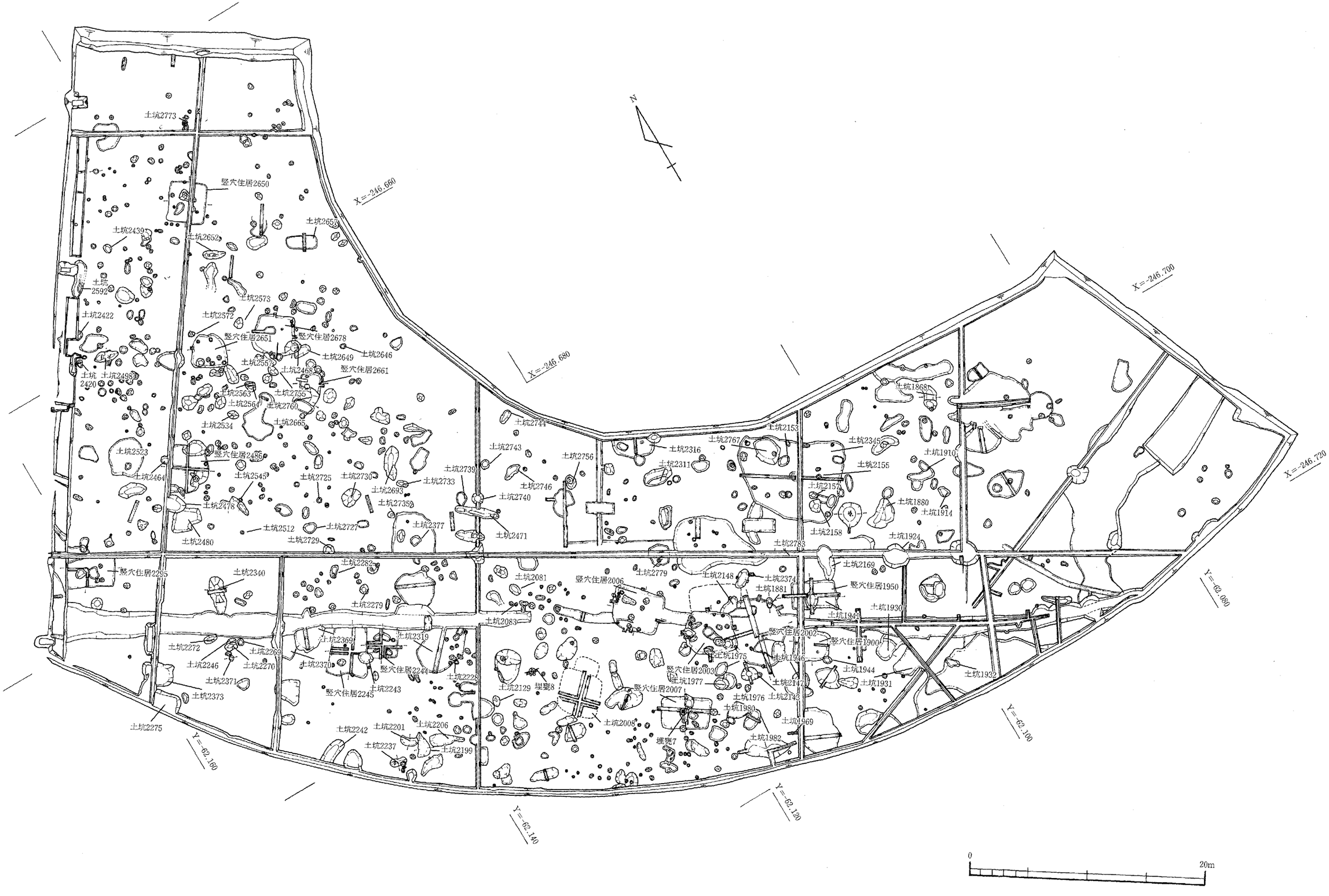
その他土坑について

土坑とは、柱穴や竪穴住居や墓坑以外の、大きな人力掘削痕とすることができよう。いわば土坑墓・貯蔵穴などと、用途を特定できないものがその定義となり得る訳である。今回の徳蔵地区遺跡でも、多数の土坑が検出されたが、本稿では縄文時代後期と特定できる土器等の遺物を安定して含む土坑のみ取り上げた。

今回、徳蔵地区遺跡で確認できた土坑例としては、埋設土器遺構を含め大きく4つに類例化できると考えられる。第1には、一般的な廃棄土坑と考えられる例で、比較的小さい土器破片等を含む例である。土坑2268・2569などが挙げられる。第2には、今回埋設土器遺構とした、大型の完形土器を埋納する例である。第3には、土器片・土器埋納土坑とした、大型の土器片もしくは小型の完形土器を意識的に埋納する例である。これには、ほぼ完形の双耳壺を埋納した土坑2458、深鉢縦半分を埋納した土坑2609、特殊な例として土坑壁に沿って土器片を立て並べた土坑2602などが挙げられよう。第4には、自然流路痕的なもので、遺物がほとんどなく平面形態も不定形を呈す例である。これには、第6・7層上面で検出した土坑群が対応しよう。

他にも土坑として記述したが、土坑2451・土坑2528は埋設土器遺構の可能性がある。土坑2528は無文深鉢を横位に埋設した遺構例とも考えられるほか、土坑2451の掘方は長径80㎝×短径50㎝と土器より長大で、墓坑とすると土器は供献的な性格であった可能性もある。

また今回は、明確には貯蔵穴を確認し得なかったが、本来的に有りえなかったのかどうかは検討を要する。貯蔵穴を含め、今回の調査では生業に関する遺構例が把握できなかったが、それに強く関る石器を含めた総合的研究が、今後の課題として残る。



第202図　Ⅴ区 12-④区 縄文時代中期遺構平面図

第203図　Ⅴ区 12-④区 縄文時代後期 遺構平面図

配石遺構としては、土坑2538［埋甕13］や配石遺構１、土坑1162などが挙げられる。土坑2538については先述のとおりであるが、配石遺構１が円形配置を志向すると考えられるほかは確実な共伴遺物もなく、特にまとまりを抽出できない。当調査区は地盤が礫層であり素材が豊富に存在するが、そのわりには配石構築を顕在化させた形跡は薄いという感があり、配石遺構の認定を含め今後の課題としたい。

後期土器の様相

今回の調査では、縄文後期の土器型式にして多寡はあるが、後期初頭の中津式から福田Ｋ２式、後期前葉の広瀬土坑40段階から芥川期、北白川上層式１期と北白川上層式２期の、合計６型式を抽出し得た。後期初頭、中津式から福田Ｋ２式の遺構･遺物は僅少で、土器の出土総数も全体で数点である。同じく次期の広瀬土坑40段階も、包含層に土器が数点見られるのみである。

遺構・包含層からの出土遺物の中心は、芥川期から北白川上層式１期にかけてである。ただし、両型式の変化は連続的で、特徴的なもの以外その区分は難しい。無文深鉢における型式分類も同様で、埋設土器遺構の時期区分は有文深鉢により抽出し得たもの以外、芥川期から北白川上層式１期の両型式に収まるものと考えられる。土坑においても同様である。落ち込みを含め多くの遺構に含まれる両型式の在り方は、混在というより時期的にも両型式の過渡期にあったものと考えたい。ただし、鉢などの器種判定を含め、混入かどうかの再検討は必要である。堀之内式系土器を含む東日本系や瀬戸内、あるいは山陰・近畿北部の特徴を示す土器は一部確認できるものの顕著でなく、近畿地方南部の普遍的な在り方だと考えられる。

次期の北白川上層式２期の遺構・遺物は包含層を含め少ないが、竪穴住居1113・2600出土遺物は当型式に該当する。特に竪穴住居1113の土器資料は一括性が高いと考えられ、しかも上層２期でも新しい様相を示す。以後の縄文土器資料は、包含層を含め当調査区では確認できない。

以上のことから徳蔵地区遺跡例は、芥川期から北白川上層式１期の土坑出土遺物から共伴関係が摑めるとともに、埋設土器遺構から出土した深鉢は完形のものが多く器形全体が把握できる好例で、当該期の貴重な資料と成り得よう。また、土坑2538から共に出土した石棒・埋設土器や、双耳壺など特殊な土器も注目される。

なお、芥川期については、本来『芥川式』と提唱されたもの[註8]ではあるが、筆者にはその型式内容が理解できなかったことを含め、本稿では一つの型式というよりある時間断面を示すものと解釈して、あえて芥川期という名称を使用したことをことわっておきたい。今回の徳蔵地区遺跡における後期の土器様相については、基礎資料の報告という体裁のみで、綿密かつ総体的な考察には至らなかった反省を込めて、今後の課題としたい。

徳蔵地区遺跡の縄文後期集落像の復元にむけて

最後に、後期における徳蔵地区遺跡の時期的変遷を述べ、本稿の小結としたい。

後期初頭、中津式から福田Ｋ２式は、包含層と土坑に土器破片が数点伴うのみでは明確には確認できない。ただし要検討であるが、土坑から出土した双耳壺は当該期の可能性がある。次期の広瀬土坑

40段階も、包含層に土器が見られるのみで確実に遺構に伴うものはない。

遺跡形成期の中心は、後期前葉、芥川期から北白川上層式1期にかけてである。前述のとおり、多くの両期の遺構分別は困難ではあるが、土坑など確実に芥川期の遺構は存在し増加する。代表的なものに、土坑2528［埋甕13］がある。石棒と埋設土器遺構を伴うこの特徴的な遺構、あるいは上述の双耳壺は、想像を加えると後期の徳蔵縄文人の遡源的な記念物であったのかも知れない。以後、芥川期から北白川上層式1期にかけて、多数の埋設土器遺構と土坑が形成される。竪穴住居2682を包括する落ち込み1795からも、当該期の遺物が多数出土している。この時期は、住居とした遺構を除き、埋設土器遺構を中心とする、埋葬・祭祀的な遺構が顕著となり、その規模は近畿地方でも有数のものとなる。次の北白川上層式1期の単純期としては、確実なものとして埋甕⑤などの埋設土器遺構が挙げられ、遺跡は継続するものと考えられる。

北白川上層式2期には、竪穴住居1113・2600と、二棟の住居が確認できるのみである。一般的な関西縄文集落は、時期を問わず住居が数棟みられる程度[註9]とされ、後期の徳蔵集落像もそれに該当できよう。ただし、前段階の芥川期から北白川上層式1期にかけて、埋葬・祭祀的な遺構が大規模に形成されたのに対し、一転して生活色の濃いかたよった遺跡構成となる。つまり時期も含め、生活遺構と埋葬・祭祀的遺構の規模の差においても、ずれが生じている。このことについては、遺跡本来の姿であるのか、調査方法を含めた二次的な要因によるものかは、今後の課題としたい。そして最期に、竪穴住居1113をもって後期集落は途絶えるかたちとなる。

後期の徳蔵地区遺跡が示す、土器型式に基づく時期ごとの遺跡の盛衰は、地点ごとの遺跡の推移、いわば近畿地方において既に示されている「比叡山西南山麓遺跡群」[註10]を代表例とする、縄文集落の移動を示すものと考えられる。ここ南部平野の遺跡群においても、周辺縄文遺跡の時期差からその可能性の一端が示されている[註11]が、徳蔵地区遺跡および周辺遺跡群の実態把握にむけては、山積する課題のなか、今後のより詳細な分析を基とする調査研究の積み重ねと、太平洋を臨む交流拠点としての大きな視野も必要とされよう。

註1　千葉豊1989「近畿地方出土の埋設土器遺構について」『昭和61年度農業基盤整備地域埋蔵文化財調査報告書』三重県教委
植田文雄1991「拡張、あるいは展開する縄文文化－西日本における埋甕の出現とその変容をめぐって－」『滋賀考古　第5号』

註2　ただし報告記述においては、調査時に遺構番号名として用いた『埋甕』名を使用した。

註3　中村健二1991「近畿地方における縄文晩期の墓制について」『古代文化43-1』

註4　立岡和人2000「近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開」『関西の縄文墓地　発表要旨集』

註5　関西縄文文化研究会1999『関西の縄文住居　発表要旨・資料集』

註6　矢野健一1999「非環状集落地域」『季刊考古学　第69号　特集縄文時代の東西南北』雄山閣出版

註7　北海道などの寒冷地の縄文期竪穴住居は1m近く掘り込む例がある。

註8　高槻市教委1995『芥川遺跡発掘調査報告書』

註9　大野薫2001「近畿・中国・四国地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』

註10　泉拓良1991「縄文文化」『考古学　その見方と解釈　上』筑摩書房
矢野健一1991「IV　遺跡を群としてとらえる」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館

註11　川崎雅史2002「第4章　まとめ」『大塚遺跡』御坊市文化財調査委員会・南部町教育委員会

第２節　縄文時代晩期～弥生時代前期

旧河川や土坑から出土する突帯文土器と弥生土器を概観した後に、集落の内容・性格を考える。

（１）縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器

Ⅱ区10-③　旧河川第８層の時期

近畿地方の突帯文土器は、突帯位置やプロポーションあるいは共伴する浅鉢の形態などから滋賀里Ⅳ式―（口酒井式）―船橋式―長原式と移行すると考えられている。ただ、和歌山県とりわけ紀南地方においては滋賀里Ⅳ式に併行する土器について認識できるものの、それ以降の変遷が明確でなく鉢などとのセット関係も明らかでない。これは船橋―長原と河内潟周辺部の土器の形態変化とその周辺部の形態変化が一律同様でないことに起因するものである。それ故、地域単位で編年を組み立てることになるが、層位的な発掘例がなく資料的にも乏しいのが現状である。

ところで縄文時代晩期末の紀南地方を代表する突帯文土器として瀬戸タイプがある。これは白浜町瀬戸遺跡で出土した資料をもとに中村貞史氏によって設定されたタイプである。内面を強くヨコナデすることで外反する口縁端部外面に幅広で垂れ下がる突帯を付すもので、一条突帯と二条突帯があり、底部には尖底と平底のものがある。突帯上以外に口縁端面にも刻みをもつものがある。土坑から弥生時代前期中段階の壺と共伴することから、弥生時代前期で長原併行期かそれよりやや遅れる時期に編年している。また、瀬戸遺跡では弥生前期中段階の甕が出土していないことから、弥生壺と突帯文甕のセット関係を指摘している。

瀬戸タイプのように外反する口縁端部外面に幅広で垂れ下がる突帯をもつ土器は、播磨地域でも出土しており、和歌山県では日高地方以南に分布する。御坊市尾の崎遺跡・堅田遺跡・中村地区遺跡、みなべ町片山遺跡では突帯文土器と弥生時代前期土器が共伴して出土する。堅田遺跡は弥生時代前期古段階末頃に成立する集落で、瀬戸タイプの突帯文土器が多く出土し、前期中段階の弥生土器との共伴資料が多い。また、突帯文土器の系譜をひく甕が新段階にも存在することが明らかにされている。堅田遺跡の突帯文土器には、底部が尖底のものや大型のものがなく、プロポーション的にも弥生甕に類似するものが多い特徴がある。ただ集落成立当初においても、瀬戸遺跡のように弥生壺と突帯文甕と言うセット関係ではなく、煮炊具の主はやはり弥生甕であり突帯文土器の方が少ない傾向にある。

旧河川第８層から出土した口縁部から体部中位まで明らかな突帯文土器のうち、中村貞史氏の定義をもとに、瀬戸タイプを確認してみる。資料としては280、282～287、294～296、312、329がある。281は形態などからは瀬戸タイプではあるが片岩を含むことからここでは省いておきたい。この土器に関しては体部下半を粗く横方向に削っており、後の紀伊型甕に繋がる形態である可能性がある。鉢・甕は胎土から判断すれば在地のものでなく、また突帯の形態も違うことから瀬戸タイプは深鉢のみ存在することになり、これまでの例を追認したことになる。また、底部については地元胎土の尖底が321・322の２個体のみの確認であり、主は平底であると考えることができる。

以上から旧河川第８層から出土した瀬戸タイプの深鉢の特徴を整理して書いてみる。

①器種は深鉢のみで、鉢・壺とはセットにならない。

②大きさからは大型・中型・小型の3つに分けることができる。

③一条突帯と二条突帯があり、大型は二条突帯、小型は一条突帯に限られ、中型には二条突帯と一条突帯がある。ただ、瀬戸遺跡では、小型の二条突帯があり、みなべ地域だけの特徴とすべきかもしれない。

④プロポーションは体部から頸部・口縁部にかけて屈曲せずにゆるやかに繋がる。

⑤外反する口縁端部外面に幅広で垂れ下がる突帯を付す。

⑥刻み目は突帯上以外にも口縁端面に刻むものが多く、また口縁端面のみ、刻み目がない資料もある。

⑦刻み目は概して小さく、小D字状、V字状を呈するものが多い

⑧底部は尖底と平底があるが、主流は平底である。

一方、324・325・342のように地元胎土で、口縁端部に接して断面三角形の突帯を付すタイプがある。形態や刻み目の特徴から、324・342などは長原式に類似し、325は船橋式に類似する。また、同様な突帯をもつ搬入品326～328・331も形態や刻み目などからは船橋式や長原式の特徴をもつと言える。

旧河川第8層から出土した弥生土器は少量であることから、これから時期を求めることは危険であるかもしれないが、あえてこれらがどの時期に位置づけられるか考えてみる。対象とする資料は遠賀川系の甕2点と壺2点である。壺は口縁部・頸部・体部の境が明瞭であり、形態や古手の文様である重弧文を描き沈線も細いことなどからも畿内の弥生土器編年では前期古段階から中段階はじめ頃の時期を当てはめることができる。一方、甕は頸部に2条の沈線を巡らしている。甕の頸部は古いタイプでは段あるいは無文であり、2条の沈線は後出する。瀬戸内の津島1式や近畿でもっとも古く前期古段階に編年される東大阪市若江北遺跡第5次土坑15の資料、あるいは八尾市田井中Ⅰ期の資料では、甕の沈線は1条までで沈線を2条巡らす資料は存在しない。これらのことなどからも、旧河川第8層の資料は若江北などよりやや下る前期中段階初頭の時期であると考えることができる。

突帯文土器のうち瀬戸タイプであるが、先にも述べたように瀬戸遺跡や堅田遺跡などで前期中段階の弥生土器との共伴関係が明らかにされていることからも、弥生土器とほぼ同時期の遺物であると位置づけても差し支えないと考えられる。長原式の範疇で捉えた生駒西麓地域の突帯文土器であるが、河内潟周辺においても弥生土器と長原式突帯文土器との共伴が確認されており、東大阪市宮ノ下遺跡・水走遺跡では多くの突帯文土器に混ざって古段階から中段階はじめ頃に編年される弥生土器が出土することからも、おおよそ瀬戸タイプと併行関係にあると捉えることができる。また長原式に類似する突帯をもつ地元胎土や和歌山県北部地域の土器についても同じ時期のものと考えたい。

次に東日本の土器であるが、深鉢は馬見塚式では新しい段階のもので下り松期のもの、浮線文土器は氷Ⅰ式古段階のものである。浮線文土器は近畿地方ではいくらかの出土があり、弥生時代前期の早い段階に併行している。弥生土器・瀬戸タイプの突帯文土器が中段階のはじめ頃とした場合これら東日本の土器は、わずかに古い資料と捉えることもできるが、茨木市東奈良遺跡ではやはり前期中段階以降の土器と氷Ⅰ式古段階の浮線文土器が出土した例もある。このように旧河川第8層から出土する

遺物は、突帯文土器のバリエーションが多いことから一見時期差のある遺物が混在するようにも解釈することができるが、時期差が認められるような堆積層からの出土ではないことからも、弥生時代前期中段階初頭の一括資料と捉えるべきであろう。

Ⅲ区　土坑９・44・50・51の時期

土坑９・51の時期であるが、広口壺の口縁部が発達してなく、口頸部の境が明瞭であることや甕の口縁が短く頸部の沈線が２条までであることからなどから前期中段階はじめ頃であると考えられる。また、528にみられる沈線間刺突は中段階はじめ頃に盛用されるもので、498のような沈線下の刺突や527のような三条の沈線間の刺突は、沈線間刺突の変形であると考えられる。土坑44･50は積極的に編年に使える資料はないが、突帯文土器を伴い新しい特徴の弥生土器が無いことから土坑９・51とほぼ同時期の前期中段階はじめ頃であると考えたい。

10-⑤区　旧河川１の時期

下層　突帯文土器の特徴が10-③区旧河川第８層出土のものと同じであり、壺に関しても口頸部の境を段で区画するなど古い特徴をもつものがある。ただ、甕の口縁が長く伸びることや沈線の数も４条のものがあるなど新しい特徴を示すものがある。このことより、中段階はじめ頃から中段階後半にかけての資料であると考えられ、やや時期幅が想定できる。

砂礫層　突帯文土器に関しては下層の遺物と同じタイプであり、下層からの混入遺物と考えたい。壺は沈線が多条になり、区画文様から帯状文様になっている。頸部や肩部に突帯を削り出すタイプもあるが、突帯上の沈線は数が多い。口縁端部に沈線などの文様を施すのは新しい特徴である。

甕は口縁部が長くなっており、沈線の数も３条のものがある。これらのことから砂礫層の遺物は前期新段階前半の資料であると考えられる。

３・４層に関しては、出土するものがすべて弥生前期中段階から新段階にかけての土器であると考えられ、堆積時期を反映する遺物でない感がえられる。

13-①区　旧河川１（10-⑤区旧河川１の上流部に位置する。）

底直上　突帯文土器は前期中段階と評価した10-③旧河川第８層出土のものと同様なタイプであるが、弥生土器の特徴は、それより新しい特徴をもつものが多い。おおよそ前期中段階とすることができるが、甕741･壺742は部分的な資料であるが新段階に下る可能性もある。10-⑤区旧河川１と一連のものであり、おおむね下層の遺物と対応とすると考えられるが、若干新しく位置づけられる可能性がある。

下層　瀬戸タイプの突帯文土器は、10-③区旧河川第８層出土のものなどに比べ突帯が厚いもので占められる。また、797のように一条突帯の深鉢で遠賀川系甕の口縁部に突帯を貼り付けたタイプが見られる。弥生土器の壺では頸部に突帯を削り出す782・809は前期中段階に位置づけられるが、多くの資料が肩部の沈線が多条で帯条化しており、前期新段階までの時期幅を持たすことができる。

（２）遺跡の動向

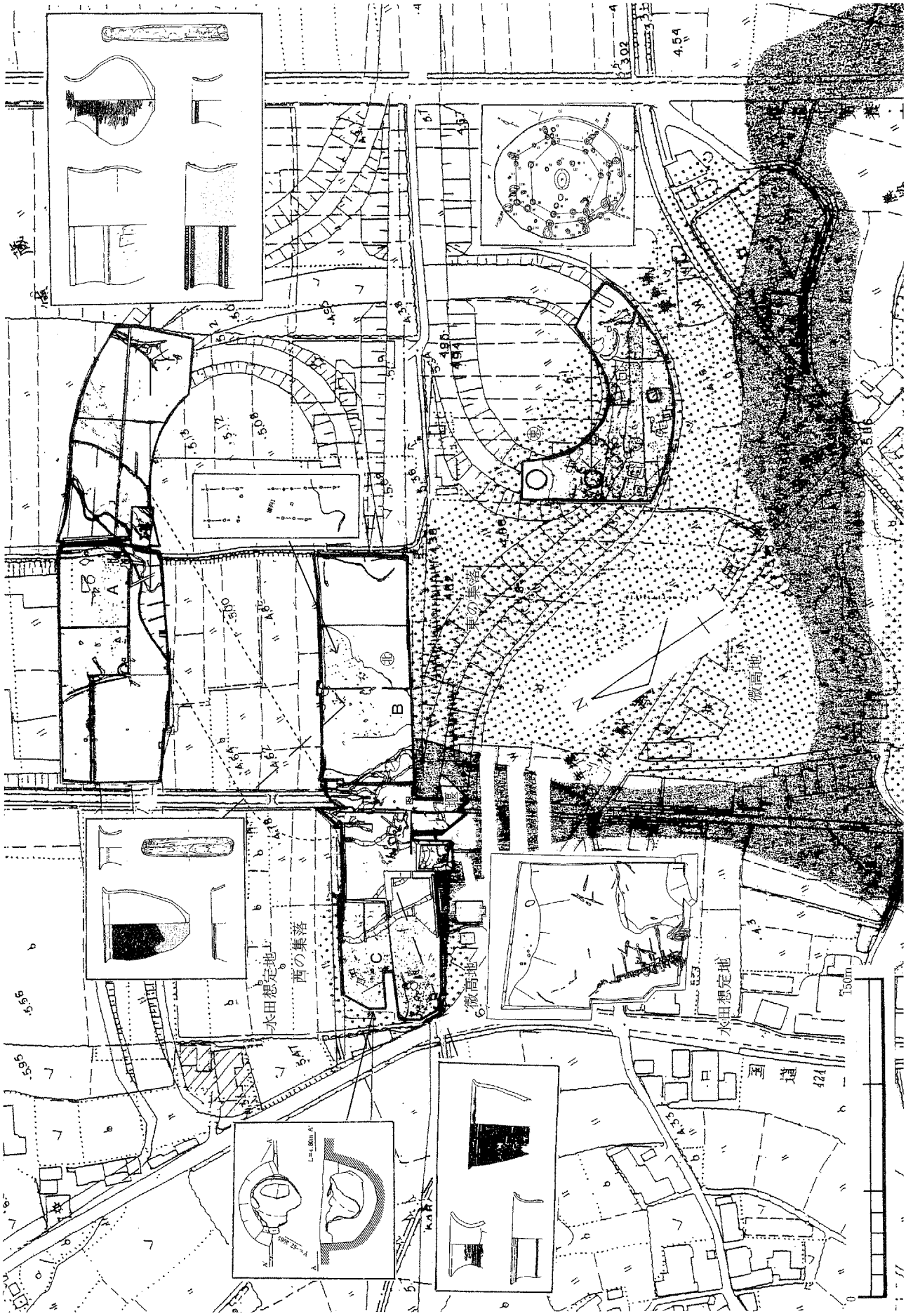
徳蔵地区遺跡では、まず前期中段階はじめ頃に自然流路に挟まれた微高地、Ⅱ区・Ⅲ区付近に集落

が作られる。この時期に堰状遺構も造られたと考えられる。集落は環濠で囲繞し集住するものでなく、古い時期の遺物の出土地点が分散することからも流路の畔にいくつかに分かれた形で形成されていたと考えられる。地形的にはA地区以外は環濠で囲い込む必要性はなく、河川で区切られた区画となっていた。中段階後半から新段階にかけて集落は全体的に南にスライドした形で、III区の西付近とIV区付近に展開するようになる。その後、新段階後半には集落は廃絶している。

集落が形成される時期には、東日本や生駒西麓地域、和歌山県北部地域などからの搬入品が多いのに比べ、それ以降は搬入品が少ない傾向にある。このことは弥生文化を受け入れる過程で、各地から人の移入があったからだと考えられる。東日本系の土器については海を介してもたらされたと考えられ、北からの搬入品も同様な視点が必要であろう。

各地区、各遺構の時期を再度整理してみる。文章を簡潔化するため10-③区旧河川8層をA、11-①区の土坑群をB、10-⑤区、13-①区旧河川1の最下層付近をCとする。まずAとBの遺物が弥生時代前期中段階はじめ頃に位置づけられる。Aでは突帯文が中心で若干の弥生土器が伴出し、Bでは弥生土器のなかにわずかに突帯文土器が混入する状況であり、同じ時期でありながら土器の組成がまったく異なっている。一方では主に縄文土器の系譜にある土器を使い、一方では主に新進の弥生土器を使っていることになる。弥生文化が開花する時期にはこれらとよく似た現象が河内潟周辺部や和歌山県北部地域であり、それに倣うならAを縄文人が弥生文化を受け入れた集落、Bを弥生人が作った集落と解釈することもできる。ただ、それらのケースは、数キロ以上の距離をあけての集落間でのことであり、徳蔵地区遺跡のように旧河川を挟んで60mと言う指呼の距離となると特異な現象であると言え、両者に時期差を求めてその違いを理解することも考慮しなくてはならない。一方、Cでは前期中段階の弥生土器と突帯文土器の数が拮抗して出土する。この層は中段階はじめ頃より新しい遺物が混在し、A・Bより時期幅を持っていることから中段階はじめ頃だけに限れば、突帯文土器と弥生土器の比率をA・Bと同等には比べることはできない。ただ、突帯文土器のうちAで出土したものより突帯の厚さがあるタイプやプロポーションが弥生甕と似るタイプは新しく位置づけることができ、堅田遺跡の例をみるなら中段階後半くらいまで下る可能性がある。また57年度瀬戸遺跡SX-1でも中段階後半の土器と突帯文土器の共伴が確認されている。これらのことから、突帯文土器が出土しないと言う事だけでAよりBが新しいとは言えない事になり、時期差で解決することも難しくなる。今一度Bの確認をおこなってみると、A・Cとは違って土坑の出土であると言う事、2個の石棒が出土していることが注目される。石棒は縄文人が祭祀に使ったものであり、弥生人が作ったとされ弥生土器で占められる若江北遺跡などでは石棒が出土していないと云う例からもBは弥生人が作った集落と言う仮定も崩れることになる。また、石棒が土坑から出土すると言うことはやはり祭祀に関わる儀式がこの場で行われ、儀式にはあえて弥生土器を選んだと解釈するのが妥当でないだろうか。

B集落は、掘立柱建物を中心として、西に土坑19・20・22などの土坑群、さらに西に長辺を掘立柱建物に合わせた土坑43・44、北側には土坑9・51・55、南西方向の微高地の縁辺部で検出した土坑54などがある。土坑9からは赤色顔料を塗った石棒や黒色物を塗布した弥生土器が出土し、また土坑54



第204図　縄文時代晩期～弥生時代前期 遺構分布図

からも石棒が出土する。

これ以降集落の本体は、東の微高地、高田土居城跡の下に移ったと考えられる。

本稿は川崎雅史氏の助言により出来たものである。記して感謝する。

（3）堰状遺構

堰状遺構と溝状遺構

今回、13-②区で検出した堰状遺構はいわゆる合掌形堰で、水流を受ける側に隙間なく打ち込まれた杭列と、それを固定する横木、横木を支える8本の控え材から構成される。

堰状遺構は南壁断面で確認した溝状遺構とセットになり、河川から調査区の南側に分水することを目的として築いたものであると考えられる。ただ、今回の調査区が河川屈曲部全体をカバーするものでなく、溝状遺構については断面からのみの推定であることから、全国各地の事例をもとに徳蔵地区遺跡の堰状遺構の検証をおこなってみたい。

今回検出した堰状遺構とほぼ同じ構造のものが兵庫県伊丹市岩屋遺跡や埼玉県熊谷市北島遺跡で見つかっており、岩屋遺跡のものは弥生時代前期、北島遺跡のものは弥生時代中期に位置づけられる。どちらの例も河川が大きく屈曲する場所に築かれ、屈曲部外側の角付近には分水する水路を設けている。河川の水を堰状遺構で調整して水路に流し込む構造である。徳蔵地区遺跡の例を再度見てみると、旧河川3（10-⑤区・13-①区で旧河川1）が調査区内で大きく屈曲し、その屈曲部に水の流れを受けるように堰状遺構を構築している。また、溝状遺構と考えられる落ちの位置は、丁度屈曲部外側の角付近にあたり、分水する水路の取り入れ口に相当すると考えることができる。

堰状遺構は横木・控え材が宙に浮いた状態では、強度的にも構造的にも機能することが不可能で、少なくとも横木･控え材は埋土で覆われていたと考えられる。この場合、堰状遺構の前面が一段低く、堰状遺構の背後は土堤状に高くなっていたことになり、同じ状況が北島遺跡でも確認されている。おそらく水流が少ないときは全ての水を効率良く水路である溝状遺構へ流す為であり、水流が多いときは堰状遺構を越して東側にも水を流す構造であったと推定することが出来る。

旧河川と変遷

調査の段階では、旧河川3は一時期の流れであると判断していた。ただ、整理段階において複雑に折れることから図化していなかった調査区西壁断面を写真で検討した結果、この付近での旧河川3の堆積は大きく3時期に分かれることが明らかになった。写真からは旧河川3の屈曲部は南に移動していることが読み取れる訳だが、これは北からの水流が直接当たる角付近が抉られた結果であると考えることができる。ただ、屈曲部から東側部分については調査区東壁断面の観察からも、ほぼ同じ川幅を保ち推移したことが窺える。写真などから判断して、堰状遺構は3時期目の河川の流れに構築されていることになる。なお、堰状遺構の北東側からは、堰の部材と考えられる加工木及び自然木が多量に見つかっているが、これらについては今回検出した堰状遺構に伴うものか、流路の1時期目か2時期目にも堰状遺構が築かれていてそれに伴ったものであるかは判断できない。

網代

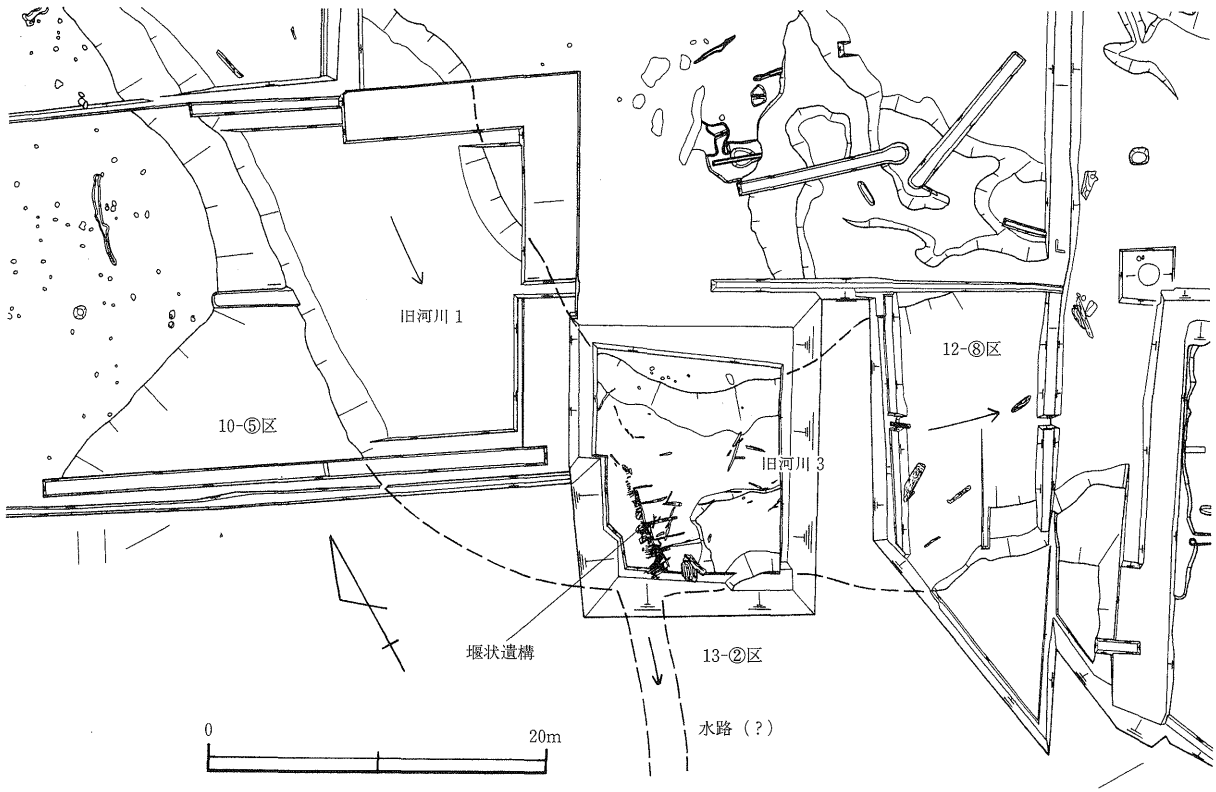
堰状遺構の前面では網代が検出されている。堰を補強する目的で植物繊維を用いた例は多く、岩屋遺跡・北島遺跡や滋賀県下鈎遺跡などの例があり、北島遺跡では植物を編みこんだ状態で使用している。徳蔵地区遺跡では、網代の上端部が堰状遺構から離れた状態で出土しているが、もともと堰状遺構の補強として使用されていたものが、埋没する過程で剝がれ落ちた可能性が考えられる。

堰状遺構の時期と位置づけ

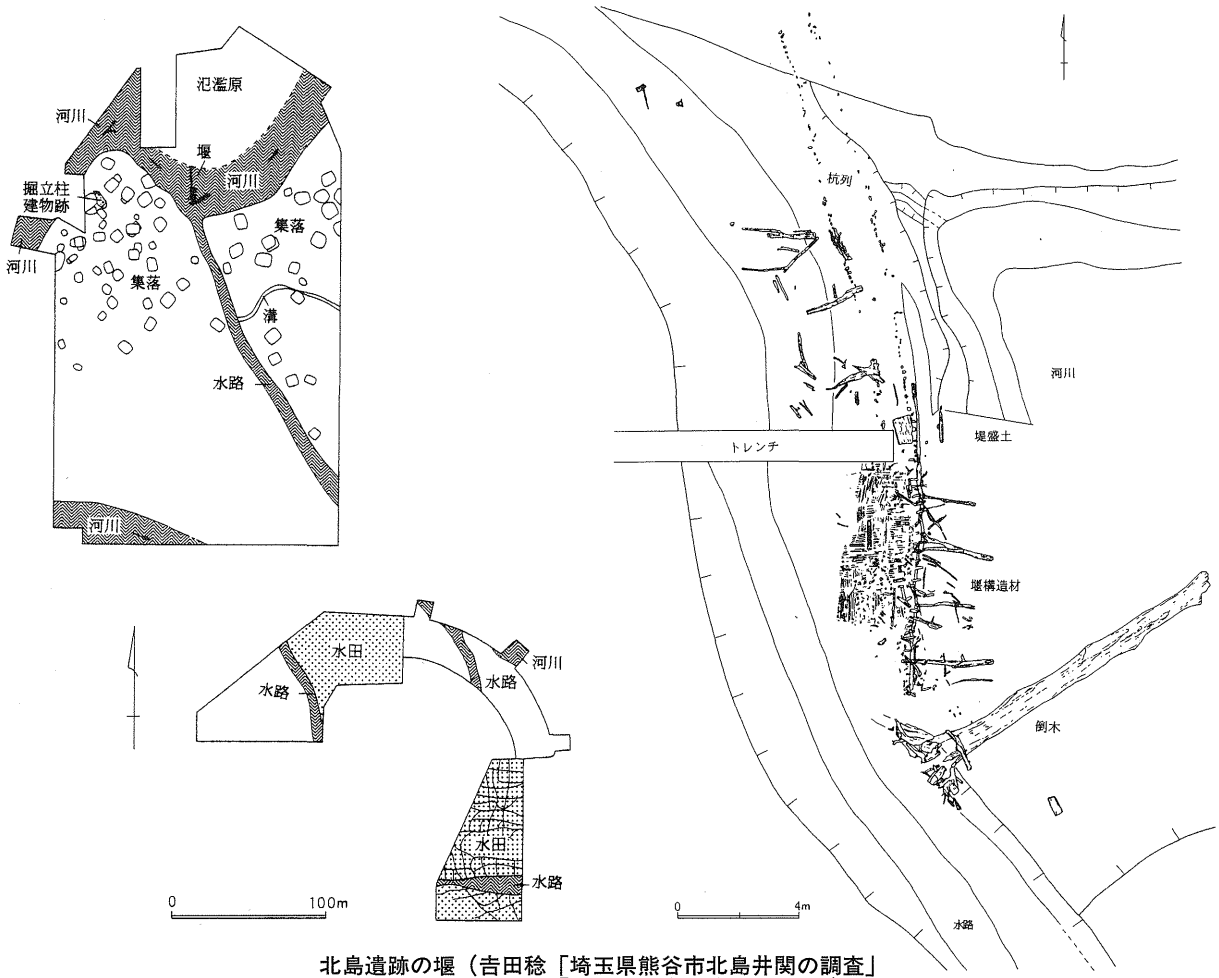
旧河川３の川底付近や、堰状遺構の周辺からは弥生土器や突帯文土器が出土している。弥生土器では壺831のように口縁部がやや発達し前期新段階の様相を呈するものがあるものの、おおよそ前期中段階の範疇で押さえる事ができ、突帯文土器もこれに併行する時期のものであると考えられる。一方、旧河川３の上流部に相当する10-⑤区・13-①区の旧河川１でも、最下層・下層から弥生時代前期中段階から新段階古相の土器が出土している。下層以下は木屑や砂礫を含み流れる過程で堆積したと考えられ、前期新段階新相以降の土器が出土しないことからも、一連の旧河川１・３が機能していた時期、言い換えれば堰状遺構が機能した時期は弥生時代前期中段階から新段階古相と考えることができる。

調査区の南側は調査対象地外であったことから明確なことは言えないが、堰状遺構の南側に続く溝状遺構は南に伸びてその下流にあったであろう水田を潤していたと想定することが出来、周辺の事例から考えてもその蓋然性は高い。

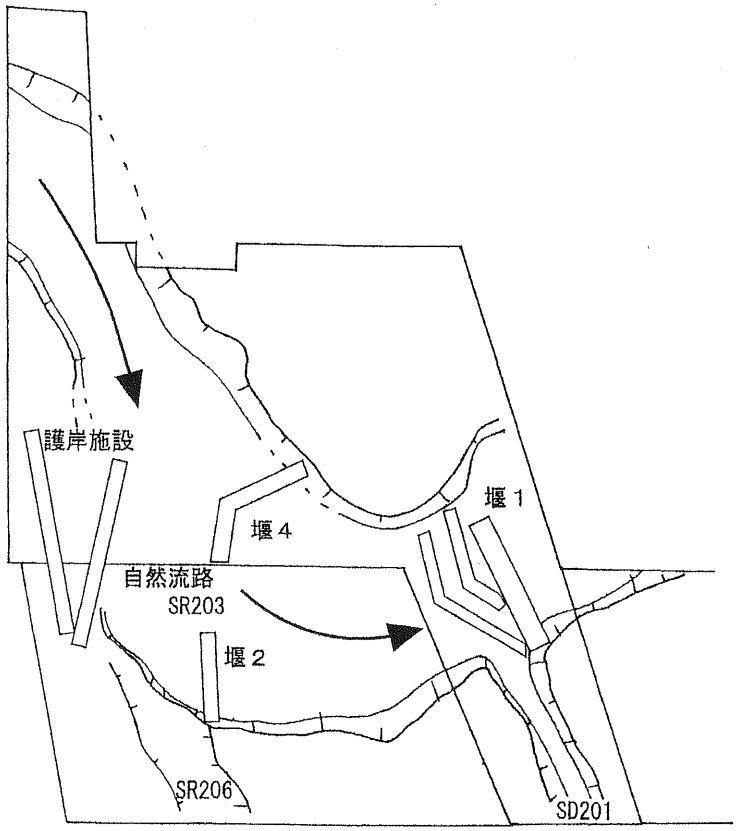
弥生時代の早い段階で、稲作と一緒にすぐれた土木技術で川の流れを変更する潅漑・導水技術が一緒に入ってきたことが窺える。



第205図　堰状遺構の機能推定図



北島遺跡の堰（吉田稔「埼玉県熊谷市北島井関の調査」『日本最古学』第13号 2002）



岩屋遺跡の堰（岩屋遺跡発掘調査成果概要・記者発表資料）

第206図　堰状遺構の類例（北島遺跡・岩屋遺跡）

参考文献

中村　健二　2000「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
渡邊恵理子　2000「岡山県南部地域における遠賀川系土器の様相」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
岩瀬　　透　2000「河内平野南部地域における弥生時代前期前半期土器の再検討」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
田中　清美　2000「河内潟周辺における弥生文化の着床過程」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
深澤　芳樹　2000「刻目段甕のゆくえ―前期弥生土器における広域編年の試み―」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
小林　青樹　2000「東日本系土器からみた縄文・弥生広域交流序説」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
石川日出志　2000「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
前田　佳久　2000「削出突帯の成立」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
中村　　豊　2000「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
中村　　豊　2000「東四国における弥生文化の成立」『第47回埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立―各地域における弥生文化の成立期の具体像―』埋蔵文化財研究会
泉　　拓良　1991「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第８集
勝浦　康守　2000「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器―三谷遺跡・名東遺跡資料の検討」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
大野　　薫　2000「大阪府西大井遺跡出土の突帯文土器と弥生土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
大野　　薫　1995「紀泉の突帯文土器」『泉佐野市史研究』第１号
田端　直彦　1997「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
土井　孝之　1995「紀伊―二形態の弥生集落」（金関恕＋大阪府弥生文化博物館編『弥生文化の成立』）
中村　貞史　1984「和歌山県下の縄文晩期」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
中村　健二　1993「近畿地方における凸帯文土器資料の現状」『突帯文土器から条痕文土器』突帯文土器研究会
若林　邦彦　2000「河内潟沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『第47回埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立―地域における弥生文化の成立期の具体像―』埋蔵文化財研究会
1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書―第５次―』㈶大阪府文化財調査研究センター
1998『水走遺跡第８次・鬼虎川遺跡第27次発掘調査報告書』㈶東大阪市文化財協会
1997『水走遺跡第３次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告書』㈶東大阪市文化財協会
1996『宮ノ下遺跡第１次発掘調査報告書』㈶東大阪市文化財協会
1982『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』㈶大阪市文化財協会
2002『堅田遺跡―弥生時代前期集落の調査―』御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会
1989『弥生土器の様式と編年―近畿編Ⅰ―』木耳社
2001『弥生土器の様式と編年―東海編―』木耳社
1982「第５章　和歌山県瀬戸遺跡の第４・５次発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
1981『尾ノ崎遺跡』御坊市遺跡調査会
1995『中村地区遺跡発掘調査報告書』御坊市遺跡調査会
1978『片山遺跡Ａ地点発掘調査概報』南部町教育委員会・片山遺跡調査委員会

第3節　弥生時代後期～古墳時代前期

南部平野の弥生時代から古墳時代前期にかけての集落動向は、現在までに蓄積された考古資料からみると、紀ノ川水系に代表される紀北地域や日高川水系に代表される紀中地域と基本的に同じである。弥生拠点集落の成立・解体から高地性集落の成立と解体、弥生時代後期から古墳時代前期集落の成立と地域的様相は同じである。しかし、2点の様相を異にする点がある。高地性集落の数が多く、存続期間が長い遺跡がある事[註1]、大型の見る銅鐸が南部平野を取り囲むように6個も大量に出土する事である。第1点に関しては、紀ノ川水系や有田川水系など紀北の遺跡では、弥生時代中期末から後期前半までの限定された存続期間なのに比較して、日高川水系以南の丘陵部遺跡では長い存続期間がみられる[註2]。また存続期間が長い地域には見る銅鐸が出土し、短い期間の地域には聞く銅鐸が数多く出土する。

南部平野の遺跡群の動向に関しては、今まで低地の遺跡群の調査例が海岸線部分に集中しており、集落跡についての考古資料がなかった。しかし、徳蔵地区遺跡や大塚遺跡の調査により、弥生時代後期以降古墳時代前期にかけての集落の動向が判明した。

（1）当該期土器編年の蓄積と徳蔵地区遺跡・大塚遺跡の土器

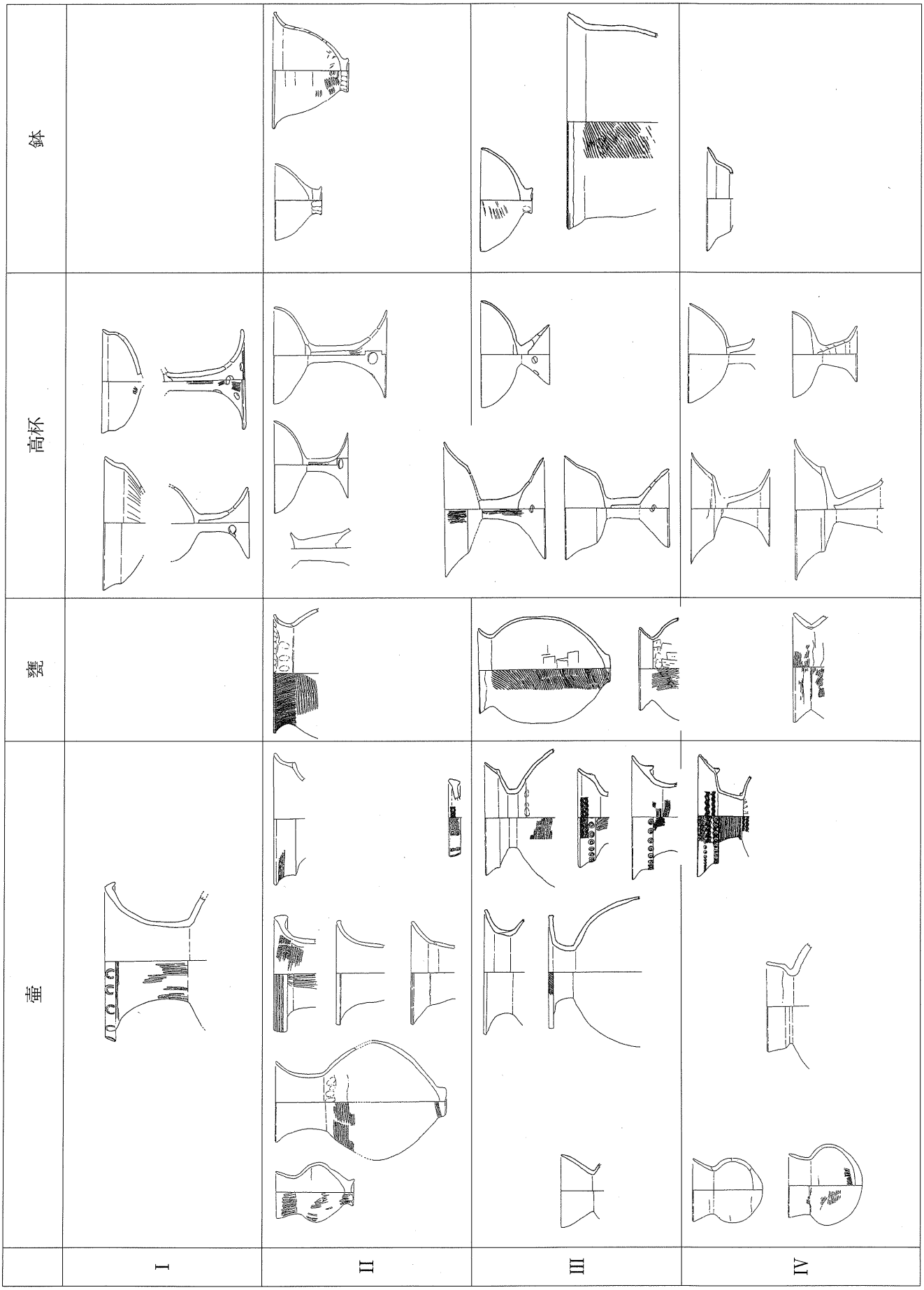
この時期の土器については、和歌山市鳴神地区遺跡、有田郡吉備町野田地区遺跡、御坊市中村地区遺跡の報告書で編年案が提示され、さらに前田敬彦氏により県下の編年案が出されている。発掘調査されたみなべ町資料では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の布留式甕出現までの時期を四期で区分できる。それによれば土器変化は連続しており、中でもIII期の資料が充実しており、I期の資料は少ない。それ故、III期資料を機軸に、土器形式が古いI期とII期、新しいIV期に区分できる。I期とII期の区分は、口縁部が屈曲する高杯資料によっている。

I期　徳蔵地区遺跡溝5出土遺物がある[註3]。遺構は溝だけである。遺物量も少ない。口縁端部を垂下させ、竹管文により装飾する広口壷（以下A）がある。口径も大きく大型である。高杯は屈曲して立ちあがるもの（以下A）で、口縁部は短い。脚柱部は長い。また中実の脚注部がある。裾部に穿たれた孔は大きい。甕・鉢の資料はない。

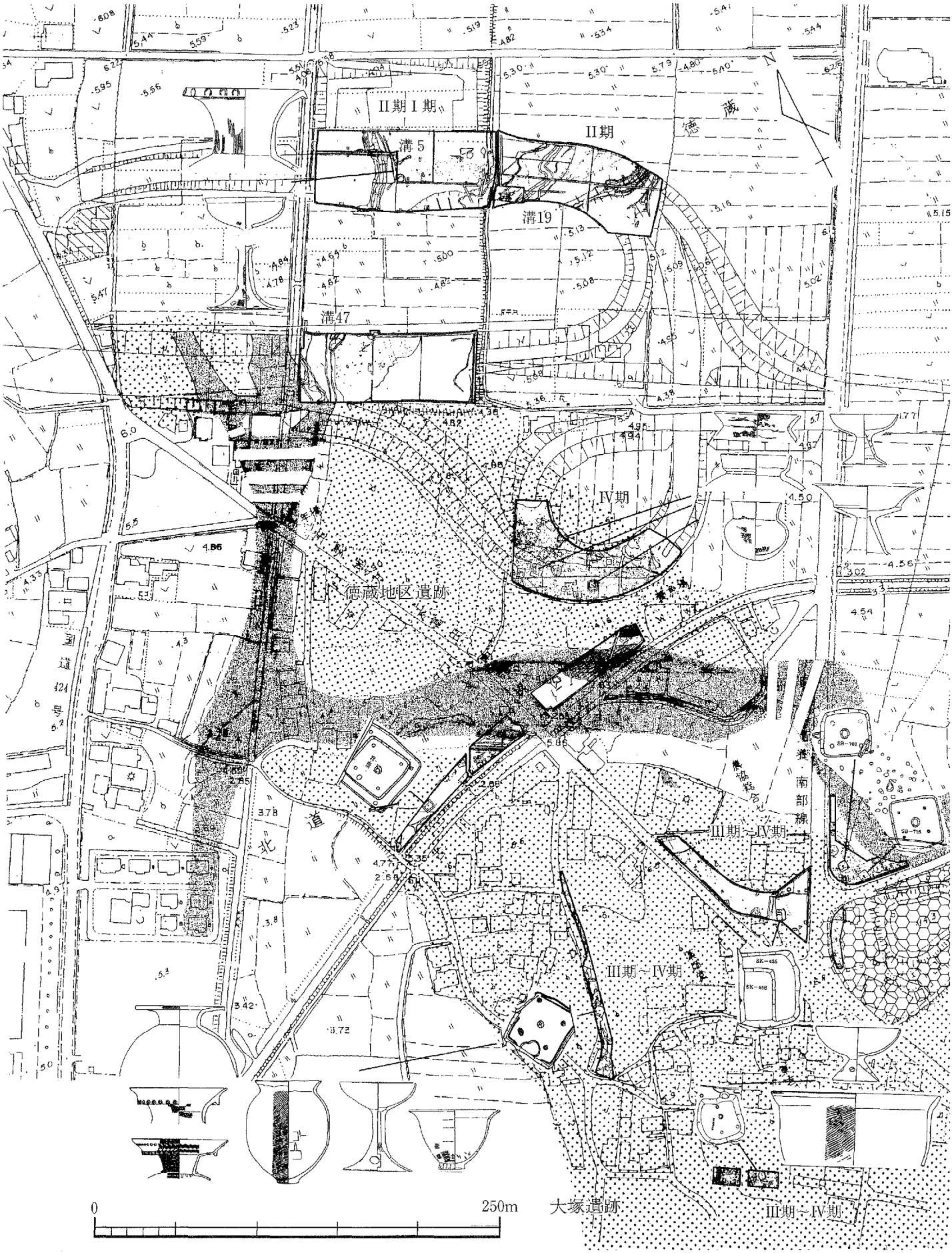
II期　徳蔵地区遺跡11-①区溝47、10-②区溝19などがある。水田が検出できるが、竪穴住居は存在しない。擬凹線を施した広口壷Aがある。また口縁部を垂下させない広口壷（以下B）がある。量的には多くなる。二重口縁壷がみられるが、口縁部への装飾はない。甕は弥生甕で、外面に叩きを施す（以下A）。高杯はAとB（椀状の口縁部）がある。鉢は口縁部が屈曲するAと椀状のBがある。

III期　大塚遺跡竪穴住居群出土遺物[註4]である。II期との違いは、庄内甕が出現する点である。壷は、広口壷Aの消滅と広口壷Bと二重口縁壷が主流になる。二重口縁壷は量も多くなり、装飾も多様になる。高杯A・BII期に比べて、口縁部や裾部の発達が著しい。

広口壷Aは消滅している。広口壷Bと二重口縁壷が主流である。広口壷Bと二重口縁壷への加飾は、多様である。装飾は、波状文と円形浮文を基本とし、その多様な組み合わせで成り立つ。広口壷Bには、口縁端部に竹管や擬凹線などで装飾を施すものが多い。二重口縁壷は、口縁部内外面への多様な装飾を施す。内面へは、二条から四条の櫛描波状文を主体とし、外面へは櫛描波状文や円形浮文を二



第207図　南部川水系弥生時代後期後半～古墳時代前期 土器変遷表



第208図　弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図

段或いは三段にわたって施す。弥生甕と共に少量の庄内甕が共伴する。甕Ａは口縁部への刻み目を施すものもある。体部外面を細かい叩き調整し、内面を削り調整する庄内甕が出現する。高杯Ａ脚注部はII期より長くなり、裾部の発達も著しい。裾部に穿たれた孔は大きい。脚柱部が中実のものもある。高杯Ａの口縁部は長くなり、体部が短くなる。高杯Ｂは脚柱部がなくなり、裾部は直接口縁部に貼り付けられる。庄内系の有段高杯も存在する。鉢Ａは消滅し、鉢Ｂが主流になる。東海地方からの鉢の搬入品がみられる。

IV期　徳蔵地区遺跡竪穴住居群資料と県道に伴う大塚遺跡資料がある。III期との違いは、壷・甕・高杯にみられる。壷は広口壷Ｂが消滅する。甕の主流は布留式甕になり、一部弥生甕が残存する。高杯はＡが主流でＢは少なくなる。高杯Ａは、口縁と体部に段差をもち、脚柱部がスカート状に開いた形態である。一部脚部形態がエンタシス状になる。脚柱部の一部個体には、削り調整がないために粘土紐積み上げ痕が残存する。エンタシスの高杯は、有田川水系野田地区遺跡で大量に出土したが南部川水系でも出土する。壷は二重口縁壷が少なくなる。口縁部が屈曲して立ちあがる壷が新たに出現する。鉄器鎌が共伴する。

土器の変化は、Ｉ期からIII期までは連続する。広口壷・弥生甕・高杯・鉢の基本四器種は、細部の変化を遂げつつ連続する。しかし、III期とIV期の違いは鮮明である。伝統的な弥生土器である広口壷Ａ・Ｂの消滅、後期で出現した二重口縁壷の消滅、布留式甕の出現と弥生甕の消滅、より斉一性に富むスカート状に開く裾部をもつ高杯Ａの出現など、新旧交代が土器からみられる。このことは和歌山県内の各水系資料と比較しても、違いはあまり見られない。当該期の土器は、斉一的な印象である。土器の地域色については、有田川水系で指摘[註5]したエンタシスを呈する高杯の存在や高杯裾部に穿たれた孔は大きいなど、紀ノ川水系を除いた有田川水系以南に地域色を見出せるが、南部平野でも同様の点が指摘できる。

III期資料が庄内新段階、IV期資料が布留古段階と考えられる。Ｉ・II期が連続した時間の中で、後期後半、後期末～庄内古段階資料である。各時期は、前田編年のＶ３～庄内新に並行する。

（２）徳蔵地区遺跡と大塚遺跡の動向

徳蔵地区遺跡と隣接する大塚遺跡に当該期の集落に関する遺構が存在する。徳蔵地区遺跡で集落を検出した微高地は、高田土居城と重複する部分が多い。高田土居城は砂で埋め戻し保存したため下位にある当該期の遺構に関しては、内容は不明である。集落の中核部分であるが大部分が未調査のため、調査し得た考古資料で考える。

徳蔵地区遺跡の微高地は、古川支線を挟んで東の微高地と西の自然堤防がある。集落を確認したのは東の微高地である。集落本体はここに集中し、西の自然堤防上では、遺物の出土は希薄である。徳蔵地区遺跡ではＩ期・II期、IV期資料がみられるが、III期資料は、検出できない。大塚遺跡ではIII期とIV期の竪穴住居がみられる。

低地の最も古い遺構は、Ｉ期の溝５があげられる。南部川水系での低地への出現時期である。溝５は、低湿地に掘削された小溝で、近辺には大溝１が南北に流れる。大溝の時期はII期段階で、鳥形木

製品などが出土した。水田に関する付属施設と考えられる。II期資料は、溝や旧河川が埋没する過程で掘削された溝・水田及びそれに伴う施設（10-②区）、微高地縁辺部に掘削された溝47などが挙げられる（11-①区）。この時期には面的に拡大するが、竪穴住居はみられない。水田は旧河川の窪地に作られている。旧河川が上流から流れており、その窪地内に水田が営まれていたと想定できる。IV期は、隅丸方形・方形竪穴住居8棟がある。住居の方位には大きく二方位ある。

当該期、周辺遺跡では古川を挟んだ位置に大塚遺跡がある。大塚遺跡は三度の調査例がある。III期資料とIV期資料である。III期資料は、方形竪穴住居が9棟ある。この時期に南部川水系では、平野部に方形竪穴住居が出現する。大型の竪穴住居も検出している。脚台II式の製塩土器や熊野地方に多く分布する大型粗製鉢がみられる。IV期資料は県道部分で確認できる。

以上から想定できる平地の動向は、弥生時代後期後半・Ⅰ期で平野部に進出する。しかし面的に小さく点的な範囲での活動である。後期末から庄内新段段階・II期で、基幹水路を掘削し水田を旧河川沿いに営み、生活範囲は面的に拡大される。庄内新段階・III期で、多数の竪穴住居を作り出し集落を形成し、布留古段階・IV期へと継続する。これ以降の集落展開は現状では把握できない。III期からIV期の集落展開は、東西250m、南北750m以上で面的にも大規模な集落である。前代に系譜を引く集落は徳蔵地区遺跡や大塚遺跡では確認できない。土器からは、庄内甕や布留式甕などの畿内との綿密な関係、土器地域色を一掃する畿内との密接な関係性が見いだせる。その一方、大型粗製鉢にみられるように熊野地方との関係もみられる。

（3）南部川水系の弥生時代後期から古墳時代前期の動向

南部川水系や会津川水系では、高地性集落が数多く存在する。その存続時期に長短がある。紀北地方と同じ弥生時代中期末から後期前半の短期間の遺跡と後期全般に及ぶ遺跡である。前者は南部平野の月向遺跡、田辺平野の岩倉山遺跡、日高川水系の亀山遺跡など、平野部の遺跡を集約したかのような水系で一つ及いは二つの高地性集落である。後者の遺跡は、南部平野では半田遺跡などがある。未調査のため内容は不明であるが表採資料では、半田遺跡からは紀北地方や河内地方の土器が出土する。

南部川水系では、高地性集落が終焉する時期に平野部への進出が行われ、集落形成が行われる。この動きを他水系と比べる。

高地性集落と低地遺跡の関係についての考古資料の蓄積は、日高川水系が最も多い。川崎雅史氏により、高地性集落には、亀山遺跡と中村地区遺跡の二つのタイプがあると分析されている[註6]。

弥生遺跡は、弥生時代中期中頃には日高川が形成した自然堤防上に連なって存在するが、中期末から後期中頃にかけて活動をとめ、平野を見下ろす亀山遺跡に集落は集約される。扁平紐式銅鐸3個が埋納され、それは各集落が集約された証とする。高地性集落には紀北地方や河内の大型土器が出土し、容器として使用され、各地との活発な交流があり、またサヌカイト原材や大型石鏃の出土から戦闘的な集落と想定される。一方、紀北地方より遅く後期前葉に低地を捨てて丘陵に上る中村地区遺跡は、標高が15～16mと低く、堀などもなく防御を意識した集落とは考えがたく、住居埋土の均質なシルト層からみて、平野部が湿潤化したことによる移動が考えられるとした。

弥生時代中期末段階で、畿内政権と連動しつつ、政治的な緊張関係により平野部の集落を放棄して、軍事的色彩の濃い亀山遺跡が形成され、後期前半段階で水位の上昇に伴う平野部の湿潤化を原因とした中村地区遺跡の成立を想定する。平野部の各集落が持っていた３個の聞く銅鐸は、亀山遺跡が成立する時期、中期末段階に埋納されたと考える。

低地集落は、後期前葉に平野部に形成された東郷遺跡が亀山遺跡と共存する。平野部の湿潤化の時期であるが集落は成立する。この時期各地の土器が出土する。庄内期から布留期にかけては、畿内・東海・中国・九州や韓式土器が出土し、大溝掘削など土木工事を行うため、大和政権の影響下に営まれた集落と考えている。

南部平野の高地性集落は、平野部を見下ろすかのように丘陵部に存在する。高地性集落の表採資料で見る限り、月向遺跡が亀山遺跡と同じ時期の遺跡で、半田遺跡などが後期中頃の高地性集落である。二つのタイプの高地性集落がみられ、日高川水系遺跡群の動向と同じと考えられる。しかし、東郷遺跡に該当する遺跡は存在しない。平野部での集落形成は庄内新段階で、有田川水系・日高川水系と同じである。それ故、紀北地方との集落動向の違いは、やはり存続期間の長い高地性集落にある。集落の大きな変動が祭祀と関連するならば、この点に見る銅鐸が多く出土する意味が見出せることになる。

註１　前田敬彦「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」古代文化第47巻10号　平成7年10月

註２　既に川崎雅史氏により指摘されている。
「中村地区遺跡発掘調査報告書」御坊市遺跡調査会　1995年３月。

註３　「徳蔵地区遺跡」―国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書―財団法人和歌山県文化財センター2003年８月

註４　「大塚遺跡」マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　御坊市文化財調査会　2002
「大塚遺跡」町道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　御坊市文化財調査会　2002

註５　渋谷高秀「有田川流域・弥生～古墳時代前期の様相」埋蔵文化財情報16　和歌山県文化財研究会　1984年３月「田殿・尾中遺跡」吉備町教育委員会　昭和57年「野田地区遺跡発掘調査報告書」和歌山県教育委員会　昭和60年

註６　「中村地区遺跡発掘調査報告書」御坊市遺跡調査会　1995．３

第4節　鎌倉時代～室町時代　条里型地割の形成とその変遷

南部平野に広がる八丁田圃と呼ばれる条里型地割は、北は本庄地区から南は南部町との境界部まで広がり、173ヘクタールの大きさをもつ。水田は、一辺109mの方形区画の条里型地割を良好に残している。山岳部が海岸線まで迫る紀南地方では、傑出した耕地面積を持つ。

高野山の荘園としての南部荘の条里型地割が、いつの時期に形成され、どのような変遷過程をもつのか考古資料から解明する事は、今回の調査の大きな目的である。

条里については、中野栄治氏による研究成果がある[註1]。「数詞地名を欠くが」「『和名抄』の南部郷に比定できる条里区」とした。額田雅裕氏の研究では、条里型地割が残存する南部平野は、南部川が形成した沖積平野であるが、その分布は完新世段丘下位面に限定され、「その砂州の背後に抱かれたラグーンが堆積する型で発達してきた」[註2]とされる。用水路は、詳細な現地踏査を行った海津一朗・坂本亮太氏の研究が公表されている[註3・4]。それによると、条里型地割によって形成された水田への取水は、ほとんどが南部川に作られた井堰から行われている。考古資料からは、既に徳蔵地区遺跡の調査からその成果を公表しているが[註5]、その後広く面的に調査した緑資源公団の整備事業に伴う試掘・確認調査[註6]がなされたため、その調査成果も加えて考える。

南部平野の条里型地割のうち調査対象とした調査区は、南部平野の最南端部を占める徳蔵・北道・芝・東吉田地区で、低湿地である。面積にして約44万㎡である。灌漑概況図[註3・4]からすると区は、調査対象区は、大井用水から取水する。

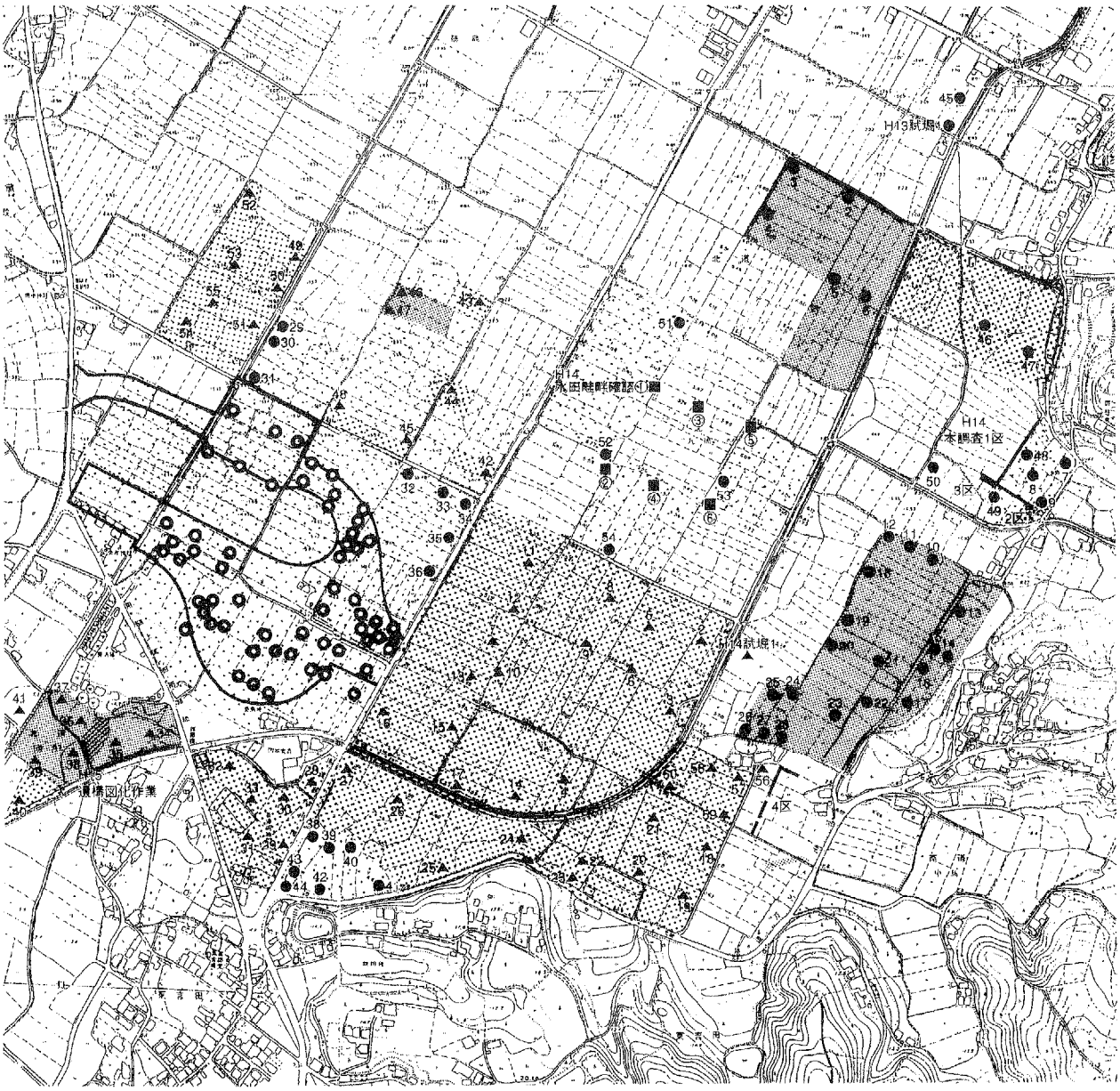
（1）現状の条里型地割

現有の地割方位の主軸は、東に29度振っている。これは地形面の傾斜方向と調和するものである[註2]。南部川も条里型地割に平行して南流する。現況の地形図から標高を拾うと、第208図になる。最も北側では標高12m、南側では4.8mで、比高差は2㎞間で7.2mである。

南部平野の等高線は、南部川の流れに直交する。南部川は、北部で南北方向に流れ、須賀橋付近で右折し、その後、直線的に南西方向に流れる。中央部付近から以南は現在の水田区画と同じ方位で南端部まで行く。東側の丘陵部に近い水田は標高が高く、中央部の水田と等高線は合わない。水田の中央部西側部分は、南部川が形成した自然堤防で地形が高くなっている。

条里型地割の最北端、東本庄地区から最南端の徳蔵地区まで完結する最長線は、現在の古川支線ラインで、全長約2㎞である。このラインは南部川に平行する。最南端には大年神社が存在し、また高田土居城西堀と旧河川部分に該当する。大年神社は、「大年の森」として、鎌倉時代の検註帳に載っており、一里（十二里とも）一坪の数える起点となっている[註8]。最北端は本庄地区で、条里型地割の北東コーナー部分が丘陵部と平野部の境界部に該当する部分である。

この最南端部分は、発掘調査成果からみても旧河川が存在する位置であり、南部平野全体の排水地点に該当する。高田土居城が立地する場所は、縄文時代中期以降の島状の微高地である。その位置は南部平野全体の排水が集中する場所にあり、島状の微高地の両側、東と西に排水路は存在する。2箇所の排水路は、東の古川と西の古川支線部分である。



緑資源公団関連調査

本　調　査	平成14年度	■	1～4区
水田畦畔確認調査	平成14年度	■	①～⑥グリッド
試　掘　調　査	平成13年度	●	1～54グリッド
	平成14年度	▲	1～60グリッド
遺構図化作業	平成14年度	▨	1　区
日本道路公団試掘		○	

中世

中世～近世

近世

0　500m

第209図　南部平野調査地点試掘状況図

条里型地割により正方形に大区画された水田を、さらに小畦畔で長方形に区画している。長方形の長辺部分が南北方向と東西方向のものが両方存在する。これは水の取り入れ口に関係すると考えられ、基本的には短辺部分の標高の高い方に取り入れ口が存在する。

用水路[註3・4]は、南部川の最も上流の一の井用水が、北部の東本庄、谷口地区を灌漑する。三橋井用水は、東本庄、谷口、筋を灌漑する。一の井の補完的な用水である。其乃井用水は、谷口、筋を灌漑する。大井用水は、徳蔵、谷口、筋、熊岡、植田、東吉田、片町、芝、新町を灌漑する。取水は、北側から大きくは三地域に区分されている。最上流の一の井用水は最も北側の水田地帯、三橋井用水は中位の水田地帯、其乃井用水と大井用水で下位の水田地帯を潤す。大井用水に関しては、鎌倉期には成立していないとする見解がある[註7]。

（2）水田の形成

古川と旧河川の埋めたて

現在の古川は、昭和25～30年（1950～55）に改修されたものである。それ以前の古川は、昭和22年米軍撮影の航空写真によると条里型地割に沿って流れていたことがわかる。降雨期には条里型地割末端の高田土居城周辺は、洪水となり、水田も浸かったのである。それ故の改修工事であったが、近年でも降雨期には水田が浸かってしまう状況が応々にみられた。条里型地割に沿って流れる旧古川以前の流路については、緑資源公団の試掘・確認調査により、その流路の想定がなされている。中世水田層直下で検出した旧流路を結んだものである[註6]。また14年度24グリットからは旧流路の肩部を検出している。

徳蔵地区遺跡10-②区の調査では、中世水田層を除去した面、第5層上面で検出した旧河川跡の上層旧河川第1層が自然堆積の層ではなく、人工的に埋められた整地層である。これは、窪地を水平にするために、埋めたてたと考えられる層である。この層の遺物は、弥生時代後期の遺物や須恵器や土師器などが出土するが瓦器は存在しない。最も新しい時期の遺物に土師器皿（第30図、214）がある。口縁部下端の外面に僅かな凹凸がみられ、口縁部内面に沈線がみられる。地域の土器編年が明確でないが、形態からみて平安時代後期、11世紀代と考えられる。

緑資源公団が実施した農用地整備事業に伴う試掘・確認調査では、耕地化された時期は、「25グリッド整地土下層から出土した中世タイプの下駄を上限とし、整地土上層で一定程度出土する瓦器・山茶碗を下限とした範囲の時期」すなわち「11世紀末～12世紀代前半頃」に行われたものとした。「旧流路が埋めたてられたことから、用水・排水には現在、坪界を流れる流路とほぼ同位置に作られた流路が機能していたもの」と推測され、「現在、坪長が標準的な長さよりも長い場所では、中世の同様の地割がみられ（坪長114m）、現在の八丁田圃は中世の大区画を踏襲していた」とした。また東吉田Ⅰ遺跡付近では中世水田層直下の面には、鎌倉時代に属する遺構があることも指摘した。

微高地の削平

微高地を削ったと思われる地点については、数カ所想定できる。11-①区は、高田土居城からの舌状に伸びる微高地が調査区中央部に存在する。両端部分は低くなり、この部分には第4層が存在するが、

高い部分には第4層は存在しない。高い部分にある現在の耕作土が、鎌倉時代にも同様の高さで存在したと想定できる。この微高地では、弥生時代前期の掘立柱建物を検出したが浅いため、それ以降の時期に削平を受けたものと考えられる。12-④区では、弥生時代前期の遺構と古墳時代前期の遺構を同一面で検出したが、共に住居は削平を受けている。調査区の南では、床土直下で遺構が検出できる。このような場所は、中世水田を作る際に削平をしたものであろう。

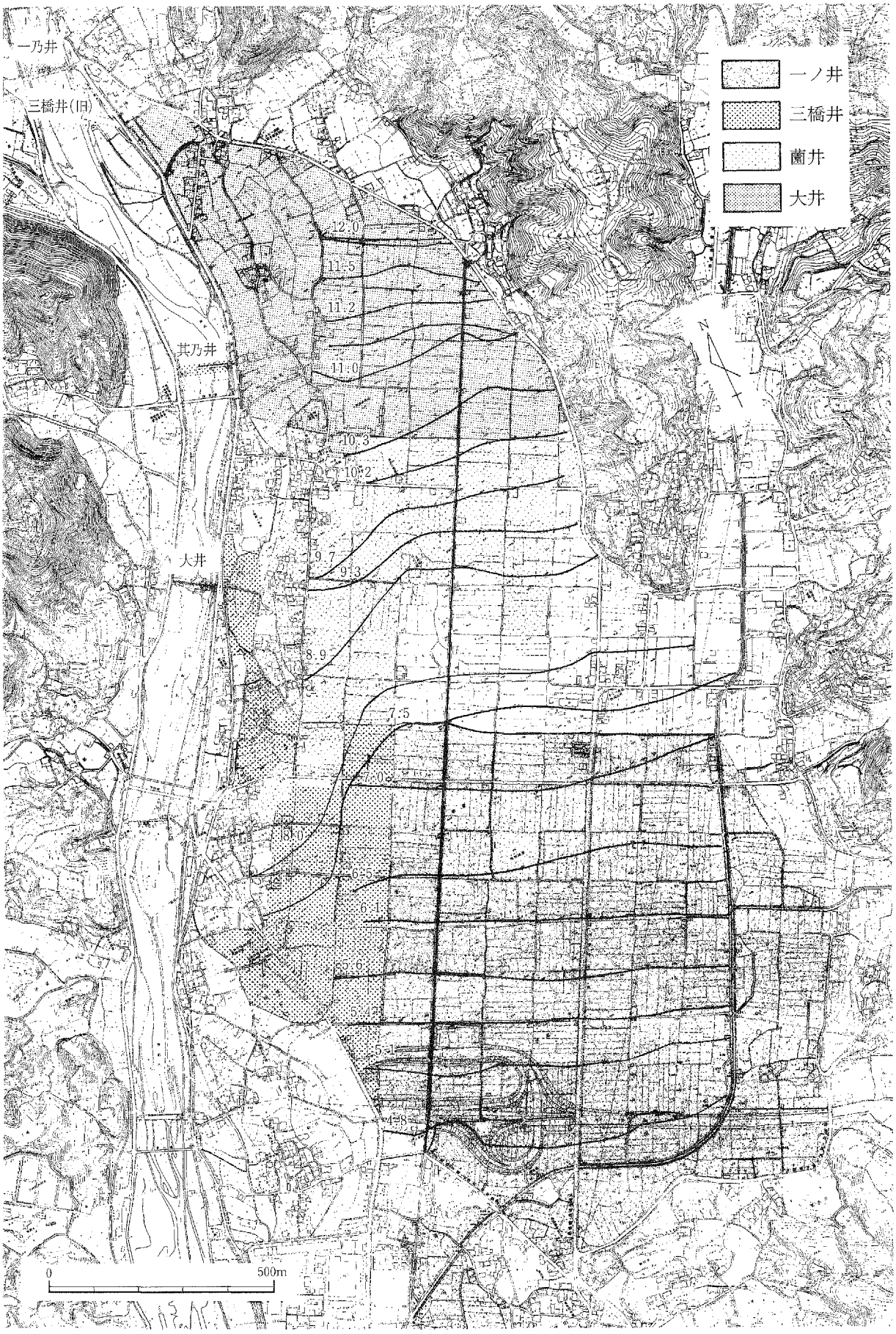
小畦畔の痕跡と坪界の調査

また10-①・②区など各調査区の第5層上面で検出した小畦畔の痕跡と考えられる帯状の遺構は、全て現在の水田区画と同じであるため、条里型地割での長方形の小区画は、少なくともⅠ区、Ⅱ区、Ⅴ区においては、現代の水田と同一方向にあるものと推定される。これは用排水路が作られた当時と同じであることを示唆する。13-⑥・⑩などが坪界に該当する地点であるが、近世に溝は掘り直されており、その初現が判明する考古資料はない。

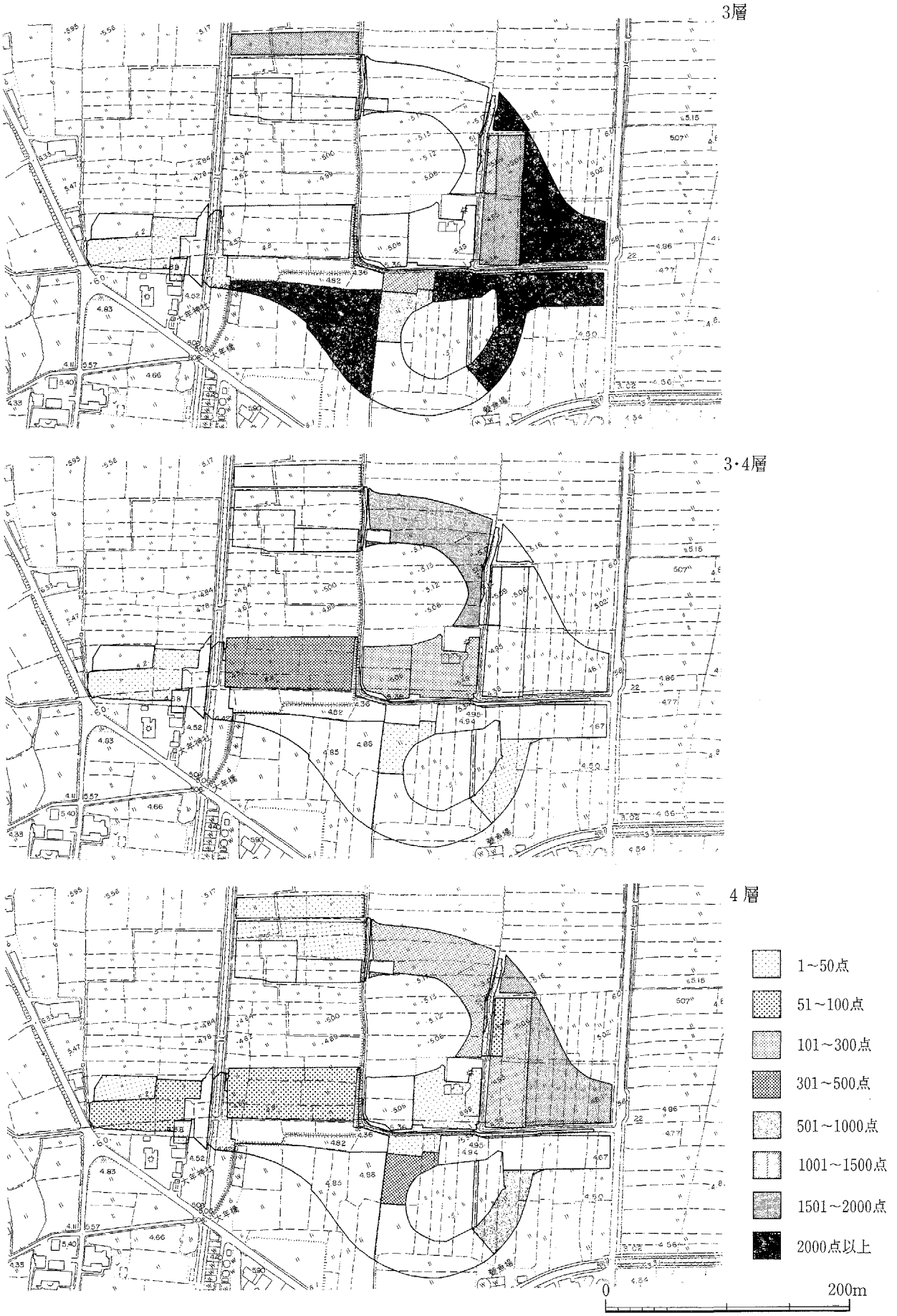
水田層の調査

徳蔵地区遺跡発掘調査では水田層には第4層と第3層があり、二時期存在することが判明した。第4層は鎌倉時代～室町時代を中心とする遺物、12世紀中葉から14世紀中葉の遺物を含む層で、第3層は室町時代、14世紀中葉から15世紀後半の遺物を含む層である。第4・3層の下には基本的には床土を敷かない。下面が粘土層のため、水の滞水ができたのであろう。第3層は砂質の灰色シルト層で、調査区全域に存在する。この3層は第4層の上に造られるが、床土を敷かない。第4層も粘土質で、水漏れがしない土であることから、床土を敷かなかったのであろう。このことからも湿地で、用水よりも排水が主眼になる地域であったことが判明する。第3層は、砂質であることから整地層とも考えたが、水の沈殿を示す鉱物質の堆積があることから水田層と考えられる。第1層である近世～現在耕作土の下の第2層は、床土に該当する。地点により厚さに違いが見られるが、全域の水田で確認できる層である。第4層は水田化された当初の時期であり、同じ条里型地割の上にかさ上げして水田化した時期が第3層である。第2・1層は近世から現在の水田層になる。第4・3層から出土した遺物の出土量は、第4層鎌倉～室町期の遺物は南に多くみられ、第3層室町期の遺物は調査地点全域で多く出土し、全体出土量の半数近くを占める。高田土居城関係のものであろうか。

水田層である第3・4層から出土した遺物を層位と時代別にカウントしたのが第17表である。これを見ると、Ⅰ区の第3・4層から出土する遺物が極端に多いことが分かる。内容的にも縄文時代から室町時代に至る各期のものが連綿とある。Ⅰ区は湿地に作られた水田であったことが発掘調査であきらかになっているが、柱穴や土坑などの遺構がほとんど無く、生活の痕跡を見ることができない。一方、Ⅱ区は微高地に立地し、縄文時代・弥生時代の遺構が検出されている。Ⅱ区のうち11-①区は、第3層がなく、第4層が低い部分にのみ認められる程度であり、必然的に遺構密度に比べて水田層からの遺物の出土が少ない傾向にある。以上のことから伺えることは、微高地であるⅡ区周辺の土で一段低いⅠ区付近の水田を埋めたと言う事である。Ⅰ区の第4層と第3層の形成時期が異なると考えられることから、水田の地ならしは2度に亘ることが推定される。一時期目に関しては、第4層の遺物に



第210図　南部平野灌漑概況区分図(海津一朗氏作成図に加筆)



第211図　中世水田層遺物分布図

Ⅰ区　第3層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			46	1.42%
弥生土器			651	20.15%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	1	0.51%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	52	26.26%
		杯蓋	8	4.04%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	27	13.64%
		甕	105	53.03%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	1	0.51%
		高杯	3	1.52%
		ハソウ	1	0.51%
小計			198	6.13%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	7	7.87%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	1	1.12%
	須恵器	杯身	25	28.09%
		杯蓋	9	10.11%
		鉢	1	1.12%
		壺	28	31.46%
		甕	16	17.98%
		高杯	1	1.12%
		横瓶	1	1.12%
小計			89	2.76%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	10	66.67%
	須恵器		4	26.67%
	灰釉		1	6.67%
	緑釉		0	0.00%
小計			15	0.46%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	162	28.13%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	100	17.36%
		塝	5	0.87%
	瓦器	椀	125	21.70%
		皿	42	7.29%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	80	13.89%
		甕	6	1.04%
	陶器	備前	2	0.35%
		常滑	4	0.69%
		瀬戸美濃灰釉	3	0.52%
	中国製磁器	青磁	21	3.65%
		白磁	9	1.56%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	17	2.95%
小計			576	17.83%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	1029	62.18%
		椀	1	0.06%
		捏鉢	13	0.79%
		土釜	129	7.79%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	137	8.28%
	瓦器（質）	捏鉢	9	0.54%
		土釜(羽釜)	19	1.15%
		塝	4	0.24%
		甕	15	0.91%
		火舎	24	1.45%
	陶器	備前	166	10.03%
		瀬戸美濃	26	1.57%
		常滑	26	1.57%
		信楽	1	0.06%
	中国製陶磁器	青磁	43	2.60%
		白磁	8	0.48%
		青白磁	3	0.18%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	2	0.12%
		褐釉	0	0.00%
小計			1655	51.24%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			3230	100.00%

Ⅱ区　第3層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			0	0.00%
弥生土器			7	17.07%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	6	60.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	3	30.00%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	1	10.00%
小計			10	24.39%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	0	0.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			0	0.00%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
須恵器			1	100.00%
灰釉			0	0.00%
緑釉			0	0.00%
小計			1	2.44%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	瓦器	椀	6	75.00%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	2	25.00%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			8	19.51%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	5	33.33%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	1	6.67%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	1	6.67%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塝	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	1	6.67%
	陶器	備前	5	33.33%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	1	6.67%
		白磁	1	6.67%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			15	36.59%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			41	100.00%

Ⅲ区　第3層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			1	1.72%
弥生土器			0	0.00%
古墳時代	土師器	椀	3	75.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	1	25.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	0	0.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	0	0.00%
小計			4	6.90%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	0	0.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			0	0.00%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	8	100.00%
須恵器			0	0.00%
灰釉			0	0.00%
緑釉			0	0.00%
小計			8	13.79%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	1	11.11%
		塝	0	0.00%
	瓦器	椀	4	44.44%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	3	33.33%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	1	11.11%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			9	15.52%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	24	66.67%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	1	2.78%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塝	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	7	19.44%
		瀬戸美濃	3	8.33%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	1	2.78%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			36	62.07%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			58	100.00%

Ⅳ区　第3層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			17	0.76%
弥生土器			173	7.76%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	7	2.80%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	31	12.40%
		杯蓋	18	7.20%
		鉢・捏鉢	1	0.40%
		壺	21	8.40%
		甕	167	66.80%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	5	2.00%
		ハソウ	0	0.00%
小計			250	11.22%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	21	63.64%
		杯蓋	2	6.06%
		鉢	0	0.00%
		壺	7	21.21%
		甕	1	3.03%
		高杯	1	0.00%
		横瓶	1	0.00%
小計			33	1.48%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
須恵器			0	0.00%
灰釉			0	0.00%
緑釉			1	100.00%
小計			1	0.04%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	18	16.82%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	15	14.02%
		塝	0	0.00%
	瓦器	椀	33	30.84%
		皿	6	5.61%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	13	12.15%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	1	0.93%
	中国製磁器	青磁	7	6.54%
		白磁	7	6.54%
		青白磁	1	0.93%
		山茶碗	6	5.61%
小計			107	4.80%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	1429	86.71%
		椀	1	0.06%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	22	1.33%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	25	1.52%
	瓦器（質）	捏鉢	1	0.06%
		土釜(羽釜)	6	0.36%
		塝	0	0.00%
		甕	3	0.18%
		火舎	13	0.79%
	陶器	備前	112	6.80%
		瀬戸美濃	7	0.42%
		常滑	6	0.36%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	17	1.03%
		白磁	4	0.24%
		青白磁	0	0.00%
		染付	1	0.06%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	1	0.06%
小計			1648	73.93%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			2229	100.00%

第17-1表　包含層出土遺物器種構成表

Ⅴ区　第３層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			72	2.24%
弥生土器			856	26.65%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	1	0.40%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	52	20.63%
		杯蓋	10	3.97%
		鉢・捏鉢	4	1.59%
		壺	37	14.68%
		甕	138	54.76%
		提瓶	8	3.17%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	2	0.79%
小計			252	7.85%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	2	0.00%
		甕・土釜	15	0.00%
		塝	1	0.00%
	須恵器	杯身	107	0.00%
		杯蓋	27	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	58	0.00%
		甕	107	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	2	0.00%
小計			319	9.93%
平安時代	土師器	椀	1	3.70%
		甕	2	7.41%
		竈	1	3.70%
	黒色土器	皿	1	3.70%
		椀	10	37.04%
	須恵器		9	33.33%
	灰釉		2	7.41%
	緑釉		1	3.70%
小計			27	0.84%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	259	37.16%
		捏鉢	1	0.14%
		土釜・甕	106	15.21%
		塝	2	0.29%
	瓦器	椀	155	22.24%
		皿	40	5.74%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	94	13.49%
		甕	5	0.72%
	陶器	備前	1	0.14%
		常滑	2	0.29%
		瀬戸美濃系	7	1.00%
	中国製磁器	青磁	6	0.86%
		白磁	9	1.29%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	10	1.43%
小計			697	21.70%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	643	65.02%
		椀	1	0.10%
		捏鉢	4	0.40%
		土釜	38	3.84%
		火舎	1	0.10%
		甕	0	0.00%
		塝	30	3.03%
	瓦器（質）	捏鉢	7	0.71%
		土釜(羽釜)	8	0.81%
		塝	0	0.00%
		甕	12	1.21%
		火舎	6	0.61%
	陶器	備前	175	17.69%
		瀬戸美濃	17	1.72%
		常滑	8	0.81%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	28	2.83%
		白磁	10	1.01%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	1	0.10%
小計			989	30.79%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			3212	100.00%

Ⅱ区　第３・４層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			6	0.42%
弥生土器			349	24.35%
古墳時代	土師器	椀	2	1.90%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	1	0.95%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	49	46.67%
		杯蓋	2	1.90%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	7	6.67%
		甕	40	38.10%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	4	3.81%
		ハソウ	0	0.00%
小計			105	7.33%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	8	33.33%
		杯蓋	2	8.33%
		鉢	0	0.00%
		壺	8	33.33%
		甕	6	25.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			24	1.67%
平安時代	土師器	椀	2	9.09%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	6	27.27%
		椀	14	63.64%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			22	1.54%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	49	23.11%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	33	15.57%
		塝	7	3.30%
	瓦器	椀	62	29.25%
		皿	13	6.13%
		足釜	2	0.94%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	31	14.62%
		甕	1	0.47%
	陶器	備前	4	1.89%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃系	1	0.47%
	中国製磁器	青磁	4	1.89%
		白磁	4	1.89%
		青白磁	1	0.47%
		山茶碗	0	0.00%
小計			212	14.79%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	447	62.52%
		椀	4	0.56%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	72	10.07%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	37	5.17%
	瓦器（質）	捏鉢	2	0.28%
		土釜(羽釜)	2	0.28%
		塝	0	0.00%
		甕	16	2.24%
		火舎	2	0.28%
	陶器	備前	93	13.01%
		瀬戸美濃	8	1.12%
		常滑	10	1.40%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	16	2.24%
		白磁	6	0.84%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			715	49.90%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			1433	100.00%

Ⅲ区　第３・４層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			16	3.55%
弥生土器			299	66.30%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	2	5.56%
		甕・土釜	3	8.33%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	22	61.11%
		杯蓋	1	2.78%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	3	8.33%
		甕	5	13.89%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	0	0.00%
小計			36	7.98%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	2	50.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	2	50.00%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			4	0.89%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	4	100.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			4	0.89%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	38	61.29%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	6	9.68%
		塝	0	0.00%
	瓦器	椀	5	8.06%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	7	11.29%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	1	1.61%
		瀬戸美濃系	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	5	8.06%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			62	13.75%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	7	23.33%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	7	23.33%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	5	16.67%
		塝	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	11	36.67%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			30	6.65%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			451	100.00%

Ⅴ区　第３・４層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			5	3.79%
弥生土器			59	44.70%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	3	27.27%
		杯蓋	2	18.18%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	6	54.55%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	0	0.00%
小計			11	8.33%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	須恵器	杯身	1	16.67%
		杯蓋	1	16.67%
		鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	4	66.67%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			6	4.55%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			0	0.00%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	11	64.71%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	0	0.00%
		塝	0	0.00%
	瓦器	椀	5	29.41%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	1	5.88%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃系	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			17	12.88%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	18	52.94%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塝	11	32.35%
	瓦器（質）	捏鉢	1	2.94%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塝	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	3	8.82%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	1	2.94%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			34	25.76%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			132	100.00%

第17-２表　包含層出土遺物器種構成表

Ⅰ区　第4層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			6	0.59%
弥生土器			321	31.59%
古墳時代	土師器	椀	3	1.83%
		高杯	1	0.61%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	88	53.66%
		杯蓋	37	22.56%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	20	12.20%
		甕	14	8.54%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	1	0.61%
		ハソウ	0	0.00%
小計			164	16.14%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	10	14.08%
		甕・土釜	1	1.41%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	23	32.39%
		杯蓋	6	8.45%
		鉢	0	0.00%
		壺	4	5.63%
		甕	9	12.68%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	18	25.35%
小計			71	6.99%
平安時代	土師器	椀	2	5.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	5	12.50%
		椀	12	30.00%
	須恵器		19	47.50%
	灰釉		2	5.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			40	3.94%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	144	49.83%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	24	8.30%
		塙	0	0.00%
	瓦器	椀	44	15.22%
		皿	28	9.69%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	26	9.00%
		甕	1	0.35%
	陶器	備前	2	0.69%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	1	0.35%
	中国製磁器	青磁	13	4.50%
		白磁	2	0.69%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	4	1.38%
小計			289	28.44%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	30	24.00%
		椀	2	1.60%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	19	15.20%
		火舎	0	0.00%
		甕	1	0.80%
		塙	9	7.20%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	5	4.00%
		塙	18	14.40%
		甕	3	2.40%
		火舎	1	0.80%
	陶器	備前	27	21.60%
		瀬戸美濃	3	2.40%
		常滑	3	2.40%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	4	3.20%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			125	12.30%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			1016	100.00%

Ⅱ区　第4層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			1	0.72%
弥生土器			74	53.62%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	4	30.77%
		杯蓋	1	7.69%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	1	7.69%
		甕	5	38.46%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	2	15.38%
小計			13	9.42%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	2	40.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	3	60.00%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			5	3.62%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	2	100.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			2	1.45%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	6	27.27%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	0	0.00%
		塙	3	13.64%
	瓦器	椀	3	13.64%
		皿	9	40.91%
		足釜	1	4.55%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	0	0.00%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			22	15.94%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	8	38.10%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	7	33.33%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塙	4	19.05%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塙	0	0.00%
		甕	1	4.76%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	1	4.76%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			21	15.22%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			138	100.00%

Ⅲ区　第4層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			46	30.87%
弥生土器			61	40.94%
古墳時代	土師器	椀	2	9.09%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	1	4.55%
	須恵器	杯身	15	68.18%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	3	13.64%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	1	4.55%
		ハソウ	0	0.00%
小計			22	14.77%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	2	66.67%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	1	33.33%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			3	2.01%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			0	0.00%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	17	100.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	瓦器	椀	0	0.00%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	0	0.00%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			17	11.41%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塙	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			0	0.00%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			149	100.00%

Ⅳ区　第4層出土遺物器種構成表

時代	種類	器種	点数	比率%
縄文土器			0	0.00%
弥生土器			0	0.00%
古墳時代	土師器	椀	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	0	0.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		ハソウ	0	0.00%
小計			0	0.00%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	0	0.00%
		杯蓋	0	0.00%
		鉢	0	0.00%
		壺	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			0	0.00%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	0	0.00%
		椀	0	0.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			0	0.00%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	瓦器	椀	0	0.00%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	0	0.00%
		甕	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	0	0.00%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	0	0.00%
小計			0	0.00%

時代	種類	器種	点数	比率%
室町時代	土師器	皿	3	0.00%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塙	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			3	100.00%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			3	100.00%

第17-3表　包含層出土遺物器種構成表

V区　第4層出土遺物器種構成表

時代・種類・器種			点数	比率%
縄文土器			21	2.51%
弥生土器			411	49.05%
古墳時代	土師器	椀	1	0.41%
		高杯	0	0.00%
		甕・土釜	2	0.81%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	78	31.71%
		杯蓋	67	27.24%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	10	4.07%
		甕	82	33.33%
		提瓶	1	0.41%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	5	2.03%
		ハソウ	0	0.00%
小計			246	29.36%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	6	13.33%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	26	57.78%
		杯蓋	4	8.89%
		鉢	0	0.00%
		壺	3	6.67%
		甕	6	13.33%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			45	5.37%
平安時代	土師器	椀	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	1	100.00%
		椀	0	0.00%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			1	0.12%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	57	64.77%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	4	4.55%
		塙	0	0.00%
	瓦器	椀	19	21.59%
		皿	0	0.00%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	3	3.41%
		甕	1	1.14%
	陶器	備前	0	0.00%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	2	2.27%
	中国製磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	2	2.27%
小計			88	10.50%

時代・種類・器種			点数	比率%
室町時代	土師器	皿	16	61.54%
		椀	0	0.00%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	1	3.85%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塙	5	19.23%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	0	0.00%
		塙	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		火舎	0	0.00%
	陶器	備前	1	3.85%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		常滑	2	7.69%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	1	3.85%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			26	3.10%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			838	100.00%

全地区　第3層出土遺物器種構成表

時代・種類・器種			点数	比率%
縄文土器			137	1.39%
弥生土器			1759	17.79%
古墳時代	土師器	椀	3	0.39%
		高杯	2	0.26%
		甕・土釜	10	1.31%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	146	19.16%
		杯蓋	44	5.77%
		鉢・捏鉢	5	0.66%
		壺	92	12.07%
		甕	436	57.22%
		提瓶	11	1.44%
		平瓶	1	0.13%
		高杯	8	1.05%
		ハソウ	4	0.52%
小計			762	7.71%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	9	1.98%
		甕・土釜	15	3.30%
		塙	2	0.44%
	須恵器	杯身	162	35.68%
		杯蓋	38	8.37%
		鉢	1	0.22%
		壺	95	20.93%
		甕	126	27.75%
		高杯	2	0.44%
		横瓶	4	0.88%
小計			454	4.59%
平安時代	土師器	椀	1	1.92%
		甕	2	3.85%
		竈	1	1.92%
	黒色土器	皿	1	1.92%
		椀	28	53.85%
	須恵器		14	26.92%
	灰釉		3	5.77%
	緑釉		2	3.85%
小計			52	0.53%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	562	31.27%
		捏鉢	1	0.06%
		土釜・甕	249	13.86%
		塙	8	0.45%
	瓦器	椀	499	27.77%
		皿	110	6.12%
		足釜	0	0.00%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	205	11.41%
		甕	12	0.67%
	陶器	備前	3	0.17%
		常滑	7	0.39%
		瀬戸美濃灰釉	17	0.95%
	中国製磁器	青磁	35	1.95%
		白磁	41	2.28%
		青白磁	1	0.06%
		山茶碗	47	2.62%
小計			1797	18.17%

時代・種類・器種			点数	比率%
室町時代	土師器	皿	3404	69.09%
		椀	4	0.08%
		捏鉢	17	0.35%
		土釜	351	7.12%
		火舎	1	0.02%
		甕	1	0.02%
		塙	245	4.97%
	瓦器（質）	捏鉢	19	0.39%
		土釜(羽釜)	34	0.69%
		塙	4	0.08%
		甕	33	0.67%
		火舎	48	0.97%
	陶器	備前	503	10.21%
		瀬戸美濃	65	1.32%
		常滑	52	1.06%
		信楽	1	0.02%
	中国製陶磁器	青磁	111	2.25%
		白磁	23	0.47%
		青白磁	3	0.06%
		染付	4	0.08%
		鉄釉	2	0.04%
		褐釉	2	0.04%
小計			4927	49.83%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			9888	100.00%

全地区　第3・4層出土遺物器種構成表

時代・種類・器種			点数	比率%
縄文土器			27	1.34%
弥生土器			707	35.07%
古墳時代	土師器	椀	2	1.32%
		高杯	2	1.32%
		甕・土釜	4	2.63%
		甑	0	0.00%
	須恵器	杯身	74	48.68%
		杯蓋	5	3.29%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	10	6.58%
		甕	51	33.55%
		提瓶	0	0.00%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	4	2.63%
		ハソウ	0	0.00%
小計			152	7.54%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	0	0.00%
		甕・土釜	0	0.00%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	11	32.35%
		杯蓋	3	8.82%
		鉢	0	0.00%
		壺	10	29.41%
		甕	10	29.41%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	0	0.00%
小計			34	1.69%
平安時代	土師器	椀	2	7.69%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	6	23.08%
		椀	18	69.23%
	須恵器		0	0.00%
	灰釉		0	0.00%
	緑釉		0	0.00%
小計			26	1.29%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	98	33.68%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	39	13.40%
		塙	7	2.41%
	瓦器	椀	72	24.74%
		皿	13	4.47%
		足釜	2	0.69%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	39	13.40%
		甕	1	0.34%
	陶器	備前	4	1.37%
		常滑	1	0.34%
		瀬戸美濃灰釉	1	0.34%
	中国製磁器	青磁	9	3.09%
		白磁	4	1.37%
		青白磁	1	0.34%
		山茶碗	0	0.00%
小計			291	14.43%

時代・種類・器種			点数	比率%
室町時代	土師器	皿	472	60.59%
		椀	4	0.51%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	79	10.14%
		火舎	0	0.00%
		甕	0	0.00%
		塙	48	6.16%
	瓦器（質）	捏鉢	3	0.39%
		土釜(羽釜)	7	0.90%
		塙	0	0.00%
		甕	16	2.05%
		火舎	2	0.26%
	陶器	備前	107	13.74%
		瀬戸美濃	8	1.03%
		常滑	10	1.28%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	17	2.18%
		白磁	6	0.77%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			779	38.64%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			2016	100.00%

全地区　第4層出土遺物器種構成表

時代・種類・器種			点数	比率%
縄文土器			74	3.45%
弥生土器			867	40.44%
古墳時代	土師器	椀	6	1.35%
		高杯	1	0.22%
		甕・土釜	2	0.45%
		甑	1	0.22%
	須恵器	杯身	185	41.57%
		杯蓋	105	23.60%
		鉢・捏鉢	0	0.00%
		壺	31	6.97%
		甕	104	23.37%
		提瓶	1	0.22%
		平瓶	0	0.00%
		高杯	7	1.57%
		ハソウ	2	0.45%
小計			445	20.76%
飛鳥・奈良時代	土師器	皿・杯・椀	10	8.06%
		甕・土釜	7	5.65%
		塙	0	0.00%
	須恵器	杯身	53	42.74%
		杯蓋	10	8.06%
		鉢	0	0.00%
		壺	11	8.87%
		甕	15	12.10%
		高杯	0	0.00%
		横瓶	18	14.52%
小計			124	5.78%
平安時代	土師器	椀	2	4.65%
		甕	0	0.00%
		竈	0	0.00%
	黒色土器	皿	6	13.95%
		椀	14	32.56%
	須恵器		19	44.19%
	灰釉		2	4.65%
	緑釉		0	0.00%
小計			43	2.01%
鎌倉時代	土師器	皿・椀	224	53.85%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜・甕	28	6.73%
		塙	3	0.72%
	瓦器	椀	66	15.87%
		皿	37	8.89%
		足釜	1	0.24%
	須恵器（質）	皿・椀・捏鉢	29	6.97%
		甕	2	0.48%
	陶器	備前	2	0.48%
		常滑	0	0.00%
		瀬戸美濃灰釉	3	0.72%
	中国製磁器	青磁	13	3.13%
		白磁	2	0.48%
		青白磁	0	0.00%
		山茶碗	6	1.44%
小計			416	19.40%

時代・種類・器種			点数	比率%
室町時代	土師器	皿	57	32.57%
		椀	2	1.14%
		捏鉢	0	0.00%
		土釜	27	15.43%
		火舎	0	0.00%
		甕	1	0.57%
		塙	18	10.29%
	瓦器（質）	捏鉢	0	0.00%
		土釜(羽釜)	5	2.86%
		塙	18	10.29%
		甕	4	2.29%
		火舎	1	0.57%
	陶器	備前	28	16.00%
		瀬戸美濃	3	1.71%
		常滑	6	3.43%
		信楽	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	4	2.29%
		白磁	1	0.57%
		青白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
		鉄釉	0	0.00%
		褐釉	0	0.00%
小計			175	8.16%
江戸時代	陶磁器	備前	0	0.00%
		瀬戸美濃	0	0.00%
		唐津	0	0.00%
		伊万里	0	0.00%
		波佐見	0	0.00%
		志野	0	0.00%
		その他	0	0.00%
	中国製陶磁器	青磁	0	0.00%
		白磁	0	0.00%
		染付	0	0.00%
小計			0	0.00%
合計			2144	100.00%

第17-4表　包含層出土遺物器種構成表

室町時代の土器が一定量含まれることから、少なくとも鎌倉時代ではないことが明らかである。

緑資源公団の調査で検出した水田層では、中世は存在せず近世だけの水田層、中世の水田層、中世～近世の水田層などが存在することが判明した。近世だけの水田層については、古川旧流路の氾濫原もしくは低湿地にあたるため、古川の氾濫か近世以降に水田が改変されたものと推定されている。

（3）結語

開発は排水路の関係から、標高の高い地域から南の低い地域に向かって行われたと考えられる。地形から用水と排水を考慮しつつ、最大限の面積を確保するための南北主軸線を決め、東西主軸は平野部と丘陵部の境目に最北端ラインをおき、碁盤目を引いたと想定される。最長南北軸線は、古川支線のラインである。南端部は南部平野の古来よりの排水路に該当する地点である。

最初に水田化されたのは、最上流の一の井用水が灌漑する地域、最も北側の水田地帯で、順次、南に向かって低湿地に開発は進んでいったと考えられる。地形の起伏は、水田化のための土木工事で高い地域は削られ、河川や池、窪地は埋めたてられ平坦にされた。平野部を流れる古川は埋めたてられ条里型地割に沿って流された。

南部の低湿地部分の開発は、考古資料から鎌倉時代と考えられる。それ故、中位、上位の水田の開発は平安時代に遡る可能性がある。南部荘の、本荘、新荘は文献では1177年には成立していた[註3]。徳蔵地区遺跡の調査対象の水田は、室町時代にかさ上げされている。南部の条里型地割は、現在まで改変されることなく当初の区画を踏襲している事が判明した。

註1　中野栄治『紀伊国の条里制』古今書院　1989年
註2　額田雅裕「南部平野における地形面の区分について」『和歌山地理』7号　1987年
註3　海津一朗『中世探訪　紀伊国南部荘と高田土居』2000
註4　和歌山大学中世荘園調査会『中世1240年の荘園景観』2002
註5　渋谷高秀「発掘された中世水田面」『くちくまの』115　1999年
註6　丹野　拓「第3章　考察」『南部平野区画整理工事にかかる発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター2003
註7　坂本亮太「紀伊国南部荘における条里と検注」『条里制・古代都市研究』18号　2002
註8　海津一朗註4に同じ

第５節　高田土居城について

高田土居城は、南部平野最南端部、広大な条里型地割によって区画される水田から流れ出る水が一点に集約される場所に位置する。城跡は、単郭形式で、四周に幅10～12mの堀が巡る東西70m、南北50m、高さ２mの長方形の台地と認識されてきた。しかし、現地踏査や航空写真、地図によって単郭の城ではなく、二重の堀をもつ複郭の城であるとの想定もあり、調査を実施したところ、想定通り、複郭の城郭であることが判明した。

発掘調査は、外郭部を対象に二度にわたり行われた。北辺部の堀の調査では、複郭構造の城郭の存在と堀の変遷過程が、後の調査では外郭部形態とその詳細な内容、及び変遷過程が判明した。さらに内郭部の整理が進めば、地域の中での、また南部荘での高田土居城の位置付けが明確になる。[註1]

（１）高田土居城成立以前の条里型地割

第４層中世水田層は、内郭部・外郭部全域に存在する。12世紀中葉から14世紀中葉の遺物を含む水田層である。

高田土居城が立地する場所は、条里型地割形成以前はどのような地形であり、また第４層水田層形成時の周辺水路はどうなっていたのか。

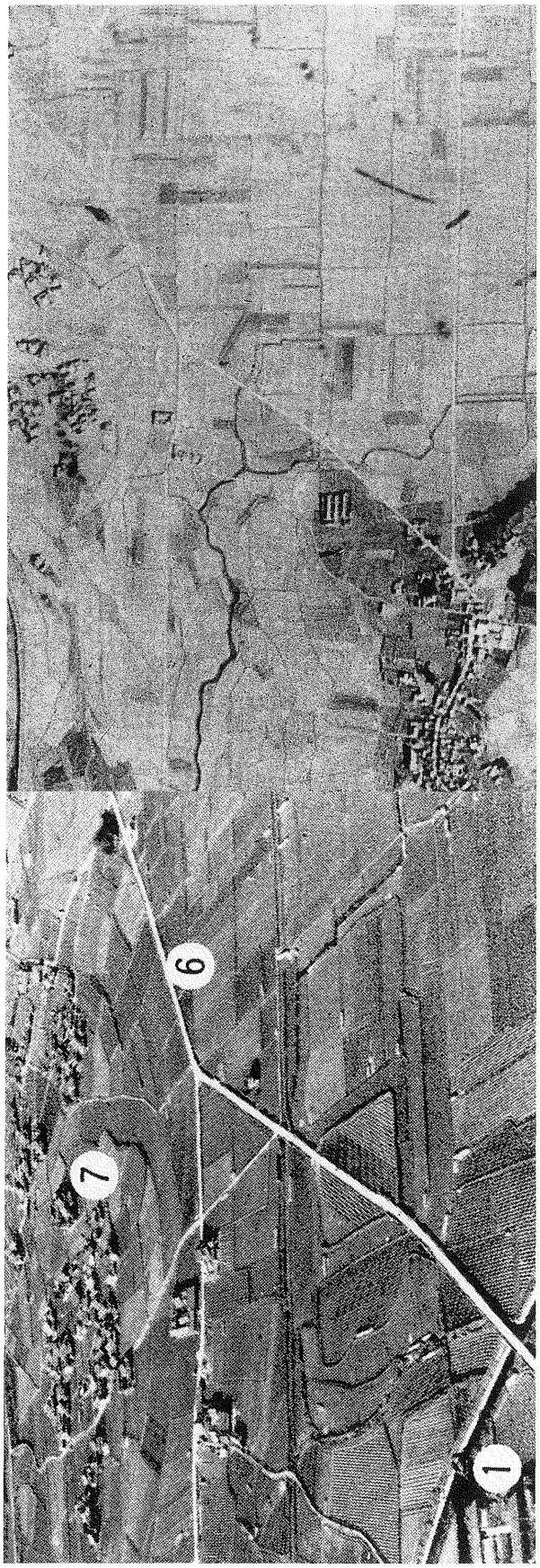
条里型地割施工以前の高田土居城が立地する地点は、縄文時代中期以降の微高地であり、南側と西側には旧河川が流れていた。南部平野全体の排水路はこの二つで、それ以外は存在しない。この地形を踏まえて、第４層の水田が内郭部･外郭部に形成された。条里型地割施工の南北ラインの最長線は、このうちの一つ、西辺の堀部分に流れ込む排水路に該当する。この想定水路は、昭和22年米軍航空写真から見ると、旧古川は条里型地割を縫うようにして南辺堀部に流れ込み、北辺の古川支線は北辺堀に流れ、西辺の堀部分に流れ込む構造になっている。それ故、北辺部、西辺部、南辺部の三方向は各水路により囲まれていたことになる。故に、微高地部分の東堀部を掘削して遮断すれば、四方を囲まれる構造を元々持っていたことになる。また東側には水路が存在した可能性もある。四方を遮断された内部空間は微高地で、生活空間としては最適である。またこの場所は、西には南部川が流れ、東からは丘陵部が伸びて、その間を古川・古川支線により遮断され隔絶した微高地、海方向の南から南部平野に入るには無視できない空間である。また南部平野に広がる広大な条里型地割全体を南から見渡せる場所としては、最適な空間である。

のちに形成される大規模な二町四方の大きさを持つ高田土居城は、条里型地割の上に造られたため、平面形態を規定された事が判明する。鎌倉時代に属する遺構は、高田土居城内郭部・外郭部からは検出できないため、この時期に館の成立はないものと考えられる。

（２）堀６の掘削と内郭部の形成－平地居館の成立

施設は、内郭部が第４層水田層の上に、外郭部が第３層の上に造られている。第３層は14世紀中葉から15世紀後半の遺物を含む層である。外郭部の外堀２・３北東隅は第３層を切って造られている。

内郭部には、第４層水田層の上に第３層室町時代水田層は存在しない。第４層の上には、焼土を含んだ整地層が存在する。もともと第３層水田層が形成されず、第４層水田層の上に内郭部を造ったの



上、米軍撮影昭和28年航測写真
下、高田土居城跡航測写真上南部誌より転載
写真11　航空写真

か、整地層を造る際に第３層を削平したのかは不明である。内郭部では第４層水田層の上面から土坑が検出でき、大小の二種類の大きさをもつ中世土器の様相を残した土師器皿が大量に出土した。15世紀後半の堀６出土の土師器皿や第4層上面検出遺構出土遺物には、大中小三種類の皿が存在しており、それとの比較からして、より古い時期15世紀前半段階と想定でき、その時期には内郭部は成立していた可能性が強い。内郭部成立は第３層が形成される以前にあり、そのために水田層を内郭部には造れなかったと考えられる。

外郭部調査では、堀６-外堀１・２・３を検出した。南北ラインの条里型地割に沿った遺構は、外堀１と堀６である。外堀２・３は条里型地割から外れる。堀６は外堀１に切られる。堀６ｂは南北方向の条里型地割に沿って掘削されている。南北方向に掘削された堀底面は、中央部が凸であり、東側の堀６ｃ底面は条里型地割の南北坪界にのって、南へと一直線に進む。北へのラインは、外堀１と外堀２の間に井戸による撹乱を受けた部分にのって条里型地割ラインになる。(第81図参照)それ故、南北坪界上に掘削される窪みが直線的に南北方向へ延びることを根拠に、条里型地割施工時の水路と想定できる。条里型地割施工時、東側の坪界を南北に走る直線的な水路、堀６の前身が形成され、この溝を利用して長方形の区画をもつ方形区画が作られたと想定できる。内郭部の現状で残る堀を拡大した長方形の形状をもち、水路と併せて館としての機能をもつ。長辺105mの大きさである。この段階で一町四方に近い大きさの水田を潰し、方形居館を作った事になる。堀６内部を居館空間と考えると第３層が存在しない事が理解できる。外郭部には第３層が存在することから、方形居館形成時には外郭部は存在せず、高田土居城

内郭部の北部、東部には水田層がひろがっていたことになる。

（３）堀６廃絶と外堀１・２・３の掘削―城館の成立

堀６は、バラス層により一気に埋められる。内郭部調査の際に延長線上に堀６を検出したが、堆積状況は外郭部調査と同じである。堀６の北東隅には北方向から15世紀後半代の一括遺物が投棄されている。また外堀１・２・３最下層からも同時期の遺物が出土している。堀６埋土の上層はバラスであり、外堀１・２・３を掘削する際に出る土と同一である。埋土や遺物からみて、堀６を埋めて新たに造った一連の堀群は、15世紀後半の時期と考えられる。

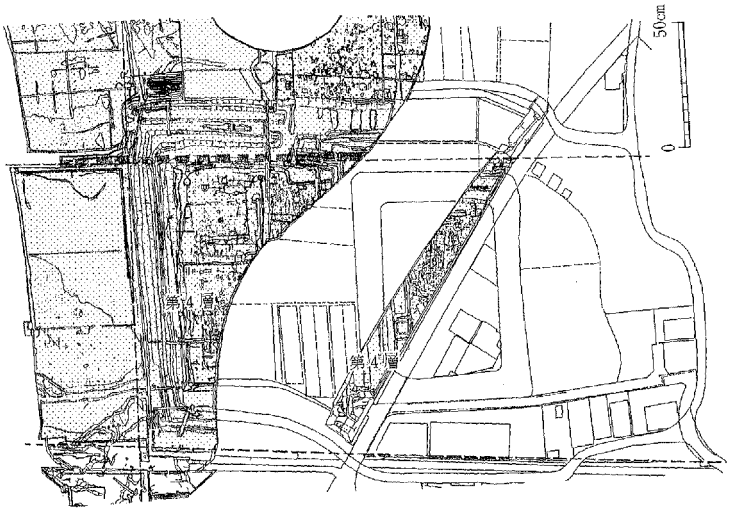
外堀1・２・３は、形状や規模、堆積状況、出土遺物などから同時期に掘削され、同じ変遷過程を歩み、埋まったと考えられる。また平面規模、断面形状、堆積状況は、内郭部に残る堀に非常によく似ており、内郭部の堀も同時期に掘削されたと考えられる。

掘６を埋めて一連の堀を作った理由は、堀幅を格段に大きく深くした事、外堀１による複雑な屈曲を作り出した事、堀の数を多くした事などから、城郭形成のためと考えられる。

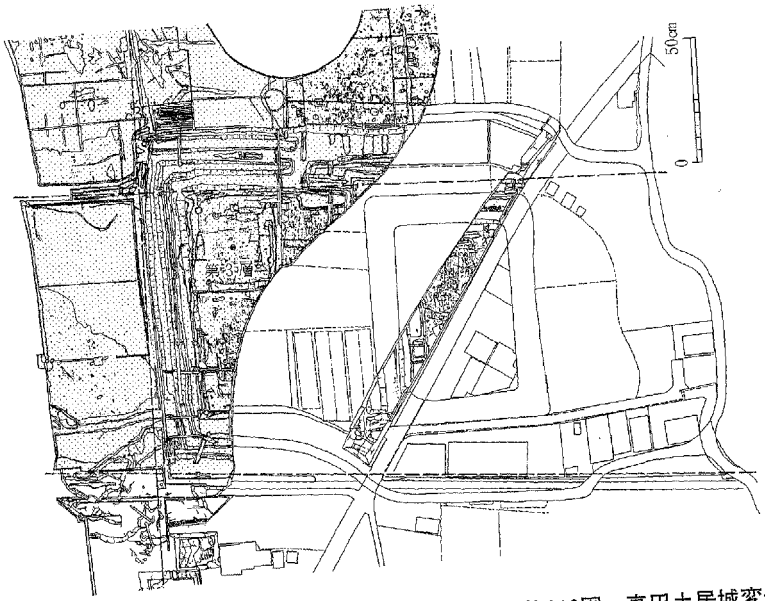
外堀１は外郭部の平面形態をつくる。取水口も判明しにくい構造であり、城の形態を規制する堀である。地形から考えられる水の流れに矛盾するような直角の折れ部分など外郭部の平面形態は、城として防御を主眼とするためである。折れ部分の北側には三条の堀を掘り、南では一条になり17mの大規模な堀になっている。外郭を挟んで西側の現状地形は、緩やかにカーブしており、地形的に東と同様の折れ部分が想定できる。左右対称の外郭部形状をもっていたのであろう。

堀は城郭を形成するが、基本的に条里型地割に合わせて作られた堀であるため、水利機能も併せ持つ。外堀２・３は、断面形状や堆積状況から考えて、水を流すことを主眼とする堀である。しかし、外堀１と合わせることにより二重・三重になり、より防御性も強くなる。外堀１は条里型地割に沿った外堀であるが、外堀２・３の東辺部分は、外堀１の外側に順次造られたため、条里型地割よりも外側にはみ出てしまう。上流からの水は外郭部の外堀２・３の北東隅から取り入れを行う構造である。これは城郭として防御を主眼としつつ、水の流れを規制し溜める機能ももたせるために、外堀１より東に造り、条里型地割よりも東外側へ突き出たと考えられる。また、北辺外堀１と外堀２は、西部分で外堀２が狭くなっており、外堀２が急激に流れた際に外堀１へ流し貯める構造であることも、水を貯める構造を外堀１が持っていたためと考えられる。外堀１・２の東辺南北ラインの堀構造は、高低差からは、南から北方向へ水を流し、さらに東から西へと流す。また外堀１・２・３は段差を設けており、外堀１の堀底が深く、外堀２、外堀３となっている。外堀１・２・３は南で一条の堀になるが、一条になる場所でも三条の堀とは段差をもち一段深くなつ。一条になった堀部分の底面高に南北の高低差はなく、平坦である。外堀３より流れてくる水を一条の堀で貯めつつ、それが満杯になった段階で外堀１へ、さらに水位が高くなれば外堀２へ流す構造である。外堀１の南端部分に木材による土留めを行うが、これは自然地形の高低差からは北から南に水が流れ、水が当たる箇所に該当するための土留めと想定できるが、実際はそうではなく、堀６を埋めたために基盤が脆弱で土漏れがあり、そのために土留めが必要であったため施したのである。外堀幅が17mと巨大であるため、橋が造られるが、

①条里型水田形成以前の地形



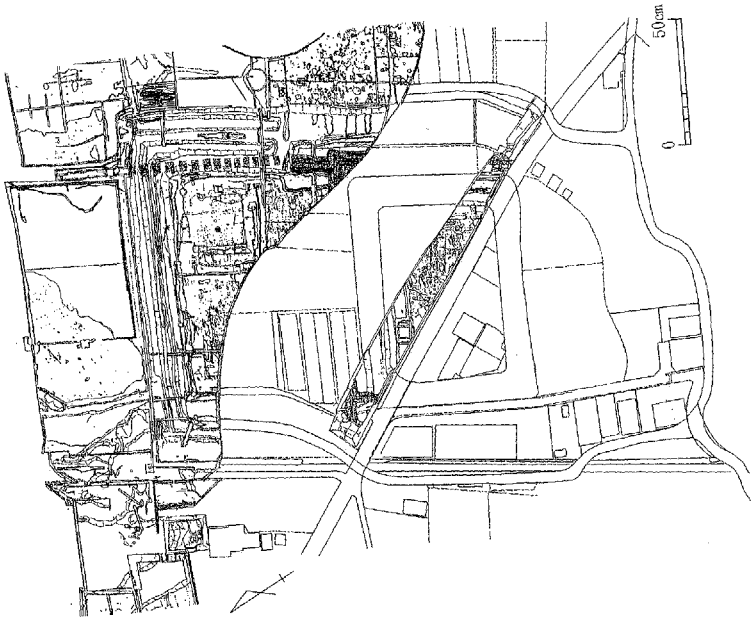
②条里型水田(第4層)形成



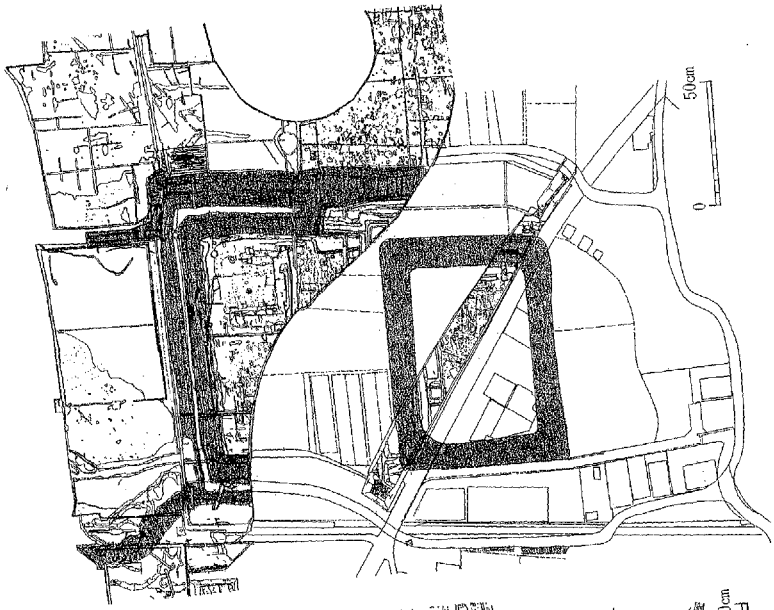
③第3層形成

第212図　高田土居城変遷図1

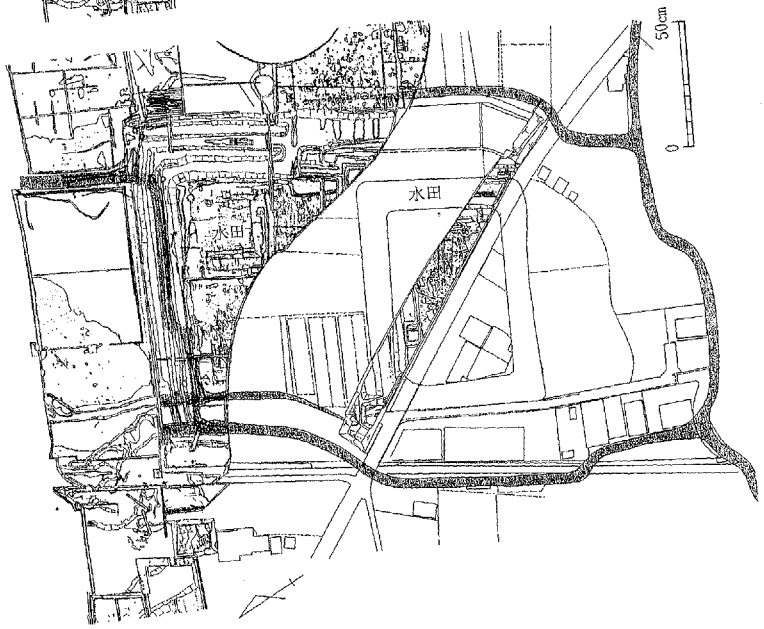
④堀６の堀削・廃絶



⑤城郭の形成



⑥城郭廃絶以降の地形



第213図　高田土居城変遷図２

橋脚も二本を一組にして3列と他に類例をみない規模である。外堀1北辺部に作られた土留め用の建築用木材は、廃材として再利用されたものであり、前代の高田土居城構築の建築材とも考えられる。建築材は、その部位から倉庫用と考えられている。

外郭部の構造は、土塁と四区画された屋敷地で構成される。内郭部の土塁は、明瞭な形で残存する。北辺部の外堀1には土塁の崩落がみられる。また外堀1に沿って、幅6～7mで遺構の希薄な空間が存在し、土塁が構築されていたことが想定される。土塁の下に存在する遺構には、土坑8があり、出土した土師器皿は、堀6出土遺物と同時期であり、大小二種類の土師器皿を地鎮として埋納している。

屋敷地は、両側に側溝を作って東西南北に通路が作られ、外郭を四区分する。通路幅は、南北路幅が5～7mと広く、東西路幅が2.5mと狭いため、主要な通路は南北方向に走るものである。内部には、石組みや素掘りの井戸を持ち、数棟の掘立柱建物を持つ屋敷が存在する。北東部屋敷地が440㎡、北西部屋敷地が720㎡である。掘立柱建物柱穴の切り合いは存在しないため、短期間の住居域と考えられ、15世紀後半から16世紀前半の時期に盛期をもつ。出土した遺物からも短期間と考えられる。。

（4）城郭の変遷と廃絶

堀内堆積土から、外堀1・2・3掘削以降の変遷過程をみる。

城郭を形成する大規模な堀北辺外堀は15世紀後半段階に作られたあと、第5層～第3層が堆積し、流れをもつ堀として16世紀前半までは機能していた。その後、水の滞留が始まり第2層が堆積する。第2層下層は16世紀前半から中頃、上層は16世紀中頃から後半の時期である。この第2層堆積時期は、城郭としての機能を消失していた可能性が高い。外堀最上層第1層は、整地層で16世紀末から17世紀代の遺物を含む層である。外郭の堀と内郭の堀を水田化するために整地した層である。17世紀代に内郭堀と外郭堀は完全に水田化され現在に至る。

（5）出土遺物の傾向

出土遺物は、15世紀後半から16世紀前半の時期が主である。堀からの出土遺物は、備前擂鉢などは小破片となって投棄されたものである。また土師器皿の出土が多くみられる。15世紀後半では、土師器皿は口径により4種類に区分できる。直線的に伸びる口縁部をもつタイプは、形態からみて都の影響、都の土師器皿を模して作られたと考えられる。また口径12cmの皿は底部に糸切りの痕がみられるが、のちに押さえで消している。土師器皿から地域色を消して畿内的な様相に近づけたものと想定できる。京都系土師器も出土している。また戦国城郭で一般的であった中国製染付、白磁皿の出土量が少ないことは、15世紀後半から16世紀前半の同時期に営まれた平須賀城で多量の中国製染付や青磁・白磁が出土することと対照的である。また平須賀城では青磁大盤・双耳壺、古瀬戸水注などステイタスを示す遺物も多数出土[註2]するが、高田土居城では対照的にそれら遺物の出土量は極端に少ない。遺跡の性格が遺物の違いを反映するのであろうか。そうであれば、京都系土師器の出土は、大きな意味をもつ。儀礼空間として、考えられるのではないか[註3]。

以上を再整理する。鎌倉時代に条里型地割が施工され、それに伴う溝が掘削された。この溝は、掘6の前身と考えられる。その後、これを利用して長方形の形態をもつ居館が構築された。15世紀前半

の時期と想定される。この時期、外郭部はなく単郭である。15世紀後半までに、内郭部を除いて周辺部には室町時代水田層が形成される。その後、時期を経ず堀６を埋めて、外郭の外堀１・２・３、内郭の堀など大規模な一連の工事がなされる。幅10m前後の内堀で囲まれた東西70m、南北50mの長方形の内郭部と、大規模な二重･三重で囲まれた東西150m、南北225mの外郭からなる全国屈指の規模の城館である。内郭・外郭には土塁がそれぞれにあり、強固な城としての体裁をもつ。二重・三重に構成され、さらに17mもの規模をもつ一条の堀になる外堀構造は、防御と共に水を溜め流す機能ももつ。外堀１・２・３掘削に際しては、堀底に高低差をつける。この土木技術により、南部平野全体の流水を溜める機能と共に更に下流域への潅漑体系にも大きな影響をもつのである。城館としての体裁は、戦乱の緊張が作り出したと考えられる。内部には四区画された屋敷地をもつ。全体の大きさ、17m幅の堀など規模からしても近世平城に繋がる形態をもつ。15世紀後半から16世紀前半のごく短い期間、城郭として機能した。[註4]

高田土居城は、地域開発と潅漑体系で密接に繋がり、また平地居館から城館へと変化する過程が考古資料で把握できる。出土遺物の特徴は土師器類が主で、中国製染付や白磁皿などの出土量が少ない点にある。当該期に山城として存在する平須賀城と対照的な遺物内容である。土師器皿は在地のものと、調整により、畿内的な様相をもつ二者に区分できる。後者の存在は、高田土居城の性格をものがたる。高田土居城は16世紀前半には堀は埋まり始め16世紀後半から17世紀前半には水田化する。内郭部の堀が一段低い水田として残存していたことから内郭部のみ城として伝承され、外郭部の存在は忘れ去られていた。

註１　平成13年度に県道上富田南部線改築工事に伴い発掘調査された。平成17年度に報告書が刊行される。

註２　『平須賀城跡、発掘調査概報』南部川村教育委員会 1995年３月
平須賀城跡、発掘調査概報』南部川村教育委員会 1996年３月
川崎雅史『平須賀城跡の土器組成』和歌山城郭研究第３号

註３　森島康雄氏御教示。

註４　弓倉弘年は、文献史料から高田土居城を紀伊守護の奥部支配の拠点と明確に論じた。
弓倉弘年「畠山氏と南部、高田土居」『紀伊国南部荘と高田土居』和歌山中世荘園研究会 2000
室町時代南部荘の歴史について詳細に検討されている。高田土居城内郭報告書で検討する。

付章１　徳蔵地区遺跡から出土した石器群の分析

㈱アルカ

（A）分析

１．はじめに

１－１　はじめに

株式会社アルカでは平成14年度に徳蔵地区遺跡の石器の整理作業と分析業務を行った。㈶和歌山県文化財センターから出土地区と遺構の時期を伺い、それに従い業務を進行していった。その概要はつぎの通りである。

12-④区　　縄文中期・後期中心。弥生前期、布留期
12-⑤区　　縄文中期・後期
13-④区　　中世の館跡。部分調査で縄文中期・後期の遺物出土
10-②区　　弥生前期。弥生中期。
11-①区　　突帯文～弥生前期。
12-⑧区　　弥生前期。弥生中期。
13-①区　　弥生前期
13-②区　　弥生前期
13-③・⑤区　弥生前期
13-⑨区　　弥生前期

１－２遺構の時期について

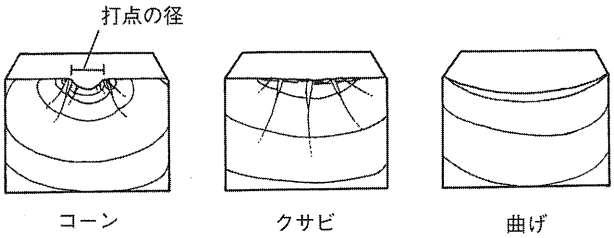
この項ではとりあげた遺構については、次のように時期を位置づけている。

縄文中期前半…住居2003・2245・2486、土坑1975・1977・2316・2340・2382・2401・2450・2453・2527
縄文後期前半…住居1113・2600・2682、土坑2514
弥生前期……住居100
庄内～布留期…住居000番台

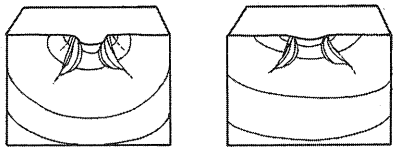
１－３　記述の手順および石器観察の方法

本稿での記述の順序は次の通りである。

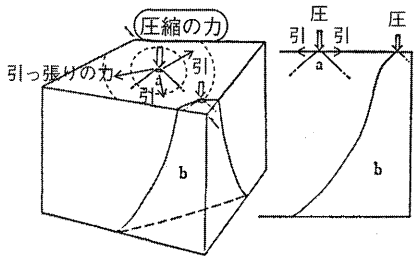
①資料体の作成と記述の方法
②各地区・層位・遺構から出土した石器



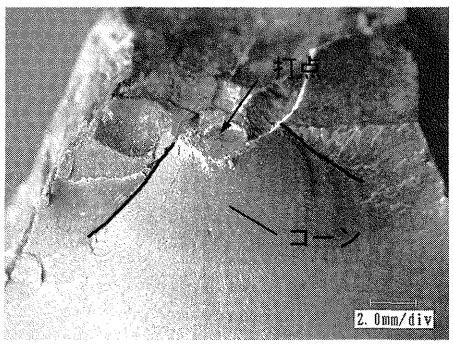
1−1　剥離開始部のタイプ



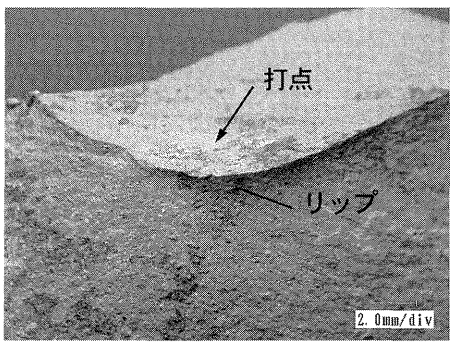
1−2　コーンとバルブのタイプ
（剥離開始部のタイプがコーンタイプの場合）



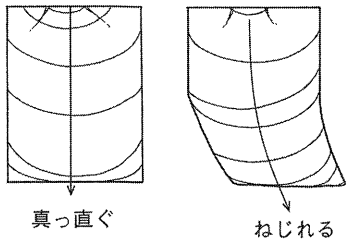
1−3　「割れ円錐」のモデル
（松沢 1979を一部改変）



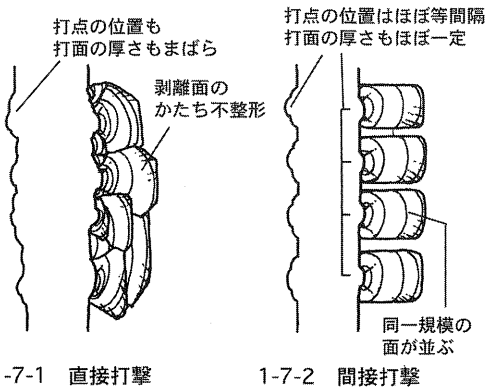
1−4　かなづちをハンマーとして剥離した場合



1−5　鹿角をハンマーとして剥離した場合



1−6　剥離軸のタイプ



1−7　直接・間接・押圧の打点の位置・剥離面の諸特徴（模式図）

←石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が明瞭である。鉄は、明らかにサヌカイトに対し変形しない材質である。この場合、石核内部により大きな圧縮の力を与えることができるため、明瞭なコーンを形成する。

石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が不明瞭である。またリップが形成されている。鹿角がサヌカイトよりも変形する材質のため、鹿角ハンマー自身の変形のためにエネルギーの大半が使われてしまう。故に石核内部に充分な圧縮の力を加えることができず、コーンを明瞭に形成するまでに至らない。

（1-4・5については、太田公彦氏（太田2001）の先行研究がある。）

作成：馬場伸一郎

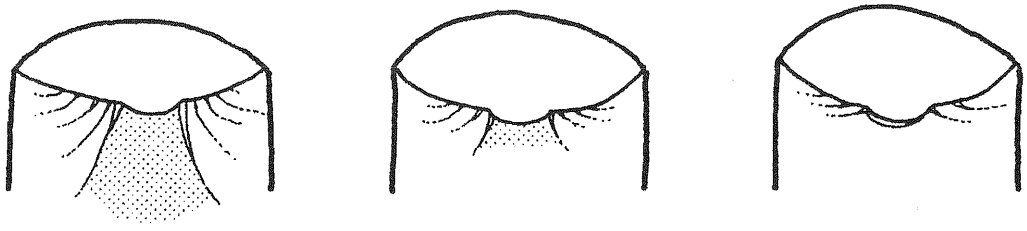
第1図　図説による剝離技術

③徳蔵地区遺跡における縄文時代の剥片石器の製作系列について

まず石器群の検討の前に、本稿の石器観察と分類方法を明示しておきたい。石器観察の着眼点としては、まず剥離痕を観察し、剥離痕から「剥離技術」を復原した。剥離技術とは、人類が石材から石器を作り出すときの石を剥がす手法のことで、「右手の技術」と「左手の技術」にわけて剥離技術を理解する（竹岡1989・角張2002）。要点は右手と左手の織り成す結果、石器づくりが成立するという観点から、右手のハンマー材質と身振り、そして石器をもつ左手の属性、この二つを剥離技術と考える。整理すると、右手の技術：①ハンマー材質と②身振り（直接・間接・押圧）で、左手の技術：素材の持ち方のことであり、素材を裏表・左右に動かしながら目的とするデザインをつくるための技術である。以下に説明することは認定基準では検討の余地は残すものの、大きく傾向をつかむには事例研究も重ねられていることから有効である。

右手の技術—ハンマー材質　実はこの剥離技術にはもう一つ重要な点があり、残された痕跡に人間のコントロールが及ばない、いわゆる物理的な因果関係で発生する属性があり、それが客観化の対象となることを角張氏（角張2002）は指摘する。ハンマー材質は、コーンの形成度合いが石材とハンマー材質の相対的な変形度を反映することが実験で既に明らかとなっている。先行研究としては、吉田政行ほか（吉田ほか1996）の実験では、黒曜石に対し様々な材質のハンマーで剥離実験を行った結果、リップ・打点・コーン・バルブ等の属性の発生とハンマー材質に有意の関係があることが指摘されている。そしてその続編では、12種類のハンマー材質で黒曜石の剥離実験を行い、打点の付近のコーンの状態や剥離開始部分の特徴とハンマーの材質に有意な関係があることが定量的に示された（鈴木ほか2002）。これら研究で剥離痕の打点・コーンの状態からハンマー材質をある程度まで絞り込むことが可能であることがわかる。筆者も二上山サヌカイトを材料に剥離実験を行い、ハンマーを鉄・チャート・乾燥鹿角と変えて剥離実験を行った結果、コーンがA・B・Cのタイプに分類でき（第2図）、それぞれにハンマー材質が顕著に反映されることを把握した。そしてそれぞれのコーンタイプに、鉄・チャート・乾燥鹿角が8割の確率で有意に結びつくことを指摘した（馬場2002）。本稿ではハンマー材質の判定は行わないが、コーンタイプの分類を使い、ハンマーの硬度や変形度合いを示すものとする。

右手の技術—身振り　次に身振りについては石器製作の民族誌や実験などから「直接打撃」・「間接打撃」・「剥離押圧」の三種類に整理されている。剥離面に残された属性を観察し、これら身振りを特定するのに有効な属性を抽出することができれば身振りの推定が可能となり、既に角張氏（2003）が実践している。



第2図　ハンマーの材質の違いによるコーン

身振りの推定で注目すべき属性は、石核や石器の二次加工の場合は、剥片が剥がされた打点の位置関係（剥離面の並び）・打面の厚さ・剥離軸の軌跡・剥離面の規模の４つである（第１図-６・７）。この属性からハンマーを直接振り下ろす直接打撃（D）、パンチを石器に予めあてがいパンチを打撃する間接打撃（Ｉ）、ハンマーを予めあてがい押しつけて剥片を剥離する押圧剥離（Ｐ）が推定できる。

その推定は、先ず押圧剥離か、そうでないかの判定が先にくる。打面の厚みが数ミリで、剥離面が薄く、そして規則正しい剥離面の並び方と同じ規模、剥離軸長が10ミリに満たない場合は、押圧剥離であろう。石鏃の加工面をみて、経験的に剥離面を覚えるのがコツである。

直接打撃は、ハンマーを素材に直に当てて剥片を剥離する手法である。その打撃力は高く、目視と腕力でハンマーを振り下ろすために、ハンマーの当たる箇所とハンマーエネルギーはコントロールできない。その結果は、剥離面が安定しない。

間接打撃は、予め工具を石器に当て、その工具を打撃する手法である。石核や石器の剥離したい場所に加工を施すことが可能となる。よって間接打撃では、打点の位置や剥離面、そして打面の厚さはある程度揃うことになる。そして力の方向が制御しやすいので、並んだ剥離面の剥離軸は真っ直ぐに整列させることも可能である。以上までが右手の技術を剥離痕から推定する方法である。

左手の技術　次に左手の技術を剥離痕から推定する方法を説明する。剥離により生じる加工面は、利き手のハンマーが当たる素材面の状態で変化する。平らな素材面に対して急角度にハンマーが当たると加工面は深く抉れ、鋭い辺に垂直に当たると辺は潰れる。加工面を均一に保つには、ハンマーの当たる角度を調整する必要があり、その調整は左手に持った素材を、左手首の回転によってハンマーの当たる角度を変化させる必要がある。この左手の回転を含んだ素材の持ち方が「左手の技術」に相当する。ハンマーの角度の変化によって生ずる剥離面の様相を区別すると、「通常」・「急角度」（「鋸歯」は急角度の連続面の１種）・「平坦」・「刃潰し」の４種類で区別ができる。この４種類を左手の技術とすることにする。

剥離技術による石器分類の実践　さてここまで剥離面の観察ポイントを説明し、剥離面を観察することで工具とその身振りを復原することが可能であることを指摘した。そして工具と身振りの組み合わせ＝「剥離技術」が同じ辺（刃部の辺、側辺など）に認められる場合、同じ石器であると客観的に指摘することが可能となる。このように剥離技術を基準に石器を分類していくと、形や大きさだけにとらわれず、技術レベルでの分類が可能となる。剥離技術は、ある特定の剥片を作り、そして特定の石器を作るために用いるように、当時の文化的な規則である。決して無造作に石器は製作されていない。決まった法則が遺跡ごとに存在している。徳蔵地区遺跡でも、素材の種類、加工の種類、そして石器のデザインをトータルに分析することで、どの石器製作工程にどの技術が駆使されているのかを復原することが目的である。

さて、同じ石器であると同定する、同じ剥片であると同定する場合、剥離技術以外にもいくつか属性を取ってさらに剥離技術を細分することができる。また、剥離技術のクロスチェックもする必要がある。以下に剥離技術の細分や剥離技術のクロスチェックに必要な属性を説明する。剥片と二次加工面の同定でそれぞれに必要な属性が違ってくるので分けて説明する。

①同じ剥片であると同定する場合

1．打点の径・・これはハンマーの大きさを比較するのに有効な属性である。ハンマーの大きい・小さいについて同定するのに必要である。

2．打点のタイプ‥この属性のうち、コーンタイプとクサビタイプ（第1図-1）は直接打撃のうち、通常の圧縮力（D）か、垂直に打った結果の極度に大きい圧縮力（vD）のいずれかを判定するのに有効である。さらにクサビタイプの場合、両極石器によく見られるので、両極打撃に固有の打点タイプと考えられる。よって、直接打撃、垂直打撃という身振りの推定に有効な属性である。

3．コーンタイプとバルブの発達度合い‥コーンは高い圧縮の力を加えると円錐形が明瞭となり（第1図-4）、逆に弱い力の場合は不明瞭になる物理的作用をもつ（第1図-5）。先に説明したように、コーンはサヌカイトのコーンタイプA・B・Cへ分類する（馬場2002）。また、バルブはコーンの力を受け継ぐ部分であるので、コーンが明瞭の場合はバルブが発達し、コーンが不明瞭であるならばバルブは発達せず剥離面がフラットな状態となる（太田2003）。本稿ではバルブが「発達／未発達」を用語として使用する（第1図-2）。

4．打面の種類・・自然面打面、単剥離面打面、複剥離面打面、調整打面などの種類がある。特定の石核から剥離される場合、通常は決まった打面をもつ場合が多い。また、自然面打面が多い場合は、石核成形されていない原石から直接剥離された剥片の可能性が強い。このように石核の種類を把握するのに有効な属性である。

5．打面の厚さ・・打面の厚さが一定の場合、工具を予めあてて剥離する方法が考えられる。つまり押圧剥離か間接打撃である。押圧剥離は3㎜の厚さを剥ぐのが限界である。10㎜近くの打面の厚さをもつ場合、間接打撃と考えた方がよい。一方、一定しない場合は直接打撃で剥離している。

6．剥離角・・作業面とバルブ直下の主要剥離面のなす角度を、打点を通るラインで計測する。

7．主要剥離面の面積（サイズ）‥主要剥離面の面積を計測すれば、どの程度のサイズの素材剥片が剥がされたのかがわかる。剥片のサイズの傾向と、実際の石器の素材剥片の傾向をつきあわせれば、例えばSというサイズの素材剥片は石鏃に、Mというサイズの素材剥片は削器にと復原が可能である。そしてこれを石核に残された剥離面に当てはめれば、どのような石核の種類から剥がされたのかをも復原可能である。なお、似たような方法に長さ・幅の計測があるが、この方法は上記のような比較がしずらい。したがって面積による比較を行った。

8．剥離軸・・剥離軸とは打点から剥片の末端までの軸を指し、その軸は打点からリングの頂点を結んだ線で表される。

9．剥片の背面剥離痕構成‥定型的な縦長剥片を剥離している場合、素材剥片の背面は剥離軸と同じ軸をもつ剥離面で構成されることが多い。一方、貝殻状の剥片を剥離している場合、素材剥片の背面は自然面で覆われているか（礫端片・礫面剥片）、一定しない多方向の軸をもつ剥離面で構成される。打面の種類と同じく、素材剥片の背面構成は石核の種類を考える手がかりとなる。以下のタイプを設定する。

・自然面タイプ・・背面が全面自然面で覆われている。

・単方向タイプ・・背面が１方向の剥離軸をもつ剥離面で構成される。
・２方向タイプ・・背面が２方向の剥離軸をもつ剥離面で構成される。
・多方向タイプ・・背面が３方向以上の剥離軸をもつ剥離面で構成される。

上記の属性の全てが一致する剥片は、同じ剥片と考えてよい。なぜなら、属性が一致しているということは、同じ石核の種類から、同じ剥離技術で、同じ形態の素材剥片を剥離しているからである。

ただ、実際はこれら全ての属性を石器から抽出することは加工が進んでいる石器ほど難しい。ただ、これら属性のなかで、２．打点のタイプ、４．打面の種類、７．サイズ、８．剥離軸、９．背面剥離痕構成は多くの石器の素材剥片で観察可能である。このうち打点のタイプ、コーンタイプとバルブの発達度、剥離軸については剥離技術と関連がある属性のため剥離技術としてまとめる。

したがって徳蔵地区遺跡の剥片では、剥離技術、打面の種類、剥片のサイズ、背面剥離痕構成のデータを中心に採取してある。この属性を採取すれば、素材剥片の分類とグルーピングが可能である。そして、グルーピングされた素材剥片がどの石器素材となっているか、そしてどの石核が剥がされたものなのかをも追究することができる。ほかの属性についても観察できる場合は採取した。

②二次加工をもつ石器で同じ剥離技術であると同定する場合
１．打点の径・・①と同様。ハンマーの大きさの分類に必要な属性
２．打点のタイプ・・①と同様。ハンマー材質と身振りの推定に必要な属性。
３．剥離面の起伏・・コーンとバルブの発達度の属性である。
４．剥離角・・①と同様。
５．打面の厚さ・・①と同様。身振りの復原に必要な属性。
６．剥離面の面積（サイズ）・・①と同様。身振りの復原に有効な属性。
７．剥離面の幅・・１．の打点の径と関連のある属性。ハンマーのサイズが大きいと、剥離の幅も大きくなるのが通例である。打点の径よりも観察可能な場合が多いため、１．打点の径の代わりにもなる。
８．剥離軸・・身振りの復原に必要な属性。

剥片と同様に、上記の属性の全てが一致する剥離面は、同じ剥離面と考えてよい。属性が一致していれば、同種類のハンマーを使用して、同じ身振りで剥がされた剥離面である。

さて実際、石器を観察して抽出しやすい属性は、２．打点のタイプ、３．剥離面の起伏、５．打面の厚さ、７．剥離面の幅、８．剥離軸の５つである。これ以外は、加工が進んでいるものほど確認しづらい。このうち、２．打点のタイプと３．剥離面の起伏、５．打面の厚さ、７．剥離軸については剥離技術の属性としてまとめる。７．の剥離面の幅は特に押圧剥離のハンマーの大きさの復原に有効である。

したがって徳蔵地区遺跡における二次加工をもつ石器については、剥離技術、剥離面の幅の属性を中心に採取してある。

2．資料体の作成と記述の方法

前章で説明・定義した事項をもとに、ここより実際に徳蔵地区遺跡の石器群の分析を始める。

2－1剥片石器の定義

本稿では剥片石器を次のように定義する。

石鏃　押圧剥離で加工された二等辺三角形状の尖頭部をもつ石器。

石錐　急角度の押圧剥離で加工された刃部をもち、刃部は二辺の尖頭部を形成する。

石匙　つまみをもつ削器類のこと。

削器　押圧剥離・間接打撃・直接打撃のいずれかの剥離技術で刃部がつくられた石器。金山産サヌカイトの板状剥片を素材としたものは、大形削器という名称を用いた。

掻器　素材の末端に急角度の刃部もつ石器のこと。金山産サヌカイトの板状剥片を素材としたものは大形掻器という名称を用いた。

両極石器　相対する二辺にクサビタイプの打点タイプをもつ石器。いわゆるピエス・エスキーユ。

両極剥片　両極石器より剥離された剥片のこと。

剥片　主要剥離面をもち、二次加工が認められない石器。主要剥離面とは石核から剥がれた面のことである。金山産サヌカイトの剥片のうち、石器や石核素材となるものは板状剥片、ならないものは大形剥片と文中で使用している。

石核　剥片石器の素材（目的的剥片：石器の素材となる剥片のこと）を剥離した母材のこと。

原石核　石核の素材となる剥片を剥離した石核のこと。

原石　石核の素材となる礫のこと。

礫器　礫を素材とし、剥離で刃部加工を施した石器のこと。

部分磨製石斧　磨製石斧で特に刃部の刃付けのために研磨がほどこされた石斧。

使用痕剥片　刃部に使用により生じた微細剥離の認められる、刃部加工のない石器のこと。

折取加工剥片　意図的に切断した剥片のこと。

2－2資料体の作成の方法

資料体の作成の目的は、徳蔵地区遺跡の縄文・弥生時代の基礎的資料体作成のためである。以下の手続きで資料体の作成を行った。

方法１　図化資料の抽出と属性表の作成

12-④区を中心として、縄文時代の包含層である５・６層および遺構出土の石器類にまず限定した。ただし、層位の判明している表採品については対象とする。次に、形態の明確な石器（狭義）および石核を図化対象に選択した。また石器製作作業に特徴的な剥片を図化対象とした。

なお出土層位の不明な石器群の中にはそこにしかない特徴的な遺物がある。それらも図化対象とした。石器の図化の総数は229点である。この229点によって徳蔵地区遺跡の石器群の概要は概ね把握で

きるだろう。図化した石器の内訳は以下の通りである。

なお、サヌカイトは産地名を、その他の石材は岩石名を記す。

1．石鏃およびその未成品・・53点(うち二上山産凹基鏃43、金山産凹基鏃4、産地不明サヌカイト凹基鏃３・有茎鏃３)
2．石匙およびその未成品・・18点（うち二上山産12点、金山産４点、産地不明サヌカイト２点）
3．石錐およびその未成品・・14点（うち二上山産13点、金山産１点）
4．削器・・43点（うち二上山産34点、金山産６点、チャート製１点、産地不明サヌカイト２点）
5．掻器・・１点（二上山産）
6．金山産の大形剥片を素材とした大形削器・大形掻器・大形使用痕剥片・・13点
7．使用痕剥片・・３点（二上山産３点）
8．折取加工剥片・・３点（二上山産）
9．打製石斧・・６点
10．礫器・・２点
11．磨製石斧・12点
12．弥生時代の磨製石斧・・３点
13．磨製石庖丁・・１点
14．大形直縁刃石器・・１点
15．岩偶・・１点
16．抉入石器・・１点
17．器種不明・・１点
18．両極石器・・20点（うち二上山産16点、金山産１点、泥岩製１点、黒曜石１点、産地不明サヌカイト１点）
19．二次加工剥片・・１点
20．剥片・・12点（うち金山産大形剥片４点、二上山産大形剥片２点、二上山産剥片２点、金山産剥片１点、黒曜石１点、チャート１点、紅簾片岩１点を図化）
21．金山産板状剥片・・４点
22．両極剥片・・３点
23．石核・・８点（うち二上山産７点、金山産１点）
24．原石核・・２点（二上山産）
25．原石・・２点（二上山産）

方法２　基礎台帳の作成

次に図化対象以外の剥片類、器種名のわかる石器断片について基礎台帳の作成を行った。図化はしないが石器群を評価する上で欠かせない剥片データや石器断片を数量的に記録として残すのがねらい

である。器種名のわかる石器断片、及び剥片剥離作業に特徴的な剥片を選択した。台帳には出土地区・グリッド・層位もしくは遺構・石材名・器種・重量を記入し、通番を付けた。

以上の方法１・方法２によって、この遺跡の石器群の内容は明らかにされる。

方法３　顕微鏡を用いたデータの作成

従来の肉眼観察による再現性の難しいデータづくりに変えて、今回は以下の３点についてデジタル顕微鏡によるデータ作成を行った。

１．石材の肉眼観察について

金山産と二上山産の基準を明確にするためにサンプルを用い観察を行った。

２．石鏃の押圧剥離のデータ

縄文時代と弥生時代の代表的な石器である石鏃についてはこれまで形態的な分類が主であった。押圧剥離の技術属性を把握することで、地域的編年的な石鏃の変遷が追える可能性がある。そのための基礎データとして低倍率（マイクロスコープによる観察倍率は20倍程度）押圧剥離面の観察データを提示した。

３．使用痕分析

高倍率（マイクロスコープによる観察倍率は450～1000倍程度）の顕微鏡を用いた使用痕分析は、石器の用途を理解する上で重要な分析である。今回は弥生時代の代表的な器種を観察した。

方法４　理化学分析（黒曜石の産地同定）

原産地の特定できる黒曜石について産地同定を行った。徳蔵地区遺跡の場合、黒曜石の産地から離れているため、この分析は有効である。

２－３　剥片石器の記述方法

剥片石器の記述は前章1-3で説明した剥離技術の観点をもって説明する。そして文中で剥離技術を説明する際に用いる各種記号は次の通りである。

ハンマー材質（コーンタイプ分類）

先にも触れたように、材質の硬度と変形度を反映するコーンの状態に注目する。コーンの状態については筆者が以前設定した二上山サヌカイト剥離実験（馬場2002）に従い、コーンタイプをＡ・Ｂ・Ｃに分類して記述する（第２図）。

身振り

押圧剥離（Ｐ）：工具を押し当てて、圧力で剥片を剥がす技術のこと。

間接打撃（Ｉ）：工具をあらかじめ対象に当てておき、その工具を打撃することで剥片を剥がす技術のこと。

直接打撃（Ｄ）：工具を振り下ろして剥片を剥離する技術のこと。

垂直打撃（vD）：直接打撃のなかでも、ハンマーを垂直に打撃する方法である。対象に対する圧縮の力が極度に大きいため、コーンとバルブが発達せず、打点タイプがクサビタイプとなる。

石材

石材は肉眼観察で判定した。サヌカイトの場合、二上山産と金山産に区別する。不明な場合は不明とする。

素材の剥離技術と形態について

素材の剥離技術とは目的剥片の剥離技術を指す。そして素材形態は縦長剥片、横長剥片等石器研究で慣用的に使用される形を示す属性である。双方とも石器の素材の選択性を把握するために必要な属性である。素材の剥離技術については身振りのD･vD･P･Iと以下の素材形態の属性を組み合わせ記号化する。

縦長剥片・・剥離軸に置いたとき、縦の長さが横の長さより二倍以上の剥片。

横長剥片・・剥離軸に置いたとき、横の長さが縦の長さの二倍以上の剥片。

矩形剥片・・剥離軸に置いたとき、縦・横の長さともほぼ同じくらいの剥片。

貝殻状剥片・特に全体形が楕円形で、末端がヒンジフラクチャーの剥片。

板状剥片・・約15cm四方の板状に剥離された剥片。金山産。

礫端片・・打面と背面の全面が自然面で覆われる剥片。

素材剥片のサイズについて

素材剥片のサイズを記号化して次のように表している。なお、折れていたり欠損していたりする場合でもできる限り原型を想定しサイズを測定している。

S・・ 625㎟（縦25㎜×横25㎜）の枠内に入る素材剥片

M・・1250㎟（縦25㎜×横50㎜）の枠内に入る素材剥片

L・・2500㎟（縦50㎜×横50㎜）の枠内に入る素材剥片

※Lについては、5000㎟のＬＬ、7500㎟のＬＬＬ。10000㎟のＬＬＬＬと倍になる。

2－4　石核と素材剥片の記述の方法

徳蔵地区遺跡の石器群の分析では、最終的に剥片石器群を製作工程の系列へ分類する。これは剥片石器の分析ではまず基本となる作業であり、そのためにはまず石核の種類を理解することが必要である。出土した石核を次のように分類した。

① 二上山産石核１類

第４図：16（中期土坑2527）

素材：亜角礫

説明：１－３－２で触れたように、剥離で作り出された剥片がどのような特徴をもつのか、石核から把握する必要がある。正面図の作業面を観察してみよう。この石核からは、単剥離面打面もしくは複剥離面打面をもつ剥片が作り出される。そして剥離技術はＢタイプのコーン（馬場2002）が認められる直接打撃である。剥離面の打点付近はコーンが明瞭でバルブが発達している。剥がされた剥片のサイズはＬ～ＬＬＬサイズを中心とする。剥片の背面構成のタイプは、自然面・２方向・多方向タイプである。

② 二上山産石核２類

第10図：109（6層）

素材：亜角礫

説明：この石核からは自然面打面をもつ剥片が多く作り出される。次に単剥離面打面である。そして、剥離技術はBタイプのコーン（馬場2002）が認められる直接打撃である。コーンの円錐形が1類と比べるとやや不明瞭である。剥がされた剥片のサイズはL～LLを中心とする。そして形態は貝殻状剥片で、剥離の末端はヒンジフラクチャーが多い。剥離面の背面構成のタイプは自然面･単方向タイプ･2方向タイプである。

③ 二上山産石核3類

第10図：107（5層）

素材：素材は亜角礫の角から剥がされた剥片である。打点付近が剥離されているが、主要剥離面のバルブの発達度から想定すると、この素材剥片はBタイプのコーンが認められる直接打撃で剥がされた剥片である。

説明：この石核からは自然面打面をもつ剥片が作り出される。次に単剥離面打面である。そして、剥離技術は2類と同様、Bタイプのコーン（馬場2002）が認められる直接打撃である。剥がされた剥片のサイズはMとLを中心とし、両面はポジ面となる。そして形態は貝殻状剥片で、剥離の末端はヒンジフラクチャーが多い。剥離面の背面構成のタイプ0は単方向・2方向タイプである。

④ 二上山産石核4類

第5図：31（後期住居跡2600）

素材：亜角礫

説明：この石核の剥離面はクサビタイプの打点のタイプである。これは1-3-2で触れたように、両極打撃に特徴的に見られる打点タイプである。剥離技術は垂直打撃で、剥離面のコーンとバルブは発達していない。剥がされた剥片のサイズはSとMを中心とする。

⑤ 金山産石核1類

第18図：197

素材：亜角礫

説明：この石核からは摂理面に沿って剥片剥離が行われており、ハンマー材質の推定が困難である。直接打撃の痕跡が認められ、剥離された剥片のサイズはSとMを中心とする。

⑥ 金山産石核2類

第22図：227

素材：板状剥片

説明：徳蔵地区遺跡から出土する板状剥片を剥離する製作系列。徳蔵地区遺跡から板状剥片を剥離する石核は出土していないが、金山製作系列1類とは石核も剥片も異なるため2類を設定する。

3．各地区・層位・遺構から出土した石器

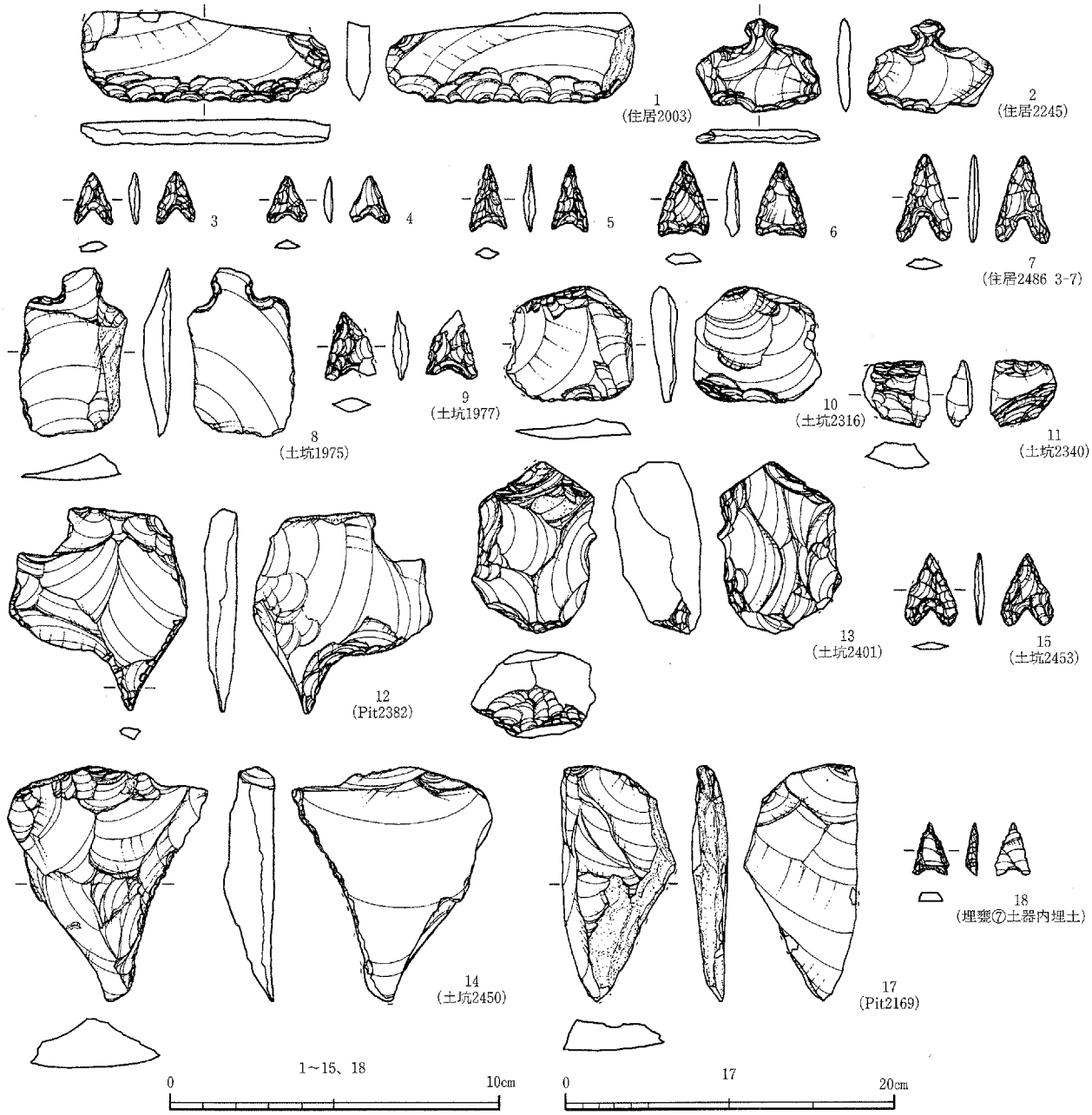
ではここから資料体の記述を前章の方法に従って行う。地区ごと、遺構ごと、器種ごとに説明していくことにする。

3－1　12-④区　縄文中期前半の遺構から出土した石器群（第３・４図）

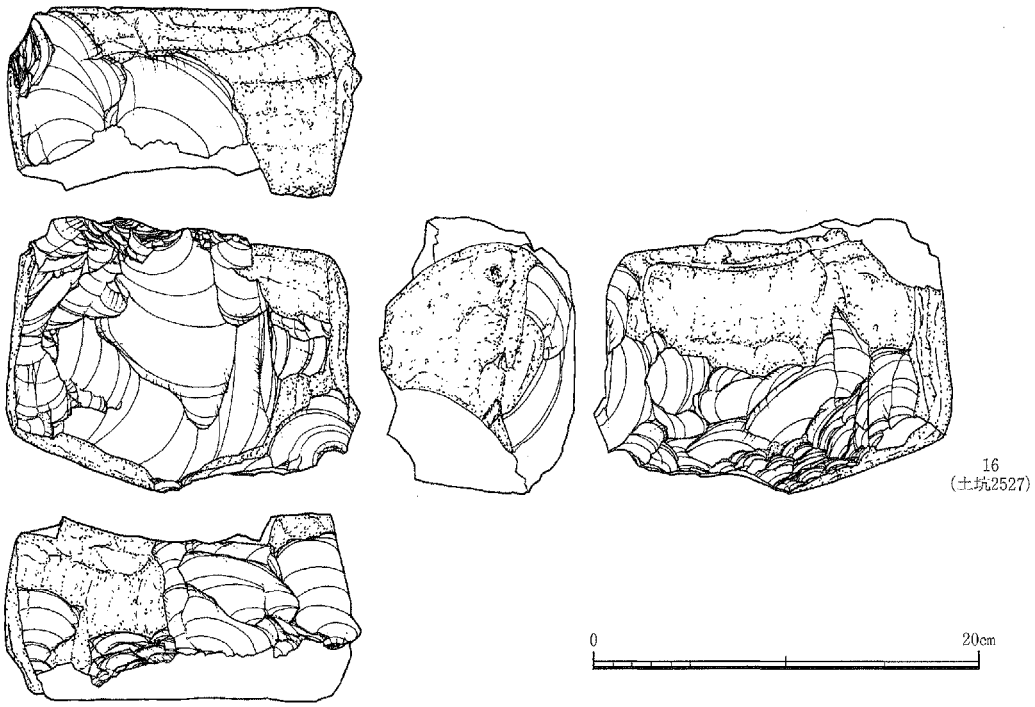
この節では縄文中期前半の住居・土坑・柱穴から出土した石器について説明する。縄文中期の遺構から出土した59点の剥片石器の石材は、１点がチャート、２点がサヌカイトで産地不明、49点が二上山産サヌカイト、５点が金山産サヌカイトである。そして、サヌカイトの産地別に器種別内訳を見てみると次のようになる。

〔二上山産の住居出土〕

凹基鏃14点、石匙１点、削器１点、両極打撃の石核１点、両極石器４点、両極剥片２点、二次加工剥



第３図　12-④区 縄文時代中期前半の遺構から出土した石器群（１）



第4図　12-④区 縄文時代中期前半の遺構から出土した石器群(2)

片2点、折取加工剥片1点。合計26点。

〔二上山産の土坑出土〕

凹基鏃3点、石錐1点、石匙1点、両極石器9点、両極剥片2点、削器2点、掻器1点、二次加工剥片2点、大形剥片1点、石核1点。合計23点。

〔金山産の住居出土〕

両極石器4点、二次加工剥片1点。合計5点出土。

以上のように、金山産で石鏃など形態的に安定している典型的な石器は1点も出土していないことが特徴である。

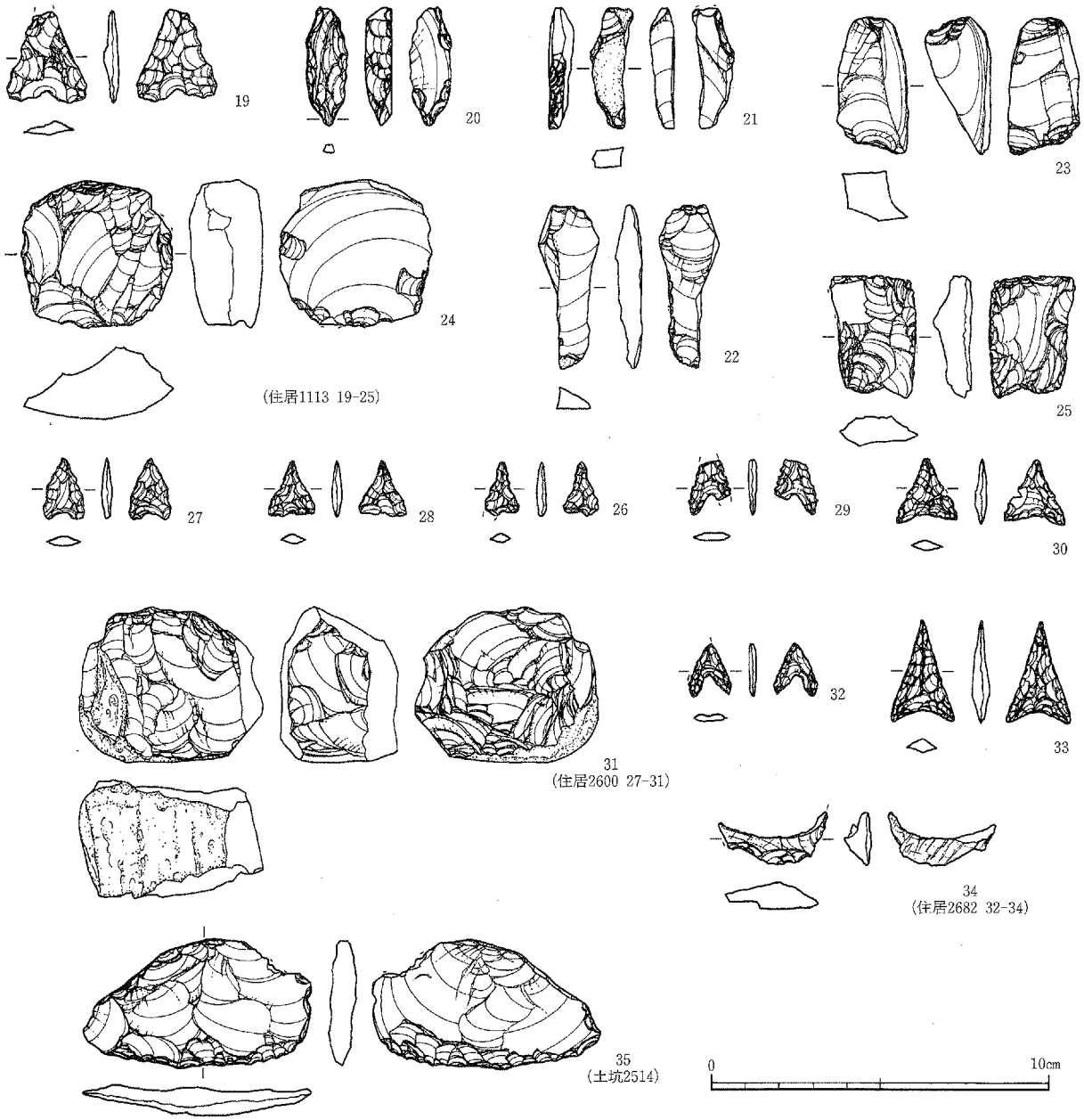
また、住居1900、2003、2245、2295、2486、土坑1876、2243、2263、2269、2340、2358、2375、2381、2383、2451、2464、2494、2538、2563、2572、2573、2602、2648、2756、2760、2767からは、剥片石器の製作時に生じる剥片類が出土している。中期の住居及び土坑から出土した剥片類の重量をサヌカイトの産地別に測定した結果、金山産32.8g(うち住居出土7.4g、土坑出土25.4g)、二上山産195.9g(うち住居出土68.1g、土坑出土127.8g)、産地不明0.1gであった。ここから、二上山産サヌカイトの剥片石器製作活動が中心に展開されていたことが推定される。

住居2003　1は削器である。素材はＬＬサイズで、恐らく二上山石核1類から剥離された剥片を二つに分割したものを素材としているのだろう。刃部は押圧剥離で加工される。

住居2245上層　2は横形石匙である。素材はMサイズである。素材が薄くバルブが発達しないため、両極剥片の可能性もある。刃部は押圧剥離で粗く加工される。

住居2486　凹基鏃が5点出土している。3・4・5・6は押圧剥離で加工される。7は押圧剥離で加工され、幅が4㎜前後と広い。

土坑1975　8は縦形石匙である。素材はＬサイズで、主要剥離面のバルブがあまり発達しない。自然



第5図　12-④区 縄文時代後期前半の遺構から出土した石器群

面打面で背面は単方向のネガ剥離面である。よって、二上山石核２類から剥離された剥片を素材としていると考えられる。そして部分的だが左側辺を押圧剥離で加工する。

土坑1977　凹基鏃９が１点出土している。押圧剥離で加工される。

土坑2316　両極石器10が１点出土し、垂直打撃痕が認められる。

土坑2340　両極石器11が１点出土している。垂直打撃痕が認められる。

Pit2382　石錐12が１点出土している。素材はＬサイズで、打面が自然面、背面の剥離面構成は多方向タイプである。打点付近にはＢタイプのコーンが認められる。したがって、二上山２類の石核から剥がされた剥片を素材としている可能性が高い。刃部は直接打撃と押圧剥離で加工される。

土坑2401　掻器13が１点出土している。器体を直接打撃で、刃部を直接打撃と押圧剥離で加工する。徳蔵地区遺跡では唯一の出土例である。

土坑2450　削器14が１点出土している。素材はＬＬサイズで、打面が単剥離面打面、背面の剥離面構成は多

方向タイプである。主要剥離面のコーンやバルブは発達しないが、背面の剥離面に硬いハンマーで打撃された打点が認められる。よって、二上山石核１類から剥離された剥片を素材としていると考えられる。

土坑2453　凹基鏃15が１点出土している。押圧剥離で加工される。

土坑2527　石核16が１点出土している。詳細は2-4を参照していただきたい。二上山石核1類の代表例である。

Pit2169　大形の剥片17が１点出土している。この剥片を剥離したときに同時割れを起こし、半分欠損した状態になっている。このような大形の剥片を剥離した痕跡は徳蔵地区遺跡では認められない。原産地で剥離され原石と一緒に徳蔵地区遺跡に搬入されたと思われる。

埋甕⑦土器内埋土　この埋甕は船元Ⅳ段階の土器を使用していることがわかっている。ここからは凹基鏃18が１点出土している。急角度の押圧剥離で加工される。形態的に類例がない。

3－2　12-④区　縄文後期前半の遺構から出土した石器群　（第５図）

縄文後期前半の遺構は住居1113・2600・2682、土坑2541がある。また、住居1113、2600、2682からは石器製作時に生じる剥片類が出土している。石材別に分けると二上山産サヌカイト94.7g、金山産サヌカイト28.4gと二上山産サヌカイトの方がより多く出土している。

住居1113　凹基鏃19が１点、石錐20・21が２点、両極石器23・24・25が４点、両極剥片が１点、使用痕剥片22が１点出土している。石材は全て二上山産サヌカイトである。中期の遺構と同様、金山産サヌカイトで石鏃など定型的な石器は出土していない。

19の凹基鏃の剥離面は幅が広い。加工は押圧剥離である。弥生時代の石鏃の可能性もある。20の石錐は角柱状剥片を素材としていて、その素材は折取加工剥片を分割したものである。20の左側辺にある大きな剥離面は折取加工剥片の面である。24の両極石器は、直接打撃でバルブの発達した剥片が素材である。23も厚手の剥片を素材とした両極石器である。このように直接打撃で剥がされた厚手の剥片に対し、両極打撃が行われている。22は使用痕剥片である。両極剥片を素材としている。

住居2600　凹基鏃が５点、石核が１点出土している。26・27・28・29・30は押圧剥離で加工される。31は石核である。本稿で設定した二上山石核５類に相当する。両極打撃で剥片剥離される石核である。

住居2682　二上山産サヌカイトの凹基鏃が２点、チャート製の削器の刃部断片が１点出土している。32・33は押圧剥離で加工される。端正な作りである。34は手前の辺が刃部である。押圧剥離で刃部が加工される。

土坑2514　削器35が１点出土している。素材はＬサイズで、打面は単剥離面打面、背面の剥離面構成は２方向タイプである。素材技術はＢタイプのコーン（馬場2002）をもち、直接打撃である。よって、この削器の素材は二上山石核２類より剥離された剥片を素材としている。

3－3　12-④区　５層と６層包含層より出土した石器群（第６～12図）

この節では、縄文時代中期前半・後期前半の包含層から出土した石器について説明する。なお、説

明はまずサヌカイト製については二上山産と金山産、そして不明のものに大別し、産地ごとで器種別に記述を行うことにする。これ以外の石材については一括して説明する。なお12-④区についての石器の詳細については4-3で改めて考察する。

金山産サヌカイト

金山産サヌカイトの石器は、凹基鏃2点、両極石器4点、両極剥片1点、縦形石匙2点、削器3点、二次加工剥片4点、折取加工剥片4点、大形使用痕剥片1点、大形削器8点、大形掻器2点、大形剥片9点が出土している。

凹基鏃36は押圧剥離による加工である。37と38の石匙は周辺加工の石匙で刃部は押圧剥離で加工される。仕上がりは粗い。39は両極剥片である。主要剥離面の打点のタイプはクサビタイプである。40は削器としたが石匙の未成品の可能性もある。41と42は削器である。刃部は押圧剥離で加工される。43は7層出土の削器である。石材は金山産サヌカイトで素材はLサイズである。板状原石を素材とする石核から剥がされた剥片を素材としていると思われる。手前の辺が刃部で、押圧剥離で粗く加工される。側辺には成形のための折取加工がある。

44は金山産サヌカイトの板状剥片を素材とした石器である。44は大形使用痕剥片である。右側辺に微細な剥離が認められる。45・46・47・48・49・50・51・52は大形削器である。表面の風化が著しい。刃部を直接打撃で加工する。51は押圧剥離で刃部を加工しているかもしれない。48は下部が欠損していて器種が確定できないが、両側辺に同じ剥離技術が認められるため一応削器とした。52も削器である。板状剥片の末端に直接打撃による加工が認められる。53と54は大形削器である。急角度の末端辺に刃部の加工が認められるため掻器とした。53は刃部が押圧剥離で、54の刃部は直接打撃で加工される。53や54の側辺部は折取加工されている。55・56・57・58・59は剥片である。56は背面が自然面で多く覆われるため、石核の作業面調整時に生じた剥片の可能性がある。60と61は板状剥片である。徳蔵地区遺跡では板状原石からの剥片剥離の痕跡が認められないので、60や61のような板状剥片の状態で遺跡に搬入されたと考えられる。

なお、包含層より出土した金山産の剥片類を集計すると、302.8gであった。

二上山産サヌカイト

二上山産サヌカイトの石器は、凹基鏃およびその未成品8点、石錐5点、両極石器24点、両極剥片4点、石匙3点、削器17点、使用痕剥片1点、打製石斧1点、折取加工剥片6点、二次加工剥片6点、剥片2点、石核5点、原石2点が出土している。

凹基鏃は62・63・64・65・66・67・68である。全て押圧剥離で加工される。67はやや鋸歯気味の縁辺に加工されている。69・70・71・72は凹基鏃の未成品である。このなかで71については、押圧剥離の幅が5㎜前後と幅広い。形態的にも大形なので弥生時代の凹基鏃の可能性もある。72は両面ポジ面の素材である。素材のサイズや特徴から二上山石核3類から剥がされた剥片を素材としていると思われる。

石錐は73・74・75・76・77である。刃部は全て押圧剥離で加工される。73は素材が角柱状である。両極打撃で生じたスポール状の剥片を素材としているかもしれない。77は石錐のなかでも大形である。

素材剥片はＢタイプのコーンをもち、直接打撃で剥離される。背面の剥離面構成は単方向タイプである。よって、二上山石核２類から剥がされた剥片を素材としていると思われる。

両極石器は78・79・80・81・82・83である。78は両端が潰れている。楔のように使用された可能性がある。81の素材は剥片である。ＬＬサイズの剥片を剥がそうとしていたときに同時割れを起こし、半分欠けている状態の剥片を素材としている。

石匙は84・85・86・87である。84は縦形石匙の断片と思われる。85は横形石匙で、押圧剥離によって粗く刃部を加工する。86も横形石匙である。器体を直接打撃で加工し、刃部は押圧剥離で整形する。87は特殊な形の石匙で、あまり例を見ない。

削器は17点出土している。ここでは素材の種類を中心に説明する。88と89の素材は垂直打撃で剥離された素材を利用している。ちょうど亜角礫の角をとっているようである。コーンとバルブは発達しないが、打点がクサビタイプで強いフィッシャーが打点より発生している。これは強い圧縮力で剥離される剥片の特徴である。90と91もやはり強いフィッシャーが認められる。91についてはリングが何本もうねっている状態が認められ、これも垂直打撃で剥離された剥片の特徴である。92も剥片り大きさから推定するに直接打撃で剥離された剥片の可能性がある。93については、自然面打点でＢタイプのコーンをもつ。93を除くこれら削器の素材の特徴は、二上山石核１類の剥片の特徴と一致する。

次に、94・95・96はバルブがゆるやかに発達する素材を利用している。95は良好な例で、自然面打面・２方向タイプで、打点はＢタイプのコーンをもち、直接打撃で剥離される。また素材形状は貝殻状である。したがってこれら素材剥片の特徴は、二上山石核２類から剥離された剥片と一致する。96は素材剥片を二分割している。

97と98はあらく直接打撃で刃部が加工される。未成品の可能性もある。99は押圧剥離で刃部が加工される。100は直接打撃と押圧剥離で刃部が加工される。101・102・103は直接打撃で周囲を加工している。これは削器未成品と思われる。

使用痕剥片104は１点出土している。素材剥片の末端に微細な剥離が認められる。素材はバルブも発達する。直接打撃で剥離される剥片と特徴が一致する。

折取加工剥片は105･106の２点出土している。106の素材背面には、直接打撃のために激しく打点が潰れている。ここで素材剥片が二上山石核１類から剥離された剥片であることがわかる。107は二次加工剥片とした。削器の未成品の可能性もある。

108と109は剥片で大形のものである。108は亜角礫の角を取る剥離で直接打撃によって剥離される。109は同時割れを起こし、剥片が半分欠損した状態である。108と109とも剥離技術の特徴から、二上山石核１類から剥離された剥片である。役割を考えれば、双方とも素材剥片には適さないので、石核の作業面調整や石核の成形加工剥片と考えられる。

110・111・112・113・114は石核である。113の石核は剥離の打点タイプがクサビタイプである。強い圧縮の力で剥離されているのがわかる。したがって直接打撃による剥離であり、二上山石核１類の石核から剥離された剥片である。

115はブロック状の亜角礫を素材とした原石核である。正面に剥離面が認められるが、これは110のような小形の石核の素材になる。110の石核はちょうど亜角礫の角をとった剥片が素材となっていて、これは115の剥離の部位と一致しているからである。よって、石核の素材となる剥片を剥離する石核＝原石核という器種名で呼ぶことにする。

116と117は原石である。亜角礫で平坦な面をもつ部位が認められる。112のような石核の素材になるのであろう。

なお、包含層より出土した二上山産サヌカイトの剥片類は1533.7gであった。金山産サヌカイトが302.8gであったので、二上山産サヌカイトの剥片が5倍近く出土していることがわかる。縄文中期・後期の遺構でもやはり二上山産サヌカイトの出土量が多いことが認められており、包含層も同様の結果を得ることができた。徳蔵地区遺跡の縄文中期・後期は二上山産サヌカイトの剥片石器の製作活動が中心であったことがこれら剥片の出土量から想定できる。

ところで、金山産サヌカイトの剥片には単剥離面打面をもつ板状剥片やその断片の他に、線打面かもしくはそれに近い打面を持つものも散見された。線打面をもつ剥片は両極打撃の剥片や尖頭器の製作剥片によく見られる打面形態で、金山産サヌカイトの石器に両極石器が多いことからも、線打面を持つ剥片は両極打撃に伴って生じた剥片と考えられる。石鏃等の素材になるような特徴的な剥片は認められなかった。

産地不明サヌカイト

サヌカイトの石器で産地不明なものは、両極石器118が1点、横形石匙119が1点、削器120が1点、折取加工剥片2点が出土している。120の削器の刃部加工は押圧剥離である。

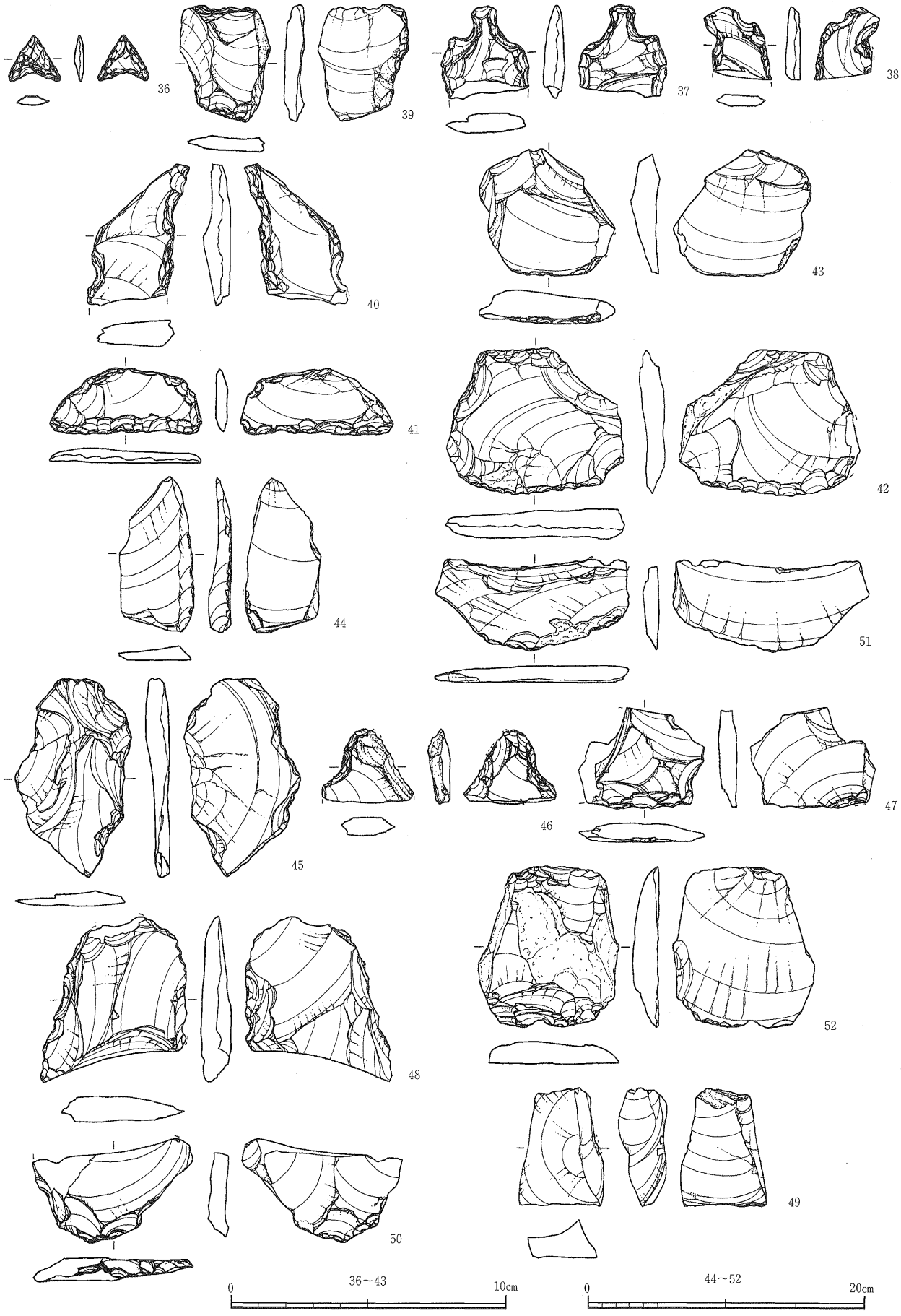
なお、産地不明の剥片類が包含層から101.4g出土している。

以上、縄文時代の包含層について検討した。出土した剥片類については5・6層一括してデータを提示したが、層位別のデータについても提示しておく。

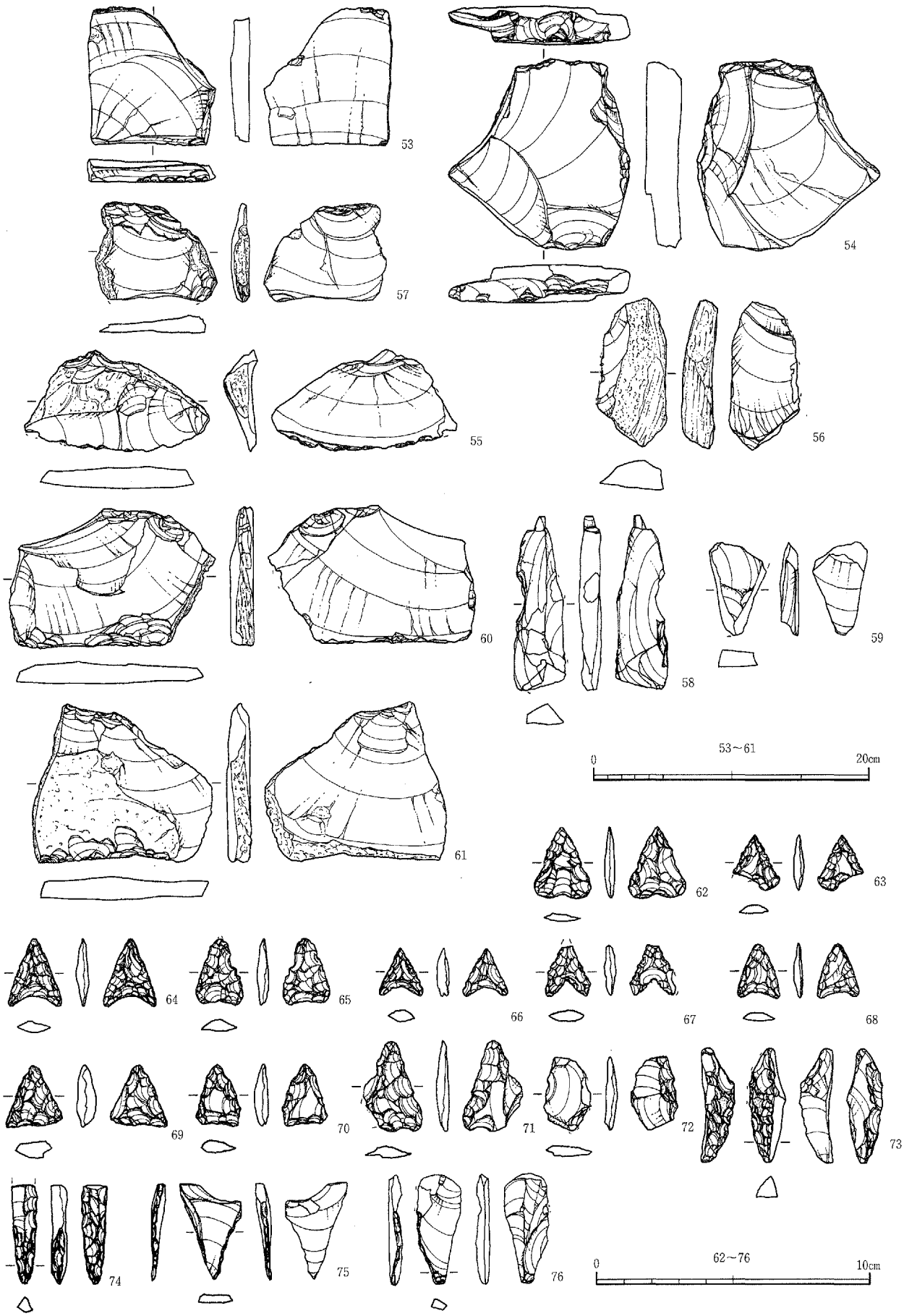
剥片の産地	5層	6層	5層と6層の合計
金　　山	135.4g	167.4g	302.8g
二 上 山	930.0g	624.7g	1533.7g
産地不明	59.4g	42.0g	101,4g

その他の石材の石器

121はホルンフェルス製の打製石斧である。刃先は摩耗している。両側辺と刃部を直接打撃で加工する。122は部分磨製石斧である。凝灰岩製である。刃先のみに研磨加工が認められる。123は丸鑿状石斧とした。細長い棒状礫を素材とし、刃部付近に研磨加工を施す。刃先の下見のラインが弧を描くようになっている。124は部分磨製石斧未成品である。凝灰岩製である。側面を直接打撃で加工したあと、研磨加工を施している。125は定角式磨製石斧の頭部断片である。蛇紋岩製で、徳蔵地区遺跡で唯一の出土例である。頭部は剥離で加工された後、研磨で平滑に整形されている。126は抉入石器とした。表面の風化が激しい。両側辺の剥離は加工である。127はチャートの剥片である。128は黒曜石の剥片で

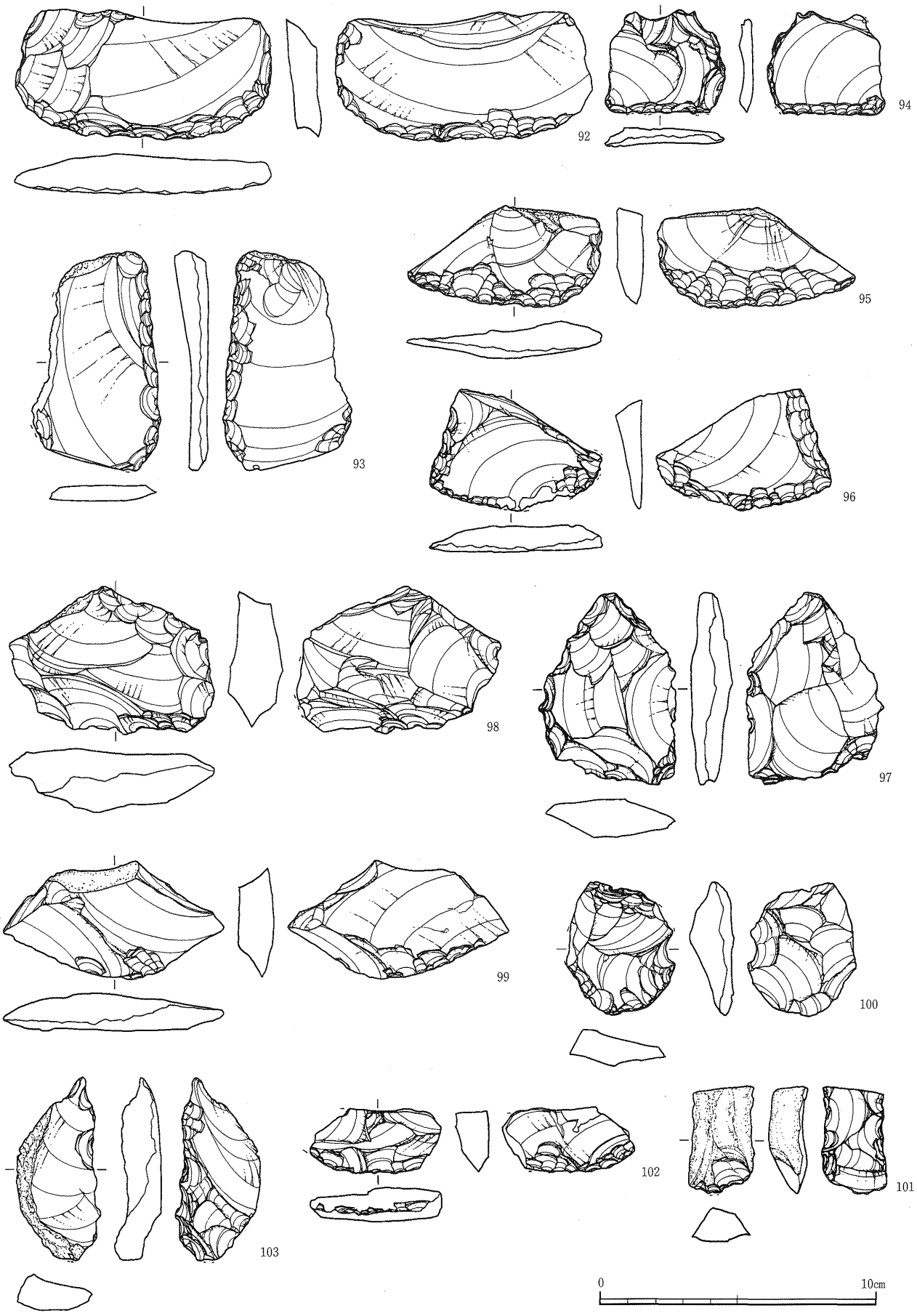


第6図　12-④区5層・6層（包含層）より出土した石器群（1）

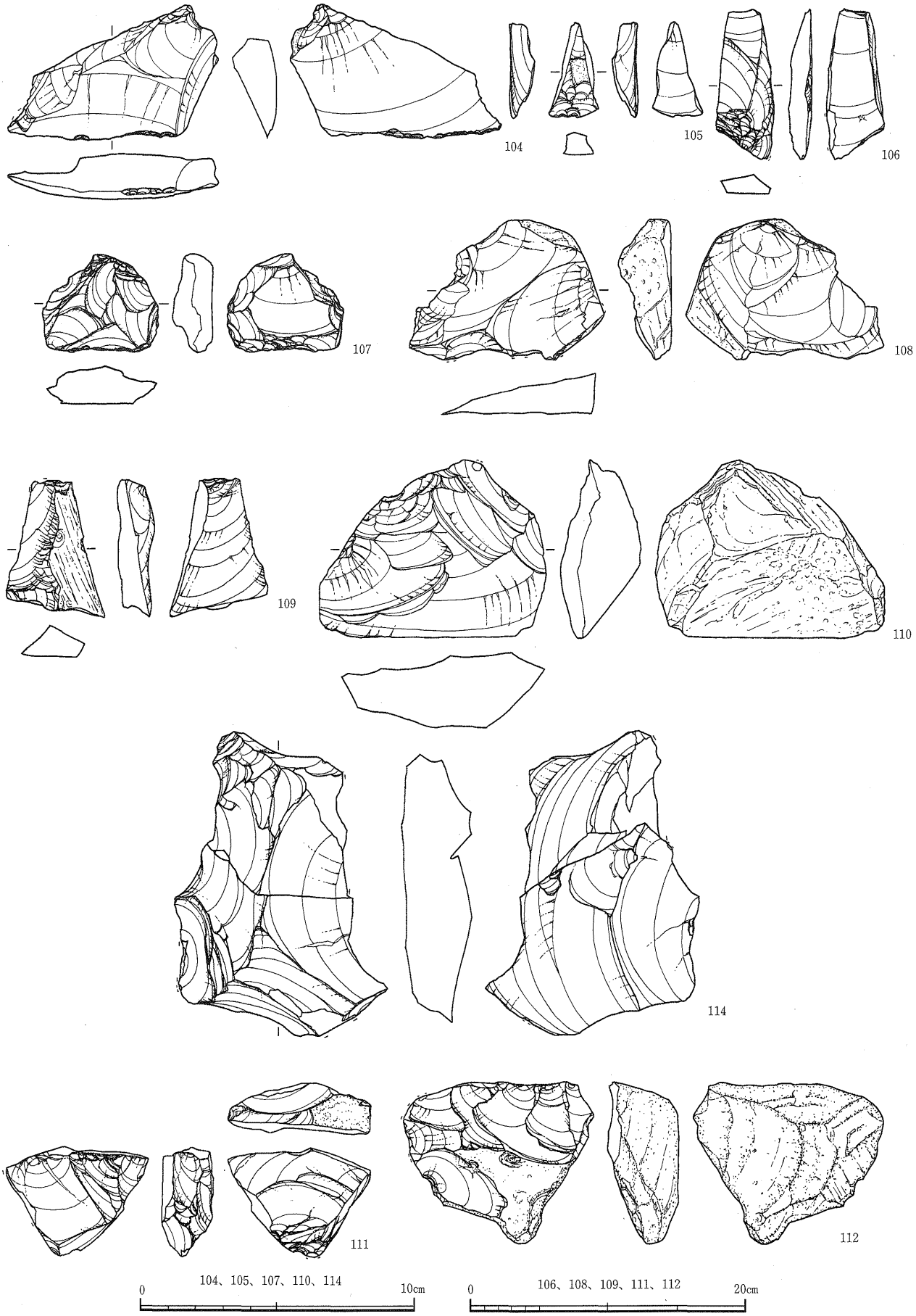


第7図　12-④区5層・6層（包含層）より出土した石器群（2）

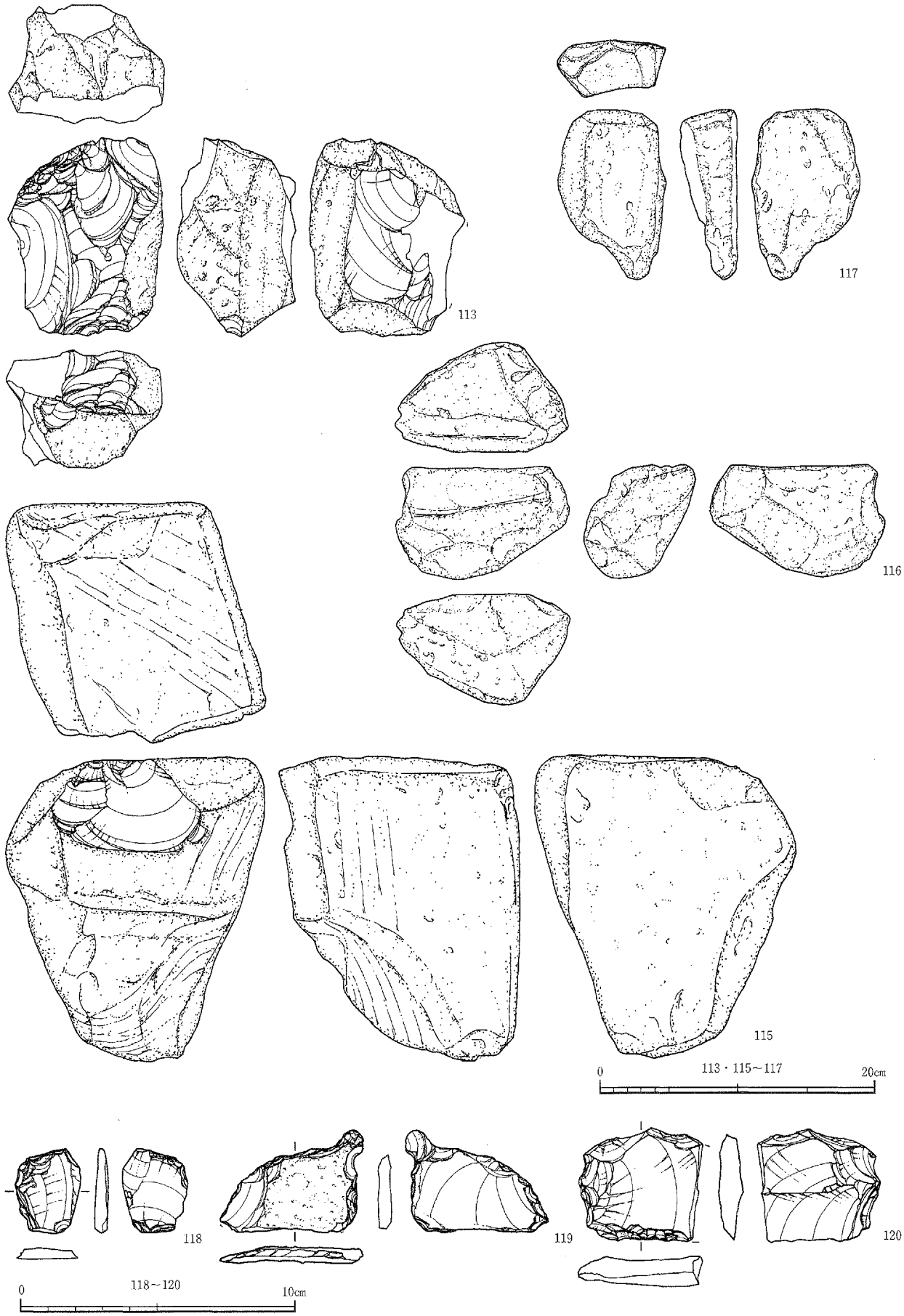
第8図　12-④区5層・6層（包含層）より出土した石器群（3）



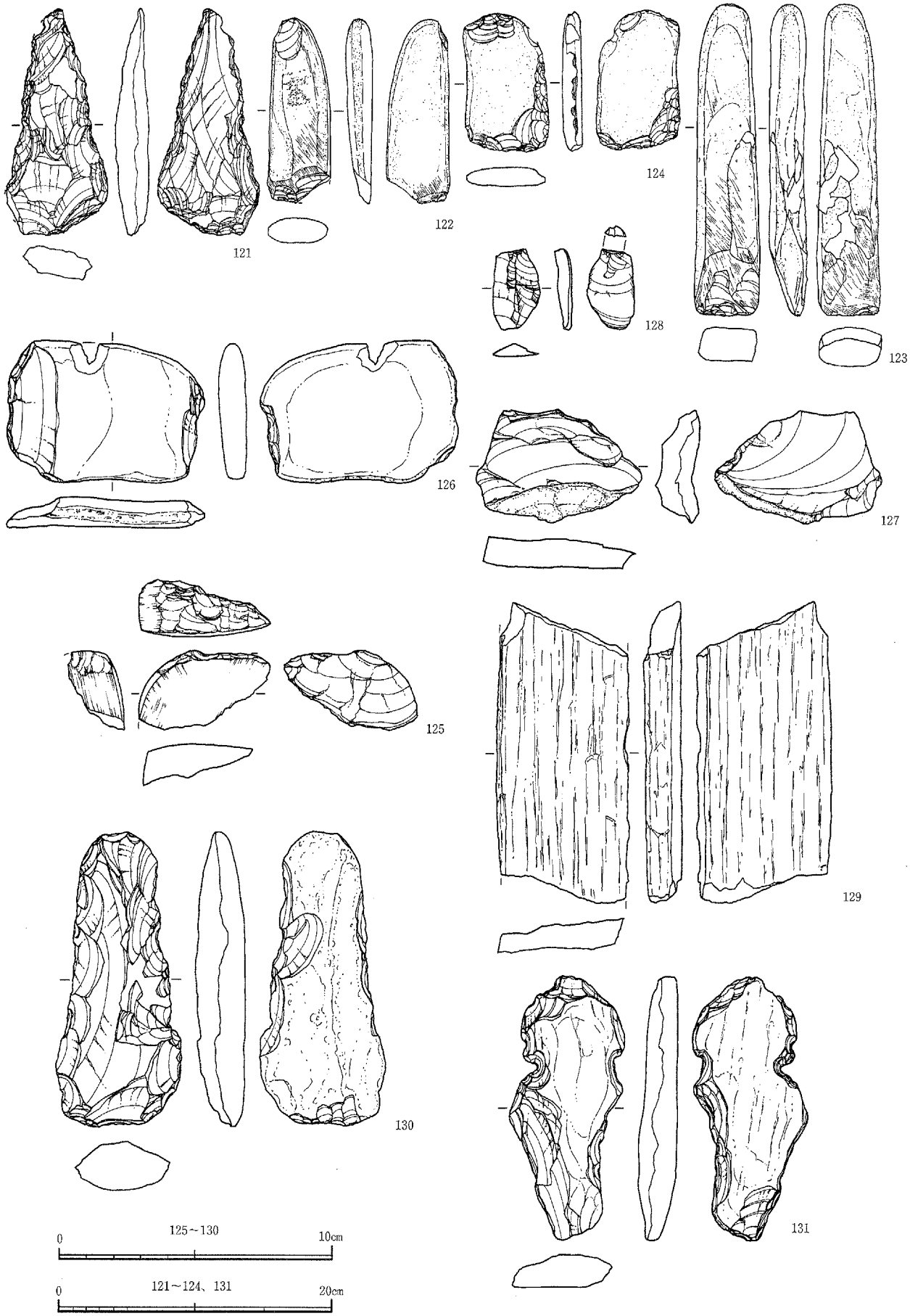
第9図　12-④区5層・6層（包含層）より出土した石器群（4）



第10図　12-④区５層・６層（包含層）より出土した石器群（５）



第11図　12-④区５層・６層（包含層）より出土した石器群（６）



第12図　12-④区５層・６層（包含層）より出土した石器群（７）

ある。間接打撃で剥離されている。沼津工業高等専門学校の望月明彦氏の分析で神津島産との結果を得ている。129は紅簾片岩の剥片である。130は打製石斧である。両側辺と刃部を直接打撃で加工する。刃先に若干の摩耗痕が認められる。131は岩偶と推定した。石材は緑泥片岩である。表面の風化が著しく詳細は確認できないが、直接打撃で器体を成形している。

3－4　12-④区　縄文時代の遺構より出土したその他の石器（第13図）

この節では縄文時代で時期不明の遺構から出土しているものについて説明する。時期不明の遺構（住居・土坑・柱穴）から出土した石器の内訳は次の通りである。

〔金山産サヌカイト〕

二次加工剥片１点。

〔二上山産サヌカイト〕

凹基鏃９点、石匙１点、両極石器８点、両極剥片３点、削器５点、二次加工剥片３点、大形剥片１点、石核断片１点。

〔産地不明〕

削器１点、両極石器１点。

落ち込み1795　両極石器132が１点、削器133・134が２点出土している。石材は132・133が二上山産サヌカイトである。134は産地不明である。133の素材はバルブの発達するＬＬサイズの素材剥片である。素材の打点付近は加工で無くなってしまっているが、このようなバルブの発達する剥片は直接打撃で剥離が可能である。恐らく二上山石核１類から剥離された剥片を素材としているのだろう。手前の辺が刃部で、押圧剥離が認められる。だが、この押圧剥離より新しい直接打撃痕が認められるため、この石器は再加工されていると考えられる。

落ち込み1112　削器135が１点、削器未成品136が１点出土している。135の削器の素材は両極剥片である。よって、二上山石核５類から剥がされた剥片を素材としていると思われる。

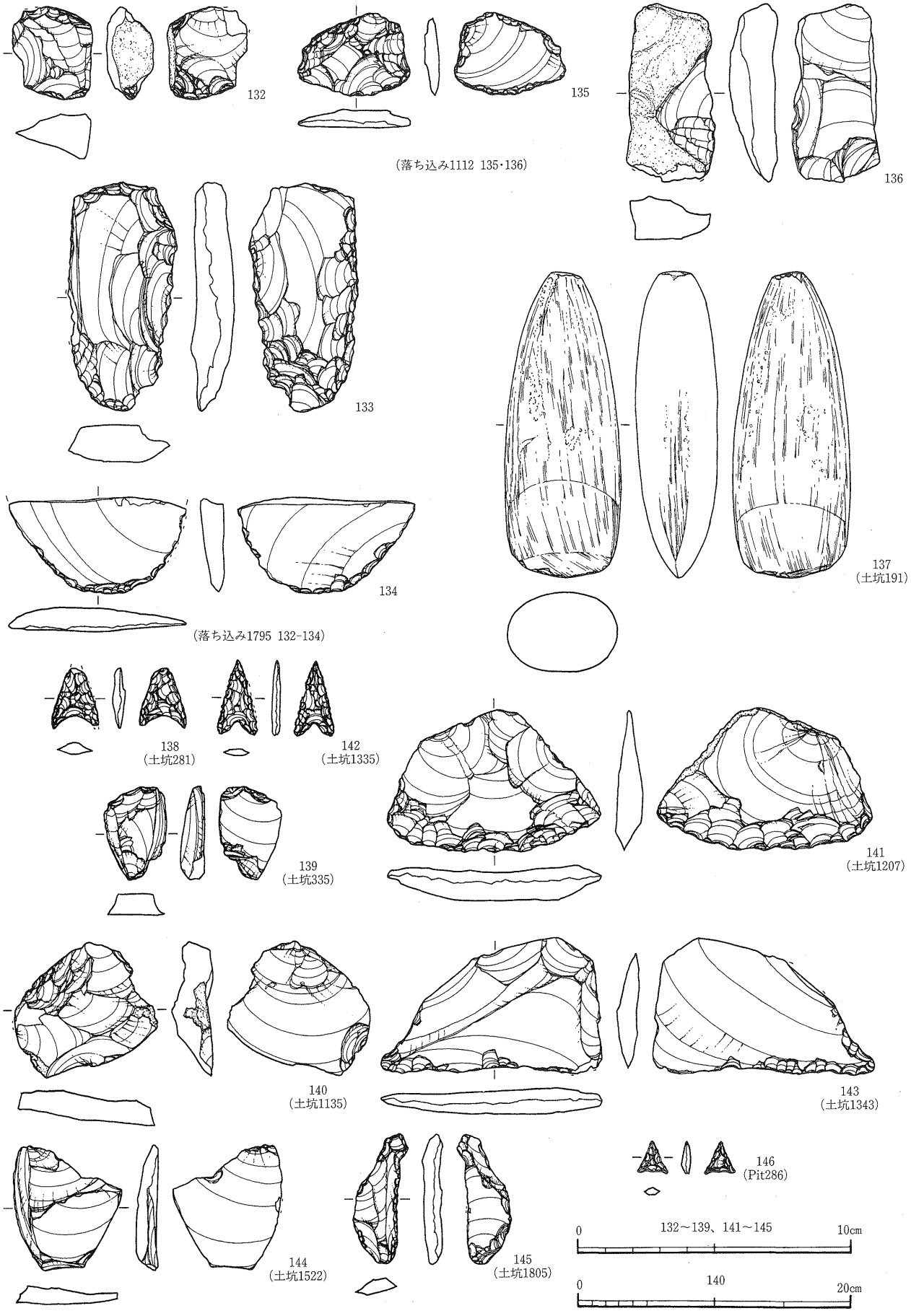
土坑191　137は磨製石斧である。基部が尖る形態をもつ。刃部と刃部側辺が丁寧に研磨されている。基部は敲打整形され、研磨でさらに整形れている。

土坑281　二上山産サヌカイトの凹基鏃138が１点出土している。押圧剥離で加工される。

土坑355　二上山産サヌカイトの両極石器139が１点出土している。角柱体剥片の石核とも考えられる。

土坑1135　二上山産サヌカイトの大形剥片140が１点出土している。直接打撃で剥離される。コーンが明瞭でコーンに沿う強いフィッシャーが顕著である。ただし素材剥片には不適切な上、背面の剥離面構成は多方向タイプで既に先行して数枚の剥離が行われている。このような剥片は第23図の二上山石核１類の16からの剥離によって生じたものであろう。作業面調整剥片と考えられる。

土坑1207　二上山産サヌカイトの削器141が１点出土している。素材はＬＬサイズで、バルブはゆるやかに発達する。打面は自然面打面で、背面の剥離面構成は２方向タイプである。このような特徴は二上山石核２類の剥片に認められるので、ここから剥離された剥片を素材にしていると考えられる。



第13図　12-④区 縄文時代の遺構より出土したその他の石器群

土坑1335　二上山産サヌカイトの鋸歯縁凹基鏃142が１点出土している。押圧剥離で鋸歯縁に加工される。

土坑1343　二上山産サヌカイトの削器143が１点出土している。SPで刃部が加工される。

土坑1522　二上山産サヌカイトの両極剥片144が１点出土している。

土坑1805　二上山産サヌカイトの縦形石匙145が１点出土している。刃部は押圧剥離で加工される。表面の風化が著しい。

Pit286　二上山産サヌカイトの凹基鏃146が１点出土している。押圧剥離で加工される。

3－5　12-④区　弥生時代の住居から出土した石器と弥生時代特有の石器（第14図）

3－5－1　弥生時代前期の住居から出土した石器

この項では弥生時代前期の住居であるSH100より出土した石器について説明する。出土した石器の内訳は次のとおりである。

〔金山産サヌカイト〕

凹基鏃２点、石錐１点、両極石器６点、二次加工剥片２点。

〔二上山産サヌカイト〕

有茎鏃１点、石錐１点、両極石器１点。

〔産地不明〕

石錐１点、二次加工剥片１点。

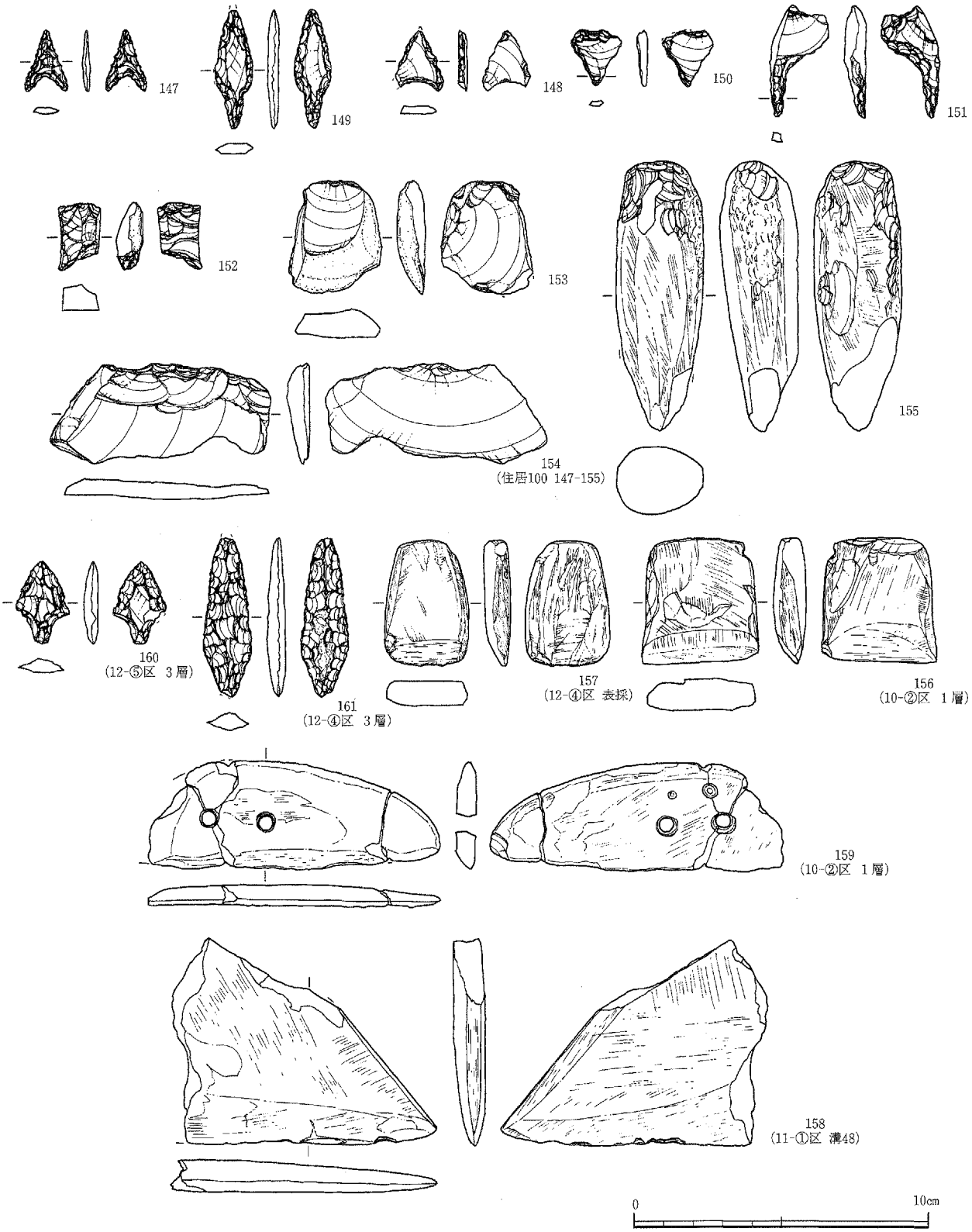
〔その他〕

泥岩製両極石器１点、頁岩製磨製石斧１点。

147は凹基鏃で金山産である。縁辺が鋸歯状に加工される。148も凹基鏃で、二上山産である。押圧剥離で加工される。149は有茎鏃で二上山産である。押圧剥離で加工される。素材は直接打撃で剥離された剥片である。素材の両面に大きな剥離面が認められる。150と151は石錐である。急角度の押圧剥離で刃部が加工されている。152は両極石器、153は両極剥片である。153は上端にステップフレイキングが認められる。垂直打撃で形成される剥離面のため、両極剥片とした。154は剥片であり、これは打製石斧の加工のときに生じた調整剥片である。この剥片の打面は線打面で打点はクサビタイプである。そして、剥離面の起伏は平坦で剥離面の末端はステップである。このような剥離は、打製石斧の側辺部の加工に良く認められる。155は刃部の欠損する磨製石斧の基部断片である。基部には剥離・敲打・研磨加工が認められる。

なお、この住居跡からは剥片石器の製作時に生じる剥片類が出土している。これを産地別に分けると、金山産81.1g、二上山産15.1g、不明0.1gであった。金山産の方が圧倒的に多いことがわかる。これは縄文中期・後期の住居・土坑で二上山産が多かったのと逆の現象であるので注目しておきたい。

3－5－2　10-②・11-①・12-④・12-⑤区　弥生時代特有の石器



第14図　12-④区 弥生時代の住居から出土した石器と弥生時代特有の石器

この項では明らかに弥生時代の石器である資料について説明する。形態的に弥生時代の特徴が認められる石鏃についてもここで説明する。

156と157は扁平片刃石斧である。両方とも扁平礫を素材とし、研磨で器体を加工する。158は大形直縁刃石器である。刃部だけでなく器体も研磨されているのは比較的珍しい。159は直線刃の磨製石庖丁である。弥生中期の河内平野によく見られる形態である。有茎鏃の160は4㎜前後の幅の広い押圧剥離

で加工される。これは弥生時代の可能性がある。161は突出した規模をもつ石鏃なので中形有茎鏃とした。５㎜前後の幅広の押圧剥離で加工される。なお、この石鏃の基部には摩耗痕が認められる。装着時に形成された摩耗痕であろう。これは弥生時代の有茎鏃である。

そして別の地区だが12-⑧区より太形蛤刃石斧が出土している。12-⑧区の項に説明があるので、ご参照いただきたい。

３－６　12-④区　その他遺構から出土した石器群

３－６－１　古墳時代前期の住居から出土した石器群（第15・16図）

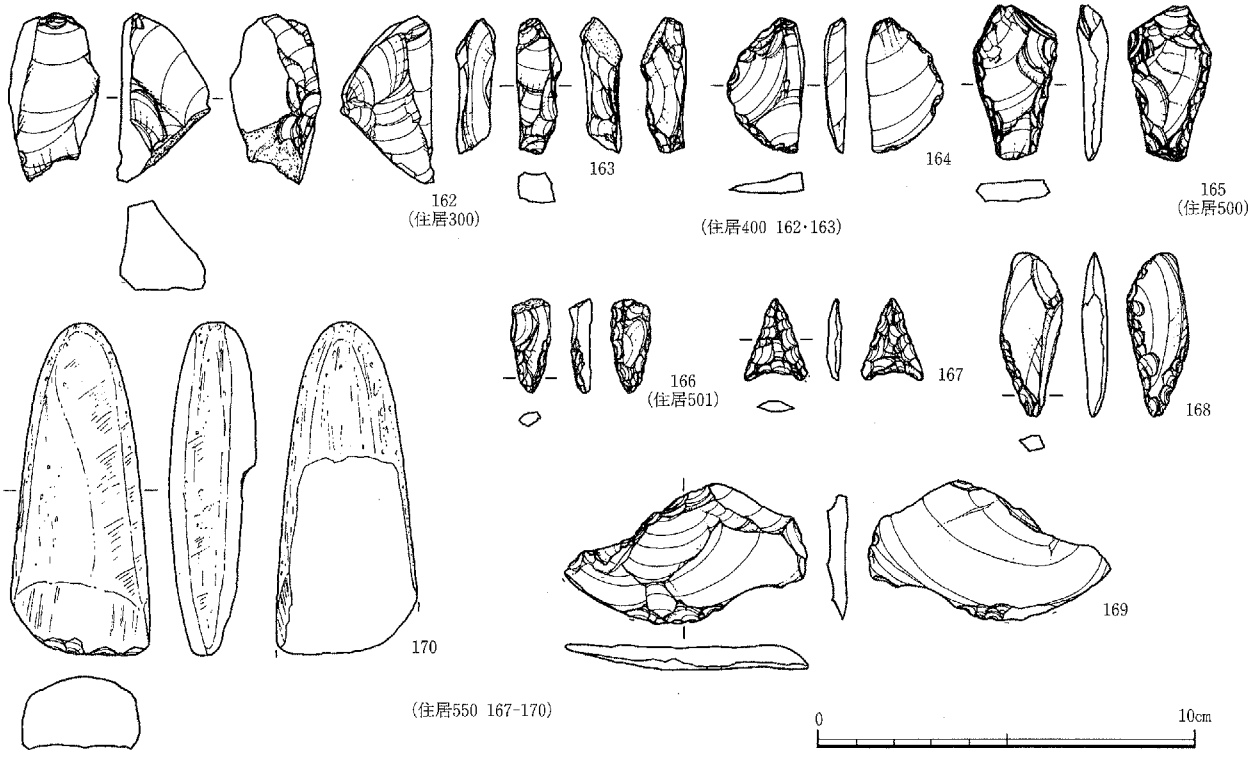
住居300　両極石器162が１点出土している。

住居400　石錐の未成品163が１点、削器164が１点出土している。石材は二上山産サヌカイトである。163の石錐の素材は両極石器で、両極打撃に先行して形成された左側面は折取加工で形成された面と思われる。よって、折取加工石器を両極打撃で分割したときに、スポール状に作り出された剥片を素材としていると考えられる。

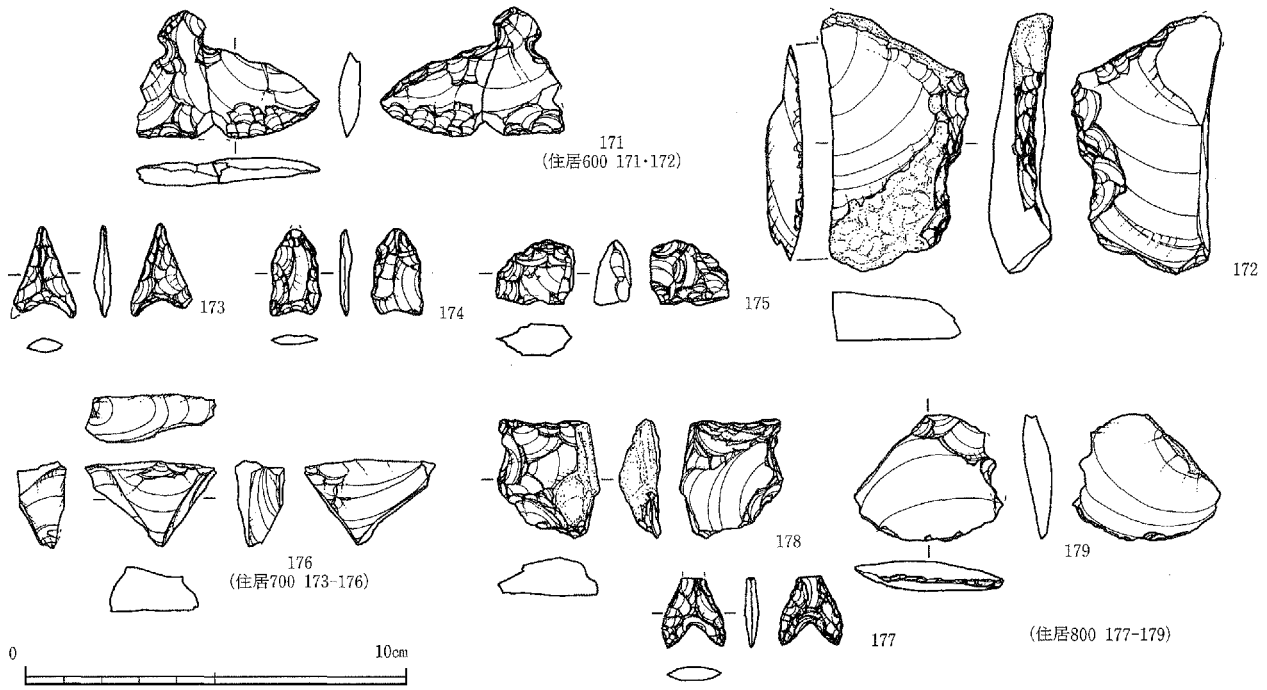
住居500　削器165が１点出土している。石材は金山産サヌカイトである。素材は剥片Dを用い、押圧剥離で刃部を整形する。

住居501　石錐166が１点出土している。刃部は押圧剥離で整形される。

住居550　凹基鏃167が１点、石錐168が１点、削器169が１点、乳棒状磨製石斧170が１点出土している。サヌカイトは全て二上山産である。凹基鏃は押圧剥離で加工される。石錐は素材を折取り、折取面を打面として押圧剥離で刃部が加工される。削器はサイズ、背面構成から考えると、二上山産石核２類



第15図　12-④区 古墳時代前期の住居から出土した石器群（１）



第16図　12-④区 古墳時代前期の住居から出土した石器群(２)

から剝がされた剝片を素材とする。刃部は押圧剝離で加工される。

住居600　横形石匙171が１点、削器171が１点出土している。横形石匙の素材は両面ポジ面の貝殻状剝片である。よって、二上山産石核３類から剝がされた素材と考えられる。刃部は押圧剝離で整形される。削器172はサイズと背面に多くの自然面を残すことからも、二上山産石核１類から剝がされた大形の剝片を素材としている。なお、この石器の左側面は素材を剝離した際に同時に形成された面（同時割れ面）である。

住居700　凹基鏃173が１点とその未成品174が１点、両極石器175が１点、折取加工剝片176が１点出土している。凹基鏃は金山産サヌカイト、両極石器は神津島産黒曜石（沼津工業高等専門学校　望月明彦氏分析）、他２点は二上山産サヌカイトである。凹基鏃は表面の風化が激しく、押圧剝離とまでしかわからない。凹基鏃の未成品は押圧剝離で加工される。折取加工石器は二上山産石核１類から剝がされるような厚手の剝片を分割し、そして右側面を折り取っている。左側面が最終形成の面で、その面の打点のタイプはクサビタイプである。よって、剝離技術は垂直打撃である。ここから剝がされた素材は住居550から出土した168の石錐の素材になっていると考えられる。

住居800　凹基鏃177が１点、両極石器178が１点、削器179が１点出土している。石材は二上山産サヌカイトである。凹基鏃は押圧剝離で加工される。削器は両面ポジ面で、サイズと打面の種類より二上山産石核３類から剝離された剝片と考えられる。刃部はやや急角度の押圧剝離で加工される。

３－６－２　中世溝・河川より出土した石器群（第17図）

溝439　凹基鏃180が１点、縦形石匙181が１点、横形石匙182が１点出土している。石材は二上山産サヌカイトである。凹基鏃は押圧剝離で加工される。縦形石匙の素材は直接打撃の剝片と思われ、刃部は粗雑な押圧剝離で加工される。横形石匙は素材剝片の打面が自然面打面で、サイズはＬサイズ程度

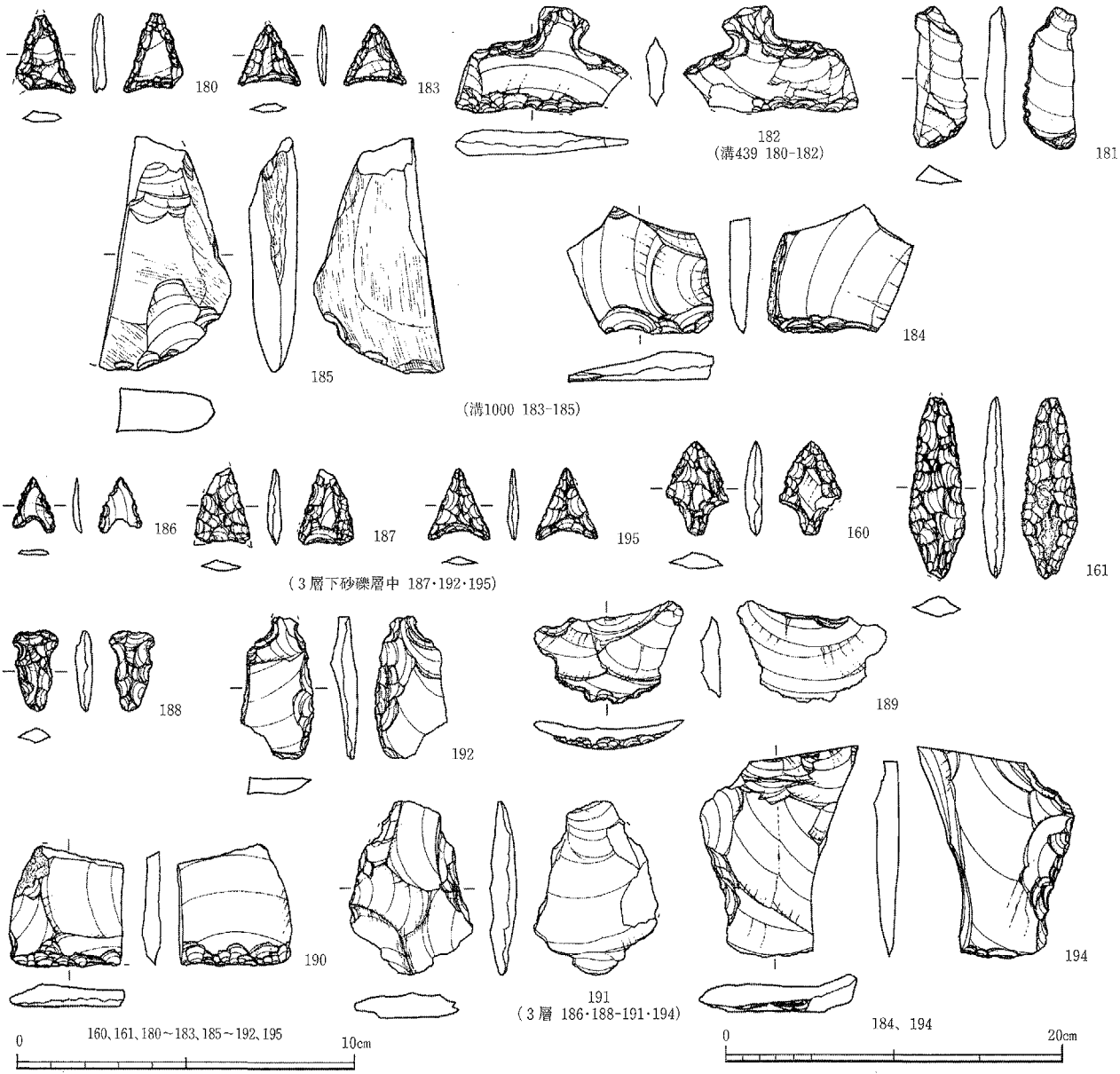
である。バルブもゆるやかに発達している程度である。ここから考えれば二上山産石核２類から剥離された剥片を素材にしていると思われる。刃部は押圧剥離で加工される。

溝1000　金山産サヌカイトの凹基鏃183と大形削器184が各１点、磨製石斧185が１点出土している。凹基鏃は押圧剥離で加工される。大形削器は手前の辺に当たる刃部が直接打撃で加工される。

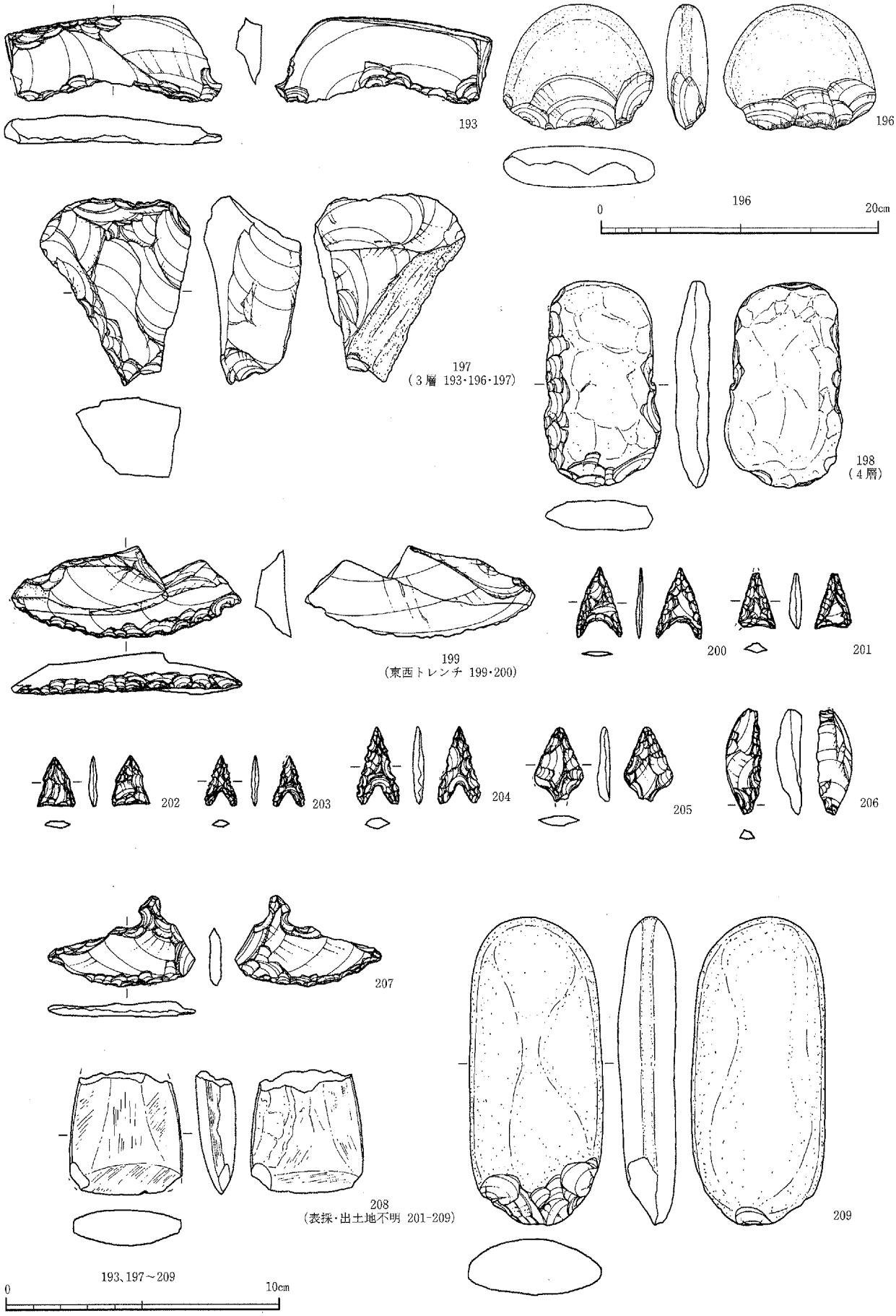
3－6－3　12-④・12-⑤区　その他の出土の石器群（第17・18図）

〔３層および３層下砂礫層中〕

二上山産サヌカイトの凹基鏃186・187が２点、有茎鏃160が１点、中形有茎鏃161が１点、小形石匙188が１点、削器189・190が２点、打製石斧断片191が１点出土している。金山産サヌカイトでは、縦形石匙192・削器193・大形削器194・石核197が各１点ずつ出土している。あと産地は不明の凹基鏃195と礫器196が出土している。



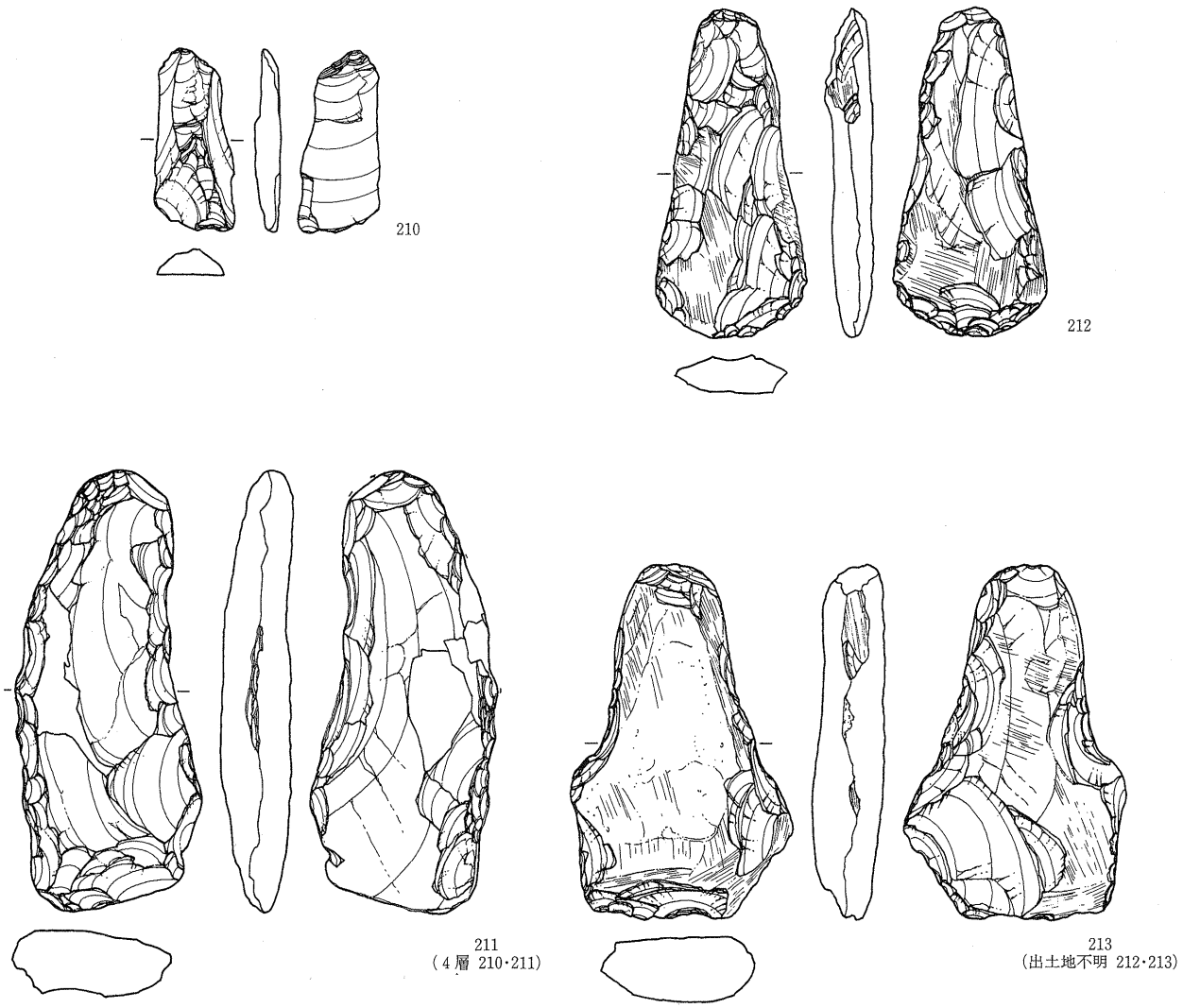
第17図　12-④区 中世溝・河川より出土した石器群とその他出土の石器群（１）



第18図　12-④・⑤区、その他の出土石器群（2）

二上山産サヌカイトの石器から見てみよう。凹基鏃の186は押圧剥離で加工し、縁辺は急角度になっている。小形の石鏃である。187は4㎜前後の幅の広いS'Pで加工される。徳蔵地区遺跡の縄文時代の石鏃には見られない剥離技術のため、弥生時代の凹基鏃の可能性がある。188の小形石匙も幅広の押圧剥離で加工される。189と190の削器は、189がバルブの発達する素材剥片、190がバルブはあまり発達しない素材剥片である。それぞれ石核の種類が異なると考えられる。191は刃部の摩耗痕が認められる打製石斧断片である。

次に金山産サヌカイトの石器を見てみよう。192は縦形石匙である。表面の風化が著しい。押圧剥離で刃部が加工される。193は削器である。直接打撃で粗く刃部が加工される。素材はＬＬサイズの剥片を折断している。194は大形削器である。左側辺を直接打撃で、右側辺を折取加工で成形する。手前の辺が刃部で、直接打撃で粗雑に加工される。197は石核である。板状剥片を素材とする。Ｓサイズの素材剥片の石核と思われる。



第19図　10-②区より出土した石器群

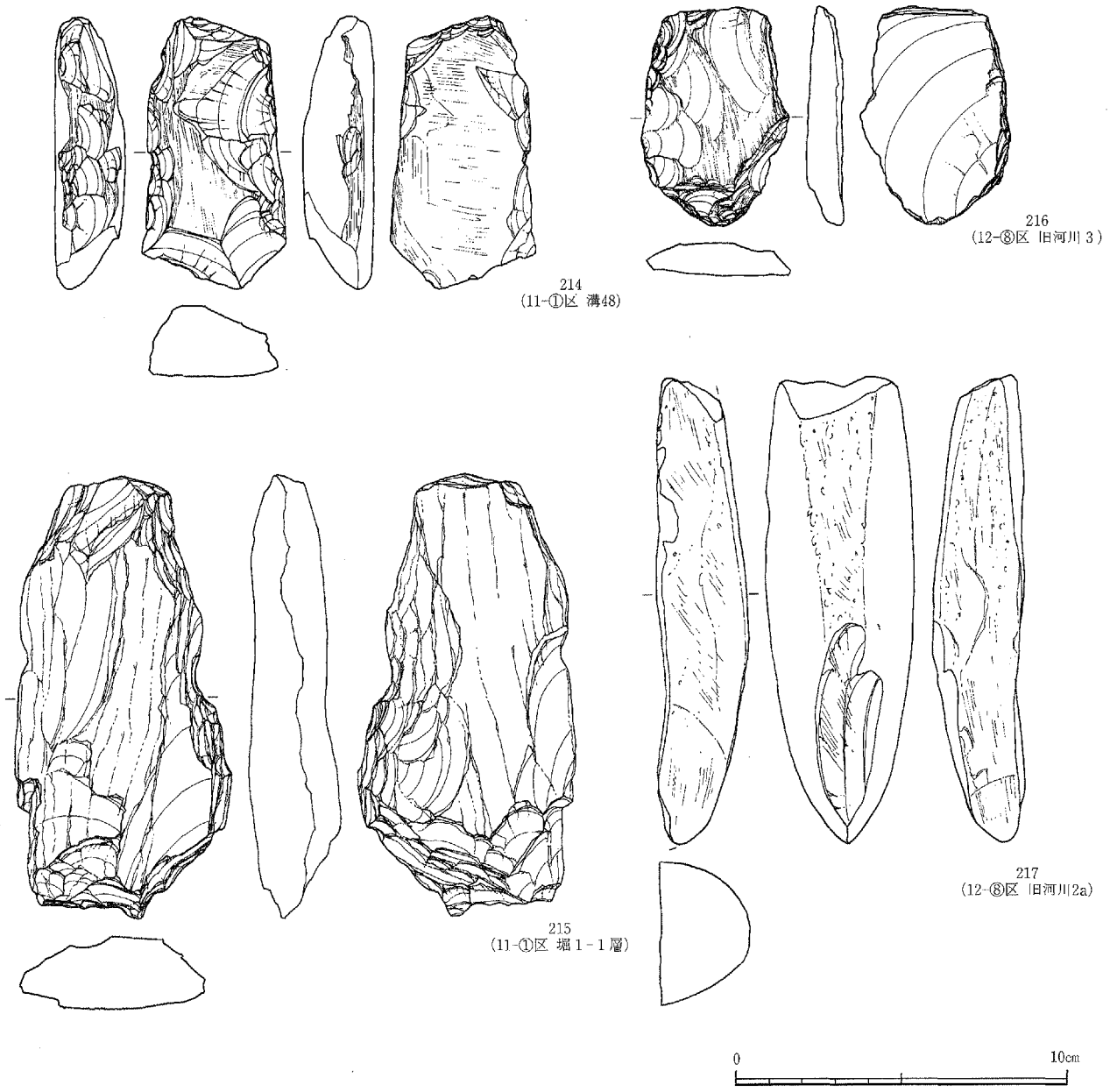
196の礫器は砂岩製で直接打撃で刃部を加工する。刃部付近に摩耗痕の確認できる良好な資料である。

〔その他の層位出土の石器群〕

198は4層出土の打製石斧である。表面の風化が著しい。石材は不明である。199は東西トレンチ出土の削器である。石材は二上山産サヌカイトである。手前の辺が刃部で、押圧剥離で加工される。

3－6－4　表採・出土地不明の石器（第18図）

200と201は押圧剥離で加工された凹基鏃である。202はいわゆる五角形石鏃である。203は鋸歯縁凹基鏃で、ともに押捺剥離で加工される。204も鋸歯縁凹基鏃だが203よりやや幅広の押圧剥離面を持つ。205は有茎鏃で押圧剥離加工される。弥生時代の有茎鏃の可能性がある。以上は二上山産サヌカイトを石材とする。206は石錐である。石材は金山産サヌカイトである。刃部は押圧剥離で加工される。左側



第20図　11-①区と12-⑧区より出土した石器群

辺は折取面と思われる。おそらく折取加工剥片を石核として剥離された角柱状の剥片を素材とする。207は横形石匙である。これも同じく石材は金山産サヌカイトである。裏面の左側辺は折取加工される。このような折取加工は金山産サヌカイトの石器によく見られる。刃部押圧剥離で粗く加工される。そして208は定角式磨製石斧である。209は扁平礫の先端を直接打撃で加工した礫器である。

3－7　10-②区（第19図）

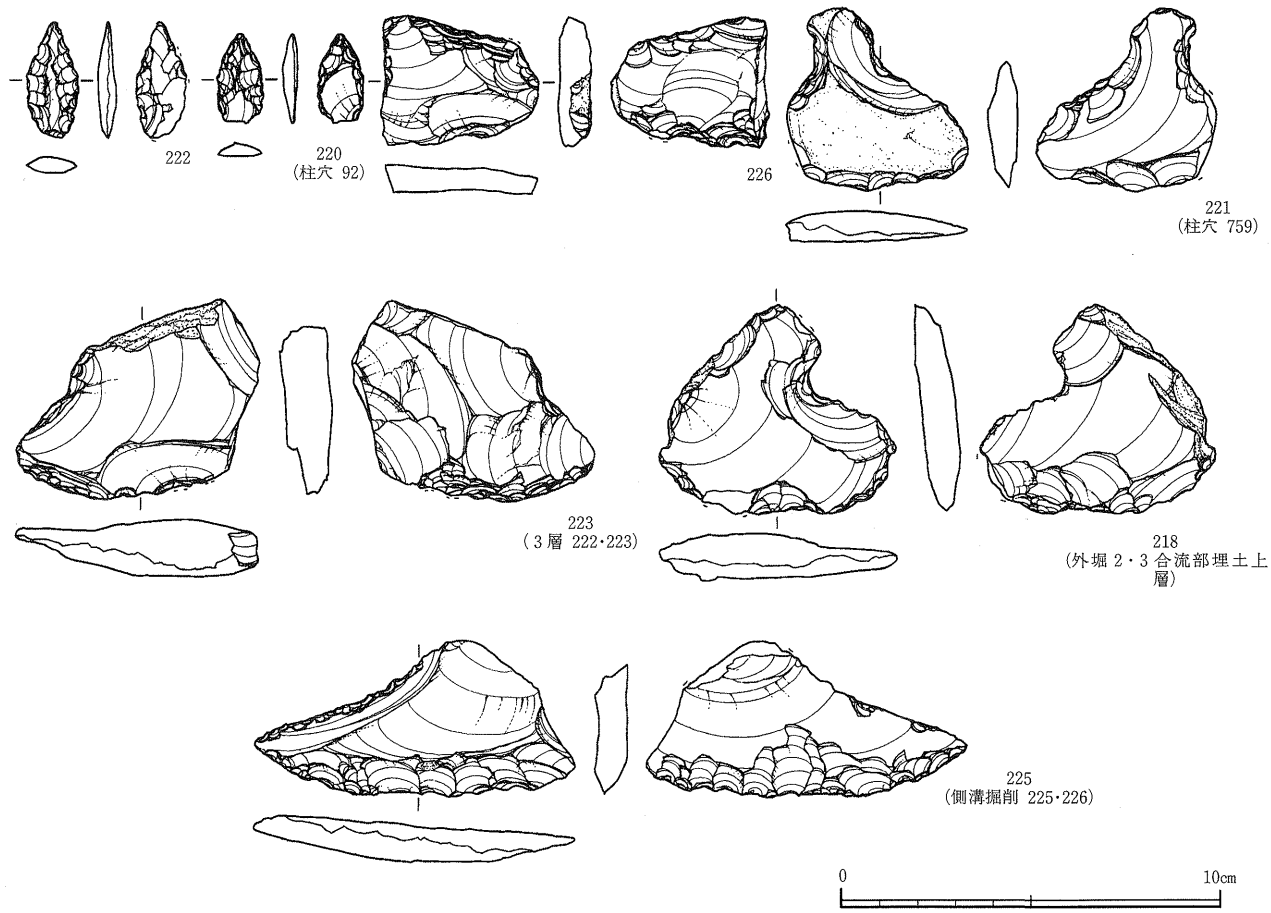
4層　210は二上山産サヌカイトの両極剥片である。上辺にクサビタイプの打点をもつ。垂直方向に強い力がかかった結果、剥がされた剥片である。211は打製石斧である。石材は泥岩である。表面の風化が著しく、詳細は確認できない。直接打撃で刃部と基部が整形される。

出土地不明　212は部分磨製石斧である。直接打撃と研磨で器体を成形加工する。刃部には摩耗痕が認められる。213も部分磨製石斧である。製作技術は212と同様である。石材は212･213とも泥岩である。

3－8　11-①区（第20図）

溝48　部分磨製石斧214が出土している。まず直接打撃で器体を大きく成形し、研磨を加えている。正面図手前の2枚の剥離は研磨痕より新しく形成された面である。

堀1　215は緑色片岩製の打製石斧の未成品と思われる。刃部に相当する辺に直接打撃により加工が施される。



第21図　13-④区より出土した石器群（1）

3－9　12-⑧区（第20図）

旧河川３　打製石斧216が１点出土している。この打製石斧はより大形の打製石斧の刃部断面を再利用し、再度打製石斧として利用している。刃部付近には、以前の打製石斧使用時に形成された摩耗痕と、再利用後に形成された摩耗痕が認められる。再利用後と判断したのは、以前の打製石斧の摩耗痕より新しく形成された剥離面に、また摩耗痕が認められるからである。石材は二上山産サヌカイトである。

旧河川2a　217は両刃石斧断片である。緑色岩製である。縦折れして半分を欠損している。敲打と研磨で加工される。弥生時代のものである。

3－10　13-④区（第21・22図）

13-④区からは、石鏃未成品１点、凹基鏃未成品１点、両極石器１点、横形石匙２点、削器２点が出土している。全て二上山産サヌカイトである。また器種不明だが、研磨痕の認められる石器が１点出土している。

外堀２・３合流部埋土上層　218の横形石匙は直接打撃で粗く刃部が加工される。未成品なのかも知れない。素材はＬサイズで、背面は自然面単方向のネガ剥離面である。よって、素材剥片の石核は二上山産石核２類の可能性が高い。

外堀２・３合流部埋土中層　徳蔵地区遺跡では最大規模の原石219が出土している。産地は二上山である。表面はごつごつとしたクレーター状である。二回の打撃により剥離が形成されている。

Pit92　石鏃220は押圧剥離で加工される。

Pit759　221の横形石匙は直接打撃で刃部が加工される。未成品なのかも知れない。素材はＬサイズで、素材は、背面が自然面で覆われる礫端片である。同様の特徴をもつ剥片は二上山２類の石核から剥離される。よって、素材剥片の石核は二上山産石核２類と思われる。

３層　石鏃の222は押圧剥離で加工される。223の削器は直接打撃で刃部が加工される。224は器種不明だが、研磨による加工が認められる。石材は泥岩である。

側溝掘削　225は削器である。手前の刃部は間接打撃による加工と思われる。素材はＬＬサイズで、末端がややヒンジフラクチャー気味の横長剥片である。二上山石核１類もしくは２類から剥がされた剥片を素材にしていると思われる。226は両極石器で、上下端の階段状剥離が顕著である。

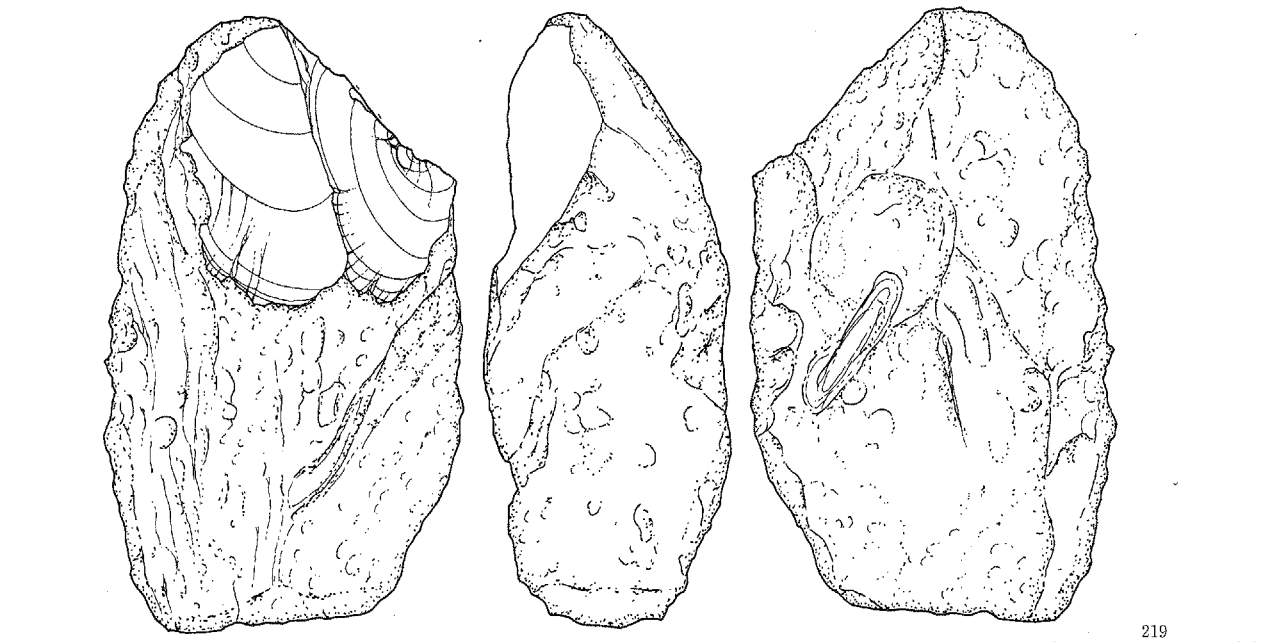
3－11　その他の表採・不明（第22図）

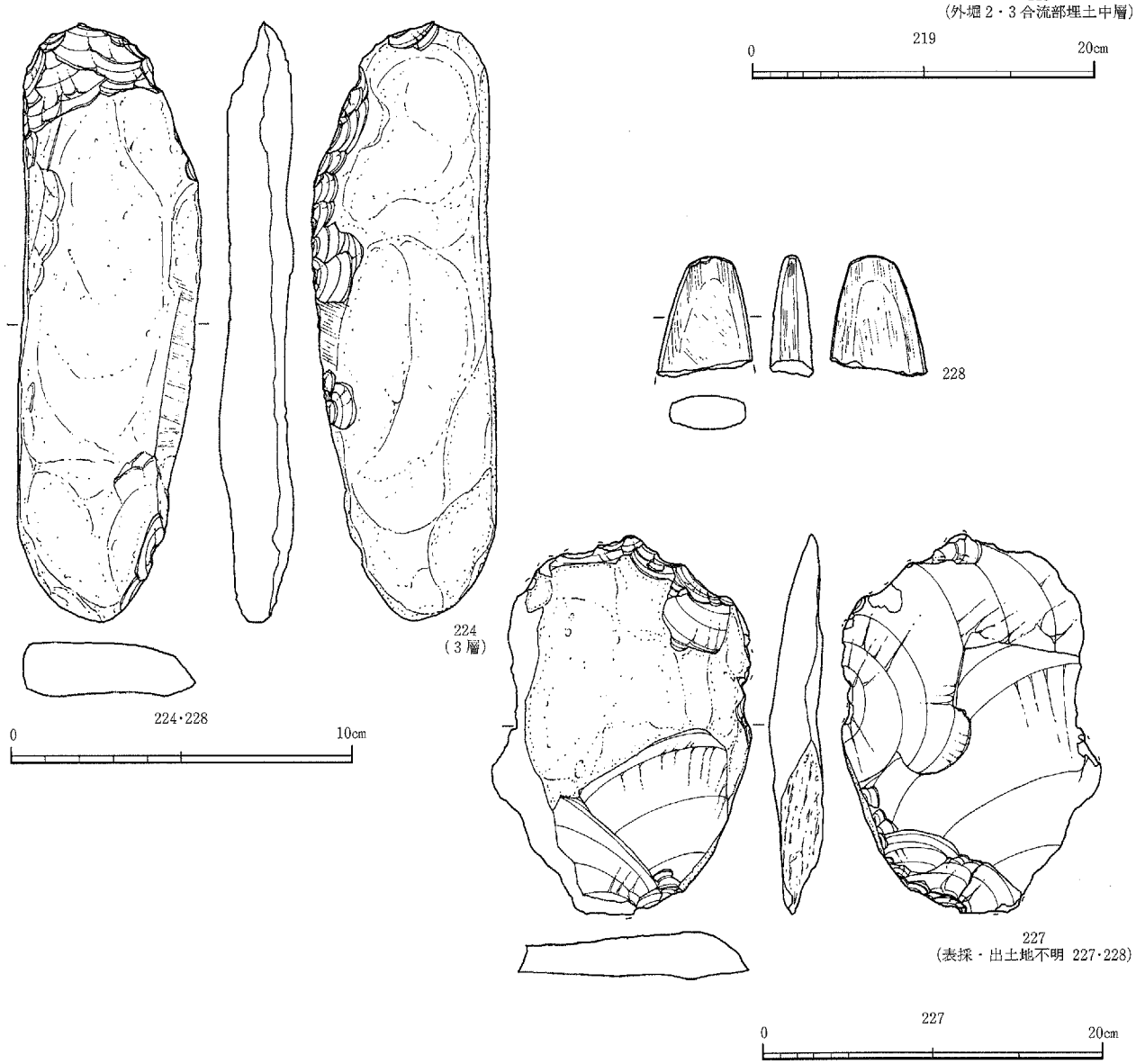
ここでその他の表採品・出土地不明の石器を説明する。227は徳蔵地区遺跡のなかで最大の金山産サヌカイトの板状原石である。そして228は定角式磨製石斧である。

４．徳蔵地区遺跡の縄文時代剥片石器の製作系列について

4－1　はじめに

３章の資料体の記述では、出土遺物を地区ごと、遺構ごと、層位ごとに分けて説明した。この章では３





第22図　13-④区より出土した石器群(2)とその他の表採・出土地不明の石器群

章の結果を受けて、剥片石器群の製作工程の系列について分析する。なお、この章を論じるにあたり、まず明らかに弥生時代にともなう石器については除外し、残った縄文時代の石器群を分析資料とする。

縄文時代の石器群も、出土層位に添えば中期の剥片石器群、後期の剥片石器群に分けることができるかもしれない。しかし沖積地の調査のため、遺構の検出が非常に困難であったという。実際の石器の分析でも、下層の中期の石器群が上層の後期の石器群へ混入している可能性は極めて高い。

よって、この章では石材別に分けて製作工程の系列の復原を行うことにする。このなかでも、二上山産サヌカイトは原石・石核から石器までの一連の工程の資料が揃っているため、製作系列の復原がしやすい。5・6層の縄文時代包含層の資料を中心に復原し、補完のために攪乱層出土の資料等を取り扱うことにする。

4－2 製作系列の復原

ではここから製作系列を復原してみよう。製作系列の復原の指標には、2－4で説明した石核の類型を使用する。

製作系列の復原で重要なのは、同じ素材剥片を使用する石器を抽出することである。同じ素材剥片と判定する基準は前項や1－3で触れたように、剥離技術・打面の種類・剥片のサイズ、形状、背面構成である。次に、グルーピングされた素材剥片が一体どの石核から剥離されたものなのかを明らかにする。このような手続きを経て、製作系列が復原可能となる。3章の資料体の記述でも、素材剥片は･･･というような記述を行っている。ここでは3章のまとめも含めて、まず製作系列の復原を行う。

ではまず、2－4で設定した石核の類型ごとに製作系列を説明することにする。

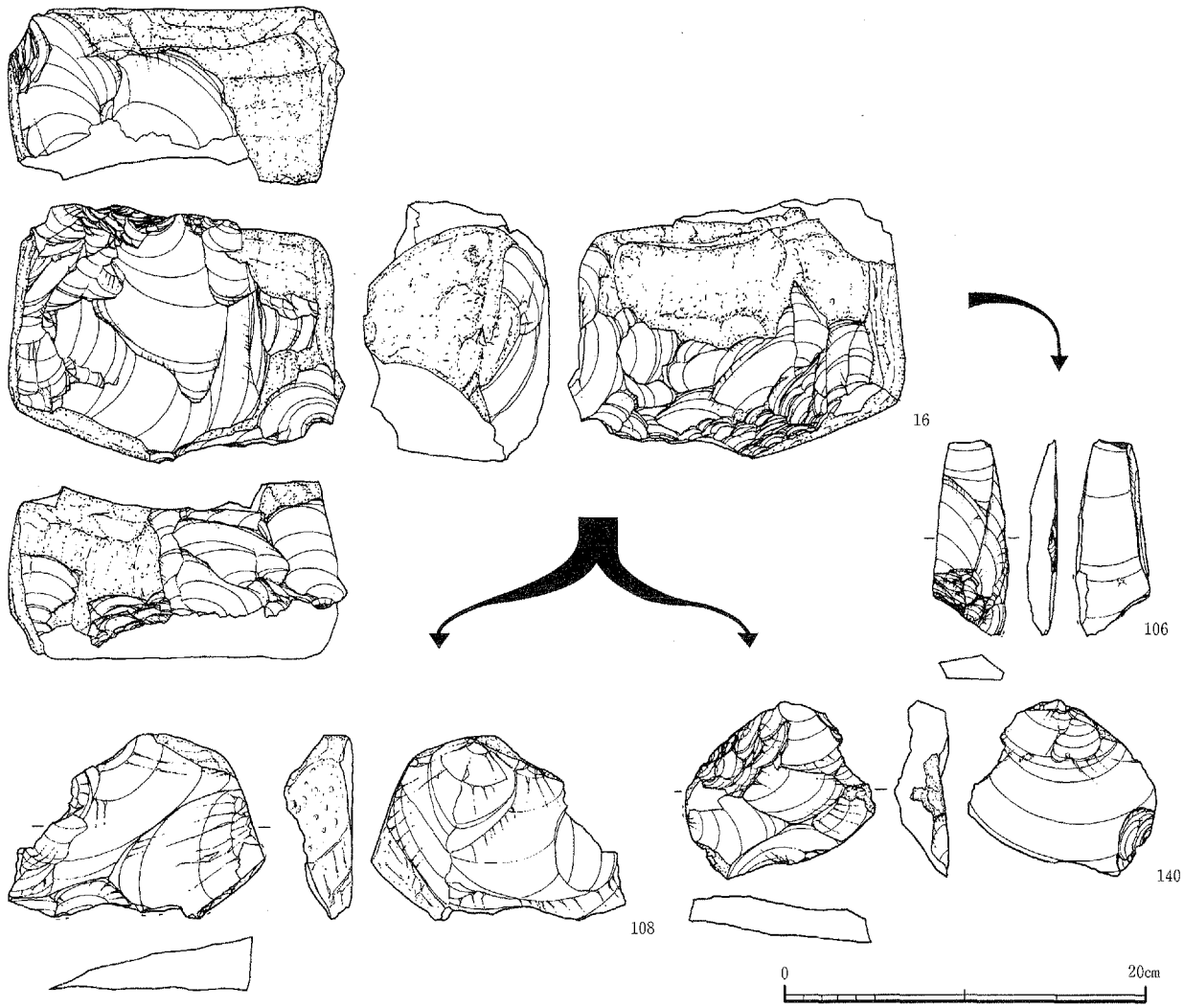
二上山製作系列1類（第23・24図）

二上山製作系列1類とは二上山石核1類から始まる一連の製作系列である。この製作系列は、素材剥片の打点にAタイプのコーン（馬場2002）が認められる直接打撃で剥離された剥片を素材とすることで共通する。第23図の16は二上山石核1類の典型例である。亜角礫を素材とする。剥離技術はAタイプのコーンが認められる直接打撃で、コーンとバルブが発達する。圧縮力が強いので時に打点タイプはクサビタイプとなることもある。そして単剥離面打面もしくは複剥離面打面をもつ矩形剥片が多く剥離されている。打点の径は約4㎜である。打点の径はコンタクトエリアの大きさに比例すると考えてよい属性である。同じであれば、ほぼ同じハンマーを使用していると推定できる。また、背面の剥離面構成は、単方向・2方向・多方向の剥離面で構成される場合が多い。次に、108と140は作業面調整のときに生じた剥片である。剥離技術はハードハンマーの直接打撃で、打点の径は16の石核と同様、約4㎜である。108については、亜角礫の角を剥離している。剥離技術と打点の径、そして素材が一致するので、二上山石核1類の剥離のときに生じた剥片と考えられる。以上が二上山製作系列1類の剥片剥離作業でつくられる剥片の諸特徴である。

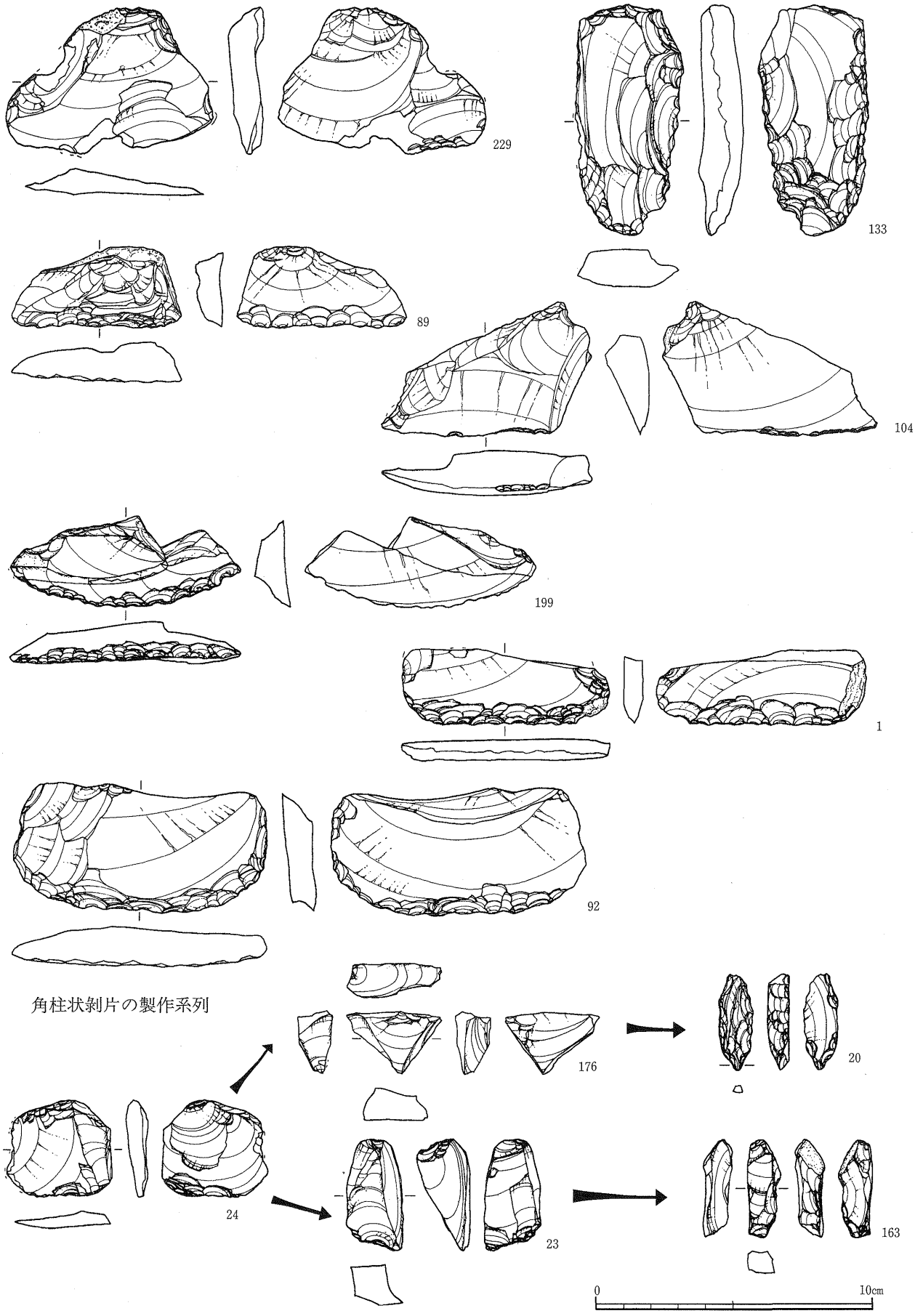
次に、二次加工以降の工程を見てみよう（第24図）。229と89のようにクサビタイプの打点をもつ素材剥片を使用する例と、104や133のようにおそらく打点はコーンタイプで、バルブが発達する素材を使用する例がある。これらは直接打撃で剥離された剥片の特徴である。第23図の106は折取加工剥片で、

背面に直接打撃痕が認められる。サイズはＬＬを中心とし、形態は矩形剥片が多い。このように、二上山石核１類の剥離面と同じ特徴をもっているので、製作系列では１類と考えてよい。なお、199･1･92は素材を折取して分割しており、復原される元々の素材剥片のサイズから、二上山石核１類から剥離された素材剥片と考えられる。二上山石核１類の素材剥片を使用した石器は、素材のサイズも大きいため、刃部幅が７cm近くある比較的大きい削器類が多い。

さて、上記に指摘したように削器用の素材を剥離する一方で、厚みのある剥片をさらに加工して剥片剥離する工程についても触れておく。24はバルブの発達した貝殻状剥片で、直接打撃で剥離された剥片と考えられる。24は両極石器であるが、同じように厚みのある剥片素材を用いる両極石器に、176･23がある。176も23も両極打撃の際に同時に生じる角柱状の剥片が剥離された痕跡がある。176の右側面は折取面である。そして20の石錐の左側面には、元々の素材剥片にあった折取面が認められる。このように、176→20という工程の繋がりが復原できた。ここから、24のような厚手の素材は、両極打撃で角柱状の剥片を作り出し、石錐の素材にしたのではないかと考えられる。163の素材は角柱状の両極石器である。なお。角柱体剥片関連の資料は、縄文後期前半の住居1113からの出土例が多い。このことから後期前半の製作技法の可能性もある。



第23図　二上山石核１類の製作系列（１）



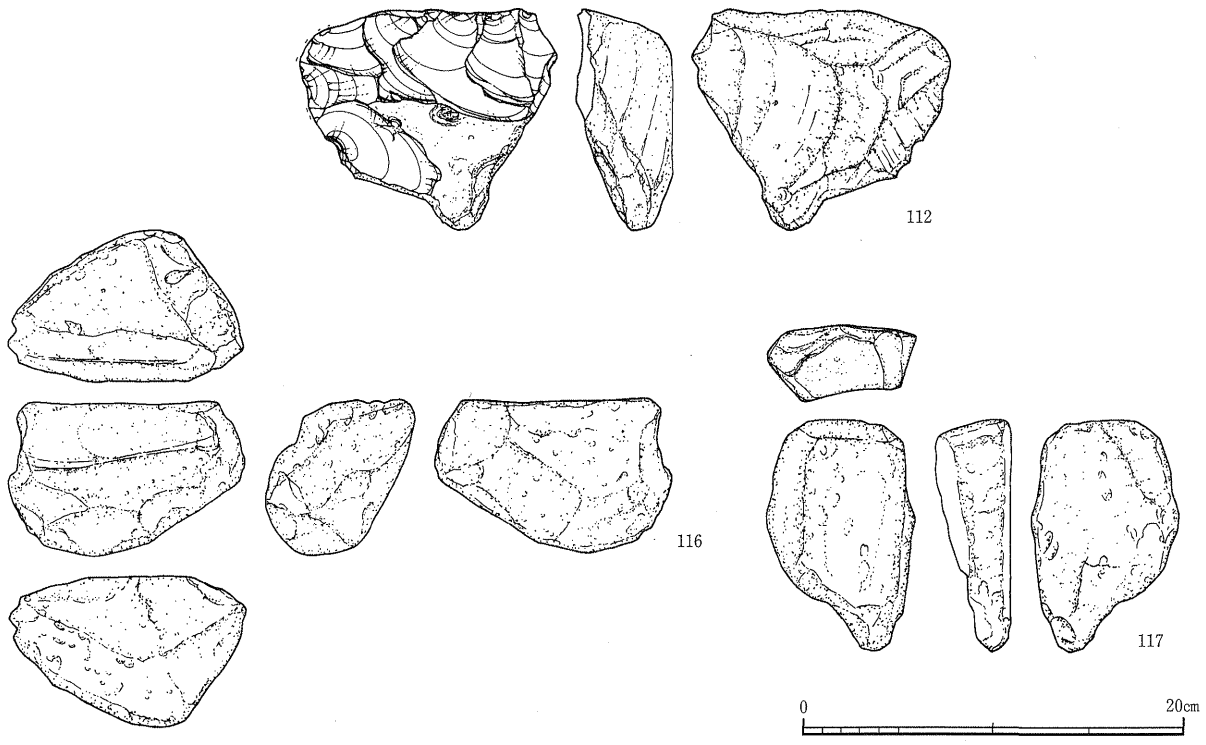
第24図　二上山石核１類の製作系列（２）と角柱状剥片の製作系列

二上山製作系列２類（第25・26図）

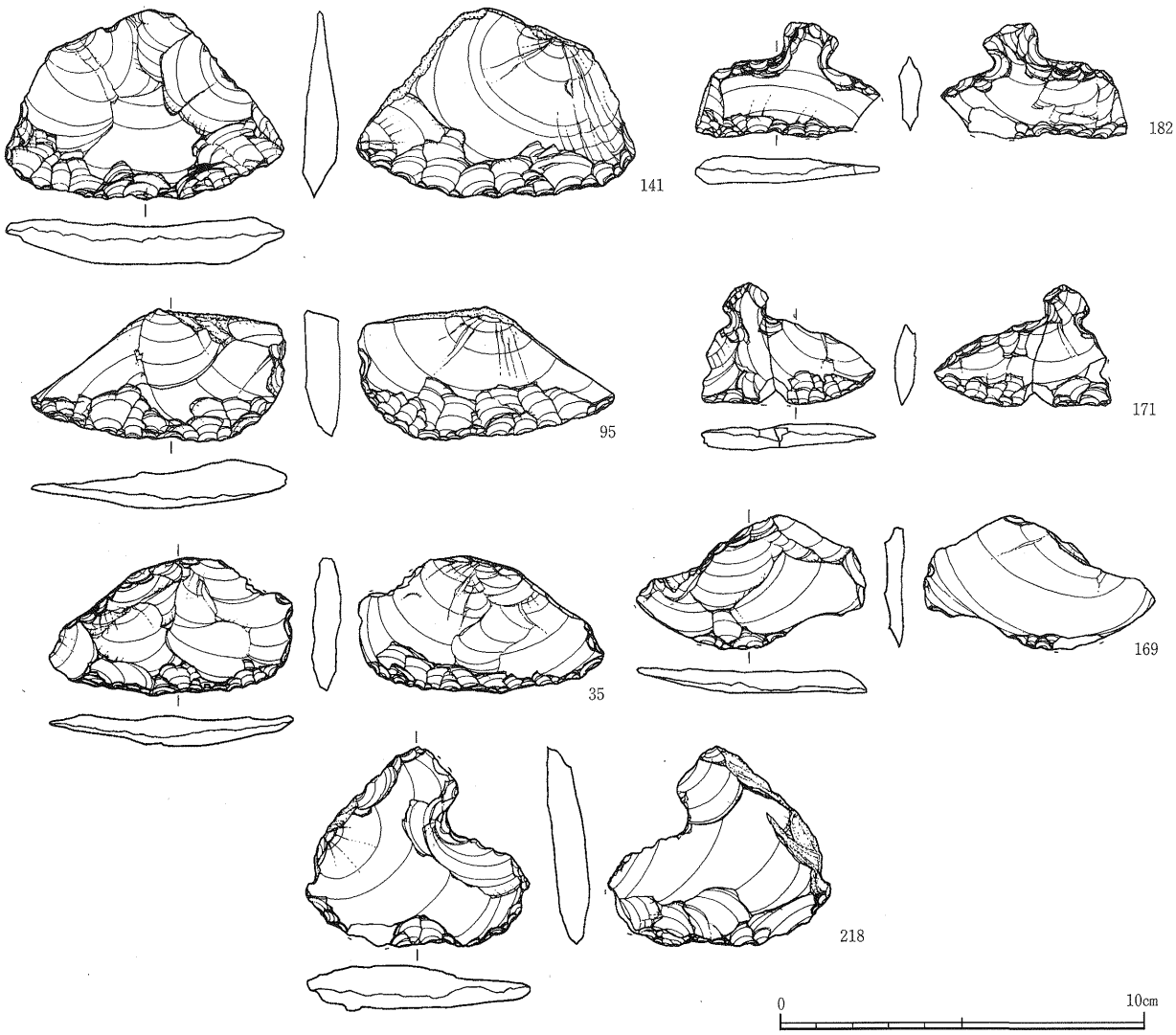
二上山製作系列の２類とは、二上山石核２類から始まる一連の工程である。この製作系列は、直接打撃で剥離されたＢタイプのコーン（馬場2002）が認められる貝殻状剥片を素材とすることで共通する。第25図の112は二上山石核２類の典型例である。やや扁平な亜角礫を素材とする。剥離技術は直接打撃で、ハンマーの方が変形しているため、コーンの円錐形ははっきりとせず、バルブもゆるやかに発達するか、発達しない。そして自然面打面からもしくは単剥離面打面をもつ剥片が多く剥離されていることを石核から読みとれる。素材のサイズはＬを中心とし、末端がヒンジフラクチャーになる貝殻状剥片が多い。また、背面の剥離面構成は、自然面タイプ・単方向タイプが多く、ついで２方向タイプという順になる。なお、116と117は二上山石核２類に適する原石である。以上が、二上山製作系列２類の剥片剥離作業でつくられる剥片の諸特徴である。

では実際、どのような石器にこの剥片は使用されたのだろうか。まず石器に使用された素材剥片の特徴を明らかにする。第25・26図の石器の素材は製作系列１類とうって変わってバルブの発達しない比較的薄めの素材剥片である。これら剥片の剥離技術はＢタイプのコーンが認められる直接打撃である。そして、素材剥片は141・95・35・218のように自然面打面のものが多く。そして背面構成は182・171・218・169のような単方向の剥離面構成が多く、ついで35・95のような２方向タイプが多い。素材のサイズはＬサイズを中心とし、形態は貝殻状剥片が多い。このように素材剥片の諸特徴は二上山石核２類で剥離される剥片と一致する。このような素材は、中形の削器や石匙に使用されていることがわかる。

このように石器となった素材剥片の諸特徴をもとに、製作系列２類の復原が可能となった。



第25図　二上山石核２類の製作系列（１）



第26図　二上山石核２類の製作系列（２）

二上山製作系列３類（第27図）

二上山製作系列３類とは、二上山石核３類から始まる一連の工程である。この製作系列は、①Ｂタイプのコーン（馬場2002）の認められる直接打撃で剥離された剥片、②両面ポジ面の貝殻状剥片、を素材とすることで一致する。第27図の110は二上山石核３類の典型例である。亜角礫の角を剥離した剥片を素材とする。素材のバルブは発達している。二上山石核２類と同様、剥離技術はＢタイプのコーンが認められる直接打撃で、ハンマーの方が変形しているためコーンの円錐形ははっきりとせず、バルブもゆるやかに発達するか、発達しない。そして自然面打面かもしくは単剥離面打面をもつ剥片が多く剥離されていることを石核から読みとれる。そして素材のサイズはＭ～Ｓサイズを中心とし、末端がヒンジフラクチャー気味となる貝殻状剥片である。さらに、両面がポジ面であることがこの石核から剥離される剥片の特徴である。背面の剥離面構成は単方向タイプを中心とする。以上が、二上山製作系列３類の剥片剥離作業でつくられた剥片の諸特徴である。

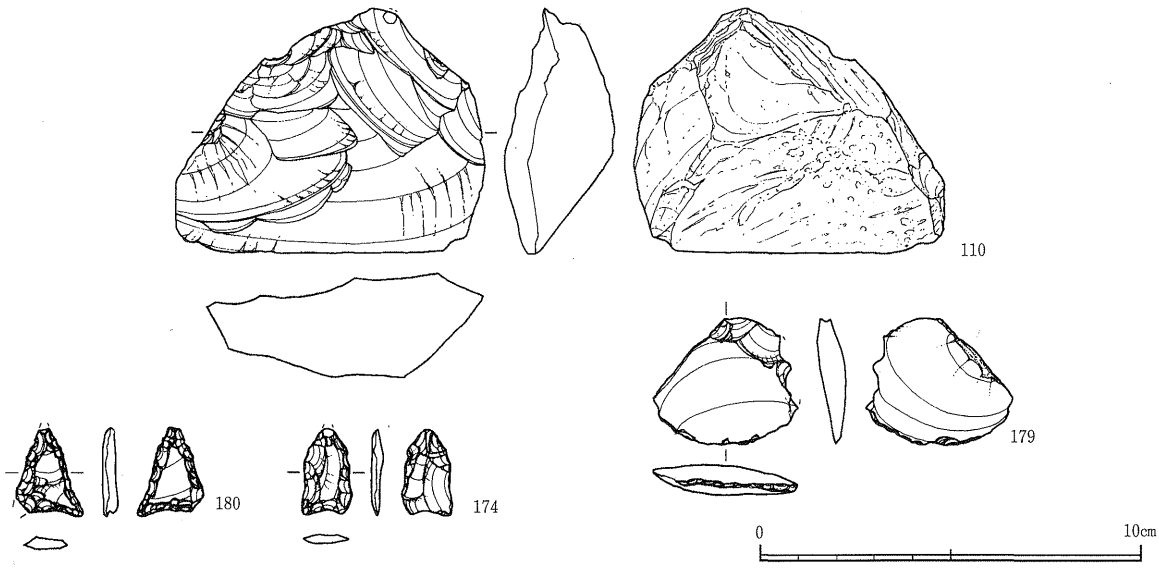
では実際、どのような石器にこの素材は使用されたのだろうか。179は両面ポジ面の貝殻状剥片を素材とした削器である。剥離技術はＢタイプのコーンが認められる直接打撃で、打面は自然面打面、背面の剥離面構成は単方向タイプである。二上山石核３類の剥離面の特徴と一致する。このような小形

の削器に素材は使用されたと考えられる。なお素材の剝離技術が明らかではないが、180・174のような凹基鏃の一部も素材のサイズからいってこの製作系列に含まれる可能性は充分にある。

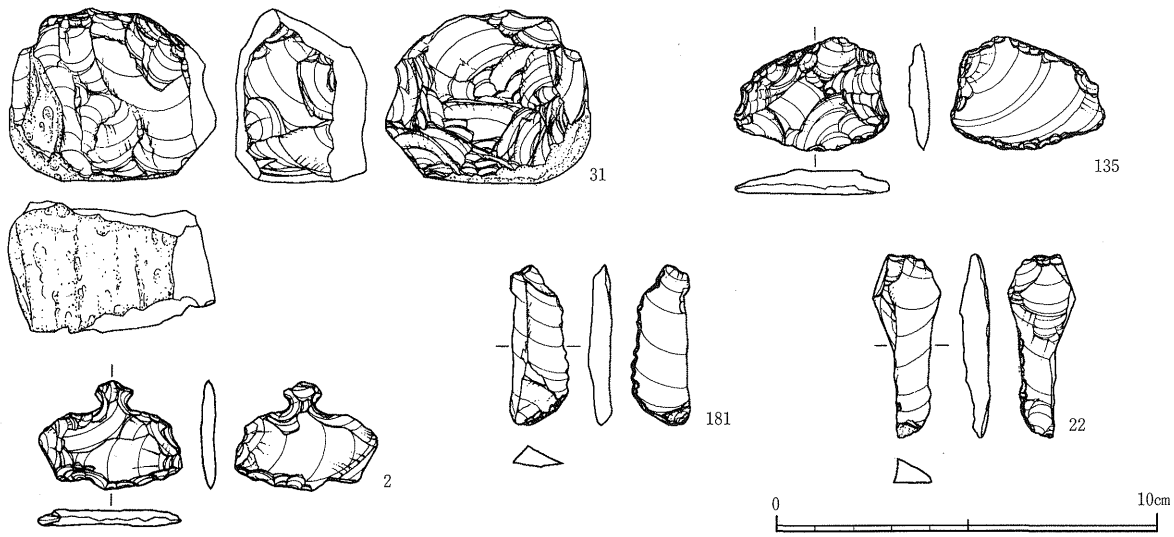
二上山製作系列4類（第28図）

二上山製作系列4類とは、二上山石核4類から始まる一連の工程である。この製作系列は、クサビタイプの打点のタイプをもつ両極石器もしくは両極剝片を素材とすることで共通する。31は二上山石核4類の典型例である。両極打撃痕の残る石核で、Sサイズの剝片を中心にバルブの発達しない薄い剝片が剝離されている。

では石器の素材から見ると、2・181の石匙や135の削器、22の使用痕剝片の素材に両極石器や両極剝片が利用されている。素材のサイズでも24の石核の剝離面とほぼ同じサイズである。なお、素材の剝離技術では明らかにできないが、素材のサイズから凹基鏃の素材の一部がこの製作系列に含まれる可能性は充分にある。



第27図　二上山石核3類の製作系列

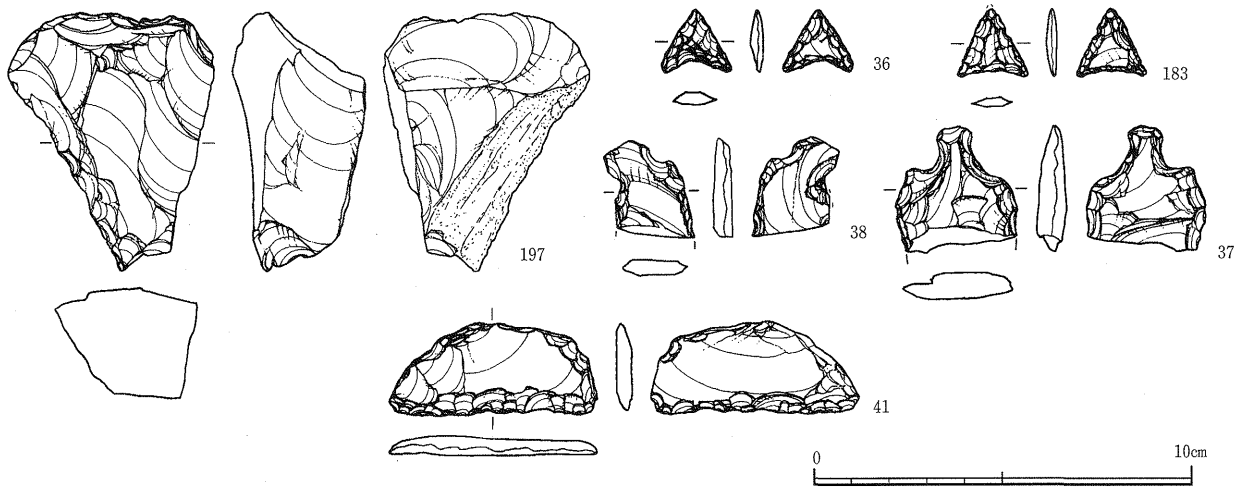


第28図　二上山石核4類の製作系列

金山製作系列１類（第29図）

金山製作系列１類とは、金山石核１類から始まる一連の工程である。第29図の197の石核を見て、剥離された剥片の特徴を説明する。剥片の剥離技術はＢタイプのコーンが認められる直接打撃である。そして自然面もしくは単剥離面打面をもつ剥片が剥離され、末端はステップ状となる。剥片のサイズはＳサイズを中心とし、両面がポジ面となる。剥片の背面構成は単方向か２方向タイプが多い。以上が金山製作系列１類の剥片剥離作業でつくられた剥片の特徴である。

では実際、どのような石器にこの素材は使用されたのだろうか。今時点では素材剥片の剥離技術や形態的特徴をもって繋げられる石器がない。だが、素材のサイズからして、36や183の凹基鏃の素材の可能性は充分にある。また、38・37・41のような石匙や削器類の素材を剥離する石核が金山産では見あたらない。金山産サヌカイトは板状剥片の状態で遺跡に搬入されるため、石核として残りにくいことが原因と思われる。



第29図　金山石核１類の製作系列

金山製作系列２類（第30図）

金山製作系列２類は、板状剥片を素材とする石器の一連の工程である。これら板状剥片の母体となる石核は徳蔵地区遺跡では出土していないが、金山製作系列１類と異なる系列であるため、２類を設定した。227は板状剥片を素材とした石核である。裏面主要剥離面側に大きく剥離された痕跡が認められる。第30図の61・60が板状剥片である。これら板状剥片はそのまま素材として利用され、44の大形使用痕剥片、45・51・48・52の大形削器、53や54の大形掻器となる。

４－３　まとめ　サヌカイトの流通と徳蔵地区遺跡におけるサヌカイト製剥片石器の作業

二上山産サヌカイトと金山産サヌカイトの剥片石器の製作作業

いままでの製作工程の系列の復原で明らかになったことをまとめておく。

まず、二上山産サヌカイトから説明する。徳蔵地区遺跡においては、二上山産サヌカイトは人頭大の亜角礫の原石核が出土しており、遺跡から出土した石器群で一連の製作工程を復原できた。二上山産サヌカイトのいずれの製作系列も、徳蔵地区遺跡から出土した資料で復原することが可能である。徳蔵地

区遺跡で大小様々な二上山産サヌカイトの剥片石器の製作が行われていたことは明らかである。

ただ、復原した工程のうち、原石・石核いずれの工程より徳蔵地区遺跡内で作業がとり行われたのか検討する必要がある。4-2で復原した製作工程の系列をもう一度振り返ってみたい（第23図）。特に二上山製作系列1の石核は二上山石核1類としたもので、Aタイプのコーンが発達する直接打撃の剥片剥離が特徴であることは先に指摘した通りである。そして16の石核と108・140の剥片は剥離技術が一致している上に、打点の径が約4㎜と一致している。これは同じ大きさのハンマーを使用している有力な属性であることは先に説明したとおりである。つまり、16の石核の剥片剥離の途中で、108と140のような作業面調整のために剥離された調整剥片が遺跡から出土していることが明らかである。

このように、二上山石核1類の剥片剥離作業は徳蔵地区遺跡内でたどれる。したがって16のような亜角礫原石自体は二上山より入手するものの、原石以降の石材消費過程は徳蔵地区遺跡で全て行われていたことが石器群より復原された。徳蔵地区遺跡では16のような人頭大の亜角礫から剥片剥離と石器製作作業を行っていることが判明する。

さて、115の原石からはじまる二上山原石核製作系列についてはどうだろうか（第31図）。115の原石核の剥離面の打点の径は約11㎜で、二上山製作系列1類のハンマーよりさらに大きいハンマーを使用していることがわかる。他にも111の正面の分割面にあたる主要剥離面の打点の径は約10㎜、背面の剥離面の打点の径は約8㎜である。109の同時割れを起こしてしまった剥片は、復原すれば打点の径は9㎜前後になる。109の同時割れ剥片は遺跡内での作業を想定させる剥片であるが、決定的な証拠ではなく、徳蔵地区遺跡外で剥離された剥片の可能性も捨てきれない。

以上のように二上山原石核製作系列は、直接打撃で、打点の径は約10㎜前後という共通した属性で一致する。110の二上山石核3類に該当する石核は、亜角礫の角を剥離していること、そしてバルブの発達度から、二上山原石核製作系列で生じた剥片を石核にしているものと思われる。

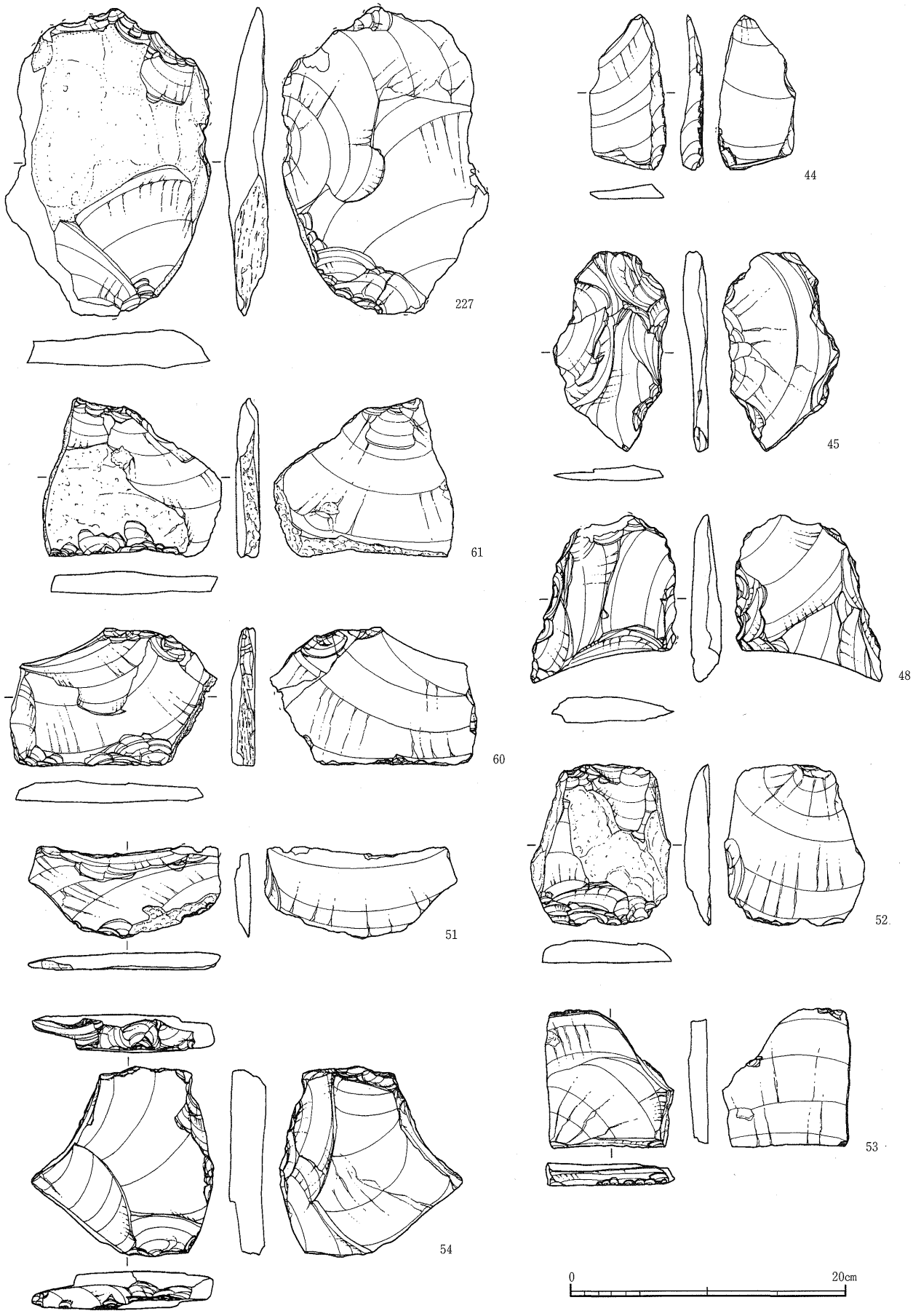
一方で金山産サヌカイトはどうだろうか。第30図を参照していただきたい。まず227・61・60のような板状剥片の状態で遺跡に搬入されていることは、遺跡内で板状剥片への剥片剥離作業の痕跡が認められないことからも明らかである。板状剥片で搬入された以後、板状剥片がそのまま素材となって大形削器45・48や大形掻器53・54に加工される。一方で第29図-197のような1類の石核が出土しており2類との関係が注目されるが、関係云々を論じる材料が少ない。金山産に対する出土状態を整理すると以下のようになる。

①金山産の石器には未成品が認められない。

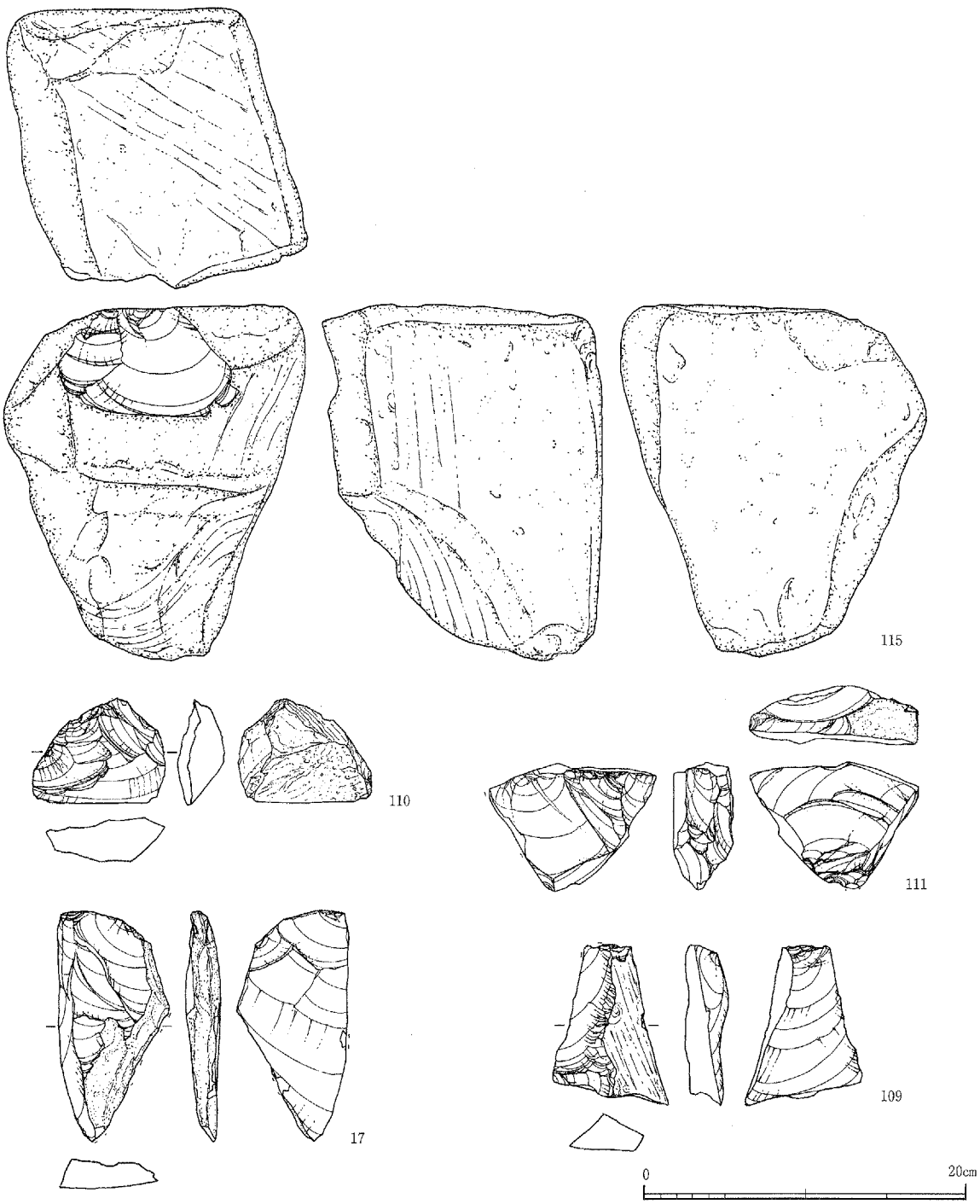
②包含層や土坑・住居出土の剥片には、石鏃や石匙など定型的な石器の素材になるような剥片は認められなかった。

③縄文中期前半の住居・土坑と後期前半の住居跡から出土した石器の中に、石鏃や石匙など形態的に安定している石器は1点も出土していなかった。

①のデータは製作自体が行われていないことを示し、②のデータは定型的な石器の素材剥片の剥離作業が欠落していることを示すデータである。③は、住居で金山産サヌカイトの定型的な石器の製作



第30図　金山石核２類の製作系列



第31図　二上山原石核の製作系列

活動が欠如していることを示すデータである。よって①~③のデータから、徳蔵地区遺跡内では、金山産サヌカイトの剥片石器製作がほとんど行われていなかったと推定される。唯一、遺跡内で製作されているのは、板状剥片を素材とした削器か両極石器程度である。これは二上山産サヌカイトの石器の製作活動と比較すると対照的である。

時期ごとにみた剥片石器の製作活動

次に、二上山産サヌカイトと金山産サヌカイトの剥片石器製作活動について、出土分布を含めて時期別にみてみよう。

二上山産サヌカイトはいままでの分析で、徳蔵地区遺跡では人頭大の原石を搬入し、それ以後の剥片剥離作業と石器製作作業を行っていたことが明らかとなった。そして遺跡内での石器製作の具体像を考えてみたい。剥片石器の製作は主に住居かもしくはその周辺で行われていることが、住居から出土した剥片類の存在から明らかである。そして、縄文中期の住居、縄文後期の住居1113とも剥片類の石材別産地は9割近く二上山産サヌカイトである。金山産はあくまで少数派である。このように縄文中期・後期の徳蔵地区遺跡は二上山産サヌカイトを主に用いた剥片石器の製作が展開されていたことが明らかである。

そして、繰り返しになるが、金山産サヌカイトは石鏃等の定型石器の未成品が出土していない。その上、定型的な石器の素材剥片が認められなかった。つまり、小形剥片石器の剥片剥離作業が行われていないのである。こうしたデータから金山産サヌカイトの剥片石器の製作が、徳蔵地区遺跡内でほとんど行われていなかったと考えられる。製作されたものは搬入した板状剥片をそのまま素材とした削器類か、両極石器程度である。

次に石器の分布について考えてみよう。石器の分布図で注目すべきは、金山産サヌカイトの板状剥片もしくはそれを素材とした大形削器類が二カ所で集中的に出土していることである。特にｆ23グリッドでは6点、一括して出土している。この一括出土の時期については石器から明らかにできなかった。なお、この分布が何を意味するのか、遺構などとの関連性を明らかにした上で、検討する必要がある。今後の検討課題である。

最後に弥生時代前期について触れておきたい。遠賀川式土器の後半段階が出土した住居100からは良好な弥生時代前期の資料体が出土している。凹基鏃、石錐、両極石器、磨製石斧、打製石斧の調整剥片の他に、剥片石器の製作時に生じた剥片・チップが出土している。石器では、金山産サヌカイトの凹基鏃が2点、両極石器が1点出土しており、金山産サヌカイトの石器が目立つ。先に触れたが、この住居の金山産サヌカイトの剥片・チップは8割近くあり、以前より金山産サヌカイトの利用率が格段に高くなっている。この現象に関連することとして興味深い指摘が秋山浩三氏によってなされている。秋山氏は遠賀川式土器の河内平野への伝播と連動して金山産サヌカイトが増加する傾向にあることを指摘している(秋山1999)。秋山氏の分析した河内平野と同様の現象がここ徳蔵地区遺跡の住居100の資料体に見られ、金山産サヌカイトの増加傾向は河内平野と連動している現象と考えられる。

参考文献

秋山浩三1999「近畿における弥生化の具体像」『論争吉備』考古学研究会岡山例会委員会編
太田公彦2003「ハンマーと石材の関係について」『アルカ研究論集』第1号（2001年にHP上で掲載されたものを再録）
角張淳一2002「石器研究の展望」『利根川』23
角張淳一2003「剥片剥離技術の検討および石器実測図の評価」『平成14年度愛知県埋蔵文化財センター年報』
鈴木美保ほか2002「石器製作におけるハンマー素材の推定—実験的研究と考古資料への適用—」『第四紀研究』41-6
高倉純・出穂雅美2004「フラクチャー・ウイングによる剥離方法の同定研究」『第四紀研究』43-1
竹広文明1993「縄文時代の石器石材獲得—金山産サヌカイトをめぐって—」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集』
谷若倫郎1997「瀬戸内的物流」の原形—金山産サヌカイトの移動をめぐって—」『伊達先生古稀記念古文化論集』
馬場伸一郎2002「ハンマーの材質について復原した実験」『二上山・関谷盆地における石器製作遺跡の調査』香芝市教育委員会
吉田政行ほか1996「剥片の諸属性とハンマー素材の関連」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨集』

（B）石鏃の押圧剥離について

1．はじめに

本稿では徳蔵地区遺跡から出土した石鏃10点について、低倍率による剥離面分析を行った。この観察は、右手の技術であるハンマー材質と身振り、左手の技術である素材の持ち方を明らかにする分析である。

2．分析の方法

観察ではキーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）を用いた。観察倍率は10倍～20倍である。

なお、工具と身振りの判定方法については、第１章の１－３に詳述した判定基準を用いる。

3．分析資料について

徳蔵地区遺跡は縄文時代中期・後期と弥生時代の複合遺跡である。分析資料は二上山産サヌカイトの凹基鏃６点、金山産サヌカイトの凹基鏃２点、二上山産サヌカイトの有茎鏃２点である。

以下分析資料について詳述する。

〔写真１〕金山産サヌカイトの鋸歯縁凹基鏃（第14図-147）

12-④区住居100から出土している。表面が風化しているが、鋸歯縁の部分に形成された剥離面はバルブが発達している様相がわかる。打点付近の稜線は発達しているが、剥離の末端の稜線は指で引っかかるほど発達していない。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真２〕金山産サヌカイトの凹基鏃（第17図-183）

12-④区溝1000から出土している。剥離の開始部付近は、コーンとバルブが発達していない。時に潰れている剥離面もあるが、工具の保持が安定しなかったために生じたイレギュラーな剥離であろう。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真３〕二上山産サヌカイトの鋸歯縁凹基鏃（第５図-29）

12-４区住居2600から出土している。鋸歯縁の部分に形成された剥離面はバルブが発達している。打点付近の稜線は発達しているが剥離面の末端の稜線は発達していない。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真４〕二上山産サヌカイトの凹基鏃（第７図-66）

12-④区竪穴住居から出土している。剥離面の打点付近は、コーンとバルブが発達し、打点に砕けを伴うこともある。打点付近の稜線は発達しているが、剥離面の末端の稜線は発達していない。剥離面の幅は約2.5㎜程度である。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真５〕二上山産サヌカイトの凹基鏃（第５図-33）

12-④区住居2682から出土している。剥離面の打点付近はコーンとバルブがほとんど発達していない。打点付近と剥離面の末端とも稜線は発達していない。剥離面の幅は３㎜前後で、比較的奥まで伸びる端正な作りである。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真６〕二上山産サヌカイトの凹基鏃（第15図-167）

12-④区住居550から出土している。剥離面の打点付近はコーンとバルブがほとんど発達していない。打点付近と剥離面の末端とも稜線は発達していない。剥離面の幅は３㎜前後である。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。

〔写真７〕二上山産サヌカイトの凹基鏃（第17図-187）

12-④区３層から出土している。剥離面の打点付近はバルブが発達し、打点に砕けを伴うこともある。打点付近の稜線は指先でひっかかるほど発達しているが、末端の稜線は発達していない。剥離面の幅は３～４㎜程度とやや幅広である。打点の位置は等間隔で、打面の厚さは１㎜未満でほぼ一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。なお、剥離面の幅も広い上にサヌカイトの風化があまり進んでいないので、弥生時代の凹基鏃の可能性がある。

〔写真８〕二上山産サヌカイトの凹基鏃（第５図-19）

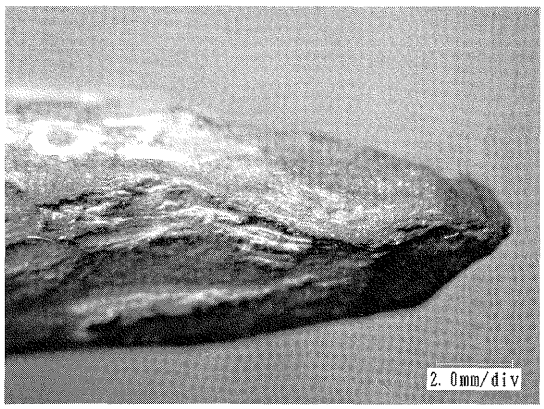
12-④区住居1113から出土している。剥離面の打点付近は、コーンはあまり認められないが、バルブはやや発達している。曲げタイプの剥離の開始部も認められる。また、打点付近の稜線は指先にひっかかる程度に発達しているが、剥離面の末端の稜線は発達していない。剥離面の幅は５㎜程度と幅広い。打点の位置は概ね等間隔で打面の厚さは１～２㎜程度で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。なお、剥離面の幅も広い上にサヌカイトの風化があまり進んでいないので、弥生時代の有茎鏃の可能性がある。

〔写真９〕二上山産サヌカイトの中形有茎鏃（第14図-161）

12-④区３層から出土している。剥離面の打点付近はコーン・バルブとも発達しない剥離面が多い。また、打点付近の稜線と剥離末端とも指先でひっかかるほど稜線は発達していない。剥離面の幅は４～５㎜と幅広である。打点の位置は等間隔で打面の厚さは１㎜未満でほぼ一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。なお、剥離面の幅も広い上にサヌカイトの風化があまり進んでいないので、弥生時代の有茎鏃の



実測図161の基部摩耗痕

可能性がある。弥生中期の河内平野によく見られる有茎鏃の形態である。

なお、この有茎鏃の基部には装着時に生じた摩耗痕が認められる。

〔写真10〕産地不明の有茎鏃（第14図-160）

12-④区３層から出土している。剥離面の打点付近はバルブが発達し、砕けを伴うこともある。また、打点付近の稜線は指先でひっかかる程度に発達しているが、剥離面の末端の稜線は発達していない。剥離面の幅は一定していないが、広いもので4.5㎜ある。打点の位置は概ね等間隔で打面の厚さは１㎜未満で一定している。

以上の剥離面の特徴から、剥離技術は押圧剥離であると考えられる。なお、剥離面の幅も広い上にサヌカイトの風化があまり進んでいないので、弥生時代の有茎鏃の可能性がある。

４．まとめ

以上の分析の結果をここでまとめる。写真１～６の鋸歯縁凹基鏃と三角形の凹基鏃、二等辺三角形の凹基鏃は縄文時代の遺構や包含層から数多く出土しているため、縄文中期・後期の石鏃と考えられる。縄文中期・後期の凹基鏃はネガ面の観察であるので、主要剥離面と異なりコーンタイプの判定が難しいが、Ｂタイプかあるいは Ｃタイプが多いと推定される。写真１の資料についは、弥生前期の住居100から出土しているが、剥離技術が縄文時代の鋸歯縁凹基鏃と同じため、縄文時代の石鏃の可能性がある。

次に、写真９の有茎鏃を見てみよう。これは河内平野の弥生中期の遺跡から数多く出土する有茎鏃であり、押圧剥離の幅は４～５㎜と縄文時代の押圧剥離面の幅より２倍も広い。これを手がかりにすると、写真７・写真８・写真10も幅広の押圧剥離であるため、弥生時代の石鏃の可能性がある。

このように石鏃の押圧剥離面の分析から、時代ごとの特徴を指摘することが可能である。今後、このような観察例を増やし、カタログ化することでより広域間での比較や時期差の検討が可能となる。

（Ｃ）金山産サヌカイトと二上山産サヌカイトの特徴について

１．はじめに

ここでは徳蔵地区遺跡から出土した二上山産サヌカイトと金山産サヌカイトの特徴について説明する。ここで設定された基準は本稿のサヌカイト石材の肉眼観察分類の基準となっている。

２．説明

〔写真11・13・15〕二上山産サヌカイト

徳蔵地区遺跡の縄文時代包含層（５層・６層）から出土した二上山産サヌカイトの色調は灰色である。材質は緻密で、剥離面のスジが発達せず細い。あるいは肉眼では認められない場合もある。写真２のように、加工が入っても容易に区別ができる。なお、色調は縄文時代の場合、風化が進んでいるため表面の色調は灰色である。

次に徳蔵地区遺跡からは弥生時代前期の住居（住居100）が検出されている。その住居より出土した剥片はやや黒みを帯び、黒灰色である。剥離面の特徴については縄文時代包含層の資料と同様、剥離面にスジが発達していない。

〔写真12・14・16〕金山産サヌカイト

徳蔵地区遺跡の縄文包含層（5層・6層）から出土した金山産サヌカイトの色調は白灰色である（写真12・14）。二上山産サヌカイトに比べると非常に風化が進んでいるように見える。材質は二上山産サヌカイトに比べるとやや軟質である。剥離面に太いスジが発達している。写真14のように加工が入っていてもスジの発達は認められる。このように縄文時代の場合、風化が進み表面の色調は白灰色である。

弥生時代前期の住居（住居100）から出土した剥片は、先の縄文時代の剥片類よりも風化が進んでいないため、灰色である（写真16）。剥離面の特徴については縄文時代の資料と同じく、剥離面に太いスジが発達している。

3．まとめ

以上のように、徳蔵地区遺跡の二上山産サヌカイトと金山産サヌカイトの特徴について説明した。実際に分類の基準として有効なのは、岩石の緻密さ、色調、剥離面に見られるスジの発達度の三点である。

（D）使用痕分析

第1節　はじめに

徳蔵遺跡出土の石庖丁、大形石庖丁の断片、扁平片刃石斧の3点を使用痕分析し、その結果を報告する。

第2節　観察の方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている（梶原・阿子島 1981）。微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島 1981）を用いた。

第3節　分析結果

・磨製石庖丁（第32図-159）

緑泥片岩製の石庖丁である。風化しているため、石器表面の半分以上は剥落している。

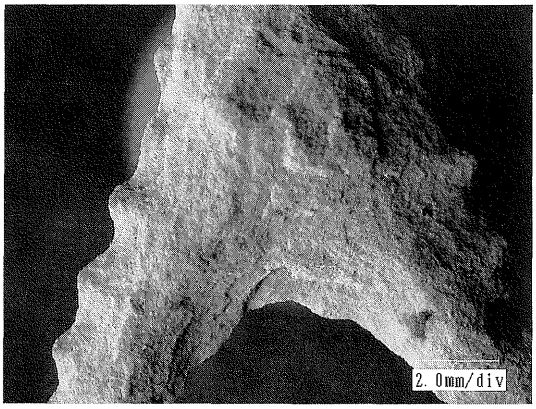


写真1　鋸歯縁凹基鏃（金山産）

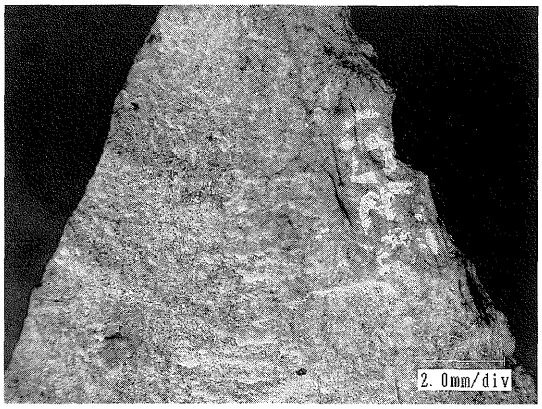


写真2　凹基鏃（金山産）

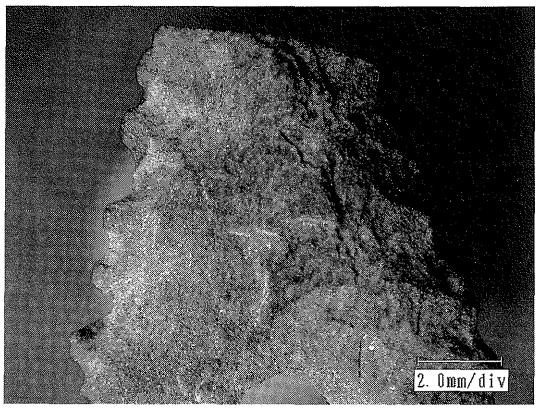


写真3　鋸歯縁凹基鏃（二上山産）

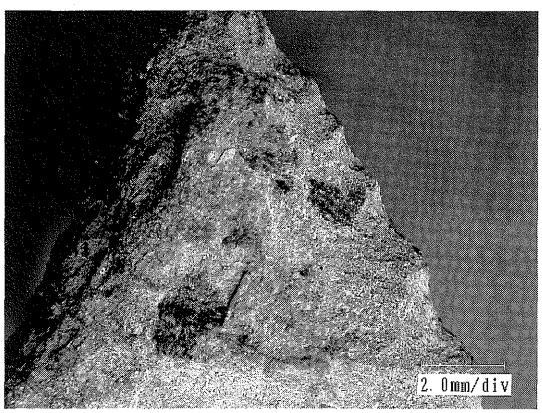


写真4　凹基鏃（二上山産）

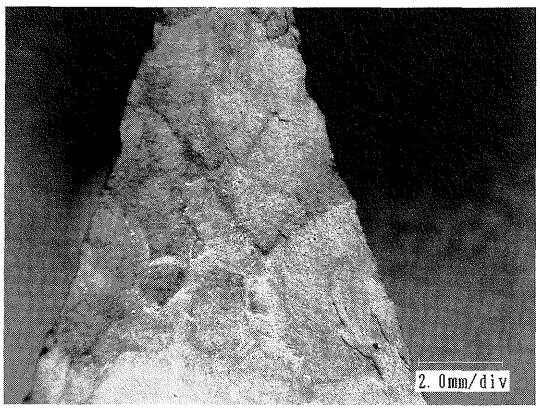


写真5　凹基鏃（二上山産）

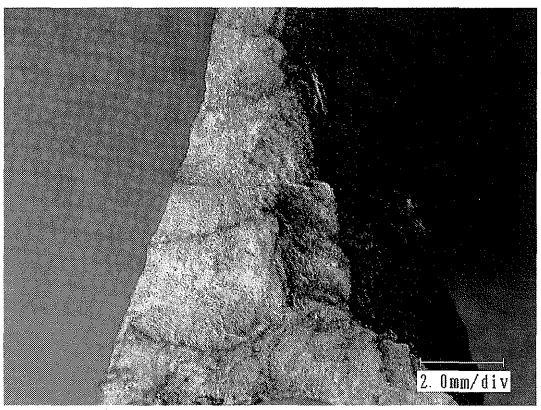


写真6　凹基鏃（二上山産）

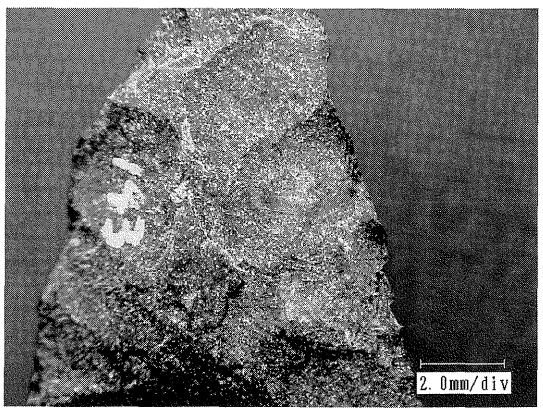


写真7　凹基鏃（二上山産）

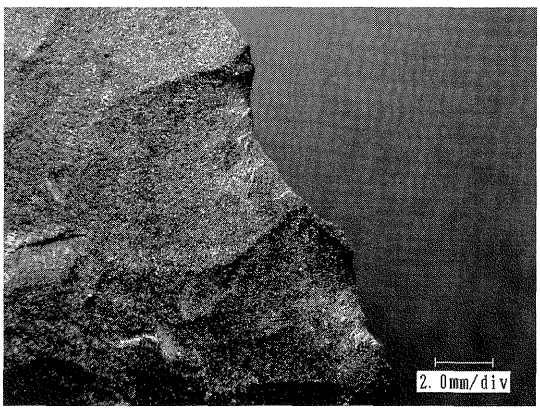


写真8　凹基鏃（二上山産）

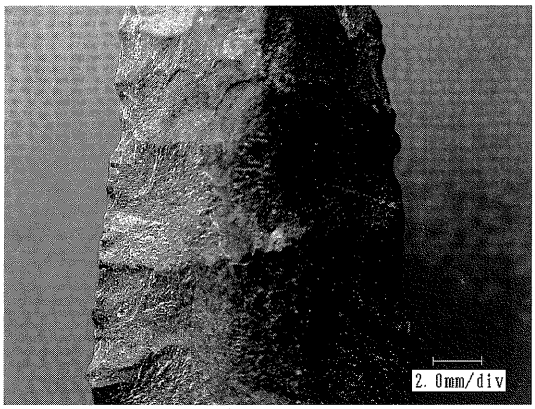


写真9　中形有茎鏃（二上山産）

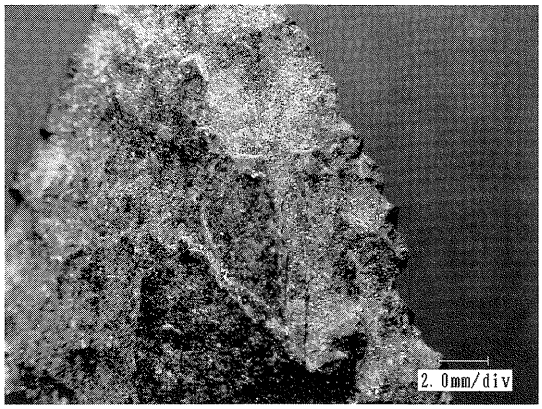


写真10　有茎鏃（産地不明）

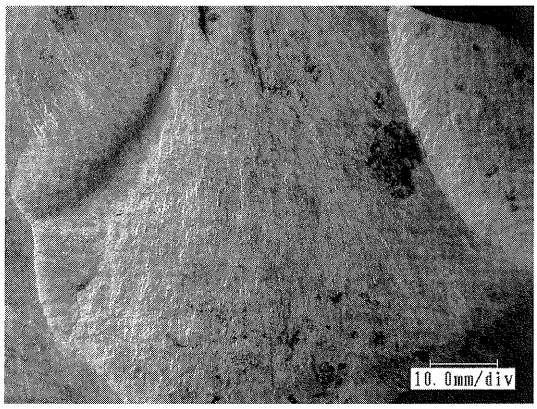


写真11　二上山産サヌカイト

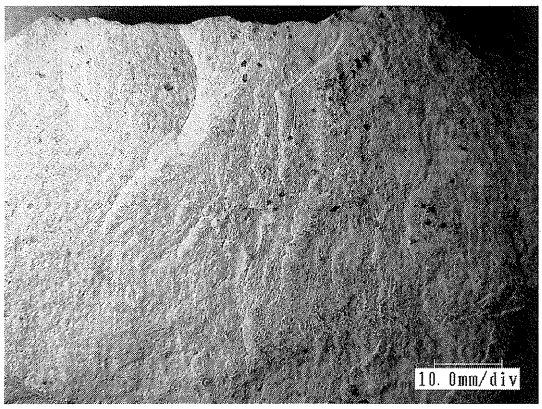


写真12　金山産サヌカイト

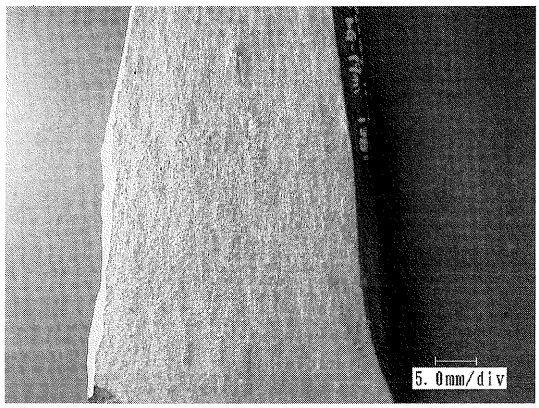


写真13　二上山産サヌカイト

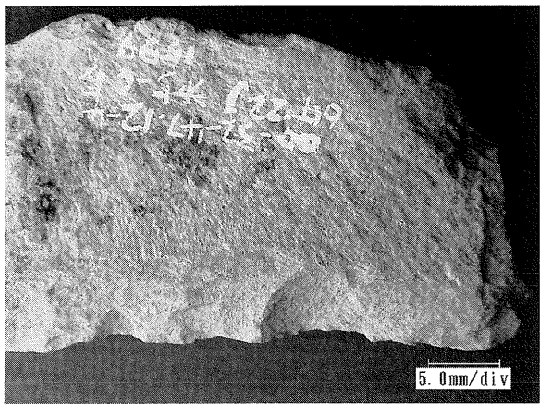


写真14　金山産サヌカイト

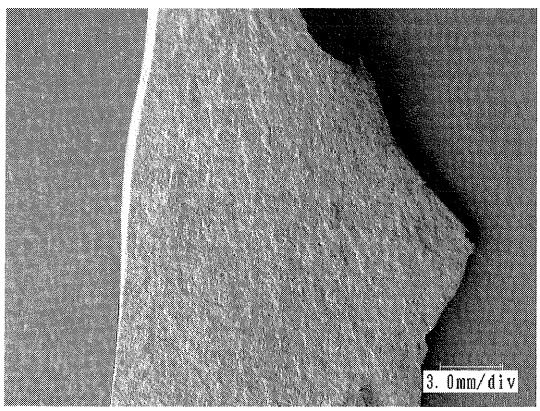


写真15　二上山産サヌカイト（住居100）

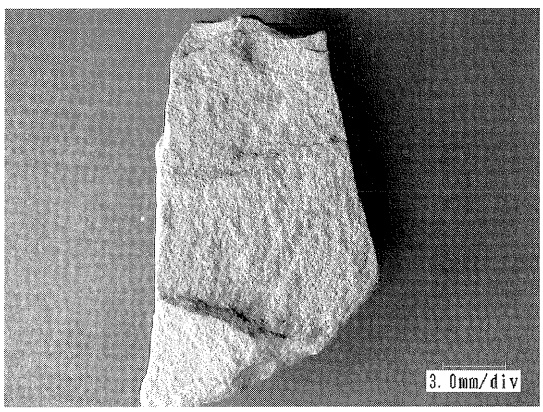


写真16　金山産サヌカイト（住居100）

石庖丁の形態は、背部分が外湾し、刃部は、直線状で、片刃状である。刃部には、明瞭な研ぎ痕がみられる。刃角は約45度である。２つ穿孔をもつ。石庖丁の左側は破損している。

使用痕は、石庖丁の裏面側に顕著にみられた。明るく、滑らかな表面をもち、ドーム状に広がるＢタイプ光沢（注）が、ほぼ全面にみられた。光沢の発達強度には、変位があり、その強度を把握するため、分布図を作成した。

「強」：大形の光沢パッチ、もしくは、高い密度で光沢のパッチが分布している部分

「中」：小形のパッチや、パッチがまばらに分布している部分

その結果、石庖丁の裏面右側刃部に特に「強」分布がみとめられ（写真１）、左側には、少し発達が弱まって光沢がみられる（写真２）。この「強」分布の光沢は、石庖丁の右側裏面の背近くまで広がる（写真３）。光沢強度は、背に近くになるにつれ「中」分布が広がり（写真４、５）、しだいに発達を弱めながら背部分にまで広がる（写真６）。穿孔の間には、それほど強い光沢はみられなかった。

表面側には、ほとんど表面が剥落しているため、光沢は認められなかった。刃部は、もとの石器表面を残しているが、光沢は広がらなかった。刃部には、研磨の痕跡が明瞭にみられるころから、刃の研ぎなおしによって、この部分の使用痕が欠損したと考えられる。

線状痕は確認できなかったので、石器の操作方法は不明である。

光沢分布から、この石庖丁の主要な刃部は右側であったと考えられる。

光沢タイプから、稲などの植物質に対して使用されたと考えられる。

・大形磨製石庖丁（第33図上-158）

大形石庖丁の断片と考えられる。石材は、緑泥片岩製である。石器は受熱のため、表面が変化している。

受熱による表面変化のため、明瞭な光沢は、ほとんどみられなかった。一部、裏面の刃部しのぎ部分に、かすかに光沢が認められた(写真１)。部分的には、明るく滑らかな表面をもち、光沢がパッチ状に広がり、おそらくＢタイプに属する光沢と考えられる（写真２、３）。

線状痕はみられなかった。

光沢の残りがよくなく、断定はできないが、おそらく稲などの植物質に対して、使用されたと考えられる。

・扁平片刃石斧（第33図下-156）

小形の扁平片刃石斧である。石材は、緑色岩製である。

低倍率での観察では、刃部を整形した時に生じた擦痕が顕著にみられた（写真３）。

高倍率観察では、裏面側に、縁辺に対して直交方向に走る線状痕と、光沢が確認できた（写真１、２）。光沢は、発達は弱いが、明るく丸みをおび、表面が滑らかなことから、Ｂタイプ光沢に属すると考えられる。表面側には、こうした使用痕はみられなかった。

使用痕が裏面側にのみみられたことから、裏面に被加工物が接触していたと考えられ、手斧的な操作方法が考えられる。光沢から、被加工物は木質と推定できる。そのため、この偏平片刃石斧は、木

質の被加工物に対して、手斧的用途であったと考えられる。

第4節　まとめ

磨製石庖丁は、Bタイプ光沢がみられたことから、稲などの植物質に対して利用されていることが明らかとなった。

大形磨製石庖丁の断片には、不明確であるが、Bタイプ光沢がみられ、石庖丁と同様に、稲などの植物質に対して利用されていると考えられる。

近年の使用痕分析の成果から、大形石庖丁を含んだ「大型直縁刃石器」と分類される石器は、稲の根刈りに利用されたと推定され、穂首刈りに利用されていた石庖丁と、収穫具のセット関係にあると考えられている（斉野 1993、1994）。

徳蔵遺跡のある紀伊半島南部にも、磨製石庖丁と大形磨製石庖丁のセット関係が確認されたこととなり、石庖丁を伴う農耕技術が紀伊半島にも存在していたことが予測できる。

今後、データを収集して、より具体的に追求していきたい。

（注）：石庖丁にみられるこの光沢は、他の報告書、論文の中では、Aタイプ光沢、もしくはコーングロスと呼ばれている。稲などの植物質に生じる光沢である。

参考文献

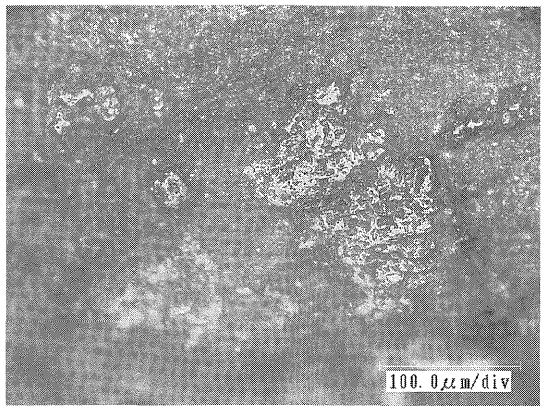
阿子島香　1989　『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社

梶原洋・阿子島香　1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2）」『考古学雑誌』67-1　pp.1-35

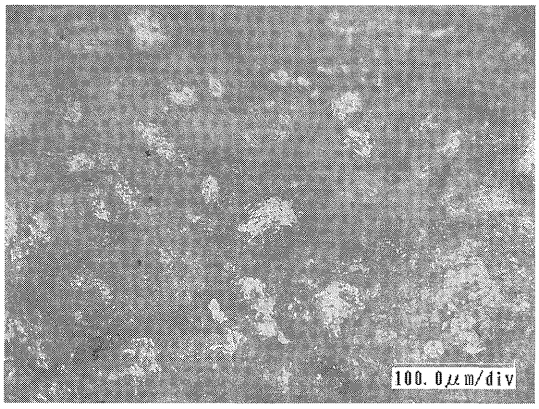
斉野裕彦　1993　「弥生時代の大型直縁刃石器（上）」『弥生文化博物館研究報告』2　pp.85-109

1994　「弥生時代の大型直縁刃石器（下）」『弥生文化博物館研究報告』3　pp.31-68

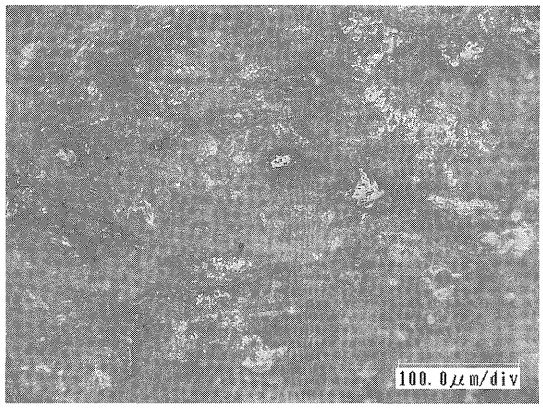
1　Bタイプ光沢　「強」



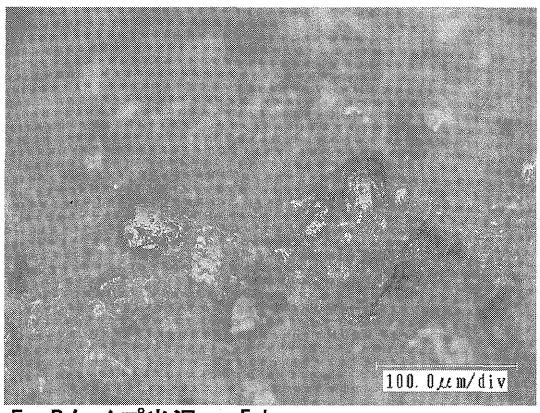
2　Bタイプ光沢　「強」



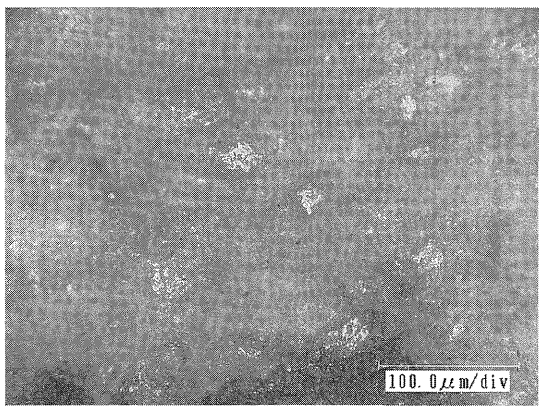
3　Bタイプ光沢　「強」



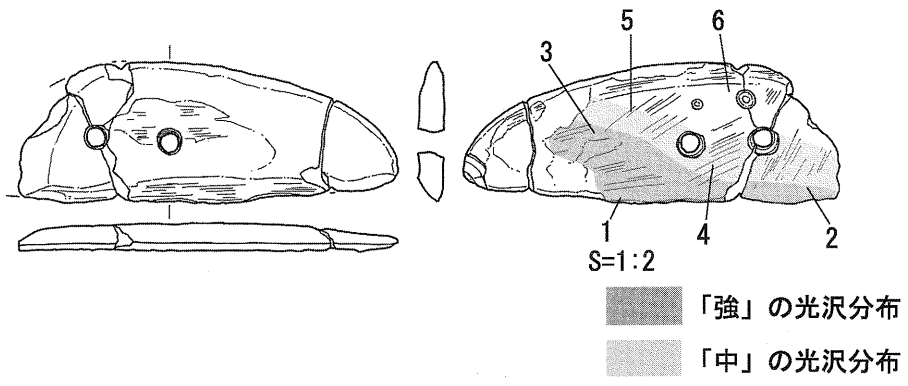
4　Bタイプ光沢　「中」



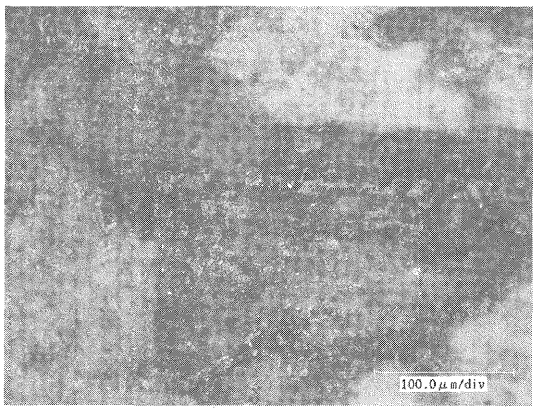
5　Bタイプ光沢　「中」



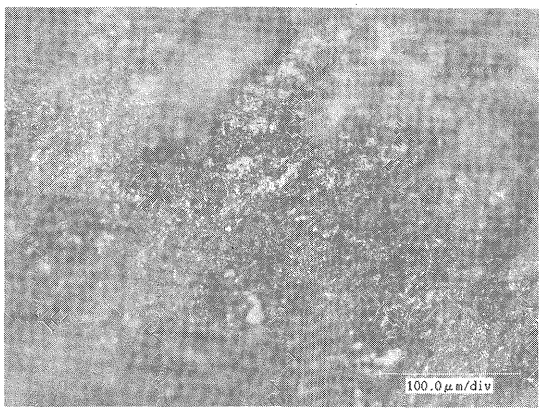
6　弱いBタイプ光沢の分布



第32図　石庖丁の使用痕

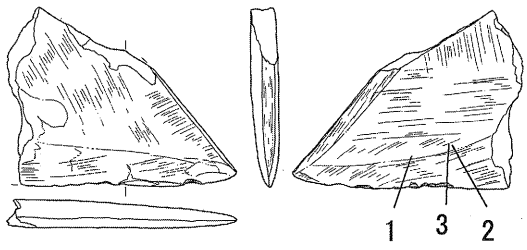


1　微弱な光沢

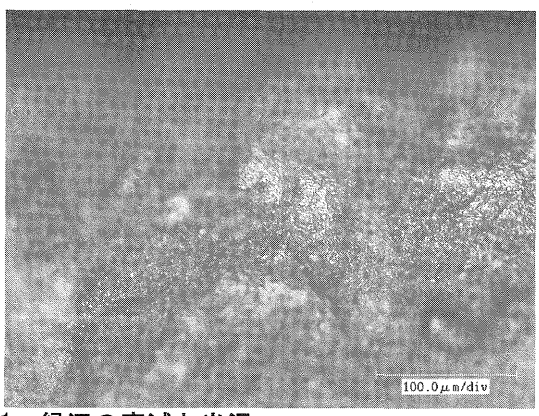


2　微弱な光沢(Bタイプ?)

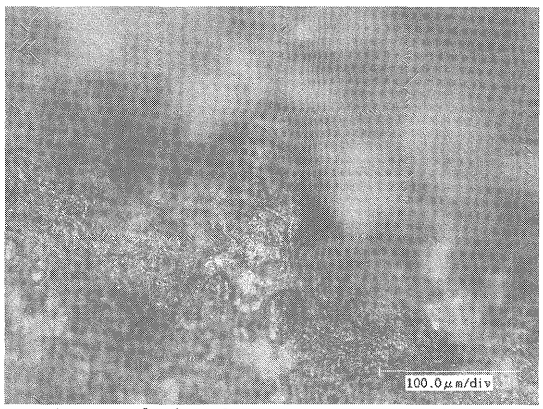
3　微弱な光沢(Bタイプ?)



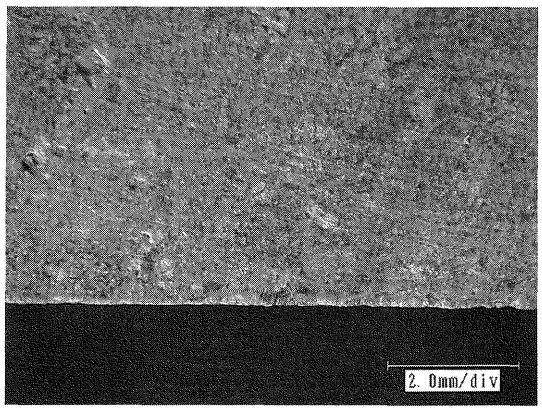
S=1:3



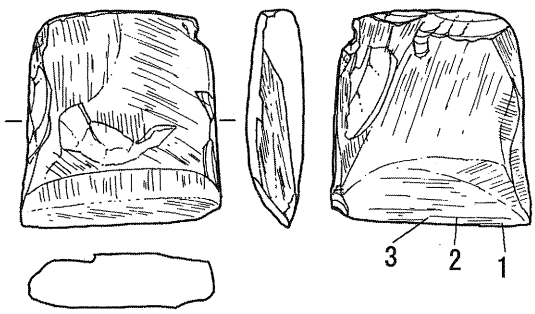
1　縁辺の摩滅と光沢



2　縁辺の摩滅と光沢



3　低倍率による刃部の状況



S=1:2

第33図　石器の使用痕

番号	地区	大区画	小区画	層位か遺構	層位・遺構の時期	器種	石材	素材の技術と形状	素材の大きさ	刃部の加工(整形+成形)	石鏃の押圧剥離幅(mm)	刃部以外の加工や剥片剥離技術	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	12-4	G7	e2	住居2003	中期	削器	二上山	D剥片	LL	S'D	適用外	なし	27.9	76.5	8.3	23.36	
2	12-4	G6	l24	住居2245上層	中期	横形石匙	二上山	HvD剥片	M	S'P	適用外	S'P	28.9	38.2	4.6	4.41	素材は両極剥片の可能性がある。
3	12-4	G6	m19	住居2486	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	1.3~1.9	なし	16.2	11.9	3.4	0.41	
4	12-4	G6	m19	住居2486	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	2.3	なし	14.5	12.3	3.1	0.35	
5	12-4	G6	m19	住居2486	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	3.0~3.2	なし	20.8	11.5	3.7	0.45	
6	12-4	G6	m19	住居2486	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	2.9~3.2	なし	23.2	15.5	4.7	1.34	
7	12-4	G6	m19	住居2486	中期	凹基鏃	産地不明	D剥片	S	SP	3.9~4.2	なし	27.0	16.8	3.5	0.94	
8	12-4	G7	e3	土坑1975 6層	中期	縦形石匙	二上山	S'D剥片	L	S'P	適用外	S'P・S'I	51.6	33.0	8.4	11.86	
9	12-4	G7	e3	土坑1977	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	不能	なし	20.9	15.9	5.0	1.04	
10	12-4	G6	d23	土坑2316	中期	両極石器	二上山	D剥片	L~M	なし	適用外	HvD	35.5	39.2	8.2	9.34	
11	12-4	G6	m21	土坑2340	中期	両極石器	二上山	D剥片	S	なし	適用外	HvD	20.1	20.5	8.3	2.90	
12	12-4	G6	n19	土坑2382	中期	石錐	二上山	S'D剥片	L	S'P・S'D	適用外	なし	62.3	54.6	10.3	28.02	
13	12-4	G6	n17	土坑2401	中期	掻器	二上山	D剥片	L	S'P・S'D	適用外	S'D	53.0	38.2	26.9	51.59	
14	12-4	G6	l15	土坑2450	中期	削器	二上山	HD矩形剥片	LL	S'P	適用外	なし	71.9	61.2	15.7	48.56	
15	12-4	G6	k14	土坑2453	中期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	SP	2.5~3.0	なし	22.4	16.1	3.1	0.70	
16	12-4	G6	k12	土坑2527	中期	石核	二上山	適用外	適用外	なし	適用外	HD	187.6	144.9	102.2	3600.00	
17	12-4	G7	b5	Pit2169	中期	大形剥片	二上山	HD剥片	適用外	なし	適用外	なし	144.7	70.1	21.8	209.45	
18	12-4	G7	f3	埋甕⑦土器内埋土	船元IV	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P/急	1.7~2.0	なし	16.1	11.0	3.9	0.53	
19	12-4	F7	n1	住居1113	後期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	SP	6.0	SD	27.4	24.3	4.7	1.75	弥生時代の凹基鏃と思われる。
20	12-4	F7	v1	住居1113	後期	石錐	二上山	D剥片	S	S'P	適用外	なし	35.3	12.7	8.2	3.70	
21	12-4	F7	v1	住居1113	後期	石錐	二上山	D剥片	S	S'P	適用外	なし	35.9	12.7	7.5	3.11	
22	12-4	F7	n1	住居1113	後期	使用痕剥片	二上山	HvD剥片	M	なし	適用外	なし	48.7	18.1	8.0	4.29	
23	12-4	F7	v1	住居1113	後期	両極石器	二上山	HD矩形剥片	M	なし	適用外	HvD	40.9	21.0	19.6	13.41	
24	12-4	F7	v1	住居1113	後期	両極石器	二上山	HD矩形剥片	L	なし	適用外	HvD	44.1	45.6	22.1	45.95	
25	12-4	F7	v1	住居1113	後期	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD	36.5	25.5	11.7	9.66	
26	12-4	G6	k16	住居2600	後期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	3.2	なし	16.4	10.5	3.3	0.36	
27	12-4	G6	k16	住居2600	後期	凹基鏃	産地不明	D剥片	S	SP	3.0	なし	18.4	12.7	3.2	0.56	
28	12-4	G6	k16	住居2600	後期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	SP	3.3	なし	16.9	14.0	3.3	0.45	
29	12-4	G6	k16	住居2600	後期	鋸歯縁凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P/鋸歯	2.2~2.5	なし	16.5	12.8	2.8	0.42	
30	12-4	G6	k16	住居2600埋土あぜ	後期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	2.9~3.6	なし	19.7	18.1	3.7	0.74	
31	12-4	G6	j16	住居2600土坑4	後期	石核	二上山	礫	適用外	なし	適用外	HvD	46.5	54.9	35.2	124.59	両極剥片をつくる石核。
32	12-4	G6	j11	住居2682土坑1	後期	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	1.3~1.6	なし	15.9	12.8	2.5	0.33	鋸歯気味の縁辺。
33	12-4	G6	j11	住居2682	後期	凹基鏃	二上山	不明	S	SP	3.1	なし	30.6	19.0	5.3	1.46	端正な作り。
34	12-4	G6	j12	住居2682	後期	削器	チャート	不明	不明	S'P	適用外	不明	14.8	31,2	7.7	1.70	末端部の断片。
35	12-4	G6	n13	土坑2514	後期	削器	二上山	S'D横長剥片	L	P	適用外	なし	38.8	68.1	9.2	20.26	
36	12-4	G6	i23	5-bc層	後期	凹基鏃	金山	剥片	S	SP	2.6~2.9	なし	16.9	19.0	3.6	0.65	
37	12-4	G6	g19	5-c層	後期	縦形石匙	金山	剥片	L	S'P	適用外	S'D	34.0	32.3	8.3	7.78	
38	12-4	G6	h21	6層	中期	横形石匙	金山	剥片	L~M	S'P	適用外	S'D	26.7	24.1	5.4	3.30	
39	12-4	G6	l14	5-c層	後期	両極剥片	金山	HvD剥片	L	なし	適用外	なし	42.5	33.2	7.6	10.92	
40	12-4	G6	f22	6層	中期	削器	金山	D剥片	L~M	S'D	適用外	S'D	52.0	37.9	10.3	14.69	
41	12-4	G6	j22	5-c層	後期	削器	金山	HvD剥片	M	S'P	適用外	不明	24.6	56.0	5.7	7.85	
42	12-4	G7	h2	6-1層	中期	削器	金山	D剥片	LL	S'P	適用外	なし	54.1	65.5	11.4	38.46	
43	12-4	G6	g23	7層	不明	削器	金山	D板状剥片	L	S'P	適用外	折取	46.7	50.0	12.6	22.13	
44	12-4	G6	f23	6層	中期	大形使用痕剥片	金山	D板状剥片	LLL	なし	適用外	なし	113.8	55.9	16.9	86.97	
45	12-4	G6	f23	6層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	S'D	適用外	S'D	145.7	85.8	18.1	186.83	
46	12-4	G7	b3	6-1層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	不明	適用外	S'D	55.0	67.3	16.5	45.17	
47	12-4	G7	a7	6層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	S'D	適用外	なし	74.4	91.7	14.0	89.86	
48	12-4	G6	f23	6層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	S'D	適用外	S'D	121.8	107.2	22.5	263.53	
49	12-4	G6	m16	6層	中期	大形削器	金山	板状剥片	適用外	S'P	適用外	折取	86.5	62.5	35.3	155.24	
50	12-4	G7	c5	6-1層	中期	大形削器	金山	板状剥片	適用外	S'D	適用外	なし	76.5	117.7	17.4	125.22	
51	12-4	G6	f23	6層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	S'D・S'P	適用外	折取	67.5	141.9	13.4	141.14	
52	12-4	F7	y3	6層	中期	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	D	適用外	なし	118.3	103.0	19.1	268.94	
53	12-4	G6	f23	6層	中期	大形掻器	金山	D板状剥片	LLLL	S'P	適用外	折取	101.0	94.4	17.0	211.98	
54	12-4	G7	a3	6-1層	中期	大形掻器	金山	D板状剥片	LLLL	D	適用外	折取	140.2	133.3	28.1	595.48	
55	12-4	G6	f23	6層	中期	板状剥片	金山	D板状剥片	LLLL	なし	適用外	なし	74.5	136.1	25.3	159.53	
56	12-4	G6	i13	5-b層	後期	大形剥片	金山	D板状剥片	LLLL	なし	適用外	なし	108.7	51.2	23.7	134.02	
57	12-4	F7	y3	6層	中期	大形剥片	金山	D板状剥片	LLL	なし	適用外	なし	72.6	90.4	13.8	77.20	
58	12-4	G6	b25	6層	中期	大形剥片	金山	板状剥片	適用外	なし	適用外	なし	127.5	38.1	16.6	68.50	
59	12-4	G6	i25	6層	中期	大形剥片断片	金山	板状剥片	適用外	なし	適用外	なし	68.4	41.0	13.5	33.28	
60	12-4	G7	b6	5-b層	後期	板状剥片	金山	D板状剥片	LLLL	なし	適用外	なし	101.7	151.9	18.3	318.37	
61	12-4	F7	y3	6層	中期	板状剥片	金山	D板状剥片	LLLL	なし	適用外	なし	116.2	132.3	18.0	307.19	
62	12-4	G6	f21	6層	中期	凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P	3.3	なし	26.3	20.8	3.6	1.42	
63	12-4	G6	k16	5-c層	後期	凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P	3.2~3.7	なし	20.4	17.0	3.7	0.83	
64	12-4	G7	f1	6-1層	中期	凹基鏃	二上山	剥片	S	SP	不能	なし	25.1	19.6	5.1	1.30	
65	12-4	—	—	5層表採	後期	凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P	不能	なし	24.6	17.4	4.3	1.32	
66	12-4	—	—	5層	不明	凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P	2.8	なし	17.8	16.4	4.4	0.73	
67	12-4	—	—	5層	不明	鋸歯縁凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P/鋸歯	不能	なし	18.6	16.8	4.3	0.83	
68	12-4	—	—	5層	不明	凹基鏃	二上山	剥片	S	SP	2.4	なし	20.1	15.5	3.5	0.76	
69	12-4	—	—	5層表採	後期	凹基鏃未成品	二上山	D剥片	S	S'P	5.5	なし	22.8	20.9	7.2	2.60	やや厚手の石鏃。
70	12-4	—	—	5層表採	後期	凹基鏃未成品	二上山	剥片	S	S'P	3.6	なし	22.7	16.6	5.0	1.58	弥生時代の凹基鏃と思われる。
71	12-4	—	—	5層不明	後期	凹基鏃未成品	二上山	D剥片	M	SP	5.6	なし	33.4	21.8	4.6	2.54	弥生時代の凹基鏃と思われる。
72	12-4	G6	m2	6層以下	中期	石鏃未成品	二上山	D剥片	S	S'P	4.3	なし	26.7	17.0	4.6	1.92	凹基鏃未成品と思われる。
73	12-4	F7	t2	5-b層	後期	石錐	二上山	剥片	M	S'P	適用外	なし	42.0	13.3	12.4	5.18	
74	12-4	G7	c5	5層上面	後期	石錐	二上山	剥片	不明	S'P	適用外	なし	36.3	9.6	6.1	2.18	
75	12-4	G6	h15	5-c層	後期	石錐	二上山	剥片	M	S'P	適用外	なし	35.5	22.8	5.8	2.73	
76	12-4	G6	k21	5層	後期	石錐	二上山	剥片	M	S'P	適用外	なし	40.5	16.5	5.4	2.50	
77	12-4	—	—	6層表採	中期	石錐	二上山	S'D横長剥片	L	S'P	適用外	S'P・S'D	84.7	29.4	15.1	17.21	

表1-1　全体属性表

番号	地区	大区画	小区画	層位か遺構	層位・遺構の時期	器種	石材	素材の技術と形状	素材の大きさ	刃部の加工(整形+成形)	石鏃の押圧剥離幅(mm)	刃部以外の加工や剥片剥離技術	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
78	12-4	G 6	k21	6層	中期	両極石器	二上山	D剥片	L	なし	適用外	HvD	36.7	41.0	16.0	20.98	
79	12-4	G 6	m18	5-bc層	後期	両極石器	二上山	剥片	L	なし	適用外	HvD	40.2	32.4	17.2	18.28	楔として使用された可能性あり。
80	12-4	G 6	m22	6層	中期	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD	35.1	19.3	13.6	9.20	
81	12-4	G 6	n20	5-c層	後期	両極石器	二上山	D剥片	L	なし	適用外	HvD	56.7	34.5	11.3	19.30	
82	12-4	—	—	5層不明	後期	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD	27.4	35.1	17.5	15.03	
83	12-4	G 6	l22	5-c層	後期	両極石器	二上山	D剥片	LL	なし	適用外	HvD	46.2	92.0	13.7	43.06	
84	12-4	—	—	5層表採	後期	石匙断片	二上山	D剥片	M	S'P	適用外	不明	24.4	18.8	5.2	1.84	
85	12-4	—	—	6層表採	中期	横形石匙	二上山	D剥片	L	S'P	適用外	S'D	27.6	54.6	9.4	10.73	
86	12-4	—	—	6層表採	中期	横形石匙	二上山	D剥片	L	S'P・S'D	適用外	S'D	48.4	51.9	9.5	12.56	
87	12-4	G 6	h18	5-c層	後期	異形石匙	二上山	剥片	L	S'P	適用外	S'D	34.7	52.3	8.2	8.74	
88	12-4	G 6	j13	5-b層	後期	削器未成品	二上山	HvD剥片	L	S'D	適用外	S'D	57.2	27.3	17.9	26.35	
89	12-4	G 6	g21	5	後期	削器	二上山	HvD剥片	L	S'P・S'D	適用外	なし	30.9	62.3	14.9	24.65	
90	12-4	G 4	n19	6層	中期	削器	二上山	D剥片	L～M	S'P	適用外	S'P・S'D	35.8	45.3	8.4	14.41	
91	12-4	—	—	5層表採	後期	抉入削器	二上山	D剥片	LL	S'P	適用外	S'P・S'D	42.2	63.0	15.4	33.00	
92	12-4	G 6	j14	5-b層	後期	削器	二上山	D剥片	LL	S'D	適用外	なし	47.3	94.3	14.8	61.20	
93	12-4	G 6	l18	6層上面	中期	削器	二上山	S'D縦長剥片	LL	S'D・S'P	適用外	なし	80.1	47.3	12.6	40.42	
94	12-4	G 6	e23	6層	中期	削器	二上山	D剥片	L	S'P	適用外	D	37.8	42.7	7.0	9.51	
95	12-4	—	—	6層表採	中期	削器	二上山	S'D剥片	LL	S'P	適用外	なし	37.2	71.2	13.7	27.84	背部は表面に対し垂直な自然面
96	12-4	G 6	f23	6-1層	中期	削器	二上山	D剥片	L	S'P	適用外	折取	44.7	63.2	10.0	22.49	背部に折取で、垂直な面を形成。
97	12-4	G 6	l18	6層	中期	削器	二上山	D剥片	LL	S'D	適用外	S'D	70.7	49.9	14.9	45.73	
98	12-4	G 6	m15	6層	中期	削器未成品	二上山	D剥片	LL	S'D	適用外	S'D	55.5	76.5	24.9	81.88	
99	12-4	G 7	a 5	5-c層	後期	削器	二上山	D剥片	LL	S'P	適用外	なし	43.6	80.4	13.8	41.87	
100	12-4	—	—	6層表採	中期	削器	二上山	D剥片	L	S'D	適用外	S'D	49.0	39.4	16.1	23.40	
101	12-4	—	—	5層不明	後期	削器未成品	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HD	39.2	24.2	14.0	13.81	
102	12-4	—	—	5層不明	後期	削器	二上山	D剥片	M	S'P	適用外	なし	23.7	47.9	12.8	16.59	
103	12-4	G 7	a 5	5-c層	後期	削器未成品	二上山	D剥片	LL	S'D	適用外	S'D	66.7	30.8	17.0	22.67	
104	12-4	G 6	p22	5	後期	使用痕剥片	二上山	HD剥片	LL	なし	適用外	なし	49.3	77.7	16.6	48.14	
105	12-4	G 6	m19	6層	中期	折取加工剥片	二上山	D剥片	S	なし	適用外	折取	34.8	18.3	9.6	4.55	
106	12-4	G 6	m19	5-b層	後期	折取加工剥片	二上山	HD剥片	LLL	なし	適用外	折取	109.9	42.1	17.6	81.07	
107	12-4	G 6	n20	5c層より下	後期	二次加工剥片	二上山	D剥片	M	不明	適用外	S'D	35.8	42.9	15.0	22.51	
108	12-4	G 6	e22	6層	中期	剥片	二上山	HD剥片	LLLL	なし	適用外	なし	102.4	142.7	39.1	322.32	
109	12-4	G 6	m18	5-bc層	後期	剥片	二上山	HD剥片	LLL	なし	適用外	なし	100.9	72.5	27.3	133.72	
110	12-4	G 6	k22	5層	後期	石核	二上山	HD剥片	LLL	なし	適用外	S'D	65.3	83.2	29.6	139.09	石鏃、小形削器などの石核。
111	12-4	G 6	l18	5-c層	後期	石核	二上山	HD剥片	LLLL	なし	適用外	S'D	80.1	104.9	37.5	308.92	
112	12-4	G 6	l18	6層上面	中期	石核	二上山	亜角礫	適用外	なし	適用外	S'D	118.3	138.3	52.1	777.09	
113	12-4	—	—	6層表採	中期	石核	二上山	亜角礫	適用外	なし	適用外	HD	144.3	114.0	86.5	1493.57	
114	12-4	G 6	h18	5-c層	後期	石核	二上山	HD剥片	LLLL	なし	適用外	S'D	111.6	78.2	27.5	185.75	
115	12-4	—	—	6層表採	中期	原石核	二上山	亜角礫	適用外	なし	適用外	HD	222.9	188.5	175.7	8500.00	
116	12-4	G 6	j18	6層上面	中期	原石	二上山	亜角礫	適用外	適用外	適用外	適用外	82.7	126.9	81.0	842.02	
117	12-4	G 6	o19	6層	中期	原石	二上山	亜角礫	適用外	適用外	適用外	適用外	124.7	78.7	41.0	413.18	
118	12-4	G 6	n19	6層以下	中期	両極石器	産地不明	HvD剥片	S	なし	適用外	HvD	30.9	23.8	5.0	4.30	
119	12-4	G 7	f 4	6-1層	中期	横形石匙	産地不明	D剥片	L	不明	適用外	S'P・S'D	37.5	51.4	6.3	10.65	
120	12-4	G 7	j 2	5-c層	後期	削器	産地不明	D剥片	L	S'P	適用外	S'D	44.9	41.8	11.4	21.66	
121	12-4	G 6	d25	5-c層	後期	打製石斧	ホルンフェルス	剥片	適用外	HD	適用外	HD	162.7	74.4	25.4	250.76	裏面に摩滅した面がある。
122	12-4	G 6	j25	6層	中期	部分磨製石斧	凝灰岩	扁平礫	適用外	HD・研磨	適用外	なし	134.9	46.5	20.5	172.87	
123	12-4	G 7	f 2	6層	中期	丸鑿状石斧	頁岩	棒状礫	適用外	HD・研磨	適用外	なし	230.6	47.2	27.8	487.55	
124	12-4	F 7	v 5	5-bc層	後期	部分磨製石斧未成品	凝灰岩	扁平礫	適用外	HD・研磨	適用外	なし	101.9	62.5	14.4	138.57	
125	12-4	G 7	e 2	6-1層	中期	定角式磨製石斧	蛇紋岩	不明	適用外	不明	適用外	研磨・HD	28.9	47.7	20.9	23.20	頭部の断片資料。
126	12-4	G 6	d 1	5-c層	後期	抉入石器	緑泥片岩	不明	適用外	不明	適用外	HD	52.3	72.6	11.6	55.63	
127	12-4	G 6	i14	5-b層	後期	剥片	チャート	剥片	適用外	なし	適用外	なし	41.5	60.7	15.9	33.63	
128	12-4	G 7	h 1	6層	中期	剥片	黒曜石	I縦長剥片	適用外	なし	適用外	なし	28.9	18.0	6.6	2.33	
129	12-4	G 6	h17	5-c層	後期	剥片	紅簾片岩	剥片	適用外	なし	適用外	なし	110.1	48.8	14.2	94.78	
130	12-4	G 6	f13	5層	後期	打製石斧	泥岩	剥片	適用外	HD	適用外	HD	108.0	46.1	18.5	87.74	
131	12-4	G 6	i13	5層	後期	石偶	緑泥片岩	不明	適用外	なし	適用外	HD	192.7	83.6	28.9	481.27	表面の風化
132	12-4	G 6	n14	落ち込み1795	不明	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD	34.0	29.9	17.4	15.21	
133	12-4	G 6	h15	落ち込み1795	不明	削器	二上山	HD横長剥片	LL	S'D	適用外	S'D	84.2	40.4	16.3	60.23	再加工される。
134	12-4	G 6	k13	落ち込み1795	不明	削器	産地不明	D剥片	LL	P	適用外	なし	35.4	64.6	9.0	20.14	表面の風化が著しい。
135	12-4	F 7	r 5	落ち込み1112	不明	削器	二上山	HvD剥片	M	S'P	適用外	なし	30.3	41.3	6.9	8.63	
136	12-4	F 7	u 1	落ち込み1112	不明	削器未成品	二上山	剥片	L	不明	適用外	S'D	65.4	32.1	17.7	42.35	
137	12-4	—	—	土坑191	不明	打製石斧未成品	緑色片岩	剥片	適用外	HD	適用外	HD	112.6	43.2	30.0	243.78	
138	12-4	G 6	j20	土坑281	不明	凹基鏃	二上山	剥片	S	SP	3.4	なし	22.3	17.5	4.7	1.12	
139	12-4	G 6	m19	土坑355	不明	両極石器	二上山	剥片	不明	なし	適用外	HvD	34.3	23.1	9.1	7.12	角柱体剥片の石核か
140	12-4	G 6	k12	土坑1335	不明	大形剥片	二上山	HD矩形剥片	LLLL	なし	適用外	なし	99.2	104.8	31.1	208.85	
141	12-4	G 6	i14	土坑1267	不明	削器	二上山	S'D貝殻状剥片	LL	S'D	適用外	なし	52.7	78.5	12.8	50.69	
142	12-4	G 6	k12	土坑1335	不明	鋸歯縁凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P/鋸歯	1.8～2.4	なし	27.7	14.8	3.4	0.94	
143	12-4	G 6	l13	土坑1343	不明	削器	二上山	D剥片	LL	SP	適用外	なし	50.3	81.0	10.0	34.14	
144	12-4	G 6	j23	土坑1522	不明	両極剥片	二上山	HvD剥片	L	なし	適用外	なし	45.8	40.2	8.5	11.64	
145	12-4	G 6	k23	土坑1805	不明	縦形石匙	産地不明	D剥片	M	SP	適用外	なし	47.7	20.1	7.8	4.88	
146	12-4	G 6	l20	Pit286	不明	凹基鏃	二上山	剥片	S	S'P	2.1～2.4	なし	12.1	11.2	3.4	0.24	
147	12-4	G 6	l16	住居100	遠賀川	凹基鏃	金山	不明	S	S'P/鋸歯	1.7～2.1	なし	21.0	14.5	2.9	0.39	
148	12-4	G 6	k16	住居100	遠賀川	凹基鏃	金山	D剥片	S	S'P/急	適用外	なし	20.5	16.7	3.3	0.95	
149	12-4	G 6	l16	住居100	遠賀川	有茎鏃	二上山	D剥片	M	S'P	2.9	なし	40.2	13.0	4.1	1.95	
150	12-4	G 6	l17	住居100	遠賀川	石錐	産地不明	D剥片	M	P	適用外	なし	19.1	17.4	3.8	1.00	
151	12-4	G 6	k16	住居100	遠賀川	石錐	二上山	D剥片	S	S'P/急	適用外	なし	38.0	20.4	7.6	3.33	
152	12-4	G 6	k16	住居100	遠賀川	両極石器	金山	不明	S	なし	適用外	HvD	22.9	15.3	9.4	3.25	
153	12-4	G 6	l17	住居100	遠賀川	両極石器	泥岩	D剥片	M	なし	適用外	HvD	38.8	31.9	10.1	13.67	
154	12-4	G6	k16	住居100	遠賀川	剥片	金山	適用外	適用外	なし	適用外	なし	34.8	76.2	8.2	13.14	

表1－2　全体属性表

番号	地区	大区画	小区画	層位か遺構	層位・遺構の時期	器種	石材	素材の技術と形状	素材の大きさ	刃部の加工(整形+成形)	石鏃の押圧剥離幅(mm)	刃部以外の加工や剥片剥離技術	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
155	12-4	G6	k16	住居100	遠賀川	磨製石斧	頁岩	不明	適用外	研磨	適用外	剥離・敲打・研磨	92.2	30.2	26.4	85.62	刃部欠損。
156	10-2	E 4	s25	1層	弥生	扁平片刃石斧	緑色岩	適用外	適用外	研磨	適用外	研磨	43.2	39.3	11.1	34.99	
157	12-4	−	−	表採	弥生	扁平片刃石斧	頁岩	適用外	適用外	研磨	適用外	研磨	43.0	28.9	9.3	17.28	研磨加工で器体と刃部を整形する。
158	11-1	H 5	e 6	溝48	弥生	大形直縁刃石器	緑泥片岩	不明	適用外	研磨	適用外	研磨	71.1	90.8	11.3	77.93	使用痕あり。
159	10-2	E 5	t 3	1層	弥生	磨製石庖丁	緑泥片岩	不明	適用外	研磨	適用外	研磨・穿孔	37.4	99.8	7.7	36.50	
160	12-5	G 6	j15	3層	不明	凹基鏃	産地不明	D剥片	S	広S'P	3.7〜4.9	なし	28.4	18.6	5.2	2.02	弥生時代の凹基鏃と思われる。
161	12-4	G 6	m19	3層	不明	中形有茎鏃	二上山	D剥片	M	広SP	4.6〜6.2	SD	54.4	16.7	6.7	5.29	茎部に装着摩耗跡あり。
162	12-4	G 6	k19	住居300	布留	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HHvD	45.1	25.1	24.3	23.70	
163	12-4	G 6	g18	住居400	布留	石錐未成品	二上山	D折断両極剥片	S	なし	適用外	HD	36.2	12.4	10.9	4.42	
164	12-4	G 6	g18	住居400	布留	削器	二上山	HvD剥片	S	SP	適用外	なし	36.0	20.6	6.0	4.59	
165	12-4	G 6	p20	住居500	布留	削器	金山	D剥片	M	S'P	適用外	D	41.5	22.4	8.6	6.53	素材に両極石器を用いる。
166	12-4	G 6	p19	住居501	布留	石錐	二上山	D剥片	S	S'P/急	適用外	なし	25.2	10.6	5.9	1.52	
167	12-4	G 6	k23	住居550	布留	凹基鏃	二上山	剥片	S	SP	2.8〜3.3	なし	22.1	16.6	4.0	0.88	
168	12-4	G 6	k23	住居550	布留	石錐	二上山	D剥片	S	S'P	適用外	なし	43.9	16.7	6.9	4.69	
169	12-4	G 6	k23	住居550	布留	削器	二上山	S'D剥片	L	P+D	適用外	D	37.2	64.3	7.4	13.61	
170	12-4	G 6	k23	住居550	布留	乳棒状磨製石斧	緑色岩	適用外	棒状礫	研磨	適用外	研磨・敲打	88.6	37.3	23.3	95.91	
171	12-4	G 6	m21	住居600	布留	石匙	二上山	S'D剥片	M	S'P	適用外	S'D	33.8	48.8	7.5	8.07	
172	12-4	G 6	m21	住居600	布留	削器	二上山	HD剥片	LL	HD	適用外	なし	68.3	39.1	16.6	35.86	
173	12-4	G 7	g 2	住居700	布留	凹基鏃	金山	剥片	S	SP	不能	なし	24.4	16.4	4.5	0.96	
174	12-4	G 7	g 2	住居700	布留	凹基鏃未成品	二上山	D剥片	S	SP	不能	なし	23.0	13.8	3.2	0.95	
175	12-4	G 7	g 2	住居700	布留	両極石器	黒曜石	剥片	S	なし	適用外	HvD	17.3	21.2	10.0	3.40	
176	12-4	G 7	g 2	住居700	布留	折取加工剥片	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD・折取	22.0	34.6	13.3	8.65	
177	12-4	G 6	k21	住居800	布留	凹基鏃	二上山	不明	S	SP	不能	なし	18.5	17.1	3.8	0.90	
178	12-4	G 6	m21	住居800	布留	両極石器	二上山	D剥片	M	なし	適用外	HvD	31.6	27.4	11.0	8.95	
179	12-4	G 6	k21	住居800	布留	削器	二上山	S'D貝殻状剥片	M	S'P	適用外	なし	33.6	38.8	8.2	9.21	
180	12-4	G 7	b 4	溝439	不明	凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P	2.7	なし	23.7	18.0	4.3	1.45	
181	12-4	G 6	m22	溝439	不明	縦形石匙	二上山	HvD剥片	M	S'P	適用外	S'P	42.6	15.9	6.5	3.42	
182	12-4	G 6	o21	溝439	不明	横形石匙	二上山	S'D剥片	L	S'P	適用外	P+D	32.0	51.9	7.9	10.68	
183	12-4	G 7	c 3	溝1000	不明	凹基鏃	金山	剥片	SP	SP	不能	なし	18.4	18.6	3.1	0.65	
184	12-4	G 7	d 5	溝1000	不明	大形削器	金山	D板状剥片	LL	HD	適用外	なし	76.9	87.2	17.5	107.51	
185	12-4	G 7	c 4	溝1000	不明	磨製石斧	頁岩	不明	適用外	研磨	適用外	研磨	70.3	39.5	14.5	41.42	
186	12-4	F 7	w 4	3層	不明	鋸歯縁凹基鏃	二上山	D剥片	S	S'P/鋸歯	1.6〜1.8	なし	16.8	13.0	2.7	0.25	
187	12-5	G 6	i13	3層	不明	凹基鏃	二上山	D剥片	S	広S'P	4.0〜4.5	S'D	22.8	16.6	4.4	1.41	弥生時代の凹基鏃と思われる。
188	12-4	G 6	n24	3層	不明	小形石匙	二上山	D剥片	S	S'P	適用外	S'P	24.3	13.6	5.2	1.37	
189	12-4	G 6	l21	3層	不明	削器	二上山	D剥片	M	S'P	適用外	D	30.8	44.6	8.6	6.65	
190	12-5	G 6	g10	3層	不明	削器	二上山	D剥片	L	S'P	適用外	なし	36.3	34.3	6.9	10.03	
191	12-4	G 7	j 1	3層	不明	打製石斧断片	二上山	不明	不明	不明	適用外	不明	52.1	37.0	7.9	12.88	
192	12-4	G 6	e25	3層下砂礫層中	不明	縦形石匙	金山	D剥片	M	P+D	適用外	D	42.8	21.7	8.1	6.20	
193	12-4	G 6	i21	3層	不明	削器	金山	D剥片	LL	S'D	適用外	折断	31.8	80.1	10.7	26.70	
194	12-4	G 6	i25	3層	不明	大形削器	金山	D板状剥片	LLLL	S'D	適用外	S'D・折取	126.5	94.0	22.8	217.13	
195	12-4	G 6	f25	3層下砂礫層中	不明	凹基鏃	産地不明	剥片	S	SP	不能	なし	21.5	18.6	3.5	0.71	
196	12-4	G 7	b 4	3層	不明	礫器	砂岩	扁平礫	適用外	HD	適用外	なし	91.9	111.6	29.7	400.53	刃部が使用により摩耗している。
197	12-4	G 7	c 2	3層	不明	石核	金山	D板状剥片	LL	なし	適用外	S'D	68.5	55.3	35.0	102.69	
198	12-4	F 7	t 3	4層	不明	打製石斧	産地不明	扁平礫	適用外	HD	適用外	HD	75.6	43.1	12.3	51.76	表面の風化が著しい。
199	12-4	G 6	n23	東西トレンチ	不明	削器	二上山	D剥片	LL	S'P	適用外	なし	34.7	84.6	16.6	31.22	
200	12-4	G 6	o23	東西トレンチ	不明	凹基鏃	二上山	D剥片	S	SP	不能	なし	26.1	16.7	2.5	0.61	
201	12-4	−	−	不明	不明	凹基鏃	二上山	剥片	S	SP	3.3	なし	20.4	13.5	4.4	0.88	
202	12-4	−	−	表採	不明	五角形石鏃	二上山	D剥片	S	S'P	不能	なし	18.6	14.2	3.3	0.58	
203	12-4	−	−	表採	不明	鋸歯縁凹基鏃	二上山	不明	S	S'P/鋸歯	1.1	なし	18.8	12.1	3.0	0.34	
204	12-4	−	−	表採	不明	鋸歯縁凹基鏃	二上山	不明	S	S'P/鋸歯	2.2	なし	28.5	15.5	4.2	1.19	
205	12-4	−	−	表採	不明	有茎鏃	二上山	D剥片	S	SP	不能	なし	27.5	18.1	4.9	1.90	
206	12-4	−	−	不明	不明	石錐	金山	角柱状剥片	S	S'P	適用外	なし	38.8	13.3	9.9	4.28	
207	12-4	−	−	表採	不明	横形石匙	金山	D剥片	M	S'P	適用外	折取	33.8	53.4	5.9	7.06	
208	12-4	−	−	表採	不明	定角式磨製石斧	不明	不明	適用外	研磨	適用外	研磨	45.5	41.6	14.8	35.80	
209	12-4	−	−	表採	不明	礫器	砂岩	扁平礫	適用外	HD	適用外	なし	113.4	49.3	21.8	173.02	
210	10-2	F 4	b23	4層	不明	両極剥片	二上山	剥片	M	なし	適用外	HvD	51.4	23.0	7.6	8.54	両端に垂直打撃による加工が認められる。
211	10-2	F 4	c24	4層	不明	打製石斧	泥岩	剥片	適用外	HD	適用外	HD				143.15	
212	10-2	−	−	不明	不明	部分磨製石斧	泥岩	剥片	適用外	HD・研磨	適用外	HD・研磨	92.3	42.6	13.8	52.23	
213	10-2	−	−	不明	不明	部分磨製石斧	泥岩	剥片	適用外	HD・研磨	適用外	HD・研磨	99.8	62.5	20.6	132.59	研磨による成形加工痕。
214	11-1	H 5	c 3	溝48	不明	部分磨製石斧	頁岩	不明	適用外	HD	適用外	研磨・HD	82.8	44.1	21.8	96.68	
215	11-1	G 5	y13	堀1　1層	不明	磨製石斧	砂岩	礫	適用外	研磨	適用外	敲打・研磨	134.6	66.3	27.9	243.86	
216	12-8	H 5	l 5	旧河川 3	不明	打製石斧	二上山	打製石斧断片	適用外	HD	適用外	HD	66.5	45.0	11.3	39.15	打製石斧の刃部断片を再加工し、再度打製石斧として使用。再加工後の使用で形成された摩耗跡が認められる。
217	12-8	H 4	j25	旧河川 2 a	弥生	太形蛤刃石斧	緑色岩	不明	適用外	研磨	適用外	敲打・研磨	142.4	27.9	44.7	239.56	
218	13-4	G 6	m 9	堀2･3合流部埋土上層	不明	横形石匙	二上山	S'D貝殻状剥片	L	D	適用外	D	55.7	62.6	12.7	32.84	
219	13-4	G 6	p15	堀2･3合流部埋土中層	不明	原石核	二上山	円礫	適用外	なし	適用外	HD	325.4	192.0	131.8	8000.00	
220	13-4	G 6	t 3	柱穴92	不明	凹基鏃未成品	二上山	D剥片	S	SP	2.6〜3.1	なし	23.8	12.5	4.2	1.07	
221	13-4	G 5	y18	柱穴759	不明	横形石匙	二上山	D貝殻状剥片	L	S'D	適用外	S'D	48.8	47.8	8.7	17.44	
222	13-4	G 6	p 3	3層	不明	石鏃未成品	二上山	D剥片	S	SP	3.0	なし	30.8	13.7	5.0	1.78	有茎鏃の可能性がある。
223	13-4	G 6	p 5	3層	不明	削器	二上山	S'D剥片	L	S'D	適用外	S'D	53.3	64.5	15.4	44.97	
224	13-4	G 5	r21	3層	不明	器種不明	泥岩	扁平礫	適用外	なし	適用外	研磨	176.7	54.6	22.2	270.06	研磨痕が右側面に認められる。
225	13-4	G 6	u 6	側溝堀削	不明	削器	二上山	D横長剥片	L	S'I	適用外	なし	41.7	84.7	12.2	28.64	
226	13-4	−	−	側溝堀削	不明	両極石器	二上山	D剥片	L	なし	適用外	HvD	34.5	42.2	9.0	14.68	
227	12-4	−	−	表採	不明	板状原石	金山	原石	LLLLe以上	なし	適用外	なし	223.6	152.2	32.1	1046.52	
228	12-4	−	−	不明	不明	定角式磨製石斧	緑色岩	不明	適用外	研磨	適用外	研磨	35.7	28.4	12.9	18.44	北陸で見られる定角式の石材似る。
229	12-4	G 6	j15	5-c層	後期	削器	二上山	HvD剥片	LL	S'P	適用外	なし	53.5	76.3	13.3	34.39	

表１－３　全体属性表

付章2　徳蔵地区遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、南部川河口に近い沖積低地に立地する。付近には、河川や海によって作られた微高地が点在するが、遺跡は微高地を中心に存在する。これまでの調査により、縄文時代中期の集落、縄文時代後期～弥生時代前期の墓域や集落、高田土居城跡の堀やそれに伴う橋脚や土留め材などが確認されている。

今回の分析は、縄文時代晩期～弥生時代前期（一部は古墳時代）の河道から採取した土壌を対象に、当時の古環境を推定する目的で、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。また、遺構内から検出された種実や木材の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。一方、高田土居城跡に伴う堀から採取した土壌についても、当時の古環境を推定する目的で、珪藻分析･花粉分析を行う。また、堀に伴う橋脚や土留め材に使用されていた木材の樹種や、堀から検出された種実の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。なお、橋脚や土留め材に関しては、放射性炭素年代測定を行い、時代観に関する情報を得る。

1．試料

土壌試料は、各遺構から採取された10点である。このうち、珪藻分析と花粉分析に関しては全点、植物珪酸体分析に関しては中世の堀の埋積物を除いた7点を分析する。樹種同定用試料は、旧河川の堰状遺構の構築部材5点、中世の堀に伴う橋脚から2点と土留材から2点の計9点である。中世の試料4点は、放射性炭素年代測定も併せて実施する。種実同定用試料は、遺構などから出土した21点である。試料の詳細は、表1にまとめて記す。

表1　分析試料一覧

番号	地区	遺構	層位など	目的	時代性	分析項目
1	Ⅳ 13-④区	外堀2・3合流部	調査区南壁　最下層1	高田土居城跡の外堀・内堀の古環境推定	高田土居城跡外堀 室町時代	珪藻分析 花粉分析
2	Ⅳ 13-④区	内堀6a	試料3の直上層		高田土居城跡内堀 室町時代	
3	Ⅳ 13-④区	内堀6e	調査区南壁　西最下層		高田土居城跡内堀 室町時代	
4	表8参照	各遺構などから検出された種実21点	結果表8参照	各時代の植物利用と古植生推定	縄文時代～中世	種実遺体分析
5						
6	Ⅲ 13-②区	旧河川3	構築部材5点	堰状遺構の構築材の種類を知る	縄文時代晩期～弥生時代前期	樹種同定
7	Ⅱ 13-③区	旧河川2	第7層	旧河道の分析により、当時の古環境を推定する	縄文時代晩期～弥生時代前期	珪藻分析 花粉分析 植物珪酸体分析
8	Ⅱ 13-③区	旧河川2	第8層			
9	Ⅴ 13-⑧区	旧河川2a	第7層		古墳時代中期	
10	Ⅲ 13-②区	旧河川3	調査区南壁最下層1	堰状遺構付近の旧河道埋積物の分析により、当時の古環境を推定する	縄文時代晩期～弥生時代前期井堰	
11	Ⅲ 13-②区	旧河川3	調査区南壁最下層2			
12	Ⅲ 13-②区	旧河川3	堰状遺構の支え木　下部堆積層			
13	Ⅲ 13-②区	旧河川3	調査区東壁　最下層			
14	Ⅳ 13-④区	外堀1～3合流部	橋脚材1	外堀に構築された建築部材の樹種と年代を知る	室町時代 高田土居城跡外堀	樹種同定、放射性炭素年代測定（AMS法）
15	Ⅳ 13-④区	外堀1～3合流部	橋脚材2			
16	Ⅳ 13-④区	外堀1～3合流部	土留材1			
17	Ⅳ 13-④区	外堀1～3合流部	土留材2			

2．分析方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお暦年較正は、丸める前の値をRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用いて計算した。

（2）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、Witkowski etal（2000）などを参照する。

同定結果は、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（3）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（4）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度

に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から内容物について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

（5）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（6）種実遺体分析

試料を双眼実体顕微鏡下で観察・分類し、その形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等と比較し、種類を同定・計数した。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、乾燥したものは、乾燥剤を入れて保存する。水湿を帯びたものは50%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

3．結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を表2に示す。同位体補正後の年代値は、約400～500年前を示している試料が多い。暦年較正の結果は表3に示す。結果をみると、西暦1400～1500年を中心としており、室町時代とされる状況と調和的である。傾向としては、橋脚よりも土留め材の方がやや古い年代値を示している。なお、丸太材など年輪の新旧がわかっている場合には、年輪に沿って複数の試料を分割してそれぞれ年代値を測

表2　放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺構等		樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
14	外堀1～3合流部	橋脚材1	マツ属複維管束亜属	460±30	-28.14±0.69	510±30	IAAA-30721
15	外堀1～3合流部	橋脚材2	マツ属複維管束亜属	380±30	-27.58±0.59	430±30	IAAA-30722
16	外堀1～3合流部	土留材1	マツ属複維管束亜属	500±30	-27.52±0.57	540±30	IAAA-30723
17	外堀1～3合流部	土留材2	マツ属複維管束亜属	580±30	-30.21±0.56	660±30	IAAA-30724

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

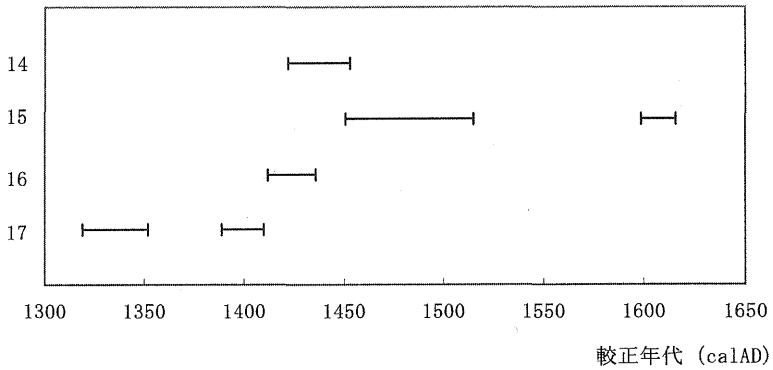
表3　暦年較正結果

試料	補正年代(BP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code No.
1	458±31	cal AD 1,422 － AD 1,453	cal BP 528 － 497	1.000	IAAA-30721
2	382±31	cal AD 1,451 － AD 1,515 cal AD 1,599 － AD 1,616	cal BP 499 － 435 cal BP 351 － 334	0.802 0.198	IAAA-30722
3	502±31	cal AD 1,412 － AD 1,436	cal BP 538 － 514	1.000	IAAA-30723
4	577±31	cal AD 1,319 － AD 1,352 cal AD 1,389 － AD 1,410	cal BP 631 － 598 cal BP 561 － 540	0.618 0.382	IAAA-30724

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している。

定し、較正曲線を比較したり確率分布を求めることによって、より詳細な年代値が検討できる（中村ほか、2001など）。この方法は、今回のような有史以降で詳細な年代値が必要な場合などには、有効な方法であるといえる。

図1　暦年較正結果



（2）珪藻分析

結果を表4、図2に示す。珪藻化石は、3区の試料番号7・8が無化石、4区の試料番号3、2区の試料番号12は珪藻化石の検出数が少なかった。それ以外の6試料は多くの珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は、4区で約70%と高かったが、それ以外は約40%前後であった。産出分類群数は、合計で31属169種類である。

・中世の堀（13-④区）

試料番号1は、水生珪藻（淡水生種から陸生珪藻を引いたもの）が優占し、その生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真＋好アルカリ性種（アルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。主な産出種は、流水不定性の*Amphora affinis* が約20%産出し、好流水性種（流水域に最もよく生育する種）の*Gyrosigma scalproides*、好流水性で中～下流性河川指標種群の*Navicula viridula*、*N. viridula var. rostellata*、流水不定性種の*Caloneis silicula*、*Cymbella silesiaca*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Cymbella naviculiformis* 等を伴う。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群、沼沢湿地付着生種群とは、水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や浅い湿地で優勢な出現の見られる種群のことである（安藤、1990）。

試料番号2は、水生珪藻が約60%と多産するが、陸生珪藻（陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある種群）も約30%産出する。主な産出種は、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、*G. aff. aquaemineralis*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Pinnularia gibba*、それに陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内、1991）の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が約10%産出する。このうち、*Gomphonema parvulum* は、中程度に汚濁した水域に多産する広域適応性種（Asai and Watanabe、1995）でもある。この他にも、*Nitzschia umbonata*、*Sellaphora pupula* 等の広域適応性種を伴う。珪藻化石の少なかった試料番号3は、*Gomphonema parvulum* 等の水生珪藻が少量産出したが、その多くは壊れたり溶解していた。

表 4　珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境										
	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	7	8	9	10	11	12	13
Nitzschia constricta var. subconstricta Grunow	Euh-Meh				1	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Nitzschia normannii Grunow	Euh-Meh				1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia sigma (Kuetz.)W.Smith	Euh-Meh			E2	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Amphora strigosa Hustedt	Meh				–	–	–	–	–	–	2	2	–	2
Gyrosigma distortum var. parkeri Harrison	Meh				–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Nitzschia hungarica Grunow	Meh			E1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia levidensis (W.Smith)Grunow	Meh				1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia levidensis var. salinarum Grunow	Meh				3	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Synedra tabulata Agardh	Meh				–	–	–	–	–	–	1	2	1	–
Thalassiosira lacustris (Grun.)Hasle	Meh				–	–	–	–	–	–	2	–	–	2
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	2	–	–	–	1
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	2	2	–	–	–	–	1	1	–	–
Navicula goeppertiana (Bleisch)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	–	3	–	–	–	1	–	–	–	–
Navicula gregaria Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula pusilla W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	5	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		1	–	–	–	–	4	2	–	–	15
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	–	–	–	–	–	1	1	1	3	1
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1	–	–	–	–	–	1	1	–	–
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	44	1	–	–	–	24	10	6	2	4
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	–	6	–	–	–	1	–	–	–	1
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1
Caloneis schumanniana (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		10	1	–	–	–	3	3	–	–	3
Caloneis silicula var. minuta (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Caloneis tenuis (Greg.)Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	1	9	6	–	22
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	1	1	2	–
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	1	–	–	–	–	2	1	2	2
Craticula halophila (Gran. ex V.Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Craticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	1	–	2	2	1
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Cymbella incerta Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	7	–	–	–	–	2	2	–	–	–
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	8	–	–	–	–	1	7	2	–	5
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	1	3	3	1	2
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	–	–	–	–	–	10	4	2	1
Cymbella tumida var. gracilis Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	–	–	–	–	–	3	4	2	1
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	3	–	–	–	–	–	6	3	–	3
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	1	1	–
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	–	–	2	–	–	1
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	3	–	–	–	–	–	2	2	–	2
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		2	–	–	–	–	5	1	1	–	1
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		–	–	–	–	–	–	–	1	1	2
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	–	1	2	–	–	3
Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	1	–	–	–	–	–	5	–	–	3
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	2	–	–
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Fragilaria construens fo. binodis (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	2	1	–	–	–
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	2	4	5	1	3
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	–	–	–	–	2	2	–	3
Gomphonema aff. aquaemineralis Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind		–	18	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh-unk	unk	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	1	1	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	10	19	3	6
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	2	8	–	–	–	1	–	–	–	–
Gomphonema minutum (Agardh)Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	30	1	–	–	1	13	9	2	4
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing)Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	2	2	1	–	–	–	1	–	–	2
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	8	–	–	–	–	2	1	–	4
Gomphonema sarcophagus Gregory	Ogh-ind	al-il	ind		–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema subclavatum (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	1	–	–	–	–	1	1	–	1
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	–	–	–	–	–	–	1	–	1
Gomphonema aff. utae Lange-B. & Reichardt	Ogh-unk	unk	unk		–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	3	1	4	1	2
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		4	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gyrosigma pseudokuetzigii Kobayasi	Ogh-unk	unk	unk		3	–	–	–	–	3	3	1	1	4
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		5	1	–	–	–	–	–	–	–	7
Gyrosigma spencerii (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	–	–	–	–	1	3	–	1	–

表4　珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境										
	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	7	8	9	10	11	12	13
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	1	–	–	2	–	5	8	6
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	–	23	–	–	–	13	2	1	1	4
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	–	3	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	1	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		4	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula mobiliensis var. minor Patrick	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	2	1	–	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	3	23	–	–	–	7	–	1	–	3
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
Navicula notanda Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		2	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Navicula oppugnata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	2	2
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	10	1	–	–	–	–	–	3	–	6
Navicula viridula var. linearis Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	–	2	3	–	–
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	7	1	–	–	–	–	6	1	–	1
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Neidium affine var. hankense (Skv.)Reim.	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		3	1	–	–	–	–	1	–	–	1
Neidium dubium (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–
Neidium tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	2	–	–	1	–
Nitzschia angustata (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	–	1	–	–	–	–	–	–	2	1
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Nitzschia sigmoidea (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Nitzschia umbonata (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	7	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	–	1	–	–	–	–	3	–	–	2
Pinnularia appendiculata (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	–	2	–	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	1	–	–	–	1	2	–	–	1
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia divergens var. elliptica (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	3	21	–	–	–	1	1	1	–	1
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		–	–	–	–	–	1	1	–	–	2
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	1	–	–	–	–	2	–	–	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia pseudogibba Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		3	3	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	3
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	8	–	–	–	–	1	–	–	1
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	–	2	3	2	4
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	–	4	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		3	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	–	–	–	–	1	2	–	1	6
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	5	4	2	4	–
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	–	3	–	1	1
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	1	1	–	–	2
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	5	9	–	–	–	–	1	–	–	–
Sellaphora pupula fo. capitata (Skvortzow & Mayer)	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	1	–	–	–	1
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Stauroneis legumen (Ehr.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	–	–	–	–	–	–	1	–	3
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	6	1	2	1	–
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	–	1	1	–	1
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					4	0	0	0	0	0	1	0	0	0
汽水生種					5	0	0	0	0	0	5	5	1	4
淡水～汽水生種					10	8	0	0	0	9	4	1	0	17
淡水生種					196	211	3	0	0	111	160	114	57	181
珪藻化石総数					215	219	3	0	0	120	170	120	58	202

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Euh-Meh	：海水生種－汽水生種	al-bi	：真アルカリ性種	l-bi	：真止水性種
Meh	：汽水生種	al-il	：好アルカリ性種	l-ph	：好止水性種
Ogh-Meh	：淡水－汽水生種	ind	：pH不定性種	ind	：流水不定性種
Ogh-hil	：貧塩好塩性種	ac-il	：好酸性種	r-ph	：好流水性種
Ogh-ind	：貧塩不定性種	ac-bi	：真酸性種	r-bi	：真流水性種
Ogh-hob	：貧塩嫌塩性種	unk	：pH不明種	unk	：流水不明種
Ogh-unk	：貧塩不明種				

環境指標種群

E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)

K:中～下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

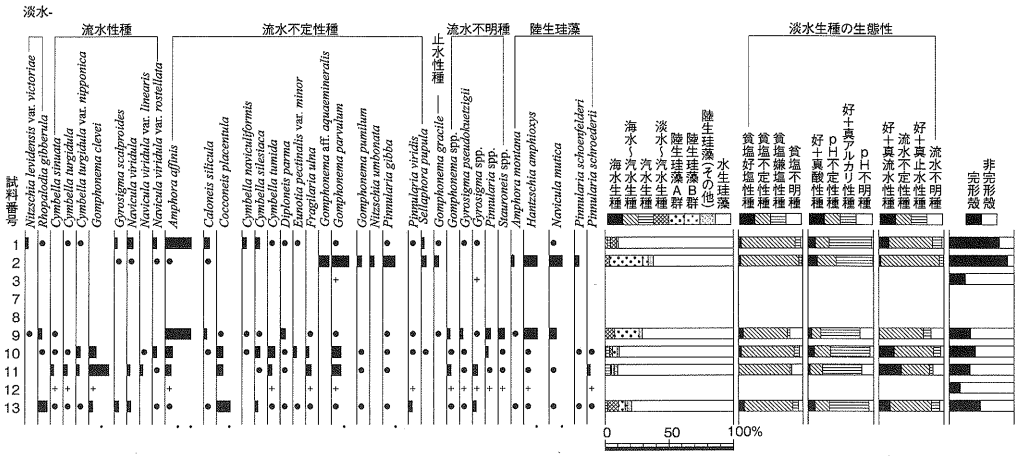


図２　主要珪藻化石群集の属位分布
海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は２％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

・旧河川（12-⑧区）

試料番号９は、水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。産出種の特徴は、流水不定性の*Amphora affinis*が約20％産出し、流水不定性種の*Caloneis silicula*、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が約10％産出する。

・堰状遺構周辺（13-②区）

珪藻化石が産出した３試料（試料番号10、試料番号11、試料番号13）は、生態性や珪藻化石群集が近似している。貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、流水不定性種と真＋好流水性種が優占あるいは多産する。とくに多産する種類がみられないのが特徴で、好流水性の*Gomphonema clevei*、*Cymbella turgidula var. nipponica*、中～下流性河川指標種群の*Cymbella sinuata*、*C. turgidula*、*Navicula viridula var. rostellata*、流水不定性の*Amphora affinis*、*Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*、*Gomphonema parvulum*等が産出する。珪藻化石の少なかった試料番号12は、生態性や珪藻化石群集が前後の試料と近似する。

（３）花粉分析

結果を表５・図３に示す。縄文時代晩期～弥生時代前期の河川等の堆積物と、中世の堀内埋積物とでは組成が異なる。

縄文時代晩期～弥生時代前期の堆積物は、試料番号５で花粉化石の検出が少なかった他は、比較的多く産出する。木本花粉と草本花粉との比率は、ほぼ同等か、草本花粉の方がやや多い程度である。木本花粉では、コナラ属アカガシ亜属の割合が高く、マキ属・モミ属・ツガ属・マツ属・シイノキ属などが検出される。一方草本花粉では、イネ科が多くみられる。

中世の堆積物は、試料番号２で木本類の割合が高いが、他の２試料は草本類の割合も比較的高い。木本花粉はいずれもマツ属の割合が高いが、試料番号２ではやや低く、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属、ウコギ科が高くなっている。草本花粉は、試料番号１・３でイネ科の割合が高くなっている。

（４）植物珪酸体分析

表5　花粉分析結果

種類 ＼ 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
マキ属	–	–	1	8	–	13	13	20	34	3
モミ属	2	1	1	8	–	4	16	20	5	6
ツガ属	13	3	16	33	1	26	16	35	13	8
マツ属単維管束亜属	1	–	2	–	–	–	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	124	114	135	10	–	28	13	3	10	11
マツ属（不明）	84	43	88	39	1	24	8	16	15	9
スギ属	2	3	1	10	–	13	13	14	5	7
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	–	–	–	–	–	–	5	1	–	6
ヤナギ属	–	6	36	–	–	–	11	3	5	2
ヤマモモ属	13	4	12	8	–	7	1	4	10	8
サワグルミ属	2	–	1	1	–	–	–	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	3	–	1	–	–	5	8	1	–	–
カバノキ属	2	1	2	–	–	–	1	–	1	1
ハンノキ属	1	1	1	–	–	1	–	–	1	–
ブナ属	1	–	1	–	–	1	–	1	–	1
コナラ属コナラ亜属	6	5	18	18	–	5	8	19	8	12
コナラ属アカガシ亜属	22	9	13	87	1	60	58	53	59	97
クリ属	3	2	1	3	–	8	11	4	5	3
シイノキ属	3	1	2	9	–	33	28	14	31	24
ニレ属－ケヤキ属	1	195	2	1	–	–	3	1	3	2
エノキ属－ムクノキ属	6	107	5	–	–	–	5	3	5	1
キハダ属	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
センダン属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
アカメガシワ属	–	4	–	–	–	–	–	–	–	–
ウルシ属	–	6	1	–	–	–	–	–	–	–
モチノキ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	2
カエデ属	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ブドウ属	1	1	–	–	–	–	–	–	–	
ツタ属	2	–	–	–	–	1	–	1	–	1
ノブドウ属	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
グミ属	6	1	–	–	–	–	–	–	–	1
ウコギ科	–	76	–	–	–	–	–	–	–	3
アオキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ミズキ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ツツジ科	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
カキ属	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–
ハイノキ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
トネリコ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	13
ニワトコ属	–	–	–	–	–	–	6	–	–	–
ガマズミ属	–	–	4	–	–	1	9	1	–	–
スイカズラ属	4	1	–	–	–	1	1	–	–	1
草本花粉										
ガマ属	2	1	–	–	–	1	–	–	1	2
ミクリ属	3	–	–	–	–	–	–	–	–	5
ヒルムシロ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
サジオモダカ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1
オモダカ属	22	–	–	–	–	7	1	–	–	–
ミズオオバコ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
イネ科	302	31	193	111	5	131	487	218	93	90
カヤツリグサ科	54	2	23	54	–	48	16	22	25	26
イボクサ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ミズアオイ属	26	–	2	3	–	9	–	3	6	13
クワ科	1	7	1	–	–	2	5	–	1	1
ギシギシ属	–	–	1	–	–	–	–	–	1	2
サナエタデ節－ウナギツカミ節	7	3	1	–	–	3	3	4	–	–
タデ属	1	1	1	–	–	–	3	3	4	1
ソバ属	2	2	1	–	–	–	–	–	–	–
アカザ科－ヒユ科	3	2	4	–	–	1	–	–	–	–
ナデシコ科	1	1	4	12	1	1	3	–	1	1
カラマツソウ属	–	–	–	–	–	–	3	–	1	1
キンポウゲ属	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–
キンポウゲ科	1	1	1	1	–	1	–	–	4	–
アブラナ科	–	2	–	–	–	–	–	–	1	–
バラ科	2	1	1	–	–	1	3	4	–	6
マメ科	–	–	–	–	–	–	–	–	1	2
キカシグサ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ヒシ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アカバナ属－ミズユキノシタ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
アカバナ科	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アリノトウグサ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
セリ科	3	1	3	13	1	3	1	–	1	13
ヒルガオ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ネナシカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	4	1	–
シソ科	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ヨモギ属	19	7	5	8	2	27	25	3	8	12
オナモミ属	–	–	1	–	–	1	3	–	–	–
キク亜科	3	2	2	16	4	4	1	–	1	1
タンポポ亜科	2	1	3	8	–	1	1	1	1	2
不明花粉	18	9	9	12	2	16	21	19	25	10
シダ類胞子										
ヒカゲノカズラ属	1	–	–	5	–	1	–	1	–	–
イノモトソウ属	8	–	7	161	8	9	5	13	8	2
ミズニラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
他のシダ類胞子	66	84	49	289	9	33	66	75	61	18
合計										
木本花粉	306	587	347	237	3	232	235	214	211	222
草本花粉	460	65	251	226	13	242	556	263	151	180
不明花粉	18	9	9	12	2	16	21	19	25	10
シダ類胞子	75	84	56	455	17	43	71	89	69	22
総計（不明を除く）	841	736	654	918	33	517	862	566	431	424

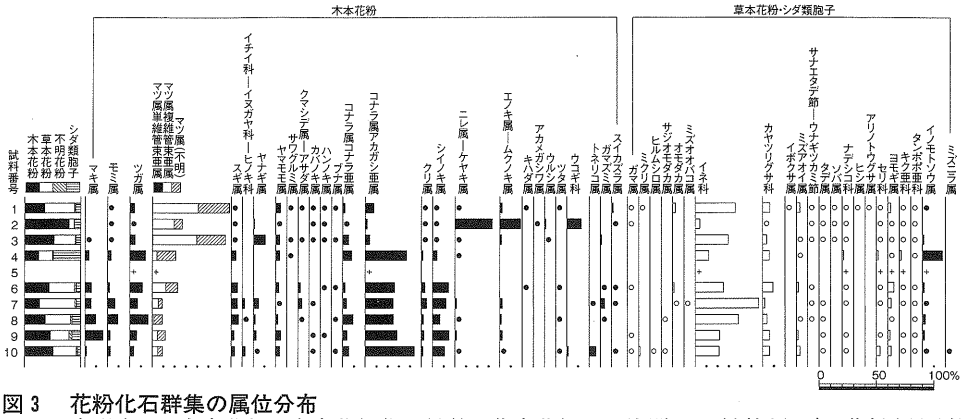


図3　花粉化石群集の属位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

結果を表6、図4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。植物珪酸体組成は全試料とも類似し、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が認められる。また、栽培植物のイネ属も検出される。また稲籾殻に形成されるイネ属穎珪酸体もわずかに認められ、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン、1981）も検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈する。なお試料番号7・8では、ネザサ節を含むタケ亜科の出現率が他と比べて多くなっている。

（5）樹種同定

樹種同定結果を表7に示す。試料No.6－5は、散孔材の道管配列を有する広葉樹であるが、全体的に収縮しており、穿孔板や壁孔の形態等、樹種の同定に必要な組織の観察が十分にできなかったため、種類の同定には至らなかった。その他の木材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹3種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属・クリ）に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外に向かって緩やかに管径を減じて、年輪界に向かって径を漸減させる。しかし、晩材部の多くを欠くため、晩材部における道管配列の詳細は不明。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。以上の特徴から、コナラ亜属のクヌギ節またはコナラ節と考えられる。両者は、晩材部におけ

表 6　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	7	8	9	10	11	12	13
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	7	3	10	15	13	1	8
タケ亜科ネザサ節	46	29	24	26	20	28	37
タケ亜科	181	237	72	72	138	86	100
ヨシ属	3	10	24	35	50	19	49
ウシクサ族ススキ属	1	1	16	8	6	7	31
イチゴツナギ亜科	4	-	2	4	3	3	6
不明キビ型	15	16	44	20	28	31	101
不明ヒゲシバ型	8	13	11	17	29	19	27
不明ダンチク型	6	7	23	10	23	21	26
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	14	5	37	18	10	15	17
タケ亜科ネザサ節	27	20	54	70	29	34	20
タケ亜科	40	85	56	54	35	45	39
ヨシ属	7	1	18	25	9	13	23
ウシクサ族	9	7	12	9	5	8	6
不明	24	19	43	21	22	20	14
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	271	316	226	207	310	215	385
イネ科葉身機動細胞珪酸体	121	137	220	197	110	135	119
総計	392	453	446	404	420	350	504
組織片							
イネ属穎珪酸体	-	3	-	-	-	1	-
イネ属短細胞列	-	-	2	-	-	-	-
タケ亜科短細胞列	-	-	1	-	-	-	-
ウシクサ族機動細胞列	-	-	1	-	-	-	-
樹木起源							
第Ⅲグループ	-	5	4	6	2	2	-
第Ⅳグループ	-	5	5	16	7	8	-

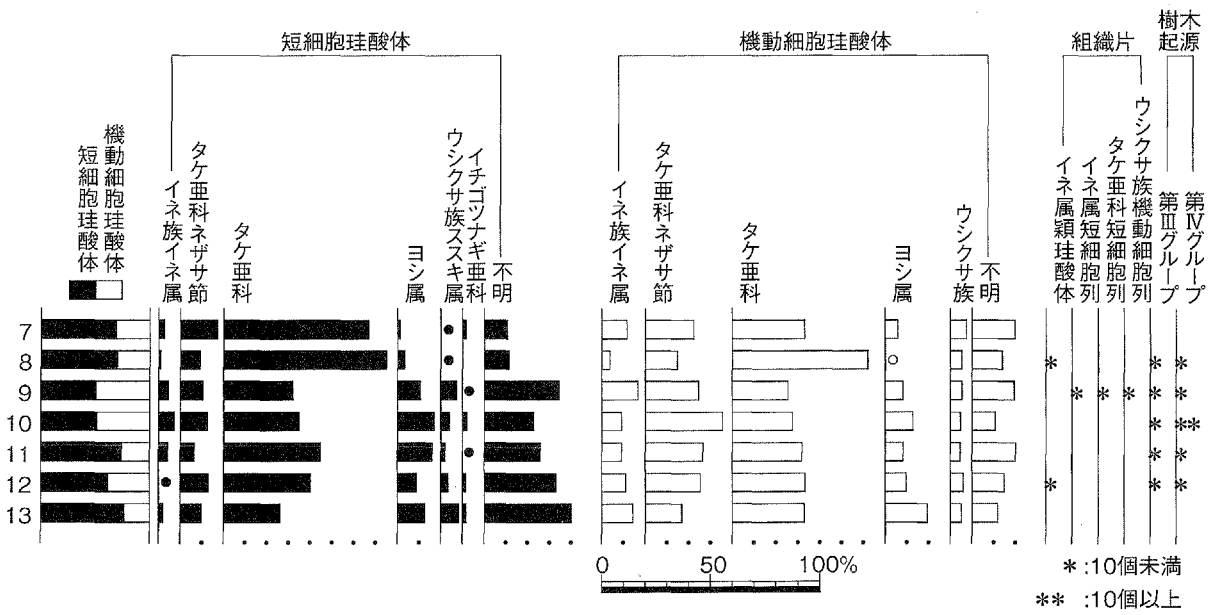


図 4　植物珪酸体群集と珪化組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の種類を示す。また、珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を＊で示す。

る道管配列の違いで区別することが可能であるが、本試料では晩材部の道管配列が観察できなかったため、区別することができなかった。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

試料は収縮している。環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

表７　樹種同定結果

地　区	遺構名	層　位	時　期	番　号	枝番	樹　種
10-②区	旧河川3	堰状遺構構築部材	縄文時代晩期～弥生時代前期	No．6	6-1	コナラ属コナラ亜属
					6-2	クリ
					6-3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
					6-4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
					6-5	広葉樹（散孔材）
13-④区	外堀1～3合流部	橋脚材1	室町時代	No.14		マツ属複維管束亜属
		橋脚材2	室町時代	No.15		マツ属複維管束亜属
		土留材1	室町時代	No.16		マツ属複維管束亜属
		土留材2	室町時代	No.17		マツ属複維管束亜属

（６）種実遺体分析

結果を表８に示す。木本10種類の種実が同定された他、炭化材、不明植物（部位・種類ともに不明である植物片を示す）、岩片が認められた。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴等を記す。

〈木本〉

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

球果が同定された。黒褐色、木質で円錐状広卵形体。長さ50mm～60mm、径20～35mm程度。長楕円状で矩形の種鱗が、覆瓦状、螺旋状に密着する。種鱗の外部露出部分は、不規則な四角形または五角形で肥厚し、横の稜線とその中央部に短く突起する臍点がみられる。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* （Maxim.） Kitamura）

クルミ科クルミ属

核の半分が同定された。灰褐色、完形ならば広卵体で先端部分がやや尖る。径30mm程度。１本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れている。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。なお、核皮は硬く、表面はオニグルミに比べ平滑で、正中線上に浅い凹部がある個体については、オニグルミの変種であるヒメグルミ（var. *cordiformis* （Makino） Kitamura）とした。

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）　　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

炭化した子葉が同定された。炭化子葉は黒色、完形個体が多く、楕円体で頂部は尖らない。長さ10～15mm、径5mm程度。２枚の子葉が極端に不揃いである個体が多く、子葉の合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には１本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。

岡本（1979）は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異

表8　種実同定結果

試料名				マツ属複維管束亜属	オニグルミ	ヒメグルミ	イチイガシ	アカガシ亜属	コナラ属		モモ			センダン	トチノキ	ミズキ	炭化材	不明植物	岩片
				球果	核	核	子葉	殻斗	果実	子葉	核			核	果実	核			
					半分	半分	炭化			炭化	完形	半分	破片		破片				
地区		遺構	層位																
10-②区	E4v22	遺構8	第1層	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
10-②区	F4e22	遺構8	最上層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
10-③区	G4b23	旧河川	第1層	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
11-①S区	G5p16	堀2・ニ	4層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
11-①S区	G5t16	堀1・ハ	3層	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
11-①S区	G5q14	堀2・ニ	1層の中層	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
12-⑧区	H5k5	旧河川3	第7層	−	1	1	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G7f3	住居2007　い	上層	−	−	−	1	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G7f3	住居2007　い	上層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
12-④区	G7f3	住居2007　い	上層	−	−	−	3	−	−	8	−	−	−	−	−	−	1	−	−
12-④区	G7f3	住居2007　い	上層	−	−	−	−	−	−	14	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G6j11	住居2007　に	上層	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G6j11	住居2007　い	下層	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G6j11	住居2007　土坑-1		−	−	−	3	−	−	5	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G6j11	住居2682　土坑-1		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区		竪穴住居		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
12-④区	G7x2	トレンチ	第5-bcより下	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
12-⑧区	H5j2	旧河川2a	第7層小坑群周辺	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
13-⑨区	H5j6	旧河川3	8c層か？（下層）粗砂礫＋粘土	−	−	−	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
13-⑨区	H5f3	旧河川2a	粗砂礫　下層	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
13-⑨区	H5g5	旧河川2a（2b？）	暗灰色粘土（木屑）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−

形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれていること、そして中軸の圧痕が確認できることなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。試料には、このようなイチイガシの特異的特徴を典型的に示している個体が認められたため、イチイガシに同定することができた。

・アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　　ブナ科コナラ属

殻斗が同定された。果実は卵形。長さ15～20mm、径10～15mm程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋が円柱状または円錐台状に突出する。殻斗は灰褐色、椀状で輪状紋をもつ。径14mm、高さ9mm程度。

・コナラ属（*Quercus*）　炭化した子葉破片と果実破片が同定された。種まで同定できない破片をコナラ属にとどめた。子葉の合わせ目に沿って半分に割れている個体が多い。頂部は尖らず、上述のイチイガシの形態に類似する。イチイガシには異形性を表現しない場合もある（岡本、1979）ことから、コナラ属とした破片の大半はイチイガシであろうと思われる。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　　バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形、半分、破片が同定された。茶褐色、広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ18～25mm、幅17～19mm、厚さ13～15mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れた個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が磨滅した個体もみられる。

・センダン（*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　　センダン科センダン属

核が検出された。淡褐色、楕円体で上面観星形。長さ11mm、径８mm程度。表面には浅く広い５～６個の縦溝と縦隆条が交互に配列する。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　　トチノキ科トチノキ属

果実の破片が同定された。灰褐色、完形ならば歪な倒卵球形。径25mm程度。基部と頂部を結ぶ３本の溝が走り、溝に沿って３裂した１片。果皮はスポンジ状で弾力があり、厚さ４mm程度。表面には皮目状の斑点がある。

・ミズキ（*Cornus controversa* Hemsley）　　ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）が同定された。黒褐色、偏球形で径４mm程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

４．考察

４－１．旧河道関連

（１）堆積環境

古墳時代後期の旧流路である試料番号９は、真＋好流水性種はほとんど産出しない。このことから、流れはそれほどなく、淀んだ水域であったと考えられる。また、西側の微高地から廃棄されたとみられる須恵器や木屑が多量に出土していることからみて、埋積に関しては廃棄物などによって埋められた可能性が高い。陸生珪藻が比較的多いことから、埋められる際には表土など乾いた場所の土壌が使われたとみられる。

縄文時代～弥生時代前期の井堰付近の試料４点は、珪藻化石群集が共に近似しており、堆積環境もほぼ同様であったと考えられる。これら４試料は、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を含み、止水環境に生育する種類はほとんど産出しない。また、特定の種類が多産しないという特徴も持っている。このような群集は、集水域から様々な環境からもたらされた珪藻化石によって構成され、混合群集（堀内ほか、1996）と呼ばれる。この群集は、氾濫源などの沖積低地に特徴的にみられることから、当時の水域環境は旧南部川の影響を強く受けていたものと考えられる。

（２）古植生

紀伊半島南部沿岸地域は、山地が沿岸部にまで迫っているため、沖積低地の発達が悪い。そのため、花粉分析等を行えるような堆積物を採取できる場所が少なく、新宮市浮島（松下ほか、1988）や、太地町の沖積低地（此松・岡橋、2001）で行われているにすぎない。これらの組成をみると、シイノキ属の花粉化石が高率に検出されるのが特徴で、アカガシ亜属など暖温帯林を構成する種類を伴っているのが特徴である。このことから紀伊半島南部の海岸植生は、シイ－カシ林を中心とした暖温帯林が発達していたとされ、検出されたアカガシ亜属はウバメガシに由来する可能性が高いとしている（此松・岡橋、2001）。今回の組成をみると、シイノキ属も検出されているがアカガシ亜属の方が高率である。また種実遺体の結果ではイチイガシが検出されており、遺跡付近に生育していたカシ類はイチイガシであったと推測される。このことから縄文時代～弥生時代の周辺植生は、イチイガシなどのカシ

類を中心とする森林であったと考えられ、シイ類やヤマモモ・センダンなども生育していたと考えられる。本遺跡は先述した調査地点よりも内陸に位置し、他の地域と比較して沖積低地の発達も良い。このような土地的要因の違いが、新宮市や太地町の沿岸部と異なる森林植生が発達した原因の一つと考えられる。またモミ属・ツガ属・マキ属などの花粉化石は、温帯針葉樹林に由来するとみられ、内陸部を中心に分布していたものと推定される。一方種実や木材では、オニグルミ・トチノキ・クリ・ナラ類など落葉樹が多くみられる。これらは林縁などによくみられる種類であることから、遺跡と後背山地との境界付近に生育していたことが推定される。

植物珪酸体の結果では、樹木起源の珪酸体が多産する。このうちIII型はブナ科、タイザンボク、イスノキなどに形成され、IV型は、モクレン属・シイノキ属など多くの種類の葉に形成されると考えられている(近藤、ピアスン、1981)。西日本地域では、土壌中から樹木起源の植物珪酸体が多産することがしばしばあるが（杉山・早田、1994)、今回もこの一例であるといえる。なお、照葉樹林の代表的な樹木としてタブノキやクスノキなどクスノキ科の植物があるが、クスノキ科の花粉化石は膜が弱いため化石としてはほとんど残らないため、花粉化石からクスノキ科が生育していたかどうかを推測することは難しい。樹木珪酸体はクスノキ科の葉にも作られることから(杉山・早田、1994；杉山、2000など)、検出された樹木起源の珪酸体は、カシやシイのほかクスノキ科に由来する可能性もある。

草本類の割合が全体的に高く、その中でもイネ科が多く検出される。イネ科の植物珪酸体組成をみると、ネザサ節を含むタケ亜科の割合が高い。ネザサ節などのタケ亜科は、植物珪酸体の生産量が多いため(杉山、2000など)、周辺植生に比べて植物珪酸体組成が高くなる。植物体の乾燥重量をもとに比較すると、ネザサ節の機動細胞珪酸体は、ヨシ属の８倍以上になると考えられている（杉山、2000など)。このことからネザサ節を含むタケ亜科は、遺跡周辺の山野に生育していたと考えられるが、植物珪酸体組成が示すほど多くはなかったと思われる。また、ヨシ属は低地を中心に生育していたと思われる。花粉化石をみても、ガマ属・オモダカ属などの水生植物が検出されていることから、これらも河川沿いなどの沖積低地を中心に生育していたものと考えられる。このように低地を中心に草地が存在していたと考えられるが、後述するように一部は水田などの耕地に生育していた可能性がある。

（３）植物利用

植物珪酸体をみると、いずれの試料からもイネ属が検出され機動細胞珪酸体で10%、短細胞珪酸体で数%程度である。これらは当時行われていた稲作に由来すると思われる。遺跡からは弥生時代前期頃とみられる堰状遺構が検出されているが、堰状遺構を構成する堆積物からもイネ属の植物珪酸体が検出されることから考えて、堰状遺構を含む河道が水田に関わる水利施設などに接続していた可能性もある。

検出された種実のうち、クルミ・イチイガシ・モモ・トチノキが食用可能である。このうち、モモは栽培のために渡来した種類で、弥生時代以降多くの遺跡で検出例がある(粉川、1988など)。イチイガシは、カシ類の中で唯一生食可能な種類である。収量が多く貯蔵が利くことから、生食可能なクルミとともに古くから利用されていた。トチノキの「あく抜き」に複雑な工程を要するが、この技術は

縄文時代中期頃に確立したとされ(渡辺、1984)、その後のトチノキを利用されたと思われる痕跡が多くの遺跡で見つかっている。今回検出された種実は、いずれも破損・摩耗が著しいことから、食用残渣をその場に投棄したものではなく、流されて堆積したものと思われる。これらは遺跡周辺に生育していたと考えられ、山野からの採取や栽培などによって、当時利用されていた可能性は高いと思われる。

堰状遺構構築部材には、種類不明の散孔材も含めて4種類が確認された。このうちコナラ亜属については、クヌギ節の可能性もあるため、これを除くと最低でも3種類が利用されていたことが推定される。検出された種類はいずれも二次林の構成種であり、林縁などによくみられる。花粉化石でも低率ではあるが検出されていることから考えると、ナラ類やクリは、遺跡と森林との林縁部に生育していたことが予想される。種類にばらつきがみられることからしても、周囲で容易に入手可能な木材を利用して、堰状遺構が構築されていたことが推定される。

4-2．高田土居城跡関連

（1）堆積環境

高田土居城跡外堀（堀2・3）は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を伴うことで特徴付けられた。このことから、堀には流れがあったことが推測され、中～下流性河川指標種群を含むことから、旧古川など、沖積低地を流れる河川水の影響を強く受けていたことが伺われる。外堀は、一部旧古川の河川を利用して構築されていることからも、調和的な結果である。一方、同じく室町時代に比定される内堀は、真＋好流水性種が非常に少なく、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が優占し、陸生珪藻A群も多産する。また、伴出種の中には汚濁に対して中程度に汚れた中腐水域に耐性のある種が多かった。このような状況から、流水の影響を受けるような状況ではなく、富栄養の淀んだ水域であったと思われる。また水深は浅く（1m以下？）、乾燥した土壌（表土など）が混入することもあったと考えられる。このことから内堀は河川からの導水はなく、地下水や雨水などが溜まったような状況であったと思われる。内堀（堀6）は、堀2・3が構築される以前に存在したとされ、城の拡張や防御の充実のために、堀2・3へと作り替えられたと考えられている。堀も「水たまり」的な窪みから、河川からの導水によるものへと変化しており、防御的な性格をより強くしたと考えられる。

（2）古植生

縄文時代晩期～弥生時代の花粉化石群集と比較して、大きく変化した点はマツ属の増加である。マツ属は、森林破壊によって生じた空間に先駆的に進入して二次林を作ることが多いことから、周辺の開発が進むとマツ属花粉も増加すると考えられる。また痩せ地で育ち成長も早く、有用材として用途が広いことなどから、山野に植林される。さらに中世の寺院や武士の館跡では、マツを植えたという記録が多数残されている(飛田、2002)。特に種実遺体でマツ属の球果が検出されていることから、近くにマツが存在していたと推測され、マツは、山野に二次林や植林として存在しただけでなく、城館内にも植えられていたと推測される。なお、内堀に相当する試料番号2では、ニレ属－ケヤキ属、エ

ノキ属－ムクノキ属、ウコギ科などの木本類が多く検出される。これらは、河川沿いや林縁など明るい林地に生育することから、周辺に生育していたものに由来すると思われる。草本類に関しては、先述した旧河道と類似することから、低地を中心に草地が存在し、一部は水田などの耕地であった可能性がある。

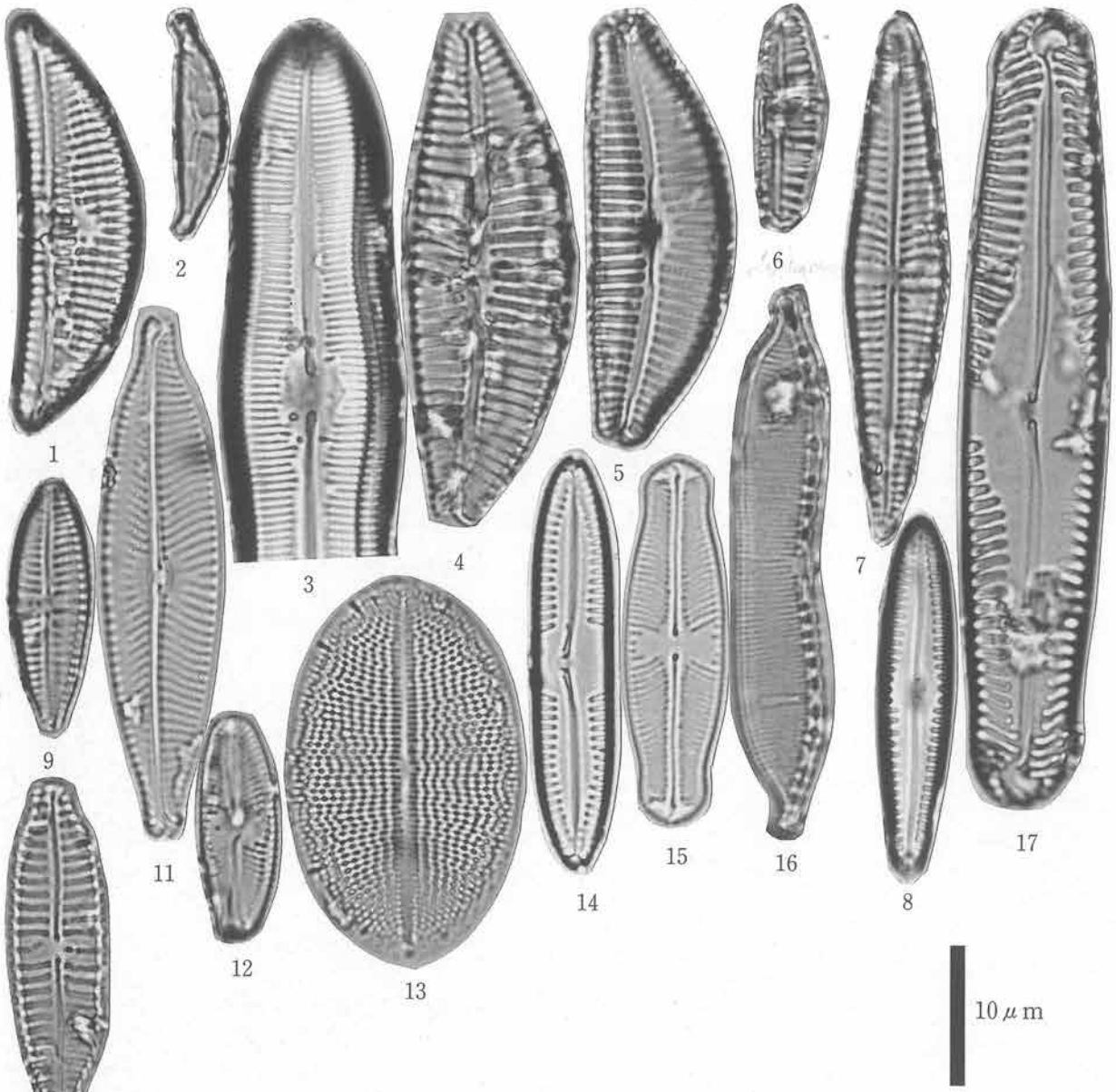
（3）植物利用

堀から検出された栽培植物は、イネ（植物珪酸体）・ソバ（花粉化石）・モモ（種実）がある。これらは、周辺での栽培・利用が推測される。一方、高田士居城跡外堀から出土した橋脚と土留材は全て複維管束亜属（ニヨウマツ類）であった。本州に生育する複維管束亜属にはアカマツとクロマツの2種があり、いずれもほぼ同様の材質を有する。報告では生育状況によって材質の変動が大きいが、気乾比重が0.42～0.62で針葉樹としては重硬な部類に入り、一般には強靱な木材といえる（平井、1980）。また松脂を多く含み心材の保存性は中庸であるが、水中にある場合には長く持つとされる。このような材質から建築・土木材としては適材であり、選択的に橋脚や土留に用いた可能性がある。また花粉分析の結果から、周辺でマツ林が増加したと考えられていることより、当時容易に入手可能な木材であったと推測される。

引用文献

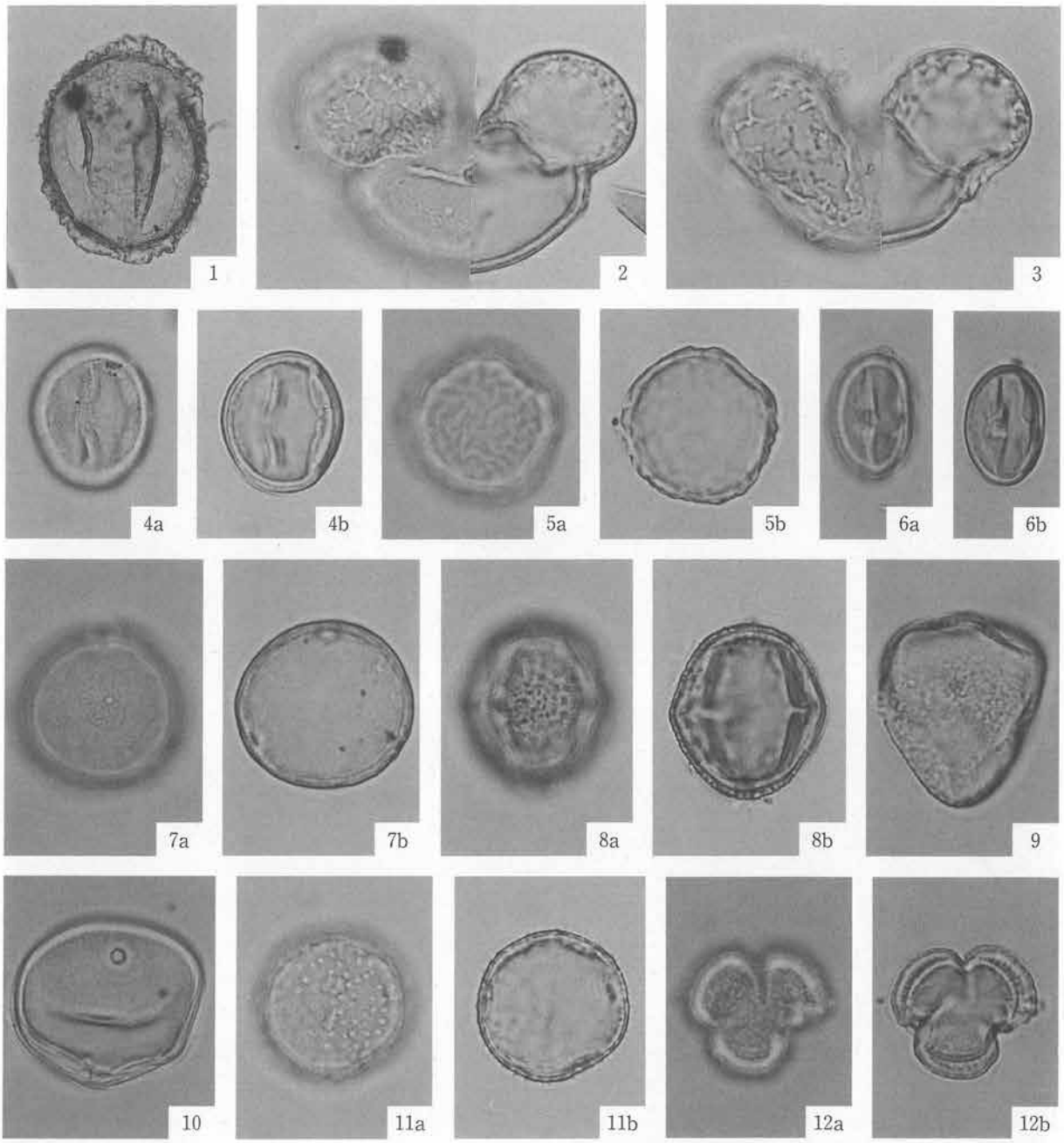
平井信二（1980）木の事典　第7巻．かなえ書房．
堀内誠示・高橋敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について．
—混合群集の認定と堆積環境の解釈—日本文化財科学会、第13回大会研究発表要旨集、p.62-63.
石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑、p.328、石川茂雄図鑑刊行委員会．
此松昌彦・岡橋久世（2001）和歌山県太地町南西縁における完新世の古植生変遷．日本地質学会
第108年学術大会講演要旨、p.312、日本地質学会．
近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉の珪酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物珪酸体について．帯広畜産大学研究報告、12、p.217-229.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用．第四紀研究、25、p.31-64.
粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．「弥生文化の研究2　生業」、金関　恕・佐原　真編、p.112-115,雄山閣．
松下まり子・前田保夫・松本英二・松島義章（1988）新宮（紀伊半島）および室戸岬の完新世植生史
—とくにシイ林の成立について—、日本生態学雑誌、38、p.1-8.
中村俊夫・福本浩士・丹生越子・小田寛貴・池田晃子・南　雅代・太田友子・光谷拓実・今村峯雄・
坂本　稔（2001）名大タンデトロン加速器質量分析計を用いた樹木年輪試料と^{14}Cウイグルマッチングの試み．
日本文化財科学界第18回大会研究発表要旨集、p.64-65.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑、p.642、東北大学出版会．
岡本素治（1979）遺跡から出土するイチイガシ．大阪市立自然史博物館業績、第230号、p.31-39.
杉山真二・早田　勉（1994）植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第2報）－九州南部の台地上における
照葉樹林の分布拡大の様相－日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集、p.53-54.
杉山真二（2000）植物珪酸体．「考古学と植物学」、p.189-213、同成社．
飛田範夫（2002）日本庭園の植栽史．P.435、京都大学学術出版会．
渡辺　誠（1984）増補　縄文時代の植物食．P.247、雄山閣．

図版1　珪藻化石



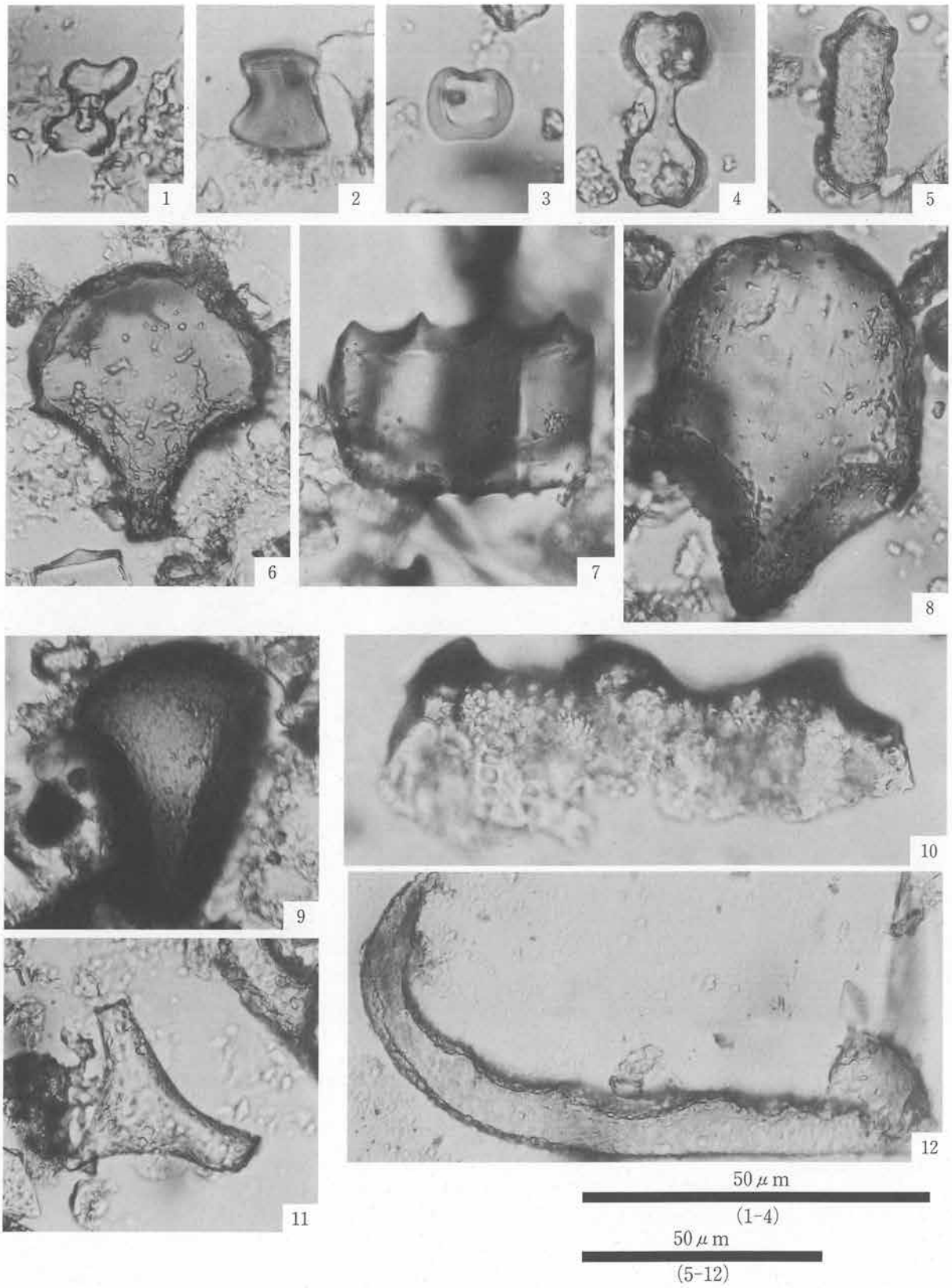
1. *Amphora affinis* Kuetzing (No. 1)
2. *Amphora montana* Krasske (No. 2)
3. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve (No. 1)
4. *Cymbella turgidula* Grunow (No.10)
5. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (No.10)
6. *Cymbella sinuata* Gregory (No.10)
7. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (No. 2)
8. *Gomphonema clevei* Fricke (No.10)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (No. 2)
10. *Gomphonema angustatum* (Kuetz.) Rabenhorst (No.10)
11. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (No. 1)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (No. 2)
13. *Cocconeis placentula* (Ehr.) Cleve (No.10)
14. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (No.10)
15. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (No. 1)
16. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (No. 2)
17. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (No. 2)
18. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller (No.10)

図版 2　花粉化石



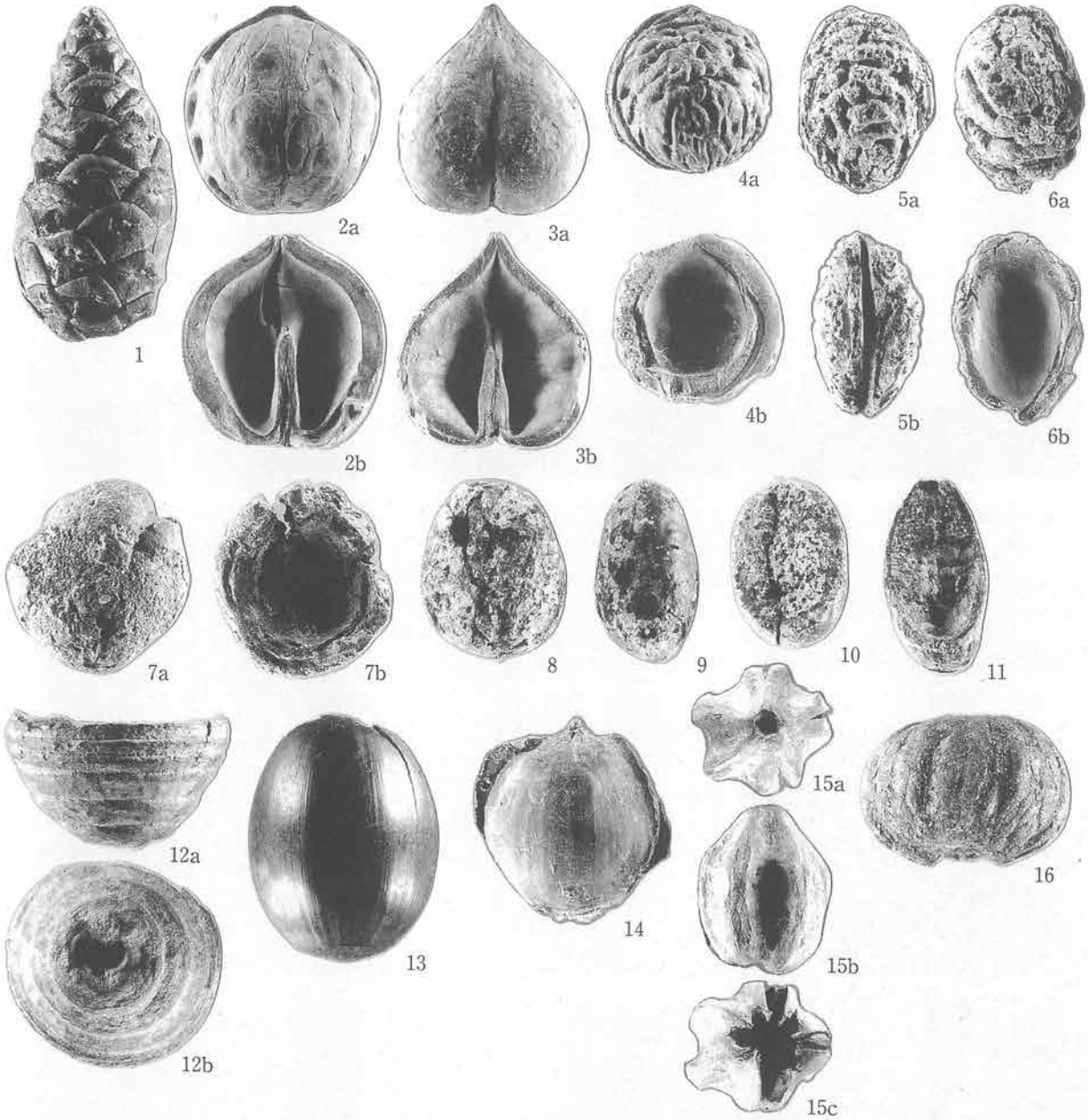
1. ツガ属(No.10)
2. マキ属(No.10)
3. マツ属(No.2)
4. コナラ属アカガシ亜属(No.1)
5. ニレ属－ケヤキ属(No.2)
6. シイノキ族(No.10)
7. エノキ属－ムクノキ属(No.2)
8. ウコギ科(No.2)
9. カヤツリグサ科(No.1)
10. イネ科(No.10)
11. オモダカ属(No.1)
12. ヨモギ属(No.10)

図版 3　植物珪酸体



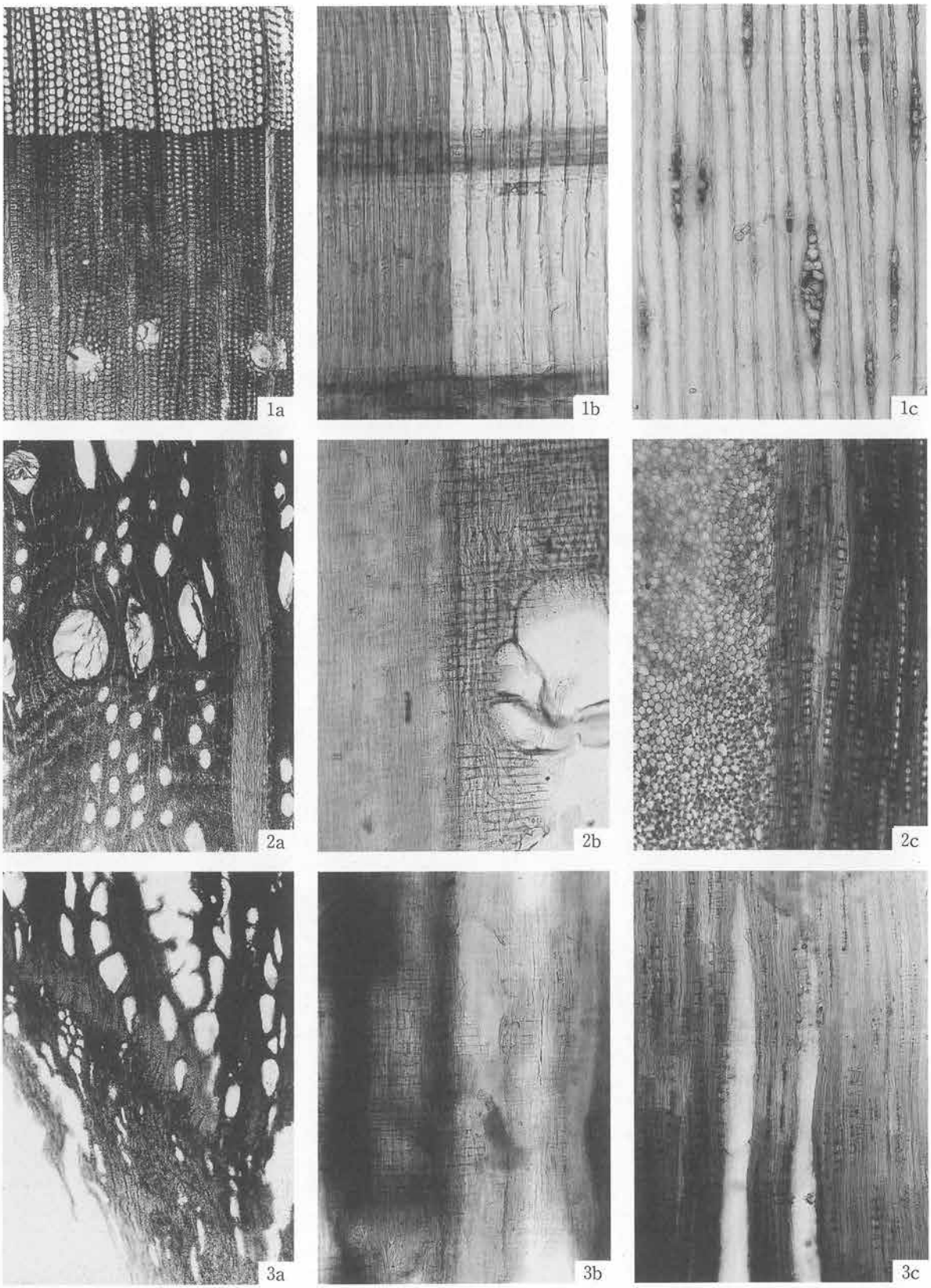
1. イネ属短細胞珪酸体(No.10)
2. ネザサ節短細胞珪酸体(No.8)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(No.10)
4. ススキ属短細胞珪酸体(No.9)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(No.10)
6. イネ属機動細胞珪酸体(No.9)
7. ネザサ節機動細胞珪酸体(No.9)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体(No.9)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(No.10)
10. イネ属穎珪酸体(No.8)
11. 樹木起源第Ⅲグループ(No.8)
12. 樹木起源第Ⅳグループ(No.8)

図版 4　種実遺体



1. マツ属複維管束亜属 球果(304)
2. オニグルミ 核(78)
3. ヒメグルミ 核(134)
4. モモ 核(17)
5. モモ 核(城88)
6. モモ 核(城88)
7. トチノキ 果実(70)
8. イチイガシ 子葉(3130)
9. イチイガシ 子葉(3130)
10. イチイガシ 子葉(3127③)
11. イチイガシ 子葉(3127③)
12. アカガシ亜属 殻斗(53)
13. コナラ属 果実(53)
14. コナラ属 果実(134)
15. センダン 核(303)
16. ミズキ 核(1213)

図版 5　木材



1. マツ属複維管束亜属(No.17)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(No.6-3)
3. クリ(No.6-2)
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm:a
200 μm:b,c

報告書抄録

ふりがな	とくぞうちくいせき
書名	徳蔵地区遺跡
副書名	近畿自動車道松原那智勝浦線（御坊～南部）建設に伴う発掘調査報告書
編著者名	渋谷　高秀・土井　孝之・佐伯　和也・黒石　哲夫・立岡　和人
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8268　和歌山県和歌山市湊571-1　　TEL 073-433-3843
発行年月日	西暦2005年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
徳蔵地区遺跡 高田土居城跡	和歌山県 日高郡 みなべ町 気佐藤・ 徳蔵	303917	54 44	33度 46分 29秒	第1次確認調査 19960123～19960321 第2次確認調査 19971030～19980307 第1次調査 19980131～19980331 第2次調査 19980615～19990331 第3次調査 19990401～20000331 第4次調査 20000403～20010331 第5次調査 20010403～20020329	234 300 1700 16081 12711 13148 13167	近畿自動車道松原那智勝浦線（御坊～南部）建設
				東経 °′″			
				135度 19分 45秒			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳蔵地区遺跡	集落	縄文時代 （中期）	竪穴住居 埋甕 集石遺構 土坑	縄文土器 （船元式Ⅰ～Ⅳ） 礫石器 二上山産サヌカイト石器	微高地上に営まれた縄文時代の墓域と居住域を検出した。
		縄文時代 （後期）	竪穴住居 埋甕	金山産サヌカイト石器 縄文土器	
		縄文時代 （晩期）	旧河川	（北白川上層式） 長原式併行期	
		弥生時代 （前期）	旧河川 竪穴住居	石鏃・敲石・台石・磨石 弥生土器（前期） 木器	水流を変える為旧河川に構築された堰状遺構を検出した。
		古墳時代	竪穴住居 旧河川	須恵器・土師器	
		中世 （鎌倉～室町）	水田址		
高田土居城	城跡	室町時代	堀・橋脚 土留め材 掘立柱建物 井戸・区画溝	備前焼・常滑焼・中国製（青磁・白磁・染付）・瀬戸美濃陶器・山茶碗・東播系土器・土師器皿・瓦器椀・瓦器皿・溶解炉	高田土居城は複郭の城で今回北外郭部分を調査した。三重の外堀で囲まれている。

徳蔵地区遺跡

近畿自動車道松原那智勝浦線(御坊～南部)建設に伴う発掘調査報告書

―本文編―

2005年3月

編集発行：財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本：中和印刷紙器株式会社

徳蔵地区遺跡

――― 近畿自動車道松原那智勝浦線(御坊～南部)建設に伴う発掘調査報告書 ―――

―図版編―

2005年3月

財団法人　和歌山県文化財センター